

# 私のヒーローと世界の危機と愛しい日常風景

淵深 真夜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

サイタマの妹にとって、世界の危機すら日常の背景。

村田版「ワンパンマン」のストーリー・設定・キャラデザに基づいた内容です。

基本原作沿いで、時々オリジナル。

残酷な描写は原作と同等レベルで、サイタマの家族やキャラクターの過去ねつ造有り。

## 目次

### 趣味ヒーロー編

私のヒーロー | 1

願いが叶ったことを私はまだ知らない | 5

貴女の名前を教えてください | 10

罪は一つ、許された | 15

いつてらっしゃい | 21

弟子になる前に | 26

闇と出会う | 29

エンドロールには早すぎる | 34

無価値な生き様の意味 | 37

私の大好きな人たち | 41

強くなりたいと願うのはやめた | 46

世界は広いのに、世間は狭い | 51

自覚ときっかけ | 54

ヒーローになれるかな？ | 59

### プロヒーロー編

ヒーローを続けていける糧 | 62

敬愛4 庇護欲3 独占欲3 で構成された感情 | 67

正義とヒーローは違う | 73

所有欲3 支配欲3 加虐心3 不明1 で構成された感情 | 80

こうして、恩返しは延期に | 85

ゴーストタウンの天使 | 91

### 巨大隕石編

まだ名が決まらぬ種 | 96

科した誓いは墓標にならず

しなくちやいけないこと

その約束が世界の支柱

柱と杖

逆鱗、二つ

80年後までお元気で

### 深海王編

長い一日が始まった

構成物質1割、未だ不明

無自覚に、無意識に、バトンは渡る

その誓いが、彼らを動かした

弱い私はまた守られるだけ

最優最良最善の選択にして、最悪の結果

涙さえも、流せなかった

憧れは夢に、夢は現在に

雨が止まない

晴天への言葉

### 入院生活編

ただいま、日常

まだもう少しだけ、このままで

恋情エゴイズム

三者三様日常断片

お友達が出来ました

私を守ってくれた人

薄闇に1割の慈しみ

ボロス編

最果ての孤独

この夢は誰も知らない

懐かしい名前と新たな出会い

嵐の前の愉快的な茶番

破られたのか、守れなかったのか

もうあの夢は誰も知らない

寄り添うことしかできない

連鶴

地上戦、開始

正義の味方VSヒーローの妹

ヒーローの仕事

さいごは笑顔で終わりましょう

10ヒーローズ編

一人目、「お兄ちゃん」

二人目、「友達のお兄さん」

三人目、「少し心配な子」

四人目、「……お、女……友達？」

五人目、「ちゃんと叱ってくれる人」

三者三様日常断片・その二

六人目、「優しいおじいちゃん」

七人目、「姉のような、妹のような……」

八人目、「しっかりした大人」

九人目、「隣がもはや当たり前」

S級改め、ただのファンクラブ

十人目、「今はまだ会えない」

417

ジエノスVSソニック編

本日も厄日

436

言う資格なんてないけれど

444

喧嘩するほど仲が良い

455

自己完結行き止まりをぶち壊せ！

462

お前らがケンカするんかい

471

彼女の災難、男どもの役得

479

兄VS妹

486

なんて他人事な核弾頭

494

エヒメは 混乱 している

503

ここにいていいよ

510

真っ直ぐに歪んでいる

518

今はこれでいい

523

全員迷走中

531

気に入られました

539

少年一人のボーイズトーク

549

遅効性核弾頭

560

トラウマ克服編

リア充爆発計画始動

570

まだ終わってなどいない

579

女神と絶望

587

今、ここにあるもの

598

死んでもいいけど死ねない

608

月が綺麗な夜の夢、と……

618

真実探し

ミラーージュの話

加害者は誰だ

始まりの独占欲

レウコクロリデイウムに似てる

June

守護者

虚構の女王

彼女を食い荒らした蟲

愛 for I

後悔を終わらせよう

鏡像遣い

伝えたいことがあった

自己愛蜃気楼

悪い想像は悪い現実を呼ぶ

いつてきます

One Punch Girl

蜃気楼を追う者

世界が終わらない日までの秘密

## ガロウ編

あなたを覚えている

君は聴いてくれた

私の願い、あなたの望み

約束は果たせない

君が確かに好きでした

629

636

646

654

668

677

690

703

716

728

740

751

764

782

793

806

813

826

836

851

864

873

885

896

少しの後悔	907
誰でもなれる	920
変わらない君、変わり果てた俺、変われない僕	931
助ける理由	938
ヒトとしての生への未練	957
理由にはできない	971
絶対に認めない	980
知りたい	992
今更になって	1003
俺の所為	1013
成長の証明	1025
三人にとつてのガロウについて	1043
絶対に大丈夫	1060
折れるしかなかった	1074
真面目なところ悪いが、違う。そうじゃない。	1088
サイタマ、エヒメに土下座する未来決定	1101
一応こちらが主人公 s i d e	1116
怪人未満の逆鱗	1135
今回はわりと真面目にS級会議	1147



## 趣味ヒーロー編

### 私のヒーロー

「余計なお世話なんですよーだ！ 他人を見下して、心配してるワタクシ優しい良い人でしょアピールに他人の家庭事情を使うな！

勝手に私を不幸な苦勞人にするな！

お兄ちゃんをダメ人間扱いするな！ 確かにダメ人間だけどき!!」  
刻んだもやしと鶏ひき肉にストレスをぶつけながら、思いつきり混ぜ合わせる。

いつもなら面倒くさいと思うこの調理過程が、今日は好都合だった。

「確かにお兄ちゃんは無職だし、ハゲだし、6歳年下の私の稼ぎで生活してるし、家事もほとんど私だし、ハゲだし、空気読まなくて礼儀も知らないハゲだけど、何が正しいかを誰よりも何よりも知ってる人なんだから！

お前らは、赤の他人の為に命を懸けて戦えるの!? いつもいつも旦那や子供の愚痴ばかり言って、家族すら守るかどうか怪しいじゃない!」

思いつきり混ぜ合わせたら、今度は掌に丸めて軽くキャッチボールして空気を抜く。

……軽くのはずが、これもストレスをぶつけているから結構な勢いになってるけど、まあいいや。

「お前らは、目的のために言い訳せず努力をひたすら貫き通したことがあるの!? お前らは、子供の頃に夢見た将来の自分になってるの!? なれてないならそれは、本当にどうしようもない、諦めるしかない壁にぶつかったの!」

どうせ努力が面倒くさくて、才能の差を見せつけられるのが嫌で、言い訳して目をそらして自分から夢を捨てたんでしようが!

そんな奴らが、お兄ちゃんを無職だハゲだダメ人間だ妹さんが可哀

相だなんて言うなクソババアどもー!!

……ふう」

本当はスーパードでこちらをチラチラ見ながらコソコソと隠れていない噂話のネタにしてやがったババアたちに、直接言つてやりたかったことをもやしのハンバーグに全部ぶつけて、ひとまず気が済んだ。後は焼いてタレに絡めたら照り焼きハンバーグの完成だけど、どうしようかな。もう焼いておこうかな。

出来ればお兄ちゃんに出来立てを食べさせてあげたいんだけど、お兄ちゃんいつ帰ってくるかわからないからなー。

そんなことを思いながら、あのD市で暴れると警報が出てた巨人はどうなったのか、TVで確かめようと振り返ったら、見慣れた黄色いコスチュームと輝く頭がそこに立っていた。

「……お帰り。お兄ちゃん」

ああ、今日もワンパンで終わっちゃったんだね。そしてすぐに帰ってきたんだ。っていうか、どこから聞いてたの？

「お前な、俺の為に怒ってんのか、俺にトドメを刺したいのか、どつちかにしろよ。つーかお前が怒ったババアよりお前の方がハゲって言ってるんだろコラ」

どうやら初めから聞かれていたらしい。

頭に血が上って思い浮かぶままに言葉を羅列してたけど、そういえばハゲを連呼していた気がする。ごめん、お兄ちゃん。

ただそれを認めると、それはそれでたぶんお兄ちゃんの心を抉るので、私はお兄ちゃんの言葉を聞かなかったことにして、話を変える。

「もうすぐご飯だから、着替えて手を洗ってね」

にっこり笑ってそう言ったら、お兄ちゃんは「話を誤魔化すな」と言いつつも、言われた通り着替えて自分の手と手袋を洗う。

「お兄ちゃん、またワンパンで終わっちゃったの?」

戻ってきたお兄ちゃんに背を向けたまま尋ねたら、覇気のない声で「……ああ」とだけ返事が返ってきた。

お兄ちゃんは自分が強くなりすぎたこと、そしてそれ故に戦いがあまりにあっけなく終わることに対して虚しさを感じてることを、ずっ

と前から知っている。

お兄ちゃんの感じる虚しさは、共感こそは出来ないけどなんとなく想像はつくし理解もできる。

でもね、ごめんねお兄ちゃん。

お兄ちゃんは昔みたいに恐怖や緊張感、そして高揚に満ちた戦いを望んでることは知ってるけど、私はお兄ちゃんがそんなものを感じるほどの敵は出てこないでほしいって思ってるんだ。

それは世界の平和の為とかじゃなくて、とても自分勝手な願いだけだ。

だって、そんな敵が現れたら勝ってもまた昔みたいに大怪我するし、負けたらお兄ちゃんが死んじゃう。

私は今のうちに、傷一つなく時間も最低限で片付けて帰ってくる最強のヒーローのままであって欲しい。

……それでも、お兄ちゃんが夢を叶えたのに、満足感もなく虚しいと思わせる現状だって嫌なのは事実。

せめて、お兄ちゃんを周囲の人が評価してくれたらいいのに。

そうしたら、お兄ちゃんは戦いに満足感は得られなくても、ヒーロー活動に対する意義を見出せるかもしれない。

「今日の晩飯は何？」

「今日はねー、もやしと鶏ひき肉の照り焼きハンバーグと、ナムルだよ」

「……もやしばっかだな」

「もやしは栄養がたっぷりあるのにとっても安価な、我が家の救世主。なので、文句は言わない」

ゴーストタウンのワンルーム。とっても狭い我が家。

特売品の食材ばかりで構成されたご飯。

そして趣味がヒーローで無職、ご近所で妹に養われてるダメ人間と評判のお兄ちゃん。

私の環境は、確かに客観的に見れば不幸この上ないだろうけど、私にとってここが一番大切に幸せな場所。

お兄ちゃんは禿げる前から、「ヒーローになる」って言い出す前か

ら、私にとっては世界で一番強くて頼れるヒーロー。

だからこそ、私は恵まれてるくせにさらに願う。

お兄ちゃんを正當に評価してくれる人が現れることを。

お兄ちゃんの強さを理解して、私と一緒にすごいつて思ってくれる人。

お兄ちゃんを恐れず、立ち向かってお兄ちゃんと同じくらい努力をする人。

そういう人が現れたら、お兄ちゃんにも張り合いつてものが生まれるかもしれない。

……虚しく、なくなるかもしれない。

そんなことを思いながら、私は出来上がった夕飯をテーブルに運ぶ。

あ、そういえばまだ言つてなかった。

「お兄ちゃん」

マンガを読んでたお兄ちゃんが顔を上げる。

「お疲れさま」

ねえ、お兄ちゃん。

私のこの言葉は、少しはお兄ちゃんの「ヒーロー活動」の張り合いになつてる？

願いが叶ったことを私はまだ知らない

……何かお兄ちゃんが死んだ目でサボテンに水をやってるんだけど、どうしたらいいんだろう？

今朝、妙に呆けた顔で起きたけど、家の前で怪人が現れた瞬間に久しぶりに見るくらい生き生きとした表情で着替えて戦いに行っただかと思ったら、いつも以上に生気をなくして帰ってきたし。

テンションの高低差が激しすぎるよ、お兄ちゃん。

「お兄ちゃん。今日はどうしたの？」

訊いちや悪いかもされないけど、魂が抜けてるんじゃないかというぐらい、覇気も生気もないから、我慢できずに訊いてみた。

「……エヒメ。今朝、夢を見たんだ」

お兄ちゃんは死んだ目のまま、今朝見た夢の内容とその夢の所為で生まれたギャップ、それによってさらに顕著に感じる虚しさを語りだした。

お兄ちゃんが強くなりすぎたことに対して虚しさを感じていることは知っていたけど、本人から話を聞くのは初めて。

その内容はだいたい私が予想してた通りだけど、私は何も言えないでいる。

言えることなんてない。私が何を言っただって、お兄ちゃんの虚しさの解消にはならないのだから。

私はただ、話すことで少しは気持ちになるんじゃないかってことだけに期待して、黙って話を聞き続けた。

「怪人やモンスターと戦っている時、そこに魂のぶつかり合いなんてないんだ。

まるで虫を……蚊を潰すときののように、感情が伴わねえんだよ。

こんな風に！」

お兄ちゃんが話してる最中、丁度お兄ちゃんの拳に蚊が止まって、たどえ話のように潰す。

「そう、この感覚だ。」

何も感じなくて当たり前だ」

うん。話は良くわかったよ、お兄ちゃん。

でもね、お兄ちゃん。

「お兄ちゃん。蚊、潰せてないよ」

お兄ちゃんが自分の拳を叩く直前に逃げ出して、プーンと耳障りな音を立てて逃げる蚊を指さしてみる。

お兄ちゃんは、生気のない目のままその蚊を握りつぶそうとするけど、また逃げられる。

何度かパンパンと手を叩くけどどれもこれも不発で、自分の頭に止まった瞬間叩いたけど、それでも逃げられた時は、無表情ながらもちよつと本気を出してた。

なのに、捕まらない。

何、この蚊。すごい。

「くそー・逃がした！・蚊めえ〜(怒)」

……何か私が全然意図してない方向でだけど、とりあえず虚しさを忘れたみたいだからもう別に良いやと思って、私はベランダから部屋の中に戻った。

何ていうか、昔から思ってたけど本当に単純な人だな、お兄ちゃんは。

結局蚊は潰せず逃がしたのか、お兄ちゃんは頭を掻きながら部屋に戻って来てTVをつける。

すると、TVも蚊の話題だった。

何でも新種の蚊が大量発生してるらしい。

新種か。それならお兄ちゃんも潰せなかったのは納得かもしれない。

「大量発生って勘弁してくれよ」

「でもこの蚊が怪人とかの一種なら、強敵かもね」

私がそんな軽口を叩いてみたら、お兄ちゃんは一瞬悩んだけど「地味すぎる……」って呟いた。そりやそうだ。

ところが、軽口や地味という一言で片づけられない事態であること、次の瞬間入ってきた警報で私たちは知る。

蚊の大群が乙市を襲撃していると、ニュースが伝える。

空を真っ黒に埋め尽くすほどの群体と、血を吸いつくされてミイラ化した動物の映像で、血の気が引く。

お兄ちゃんも青ざめた顔で呟く。

「乙市ってここじゃん。窓、閉めなきゃ」

……うん。そうなんだけど、それが一番正しい判断なんだけど、もうちょっと他に反応はないのかな？

そう思いつつも本当にあの蚊の大群は洒落にならないので、慌てて部屋中の戸締りを確認する。

うん、大丈夫。どこも全部閉まつてるし、隙間風が吹く古いアパートだけど蚊が侵入できるほどの隙間はない。

玄関で安心してたら、部屋でお兄ちゃんがなんか騒がしい。

何やってんだろうと戻ってみたら、どうも一匹すでに部屋の中に入り込んでいたらしく、お兄ちゃんと蚊の格闘が再び始まっていた。

まあ、一匹だけならさすがに痒い、ムカつく以上の被害はないかと思つて私は放っておくことにしたけど、何故か蚊はお兄ちゃんだけを集中攻撃するので、お兄ちゃんのストレスがどんどん溜まっていくな。

「あーもう!! 何で俺ばつか刺されるんだよ!」

「お兄ちゃんの血が美味しいんじゃない? もしくは、お兄ちゃんが好みのタイプなんだよ。」

やったねお兄ちゃん! モテ期だよ!」

そういえば吸血する蚊は基本的にメスであるという無駄知識を思い出して軽口を叩いてみたけど、「モテ期ならせめて人間型が寄つて来いよ!!」と若干キレながら返された。

……「人間」じゃなくて、「人間型」でいいんだ。お兄ちゃん。

出来れば私、お義姉さんは人間がいいなあ。

「あああ!! 逃げんなクソっ! エヒメ! ちよつとあれと決着つけてくる!!」

「お兄ちゃん!?!」

いくら叩いても捕まえられない蚊はいつの間にか、部屋から消えた。

部屋のどこかに隠れているのか、実は出入りできる隙間がどこかにあったのかはわからないけど、どっか行つたと思えばそれで良かったのに、私には理解できない闘争本能に火がついたお兄ちゃんは、外を飛んでいた蚊の一匹を何故か追いかけて出て行つた。

まあ、お兄ちゃんなら大丈夫だろうと一瞬思つたけど、……よくよく考えたらお兄ちゃん、蚊に刺されて痒がつてたよね？

え？ 怪人に殴られても怪我しないお兄ちゃんの皮膚を貫通したの？ あの新種の蚊は？

ちよつと本当に怪人の一種なんじゃない!?

つていうか、それならお兄ちゃんが蚊の大群にやられてミイラ化もあり得る!!

洒落にならない可能性に気付いて、慌てて私は自分のヘアスプレーとライターを持って、お兄ちゃんのもとに跳んだ。

「お兄ちゃん!」

「うおう!? 何だエヒメ! 俺は忙しい!!」

蚊との闘いで忙しいとか言わないで!

怪人かもしれないけどなんか私が悲しい!!

私のそんな心の叫びは置いておくとして、お兄ちゃんにスプレーとライターを渡して、大群に襲われそうになったらこれ使つて、即席火炎放射器にでもしてと言つて戻つた。

これもこれでどうなんだろうつて思うけど、意地になつたお兄ちゃんが止められないのは良く知ってるから、もうこれでいいや。

\* \* \*

そんな風に思つて、家でお兄ちゃんの帰りを待つていたら、なんか真つ黒に染まつた空の方向で、その黒をすべて焼き尽くすほどの爆発が起こつた。

……あれ?

もしかして、私のスプレーの所為じゃないよね?

その後しばらくして、お兄ちゃんが全裸で帰ってきたのは心底びっくりしたけど、とりあえずあの爆発とお兄ちゃんが抱えていた下半身と片腕がもげたサイボーグさんは、私が渡した即席火炎放射器の所為



じゃないことを知って、ホツとした。

貴女の名前を教えてください

俺が油断していたとはいえ、自爆以外になす術を失うほどの戦力を持った怪人をまさに言葉通り一撃で倒した人、サイタマ先生は、情けなく倒れ伏すしかない俺を見下ろして尋ねた。

「なあ、お前大丈夫か？ 救急車、呼ぶか？」

「いえ、お構いなく」

ただでさえすぐ傍にいたのに存在を忘れて周囲ごと焼却してしまい、怪我はないとはいえ全裸にしたあげく俺の油断の尻拭いをさせてしまったのだから、これ以上の迷惑はかけられないので、俺は先生のご厚意を遠慮した。

そもそも、救急車や病院では俺を直せない。

「でもお前、それじゃ動けねーだろ？」

しかし先生は、迷惑しかかけていない俺の事を心配してくれた。

そのご厚意は光栄この上ないが、だからこそ甘えてはならない。

「はい。確かに移動手段は失われていますが、連絡手段は残されていますので、ご安心を。」

今、博士に回収を頼みますので本当にお気になさらず」

移動手段がないのは見てそのままわかるので正直に認めつつ、迎えが来ることを伝えてそのまま先生にはひとまずお帰りを願った。

俺の所為で全裸な為、もし他に人が来たら先生が通報されてしまうので切実にここは早く帰って欲しかったのだが、先生は一度頭を掻いて、それから当然のように俺を小脇に抱えた。

「!? 先生!?! 何を!?!」

「先生ってなんだよ、先生って。」

誰をどこから迎えに呼ぶのかは知らねーけど、迎えに来るまでお前はうごけねーんだから、そんなら俺の妹にお前家でも連れて行ってもらえ。たぶん、迎えに来てもらうより早いから」

何が何だか、訳が分からなかった。

つい今さつき知り合ったばかりで、迷惑ばかりをかけている俺のこ

とをここまで気にかけてくれるのも、先生の妹さんに連れて行っても  
らえというセリフの意味も。

「あの、妹さんに連れて行ってもらおうとは？」

とりあえず俺は一番理解不能な部分を尋ねると、先生はさらっと答  
える。

「ああ。俺の妹、テレポート使えるから。場所さえ言えば、すぐに連れ  
て行ってもらえるぞ」

……規格外の強さを持つ先生の妹さんも、規格外の存在だった。

\* \* \*

「お兄ちゃん!? 何してんの!?!」

アパート前で現れた少女の叫びに、場違いながらホツとした。

今現在、サイタマ先生は俺の所為で服が全て燃えてしまい、全裸だ。  
悪いのはすべて俺の方なのに、言い訳のしようがないほどに猥褻物陳  
列罪を犯してしまっている。

なので女性が出てきた時は、正直あの怪人にやられそうになった時  
以上に焦ったが、どうやら彼女は先生が言っていた妹さんらしい。

妹でも年頃の女性なら兄の全裸はトラウマものかもしれないが、少  
なくとも自分から身内を一番情けない罪状の犯罪者として通報はし  
ないだろう。

本当に申し訳ないが、目撃者が貴女だけで良かった。

「おー、エヒメただいま」

「うん、お帰り！　そしてさっさと服を着て！　っていうか、さっきの  
爆発は何!?!　そしてその人は大丈夫なの!?!」

先生はごく普通に散歩から帰ってきたかのように挨拶をして、妹さ  
んは混乱しているのかとりあえず返事を返してから、色々と叫ぶ。

「あー、あの爆発はこいつが蚊退治でやった。それで、俺の服が燃え  
た。

で、色々あってこいつがこんなんだから、ちよつとこいつの家まで  
連れて行ってやってくれ」

「……あー。うん。そうなんだ。うん、わかった。わかったから本当  
にもうさっさとパンツ履いて」

覇気がなく最低限の説明に妹さんは詳しく話を聞くのを諦めたのか、とりあえず先生に最低限の衣服着用を促して、そしてそのまま俺を受け取った。

あまりに自然に先生から妹さんに渡されて、困惑する。

赤子のように抱きかかえられることを情けなく思うよりも先に、妹さんは先生が俺を彼女に渡した時のように、先生が俺を小脇に抱えた時のように、さも当然と言わんばかりに言った。

「あの、大丈夫ですか？」

私一応テレポーターですから、住所言つてください」

俺を博士のもとまで運ぶこと、俺の手助けをすることに何の不満も疑問も抱いていない、無垢な瞳で俺を見つめ返し、尋ねた。

本来なら博士のラボの場所を知られることは百害あつて一利もないが、先生に弟子入りをするのならまずはこちらが信頼して、情報を開示しなければならぬ。

だから、ご厚意に甘えると同時に信頼の証として正直に伝えるつもりはあつた。

けれどその信頼は、あくまで先生に向けられたものであつて、妹さんに対してはいわばついでもしかなかつた。

なのに俺は、この目で見られた時、俺が先生の服を燃やしてしまったことに対して何も訊かず、責めもせず、まず俺の心配をして、当然のように俺を博士のもとまで運んでくれようとするこの少女を信頼した。

「……場所は——」

失われたはずの心臓が跳ね上がるような錯覚を、感じた。

どうやら妹さんのテレポートは一度に跳べる距離に制限があるのか、一気に博士のもとまではさすがに行けず、5度ほどテレポートを繰り返してようやくたどり着く。

それでも所要時間は1分足らずで、事前にクセーノ博士に連絡をしていたとはいえ、博士の俺を抱きかかえてやってきた少女には酷く驚いていた。

彼女は博士に俺を渡して、「なんか兄がご迷惑をかけてすみません。

この人を、どうかお願いします」と言っ、丁寧な頭を下げた。迷惑をかけたのは俺で、俺はそのことを伝えるべきだった。

まず最初に言うべきことは、先生と彼女に対しての謝罪であるべきだった。

なのに、俺の口から出た言葉は全く違うものだった。

「俺は、ジエノスという者です!!」

まずは、名乗った。

そして、訊いた。

「貴女の名前を教えてください」

本当は知っていた。

先生が「エヒメ」と呼んだのを確かに聞いた。そして、覚えていた。けれど俺は、聞きたかった。

直接彼女から、彼女の名前を教えてください。欲しかった。

彼女は一瞬、きよとんとしてから柔らかく微笑んだ。

「エヒメです」

もう俺にとって彼女は、恩人であり尊敬する師匠の妹というおまけではない存在ではなかった。

彼女も、俺にとって尊敬に値する人だった。

「エヒメさん、この御恩は忘れません。必ず、お返しします」

俺の言葉に、また彼女はきよとんとしてから今度は困ったように笑った。

「別に私は大したこと、してませんよ」

そう言っ、彼女は俺とクセーノ博士にもう一度、丁寧に礼をして姿を掻き消した。

謝罪はついで、言えないままだった。

\* \* \*

博士は俺を修復する準備をしながら、話しかけた。

「いい娘さんだったの」

博士は、自分の事のように嬉しそうに笑い、呟く。

「オヌシの事を、『この人』と呼んでいたな」

博士の言葉で、思い出す。

ああ、そうだ。

彼女は初めからそうだった。

兄が全裸で帰ってきて、混乱しながらも出てきた言葉は、「それ」でも「ロボット」でも「サイボーグ」でもなかった。

『その人は大丈夫なの!?!』と彼女は言った。

初めから彼女は俺をずっと、人間扱いしていたことを思い出した。

## 罪は一つ、許された

「もー、お兄ちゃん！ どうしてジエノスさんが来るって言ってくれなかったの!?!」

俺の訪問に先生の妹さん、エヒメさんが先生に対して抗議の声を上げる。

「エヒメさん、俺が悪いんです。事前にいつ伺うかを俺はお伝えできていなかったのよ」

「そうだぞー、エヒメ。マジでこいつが来るなんて俺、思ってたかったし」

「うちに来るってこと自体は、ジエノスさんはちゃんと行ってたんでしょ？ ならせめてそれぐらい、お兄ちゃんは私に伝えておいてよ。」

ジエノスさんは気にしないでください。あの時は状態があんなだったんだから、詳しいことなんか言ってる場合じゃなかったですし」

俺が先生の擁護に回ろうとしたが、身内独特の厳しさか先生の意見は封殺されてむしろ俺が庇われた。

先生が不満そうな顔をしているが、エヒメさんの意見が正しいと思っているのかそれとも妹に逆らえないのか、そのまま押し黙る。

そんな状態で先生をさらに擁護しても、たぶん余計に先生がエヒメさんに叱られるだけなので、俺はただ先生にもう一度「すみません」と謝った。

「飲んだら帰れよ。弟子なんて募集してねーし」

エヒメさんが俺の分までお茶を入れてくれて、湯呑を置かれたタイミングで先生は言った。

「お兄ちゃん！ せっかく来てくれたのに、失礼でしょー!」

押しかけなのだから言われて当然なのに、エヒメさんは俺を庇ってくれる。

その言動は嬉しいが同時に申し訳なくて、何と答えるべきなのか迷っていたら、先生が話を変えてくれた。

「あれ？ お前、ケガ治ってね？」

「お兄ちゃん、その反応遅いよ……」

「はい。身体の大部分が機械なのでパーツさえあればすぐに」

俺の返答に先生の反応はただ一言、「変わってんな、お前」だけだった。

このご兄妹は容姿こそはあまり似てる兄妹ではないが、内面はよく似てる。

初めから俺を人間として見てくれて、サイボーグであることも「変わってる」の一言で済ませたのは、この人たちだけだった。

サイボーグになったことを俺は後悔など一つもしていないが、それでも人として扱われること、畏怖や侮蔑もなくありのままに受け入れもらえることに、胸の内がほのかに温かくなるのを感じる。

ああ。

機械の体でも、心臓はもうなくとも、「心」というものは変わらず胸の中にあるのか。

そこまで思いつつ、一つの可能性にも気づいてしまった。

先生もサイボーグであるという可能性に。

そうであったとしてもお二人が尊い存在であることに何ら変わりはないが、先生がサイボーグならせひともどんなパーツを使っているのかが知りたいので、尋ねてみる。

結果、エヒメさんが爆笑した。

「あーはははは！ 装甲！ 頭部の肌色の装甲！！」

むしろ装甲が抜け落ちてるのに！！」

「うるせーぞエヒメ！！」

そうだよ！ ハゲてるんだよ俺は！ 頭部の装甲が抜け落ちてる

んだよ！

何なんだテメーらは！！」

俺の言葉の何がエヒメさんの笑いどころなのかはわからないが、とりあえず先生が俺の話を聞いてくれるようなので、俺がサイボーグになり、単独で正義活動をしている理由を話す。

\*\*\*



「バカヤロウ!!」

20文字以内で簡潔にまとめて出直して来い!

……しかし、先生は俺の過去や苦悩、使命感を一刀両断して俺を締め出した。

仕方がない。あれだけ強い先生なら例え怪人やテロリストなどが現れていなくても、鍛錬だけで十分忙しいはず。

言葉をまとめられず、ただ俺の都合だけを長々語った俺が悪い。

先生の言う通り、簡潔にまとめて出直そう。

「ジェノスさん、ごめんなさい!」

そう思っただけで歩き出した時、後ろから小走りでエヒメさんが俺に追いつき、謝った。

「ごめんなさい、ジェノスさん。お兄ちゃんが話を聞かなくて」

……どうしてこの人は、俺が悪いのに俺に謝ってばかりいるのだろうか?」

そして俺はどうしてこの人を、謝らせてばかりいるのか。

無性に自分が情けなく思えた。

「いえ、俺が悪いのです。先生はお忙しいのに、俺は自分の都合で勝手に来て、やはり自分の都合を話しただけです。先生が怒って追いつくのは当然です。」

むしろ、まとめて出直せとチャンスを与えただけ先生は寛容ですね」

「うん、ごめんなさい。お兄ちゃん、全然お忙しくないから。本当に本当になんかごめんなさい」

俺が自分の非を詫びると、エヒメさんは申し訳なさそうな顔をしてさらに謝られた。

ああ、ダメだ。どうして俺は、この人の前ではやることも言うことも全てから回ってしまうのだろうか?」

先生にはもちろん、エヒメさんにも恩を返せない自分が情けなくて凹んでいると、エヒメさんはそんな俺を見上げて、口を開く。

「……それと、ジェノスさんに訊きたいことがあるんですが、いいですか?」

「? はい、どうぞ。俺に答えられることなら何なりと」

彼女の言葉に、少し首を傾げつつも俺は特に考えもなしに答えた。もう俺は先生と彼女に対してはクセーノ博士同等に全幅の信頼を寄せていたので、言葉通り何でも答えるつもりだった。

「……ジエノスさんにとつて暴走サイボークに復讐するのは、人生の『目的』ですか? それとも生きるための『手段』ですか?」

しかしあまりに予想外な問いに、俺は完全に言葉を失う。

何も答えられない俺に、少しだけ答えを待っていたエヒメさんが言葉が続ける。

「……余計なお世話なのはわかってます。けれどもし、あなたが復讐を人生の『目的』にしているのでしたら、それはやめてほしいんです。それは、目的が果たしても果たせなくても、何も得られない虚しさしか残らない生き方であることだけは、わかりますから」

やめてくれ。

そんなことは、もう何度も言われてきた。

復讐の無意味さくらい、わかってる。

それでも、俺にはこれしかないんだ。

故郷も家族も、人としての体の大部分も、俺の全てを奪ったあの暴走サイボークが、それを作った科学者がこの世に存在し、償いもせずのにさばっているのが耐えられないんだ!

「——俺は、許せないんです。たとえ誰に何と言われようとも、俺から全てを奪ったあの暴走サイボークが!!」

思わず八つ当たりしそうになるのを抑えて、まず言った。

きつとエヒメさんじゃなければ、「お前に何がわかる! 綺麗事を吐くな偽善者が!!」と怒鳴り散らしていただろう。

それをしなくて良かったと、俺はこの直後に心から思った。

「え? そりゃそうでしょう。何で許さなくっちゃいけないんですか?」

エヒメさんが俺の言葉に即答で同意し、そして心底不思議そうな顔をしてむしろ許す理由を訊いてきた。

その反応に毒気が全て抜け落ちる。

「……エヒメさんは、俺の復讐を止めたかったのでは？」

「? いいえ。私、復讐はしたければどうぞ勝手にとしか思いませんよ。」

関係ない他人を巻き込んだり、本人じゃなくてその家族を傷つけるという手段を取るのなら、話は全然別ですけど」

きよとんとした顔で、はつきりと彼女は「復讐」を肯定する。

そこまで言っただけの言葉の何が悪かったのかに気付いたのか、エヒメさんは補足を加えた。

「ああ、ごめんなさい。あの言い方じゃ、復讐そのものをやめろとしか取れませんね。」

えつと、私が何を言いたかったかというと、復讐を果たせたら死んでもいいか思わないで欲しいんです。復讐をゴールではなく、幸せになるための手段、通過点にして欲しいなって思ってたんですけど……ごめんなさい。なんにせよやっぱり、余計なお世話ですよ」

それは確かに、余計なお世話かもしれない。

でも、それは俺からしたら世界を一変させる言葉だった。

俺の4年間を全否定しながら、それでも俺がしてきたことの意味を肯定してくれた。

俺の幸せを願う言葉だという事を、理解した。

「……俺は、幸せになってもいいんでしょうか？」

思わずこぼれた言葉は、あまりに情けない弱音。

自分一人だけ生き残り、その罪悪感に押しつぶされそうで、ずっと目を背けていたものに向き合った。

俺と同じ年だけど、俺よりもずっとか弱くて儂げで、守りたいと思える少女の力を借りて。

エヒメさんはやはり、きよとんとした顔でこともなげに答える。

「ジェノスさんが逆の立場なら、生き残った家族の幸せを願いませんか？」

あなたが喪って今も悼む人は、あなたが生き残った事や幸せになることを妬むような人なんですか？」

質問で返されたその答えが、全てだった。

俺の罪悪感は、あまりに無意味だったことを思い知らされた。

「——いいえ」

自分の4年間が無意味だったことを思い知ったのに、ずいぶんと気は楽になる。

けど、俺は復讐をやめることは出来ない。

あの暴走サイボーグが存在する限り、たとえ幸せになってもその幸せがまた壊される恐怖に晒されるのはごめんだ。

だから、俺のすることに変化はない。

でも、その復讐がたとえ果たされなくても、きっと彼女と出会う前ほど悔やみはしないだろう。

俺は、4年前に俺が勝手に背負って罰していた罪を一つ、許すことが出来た。

いってらっしゃい

余計なお世話だとわかってはいてもどこか刹那的で破滅に向かつて行くジェノスさんを放っておけなくて、お兄ちゃんに追い出された後、思わず追いかけて言いたいことを全部言ってしまった。

「お前に俺の何がわかるんだ」とか「綺麗事をほざくな」とか言われて怒られてもおかしくないことを言ったと思っただのに、ジェノスさんはものすごく真面目に私の言葉を受け取ってくれて、深々と頭を下げて「ありがとうございます」とまで言うから、かえって反応に困った。

この人、お兄ちゃんといい私といい、好意的に解釈しすぎてる。

私たちはジェノスさんが思っているような聖人君子じゃないから、その対応は正直息苦しいけど、ここまで真面目だとそれは言えない。だから私は慌てて、「頭を上げてください！」と説得するしかなかった。

そしてそのまま、私たちの部屋にUターン。

どうやら私とのやり取りで、お兄ちゃんに伝える内容が20文字以内でまとまったらしい。

マジで？ 何で？

\*\*\*

「先生のように強くなる方法、教えてください」

本当に20文字でまとめた。ずいぶんざっくりシンプルになったなあ。

でも、お兄ちゃんのように強くって……どうやるの？

なんかお兄ちゃんは「お前ならすぐ超えられる」とか言ってるけど、お兄ちゃんがやってたのってただの筋トレだよね？

サイボーグのジェノスさんに効果あるの？

正直ツツコミどころが満載どころかツツコミどころしかない会話を繰り返してるけど、たぶんこれは私が口出ししたらいけない奴だ。

私には理解できないけど、男の世界って奴。

だから私は心の中で「ジェノスさん、真実知ってもめげないで」と

応援を送りながら、お茶でも入れ直そうと思って台所に向う。

そのタイミングで、ジェノスさんが「高速接近反応」と呟き、玄関で構えた。

え？ もしかして怪人が来るの？

玄関壊れたら、誰に修理代を請求したらいいのかな？

私の心配は、ちよつと無意味だった。

壊れたのは玄関じゃなくて、天井。お兄ちゃんの真上の天井をぶち抜いて、怪人が現れた。

ジェノスさん、怪人が来る方向外れてますよ！

「ケケケケケ！ 俺の名は」

言い切る前に、予想通りお兄ちゃんのワンパンで頭が胴体とサヨナラして、爆発四散で壁に飛び散る。

「天井弁償しろ」

「お兄ちゃん！ 弁償させたいのならワンパンで終わらせないで！

っていうか、家の中で戦わないでよ！ その怪人、お兄ちゃんが片付けてよね!!」

自分でも反応がおかしいなーとは思いうし、ジェノスさんから若干引かれてるのはわかってるけど、これは言わせて！ 私には切実なんだから！

本当に何で部屋の中で退治しちゃったの!? お兄ちゃん、手加減出来るでしょ！

私、その怪人の死体片付けたくないよ!!

私の文句をお兄ちゃんがうるさそうに顔をしかめながら、怪人の胴体と飛び散った頭を窓から捨てる。

その窓の下にも怪人がいることに気付いて、お兄ちゃんはジェノスさんと一緒に下に降りて行っちゃった。

「悪い！ エヒメ！ ちよつと行ってくる!!」

「すみません。エヒメさん！ 危ないので部屋で待っていてください!!」

二人は口々にそう言って、さっさと出て行く。

「ちよつと待ってよ、お兄ちゃん！」

私の文句なんて、もちろん聞きやしない。

お兄ちゃんのバカ!!

まだ怪人の死体のグロテスクな断片は残ってるし、壁に嫌な汁はべつとり滴ってるのに!

私は涙目でその掃除をしようとしたら、外でジェノスさんが切羽詰まった声で「先生!」と叫ぶのが聞こえてくる。

お兄ちゃんがまた何かをやらかしたのかと思ってベランダから見てみたら、何故かお兄ちゃんが地面に埋まっていた。

何で!?

「どうしたのお兄ちゃん!? つくしごっこ!」

「……俺ら兄妹って、発想がまったく同じだな」

思ったことをそのまま言ってみたら、お兄ちゃんが遠い目をしてそう返した。自分でも、今の状態がつくしに似てるって思ったんだ。

何ていうか、ドンマイお兄ちゃん!

お兄ちゃんを引き抜きに行った方がいいのかな? と思ったけど、何か二足歩行のライオンは出てくるし、人間大のモグラも出てくるし、お兄ちゃんは普通に地面から出てきたから、私はベランダから部屋の中に引っ込んだ。

本当は嫌だけど、さっさと掃除しなくちゃこびりついて取れなくなる。

私がそうやって半泣きであのカマキリ怪人の死体の後始末をする間に、お兄ちゃんとジェノスさんが怪人を片付けて、帰ってきた。

でもまたすぐに出かけるらしい。

どうもあの怪人たち、そしてジェノスさんと知り合うきっかけになった蚊の怪人は、自然発生したものじゃなくて人為的に作られたもので、それらを作った「進化の家」にお兄ちゃんは目をつけられたそうだ。

あー、うん。納得。

どう考えてもお兄ちゃんは、テレポーターの私以上に突然変異だよね。

「エヒメ、テレポートで行けるか?」とお兄ちゃんが訊いてきたので、

私は「進化の家」の正確な場所を訊き返す。

「……お兄ちゃんはともかく、ジエノスさんがちよつと問題かな?」  
「俺ですか!？」

名指しで「問題」と言つてしまい、ジエノスさんはショックを受けた様子を見せる。

「ごめん、ジエノスさん。別にジエノスさんは悪くないの。サイボーグなら仕方ない理由なの！」

「あー、ごめんなさいジエノスさん。あんまり気にしないで。」

そしてもう一つごめんなさい。ちよつと失礼」

「は?」

説明するより先に、私はジエノスさんに抱き着いた。

あー、やつぱりこれは確実に、同じ身長 of 男性の倍以上に重いな。「ごめんなさい、ジエノスさん。私のテレポート、一度に跳べる距離と跳ぶ時の質量が反比例するんです。あと、間を置かずにテレポートを繰り返すのもちよつと限界があるんです。」

私一人なら最大10キロくらい先まで跳べるんですけど、私、お兄ちゃん、ジエノスさんと『進化の家』までテレポートで移動したらかなり短い間隔のテレポートを繰り返すので、確実に途中で私はキャパオーバーを起こしてしまうんです」

ジエノスさんから離れてから改めて私のテレポートに関しての説明をすると、やけに間を置いてから「……そ、そうですか。お、気になさらず」と出来の悪い合成音声みたいにぎこちなく言われた。

あれ? もしかして私、抱き着いた時に触つちやいけない所でも触つちやった?

私が心配になって、ジエノスさんに「大丈夫ですか!？」って尋ねたら、何故かお兄ちゃんから軽くチョップを喰らった。何で!？」

「お前な、少しは相手の性別を考えろ」

「意味わかんないよー!」

お兄ちゃん of 言葉に正直な感想を叫んだら、溜息をつかれた。だから何で!？」



「まあいい。とりあえず、徒歩で行ってくるわ」

私の質問に答えてくれず、お兄ちゃんはまだなんかぎこちないジエノスさんを連れて、「進化の家」を潰しに行った。

「お兄ちゃん、ジエノスさん、いってらっしゃい。」

天井の修理代も忘れず請求してもらって帰ってきてね」

そうやって私は二人を送り出す。

……そういえば今日はスーパーの特売日だけど、お兄ちゃんはタイムセールまでに帰ってくるつもりなのかな？

## 弟子になる前に

「まさか走って現場に向かうとは」

エヒメさんがテレポートを使えるのなら先生は飛行くらいできる  
と思い込んでいたが、意外と先生は戦闘や防御力、運動能力以外は普  
通らしい。

「他にどうすんだよ？　そもそも、エヒメのテレポを使うのも稀だぞ。  
基本は徒歩だ」

「そうなんですか？」

「ああ。あいつも言ってたけど、テレポートを使うのも限度があるか  
らな。

あいつは基本的に戦えねーから、俺がいない時に怪人が出たらテレ  
ポ頼りだし。俺の都合で使わせて肝心な時にキャパオーバーなんて、  
洒落にもならねーだろ？」

なるほどと納得すると同時に、俺は数時間前にその説明を本人から  
受けた時のことを思いだし、またしても思考がフリーズ、いやシヨー  
トしかけた。

彼女からしたら俺の大体の重さを見繕って、どのくらいの距離を跳  
べるか、何度テレポートをすれば目的地にたどり着けるかの大雑把な  
計算をしたかっただけだ。

ただそれだけ、俺がサイボーグだから同程度の体格でも生身の人間  
よりはるかに重いだろーと思ひ、重さを確かめるために抱き着いただ  
けなんだ。

それだけだとわかっているのに、流れていないはずの血液が頭部に  
集まって熱くなる気がした。

これが初めから俺をロボット扱いしていた相手からの行動なら、俺  
も気にならなかつただろう。

しかしエヒメさんは俺を初めからサイボーグどころか人間として  
扱い、見ている節が強い。

俺が訪ねてお茶をもらった時、俺の前にお茶を置いてだいたったって

から俺がサイボーグであった事を思い出したのか、「！　　そういえばお茶で大丈夫なんですか!?　　ごめんなさい、うちに今あるオイルってサラダ油くらいなんですけど！」と焦っていた。

俺が取り込んだ有機物をバイオ燃料にするため食事もできるし味覚もあることを伝えると、彼女は安心したように表情を和らげて、そして微笑んで言うてくれた。

「ジェノスさんにその身体をくれた博士は、いい人ですね」と。

「機能」ではなく「身体」、「作ってくれた」ではなく「くれた」と、本人は意識してないのかもしれないが、細やかに俺を人間扱いしてくれる。

そんな人だからこそ、意識してしまう。

抱き着かれた時の柔らかかな感触。

強く抱きしめたら折れそうな、華奢な全身。

清潔な石鹸の匂いに混じった、有機的な人の、彼女の甘い香り。

……まさかこの身体になってから、自分が男であることを思い知らされるとは。即物的すぎて、罪悪感で死にそうだ。

「……なー、ジェノス」

「!?　　はいー!」

羞恥と罪悪感で走りながら精神的に死にそうになっていた俺を、先生が現実に取り戻す。

先生は、走るスピードを一切緩めないまま言葉を続けた。

「頼みがあるんだ。」

これは先生だの師匠だの関係なく俺個人のだから、聞いてくれたからって弟子にはしねーから、嫌なら素直に断れ。

ってというか、俺の頼みだからって無条件でOKされた方が俺は嫌だ」

先生からの頼み事という時点で「はい!　　何なりと!」と即答しかけたが、その前に釘を刺されて一瞬言葉に詰まる。

「はい。それで、頼み事とは?」

「エヒメと仲良くってというか、ダチになってくれないか?」

それのどこが先生からの頼み事なのか、俺にはわからなかった。

そんなの、俺から土下座で頼み込むのも凶々しいと思っていたことなのだから。

先生が何故、俺にそんなことを言うのか理解できずに呆けていると、先生は振り向きもせずに淡々と理由を語る。

「あいつちよつと事情があつて、基本的に俺以外の他人を信用しないし好きじゃないんだ。警戒心が野良猫並みで、自分から他人に関わろうとしないし笑わないし近寄らないんだよ」

「そうなんですか？」

先生が語るエヒメさんの人物像は、意外そのものだった。

むしろ俺から見た彼女は、心配なくらいに人懐っこくてよく笑う、明るくて好ましい少女だったから。

「うん。そういう奴のはずなんだけど、何かお前には妙に懐いてるみたいだから、お前が嫌じゃなければあいつのダチになつてくれ。」

あいつ、俺にべつたりで仕事も他人にあんまり関わらないでやれる仕事だから、世界が実はすげー狭いんだよ。テレポート使えるくせに。

だからちよつとあの引きこもりを外に引きずり出して、視野を広げる手伝いをしてくれ」

一度、振り返つて俺にそう伝えた先生の顔は、いつもと変わらず覇気や生気が乏しい表情だった。

しかしその目は、いつもより感情がわかりやすかった。

言葉では呆れて突き放している節が強いが、先生の瞳は妹に対する愛情や心配で満ちていることが、感情の機微に疎いと昔から言われていた俺にもはつきりとわかる。

だから俺は、まっすぐに先生を見返して答える。

この無機物でできた目でも、俺の心からの答えを、感情を表せていることを願つて。

「言われなくても、そうさせていただきます」

俺の答えに、先生はわずかに微笑んだ。

その笑みは、エヒメさんによく似ていた。

## 闇と出会う

天井にビニールシートを貼って、とりあえず今日一日くらいは凌げるようにした。

お兄ちゃん、ちゃんと天井の修理費をもらってきってくれるかな？

まあ、そこを心配してももらえないものはもらえない。怪人を人工的に作る組織に期待するのは無駄。

初めから諦めていた方がもらえなくても精神ダメージは少ないし、もらった場合が嬉しいから、私はとりあえず天井の事はもう考えないでおこうと決めて、気分転換にクラフト材料でも集めに行こうと決めた。

私の仕事は、雑貨制作とその販売。

アクセサリーとかぬいぐるみとか雑貨とか、そういうものを昔から作るのが好きで、小学生の頃からネット通販で販売してた。

もちろんその頃に作ったものは、子供のお遊びのものだったからただ同然だったけど、私は料理にしろものづくりにしる、何かを作ることでストレスを発散させるタイプだからか、ちよつと学校で色々あった中学校の時期から製作スピードと作品の出来栄えがやたらと向上して、それなりの価格でも売れるようになった。

で、お兄ちゃんがヒーローになると言い出した時期と同時に、私も色々あってお兄ちゃんと暮らし始めることになり、本格的に制作と販売を始めて今に至る。

順風満帆とは言えないけど、ネット通販では固定客もいるし、いくつか雑貨のセレクトショップに商品を置かせてもらって、ギリギリだけど生活が出来る程度に稼いでる。

棲んでるところが家賃ただ同然の、ゴーストタウンアパートだからこそ成り立つ生活だけだね。

そうじゃなかったら、とつくの昔に私たち兄妹は飢え死にしているぐらいギリギリ。

なので、実はというと稼ぎの元のクラフト材料だって満足には揃えられなかったりする。



を取っただけ。

今すぐあのタコ頭のえさになることは免れたことにホツとして、これからどうするかを考える。

あの浜辺は森と崖があるから人が泳げないというだけであって、実はそう市街地から離れていない。っていうか、陸地で移動したら遠いけど、海から移動したらJ市のリゾート地にもものすごく近い。

あのタコは偵察とかなんとか言ってたけど、そのくせ自分から出て来たという事は、あの怪人は確実にバカで好戦的。

私が逃げたからって、大人しく偵察を続行するとは思えない。そもそも偵察の意味を理解してない可能性もあるよね、あのタコ。

……このまま放っておいたら、危ないだろうなあ。

災害レベルがどの程度かはわからないけど場所が場所だから、レベルが低くても倒せる倒せない以前に逃げられる可能性の方が格段に高いよね。

お兄ちゃんを呼ぶのが一番いいんだけど、進化の家は私のテレポ―ト使っても遠いしなー。

もしお兄ちゃんが怪人と交戦したら、その最中にお兄ちゃんだけ連れて行くのはジェノスさんに悪い。

ジェノスさんなら勝てそうな相手だったから、ジェノスさんに頼むってのも考えたけど、重さ的に私がここに彼を連れて戻ってくる前にキャパオーバーを起こす。仮に起こさなくても、それならここで通報した方が早いくらい時間がかかる。

「……なら、仕方ないか」

私は持ってたバケツを、地面に置いた。

\* \* \*

「小娘ええつつー！ どこだ!? どこに消えた!?!」

タコの怪人は森の木をなぎ倒しながら私を探してた。

だから偵察ならもっと静かに大人しくしてなさいよ。っていうか海に帰れ。

でも逃げられていたら私が戻ってきた意味がないから、無駄にプライドだけは高いバカで良かった。

「どっだー！ どっにいる!？」

叫びながら私を探す怪人が、私がここに跳ぶと決めていた座標上に立った瞬間、私は跳んだ。

座標上とはいえ、私が跳んで現れた場所は地面じゃなくて空中。つまりは怪人の真上。

そこに、近くの海水浴場から持ってきたテトラポットと一緒に私は現れた。

私のテレポットは、私が持つてるといつか身につけていたり、体が密着してるものも一緒に跳ぶ。

よく考えなくても当たり前前の理屈だけど。そうじゃなきゃ、私はテレポットするたびに真っ裸になるもん。

だから人を運ぶときはその相手に抱き着けばいいし、こういう重いものも抱き着いていれば跳べる距離は短くなるけどさほど苦労せずに運べる。

だから、テトラポットを一つ持つてきて隠れて、「怪人がここに立った瞬間跳ぶ」という座標軸を決めて、いつでもそこに跳べるようにした状態で待っていた。

そして狙い通り、怪人が座標軸上に立った瞬間跳んで、空中に現れた瞬間、私は抱き着いていたテトラポットから両手を離して再び適当な場所に跳ぶ。

とつさに跳んだ場所は元いた浜辺だったから、そのまま徒歩で怪人がいるはずの場所に戻った。

まだテレポットの回数に余裕はあるけど、仕留めてないのならそれこそキャパオーバーで跳べない事態は絶対に避けたいので、回数を節約する。

私が戻るとそこには、私から離れたことで一緒にテレポットされることなくごく常識的な物理法則にしたがつて落下したテトラポットが、真下にいた怪人のタコ頭を潰していた。

やった！ 上手くいった！

始めてやった割には、理想通りで計算通りと自画自賛しながら、怪人に近寄った私は甘かった。



タコの足が、ぬるりと私の足をからめとった。

「!?」

「ゆ、るさん！ おれを、コケにしやがって！ 許さんぞ、小娘ええつつ!!」

頭の半分がテトラポットに潰されても、怪人は生きていた。

生きて、私の足を頭部から生えたタコ足が引き寄せ、私を引きずりよせて、倒れ伏した体の腕が、丸太のような太い腕を上げて、その手で私を叩き潰そうと振り落とされて――

その腕が、音もなく切り落とされた。

だるま落としのように、等分に輪切りされて、血さえも出ずに落ちていった。

腕だけではなく怪人の体が、頭が、私の足を掴んだタコの足も切り刻まれた。

悲鳴さえ上げられず、自分が死ぬということすら認識できず、ただ目の前の出来事を見つめるしかなかった私を、現実に引き戻したのは冷たい声。

「おい」

闇を人の形にしたような人が、私の目の前に降り立った。

「何がしたかったんだ、お前は？」

忍者と、出会った。

## エンドロールには早すぎる

依頼人との契約交渉まで時間があつたから、近場の森で日課の鍛錬を行っていた。

その森の中で、突然現れた気配に警戒したのが始まりだった。

俺が森に入った事すら悟らせず、さらに奥の浜辺までやってきた侵入者を、気配を殺して窺ってみたら、それは20歳に手が届くか届かないかという、ごくごく普通の女だった。

歳や性別、容姿で油断するほど甘い世界で生きてはいないが、その女は俺に気配を察知させずにここまで来られる程の手練れだとは思えなかった。

気配を殺しているとは言え、まったく俺に気付いた様子もなければ、周囲を警戒もしておらず、時々危なかしげに浜辺で転びそうになる。

そもそも服装が足首まである長いスカートで、この森を越えて崖を降りたとは思えん格好だった。

そしてやってることと言えば、黙々と浜辺に落ちているものを拾い集める。

ゴミ拾いでないことだけはわかるが、流木を拾ったかと思つたら、貝殻を投げ捨てたりと、俺にはわからん基準で物を集めていた。

このまま警戒を続けるべきなのか、先手を打つべきなのか、それとも放っておくべきなのかがまったく判別つけられなかったが、怪人が現れてようやくあの女の正体を理解した。

ただテレポートが使えるだけの、一般人だった。

俺が一番嫌いな能力を、俺が誇るスピードを何の努力も用いず凌駕する力を持った女だった。

自分から現れて偵察だと自分で名乗ったバカな怪人から一瞬で掻き消えたのは、俺と同等かそれ以上のスピードで移動したわけじゃない。

空間を超えて跳躍し、女はさっさと逃げた。

警戒していたのが恥ずかしくなって、八つ当たりで怪人をいたぶつ

てやるかと思つたら、怪人の方も獲物があつさり逃げられたことに逆上して、森の中に暴れながらやってきた。

愚鈍だ。パワーだけが取り柄のようだが、岩を砕くのも一撃では無理で時間がかかるレベル。災害レベルせいぜいは、虎の下位だろう。あんなものを切り裂いても、せつかくの武器が汚れて錆びるだけだ。

一気にやる気をなくし、俺はそのまま暴れまわる怪人をただ眺めた。

このまま行けば、市街地まで出て行くかもな。  
そうしたら、ヒーローが退治にやってくるかもしれない。

あの怪人を切り裂くよりも、やってきたヒーローと戦った方があの女で苛立ったストレスを解消できるかもしれない。

そんな期待を潰したのは、俺の強さを再確認できる手練れかもしれないと期待させたくせに、一番不快な形で潰した女だった。

もう一度、女は俺の期待を潰した。  
テトラポットで、怪人のタコ頭ごと。

\* \* \*

逃げたと思つた女は何故かテトラポットに抱き着いて怪人の頭上に現れたかと思つたら、そのテトラポットを落としてまた消えた。

そして今度は確実に殺したのかを確かめるためか、何故かテレポットを使わず徒歩でやってきた。回数制限でもあるのか？

頭を半分潰したとはいえ、まだ手足が動いているのを痙攣だと思っているのか、女はノコノコ近づいて、そして言葉通り足元を掬われる。

頭部のタコ足が女の足を掴んで引き倒し、女の体よりも太さのある腕が叩き潰そうと振り上げられても、その女は何もしなかった。

顔面蒼白のまま、テレポットで逃げることも出来ないのか、出来ることすら恐怖で忘れているのか、悲鳴さえも上げずにただ見上げていた。

無性に苛立った。

俺の期待と予想をことごとく裏切った癖に、こんなにもあつけなく死のうとしている女が、その結末が気に食わなくて仕方なかった。

だから、壊した。切り裂いた。切り刻んだ。  
女を助けたんじゃない。

ただ俺は、何もかも気に入らなかっただけだ。

「おい」

だから、訊く。

「何がしたかったんだ、お前は？」

力があるくせに無力で、足掻いても無意味で無価値な行動しか出来  
なかつたこの無様な女が、何をしたかったのかを。

それを知ってから、首をはねるのは決して遅くはない。

## 無価値な生き様の意味

女は座り込んだまま、俺をただ見上げている。

その首に、怪人を切り刻んだ刀の切っ先を突き付けて、もう一度だけ訊いてやった。

「おい。聞こえなかったのか？」

お前は何かしたかったんだと訊いているんだ。

貴様はテレポーターだろう？ 一度逃げたおきながら、戦えもしないくせに舞い戻って、倒せたと調子に乗って殺されかかる。

ヒーロー気取りか？ 無価値で無様な人生だな」

女の行動を嗤ってやると、眉根を一度寄せてから震える唇で途切れ途切れ答えた。

「……ヒーローを……気取った……訳じゃ……ない。

……私じゃ……絶対に……なれないのは、わかってる、から」

唇も、体も、声も震えているくせに、俺をまっすぐに見据える目が気に入らない。

けど、まだだ。

まだこの目を潰すのも、首をはねるのも早い。

答えをまだ、聞いていない。

「なら、何故戻ってきた？ あんなにノコノコと警戒もせずに怪人に近づいたという事は、戦闘経験なんぞろくにないのだろうか？」

テレポーターなら自分の特性を使って、さっさと逃げて部屋の隅で縮こまっていればよかったものを、何故、戻ってきた？」

女は、まっすぐに俺を見て答えた。

「……昔の……まだテレポートなんか使えない頃の私が……そうだった。

嫌なことは、全部、胸の内にため込んで……逃げてるくせに、何処にも行けなくて……いつも部屋の隅で縮こまって……、逃げたい、助けてっってお兄ちゃんに頼って、縋って、甘えてた……。

……そんな、屈折したストレスが原因なのかどうかはわからないけ

ど、テレポルトが使えるようになって、……もつと遠くに逃げられるようになった。

……でも、……逃げた自分が……弱い自分が嫌だって思う気持ちから、どうやっても、逃げられなかった」

喉に突き付けられた刀を見もせずには震えながらも、弱い女は、逃げるしかなかったはずの女は言う。

俺から逃げずに、向き合って答えた。

「お兄ちゃんは、逃げないから、強くなった。強くなるには、逃げたらダメだってことを、教えてもらった。

だから私は、もうせめて、『私』から逃げない。自分に恥じる自分にならないために、逃げない。

ヒーローなんかじゃない。私が守れるのは、私自身だけ。だから私は、私の為に戻ってきた。

戦ったことはないけど、あの怪人を倒す術が思い浮かんだから、実行できる力があつたから、それをしないで逃げたら、また私は私を殺すから。

……だから、戻ってきた」

そこまで一気に言って、一息ついてからこいつは、状況がわかってないのか、へらりと笑って最後の答えを吐いた。

「あと、思いついたことって試してみたくありません?」

今までの女の主張を台無しにする一言を、自分で言い切った。

ただ単に、戦えない自分でも勝てるかもしれない手段が思い浮かんだからやってみただけだと、告白した。

この女、実は結構バカだと思った。

「……くっ」

「?」

「はははははっ!」

ヒーロー気取りの偽善者かと思つたら、なかなか自己中心的で好戦的な女だな!」

そんなバカの答えを、気に入ってしまった。

ヒーローを気取って自己犠牲に酔つたセリフを吐いたのなら、その

すべてを否定しつくして絶望に叩き落として殺してやろうと思ってい  
たら、まさかの全ては自分の為！

そして、ただ思いついたことを試したかったという子供のような動  
機！

誰かを守る為ではなく、自分が強くなるために、そして自分の力を  
試すために行動する。

それはヒーローよりも、善悪など関係なく強さを求める俺の行動原  
理に遥かに近かった。

俺は女の喉笛から刀を引いて、腹を抱えて笑う。

こいつはとことん、俺の予想を裏切るな。

まさか俺が、テレポーターを気に入ってしまったなんて思いもよらな  
かったぞ！

女はきよとした顔で、爆笑する俺を眺める。

まあ、こいつからしたら俺が何をしたかったのか、何故あんなこと  
を聞いて、そして今、爆笑してる理由もわからないのは当然か。

しかし俺は、わざわざその説明をする気なんてさらさらない。

こいつに何かを与える気はない。この女自身は気に入ったが、テレ  
ポーターが気に入らんのは変わりないからな。

「おい、女」

「え？ あ、はい」

そう。テレポーターは気に入らない。俺の速さを否定するから。

「名前は何だ」

けれど、こいつは気に入った。

こいつの最後の答えに、納得して共感してしまった。

「……エヒメ、です」

「そうか。」

エヒメ。お前、この浜辺によく来るのか？」

俺の問いに戸惑いながらも、素直に頷いてエヒメは答える。

何が何だかわからんと言いたげな顔に、手練れかと思いき警戒してた  
時の溜飲が下がる。

そうだ。今度はお前が俺に振り回されろ。

「今回は貸しにしておいてやる。必ず、返せよ」

自然に口角が上がるのを感じながら、俺はエヒメに背を向けた。ついつい長居をしてしまったが、そろそろ依頼人の元に行かねばならないことを思い出した。

惜しいがしばらく、ここには来れない。

だから後ろの声を無視して走る。

「助けてくれてありがとうございます」も、「あなたの名前は？」という問いも聞こえていないフリをして、俺はエヒメから去る。

次に会ったら、名乗ってやるさ。

最強の忍者、音速のソニックだと。

だからそれまで、俺の事で頭をいっぱいにしてろ。

俺はお前を見つけてからずっと、お前でいっぱいだったのだから。



## 私の大好きな人たち

チクチクと私は手縫いでお手玉みたいな猫のぬいぐるみをひたすら縫って完成させては、月見団子みたいにピラミッドにして重ねていたら、玄関でインターホンが鳴ると同時に、「先生」と言う声が聞こえる。

ジェノスさん、礼儀正しいのはいいけどインターホンの意味がないよ。

「こんにちは、ジェノスさん」

玄関を開けると、ジェノスさんがとても良い姿勢で立っていた。

あ、良かった。進化の家で壊れた部分は全部直ってる。髪もあのカリフラワーみたいなのから、前と同じ髪形に戻ってることにホッとする。

進化の家から帰ってきたジェノスさんを見た時、嘔き出さないようにするのに苦労したなあ。

顔の半分が壊れても損なわれないイケメンである分、ギャグマンガのようにカリフラワーになった頭はちよつと私の腹筋に抜群の破壊力だったから。

顔の半分が壊れてもイケメンなのに、カリフラワーになったら台無しって不思議。イケメンだからって何でも似合う訳じゃないんだね。

「こんにちは、エヒメさん。」

先生はいらっしゃるでしょうか？」

「ごめんなさい。お兄ちゃんちよつとテロリストを潰しに出かけちゃいました」

実際にどうでもいいことを考えつつ、私はジェノスさんの質問に答え

た。  
「テロリスト？ 桃源団ですか？ あの程度の集団に先生が討伐に向かったのですか？」

ジェノスさんも今朝のニュースか何かで、あのニート集団を知ってるみたい。とりあえず家の中に上がってもらいながら、私はお兄ちゃんがテロリストを潰しに行った理由を説明した。

「あのテロリストたち、皆スキンヘッドが特徴でしょう？」

お兄ちゃん、あんな集団が暴れまわったら自分もその仲間だって誤解されるって言って出ていっちゃいました」

「なるほど。先生も、俺を呼んでくださればよかったのに。いや、今からでも俺も桃源団を探して焼き尽くしに……」

「ストップ、ジエノスさん。相手は人間ですから焼かないで」

犯罪者で強化スーツなんか着こんでるから、たぶん正当防衛になると思うけどやめて。

っていうか、前々から思ってたけどジエノスさんって効率や合理性を求めるあまりに、お兄ちゃん以上に行動がぶっ飛んでることがあるよね。

なんか進化の家でも、まず初めに建物をぶっ飛ばして崩壊させたらいいし。

実験の為に攫われた一般人とかがいたらどうする気だったんだらう？

とりあえず私が止めると、ジエノスさんはしゅんと落ち込みつつ桃源団を焼き尽くすのは諦めてくれた。

しゅんとしてる様子が、ちよつと可愛い。

なんというか、とにかくお兄ちゃんの役に立とうと頑張るジエノスさんって犬っぽいなーと失礼なことを思いつつもお茶を入れ、それを渡してもローテーブルを前にして向き合って座る。

「それで、ジエノスさん。今日はどうしたんですか？」

お兄ちゃんに用があるのなら、私が跳んで連れて帰りますよ」

「いえ。結構です。」

……実はエヒメさん。貴女に訊きたいことがあります、今日はお訪ねしました。だから、先生の不在は失礼ながら好都合です」

私が尋ねて提案してみたら、それを否定してから少し悩んだ様子を見せて、彼は答える。

私に訊きたいこと？ 何だろう？

「？ はい。私に答えられることなら何なりと」

特に私は隠していることも隠したいこともないから普通にそう答え

るけど、ジェノスさんには言いにくいことなのか、少し間をあけてからまず初めに行ったのは質問ではなくて、先日、進化の家から帰ってきた二人に私が話した「忍者さん」についてだった。

「……すみません。まず初めに、これは訊きたいことではなくて謝罪ですが、先日、エヒメさんを怪人から救ってくれたという『忍者』の正体は未だにつかめておりません。」

申し訳ありません」

「ちよつ、そんなに気にしないでくださいよ！」

確かに私はあの人にお礼をしたいから、もし心当たりがあつたら教えてくださいって言いましたけど、自分で頑張つて探しますから、ジェノスさんはついででいいんですよ！ 本当に出れば、出来ればでいいんです！」

ローテーブルに手をついて土下座に近い形で謝るジェノスさんに焦つて、私が「ついで」と「出来れば」を強調する。

……強調しても、この人は大真面目にあの忍者さんを探すんだろうなあ。

ちなみに、私は怪人に遭遇してなんだかわからないうちに忍者さんに助けられたことはお兄ちゃんとジェノスさんに話したけど、怪人を自分で退治しようとしたことと忍者さんにも軽く殺されそうな空気だったことは話してない。

怪人を退治しようとしたことはともかく、失敗して危ない目に遭つたことは絶対二人に怒られるし、忍者さんにも殺されそうになったことを話したら、それこそジェノスさんが忍者さんを探し出して焼却しよう。

命の恩人を火葬されたら、もう私はどうやって償えばいいかわからないから言わない。絶対に言わない。

……喉笛に刀を突き付けられたというのに、私にとつてあの忍者さんは怖い人ではなく、命の恩人という認識。悪く思えないんだよね。

それは確かに助けられたからっていうのも大きいけど、私のあの身勝手な「怪人退治」の理由を、自己中心的だつて理解したうえで見下したり蔑んだりしないで、大笑いしながら当たり前のように受け入れ

てくれたことも、理由の一つ。

……何かあの笑顔を見た時、笑われた時、バカにされてるとか思わず、この人というの楽だなって思った。あの時はまだ、刀を突き付けられてたのにな。

それはいつもはだらしなくてダメ人間の見本みたいなのに、何だかんだで正しいことしかしないお兄ちゃんや、どこまでもまっすぐで生真面目なジェノスさんとは違って、身勝手に間違っばっかりな私の飾らない本音を好意的に解釈するでもなく悪いまんま笑い飛ばしてくれたのが、「ああ、私はこのままでいいんだ」と思えたからなんだろうなあ。

別にお兄ちゃんやジェノスさんが嫌いとか、一緒にいたくないってわけじゃないけどね。

お兄ちゃんはなんだかんだで私の全部を「エヒメだから」って受け入れてくれると信頼してるし、ジェノスさんは正直に言えば付き合ってたて疲れる言動が多いけど、でも初めて「お兄ちゃんがすごい」という私の話に共感してくれて、お兄ちゃんを評価してくれる人だから。この人とお兄ちゃんの話をしてる時が、もしかしたら私は一番幸せな時間かもしれないって思わせるぐらいに、楽しいから。

だからジェノスさんも大好きなんだけど、この人の限度のなさや実は初めのお兄ちゃん全裸で証明してるから、もしかしたらこの人に忍者さんの事を話したのが間違いかもしれない。

なんか殺されそうだったってことを話さなくても、出会った瞬間に殺し合いが始まりそうなほど相性が悪そう。

私の説得でジェノスさんはようやく、頭を上げてくれた。

そしてまたちよつと間を置いて、ようやく本題に入る。

「……………エヒメさん」

「……………」

いつも真面目なジェノスさんがさらに真面目な様子でこちらを見据えるので、自然に私も緊張して背筋を伸ばす。

ジェノスさんは、言った。

「……………先生の強さの秘密は、毎日の腕立て伏せ100回、上体起こし1

00回、スクワット100回、ランニング10キロとは本当ですか!？」

……ああ、お兄ちゃん。

大真面目にそれ、ジェノスさんに言っちゃったんだね。

私はどんな顔をして、「本当」って伝えればいいの？

強くなりたいと願うのはやめた

エヒメさんはかなり長い間、思い悩むように頭を抱えて沈黙を続け、そして絞り出すような声で言ってくれた。

「……………本当」

「……………そう、ですか」

その答えに、俺も右手で項垂れた頭を支えて声を絞り出す。

声は絞り出さないと出なかつたくせに、する資格はないとわかっていながらも失望は隠しきれずにあふれ出た。

「……………えっと、一応言っておきますけど、私もあの筋トレでお兄ちゃんがあんな超人的な強さを得たとは思ってませんから。

でも、お兄ちゃんがやってること自体は本当にあれだけなんです。筋トレだけで、改造手術とかそういうのは全く何もやってません」

エヒメさんは何とか俺をフォローしようとしてくれたが、正直それは何の意味もない。

先生が気付いていないだけで他に何かきっかけや秘密があるのなら、俺も同じくらいの強さを得る可能性があるが、もしも仮に、本当に筋トレだけであの強さを得たのなら、それは俺にとっては絶望だ。

生身の体を失った俺にとって、筋トレは無意味どころか下手したら無駄にパーツを摩耗させて、損傷させる行為に過ぎない。

つまり俺は、サイボーグになった時点で先生のように強くなるという可能性を永遠に失ったということだ。

まだ可能性はある。そちらの方が高いとは分かっているが、それでも強くなる可能性や方法は全くの手探りなくせに、絶望の可能性ははっきりと具体性を持って俺の心をへし折りにかかった。

……クセーノ博士がくれたものを否定などしたくないのに、サイボーグになったことを後悔などしたことなかつたのに、「どうして？」という考えが俺の頭から消えない。

ああ、いつそサイボーグではなくロボットであつたのなら、全てが作りものならば、この絶望をただの低い可能性として切り捨てること

が出来たのに。

ついにそんなことを思い始めた時、俺の左手が温かくて柔らかいものに包まれた。

エヒメさんの手、だった。

いつの間にかエヒメさんが俺の向かいから隣に移動して座り、俺が膝の上で握りしめていた左手を自分の両手で包み込んで、彼女は困ったように笑って言う。

「あの、ジエノスさん。

私の考えを聞いてもらえますか」

生身ならきつと力を込めて握りしめすぎて血が出てるであろう俺の拳を、両手でも包みきれないのにエヒメさんは、それをほぐすように柔らかく握って、そしてまっすぐに俺を見て語る。

「お兄ちゃんは、逃げないんです。

怪人からも、苦難からも、自分からも」

困ったように、照れくさそうに、けれど誇らしげに先生を、自分の兄について語る。

「お兄ちゃんがやってることは、本当にさつき言った運動部の筋トレメニューでしかないけど、でもお兄ちゃんは本当に毎日欠かさず行っんです。

……たとえば、怪人に大怪我を負わされた次の日でも」

「!?」

先生の言っていた筋トレは、彼女の言う通り運動部がこなすレベルのもので、さほどハードでもない。

だから俺は初め先生がそう言った時、ふざけているのかと思った。

……バカにしているのかと、憤った。

けど、そうだ。

先生だって3年前まで普通の、ごく一般人レベルの強さしか持たない人間だったんだ。

きつと災害レベル狼にも苦戦するような、そんな人が始まりだった。

「お兄ちゃんは怪人との戦いで腕が骨折しても、腕立て伏せをやめた

り、数を減らしたりしませんでした。

車に轢かれそうな子供を庇って自分が車にはねられても、ランニングを中断なんかしませんでした。

私が泣いて止めてやっとな、怪我の手当てだけはさせてくれたんですよ。もちろん、手当てをしたらまた、残りの距離を走りに行っちゃったし」

エヒメさんは少しだけ唇を尖らせた。自分に心配ばかりをかけた、昔の兄に対して怒っているんだろう。

それでも、柔らかな微笑んでいる。

兄を、誇りに思っている。

……俺は、生身の体でないと意味がないと絶望した。

だが、俺がサイボーグではなく生身の体のままだったとしても、先生と同じことが出来ただろうか？

筋トレの内容や回数は、問題じゃない。

たとえ自分がどんなに傷ついても、どれだけ辛くても、やろうと決めたものを貫き通して行動する。

それが、生身だからといって出来るのか？

俺の場合は明確に、サイタマ先生という見本がある。具体的にこうなりたいというゴールがあるのに対して、先生はどうだ？

先生は俺以上に手探りのまま、ゴールなんて見えていないしあるのかどうかもわからないまま、それでも貫き通した。

「それとお兄ちゃんは多分、災害レベルの意味を未だに分かってないですよ。今も昔も狼だから俺が行こう、鬼だから行かないなんてこと、言ったこともしたこともないです。

ニュースで警報が出たら、それがどんなに遠くても、目の前で怪人やテロリストが暴れていたら、それがどんなレベルでも、真っ先に飛び出して戦います」

一切の妥協をせず、どんなに傷ついても挫けず、いかなる強敵でも怯まず、自分に課したことやものから逃げない。

それを、俺は実行する覚悟があったか？

「……それが、私が思うお兄ちゃんの強さの秘密……、強さの理由で



す。

私は、お兄ちゃんがヒーローになると言っただけからたぶん一番近くで見えてきました。そこでそう思って……、だから私も、お兄ちゃんみたいに強くなるうって決めたんです」

夢げで華奢で、誰かに守られるのが一番自然な彼女が、そう言った。強くなる、と。

「私はお兄ちゃんみたいなのはなれない、そもそもなりたいたとは思えないけど、でも、弱くて逃げて守られて誰かに頼って縋って甘えるだけの自分が嫌だから……、だから、そんな自分から逃げないって決めたんです。」

せつかくレポートなんて特殊な力を得たのだから、これは逃げるためだけじゃなくて他に生かそう。誰かを助けるため、時間を稼ぐため、怪人を倒すため、とにかく思いついた可能性を『きつと無理だ』なんて決めつけないで実行して、貫き通そうって決めました。

……それこそが、お兄ちゃんみたいになるための一歩だと、私は思っています」

エヒメさんが包み込んでくれていた俺の手は、いつしか力が抜けていた。

八つ当たりの憤りは、エヒメさんの言葉で綺麗に霧散して、もう俺のどこにもそれはない。

「……私の考え、参考になりました？」

微笑んでいたエヒメさんの瞳が、不安でかわずかに揺れる。

俺はその目を見つめ返し、俺の手を包む彼女の手に、自分の右手を重ねた。

この、何もかもを破壊して焼き尽くす武骨で無機質な手でも、彼女が俺にしてくれたのと同じ役割を果たしてくれるだろうか？

……温かいと、思ってくれるだろうか？

「——はい」

俺はただ一言、答える。

言い尽くせないほどの感謝を込めて。

……ああ。

エヒメさんが決めているのなら、俺だって覚悟を決めよう。  
子供のように、ただ願うのはもうやめだ。  
強くなりたいと願うのではなく、強くなると誓おう。

世界は広いのに、世間は狭い

やる気もない、覇気もない、髪もない、全身どこも隙だらけで、強化スーツを着ていた分、ハンマーヘッドの方がまだマシに思えるほど弱く、脆く、手ごたえのなさそうな男。

それが奴への、第一印象。

大方、テロ行為の参加すら認められなかった下っ端中の下っ端かと思った。

本人は否定し、ヒーローを自称していたが、お前なんか知らんしその無毛地帯な頭で何言ってるんだこいつは？ としか思えなかった。

しかし、俺の苦無、そして刀の攻撃を奴は見切った。

もうこの時点で、こいつがテロリストの残党か本当にヒーローかなんぞどうでもいい。

俺の技を、速さを見切られた。それが、俺のプライドが許さない。それはもちろん事実だが、それ以上に胸の内が高揚する。悪い癖とわかっていながら、口角が自然に吊り上がる。

どいつもこいつも、新しい技を試すどころか準備運動にもならないうちに死んでいった。

手ごたえなどなく、俺の強さを再確認もできないまま、羽虫を潰すような殺しはもう飽き飽きだ。

そんな俺の心境を、男は見抜く。

こいつへの第一印象は改めよう。

お前は俺に相応しい、敵だ。

\* \* \*

そう認識を改めて、もう一度男と対峙したら、男は手で俺を制して「ちよつと待ってくれ」と言い出した。

初めから変わらず覇気のない顔と声なので、イラツと来るものはあるが命乞いではないのはわかった。

何よりこいつは俺の顔や全身をじろじろ見ては、腕を組んで首を傾げている。

何だ？ 訊きたいことでもあるのか？

まあ、いいだろう。冥途の土産に答えてやる。

「お前さ、俺の妹を怪人から助けてくれた奴？」

しかし男から発せられた問いが余りに予想外だったため、不覚にも呆気を取られる。

心当たりはあったが記憶するあの女、エヒメとこいつが兄妹という形で繋がらなかった。

「ハゲた女なんぞ知らん」

「俺だって昔は生えてたよ!!」

「妹の方を否定しろ」

思わず素で思ったことをそのまま口にしたら、向こうにも素でキレられた。

言い出した俺が言うのもなんだが、お前の事はいいから妹がハゲであることの方を否定しろ。お前の過去はどうでもいい。

「……エヒメのことか？」

茶番はやめにして名を出してみれば、男は「そうそう！ やっぱりお前か！」と肯定した。

……似てない兄妹だな。

髪のを抜いても、顔立ちはもちろん、お人好しのように思えて実は自己中心的なあいつと、自称とはいえヒーローの兄か。

まあ、俺の予想をことごとく裏切るという点ではそっくりだがな。

とにかく、こいつが先日出会って少し気に入った女の兄だという事はわかったが、それがこいつの命を見逃す理由にはならない。

短い会話とも言えない会話の中で、エヒメの口から「お兄ちゃん」という単語が何度か出たのは覚えている。

あいつが兄を慕っていることは、知っている。

しかしそれすらも、こいつを殺すのに躊躇う理由にはなりやしない。

むしろ、楽しみだとすら思えた。

あの弱くて無力で本来なら逃げる以外何もできないはずの女は、自分に「逃げない」と課している。

そんなあいつに、俺の強さと速さを見せつけた俺が兄を殺したと知

ればどうするか、知っても自分で課した「逃げない」に準じ、俺に向かつてくるのかが知りたい。

俺に命を救われた恩と、兄を殺された恨みがせめぎ合って歪む顔が、俺以外の事なんぞ考えられなくなった顔が見たかった。

だから、「あいつの恩人か」。なら、手加減しないとあいつにめっちゃくちや怒られんな」という不快な呟きを無視して、俺は駆けた。

手加減なんぞ必要ない。お前はここで死ぬ。死んで、その首は妹への手土産になるんだ。髪がないから持ち運びにくいな。

俺の速さが最高速度を迎える。

そのタイミングで首を刈り落とそうとした時、奴がぎゅるつと勢いよく俺に顔を向け、確かに視線を合わせて言った。

「帰っていいか?」と。

俺のスピードが、最高速度も見切られたことにプライドが大きくえぐられ、その勢いに任せて、全身の回転も加えた蹴りを、風刃脚を放った。

「チェックメイト。あ！ すまん」

\* \* \*

……逃げたんじゃない。俺は負けて逃げたんじゃない！

これは戦術的撤退だ！

足が震えるのは、最強の俺に相応しいライバルが現れたことに対する武者震いだ!!

決して、金的を喰らったことは関係ない！ そもそもそんなものは

喰らってない!!

ああ、くそっ！ 何なんだ、あの兄妹は!!

やる気に満ちてるくせに無力な妹と、やる気は全くないのに強い兄って、どれだけ真逆なんだ!!

くそっ！

覚えてろ、サイタマ!!

そしてエヒメ!

お前に貸した恩は、サイタマ打倒に協力という形で返してもらおうかな!!

## 自覚ときっかけ

「お兄ちゃんのバカバカバカバカーっ!!」

「痛い！ すまん！ 悪かったって言ってんだろ！」

「エヒメさん、落ち着いて！ 先生も悪気はなかったことですし……」

エヒメさんが泣きながら先生の肩や背中をひたすら殴打するのを、俺は何とか止めようとするが、無駄だった。

殴打はやめても、エヒメさんは涙目のまま先生を睨み付けて叫ぶ。

「お兄ちゃんの大バカ!!」

何でよりもよってソニックさんにとんでもないことしちやっぺんの!？」

先生が桃源団のリーダー、ハンマーヘッドのバトルスーツを破壊して追い払ったのはいいが、そこで先生はエヒメさんが先日助けられたと言っていた「忍者」と出会ったらしい。

その忍者は「音速のソニック」という頭痛が痛いみたいな名らしく、それだけなら別にいいのだが問題は、用心棒から暗殺も請け負う裏社会の人間であったことと、先生が危惧していた通り桃源団と間違われて戦いを挑まれたことだ。

暗殺者なら先生も遠慮など普段ならしないだろうが、エヒメさんを奴が助けたことは事実だったらしいので、さすがに妹の命の恩人を殺すのはもちろん大けがを負わすのも躊躇われて、先生は相手に寸止めで実力差を見せつけて終わらせるつもりだった。

……つもり、だった。

「なんでとんでもないところに攻撃しちやっぺんの!？」

ソニックさんがお兄ちゃんの所為で女の子になっちゃったら、私はどう償えばいいかわかんない!!」

だが、その寸止めの位置が……股間であった事と、相手は二重で強調するだけあつてのスピード自慢だったからか、勢いが止まらず自分から先生の拳にぶつかりに行った。

……これはもう、相手の運が悪かったとしか言いようがない。

「お兄ちゃんのバカ！ もうソニックさんが女の子になっちゃった

ら、責任とって結婚しろ！

あ、ダメだソニックさんに得がない、迷惑でしかない！ やっぱ結婚すんな土下座しろ!!」

「言われなくてもしねーよ!!」

もはや怒りすぎて自分でも何を言ってるのかわからなくなってるエヒメさんに、とりあえずお茶を渡して水分補給を促す。

エヒメさんはまだ「お兄ちゃんのカカ」を呟きつつも、泣き叫んで疲れたのか大人しくお茶を飲んでくれたので、この間に何とか説得しようとする。口を挟む。

「エヒメさん、お気持ちわかりますがやはり、先生を責めるのは酷です。」

先生はむしろエヒメさんの恩人だからこそ相手が自分を殺すつもりでも精一杯手加減をして、殺すのはもちろん怪我もしないように配慮したのですから」

彼女は決して愚かではないので、俺の言葉は言われなくともわかっていたのだろう。

悪気のなかった兄を責めてしまったことを悔やむように眉根を寄せて俯くが、それでも自分の恩人に対する罪悪感の所為か、先生を許すことが出来ないようだ。

……そこまで、いつもあんなに慕っている、俺にどこまでも真っ直ぐに語って誇っていた兄を許せないくらいにその恩人が、ソニックという男が大切なのか。

命の恩人なのだから、それは当たり前だろう。

……なのに俺はその事実が、無性に気に入らなかった。

「……エヒメさん。そこまで、ソニックという男が大事ですか?」

気がつけば、声に出た。

「え?」

「? ジェノス?」

エヒメさんだけではなく、先生も目を丸くして俺を見た。

何故、俺はこんなことを尋ねているのか、自分でもわからない。

なのに、言葉は勝手に俺の口からこぼれ出る。

どうした？ 人工声帯の故障か？

「その男は、暗殺者です。先生が本当にテロリストかどうかも確認せずに殺そうとしたような男ですよ？」

エヒメさんを助けたのは確かな事実かもしれませんが、俺にはそいつが善意で助けたとは思えません。何らかの裏の意図があったと考えた方が自然でしょう。

……だから、そんなにも恩義を感じたり、罪悪感を背負う必要はないのでは？」

……重い沈黙が落ちる。

俺は、何を言った？ 何故、あんなことを言った？

そしてどんな答えを、俺は望んでるんだ？

「——ジェノス、さんは……」

沈黙は数秒か、数分かつたのかも俺は覚えていない。

ただ泣いてないのに今にも泣き出しそうな、先生に泣きながら責めたてていた時以上に痛々しい目で俺を見据え、エヒメさんは言った。

「ソニックさんが、私を助けてくれたことは、相手が犯罪者だから、感謝する必要がないって、いうの？」

まるで死刑宣告でもされたかのような絶望をその目に湛えて、何かに怯えるようにたどたどしく。

「あの人がしたことには、価値はないっていうの？」

大切な宝物を踏みにじられた子供の顔で、彼女はそう問うた。

「アホか！」

「ぐっ!!」

「ジェノスさん!?!」

先生のチョップがいきなり後頭部に入り、俺はそのまま前のめりで床に額をぶつけた。

いきなりの事態で俺もエヒメさんも何が起こったかを理解しきれずにいると、先生は深々とため息をついてから、未だ土下座のような体勢の俺を見下ろして淡々と言う。

「お前な、俺を庇ってエヒメを慰めたかった気持ちはありがたいけどさ、極端なんだよ。」



エヒメも、んな顔してんじやねえよ。助けられたのはお前なんだから、お前が『価値はある』って思えばそれでいいだろ」

さらっと先生はそう言っつて、俺の話を終わらせた。

俺は、先生がこれ以上エヒメさんに責められないように、そしてエヒメさんが罪悪感で苦しまない為にあんなことを言っつたということにした。

そしてエヒメさんが問うた答えも、俺ではなく先生によって答えられた。

俺に無価値と評されて絶望した彼女に、その絶望こそが「価値あるものであつて欲しいもの」の価値を落とすと諭した。

「……ジエノスさん」

起き上がった俺に、エヒメさんは言う。

もう、その目には絶望も怯えもない。

穏やかに、けれど少し気まずげに笑つていた。

「ごめんなさい。心配も迷惑もをかけて。」

……それと、お兄ちゃん。言い過ぎた。ごめんね」

「おう。俺も悪かつた。もしまた会つたらあいつに謝つとくわ」

……兄妹喧嘩はそれで終結した。

だから、俺も言わねばならない。

「……すみません、エヒメさん。エヒメさんにとっての恩人に対して、失礼なことばかり言っつて、決めつけて」

俺がそう詫びて、床に手を突き土下座しようとしたのを、エヒメさんが止める。

「ジエノスさん、もういいんです。ソニックさんが何者かわかつたなら、心配するのは当然なんですから」

彼女は俺を許した。

俺の言葉は、彼女の大切なものを踏みにじつた言葉は、心配故の言葉だと受け入れてくれた。

もしも、罪悪感が質量を伴うものならば、俺は今この瞬間、全身が潰れただろう。

違う。違うんです。先生。エヒメさん。違うんです。

ああ、人工声帯の故障なんかではない。責任転嫁をするな。

これは、俺の醜い嫉妬だ。

恩義と罪悪感で、先生以上にエヒメさんの心の大半を占めている男に俺はただ、嫉妬しただけなんだ。

愛しくてあまりに尊くて、何よりも大事にしてゆきたかった想いの自覚は、最悪に醜い感情の芽生えがきっかけだった。

ヒーローになれるかな？

お兄ちゃんとソニックさんがものすごく嫌なきっかけでライバルになっちゃったせいで、私はお兄ちゃんにキレルわ、ジェノスさんには迷惑をかけてなんかすごく気を遣わせてしまったわでグダグダになったのが、何とか少しは落ち着いた。

落ち着いたけど、ジェノスさんは私を心配して慰めるためとはいえソニックさんをかなり悪く言ってしまったことをまだ凹んでいるから、ちよつと気まずい。

なのお兄ちゃんはもちろんそんな空気は読まず、「てゆうーか、何でお前はいるんだよ？ 帰れよ、他人なんだから」と辛辣な言葉を投げつけた。

っていうか、お兄ちゃんにとってジェノスさんはまだ弟子どころか知人ですらなかったんだ。

「お兄ちゃん！」

「先生！ 俺は強くならなければ「うるせええええええええええ！」

私の注意とジェノスさんの言葉に被せて、お兄ちゃんが怒鳴る。

「エヒメの恩人の事で忘れかけてたけど、俺は重大な問題に気付いてシヨックを受けてる最中だ！」

今日は帰ってくれ！ 頼むから！」

怒鳴った後にそう言ったお兄ちゃんの顔は珍しく真剣に焦ってて、本当にシヨックを受けてるみたい。

「重大な問題？」

ジェノスさんが首を傾げ、お兄ちゃんにその思い悩む問題を教えてくれと頼み、私もお兄ちゃんがここまでシヨックを受けそうなことあったっけ？ と、お兄ちゃんの話の思い返してみた。

……ん？

もしかして、お兄ちゃん。

「お兄ちゃん、もしかしてソニックさんに『お前など知らん』って言われたのを気にしてる？」

記憶を掘り返し、お兄ちゃんが語ったソニックさんとのやり取りをダメもとで上げてみたら、お兄ちゃんはゲンドウのポーズでしばらく黙った後、「うん」って呟いた。

……当たっちゃったよ。

やめてよ、ジエノスさん。そんな「さすがはエヒメさん!!」って目で見ないで。

思い悩んでいたことをあっさり当てられたことで開き直ったのか、お兄ちゃんは現状の不満を淡々と死んだ目で語り始めた。

言い方は抑揚なく淡白で、目も死んでるくせになんか鬼気迫るオーラが溢れ出てた。

……ストレス溜まってたんだね、お兄ちゃん。

今日もテロリストに間違えられるわ、ソニックさんに「知らん」つて即答されるわ、前にも怪人を倒したのに誰も自分の事を覚えていないわと、愚痴と不満を垂れ流し、私は今日はお兄ちゃんの好物でも作って愚痴をひたすら聞いてあげようと覚悟したタイミングで、ジエノスさんは膝立ちになって叫んだ。

「……まさか、趣味でヒーローとは……」

先生！ ヒーロー名簿に登録はしてないんですか？」

「え？ はい、お兄ちゃんはしてませんよ。趣味ですから」

「え？ 何それ？」

……私たち兄妹は、お互いの答えに驚愕の視線を向けて向き合い、ジエノスさんはもう完全にフリーズしてた。

お兄ちゃん。何か信じられないセリフが聞こえたんですけど？

\* \* \*

「知ってたなら教えろよ！」

「むしろ私が、お兄ちゃんがプロヒーローの存在を知らなかった理由を知りたいよ！ 20文字以内で簡潔に説明して!!」

私とジエノスさんからプロヒーローの存在を教えてもらって、一通り凹んで頂垂れてから、逆ギレしやがったよこの兄は。

まあ、私も「趣味」という言葉を鵜呑みして何も教えなかったのは悪かったけどさ。

だって、プロヒーローの制度はたぶんお兄ちゃんの肌には合わないし、お兄ちゃんが夢見た「ヒーロー」とは違うものだったから。

そのことを一応伝えてみたけど、お兄ちゃんはもう長い話は面倒状態に入ってしまったって、ランキング制度とかは完全に話半分でプロヒーローを目指すことを決めてしまった。

……ま、いいか。

お兄ちゃんは自分が一度決めたことのなら、きつかけはどんなにバカバカしいことでも貫き通すし、他人に褒められるのは素直に喜ぶけどバカにされても気にしないのは、反省しないっていう欠点でもあると同時にランキングとか順位付けの世界だといいい武器だし。

……私と違って、挫けて潰れて立ち上がれなくなるってなんてない。

そう思うから、私は素直に応援しよう。

「お兄ちゃんなら実績があるんだから、合格は確実だよ!」

「そうだよな! そういや、ジェノスは登録してんのか?」

「いえ、俺はいいです」

お兄ちゃんの質問に、ジェノスさんは否定とこれからもする気はないと意思表示する。

確かに、ジェノスさんは認めた人に対しては息苦しいくらいに礼儀正しくてこちらを立ててくれるけど、そうじゃなきゃ結構傍若無人で上下関係なんて気にしない人だから、お兄ちゃんとは違う意味で向いてないよね。

なのに、一人で試験は不安なのかお兄ちゃんはジェノスさんもプロヒーローになることを誘う。

「登録しようぜ!」

一緒に登録してくれたら、弟子にしてやるから!」

あんたはトイレに誘う女子中学生か。

「いきましよう!」

そして即答か。単純すぎませんかね、ジェノスさん!

なんか私、実力関係ない部分で心配になってきたんですけど!?

## プロヒーロー編

### ヒーローを続けていける糧

ヒーローになった。

71点の合格にまさしくギリギリの点数で最下位C級だけど、プロヒーローとしての資格を俺は得た。

子供の頃の夢が叶ったと、やっと言ってもいいんだろう。

なのに、俺の感情は揺さぶられることはなかった。

いや、ジエノスが満点合格したのに俺はギリギリで合格だって判明した時は、死ぬほど焦ったけど。

あと責任者に直訴しに行くって言った時も焦ったけど、そういうのはいい。

もつとこう、達成感とかそういうものがあるかと期待したら、いつもの怪人退治と大差ない。

ただただ予定調和の単純作業じみてて、虚しいだけだった。

結局、俺は期待したものなんか何も得られないで、面倒くさいものを背負っただけだ。

まずは、ジエノス。

俺を慕うのも尊敬してくれるのも恥ずかしくて面倒くさいとも思いうけど、それ自体は素直に嬉しい。嬉しいが、どう考えてもあいつは俺を過大評価してる。

俺はマジであるの進化の家で言った通りの事しかしてねーから、あいつに教えることなんかないし、あいつが思うほどご立派な人間でもない。

やっぱり、弟子にするとか言うべきじゃなかったかもなー。

何を教えりやいいんだよ、何を。筋トレしか浮かばねーよ。

そんでもって、プロヒーローの資格。

これは自分からもらいに行つて得た物なのに、達成感もなく得てしまえばただの面倒事に成り果てた。

いや、これからいつもやってたことをして金をもらえるのは、喜ば

しいことだけどさ。

さすがに俺ももう、むなげ屋行かたびに近所の主婦から「妹に養われてるダメ人間」って噂されるのは嫌だ。

……エヒメにかけてきた苦勞を、少しは樂にしてやれることは本当に良かったと思える。

これからあいつが、俺が馬鹿にされてその怒りを誰にもぶつけられず溜めこむなんてことをしないですむのなら、それだけで俺は趣味ではなくてプロのヒーローになって良かったと思う。

……思えるのに、虚しいと思うのはやっぱりランキング制度って奴の所為か。

俺は昔からさほど順位とか他人の評価とかを気にせず生きてきたけど、それでも俺を慕って俺に弟子入りした奴が、俺より上の評価を得ているのはさすがに凹む。

運動はともかく筆記がズタボロだったんだから、これはまあしゃーないけどさ。

それよりも俺のテンションを落とすのは、さつき何か出て来て「新人潰し」とか言って俺が土手に転がり落としておいたオッサンだ。

名前は覚えてないけど、確かA級だとかなんか言ってたよな。少なくとも、俺より上だったことは確かだ。

……俺より上なのに俺より弱くて、そしてヒーローなのに同じヒーローを潰そうとする。

達成感がないのも、虚しいのも当たり前だな。

これは、俺が思い描いていたヒーローじゃない。

俺の夢はまだ、叶っていない。

けれど、俺は自分になりたかったヒーローというものも実はよくわかっていない。

だから、何もかも中途半端で虚しくて、面白くない。

まさか、プロヒーローになってからこんな風に思い悩むなんて思わなかったよ。

どんなヒーローに俺は、なりたかったかなんて。

\* \* \*

「お兄ちゃん、お帰り」

虚しさを抱えたまま家に帰ったら、エヒメがいつものように出迎えた。

どんな怪人が現れても、ヒーロー活動が趣味から仕事に変わっても、変わらない日常風景。

「お前、合格おめでとうぐらい言えよ」

あまりにも自然体で、もしかして俺は試験に落ちたとしても思われるんじゃないかと思ったけど、あいつはさすが、俺の妹だ。

俺が「ヒーローになる」と決めた3年前から、一番近くで俺を見て、俺のバカな行動で泣かせて、それでも応援して支えてくれた家族だ。「おめでたいことなの？」

しれっと、あいつは言った。

俺が合格しても満たされていないこと。虚しさがさらに増したことを見抜いて、だからこそあいつは触れずに日常を続けた。

俺がプロヒーローをいつでもやめれるようにと、自分の期待が重荷にならぬように、あいつは俺の合格を喜ばず、何でもない些細なこととして扱った。

「……めでてーことだろ。やっと無職じゃなくて、堂々と名乗れる職を手に入れたんだから」

バカか、お前は。

そんな気を回さなくてもいいんだよ。

お前は俺の妹で、俺はお前の兄貴なんだ。しかも、6歳も上なんだ。期待しろよ。お前なんか全然、重くなんかねーんだよ。

俺の答えに、あいつは一瞬きよんとしてから笑った。

「……そっか。じゃあ明日、お祝いしよう。ジェノスさんも一緒に！」  
ああ、そうだ。

お前は無邪気にそうやって喜んで、笑っている。

そうじゃないとそれこそ、俺は何のためにヒーローをやっているかわからない。

妹に散々迷惑と苦勞をかけて、泣かせた拳句に気を遣わせるヒーローがこの世にいてたまるか。



そんなことを考えながら、俺は手を洗おうと洗面所の方に向かう。その途中でエヒメが台所からひよっこり顔を出して、こんなことを言い出した。

「そうだ、お兄ちゃん。無職で思い出したんだけど」

何だそれ？ 嫌なワードで何を思い出したんだ、こいつは。

「お兄ちゃん、ハンマーヘッドって奴と自分が似てるんじゃないかって言ってたじゃん。」

ソニックさんとかのことでグダグダになって、言い忘れてた」

ハンマーヘッドと言われて、俺の方が一瞬「誰だそれ？」って思った。

ああ、あれか。あの働きたくないって主張してたテロリスト達のリーダーか。

よく考えたら、プロヒーローになるきっかけはそいつだよな。

そいつがどうしたのか、まさか今頃「確かに似てるよね」と言われたら、さすがにしばらく立ち直れないぐらい凹むぞ俺はとか思っていたら、エヒメはあまりにも当然と言わんばかりの顔をして言った。

「全然、似てないよ。」

どれだけ間違えてもお兄ちゃんは、あんな奴と一緒ににはならないし、そもそも間違えない。

ヒーローになるために就職しないでどれだけ辛くても筋トレを続けたお兄ちゃんと、働きたくないからバトルスーツに頼って暴れたあいつとは、どこまで行っても交わることのない別物だから」

それだけ言っつて、エヒメは台所に引っ込んで俺は廊下に取り残される。

胸の内が、満ちるのを感じた。

怪人を倒しても、プロヒーローになっても得られなかった達成感と満足感が今、確かに胸の中に溢れるほど満ちたのを感じている。

「——ああ、そうか」

あまりにも身近で、そして俺にとって当たり前だったから気付かなかった。

俺がなりたいヒーローは、お前が望むヒーローだ。

エヒメが、妹がいつだって笑って幸せになれる世界を作って守り抜く。

それが、俺がなりたくて仕方がなくて、そして誰にも譲れないヒーローだ。

お前が、俺がヒーローであり続ける糧なんだ。

## 敬愛4庇護欲3独占欲3で構成された感情

「なあ、ジエノス」

「はい、何でしょうか先生」

先生との手合わせを終えた後、俺と先生はうどん屋で昼食をとる。互いに向き合ってテーブル席に座り、うどんをすすっていたら先生が何気なく俺に尋ねた。

「お前、エヒメに惚れてんの?」

……もしかしたら俺にとってこの時が一番、自分がサイボーグで良かったと思った瞬間かもしれない。

生身なら間違いなく食べていたうどんを先生に向かって嘔き出して、むせていたところだろう。

食事をとれるとはいえ人間とは根本的に違う構造上、どんなに衝撃的なことを言われてもそのような反応が出なかったことは幸いだが、言われて完全に動きが停止して、先生に頭を軽くノックされるまで動き出せなかったのも、あまり意味がない。

完全に先生の言葉を俺は、フリーズするほど凶星と肯定していた。……つい最近、最悪なきっかけで自覚したばかりの想いを、まさかこんなにも早く先生に指摘されるとは。

先生がとてつもなく聡いのか、俺がどうしようもなくわかりやすいのか。

どちらにせよ羞恥で今すぐに自爆したいくらいだが、それよりも申し訳なさが先立った。

「すみません!! 先生!!」

「何でいきなり謝るんだよ!?!」

俺はとりあえずうどんのどんぶりを横において、テーブルに手を突き頭を下げた。

本来なら土下座をすべきだろうが、あまり広い店ではないのでそれが出来ず、ひとまず今できる限り深く頭を下げる。

「先生に何一つ追いつくどころか近づきさえもしていない分際で、先生から頼まれた『エヒメさんの友達』ではなく身の程知らずに、エヒ

メさんに懸想など……」

「落ち着け。とりあえず、とにかく落ち着け。そんで頭を上げろ。」

別に俺は怒っても反対もしてねーから」

俺が思いつくままに自分の身の程知らずな想いを詫びるのを、先生は途中でぶった切って止めて、そして信じられない言葉を口にした。

「……反対、されないのですか？俺なんかエヒメさんを……」

「自分の事を、『なんか』なんて言うな。それに、何で俺が反対しなきゃいけないんだよ。」

一番大事なのは、お前とエヒメ自身の気持ちだ。むしろ、関係ない俺がこんなことを訊いてる方が、身の程知らずで厚かましいんだよ」俺の自虐的な言葉を叱り、先生はうどんをすすりながら言う。

誰よりも身近で守ってきたはずの妹を、こんな馬の骨としか言いようのない俺が懸想していることを、先生は本人たちの問題で自分は部外者だと言い切った。

理屈では確かにそれが正論だろうが、そういう問題なわけがない。そうやって割り切れるようなものではないはず。

「……だから、別に俺から何かを言うつもりもするつもりもねーよ。」

お前の事はまだよくわかってないけど、良い奴だってことはもう十分知ってるし、泣かせるなどかとも言うつもりもねえよ。俺が一番、心配と迷惑をかけて泣かせてるし。お前らはまだ若いんだから、一生をかけて幸せにしろとも言えねえし。

「………だけど、一つだけ、これだけは言わせてくれ」

そのことをわかっているからか、気まずげに先生は少し間を置く。やはり先生も割り切れる例外ではなく、例え無関係で余計なお世話でも、妹を思うからこそどうしても相手に科したい条件を口にする。

「あいつに……、エヒメに期待をするな」

「……大丈夫です、先生。エヒメさんが俺のことを、先生の弟子であつて友人とすら思ってもらえてるかも怪しい状態ですから、それこそこの想いに応えてもらえるなんて……」

「あ、違う。俺が悪かった。そういう意味じゃねえよ」

先生の言葉に、わかつてはいたが改めて突き付けられた、彼女と俺

との気持ちの違いを思い知らされながら答えていると、これも途中でぶった切られて否定された。

「あいつがお前のことを好きになるかどうかの期待をするなじやなくて、あいつ自身に期待すんなって意味だ。」

「っていうか、そこを否定したら俺、自分で言ったことのほとんどを棚に上げてんじやねーか」

「言われてみればその通りだったので早とちりを俺は謝罪するが、しかし言い直されたら余計に意味が分からなくなった。」

「あの、すみません先生。おっしゃる意味が俺にはよくわからないのですが……」

「あー、うん、だろうな。……何て言えばいいのかなー？」

先生は残っていたうどんの汁を飲み干して、どんぶりを置いた時、目は中空を彷徨わせて、言葉を探しながら答えた。

「……あいつ、基本的に他人が好きじゃないって言っただろ？」

進化の家に向かう途中、先生から「妹の友達になってくれ」と言われた時のことを思い出す。

あの時は先生が語ったエヒメさんの人物像が、俺の知るエヒメさんとは乖離しすぎていて信じられなかったが、あれからそれなりに日が経ったというのに、彼女の口から出る人の話題は先生と恩人であるソニツクだけ。

それ以外の人名や話題を聞いた覚えがないので、未だに信じられないが人嫌いは事実なのだろう。

先生は少し悩む様子を見せながら、語る。

あの時は「ちよつと事情があつて」で終わらせた、彼女がそうなった理由を。

「エヒメは俺と違って、何でも平均以上の結果を出す優等生で、周りから神童だとか天才少女だとか言われまくってたんだ。本人は、ただの器用貧乏だって昔から言ってるけどな。」

……そんな感じで、周りから『何でもできる』って期待されて、昔は押しに弱かったから無茶ぶりされても断れないでくそ真面目にその期待に応えて、結果を出して、それでさらに期待されて無茶ぶりを

押し付けられてを繰り返してたんだ。

……で、あいつは自分の実力とか限界以上に頑張つて、余裕なんか無いのに周りは何でも押し付けた挙句、あいつが出した結果に嫉妬して、足を引っ張って嫌がらせやらイジメやらもされるようになって、高校に入つてもう周りのプレッシャーと嫌がらせに限界を超えたのか……、気がついたら実家から離れて一人暮らししてた俺の目の前で、座り込んで泣いてたんだ。

テレポートが使えるようになったのは、それが始まりだ。あいつはそこまですないと逃げられない袋小路に、追い詰められてたんだ」その内容に、絶句した。

先生が彼女に「期待をするな」といった意味も、人間嫌いな理由も、テレポートという特殊な力を持つ理由も理解できた。

『ジエノスさん！』

脳裏に浮かんだのは、いつも先生の家を訪れた時、笑って出迎えてくれるエヒメさん。

その笑顔は屈託がなくて、無垢で天真爛漫の見本のように明るく、故郷と家族を失ってから満たされなかった俺の胸の内に、安らぎを与えてくれていた。

どうして、人としての力を超越するほどに追い詰められて、逃げたくても逃げられず、誰にも守ってもらえずに虐げられていた彼女が、過去の話とはいえ今はああやって笑っていられるのかがわからない。どうして、赤の他人である俺の幸せを願ってくれたのかが、わからない。

どうして、そこまですて逃げたかったのに、今は「逃げない」と自分に科せるのが、わからなかった。

「……だから、あいつに対して期待というかあんまりプレッシャーをかけないでやってくれ。

お前は本気でそう思ってるってのはわかってんだけど、お前は些細なことでも『さすが、エヒメさん！』みたいな反応をするから、今のところは気にしてないみたいだけど、あいつ、誰かに失望されて『価値

がない』って思われんのがトラウマなんだよ」

何の反応も返答も返せなかった俺に、先生は言葉を続ける。

その言葉の中の、「価値がない」が俺の胸の中で形ない部分を抉る。

それは先日、嫉妬のままに彼女の恩人を、彼女にとって価値あるものを貶めた時のことであることは、明らかだ。

「……………あの時は、本当に申し訳ありませんでした」

「もうそれはいいっつーの」

何とか絞り出した謝罪は、あまりに軽く流され、許された。

それがむしろ俺の中の罪悪感を肥大させ、心が掻き雀られる。

許されるということは、あまりに過酷な罰にもなることを俺はこの時、知った。

「……………つーか、マジで俺がこういうことを言う資格ないんだよなー」

離れて暮らしててほとんど会ってなかったとはいえ、あいつがテレビで逃げ出すまで、あんなに追い詰められてたことを何も知らなかったし……………。

丁度ヒーローになるって決めた直後だったのに、俺はヒーローじゃねーってことを思いっきり思い知らされたわ。……………妹を守ってやれなかったなんて、とんだヒーローだよ。

……………だからお前は、俺みたいになるな。俺が口出ししたいのは、それだけだ」

先生はそう自嘲気に笑って話を終わらせ、俺のうどんが冷めて伸びていることを指摘する。

ずいぶんと放置されて不味くなったうどんをすするが、味は何も感じなかった。

味覚センサーの故障ではなく、ただの俺の心の問題だ。

……………先生。あなたはちゃんとエヒメさんのヒーローですよ。

だって彼女が、人を超越して真っ先に向かった先は、貴方の元だったのでしょう？

人嫌いな彼女が今、あんなにも綺麗に笑えるのは、先生の元に逃げこんでからずっと彼女を貴方が守ってきたからでしょう？

やはり先生は、強さだけではなく心根までも尊敬に値する方だと思

い知らされる。

強さの次元の違いを目の当たりにした直後、人としての器の違いも、自分の器の小ささも思い知らされるなんて……

俺は、思ってしまった。考えてしまった。

出会ってさえもない昔の話なのに、俺は「先生ではなく俺を頼って欲しかった」と。

俺は、ソニツクという男だけではなく、敬愛する先生にさえも嫉妬した。

彼女の笑顔を、幸せを与えられる唯一の存在になりたいと、願ってしまった。



## 正義とヒーローは違う

ジェノスさんが隣に引越してきた。

うん、実はいつかこうなるだろうって思ってた。

むしろ、「ここに住んでいいですか？」って言い出しかねないと思っ  
てた。

隣なだけ良かった。ここで3人が生活するのはさすがに狭い。

そんな経緯で前からそうだったけどこれから毎日ジェノスさんが  
やってくるのが確定して、お兄ちゃんはジェノスさんにどんな修行を  
つけるんだろう？　と思っていたけど、それ以前の問題に直面した。

「そういえばセミナーの話だと、C級ヒーローの場合、一週間ヒーロー  
活動をしなかった場合はヒーロー名簿から除外されるって言ってま  
したが、先生は大丈夫なんですか？」

ジェノスさんが日記を書きながら投下した爆弾発言に、お兄ちゃん  
がものすごい衝撃を受ける。

お兄ちゃんの人の話を聞かない悪い癖はセミナーでも発揮したら  
しく、このままだと何もしいまま、っていうか何もなかったから  
こそ最速でヒーロー資格剥奪だという事態に気付き、お兄ちゃんは漫  
画を放り投げてヒーロースーツに着替え始める。

「お兄ちゃん、掃除したばっかなんだから散らかさないでよ」

「んなこと言ってる場合か！　とにかく、行ってくる！」

お兄ちゃんはジェノスさんに上手いことこじつけた修行内容を言  
いつけて、そのまま走って悪い奴を探しに行った。

頑張ってるね、お兄ちゃん。と私は心の中で思いながら、自分の仕事  
を続行。

今、作ってるのはビーチグラスでフォトフレームやブローチなどの  
アクセサリー類。

我ながらにいい感じ。でも、材料が残り少ないからまた拾いに行か  
なくちゃ。

そういえば、またあの浜辺に行けばソニックさんに会えるのかな？  
会えたらいいのと思うけど、同時に会うのは結構怖いとも思う。

もうお兄ちゃんがやったことを私はどう謝ったらいいか、どんなにイメトレしてもわからないし慣れないもん。

そんなことを思いながら作業をしていたら、ジエノスさんがこちらを窺っていることに気付いた。

あ、しまった。お兄ちゃんに課題を出されたから、すぐに出て行くんだろうなあと思って、ほとんど存在を無視しちゃってた。

「ごめんなさい、ジエノスさん。放っておいちゃって。お茶のおかわり、入れましょうか？」

「……あ、いえ、お構いなく」

私が作業を中断して尋ねると、ジエエノスさんはぎこちなく断った。

そこから、気まずい沈黙が流れる。

なんか最近、ジエノスさんは私に対してぎこちないというか、やたらと遠慮してるというか、とにかく変。

私、なにかしたっけ？

私が自分の行いを思い返して心当たりを探していると、ジエノスさんの方から久しぶりに話しかけてきた。

「……そういえば、エヒメさんは先生がノルマを達成できていないことを知っても焦っていないように見えますが……、信頼、されているんですね」

まだどこかぎこちないけれど、私が違和感を覚えたところから初めてジエノスさんの方から話しかけてくれたので、嬉しくなる。

どうも私が嫌われてしまった訳じゃないと安心して、ついつい私は顔を綻ばせて、あんまり笑って言うべきじゃない内容を答えてしまふ。

「ああ、焦っても意味ないからまあいいやって思ってるだけですよ。

信頼も何も、お兄ちゃんがどんなに頑張っても世界が平和ならどうしようもないし、だからといって災害を私が起こすわけにもいかないし。

まあ、お兄ちゃんがヒーロー資格なくしても前の生活に戻るだけですから、いつそ生活サイクルが変わる前で良かったくらいですね」

うん、我ながらにポジティブなのかネガティブなのか全くわからない結論を出してるな。

ジェノスさんが、「その発想はなかった！」って顔で固まってるし。「……もしかして、エヒメさんは先生がプロヒーローをやめてほしいと思ってるませんか？」

私の答えで固まらせちゃって、どうしようかと悩んでたらジェノスさんは自動解凍してくれたけど、今度は意外な質問をされた。

意外なのは、見当はずれじゃなくて結構凶星を突かれてるから。

……バレちゃってたか。

「……そこまで積極的には思ってますよ。でも、うん、正直、お兄ちゃんはヒーロー協会が望むヒーローじゃないし、まずないと思うけど協会が望むようなヒーローにお兄ちゃんがなってほしくないですから。」

だから、お兄ちゃんがやめるって言ったなら正直ホツとするかも」

そう。私がヒーロー協会やプロヒーローの存在を知っててもお兄ちゃんに何も言わなかったのは、もちろん普通にお兄ちゃんも知ってるだろうって思ってたのが一番だけど、実は私個人がああ組織やプロヒーロー制度っていうのが嫌いだから。

「……それは、ランキング制度などの事が原因ですか？」

そこまで尋ねられて、何故ジェノスさんが私にこんなことを訊くのか、そして私の本音に何でわかったのかに気付けた。

「ジェノスさん、お兄ちゃんから私の昔の話、聞きましたね？」

「！……すみません」

責めるつもりなんてなかったけど、ジェノスさんは項垂れて絞り出すような声で謝る。

そんな風に思わなくていいのに。

「いいんですよ。……もしかして最近、ぎこちなかったのもその所為ですか？」

気にしないでくださいよ。本当にもう、昔の話ですから」

少しだけ、嘘をついた。

大半は昔の話、私も周りも子供だったと納得してるけど、それでも

未だに集団に囲まれると足がすくんだり、何かの順位が下位だと不安で仕方がなくせに、上位だと引きずり落とされるのが怖くて呼吸ができなくなる。

順位が下がることが怖いんじゃないやなくて、その引きずり落とすための手段が怖い。

酷い誹謗中傷で自信や尊厳をすべて踏み潰されて、孤立させられて、生きながらに手足をもがれてジワジワと精神を摩耗させられるよな、あの陰険極まりない嫌がらせは未だ夢に見る。

……少しどころじゃなかった。全然私、立ち直ってないや。

でも、ジェノスさんを責めたいわけじゃないのは本当。怒っていないのは、本当。

「ランキング制度が嫌いなのは当たりですけど、お兄ちゃんがプロヒーローをやめてほしいって思うことに関係はしてないですよ。」

だってお兄ちゃんは、順位とかまったく気にしないから。下なら上がって行けばいいだろとしか思わないし、周りになんて言われて足を引っ張られても、その引っ張る手を引きずって前に進んでいく人ですし」

そしてこれも本当。

私が心配していること、本当に嫌いなこととランキング制度は全く別の話。

「? それでは、いったいエヒメさんは何を危惧してるんですか?」

ジェノスさんは罪悪感で死にそうだった様子を少し薄めて尋ねたから、私は答える。

「ジェノスさん。正義とヒーローの違いってわかりますか?」

質問を質問で返すのは悪いけど、私の答えを一番分かりやすく言うにはこれしかない。

ジェノスさんはさらに訳が分からないと言いたげな顔をしつつも、真面目に答えてくれた。

「正義は正しい行いそのもので、ヒーローはそれを行う者の事では?」「そうですね。それが本来の意味なんでしょうけど、私にとっては違うんです。」

そして私にとって、ヒーロー協会やプロヒーローの大半は、『ヒーロー』ではなく、ただの『正義』に過ぎない。だから、嫌いなんです」  
ジェノスさんから私の過去を知ってしまった、そしてそれに踏み込んでしまった罪悪感が完全に表情から消えて、困惑と疑問だけに染まった。

その疑問に、私は答える。

「私にとって、『正義』の本分は、勝つこと。ただそれだけ。

そして『ヒーロー』の本分は、誰かを守り、救うこと。例え怪人に勝てなくても、それでも人を一人でも守り抜いて救ったのなら、私にとってその人こそが『ヒーロー』です。

……だから、お兄ちゃんには『正義』ではなくて、『ヒーロー』であって欲しいんです。

今も、昔も、これからもずっと」

お兄ちゃんは私にとって、昔からずっと変わらず「ヒーロー」だった。

今みたいに怪人をワンパンで倒せなくなったり、就職や学歴社会に勝てなくなったり、いつだって泣いて「助けて」と頼る以外何もできなかった、逃げ込んだ私を抱きしめて、私を守って、救ってくれた。

『エヒメ。お前は俺の妹として生まれてきてくれただけで、それだけで俺にとって自慢の、世界で一番可愛いくて大切な妹なんだ』

何もできなくても、ただお兄ちゃんの妹であるだけで、私というだけで価値があると言ってくれたから。

だからずっと、お兄ちゃんは何にも、誰にも勝てなくてもいいから、正義なんかじゃなくていいから、ヒーローであって欲しい。

それが私の本音なんだけど……、ジェノスさんが私にとっての正義とヒーローの違いを語ったらまたフリーズしちゃった。

それだけならまだ良かったんだけど、「ジェノスさーん」って話しかけたら今度はすごい勢いで日記のノートに何かを書き始めた。

「ちよっ!? ジェノスさん何書いてるの!?!」

「今の言葉に感銘を受けたので、メモをしています!!」

「秒速で3ページくらい書いたけど、何をどこまでメモしてるの!?!」

私のセリフだけなら、多くて1ページで終わるよね!? 一体この日記に何を書いてんのこの人!?

そこまで言つて、思つて、それから私は笑つた。

「……ふふっ。あははははは!」

「? エヒメさん?」

不思議そうに首を傾げるジェノスさんに、私は笑いを止められないまま言う。

「あはっ! ごめんなさい、ジェノスさん。いきなり笑つて。

でも、ジェノスさんとこんな感じで話すの、久しぶりだったからなんだか嬉しくて」

私の言葉でジェノスさんがまた「……すみません」と言いながら、申し訳なさで今にも切腹しそうな顔になつて俯く。

そんな顔を両手で挟んで無理やり上げて、私と目を合わせる。

「謝らないでください。」

ジェノスさん。私は未だに昔のことを引きずつて、人付き合いが上手くないしプレッシャーに弱いですけど、あなたと話するのは好きなんです。あなたに期待されるのは正直息苦しいつて思うこともありませんけど、あなたが思う私は私になりたい私だから、だから頑張つていけるんです。

私、あなたとはこれからも仲良くなりたいですし、お兄ちゃんのこと関係なく付き合つてゆきたいと思える人なんです。

……だから、そんな風に気を遣いすぎないで、今までみたいにしてください」

プレッシャーに弱いけど、褒められたくない訳じゃない。

むしろ褒められたいし、認められたい。逃げたくない。頑張りたい。

だから私には、全てを受け入れて守つてくれるお兄ちゃんや、悪いところも笑い飛ばして受け入れてくれたソニックさんではなく、過大評価されてるなつてちよつと疲れることがあるけど、私になりたい私を期待してくれるこの人が必要。

その「私」になれば、この人は褒めてくれると思つたら頑張れるか

ら。

……こんな、やっぱり根本は自己中心的でお兄ちゃんとは全然違う  
ダメな私の言い分を、やっぱりジエノスさんはいつもみたいに真面目  
に聞いて、そして答えてくれた。

「……………はい」

その時の顔が赤かったのはもう日が暮れ始めていたからだど、私は  
信じて疑わなかった。

### 所有欲3 支配欲3 加虐心3 不明1 で構成された感情

武器の補充と刀の研ぎを終えて、帰ってからの鍛錬の内容を考えていたら、背後の気配が一つ増えた。

それは殺気などではない。こちらを意識した、見た、ただそれだけの人の気配。

しかしその気配は、何もなく誰もいなかった場に言葉通り降って湧いたので、本来なら警戒するところだったが、この凄腕なのか素人なのか判別つかないギャップに俺は心当たりがあった。

だから俺はその気配がした方に、相手の背後に回り込んでやった。そいつは話しかけようとした奴が目の前から突然掻き消えたことに、体を跳ね上がらせて驚いていた。

その反応が少しだけ、ほんのわずかに溜飲を下げる。

こいつの兄から受けた屈辱の、溜飲を。ほんの、ほんのわずかだが。「俺の背後を取ろうなど、100年早いわ」

後ろでそう言つてやると女は、エヒメはまた体を跳ね上がらせて驚き、そして気まずそうに振り返った。

「……別に、そういうつもりじゃなかったんですけど」

\* \* \*

向き合つて、まず初めにエヒメは問うた。

「えっと……ソニックさん……ですよね？」

こいつの兄と会い、そいつに名乗ったのだから知られているのは予想出来ていたが、思っていた以上に気分が悪い。

俺自身が名乗れず他人、よりにもよつてあの憎たらしいサイタマからの伝聞で知られたというのが、ひどく俺の神経を逆なでる。

そうだと肯定しながら、そのイラつくままに、八つ当たりで目の前の女の顔でも引つ叩いてやろうかと考えたが、この兄弟はどこまでもこちらの予想を裏切ることに長けている。

「このたびは、愚兄がとんでもないことをして申し訳ありませんでしたー!!」

いきなりエヒメは、腰を直角に折り曲げて俺に謝った。



あまりの勢いで俺が困惑していると、こいつは頭を下げたままやたらとでかい声でとにかく謝り続けた。

「もうなんていうか、本当にうちのハゲ愚兄がご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありません!!」

っていうか、大丈夫でしょうか!? 後遺症とか残ってませんか!?

もしお兄ちゃんの所為で女の子になっちゃってたら、今すぐお兄ちゃんを連れて来て責任とって結婚してもらいますからご遠慮なく!!」

「うるさい黙れ! 最後の詫びが一番いらん!!」

「ですよー! ごめんなさい!!」

この大通りのど真ん中で、大声で謝罪なのか嫌がらせなのかわからんことを叫びだした女の頭を引っ叩いて止めようとしたが、俺の言葉に納得しつつも止まらなかった。

もはや自分でも何を言ってるのかがわかっていないらしく、頭を上げて「もう本当にごめんなさい、お兄ちゃんがごめんなさい」としか言わないので、とりあえず俺はエヒメの腕を掴んで人ごみを抜ける。

適当な裏路地に入り、エヒメを壁に縫い付けるように俺が前に立ち、頭を掴んで睨み付ける。

「貴様は俺に詫びたいのか、嫌がらせをしたいのか、どっちだ」

「ごめんなさいごめんなさい! お詫びとお礼がしたいです!

もうずっとそのことばかり考えてたんですけど、どうやってもお兄ちゃんがやったことがお詫びしきれなくて、見つけた瞬間からパニックを起こしてしまいました! ごめんなさい!」

未だにパニックを継続させてエヒメは叫ぶが、……腹立つことにその台詞が俺の中の苛立ちをいくつか解消した。

そうか。考えてたのか。

俺の事で頭をいっぱいにさせる為にわざと名乗らずに去って行ったのに、あのハゲの所為で台無しになったと思っていた思惑が、こんなところで成り立っていたとはな。

しかし、その成り立った経緯がやはり殺意が湧くほどに屈辱的だ。

その屈辱を思い出すと同時に、もはや「ごめんなさい」をエンドレスで言い続けるエヒメを見て思いつく。

この屈辱と苛立ちを晴らせそうな、こいつにでも出来る「詫び」を。「エヒメ。俺に詫びたいか？」

頭をわし掴むのはやめて、代わりに顎を掴んで顔を上げさせて、俺は訊く。

幼げで無垢な顔が、ただ不思議そうに俺を見上げていた。

何を言われるのか、何をされるのか全くわかっていない顔。

その顔を見ていると、背筋にゾクゾクとした快感とも高揚とも言えるものが走る。

新雪を前にした時のようで、それよりもはるかに下卑た欲求が沸き起こる。

この無垢を跡形もなく、壊して染めて穢してしまいたい。

俺は自分の膝を曲げて、エヒメの足の間に入れる。

エヒメの耳に唇が当たる寸前まで寄せて、答えなんかもはや関係ない問いかけをする。

「エヒメ。お前が責任を取ってくれるか？」

そこまで壊しても、この女は「逃げない」を貫くかが見たくなった。

「え？ ごめんなさい！ ちょっと私、さすがに性転換はしたくないですー！」

「誰が男として責任を取れと言った！」

しかし、俺の思惑は予想したくない方向に取られて思わず思いつきりどついた。

「やたらと嫌な心配をしてるが、俺は正常だ！ 後遺症など何もない

！ そもそも、俺は奴にやられてなんかいない！ 俺は何も喰らっていない！ わかったか!？」

「……は、はい」

俺にどつかれた頭を押さえて、地面に座り込むエヒメに俺は宣言する。

この兄弟は何で基本的に似てないのに、俺を振り回すという点ではやたらとそっくりなんだ!？」

ああ、クソっ！ 萎えた！ 予定変更だ!!

「おい、エヒメ。貴様の兄貴は今どこにいる？ そもそも、一緒に出掛けているのか？」

こいつをどうこうするのはやめだ。こいつを使って、そもそもこの不快感と屈辱の原因を抹殺する。

「お兄ちゃんですか？ ごめんなさい。私、ちょっと商品の納入と材料の買い出しに一人で来ただけで、お兄ちゃん是一緒じゃないです。たぶん今頃、町中を血眼で走り回ってると思いますから、場所の特定はできませんね」

こいつは俺が自分の兄の命を狙っていることをわかっているのかいないのか、さらっと俺の問いに答えた。

斜め上だが俺に対して妙に律儀な恩義と罪悪感を懐いてる女なので、嘘ではないだろう。

くそっ！ これも不発か！

解消されない苛立ちに舌を打てば、エヒメは一度中空に目をやって、まだ地面に座り込んだまま提案してきた。

「あの、お兄ちゃんの所まで飛びましようか？」

「は？」

「私のテレポート、本能というか直感で座標を定めてそこに跳ぶので、誰かの元には基本的跳べないんですけど、お兄ちゃんだけは例外的にどこにいるかわかってなくても勝手に座標設定が出来るんです。

だから、テレポートでならお兄ちゃんの元に連れて行けますよ」

お前のテレポートの理屈なんか訊いとらん。

なんでこいつは、自分の兄を殺そうとしている相手を自分から運ぶと言いつ出してるんだ？

貴様は本気で、俺が兄を殺そうと思っていると思っていないだろ。

……それとも、俺に兄が殺せるわけがないと思ってるのか？

そうだとしたら、もはや苛立ちも屈辱も越えて、楽しみになってきた。

忘れかけていたあの期待が、蘇った。

俺に命を救われた恩と、兄を殺された恨みがせめぎ合って歪む顔が

見たいという欲求が蘇り、萎えた気持ちを高揚させた。

「いいだろう。連れていけ」

テレポートは俺が最も嫌う異能だが、これはこいつの目の前でやってこそ楽しみだ。

特等席で見ろ、エヒメ。

お前の兄が殺される瞬間を。

「はい。じゃあ、失礼します」

言いながら躊躇なく真正面から抱き着かれ、思わず反射で頭頂部に手刀を落とす。

「痛い！ 何すんですか!?!」

「お前がいきなり何するんだ!?!」

「だって私、抱き着くか抱き着いてもらわないとテレポートできません!」

「それこそ初めに言え!」

どうしてお前はそう締まらないんだ!

ああ、くそっ! 忘れろ! これから奴を殺すんだから忘れろ!

思った以上の弾力と質量だったことなんか、さっさと忘れろ!!

こうして、恩返しは延期に

ソニックさんはお兄ちゃんを前にしてもとつさに動きやすく、私が余計なことをできないようにという理由で、私が前や横から抱き着くのは却下して、ソニックさんが私を後ろから抱き着く形でテレポト。

初めてテレポトを体験してもソニックさんは特に思うことはないので、目の前に現れたお兄ちゃんに向って、用意していた苦無を躊躇なく即座に投げつけた。

けどそれは余裕でお兄ちゃんに受け止められた。

でもそれでお兄ちゃんはソニックさんと私の存在に気付き、驚愕の声を上げる。

「エヒメ!? それとお前は確かか……エヒメの恩人の、なんとかの……」

あ、ダメだこれ。お兄ちゃん、ソニックさんの名前忘れてやがる。

もうどうソニックさんにフォローしようかと私が考えていたら、お兄ちゃんは綺麗さっぱり忘れている方がマシな発言をしまがりましたよ。

「関節のパニック?」

「音速のソニックだ」

「もう本当にうちの愚兄がごめんなさい!!」

何でこんな覚えやすい名前を忘れて、語感だけは覚えてんのお兄ちゃん!?

よくそんな絶妙に語感しかあつてない、意味不明な名前をひねり出したね!

私の謝罪はもちろん何のフォローにもならず、ソニックさんの苛立ちと殺気は戦いも殺し合いも素人の私でもわかるくらいに膨れ上がる。

私の肩に回していたソニックさんの手が、首に移動する。

今はくすぐるように指先で撫でるだけだけど、いつでも私がテレポトで逃げる隙も与えず、私の首を絞めるどころか折れるようにして、そのことをアピールしてソニックさんは、お兄ちゃんに宣戦布告

する。

「サイタマ……。今日は貴様を……。殺……。悪いけどいま忙しいから、また後でな」

なおにお兄ちゃんはソニックさんのセリフに自分の言葉を被せた挙句に、忙しいからと断りやがった。

待て。お兄ちゃん。今の私の現状、理解してる？

「ちよっ、お兄ちゃん!? 私、今思いつきり人質なんですけど!」

「え!? マジで!」

何だその反応!? ソニックさんが予想外すぎて、私の後ろで固まっちゃってるだろうが!

お兄ちゃんにはこの現状、どう見えてたの!?

「いやー、それなら良かった。何かべったりくっついてるから、『私たち付き合います』とか言われたら、ジェノスに俺はなんて言えばいいのかって焦ったわ」

「お兄ちゃんの目は何なの!? 節穴なの!? タピオカなの!」

ちよつとソニックさん、苦無貸して! あの役にたってない目、抉ってくるから!!」

「すさまじい兄妹喧嘩に、俺の武器を使うな!!」

お兄ちゃんの人の話を聞かないスキルが、まさかの話を始める前に発動してとんでもない勘違いをしていたことが判明し、思わずキレた。

けど私以上に、蚊帳の外に追いやってしまったソニックさんがキレた。

「貴様ら、兄妹そろって俺を馬鹿にするのもいい加減にしろよ!」

ソニックさんが叫んで私服でも腰の後ろに差していた刀に手をかけたけど、そのタイミングで邪魔が入る。

「あの人です!」

「お前か! 不審人物というのは!」

高い女性の声と野太い男の声がほぼ同時に聞こえ、思わず私たち3人はその声が出た方向に目を向ける。

そこにはタンクトップタイガーと名乗る、その名の通り虎柄タンク

トップを着て髪どころか眉も虎みたいに黒と黄色に染めた男がヒーローだって言ってた。

横にいる女の人は私たちを指さして「あの人が、危ないんです！ なんとかしてください！」と叫び、お兄ちゃんはソニックさんを見てニヤニヤ笑うし、私はまたどうソニックさんをフォローすべきか悩んだ。

けど、私の悩みは見当違いでした。

タンクトップタイガーが頭を掴んで睨み付けたのは、ソニックさんじゃなくてお兄ちゃんの方だった。

「その人、昨日から怖い顔して町中走り回って……怪しいんです！

今も、何かカップルに絡んでましたし!!」

不審人物、お兄ちゃんの方だった！

そして確かに言い訳のしようもないくらいに、不審人物だ！ 昨日やっぱり、止めておいたら良かった!!

ついでに、他人にもカップルって間違えられてるよ私たち！

確かにソニックさんずっと私の肩に手を回してるような体勢だから、傍から見たらバカップルだ。実際は、首を折られる寸前なんですけどね。

「ち、違います！ 絡まれてません！ その人、私のお兄ちゃんです!!」

「そうだし、俺もプロヒーローだつづうの!」

とりあえず私が絡まれていたことを否定し、お兄ちゃんも自分の潔白を証明しようとするけど、カップルに絡んではともかく、怖い顔で町中を爆走は事実なので説得力がない。

……このタンクトップが言っていることは、正論だ。

お兄ちゃんの所為で迷惑をかけた人がいるし、それはお兄ちゃんだけじゃなくて真っ当に活動してるヒーローの評判を落とす行為だから、怒られるのは仕方がない。

でも、あいつは正論を盾にしているだけで、本音は「新人のくせにC級6位の俺に逆らう気か？」だけ。

その証拠にわざわざ挑発的なセリフを吐いて、お兄ちゃんを怒らせ

て乱闘に持ち込ませようとしてる。

怖い顔をして徘徊してた不審人物に注意というだけじゃ目立った功績にはならないから、こいつはわざと事態と被害を大きくして、自分の手柄も大きくしたいだけのマッチポンプ。

……反吐が出る。

口角を汚らしく上げて、お兄ちゃんを「引き立て役」といった瞬間、私は限界を迎えて口を開いた。

……けど、言葉が出る前にもはや「ヒーロー」どころか「正義」ですらない男が爆発した。

私は、何かを叫ぼうとして口を開いたまま後ろを振り返る。

手裏剣を投げつけた体勢のまま、ソニックさんはつまらなそうに私を見下ろして言った。

「何だそのマネケ面は」

実際、私の顔はその通りだったんだろうなあ。

お兄ちゃんも倒れ伏したタンクトップを見下ろしながら、ソニックさんに「何やってんだ」と訊く。

やっとお兄ちゃんがまともに相手したのが嬉しいのか、ソニックさんの機嫌が回復して笑みを浮かべながら、彼はしれっと答える。

「邪魔だったから寝てもらったまでだ。」

サイタマ！ お前も、ヒーローなどというくだらん肩書を持っているんだったな。

だったら、俺と戦わざるを得ない状況にしてやる！ ヒーローサイタマー！

獲物をいたぶる猫のような、凄絶な笑顔を浮かべてソニックさんは私の首を掴んだまま、跳んだ。

首を掴まれているというのに跳ぶ体勢や他の部分で絶妙に支えているのか、ほとんど苦しくなかったことに、場違いながらも彼の実力が桁外れであることを知る。

けれどそんな呑気な感想は続かない。

彼が投げつけた火薬仕込みの手裏剣が、お兄ちゃんじゃなくて町中を破壊する。



街燈やビルが破壊されたことでガラスがまき散らされ、爆発音に驚いたのかそこらじゅうで交通事故が起こる。

お兄ちゃんは、ソニックさんが爆薬仕込みの手裏剣で吹っ飛んだ車から子供を守ったりしてるけど、どこか集中してないというか何かに気を取られてるというか……。

……たぶんあれ、「こんなことやってる暇ねーのに。早くノルマ達成しないと」って思ってるわ。絶対。

お兄ちゃん！　ここ！　悪い人ここにいる！　今は私の恩人だつてこと忘れていいから！！

「ソニックさん、やめて!!」

お兄ちゃんがいらんとところで天然を発揮して役に立たないので、私はソニックさんに抱えられて振り回されながらも、本人に懇願する。

もちろんこの人が私の懇願を聞いてくれるわけもなく、彼はバカにしきった眼で、でも心の底から楽しそうに笑って答えた。

「バカか、お前は。俺は確かにお前の命を助けたが、あんなものは気まぐれにすぎん。俺は、人の命を奪うことに何の罪悪感も持たん。俺にくだらない期待をするな」

そう言いながら、近くにいた人に刀を振るう。

……ええ。期待なんかしていいない。あなたがそういう人だという事は、私を助けた直後に首へ突き付けられた刃が語ってた。

でも、……それでも!!

ソニックさんが振るった刃が、宙を切る。誰も、何もいない空間を空ぶった。

切ろうとしていた獲物が消えたのではなく、自分が移動したことに、私に邪魔をされたことに即座に気付き、ソニックさんは私を睨み付けて訊く。

「何のつもりだ？」と。

首にかけられた指の力が増して、気道をわずかに塞ぐ。

それでも、私は彼を見据えて答えた。

自分で自分に科した、誓いのままに。

「……期待なんかしてなくても、あなたがどんな人かわかっていても、

それでも、こういうことをする女だから、あなたは殺さなかったんでしょう?」

その答えは、あの日の私の答えと同じく、彼にとっての正答だった。

「……はっ! その通りだな!」

お兄ちゃんに向けた猫の笑顔を私にも向けて、彼は言う。

「なら、お前も止めてみる。弱くて、逃げるしかない、ただ『逃げない』を科しているだけのお前に何ができるかを、俺に見せてみる!」

しかし残念ながら、ソニックさんに私が何を出来るかを見せることは出来なかった。

ソニックさんの私に対しての宣戦布告直後、いつの間にかやってきたお兄ちゃんが、「ここにいたか」と言っつて、チョップ一撃でソニックさんを地面のアスファルトにめり込ませたから。

このタイミングで、ソニックさんを捕まえたらノルマ達成つてことに気付きやがったよこの愚兄!!

「ソニックさーん!?!」

「ふう……これで仕事したことになるのかな?」

なるけど空気読め!!

## ゴーストタウンの天使

お兄ちゃんと近所のスーパーに行った帰り、怪人と出くわした。

まあ、それはこのZ市のゴーストタウンじゃ珍しいことじゃないし、お兄ちゃんと一緒なら問題は、お兄ちゃんの攻撃で爆発四散した怪人の断片が降りかからないかってことぐらい。

それくらい私にとって日常茶飯事なんだけど、今回は怪人がすでに人を襲っていたのが、私の日常から少しだけ外れていた。

遠目からだけど、まだ胸のあたりが上下してるので生きているのは確か。

「お兄ちゃん！ 私、あの人を病院に連れて行くから、これと怪人よろしく！」

「おう。気をつけろよ。……あ、昆布だし買うの忘れてた」

私はお兄ちゃんに買い物袋を押し付けて、怪我人の方に跳んだ。

なんかお兄ちゃんは怪我人がいることすら日常風景にして、関係ないことを呟いてた気がするけど無視しておこう。

怪人に私が注目されたら不味いので、私はボロボロの怪我人の元に跳んだ直後、怪人がこちらに振り返るより先に怪我人を抱きかかえて、即座に跳ぶ。

かなり適当に跳んだけど、場所はちょうどゴーストタウンの入り口。封鎖された金網を前にして、ちよつと安心する。

良かった。怪人から大分離れた場所だし、このあたりなら怪人出現率はそう高くない。

「……………うう……………は……………」

私がおんな安心をしていたら、抱きかかえていた怪我人、なかなか立派なおひげのおじさんが意識を取り戻した。

「大丈夫ですか？ 今から病院に運ぶので、しつかりつかまってください」

私がおじさんの顔を覗き込むように見てそう伝えると、おじさんは目を丸くして「あなたは……………私はどうして……………いや、それよりも怪人は!？」と逆に混乱させてしまった。

「落ち着いてください。私は近所に住むテレポーターです。たまたまあなたを発見したので、このまま病院に連れて行きます。」

怪人はもう他のヒーローに任せましたから、大丈夫ですよ」

とりあえず詳しく話すにはおじさんの怪我は酷いし混乱してるし、あの怪人はお兄ちゃんに任せただから大丈夫だろうけど別口の怪人が出てきたら困るから、私は最低限の説明で済ませてこのまま一番近くの病院まで跳ぼうとしたら、おじさんが私の腕を強くつかんで叫んだ。

「待つてくださいい！ 彼は……、黄金ボールはどこですか!? 彼はすでに保護されているんですか!?!」

「え?」

座標指定の為の集中を中断して話を聞いてみると、おじさんはただ怪人に襲われた一般人じゃなくてむしろ退治に来たヒーローで、しかももう一人仲間がいたらしい。

つまり、まだ仲間が重傷で気を失ったままどこかで放置されていることを知って、私は慌てておじさんにそのお仲間がどのあたりでやられたかを聞く。

この辺の人じゃないから少しわかりにくかったけど何とか場所が特定できたので、私はおじさんに申し訳ないけどここで少し待っていてくださいと伝えて、その場に跳ぼうとしたらおじさんに止められた。「お待ちくださいい！ いくら、テレポートが使えと言っても、あなたには戦ったり身を守る術はないのでしよう!?! 危険です!」

私が何とかしますから……お嬢さん、あなたこそお逃げなさい」

その言葉に、場違いだと思うけど自然に笑みが浮かぶ。  
ああ。プロヒーローの世界は、「正義」ばかりで「ヒーロー」はいないんだって思ってたけど、ちゃんといえるんだって安心した。

だからこそ、私がやめるわけにはいかない。

「大丈夫です。私、ここに住んでますからあなたよりはるかに地理に詳しいですし、怪人が出て逃げる対処と覚悟は完璧です。」

だから、あなたの方こそ無理をしないでください。

例え怪人に勝てなくても、あなたが時間を稼いだからこそ怪人は居

住区に向かわず、結果として被害は最低限になったのですから。

——あなたたちは、たくさんの人を守って救ったヒーローなんですから、ここで死ぬのも怪我で引退も、もったいないでしょう?」

私はほとんど言い捨てて、おじさんが呆けてる間にテレポートでおじさんの仲間の方に向かう。

幸い、おじさんが言っていた場所と私が特定した場所は完全に一致して、仲間の人も幸いなのか微妙だけど大人しく気絶してたので、探す手間はいらなかった。

ただ、結構体格のいい人だったので私のテレポートの距離範囲が落ちて、おじさんとその仲間を連れて病院に向かうのに、結構な回数のテレポートが必要となってしまった。

\* \* \*

たぶん私一人なら、おじさん達をテレポートで病院に送った後、家までテレポートでまた帰るのにキャパオーバーはしないと思うけど、念のために歩いて家まで帰ったのでだいぶ遅くなってしまった。

テレポートって体力というか精神力を削るのか、実は一回一回結構疲れるし、キャパオーバーしたらテレポートが出来なくなるだけじゃなくて、卒倒してもおかしくなくらいぐらい具合が悪くなるんだよね。

だから、家に帰って丁度キャパオーバーならまだしも、途中でオーバーしたらもう色んな意味でヤバいから、危ない橋はわたらず大人しく徒歩で帰ってきた。

そしたら、なんか家の前の廊下に昆布が大量に置いてあった。

……お兄ちゃんと一緒にスーパーに行ったから、今日むなげ屋で昆布は安売りしてなかったことは確か。

そしてチラツとしか見てなかったけど、あのおじさん達が襲われて、そしてお兄ちゃんが倒したのであろう怪人の姿は、確かこういうものがうじゃうじゃ生えた奴で……

私は玄関を開けてすぐに、お兄ちゃんに向かって叫んだ。

「お兄ちゃん! この廊下の昆布使わないでよ! 使うんなら、お兄ちゃん一人で食べて! 私、怪人の一部なんて食べたくない!! つて

「どうか、どうせ無駄な足掻きなんだから諦めて!!」

「! 先生! これは怪人の一部だったのですか!? それなら、もしかしたら本当に発毛効果があるかもしれない!」

クセーノ博士は専門外ですが、調べていただけるかどうかお訊きします!!」

出かけてたはずのジェノスさんも帰ってきてたようで、私のセリフになんか変な反応してる。

「お前らうつせーっ!」

もうほつとけよお前ら! 俺は昆布が好きなんだよ! わかめもひじきも好きなんだよ! 海藻が好きなんだよ! ただ好きだから食ってんだよ!!」

私とジェノスさんの言葉がお兄ちゃんのデリケートな部分を抉つたようで、盛大にキレられた。

うん、ごめん。最後は特に言い過ぎた。

「ご、ごめん、お兄ちゃん」

「も、申し訳ありません。

……ところでエヒメさんは、先生と一緒に出掛けられたのでは?」

二人で謝った後にふとジェノスさんが尋ねてきたので、普通に帰りにあつたことを話したら、「じゃあ、あの話はやはりエヒメさんの事ですか」と勝手に納得された。

「あの話?」

「先ほど、A級ヒーローが二人Z市のゴーストタウンで怪人に襲われて重傷、手が空いてるA級以上の近隣ヒーローは怪人討伐に向かつてくれと連絡がありました。

まあ、俺が向かう前に他のヒーローが先生が怪人を倒した跡らしきものを発見したと連絡があつたので、行きませんでした」

ふーん。あのおじさん達、A級だったんだ。なら、あの怪人は結構強かったんだ。お兄ちゃんが一緒にいる時に遭遇で、本当に良かった。

でも、その話のどの辺に私が関係してるの?

私はその前に二人を病院に連れて行っただけなのについて思ってい

たら、ジエノスさんは続きを口にする。

「それだけなら別に何も気にしなかったのですが、最初に襲われたA級ヒーローが、『ゴーストタウンには恐ろしい怪物だけではなく、その怪人を前にしても身を挺して我々を助けてくれた、勇敢で美しい天使のようなテレポーターの女性がいた』と証言しているそうで、ヒーロー協会はぜひともその女性も、ヒーローにスカウトしたいらしく……」

「それは私の話じゃありません。知りません、そんな人」

ジエノスさんの話を途中でぶった切り、私は死んだ目で答えた。

いや、実際に誰よ天使って。

## 巨大隕石編

### まだ名が決まらぬ種

お兄ちゃんが見てる新聞を後ろからのぞき込んだら、小さくだけどお兄ちゃんとソニックさんの事が載ってるし……。

ああ、もう本当にごめんなさいソニックさん。町中で暴れたことはフォローするつもりはないけど、さすがにあんなあっさり空気読まずに倒されたのは同情する。

しかも新聞で名前、パニックになってるし。

あとなんか、私が病院に運んだおじさん達も新聞に載ってるけど、そこに書かれた「自分たちを助けてくれた勇敢な天使」なんて文章は見えない。

そんな人知らないから、きっと別の人。別のテレポーターさんです、それ。

「サイタマ先生の順位が最下位の388位から342位に上がってます」

私がちよつと自分に現実を言い聞かせていたら、PCを見ていたジェノスさんがそう報告をしてくれた。

ソニックさんを捕まえたので、上がったんだね。いいことのはずだけど、ものすごい複雑。

「ジェノスさんの方はどうですか?」

私が無気なく尋ねてみたら、少し落ち込んだ様子で特に何もやっていないからS級最下位のままだと彼は言う。

最初からS級という時点ですごいものだから、落ち込むことなんかじゃないのに。

でも、しれつと語られた一般人の投票で作られる人気ランキングだと6位という事実には、私たち兄妹が「なんで!」と同時に叫んだ。

お兄ちゃんに至っては、盛大にお茶を嘔き出した。

私たちのツツコミを素直に質問と受け取ったのか、ネットのコメント欄をジェノスさんは淡々と読み上げる。



……顔がカッコイイとか、サイボーグ王子とか、イケメンヒーロー  
五本指に入るとか、よくあんな無表情で言えるなこの人。

同じことをお兄ちゃんも思ってた。尋ねたら、自分の写真を見て勝手に  
評価されたことは何とも思わないと答えてた。本当にストイックな  
人だな。

「でも、ちよつともつたいないかも」

「え？」

あ、思ってたことがそのまま声に出た。

ジェノスさんがきよんとした顔でこちらを見てるので、何でもな  
いとごまかすのも気まずいから、少し恥ずかしいけど私は声にしな  
かった部分も口にした。

「あんまり気にしないでください。」

ジェノスさんはカッコよくてクールなだけじゃなくて、努力家など  
ころとか面白くて楽しいところもいっぱいあるのに、それが写真だと  
伝わらないのがちよつともつたいないなーって思っただけですよ」

私の言葉に、ジェノスさんはフリーズ。……なんか最近、この反応  
が多い気がする。メンテナンスした方がいいのでは？ って言うの  
はやつぱ失礼かな？

「……俺は、カッコいいんですか？」

フリーズが解けたかと思ったら、なんか意外なところを拾われた。  
そこを今更気にしますか？ マジで自分がカッコイイって自覚な  
かったんだ。

「カッコいいですよ。外見も、性格も。」

真面目で自分の中に芯を持ってて努力を惜しまないから、いつも  
私、尊敬していますよ。

顔立ちも、イケメン仮面なんかより私ずっとジェノスさんの方が  
凛々しくて綺麗でカッコいいと思いますし……ってどうしたんです  
かジェノスさん!？」

なんか気がついたらジェノスさんがテーブルに突っ伏して、リアル  
に頭から煙出してるんだけど、どうしよう!？」

私が心配してもジェノスさんは「大丈夫」って言い張るし、お兄ちゃ

んは「気にすんな。思考回路がショート寸前だけだから」って言うし!

「それ一番ダメな奴じゃない!」

何!?! 今すぐ泣き出しそうなの!?

\* \* \*

ジェノスさんの頭から煙が出てきた時は本気で焦ったけど、協会から連絡が来た時には普通に戻ってて良かった。

でも、失礼でも帰って来たら言わせてもらおう。博士さんにメンテナンスしてもらった方がいいですよって。

そう心に決めて、私は拾った流木で小さな椅子のような飾り棚制作を続行し始めたタイミングで、お兄ちゃんは意外なことを訊いてきた。

「なあ、エヒメ。お前、ジェノスの事どう思ってるんだ?」

「……? どうって、さっき言った通り。本人に言えない部分があるとしたら、真面目すぎてたまに引くとこくらいかな?」

私が首を傾げつつ答えたら「いや、そうじゃなくて……」と、お兄ちゃんは一度唸ってから寝っ転がって漫画を読んでいたのを止めて、私と向き合ってやや真剣な面持ちで改めて訊いてきた。

「お前さ、好きな奴とかいないのか?」

「はあ?」

まさか、お兄ちゃんがこんなことを訊いてくるとは思わず、私は思いつき顔をしかめて「訳わからん」っていう心境を込めた声を出した。

何で私、19にもなって25歳のお兄ちゃんと恋バナをしないといけないの?!

私の心中は思いつき顔に出たのか、「俺だっけしてたくてこんな話をしてるわけじゃねーよ!」と軽くキレられた。

じゃあ何で訊いてるの? と訊き返せば、どうも歯切れが悪い。

「別に。ただジェノスといい感じに見える時があったから、そういう時は気を回してやろうかと思ったただけだ」

「それはただお兄ちゃんがリア充を見たくないだけじゃないの?」

「うっさいわー！」

何か余計な気を遣おうとしてたお兄ちゃんに呆れて、溜息しか出ない。

「ジェノスさんの事は、普通に好きだよ。でも、そんなんじゃないよ。何ていうか、私にとつてもう一人のお兄ちゃんって感じ」

「……………そうか。それ、ジェノスに言うなよ」

私の答えにお兄ちゃんは何故か私以上に深い溜息をついて、意味不明な指示を出した。え？ 何で？

「……………まさかとは思うが、お前さ、ソニックを「ないから」

頭を抱えて項垂れて、ソニックさんの名前も出してきたお兄ちゃんに最後まで言わず否定しといた。

「即答って、お前……………。結構仲良く見えてたのは何だったんだ？」

お前、人質に取られてたくせに俺がソニックをしばいたら、ソニックの心配ばかりしてたじゃねーか」

「アスファルトの地面に顔型がつくほどめり込まされたら、心配もするってば……………」

ソニックさんの事も好きだよ。普通に。ジェノスさんとは意味合いは違うけど、そういうのじゃないことは同じ。っていうか、ぶっちゃけジェノスさん以上にソニックさんが彼氏とかそういうの想像できないし、ないわー」

確かにソニックさんの事は、意外に思えるかもしれないけど決して嫌いにはなれなくて、好きだとはつきり言える。

それは命を救われた、悪い部分も笑い飛ばして受け入れてくれただけじゃなくて、あの日、もう一つ増えた。

言葉通り、自分にとって邪魔だったから攻撃しただけだったのはわかっているけど、お兄ちゃんを貶めるあの名誉欲にしがみつく何とかタレントトップに攻撃をしたこと。

それが、自己中心的で自分と自分にとって大切なもの以外は基本的に興味がない私にとって、すごく嬉しかった。

だからあの人の事は決して嫌いになれないけど、彼氏とかはマジでないわー。

「何で？」

好意的なのに即答で「ないわ」が意外なのか、お兄ちゃんが素で不思議そうに訊いたから、私はまた即答する。

「私より腰が細くてお尻が小さくて足が綺麗な彼氏はちよつと……」  
「どこ見てんだお前は。納得だけど」

あの人の服装が悪い。私服はともかく、忍者服なら絶対に見る。何だあの理想的な下半身のラインは。失礼を承知で正直に言わせてもらうと、私は初見で下半身が素晴らしい代わりに胸が絶望的でない女性かと思っただけど。

「とにかく、二人ともないから。変な気を回さないで」

もうこれ以上お兄ちゃんと恋バナなんて気まずいだけの話は続けたくないから、私は話を無理やり切り上げて終わらせる。

お兄ちゃんの方もしたくなかったのか、「へいへい」と気のない返事をしてまただらしなく漫画を読み始めた。

そんな対応するんなら、何故始めたし。

けど……恋かあ。

そういうのに一番うつつを抜かす時期こそ、私は余裕がなくてどこにも行けなくて何も見えなくて、ただひたすらにお兄ちゃんに助けを求めていただけだった。

だから私は、恋とか愛とかそういうものがよくわからない。

本当は、ジエノスさんもソニックさんも「そんなんじゃない」と言っただけど、私には何が「そんなの」なのかもわかっていない。

ただ、二人と恋愛っていうのがイメージできないから否定しただけで、それは恋愛そのものがわからないからイメージできないだけと言われたら、もう何も否定できない。

でも、肯定だつてできない。だつて私、二人が仮に女の子を連れて来て「彼女です」つて紹介されたら、「おめでとうございます」としか思わないもん。

たぶん、この「好き」は愛でも恋でもないのは確か。

……でも、何だろう。

彼女を連れてきても、「おめでとうございます」としか思わないけ

ど、「彼女が嫌がるからもう会わない」って言われたら、それはすごく嫌だなあつて思う。

それは同性の友人相手でも普通に起こりうる独占欲か執着かは、わからない。

ただ、あの人たちとの繋がりが完全に断たれることだけは、無様に泣き叫んで継り付きそうなくらいに嫌だという事しかわからない。

……このひたすらに失いたくないという気持ちは、何て名付けなければいいのだろうか？

この疑問は解けることなく、私は忘却する。

災害レベル竜、巨大隕石接近の警報が出された瞬間に。

科した誓いは墓標にならず

バングから隕石の話聞き、即座に俺は落下地点まで向かった。バングは「大切な人と遠くへ避難しろ」と言ったが、俺が選んだのは避難ではなく、迎え撃つこと。

先生なら、必ずそうするから。

そして彼女も、同じ誓いを科しているから。

だから俺も、逃げるわけにはいかなかった。

俺はヒーローになったのだから。

敵に勝つのではなく、何かを守り、誰かを救う存在になると誓ったのだから。

……だが、その誓いが試作品で強化された焼却砲のフルパワーでも成し遂げられる自信は、はつきり言ってなかった。

仮に破壊が出来たとしても、それは隕石を砕くだけ。無数の細かい断片となって降り注ぐ隕石群はあの巨大隕石よりはるかにマシだろうが、間違いなくZ市全体に大きな被害を加えるだろう。その不安を俺は無理やり押しつぶし、ただ向かう。

逃げるわけにはいかない。

諦めるわけにはいかない。

もう二度と俺は、安らげる居場所も、愛しい人も喪いたくない。

それだけを想い、俺は隕石落下地点真下までやってきた。

\* \* \*

けれど、事態は最悪だった。

S級ヒーロー、ボフォイもといメタルナイトが発射した大量のミサイルでも隕石は砕けるどころか勢いすら落ちず、むしろ俺が焼却砲を放つタイミングを遅らせた。

頭の中ではわかっていて。あれだけのミサイルを撃ち込んでも破壊できなかった隕石が、いくらフルパワーでも俺の焼却砲では歯が立たないことなど。

いくつもの不安や最悪の事態への可能性が、俺の覚悟を、決心をへし折りにかかる。

押しつぶして見ないようにしたものが蘇り、時間がないのに俺を迷わせ、ためらわせ、誓いを鈍らせる。

……その鈍った誓いに再び輝きを取り戻させたのは、バングの言葉だった。

「まあ、落ち着け。

心に乱れが見える。おぬしは失敗を考えるにはまだ若すぎるのう。適当でええんじや。適当で。土壇場こそ、な。結果は変わらん。それがベストなんじや」

適当がベスト……。

昔の俺なら、大きく反発を覚えた言葉がいやにあっさり頭に入り、納得した。

それは、尊敬する先生こそがその言葉を体現していたからだ。

気負いすぎず、ただ目の前のことにまっすぐ向かってゆき、愚直でありながら人に決してプレッシャーを与えない先生の生き様を思い出し、迷いが霧散してゆく。

ああ。そうだ。

失敗や二次的被害なんて、今なにもしない言い訳に過ぎない。

それは起こってから考えろ。何とかしろ。

今はただ、俺が出来ることを逃げずにやれ。

俺は体内からエネルギーコアを抜き出して、焼却砲に接続する。

体内チャージよりこちらの方がダイレクトに、エネルギーを放出できる。

「バング！ 伏せていろ！」

背後のバングに指示を出し、俺は左腕を隕石に掲げた。

この一撃に俺の今を、全てを、捧げる!!

新パーツで強化した焼却砲は、以前とは比べ物にならない焰の柱となつて隕石を迎え撃つ。

確実に威力は上がっている。今なら、あの阿修羅カブトも仕留める自信があった。

なのに、それほど強化された焼却砲をフルパワーで打ち出しても、隕石は破壊出来なかった。

勢いが落ちてるとバングは一瞬言ったが、即座に気のせいだったと否定しやがった。くそジジイっ！

俺の生命活動最低限分を残し、エネルギーが枯渇して焼却砲が止まる。

……ああ。ここが俺の墓場か。

「……残り9秒。逃げるんだバングさん」

土壇場でふざけたことを言ったジジイだが、俺の迷いを消したのは、何よりも大切な誓いに輝きを取り戻させたのは間違いなく、彼だ。だから最期に、せめてもの敬意で敬称をつける。

……やれることはすべてやった。逃げずに、誓いを貫いた。

けれど、俺の中には後悔ばかりが渦巻いた。

ああ、せめて最期に幻聴でも幻覚でもいい。

会いたい。声が聞きたい。

俺の幸せを願った人。

俺の世界を一変させた人。

俺をただの「正義」から「ヒーロー」にしてくれた彼女に、一目……

「ジェノスさん!!」

幻聴でもいい。

幻覚でもよかった。

でも、本当は本人に、間違いのない本物に、

貴女に、会いたかった。

\* \* \*

「ジェノスさん!!」

聞こえるはずのない声。

いるはずのない彼女が、俺に駆け寄ってきた。

靴すら履かないで彼女は俺に駆け寄って、焼却砲の余熱で人が触れ



られるようなものではない俺の腕に手を伸ばし、一瞬触れた指先は反射で即座に離れた。

それでも確かに触れた。何の躊躇も持たずに、この灼熱の体に彼女は瞳いっぱい大粒の涙を溜めて、俺の名を呼んで、俺に触れようとしてくれた。

「ジエノスさん！ しっかりして！」

俺を案じ、今にも泣き出しそうな顔で叫んで彼女はもう一度俺に手を伸ばす。

「だ、めです。エヒメさん……触れては……」

それを押しとめるのが、俺にとつての出来る精一杯だった。

どうして彼女がここにいるのかなんて、尋ねる余裕はなかった。

どうしてこんなにも、怪我をしてまで俺に触れようとしてくれるのか、なんて訊けなかった。

ただただ、沸き上がる幸福がそれを疑問に思うことすら塗りつぶしたからだ。

「じいさん、こいつら任せるぞ」

俺の幸福は、まだ終わらない。

そうだ。彼女がいるという事は、この人もいる。

先生はバングにいつもの、本当にいつもの、「適当がベスト」としか言いようがない顔で名乗り上げる。

「俺は趣味でヒーローをやってる者だ」

その直後、先生は跳んだ。

ああ、やはり飛べるじゃないですか。

先生は真つすぐに、どこにも曲がらず、ひたすら愚直なまでに飛び立ち、そして叫んだ。

「俺の町に落ちてんじゃねえ!!!」

「お兄ちゃん!?!」

エヒメさんの叫びと、隕石が碎けるのは同時だった。

しなくちやいけないこと

隕石の警報が流れた時、ジェノスさんが何で協会に呼び出されたかを知った。

落下まで30分くらいあるというのに、視認できるほどの大きさの隕石を何とかしろと命じられたのは明白だった。

だから私はお兄ちゃんに縋った。それしか出来なかった。

私が縋って願ったのは、この町を隕石衝突による消滅を防ぐことじゃなくて、私はたくさんの人よりもたった一人を優先してお兄ちゃんに泣きついた。

「お兄ちゃん！ ジェノスさんを助けて!!」

ジェノスさんには失礼だけど、私はジェノスさんにあの隕石がどうにかできるとは思っていなかった。

それはジェノスさんの実力を信じていないとかじゃない。ただただ、不安だった。

つい今さつき、彼は私にとってお兄ちゃんと同じくらい失いたくない人だとわかったから、だからただひたすらに彼の安否が心配だった。

「任せろ」

お兄ちゃんは泣いて縋り付く私の頭を撫でて、そう言ってくれた。でもさすがに、一人でジェノスさんを探しに行こうとしたのは止めた。

「お兄ちゃん、さすがに徒歩じゃ間に合わないと思うよー!」

そもそもどの辺にいるかもわかってないでしょ! と私は叫んで、お兄ちゃんに抱き着いて跳ぶ。

自分で言っておきながら、私だってジェノスさんがどこにいるかなんて知らない。

でも、隕石落下を阻止するなら隕石落下位置近くにいるはずだと思いい、私はお兄ちゃんにしがみついてとにかく隕石近くのビルまで跳んで行く。

そこまで行っても、視認できる位置にジェノスさんはいなかった。

隕石が巨大すぎて、どのあたりでジェノスさんは待ち構えているかが全然わからなくて途方に暮れそうになった時、轟音が鳴り響いてすごい煙が隕石を包み込む。

「何だあれ?」

お兄ちゃんが視線を向けた先には、背中にいくつもの砲台を背負った曲線が多いので見ようによっては可愛いと表現できるロボットらしきものがいた。

そういえばS級にロボットやら最新兵器を駆使して戦うヒーローがいるんだっけ?

あのロボットはそのヒーローで、轟音はあのロボットが隕石を攻撃したんだと思い、私は視線を隕石に戻す。

煙が晴れても、隕石は凶悪な大きさとスピードのまま地上に向かってくる。

効果がなかった。でも、ジェノスさんは一人じゃなかったことにわずかな安堵をしていたのに、あのロボットはそれ以上は何もせず、どこかに飛んで行ってしまった。

「!? 何で!?!」

「さあな。自分の攻撃が効かなくて、怖くなったんじゃないか?」

逃げ去るロボットを見送り、私は唇を噛みしめる。

私が今ここにいるのも、この町の為なんかじゃない、ただ一人の為なのだからこんなことを思う資格なんてないのに、ロボットのあまりの身勝手さと無責任さが頭を真っ白にするくらい許せなかった。

お前がもう少しでも頑張ってくれたら、ジェノスさんの負担が軽くなるのに!!

完全に八つ当たりの恨み言。

そんな私の身勝手な八つ当たりを、まっすぐに伸びた火槍が焼き散らした。

隕石の落下位置真下から、あまりにも真っすぐでどこにも曲がらない、愚直なまでの炎の柱は、まさしくあの人の象徴だった。

「——ジェノスさん?」

間違いなく、あれはあの人の十八番、焼却砲だ。

あの人は、あんなロボットが撃ち込んだ兵器でも壊せなかった隕石を破壊することを諦めていなかった。

あんな場所で、あんなにも真つすぐに彼は、「ヒーロー」を貫いていた。

「結構、遠いな」

お兄ちゃんがジエノスさんの焼却砲を見ながら、呟いた。

そして、訊く。

「行けるか？」

私一人ならともかく、お兄ちゃんも連れてだと普段ならきつと距離が足りない。2度に分けなくちやたどり着けなさそうな距離。

でも、そんな暇なんかない。

「当たり前だよ！」

零れ落ちそうな涙を拭って、宣言する。

行ける行けないじゃない。行くんだ。一足飛びで、あそこまで。

ジエノスさんの元まで！

私はお兄ちゃんにしがみついて、集中する。

イメージする。

座標ではなく、今、全てをかけて隕石を打ち落とそうとしている彼の尊い背中をイメージして、ただそこに向かうと決めた。

その背中に、私は走り出した。

隕石を打ち砕けなかった。エネルギーのほぼすべてを使い果たした。

何もできなかった。

けど、それでも、私にとってお兄ちゃんと同じくらい、尊くて大切なヒーローに駆け寄った。

「ジエノスさん!!」

ただ、あなたに会いたかった。

\* \* \*

ジエノスさんはエネルギーを消耗しすぎてはいるけど、怪我とかはしてなくて少しきこちないけど話すことも出来たから、ひとまず安心する。

けどその直後、お兄ちゃんが飛び上がった。

私に何も言わず、お兄ちゃんは足にロケットでもついていたんじゃないかって勢いで飛び上がった、叫ぶ。

「俺の町に落ちてんじやねえ!!!」

「お兄ちゃん!?!」

私の叫びと同時に、隕石が碎ける。

お兄ちゃんの姿は、隕石が碎けてできた粉塵が隠して見えない。

「お兄ちゃん!? お兄ちゃん!!」

私がどんなに声を張り上げても、お兄ちゃんは返事をしてくれない。

私は目を凝らしてお兄ちゃんの姿を空に探すけど、碎かれた隕石の断片が邪魔をする。町に無数に降り注いで、ビルを、家々を、地面を削って抉って穿って破壊しつくす礫は、何も待ってくれない。

礫は私たちの方にも平等に降り注いだ。

「エヒメさん! 危ない!」

お兄ちゃんを探して立ち尽くしてた私は、ジェノスさんの声でやつと目の前に礫が迫っていることに気付く。

幸い、それは全然気づいてなかったけど初めからいたらしいおじいさんに碎かれて、助かった。

「お嬢ちゃん、ジェノス君、動くな。まあ、ジェノス君に至っては言われなくとも動けんじやろうが。」

守っちゃる」

髪もひげも真っ白に色が抜け落ち、顔も指先も皺で埋まった老人なのにまったく老いを感じさせない、むしろあの隕石のような巨大な岩を連想させるその人は飄々と宣言して、そして言葉通り私たちを無数の礫から守ってくれた。

けれど、ビルのだ真ん中にかなり大きな欠片が突っ込んできて、地震のように大きく揺れる。

……ああ、もう!

お兄ちゃんを探すのはいったん中断して、私はジェノスさんにしがみつき、おじいさんも私にしがみつくよう言った。

「おじいさん！ 私、テレポーターです！ 跳んで避難しますから捕まってください！」

いきなりの宣言だったけど、ここに私たちが来たのはまさにいきなりだったからおじいさんの方は案外すんなり信じて、「じゃあ、お言葉に甘えようかのう」と言ってくれたけど、ジエノスさんが少し抵抗した。

「!? エヒメさん！ 俺の体はまだ熱が……」

「黙ってる！」

「はい！ すみません!!」

ジエノスさんの気遣いはありがたいけど、もう触れないほどじゃない。

だから、しつかりこの人を離さないようにして、跳んだ。

\* \* \*

どこに跳んだってこの崩壊の雨からは逃れられないのだから、特に座標を指定せず、降り注ぐ礫が止むまで私はテレポートを繰り返し返した。

幸い、礫が降り注いだのは10分足らずで、私のテレポートもギリギリキャパオーバーにはならなかった。

けどさすがに短時間で数十回にテレポートは体に相当な負担をかけて、めまいが酷くて頭がくらくらする。

もう今すぐここで倒れて寝てしまいたいくらいに体がだるい。

でも、それは出来ない。

私にはまだ、やらなくちゃいけないことがあるから。

「エヒメさん！ 無理しないでください！ 靴もあなたは履いてないんですよ!!」

「そうじゃ、お嬢ちゃん。お嬢ちゃんは十分頑張ったのだから、ひとまず休みなさい」

だいぶ回復したジエノスさんとおじいさんが、私の身体を支えて無理するなど説得するけど、でも、私には無理だった。

「……お願い、ジエノスさん。止めないで。」

……私、お兄ちゃんを……お兄ちゃんを探さないといけないの」

お兄ちゃんはまだ見つかってない。

お兄ちゃんがどこにもいない。

そんな状態で私は、倒れることも大人しく待つてゐることも出来ない。

探さなくっちゃいけない。

私はお兄ちゃんを探して、見つけて、そしてしなくちゃいけないことがある。

「エヒメさん……」

ジェノスさんの悲痛な顔が罪悪感になって胸を抉るけど、でもごめんなさい、ジェノスさん。

私は今動かないと、後悔でこの先一生動けなくなる。

そうやってお兄ちゃんに縋つてまでして守りたかった、無事でいて欲しかった人を傷つけて、まだ建物の崩壊や火事、そして混乱する人の暴動で騒がしい町中を歩きだそうとしたタイミングで、気のない声が降つて湧く。

「おー、こんなところにいたのか」

……ジェノスさんに散々心配をかけて、傷つけてまでして探しに行こうとしていた元凶が、のこのこ戻ってきた。

いつも通りぼへーとした顔で、怪我もなく被害と言えば服を少し汚したくらい。

いつも通り、やっぱりワンパンで終わってしまった虚しさを抱えて。

お兄ちゃんは、ごく普通に戻ってきた。

「なんと……」

「先生……」

おじいさんは信じられないと言わんばかりに驚愕の声を上げ、ジェノスさんは嬉し気にお兄ちゃんを呼ぶ。

「……お兄ちゃん」

私も一言呟いて、そして駆けだす。

これはさすがに、ジェノスさんもおじいさんも止めなかった。

私は靴下だけのまま砂利だらけの道を走って、お兄ちゃんに駆け

寄って、

「お兄ちゃん!!」

そのまま私は、しなくちやいけないことをした。

お兄ちゃんの頬に渾身の力を込めたビンタを一発、叩き込んだ。



## その約束が世界の支柱

スツパアアーンツ！ と実に素晴らしい音がした。

先生が攻撃を喰らって横に吹っ飛ぶのを見るなんて、進化の家で阿修羅カブトと戦っていた時以来だ。

しかもあれは何かに気を取られて茫然としてた時であって、これも予想外とはいえまさか真正面からエヒメさんのビンタをああも綺麗に喰らうとは、先生自身も想像していなかっただろう。

それぐらい、完璧で強烈なビンタだった。

後ろでバングが「素晴らしい」と呟くのも無理はない。あの靴下だけという状態かつ、砂利だらけの地面だというのに完璧なバランスで腰を落としてひねり、全身の体重をかけて勢いをつけて、軽傷とはいえ俺の所為で火傷も負っている手で、まさに渾身の一撃が炸裂した。

さすがは先生の妹……………いや、違う。

ついあまりに素晴らしい一撃に見惚れてしまったが、この感想は違う。

「エヒメさん!? 何やってるんですか!？」

今にも倒れそうな顔色でフラフラになりながらも、サイタマ先生を探しに行こうとしていたエヒメさんが、まさかの見つかった兄に向って、最強と名高い本物の実力者である武道家のバングに称賛されるほどのビンタを喰らわせたことに、俺は驚愕の声を上げる。

先生の方も、エヒメさんの一撃で吹っ飛んだ体を起こして「いきなり何すんだ!？」と怒鳴る。

けれど、俺の声も先生の声も、一瞬で掻き消された。

「——お兄ちゃんの、バカアアアアアアツツ!!」

エヒメさんの涙ながらの叫びが、全てを吹き飛ばした。

\* \* \*

あまりの剣幕で叫ばれ、先生は殴られた怒りも忘れて啞然とした顔でエヒメさんをただ見上げている。

俺もバングも何も言えず、周りの混乱して暴動を起こしていた連中も何事かとこちらの様子を窺い、辺りが急に静かになる。

そんな異様な空気も無視して、エヒメさんはゼイゼイと肩で息をしながらか先生を涙目で睨み付けて、再び叫ぶ。

「お、お兄ちゃんのバカ！ バカバカバカッ！ 大バカ！」

ハゲ！ もうお兄ちゃんなんて頭皮も禿げろバカアアッ!!」

「恐ろしいこと言うなよお前!! 何なんだよ!? 何をそんなに怒ってるんだよ!?!」

エヒメさんの怒涛の叫びに無理やり割り込んで、先生は訊く。先生も、彼女がここまで怒っている理由はわからないようだ。

エヒメさんは、少し間を置いた。落ち着いたわけではなく、ただ息を整えるだけの間であることは、燃え滾るような瞳とその目たつぷりにため込んだ涙が如実に語っている。

「……………約束……………破った」

「え?」

ぼそりと呟いた言葉が聞こえなかったのか、それとも意味が分からなかったのか、先生が訊き返す。

しかしそれもまた、エヒメさんの逆鱗だった。

「お兄ちゃん、自分で言ったじゃない!!」

絶対に、『いつてきます』って言うって!!」

俺がいつてきますって言ったたら、絶対に、どんなに遠くても、どんなに強い怪人でも、どんな怪我をしても絶対に帰ってきて、『ただいま』って言うから、だから私は待つてろって言ったじゃない!!」

その約束、破った!!」

地面を踏み鳴らし、先生に向かってエヒメさんは叫んだ。

その言葉で、思い出す。

先生は必ず、どんなに急いでいてもエヒメさんにいつも「いつてくる」など、「いつてきます」に類いする言葉をかけて出かけていたことを。

そしてあの隕石破壊では、言っていなかったことを思い出した。

「……………あ……………」

先生も思い出したのか、気まずげに目をそらしてぎこちなく言葉を続ける。

「……いや、でもすぐに終わると思ったし、ほら、怪我せず戻ってきたじゃん。こんなのいつものこと」「うっさいだまれハゲ!!」

先生の言い訳は、いつもの彼女からは決して出てこないぐらい乱暴な言葉でぶった切られた。

「いつもの事じゃない! 隕石なんて初めてだし、それに怪人でも犯罪者でも何でも同じ敵なんかない!!」

いつもお兄ちゃんが無事なんて保障、どこにもない!!

だから……私はいつも怖いのに、お兄ちゃんが帰ってこないのが怖くて、お兄ちゃんが私の知らない所で死んじゃうのが怖くてたまらないのに、お兄ちゃんはいつも勝手に引っっちゃう!!

……だから……約束……お兄ちゃんがした……約束を……信じてたのに……なのに……なのに……お兄ちゃん、約束破った!!」

エヒメさんの目からため込んだ涙が零れ落ち、それでも彼女は叫んで訴えた。

自分の不安を、恐怖を、どれほど先生と昔、交わした約束が大切な拠り所だったかを。

そこまで叫んで、エヒメさんはその場に座り込んで子供のようにならすら声を張り上げて泣いた。

泣きながら、「お兄ちゃんのバカああ!」と叫び続けた。  
「……これは、言い訳できんのう」

バングが困ったような、少し面白がるような声音で言う。

その通りだった。これは俺でも、先生を庇えない。

いや、俺も先生と一緒にエヒメさんに謝らなくてはいけない。

俺は先生を尊敬し、憧れて、何より負けたところなど見たことがない。

それゆえ、本来なら根拠といえないそんな根拠で「先生にかなう敵などいない」と思っている。

それとは逆にエヒメさんは、先生が弱かった時期を知っている。

だから、彼女は先生がどんなに強くなっても、不安を消すことなど

できない。

彼女にとつてはたとえ相手が災害レベル狼以下でも、自分から最愛の兄を奪うかもしれない恐ろしい敵なんだ。

それでも先生は、決して立ち止まらないから。

必ず、立ち向かうから。

それを止めることなどできないし、したくないと思っっているからこそ、彼女は先生との約束を信じ、それを自分の世界の支柱にして先生を見送り、帰りを待ち続けていた。

……どれほど、不安だったのだろうか？

「いつてきます」を言ってもらえず、先生が隕石に飛び込んでいった時、彼女の不安と恐怖は俺には測りきれない。

彼女の不安も恐怖も何も想像できず、先生は無事だと信じ切って、エヒメさんが先生を探しに行こうとしていたのを止めた、数分前の自分を殴りたい。

彼女は俺の望みを叶えてくれたのに、どうして俺は彼女の不安を少しでも和らげてやることも、同調してやることも出来なかったんだ。後悔がとめどなく湧き上がるが、いくら悔やんでも彼女の涙は止まらない。

先生は膝立ちになって、もう声を張り上げて文句を言う体力もなくなった、それでも俯いて泣きじやくるエヒメさんの頭に、手袋を脱いだ手を乗せて、優しくなでて言う。

「……俺が悪かったよ、エヒメ。」

もう絶対に、二度と約束は破らない。必ず言うし、必ず帰ってくる。だから、もう泣くな」

先生は自分の非をすべて認めて、エヒメさんの頭を撫で続ける。

「……嘘つき」

それでも、先生はエヒメさんに許してもらえず、彼女は辛辣な一言を吐いて意識を手放した。

しつかり、兄の方に自分から倒れこんだ。

## 柱と杖

乙市に墜ちるはずだった隕石を先生が砕いて、3日たった。

町には当然まだ砕かれて落下してきた隕石群の爪痕が痛々しく残っているが、死者は出なかったからか人々が落ち着きを取り戻すのは早く、平穏と言ってもいいだろう。

もちろん、死者が出なかったただけであって怪我人は重軽傷問わず数えきれないほど出てしまい、住居や職場を失った人間も多数存在する。

そしてそんな人々が、振り上げて落とすところのない拳を先生に向けていることを俺は知っている。

理屈としては理解できなくもないが、無事に生きているからこそ今の現在の苦労を、乙市消滅の危機から救った先生に向ける民衆の愚かさ、集団心理の恐ろしさには言葉もない。

だが、先生を責める者の大半は感情の問題で、やはりこれが最善、災害レベル竜がこの程度の被害で収まったのは幸運だと頭では理解しているのか、先生を直接責めるような輩は今のところ出ていない。

せいぜい、ネットで喚きたてられているだけだ。

顔も名前も隠していないと吠えられない輩など、視界に入れるのも無駄だ。

先生はネットに興味がないので、俺から言わないと何も知らないだろう。現に、自分がC級5位に昇格したことすら、つい今さつき俺に言われるまで知らなかったのだから。

だから、この誹謗中傷は先生の耳に入れる必要はない。

こんな些末な問題よりも、先生には解決せねばならない重大な問題があるのだから。

そう。さつきから、正確に言うと隕石破壊の3日前から、先生とまったく口を利かないエヒメさんと仲直りをしなければならぬのだから。

「……エヒメ。なんか甘いものでも食いに行くか？」

「……………」

先生が3日前、エヒメさんがレポートのし過ぎで倒れてからずっと、彼女の看病をしていた。

靴を履かずに出てきたので、靴下のみで歩き回って怪我した足はもちろん、俺の所為で負った火傷も先生は丁寧の手当てし、そしてずっとエヒメさんが目覚めるまで、手を握って待っていた。

そしてエヒメさんが目覚めた直後に先生は土下座で謝ったのだが、エヒメさんはやけに据わった眼で先生を睨み付けただけだった。

……あの威圧感は、今まで俺が遭遇してきた怪人や敵以上だった。先生も、同じことを言っていた。

そしてそれから、彼女は誇張なしで一言も先生とは会話していない。

何を話しかけても無視して、彼女はひたすらにぬいぐるみやら、飾り棚やら、ランプシェードやら、アクセサリーやらを自分の周りにバリケードのように積み立てるほどに作り続けた。

先生曰く、「キレた時はひたすらああやって、何かを作りまくる」らしい。

……この無言の威圧感も気まずいが、俺にとって何より気まずいのはこれじゃない。

「……エヒメさん」

「はい。ジェノスさん、どうかしました？」

あ、お茶のおかわり入れましようか？」

……俺には普通に、いつもの笑顔で対応してくれるのが一番きつい。

……これ、俺に対応してくれるからといって、俺から先生を無視しないでやってほしい、許してほしいという説得が利く訳ではない。

一度言ってみたら穏やかな笑顔のまま、「何を言っているのか意味が分かりません」と返されて、もう俺は何も言えなくなった。

「……………いえ。……何でもありません。すみません」

だから俺はそう言って、すすすす引き下がることしか出来なかった。

……すみません、先生！

俺にはあの笑顔で圧倒する空気に対抗する手段が、何一つ思い浮かびません！

先生へのフォロワーも、彼女の怒りを少しでも和らげることも出来なかった不甲斐ない俺に、先生は俺の肩に手を置き、悟った表情で答えたのは記憶に新しい。

「……うん。俺も手を尽くしたけど、無駄だった」

先生が、どんな強敵にも立ち向かい、打ち勝ってきたあのサイタマ先生が諦めの境地に立つほどに、エヒメさんの約束を破られた怒りは深刻だった。

……ただ、エヒメさんは怒ってこそいるが、先生の事を嫌いになつたのではないことは確かだ。

そもそも怒っている理由が理由なのだし、エヒメさんは先生の言葉は無視して答えないが、先生が「あれどこだっけ？」と言えば無言で探して差し出し、食事はきちんと人数分作り、それも先生を労わっているのか先生の好物を作ってくれている。

そのことから考えて、エヒメさん自身も折れ所を見失っているのではないかと俺は思っている。

だからこそ、ここは上手いこと俺が間に入って緩衝剤にでもなれば、お二人は仲直りできると思うのだが、……そういうのはサイボーグになる以前から俺にとって一番苦手な分野だ。

どこまでも役に立たない自分に嫌悪する。

先生は気まずい空気に耐えきれなくなつて、俺に謝りつつ「その辺、見回りに行つてくる」と言つて出て行った。

出て行く際に、エヒメさんに何かいるものはあるかを尋ねていたが、エヒメさんはひたすら手縫いで丸いペンギンを縫い続けていた。

エヒメさん、そろそろあなたの姿がぬいぐるみで埋まって見えなくなりそうです。

……先生がいなくなり、数分沈黙が続く。

悲しいことに俺とエヒメさんの繋がりは、先生だけだ。

だから、先生の話題がNGとなると一気に何を話せばいいのかわか

らなくなる。

いや、今作っている物の事でも何でも、会話しようと思えばできる。だけど、それは逃げだ。もちろん、黙っていることも。

自分でもエヒメさんは折れ所を見失っているだけだと思っっているのなら、俺が緩衝剤になるべきだと思っっているのなら、俺が行動すべきなんだ。

あの笑顔で俺のエネルギーコアをわし掴むような威圧感に臆すな。強くなると誓ったのだろう！

そう言い聞かせて、俺は再びエヒメさんに話しかけた。

「エヒメさん！」

「あの、ジエノスさん」

しかしその意気込みは本人によって、いきなり削がれた。

そしてそれはエヒメさん自身も同じだったようで、俺たちは顔を見合わせて気まずげに笑うしかなかった。

\* \* \*

同時に話しかけてしまい、今までとは違う居心地の悪さが漂う。

しかも、お互いに「お先にどうぞ」と譲ってしまったため、もうどう話しかけていいかわからない。

結局、俺はエヒメさんと向き合ってたただ正座していた。

ヤバイ。勢いに任せて一気に言っただけおもうと思っただけから、何を言おうとしていたかが、完全に飛んだ。

「……ごめんなさい。ジエノスさん。空気悪かったですよ？ 兄妹喧嘩に巻き込んで、本当にごめんなさい」

俺が必死で何を言おうとしてたかを思い出そうとしてる間に、エヒメさんの方が先に言葉をまとめて俺に謝った。

「い、いえ！ 気にしないでください！ そもそも先生は、Z市はもちろん俺を助けようとしてくれた結果、エヒメさんとの約束を破ってしまった訳ですから、俺にこそ責任があります！」

「……ありがとう。ジエノスさん。でも、それだって私がお兄ちゃんに頼んだことだもの。」

私、お兄ちゃんにわがまま言っただけ、その挙句にすっかり忘れた



だけのことを根に持つてるの。だから、悪いのは私。ジエノスさんはそんな私を庇っちゃダメですよ」

俯いていてもエヒメさんが罪悪感で悲しげな顔をしているのが分かったので、俺は慌てて貴女に非はないと庇いたてるが、彼女は困ったようにわずかに微笑み、潔く自分の非を受け入れて俺に渡してはくれなかった。

だから俺はそれ以上は何も言えず、ただ尋ねるしかなかった。

「……まだ、先生の事は許せませんか？」

俺の問いが、またエヒメさんの顔を曇らせる。

ああ、俺は本当に無能だ。どうして、この人を悲しませてばかりいる？

「……許してるといえば、もうずっと前から許してます。

……だから今、意地を張ってるのは怖いからなんです」

「怖い？」

俺がオウム返した単語にエヒメさんは頷き、それからゆっくり語りだした。

「……本当にうっかりであることはわかってるんです。悪気がないことは、ちゃんとわかってる。覚えてたって言ってる暇がなかった事態だったってことも。

……別にいつもいつも、心配で不安で仕方ないわけでもない。最近なら、心の底から根拠もなく、お兄ちゃんは大丈夫だって思い込んで気にも留めないことの方が多いですよ。……だけど、それでも、やっぱりふとした瞬間に不安でたまらなくなる時だってあるんです。

そういう時は、お兄ちゃんの約束を思い出して自分にいつも言い聞かせてました。

……だから、もう本当に私のわがままでしかないけど、こんな意地を張ってたらお兄ちゃんに嫌われちゃうけど、それでも、絶対に二度と忘れないようにして欲しいって思ったら……もういつ謝ればいいのかわからなくなっちゃって……。

……だから、本当にごめんなさい、ジエノスさん」

エヒメさんはじつと俯いて、自分が作ったぬいぐるみを指先で弄り

ながらそう言葉を締めくくった。

彼女の話の話を聞いても、彼女の不安や後悔、兄に対して酷いことをしているという罪悪感を理解しても、……俺には何一つ、それをどうにかできる術も言葉も思い浮かばない。

「……エヒメさん」

俺は無力で無能なうえに、最低だ。

「俺では、……支えになりませんか？」

俺に浮かんだのは、彼女の為の言葉ではなく、俺自身の為の言葉だった。

「俺も……約束します。怪人退治の時は必ず、あなたに行ってくると伝えますから、……どうかあなたは安全なところで待っていてください。

俺も必ず！ 必ず帰ってきますから！ どんな敵が相手でも、先生を連れて絶対に帰ってきますから！

……だから、その時は俺たちに笑って、『お帰り』と言って欲しいんです。

それが、先生にはもちろん、……俺にとつての戦いの糧に、……絶対に生き残ろうと思える活力になりますから……だから……どうか……俺とも約束をしてくださいませんか？」

俺が言い出した言葉を理解できず、きよとんと呆けるエヒメさんにそのまま俺は身勝手なことを言い続けた。

何が支えだ。何が約束をして欲しいだ。

先生の足下にも及ばない俺ではさらに心配をかけて、約束なんかしたってエヒメさんの不安を煽るだけだ。

……それでも、俺はなりたかった。

先生のように強くなる以上に、身の程知らずなものを望んでしまった。

「……エヒメさん。俺では先生のように、貴女の世界に安心を与えられるような柱にはなれないでしょう。

でも、貴女が少しでも傷つかずに歩いて行けるための杖くらいにはなりますから！ あなたの不安や恐怖を少しでも和らげて、貴女を支

える存在に必ずなってみせますから………どうか、俺とも約束してください」

エヒメさんの為なんかじゃない。ただ俺自身が、彼女の心の中の重要な位置にいたい。ただそれだけの、醜い願い事。

これはそんなものに過ぎないのに……エヒメさんは……

「……いいんですか？」

困ったように眉を少し下げて、その瞳には涙が溜まってる。両手で口元を覆い隠して、今にも泣き出しそうなのを堪えていた。

……でも、その目は確かに嬉しそうに笑ってくれていた。

「いいんですか？ ジェノスさんにも、そんなわがままを言っても。

……あなたを、杖にしてしまっただけいいんですか？」

俺をその心に置くことを嬉しそうに、けどだからこそ躊躇うように尋ね返す。

「杖なら……私、甘えてしまいますよ？ 柱はどうやっても動かせな

いから諦めがつくけど、……杖ならずと自分の手元にあるのが当たり前って、思っちゃいますよ？」

彼女が俺をその心に置けない理由を、俺を杖にするのを躊躇う理由を語り、確かめる。

ああ、それはなんて俺にばかり都合のいい言葉なんだ。

「……甘えてください。」

俺がなりたくて、そうでありたくて言ってるんです」

俺は心からの本音を口にする、エヒメさんは涙を一粒零して、

言った。

「ありがとう」と、彼女は微笑んだ。

## 逆鱗、二つ

なんかタンクトップサイダーって奴と黒タンクトップに訳わからんことを言われたと思つたら、Z市民から「ヒーローやめろ」やら「消えろ」やら言われてるんだが、……アイス買ったから帰っていいか？ 楽観してたのは事実だし、悪いとも思ってる。

一応、隕石を砕いた後は人や建物に当たりそうな礫を砕きまくってフオローしたつもりだったけど、完璧じゃなかったのはわかってる。余計なことをしたとは思ってないが、俺はヒーローとしてたいして優秀じゃないことくらい知ってる。

俺にできたのは、死人が出るのを防いだぐらい。そんなの、ヒーローならして当然の行いだ。

だから、別に思うことはない。

俺がでかい隕石を砕くことしかできないで、町への被害を全部は防げなかったのは、俺の実力と努力が足りなかった結果だ。

もう趣味じゃないんだから、こういう所にも気を遣うべきだったのを忘れてた俺の自業自得。

なら、俺に文句をつけて気が済むのなら、勝手にしてくれりゃいい。でもアイスが溶けるから、早くしてくれ。

もうこんなんでエヒメの機嫌が直る訳ないってのはわかってるけどさー、こうするしかねーじゃん？

っていうか、あいつがすでに怒ってないこともわかってる。

ただ俺にもう二度と約束を忘れて欲しくないから、面倒なくらいに引きずって拗ねてるだけだってことくらいわかってるから、いつもなら好きなだけ拗ねさせてやるけど、今はジェノスがいるからな。

さすがに関係ないあいつを巻き込むのは悪い。

それも、エヒメの方がわかってるだろうから何とか折れてくれねーかな？

逆に無理かもな。ジェノスに悪いって思えば思うほど、あいつは俺とジェノスにどう謝っていいかわからなくなって、余計に何も言えなくなってる可能性が高いわ。

どうしてあいつは、何でもかんでも自分の中にため込むのかね？

3日前みたいに、俺に思いつきりぶちまけてしまえばいいのにな。

あんなわがママとも言えないわがママを受け止めるくらい、こんな未熟なヒーローの俺でも出来る。

約束を守れなくてあいつを泣かせてばっかりだけど、だからこそあいつが吐き出したものを受け止めて「大丈夫だ」って言って安心させてやりたいのに、肝心の本人が自分の中にため込んで絶対にこっちに渡しやしない。

大事なものなんかじゃないのに、自分を傷つけるだけのものなのに、あいつは他の誰かを傷つけないためにいつも自分の中で堰き止める。

趣味でヒーローを始めた俺なんかより、あいつの方がずっとヒーロー向きだ。

絶対に、させないけどな。

やってる俺が言うのもなんだが、あいつにこんな危ない事はやらせない。

だから、周りに何といわれても俺はやめない。

ヒーローを、やめない。

俺がしないと、あいつが「誰もやらないから」って中学校の学級委員じゃねーんだからな理由でやりかねないからな。

「おい、今こいつ不審な動きをしたぞ！」

とにかく俺が早く帰りたいって思ってたなら、黒タンクトップがさらに訳わからんことを言い出した。

「この町を破壊したように!! この場にいる人々にも危害を加えようというのか!？」

うーん。さすがに完全ないちやもんになってきたな。

これは余計に面倒なことになりそうだなと思ったけど、なんか俺と戦う空気になってきた。

あ、これ逆に早く帰れそうだな。

こいつらぶっ飛ばしてさっさと帰ろう。

むしろ望んだ展開になってきたので、俺は軽く拳を握っていつでも

軽く触れる準備をする。

よしそのまま向かってこい、タンクトップサイダー。

「俺たち兄弟がヒーローとして歪んだお前を粛正してやる!!! ガオオオッ!」

なんか猫っぽい声を上げて俺に向かってきたサイダーに、俺が拳を軽く振る直前……

「ぐえっ!」

カエルが潰れるような声を上げて、サイダーが倒れた。

テレポートで跳んできた膝が、思いつきり延髄に全体重をかけて入ったからな。無理もない。

「……エヒメ?」

テレポートでニードロップを決めた妹の名前を呟いて、俺はそんなことを考えていた。

\* \* \*

偶然か狙ったのかはわからんがエヒメがニードロップを決めて、サイダーは泡吹いて倒れる。

兄貴の黒タンクトップと周りの奴らは、茫然。そりやそうだろう。いきなり女が空中に現れて、ニードロップだもんな。実の兄の俺ですら、どう反応したらいいのかわかんねーよ。

エヒメは自分がニードロップを決めて倒れた奴の心配なんか一切せず、むしろゴミを見るような目で一度睨み付けてから立ち上がった。その反応で、エヒメがわざとやったと確信する。

そして、エヒメは俺に背を向けて、黒タンクトップに向き直る。

「……エヒメ?」

呼びかけても、エヒメは答えない。

ただ俺には、顔が見えなくても背中しか見えなくても、わかった。こいつはまた怒ってブチ切れていることくらい、わかった。

その対象が、俺じゃないことも。

まだ茫然として弟の心配すらできない黒タンクトップにエヒメは言う。

「私の所為だ」

堂々と潔く、こいつは言い出した。

「はっ。」

女が突然現れたこと、その女が弟にニードロップを決めたことよりも、黒タンクトップはエヒメの第一声に困惑した。

その困惑を無視して、エヒメは声を張って叫んだ。

「Z市がこんな被害を出したのは私の所為で、お兄ちゃんの所為じゃない!!」

私が、町よりもZ市の人たちよりも、たった一人を優先したから!

お兄ちゃんにわがままを言ったから! お兄ちゃんが隕石を壊すのがギリギリになった!!

だから、責めるんなら私を責めろ!

お兄ちゃんは悪くないんだから! 悪いのは全部、私なんだから!!」

エヒメは俺を背にして、俺を守るように、俺を庇って、叫んだ。

小さな肩も、細い足もガタガタ震えてる。

こいつはこんなふうに集団で責められるのが何より怖くて、逃げ出したくて仕方がないはずなのに、レポートなんかを使えるようになってまでして逃げだしたものはずなのに、エヒメは今、ここで俺を庇った。

……ああ。バカだな、お前は。

お前が悪いわけねーだろ。

あんなのわがままじゃない。むしろ、兄ちゃんは嬉しかったんだぞ?

お前、寂しがり屋なくせに人が嫌いになって、本当は友達とかが欲しくせに俺しかまともに付き合うことが出来なかったのにジェノスと仲良くなって、いつも俺に何かを頼るのは悪いって思って何も言わないお前が、ジェノスを助けてって言ったのは、本当に嬉しかったんだぞ。

そもそもお前、自分で言ったじゃねーか。徒歩じゃ間に合わないって。

お前がいたから、間に合ったのに。

お前の「ジェノスに会いたい」ってわがままが、俺をあそこまで送り届けたのに。

それでも、お前は俺を守るために言うのか。

自分の所為だと。

一気に言いたいことを言っつて、エヒメは肩で息をしている。

おそらく緊張とトラウマが一気に蘇ったことで、頭が完全に真っ白になってるところだ。

そんな状態のエヒメに、黙つたのをいいことに黒タンクトップがまた大声を張り上げる。

「……お前！ 妹にそんなことを無理やり言わせてまでして、ヒーロー気取りがしたいのか!？」

その言葉に、エヒメが顔を上げて何かを言い返そうとしたが、声が出ない。

声も出せなくなるほどに、こいつは昔のことを思い出してしまつてる。

……ああ。もう……

「信じられないなあー!! 妹を共犯者にして、美談に仕立てて、責任逃れなん……て……!!？」

——お前、もう黙れよ。



## 80年後までお元気で

ジェノスさんと話して、ジェノスさんが自分も約束する、お兄ちゃんの代わりの支えに、杖になつてくれるって言ってくれて、ようやく私の不安は治まつて、お兄ちゃんを許せなかった意地は氷解した。だから、私はお兄ちゃんを探しに行った。たぶん私は家で待つてたら、お兄ちゃんに酷いことをしたって自己嫌悪で今度はドツボにはまつて謝れなくなる。我ながらに面倒くさい性格してるな本当に。

謝ろうって思ったら即座に行動で探しに行くと言えたら、まだ町が危ないから自分も一緒に行くって、ジェノスさんは言い出した。

大丈夫って遠慮しても、ジェノスさんは強引に、頑なに一緒に行くと言つて譲らなかつた。

私はその時、ジェノスさんが言った「町はまだ危ない」を言葉通りに捉えていた。

隕石の打撃で崩壊しかけの建物、瓦礫の山だらけで危ないって意味だと信じて疑わなかつた。

お兄ちゃんを非難する、集団の声が聞こえるまで。

\* \* \*

その声が聞こえた瞬間、ジェノスさんが「エヒメさん!」と呼んだのを無視して私は跳んだ。

完全にとっさで、もはや反射や本能に近い。

でも私はこの時、完全に飛ぶ場所を意識していた。

お兄ちゃんの元に行くのは当然だけど、それ以上に狙っていた場所があつた。

お兄ちゃんを否定する、お兄ちゃんを馬鹿にする、お兄ちゃんを侮辱する奴を、許せなかつた。

その背中が、あの忌々しいヒーローはもちろん正義すらも名乗る資格のない虎柄タンクトップが見えたから。

私はその背中、っていうか延髄に膝をめり込ませてやった。

そこから後は、もうほとんど何も考えていない。

ただ思いつくままにわめきたてた。

そして一度言葉が途切れたら、もう何も考えられなくなった。  
自分を取り囲む集団。

大きな罵倒の声。

人の顔が、形が、認識できない。

黒い影のような、汚泥のようなものが、血走った眼球で私を憎らし  
そうに睨み付け、楽しそうに嘲笑っているようにしか見えない。

一番近くで影が、汚泥が、眼球が、硝子を引つ掻くような不協和音  
で何かをがなり立てている。

言葉を言葉として、理解できない。単語が聞き取れない。ただの耳  
障りで頭がおかしくなりそうな雑音にしか聞こえない。

なのに、何故か内容だけはわかる。理解してしまう。

お兄ちゃんをさらに貶める言葉だつてことだけは、わかつてしま  
う。

だからもう一度、私は何かを言おうとするけど、鉄の塊でも飲んだ  
みたいに息が苦しくて何も言えない。声が出ない。出ない。出ない。

でも、言わなくちゃいけない。言いたいののに、言つてやりたい言葉  
あるのに、私は叫ばなくっちゃいけないのに！

お兄ちゃんは悪くないって、叫ばなくっちゃいけないのに！！

「エヒメ。……ありがとな」

声が、聞こえた。

お兄ちゃんの声が聞こえて、お兄ちゃんの手が私の頭を一度撫で  
て、通り過ぎた。

気が付くと、不協和音は止んでいる。むしろ、耳が痛いくらいに静  
かになってる。

もう影も、汚泥も、血走った眼球もない。

周りにいるのは、誰かに八つ当たりしたかっただけの嫌になるくら  
い弱くて愚かな普通の人間たちだ。

そして目の前にいるのは、ただの黒いタンクトップを着た、声がで  
かいだけの男。

その男は、両手で何かを掴むみたいに構えたまま、脂汗を流して固まっていた。

歯の根は噛み合わずガチガチと歯が割れそうなほど強く鳴らして、足だつて今にも崩れ落ちそうなほどに震わせている。

不快な匂い、アンモニアの匂いさえしていることに気付いてしまった。

そんな男に、お兄ちゃんは無言でゆっくり近づいて行く。

ゆっくり、ゆっくり、まるで甚振るような速度で近づいて、お兄ちゃんは奴の構えた手に、自分の手を重ねる。

そしてそのまま、指を曲げて力込め……

\* \* \*

「お兄ちゃん!!」

何をしようとしているのかに気付いて、私は叫んだ。

何かが私の息を、声を、叫びを阻害していたのに、あまりにもあつさり声は出てきた。

私の声でお兄ちゃんの背中がかすかに揺れて、それからお兄ちゃんは振り返る。

「……大丈夫だっつーの」

気まづげに笑つて、そう言った。

……嘘つき。

絶対に今、「マジシリーズ」やらかしそうになつてたくせに。

お兄ちゃんが「マジシリーズ」をやらかすのはやめてくれたけど、さすがにその黒タンクを許す気はなかったようで、私に気まづげに笑いながらも黒タンクの手を握る。

お兄ちゃんからしたら、ものすごく優しくもう撫でるくらいの力加減で握つてるだけなのに、黒タンクは絶叫。

「ままままいった!! やめてえええ! 手が潰れるうううう!!」

「え? いや……冗談だろ?」

私の想像通りかそれ以上に手加減したうえでこの反応らしく、お兄ちゃんも若干引いてた。

黒タンクトップは情けなく絶叫して、お兄ちゃんがこの町を破壊し

たつて言うのは嘘だったと認めて叫ぶ。

お兄ちゃんの汚名は雪がれた……はずなのに。

「いや。嘘じゃねえ。」

隕石をぶっ壊したのは俺だ！ 文句がありや言ってみろ！ 聞いてやる！」

お兄ちゃんは自分から、汚名を頭から被りに行った。

「お兄ちゃん!？」

私と呼んで止めようとしても、バカでかい声で圧倒させて聞いてはくれない。

お兄ちゃんは周りの人たちに、開き直りとも八つ当たりとも取れる言葉を吐き散らした。

吐き散らしつつも、「文句があるなら言ってみろ！」と、他人の言葉も聞いた。

なのに、誰も返せなかった。

元々、自分たちの言葉よりお兄ちゃんの行動が正しくて、自分たちこそ八つ当たりをしていたことくらいわかっていたんでしょうね。

唯一、言い返せたのは「ハゲはお前だろ」ぐらい。そしてそれは紛れもない事実だったので、お兄ちゃんも「るせーるせーるせーツ!!」としか返せなかった。

「先生！ エヒメさん！」

集団の気まずい沈黙はジェノスさんが来たことがきっかけで終わり、集団もタンクトップも蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

たぶん、むき出しの機械の腕とすでに隕石の事で今まで以上に有名になったジェノスさんが怖かったんだろう。

弱いと思つた相手にしか拳を振り上げれないし、それを振り下ろす覚悟だつて一人ではできないなんて……

人は、なんてバカなんだろうとつくづく呆れる。

そのバカに、自分も含めながら。

「先生！ エヒメさん！ すみません！ やはりお二人が今は外に出ない方がいいと俺は教えておくべきでした!!」

ジェノスさんは私たちに駆け寄ってすぐに、直角に腰を曲げて謝り

でした。

どうもジェノスさんはお兄ちゃんが隕石に関しての戦犯扱いされていることを知ってたみたいだけど、私もお兄ちゃんも責める気はない。

ジェノスさんが、私たちを思つて黙っていたことくらいわかつてるから。

だから、私たち二人で謝罪が今にも土下座に移行しそうなジェノスさんに、頭を上げるようむしろ説得する。

その説得ついでお兄ちゃんが、「お前、近くにいたならよくあの火のやつ撃たないように我慢したな」と言った。

……そういえばそうだね。

私も人の事が言えない無茶苦茶やったけど、ジェノスさんならお兄ちゃんに「ヒーローやめろ」コールをした集団を、あの隕石にぶっ放してた焼却砲で焼き尽くしてもおかしくないよね。

私がジェノスさん、我慢強くなつたなあと思つていたら、「いえ、そうしようと思つていたんですが……」とか言い出した。

寸前だった!?

でも何でチャージしといて撃つのはやめたのかと思つたら、ジェノスさんはお兄ちゃんを見て少し恐れているような、慄いているような、でもどこか安堵しているような何とも表現しづらい表情で答えてくれた。

「……すさまじい殺気を感じたので、俺の出る幕はない。むしろ、邪魔をしたらこの殺気の餌食は俺になると感じて、俺は撃つことが出来ませんでした」

「……えっと、なんか、ごめんなさい」

タンクトップや非難してた集団はもちろん、ジェノスさんまで慄かせるほどの殺気を放つてたんだ。何ていうか、巻き添えにしてごめんなさいジェノスさん。

とりあえずそう謝ると、ジェノスさんは穏やかに笑いながら「俺はいいんです。……それより、エヒメさん」と言つて、お兄ちゃんの方をこつそり指さした。

それでやっとな、私は言わなくちゃいけないことをやっと思ひ出す。ああもう、私、ジェノスさんに本当、迷惑ばかりかけてる。今度、しっかりお詫びとお礼をしなくちゃ。

でも今は、こちらが先。

何のために、私はお兄ちゃんを探していたのかを思ひ出した私は、顔を上げて口を開く。

言わなくちゃ。

お兄ちゃんに、わがまま言っつて、無視して、拗ねてごめんさいって。

守ってくれて、ありがとうって。

「……エヒメ。……約束しようぜ」

「え？」

けど、私が口を開く前にお兄ちゃんが言い出した。

「何でもいいから、お前が好きなのでいいから、約束しようぜ。」

お前が安心して、家で俺を待てるように。お前が信じていられるような約束を、何でもいいから言ってみろ。

それは絶対、今度こそ一度も破らずに守ってやるからさ」

……ああ。

やっぱり、お兄ちゃんには適わない。

「……お兄ちゃんは、……ヒーローだから。……だから、死んじやうかもしれない危険が伴うことは絶対にやめることが出来ないんでしやう？」

私のまず初めの問いにお兄ちゃんは、いつも通りやる気のない顔でいつもの覇気のない声で、「ああ」と返事する。

その目は、いつも私の話を聞いてくれてる時と同じ、真剣そのもので。

「……なら、死なないでなんて約束できないでしょう？」

だから、しない」

私が一番して欲しい約束は、ただこれだけ。

でも、それは保証なんかできないものだってわかってる。

「お前が望むなら、してやるよ」

「しなくていいよ。私が信じられないんだから」

なのにお兄ちゃんは即答で、これを約束にしてもいいって言った。  
れた。

でも、その答えも私は即答で返す。

「そんな約束しないでいい。そんな無理をしなくてもいい。

……死んじやっても、仕方ないからいいよ。

——だから、せめて一つだけ約束」

私は右手を、小指を立てた手をお兄ちゃんの前に出して言う。

たった一つだけ、交わしてほしい約束。

「せめて死ぬのは、80年後くらいにして」

それが、私ができるぎりぎりの妥協点。

お兄ちゃんは私の答えに目を丸くさせてから、笑った。

「そんなんでいいのかよ」

軽く、当たり前のように言いきって、そんなの出来て当然とばかりにためらいなく、お兄ちゃんは私の指に自分の小指を絡めた。

約束を、してくれた。

## 深海王編

### 長い一日が始まった

お兄ちゃんが約束を破ったことに対する怒りと、悪気はなかったお兄ちゃんを責める自己嫌悪をぶつけて、色々作りまくったので今月の納入ノルマは余裕で達成できたのはいいけど、材料が綺麗になくなった。

ビーチグラスとか流木とか、拾いに行けるものはもちろん、糸とか布とかボンドとかも使い果たしたから買いに行かなくちゃ。

だから、丁度J市にある大規模なクラフト材料の店でセールをやっているから、そこに行くってことを伝えたら、ジエノスさんも買い物に付き合おうと言ってくれた。

ジエノスさんには興味のない買い物だろうから、時間もかかって退屈ですよと遠慮したんだけど、分野は全く違うとはいえ自分の体の修理が出来るジエノスさんは、私の雑貨づくりに興味があると言って、荷物持ちになってくれると言ったのは、本心から嬉しい。

……でも、今回は本当について来て欲しくないんだよね。

クラフト材料だけを買うつもりならお言葉に甘えるんだけど、ついでに買いたいものがあるから。

でも、それは言えない。言うぐらいなら、買わない。

今すぐには買わなくちゃいけないものでもないからまた今度にしてもいいんだけど、こちらも近くの店でセール中らしいから一緒に行っておきたい。

だけど、ジエノスさんの好意と、そんな捨てられそうな子犬みたいな目で、「……お邪魔ですか?」と訊かれたら、簡単には無碍にできない。

私は悩んだ挙句に、完全に他人事として漫画を読んでたお兄ちゃんに、助けを求めた。

助けって言うか、お兄ちゃんにクラフト材料以外の買いたいものを話したただけだけ。



本当はお兄ちゃんにだって言いたくないけど、ジェノスさんに言うぐらいならお兄ちゃんに言つて、どうにかオブラートに包んで言つてもらつた方がマシ。

……なのにこの愚兄、本当に空気を読まないな！

「ジェノス。こいつパンツ買いたいらしいから来んなつて」

「それを言つたら意味ないだろーがっ!!」

近くにあつたテレビのリモコンを引っ搦んで、私は躊躇なくオブラートに包むどころか、私が包んだ「下着」というオブラートすら溶かして破いてザツクリそのまんま言いやがつたバカ兄の頭をどついた。

私の悩みは何だつたの!?

ジェノスさん、フリーズしちゃつたし!!

そんなもう羞恥で今すぐ穴掘つて埋まりたい。でもその前にお兄ちゃんをマグマの中に蹴落として埋めたいぐらいに恥ずかしい思いをして、ジェノスさんにもものすごく気まずく「……出過ぎた真似をしてすみません」つて謝られて、余計に恥ずかしいわ、ジェノスさんに申し訳ないわ、お兄ちゃんがムカつくわで、もっかいお兄ちゃんを殴りたいのを抑えてまでして、J市にやつてきたのに……。

……災害レベル「虎」の怪人が大量発生つて何ですか？

私、やつと買うものが決まつたところだつたのに、結局下着買えなかつたんですけど!?

……まあそんな私の災難はいいとしよう。

つていうかもう忘れたい。私はあんなに恥ずかしい思いをしてまで、何しにここに来たの？ つて思うのは虚しすぎて涙も出ない。

だからこの恥ずかしさと虚しさを忘れるために、私はほとんどヤケクソで、テレポートで近隣住民を災害避難所まで運びまくつた。

私一人、Z市に逃げ帰ることは簡単。

だからこそ、それはしない。

逃げないと科したから、私は自分の誓いに従つて、私が出来ることをする。

とりあえず、J市にいることを知つてるお兄ちゃんとジェノスさん

には、避難所にいるとは伝えておいたけど。

避難所にいるって伝えるだけで、テレポートで出入りしまくって逃げ遅れた人を保護してることは言わなかった。

言わなくてもたぶん二人はわかってるだろうし、私がそうする理由も、何を言っても絶対にやめないことだってわかってるはず。

それでも、二人はきつと心配して、私を叱るのも知ってる。

二人に心配させて、悲しい顔を見るのは嫌なのに、叱られることは少し嬉しい私は、本当にわがままで最低だ。

心配してくれて、故に叱るといふのは大切に思われてる証明。

それが欲しいだけの私は、罪滅ぼしも兼ねて飛び回り、保護しまくった結果、現在グロツキー。

キャパオーバー起こすギリギリまでテレポートをした甲斐があつて、近隣住民のほとんどの安否が確認された。

後は、ヒーローが怪人を退治してくれるのを待つだけだったので、私は避難所の隅に隠れて、休憩を取る。

保護した人、感謝もお礼もいらないから、ほつといてください。私が今一番欲しいのは、ぐっすり眠れる布団です。

私は完全に安心しきっていた。

だって、一般人の避難は完了してて、ヒーローはすでに一人交戦してる。しかもA級11位とかなりの実力者。

それに、お兄ちゃんとジエノスさんに連絡もしてあるから、もう大丈夫。

お兄ちゃんは結構方向音痴だからちよつと心配だけど、ジエノスさんがいるなら大丈夫でしょう。

仮にはぐれても、やっぱりジエノスさんがいれば大丈夫。

なんか今現れてる怪人は、私がソニツクさんに出会ったけど、私でも油断して最後に大ポカやらかしちゃったけど、それでも倒せそうであつたあの怪人とはほぼ同種族っぽい。

災害レベルも虎なら、ジエノスさんは余裕のはず。

そう思い込んで、私は軽く眠った。

起きる頃にはすべてが解決してると、信じてた。

その根拠なんてない思い込みと、私の仮眠はさつきと終わる。  
大きな人のざわめきで、目が覚めた。

眠っていたのは、おそらく10分かそこら。  
たったそれだけの時間で、状況が一変したらしい。

一人で怪人の群れと奮闘していたヒーローが、残り4体を一気に倒したまでは良かった。

その直後に、親玉らしき怪人にそのヒーローは瞬殺された。

いや、実際は殺されてはならないらしいけど、怪人がすぐ近くにいたら誰も助けに行けない状態らしい。

私は避難所の端に座り込んだまま、ケータイでヒーローがやられたという情報を確認した後、どのあたりで今、倒れているのか、その倒されたヒーローがどういう人かを調べる。

……良かった。ジエノスさんみたいなサイボーグでも、重い鎧や武器で全身固めてる人でも、体格が良すぎる人でもない。どちらかというと細身な人だ。

数分の仮眠とは言え、テレポルトで消耗するのはやっぱり体力じゃなくて気力とか精神的なものなのか、だいぶキャパオーバーギリギリで感じる体のだるさはなくなってる。

このくらいの体格の人なら、避難所に連れて行くことが出来るはず。

ちょうど、そのヒーローを倒した怪人が、別のヒーローに向かって行ったという速報も入った。

その今現在襲われてるヒーローには悪いけど、ステインガーさんだっけ？ とりあえずその人の傍から怪人がいなくなったのなら、都合。

ごめんなさい。しばらくでいいから囿になっててくださいと、私は心の中で名前も知らないヒーローに無茶ぶりをして、跳んだ。

\* \* \*

ステインガーさんが身長のわりに私が思ったより軽かったのは、良い想定外。

悪い想定外なのは、私が無茶ぶりしたヒーローは本当に無茶ぶり

だったららしく、私がステインガーさんを回収して避難所に戻るまで5分もなかったはずなのに、戻ってきた頃にはかなりの劣勢に立たされていた。

そのことを、避難所に戻って来て聞かされて、正直私はうんざり。もう私がテレポーターであることは、人を保護しまくった事で避難所内では知れ渡ってるし、ステインガーさんを連れて帰ってきたから、それは仕方がない。

でも何で、その劣勢に立たされてるヒーロー、イナズマックスさんも助けに行くことがほとんど決定事項になってんのかな？

シエルターの職員、ヒーロー協会の人たちは皆、はつきりとは言わないけど、遠回しで私に助けに行け、行くのが当たり前前だろと言っている。

避難所の市民たちは、「イナズマックスも助けてくれ！」と私に懇願するけど、そのうち何人が本気で、そのヒーローを心配しているのが訊きたくなった。

大半、いえ、9割9分が別にどうでもいいけど自分が善人であるアピールで、声高に叫んでるだけ。

自分から何もしない、隣の人が言ってることをオウム返ししてるだけであることなんか、わかってる。

だからこそ、私は無言で跳んだ。

……そのイナズマックスというヒーローを助けるためじゃない。

あの空間から、あの空気から、あの視線から、あの期待から私は逃げ出しただけ。

私は結局、科した誓いをいつも守れない。

そんな弱い自分からまた逃げるために、イナズマックスという人を探す。

……言われなくなつて助けに行くつもりだったんだから、自分の事しか考えてないんだから、私に期待なんかしないで自分の事だけ見てよ。

ちゃんとのあたりで交戦中かを聞いていれば良かったのに、私はただあの場から逃げ出すためにさっさと適当に跳んだから、全然その

ヒーローがどこにいるのか、そもそもイナズマックスという名前だつて今さつき知つたばかりで、顔さえもわからなかった。

サイボーグや重量系の人じゃなきやいいんだけどと思ひながら、キャパの節約に歩いてとりあえずは人や怪人を探す。

初めに怪人退治をしてくれたステインガーという人は、A級11位という高順位は伊達じゃなく本当に優秀な人だったのか、親玉以外の怪人は彼一人で全滅させたらしく怪人に出会うことなく、私はイナズマックスという人を見つけることが出来た。

轟音とともに崩れるビルが見えて、そちらに駆け寄つた。

そのビル近くでまず最初に見えたのは、お姫さま抱っこした成人男性が子供に見えるくらいに大柄、そして筋肉隆々とした人で、大変申し訳ないけど、最初に見た時は怪人の親玉だと確信した。

よく見たら、人間だったけど。

いや、正直ジェノスさんがいなかったら私は、よく見ても怪人だという思い込みは消せなかつたと思う。

ジェノスさんがS級ヒーローになつたと知つて、今まで興味なかつたS級ヒーローについて調べたことがあつた。

軽く一回限りだから、今はもうほとんどの人を忘れてるけど、一人だけ、ジェノスさん以外で覚えている人がいた。

順位がジェノスさんのすぐ上で（今は確か抜かされて、この人が最下位のはずだけど）、なおかつものすごくインパクトのある名前と外見、そして経歴だったから、今は役にたつたけど無駄に覚えてましたよ。

おかまで男好きの脱獄犯。ぷりぷりプリズナーさんですよ？

プリズナーさんは、私の存在に気が付き、「一般人か？　ここは俺に任せて、早く逃げるんだ！」と言つた。意外に一人称は俺なんです。オネエ口調だと信じて疑いませんでした。

「私、テレポーターです！　イナズマックスさんを、保護しに来ました！　ちなみにステインガーさんはすでに保護しています!!」

もちろん、場違い極まりないそんな感想を言えるわけもないので、私は声を張つてプリズナーさんにそう伝えたら、「何?!　ステイン

ガーちゃんを保護してくれたのか！ ありがとう！」と叫び返して、その場に抱えていたイナズマックスさんを寝かせて、怪人の親玉と対峙する。

「俺があれを引き付けている間に、イナズマックスちゃんを安全なところに連れて行ってくれ」

彼(彼女?)がそう言っ、自分と同じくらいの体格の怪人に向かって行ったので、私もイナズマックスさんに駆け寄る。

けど、フラツとめまいがして、盛大に転びかけた。

ああ、キヤパが相当ヤバいな。イナズマックスさんは連れて帰れても、プリズナーさんがやられたら、あの人は運べないかも。

そんなことを思いながら、膝が崩れかけたのに、私は転びも地面に座り込むこともなかった。

「お前は相変わらず、エゴイストなのか聖人なのか、ただの馬鹿なのかよくわからんな」

私と太さ自体はそう変わらない腕が、私を支えていた。

……それ、割とあなたにも同じこと言えますよ。

暗殺者なのに、憎いライバルの妹である私を、何かと助けてくれるあなたにも。

「……この前はお兄ちゃんが空気を読まなくてごめんなさい」

とりあえず私は、囚人服姿のソニックさんに謝っておいた。

「……お前も、空気は読めてないだろ。今言うか、それを？」

## 構成物質1割、未だ不明

プリズナーの脱獄に乗じて、俺もさっさと脱獄した。

その後、プリズナーを追ったのはただの興味だ。別に俺一人でも脱獄は出来ただろうが、さすがに面倒くさそうだったので、ここまで即座に脱獄できる機会をくれた奴に感謝は素直にしてやっても良かったが、それをわざわざ伝えるためについて行くほど俺は暇じゃない。

ただ、生身でハンマーヘッドのバトルスーツを軽々上回る奴が、脱獄してまでヒーロー活動をすることにわずかながらの興味がわき、戦いに飢えるこの血が騒いだけだ。

……まあ、その血の騒ぎは奴に目をつけられていたということが判明したことで、さっさと帰ろうという警報に変化したがな。

俺が奴に負ける要素はないが、もうチェックされていたという事実だけで嫌だ。関わりたくない。

だから、さっさと帰るつもりだった。怪人が町を襲おうが人を殺そうが、俺には関係ないし興味もない。

帰るつもりだった。

あいつが、……エヒメが現れるまでは。

やけに青白い顔色で現れ、プリズナーが助けたヒーローを保護しに来たとエヒメは宣言する。

……A級ヒーロー二人をほぼ瞬殺した怪人から保護しに来たというのに、あいつは偽善者独特の自分に酔った顔なんてしていなかった。

むしろ、実に面倒くさそうだった。

面倒くさくて、他人なんかどうでもいいが間違いなくあいつの本心なんだろう。

なのに、あの女は来た。

逃げないという誓いは、もはや自己満足すら得られない呪縛になって自分をただ苦しめるだけであることは他人の俺でも一目瞭然だというのに、エヒメは別に助けたくもない他人を助けに、自分の兄に頼るなどの方法なんか見向きもせず、当たり前のように、面倒くさそう

にやってきた。

……本当にお前はエゴイストなのか聖人なのか、よくわからん女だな。

行動そのものは不快なのに、その行動原理がどうしても憎めず同調する不思議な女は、プリズナーが助けたヒーローに駆け寄って、盛大に転びかけた。

何かにつまずいたというより、足の力が抜けたといった形で転びかけたこと、そもそもテレポートで近づかなかったことがわずかに気になつた。

それを訊く為だけ、わずかとはいえ疑問を残すのは不快だから解消する為。それだけだ。

こいつを助けたわけじゃない。

だから俺は、俺の腕の中で気まぎれにへらつと笑ってる女に訊く。

「お前のテレポートは、さほど使い勝手が良い能力ではないな？」

空気を読めていないと指摘した俺が言うのもなんだが、脈絡のない問いだった。

だからかエヒメは俺の問いを理解できずにキョトンとしていたが、そんなもん気にせず俺は質問を重ねる。

「前から思っていたが、お前はもつとここで使えばいいだろうと思う状況で使っていないことが多い。」

回数制限でもあるのか？ 異様に顔色が悪いのは、その所為か？ 「……心配してくれてるんですか？」

俺の質問に答えるのではなく、あり得ないことを訊いてきたことに思わず顔が歪む。

俺の表情は言いたいことを如実に表していたらしく、俺が何かを言う前にエヒメは「そこまで否定しなくても……」と不満そうに言い出した。

「阿呆なこと言ってないで、俺の質問に答えろ。バカ女」

こいつの言葉は、バカバカしくて的外れでしかない。

心配？ そんなものお前はもちろんどうして俺が、誰かにすると思えた？



未だ腕にお前を抱えたままなのは、お前がさっさとあのヒーローを連れて逃げないようにするため。質問に答えるまで、ただ捕まえておきたかっただけだ。

そうでしかない。それ以外、あり得ない。

俺は自分自身の問いに、そう答えを返す。

逃げないと科した女を逃がさない為に腕の中に閉じ込めた理由は、それだけだと言いかせた。

矛盾なんて、俺の中にはなかった。

「……ええ。正確な回数は体調とかによつて変化するからわからないんですけど、回数制限があります。キャパオーバーすると、テレポーターどころか自力で動くことも出来なくなります。」

正直、今はテレポーターせずにこのまま寝てしまいたいくらいギリギリですね」

俺がイラついていることに察したのか、さすがにこれ以上余計なことを言わず、エヒメは曖昧に笑いながら答える。

その言葉に嘘はないだろう。現にこいつは自力で立つ気も起きないくらいにギリギリなのか、俺に完全に体を預けて支えられている。

「……そこまでして、お前は心底面倒くさいと思いつながら何故、あいつを助けようとするんだ？」

面倒なら放っておけ。本心からしたくないことをしないことは、逃避ではなく選択したうえで選んだ行動だろうが」

俺の正直な感想に、またエヒメはきよとんとした顔で見上げてくる。今度は、どうしてそんな顔で俺を見るのかはわからなかった。

「……面倒くさいって、ばれちゃってました？」

ソニックさんに隠し事って出来ませんね」

バツが悪そうでありながら、どうしてそんなに嬉しそうに笑うのかも、わからない。

「私は、……結局自分に科した誓いを守れなかっただけですよ。ヒーローを助けに行ってくれなんて、無責任な期待を敵に回して、『面倒だから嫌です』って言う勇気がなかっただけ。……ただ、それだけなんです」

ヒーローを助けに行くという、矛盾と無責任極まりない要望の圧力に負けたと、この女は自嘲した。

その自嘲する顔が、無性に気に入らなかつた。諦めた、弱々しい目に酷く苛立った。

その目が、この弱さこそがこの女らしい、本来ならそうである姿であること、元々「逃げない」なんて不可能なほど弱い人間であることなんて、初めからわかっていたはずなのに。

期待など俺はこいつにしていなかつた。むしろ、この身の程知らずな誓いを、強さを粉々に壊してしまいたいとさえ思っていたのに、今の弱々しいこいつは不快だつた。

……その不快さはいっつ自身から来るのか、それともこの女の強さを壊した矛盾と無責任、そして弱さの塊である声だけがでかい「普通の人間」という存在からかは、わからなかつた。

そんなことを考える前にこの女は実にふてぶてしく、そして面倒くさそうに、聖人からほど遠い顔をして言ったからだ。

「……でも、一応初めから来る気はあつたんですけどね。だからこそ、余計な期待なんかしてほしくなかつたのに」

「……何故、お前は『見捨てる』という選択をしない?」  
本心から、心底不思議だつた。

この見返りを求めていなくせに聖人からほど遠い、面倒くさいけど仕方ないと思いつながら人を助けようとする行動原理は理解できなかった。

出来なかつたのに、この女は他人を殺すことも見捨てることも躊躇しない俺でもわかるように、その動機を言つてのけた。

「自分の家の前に死にかけの捨て猫が放置されてて、ほっとけば明日にはハエと蛆虫の巣窟になりそうだったら、どうにかするでしょう?」

私がやつてることなんか、それと同じようなものです。面倒だから放置して、その結果で後味が悪くなるものを見たくない。それだけです」

しれっとふてぶてしく、面倒くさそうに言い切つた。

A級ヒーローを、お前を含めた一般市民を助けるために役に立たな

かったとはいえ行動して、やられた奴らを見ていて不快な猫の死体と  
言うか、この女。

本当に、本心では他人をどうでもいいと思ってるな。

しかしそれは、俺でも確かにわかる。面倒だが、見返りなんていら  
ないが、確かに何とかしようとは思える動機だった。

……俺の場合はその死にかけの猫を、自分が見えないどこか別の所  
に捨てるという選択を取るが、こいつは助けるという選択をする。

その部分はどうしても相容れなくせに、どうしてもこの女の考えは  
俺でも理解できて、同調できるのか。

理解できて同調できるのに、どうしても相容れないのかがわからな  
かった。

そのわからない部分を、知りたいと思った。

それは相容れたかったかの、それとも決別したかったのか、それ  
はわからない。

それはどうでも良かった。

ただ、知りたかった。

が、そんなことを訊いてる暇も、俺が考えてる時間もなかった。

プリズナーと対峙している怪人のパワーは、どうも脳筋のプリズ  
ナーより上回るらしい。

単純な殴り合いは実に滑稽で俺が負ける要素などどこにもなかつ  
たが、プリズナーがやられてこっちに向ってきたらさすがに装備がな  
い俺では面倒だ。

スピードと武器や技の技術で俺に適う者など存在しないが（一瞬よ  
ぎったハゲなど見えない）、俺のパワーはそこまでずば抜けていない  
ので、こいつらと戦うとなれば丸腰の俺では長期戦になるのが厄介  
だった。

だからここは、あいつがあれを引き付けている間に帰るか。

……何か、プリズナーが「変☆身!!」と言いながら全裸になったし。  
どう見ても天使じゃない。というか人間じゃない。

というかもう見たくない。帰ろう。

エヒメの方も、男の全裸を見ても女らしい反応を見せず、というか

できずに死んだ目になって「変身というか、あれは変態……」と呟いていた。

二重の意味で正しいな。上手いこと言ったつもりか。

プリズナーが「エンジェルスタイルの俺を見て生きて帰ったものはない」と言い出したので、もう本当に早く帰ろうと思った。

そう言うとエヒメが腕の中で「お気をつけて」と言ったから、何気なく俺は言い返した。

「俺が、死にかけの猫に見えるか？」

エヒメが言ったことを使って、ただの反射で言ったであろう社交辞令的な別れの挨拶を皮肉った。

特に意味はない。ただ、逃げ帰るわけではない、このままプリズナーがやられても俺は余裕だと、あんな愚鈍な魚人くらい仕留められると暗に言ったつもりだった。

お前が「後味悪い」と思う結果になららん。そういう意味をこめたつもりさえもなかった。

特に意味のない、言葉のはずだった。

なのに、エヒメは俺の言葉に少しだけ怒った様子を見せる。

弱々しかった目に、諦めしかなかった不快な目がある日、喉笛に刃を突き付けてもそらさなかった目に戻る。

この女にはそぐわない強さが灯った眼になって、まっすぐに俺を、あの日と同じように見据えて言う。

「あなたは、私にとってどうでもいいけどほとくには後味が悪い人ではありません。

ソニックさんは、私にとって他人じゃなくて大切な人です。だから、本当に気を付けて欲しいですし、何かあったら面倒なんて思わずに、身の程知らずでも余計なお世話でも私は助けに来ます。

ソニックさんの強さを信じていない訳じゃないけど、これは強い弱いなにか関係ない、大切だからこそ思う心配です」

……この女は、俺が自分の兄の命を狙っていることを覚えているのか？

覚えていても、知っていても、その上で俺を「大切」というのか？

やはりこの女はと俺は、相容れないと確信した。

確信しても、やはり何故相容れないのかを知りたいと思った。

どうして、こいつは俺を「大切」だと言えるのかが、知りたかった。

「本当に余計な世話だ。そんなことを思うより、さっさとあれを連れて帰れ。」

お前に貸した恩はまだ返してもらっていない。それを返す前に死ぬなんて俺は許さんからな」

だから、さっさとこいつもこの場を離れるように言った。

ただ自分の為だけに、俺自身の為だけに俺はこいつを生かす。

……なのに、エヒメは実に嬉しそうに笑った。

「はいー」

笑って、俺の手から離れてイナズマックスとかいったヒーローを抱えて消える。

イナズマックスを連れて行くときは、俺とテレポートしようとした時のように、躊躇なく抱き着きはしなかった。

肩を貸すように、奴の腕を自分の肩に回して担いで消えたのが、あの女にとっての俺とどうでもいい他人の違いが目に見えたのが、何故か少しでも気分が良かった。

\*\*\*

エヒメが消えた直後、プリズナーが怪人にやられてサッカーボールのように蹴り飛ばされ、ビルを抉って飛んでいく。

怪人が俺と向き合い、名乗る。

深海王と名乗ったその魚類は、名前の通り深海に引きこもっていいばいいものを、この世を支配すると世迷い言をほざいて俺にでかい態度を取る。

この俺にでかい態度さえ取らなかつたら見逃してやつても良かったのだが、少し、目障りだ。

だから、遊びのついでに駆除してやろう、深海王。

そう、これは遊びだ。

俺に負ける要素などないのだからな。

遊びに過ぎない。

俺の為に過ぎない。

決して、あいつの為なんかじゃない。

この町のどこかに避難した、あの女の為なんかじゃない。

無自覚に、無意識に、バトンは渡る

負ける要素がなかったのは事実。

あるとしたら、それは武器などを使わない生身のソニックでは威力不足で、どうしても長丁場な戦いになることからのスタミナ切れ。

深海王との戦いで、彼が案ずるべきはそこだけだった。

雨が、降るまでは。

元々は水の中の生物なのだから、それは当然と考えておくべきだったこと。

深海王が、陸上に上がっていることで弱体化していたという可能性を。

雨が、水が、彼を本来の姿に変えてゆく。

本来の力を、取り戻す。

「あなたの攻撃、まるで痛くない」

部下に比べたらまだ人間に近かった顔立ちが、完全に魚のものへと変貌した貌が嗤う。

(速い)

ソニックのスピードに追い付く速さ。

(でかい)

ソニックの何倍もある身の丈。

(強い)

ソニックをはるかに凌駕するパワー。

(だが、俺が負ける要素は……)

ソニックは決して愚かではない。

だから、ここで「ない」とは言いきれないことなどわかり切っている。

故に、引いた。

逃げるのではなく、その「負ける要素」をなくすために。

丸腰では威力不足の自分を補うための装備を整えるために、一旦身を引く。

逃げるなど、思いつきもしなかった。

それは負ける要素以上に、あつてはならない。

逃げる以外にできない小娘でも自分に科して実行していることを、「最強」と名乗るソニックが行う訳にはいかなかった。

逃げるわけにはいかなかった。

負けるわけにはいかなかった。

その理由は、自分が最強だから。

ただ、それだけだった。

それだけのつもり、だった。

「そこで待つてろ……。」

次、会う時がお前の最期だ」

変わり身に使った囚人服と宣戦布告を残して、ソニックは雨天の中、姿を消した。

自分より小柄とは言え、自分でも捉えられず、目でも追えなかった男にわずかながら深海王は驚愕する。

が、彼にとってソニックはただ自分の視界でうろちよろと飛び回つてうつとうしい羽虫でしかなかった。

だから、気にも留めずに歩を進める。

自分にとっての餌場であり娯楽場である場所に。

災害避難所である、シエルターに。

\* \* \*

「お前は誰だ？　ここで何をしている？」

そして、二人は邂逅する。

知らず知らずに、バトンは渡る。

知っていたら、ソニックはむしろ意地でも渡さなかった。

知っていたら、ジェノスは殺してでも奪い取っていた。

だから、これは知らなくて良かった話。

腕と眼球で、誰でも一目でただの人間ではないことはわかる。

ソニックは目の前のサイボーグ、ジェノスを一瞥して呟いた。

「ふんっ。ヒーローか？」

ソニックにとってヒーローは、どこをとっても嫌う要素しかない、不快な存在でしかなかった。



それは前からだったし、これからもそう。

けど、この時は少し違った。

嫌う理由にほんの少しだけ、自分以外が関与していた。

守るはずの一般人に、まだ20歳に手が届くか届かないかという年頃の女に保護された奴ら。

逃げないと科した、あの強い目を持つ彼女の光を、あの目の輝きを消しかけたきっかけ。

ソニックはすれ違いざまに、言い捨てる。

「正義ごっこなどしている連中では、本物の強敵には勝てない。

何も守ることは出来ない」

それが、バトンであった事など彼は知らない。

言い捨てたサイボーグが、そのバトンを受け取れる相手だったことさえも。

ジェノスだって、知らない。

自分がバトンを、受け取ったことも。

正義ではなく、ヒーローとして守らねばならない人を託されたことなど、知らない。

誰も、知らない。

ジェノスが振り返った頃には、誰もいなかった。

ただ、目には見えない、誰も知らないバトンだけが託された。

こうして、世界は知らず知らずに交錯する。

何気ない言葉が、何気ない出会いが、蝶の羽ばたきのよういつか世界を一変させる大きなものに変貌することを、誰も知らない。

「今の変質者はいつたい……っ！」

そしてそのきっかけが、シリウスに始まるともカツコよく終わるとも限らない。

ジェノスはあまりに堂々とした全裸の変質者に気を取られ、数秒間そこに立ち尽くしてしまった。

## その誓いが、彼らを動かした

イナズマックスさんを連れて避難所に帰って来た時には、さすがに顔色で私の体調とかが最悪だったのは誰が見ても一目でわかる状態だったらしい。

だからもうテレポートはしばらく使えない、またいざという時に使うために休ませて欲しいという私の要望は、あっさり通った。

怪我人とかを寝かせるためのベッドを使ってもいいと言われたけど、それは遠慮してやっぱり私は避難所の隅で座り込んで、もらったペットボトルの水を半分くらい飲んでから目を閉じる。

ベッドだと周りが大騒ぎしても目が醒めなさそうだったから、あえて寝にくいところで仮眠を取る。

予感がしてた。

たぶん、このままでは終わらない。

私はこのまま、ことが終わるまでゆっくり休むことなんかできない。

そんな気がしてたから、このおそらく短いであろう休める時間を無駄にせず、そしていざという時すぐに動けるようにだけはしておいた。

……体は鉛になったようにだるい。

でも、心はさつきよりずっと楽になったと思う。

ソニックさんは、私が「他人をどうでもいいと思ってる面倒くさがり」だと見抜いても、私のそんな部分を失望せず、受け入れた。

心配したのかを訊いたらものすごく嫌そうな顔をされたけど、確かにあの人は転びそうな私を支えて、そのまま体を預けていた私を突き放しめせずにずっと抱えていた。

恩を返すまで死ぬなど、生きろと言った。

それだけが、私にもう一度誓いを背負っていいこうと思える原動力になった。

私が面倒くさくてもヒーローを助けに行った事、あの無責任な期待から逃げた事でソニックさんに今日出会えたのなら、逃げたことにも

逃げなかった事にも意味はある。

私にとつての、価値はある。

だから、まだ頑張ろう。

また逃げずに頑張れば、良いことがあるかもしれない。

逃げたつて、もしかしたら何か意味を、価値を見つけることが出来るかもしれない。

今日、逃げたことを受け入れて、また逃げないと誓い、私は休息をとる。

今度の休息も、やっぱり10分程度だったけど。

\* \* \*

シエルターが破壊されるという轟音だったにもかかわらず、私の瞼はずいぶん重く目を開けるが辛かった。

やっぱり、ベッドで寝なくて正解。ベッドだったら、たぶん私が怪人の餌食になっても起きなかったでしょうね。

体は休息を求めて訴えてるのを無視して起き上がり、音のした方に目を向ける。

……プリズナーさんと対峙してた時と、外見が変わってない？

別の怪人？

ソニツクさんと会話してたからあんまり注目してなかったけど、何か微妙に違うっぽい怪人に私はちよつと寝ぼけてるのもあつて呑気に首を傾げていたら、男の人が一人前に出て来て、降参を宣言した。降参して、怪人の求めるものを提供をするから、ここにいる者の命だけは助けてほしいと交渉を始める。

でもその交渉は、他のヒーローがやってくるまでの時間稼ぎと見破られていたのか、それとも人間の言葉なんて聞く耳が本心からなかったのか、怪人はあっさり却下する。

要求があるとしたら、気持ちのいい悲鳴を上げろ、か。

よくは見てなかったし、聞いてもなかったけど、その声とプリズナーさんの方が似合いそうなオカマ口調で、やっぱりプリズナーさんと戦っていた怪人だと確信した。

変態能力でもあつたのかな？ プリズナーさんと同じく。

こいつがここに来たってことは、プリズナーさんは負けてしまったんだ。

ソニックさんは、大丈夫かな？

大丈夫だと思おう。ヒーローでもないあの人が、自分からこんな面倒くさい敵と戦う訳もないと信じて、今は不安から目をそらす。

そして、プリズナーさん、ごめんなさい。

生きてるか死んでるかもわからないけど、生きていたとしても私はあなたを保護しにはいきません。

それは、確実に全裸であるあなたを運びたくないってというのが正直言ってかなり大きな割合であるけど、一番重要な理由はそれじゃない。

面倒だけど、本当に面倒くさくてしたくないけど、でも、ここで何もしなかったら後味悪い思いをするのは私だから。

だから、私は飲みかけだったペットボトルを、怪人の顔に向かって投げつけた。

ポコンと軽い音がして、怪人は一瞬きよんとしてから、投げつけられたものを見て、それから投げつけた私を見た。

周りも、私を見る。

怪人と同じように何をしたかが理解できていない目もあれば、なんてことをしてくれたんだ?! と怒っている視線もある。

怪人がシエルターを破壊して目の前にいる状況でも、無根拠に自分は死なないと思ってる頭が平和な人は、面白いことが起こりそうだと期待してることだってわかった。

どの視線も無視して、ただ私はもう一度背負った、自分に科した誓いのままに言った。

「生臭いんですよ、あなた。室内に入りたいなら、全身フアブって出直してきなさい」

こいつ相手に、下手に出る方法じゃ時間稼ぎは出来ない。

時間を稼ぐなら、挑発で囷になるしかない。

面倒くさいし、怖いし、本当はしたくないけど、しょうがない。

私しかする人間がないし、出来る人間もない。

逃げないと誓ったんだから、やるしかないじゃない。

私は趣味でヒーローやってるお兄ちゃん以上に、それってどうよな理由で行動にでた。

お兄ちゃんが知ったら、「中学の学級委員決めてるんじゃないやねーんだから」って言われて怒られそうだなあ。

私の言葉に魚面の怪人は、わかりやすく顔を引きつらせて笑う。

やっぱりこいつはプライドが高い分、煽り耐性が低い。

「……あなた、見覚えがあるわ。さつき、私の獲物を連れて帰った奴ね」

意外にも人間の見分けががついていて、しかも記憶力が良いらしい。「そうですよ。あなた遅いから、余裕でした」

言った瞬間、私なんか余裕で掴めそうな手が私をハエのように潰そうと振り下ろされた。

「ほら、遅い」

振り落とされ、地面にそのまま手形を作った怪人に、私は全然違う所でしれつと言ってやる。

……覚悟したうえで言っただけでやっただけと事前に座標指定もしてたけど、やっぱり心臓にもものすごく悪い。

ロングスカートだから、足の震えは隠れる。だから、腕を組むふりをして体の震えを押しさえつけて、私は余裕ぶって、本当は今にも逃げ出したいのを隠して、必死で強がって、挑発する。

「魚類が肺呼吸身につけたからって、調子に乗りすぎなんですよ。

それは進化じゃなくって、ただ単にあなたが種族勘違いしてただけ。魚類じゃなくて両生類、カエルの一種だっただけですから。

干からびる前に、さつきと水辺に帰って合唱でもしといてください」

思いつくままに挑発の言葉を言い放つ。

ビキビキと音が鳴りそうなほど、怪人は顔を引きつらせて、また私の方に向き直る。

「……あなた、簡単には殺してあげないわ。

全身の骨を砕いて、手足を引きちぎってから、頭をかみ砕いてあげ

る」

ものすごく嫌な殺され方を宣言されつつも、私は表面上鼻で笑ってやる。

「大海知らずの井蛙が、何を言ってるんだか？」

私一人に注目しろ。

このままレポートで誘導して、こいつが壊した穴から遠ざけてシエルターの人を逃がせば、ここで一か所に固まってるよりは被害は少ない。

大丈夫。お兄ちゃんとジェノスさんには連絡してあるから、必ず来る。

それまでの時間を稼げばいいだけ。

そう言い聞かせて、簡単なことだと自分を騙そうとしたけど、本当はわかってる。

この恐怖と混乱に満ちた空間で、私が上手く怪人を誘導しても避難してきた人たちはそうすぐに簡単に逃げ出せないことを。

たぶん、半分も逃げ出す前に私はキャパオーバーを起こすことも、全部わかってる。

「どれだけ今が絶望的な状況下なんて、嫌になるくらいわかってる！それでも、私がするしかないんだ。」

私しかないんだ。

……そう、思ってた。

\* \* \*

「はあっつ！　そ、その女性に手を出すな！」

B級ヒーロー！　ジェットナイスガイ参上!!」

「う……うおお！　俺もやるぜ！」

C級ヒーロー！　ブンブンマン参上!!」

ジェノスさんほどではないけど体がメカメカしい男の人と、髪形がアフロな男の人が、私の前に出て、私を庇って名乗り上げた。

「……ヒーローとして、一般人の女性一人を囮にさせるわけにはいかな」

そんな呟きがまた後ろから聞こえて、私を通り過ぎる。

「よし、力を合わせるぞ。

38位の最下位とはいえ俺もA級の端くれ……やってやる！」

A級ヒーロー、蛇咬拳のスネック参上！」

蛇柄のスーツを着た人が、ネクタイを締め直して構えた。

「!! お、俺もヒーローだ！」

オールバックマン参上！」

初めに、降参宣言をして犠牲を出さないように時間を稼ごうとしていた男性も、名乗り上げる。

……ヒーローが、いた。

ここにいてるってことは、自分たちが敵う相手じゃないって思ったからだ。

なのに、名乗った。

名乗って、前に出る。

私の前に、私を庇って、私しかいないからしなくちゃいけないって思っていたことを、私の代わりに、敵わないと思った相手に立ち向かう。

……ああ、これだから私は、他人なんかどうでもいいと思っても人を嫌いになっても、どれだけ人の悪意や醜さを目にしてきても、それでも人に、人間に失望が来ない。

私の一番のヒーローは、いつだってお兄ちゃんだけだ。

それでも、ここにも、ちゃんとヒーローはいた。

誰かを守って、救おうとする人たちは、確かに存在していたことが嬉しくて、この絶望的な状況なのに、私の胸の内は希望で満ちる。

……何人集まっても、避難してたヒーローだと思うと心細いと冷静な私がちよつと思っただのは内緒。

弱い私はまた守られるだけ

4人のヒーローが私の前に立って、私を怪人から庇う。

「お嬢さん、君はもういいから逃げろ。」

……テレポルトが使えるとはいえ、普通の子に何もかもを背負わせて悪かった。けど、後は俺たちヒーローの仕事だ」

蛇柄スーツの男の人、スネックさんがそう言っつて、私を後ろに下がらせようとする。

その言葉は、ものすごく甘えてしまいたかった。

「……ごめんなさい。それは、出来ません」

でも、私はその言葉を、この人たちの優しきを受け取らなかった。「私が挑発しちやつたから、ここで逃げても奴はたぶん私を追ってきます。」

それに、ここであなたたちに全部任せて逃げた方が、どんな結末でも夢見最悪ですから」

そう言っつて私は、自分のスカートを力任せに破つてスリットを作る、

お気に入りだったんだけど、仕方ないな。

……だつて、思いついちやつたんだもん。

私一人じゃ無理だつただろうけど、この怪人を倒せなくともそれなりのダメージを与えられそうな方法が、浮かんじやつたんだもん。

「私も、戦いますー！」

一人じゃないのなら、この誓いは軽くなる。

絶対に、成し遂げられる。

……そう、思つてた。

\* \* \*

私の思い浮かんだ作戦というか方法は、はっきり言っつて最低なもの。

だつてそれは、今ここにいるヒーローさん達を囮にすることで成立するものだから。

S級ヒーローのプリズナーさんがやられた相手に、A級一人、B級



一人、C級二人では敵わないと、残酷で冷静な私は考えていた。

自分を助けてようと体を、命を張ってくれている人たち相手に、私は打算的に戦力を計算した。

本当に、自分勝手な私自身が嫌になる。

でも、だからこそ、私は自分の浮かんだ考えを、方法を、作戦を失敗するわけにはいかない。

私の考えている作戦は、お兄ちゃんやジェノスさんが来るまでの時間稼ぎじゃなくて、本気で奴を今、ここで倒す方法。

だから、上手くいけばここで事を終わらせることが出来るけど、失敗したら余計に怒りを買って、最悪な今の状況が絶望に変わる。

……でも、やるしかない。

時間稼ぎだって、出来る状況じゃないんだ。

なら、私は私なんかを助けようとしてくれた人を囮にして、どんなに最低でもやり遂げないといけない。

……あの怪人を、殺さなくちゃいけないんだ。

私が覚悟を決めたタイミングで、ジェットナイスガイと名乗ったヒーローが怪人に突っ込んで言ったけど、その胴体は障子に手を突っ込んで破るように、あまりにも脆く突き破られた。

「ジェットナイスガイが殺られた……」

「騒ぐな。あれはサイボーグだ。死んだとは限らん」

さっそく一人、戦闘不能になった事で走った動揺をA級ヒーローさんが宥めるけど顔色が悪い。

当然でしょうね。だって鉄の体をあの手は、突き破ったという事なんだから。

それでも、彼らはまだ諦めない。

「俺が合図したら、一斉に飛び込め」

……お嬢さんは、変な意地を張るな。ここは男に花を持たせてくれ」

A級ヒーローのスネックさんはそう言って私が罪悪感を持たないように、意地を捨てやすくしてくれた。

でも、ごめんなさい。

犠牲が出たからにはなおさらもうこの意地は捨てられないし、やり遂げないと罪悪感が永遠にまとわりつく。

けど、私がそこに居続けたらヒーローさん達は行動に移れないから、それは私の最低な作戦にとっても都合が悪いから、だから私はその言葉に従うように一歩身を引く。

その私の動きを合図に、怪人は散々挑発をした私に向って動く。

そしてヒーローさん達も、その怪人の動きを合図に、動く。

私も、動いた。

跳んだ。

まずは、目をつけていた武器を調達する。

その間に、ブンブンマンさんとオールバックマンさんが同時に殴り飛ばされた。

けど、さすがはA級ヒーロー。

スネックさんだけは、アクロバティックな動きで何とか、怪人の拳を避けた。

けれど、それは初めの一撃のみ。

二撃目の拳は、避けるために跳んだ空中でもろに受けてしまい、スネックさんはボールのようにシエルターの屋根まで吹き飛ばされて、ぶつかって、落ちた。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

あなた達を、私なんかを守ろうとしてくれた人を信用しないで、勝てないと考えて、囷にして、犠牲にしてごめんなさい。

……そこまですたからには私が失敗するわけにはいかず、スネックさんに怪人の拳が、二撃目が命中する直前に跳んだ。

イメージしろ！ 座標ではなく、明確に、相手を!!

隕石の時のように、ジェノスさんの背中のように!

お兄ちゃんを非難していた、あの虎タンクトップの時のように!

あの怪人の、「眼球」をイメージして、跳べ!!

私は怪人が壊したシエルターの外壁から露出した、外壁補強に使われていたであろう折れた極太の鉄棒を持って、跳んだ。

これを奴の目に突き刺せば、私の全体重をかけて突き刺せば、上手

くいけば眼底まで突き破って脳まで達する一撃になる。

奴を殺せる、一撃に……

奴を……殺せる……

\* \* \*

「あら？」

怪人の眼球に突き刺すはずだった鉄棒は、怪人の肩の鱗に当たり、傷つけるどころか滑って私の手から離れる。

そして私は、無様に落ちて地に伏せる。

………失敗。

それも……位置指定が、失敗して……

「あらあらあら、どうしたのかしら？」

自分から、私に踏みつぶされに来たのかしら？」

頭上で、怪人の喜悦の声が聞こえる。

見たくもないのに、体が勝手に上からの声を確かめる。

魚の顔が、嬉しそうに、甚振るように、甚振る為に、私を見下ろしている。

「でも、ダメよ。言ったでしょ？」

あなたは、全身の骨を砕いて、手足を引きちぎってから、頭をかみ砕いてあげるって」

ゆっくり伸ばされた手が、急に遠くなる。

遠くと言っても、2メートルほど。

本能で無意識にテレポートで私は逃げるけど、座標指定の為の集中なんか出来るわけもなく、ただ私の臆病で身勝手な逃げたいという願望に従って後ろに下がるだけ。

「逃げるの？ つまらないわねえ。遊びましょうよ」

そのことをわかっているのか、怪人は私がテレポートで逃げても焦らず、甚振るのを続行する。わざとゆっくり、こちらに向かってくる。

何も考えられないまま、私は無駄にテレポートで逃げる。ただ、後ろに下がって、壁際まで追い詰められる。

壁なんて私には無意味なはずなのに、今の私の精神状態だと越えられない。

私の中には、怪人に追い詰められ鼻先まで迫った死に対する恐怖と、ヒーローさん達を犠牲にしてまで出した絶好のチャンスを無駄にした後悔でいっぱいだった。

私の失敗は、全部私の所為だった。

私が今更、覚悟したつもりだったのに、全然覚悟が出来てなかった。

……殺すという覚悟が、出来てなかった。

あのソニックさんに助けられた時とは違って、手に、体に、全身に殺した感触が残るであろうこの方法を、嫌がった。

怖いと思ってしまった。

それが、あの位置指定失敗だという事はわかってた。

「あら？　もう鬼ごっこは終わり？」

追い詰められた私を、怪人は喜悅、愉悅を湛えた笑みで見下ろした。強がりすらいえない私は、腰が抜けて立つこともレポートで逃げることも出来ない私は、ただ涙を流してそれを見上げることしか出来なかった。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

何の役にも立てなくて、結局自分が一番大事なわがままで、臆病者な私のなんかの犠牲にして、ごめんなさい。

そうやってヒーローさん達に謝ること以外に、私がしたり思ったりする権利なんてもはやないはずなのに、身勝手な私は傲慢にも求める。助けて、と。

私の、ヒーローに。

「じゃあ、約束通りにしてあげる」

怪人が笑って、嗤って、私に手を伸ばした時、見えた。

シエルターの天井近くに取り付けられた丸い大きな窓に立つ、人影を。

その窓が蜘蛛の巣状にひび割れて、光の雨のようにガラスの破片が降り注ぐ。

その破片とともに降り立ったのは黒鋼の腕を携えた、たとえ闇夜でも冴えるほどの輝きを持つ金の髪と瞳。

「海人族というのはお前か」

こんな身勝手な私に、まだ生きろと言った神様がくれたのは慈悲か。

それとも、償えという意味でこの生をくれたのかは、わからない。「排除する」

どちらでも、私はまた助けられ、守られて、救われたのは事実。

ジエノスさんが、来てくれた。

## 最優最良最善の選択にして、最悪の結果

「——ジエノス、さん……」

破れて汚れた服装。乱れた髪。手足どころか顔にも擦り傷を負って痛々しい。

そして何より、恐怖と科した誓いを守れなかった自分を責めて涙するその顔に、頭が真っ白になった。

相手が怪人で良かったかもしれない。

例え相手が人間でも、俺は同じことをした。

肩のブーストで加速し、その勢いのまま相手に飛び込み顔面を殴りつけて零距离で焼却砲をチャージなしとはいえフルパワーで撃ち放つ。

肉が焼けるどころか蒸発する音は一瞬で遠ざかり、怪人はシエルターの壁をぶち破り、ビルを抉って吹き飛んだのを確かめ、俺は振り返った。

怪人に追い詰められ、テレポートで逃げることでさえできずに座り込んでただ泣いていた……、こんなにもボロボロになるまで逃げずに頑張っていた愛しい人に、振り返る。

「エヒメさん。敵は、今ので最後ですか？」

彼女は数秒間、目を丸くさせたまま俺を見つめて、そして恐怖で強張っていた顔を安堵でわずかに緩ませて、頷いた。

同時に、シエルターに避難していた人々が歓声を上げる。

「うおおおおお！」

「かっけえええええ！」

「助かったああああ!!」

よほどの危機だったようだが、俺はヒーロー失格なことに他人のこなど気にしてなかった。

今のが最後の敵だと知って、エヒメさんがボロボロとはいえ無事そこにいるだけで、何もかも終わったと思って安堵していた。

その時、俺が考えていたことは早く今すぐにも彼女に手を差し伸べたい、座り込む彼女にもう大丈夫だと安心を与えたい。

それだけだった。

その為に駆け寄ろうとした瞬間、安堵に緩んでいた顔を再び強張らせて、エヒメさんは叫んだ。

「ジエノスさん！ 後ろ!!」

俺の腕がもがれ、床を抉りながら壁に体を叩き付けられたのは、同時だった。

怪人は俺に殴られ、焼かれ、その所為で大穴の開いた顔で言う。

「キレたわ。グチャグチャにしてあげる」

「また油断……。俺も学習が下手だな」

自嘲を呟く。いや、これは学習が下手というより自業自得だろう。戦いに来ておいて、何を浮かれていたんだ俺は。

……杖になると約束したくせに、俺はさっそく彼女を不安にさせ、心配させた。

だから、これ以上彼女を悲しませないためにも俺は立ち上がり、叫んだ。

「シエルターから逃げ出せる者は、今すぐ行け！」

俺が奴の相手をしているうちに行け！」

大丈夫だと証明するために、体を起き上がらせて立ち上がる。

今だけは、人間扱いされたくなかった。

人間扱いされて悲しまれるより、サイボーグであった事で安心してほしい。

損傷は激しく、あの零距离焼却砲で仕留めていないのなら俺に勝てる保障などないが、それは口に出さない。

保証がなくとも、勝てなくても、俺は守り、救うと誓う。

「エヒメさん」

自分の言葉が遅くて間に合わなかったと自責する貴女に、伝える。

「いつてきます」

約束を交わす。

必ず帰ってくるから、貴女は安心して、信じて、安全な場所で待っていてほしいと。

……この半分砕かれた顔面が、上手く笑えていたかは俺にはわから

ない。

でも、彼女は自責と不安で歪みながらも、それでも笑ってくれた。わずかな安堵と、喜びを俺に伝えてくれた。

それだけで俺は、災害レベル鬼はもちろん、竜でも、例え本物の神が相手でも戦えた。

逃げる民衆を、怒り狂った怪人が追う。

その怪人の元に残された左腕で焼却砲をブースター代わりに放ち、飛び込む。

俺の蹴りと、怪人の拳がカウンターで入った。

そのまま、どちらも一瞬たりともひるまず即座に拳と蹴りの応酬を始める。

最初の一撃のダメージが残っているのか、怪人のパワーとスピードは俺と互角。

どちらも有効打を与えられず、それでも一瞬でも隙を見せればそこに一気に叩き込まれるのをわかっているのです、俺らは消耗するしかない無駄な攻撃ばかりを重ねる。

これでいい。俺の目的は、勝つことじゃない。

避難していた人々を、エヒメさんを逃がして、そして待てばいい。先生が、サイタマ先生が来るまでの時間を稼げたらそれでいい。

こいつに勝てなくても、手足がもがれても、生きて彼女の元に帰れたら、彼女が守り、救えたらそれだけで良かった。

そんなたった一人のヒーローでしかなかった、たった一人だけしか守っていないかった俺なんか、声援を送る少女がいた。

「が……、がんばれお兄ちゃん!!」

「うるさい。ガキは溶けてなさい」

その声が怪人の気に障り、奴は俺よりもその少女に向かって攻撃を仕掛けた。

強烈な酸<sup>す</sup>い匂い。

吐き出された液体が強力な酸性だという事は、瞬時に理解できた。

俺は、俺に声援を送ってくれた少女のヒーローではなかった。まったく別の人だけを想い、ただ自己満足で戦っていたにすぎなかった。



それでも、あの少女を守ろうと身を翻す。

この少女を守れなければ、どんな顔をして彼女に向き合えばいいかわからなかったから。

やはりどここまでも身勝手な理由で駆け寄るが、体の至る部分がショートを起こし、上手く動けない。

間に合わない。

そう思った瞬間。

少女の体を、エヒメさんが包み込んだ。

音もたてずにその空間に割り込んで、傷だらけの体で、庇う少女より大きいとはいえ、小さくか細い体で包み込み、溶解液から守る。

……ああ。俺は、最低だ。

自分に声援を送ってくれた少女では越えられなかった限界が、彼女ならば容易く、踏み越えることが出来た。

溶解液が二人に降りかかる前に、割って入ることが出来た。

この身体を盾に、守れた。

救えた。

それは、ヒーローとして最優で、最良で、最善の選択のはずだった。なのに、結果は最悪極まりない。

「——ジエノス、さん……」

少女を抱きしめ、俺を見上げたエヒメさんの顔は、絶望に染まっていた。

涙さえも、流せなかった

残されていた左腕が、落ちる。

外装だけではなく内部のパーツもほとんどが溶かされ、かろうじて脊椎部のみで体の上下が繋がっている有様だ。

それでも、良かった。

彼女が守れたのなら。

エヒメさんをこの溶解液から守れたのなら、それで良かった。

……たとえ彼女の顔が絶望に染まっていたとしても、一番近くで彼女が一番見たくなかったものを見せてしまったとしても、身勝手な俺は思う。

貴女が無事で、良かったと。

「……にげっ……！」

幸いながら損傷しなかった声帯で逃げることを、離れることを懇願するが、最後まで言い切れず俺は、怪人に頭を鷲掴みされ、壁に叩き付けられ、さらに追い打ちで殴りつけられて壁を破ってそのまま外に放り出される。

そこまでされても、俺は安堵していた。

怪人の怒りや関心が完全に俺に集中していたこと、俺以外の人間は眼中になかったこと。

エヒメさんが襲われなかったことに、ただ安堵していた。

安堵しながら、破損し、損傷し、ショートしているパーツの悲鳴を無視して、体を動かさそうとする。

立ち上がろうと、足掻いた。

約束をしたから。

必ず帰ると約束をしたから。杖になると、俺は言ったんだ。

甘えていいですか？ と彼女は泣きながら笑ったんだ。

だから俺は、どれだけ傷ついても帰らなくてはならないんだ！

「あなた一人ならあんな溶解液かわすくらい、簡単だったでしょうね。

まさか、ガキをかばって自滅するなんて私も考えつかなかったわ」

怪人が嘲笑う言葉に、俺自身も笑えてきた。

庇ったのは、俺を応援してくれた少女じゃない。俺はその子を守れなかった。

その子を守ろうとした、尊い人をただ守りたかっただけだ。

そして……今も……。

「あなたはバカだけど、私に軽傷を負わせたことは高く評価するわ。

もう治ったけどね」

怪人の言葉などもう聞こえていない。

ただ俺は、内部が焼ける熱を吐き出しながら、立ち上がる。足掻く。

俺が無理をすればするほど、露出したパーツが火花を散らせてさらに痛む。

もう俺は動くことすらままならない身体であることくらい、わかっている。

けど、まだだ。

まだ死ねない。まだ終われない。まだ、諦められない。

自爆だつてできない。

それは、彼女との約束を先ほど以上の最悪で破る行為だ。

「死ね」

それだけは、出来ない。

なのに、俺が出来た足掻きはただ俺を見下ろす怪人を睨み付けることだけだった。

——彼女を、エヒメさんのすることを、ただ見ているだけしか出来なかった。

\* \* \*

「死ね」と俺に宣言した直後、怪人は自分の真上が陰った事を不審に思いい、いや、不審に思うことよりも早くただの反射で見上げたのかもしれない。

見上げた瞬間、貫かれた。

俺を見下ろし、嘲笑っていた眼が、左目が、シエルターの壁を補強するのに使われていたであろう鉄棒で、深々と。

小柄とは言え、女性とはいえ、全体重と重力が鉄棒一点に集中して、眼球に深々と一気に突き刺さったのを、見た。

エヒメさんが、怪人の眼球を貫いた。

「あああああつっつっ!!」

絶叫を上げ、怪人は腕を振り回して暴れる。

その振り回した腕が重力に従って落ちるしかないエヒメさんに当たり、彼女はアスファルトの地面に叩き付けられた。

「エヒメさんっ!!」

俺の叫びよりも、早かった。彼女が立ち上がり、そして駆け出すのは。

立ち上がって、雨と泥ともはや怪人のものか自分のものかもわからない血にまみれて、何度も転びながら、それでも一瞬たりとも立ち止まらず、まっすぐに俺に向って来た。

「ジエノスさん!!」

泣きながら、俺を呼んだ。

約束を守ってくれないで、安全なところで待つてくれないで、俺の元に、一番危険な方法でやって来た。

……文句など言う資格はない。

約束しておいて、俺は彼女の目の前で最悪の結果を見せたのだから。

彼女がまた来てくれたことに喜びを感じている俺には、彼女の無謀に何かを言う資格などない。

彼女を誰よりも何よりも守りたかったのに、彼女は来た。

テレポートも出来ずに追い詰められていたのに、怯えてただ泣いていた彼女が泣きながら、さつき以上にボロボロになって、傷ついて、傷つけて、それでも、俺の元に走り寄ってきてくれた。

俺を守るために、怪人にあんな危ない方法で攻撃してくれた。

そして今は、俺を救おうとしている。

あの、巨大隕石の時のように。

俺に、彼女が手を伸ばす。

焼却砲の余熱などとは比べ物にはならない、怪人の溶解液にまみれたこの身体を、その溶解液によって破損して火花が散る、内部の熱が剥き出しのこの身体にためらいなく手を伸ばし……

俺を、抱きしめた。

「!? エヒメさん!! ダメだ! 離せ!!」

彼女の手が、体が焼ける最悪の音が聞こえても、俺は彼女のか細い体を引き離す術は失われていた。

何もできず、ただ俺は歯を食いしばって激痛に耐える彼女に、抱きしめられるしかなかった。

両手が灼けてもその腕かいなは俺を手放そうとはせず、彼女は一瞬だけ目を伏せて、そして見開く。

一瞬の浮遊感。

そう多く体験はしてないが、これは彼女が行うテレポートが始まる瞬間の感覚であることを知っている。

この浮遊感に身をゆだねる以外、できなかつた。

「!?」

だが、その浮遊感が途中で邪魔されたかのように、叩き落とされる。場所は、変わっていない。

俺が怪人に殴り飛ばされて、放り出された場所から数センチも動いていない。

動かないまま、エヒメさんの腕の力が抜ける。

酸に、熱に焼かれても俺を抱きしめていた腕が、体が弛緩して、目から光が消える。

「…………エ…………ヒメ…………さん?」

俺の呟いた言葉に反応したかどうかとも怪しい、謔言のようなかすかな声が聞こえた。

「……………こんな……………ところで……………限、界……………?」

「エヒメさん!?!」

ぐらりと傾いた身体を、俺は支えてやることさえも叶わない。

その身体が、怪人の腕に浚われても、俺にできたのはただ叫ぶだけだった。

「!? やめろー! やめてくれ!!」

無様にただ縋って懇願する以外、俺は何もできなかつた。

「やってくれたわねええっ!! 小娘えええっ!!」

鉄棒を抜き出してもまだ治っていないのか、血涙を流しながら怪人は俺の叫びすらも聞こえていないほどに怒り狂い、エヒメさんの体を人形のように掴み、高々と掲げる。

骨の折れる音が聞こえても、怪人の腕の中の彼女はピクリとも動かない。

もうすでに生きているのかさえもわからない彼女を怪人が怒りのままに、渾身の力を込めて地面に叩き付け、彼女を人の面影すら残さず破壊しつくそうとしているのに、俺はただやめてくれと懇願する以外、何もできやしなかった。

涙さえも、流せなかった。

やめろ。

やめてくれ。頼むから、やめてくれ。

その人がいないと、俺はもう自分がどうやって今まで生きていたかどうか、どうやって自分が立っていたのかもわからないんだ。

彼女がいないと、もう息の仕方さえもわからない。

貴女がいないと、生きていけないんだ！

誰か、助けてくれ!!

「ジャステイスクラッシュユ！」

## 憧れは夢に、夢は現在に

昔、中学生になったばっかりの頃、迷子の女の子と出会った。

「お兄ちゃんが、見つからないの」

そう言つて泣く女の子と手を繋いで、その子のお兄ちゃんを探したことがあった。

それが、僕の「憧れ」が「叶えたい夢」になった日の事。

「ヒーローになりたい」と思った、きっかけだ。

\* \* \*

そんな昔のことを、ふと思い出す。

思い出す要素なんて、この場のどこにもない。

余計なことを考えてる余裕なんてない。

目の前には災害レベル鬼の怪人が、ぐったりとした女の子を今にも地面に叩き付けようとしている。

怪人の足元には、明らかに僕より強そうなサイボーグさんが、両手どころかかろうじて体が上下繋がっているような状態で倒れている。

怪人の背後のシエルターには、まだ多くの市民が逃げられずに残っている。

僕では適わない相手だつてことは、協会に言われなくつたつてわかつてる。

わかつてる。わかつてるよ！

でも、それでも俺は、ここで立ち向かわなくつちやいけないんだ！

「正義の自転車乗り、無免ライダー参上!!!」

俺は、ヒーローなんだから!!

\* \* \*

校門前で、真新しいランドセルを重そうに背負った女の子が、怯えるようにそこにいた。

僕は自転車から降りてその子にどうしたのかを訊いたら、「お兄ちゃんと一緒に帰る約束してたの。……でも、お兄ちゃん、いないの。

4時になったら、校門で待ってるつて言つてたのに……。」と言つて、泣き出した。

僕には妹なんていないから、6歳も年の離れた女の子なんて親戚にもいないから、どう接したらいいか焦って困ったことをよく覚えている。

何とか宥めて泣き止ませて、それから僕はその子と手を繋いで、中学校の校舎に戻った。

お兄ちゃんはきつとちよつとした用事で、まだ学校に残ってるんだよって説得して泣き止ませたから、僕はその子と一緒に校舎内を歩き回って探した。

その子のお兄ちゃんを、一緒に探した。

けど、校舎内はもちろん体育館やその裏、グラウンドの隅々まで探したのに、その子のお兄ちゃんは見つからなくて、また女の子は泣きそうになってた。

泣きそうだっただけで、泣かなかった。

僕に迷惑をかけるのを嫌がるように、小さな唇を噛みしめて、スカートのを握りしめて、泣くのを我慢していた。

だから僕は、その子に言ったんだ。

きつと入れ違いになっちゃって、今頃校門に君がないのを心配して探してる。

学校の外も、探してみよう。

そう言っつて、僕はその子のお兄ちゃんを探し続けた。

心細さを必死に押し込めて我慢して泣かなかったその子が、逆に痛々しくて見ていられなかった。

どうしても僕は、その子をお兄ちゃんに会わせてあげたかった。

その子を、助けたかったんだ。

\* \* \*

殴り掛かった拳を簡単に受け止められ、そのまま掴まれて2回、地面におもちやのように叩き付けられる。

そしてそのまま、ゴミのように投げ捨てられる。

僕を投げ捨てた後、怪人は僕の方を見向きもしないで、僕を振り回しても離さなかった女の子に、ニヤニヤした笑いと気持ち悪い声で話しかける。



「あー、ごめんね。トドメ差すのが遅れて」

右手はパンチを受け止められて掴まれて振り回されたせいで、完全に折れていた。

でも、それは俺が動かない理由になんかならない。

「ジャ……ジャステイス、タツクル……」

させない。

絶対に、その子を殺させはしない。

その子はもちろん、そこに倒れているサイボーグさんも、シエルターに残された人たちも、誰もかれも絶対に、お前に殺させはしない！！

「期待されていないのは、わかってるんだ」

僕のタツクルなんて、怪人は小蠅が止まっただくらいにしか感じていない。

その証拠に、僕はまた簡単に振り払われて、無様に吹っ飛び、倒れる。

それでも、叫ぶ。

諦めない、と。

C級ヒーローなんて、ちよつとケンカが強い一般人レベルだつてこれくらい、1位つて言つても僕はちよつとした親切の積み重ねのおかげで昇格できたんだから、戦いに向かない、B級じゃ通用しないつてことは、僕自身が一番よくわかってる。

そうだ。そもそも僕は昔から喧嘩に弱くて、争いごとに向かないつてことはわかってた。

それでも、僕は「ヒーロー」になりたいつて思つたんだ。

ただの憧れを、自分の夢にしたんだ。

あの日、あの子と、あの子のお兄ちゃんがきっかけで。

……あの子のお兄ちゃんを見つけたのは、3時間後。

僕が諦めかけて、あの子からも「もういいよ。ごめんね、自転車のお兄ちゃん」つて気を遣われて、その子を家に送つてやつてる時だった。

僕と同じ中学の制服を着た男の子が、鬼のような形相で汗だく

なつて走っていた。

女の子はその男の子を見た瞬間、目に溜めてた涙を溢れさせて、僕の手を離して駆け寄った。

「お兄ちゃん!!」と、とても嬉しそうに。

そのお兄ちゃんも女の子の姿を見た瞬間、ものすごく真剣だった顔が安心したように緩んで、妹の名前を呼んで抱きしめてた。

……実は、僕がやったことは何の意味もなかった。

その兄妹は互いに約束を勘違いしていて、お兄ちゃんは小学校に迎えに行くつもりで、妹は中学校で待ち合わせだと思いつ込んでいた。

お兄ちゃんの方はその勘違いにすぐ気付いて中学校まで戻ったのに、僕がその子のお兄ちゃんを探してやると言って校舎の中に入っちゃつてたから、お兄ちゃんは妹がどこにもいないと思つて心配して、町中を走り回つて探していた。

僕があの子に話しかけなかったら、余計なことをしなかったら、二人はもっと早くにちゃんと会えた。

僕は余計なことをしたから、女の子を不安がらせて、お兄ちゃんには心配ばかりをかけたという事実には、感謝や見返りが欲しかった訳じゃないけどさすがに凹んだ。

……でも、二人は言つてくれたんだ。

責められてもおかしくなかったのに、あの兄妹は俺に言つてくれたんだ。

お兄ちゃんの方に訳を話して謝ったら、きよとんとした顔で「何で謝るんだ?」つて言われた。

意味のないことをして迷惑と心配をかけたと僕が言えば、やっぱりきよとんとした顔で、何気ないことのように言つたんだ。

「お前がいたから、こいつは怪人とかに襲われたり変な奴に攫われたりもしなかったし、何よりお前と一緒にいてくれたから、寂しくなかったんだ。

無意味なんかじゃねーよ。助かった。ありがとな」

そう言つて、汗だくのまま笑つた。

女の子はまだ泣いたままだつたけど、僕を見上げて、笑つて言つて

くれたんだ。

「自転車のお兄ちゃん。お兄ちゃんを探してくれて、一緒にいてくれてありがとう」って。

あの二人が、言ってくれたんだ。

無意味じゃないって。

意味はあったって。

「勝てる勝てないじゃなくて」

助かったって、言ってくれたんだ。

ありがとうって、笑ってくれたんだ。

「ここで俺はお前に立ち向かわなくちゃいけないんだ！」

何かをしようと思ったこと、実行したことに価値がある。

それは結果としては余計なお世話だったとしても、無意味じゃない。  
い。

あの子が無事だったのは、僕のおかげだと言ってくれたんだ。

その二人の言葉に、僕はヒーローの本分を見た。

悪に勝つとか、怪人を倒すとか、そういうのじゃない。

何かを守って、誰かを救う。

そういう人間に、僕はなりたいてって思った。

憧れが、夢へと変わったんだ。

「頑張れええええええ！」

無免ライダー、頑張ってくれええええ!!」

……ほら。

無意味なんかじゃない。

僕が時間を稼げば、きつと強力なヒーローがやってくる。

僕はそれまで、皆を守れたらいい。

皆の希望になっていたら、いい。

それだけで、いいんだ。

「ぬうおおおおおおあああああ!!」

僕は、僕を、俺を応援してくれる人たちの希望が潰えないように、消えないように、立っていないといけない。

立ち向かわなくちゃいけない。

なのに、怪人の一撃を頭に受け、視界がぐるっと一蹴した。

「無駄でしたあ♥」

無駄じゃない。まだ、まだだ。まだ俺は、僕は、立たなくちゃ、戦わなくちゃいけない。

諦めたら、いけないんだ。

「よくやった。ナイスファイト」

僕の意思を無視して力が抜ける全身を、誰かが支えてそう言った。頭上から聞こえる声は、どこか懐かしい。

僕は知らなかった。

僕はこの日、あの日の兄弟に、僕に夢をくれたきっかけと、再会していたことを。

そして、これからも知らない。

僕たちは、知らないまま、互いに気付かないまま、友達になる。同じ夢を抱いて、そして叶えたもの同士、友達になる。

## 雨が止まない

自分の力量を理解したうえで、どれだけ絶望的な状況かを理解したうえで、命を懸けて怪人に立ち向かったヒーローに先生は称賛を送る。

「お、おいジエノスー！ おま……、生きてんのか、それ?!」

先生は自分と同じ信念を持つ、エヒメさんの定義に正しいヒーローをその場に寝かせ、俺の無様さを嘆くでも叱るでもなく、まずは心配をしてくれた。

どこまでも優しい人だが、今は俺なんか無視してくれたらいい。

貴方の妹を、大事な人を、俺にとつてもはや命そのものである人を守れなかった俺なんか、案じてもらえる価値なんてない。

「先……生……、俺、より……エ……ヒメ……さんを……」

雨のせいで露出したパーツの損傷がさらに激しくなり、もう人口声帯すらもろくに働かない。

それでも、俺は言った。

俺に出来ることなんて、それしかなかった。

「まあ、ちよつと待ってろ」

先生は俺の言葉が聞こえているのか、そもそもエヒメさんが今どういう状況なのかわかつているかも怪しい、いつも通りの覇気のない声で答える。

「いま海珍族とやらをぶつ飛ばすからな」

「聞こえてるのよー」

先生の言い間違いか覚え間違いかそれともわざとか判別がつかない言葉に、怪人は怒りの拳をぶつける。

しかし、先生の体は倒れるどころか揺れもせず、巨大な岩石……いや岩山のごとくただそこに立っていた。

立って、そのまま首をわずかに動かして、怪人を睨み付ける。

……ああ。

俺たちをいくら苦しめ、苦戦させても、この怪人は所詮魚類でしかないと思ひ知った。

あまりに、愚かだ。

この場に満ちるこの威圧感、絶対的な圧迫感、諦めるしかない絶望に気付いていないなんて。

先生の殺気に、気付いていないなんて。

\* \* \*

振り返った先生は、怪人が未だに人形のように掴んでいる、ぐったりとして先ほどから全く何の反応を見せないエヒメさんに視線を向け、ただ一言だけ呟いた。

「バカか」

怒っているようにも、悔やんでいるようにも、苛立っているようにも聞こえる声。

そのどれであつても、それは些細な一時の感情でしかないと思わせるほど、表に出てきた先生の感情の揺らぎはわずかなものだった。

だが、殺気はあきらかに、さらに膨れ上がる。

その殺気に俺は怯み、慄く。

つい今さつきまで、先生がC級であることで自分たちの助けになるのかどうか怪しんでいた人々も、わからないなりに何かを感じたのか、急に静かになった。

わかっていないのは、怪人だけだった。

後になって思えば、もしかしたら怪人はわかっていたからこそ、目を背けてわからないフリをしていたのかもしれない。

生命として警報で、わずかでも死の恐怖から回避しようと足掻いていただけかもしれない。

この絶対的絶望である殺気が全て自分に向けられているという恐怖から逃げて、逃げていることすら気付かないまま、怪人は語る。

自分は深海王。万物の源である海の王。

自分こそが全生態系ピラミッドの頂点に立つ存在だという戯言を、語った。

もはや茶番以外の何物でもないことを語る怪人に、先生は面倒くさそうに答える。

「うんうん、わかったわかった。雨降ってるから、早くかかって来い。」

……つていうか、お前が持つてるそれ、アホで鈍感で怖がりのくせに意地っ張りで面倒くさいバカだけど、俺の妹なんだよ。さっさと離せ」

怪人は気だるげな先生の対応にまた顔を引き攣らせたが、「妹」という単語に反応して、醜悪に笑う。

「あら、今なんて言ったのかしら？ このゴミを握り潰して捨てろって言ったのかしら？」

自分の立場をわかっていない、恐怖への逃避で現状に気付いていない怪人は、顔を愉悦に歪めながらエヒメさんを掴む手の力を込める。その前に、赤い手袋に包まれた手がその拳に触れる。

「――離せよ」

怪人は、その手の内にある人が目の前の人間の「弱点」ではなく、「逆鱗」であることに気付けなかった。

ぷつんと、茎から葉を雀る程度の軽い音だった。

エヒメさんごと、怪人の剛腕を先生がもぎ取った音は。

「あ？」

自分の腕が消失してるという事態も、怪人は認識できなかった。

先生は怪人の反応なんか無視してもぎ取った腕をエヒメさんから引き離し、自分の腕の中にしっかりと抱え込む。

「あ……あああああ!!」

よ、よくも私の腕をおおおおおっ!!」

そこらじゅうの建物のガラスを割るほどの絶叫を、腕をもぎ取られて数秒の間をあけて放ちながら、雨によって膨張して真の姿を現した怪人は、残された腕を振りかぶって全力で先生とエヒメさんに殴り掛かる。

しかし、その拳が振り落とされる前に、先生はエヒメさんを抱きかかえたまま軽く怪人の足にローキックを入れる。

ローキックと言うより、足を当てたと言った方が正しいくらい小さな軽い動きだったにも拘らず、怪人の足はもぎ取られた腕と同じく

らい簡単に切断され、跳ね上げられた。

「え？」

やはり怪人は、腕と同じく現状に気付かない。

片足を失い、バランスが崩れて宙に浮き、無様に転倒するしかない現状に。

けれど、それも先生が許さない。

もう奴が生きる猶予は数秒たりとも、許さない。

片手でしつかり、決して落とさないように、傷つかないように、エヒメさんを、妹を抱きしめて、守つて、先生は宙に浮かんで自分たちの方に倒れこむ怪人の腹めがけて拳を振り上げた。

ズパンっ！ と、軽いような、重いような音が響くと同時に、怪人の腹が抉られる。

先生は、怪人の真下にいたというのに返り血を浴びていない。

円状に怪人の抉られた臓物が飛び散るが、どう見ても怪人の体積には足りない。あらかたが先生の一撃の衝撃で、吹き飛ぶどころか消滅したらしい。

空には厚い雲が一部、綺麗に丸い穴が開き、晴れ間を見せる。

……空に向けての一撃で良かった。あれを地上で放っていたら、その直線距離上にある建物の大半が消し飛んでいただろう。

きつと奴は知らない。

こんな死を迎えても、こんな一撃を喰らっても、これは先生にとつて本気でなかったことなど知らないまま、死んだ。

先生が怪人に拳を振るつた瞬間、確かに殺気が薄まったことに気付いた。

それは怪人に対する慈悲でも何でもなく、ただ先生の本気の余波が抱きかかえているエヒメさんに及ばない為に過ぎないことを、俺は知っている。

腕や足をもぎ取つたのは拷問でも甚振る為でもなく、エヒメさんを傷つけられた怒りで周りの被害を考えない一撃を与えないようにするための手加減が上手くできず、いつもよりむしろ加減をしすぎてしまった結果だろう。



どんなに怒りが胸の内が満ちていても、先生は守るべきものを、救うべき人を見失わない。

この人こそ、本物の「ヒーロー」であることを、改めて思い知る。

\* \* \*

「先生……エヒメ……さんは……」

「大丈夫だ。気絶してるだけだ」

俺の問いに、先生は困ったような曖昧な笑みを浮かべて答えてくれた。

……俺は責められるべきなのに、先生は何も言わない。

エヒメさんを守るどころか、その両腕に痛々しい火傷を負わせて、無免ライダーや先生が一秒でも遅れたら、無残という言葉すら優しい殺され方をされても、見ているだけしか出来なかった無様な俺は責められるべきなのに、先生は何も言わず腕の中のエヒメさんに呟く。

「お前な、俺に80年は生きろって言うておいて、自分はさっさと死ぬ気か？」

ふざけんなよ。俺が約束したんだから、お前だつてせめて同じくらい生きろ」

ぐったりとして何の反応も示さないエヒメさんにそう言うて先生は叱りながら、俺に何かを話しかけようとして気付く。

先生が怪人を倒したことで沸き上がっていた歓声が、たった一人の何も知らない口先だけの人間の言葉で、助かった喜びや先生への感謝に満ちていた雰囲気とその人間に対する怒りと、太刀打ちできなかった無様な俺たちに対する非難と同情に変化していることに。

……俺の事だけなら、良かった。俺は実際に何もできなかった。守りたかった、たった一人すらあんなにも傷つけた。

俺が無能と言われるのは、当然だ。

俺が来る前に戦っていた他のヒーローのことは、何も知らないのだからは何も言えない。

けれど、「命を張るだけなら、誰でも出来る」と、「時間稼ぎなんて工夫すれば誰でも出来る」という言葉は、許せなかった。

それは、エヒメさんと無免ライダーの全てを否定する言葉だ。

彼女や彼と同じように、命を張って前に出て時間を稼いだ人間が言うのならともかく、ただ安全な場所で守られるのが当然と思つて何もしなかつた輩が言つていい言葉じゃない！

お前らには、出来るのか!?

逃げ出せる術があつても、その逃げる術を誰かを助けるために使えるのか!?

その逃げる術さえ怯えて使えなくなるような相手に、覚悟を決めて立ち向かうことも、自分が激痛に苛まれながらも誰かを助けようとすることを、「誰でも出来る」と言うのか!?

自分の弱さを理解して、その弱さに言い訳をせずに真正面から強敵に向き合つて、命を懸けて希望の明かりを灯し続け、守り続けることが、お前らにはできるのか!?

「あつはつはつはつはつはつは。」

いやー、ラッキーだった。他のヒーローとかこいつが怪人の体力奪つててくれたおかげで、スゲー楽に倒せたぜ。

遅れてきてよかつた。俺、何もやってないのに手柄独り占めにできたぜ。

自分の感情のまま、子供の駄々のように怒鳴り散らしたかつた言葉は、先生の飄々とした声にかき消された。

……先生は、あの隕石の件で被つた泥を利用して、他のヒーローの名誉を守つた。

むしろこれを機に隕石の件の汚名を今度こそ晴らしても良かったのに、晴らせたはずなのに、先生は何の役にも立っていなかった、それこそ先生が来るまでの時間稼ぎしか出来なかつた俺たち全員の名誉を、守つた。

自分の意味と価値を貶めてでも、俺たちの意味と価値を守つた。

自分が、「妹さえも利用した」という最悪の汚名を被つて、俺たちを救いあげた。

——先生。

こんなところまで、「ヒーロー」を貫かないでください。

俺は貴方にここまでして守られる価値があるとは、自分では思えな

い。

俺は、貴方のような「ヒーロー」にはなれない。

俺は、先生はもちろん、エヒメさんや無免ライダーのしたことまで貶めて嘲笑う大衆なんか、守りたいとも救いたいとも思えない。

こんなにも醜いものを守らなくてはならないのかと、嘆きたくなる。

……それでも、貴方がそれでいいのなら、それが先生の進む道ならば、俺はその尊い生き様を否定などできない。

けれど、それでも願ってしまうんです。

貴方にも、救いを、と。

「……………お兄ちゃん」

ピクリと、焼けただれた手が、確かに動いた。

## 晴天への言葉

……悔しいなあ。

結局、何にもできないなんて。

あのヒーローさん達の犠牲では、怖気ついて怯んで臆病風を吹かせて、覚悟が決められないで、やっぱり逃げることしか出来なかったのに、ジエノスさんが危ないって思ったら、あんなにも簡単に覚悟を決められた自分が恥ずかしい。

自分を助けようとしてくれた人でも、結局「どうでもいい他人」と分類している自分のすきんだ心が、何よりも恥ずかしい。

そんな恥ずかしくて、自己嫌悪で死にたくなって、刺し貫いたあの眼球の感触が気持ち悪くて、何もかも嫌になりそうだったけど、……それでも、あの人だけは助けたかったのになあ。

決して、「どうでもいい」訳がない、大切な人。

ちよつと過大評価と勘違いが入ってるけど、お兄ちゃんを正当に評価して、憧れて、慕ってくれる人。

お兄ちゃんの虚しさを、お兄ちゃんの求める形ではないけど、埋めてくれそうな人。

私と同じ、お兄ちゃんが大好きで、そしてお兄ちゃんのように真っ直ぐな、とても尊い人を、……ジエノスさんを守れると思ったのに、それなのに、あのタイミングで限界だなんて……

エゴイストな私は、最低な後悔をする。

ステインガーさんやイナズマックスさんを保護しなきゃ良かったと、考えた。

……でも、あの女の子を庇うためのテレポートには、後悔はない。あの子を助けなければ私は、この先ずつとジエノスさんにどんな顔をして付き合えばいいのかわからなかったから。

助ける術を持っていたくせに、逃げないと誓ったくせに、あの子を庇わなければ私は、それこそ何のために生きているのかさえもわからなくなるから。

ただ、それだけの為に、自分の為に助けた。

……その結果が、ジェノスさんとの約束を、「安全なところで必ず帰ってくる」と信じて待つ」を破つて、ジェノスさんに心配と迷惑をかけた。

せつかく優勢ではなかったけど、決して不利じゃない戦いだつたのに、ジェノスさんは女の子と私を庇つて、体の大半を溶かされた。

だから……だから私は、例え腕が焼け落ちてても、あの人を守らなくっちゃいけないかったのに。

あの人が負った傷は、本来私が負うはずの痛みだつたのに。

なのに……それなのに……

「やってくれたわねええっ!! 小娘えええっ!!」

怪人が叫んで、私の胴体を軽々掴みあげた。その握力であばらが折れたのはわかつたけど、腕の熱さで痛みがよくわからない。

何より、体が全然動かないし、頭も全然働かない。

もっと何かしなくちゃいけないことがあるのに、考えなくちゃいけないことがあるのに、私はただ後悔しかしていない。

何もできない自分を責めて、私は殻の中に引きこもる。

自分を守るわけでもない、ただ自分で自分をさらに傷つける、後悔と自己嫌悪の殻の中に。

\* \* \*

「俺がB級じゃ通用しない、自分が弱いってことは、ちゃんとわかつてるんだ!」

後悔と自己嫌悪の殻に、かすかなひび割れが出来る。

そのひび割れから、声が聞こえる。

悲痛な、自分の弱さを嘆く、自分の無力さを悔やむ声が、聞こえてくる。

その声で、気付く。

自分がまだ、生きているということに。

どうして、怪人がまだ私を叩き潰していないのか、疑問に持つ。

殻のひび割れが増える。

声が聞こえる。

誰かが、痛みに耐えながら叫んでいるのが見える。

「俺がお前に勝てないなんてことは、俺が一番よくわかってるんだよおツ……!!」

痛みを耐えながら、それでも真つ直ぐに、何も諦めていない、何も終わらせないと誓い、逃げずにそこに立つ人がいた。

「それでも、やるしか、ないんだ！」

俺しかないんだ！」

何もできない、自分が傷つくだけでも、それでも立ち向かい、私を、ジエノスさんを、シエルターに取り残された人たちを守ろうと、救おうとしている人がいた。

「勝てる勝てないじゃなくて、ここで俺はお前に立ち向かわなくっちゃいけないんだ！」

例え目の前の敵に勝てなくても、何かを守って、誰かを救う人がいた。

ヒーローが、いた。

……殻が、破られる。

これはきつと、私の都合のいい解釈。

ただの自己肯定でしかないことくらい、わかっている。

でも、……それでも、……私のしたことの意味はあった、……価値はあったと、言ってくれたような気がした。

誓いが輝きを取り戻す。

逃げるなど、私の中の私が言う。

だから私はもう一度、何かをしようと、何ができるかさえもわからないけど、たとえ自分の為でしかないとしても、私は守りたかった。救いたかった。

私の大切な人を、今は何とも思っただけでも、未来では大切になるかもしれない人を、私に絶望を教え、同時にいつも希望をくれる「人間」に、何かをしたかった。

けれど、私の身体は動かない。

ねえ、動いてよ。動いてよ!!

私だって、立ち向かわなくっちゃいけないんだから!

弱い私に、私は立ち向かわなくっちゃならないんだから!!

「よくやった。ナイسفアイト」

——その言葉は、私に向けられたものなんかじゃないことはわかっている。

でも、バカな私は、身勝手な私は、やっぱり自分の都合のいいように解釈する。

そして実際、もう私にすることなんて何もない。

「うんうん、わかったわかった。雨降ってるから、早くかかって来い。

……っていうか、お前が持つてるそれ、アホで鈍感で怖がりのくせに意地っ張りで面倒くさいバカだけど、俺の妹なんだよ。さつさと離せ」

……ごめんね、お兄ちゃん。本当にバカで迷惑と心配ばかりかける、面倒くさい妹で。

\* \* \*

「離せよ」

その一言と同時に、一瞬こもった力は抜ける。

私を掴み、握り、締め上げ続けていたぬるぬるとした気持ち悪い手が離れ、この世で一番安心できる腕の中に、私の身体は納まった。

まだ、体は動かない。腕の熱さもどこか、他人事のようにしか感じない。

でも、私を守るように、決して離れないように、しっかりと力強く、それでも優しく抱きしめる腕だけは感じ取れる。

その腕のぬくもりを感じながら、お兄ちゃんの軽い一撃が放つ、低くて重い音を聞いた。

すべてが終わる音を、聞いていた。

すべてが終わっても、私の身体が動かない。

お兄ちゃんにごめんも、助けてくれてありがとうも、言えない。

私にその時できたのは、今閉じたら今度はいつ開くかもわからないくらい重い瞼を、ただ閉ざさないようにするだけで、精一杯。

そんな死体同然な私を見下ろして、お兄ちゃんは私を叱る。

「お前な、俺に80年は生きろって言うておいて、自分はさつさと死ぬ気か？」

ふぎけんなよ。俺が約束したんだから、お前だってせめて同じくらい生きろ」

……うん。そうだね。ごめんね。

お兄ちゃんが約束してくれたんだから、守るよ。

私だって、生きるよ。

その約束からも、絶対に逃げない。

そう誓いながら、私の意識が薄れていく。

瞼を閉ざさないでおくことも、もう限界だった。

……なのに、耳は閉ざすことが出来ないから、だから、聞きたくない声が聞こえた。

お兄ちゃんのしたことを軽々しく扱い、ジェノスさんや、お兄ちゃんが称賛した人、他のヒーローさん達のしたことを、「誰でも出来る」と言う声が、聞こえた。

そう喚くバカを周りは非難するけど、その非難している連中だって似たようなことを考えていたのは、透けて見える。

他のヒーローは活躍できなかった？

お前たちは、何を見てたの？

あの怪人に立ち向かったのは、お前らには活躍じゃなかったの？

それがなければ今頃、ここは死体の山が出来ていたこと、それを防いだことは、活躍じゃないの？

誰でも出来るのなら、どうしてお前たちは何もしなかったの？

そう言ってやりたかったのに、……この趣味だからこそ本気でいい、何の妥協もしない人は言う。

他のヒーローや私なんかのおかげで、自分は漁夫の利を得ただけだって。

……またワンパンで終わって、虚しさだけを抱えたくせに、得られたいはずの称賛を他人に渡して、お兄ちゃんは一人きりで「ヒーロー」を貫いた。

……お兄ちゃんの生き様は、尊いものだと思う。

けれど、私は肯定できないよ。

お兄ちゃんが幸せじゃないなら、私は庇われても嬉しくないよ。辛



いだけだよ。自分の無力さが嫌になるだけなんだよ。  
お兄ちゃんが救われないなら、私は救われないよ。

「……………お兄ちゃん」

まだ、意識を手放せない。

しなくちやいけないことが出来た。

私は、動かなかった体を、手を、遠ざかっていた痛みが蘇って、全身が悲鳴を上げるけど、それでも動かす。

涙じゃないことは、わかってる。

でも、いつそ泣いて。

その涙を拭うことくらい、私にだってできるから。

私は、お兄ちゃんの頬に指先を滑らせる。

涙のような雨のしずくを拭って、伝えた。

ごめんなさいよりも、ありがたうよりも、たとえ意味はなくとも、価値がなくとも、いつか何かの意味に、価値となる信じてる言葉を、伝える。

「お疲れさま」

それだけを伝えて、私の意識は途切れた。

最後に見えたのは、厚くて真つ黒な雲が丸く穴開いて、そこから見えた、目が痛くなるほどの青空だったことだけは、覚えてる。

その空によく似た、お兄ちゃんの笑顔は、現実か私の願望だったのかは、わからない。

## 入院生活編

### ただいま、日常

昨日のうちに、覚悟はしてた。

お兄ちゃんに、「ジェノスの身体がやっと治ったら嬉しいから、明日来るって」と言われた時から、明日の朝起きたらその直後にジェノスさんが土下座で私に謝ることを。

でも、起きた時すでにオブジェのように土下座で待ち構えてるのは、予測も覚悟もしてなかったな！

「ジェノスさん、とりあえず土下座を今すぐやめて!!」

ジェノスさんの謝罪の言葉を聞く前に、病室のベッドの上でまず叫んだ。

「だから言っただろ、逆効果だって。エヒメも良かったな。ここが個室で」

横でお兄ちゃんが椅子に座って、朝食らしいバナナを食べながら言う。

ああ、お兄ちゃんは止めてくれてたんだね。止めてよ！ と思って睨んじゃってごめん。

そして本当にその通りだよ。

個室じゃなくて大部屋で、他の人にもこの土下座オブジェを見られてたら、私は悪いけど間違いなく普段の言葉使いをかなぐり捨てて、「帰れよお前!!」ぐらい反射で言ってたわ。

「……エヒメさん。このたびは本当に……本当に申し訳ありません!!」

私とお兄ちゃんという言葉でとりあえず土下座はやめてくれたけど、ジェノスさんは今すぐ切腹でもしそうな顔で、堅苦しく謝る。

こっちは予想も覚悟もしていた反応なので、ここ2日ほどかけて行ったイメトレ通りに私は返す。

「ジェノスさん、気にしないでください。元々、私が全部自分で勝手にやった事ですし。」

それに、ヒーロー協会の厚意でこうやって入院して治療も受けてますから、大丈夫ですよ。火傷も、後遺症は残らないとお墨付きをもらいましたし」

言いながらあの長い1日、J市の海人族という怪人たちの襲撃からもう3日経つんだと、ちよつとだけ感慨深く思えた。

あの1日はすごく長かったのに、日常が戻るのは早いなあ。

あの日、レポートのキャパオーバーに加えてジェノスさんに抱き着いた際に負った火傷やら深海王って怪人に折られたあばらやらの治療で、私は入院。そしてそのまま、丸1日意識が戻らなかった。

意識が戻らなかったのはキャパオーバーの副作用であることをお兄ちゃんは知ってるし、同時に丸1日寝てたら回復するものだと学習してくれているのでそこは良かったんだけど、他の怪我でかなりの心配をかけたから、起きてすぐはかなり叱られた。

本当にごめんね、お兄ちゃん。

幸いながら折れたあばらは内臓に刺さるとかもなく、折れ方も綺麗だったらしくて手術の必要もなくコルセット巻いて安静にしてればいいだけだし、火傷も雨が降ってたおかげで冷やされていたからか、リハビリさえしつかりやれば後遺症の心配もないって断言してもらえた。

私の仕事と趣味が雑貨作り。手に後遺症は本気で死活問題だから、この断言はすごく嬉しかったなあ。

あと、私の怪我は私が怪人相手に時間稼ぎをしたり怪人に立ち向かったことが原因であること、そして私がレポートで一般市民やヒーローを保護していたことはヒーロー協会に知られているので、治療とかは協会が負担してくれることにもなった。

だから私は、うちの経済状況じゃとても無理な個室に入院させてもらってる。

他人が苦手だから個室は嬉しいけど、ちよつと広くて豪華すぎて落ち着かないのはぜいたくな悩みかな？

お兄ちゃんは、自分がここに住みたいとか言い出すし。

そんな感じで私としては特に問題なく、むしろ得してると言える状

況なんだけど、ジェノスさんはものすごく私の怪我に責任を感じてる。

それは、火傷の痕は残るだろうって言われちゃったことだろうなあ。

私としてはそれは別にどうでもいい部類の問題だったんだけど、ジェノスさんにとつては相当な大問題らしい。

たぶん「嫁入り前の女の子を傷ものにしてしまった」と、えらく古風なことを考えてるんだろうな。重いわ。

ジェノスさんは私の言葉に「しかし……」とか言つて自分を責めるけど、お兄ちゃんが「このアホが勝手にやった事なんだから、気にすんな。むしろ、もう2度とすんなって叱れ」と言われて、とりあえずこれ以上謝るのはやめてくれた。

「そーいや、エヒメ。今日、俺、協会に呼ばれてるんだけど、返事は『ねーよ』でいいんだな？」

「お兄ちゃん？ わかってると思うけど、その『ねーよ』はせめて敬語のオブラートに包んでね」

お兄ちゃんがふと思ひ出して尋ねる確認に、私は釘を刺しておく。この人は言っておかないと、本当に「ねーよ」と伝言する。私本人もそんな言い方してないんですけど！

「？ 返事？ 先生や俺じゃなくて、エヒメさんがヒーロー協会に何か言われたんですか？」

ジェノスさんが表情から申し訳なさを少しだけ消して、首を傾げる。

お兄ちゃん、言つてなかったんか。

「あー、なんかこいつ、あの海珍族の件と、そのちよつと前にうちの近所で怪人に襲われたA級ヒーローを、病院に連れて行ったのがあっただろ？」

その2つでなんか、協会がぜひともヒーローにとってスカウトされてるらしいんだ。特例、試験なしでS級にならないかってな

素なかわざとなのかナチュラルに怪人の種族名を間違えながらお兄ちゃんが説明すると、ジェノスさんが無表情になった。

なんか、キユインキユインって音が聞こえるし、怖いんですけどどうしたのジエノスさん？

「……それは、エヒメさんの治療費を出す交換条件ですか？」

「いや、これは今回の功績ってことで、スカウトを受けても受けなくともせひつて言われたから、素直に甘えてるだけだ」

ジエノスさんの質問にお兄ちゃんが返した答えで、ジエノスさんから聞こえてた不穏な音は止んで、表情も無表情のままだけど若干緩んだことにホツとする。

……そつか。私の怪我を盾に、無理やりヒーローにさせられるんじゃないかって、心配してくれてたんだ。

「大丈夫ですよ、ジエノスさん。そのあたりの事はちゃんと話を聞いて考えて、厚意に甘えさせてもらってますけど、ヒーローになる件はお断りさせてもらいましたから。」

お兄ちゃんに伝えてもらうのは、その最終確認です」

私も補足で答えると、やっとジエノスさんは少しだけ笑ってくれた。

「そうですか。……安心しました」

\* \* \*

お兄ちゃんが、「じゃ、俺は協会に行ってくるわ」と言って出て行ってしまい、私とジエノスさんが病室に取り残された。

ジエノスさんが隣に越してから、ううん、その前からほぼ毎日会ってたのに、いきなり3日開いたのは初めてなので、ちよつと気まずい。

とりあえず、立ちっぱなしのジエノスさんに座ってもらい、私はさっきの話を続ける。

「実は、ちよつとだけヒーローもいいかもって思っちゃったんですけどね。」

能力の特性上、戦闘じゃなくてサポート要員としてのスカウトでしたし、それに……ジエノスさんと同じ階級なら、他力本願ですけど心細くないかなって思っちゃいました」

これは本当。少しだけ、考えたこと。

お兄ちゃんより上の階級っていうのは、お兄ちゃんが気にしないで

ろうから気まづくはないけど、私自身がそんな階級に評価されるほどだとは思ってないから嫌だった。

でも、ジェノスさんがいるのなら……って、少し思った。学校のクラス替えとかじゃないんだからって、すぐに思ったけど。

「……俺は、貴女が思ってくれるほど頼りになどなりませんよ」

「ジェノスさん、それ以上あなた自身を悪く言ったら私、怒りますよ？」

ジェノスさんは薄まっていた罪悪感を再び深めて、自嘲と自責の言葉を吐くのを、私はやめるように釘を刺す。

「この火傷は、そもそもあなたが私とあの女の子を庇ってくれたから負ったものです。本来なら、私がジェノスさんみたいな状態になるはずだったんです。だから本当に気にしないでください。この程度で済んで良かったです。」

それに……、私はテレポートも出来ずに追い詰められた時、あなたが現れた時は本当に……嬉しかった。

だからあんまりジェノスさんを、私の大切に大好きな人を貶める発言は、たとえ本人でも許しませんよ」

ベッドから身を乗り出して、ジェノスさんの手を掴んで私は訴える。

この手は本当に大丈夫だって。

あなたは、頼りにならない訳がないと伝える。

「……………はい。……肝に……銘じます……」

「ジェノスさん、なんか煙出てますよ!!」

私の言いたいことが伝わったのはいいけど、またジェノスさんの頭からなんか煙出てきた!

懐かしいな、このやり取り! 懐かしんでる場合じゃないけど!!

ジェノスさんは大丈夫だと言い張り、実際に少し時間を置けば治まったけど本当に大丈夫かな?

けど本人が言い張るのなら、サイボーグに詳しくない私じゃ追求も出来ないのです、ちよつと無理があるけど話を戻す。

「えーと、どこまで話しましたっけ? ジェノスさんがいたら、心細く

ないってところまで話しましたよね？

そんな風に思つて、少し迷つたんですよ。……ランキング制度が凄く嫌いですけど、サポート要員ならランキングはあんまり関係ないですし、苦手を克服するいいチャンスとも思つたんですけど……」

「俺は、エヒメさんがヒーローにならなくて良かったと、心から思います」

珍しくジェノスさんが、話に割り込んで断言した。

彼は金色の瞳を私に真っ直ぐに向けて、語る。

私がヒーローにならなくて良かったと思う訳を、スカウトの話聞いた時、何であんなにも静かに怒つた様子を見せたのかを。

「協会がエヒメさんに望むのは十中八九、一般市民を安全な場所に避難させることや、ヒーローを速やかに災害地区に連れてゆくこと、もしくは今回のように負傷したヒーローの保護ではありません。

協会の上層部が、自分たちが速やかに逃げるための便利な移動手段として、貴女を飼育殺したいだけです。

いきなりS級認定が良い証拠でしょう。自分だけが可愛い上層部や富裕層の輩にとって、戦える者よりエヒメさんのような、安全地帯への移動手段を持つ者をどうしても手元に置きたかった。

だから、S級という名誉やそれによる恩恵をエサにして、貴女を籠の中に閉じ込めるつもりだったとしか、俺には思えません。

……隕石の件で、協会の腐敗は一端ですが見せつけられました。ヒーロー活動をする者はともかく、あの協会そのものにエヒメさんが語る『ヒーロー』はいません。

だから、俺は貴女がそんなスカウトを受けず、断つてくれて何より安心しました」

真っ直ぐに私を見据えて、そしてジェノスさんは穏やかに笑つてくれた。

……私は、同じことを思った。

私は協会を元から信用してないのもあって、スカウトされた時の内容を初めから疑っていた。

たぶん、本当に有事の時は今回みたいな何百、何千人の一般市民

じやなくて、たった数人を守ることを強要されるんだって思った。

それが、スカウトをオブラートに包まず言えば「ねーよ」で一蹴した理由。

……一蹴しておいてこれは「逃避」なのか、それとも間違いなく自分で決めた「行動」なのかがわからなくなつてまたちよつと自己嫌悪してたけど、それをこの人はお見通しだったみたい。

そっか。安心、してくれるんだ。

ある意味、協会の上層部を守るだけの方が今回みたいなのよりずっと危なっかしくないのに、それでもこの人は、私にヒーローになつて欲しくないって思ってくれるんだ。

ジェノスさんのさりげない優しさに、自己嫌悪で刺さっていた棘が抜け、胸の内が安堵で満たされる。

……この人は、私の杖になるつて言ったことを守ってくれていることが嬉しくて、自然に笑みがこぼれる。

「……ありがとう、ジェノスさん」

そう言つて礼を伝えてから、思い出す。

私はこの人との約束を、果たしてなかったことを。

安全な場所で、待つてなんかいなかった。

ジェノスさんに心配と迷惑をかけて、必要のない罪悪感を背負わせた。

それでも、この人は私の杖になると言つた約束を守ってくれたのだから、今更でもこの約束は果たさなくっちゃいけない。

だから私は、脈絡もなく言つた。

「あ、えつと、ジェノスさん！」

……おかえりなさい」

唐突な私の言葉にジェノスさんは当然困惑して数秒間、きよとんとした顔で私を見つめ続けた。

でも、彼も言つてくれた。

「……はい。ただいま、戻りました」

少し、照れくさそうに彼は笑つて、帰つてきてくれた。



まだもう少しだけ、このまままで

「エヒメ嬢、すまんもう、見舞いに來るのが遅れて」  
「バングさん？」

エヒメの病室で特にすることもなくいつも通り漫画を読んでたら、隕石の時に知り合ったじーさんがやって來た。

気の良いじーさんと別に嫌いじゃねーけど、何とかかんとか拳という武術の道場やってて、その勧誘がちよつとウザい。

っていうか、俺やジエノスだけじゃなくてこのじーさん、何故かエヒメをやたらと勧誘するんだよな。

あれか。俺にかましたビンタが、武道家としてぜひともスカウトしたいぐらい素晴らしかったのか？

やめてくれよ。護身術を身につけるの自体はいいけど、こいつ絶対に護身ですまないんだよ。

変に武術とか身につけたら、余計に危なっかしいことに首を突っ込みかねないから、心配が減るところか倍増する。

あとこいつが武術身につけたら、たぶん兄妹ゲンカで俺が勝てなくなる。

今でさえどんな怪人よりもこいつ相手の方が勝てる気しねーんだから、マジでやめてくれ。

「バングさん、すみませんわざわざ」

「エヒメさんはベッドから降りないでください。

まだ、なるべく歩き回るなど言われているのでしよう？ 俺が対応しますから」

「そうそう、気を遣わなくていい。可愛らしい孫みたいな子に会える良い口実じゃ。それより、エヒメ嬢は果物は好きか？」

エヒメがベッドから降りようとするのをジエノスが止めて、バングもフォローしながら持ってきてきた果物かごをジエノスに渡す。

「じーさん、その中にバナナあるか？」

「お兄ちゃん、そろそろ遠慮と礼儀つてもものを知って」

小腹がちようど減ってたのでなんかもらおうと思って言ったら、俺

の方を見もせずバツサリとエヒメが切り捨てた。

おま……最近人前でも俺に容赦のないツツコミを入れるようになったな。他人を前にしたら、遠慮と緊張でやたらと大人しくて礼儀正しいいい子になろうとしたよりははずっといいけど、そこまでバツサリ言わんでもいいだろ。

まあ、言いつつもじーさんに謝りながらバナナを俺に渡すあたりは可愛げがある。

こういうのをツンデレと言うんだっけ？ 実の妹だと、別に嬉しくも何ともねーな。

「……それにしても、聞いてはいたが痛々しいのう」

じーさんは遠慮せずに皆で食べなさいとか言ってから、エヒメの両手の包帯を見て、わずかに顔を歪ませた。

その言葉と反応で、ジェノスが項垂れて、エヒメは慌てる。

「え、えつと見た目よりは酷くないんですよ！ 後遺症は残らないって言われましたし、リハビリも順調です！」

「……うむ。まあそれは、このベッドの上の野鳥園を見たら、心配は確かになさそうじゃない」

エヒメのフォローに、じーさんは少しおかしげに笑って、ベッドを埋める勢いで散らばってる折り鶴を一つつまみ上げた。

「お前、自分で千羽鶴を量産してどうすんだよ？」

今更だけど、俺も突っ込む。

お前、知ってたけど何で折り紙渡すと折り鶴職人になんの？

エヒメに何か欲しいものはないか？ と尋ねたら、指先のリハビリを兼ねて折り紙が欲しいと言い、そして買ってやったらこの有様だ。

こいつ、折り紙は本とかに載ってるメジャーな奴をほとんど全部器用に折れるけど、その中でも鶴が好きらしくて、ほつとくと延々いつまでもひたすら折り鶴を量産する。

しかも、普通の鶴だけじゃなくて1枚の折り紙で、でかい鶴と小さい鶴が繋がってる連鶴ってやつとか、逆に何枚も折り紙を使って色違いの羽を持つ鶴とか、マニアックで難易度高いのも量産してるから、マジで後遺症の心配はないわ。

いくら言ってもやたらと責任を感じてたジエノスも、この野鳥園を見てさすがにそこに關しては気にしなくなった。

ただどうしても、何を言ってもこいつはある一点を気にする。

その気にしてる点をわかっているのかわかってないのか、食えないジーンさんは飄々と口にする。

「後遺症の方は心配ないようじゃが、女の子なのに痕が残ってしまうのが痛ましいのう。けどまあ、怪我の原因がジエノス君で良かった良かった」

「……バング。どういう意味だ？」

エヒメの手を一度優しく撫でてから、何故か楽し気に笑って「ジエノスで良かった」と言い出したジーンさんに、俺とエヒメは顔を見合わせて首を傾げ、ジエノスに至っては体をキユインキユイン鳴らしながら睨み付ける。

おい、こんなところで戦闘モードに入んな。

ジーンさんも何が言いたいんだよ？

ジーンさんはジエノスの殺気に近い怒気に当てられても飄々とした様子を崩さず、言った。

「いやなに、イケメンで若くしてS級ヒーローという将来有望なジエノス君なら、責任を取ってもらうのに不足はないという話なだけじゃ」

「なっ!？」

「責任を取ってもらう」発言で、ジエノスの怒気が霧散して不穏な音も鳴りやんだけど、代わりにプシューとかいうこれはこれで心配な音がして、そのまま固まった。

……ジーンさん、完璧にジエノスがエヒメに惚れてるのをわかってて言ってるやがるな。まあ、気付くよな。こいつ、わかりやすすぎる。

そんなわかりやすいこいつの気持ちに、一番近くにいるのに全く気付いてないアホ妹は、きよとんとした顔で言った。

「私、サイボーグの腕はいりませんよ?」

明後日の方向に「責任」という言葉を解釈したエヒメの発言に、俺ら3人が脱力してずっこける。

お前、その解釈だとイケメンも将来有望も関係ないだろ。

俺ら3人が何で脱力したのかわからずオロオロするエヒメを見て、起き上がったじーさんが苦笑しながらジエノスに言う。

「ジエノス君……。まあ、君もエヒメ嬢もまだまだまだ若いから、気長に頑張れ。雨だれもいつかは石を穿つから、諦めるな」

「……余計なお世話だ、くそジジイ」

じーさんの言葉に、ジエノスが小声でいつも以上にひでー言いぐさで返す。

つていうかじーさん、それは励ましてんのか？

そして、ジエノス。うん、なんかマジで激ニブな妹ですまん。マジで頑張れ。

「お、お兄ちゃん？ 私、なんか変なこと言った？」

オロオロしながらエヒメは俺に訊く。言つたよ、思いつきりな。

でもどのあたりが変だったか、そもそも責任の意味を教えたらたぶんジエノスが羞恥で死ぬから、俺は何でもねーよと答えるしかなかった。

俺が説明しなくても、エヒメがジエノスをフォローするつもりで「サイボーグの腕がいらぬのは、後遺症がないから必要ないと思っただけで、それ自体が嫌なわけじゃないですよ！ 私、ジエノスさんの腕とか、カッコよくて好きですし！」とか言い出したから、結局ジエノスは死ぬかもしれねーけど、そこまでは知らん。

ただの照れと羞恥で否定するジエノスと、それを真に受けてまた大真面目に聞いてて恥ずかしくなるフォローをするエヒメとのやり取りに俺が呆れていると、じーさんが小さく笑いながら、横にやって来た。

「サイタマ君としては、どうなんじゃ？ ジエノス君は、義弟として有望か？」

「……有望も何も、エヒメ自身の気持ちが一番大事だろ？」

正直言つて、ジエノス自身の事は嫌いじゃねーけど、義弟つて考えると今まで以上にあいつは俺に堅苦しくなりそうだから嫌だ。

けど、俺の意見なんて関係ない。

エヒメが幸せなら、あいつが変に気張らずに肩の力を抜いて本当の自分を出して、いつも笑ってくれるなら、たとえ泣かせることが多くても最後に必ず笑わせてやれる男なら、俺は何も言う気はない。

「そうか……。サイタマ君はいい兄じゃな。エヒメ嬢が良い子に育つわけじゃ。」

……しかし、だからこそいつか、嫁に行くときは寂しいじゃろうな」隣でじーさんがそんなことを言う。

……ああ。そうだな。

いつまでも俺にべつたりで、俺が守ってやってばっかりじゃダメなのはわかってる。

いつか必ず、他の誰かを俺以上に大切な人として選んで、幸せになつて欲しいのは間違いなく本心だ。

……だけど、俺は少しだけ悪あがきをする。

口では「エヒメの気持ちが一番大切」とか言つて、ジエノスに反対はしねーけど決して積極的に協力や応援をしないのは、本音で言えば俺のしようもないわがままで、悪あがきに過ぎない。

……もう少し、あと少しだけでいいから、まだこのまま俺が守る、俺だけの可愛い妹であつて欲しいという、ただのわがままで。

## 恋情エゴイズム

「いや、マジですごいっすね！　こんなの俺、初めて見ましたよ！」  
……いつものようにエヒメさんの見舞いに来たら、エヒメさんの病室から先生でもバングでもない男の声が聞こえた。

担当医師と看護師も把握しているが、その声はどの音声データとも一致しない。

いつでも焼却砲を放てるように準備しつつ、たまたま急患か何かの都合で担当医が来れず、別の医師や看護師が看ているという可能性も考慮して、俺は病室の扉を開く。

「これ、一枚の紙でできてるんすか!?　エヒメさん、めちやくちや手先器用ですね！」

「……はあ。……ありがとうございます。……!　ジエノスさん！」  
病室にいたのは、黒い全身タイツじみた体にフィットする服装で、切っ先が刃の代わりにタケノコという奇怪な槍を持った男。

……確か、A級ヒーローのステインガーだったか？

比較的順位が高かったのだからうじて見覚えがあったが、もちろん直接的な面識はない。そんな相手が何故、エヒメさんの病室でエヒメさんにあんなにも気軽に馴れ馴れしく話しかけてる？　と思いなगरら、思わず焼却砲のエネルギをチャージしている間に、エヒメさんが俺に気付いてくれた。

見たことのない人形じみた無表情で生返事をしていたエヒメさんが俺に気付いた瞬間、嬉しそうに微笑んだことで、チャージせずとも上がっていった体内の熱が治まる。いやむしろ、まったく別の意味でさらに上がったが、それは余談だ。

そして、エヒメさんの反応でステインガーの方も振り返り、俺を見て驚愕の声を上げた。

「え、S級16位のジエノス!?　何でお前がここに!？」

「それはこちらのセリフだ。何の用だ、A級10位、ステインガー。」

その女性は、俺が師事している人の大事な妹さんで、俺自身の恩人でもある。……答えによっては、容赦はしない」

「お、俺はこの前の海人族襲撃でこの子に助けられたから、お礼を言いに見舞いに来ただけだ!!」

俺が焼却砲の砲門を奴に向けて尋ねると、奴も槍を構えながら答える。

……ああ、そういうえば深海王が現れる前に、暴れていた奴の部下に当たる怪人をほとんど仕留めたヒーローがいたな。それが、こいつか。

なるほど。病室に来ていた理由はそれで納得してやろう。

だが、それはエヒメさんに馴れ馴れしく話しかけていた理由にはならない。

そして彼女が、あんなにも人形じみた無表情で対応していた理由にもな!

「……あ、あの……二人とも……ケンカはやめてください……」

俺がそのことを力づくでも問い詰めようとした時、エヒメさんが止める。

いつもより控えめというより何かに怯えているように見えたので、俺は慌てて砲門を閉じ、エヒメさんに駆け寄る。

「エヒメさん!? 大丈夫ですか? 体調が悪いのですか?」

「わ、悪い! エヒメさん! ビビらせちゃったか?」

ステインガーの方もエヒメさんに向き直り、謝罪する。が、何故お前は軽々しく彼女の肩に触れる?

「えっと……大丈夫……ですけど……、とりあえず、……ケンカはしないでください」

エヒメさんは俺ら二人にそう答えるが、やはりその対応はどこか弱々しい。

親しくなくてもその様子のおかしさに気付いたのか、ステインガーはエヒメさんの肩から手を離して、「ごめんな、エヒメさん。怪我人なのに俺が勝手にしゃべって長居して。また、出直します」と言っ出て行った。

出て行く前に、一度俺を睨んだのは気のせいではないだろう。もちろん、俺も睨み返したが。

「……あの、ステインガーさん。……お見舞いのお花、ありがとうございます  
います」

奴が出て行く前に、控えめにエヒメさんが口にした礼の言葉と、締  
まりのないやつの笑顔が無性に気に入らなかつた。

奴が持つて来たらしい花を生けた花瓶を一度睨んで、俺は尋ねた。

「エヒメさん。奴に何かされましたか？」

「え？　されてないじゃない！　本当に何もされてませんから、始  
末しようとか考えないでくださいね！」

俺の問いに慌てて否定をする様からして、遠慮とかではないよう  
だ。……少し、残念に思った俺に自己嫌悪が襲う。

始末しようと考えたのは、決してエヒメさんの為じゃない。俺はた  
だ奴に嫉妬していただけだ。

「……なにもされてないんですけど……、あの人は優しくて気さくで  
いい人だとは思うんですけど……ちよつと苦手なんです。

ステインガーさん個人と言うか、ああいう人が」

自分の身勝手さに凹んでいたら、エヒメさんが少しだけ困つたよう  
に、吐き出すように補足で答えてくれた。

彼女は先生や俺が渡した折り紙を一枚取り出して、手元も紙も見ず  
に折りながら話を続ける。

「なんていうか……ああいう天性の人気者って感じの人は、すごく遠  
く感じて苦手ですね。

元々、ただでさえ苦手な人付き合いがああいう人が相手だと、何を  
言ってもいいのか余計にわからなくなつて、どんな顔をしたらいいの  
も分からなくなつて、自然と不愛想な対応になつてしまふんですよ。

だから、心配をかけてごめんなさい」

言いながら彼女は、手元を見もせずにもまた鶴を量産していた。

しかも、普通の折り鶴ではなく孔雀のように尾羽を広げた「祝鶴」  
や、二匹の鶴が寄り添う「夫婦鶴」、その名の通り水を飲んでるよう  
に見える「水のみ鶴」といった、高難易度の折り鶴を、器用にかなり  
のスピードで折り続けた。

その様子に、俺はあの隕石破壊時の兄妹喧嘩を思い出す。



この人は怒りやストレスはひたすら何かを作ることによって発散させるという、先生の言葉を。

同時に、彼女は本来あまり人が好きではないこと、警戒心が野良猫並みで基本的に自分から関わらないし笑わないと言っていたことも、思い出した。

ああ。そうか。あの人形じみた無表情は、俺が知らない彼女の他人への対応だったのか。

そのことに気付いて、醜い優越感が満ちる。

自己嫌悪も同時にするが、今はそれよりも喜びが勝る。

彼女にとって俺は、付き合っていてストレスを感じる他人ではないという事。

愛想笑いが出来ない彼女が、俺に向けてくれる笑顔は本物だという事。

それが、本気かどうかまでは判別がつかなかったが、エヒメさんに明らかな好意を懐いていたあのステインガーに対しての優越感となり、俺の黒く醜い独占欲を満たす。

「……いえ。何もなかったようなら、何よりです。

それと、もしあいつがどうしてもうっとうしかったら、遠慮なく俺に言ってください。全力で排除しますから」

「全力じゃなくていいです。とりあえず、武力行使で排除だけはやめてください」

エヒメさんの言葉について本音で返してしまったら、さすがに若干引かれた様子で穏便な解決を願われた。

しかし排除自体を止めなかったという事は、本気でステインガーには辟易していたらしい。

それがまた、俺の中の黒い欲情を満たす。

自分の未熟さを、器の小ささを痛感しながら、ベッドを埋め尽くしそうな鶴の中の一つが目についた。

それは、開いた扇に乗った折り鶴だと初めは思ったが、よく見たら下の扇と上の鶴は同じ紙から折られて一体化している。

それをつまみあげて、エヒメさんにこれはどうやって折るものなの

かを聞いてみたら、彼女はまた折り紙を一枚と、小さな鋏を取り出して説明する。

「これは一部を切り取って、それから切込みを入れないときすがに折れないものです。名前はそのまま、鶴の扇で……あ」

説明をしながら、エヒメさんが何かにかが付いたように声を上げ、そして少しおかしげに、嬉しそうに笑った。

「エヒメさん？」

その唐突な反応の理由がまったくわからず、俺が声をかけると彼女は嬉しそうな笑みのまま、俺と顔を合わせて答えた。

「ごめんなさい。急に変な反応しちゃって。ちよつと今、なんでステインガーさんはいい人なのに、あんなに苦手なのかわかつちやったのが、なんかちよつとおかしくて」

話題から消えたと思っていた男の名がエヒメさんの口から零れ落ちたことで、また矮小な俺の器がざわめく。

俺と一緒にいる時に、先生ならともかく他の男の話なんてしないでくださいと言えたら、どれだけ楽だろう。

そんな俺の浅ましい思いも知らないで、エヒメさんは屈託なく笑い、言葉を続けた。

「あの人、一人勝手に話して完結して、私の話を聞いてくれなかったんですよね。」

ジェノスさんは同じものを見つけても、穏やかに私の話をまず聞いてくれるから、一緒にいて落ち着きます」

「……………ステインガーより気を許されていると確信した時より、ステインガーを穏便な方法でなら排除してほしいと思っっていることを知った時より、それらとは比べ物にはならないほどの喜びが、俺の胸に満ちる。」

が、それがあまりにも清らかで、穢れのない思いから来るものだから、今までの黒い優越感が完全に自己嫌悪に成り下がる。

自業自得でしかないが、予想外すぎるカウンターを喰らってしまった。

「…………俺は、誰に対してもそうじゃないですよ。」

むしろ……、エヒメさんがいつも俺の話を真面目に聞いてくれて、俺のことを考えて忠告や励ましをしてくれたからこそ、俺はエヒメさんの話は一言たりとも聞き逃したくないと思っただけです」  
自己嫌悪と罪悪感に耐えきれず、俺はエヒメさんが語る自分を否定する。

貴女だから、貴女が相手だからそんな風に俺は穏やかに、話を聞いていられるんだと。

誰でもそんなんじゃない、話を聞く人を選ぶ身勝手な男だと告白しても、彼女は穏やかに微笑んで返す。

「それなら、私だっておんなじですよ。」

現にこうやってステインガーさんのお見舞いは迷惑がった癖に、ジェノスさんが来てくれたことはすごく嬉しいって思ってますから」  
自分も身勝手だと、彼女は言った。

その身勝手に選んだ相手が、俺だと。

心に満ちる感情に許容量があるのなら、俺は心はとつくの昔に破裂しているだろう。

喜びはもちろん、どこまでも身勝手な自分に対する罪悪感でも。

……恋愛は惚れた方が負けだと言うが、それを思い知らされる。

俺はどうやったら、この人に勝てるんだ？

勝つ気などさらさらなくせに、そんなことを考えた。

### 三者三様日常断片

【エヒメさんと変態】

「そういえば、ジェノスさんはバングさん以外に他のS級の人と会ったことってありますか?」

いつものようにお見舞いに来てくれたジェノスさんに、ふと思い出したことがあったので尋ねてみた。

「他のS級ですか? 隕石の時に一応メタルナイトとは会いましたが遠隔操作のロボットでしたし、後の奴らは名前と顔をS級認定された時にチェックしたくらいで、会った事はありませんね」

お茶を淹れてくれながらジェノスさんは答え、「それがどうかしました?」と首を傾げつつ淹れたお茶を渡してくれた。

「お礼とお詫びを言いたい人がいるんです。だから、もしジェノスさんが知っているのなら、伝言を頼みたいなと思って。」

ジェノスさんのすぐ下の、ぷりぷりプリズナーっていう人なんですけど」

「……ああ、そういえば深海王に奴も挑んでいましたね」

名前を聞いてどういう人だったのかを思い出そうとしていたジェノスさんが、思い出すと同時に顔を歪めた。

そんな反応しなくても……。いや、あの人の嗜好を知ってたらそりや歪めるかも。たぶんジェノスさんはチェックされてそうだし。

そんなことを思いながらお茶を飲んでたら、ジェノスさんがなんかやたらと険しい顔で私に訊く。

「……エヒメさん。お礼とお詫びを言いたいという事は、プリズナーと直接会ったんですね?」

「? ええ。イナズマックスさんというヒーローを保護しに行ったとき、私より先に彼を助けてくれていたので、そこで。」

私がイナズマックスさんを連れて帰るまでの時間稼ぎをしてくれたのに私、プリズナーさんは保護できなかったから、そのお礼とお詫びが言いたくて」

一瞬、ジェノスさんの質問が当たり前すぎて理解できなかったけ

ど、そういえばちゃんと説明してなかったことを思い出して、改めて説明する。

ソニックさんの事は、言わない方がいい気がする。

私の恩人ということで基本的には口には出さないけど、ジェノスさんはお兄ちゃんを狙うソニックさんの事をめちやくちや嫌ってるから。

……会った事もないのにあんなに嫌うって、実際に会ったらどうなるんだろう、この二人。

私の答えでジェノスさんの疑問は晴れたと思ったら、なんかさらに眉間の皺を増やして、ジェノスさんは躊躇いながらも、質問を重ねた。

「……エヒメさん。……奴が戦っているところ、見ました？」

……その問いで、何でこんなに険しい顔をしてたのかがよくわかった。

ああ、うん。ジェノスさん、会った事はなくてもあの人の戦闘スタイル知ってたのね。

「……変た……変身、……してました」

私はジェノスさんから、正確には脳裏に思い浮かべてしまったプリズナーさんの「エンジェル☆スタイル」から目をそらして答えると、ジェノスさんが両手で頭を抱えちゃった。

「……会った事もない同僚が、何かすみません。次、会いましたら速やかに焼却します」

「ジェノスさんが責任を感じなくてもいいんですよ!!」

落ち着いて、ジェノスさん！ 次会ったらって、その時が初対面ですよ！

謝りたくなる気持ちは何かわかるけど、焼却はしなくていいです!! 何かジェノスさんが悪くないことでジェノスさんが落ち込んだり、何かから、何とか励まそうと私もお茶を淹れて、彼に渡す。

紅茶を一口飲んで、自分が凹んだり責任を感じる必要がないことに気付いてくれたのか、カップから口を離すと同時に「そういえば」とジェノスさんが話を変えた。

「そういえば、あのシエルターに向かう途中、変質者を見かけました」話、変わったようでも変わってなかった。

っていうか、変質者？ 災害レベル鬼の警報が出てる町で？ プリズナーさんじゃなくて？

「いえ、奴ほど化け物な変態ではありませんでした」

私が思わず素で失礼なことを訊いちやったら、ジェノスさんは真顔で私以上に失礼だった。

化け物って。少しは言い淀もうよ。私も、初見で怪人だと確信したけどさ。

そんなジェノスさんのナチュラル慇懃無礼に呆れていたら、ジェノスさんは思い出した変質者が嫌なのか、顔を歪めて珍しく愚痴り始めた。

「プリズナーのような化け物ではありませんでしたが、何だったんでしょうね、あの変質者は。」

眼の下にペイント、髪はしつかり結っておきながら堂々と何も着ていないのは、どんな主義主張の現れなんでしょう？ しかもあれは、もはや堂々というより威風堂々と言わんばかりに平然としました。

あまりに自然体かつ堂々としていたので、去った後しばらくその場で立ち尽くしてしまっただのが悔やまれます。あの変態を無視していれば、エヒメさんにあんな思いをさせずに済んだのに……」

……ジェノスさんが私の事を想って悔やんでくれていることはよくわかったけど、私は全く別の事で頭がいっぱいになってしまった。どう考えてもそれ、ソニックさんだよな!?

何やってんの、あの人!? 私と別れた後、いったい何があったの!? ジェノスさんと同じく、何も悪くないってわかってるけどなんかものすごく申し訳がない！ 何か土下座で謝りたい！

でもこの場合、数秒とはいえフリーズさせちゃったジェノスさんに謝ればいいの!? それとも、思いっきり変態呼ばわりされてるソニックさんに謝ればいいの!?

っていうか何で私の周りの男の人は、外で全裸になっても平然としてられる人ばっかなの!?

【無免ライダーさんとセコム】

「おや、サイタマ君。エヒメちゃんにお見舞いかい？」

病院からちようど出てきたタイミングで、ぼったりとサイタマ君に出会う。

「おう、無免。もうだいぶ、怪我は良さそうだな」

そんな他愛のない会話を一つ二つ交わしてから、ついさつき自分の通院のついでで悪いけど、お見舞いに寄らせてもらった彼の妹、エヒメちゃんの話になる。

「そういえば、ステインガー君とイナズマックス君がまた来てたらしいよ」

「そうか。……また鶴がやたらと増えてて、ジェノスは機嫌が悪いんだろうな」

ご名答。

エヒメちゃんがJ市の海人族襲撃の時に彼らを助けたことがきっかけで、A級ヒーロー二人が彼女のファンになっちゃったらしい。

うん、すごく可愛くて守ってあげたい感じの子だから、気持ちはおわる。

けど本人は目立つ事も自分がした事を大きさに持て囃されることもすごく苦手みたいだから、可哀相だけど熱にうかれてエヒメちゃんを天使だ女神だと大きさに騒ぐ二人は、かなり彼女から敬遠されている。

それだけならまだ、時間をかければエヒメちゃんは心を開いてくれるだろうけど、……その前に二人ともジェノス君に心を折られるだろうなあ。

ジェノス君、深海王の前で見た時からわかったけど、本当にエヒメちゃん大好きだね。

僕は「視線だけで人が殺せそうな眼」というものを、彼で初めて見たよ。あの目からレーザーが出そうって思ったのは、彼がサイボーグであることは全く関係なかったな。

っていうか、二人が付き合っていないって聞いて、それに一番驚いたよ。

「つていうか無免、お前は大丈夫か？ ジェノスの奴、お前にも威嚇してないか？」

「あはは……。大丈夫だよ。エヒメちゃんは可愛いけど、年が離れるから妹みたいなものとしか思えないって言ったから」

サイタマ君の心配に大丈夫だと返すけど、彼は僕の答えで「……やったんだな。威嚇」と言わなかった部分を察してしまった。

うん、たぶんステインガー君たちにするのとは違って、本人もするつもりはなかったようだけど実は最初のお見舞いでされた。

エヒメちゃんの病室に入る直前、丁度花瓶の水を換えようとして出てきたジェノス君に会った時は、堅苦しいくらいに礼儀正しく接してくれてあれはあれで困ったけど、エヒメちゃんが気付いて僕に笑いかけてくれた瞬間、空気が凍ったのはよく覚えてる。

後で本人から謝られたから、その時にエヒメちゃんは恋愛対象じゃないって言ったら幸いながら信じてくれて、それからまた堅苦しいけど友好的に接してくれてるので僕は別にもういいんだけど、サイタマ君は深い溜息をついてから、ジェノス君を叱っておくと言った。

「いや、いいよ。僕は気にしてないから」

「お前の事がなくても、あいつはやりすぎだ。エヒメの周りから男全員排除する気か」

「あはは……。確かにそれはやりすぎだけど、今はちよつと警戒しておいた方がいいから、あんまり怒りすぎないであげて」

「？ 警戒？ どういう意味だ？」

僕の何気ない言葉に、サイタマ君が首を傾げた。

あ、知らなかったんだ。ジェノス君が心配や負担をかけないようにエヒメちゃんはもちろん、サイタマ君にも知らせてなかったのかな？ だとしたら、悪いことをした。

僕は自分の軽はずみな言葉を後悔しながら、ネットに疎い友人に現状を話す。

ごめん、ジェノス君。でも、やっぱりサイタマ君も知っておいた方がいい話だよ、これは。

「エヒメちゃん、海人族襲撃でたくさんの人をレポートで助けたか



ら、ネットとかで存在が広まって、今はちよつとした有名人扱いなんだ。

幸い、顔写真とかどこに入院してどこに住んでるとかの情報は出てないけど、本名はすでに流出してるし、可愛い子だつてことも知られてるからちよつとした好奇心で見えてみたいって人が多くて、協会にも問い合わせが多いし、手あたり次第に病院に電話で『エヒメって入院患者いる?』とか訊いてくる人や、直接やってくる人が多いんだよ」  
僕の説明にサイタマ君は少しだけポカンとしてから、顔をしかめた。自分の妹が見世物みたいな扱いをネット上とはいえられて、嫌なんだろう。

けど、見世物ならまだマシだ。考えたくないけど、ネットの匿名性で気が大きくなって書いただけだと思うけど、彼女の容姿が儂げでか弱い可愛い子と知つて、最低極まりないことを書き込む輩もいる。

そんなことを書き込んだ奴がエヒメちゃん本人に会うだけでも、僕はヒーロー以前に人として許せない。

「だから、ただの好奇心で見たいだけだと思うけど、それでも注意は怠らないであげて。女の子なんだから、何かが少しでもあつてからじや遅いから」

けどまあ、ジェノス君がほぼ一日中エヒメちゃんの病室で甲斐甲斐しく彼女を看着いるから、大丈夫だと思いつつも一応サイタマ君にも注意を促しておいたら、彼はいつもの覇気のない顔で言った。

「ああ。わかった。大丈夫だ。」

……ところで無免、ヒーローが人間の犯罪者を手加減間違えて爆発四散させた場合って、何か罪に問われんのか?」

いつもの淡々とした声と、まったく笑っていない目を見て僕は悟る。

エヒメちゃんのセコムは、ジェノス君じゃなくてサイタマ君だつたと。

しかもジェノス君が可愛く感じるレベルで、最強のセコムだった。

【ジエノスさんと洗濯物】

俺はこの時初めて、サイタマ先生に対して怒鳴りたい気持ちでいっぱいになった。

しかも、完全に八つ当たりでだ。

わかってます。わかってますよ、悪いのは俺だつて！

想像できなかった、察することが出来なかった俺が悪かった、少し考えたら誰でもわかることに気付かなかった俺がバカなだけだったことは、わかってます!!

でも！ 先生も止めてください！ 俺がやると言ったからって、普通に渡して頼まないでください!!

俺は心の中で先生に八つ当たりをしながら、紙袋を握ってコインランドリーで頂垂れる。

……先生、俺にはこの紙袋が、正確にはその中に入った、中身が透けないように不透明のビニール袋に包まれた中身を開けられません。そう思いながら、そのビニールの上に張り付けられていた、俺が贈った千代紙に書かれた文字に、もう一度目を落とす。

『お兄ちゃんへ。』

ブラは洗濯ネットに入れてあるので、そのまま洗濯機の中に放り込んでください』

……期待したが、何度見ても下着の洗い方に関するメモだ。

全自動なら何コースで、干し方とたたみ方まで火傷を負った手で書いたとは思えないくらいに綺麗な字で書かれている。

……何故俺は、先生がエヒメさんの病院帰りに渡された洗濯ものを、帰りにコインランドリーに寄り忘れて帰って来たからといって、軽はずみに「俺が行きます」と言ってしまったのだろうか。

入院生活で出る洗濯物なんて、パジャマとタオルとこれしかないだろうが！

サイボーグになる以前から入院なんてしたことがなかったとはいえ、普通に考えたら気付けるだろ!!

もう何度目かわからない後悔をするのも疲れて、俺は考える。

このまま帰って、先生に申し訳ないがお願いするか、……意を決し

て俺がこれを洗濯機に入れるかだ。

先生は最近、耳に入れないようにしていたエヒメさんがネット上で有名になってしまい、好奇心で彼女に近づこうとする輩の存在に苛立ち、少し疲れているように見える。

ただでさえエヒメさんが入院しているというだけで心労は大きいはずなのに、怪人とは違って目の前にはつきりと悪意を持って現れないその存在は、真っ直ぐでシンプルを好む先生には大きなストレスだろう。

だから少しでもその負担を軽くなるようにと、俺は家事などをすべて任せてもらって、これもその一環だった。

今頃、少しは休息をとって疲れを癒している最中だというのに、俺の愚行でその休息を台無しにする気か？

メモを見る限り全部洗濯機で洗っていいものらしく、洗濯機に入れるのと洗い終えて回収するくらい目を閉じててもできる。

干すのと畳むのはさすがに先生にお任せするが、これくらいは俺がやるべきなんじゃないかと思う。

そうだ。これは先生が課した俺への信頼と精神力の試練だ！

ヒーローたるもの、この程度で精神を乱してどうすると、先生は言いたいのですね！

ヒーローとして、そして男として、ここは紳士的に一切何も見ずに速やかに行うべきだ!!

俺は自分を奮い立たせ、この試練に打ち勝つために紙袋の中のビニールをつかみ取った。

\* \* \*

「お兄ちゃんのパカアアああっ!!」

最低！ デリカシーゼロ!! 何考えてるの!? 何で私がお兄ちゃんに頼んだか、本気でわからなかったの!?!」

「すまん！ 俺が本気で悪かった!! 本当にすまん!!」

……翌日、先生とエヒメさんのお見舞いに来てすぐ、エヒメさんが「お兄ちゃん、洗濯物ありがとう」と言い、先生が「コインランドリーに持って行ったのはジェノスだから、そっちに言え」と盛大に口を滑

らせ、先生はエヒメさんから枕でひたすら殴られている。

俺はというとエヒメさんを止めることが出来ず、今すぐ自爆しそうなほど暴走しているエネルギーコアを落ち着かせることに精一杯だった。

……そうですね。先生は試練のつもりでも、持ち主本人が嫌に決まっていますよね。他人の男に、洗濯物を……下着を任せるのは。

生身のはずの脳がショートしそうになりながらも、俺は先生に怒り続けるエヒメさんに謝った。もう謝罪で済む問題ではないが、しない訳にもいかない。というより、それしかできない。

「エ……エヒメさん……大変、申し訳ありませんでした……」

「ジェノスさんは謝らなくていいから！ 悪くないから!!」

っていうか、出来れば今すぐ全部何もかも忘れてください!!」

俺の絞り出した謝罪に、エヒメさんは一瞬だけ先生を殴るのをやめて、真つ赤な泣きそうな顔でそう叫んだので、俺も思わずほぼ反射で叫んで返答する。

「はい！ 俺は何も見えてません!!」

見えてません！ 何も見てません!!

イメーヅ通りの清楚系だったことも、D65という数字も何も見えてませんし知りません!!

……………ごめんなさい見ましたすみません!!

## お友達が出来ました

ショールを肩に引っかけて、病院の売店まで飲み物を買に行つた。

飲み物を選びながら、今日は何をしようか考える。

ジェノスさんはメンテナンスで来れないと言っていたし、お兄ちゃんは一回くらい顔出しに来るだろうけど、それがいつかはわからない。

バングさんや無免ライダーさんが来てくれたら嬉しいけど、他の人は正直来ないで欲しい。ステインガーさんとか、イナズマックスさんとか。

私はただレポートで運んだだけなんだから、助けてくれたってやたらと恩を感じられるのは息苦しいし、A級上位ヒーローってアイドルの側面も持つから、私からしたら自己主張が激しくて苦手。

っていうか、天使って呼ぶのやめてくれないかな。特にイナズマックスさんを助けた天使は私じゃなくて、ぷりぷりプリズナーという牢獄在住の天使さんです。

……排他的な自分を変えるいいチャンスと思えばいいんだけど、あの二人は本当に苦手。

そうやって関わりたくないって思ってるくせに、誰も訪れない病室に一人きりは寂しい。

わがままで子供な自分自身に嫌気がさしながら、スポーツドリンクを買って病室に戻る。

誰も来ないのなら、またお兄ちゃんに突っ込まれるだろうけど折り鶴職人になってよう。もういつそ、折り鶴アート作ってやろうかな。

「あの、おねーさん！ 落としましたよ」

「え？」

そんな壮大なんだかしようもないのかよくわかんないことを考えながら、病院の廊下を歩いていたら声をかけられた。

振り返った先には、10歳前後の女の子。

着ているものはパジャマじゃなくて普通の可愛らしいワンピース

だし、顔色もいいので入院患者じゃなくて、お見舞いか予防接種とかで来た子かな？

髪を短く切りそろえられていて可愛い子だけど、……何ていうか目力が凄い。

ぱつちりと大きな目と言えば聞こえがいいけど、瞳があまり大きくなくて三白眼になってるから、ちよつと怒ってるように見える。

可愛い子であることは間違いないんだけどね。

あとなんか、どつかで見覚えがあるような気がした。……どこでだろ？

恥ずかしながら引きこもり同然な私は、こんな小さな子と知り合ううきっかけなんてないはずなんだけどなあ。

住んでるところもゴーストタウンだから、近所の子っていうのもあり得ないし。

いくら考えても思い出せないし、女の子自身は完全に初対面という対応だから私は気のせいだと結論付けて、その子が差し出す掌を見る。

もみじのようなその掌には、ちよこんと連鶴が乗っていた。

持ってきた覚えはないから、たぶん私のシヨールかどこかに引つかかったのが廊下に落ちて、それにこの子が気付いてくれたみたい。

私はその子に視線を合わせるように体勢を低くして、鶴を受け取る。

「拾ってくれたの？　ありがとう」

その子の頭を一回撫でると、彼女は「どういたしまして！」と言いながら、頬を少し紅潮させて嬉しそうに、誇らしげに笑う。

素直で可愛らしいその様に、私も自然に口角が緩む。

何かお礼をしてあげたいけど、持つてるものはスポドリだけ。また売店に買いに行ったり、病室に戻ってお見舞いでもらったお菓子をあげるのは、遠慮するかな？

「……ねえ、この鶴はおねーさんが折ったの？」

つつい甘やかしたいと思っていた私に、女の子がちよつと遠慮がちに、上目遣いで尋ねる。

「ええ。そうよ。ちよつと手を怪我しちやつたから、そのリハビリでいっぱい折ってるの」

「手を怪我してるのに、こんなの折れるの！ こっちのちっさい鶴も!? 一枚の紙で!？」

「……すつごーい!」

似たような反応はもう病院の先生や看護師さん、ジェノスさんやバングさんとかいろんな人にされてきたけど、子供の純粋な称賛ってなんか気恥ずかしいな。

でも、何だろう。どの人からの称賛より、くすぐったいけど何だか嬉しい。

「……良かったらこれ、もらってくれる?」

「! いいの!?!」

私は女の子が拾ってくれた連鶴を渡すと、その子は想像以上に嬉しそうに喜んでくれた。

良かった。なんかランナーズハイ的な感じでやたらと無意味に量産したものだけど、喜んでもらえて。

可愛くってなんだか新鮮なやり取りが楽しかったけど、これ以上この子を引き留めていたら親御さんが心配するだろうから、私はそろそろ話を切り上げて病室に戻ろうと思ったけど、女の子はまた遠慮がちな上目遣いで私に質問する。

「……おねーさんって、折り紙得意?」

「えーと、有名なのはだいたい折れるかな。鶴は特に好きだから、珍しいのも折れるよ」

私の答えに、女の子はもじもじしながら、恥ずかしそうに言う。

「おねーさん、私に折り紙教えてください」

ちよつと予想外な頼み事で私がポカンとしてしまったら、迷惑をかけたかと思ったのか女の子が申し訳なさそうな顔になって、「迷惑ならいいんです! ごめんなさい!」と謝ったから、私は慌ててそれを否定。

「あ、違うの。ちよつとびっくりしちやつただけ。

私も今日は暇で、私に付き合ってくれるならむしろすごく嬉しいか

ら、気にしないで！」

私の答えに「本当!？」って、女の子は顔を輝かせる。やだこの子、本当に可愛い。目力の強さなんて気にならない。むしろそこが可愛い。「でも、あなたの方はいいの？ お父さんとお母さんは、心配しない？」

女の子の可愛さに萌えながら一番の懸念事項を尋ねてみたら、その子は唇を尖らせた。

「いいの！ お兄ちゃんなんて怪我して入院したくせに、また任務だからって出て行っちゃうお兄ちゃんなんか、ちよつとくらい心配させてやればいいの!!」

入院するほどの怪我してるのに任務で出て行ったって、お兄さん何者!?! と一瞬思ったけど、そういうことをやりそうな職業はすぐに浮かんだ。

浮かぶと同時に、ものすごくこの子に親近感が湧いた。

「あー、それは腹立つよね」

私は感じた親近感のままに、その子の頭を撫でて言う。

私が、誰かに言って欲しかった言葉をそのまんま。

「私と怪人倒すの、どっちが大事なのよ？ って思うよね？」

私の言葉に、女の子は一瞬ポカンとした。

「ヒーローのお兄ちゃんを持つと、妹は苦労するよね？」

続けた私の言葉で、彼女も察して満面の笑みで頷いた。

どうやらこの子も私は自分と同じ、何があっても立ち止まらないで突き進むバカヒーローの妹であることに気付いてくれたみたい。

\*\*\*

「わかってるのよ。お兄ちゃんが好きで私との約束を破ってるわけじゃないことも、お兄ちゃんがいなくなっちゃ、たくさんの人が死んじゃうかもしれないことも」

「そうそう。でもだからって、いつまでも我慢してやってると思うなーって言いたいよね」

私はやたらと意気投合した女の子、ゼンコちゃんに折り紙を教えながら、互いに自分のお兄ちゃんに対する愚痴を言いまくった。



もうこの子、私と完全に不満とかが一致してる。何が言いたいか全部わかるし、この子自身もこちらが望んだ通りの相槌を返してくれる。

ちなみに、一応ゼンコちゃんを説得して、お兄さんの病室に私の病室と名前を書いてそこのおねーさんと友達になったから、そこにいるというメモを置いて来てもらった。

さすがに、下手したら誘拐扱いされるのは困るからね。

「何より腹立つのが、私との約束破って怪人を倒しに行くとき、私に謝るし悪いって思ってるのは本当だろうけど、ちよつとどんな怪人なのかって戦うことを楽しみにしてるのが嫌!!」

「ゼンコちゃん。もうそれは、お兄ちゃんの武器を奪って殴ってもいいよ。」

こつちの約束破って心配かけといて戦いが楽しみなら、私と戦ってから行けって言いなさい」

「わかった！ 次から言う!!」

とんでもないアドバイスをしちやつたけど、反省はしない。

名前も知らないゼンコちゃんのお兄さん、妹の怒りをちよつとしっかり受け入れてくださいね。

散々愚痴って少しは不満が解消されたのか、ゼンコちゃんが教えた通りに鶴を完成させて、ちよつと落ち着いた様子で呟いた。

「……どうしてお兄ちゃんは、ヒーローなんてやってるのかなあ？

痛くて危ない思いばかりして、嫌な思いもいっぱいするのに、どーしてやめないんだろう?」

その問いに関する答えも、私は知っている。

そして、この子だって知ってるはず。

だからこれは、ただの確認作業。

「私たちが、お兄ちゃんの怪我を自分の怪我のように『痛い』って思っ  
て、危ない事をして欲しくないって思うように、お兄ちゃんは他の人の事も『痛い』って思っちゃうからね。

……痛い思いをしたくないのなら、そりや自分で動くしかないし、やめられないのはわかかってるんだけど……」

一旦言葉を切って、溜めて、吐き出した。

「でも心配かけんなバカ！」

結局、私たちの行きつくところはただそれだけ。

私とゼンコちゃんは二人してぴったりハモってから、顔を見合わせ  
て笑う。

その直後くらいに廊下がバタバタ騒がしくなり、私の病室の扉が乱  
暴に開く。

「ゼンコー！」

「お兄ちゃんうるさい！ おねーさんに迷惑でしょ!!」

やってきたのは、ゼンコちゃんそっくりの目つきで高校生くらいの  
男の子。

金属バットを持ってなんかやらと古典的なヤンキースタイルな彼  
が、血まみれのままゼンコちゃんの名前を呼んで駆け寄ろうとしたけ  
ど、即座にゼンコちゃんからの注意が飛ぶ。

「ちよつ、おま……、さつさと終わらせて帰って来たのに病室にはいな  
いし、何か全然知らん奴と友達になったってメモ置いてあるし、どん  
だけ心配したと思ってるんだ！」

「先に心配ばっかかけてるのは、お兄ちゃんの方でしょ！」

それにおねーさんはいい人だもん！ 心配なんかいらぬ!!」

やつぱりメモを残してもそりや全然知らない人間なんだから不安  
になったようで、帰ってきて即行、新たな傷の手当てもしないでこち  
らに向かって来たらしい。

でも、まだ拗ねてるゼンコちゃんは訊く耳を持たないで、私の腕に  
しがみついてそっぽ向いた。

その反応で、可愛い妹をたぶらかした知らん奴である私をお兄さん  
が睨み付けたけど、その直後に呆けた顔になってから、ちよつとだけ  
間を置いて気まずげにお兄さんは頭を下げた。

「……あー、……なんか、うちの妹がお世話をかけまして……」

「いえ、私が退屈してましたから話し相手になってもらったんです。  
こちらこそ、ご迷惑と心配をおかけしてすみません」

たぶん、妹が心配のあまり、メモの名前も知らない奴としか認識で

きないで、ゼンコちゃんの「おねーさん」って発言もよく聞いてなかったんだろなあ。

自分と歳がさほど変わらない女で、しかも怪我人の入院患者である私を、さすがに悪い虫とか誘拐犯だとは思わず一気に冷静になったのか、ちよつと可哀相なくらい顔を赤くしてる。

この人、お兄ちゃんにちよつと似てる。

髪が生えてた頃のお兄ちゃんは今より血の気が多くて覇気もあったから、いつもではないけど時々こんな感じで暴走してたなあ。

なんかさらに親近感を深めたところで、ゼンコちゃんはお兄さんの所に帰るよう説得する。

少し駄々をこねたけど、私が「今ここで拗ね続けるといつ許したらいいかわかんなくなつて、仲直りが出来なくなるよ」と耳打ちしたら、渋々ながらお兄さんを許した。

経験者だからね。パターンはわかってるよ。

でもゼンコちゃんはお兄さんの病室に戻る前に、私のパジャマのすそを握つて言う。

「……おねーさん。また、遊びに来ていい？」

その継るような目に、もう何度目かわからないけどまた口角が緩む。

私はサラサラとして気持ちのいい髪を撫でながら、答えた。

「ごめんね。私、あと3日くらいで退院なの。」

……だから、次に会う時は病院じゃなくてお外になるけど、それでもいい？」

私の初めの一言でゼンコちゃんは悲し気に顔を俯かせたけど、続けた言葉で顔を一気に跳ね上げて眼を輝かせた。

「うん！ いい！ そっちの方がいい！！」

おねーさん、今度一緒にお買い物に行こう！！」

\* \* \*

「あれ？ 今日鶴が少ないな。じーさんでも来たのか？」

ゼンコちゃんと今度はいつ会うかを約束して、恐縮するお兄さんに全然かまわないし大丈夫だからあなたはさっさと治療してと説得し

て帰った直後くらいに、お兄ちゃんが病室に来た。

タイミングがいいのか悪いのか。

っていうか鶴の量で来客が来たのか、それが誰だったのかわかるのかお兄ちゃん。

まあ、私ならわかりやすいよね。

暇かその来客が望んでいない相手なら、ひたすら量産するもんね。でも、今回は違う。

私は自分でも気持ち悪いくらいニヤニヤ笑って、手を合わせてお兄ちゃんに言った。

「お兄ちゃん。私、お友達ができたよ」

お兄ちゃんは、ベッドの脇の椅子に座って、バングさんがくれたお菓子を勝手に食べながら、いつものようにやる気も覇気もなく返答する。

「そりゃ、良かったな」

そう言った時の優しい気な目は、私と買い物に行く約束をしてるゼンコちゃんを見守るお兄さんと、同じ目をしていた。

やっぱり私たちは、似た者同士ね。ゼンコちゃん。

## 私を守ってくれた人

眼が醒めた。

「かすかな物音で起きる程、私は神経質でも眠りが浅いわけじゃないから、きつとただの偶然。」

それとも、もしかしたら起こされたのかもしれない。

「……ソニックさん？」

寝起きがさして良いわけでもないのに、暗闇の溶けるような黒装束姿の彼がベッドの脇に立って、私を見下ろしているのがはつきりとわかった。

彼は、私を見下ろしながら心底あきれ果てた顔をして言う。

「お前は本当に、バカだな」

私、この人と会うたびにまず初めに呆れられてるなーと思いつつ、呆れられて仕方ない事ばかりやってる自覚もあるので、その言葉には曖昧な笑いしか返せない。

笑いながら私が「どうしたんですか、ソニックさん。お見舞いに来てくれたんですか？」と尋ねたら、予想通り鼻で笑って「そんなわけあるか」と返される。

その返答は予想出来てたけど、肝心の訪問理由はさっぱりわからな  
い。

「なら、どうしてここに？」

起き上がって尋ねてみてもソニックさんは答えず、ただ不機嫌そうに鼻を鳴らして椅子に乱暴に座る。

付き合いは全く長くないけど結構わかりやすい性格をしてるから、これだけで話す気はないんだろうなと察して、私は訪問理由を知ることとは諦めて別の事を訊いた。

「ソニックさん、お茶は緑茶でいいですか？ ティーバッグですけど」

言いながら、消灯で明かりはつけられないからカーテンを開けて月明りで、湯呑やティーバッグを探る。

ティーバッグやインスタントとはいえ紅茶やコーヒーもあるけど、忍者ならやっぱり緑茶かな？ と根拠もなく思いながら緑茶を探し

出したけど、返答は未だない。

首を傾げながら振り返ると、腕と足を組んで座るソニックさんが目を丸くして私を眺めてた。

あれ？ 私、別に変なこと言っていないよね？

「緑茶はお嫌いですか？」

「……いや。それでいい」

念のために尋ねてみたら、また呆れたように顔を歪ませて、そして今度は何かを諦めたように深い溜息をついたんですけどこの人。

いや、私の緑茶は嫌いかどうかの質問は、確かにおかしいと思うよ。自覚してるよ。

でも、それ以外に訊くことなんかなかったんだもん！ 何をあんなに驚いていたのか、私にはさっぱりなんだもん！

何が何だかわからないまま、とりあえず電気ポットからお湯を注いで、ティーバッグを湯呑に入れる。

味の濃さは本人に任せただ方がいいだろうと思って、私はそのまま湯呑を渡してソニックさんの近くにゴミ箱も置く。

そんな私を、もはや私を見る時のデフォルトとなった呆れた目で眺めながら、ソニックさんは口を開く。

「お前は本当に、何を考えて生きてるんだ？」

濃い目が好きなのか、たぶたぶとティーバッグをお湯に何度も浸しながら、深いのか単純な疑問なのかよくわからないことを訊いてきた。

私は何でお茶いるかどうかを尋ねただけで、こんなこと訊かれてるの？

呆けた顔で質問に答えない私に苛立ったのか、ソニックさんはティーバッグをゴミ箱に投げ入れて、さらに質問を重ねる。

「お前に危機感というものはないのか？ 夜中にヒーロー協会の病院に侵入してきた暗殺者である俺に、茶を勧めるお前は本気で何を考えて生きてる？」

ああ。改めてそう言われたら、確かに私は危機感が皆無で何も考えていなくて、そりゃ呆れ果てて溜息しか出ないわって人間だ。

ソニックさんの言い分は大体合ってるし、自分でも自分のバカさ加減に呆れるけど、一応訂正は入れておこう。

私はベッドに腰かけて、警戒心がないのは誰にでもではなく、あなただからってことだけは、訂正しておく。

「あはは……。呆れて訊かれるのは無理ないですけど、ソニックさん以外だったらもっと当たり前の反応してますよ。

っていうか、下手したらお兄ちゃんとかがこんな時間にここに立ってた方が、ビツクリして悲鳴あげますね。ソニックさんがこういう時間に侵入できたのは、忍者だからって勝手に納得してました」

「……侵入できたのは納得しても、茶を勧める理由にはならんだろ。

お前、俺が暗殺者であることも、お前の兄の命を狙ってることも、理解しているのか？」

私が侵入したことに関して驚きも質問もない事には納得したらしいけど、警戒せずにお茶を勧めたことは納得できないらしく、その勧められたお茶をすすりながら、呆れ続行のまま訊き返す。

けど、私からしたらその質問の方が、「何考えて生きてる」より理解が出来ない。

何故、そんなことを尋ねるのがわからなかった。

「ソニックさんは暗殺者だけど別に殺人狂とかって訳じゃないですから、理由があれば躊躇いなく殺すけど、逆になければあんまり警戒する必要はないでしょう？」

むしろ、警戒心全開でビクビク怯えて顔色伺う対応の方が、見ててムカつくからって理由で殺されそう」

長い付き合いじゃなくても、深い付き合いじゃなくても、それくらいはわかる。

この人は決して褒められるような生き方をしていない人でなしだけど、別に人類の敵ってわけでもない。

決して四六時中警戒しなくちゃいけない人ではないことくらい、私は知ってる。

そう答えると、ソニックさんは湯呑に口をつけたまま、また目を丸くした。

でもその目はすぐに、細くなった。

今度は何か、面白がるように目を細めて彼は私に訊く。

「そうだな。俺は戦いを好むが殺しそのものに快樂は覚えん。だから、理由がなければ無益な殺生はしない。」

……理由がなければ、な」

湯呑をサイドテーブルに置き、言葉だけを残してソニックさんが私の視界から掻き消える。

私の首に冷たい刃物が当てられた時はまだ、ソニックさんの声が耳に残響として残っていた。

この人、ジエノスさんに「頭痛が痛いみたいな名前」って言われるほど強調してるだけあって、本当に速いな。

「お前を殺す理由がないと、本気で思っているのか、エヒメ？

サイタマの妹であるお前を、俺が殺さない理由が？」

背後で苦無だか手裏剣だか刀だかわからないけど、私の首に刃物を当てて楽し気に語るソニックさんに、私は答える。

これも、何でこんなわかりきったことをわざわざ聞くのか、わからない問いだったけど。

「思ってますよ。」

だって、ソニックさんの目的は、お兄ちゃんを苦しませたり悲しませたりすることじゃなくて、本気のお兄ちゃんと戦って勝つことですし。

それも、自分の実力でお兄ちゃんから本気を引き出したって思ってるはずだから、私を人質に取ってお兄ちゃんを呼び出したりするのはあっても、お兄ちゃんの行動を制限させたり、もしくは私を殺してお兄ちゃんに本気を出させるってのは、絶対にしないでしよう？

むしろそれ、ソニックさんがしたいことから一番外れてることですし」

この人は、自分が最強であることを証明するためにお兄ちゃんと戦いたがってるのだから、お兄ちゃんと戦う機会を得るために私を人質に取るとは普通にやるけど（実際、一回されたし）、それ以外は絶対にやらない。



それは、自分の実力ではお兄ちゃんに勝てないと言ってるも同然だ  
という事を理解してるから。

だから、この人は私自身に理由がない限り殺さない。

私の怪我や死でお兄ちゃんが怒って本気を出しても、それは自分の  
実力不足の証明でしかないのだから、むしろ絶対に避ける。

それが、私がソニックさんに基本的に警戒心を抱かない一番の理由  
だったりする。

背中であつと軽く笑った気配と同時に、首に当てられていた刃物が  
離れる。

「お前は弱いくせに凶々しい女だな」

背後でそう、端的に私を言い表した。

知ってますよ、そんなこと。

私たちは似た者同士では決してないのに、どうも互いにどういった  
人間かを把握しやすい相手らしい。

……それが妙に心地よいと思ってるのは私だけか、ソニックさん  
もかまではわからないけど。

\* \* \*

「ふん。まあお前の能天気さはだいたいわかった。が、まだ一つわか  
らんとところがある。

エヒメ、貴様は何で俺がサイタマを殺そうとするのを止めもしない  
？」

あ、ヤバい。答えにくい質問をされた。

……正直に言ったらキレるよね？ ぶっちゃけ、ソニックさんじゃ  
お兄ちゃんに勝てないだろうなーって思ってるから、心配してないっ  
て。

この人、スピード勝負ならまだ未来に可能性はあると思うけど、体  
格からしてスピードを優先して鍛えてるから、筋力も平均以上にあつ  
ても人間離れはしていないよね？

たぶん普通に腕相撲とかの腕力勝負でプリズナーさんや深海王に  
負ける力じゃ、スピードで勝つてもお兄ちゃんを傷つけられずにスタ  
ミナ切れで結局負けそうだとは言えない。言ったらそれこそ、私が殺

される。

「あ、そういえばソニックさん、深海王と戦ったんですか？」

「何故知ってる？　そして話を誤魔化すな」

だから私は強引に話を変える。突っ込まれてるけど気にするな。

「ジェノスさんがシエルターに向かう途中、ソニックさんらしい人に会ったって聞いたので。……その時の格好からして、少なくとも何かひと悶着あったのかなーって思いました」

振り返ってとりあえず前半の問いは、正直に答える。……自分で言った後半の言葉は、思わず目をそらしたけど。

お兄ちゃんといい、プリズナーさんといい、何で私の周りには外で全裸になっても堂々としてる人ばっかなの!?

ジェノスさんに「変質者」って言われた時、もう私は誰に謝ればい  
いかわからなかったんだけど！

私がこんなにも気まずい思いで話したのに、ソニックさんはその時の自分の格好なんて気にせず、「……あのサイボーグと知り合いなのか？」って訊いてきた。自分の全裸はどうでもいいんですかそうですか。プリズナーさんのこと言えませんよあなた。

もちろんこんな突っ込みはなんか急に不機嫌になったソニックさんに言えるわけもなく、普通に「はい。お兄ちゃんのお弟子さんで、ソニックさんに会った後、助けてもらいました」と答えたら、何故か鼻で笑われた。

その反応に首を傾げる暇もなくソニックさんが乱暴に私の腕を掴んだので、反射で短い悲鳴を上げる。

もうだいぶマシになったとはいえまだ包帯が取れない、火傷を負った腕を掴んで、彼は皮肉げに嗤った。

「助けられた？　お前は今の状況を、助けられたと言うのか？」

この腕と体で、この一生消えない痕を身体に残されたお前が助けられた一般人で、深海王を仕留めることも出来なかったくせに修理でさっさと直るサイボーグを、自分を助けたヒーローだと言うのか？」

……その言葉はジェノスさんを、私のヒーローを否定し、侮辱する言葉。

「言います」

だから、私は彼の目を見返して、はつきりと返す。

その言葉は、肯定できない。否定しなくてはいけない。

「ジェノスさんは、私のヒーローです」

例え殺されたって言わないと私は死ぬまで一生、言わなかったという後悔で自分に殺され続けるから。

「そして、あなたもですよ。ソニックさん」

このことも含めて、ね。

## 薄闇に1割の慈しみ

弱いくせに、俺が知る中で誰よりも何よりも強い光を放つ目で、こいつは言う。

自分を守れなかった、この包帯だらけの身体になった原因である役立たずを、「ヒーロー」だと。

同時に、この女は言った。

「そして、あなたもですよ。ソニックさん」

穏やかに、嬉しそうに笑いながら。

「はあ?」

この女の言葉は気持ちの良いくらいにすんなり納得できるものと、何一つわからないものと落差が激しすぎる。その中でも、これは特に意味が分からん。

「あなたも、私にとってはヒーローだと言ってるんですよ」

エヒメは相変わらずへらつとした笑顔を浮かべたまま補足を加えるが、補足を加えられても意味わからんわ。

「確かに、俺はあの魚類と戦ったが、お前の為なんかではない」

そう。俺が奴と戦ったのは、奴があまりにも身の程知らずだったからだ。

遊びの片手間のつもりが、雨のせいで強化され、業腹だが本来の力を取り戻した奴相手に、丸腰の俺では敗色が強かったから、装備を取りに戻った。

それも最強たる俺があんな奴に負けるなどあり得ない、俺が最強である証明の為に装備を整え、打ち勝つつもりだった。

全ては俺自身の為だ。

お前なんかの為じゃない。

そう言っても、この女は笑う。

あまりにも無垢に、無邪気に、無防備に笑って俺に言う。

「知ってますよ、それくらい。」

でも、あなたは深海王と戦ってくれた。たとえ数分でも、片手間の遊び、暇つぶしでも、その数分間、奴を足止めしてくれた。

その時間が、ジェノスさんがやってくるまで、無免ライダーさんがやってくるまで、そしてお兄ちゃんが来るまでの、大事な時間になった。

あなたがいなければこの程度の怪我どころか、私はジェノスさんが来る前に深海王に殺されていました。

……ソニツクさんの数分間の遊びが、私はもちろん、たくさんの人を守り、救う大事な要因になりました。

だから、ありがとうございます、ソニツクさん。

たくさんの人達を、ジェノスさんや無免ライダーさん達を、私を助けてくれてありがとうございます」

……この女は、本当にバカだ。

勝てなかった、決着を着けられなかった俺に、あの屈辱的な撤退に、消化不良な結末に、意味を、価値を見出すのか？

他人なんかどうでもいいいくせに、こいつは自分だけではなく、他人も助かったことに対してこんなふうに笑って礼を伝えるのか？

何もしなかったからこそお前と違って怪我也せず助かった愚劣なクズどもを、正義ごっこの自己満足に酔うヒーローなんて存在が助かったことに、どうしてこんなにも喜びを感じられるんだ？

……ああ。どうしてこいつは、知れば知るほどにむしろわからなくなっていくんだ。

こいつがいつそ他人に奉仕することが至上の幸福である、聖人という名のDMならまだ納得もできるが、俺はこいつが他人をどう思っているか知っている。

「エヒメ、貴様にとって『他人』とは何だ？」

俺の問いに、もう何度も見た訳が分からないと言わんばかりのキョトン顔で、それでもこの女はしれっと答える。

「どうでもいい人ですけど？」

そうだ。この女は、聖人かエゴイストかと分けるのが、そもその間違いだ。

こいつは、エゴイストな聖人だ。

それも自分の行いが正しいと疑わず、他人にひたすら自分ルールを

押し付ける独善者ではなく、精神性は性善説を体現しているくせに、性格そのものは人間らしく身勝手に自分本位で、「他人の為」と取り繕わず「自分の為」と言い切つて己を削る。

そして実際、それは他人に罪悪感を与えない為ではなく、むしろ自分自身が罪悪感を背負わぬ為にだ。

……何とかこの女は、平凡に見えて得もしないのに稀有なものを持つて生まれ落ちたな。

聖人の本能にごく普通、一般的な人間の理性が乗っかかってるとでもいふべきか。

……こういう、本物の性善説の体現者を、俺は別に否定しない。

世間では聖人君子と言われていたのが、裏ではド外道、死ぬ間際の命乞いはクソにも劣る輩など飽きるほど見てきたが、逆にどれだけ凄惨な拷問を受けても世間通りの聖人君子を保つ奴も、数多の恨みを買いつつながら、家族など特定の人物のみとはいえ、自分を犠牲にしても守り抜く人間も、前者と比べたら圧倒的に少ないが、それでも見てきた。

そういう輩は、目が痛くなるほどの光を放っているように俺は見える。

あの忌々しいサイタマも、同種だ。

特にあいつは、裸眼で太陽を見ているように思える。頭の所為か？

そういう輩が、俺は大っ嫌いだ。

自分に酔う偽善者、正義ごっこに耽溺する独善者も胸糞が悪くなる存在だが、そいつらは一皮めくれば、俺とそう変わらない闇の住人だ。そのことに気付かず、気付いていないふりをして、まるで電飾を着飾って自分自身で光を放つてると思いこんでいる道化は滑稽で、その破滅は見ていてそれなりに面白いからまだ許容できる。

しかし本物の聖人という奴は、その圧倒的な光で俺のような闇の住人の居場所を否定し、奪う。

闇で生きることが否定し、影として存在することを憐れみ、俺のしてきたこと、成し遂げたことを醜いと言って、光で塗り潰してなかったことにする。

全くもって、忌々しい。

「……ソニックさん？」

エヒメが、不思議そうな顔で俺を見上げる。

自分勝手に他人なんかどうでもいい癖に、その他人の安否を気にして、無事なら微笑む、穢れない女。

「お前は、薄闇のような女だな」

「はい？」

俺の言葉で更にこいつの瞳は疑問で染まり、頭上に疑問符が大量に浮かんでそうな顔になる。

この女も、サイタマと同じく自力で光を放つ女だ。

ただ、その光はあまりに小さく、弱々しい。

サイタマが太陽なら、こいつは蠟燭どころか線香程度だ。

間違いなく聖人のくせに、エゴが強いから闇を消し去るほどの光を放てない。せいぜい、己の手すら見えないほどの闇を薄闇にするくらいだ。

だから、光の世界にいれば、この女の光は他の光に塗りつぶされて存在していないことになるか、その程度の小さな光は「本物」と認められず、「偽善」と言われて虐げられる。

逆に闇に身を置けば、己の醜さから目をそらしていたい、暗闇に隠れていた奴に、もしくは自分で輝くことなどできなくせに光側の住人だと思ひ込みたい奴らに、電飾代わりに目をつけられる。

……結局、この女の光はどこにいても奪われるか消されるしかない。

今ここに存在していることが、奇跡に近い。

その「奇跡」から、火傷に覆われた腕から俺は手を離し、代わりに一枚の紙を弾いて渡す。

「今日、ここに来た理由はこれだ。登録してこつちにも連絡しろ」  
「え？」

渡した紙、俺の連絡先を記した紙と俺を交互に見て、エヒメはますます困惑する。

こいつには毎回散々、意味わからん言動で振り回されるから、こう

やって困惑する様を見るのはいつも少し楽しい。

「まだ、サイタマを倒すための奥義は完成していない。

それが完成したい、俺が連絡するからお前はサイタマを俺の元まで連れて来い。それが、お前に貸した恩の代金だ」

自分の兄を殺すと宣言しているのに、やはりこいつは何がそんなに嬉しいのか、へらりと笑って、俺の連絡先を大事そうに胸に抱いて言う。

「わかりました。しがみついて、連れて行きますね」

そういえば、俺がサイタマを殺そうとしてもこいつが止めない理由を結局聞いてないな。

まあ、いい。もう少ししたら、見回りが来る時間帯だ。面倒事が起こる前に立ち去ろうと、俺が窓を開けた時、エヒメが俺に言う。

「ソニックさん、来てくれてありがとうございます」

見舞いではないと言ったはずなのに、こいつはそう言って笑う。

月明りに照らされた薄闇の病室で、薄闇のような女は柔らかく、闇を否定せず、闇を闇のままに受け入れて、仄かに照らして笑っていた。

光のくせに、闇に価値を見出して、笑った。

……こいつの光は、どこでも長くはもたない。

何処にいても消されるか、奪われるかの結末しかない。

それほど儂くて弱々しい、小さな光に過ぎない。

その光がいつか消されるのならば、奪われるのなら、その役目は俺が良い。

忌まわしい太陽のような聖人や、電飾で着飾った偽善者、身を隠していただけの臆病者に消されて奪われるくらいなら、俺の手で完全に、完膚なきまでに消してやりたいとあの日、深海王と対峙した時に思った。

あんな半端に誰かに奪われて、手垢がつけられるくらいなら、新雪を自分勝手に遊び尽くすように、跡形もなく汚し尽くして壊し尽くして、原型など残さずにその光を消し去ってしまいたいと、思った。

気に入った女だからこそ、他の奴に手を出されたくない。俺が、俺だけの手で、完全にこの女の光を奪い尽くして消し去って、完全な闇



にしていまいたいと思っていた。

……だからこれは、ただの気の迷い。

もしか、と思った。

あり得ないとは分かっている。今が奇跡だということも。

けれどもしも、この奇跡がもつと続くのなら。

この小さな光を、もつと保つことが出来るのなら。

……守ることで、闇を闇のまま受け入れる光がずっとここにあるのなら。

この薄闇が、ずっとあり続けるのなら。

その役割を担うこともやぶさかではない、なんて考えは、気の迷いだ。

だから俺は、その迷いを振り切るために窓から降りた。

……たった5階程度では、まったく高さが足りずにその迷いはしがみついたままだったが、その迷いを無視して俺は駆ける。

この音速でも振り払えない迷いに、別の名前なんて俺はつけない。

これは、迷いに過ぎないんだ。

## ボロス編

### 最果ての孤独

気がついたら、知らない所にいた。

イメージとしては、ゲームのラスボスの間？

やたらと広くて一本一本が某ロボットサイズくらいありそうな柱が何本も立ち、中心には建物3階分くらい高さのある巨大な台座。その奥には、強く光り輝くやっぱり巨大な球体が浮かんでいた。

うん、やっぱりどう考えてもこれはラスボスの間です。

そんな広くて重々しい場所に、場違い感が半端ないパジャマ姿で私は、ぼんやりと立っていた。

一瞬、テレポートの暴走で知らない所に無意識に跳んだのかと思っただけど、その焦りを吹き飛ばす者が現れる。

真っ黒い、タコのような生き物。

私の身の丈3倍近くあるその生き物を見て、私はさすがにこれは即座にテレポートで逃げようと思った。武器もない、味方もいない、そもそもここがどこかも状況もわかっていないここで「逃げない」を選択するのは、ただの自殺行為でしかないわ。

でも、その怪人は確かにまっすぐ私の方を見たのに、視線は私を素通りして、私を無視して横を通り過ぎる。

その際、怪人の足の一本が確かに私の身体に触れたはずなのに、怪人の視線と同じくその足は私の身体を素通りして、ようやく気付く。

あ、これ夢だつて。

稀に、こういう内容はともかく感覚がリアルな夢を見る。

昔、テレポートがまだ使えない頃は毎日のように見ていた気がする。

知らない場所についての間にか自分がいて、そして幽霊のように誰にも見えない触れられないで、ただ勝手気ままにその辺を歩き回る。そういう夢。

テレポートが使えるようになって、お兄ちゃんと暮らし始めてから

激減したから、あれもストレスによる逃避の一種だったんだろうな。最近、こういう夢を見るのはストレスが溜まってるというより、疲れてる時だけ。

たぶん、ようやく退院して家に帰って来たけど、入院生活で家事の勘が鈍ってたから疲れちゃったんだろう。

ジェノスさんが色々気を遣って、何かと手伝おうとしてくれたんだけど、気持ちにはありがたいけどこっちも気を遣いすぎたから、それも原因かもね。

きつとそういう理由で久しぶりにこんな夢を見るんだと納得して、ならいつも通り探検でもしようと思った。

それにしても……いつもなら知らない所でも町中だったり山の中だったり、普通に地球上に存在しているであろう場所ばかりだったのに、こんなSFなのかファンタジーなのかよくわからない所は初めてだなー。

初っ端で、怪人に会ったのも。

そんなことを思いながら、私はさつき素通りした怪人に目を向けたら、実はもう一人いた。

タコ型怪人よりはるかに人間らしい外見で、タコと比べたら小さいけどそれでも2mは超えてるかな？

重々しい鎧で身を固め、ツンツンにとがった髪と、ファンタジー系RPGゲームの主人公っぽい。

けれどよく見てみたら、肌は紫色、目は顔の中心に巨大なのが一つだけぎよろりなので、後姿は主人公だけど、前を向けばラスボスですね、どう見ても。

そんな完全に人外な外見だけど、私が今まで見た人型の怪人、もしくは人が怪人化したものの中で一番、カッコいいと思った。

顔面格差つてすごいね。単眼でもイケメンって存在するんだ。

そんな実にもどうでもいいことを考えながら、二人……でカウントはあってるのかな？ まあいいや。その怪人二人は、侵入者がどうのこうのという会話を少ししてから、タコの方はこのラスボスの間から出て行った。

残されたのは、このラスボスの間によくお似合いの、単眼イケメン怪人さん。

会話の感じからして、ラスボスかどうかまではわからないけど、少なくともタコ怪人よりは上の立場らしい。

っていうか、今日の夢は本当に珍しいパターン。怪人のアジト設定なのかなここは。

この珍しいパターンはぜひとも堪能しなくちゃと思い、私は別の場所にも行ってみようと、ラスボスさんに背を向けて、タコ怪人が出て行った、これまた巨大な扉に向かった。

と同時に、何か光球が飛んで来て目の前で炸裂する。

っていうか、この光球、間違いなく私をすり抜けて爆発したよ。

何これいきなりどういう事!?

見えてないんだからただの事故、偶然、っていうか夢なんだからそもそも普通に喰らっても大丈夫だと思うけど、さすがにびっくりしたので思わず振り返ってラスボスさんを睨む。

根拠はないけど、あの光球はラスボスさんがやらかしたことだと思いい込んでいた。

まあもちろん、ラスボスさんは見えない私の視線なんかすり抜けて、光球ぶつ放した理由か何かを処理するだろうと思って、疑ってもしなかった。

たった一つの大きな目が、きよとんという擬音が似合いそうな感じでバッチリこちらの目と合うまで。

単眼の私が勝手にラスボス認定してる怪人は、腕を組んだまままだ不思議そうに眼を瞬いて、そして言う。

「何者だ、貴様」

……どれもこれも初めてのパターンだけど、この夢で私が認識されるのは本当に初めてだなあといいながら、私は答える。

「……迷子？」

おかしいのはわかり切ってる答えだけど、その答えは何故かラスボスさんのツポにはまったらしく、彼は少し表情を綻ばせて嘖き出した。

\*\*\*

「地球は精神体だけを分離させて、宇宙まで遊泳する技術でも持っているのか？」

「いえ、これ私自身がどうしてこうなってるかわかってませんから。っていうか、今も変な夢だなーって思ってますから」

何故か私は、ラスボス改め暗黒盗賊団ダークマター頭目であり、全宇宙の覇者ボロスさんと会話してる。

……どうしてこうなった？

私の「迷子？」発言の直後、いきなり室内でボロスさんが攻撃したことに驚いたのか、さっきまで会話してたタコとか、その他いろいろ多種多様な怪人がやってきて「何事ですか、ボロス様!？」とか言ってる焦ってた。この時、私はこの人の名前を知った。

で、かなりの人数が何事かと心配して駆けつけたのだけど、やっぱりボロスさん以外に私を見える人はいなくて、思わず一回、ボロスさんと私は顔を見合わせた。

自分以外には見えないし、自分を含めて誰も私を触れないし、私も怪人たちや壁をすり抜けるので、説明のしようもなく、彼自身も困惑してたんだろうなあ。

とりあえず自分の部下たちに「何でもない」と言ってお下らせて再び彼は、私に「貴様はどうやってここまでやって来た？」と訊いた。

嘘をつく意味なんてあるのかなのかさえもわからない状況だったので、私は真つ正直に「気がついたらここにいて、自分がたぶん一番、現状を理解してない。っていうか、あなた誰ですか？」って言うちゃった。

私のそのいつそ開き直った対応が新鮮だったのか、彼は「迷子？」発言と同じように少し吹き出して、自分の事、ここは宇宙船の中であること、気がついたら私がぼーつとここに突っ立っていて、初めは侵入者かと思ったことなどを話し、今に至る。

あのタコ怪人との話は、私の事だったのか。

……うん。わかってる。わかってるよ。

そろそろこれは夢じゃなくて、私、幽体離脱なんかでマジで宇宙

まで来ちやってるんじゃないかってことくらいわかってるよ。

でも夢ってことにしておいて。魂が宇宙までやってきて、自分の体は大丈夫なのかとか、ちゃんと体に戻れるのかを考えたら不安で怖くて仕方ないから、これは夢だってことにしてお願ひ！

そうやって自分自身に拝み倒して、夢だと言い聞かせて私はボロスさんと語る。何か話してないと、やってられない。

「ところで、ボロスさんは地球に向かってるようですけど、何のご予定で？」

侵略なら、正直ご遠慮してほしいんですが」

「貴様は気持ちの良いくらいに真つ正直に言うな。

遠慮はしてやらんが、安心しろ。目的は侵略でも略奪でもない」

台座に腰かけて私を見下ろし、おかしげに喉を鳴らして笑いながらボロスさんは答える。

いやいや、私はずいぶん遠慮して話していますよ。遠慮なしなら、迷惑だから帰れって言ってますよ。

「目的は、戦いだ。

地球に、全宇宙の覇者となった俺と対等に戦い、楽しませる者がいると予言された。そいつと戦うことが目的だ」

「それもご遠慮お願いします」

実にいい笑顔で言いやがった言葉に、喉まで出かかった「迷惑だから帰れ」を何とか穏便に言い繕った。

侵略や略奪の方が、交渉の余地があつてマシンなんですけどボロスさん。

「それは出来ん。これは、20年かけた悲願だ」

「20年？」

私の要望はもちろん、あっさり却下された。元々、私の一言で諦めるとは思つてなかつたけど、思つた以上に長い年月をかけてた。そりゃ、諦められないわ。

……でも、私は思う。

そして、思つたままに訊く。

きつとこれを夢だと思つていなくなつたら、さっきの光球がすり抜け

て、私に攻撃は効かないってことがわかってなかったら、怖気づいて  
言えなかったことを訊いてみた。

「それ、勝ったらどうするんですか？」

私の問いに、またボロスさんはきよとんとした目になって、こちら  
を見据える。

なんとなく、この目は幼い子供みたいで可愛いなと場違いなことを  
感じた。

そんなことを思いながら、私はボロスさんを見上げて質問を重ね  
る。

「勝ったら、次は何処に行くかの当てはあるんですか？」

今度の質問では、わずかだけど顔を歪めた。

その反応で、わかる。

「ないんですね」

この人の期待を、飢餓感を、不安を、虚しさを、私は知っている。

一番近くで、同じものを見てきたから、知っている。

顔の歪みが、不快感が大きくなってるのはわかっている。

もしかしたら、攻撃が効かないことを承知でもう一回、さつきより  
もはるかに強力な攻撃をされるかもしれない。

そしてこれが本当に幽体離脱なら、もしかしたら何らかの影響があ  
るかもしれない。

そんな予想や不安が頭によぎるけど、まだどこか夢だと思ってる私  
はそれらが全部他人事のようにしか感じられなかった。

だから、言いたいことをそのまま言った。

「最強はなれたら嬉しいですけど、無敵って寂しいですよ」

ただ思ったこと、お兄ちゃんを見てていつも感じることに、その埋め  
てあげたい孤独に同意した瞬間、ボロスさんがまた、きよとんとした  
顔になった。

自分の攻撃が私には効かなかった時、私が振り返って目が会った時  
と同じ顔で、その時以上に不思議そうに私を見ていた。

その理由は、私にはわからなかった

この夢は誰も知らない

不思議そうな顔のまま、ボロスさんは私に問う。

「貴様にとって、『最強』と『無敵』は違うのか？」

その質問に、思わず私が首を傾げた。

私にとってそれは、明確に別物だったから何故問われるのかすらよくわからなかったから。

まあ、何かナチュラルに会話が成立してるけど、よく考えなくてもこの人、宇宙人なんだよね。

翻訳機的な何かのおかげで、私との会話が成立してるんなら、もしかしたらボロスさんには同じ単語に聞こえてるのかもしれない。

そう思っ、私は答える。

「最強はもつとも強くて、無敵は敵がないですけど？」

「誰がそのまま漢字を分解しろと言った」

私の答えに、怒るのもバカらしいと言わんばかりに呆れて、ボロスさんが即座に突っ込んだ。

ちゃんと意味を把握してたよ。漢字も理解できてたよ。

何なの？ 地球に来るまでの20年間で地球の言葉を調べて覚えてたの？ 努力家だな。

けど、こうなると私はどういったらいいかわからなくなる。明確に意味が違うけど私にとってその違いは、右と左って何が違うの？ つてレベルで当たり前すぎて、どう説明したらいいかわからない。

「えーと……あ、私の定義で言えば、ボロスさんは別に無敵じゃなかった」

どう説明しようか考えてたら、そもそもこの人は私にとって「無敵」の定義に当てはまらないことに気付く。

「どういう意味だ？ 俺の強さを疑う気か？」

無敵を否定されたのがちよつと腹立ったのか、ボロスさんの声に棘が混じるけど、別に私は疑った訳じゃないから平然と言い返せた。

「いいえ。ただ、あなたはあんなに多くの20年も付き従ってくれる部下に恵まれている。」



あなたに勝てる人はいなくても、あなたの周りには誰かがいる。だから、あなたは『無敵』じゃないです」

ああ、そうか。私にとって「無敵」は「孤独」と同意語なんだ。敵がいけないという事は、味方が必要ないという事だと私は思う。

そして、悲しいけど一番の敵になりうるのは他人より身近にいる人。

……そういう身近だった人、味方だった人を「敵」と認識できないのは、「敵」ではないのなら、それはもはや強い弱いの問題ではなく、心の問題。

一人きりで生きていける人か、そうじゃないかという問題だと思う。

「まあ、だから次に行く当てがなくても落ち込まないでくださいよ。あなたには戦いの飢餓を癒す人はいなくても、それ以外で何かを満たす人はきつといますから。」

っていうか、もう今から別の事に目を向けてくれませんか？」

「貴様、最後が本音だろう」

また呆れたように突っ込まれたけど、強さを疑われたという怒気は消えている。

そして、凶星を突かれてちよつと私は困る。いや、最後だけじゃないって全部本音なんですけど、一番言いたいことは確かにそこなんだよなあ。

まあいいや。猫被つてもしょうがないから、最低限の礼儀くらいは残して私は開き直る。

「そりやそうでしょう。あなたがどのくらいの強さかは正直知らないけど、宇宙で手が付けられなくなった人が地球で戦ったら、どっちが勝つても負けても、星そのものにダメージ大ですもん。」

だから、戦い以外の何かに目を向けて、それで飢餓を癒してくださいよ。

弟子を取って鍛えてみるとか、未開発の惑星を開発してみるとか、地球に来るのも観光でしたら、私は止めませんよ」

私の言葉は、宇宙の覇者に鼻で笑われる。

「くだらん。」

貴様のような女にはわからんだろうが、俺から戦いを奪うという事は、死と同義だ。命の取り合い、死と隣り合わせのせめぎ合いだけが、生の実感を与えてくれる。

貴様が言うような、弟子の育成や惑星の開発でそれが得られるか？

一瞬の油断が、失敗が全てを失う緊張感、絶望的状况に打ち勝つ高揚と達成感を得られるのか？」

女って言ったってことは雌雄の区別つくんだと、ものすごくどうでもいいことを思いつつ、私はボロスさんの言葉に言い返す。

「全然別の事なんですから、そりゃ同じものは得られませんよ。」

そもそも、その戦いで得られるものをもう取りつくしちやっつてんですから、他のに目を向けろって言うてるんですよ」

私の言い分を論破したつもりが、そのことをわかっているからこそ、の言い分であることを指摘したら、怒るかと思ったボロスさんが、少しだけきまり悪げに溜息をついた。

「……ああ。そうだな。貴様の方が正しい。」

俺は、強くなりすぎた。俺が欲した戦いの緊張や高揚は、俺自身の手で奪い尽くした」

彼は寂しげに遠い処を見るように、目を細める。

遠い昔を懐かしむような目は、すぐに伏せられる。

懐かしみたかったけど、それはもうどんなに目を凝らしても見えないくらい、思い出せないくらい、遠かったのかもしれない。

「俺はただ、誰よりも何よりも強くなりたかった。ただそのために、がむしやらに戦い、打ち勝ち、生き残ってきた。そして、今の立場を、強さを得た。」

……その結果が、欲しかったものは決してもう手に入らないという飢餓感と虚しさだ」

自分以外誰も登ってこれない、寄り添うものがない頂点に登ってしまった人が語る。

きつと誰にも、聞かせたことのない言葉だった。

自分も目をそらして、見ないようにしてきた強者ゆえの弱音を、私

に吐露したのは何故か、それは私にはわからない。

遠慮なく私が正射してしまっただからか、この夢か幻かわからない曖昧な存在の私だからか、ずっと誰かに吐き出してしまいたかったからか、それは、わからない。

「だからこそ、この悲願は諦められんな。」

俺はこの20年、この予言だけを希望に、この飢餓に耐えてきた。もう俺は飢え死に寸前だ。今更、他のものではこの飢餓は満たせん。

……例え、この後に目的を失い、更なる飢餓と虚しさを抱え込むことになってもな」

伏せていた眼を開き、ボロスさんは立ち上がって私を一つの目で見下ろし、宣言する。

私の言葉に意味はない。

地球が滅びようがどうなるうが、自分には関係ない。

ただ、自分が求める戦いを、飢餓を癒し虚しさを埋めるものを諦めないと言い切る。

それは本来なら、絶望すべき宣言だったはず。

だけど、私にとってそれは、ほんの少しだけ嬉しいと思ってしまう言葉だった。

だって、他の被害を考えなければそれは、虚しさを埋められるのはボロスさんだけじゃないから。

「ならせめて、死人を出さないください。その目的の人に会うまで。そうしたら、きっとあなたは目的を失わない。」

その飢餓は、虚しさはもう抱えこまなくて済みますよ」

だから私は伝え、お願いする。唯一の懸念、他への被害を最低限に。それさえ行ってくれたら、あとは好きにしてとしか思わない。

そんな考えだからケロツと笑って答えた私に、もう何度目かわからないけど、ボロスさんはポカンとただ私を見下ろす。

どんなに威厳たつぷりな全宇宙の覇者でも、中身は特に意味もなく強くなりたいと望む、当たり前でありきたりな子供のままの彼が、少しおかしくて、そしてどうしようもなく私の大切な人を彷彿させるから。

だから私は伝える。

死人さえ出さなければ、あなたは見逃してもらえない。  
チャンスを、くれる。

「その予言の人、絶対に私のお兄ちゃんですから。

あと、その予言外れてるか、ボロスさんが来るの少し遅れてしまってますね。

お兄ちゃん、ボロスさんより強いですよ」

あなたは確実に負ける。

そう伝えても、ボロスさんからは怒らなかつた。

ただ、たった一つの目を見開いて、私の言葉を聞いていた。

「けどあなたは多分、お兄ちゃんが戦った中で一番強いから、だからお兄ちゃんもあなたを気に入ると思います。

だから、あなたが死人を出さなければ、人類の脅威に、敵になりさえしなければ、お兄ちゃんはあなたを殺しません。

同情とかじゃなくて、美味しいものは最後のお楽しみにするみたいな感じで、あなたがさらに強くなつて、もつといい戦いを出来るのを期待して、生かすと思います。

だから……、誰も殺さないでくださいね」

私の言葉に数秒間をあけて、ボロスさんが再び目を伏せる。

そしてそのまま、笑いだした。

私の発言にちよいちよい噴き出していたけど、そんなのとは比べ物にならないほど大笑いしだして、私は意味が分からずに引く。

自分で言つといてなんだけど、キレられてもおかしくない発言はしたけど、爆笑するようなこと言つたっけ？

「はははっ！ この俺に向つて、怯えもせずに言いたい放題のなんて肝の据わった女だとは思っていたが、なるほど！

貴様の身内が予言の相手か！

そして、その予言が外れてる、俺が負けると言い切るほどか!!」

……どうも、おかしかつたから笑つてるというより、歓喜のあまり笑つてるらしい。

ちよつとホツとしたけど、どんだけ戦闘狂なんだこの宇宙人は。

ボロスさんの笑いはしばらくしたら落ち着いたけど、自分より強いと言いきられた相手がいることがそんなに嬉しいのか、彼は終始楽しそうだった。

それこそこの場に相応しいラスボスオーラが霧散して、遠足前の子供のような雰囲気で、彼は台座から降りる。

かなりの高さがあったのに、猫のようにほとんど物音を立てずに彼は降り立ち、私に近づく。

そして私に手を伸ばす。

けど、その手は触れられない。私をすり抜ける。

どうして、私に触れようとしたのか、触れたいと思ったのかはわからない。

ただ、自分の手が私をすり抜けた時、ほんの少しだけ惜しむように見えた。

「貴様の名前は何だ？」

少しだけすり抜けた手を彷徨わせてから、彼は言う。

もう何かを惜しむ顔はしていない。ただ穏やかに、彼は笑ってる。

そう言えば、私の方は名乗っていなかつたことを今更思い出し、私が答えると彼は笑みを少しだけ深めて言葉を続けた。

「そうか。エヒメ、礼を言おう。戦い以外に、もう一つ楽しみが増えたことにな」

楽しみ？

私は彼の言いたいことが理解できなくて首を傾げると、ボロスさんは少しだけ意地悪気に笑う。

「貴様は少し、面白い。俺を恐れもせず、言いたいことを全て言うのが新鮮だ。」

……だから、貴様はこのダークマターの獲物だ。勝負に勝っても負けても、貴様は俺がもらう」

なんかすごい宣言された。

いや、私が言いたいこと言ってるのは少なくとも生身じゃないからだし、これでも色々とおブラートに包んでるよ。

……けど、まあいいか。もちろん、私は宇宙に旅立つ気はさらさら

ないけど、この人が他の何かに目を向けてくれるきっかけになるのなら、それでいいやと思えた。

お兄ちゃんと同じ孤独を抱えるこの人を、私は憎めないし恐れることも出来なかったから。

幸せになつて欲しいと、願つてしまったから。

でもマジで獲物認定は勘弁してほしいので、私はお望みの通り言いたいことを言つてやる。

「お兄ちゃんに勝てない人が、私を奪い取れるんですか？」

私の無礼さこそを気に入ったボロスさんは、私の挑発をむしろ嬉しそうに、楽しそうに聞きながら、「勝てないと思うのは、貴様の勝手な予想だろうが」と言い返す。

そう、これは私の勝手な予想。

でもあなたは、お兄ちゃんには勝てないよ。

趣味とはいえ、趣味だからこそ何一つ妥協せず、本気で「ヒーロー」を貫き通すあの人に、守るものはなくただ強くなりただけでここまできてしまったあなたでは、背負うものが違うから。

背負うものがあるからこそ、生き物は大きな力に押し負けそうになつても、倒れないように踏ん張ることが出来るのだから。

だから、あなたにはまだ無理。

そのことにこの人は気付けるだろうかと不安がよぎった時、自分のパジャマのポケットに中が入つてることに気付いた。

それが何かを思い出し、少しだけ私の顔は自然に綻んだ。

「でもまあ、どうしてもつていうのなら、お友達にならなくてもいいですよ」

言いながら、私はポケットに入っていたものを取り出して、ボロスさんに差し出す。

寝る前に、入院生活中の入眠儀式と化していたので、ついつい折つてしまつてた折り鶴。

大きな鶴の翼にもう一羽、小さな鶴が繋がった連鶴を差し出し、言う。

「そしたら、折り鶴くらい教えますから」

友達が出来たきつかけ。私が一番好きな、大きな存在にか弱くてもしつかりと寄り添って離れない鶴を差し出して、願う。

孤独なあなたの背負うものにはなれなくても、ほんの時々でも寄り添える存在になることを。

あなたが背負って、守って行きたい誰かを見つけられることを、願う。

まあもちろん、笑って「いらんわ」と言われると思っていたけど、表情は予想通りだったけど言葉が少し違ってた。

「貴様は本物のバカだな」

その辛辣で的確な言葉に何も、言い返せなかった。

言い返す前に、私は目覚めた。

そして、窓から差し込む朝日が夢の記憶を緩やかに、けれどあまりにもあつさり溶かしつくしてしまった。

夢を見たことすら忘れて、私は起き上がった。

\* \* \*

今日はバングさんの道場にお呼ばれしてるから、ちゃつちやと準備しなくちやと、眠い目をこすって着替え、パジャマは洗濯物ボックスに入れて、顔を洗う。

冷たい水でようやく目がはつきりと覚め、頭がちやんと働くようになってから、ふと昨日の事を思い出し、洗濯物ボックスを開けて自分のパジャマを取り出した。

危ない危ない。そういえば昨日、寝る前につい癖になって折り紙を折ってたら、トイレに入ったお兄ちゃんが紙を切らしていることに気付いて呼ばれて、その時、とつさにポケットに折ってた鶴を入れちゃってたんだった。

危うく、入れたまま洗濯しちゃうところだったと思いながら、パジャマのポケットを探ったけど、左右どちらも空。

「あれ？」

パジャマだけじゃなくて他の洗濯物も洗濯物ボックスから出して、ボックスそのものを探ってみたけど、ポケットから零れ落ちたわけでもないらしく、どこにも折り鶴は見つからない。

「……勘違いだったのかな？」

私はそう結論付けて、洗濯物を仕舞い直して歯ブラシを手に取った。

夢の事は、何も思い出せなかった。

そしてこれからも、思い出せない。



## 懐かしい名前と新たな出会い

岩のような力強さと、水の流れのような流麗さを併せ持つその動きは、武道なんてほとんど興味が無い私でも綺麗だと思った。

一通りの型を見せてから、バングさんは私たちにもう何度目かわからない勧誘をするけど、お兄ちゃんとジエノスさんはいつものようにあっさり断り、私も申し訳ないけどお断りする。

バングさんの流水岩碎拳は護身術の側面が強いけど、それでも私は怖いと思ってしまったから。

……お兄ちゃんに怒ってぶつ時とは全然違う、生き物を傷つける感覚に私は多分一生慣れない。

今も、火傷の痛みよりあの深海王の目を貫いた感触が残ってる。

だから、もうお断りするのも心苦しいから諦めて欲しいんだけど、バングさんは何故かお兄ちゃんやジエノスさんより私に一番教えたいらしく、勧誘を諦めてくれない。

今も、お兄ちゃんに「女の子じゃからこそ、護身術の一つや二つ知っておいた方が、サイタマ君も安心じゃろ?」と言って、外堀を固めようとしている。

「やめてくれよ、じーさん。こいつが武術覚えたら、俺がケンカで勝てなくなる。ただでさえ、今でも勝ち目がねーのに」

「余裕で勝てるでしょ! その言い方、誤解を招くからやめて!!」

お兄ちゃんの断り文句に、抗議の声をあげる。

やめてよ、そういう言い方するの! ジエノスさんが実は私がお兄ちゃんより強いって思ったらどうするんだ!?

現に今一瞬、ものすごい驚愕の表情浮かべて私を見たよ!

「そうだ、バング。そんなものは必要ない。エヒメさんに対する危機は、俺が全て排除する。」

……もう二度と、深海王の時のような失態は犯さない」

「貴様ら! 流水岩碎拳を愚弄するか! バング先生の一番弟子、チャランコ参る!」

私とお兄ちゃんが言い争ってる横で、ジエノスさんの言葉に怒っ

て、バングさんのお弟子さんとジェノスさんの戦いが始まつちやつた。

一秒もかからず、ジェノスさん勝利で終わったけど。

弱っ！ 一番弟子さん弱いよ！ っていうか、よく見たら白帯だ！ ジェノスさんもバングさんの弟子には、言つては何だけどそぐわない実力を不思議に思つて尋ねたら、バングさんが少しだけ間をあけて答えた。

「ん……まあ、弟子の一人が暴れおつて……、実力派の弟子たちを全て再起不能にしてみましたせいで、他の門下生も恐れてやめてしまうたわ」

ああ、何でお弟子さんが一人しか今日はいないのかなって思つていたら、本当に今、一人だけなんだ。

そりや、私やお兄ちゃんたちの勧誘を諦めないよね。

お兄ちゃんはその暴れたお弟子さんに興味を持つて、名前を尋ねる。

もう怪人だつてワンパン終了なのに、それでもお兄ちゃんは諦めずに求めている。

自分と互角に、戦える相手を。

闘争の飢餓を満たす存在を。

……そのことはもうすでにわかり切つてることなのに、なぜか今、すごく不安になった。

お兄ちゃんが、自分と対等に戦える相手を求めて、私がどれだけレポートしても届かない所まで行つてしまう気がした。

「ガロウ……」

「え？」

けどその急に浮かんだ不安は、バングさんの口から出た名前で霧散した。

「？ エヒメさん、どうかしましたか？」

思わず出た声に反応したジェノスさんが尋ね、私は「何でもないです」とだけ答える。

実際、何でもないし。

ただ、同じ名前の人を知っているだけ。

もう10年以上前、小学生の頃の友達と同じ名前が出て、思わずビックリしただけだったから。

私は、同じ名前としか思っていないかった。

私の記憶の中の「彼」と、バングさんの破門したお弟子さんは重ならなかったから。

あの優しい子が、そんなことするわけない。

そう、思ったから。

\* \* \*

嚴重堅牢な扉が開き、私たちは先に進む。

……ジエノスさんやバングさんはもちろんいいとして、お兄ちゃんは気にしないからいいだろうけど、私は何でここにいるのかわからなくって妙に緊張してしまう。

あの後すぐ、ヒーロー協会の使いの人が来てS級ヒーローの緊急召集を伝えられた。

もちろん私もお兄ちゃんも関係ないんだけど、S級ヒーローを複数人呼ぶってことは、災害レベル竜が来たという可能性が高い。

それならお兄ちゃんの力が必要だと、ジエノスさんが言ったのはわかる。

だから私は一人で帰って待つてろと言われると思っていたら、お兄ちゃんもジエノスさんも、バングさんまでも一緒に来ていいと言ってくれた。

私が一人で待つて寂しくないように、不安に押しつぶされないようにと、気を遣ってくれたのが嬉しくてお言葉に甘えちゃったけど……場違い感が半端なくて、緊張で気持ちが悪い。

ヒーローのスカウト、断っておいて良かったと心底思う。

私、絶対にS級としてここに呼ばれてたらプレッシャーで何もできず、むしろ迷惑しか掛けなさそう。

そんなことを考えてたら、前方に人を発見。

時代劇から出てきたような、手本のような侍のおじさんがバングさんに声をかけ、お兄ちゃんと私に鋭い視線を向ける。

思わず怯んで後ずさる私をジェノスさんが前に出て庇ってくれて、バングさんはお兄ちゃんとの私の紹介をしてくれた。

……ダメだなあ、私。何もできないで、人に甘えてばかりで。

そんな自己嫌悪をしていたら、S級4位のアトミック侍さんが声を上げる。

「ほう！嬢ちゃんがS級にスカウトされて蹴った、レポートの嬢ちゃんか！」

「スカウトを蹴った」という言葉に、「人助けをしない」という被害妄想の抱いてしまい、私の身体はさらに強張る。

ジェノスさんがアトミック侍さんに対して、いつでも排除できる態勢になっているのは気付いてるけど、私はそれを止めることさえもできない。

自分の勝手な被害妄想で自縛して自分で追い詰められている私に、アトミック侍さんはそれを吹き飛ばすみたいに笑った。

「おお、どんなに威勢が良くて生意気な女かと思ったら、可愛らしい嬢ちゃんじゃねーか！」

仲間にならねーのはちと残念だが、まあ、こんな子に上層部のお守りなんかそりやさせられねーな。いい判断だ、嬢ちゃん」

カラツと笑って、私がスカウトを断ったことを肯定してくれた。

単純で現金な私は、それだけで自分で縛っていた不安や罪悪感は解けて、勝手に怖がっていたことを詫びながら、アトミック侍さんに挨拶する。

「……初めまして。……そして、ありがとうございます」

「オッサンもヒーローなんだな。よろしく」

お兄ちゃんも同時にあいさつしたけど、握手しようとして差し出した手を払われちゃった。

その所為か、私がアトミック侍さんに警戒心を解いたのにジェノスさんが迎撃態勢を崩さない。やめてジェノスさん、排除しないで!!

あとどうでもいいけど、37でオッサンを否定するってすごいですねアトミック侍さん！あなたのオッサンっていくつ!?

「ちよつと誰よ!?! 一般人とB級の雑魚なんて連れてきたの!」

私が今にも焼却砲を放ちそうなジェノスさんを宥めていると、甲高い声でまくしたてられた。

場違いなのはわかっているから言い返せる部分はなかったけど、あったとしても私は何も言えなかった。

お兄ちゃんだって同じ。

そのマシンガントークで私たちに「不愉快、消えて」と言い放ったのは、ゼンコちゃんよりは年上かなーと思えるくらいの女の子だったから。

「なんだこの生意気な……迷子？」

「それはS級2位のタツマキですね」

同じことを思っていたら、お兄ちゃんが口に出して、ジェノスさんが答える。

ああ、そういうえばHPで見たわ。

HPの顔写真だけだと、若いなー、童顔なのかなーって程度の感想だったけど、全身を見たらかなり小柄だから、子供にしか見えない。

実際はいくつなんだろう？

「何よう？」

ついつい凝視していたら、タツマキさんが不愉快そうに睨んできたので、思わず「ご、ごめんなさい！」と謝って顔を伏せる。

「何謝ってんのよ！ 私がイジメたみたいでしょ！」

私のその対応が気に入らず、さらにきつい言い方で怒られてまた謝りそうになったけど、謝った事で怒られたので私はどうしたらいいかわからなくなってパニックを起こす。

「おい、エヒメ落ち着け。子供に泣かされそうになってどうする？」

「え？ ちよっ！ やめてよ、本当に私がイジメてるみたいじゃない！」

「タツマキ！ 一般人を連れてきたのは俺だ！ 責めるなら俺にしろ！ そもそも一般人を責めたてるのが、ヒーローのすることか!？」

パニックを起こして何も言えないまま泣きそうになってる私をお兄ちゃんが宥め、さすがにこんな反応するとは思っていなかったタツマキさんが戸惑い、そしてジェノスさんがマジキレして怒鳴る。

ああ、もう本当に迷惑ばかりかけてごめんなさい！

そう謝りたいのに、私の喉から出るのは苦し気な息だけ。

お兄ちゃんが背中をさすって、バングさんやアトミック侍さんまで私を心配してくれてるけど、私は何も言えないし、自分を落ち着かせることも出来ない。

「——ああ！ もうっ!!」

タツマキさんのしびれを切らしたような声に、思わず私は反射で目を閉じる。

暗く閉ざされた視界の中で感じたのは、頭にポンツと置かれた小さな手の感触。

お兄ちゃんでもジェノスさんでもないその手の感触に驚いて目を開けると、タツマキさんが私に視線を合わせて浮き上がって、私の頭を撫でてた。

そして、私から目をそらしてボソリと呟く。

「……私が悪かったわよ。怖がらせて」

「……いえ。私の方こそ、パニックを起こして困らせて、ごめんなさい」

タツマキさんが謝ってくれたことで、私のパニックも治まってすんなりと言葉が出てきた。

タツマキさんは一度鼻を鳴らして、私の頭から手を離して床に降り立つ。

その様子を見ながら、アトミック侍さんが「……あのタツマキが、謝っただだど!？」と驚愕して、思いつきり本人に睨み付けられてた。

そこまで珍しいのか、謝るの。

「エヒメさん、大丈夫ですか」

ジェノスさんがまだ心配してくれて、本当にもう大丈夫だと伝えてながら、S級が集められた部屋に入ろうとした時、アトミック侍さんを睨み付けていたタツマキさんに、「ねえ」と話しかけられた。

ジェノスさんがまた警戒態勢に入るけど、彼女はその刺々しい空気も、私の前に立つ彼も無視して、私をエメラルドのような目で見上げて尋ねる。

「あなた、J市で活躍したテレポーターでしょう？」

何でスカウトを断ったの？ 断るくらいなら、何で助けたのよ？」  
ジェノスさんが「お前には関係ないだろう」と切って捨てようとしたのを止めて、私はどう答えようか悩む。

さつきパニくって迷惑をかけたから、ちゃんと答えたいけど……まさかソニツクさんに言ったことと同じことをいう訳にはいかない。

あれはソニツクさんだから引かれなかっただけで、我ながらにドン引きの言い草だったと思う。

だから、あの時ソニツクさんに言わなかった方の理由を答える。

言わなかったというより、あの時はだいぶやさぐれていたから忘れてた言い分なだけだね。

「……私は、本心からよく知らない他人の為に、自分を犠牲にできる人間じゃないから……だから、スカウトはお断りしました。

ヒーローの重責を背負っていけないことは、わかり切っていましたから」

「そりゃ、さつきの有様を見たらわかるわよ」

まずスカウトを断った理由、協会に対しての不信以外で思っていたことを話すと、鼻を鳴らして言いきられた。

私もそう言われるだろうなって思ってたから、別に気にしない。

気にしないから、ジェノスさん戦闘モードに入らないで。

もういつジェノスさんが焼却砲を打ち出さないか心配なので、さつさと言ってしまうおう。

「でも、私は身勝手だから、期待してしまうんです。

私は本心で言えば、人の事をあまり信じてないしどちらかといえば嫌いですけど、それでも信じていたい、私が困ってる時は誰かに助けてほしいって思ってしまうんです。

……だから、それを期待して、言わば見返りを求めた行為に過ぎないんです。私の人助けは。

私が助けた人が、私みたいに人を嫌いにならないで、本心から誰かを助けたって思ってくれたら、未来のヒーローになってくれたら……ってという期待と、そういう人が増えたら私は助けてもらえるん

じゃないかなあつて思ってるだけなんですよ。

……私は、ヒーローにはなれません。一番、遠い存在です」

私の答えに、ジエノスさんは何かを言おうとしてくれるけど、それよりタツマキさんの言葉が早かった。

「バツカじゃないの？」

私を辛辣に言い表し、彼女は腕組みをして胸を張って言いきる。

「そんなことしなくても、あんたみたいな弱い一般人は大人しく助けられるのを待ってたらいいのよ！　そういう奴らを助けるのが、私たちの仕事なんだから！

むしろあんたがヒーローでもないのに余計なことしたら、こっちの仕事がなくなるし、あんたに甘えてプロ意識をなくすバカだって出てくんのよ!!

だから、あんたはこれからずっと、大人しく待つてなさい。

私が、助けてやるから」

それだけ言つて、彼女は部屋に入つて行つた。

「……何なんだ、あの女は」

ジエノスさんはあまりの剣幕とマシンガントークに押されて、口を挟めずにいたらしく、タツマキさんが去つてから呟いていた。

うん、ジエノスさん。私もわけわかんなかったけど、最後のセリフでわかった。

あの人、ただのツンデレです。



## 嵐の前の愉快な茶番

タツマキの訳が分からない言論に振り回された俺とエヒメさんの二人が、廊下に取り残される。

先生やバングもタツマキがエヒメさんに謝ってすぐ部屋に入っており、他のS級もほとんど既に集まっているだろう。

だから、俺も速やかに入室すべきだが、それよりも先に行かねばならないことは、隣で立ち尽くすエヒメさんの緊張を解すことだ。

先ほどタツマキに自分で言ったように、彼女は基本的に人間不信で人嫌いだ。

警戒心を一度解けば、少し困るくらいに無防備に信頼をしてくれるが、どうも色んな意味で警戒をしている余裕もなかった俺との出会いのような例外を除き、知らない人と会うだけでもこの人は、顔色を悪くさせるほどに緊張してしまうのが、さっきの二人でよくわかった。

協会までヒーローではない彼女を連れてきたのは、まだ両手の火傷も、肋骨の骨折も全く万全ではないから、やっと退院したばかりだから、レベル竜の災害に巻き込まれないように、巻き込まれてもすぐに守れるように、俺たちを心配しすぎて、レポートで駆けつけてしまわないように。

それらの理由に、嘘はない。

だけど、心からの俺の本音は、ただ一時も離れたくない。傍にいたいし、いて欲しいから。

そんな愚かなわがままで俺は、彼女が嫌うであろう知らない人間が集まるこの場に連れてきてしまった。

ただでさえ一般人が何故ここに？と思われて当然なのに、もしかしたら18人目のS級になってたかもしれないエヒメさんは、ミィハーで無責任な一般人だけではなく、S級ヒーローにとっても好奇的だ。

そのことをわかっていながら、俺は連れてきた。

だから、俺は彼女を守らなければならない。

もう二度と、失態は犯さない。

彼女の両腕の火傷はもちろん、あんな絶望に染まった顔なんて、もう二度とさせない。

「エヒメさん」

誓いを新たに、俺は顔色を白くさせて扉の前で固まるエヒメさんに話しかける。

「俺は、短気ですぐに武力行使で物事を治めようとする、力どころか人としても先生の足下に及ばない未熟者です」

唐突な俺の自虐に、エヒメさんは当然困惑する。

ああ、こつちの方がいい。

あんな恐怖に慄きながら、怯える自分を嫌って自責する顔よりも、こちらの方がずっとマシだ。

でも、本当に見たい顔は、こんな顔じゃない。

「それでも、俺は貴女の杖でありたい。

貴女が傷つかず、貴女が行きたい道を歩む手助けをさせてください」

敵を、悪を、何もかも焼き尽くす、そのための手を、そのためだけだったはずの手を差し出す。

今は、違う。

この手に別の意味を、価値を与えてくれた人に、その意味と価値を与えたくて、そしてやはり自分本位にただ触れたくて、手を伸ばす。

エヒメさんはしばし俺の手を見つめ、そして口元を綻ばせて、まだ包帯に包まれた自分の手を重ねてくれた。

「もう十分に、手伝ってもらえばいいですよ。

ダメになっちゃいそうだから、あまり甘やかさないでくださいね」  
そう言いながら、俺に甘えて、俺に頼って、俺の手を取ってくれた。  
柔らかく笑ってくれた。

ああ。

この顔が、見たかった。

\*\*\*

エヒメさんの手を取って、彼女を少しでも好奇の視線から守るように前に出て、部屋に入ると予想通り、中の連中が一齐に俺たちを見る。

ほぼ最後に入ったのだからそれは当たり前前なのだが、その中の一人、机に脚を乗せて座っていた男がこちらを見た瞬間、目を見開いてそのままバランスを崩し、椅子から転げ落ちた。

いきなりの事故に思わず俺もエヒメさん、先生や他のS級も驚き、注目が俺たちからその男、俺のすぐ上のランク、S級15位の金属バットに向けられるが、奴は即座に起き上がって自分が注目を浴びてすることに気付きもせずに叫んだ。

「!? エ、エヒメさんっ!? な、何でここに?」

「は?」

俺と先生が思わず呆けた声を上げ、同時にエヒメさんを見た。

振り返って見たエヒメさんは目を丸くしていたが、その驚愕はどう見ても知らない人間に自分の名前を知られていた恐怖混じりのものではなく、金属バットと同じ種類の驚きだった。

「……バッドさん?」

バッド? バットではなくて?

俺は何から訊けばいいのもわからずただ困惑していると、先生とバングがそれぞれに「知り合いか?」と尋ね、エヒメさんと金属バットは困惑しつつその問いに答えた。

「えっと……ゼンコちゃんのお兄さんです」

「俺の妹のダチっーか、懐いて世話になってる人っーか……」

エヒメさんが答えた名前には、聞き覚えがあった。

確か俺がメンテナンスで見舞いに行けなかった日に知り合った10歳くらいの女の子で、エヒメさんの友人。

俺は会った事がないが、その子と知り合った翌日にとっても嬉しそうにはにかみながら、「お友達が出来たんです」という報告をされたことをよく覚えている。

さすがに子供かつエヒメさんと同性に嫉妬はしなかったが、あそこまで幸せそうに、嬉しそうに彼女を笑わせた少女に悔しさを感じた。けれど、それさえも上回る感謝が芽生えるほどに、あの時の彼女の笑顔は綺麗だった。

そんな彼女の心を癒した恩人の兄ならば俺は敬意を払うべきなの

かもしれないが、……エヒメさんには悪いがどうしてもその気にはなれない。

それはどう見ても奴の反応が、知り合いがこんな意外すぎる所に現れただけではないことは、体温サーモや心拍数を測定・分析しなくても、赤らんだ顔でわかつたからだ。

先生の方はエヒメさんの返答で全てを納得したらしく、「へー。よろしく。俺はサイタマ。あいつの兄貴だ」と挨拶して、手を差し出している。

金属バットの方はまだ困惑してるのかこちらを見たまま、「あ？

おおおう？ よ、よろしく」と珍妙な挨拶を返して握手に応じていた。

その様子を苦笑しながらエヒメさんは眺め、「……バッドさん、S級だったんだ。見覚えがあつたわけだ」と呟いていた。

知り合い、それも信頼している友人の兄がいたことで彼女の緊張が解けたことは、喜ばしいことのはずなのに、無性に気に入らない。

自分の器の矮小さが本当にイヤになるが、自分が担いたかつた役目を他人に奪われたこと、エヒメさんがヒーローネームではなく本名らしき名前で呼んでいることが、俺は気に入らなくて仕方ない。

口を開けばそんな醜くて幼稚な嫉妬が溢れ出そうだったから、俺は固く閉ざしたまま、エヒメさんの手を引いて椅子に向かう。

その途中で、ようやく困惑と混乱から少しは平静を取り戻した金属バットが言う。

「エ、エヒメさん!? あの、どうしてここに!? そしてそいつ……新人とはどういう……」

後半の質問は最後まで言わず、ただチラチラと俺とエヒメさんの繋いだ手を見る。

……その反応で、つい先ほどまで胸の内で渦巻いていた嫉妬が薄れる自分に嫌悪する。どこまで幼稚で、そして醜いんだ俺は。

そんな俺に対する罰なのか、エヒメさんが苦笑しながら「ジエノスさんは私の兄の……」と説明するのに被せて、高い子供の声が俺にとっての爆弾を投下する。

「何？ サイボーグさん彼女連れてきちゃったの？」

「!? なっ!?」

不本意ながら、俺と金属バットの声が完全に重なり、そしてその後の反応も同じだった。

俺たちは同時に爆弾を投下した子供、S級5位の童帝に目を向けると奴は実に子供らしい無邪気な笑顔で、飴を食べながらにさらに言葉を続ける。

「僕たちの緊急集会なんて、レベル竜が来るかもしれないってことですもんねー。そりゃ、近くにいてもらった方が安心するし合理的かも。」

でも、こんなところでも手を繋ぐラブラブっぷりは、さすがにどうかと思いますよ」

「違います！ ジエノスさんは私の兄のお弟子さんで私とは友人です！ っていうか、何かジエノスさんからヤバそうな音と煙が出てるからもう何も言わないであげて!!」

完全にエヒメさんが俺の……こ、恋人であることを前提に語る童帝に、エヒメさんは慌てて否定と訂正を入れる。

即答の「違います！」に傷つく余裕もなく、最近メンテをしてもらったばかりのエネルギーコアが暴走しかかっていたので、その言葉には感謝しかない。

しかしそのエヒメさんの心配とフォローを無駄にするバカがいた。

「何!? まだ二人は付き合っておらんかったのか!？」

「黙れバングー！ お前は知ってるだろうが!!」

俺たちが交際などしてないこと、俺の一人相撲であることを理解したうえで、バングは声だけ真剣さを装ってわざわざ立ち上がってまでしてふざけた。

座つてろ、くそジジイ!!

バングがふざけたことで、エヒメさんの否定と修正で収まりそうだった話題が続行した。

童帝はこんなところで天才少年の頭脳を発揮し、完全に俺たちの関係を察したのかニヤニヤこちらを眺めて「サイボーグさん、頑張ってくださいね」と言い出すわ、アトミック侍も同じように笑い「若いっ

てのはいいもんだな、おい」と年より臭いことを言い出すわ、タンク  
トップマスターは隣で固まつてる金属バットに、「違うつて否定して  
たぞ」と俺が何度も聞きたくない言葉を連呼して、奴の石化を何とか  
しようとしているわという完全に收拾がつかない状況と化した。

エヒメさんの方はタツマキの時とは違う意味でパニックを起こし  
てただアワアワと周りを見て、「ご、ご、ごめんなさいジエノスさん！」  
と何故か責任を感じて謝られ、俺も慌てる。

ああ、何が杖になるだ！　この程度の混乱も収められないのか俺は  
!!

自分の無能さが情けないまま俺は助けを求めて先生の視線を向け  
るが、先生はぷりぷりプリズナーから「実際の所はどうなんだ？」と  
訊かれて、「見ての通りうちの妹がアホ」と答えていた。

先生！　どんな状況でも自分のペースを崩さずに貫けるのは貴方  
の強さの一部ですが、こんな時に冷静にそんなことを言うくらいな  
ら、いっそ貴方もパニックに陥ってください!!

「あんたたち、いい加減に黙りなさいよ!!

こんな男9割の集団で恋バナなんて気持ち悪いだけってわからな  
いの!?!」

タツマキの甲高い声の正論でこの茶番が収まるのは、それから数分  
かかった。

破られたのか、守れなかったのか

タツマキさんのおかげで、何故か私とジェノスさんが付き合ってるかどうかで変に盛り上がった話題が、何とか収まった。

ああもう、恥ずかしいし、私なんか恋人だと間違えられたジェノスさんに悪いしで、顔が熱い。

お兄ちゃんもお茶を欲しがってないで、何とか言ってくれたらよかったです。

そんな逆恨みをしつつ席に座ったら、今回の集会の説明役を任されたシッチという人が、ついさっきまでの茶番から気を取り直そうとしているのか、一度ゴホンとせき込んだ。

何か本当にごめんなさい!!

もう本当に申し訳ないわ恥ずかしいわで俯きながら、シッチさんから聞かされた今回のS級ヒーローに出された指令は、「地球を守る」と。

シッチさんは今回ばかりはこの超人集団であるS級ヒーローも命を落とすかもしれない、逃げるのも勇気だから辞退してもいいが、今から話す内容を聞いてからなら混乱を避けるために軟禁させてもらうと前置きして、ヒーローたちに覚悟を尋ねる。

……あれ？ これ、どう考えても私が聞いていい話じゃなくない？ シッチさん、私やお兄ちゃんを追い出さなくていいの？ もしかして私はS級にスカウトされた人材だからいいやって思ってる？ 私、戦闘能力はゼロですよ？

辞退する以前にそのことを伝えた方がいいのかな？ と悩んでいたら、バッドさんがかなり苛立った様子で話を進めちゃった。

ああ、そういえば今日はゼンコちゃんのピアノの発表会だった。

私も「来てほしい」って言われてただけで、バングさんとの先約があるからまた後日に聴かせてほしいと言って、断っちゃったんだ。

……バッドさんが行けなくなっちゃったんなら、私が行ってあげたらよかった。

今度会う時は、行けなかったお詫びと、発表会を頑張ったご褒美っ

てことで、何かあげようかな。

そんな地球の危機とは程遠いことを考えていたけど、シツチさんの「シババワ様が死んだ」という発言で、場の空気が一変する。

一瞬にして空気が張りつめ、それが弾けるようにS級の一人が「殺されたのか？」と叫んだ。ごめんなさい、たぶん席の順的に8位の人、名前なんでしたっけ？

そしてついでにいうと、……シババワって誰？

交わされる会話でその人が重要人物であることはわかるけど、どういう意味で重要なのがまったくわからない。

でもヒーローにとってはその人を知っていることは当然らしく、説明なんかなく知っていることを前提で会話が進む。

ジェノスさんに訊けば答えてくれると思うけど、ここまで知ってて当たり前前の空気で尋ねる勇氣は私にはなく、ただ視線を彷徨わせることしか出来なかった。

……そうやって彷徨わせていたら、バッドさんが同じように視線を彷徨わせていることにも気づいてしまった。

良かった、他にも知らない人がいた。

っていうか、その知らない人筆頭のお兄ちゃんがプリズナーさんに訊いた。

本当に空気読まないし、恥ずかしいって感情を知らないねお兄ちゃん！

でも今回は助かった！ ありがとう!!

プリズナーさんのシババワさんが予言者であるという説明に、シツチさんがその予言的中率が100%であることを補足した後、今回の指令である「地球を守れ」を意味する大予言文を公開する。

それは、「地球がヤバイ!!!」のただ一文。

……正直な感想を言わせてもらえば、「なにこれ？」だ。

死の間際で余裕がなかったとはいえ、語彙力がなくてヤバいしか言えない若者じゃないんだからとか思った。

ゼンコちゃんと同じ年くらいの男の子も同じように思ったらしく、「塾があるから帰っていい？」と言い出し、シツチさんに「天才少年と



聞いていたが、所詮お子様」と言われていた。

天才なのに塾に行くのかと思っていたけど、後で聞いたら彼は教える側だった。間違いなく、天才少年でした。

ただ、その天才少年だけではなく、他の人もそこまで危険視するほどか？ という視線を向けられて、シツチさんは自分の説明不足に気付いたのか、シババワさんの予言について、さらに補足を加える。

彼女の予言は、100%当たり、今までにいくつもの大災害を予言し、予言しても防ぎきれずに多くの命が奪われたものもあった。

そんな大災害でも、シババワは一度も「ヤバイ」という単語で表現はしなかった。

シツチさんは机に手を叩き付けて、やや狂乱しながら叫ぶ。

「大地震や鬼や竜レベルの怪人が襲来するよりも『ヤバイ』事が起きようとしているのだ！」

それも、この半年以内に!!」

……予言の重大さを理解しても、私には現実味がなかった。

私はお兄ちゃんが「いつてきます」と言ってくれないと不安で仕方がなくなるくせに、同時に何が起こってもお兄ちゃんが何とかしてくれると思ってる。

だから、私に不安になったのは、予言じゃない。

その予言が半年以内のことなら、明日のことかもしれないしまさに今日、起こるかもしれないと、誰もが目をそらしていた可能性を口にした時。

お兄ちゃんが珍しく楽しそうに笑って、「……………来て良かった」と言った瞬間、私は大きな不安に襲われた。

「？ エヒメさん？」

ジエノスさんが私の様子の変化に鋭く察して声をかけてくれたけど、私は何も答えられなかった。

答える前に、ヒーロー協会本部が激しく揺れたから。

\* \* \*

地震かと一瞬思ったけど、外から聞こえる爆発音らしき音と揺れが連動していて、それでこの建物が攻撃されていると理解する。

断続的に前後左右から攻撃を仕掛けられて、シツチさんがA市の状況確認をしようとした瞬間、今度は上空から さつきまで仕掛けられていた攻撃は遊びだったとしか思えないほどの衝撃が落とされ、私やタツマキさん、天才少年君だけじゃなくて、重そうなプリズナーさんやジェノスさんまで一瞬浮かぶぐらいに、建物が縦に揺れた。

その揺れで、攻撃はいったん収まって私は胸を撫で下ろしたけど、シツチさんの絶叫でそれは早計かつ不謹慎だったと知る。

「まさか、今すぐ予言の時が来るなんて、誰が予想できる!？」

一瞬で……A市が、この町が破壊されたらしい!」

一瞬で都市一つを壊滅なんて初めてだけど、ここまでの規模の壊滅は確かに初めてだけど、それでもこのご時世、壊滅した都市はいくつもある。

都市壊滅という災害は、自分や自分に関係のある人や物に被害が及ばなければ、珍しいけどまああるよねで済みます程度の出来事に過ぎないものになっていた。

私もそうだった。

特に世界の狭い私は、自分の目の前で、自分の手の届く範囲で私が行動すれば助けられたのに、助けなかったのならともかく、それ以外なら身勝手に残酷だけど、「ふーん」で終わる出来事だ。

だから、このA市壊滅は今まさにその中心にいるのだから、恐怖はあるけどそれ以外に思うことなんてお兄ちゃんとジェノスさんの心配くらいのはずだったのに、私が初めに思ったことは「嘘だ」だった。信じたくなかった。

A市が壊滅したなんて。たくさんの人が死んだなんて。あまりに大きな犠牲が出たなんて、信じたくなかった。

A市に思い入れも、大切な人もいないのに、私は信じたくなかった。「先生ー、外に行き……」

何者かの攻撃で建物が揺れている間ずっと、私を庇ってくれていたジェノスさんがお兄ちゃんに声をかけるけど、お兄ちゃんはとつくの昔に天井を突き破って外に出たらしい。

その天井の穴を全員が唾然としながら見上げている中、私はジェノ

スさんに謝って跳んだ。

「ごめんなさい、ジエノスさん！ 先に行きます!!」

「エヒメさん!？」

ジエノスさんの言葉を最後まで聞かず、私はお兄ちゃんの元に、協会本部の屋上まで跳んだ。

\* \* \*

……崩壊。壊滅。全滅。地獄絵図。

そんな言葉でしか表現できない地上を嘲笑うように、都市全体を覆い尽くしかねないほど巨大な船が、浮かんでいた。

「ん？ エヒメだけか？」

ジエノスさんも連れてくると思っていたのか、船を眺めていたお兄ちゃんが少し不思議そうに言う。

「……うん。とりあえず、私だけ」

「……大丈夫だっつーの。約束はもう破らねーよ」

私の答えに、お兄ちゃんは苦笑して返す。

そして赤い手袋を脱いで、素手で私の頭を撫でて言ってくれた。

「んじや、いつてくるわ。」

だから、お前は待ってるよ」

私に安心させるように柔らかく、昔から何一つ変わらない笑顔で言ってくれた。

約束を、守ってくれた。

なのに私は、飛び立とうとしたお兄ちゃんのマントの裾をとっさに掴んだ。

「？ エヒメ？」

約束を果たしても、「いつてきます」と言ってくれても、こうやって続けたのは初めてで、お兄ちゃんは困惑し、正直やらかしてる私も困惑している。

「……お兄ちゃん」

だから、すぐにマントから手を離して、伝える。

「今日の晩御飯は、白菜と豚バラのお鍋でいい？」

お兄ちゃんの好物を作ると、伝えた。

お兄ちゃんは一度ポカンとした顔になってから、嬉しそうに笑ってくれた。

「おう！ そりゃ、腹をすかして帰らねーとな!!」

必ず帰るといふ約束を再び交わして、お兄ちゃんは巨大な船に向かって、飛び立った。

それを、私はただ見送る。

ジェノスさんたちを迎えに行かないで、自力で皆がお兄ちゃんのかけた穴から這い出てくるまで、ジェノスさんに話しかけるまでたえずと、そこに佇むしか出来なかった。

……約束をしてくれたのに、私の胸の内は何故だか酷く痛んでいたから。

あの隕石の時のように、泣いて怒って叫びたい気持ちでいっぱいだったから。

誰にぶつけたらいいかわからない怒りと悲しみが、胸の中で渦巻いた。

約束を、破られたような気がして、私は泣き出したかった。

もうあの夢は誰も知らない

「オレ様のアシッドプレスで溶けてなくなr…」  
とりあえずいつも通りワンパンで終わらせて、ひたすら俺はその辺を殴りまくる。

さつきから色んな所を壊しまくってんだけど、墜ちねえなこの船。  
幹部っぽい怪人も何体か倒してけど、ボスっぽいのもまだ見つから  
ねー。

っていうか、生きてんのか？

まさかさつき倒した奴がボスとか言うんじゃねえだろうな？

まあ、それならそれでいい。とりあえず今日は、早く帰りたい。

なんかエヒメの様子が妙におかしかったからな。

あいつは我慢しなくていいことまで限界まで我慢するから、俺が約束を守ったのならどんなに不安でも止めたりすることなんてなかったのに、今日は何故か止めた。

でも、あいつは我慢の限界を迎えて感情を溢れ出したわけじゃなかった。

むしろ、今まさに我慢してるって顔だった。

……今にも泣き出しそうな顔をした。

だからさつきと帰って、せめてあいつの心配だけはなくしてやりた  
いから、早く墜ちろ。生きてるんなら、ボス出て来い。

っていうか、ジエノスが慰めるなり話を聞くなりしてガス抜きでも  
してやってくれねーかな？

たぶん無理だろうな。

あいつの強情さには俺だって勝てたことがないし、何より俺のマン  
トを掴んで俺が振り返った時、あいつは泣き出しそうな顔で自分のし  
たことを困惑してた。

何だ、あいつ？

自分が何を我慢して、何に耐えてるのかもわかってないのか？ 新  
しいパターンだな。

そんなことを考えながら、俺は扉を壁ごと引っこ抜いて開けた。

「壊れた」

\* \* \*

さらに先に進んでいったら、クソ面倒くさい迷路になった。

面倒だから殴って壁を壊して直進したら、頭の中で「壊すな、出てけ」とか言う声が聞こえる。

頭の中直接で声が聞こえるって、すげー変な感じだな。耳は使っていないはずなのに、何かムズムズする。

《それ以上、踏み込んでみる！ お前を殺すぞ！》

姿も現さないで威勢のいいことを言う宇宙人に、俺は帰り道がわからんと言ってみたらやたらと素直に教えてくれた。

うん、俺はバカだけどさすがに行かねーよ。普通に罠だと思っし、もう本当にバカ正直に教えてくれていたとしても、何で今更帰るんだよ。

「じゃあ左に進もうつと。へへへ……」

《ま、待て！ 貴様よくも！ ちよ、ちよつと!?!》

俺が誘導された方と逆の道を通って走ったら、頭の中の声が割とマジで焦り始めた。

何か自分が悪かったから待っててくださいってついには頼み込むようになってるけど、もちろん俺は無視してバカでかい、いかにもラスボスがいますよー的な部屋の扉を蹴り開けた。っていうか、ぶち破った。

その先にいたのは、お前はどこのゲームのラスボスだよって言わんばかりにラスボスらしい外見をした奴だった。

何で俺は、目玉が一つの奴に顔面の格差社会を見せつけられてんだよ？

「まさか、短時間でここまで来ようとは。」

ようこそ、我が船へ」

どうやら外見通り、こいつがインベーダーの親玉らしい。

ならさっさとぶっ潰して帰ろうと思っていたら、俺の後ろにタコがいた。

声からして、さっきまで俺の頭の中で何か一人漫才やってた奴はこ

いつらしい。

呼ばれたから振り返ってみたら、タコは瓦礫を飛ばしながら名前を名乗ったけど覚えられねーよ。多くて5文字以内で改名して来い！

ただ「念動力」という言葉だけは意味も理解できたから、何気なく口に出す。

「念動力？ 超能力か……」

俺にとって超能力といえばエヒメのテレポートだから、目の前のタコのやっつてることはせいぜい手品としか思えない。

だってさー、小石を飛ばすなんて誰でも出来るじゃねーか。こんなふうに。

俺が軽く飛ばされてきた瓦礫の一つを投げてみたら、頭を狙ったけどちよつと外れて首というか頭と足のつなぎ目あたりにぶち当たり、貫通した。

タコは頭と体というか足というか、とにかく真つ二つに分離して、足はその場にべちゃりと潰れるように倒れ、頭の方はというと一つ目星人の所まで転がって行った。

「……ぼ、ボロス様……申し訳……ありません……」

うおっ!! まだ生きてた!?

さすがに首だけになってもしゃべる奴は初めて見たので俺がビビると、一つ目星人は首だけになった部下を見下ろして、言った。

「ゲリュガンシユブ………命令に、背いたな」

「え?」

踏みつぶした。

インベーターの親玉は首だけになっても自分の失態を謝った部下の頭を、躊躇なく踏み潰した。

今度こそ本当に死んだと確信できるぐらいに頭はバラバラに飛び散り、その残骸を見下ろして奴は呟く。

「……俺がいつ、砲撃命令を出した?」

あれ?

もしかしてこいつ、A市をぶつ壊す気はなかったのか?

部下が間違えたのか、それとも勝手に砲弾をぶつ放したのであつ

て、こいつ自身は別にA市や地球になんかするつもりはなかったのか？

そうだとしたら、戦いにくいな。

このまま大人しく帰れば見逃してやるって言おうか……、いややっぱり被害でかいから見逃せねーな。でもやっぱり本人悪くないのに殺すのは後味悪いな。

そうやって俺はこいつを見逃すか倒すかに迷っていたら、しばらく自分で潰した部下の残骸を眺めていた奴が顔を上げる。

「俺の配下をこごとく……」

そこにあつたのは、非戦闘主義なんて言葉が一番似合わない笑み。

「素晴らしいー!」

子供のような声で、俺に称賛を送って来た。

……こいつ、何がしたいんだ？ 部下の内の一人は、お前がトドメを刺したんだだろうが。

「闘う前に名を聞いておこう」

そう言つて奴は、ボロスは名乗った。こいつの名前はさすがに憶えられた。

同じく俺が名乗り、そして何で地球にやって来たのかを訊いてみたらボロスは「予言」だと答える。

ついさっき聞いたばかりの言葉について反応してしまうが、それ以上に俺は珍しくボロスの話を聞き入ってしまった。

強くなりすぎて、誰も自分に適わなくなつて、退屈して、自分と対等に戦える奴がいると聞いて、20年かけて地球にやって来た。

そして今、遠足前の子供のように楽しそうに、無邪気に笑つて、俺に言い放つ。

「さあ、俺の生に刺激を与えてくれ。そのために来たんだ」  
とりあえず、殴つておいた。

馬鹿か、こいつ。

退屈で刺激が欲しいからって他の星を襲うなんて、頭の悪いOLでも考えねーっつーの。



……だから、心配しなくていい。

俺はそう、伝えた。

頭の中の妹に、俺が同じような理由でどつかにふらつと行ってしまつて、帰つてこなくなることを何よりも恐れて、「行かないで」と泣くエヒメに言つてやる。

行かねーよ。やらねーよ。

兄ちゃんはバカだけど、そこまでじゃねーよ。

だから、泣かずに待つてろ。

脳裏に浮かんだエヒメを慰めてる間に、柱にめり込んだはずのボロスが割と普通に出てきた。

ワンパンで死ななかつた敵は久々で、さすがに軽く目を見開く。

だけど、「強大すぎる俺のパワーを封印する役目を持つ鎧が今、砕かれた」というセリフで、何か白けた。

お前、それは地球では「フラグ」って言うんだぞ？

そんなことを思っていたら、何か奴の体に変化していった。

紫色の身体がほとんど黒に近い色になって、全身に走る入れ墨のような、血管のような模様部分が青白く光る。

その光が強くなって周囲にカミナリみたいなのがいくつも落ちてきて、床や俺のマントの裾を焦がす。

そんな変身を見ながら、ぼんやりと俺は思う。

こいつの鎧が崩れた時に、一緒に床に落ちたもの。

カミナリみたいなので一瞬で焼けて、消滅したもの。

あれは何だったんだらうと、何故か無性に気になった。

俺には、エヒメが一番好きな折り紙、連鶴に見えたんだけどなあ。

## 寄り添うことしかできない

空の船をただ見つめる彼女は、あの隕石に飛び込んだ先生を見ていた時と同じ顔をしていた。

押しつぶされそうな不安と、抛り所にしていた、信じていた約束を破られた怒りと悲しみを胸の内から溢れ出さないように、必死に耐えているのが今ならわかる。

ただ、どうして今そんな顔をしているのかはわからなかった。

先生が同じ失態を犯すはずがなく、そして実際に約束は破られていない。

ちゃんと守って先生はあの船に向かって行ったことは、本人から聞かされた。

なのに、エヒメさんは泣き出しそうな顔でただ船を見上げていた。

先生にビンタをした直後と同じ顔で、睨み付けていた。

俺がああ船を許せないと思った理由は、それで十分だろう。

しかし、許せないからといってどうこう出来るものではない。

童帝やキングの言う通り、あんな上空に構えられていたらこちらからの攻撃手段はほとんどなく、乗り物を用意しても撃ち落とされる。

今の静観しているこの隙に、気は進まないがロボットと兵器を駆使するメタルナイトを呼び出して応戦してもらおうというキングの提案がベストだ。

しかしタツマキはそれらの意見に癩癩を起し、もう自分一人で何とかすると言いつつ出す。

その様子は子供そのものだが、矜持はヒーローとしてふさわしいものだった。

だからこそ俺も応戦しようとしたのだが、奴は一瞬間を置いて何故かキレながら断った。

……くそガキめ。

「ジェノスさん、落ち着いて」

タツマキの言い分に内心でキレていたなら、それを察したのかエヒメさんに宥められた。

先ほどまで痛みに耐えるような顔をしていた彼女に気を遣われるのはこの上なく情けないが、けれどエヒメさんの表情は少しだけ和らいでいた。

「大丈夫ですよ。お兄ちゃんが向かいましたから。」

むしろ、お兄ちゃんが船を落としたら下で戦っている人たちが危ないですよね。

……4人、運べるかな？」

別の話題を持ち出したことで気が紛れたのか、エヒメさんは泣き出しそうだった顔を心配そうな表情に変化させて、視線も船から地上で戦う4人に向ける。

こんな顔もさせたくないが先ほどよりはだいぶんとマシなので、俺は先ほどまでの様子には触れず、彼女のこの不安を軽くさせることに専念する。

「あの大きさなら、さすがに先生でも壊すまで時間がかかりそうですし、下の奴らもS級です。逃げるなり、瓦礫を使って上手く防御するなりくらいできるでしょう。」

というより、他の3人はともかくプリズナーは放っておいていいです。誰も奴を貴女に運べとは言いませんし、文句も言いません。本人にも言わせません」

見たくもないがクセーノ博士が与えてくれた目が、奴の戦闘スタイルをこの距離からでも鮮明に映し出す。

聞いてはいたが、本当に全裸に変態するののか。

やはり会った瞬間、焼却すべきだった。

「……正直、その言葉が一番うれしいです」

エヒメさんもやっぱり奴は運びたくなかったのか、苦笑しながら俺の発言を咎めることなく同意してくれた。

苦笑とはいえ笑ってくれたことに、安堵した。

\* \* \*

けれど、エヒメさんの笑みも俺の安堵も、長くは続かなかった。

船から地上に向けて、地上で戦う4人に向けて巨大な砲弾が雨のように投下された。

その量に協会本部屋上でただ見ているしかなかった俺たちは絶句したが、タツマキはすました顔で屋上から飛び降り、そのまま超能力で飛行しながら地上に向かう。

地上に降り立った奴は、淡く緑色に発光しながら手を前に伸ばすと同時に、地面に着弾寸前だった砲弾がピタリと静止した。

そしてそのまま、奴は砲弾を船に撃ち返した。

先生程ではないがその規格外のパワーが、今は頼もしい。

俺は再び安堵してエヒメさんの方に視線を戻すが、予想に反してエヒメさんはまた顔を白くさせて、泣き出しそうな顔で船を見上げていた。

今度は、怒っているというより悲しんでいた。

信じられない、信じたくないと言いたげに、何かに縋るように彼女はただ、船を見上げる。

「……ジエノスさん」

彼女が何を想い、何を信じたが故にそんな顔をしているのかがわからなくて、何も言えなくて、杖の役目なんて一切果たせず途方に暮れる俺に、エヒメさんは船を見上げたまま、尋ねる。

「……もしも、この船が攻撃を全くしなかったら、どうなっていたんでしょうね？」

「えっ？」

それはこの壊滅した地上を見れば、先ほどの集中砲火を見ていれば、まずは出てこない、あまりに今更過ぎる仮定。

それでも彼女は、泣き出しそうな顔で船を見上げて、呟く。

もはや、俺の答えを期待しているのかどうかもわからない。

「もし、この船が攻撃なんかせずただ現れただけなら、……私たちは歓迎したのでしょうか？」

もし、あの船から出てくる人たちが怪人のような姿で、私たちなんか一瞬で殺せそうな力を持っていても、私たちは対話で分かり合おうとするのでしょうか？」

……それとも、私たちは船を災害として、他の星からやって来た『人間』を『怪人』として、話も聞かずに排除するのでしょうか？」

悲し気に彼女は、船を、その中にいるであろう乗組員、きつと他の星では俺たち「人間」に当たる種族を見つめて、眩いた。

……俺にとつて船も、その乗組員も等しく、排除すべき敵だった。それ以外なんて、考えつかなかった。

それはもちろんA市を壊滅させたという前提条件があつたからだ  
が、……俺はA市が壊滅されていなかったら、もしもただあの船が浮遊しているだけだったのなら、そしてそこから「怪人」のような異形の「人間」が現れていたら、どうしていただろうか？

……まずは対話を試みるのか、それとも先手必勝とばかりに焼却砲の砲門を開くのか。

「……ごめんなさい。変なことを訊いて」

エヒメさんは船から視線を外し、俯いた。

自分でもこの過程はあまりに今更で、あり得ないものだという事はわかつているのだろう。

それでも、彼女は信じていた。

あの船の誰かと、分かり合えることをきつと信じていたんだろう。どうして、そんなことを思ったかはわからない。

けれどそんなことは、知る必要もない。

時を戻せない、もうあの仮定が成立しないのだから、それは知つても何の意味もなさず、きつとこの人をさらに傷つけるだけ。

「……俺は、排他的で思い込みも激しいとよく言われますから、……きつと向こうが何もしてなくても、……排除対象にしてしまうと違います」

何もできない俺は、ただ隣に寄り添うだけだった。

彼女の隣で、彼女の仮定に、彼女が望まないとわかっている答えを返す。

「……だから、隣にいてください。」

俺が、何もしておらず敵か味方もわかつていない、俺の出方次第で敵にも味方にもなりえる者を傷つけてしまわないように、俺が間違えないように、エヒメさんが隣で、俺の愚行を止めてください」

貴女がいないと、何もできない。

貴女がいないと、俺は間違つてばかりだから。  
だから、隣にいて欲しいと望む。

貴女がいれば、貴女の望む答えをきつと出せるから。  
出してみせるから。

ただ俺は、隣でそう誓うことしか出来なかった。

「サイボーグさーん、おねえさーん！ 僕たちも下に降りましょう！  
ここだと船の砲弾から逃げ場ありませんし、全部をタツマキちゃん  
に任せて守ってもらったら、後でうるさいですし」

「はい」と応えた声は、俺の言葉の直後の童帝の指示に対してだと思つ  
ていた。

彼女の不安も悲しみも、何も軽くさせることも理解することも出来  
ず、ただ隣にいるだけの俺のさらに負担をかけるような言葉に応える  
声なんてあるはずないことくらい、わかつてる。

俺はまた俺のわがままを彼女に押し付けたことだけだったことは、  
わかつてた。

「ジェノスさん」

なのに彼女は、俺の手を取る。

「行きましょう」

何も出来なかった俺の隣に、いてくれた。

悲しみを押し殺して、痛みに耐えるような顔で、それでも彼女はど  
こか嬉し気に笑ってくれていた。

## 連鶴

ボロスがまた変身したかと思ったら、思いつきり膝蹴り入れてきやがって、俺は地面に叩き付けられる。

……地面？

俺、空に蹴りあげられたよな？

辺りを見渡すと何故か夜になってた。

っていうか、正面向いたら地球が見える。

月までぶっ飛ばしやがったのか、あの野郎。

とりあえず息を止めて、体を起き上がらせる。

……ペラペラペラペラと聞いてもないことしやべり倒してたと思つたら、これか。

ちよつとは戦いつぽくなってきたじゃねーか。

そんなことを考えていたら、自然に口角が上がっていることに気付く。

……俺も、ソニックのこと言えねーな。

あいつは強い。

俺が今まで相手してきた中で、一番だと断言できる。

……それでも、俺にはわかった。

自分の方が強い。

マジシリーズを出さなくても、連続普通パンチをひたすら繰り出していたらたぶん勝てる。

ボロス。お前に予言した奴は外してるか、もしくはお前は来るのが遅れてるよ。

お前と俺は、対等じゃない。

……それでも、お前との戦いは正直楽しいよ。

緊張感はまだ足りないけど、こいつがさらに強くなったらどうなるだろうという期待で高揚した。

だから、もつと早くに決着を着けても良かったのに、戦ってるのが空の上なんだからマジシリーズをぶっ放しても良かったのに、こんなに俺は戦いを長引かせた。

でも、そろそろ終わりだ。

『行かないで……。置いてかないで……。お兄ちゃん』

脳裏でエヒメが泣く。

俺が戦いの虚しさを埋めるために、俺と同じくらい強い奴を、俺よりも強い奴を求めて、自分を置いてどこかに行ってしまうという不安を抱えて、あいつはいつも俺の帰りを待ってる。

あいつに危ない事をして欲しくないから、安全なところにいて欲しいから、その為に俺があいつと交わした約束。

あいつの不安を和らげるためなんかじゃない。不安にさせたくないければ、俺がこんなことをしなければ一番いいってわかっているのに、俺は自分のわがままを押し通すためにこんな約束を交わしたんだ。

だから、この約束は守らなくっちゃいけないんだ。

俺はな、絶対に帰らないといけないんだよ！

あと80年は生きなくちゃいけないんだよ！！

俺は思いつきり、月を蹴り飛ばして戻る。

地球に、戻る。

そしてもう、さつきと片付けよう。

これ以上待たせたら、脳裏のエヒメだけじゃなく本物だってきつと泣く。

だから、帰ろう。

\* \* \*

「お、いけた」

俺が月から戻ってきた瞬間、ボロスが再び俺に突っ込んできた。

その連打を受けながら、少し奴をうらやましく思う。

本気を出せる相手、本気をぶつけてみたくなる相手。

それをどれだけ求めていたかはわかる。

その相手を目の前にしたら、もう後先の事を考えられなくなるの  
だって想像がつく。

俺だって、正直に言う相手をしてやりたい。

見逃して、こいつがもつと強くなるのを待っていたい。

でも、それはもうできない。



お前自身は攻撃するつもりがなかったんだとしても、お前の船が、お前の部下がA市を破壊した。

街は協会本部以外の建物はみんな崩れて、おそらく生きている人間だつてあの本部にいた奴らぐらいいだろう。

お前らは、あまりに多くの犠牲を出しすぎた。

俺はただ闘いたいんじゃない。

ヒーローなんだ。

ヒーローになりたくて、強くなったんだ。

だから、目的を見失ったらダメだ。

お前は、俺が倒さなければいけない、敵なんだ。

ボロスの連打を無視して、普通のパンチでまずは吹っ飛ばす。

それで、体のガードがなくなつたところで連続普通のパンチを入れて、爆散させる。

が、爆散した状態からこいつ回復したよ。マジで再生能力すげーな。

「ならば……もう一つの切り札をくられ。

全エネルギーを放ち、貴様もろとも星の表面を消し飛ばしてやろう」

「！」

また雷みたいなのがその辺に落ちまくる。

俺を月にぶっ飛ばす前に俺にぶつけたのと同じようなもんだけど、あの時とはケタが明らかに違う。

……それでも、服はともかく俺は多分平気だ。

喰らつたつて、平気だ。

だけど、この攻撃は消し飛ばさないといけない。

星の表面を消し飛ばすと、こいつは言った。

この下には、この星には、あいつがいるんだよ。

エヒメが、待ってるんだよ！

それだけは、させない。

「崩星咆哮砲!!」

「……だったらくちも、切り札を使うぜ。」

必殺「マジシリーズ」

船を蒸発させながら飛んでくるでかい光の玉に向かって、俺は拳を振った。

マジ殴りを、放った。

\* \* \*

「俺は……敗れたのか……」

こいつ自身が放った光球があつたと言え、マジ殴りを正面から受けて死体が残るところか、上半身だけとはいえ原型を留めてまだ生きてる奴は、正真正銘初めてだ。

「まだ意識あんのか。やっぱ強えーよ、お前」

だから、俺の言葉は本心だった。

……けれど、やっぱりこいつは強い。

対等な勝負だったと言いながら、すぐに自分で否定した。

「嘘だな。」

お前には、余裕があつた」

力量差を正確にこいつは理解していた。

理解できるくらいに、こいつは強かつた。

なのに……

「まるで歯が立たなかつた……。

戦いにすら……なつていなかつた……。

……ふふっ」

ボロスは血らしきものを吐きだして、言う。

負けたはずなのに晴々と、そして俺を憐れみながら。

「やはり、予言などアテにはならんな。」

お前は、強すぎた」

——知ってるわ。そんなこと。

俺は、ボロスに背を向けて歩く。  
もうこいつを倒した。もう戦いは終わりだ。  
だから、俺は帰るんだ。

あいつの元に――

「……折り紙でも、教えてもらえ」

「はっ」

もうさすがに死んだと思っていたら、まだボロスの奴は生きてた。  
それはまあいいとして、何言ってるんだお前は？

「……戦いで……満足を……得られぬようなら……他の事に目を……  
向けてみる。

弟子でも……取ればいい……別の何かを……始めてみてもいい  
……。

戦いの……緊張感や……高揚は……得られぬだろうが……そもそも  
も……戦いで……もう……得られぬように……なっているのだから  
……それは……もう……諦めろ」

声はどんどん、弱々しくなる。

けれどこいつは、相変わらず晴々として清々しく、俺を憐れんで言  
葉を続ける。

俺に、何かを伝える。

「……まあ……貴様なら……大丈夫だろう……がな……」

自分の寿命を削ってまでして俺に忠告だかアドバイスだかよくわ  
からんことを言ってたと思ったたら、何故かいきなり勝手に断言する  
し。

「お前、マジで何が言いたい？」

思わず思っていたことが我慢できずに声に出したら、ボロスはまた  
血を吐いた。

さつきよりも弱々しく、もう咳こむ力もないのだろう。

それでも、こいつは笑いやがった。

楽し気に奴は笑って、言った。

「……貴様は……『無敵』では……ない。

……貴様には……どんな高みに……登りつめようとも……、あらゆ

るしがらみも……重さも捨てて……その高みまで……飛び立って……隣を寄り添う……『鳥』が……いるだろう……が……」

言ってる意味が、まったくわからなかった。

わからなかった。

なのに、連想した。

俺に寄り添う「鳥」と言われた瞬間、頭に浮かんだのはただ一人。

妹が、浮かんだ。

「ボロス、お前は何が言いたいんだ？」

俺の問いに、奴は答えない。

もう俺の声も聞こえてないのか、奴はただ弱々しく、なのにこつちがうらやましくなりそうなくらい楽しそうに笑いながら、呟いた。

「そう……だろう？ ……」

最期の言葉は、声になっておらず聞こえなかった。

聞こえなかったのに、それが誰かの名前であることだけは、わかった。

「……それが、お前の『鳥』か？」

俺の問いに答える奴は、もう誰もいなかった。

\* \* \*

俺とボロスでぶっ壊しまくった事と宇宙船が落ちたことで方向感覚すらわからなくなつて、もう俺はどこにどう出ればいいのかわからずやたらと迷った。

だつてとにかく真っ直ぐに進もうと思つて壁を壊して進みまくつたら、いつの間にか地面掘つてたし。

でも何とか、そこから引き返してやっと地上に出れた。

「お、出れた」

出た先には、何かS級の集まりで見たパンツいっちょの黒い奴と、クソ生意気なタツマキとかいうガキがいた。

こいつらがいるってことは、エヒメとジェノスも近くにいるのか？  
つて思つて辺りを見渡したら、……うん、二人ともいた。

いたけどなんか、ジェノスが座り込むエヒメを抱きしめてた。

……エヒメ、兄ちゃんはまだ帰らない方がいいか？

「！ お兄ちゃん!!」

「!? せ、先生!？」

エヒメの方が俺に気付き、それでジェノスが慌ててエヒメを離れた。

ジェノスの腕から解放されたエヒメは、ジェノスに抱きしめられてたところを俺に見られても、まったく恥ずかしいと思っていないうばい。

……何ていうか、マジで鈍い妹ですまんなジェノス。でもどういう状況だったんだ？

んなことを思っていたらジェノスの前からエヒメが消えて、そして目の前に現れる。

俺のすぐ前じゃなくて、俺の身長より少し高い所にあいつはわざわざ現れて、そこからダイブして俺の首に抱き着いた。

「おかえり！ お兄ちゃん！ お疲れさま!!」

抱き着かれてとっさに後ろに転びそうになったのを踏ん張って、堪える。

堪えながら、思い出す。

「貴様にはどんな高みに登りつめようとも、あらゆるしがらみも、重さも捨てて、その高みまで飛び立って、隣を寄り添う『鳥』がいるだろうが」

飛びついてきたエヒメを、俺は抱きかかえる。

……捨てなくていい。お前は、お前が抱えておきたいもの、大切に持っておきたいものをずっと持って、ここで生きろ。

お前が来れない場所なんかには、行かない。

お前が全てを捨てなくちゃ、一緒にはいられない所になんか俺は行かないから。

お前の重さで、俺をここに留めておいてくれ。

「おう、ただいま」

## 地上戦、開始

上に残ってた私とジェノスさんは私のレポートで、クロビカリさん、タンクトップマスターさん、駆動騎士さんはタツマキさんが超能力で、童帝君は自分の発明品で、キングさんは童帝君にしがみついてそれぞれ地上に降りる。

まあ、降りたところで私たちにできることはないんだけどね。

ただでさえ協会本部の屋上でも遠かったのに、地上に降りたらそれこそ私たちには戦う手段はない。

タツマキさんを除いて。

さつきタンクトップマスターさんが、瓦礫というより建物の原型がまだ留めてるコンクリート片を持ち上げて船に投げつけてたけど、それ以上の大きさの道路の一部を何十とタツマキさんは超能力で浮かび上がらせて、ひたすらぶつけまくってる。

不謹慎だけど、ある意味A市が壊滅しててよかった。

タツマキさんの弾丸である瓦礫は至る所にあるし、今更周囲の建物や人間に気を遣わなくて済むし。

……A市に関してはこんなにも不謹慎なことが考えられるのに、私は何故かタツマキさんが瓦礫をあつめるのを見るのが嫌だった。

あの船を、墜として欲しくないと欲してしまおう。

それはお兄ちゃんがあの中にいるからっていうのもあるけど、何故か私は無性に、このまま帰って欲しいと思った。もちろん、お兄ちゃん置いて帰るのが前提だけど。

どうしてか、理由は全くわからないけど、あの船を私は憎めない。深海王以上の脅威であることは、このA市を見ればわかるのに、怖いとは思えない。

人類の敵だとは、思えなかった。

「俺は用事がある。先に帰らせてもらおうぞ。」

決着はつきそうだしな」

私が自分でも説明できないこの想いの理由をどうにか知ろうと考

えて足掻いていたら、駆動騎士さんが言う。

童帝君はその言葉に、他にも帰った人がいるからお好きにと答えた。

……そういえば、いつの間にかいな。キングさん。

私がちよつと辺りを見渡してキングさんを探していたら、帰ると言った駆動騎士さんが私の隣のジェノスさんに、「ちよつといいか？」と声をかけた。

私は離れた方がいいかな？　と思っただけど、駆動騎士さんは別にいてもいいと言ってくれたのでそのままジェノスさんの横にいたら、駆動騎士さんはジェノスさんとすれ違いざまに短く言う。

「メタルナイトはお前の『敵』だ。気をつけろ」

ジェノスさんの表情は変わらない。

けど、目が確かに険しく、そして冷たくなった。

「どういう意味だ？」とジェノスさんは駆動騎士さんに詳しい説明を求めるけど、彼はさっさと私たちが立つ瓦礫から降りて、帰って行った。

ジェノスさんに、「今は奴に近づかない方がいい」という忠告だけを残して。

ジェノスさんは駆動騎士さんが去って行った方向に立ち尽くす。

表情は相変わらず、変わっていない。

底冷えするような目のまま、駆動騎士さんの背中を見る。

ああ。そういえばこの人は、こういう目をしてたんだ。

お兄ちゃんに自分の事を話していた時、博士さんの事やお兄ちゃんの事を話す時は一瞬、優しくなっていたけど、彼は仇である暴走サイボーグの事を語っている時は、今にも溢れだしそうな憎悪の灼熱をこの絶対零度の目で押さえつけていた。

その目が、その復讐に捕らわれた生き方が破滅にしか向かわないと思っただから、だからあの日私はお兄ちゃんに追い出されたこの人を追いかけたことを思い出す。

それからまったく言っていないほど、この人はあの目をしなかった。

ジェノスさんの過去や仇の事を私は忘れるくらいに、この人は穏やかな目をして、笑ってくれていた。

……けれどやっぱりこの人の胸の奥にはまだ、復讐の業火が燃え盛っている。

それを否定してはいけない。私だってお兄ちゃんが殺されたらきつと同じ思いを抱くのだから、否定や説教をする資格なんて私にはない。

——だけど……

私は、立ち尽くすジェノスさんの手を取って握る。

それで弾かれたように顔を上げ、ジェノスさんが目を丸くして私と私が握る手を交互に見たから、思わず手を離して謝ってしまう。

「ご、ごめんなさい、ジェノスさん！ いやでした？」

「い、いえ！ そんなことはあり得ません!! ただちよつと驚いただけです！」

ジェノスさんがそう言ってくれてホツとしたけど、今度は逆に「どうしたのですか？」と心配されてしまう。

「いえ……私は大丈夫です。……ただ、ジェノスさん」

私はそう答えてから、つい嫌がれたという不安で俯いていた顔を上げて頼んだ。

「私は、隣にいますから、だからどうか……貴方の『敵』の前でも、隣に居させてください」

この人は私のバカげた仮定をとてまじめに聞いて、そして私の考えを、願いを、……敵としか思えない相手とも分かり合えるのではないかという期待を、正しいと言ってくれた。

間違える自分を止めてくれと、言ってくれた。

私が正しい保証なんてどこにもないのに、それでもこの人はそう言ってくれた。

だから私はこの人の隣に居たい。

私がいつも正しい選択を出来るかどうかはわからないし、私が望むことが正しい保証なんてないけれど、それでも、あなたに傷ついてほしくないから。



だからせめて、私はあなたが少しでも傷つかない選択をしてゆきたい。

そのために、どうかその業火の種火を前にした時も、傍に居させて欲しかった。

自分の命を復讐の為に捨てかねないこの人が、命を捨てようとしたら止められるぐらい傍に、捨てたつて必ず拾ってあげれる位置に居たかった。

そんな私の考えが、望みがどこまで伝わったのかはわからない。けれどジェノスさんは、少しだけ間を置いてから答えてくれた。

「……それは、なおさら負けなくなりますね」

もう彼の金の瞳は、冷たくなかなかかった。

何もかも焼き尽くす、復讐の熱もない。

私を知る、いつもの穏やかで優しい温度の、私を安心させてくれる笑顔で言ってくれた。

「お二人ともー、なんか船が爆発し始めたから、リア充爆発してないで気を付けてくださいいねー」

ちよっ！ 童帝君!!

そのセリフでジェノスさんがリアル爆発しそうになって、逆に船の爆発どころじゃないよ!!

\* \* \*

船が完全に墜ちたのを確認して、私たちも船の向こうに向かう。

クロビカリさんと童帝君は自力で向かうと言ってくれたので、ジェノスさんとタツマキさんの攻撃の際にがれきから落ちて負傷したタックトップマスターさんは、私のテレポートで跳ぶ。

重量系の二人を連れてだから複数回に分けて跳んだけど、まだ病み上がりだからかそれとも精神が不安定なのか、いつもなら余裕の回数しか飛んでないのに妙に疲れた。

「エヒメさん、大丈夫ですか？」

すみません、やはり俺は自力で向かうべきでした」

「大丈夫ですよ。ちよっといつもより疲れただけで、キャパの余裕はまだまだありますから」

そんなやり取りをしていたから、その人がいつやって来たかには気づかなかった。

気がついたら、その人はバッドさんと何か言い争いをしてた。

「何事だ？」

ジェノスさんも気づき、そちらに目を向ける。

バッドさんと言いつ争ってるのは、水色のセミロングで綺麗な顔の人。

バッドさんの言い争う内容からして、彼はヒーローらしいけどS級ではないらしい。

……誰？ 何で全部が終わった後に来て、ひたすら文句や嫌味を垂れ流してんのこの人？

S級の皆さんがしたこと、特にバッドさんやバングさん、アトミック侍さんにプリズナーさんが怪人と戦って勝利したことは無視して、どうしようもできなかった、どうにかできるのならどうかしたかった失敗をひたすら責めたてることにもちろん腹が立ったけど、それ以上私の頭は「この人誰だっけ？」で埋め尽くされた。

え？ 皆さん完璧に知ってること前提で話してるけど、S級じゃないんですよね？

雰囲気的にシババワさんの時よりも聞きにくいけど、本気で誰この人？

なんかこの人、顔立ちはずごく綺麗だけど、逆に言えばそれ以外に特徴が全然なくて、見覚えがあるのかなのかすら私にはわからないんですけど。

私が頑張って頭の中の名簿からこの人を検索するけどまったく誰も引つかからず、今頃メタルナイトもやってくるから、空気は最悪なのに私一人だけが険悪な雰囲気にもなじめないでいると、クロビカリさんが生き残りの宇宙人を捕縛したらしく、その報告で全員がそちらに向かう。

とりあえず険悪な雰囲気は宇宙人の話題でそれたことにホツとしたけど、何故か真っ先に私の知らない人が宇宙人の元まで走って行く。

私の横を通り過ぎた時、私は近くで見たら思い出すかもと思って、横目でその人を見た。

見た瞬間、私は跳んだ。

「エヒメさん!?!」

「ちよつ、何してんすかエヒメさん!?!」

ジェノスさんとバツドさんが同時に声を上げた。

うん、本当に何してんでしょうね、私。

そしてごめんなさいジェノスさん。

あなたの隣に居たいとか言いながら、私は勝手なことばかりをする。

でも、私はここに跳ばなかったら、行動に移さなかったら、また一生後悔するから。

だから私は跳んで、両手を広げて立ちふさがる。

捕縛された数人の宇宙人の前で、彼らを庇う。

私の首に当たるギリギリ手前で、その男の人のものとは思えないくらい綺麗な手は止まった。

「……何のつもりだい?」

私の前に立つ、問答無用で宇宙人を殺そうとした人に、私は言う。

「……話も聞かずに殺すなんてこと、させません」

目の前の人は、綺麗な顔の造形はそのままに醜く固まった無表情で私を睨む。

ジェノスさんと同じ、灼熱を閉じ込めた絶対零度の目で私と後ろの宇宙人を睨み付ける。

……隣を通り過ぎた時、この目を見た時、この人は宇宙人を問答無用で殺すつもりだと直感した。

そしてその直感は当たっていた。

周囲が、私の行動も彼の行動も理解できず、ただ黙って見ている。彼は無表情を溶かして穏やかに笑い、小さな子供に言い聞かせるように私に言う。

「ははっ、優しい子だね。でも、奴らはこのA市を壊滅させた『悪』だ。その『悪』を倒すのは、僕たちの役目だ。同情なんかしなくていい。

こいつらは、許されざる存在なのだから」

……どんなに優しい笑顔の仮面を被れても、仮面では目は隠せない。

復讐に滾った眼は、隠せていない。

「あなたは、殺したい相手に『悪』のレッテルを貼って、自分の行為を正当化させたいだけだ」

だから、絶対に引かない。

「話も聞かず、ただ私たちの一方的な断言で『悪』を決めるなんて、許せない」

別にこの宇宙人を守りたいわけじゃない。

けど、私は目の前の彼を止めなくちゃいけないって思った。

この人のやることを、主張を、否定しなくちゃいけないって感じた。

この人は、私の敵だと直感した。

……まあ、名前とかは未だに分からないんだけどね。

結局、この人誰なの？

## 正義の味方VSヒーローの妹

アマイマスクがエヒメさんを追い越して、捕縛した宇宙人の元に向ってすぐ、エヒメさんは姿を消した。

そして、現れたのは宇宙人の前。

彼女は捕縛した宇宙人たちの前に立ちはだかって、両手を広げて、止めた。

いきなり、何の躊躇もなく宇宙人を殺そうとしたアマイマスクの蠢行を。

「エヒメさん!?!」

「ちよつ、何してんすかエヒメさん!?!」

俺と金属バットが同時に声を上げるが、エヒメさんは答えない。

タツマキが甲高い声で「あんたいきなり、何してんのよ!?!」と叫んでも、アトミック侍に「何してんだ嬢ちゃん! 引け!!」と怒鳴られても、彼女は揺るがない。

ただ強く、目の前のアマイマスクを見据えている。

あの華奢でか弱い体に不釣り合いな、けれど一番美しい強い目で、「逃げない」という誓いを科した目で、どこまでも真っ直ぐに奴を見返していた。

「……何のつもりだい?」

アマイマスクは低く、尋ねる。

俺の位置では奴の背中しか見えないが、怯えきつて言葉をなくして宇宙人の様子と、にじみ出る怒気でわかる。

答えによつては、奴はエヒメさんすら排除すべき敵、殲滅すべき悪と認定し、躊躇いなくあの細い首を斬り飛ばすだろう。

今すぐに奴からエヒメさんを引き離したかったが、エヒメさんのレポートでギリギリ宇宙人を殺すのを阻止できたほどのスピードだ。

おそらく、俺が彼女を保護するより奴の手刀の方が速い。

そんな自分の無力さに歯噛みするが、……おそらく俺は奴より早く動けると確信しても、邪魔なんて出来なかった。

そう、邪魔だ。

「……話も聞かずに殺すなんてこと、させません」

肩や足は小さく、カタカタと震えている。

それでも彼女は広げた手を下ろさず、目をどこにもそらさずに、真っ直ぐに見据えて言った。

アマイマスクが声と言葉だけ甘く優しさを偽造しても、その目は虚飾を一瞬で剥ぎ取り、奴はただ自分の復讐心を「正義」と言い張っているだけだと指摘する。

「話も聞かず、ただ私たちの一方的な断言で『悪』を決めるなんて、許せない」

……貴女は、貫くのか。

あの協会の屋上で語った仮定を、信頼したい何かを。

そんなに震えながら、怯えながら、それでも一步も引かずに。

だからこれは、邪魔をしてはいけない。

これは、彼女の戦いなのだから。

\* \* \*

「……ああ、見覚えがあるなど思ったら、S級にスカウトされて断った子か。

どうして断ったはずなのにここにいるのかは知らないが、断ったのなら余計な口出しはしないでくれないか？

君は、自分で自分から『ヒーロー』にはならないって、助ける立場ではなく助けられる側になることを選んだのだろうか？

なら、大人しく君は、僕に『助けられ』なさい」

「あの協会に所属しないと、誰も守りも救いもしちゃいけないなんて誰が決めた？」

アマイマスクはまだ優しいヒーローとしての仮面をかろうじて被っているが、それをエヒメさんは躊躇なく剥ぎ取る。

嫌味、棘、毒、相手を傷つけるつもりで、彼女の罪悪感を煽って、何もしない逃げた無責任と暗に言ってその場を引かせようとしたのに、彼女は引かない。

ヒーロー協会を否定し、ヒーローを肯定する。

「私は、無私で人助けなんてできない。いつだって見返りを求めている。

自分が後味悪い思いをしたくないから、嫌々やってるだけ。今だって別に、後ろのこの人たちをどうしても守りたいわけじゃない。

ただ、嫌なだけ。

この宇宙人たちが乗った船がA市を滅ぼしたのは事実でも、彼ら自身は何もしてない、何も知らなかった、ただ乗っていただけという可能性がある限り、話も聞かずに排除される所なんて見たくない。

先入観と思い込みで相手の話も聞かずに『悪』と断言されて、取り返しのつかないことが起こるのは耐えられない。

……だから、どかない。

崇高な理想とかそういうのじゃなくて、本当に私の気持ちの問題だから、……だからこそ、私は絶対に引けない」

ヒーローではないこと、アマイマスクのただ傷つけるためだけに言った言葉を、自ら肯定する。

この行為は、ただ自分のわがままだと。

後ろの宇宙人を守りたのではなく、自分を救うためにやっていると言った。

今すぐその首が跳ねられてもおかしくない状況で、自分の命を懸けて、彼女は誓いを貫く。

「ははっ！ 開き直りもここまでくると、さすがに清々しい！」

つまり君は、このA市を壊滅に追いやったこいつらを助けて、こいつらに殺された人たちの犠牲の上で自己満足に浸りたいと言うんだね！

こいつらが再び誰かに牙を剥き、数多の犠牲を出しても責任を取る気もなく、自分自身が『良い人』でありたいために僕の前にこうして立ったと言うんだね!!」

仮面は剥ぎ取られた。

昔の俺のような「悪」に対する余裕のなさ、深い憎悪をむき出しにして、奴はエヒメさんにもはや怒気を超えて殺気に至ったものを言葉と一緒にぶつけた。

「おい、てめえ！ エヒメさんに手を出してみろ！ 脳みそカチ割んぞゴルアツ!!」

「待て！」

今にもエヒメさんに凶器同然のあの手刀が繰り出されてもおかしくない中、金属バットがアマイマスクに向って行きそうになつてので、腕で制して止める。

「！ てめつ、新入り!! お前、状況わかつてんのか！ エヒメさんが殺されて……」

「まだだ。まだ、終わっていない」

金属バットが怒りの矛先を俺にも向ける。が、俺はそちらを向いてる余裕はない。

いつでも、奴の手刀からエヒメさんを守るように焼却砲の準備をするが、それは今じゃない。

彼女の戦いは、まだ終わっていない。

「これで怖気づいて止まってくれる人なら、俺も先生も苦労しない」別に金属バットや他の奴らに言ったつもりはなかったが、俺の呟きは結果として良い説明になったようだ。

「……ええ。私は、この人たちを生かしたことで起こるかもしれない『失敗』の責任は取れない。

でも、それはあなただって、誰だってそうだ」

身体はアマイマスクが放つ殺気に慄き、震えが止まらない。

それでも、彼女は立ち、両手を広げて、真っ直ぐに奴を見据える。

誓いは、あまりに痛々しいほどに揺るがない。

「失敗の責任なんて、大きい小さい関係なく誰にだって取れない。あとからプラマイゼロにすることや、結果として良い方向にもつていくことが出来ても、失敗した時、何かが傷ついたり損したり、永遠に失われてしまったことは覆らない。

被害者は永遠に被害者で、加害者だって永遠に加害者だ。

……償いなんて、出来ない。

だからこそ、失敗なんてしないようにしなくちゃいけない。

だから私は、あなたのすることを肯定しないし、絶対に止める！

『死』という一番取り返しのない失敗を、『正義』だなんて語らせない！



『今』を『結末』になんかさせない！

結果が大事なら、なおさら『今』を大事にしろ！ この『今』がどうして起こったかを知って、そして考えて、もう二度と起こらないようにするべきでしょうが！

何かを『悪』と決めつけて排除こそ、責任を、この先に起こりうる最悪から目を背けて、もう大丈夫と自分を騙したいだけだ！

……それはいつか必ず、破綻する。人は自分に嘘はつけても、隠し事は出来ない。

いつか必ず、あなたが犯した『取り返しをつかないこと』は、あなたの全てを奪って潰して壊して焼き尽くして殺し尽くす。

だから、逃げるな。現実から、現在から、悪や正義で二分なんか決してできない、灰色から。

その灰色を、白か黒かを決定づけるのは、私たちが『今』行う、行動次第なんだから」

……どうして貴女は、そんなにも弱い身体で、そんなにも壮絶な生き方を選ぶんだ？

失敗を誰にも許してもらうことを求めず、目をそらしていたいものをまっすぐに見据えて。

それは痛みが伴うどころか痛みしかない、もはや拷問に等しい生き方だ。

なのに、この人は選ぶのか。

あまりにか細い体で、逃げるためだけだったはずの力で、その目に光を灯して、その生き方を選ぶのか。

——貴女は正真正銘、サイタマ先生の妹ですね。

「——何のつもりだい？」

わずかに、指先を動かしたアマイマスクが訊く。

それは、奴の真後ろで焼却砲を構えた俺にか。

俺が制していた腕をどけた瞬間、飛び出して構えた金属バットにか。

静かに音もたてず、近場の巨大な瓦礫を浮かび上がらせたタツマキにか。

愛刀に手をかけたアトミック侍か。

隻腕になつてなお、師と同じく居合の構えを取るイアイアンか。

ビキビキと音を立てて筋肉を膨張させる、ぷりぷりプリズナーか。

タツマキの巻き添えで負った傷も無視して拳を鳴らす、タンクトツプマスターか。

宥め役だったのに、今は無言で構えているクロビカリか。

ランドセルから複数の武器を携えたアームを起動させている童帝か。

後ろ手で手を組んだまま、それでもこの場を制圧させる気を放つバングにか。

誰に訊いても、答えは同じだ。

「エヒメさんから離れろ、アマイマスク」

## ヒーローの仕事

俺の言葉を鼻で笑い、奴は芝居かかった動作で振り返って、舞台演技のように大仰に語りだす。

「はっ！ 君たちは実に模範的で理想の『ヒーロー』だね！」

都市を一つ丸ごと壊滅に追いやった化け物を庇う、心優しい少女とその少女を守る騎士達!!

映画なら大ヒット間違いなしだろう!! ……映画なら、フィクションの世界ならね！」

空々しく俺たちを讃えていたのを一変させ、奴は憎悪をむき出しにした眼で俺たちを見渡す。

「現実を見る？ それはこちらのセリフだ！ 頭が花畑な夢見る女の子が勝手に理想を語るのには別に良いが、それは自分の日記の中に書き連ねておけ！」

君たちは責任を負う覚悟がないことを、詭弁で言い逃れる以外何もできない、傷ついたこともなくハッピーエンドで終わるフィクションを現実とはき違えてる子供を守ると言うのか？

それはただの甘やかしだ。ヒーロー以前に大人なら、間違いを正すために叱るのが責任で役目だろうが」

……あまりの見当違いに、怒りが湧かず憐れみがこみ上げた。

頭が花畑？

責任を負う覚悟がない？

傷ついたことがない？

それはどれもこれも、あまりに彼女を表すには程遠い言葉だ。

「本気でそう思っておるのか？」

バンクが静かに、口を開く。

「違うじやろ？ お前さんも、その子は殺されるのも覚悟でそこに立っておることくらい、わかっておるのじやろ？」

S級にスカウトされた経緯を知っているのなら、傷ついたことがない訳がないことも知っておるのじやろ？

アマイよ。もう一度よく見てみる。その子の震えと両手の包帯を

見て、そしてもう一度言ってみろ。

傷ついたこともないと、逃げる以外何もできないと」

バンクの静かで穏やかな、諭すような言葉にアマイマスクは顔を歪めて、歯を食いしばる。

その反応が、本当はどう思っているかの証拠だ。

机上の理想論ではなく、どれほどの痛みかを知ったうえであの拷問のような苛烈な生き方を彼女は覚悟していることくらい、奴は理解しているのだろう。

それでも、受け入れられない。

奴にとつての「悪」を生かすこと、守ること、救うことを、アマイマスクはどうしても許せない。

……その気持ちをも、俺は知っている。

エヒメさんに俺の復讐は生きるための「手段」か、生きる「目的」かと尋ねられた時、同じようなことを思った。

復讐が無意味だとか、死んだ家族はそんなことを望んでいないだとか、そんなのわかってる。

それでも、俺から全てを奪ったあの暴走サイボーグが許せなくて、存在しているという事実だけで気が狂いそうなので、復讐しかもう俺に残されたものはなかったから、否定などされたくなかった。

恩義のある人からの言葉だったから、俺はあの時まだマシな対応が出来た。

そしてそれ故に、俺はこの何よりも大事にしてゆきたい、大切なものを得た。

「正義」ではなく、「ヒーロー」になれた。

けれどこいつは、アマイマスクは気付いていない。

俺とは違って、エヒメさんの言葉をちゃんと聞けていない。理解できていない。

奴にとつて、エヒメさんの言葉は自分の全てを否定する言葉だとか思えていない。

「貴様は、本当に『正義の味方』だな。アマイマスク」

だから俺は、憐れみを込めて教えてやる。

「エヒメさんが守り、救おうとしているのが、貴様が断じた『悪』だけだと思っっているのか？」

もはや目に映るすべての対象に憎悪した目が、俺を睨みつける。

……子供はどちらの方だ。

貴様の方がよほど子供だ。

自分の世界が全てで、自分の考えがこの世の理で、気に入らないものを全て壊す、癩癩持ちのクソガキに過ぎない。

「エヒメさんは、その人が何故、貴様の『正義』を止めるのか、本当にわからないのか？」

貴様が『取り返しをつかないこと』をしすぎた結果に起こるであろう悲劇を、その人は案じているから止めるんだ。

……守り、救う対象に貴様も入っているんだ」

このA市を壊滅に追いやった宇宙人の残党も、そいつらを庇う自分ごと殺そうとする敵も、彼女にとっては等しく守り、救わねばならない存在。

だからこそ、彼女の選んだ生き様は拷問なんだ。

「——救う？ 僕を？」

ははははははははははははははははっ！ ああ、それは面白い冗談だな。ぜひとも、救ってほしいよ！！ 救えるものならね！」

……けれど、俺の言葉に意味はない。

俺以上に余裕がなく、何かを憎んでいる、それ以外の抛り所はなく、纏うものはすべて虚飾の男はただ嘲笑う。

俺はただ、目の前の男を憐れむ以外出来なかった。

この男を救おうなんて思えなかった。

「必要ないわよ。っていうかアンタ、私の話を聞いてなかったの!？」

ガラガラと耳障りな音が周りからしても、掻き消されることのない甲高い声が響く。

タツマキがまた、周囲の瓦礫を片っ端から浮かび上がらせて、緑の燐光を放ちながらエヒメさんを睨み付ける。

「そういうのは、私の仕事だって言ったでしょ！ だからもう、あんたは大人しくしてなさい!!」

……そしてアマイマスク。何のつもりって訊いたわね？ 教えてあげる。

いい年こいて女の子を脅すわ、論破されたら逆ギレるバカをとつちめてやるつもりよ!!」

……クソ生意気で気に入らないクソガキだが、今だけは好ましい。

ああ、そうだ。

こいつに焼却砲を向ける理由なんて、それで十分だ。

「はっ！ 同感だ。」

大人の役目だなんだほざいておいて、てめーのしてることなんて終わった後に文句をグチグチグチ垂れ流すだけじゃねーか」

「僕なんてそもそも、大人じゃないからねー。」

だから、人として当然な行動をしますよ。どう考えても、嫌味しか言わない人の味方をするより、綺麗なおねえさんを守るのが大人子供以前に人として当然でしょう?」

金属バットと童帝は軽く笑って、もはやヒーローとしての建前すらないことを言い出し、アトミック侍も刀に手をかけたままやはり笑って同意した。

「違いねえー！ 化け物と戦うことはもちろんだが、こういう嬢ちゃんを守ってこそヒーロー冥利尽きるってもんだ！」

さすがに他の者は奴らの発言に苦笑するが、誰も咎めない。

当たり前だ。本心から称賛や感謝、苦労を労わる言葉を求めず、奉仕活動や慈善行為を出来る者なんて、奇跡のような存在だ。俺はそんな人、二人しか知らない。

俺たちは結局、ヒーロー以前に人間だ。

自分たちの苦労やしてきたこと、経緯を見ずに結果を「無価値」と断じた男の味方など、この場には一人しかいない。

その一人こそが、エヒメさんであることを奴は気付けない。

アマイマスクは自分を取り囲むS級を再び、先ほど以上に忌々しうに見渡した後、もう一度エヒメさんに向き直る。

彼女は、俺たちがアマイマスクに対して臨戦態勢に入っても、俺たちに頼って後を任せたり、もう大丈夫だと安堵なんかしなかった。

ずっと手を広げて、やはり宇宙人をずっと庇って立っていた。

どこまでも強い目で、真っ直ぐに自分の敵を見据え続けていた。

その変わらぬ体勢、変わらない目、揺るがない心を前にして、アマイマスクはエヒメさんに殺気をぶつける。

臆病な者、戦いなんかしたことのない一般人なら、数メートル離れていても気絶や失禁をしてもおかしくないものを、今にもくびり殺せそうな至近距離でぶつけられても、彼女は揺るがない。

後ろの宇宙人たちが気絶や失禁をしてる中、彼女は足をガクガクと震えさせても、その膝は崩れない。

鳴りそうな歯を食いしばって耐えて、彼女は逃げずにそこに立つて、貫く。

宇宙人の命を守り、アマイマスクを破滅への未来から救うために、彼女は戦い抜いた。

「……いつか君は、必ず後悔する。その幼稚で愚かな理想論をね」

根負けしたのか、それとも自分が手を下すまでもなく彼女はいつか必ず、その自ら科した誓いに負けて破滅すると思ったのか、両手をズボンのポケットに突っ込む。

戦意を、収めた。

だが、奴の殺気は何一つ収まっていない。

毒ガスのようにまき散らしながら奴はエヒメさんを蔑み、嘲り、憎みながら、破滅への予言か、それとも苛烈な生き方を選んだ彼女に対するわずかな哀れみか判別のつかない言葉を送る。

「覚えておくんだね。綺麗事で、ヒーローは務まらないと」

しかしその言葉は、エヒメさんを言い表す言葉以上に見当はずれだった。

「はっー」

「……………ふふっ」

思わず、示し合わせたように俺とエヒメさんが笑った。

その反応にS級達は俺とエヒメさんを交互に不思議そうに見て、アマイマスクは不愉快そうに「……………何がおかしい？」と訊いてきたので、言ってる。

どれだけおかしい発言をしたのかを、こらえきれないまま笑って教えてやる。

「何を言ってるんだ、貴様は？」

ヒーローの仕事は、綺麗事を実践して実現することだろうか？」「あなたの言ってること、『八百屋が野菜を売り始めたら終わり』ってくらい意味不明ですよ」

俺の言葉とそれに続いたエヒメさんの例えが、何故かS級どもの笑いのツボを突いたらしい。

全員が嘖き出し、金属バットに至っては腹を抱えて座り込んで爆笑している。

その様子にアマイマスクの殺気も薄れた。さすがに爆発寸前のピリピリした空気が一気に緩んだことで維持できなくなっただけらしい。

もしくは、羞恥が憎悪や殺意に勝ったのかもしれないが。

「……つち!!」

怒りこそは全く抜けていないが、戦意も殺意も完全に消えたアマイマスクは一度舌打ちをして、何も言わずにエヒメさんから背を向けて、そのまま去って行く。

これ以上、何かを言っても締まらないからそれが良い判断だろう。

奴が背を向けてエヒメさんから離れ、金属バットがまだ笑いながらも、雑魚呼ばわりされたことに文句をつけようとした時、エヒメさんがその場に座り込む。

完全に自分が奴の眼中から外れたと認識して、腰が抜けたのは一目瞭然だった。

「エヒメさんー!」

俺は、ようやく駆け寄った。

言いたいことは山ほどあった。

どうしてあんなことをしたのかは分かったが、あんな無茶をしないで欲しかったと怒りたかった。

けれどよくここまで頑張ったことを、例え称賛なんて求めていなくても与えたかった。

けれど、俺の体はあまりに俺の願望に素直だった。



「ジエノスさっ!?!」  
俺は駆け寄り、その場に座り込むエヒメさんを躊躇なく抱きしめた。

さいごは笑顔で終わりました

アマイマスクの意識が私からバッドさんに移った瞬間、私は膝から崩れ落ちた。

あー、よく立ってられたなあ私。

もう自分でなんて言ったかも覚えてないや。

……私、お前誰だよ？ って口走ってないよね？

もう完全にあの人からぶつけられる殺気に怖気づかないようあえて、こいつ誰？ とか、お前イケメン仮面かよ！ とか、髪形変えんなただでさえ特徴なくて覚えにくいのにとか、っていうか前はショートだったよね？ え、もう伸びたの？ それともカツラ？ お兄ちゃんの間男なの？ とか、かなりどうでもいいことばっか考えてた気がする。

いや、名前がわかんなかったのはどうでも良くないけど。ものすごく困ったけど。

「エヒメさん！」

今更自分がやった事の危なっかしさに腰を抜かした私を、ジエノスさんは呼ぶ。

ジエノスさんは私が深海王に追い詰められた時、駆けつけてくれた時と同じ顔をしてた。

自分を責めるような、危ない事をした私に怒っているような、けれど無事であることを喜ぶような今にも泣き出しそうな顔をして、ジエノスさんは私に駆け寄ってくれた。

「ジエノスさっ!？」

まずは謝るつもりだった私の言葉は、出てこなかった。物理的に。

「嬢ちゃん！ おっ?」

「ちよつとアンタ、腰を抜かすくらいなら……ってちよつと!？」

「んなっ!」

「おお！ ジエノスちゃん大胆だな」

「あーあ。金属バットさん終了のお知らせだ」

「……童帝、言っってやるな。最初からわかっていただろう?」

「……あの、師匠。今更ですが彼女は誰ですか？　というか、何がどういう関係でどういう状況でしょうか？」

「ふむ……では後は若い二人に任せるとしようか」

「シルバーフアングさん、お見合いじゃないんですから」

「……金属バット、ショックを受けてるようなら僕は帰るぞ」

何か色々言ってる後ろの皆さんにツッコミたいけど、それもできない。

……私は今、それはもうしつかりとジェノスさんに抱きしめられて、私の頭はジェノスさんが自分の胸に抱え込むような状態。

えっと、……ジェノスさん？

しばらく無言で、後ろでタツマキさんが「ちよつと何してんのよサイボーグ!!」と怒鳴っても何の反応もなかったジェノスさんが、まったく私を抱擁する腕を緩めないまま呟くように言った。

「エヒメさん……俺は今、結構怒ってます」  
ですよねー。

「貴女にも怒っていますし、自分の事も許せない。

……でも……今は……」

何とかジェノスさんにせめて謝ろうとして身をよじるけど、その動きを封じるように、痛くはないんだけどさらに強く抱きしめて、ジェノスさんは言う。

「無事で……良かった……」

私が生きていることを確かめるように、実感するために、そして離れていかないように、ジェノスさんは私を腕の中に閉じ込める。

……きつと、あの隕石の時の私と同じ心境なんだろう。

無事だとわかっていても、その腕でその存在を確かめたくて、手を伸ばさずにはいられない。

だから私は身をよじったり、離れようとしてジェノスさんの体を押し返すのをやめた。

ごめんなさい、ジェノスさん。心配ばかりかけて、自責なんてする必要のないにそんな思いをさせて。

……私はちやんとここにいますから、安心してください。

そう伝えるために、私は大人しく身を任せた。

心音とは全く違うけどこの人の生きている証の音を、私もただ聞き入る。

\* \* \*

「ちよつと!! 無視するんじゃないわよ!!」

「……くそガキめ。童帝の方が腹は立つがマシだな」

けど無視され続けたタツマキさんがキレて叫んで、ジエノスさんがさすがに無視できなくなって少しだけ腕の力を緩めた。

緩めただけで、離してはくれないんだけどね。

けどようやくジエノスさんの胸に抱え込まれていた頭をジエノスさんの肩から出すことが出来たので、とりあえず私はタツマキさんに謝っておいた。

「ご、ごめんなさい、タツマキさん！ 何かその、色々迷惑と心配をかけて……」

「し、心配なんかしてないわよ！ 何で私があんたの心配しなきゃならないのよ！

それにあれくらい、迷惑でも何でもないわよ！ イケメン仮面をひねりつぶすくらい、息するより簡単よ！

っていうか、あんたは危機感とかそういうものを持ちなさいよ！

何盛大にセクハラされてんのに、呑気に私に謝ってるのよ！ サイボーグもいい加減にしなさいよ！ 私にスクラップされたいの!？」

……実に面倒くさいけど、実にテンプレートなツンデレだな、この人。心配してないと言った端から、ジエノスさんに抱きしめられてることをセクハラだと思つて心配してくれてるし。

気持ちはあるがたいし、確か他のS級さんが面白がられたり気まぐすようにされるのは恥ずかしいけど、でも私は答える。

「せ、セクハラじゃないです！ 大丈夫です！ 心配をかけた私が悪いんですから！

……それに、嫌なんかじゃないですから」

ジエノスさんから離れず、抱きしめられたまま答えると、タツマキさんの怒気が呆れに変わった。

「……あんたら、もう本当に爆発しろ」

タツマキさん、それはリア充的な意味？ それともリアル爆発をご所望されてる？

とりあえず何を言われても離れる気がないジェノスさんと、引き離す気もない私にもう何か言うのは諦め、タツマキさんは浮かび上がったまま私の後ろの宇宙人に目を向けた。

「で、あんたたちは結局何のために地球にやってきて、何でA市を滅ぼしたのよ？」

まさかタツマキさんがそんな質問をわざわざするなんて思っていなかったから、思わず目を丸くして彼女を見たら、タツマキさんは一瞬だけ私を見て、すぐに鼻を鳴らして目をそらして言い訳のように言葉続ける。

「ふん！ 何よ！ 私だって町一つ壊された理由もわからないままは気持ち悪くて嫌なのよ!!」

っていうか、私が訊いたんだからさっさと答えなさいよ雑魚ども!!」

ツンデレなのかツンギレなのかよくわからないことを言い出して、またタツマキさんがその辺の瓦礫を超能力で持ち上げたら、アマイマスクの殺気で気絶しっぱなしのを除いて、宇宙人が口々に語りだした。

「お、俺たちはボスの命令を聞いてただけだ！」

「この星にボスと対等に戦える奴がいるって聞いて、俺らは20年も無理やりあの船で働かされていたんだ！」

「俺たちは船の掃除とかしか任されていない雑用係で、砲撃とかそういうのには全く関係ありません！」

……私が庇った宇宙人たちは、私が望んだ通りの言葉をくれる。

なのに、私は何も満たされない。虚しいと感じている。

それは、こいつらの言葉を信じてないから。こういうえば助かると思ってるのは丸わかりな嘘だと確信してるから。

……アマイマスクの前に立ったこと、彼のしようとしたことを止めて、否定したことに後悔は何もないけど、彼の言う通りこいつらは排

除した方がいい奴らである可能性の方がはるかに高かったことくらいわかったうえで、の行動だったけど、……それでも、悲しいとか腹が立つとかじゃなくて、虚しい。

私のしたことは何の意味もなしていなかったという事を思い知らされたのが、どうしようもなく虚しい。

「……エヒメさん」

その虚しさをジェノスさんに気付かれたのか、彼はまた少しだけ強く抱きしめる。

まだ口々に自分たちが生き残るために、自分たちのボスがどれだけ悪逆非道だったかを語る宇宙人たちを、タツマキさんは汚物を見るような目で見下ろして言う。

「もういいわ。っていうか、不愉快。黙れ」

彼女の言葉で宇宙人たちは押し黙り、耳が痛い沈黙が続く。

ジェノスさんもタツマキさんも何も言わない。

他の人たちはもう私たちから離れて、まだ宇宙人の残党がない探してる。

……いっそ、アマイマスクのように私のしたことを責めて欲しかった。

私の主張はアマイマスクの言う通り、頭が花畑の子供の理想に過ぎないのは事実なんだから。

「………違うんだ」

けど、私は結局アマイマスク以外に責められず、沈黙を破ったのは宇宙人の一人だった。

他の宇宙人が自己弁護をしている時はずっと黙っていたので、気絶をしているのかと思ってた一人が、絞り出すような声で語った。

「違うんだ……。俺らは確かにほとんど何もしてないけど、まだ何もしてなかっただけなんだ！」

俺たちは皆、ボスの命令があろうがなかろうが、やってきた星を問答無用でぶっ潰してきたんだ！」

「おい、バカ！ 何言ってるんだ！」

唐突に、自分たちが不利になる告白を始め、私もタツマキさんも、

ジエノスさんも顔を上げて目を丸くさせる。

彼は仲間に黙るように言われても、告白をやめなかった。

「俺は宇宙の中でもクズだと思っけど、でも……やっぱ出来ねえよ！」

あんな俺らも何もできずにチビるしかなかった殺気を放つ奴から俺たちを庇ってくれた子に嘘をつくのも、一人で十分なのに俺らを拾ってくれたボロス様に責任全部押し付けんのも！

そもそも今回はボロス様、砲撃命令出してなかったじゃねえか!!

ゲリユガンシユプ様が俺らにそれを伝えたら、グロリバース様とメルザルガルド様が反対して、俺たちも20年もこんなへき地まで旅させられた鬱憤を晴らしたくて、ボロス様と対等な奴ならあんな砲撃くらいで死なないってゲリユガンシユプ様を説得して、ボロス様の命令を無視して俺たちが勝手にいつも通り、砲撃したんじゃねえか!!」

罪悪感に耐えきれず、彼は全てを叫んで吐き出した。

私にとって別に何の救いにもならないことを、彼はただきつと罪悪感で潰れそうだから、自分が楽になりたくて、そのためだけに吐き出した。

なのに、私は……

「——そう」

「エヒメさん!?!」

「! ちよつ、ショックだったのはわかるけど、泣くんじやないわよ!」

ジエノスさんとタツマキさんが何の前触れもなく溢れて流れた私の涙に驚き、心配してくれた。

「大丈夫です。……大丈夫」

私はただ、そう答えて涙を拭う。

どうして涙が出たのかは、わからない。

悲しいような、ショックなような気もするけど、どこか嬉しい気がした。

A市が壊滅してからずっと、私の中で渦巻いていた理由の分からない怒りと悲しみが溶けていくのを感じる。

それは涙となって溢れ出たと思えなかった。

\*\*\*

折り紙を手にとって、私は何も折らずにただそれを眺める。

何も折る気にはなれず、今日一日の記憶を反復する。

……今日はなんだか、私自身が全く説明のできない感情に振り回された。

A市が壊滅した時、信じられない、信じたくないと思ったのを筆頭に、あの船を墜として欲しくないと思ったり、宇宙人の言葉で泣いたり。

……お兄ちゃんが船から出てきた時も、そうだった。

お兄ちゃんが無事帰ってきてくれたことが確かに嬉しかったのに、お兄ちゃんのヒーロースーツを汚しているのは、自分のじゃなくて敵の返り血だつてことはわかっていたのに、……無性に悲しかった。

その悲しみを誤魔化すように、私はまだ腰が抜けていたくせにレポートで跳んで、お兄ちゃんに抱き着いた。

お兄ちゃんは私の様子がおかしいことには気づいていたのかもしれないけど、何も訊かないでただ黙って私を受け止めて、抱きかかえてくれた。

それが嬉しいのと同時に、私の中の悲しさが大きくなったのは何故か、わからない。

……まあ、その後またタツマキさんが無視されたことにキレルわ、ジエノスさんがタツマキさんに現代アートにされるわ、タツマキさんが私やジエノスさんどころかお兄ちゃんより年上だって言うわで、なんかグダグダの内に吹っ飛んだけど。

タツマキさん、いったいいくつなんだろう？

そんな感じで忘れていたのに、何故か折り紙を見てまた思い出す。説明ができない、むしろ私が教えてほしい胸の痛みが蘇る。

……どうしても何も折る気が湧かず、大好きなはずの鶴を折ろうとは思えず、私は折り紙をテレビ台に置いて、布団を敷く。

「折らないのか？」

マンガを読んだと思ったたお兄ちゃんが、訊いた。

「……折っても邪魔になるだけだから、もうやめようかなって思っ



訊かれても本当に折らない、折れない理由は私自身にもわからないから、私は適当に答えた。

「ふーん」

お兄ちゃんは私の答えに納得したような、同じように適当な相槌なのかよくわからない返答で読み終わった漫画を本棚に戻して、それから私が置いた折り紙を手を取った。

「お兄ちゃん？」

私が何をしてるんだろう？　と思つて呼びかけたら、お兄ちゃんはいつものやる気のない顔で覇気なく何気なく、意外なことを言い出した。

「エヒメ。折り紙を教えてくださいよ」

「え？」

お兄ちゃんは私の趣味に関して文句とかバカにする類は一切言つたことがなくて、すごいないつも褒めてくれたけど、興味を持ったことはなかった。

私自身も、お兄ちゃんがどうのこうのじゃなくて男の人が興味を持つようなものじゃないことはわかっていたので、一緒にやろうよと誘つたことは一度もない。

私のポカンとした顔をお兄ちゃんは一度睨んで、気恥ずかしそうに言つた。

「何だよ。別にいいだろう？」

……他になんか、闘い以外に興味湧くものを、『ヒーロー』以外の趣味を見つけたらいつて思つても」

……お兄ちゃんを否定するみたいで、私は一度も言えなかった。

闘い以外の何かに目を向けてつて、ヒーロー以外の趣味を、生きがいを見つけてほしいって、私はずっと思つていたくせに言えなかった。

また、説明できない感情が沸き上がる。

その沸き上がった感情を押し殺さず、私は言う。

「いいよ。教えてあげる」

誰かに「ありがとう」と胸の内伝えて、私は笑つた。

## 10 ヒーローズ編

一人目、「お兄ちゃん」

「つたく……こんな絵じゃわかんねーよ……」

俺が協会のお偉いさんから「暇だろ」の一言で押し付けられた猫探しに愚痴ったら、もう一つの押し付けられたものが一気に喚きだした。

「ひどい！ 一生懸命描いたのに！ パパに言いつけてやるんだから！！ そしたらすぐにヒーローなんてクビよ！ クビ！」

……何で俺は子守しながら猫探ししなきゃならねーんだよ？

いや、俺に猫探しを頼んだおっさんもさすがにこの絵じゃわからんってことはわかってたから、見分けがつく娘を連れていけって言って、それを了承したのは俺だ。つまりは、自業自得か。

うん。俺の考えが甘かった。歳の離れた妹がいるから、子供の扱いくらい余裕だぜ！ と思っただのが間違이었다。

このクソガキ、子供の頃のエヒメとは全然違うタイプだ。

言いたいことを言えず、泣くのも我慢していつもじっと耐えてたエヒメと違って、こいつはお偉いさんに甘やかされて育ったのか、言いたいことを全部言うタイプだった。

エヒメも面倒だったけど、言ったことを100倍にして返すこいつよりはマシだったな。

あんまりにも可愛げがなかったもんだから、思わず大人げなく俺は無理して協力する必要もねーし、別にクビになってもいいって言ってやった。

……そしたらこの世の終わりみたいな顔して、しかも声を上げずに泣き出しやがった。

おい、やめろ！ その顔と泣き方はやめろ！ お前の性格なら、大声で泣き喚くタイプだろ！

なんでそんなとこだけ、エヒメにそっくりなんだよ!?

大声で泣かれたら「うるせえ！ 泣くな！」くらい言えたけど、あ

んな泣き方をされたらさすがに放っておけず、ちゃんと探してやることを約束して肩車してやると機嫌が直った。

子供って何で高いところ好きなんだろうな。

おい、頭をペチペチ叩くな。

「お前さ、友達に対してもあんななのか？」

「何？ どーゆー意味よ？」

肩車をして歩きながら俺が訊くと、顔は見えねーけどたぶんまたクソ生意気そうに唇を尖らせて、頭の上で訊き返す。

「俺にやってみたみに、親が偉いから威張って悪口言ってるじゃねーかってことだよ」

「!? そ、そんなことやってないもん!!」

最初の否定は強く怒ってだったけど、その後は「やってないもん……そんなの、やってないもん」と弱々しく呟いて、また泣きそうな雰囲気を感じた。

こいつ、怒り方は昔のエヒメに全然似てないけど、悲しみ方は本当にそっくりだな。

「やってないけど、偉そうとか、調子に乗ってるとか言われてんのか？」

今度は何も答えなかった。ただ、無言で俺の頭に爪を立てた。痛えよ！ 地味に結構痛えよ!!

でもこれはわざとやってるわけじゃねーだろうから、怒れない。

……あーあ。エヒメに似てなきや似てないで面倒だけど、似てたら似てたで面倒だな。

ほっとけねーだろ。

「お前は悪くねーよ」

俺がそう言っていると、頭に爪を立てるのをやめて、身を乗り出して俺の顔を覗き込んできた。

おいやめろ、危ないだろ。落ちんぞ。

「お前は威張ってもないし、調子に乗ってるわけでもねーんだろ？」

他人の言うことなんか気にすんな。そういう奴らはな、何をやってても何もしなくても、言いたいから言ってるんだ。

お前が何をしたって、お前がどんな頑張ってもどうしようもない親の事で、お前を嫌ってるんだから、お前がどうしたって無駄なんだ」俺が見上げて言ってるやると、「その発想はなかった」か「そういう考え方をしてもいいんだ」と言わんばかりのポカンとした顔が、俺を見下ろしてた。

……お前はお前で辛い思いをしてるかもしれないけど、俺の言葉でそんな顔出来るだけマシだ。

「お前は悪くない」って言っても、「何をしても無駄だった」と思うしかない程に絶望してたあいつと違ってな。

「何したって無駄なら、いっそ自分がしたいことしろよ。」

それこそ、俺にしたみたいに悪口でも言ってるやればいいし、親にイジメられたって言ってもいい。自分がしたくもないことをやってても楽しくないし、後悔しかしねーからな」

俺の頭に両手と顎を乗せて、こいつはしばらく黙っていたけど、また呟くように「……でもそんなことしたら、余計に厭なことされる」と言う。

だろうな。

「そんな時こそ、ヒーローを呼べ。俺で良ければ、いじめっ子を……まあ殴んのはさすがになしか。とりあえず、叱ってやるよ」

また頭の上で、ポカンとしてる様子が伝わってくる。

「いいの？」

「猫探しよりは、そっちの方がヒーローの仕事だろ？」

もちろん、助けるのはお前が悪くない場合だけだ。お前も悪かったら、どっちも叱り飛ばすけどな」

そう言ってるやると、頭上で高い笑い声がした。

足をバタつかせて、そいつは笑って俺に言う。

「びーきゆうなんてカッコ悪いから、頼まないよーだ！」

「……くそガキ」

結構マジでムカついて見上げたけど、そいつの笑顔を見たらもうどうでも良くなった。

……つたく、どうしてこんなにも生意気で可愛げのなくそガキな

のに、泣き顔と笑顔は子供の頃のエヒメに似てんだよ。

\* \* \*

「!? お兄ちゃん、どうしたのその傷!!」

無事、猫を見つけてついでにジエノスがなんか駆除を頼まれてた奴も片づけて家の帰ったら、エヒメが「おかえり」と言う前に俺の顔の傷を見て、泣きそうな顔になった。

なのに、ジエノスが「猫に引つ搔かれました」と言った瞬間、腹抱えて爆笑しやがったし。何なんだ、お前。

「あはははっ! 怪人に殴られても怪我しないのに、猫の爪には負けるって、お兄ちゃんの皮膚は何製なの!？」

「うるせーぞ、エヒメ!!」

俺が怒鳴ってやつとエヒメが笑うのをやめるが、まだ目に涙が浮かんでる。

そこまで笑わんでもいいだろマジで。

ただ、笑いつつもエヒメは救急箱を用意してくれた。

俺がヒーローを始めたころは使いまくって、今では全く使わない自身の使用期限を確かめて、消毒液を脱脂綿に湿らせた。

「エヒメさん、俺がやりますよ」

「いえ、大丈夫ですよ。ジエノスさん」

ジエノスの申し出を断って、エヒメが俺の怪我の手当てをして、俺は黙ってそのまま任せる。

懐かしーな。これ。

昔はエヒメに泣かれながら、怒鳴られながらだったけど……、こんなにも穏やかに手当てされる日が来るなんて、あの頃は思ってもなかった。

同時に思い出す。

あの頃はこうやって手当てをされるたびに、もう怪我なんかしないで誓ってた。

こいつを泣かせない、心配させない為に。

……その誓いは叶ったのに、俺は未だにエヒメを泣かせるし心配をかけてばっかだ。

「なあ、エヒメ。」

俺、プロヒーロー向いてねーのかな？」

思わず俺は、ジェノスにしたのと同じ質問をエヒメにもした。

ジェノスが後ろで、俺が初めにした時と同じく「そんなことありません！」と言ってるが、エヒメはきよとんとした後、また少し笑って答える。

「猫探しには、確かに向いてないよね」

おい、あのクソガキと同じ答えを返すんじゃないよ。

そう思っていたら、エヒメが救急箱を片付けながら、言葉を続ける。

「プロでもアマチュアでも猫探しに向いてなくても、お兄ちゃんはこのヒーローだよ」

当たり前のようにエヒメは言って、笑った。

泣かせて心配ばかりかける俺を、お前が一番辛かった時に何もしてやれなかった俺を、「ヒーロー」と呼ぶ。

「……そっか」

なら、まだ頑張るか。

## 二人目、「友達のお兄さん」

待ち合わせの駅につくと、まだ約束の10分前なのにその人はすでに待っていてくれた。

「おねーさん!!」

「ゼンコちゃん、久しぶり」

ゼンコが嬉しそうに走って行けば、エヒメさんがゼンコの背に合せて体勢を低くして抱き留めてくれる。

何だここは？ 天国か？ 天国はここにあったのか。

ゼンコの約束をまた守ってやれなかった詫びと、発表会に頑張った褒美に何か買ってやるとまた新しく約束したのは、ついこの間。その買い物にゼンコは、「お兄ちゃん、エヒメおねーさんも一緒に来てもらっていい？」と言ったのは昨日だ。

むしろ俺がぜひお願いしますと土下座しそうになったのを抑えて、エヒメさんにも都合があるから訊くだけ訊いてみると言ったら、こんなに急な話だつーのにエヒメさんは来てくれた。

初めて会った時から知ってたけど、マジでいい人だ。

「すみません、エヒメさん。急に誘って」

「いえ、私もゼンコちゃんに会いたかったから、むしろ嬉しいです。

それと、ごめんねゼンコちゃん。発表会に行けなくて」

俺が謝ると優しく笑って「気にしないで」と言ってくれるのに、ゼンコが頼んだ「発表会に来て欲しい」を断った事はまだ申し訳なく思っ、エヒメさんは謝る。むしろこつちが申し訳ねえよ！

「ううん、いいの。おねーさんには前から約束があったんでしょ？」

……お兄ちゃんみたいに約束を破ったんじゃないから気にしないで！」

俺がエヒメさんの優しさに感激してたら、ゼンコから鋭い言葉の棘が飛んできた。

うん、マジですいません。申し訳ない。反省してます。

「バッドさんはゼンコちゃんの発表会に行けなかったけど、すごくカッコよかったよ。いくら叩いても切っても全然死なない怪人の弱

点を、一番最初に見つけたのもバッドさんだったし。

だから、そろそろ許してあげよう?」

エヒメさんっ!

エヒメさんのフォローでゼンコは唇を尖らせつつも納得してくれたのか、「お兄ちゃん、言いすぎた。ごめんね」と謝った。

もう俺、この人に足を向けて眠れねえ。

そうやってまた俺が感激してたら、ゼンコがエヒメさんの腕にしがみついて、「おねーさん、今日は来てくれてありがとう!」と礼を伝えたら、「こちらこそ、誘ってくれてありがとう。でもいいの? バッドさんのお買い物に、私がついてきちゃって」と気を遣ってくれる。良いんです。むしろ俺が拝み倒して来てほしいって思ったんです。

「いいの! 今日だね、お兄ちゃんがピアノの発表会で頑張ったご褒美を買ってくれるの! 私、髪飾りが欲しかったからおねーさんに選んでほしかったんだ!」

「え?」

ゼンコの言葉にエヒメさんが、驚いたような声を上げる。

同時に、困ったような顔をして思わず俺もゼンコも慌てる。

「おねーさん、どうしたの!」

「え、エヒメさん、どうかしたんすか!」

「あ、いえ、違うんです。えっと、ちよつとその……」

俺たち兄妹の詰め寄るような質問でエヒメさんをさらに困らせてしまったが、悲しんでる様子はないが少しでも残念そうな雰囲気があったから、このまま黙ってるのは男が廢る。

だから悪いと思うが、エヒメさんにどうしたのかをしつこく訊き続けたら、エヒメさんが根負けして鞆から綺麗に包んでリボンもかけたプレゼントらしきものを出した。

「……えっと、私もゼンコちゃんの発表会に行けなかったお詫びと、頑張ったご褒美を持ってきたんですけど……、髪飾り……なんです……。」

「ごめんなさい、余計なことしちやつて」

「そんなことない!」



俺が言う前に俺が言いたかったことを先にゼンコに言われて、言葉を失った。

何も言えずにそのまま固まる俺をしり目に、ゼンコはエヒメさんの腕にしがみついたまま、強く言う。

「そんなことないよ！」

おねーさんが来てくれただけで嬉しいのに、そんなの用意してくれてたなんて、すごく嬉しい！」

「でもこれ、私が手のリハビリも兼ねて作った奴だから、あんまりいいものじゃ……」

「おねーさんが作ってくれたの!?　じゃあもつと嬉しいし、すごく欲しい！」

ゼンコがキラキラした目でエヒメさんを見上げて言うと、エヒメさんはまだ少し困ったまま、それでもうれしそうに笑ってくれた。

「……じゃあ、もらってくれる??」

はにかんでゼンコにプレゼントを渡すエヒメさんが、天使すぎる。

ただでさえゼンコが天使なのに、もう一人天使って、ここは天国か？

そしてゼンコは嬉しそうに受け取って、その場で開けていいかをエヒメさんに尋ねる。

もちろんエヒメさんは笑って了承してゼンコがプレゼントを開くと、リボンに小さな真珠や宝石のような飾りがついたヘアピンがいくつか入ってた。

「可愛い！　おねーさんすごい！」

「うおっ！　マジすっげー！」

病院で会った時もゼンコに折り紙を教えたんだから手先が器用なのは知ってたけど、まさかやっと包帯が取れたばかりの火傷を負った手でこんな売り物レベルのを作ったは思わず、覗き込んで見た時は素で声を上げた。

後で知ったが、エヒメさん、こういうの作るのが本職だった。そりゃ、売り物レベルなわけだ。

早速もらったヘアピンをゼンコは頭につけ、エヒメさんはそのヘア

ピンの位置を整えてやる。

あ、ここは間違いない天国だったわ。疑うまでもなく、天国だった。俺がもはや空気なのはどうでもいい。もうこの光景を見てるだけで、幸せだから。

で、ゼンコはエヒメさんからプレゼントをもらってご機嫌なのはいいことだが、俺はこの後どうしよう？

「ゼンコ、一応訊くけどまだなんか、髪飾りとかは欲しいか？」

「あ！……えーと、ごめん、お兄ちゃん」

自分が欲しがっていたものより嬉しいものをもらって、すっかり髪飾りどころか他にほしいものもなくなって今日の目的を失ったゼンコが謝ると、エヒメさんがまた申し訳なさそうな顔をする。

「ごめんなさい。せめて、何を作ったかを昨日のうちに言っておけばよかったですね」

「おねーさんは悪くないよ！」

「そうです！ エヒメさんは気にしないでいいんすよ!!」

兄妹でエヒメさんをフォローしていたら、ゼンコが何かを思いついたように「あ！」と声を上げ、またエヒメさんの腕にしがみつく。

「そうだ、おねーさん！ ケーキと一緒に食べに行こう！」

買い物代わりの予定を提案し、ゼンコは俺に「お兄ちゃんもそれでもいいでしょ？」と同意を求めた。

むしろグツジョブだ、ゼンコ！

エヒメさんも納得してくれたらしく、ゼンコと一緒にケータイでこの辺のケーキ屋を検索する。

普段ならゼンコの頼みとはいえ、さすがに少し恥ずかしいケーキ屋も今日は恥ずかしくもなるともない。

初めて会った瞬間から「やっべ、お近づきになりたい」と思った人と一緒なら、望むところだ！

もちろん、ゼンコと一緒にいることは俺にとって何の不満にもならない。むしろ、ゼンコとエヒメさんが二人で仲良くしてるのを見るのが、最高の幸せだ。

つーか、ぶつちやけ俺こそ邪魔者だってことは自覚してる。でもい

いだろ！　ただでさえあの新入りと付き合っただけはいいないけどめちやくちや親しいんだから、俺は少しでも関わるチャンスは逃したくないんだよ！

「お兄ちゃん、何してんの？　置いてくよ」

俺があの新入りサイボーグに闘志を燃やしていたら、行く店が決まったらしくゼンコに呼びかけられた。

「おう、悪い。今行く」

俺は先に連れだつて歩くゼンコとエヒメさんを眺めながら、その後についてゆく。

……本当は、わかってる。

俺がエヒメさんに対して抱いてる感情は、恋だの愛だのいうものじゃないことくらい。

俺はただ、綺麗で儂げで妹に優しく守ってあげたい女の子の理想形みたいなエヒメさんに勝手に憧れて、夢を見るだけだつてことくらい。

あの病室で、包帯だらけの体で、柔らかくゼンコに笑いかけて優しく頭を撫でるエヒメさんに、俺は勝手なイメージを抱いただけなんだ。

本気で好きになったつもりだった。一目惚れつてやつだと思った。

少し年上だけど、俺の手で守ってやりたいと思った。

それは今も、変わらない。

変わらないからこそ、俺の気持ちは恋でも愛でもない。

……アマイマスクに殺されることも覚悟で立ちふさがって、宇宙人を庇ったエヒメさんを見て、エヒメさんがどんな生き方を、道を選んでるのかを知っても、「守ってあげたい」と思うのはただのバカだ。この人は、安全な場所で何も見ずにただ守られることなんか望んでいない。

それは、どんなに痛くても、どんなに怖くても、自分の気に入らないことは止めて、気に入らない奴まで守って救おうとするこの人の邪

魔をしてるだけだ。

……けど俺は、きつと守ってしまう。

あのサイボーグのように、全身から変な音出して歯を食いしばって耐えながら、あんな危なっかしい戦いから目をそらさずに見守ってやることなんか、俺にはできない。

俺は、この人の生き様を肯定なんかできない。

絶対に、「そんな生き方、やめろ」と言ってしまう。

結局、俺はエヒメさんが好きなんじゃなくて、俺が勝手に懐いたエヒメさんのイメージが好きただけなんだ。

そのことを、あの日に俺は思い知らされた。

「バッドさんは、甘いもの大丈夫ですか？」

初めて会った時と何も変わらない、綺麗で儂げな守ってあげたい笑顔で、エヒメさんは振り返って俺に尋ねる。

本名で呼んでくれるけど、俺とこの人の間には距離がある。

所詮俺は、「友達であるゼンコのお兄さん」でしかないことだって知ってる。

俺をフォローするのは、俺を庇ってるんじゃないじゃなくてゼンコが意地を張って折れ所がわからなくなならないようにするためだってことも、わかってる。

けど、それでいいんだ。俺が近づいたら、俺はこの人を傷つけるだけだ。

この人を守ることで傷つけて、否定するだけなんだ。

「あんまり甘すぎんのはちよつと無理ですけど、そうじゃないなら割と好きっすよ」

けれどせめて、この距離だけは保ちたい。

俺はこの人の生き方を肯定できないけど、そんな生き方はやめろって言ってしまうけど、決してその生き方自体が嫌いなわけじゃないから。

この人が傷つくのは見たくないけど、この人の生き様を貫くところは見てみたいと思ったから。

「そうですか。なら、良かった」

この人を本当に好きになりたかったのは、本当だから。

三人目、「少し心配な子」

「今日は来てくれてありがとうございます、テレポーターのおねえさん」

僕のラボに来てくれたエヒメというテレポーターのおねえさんに、まずは挨拶。

「いえ。こちらこそ、お招きありがとうございます」

「エヒメさん、丁寧に接する必要なんかありません。むしろ怒るべきです。人を実験に使いたいなどと言い出すガキに、何の遠慮も必要ありません」

おねえさんは控えめに笑って返答してくれたけど、呼んでないのに普通に一緒にやって来たサイボーグさんは僕を今にも殺しそうな目で睨み付ける。

ま、絶対に来ると思ってたし、そう言われるのも予測通りだけどね。

「酷いなあ、サイボーグさん。ちゃんと本人とそのご家族の了承も得てますよ。ね、おじさん」

「誰が、おじさんか」

こちらは事前に一緒に来るって言った、おねえさんのお兄さんのおじさんに同意を求めたら、別の部分を拾われちゃった。

……自分で言っていて意味不明だな、おねえさんのお兄さんのおじさんって。

呼んでないサイボーグさんが来るのは予測通りだけど、正直このおじさんがおねえさんのレポートについて少し調べたいと伝えた時、「絶対に自分の見てない所で、実験はもちろん質問もしない」を条件にOKするとは思わなかった。

サイボーグさんだけじゃなくて、実はおじさんも過保護なんだね。

まあ、超能力者の子供をお金で売買して実験体にしてる組織とか研究施設なんてゴロゴロ存在してるからね。

お二人の警戒は、当然か。

「大丈夫ですよ、ジエノスさん。」

それに私、前々から自分の能力をもっとちゃんと把握して、応用で

きたらいいなって思ってしまったから、調べてくれる人がいてよかったです  
くらいです」

そんな二人の心配を知らないのか、それとも僕へのフォローなのか、おねえさんは柔らかく笑って言うてくれるけど、サイボーグさんは相変わらず険しい顔のまま。

むしろ僕がフォローされたのが気に入らないみたい。僕まで嫉妬対象って余裕なさすぎだよ、サイボーグさん。

「そんなに警戒しないでくださいよー。別に変なことはしませんって。」

ただ僕は、おねえさんのテレポートがどういう原理かを少し調べただけですってば」

「信用できんな。科学者は俺にこの身体を与えてくれたクセーノ博士のような人格者もいるが、それはごく少数だ。」

大概が、『科学の進歩』と言えば人の命も尊厳も踏みにじって利用しても許されると思っっている、データの数値だけを信望する狂人だろうが」

「ジェノスさん!」

あはは、酷い言われよう。否定できないのが辛いね。

おねえさんに咎められてサイボーグさんは一応黙ったけど、謝罪や訂正をする気はないみたい。まあ、別に良いけど。

「ごめんなさい、童帝君。ジェノスさんが失礼なことを言って」

「いいんですよ。サイボーグさんはおねえさんが大好きだから、心配するのは当然でしょう?」

サイボーグさんの代わりにおねえさんが謝るから僕はフォローしたのに、サイボーグさんは「童帝!」と怒鳴る。

本当、からかい甲斐のある人だな。

「そんなに珍しいものなのか? 超能力って?」

ちよつと僕が本来の目的を忘れかけて楽しんでたら、そこら辺を珍しそうにきよろきよろしてたおじさんが話しかけてきた。

「んー、能力の種類とそのレベルによりますけど、おねえさんのテレポートは珍しいですよ。」

僕は専門的に研究してるわけじゃないから断言できないですけど、レベルの高さではタツマキちゃんの念動力が随一ですが、能力そのもののレアさではおねーさんが勝ってるかもしれないですね」

「そうなんですか？」

「そうなのか？」

……なんか本人とそのお兄さんが、僕の答えにもものすごく意外そうな反応を返した。

っていうかおじさん、もしかしてあんな条件出しといて、妹がどれだけその手の研究家にとって手に入れたいサンプルなのかわかってなかったの？

何？ ただのシスコンだったの？

「……俺も本で少し調べて知った程度ですが、テレポートが超能力の中で一番複雑な能力らしいので、コントロールが出来てなくても発現してる者自体が稀みたいですね」

僕にさっきまで警戒バリバリだったサイボーグさんまで、一瞬間まってから僕の説明に補足を加えてくれた。

それでも張本人とその兄は未だにテレポートのどこがどう凄いかかわかってないのか、そっくりな動作で首を傾げてる。

まあ、超能力者ってたいがい「なんとなく」で能力行使してるみたいだから、無理もないか。タツマキちゃんも基本、何も考えずに使ってるよね、あれ。

「念動力は極端に言ってしまうえば、手を使わずに物を動かす程度の力だから能力そのものは単純なのに対して、テレポートはその能力自体が複雑ですから。」

なんせ、高速移動じゃなくて空間移動。まずこの原理がまったく解明されていないのに、その移動するにあたって、透視や千里眼を無自覚に使用して座標指定してるとも言われてます。

つまり、テレポーターというだけで複合能力者の可能性が高く、その所持してる能力のレベルが全部高くて初めて『テレポート』という能力が発現してるっていうのが、今のところの仮定ですね」

僕の説明でおねえさんは「ああ、そういえば場所指定で行ったこと



もない場所が、明確にイメージで浮かぶことがありますね」と興味深いことを呟きながら納得してくれたけど、おじさんの方はなんか僕の説明が続くにつれて死んだ目がさらに死んだ。

これは理解できてないな。

僕はちよつとだけ考えて、もう一回おじさんに説明してみた。

「例えるなら、無意識に母国語以外の言葉を聞きながら、さらに別の言語にそれを訳しつつ、数学の計算をして、さらに足でリフティングしてるようなものです」

「すげえな。そんなことやってたのか、エヒメ」

「今の例えだからね！」

なんか変な勘違いしたみたいだけど、とりあえずどれだけ複雑で器用なことをやってたかは理解できたみたいだからいいや。

\* \* \*

そんな雑談を挟みつつ、一時間ほどおねえさんに質疑応答して、とりあえずお姉さんが把握してる能力効果はだいたいわかった。

まずテレポーターがそんなに多く存在確認がされていないから言いきれないけど、やっぱりレアさではおねえさんは相当だな。

どうもこの人の能力、完全に「自分が逃げるため」に使うべき力であって、物や他の人も一緒に跳ぶのはおまけでしかない。

物や他人を単独で飛ばすのももちろん、遠くのものをごちらに出現させるテレポートの兄弟的な能力である「アポート」も使えない。

あと、これは一緒に運ぶものの大きさと重さに寄るけど、おねえさんと密着面が大きくないと、その触れてる一部分だけしか一緒に跳ばないこともあるらしい。

……そうか、サイボーグさんに抱き着いてテレポートしてたのは、手を掴んだり繋ぐ程度じゃ、腕だけでもげて跳んじやう可能性が高いからか。

ただのリア充爆発かと思ってた。

あと、どうしてこんな使い勝手が良いような悪いような能力なのかも、ちよつと見当がついた。

おねえさん、能力が目覚めたきっかけを訊いたら顔が一瞬で強張っ

たし、サイボーグさんはただでさえ険しかった顔をさらに険しくして明らか戦闘モードに入った音がしたし、おじさんも目が少し怖くなつた。

どう考えてもこの藪をつついたら出るのが蛇どころじゃないのが分かったから、僕はテキストに誤魔化して話を換えたけど、もうあの反応だけでわかる。

超能力が目覚めるきっかけは、たいていが大きな「ストレス」だ。ポルターガイスト現象が起こる家に、虐待されていた子供がいたなんて事例はゴロゴロある。

おじさんの様子からしてまあ虐待はないだろうけど、この「逃げること」に特化してるといふかそれしかない力はまさに、大きなストレスから逃げ出すにはこの力を生み出すしかなかったってことなんだろうね。

サイボーグさんの言う通り「科学者」であるのなら僕は、お姉さんの事情なんか無視して根掘り葉掘り聞くべきなんだろうけど、僕は自分の発明品や頭脳を駆使して戦う「ヒーロー」だからそんなことしないよ。信用はしてもらえてないみたいだけど。

とりあえず、大体訊いておきたいことは全部聞けたから、テレポーターの範囲や運べる重さはどれくらいかの実験を少しさせてもらおう。僕が実験の提案をすると、やっぱりサイボーグさんはいい顔をしないけどおねえさんとおじさんは普通に了承して、僕の案内に従って実験場に移動する。

その途中で、おねえさんは僕に訊いた。

「童帝君は、どうしてヒーローになったの？」

ただの雑談だと、思った。

そして実際、ただの雑談だった。

だから僕は普通に、答えた。

「そりゃ、ヒーローは子供の夢でしょ？　むしろ子供の僕がならなくちゃ、誰がなるんですか？」

僕の返答で、サイボーグさんがまたちよつと顔をしかめた。

真面目な人だから、僕のふざけてると思える言葉がいやだったの

か、それともヒーローやってる大人をディスプレイしてるように聞こえたのかな？

後者は訂正しておこうと思ったけど、僕が口を開く前に黙ってついて来てたおじさんが僕の方を見もせずと言った。

「それは違う。ヒーローが子供の夢なのは合ってたけど、子供はヒーローになるもんじゃない。」

子供は、ヒーローになることを夢見るもんだ。ヒーローになるのは、大人だ。大人が、子供を守って救うヒーローにならなくちゃいけないんだ」

サイボーグさんがおじさんの言葉に感銘を受けて、どこから出したのかわからないノートに高速でメモし始めたことに引くことも出来ず、僕はただ眼を見開いてポカンとおじさんを見ることしか出来なかった。

何ていうか、S級集会で見た時から肝が据わってるんだか何も考えてないだけなのかよくわからない人だと思って、最初のレポートについての説明の反応で、「あ、この人何にも考えてないだけだ」って確信したのに、こういうことをサラツと言うなんて意外すぎる。

「何だよ、その顔は？」

「おじさん、意外と考えてるんですね」

「意外とってなんだ、意外とって。あとおじさんじゃねえよ」

僕の返答にサイボーグさんがまた怖い反応をするけど、言われたおじさん本人はサラツ流しておねえさんの方は少しおかし気に笑っていた。

「そうだね。お兄ちゃんがそんなこと言うなんて、珍しい。」

心配、してるんだ」

「心配？」

初めの言葉は僕の言葉に対する同意だったけど、後の言葉は完全に独り言。

だからスルーすれば良かったのに、何故か僕は拾ってしまった。

……気にしてるつもりはなかった。自覚してた。自分が子供であることなんて、わかりきった事実だと思ってた。

もう子供じゃないなんてセリフこそが、子供の証だと思ってたから、言わなかった。

でも、本当は少し気にしてたのかもしれない。

子供は大人に守られとけと突き放すように言ったおじさんの言葉を、不満に思っていたのかもしれない。

僕がオウム返しをした言葉におねえさんは穏やかに笑いながら、薄いレースの手袋に包まれた手で、あまりに自然な動作で僕の頭を撫でて答える。

「大人に守られて救われた記憶はね、その時だけ救いじゃないの。」

その記憶があれば、大人になっても絶望なんてしない。どんなに裏切られて、傷ついても、人を信じて、守って、助けようって思える、一生の救いになるの。

だから、あなたがその『救い』を得る前に与える立場になつてしまふのが少し、心配なだけ」

そう言いながらおねえさんの手は、僕の頭を撫で続ける。

サイボーグさんは、「さすがは先生！」とか言ってるけど、おじさん本人がなんか二人から目をそらしてるから、実はそこまで考えて言った訳じゃないよね、あれ。

……でも、おねえさんの言葉が僕の中にあつた不満を溶かして、納得を胸の中にすくとんと落とす。

ああ、僕は確かに天才かもしれないけど、やっぱりどうしようもなく子供だった。

子供扱いするなと言えば子供なら、子供であることを受け入れようと思えるのだから子供だ。こんなことにも気づかないなんて、天才の名が泣く。

僕はまだ子供だから、おねえさんの言葉が本当かどうかはわからな

い。  
でもなんとなく、この先の未来で辛いことがあつたら、今日の事を思い出すんじゃないかなとは思った。

僕の事を見下して、もしくは敵わないとわかってるくせにそれを認めたくないが故に子供扱いするのは違って、僕の未来を案じたから

こそ甘えさせてくれるように撫でたこの手の心地よさを、きつと僕は思い出す。

……サイボーグさんと金属バットさんが、大好きになるわけだよ。「？ 童帝君？ どうしたの？」

僕の頭から手が離れるのを名残惜しく感じながら、僕はおねえさんを見上げて言う。

子供らしく、自分が思うがままの素直な言葉を。

「いや、おねえさんの弟になりたいなーって思っただけです」

僕の言葉におねえさんや関係ないはずのサイボーグさんが反応する前に、相変わらず覇気なく、おじさんが真っ先に答えた。

「いや、お前みたいな弟、俺はいらねーんだけど」

あ、おねえさんの弟になったら、おじさんとも兄弟になるんだった。失念してた。

うん、僕もあなたはいらない。

四人目、「…………お、女…………友達？」

お兄ちゃんとジェノスさんが日課の見回りに出かけ、私は家で一人留守番。

いつもなら仕事の雑貨やアクセサリー作りをするんだけど、今日はちよつと予定があるのでその準備を開始。

まあ、準備と言っても糸と編み棒と編みかけのセーター、そしてジェノスさんから借りたパソコンを用意するだけなんだけどね。

ついでに飲み物も用意していたら、約束の時間数分前になってることに気付いて、慌てて私はパソコンの電源をつけて、スカイプを起動させる。

そして前にもらった連絡先にビデオ通話してみたら、待ち構えていたのかすぐに画面に映し出された。

刈り上げに似ているようでなんか違う、耳から上だけがもこもこことアフロに近い髪形にひげの剃り跡が青々しい、筋骨隆々な囚人服の天使、ぷりぷりプリズナーさんが画面で笑って手を振った。

「久しぶりだな、エヒメちゃん。今日はお願いを聞いてくれてありがとう」

プリズナーさんに私は「お気になさらず」と答えて、まずは途中まで編んであるセーターの胴体部分、前身ごろをウェブカメラに映す。「とりあえず、もらった図案で編んだらこんな感じになりますけど、これで大丈夫ですか？」

「おお！ イメージ通りだ！ やっぱりエヒメちゃんに頼んで良かった」

プリズナーさんの言葉にホツとして、私は編み棒と編み目がよく見えるように場所や位置を調節して言う。

「良かった。なら、この編み方を教えますね」

\* \* \*

きつかけは、あのA市が壊滅した日の事。

戦いが終わり、お兄ちゃんも帰って来た後は他に私たちがすることは何もなかったからそのまま帰ったんだけど、帰る前に私は深海王の

件のお礼とお詫びをプリズナーさんに伝えた。

それ自体は、保護できなかったのは気にしなくていい、むしろ気になる男子だったヒーロー二人を助けてくれてありがとうとお礼を言ってもらえた。

良い人だ。全裸だったけど。

で、それはいいんだけど個人的にお願いがあるとされていて、頼まれたのが今日の「セーターの編み方を教えてほしい」だった。

プリズナーさんは彼氏（この彼氏が特定の相思相愛の人なのか、彼のハーレム要員の一人なのかは知らない）にもらったセーターを破いてしまったお詫びに自分が彼氏のセーターを編みたいらしいけど、プリズナーさんは基礎的な編み方は出来るけど応用した模様編みが苦手らしい。

その時丁度私は自分で編んだ薄手のカーディガンを着てたので、それを編んだのは私か確認した後、ちよつと実際に編んでるところを見せて教えてくれないかと頼まれた。

そして私は特に断る理由もないからOKして、どんな模様にしたのか図案をもらって、試しにちよつと編んでみて今に至る。

ちなみにプリズナーさんが収監されている、看守にも手が負えない凶悪犯ばかりを集めた「臭蓋獄」に私が行くわけにもいかなかったの、ジェノスさんからパソコンを借りてビデオ通話で教えるという手段を取った訳だけど、プリズナーさんの戦闘スタイルともしかしたらチェックされてることに気付いてるからか、あまりジェノスさんは彼にいい印象がないので断られるかと思ったら、意外とすんなり貸してくれた。

……理由は、下手したらセーターの編み方を教えてもらうためだけに脱獄しかねない奴だからだったけど。

ああ、うん。脱獄されて直接会うくらいなら、パソコン貸してスカイプで連絡取ってもらった方がいいよね、確かに。

そんな経緯に思わず遠い目になると、プリズナーさんは「どうした？ 何か悩み事か？」と心配そうに尋ねてくれた。

良い人なんだよなあ、この人は基本的に。

……全裸に、全裸にさえならなければ本当に良いのに。

襲うのも犯罪者男子だけなら、私には何の関係もないし。むしろ性犯罪者なら、「ヤっちゃってください」って親指立てるのに。

「いえ、何でもありません。大丈夫です」

もちろん私のそんな本音が言える訳もなく、適当に誤魔化しながらセーターを編んでいく。

「そうか、良かった。ジエノスちゃんの事で何か悩みでもあるのかと思っただが、杞憂だったようだな」

私の答えにプリズナーさんは納得してくれたけど、今度は私が不思議に思う。

「何故、ジエノスさんの事で悩んでると思ったのですか？」

私があんな悩んでると思っただけならある意味合ってたからわかるけど、それをジエノスさんと特定した理由がわからなかったので尋ねてみたら、プリズナーさんの方もきよとんとした顔になった。

そして、何とも言えない曖昧な笑みを浮かべて、訊き返す。

「……エヒメちゃん、前から思っていたんだがあなたはジエノスちゃん、それとソニックちゃんとかのことをどう思っているんだ？」

……ああ。ソニックさんの名前も挙げられて、何か前にお兄ちゃんに訊かれたような勘違いをされてるのかと気付き、私はあの時と同じ答えを返す。

「二人とも、普通に好きですよ。友情と言うにはしっくりきませんけど、恋愛的な意味はないと思います」

「思います？ ずいぶんと曖昧だな」

プリズナーさんが私の答えに、頬杖をついてツツコミを入れる。口調こそは若干責めてるような響きを感じるけど、その表情から素で疑問に思ってるらしい。

んー……ちよつと恥ずかしいけど、お兄ちゃんもジエノスさんもないし、話してもいいか。

こういうことを話せる人、周りにいないしなあ。

……なんか、恋バナ出来る相手がオカマの囚人って考えたら、何も言いようのない気持ちになるけど、お兄ちゃんとかに話すよりはマ



シだ。

「私、そもそも恋愛ってどんなのかよくわからないんです。……と言  
うか、恋って怖い。恋する乙女って怖いって思ってます」

「何があった、エヒメちゃん」

私が若干遠い目で語ったトラウマ……と言うほどでもないけど、  
まあ今の恋愛に興味のない草食どころか絶食系な私を形作った出来  
事に、プリズナーさんがツツコミを入れる。

「大したことじゃないですよ。」

小学生くらいの時に、クラスの女子のリーダー的な存在の子が好き  
な男の子が好きだったのが私だったらしくて、少しの間嫌がらせを受  
けたことがあっただけです。

一か月くらいでその子、全然別の子が好きになつてあっさり止ま  
ましたし、子供ですから大したことはされませんでしたけど、……もう  
10歳になる前に女の恐ろしさを思い知らされましたね」

されたことと言えば、遊びに誘ってもらえないことと悪口を言われ  
た程度の本当に子供らしい大したことじゃないけど、昨日までそれな  
りに仲良かったのがいきなり掌返しされて嫌がらせを受けた挙句、他  
の子を好きになったらまた掌をひっくり返して、一言も謝ることなく  
嫌がらせをした時期をなかったことにした彼女とその取り巻きに  
は、心底引いた記憶がある。

もう嫌がらせよりも、その掌返しは私は怖くてトラウマだ。

その所為か、その掌返しのきつかけになった「恋愛」というものに  
苦手意識を持ったまま成長して、それを克服できるきつかけもなく今  
に至る。

ただそれだけの話。

そんな私の話にプリズナーさんは、「ああ、なるほどな」と納得の声  
を上げてから、私に一つの問いかけをする。

「エヒメちゃん。あなたは愛と恋の違いを知ってるか?」

えらくロマンチックな質問だなと思つて考えたけど、どうも質問で  
はなかったらしく私が答える前にプリズナーさんが自分で言った。

「愛は『与える心』で、恋は『求める心』だ。」

だから、初恋は実らないって言うんだ。子供は世界から何かを与えてもらい、それを糧に成長するのが仕事だけど、恋はもうそれだけじゃいけない、与えることも知らなければならぬと教える役目も持ってるんだ。

……だから、わがままに求めすぎる初恋は、当たり前のように破れるんだよ」

……プリズナーさんが凄く、大人で乙女なこと言ってる！

なんか内容よりも思わず、それを言ってるのがプリズナーさんだつてことに注目して衝撃を受けたけど、内容も十分に私にとっては衝撃的だった。

愛は、「与える心」

恋は、「求める心」

その説明は、まだどちらも知らないはずの私にもすんなりと納得させて、そして遠いと思っていた「恋愛」を近い存在に変えてしまった。「エヒメちゃん、あなたがその大人への通過儀礼に八つ当たりの巻き添えを喰らった事は同情する。

でもな、俺が言っても説得力はないだろうが、『恋愛』はそう悪いものじゃないんだ。恋愛は言葉の通り、与えて求める心、つまりはギブ&テイクだ。

恋だけでは、相手に求めるだけではさつきも言った通り嫌われるだけだが、愛だけでは、与えるだけでは相手を堕落させる。だから、50:50で分け合うべきなんだ。

……深海王の時も、この前の時も思ったが、あなたは既に『愛』を知っているが、逆に言えば『愛』しか、『与える心』しか知らなすぎる。あなたは少し、『求める』ことを覚えた方がいい。既に『愛』を知っているあなたなら、『初恋』でもきつと間違えない。

だから、怖がらずに向き合ってみたらどうだ？

女の子はやはり恋をしている時が一番きれいだから、それを怖がるのはもったいない」

穏やかに笑いながら、囚人だとか犯罪者男子を年中襲ってるという事実も忘れて、むしろあなたを好きになっちゃってしまいそうなことを語る

プリズナーさんは、なんだかんだでやっぱり「ヒーロー」なんだなと知る。

例えプロヒーローをやってる動機が最低極まりないものでも、この人は誰かを守って救うこと自体に見返りを求めていない。

「愛」を知っているのは、この人の方だ。

……案外、「天使」というのは間違いないのかもしれない。

「エンジェル☆スタイル」は、どう考えても間違いだらけだけど。

「……ありがとうございます」

私はプリズナーさんの優しい「乙女」として先輩のアドバイスを礼を言つて、中断してた編み物を再開する。

プリズナーさんも同じく再開するけど、その集中は私のせいでぶつ壊れた。

「でも、そもそもジェノスさんやソニックさんが私に興味がなければ初恋だろうが愛を知つてようが、結局は破れちゃうのが辛いですね」

そんな当たり前のことを言った瞬間、画面の向こうのプリズナーさんがいきなりパソコンに突っ伏した。いや、もはやあれは頭突きだった。

その所為か画面の向こうで変な音がして、プリズナーさんが映つていた画面は砂嵐になり、通話が切れた。

たぶん、パソコンを自分の頭突きで叩き壊したな。

通話が切れた理由は察しがついたけど、いきなりそうやって壊す勢いで突っ伏した理由がわからず、私はそのまましばらく途方に暮れた。

五人目、「ちやんと叱ってくれる人」

「自殺なんてバカなマネやめるんだ」

「うるさい！ カッコつけんじやないわよ！ どうせ手柄が欲しくて止めてるだけで、私が死のうが生きようがどうでもいいんでしょ!？」

僕がどんなに叫んでも10階建てのビルの屋上、フェンスの向こう側で今にも飛び降りようとしている女の子はただ泣きながら怒鳴り返す。

いいよ、それで。僕の事なんてどれだけバカにしても、罵つてもいい。

君がそこから飛び降りずに、生きてくれるのなら。

だから僕は、ただ必死で叫び続けた。

彼女の命を繋ぎ止めるために、ただそれだけの為に叫び続けた。

\* \* \*

いつものように自転車で見回りをしていたら、人がやたらと集まって空を見上げてた。

だから僕も何事かと思って見あげてみたら、屋上で女の子が今にも飛び降りそうになってた。

慌てて僕はそれを止める為にそのビルの中に入ろうとしたけど、その瞬間、屋上から女の子が「誰も来ないで！ 入った瞬間、飛び降りるから!!」と叫んで、身を大きく乗り出した。

僕がすぐに下がると女の子も身を乗り出すのはやめてくれたけど、やっぱりフェンスの内側に戻ってはいくれず、「TV局を呼んで!」と要望を叫んだ。

どうも彼女はただ死にたいだけじゃなくて何かを訴えたいのか、それとも記録に残したいのか、とにかく今すぐ飛び降りる気はないのを確認してから、僕は隣のビルに入って屋上まで駆け上がった。

隣のビルは女の子がいるビルより二階ほど高いから、その屋上から僕は女の子がいるビルに飛び移って今に至る。

……今思えば、僕が怪我するとか死ぬとかよりも女の子は僕が来た瞬間、その気がなくてもびびくりして落ちる可能性が高かったな。

もう少し考えて行動すべきだった。落ちなくて、本当に良かった。とりあえず僕は女の子の近くに行くことは成功したけど、それでもまだ距離は5メートルはあり、そして僕と彼女の間には高いフェンスの壁がある。

走ったつてあのフェンスを掴む手をあの子が離してしまえば、僕は間に合わない。ただ、彼女が墜落するのを見ているだけしか出来なくなる。

だから僕は、説得するしかない。

彼女が自分から、この内側に戻ってくるように説得をするしかないけど、僕に上手い交渉術なんかない。

だから、本音で話すしかない。

この言葉が少しでも死を選んだ彼女に届くことを期待して、叫ぶ以外何もできなかった。

「どうでもいいわけないだろ！ どうでも良かったら、わざわざ隣のビルから飛び移るもんか！

俺は君の事は何も知らない！ どうして死にたがってるのかはわからない！

でも、そんな他人でも死んでほしくないと心から思ってる！ 他人の俺がそう思ってるのに、君の家族や友達なら俺以上に、君が死んでしまうくらいなら自分が死にたいって思うくらいに嫌がって、悲しむはずだ！

「……だから、やめよう？」

僕の言葉に、女の子は顔を俯かせて、肩を震わせている。

泣いていると思った。

「……………はは、あははははははは！

ヒーローって本っ当に、綺麗事ばかりで現実が見えてないバカばっかりね!!

私が死にたいのは、TVで私の自殺を全国に放送してほしいのは、その家族や友達とかいう奴らを一生苦しませる為よ!!」

僕の言葉は、届く届かない以前に見当はずれだった。

「あんたに想像できる?! 弟は跡取りだからってだけで、どんなわが

ままも許されるのに、私はテストは満点以外は認められない！ 80点以下なら食事抜きで家にも入れてもらえない！

友達!? ねえ、友達って何!? 万引きを強要して、バレたら私に脅されたって言って泣き真似して全部を私に押し付けて、親にボコボコにされた私の顔を見て指さして笑う奴を、友達っていうの!?

平和ボケしてんじやねえよ！ クソヒーロー!!」

彼女の言葉を、何も言えなくなった。

僕は確かに、平和ボケをしていた。

家族は無条件で子供を慈しんで、愛して、兄弟が多くても平等に育てるものだと思っていて疑わなかった。

家族にも言えないことを話せる、助け合って尊敬しあえる友達は、必ず誰にでもいるものだと思っ込んでいた。

周囲から虐げられるだけで誰一人として信用できる人がいない子が、自分の死で悲しんでほしくないと考える人が誰もいない子がいるなんて、僕は想像できなかった。

僕の言葉は、説得どころか彼女の傷に塩を塗っただけだ。

「だから、もう放っておいてよ偽善者！

私が一番、助けてほしかった時はもう通り過ぎたの！ あんたは、ヒーローは助けに来てくれなかったのに、何でやつとあいつらに復讐できると思ったら邪魔すんのよ！

私は私の死であいつらに一生消えない傷を負わせて、永遠に苦しませてやるんだから、邪魔しないで!!」

あの子の自殺の動機を知ったらなおさら止めなくちゃ、こんなところで不幸と絶望だけしか知らないまま、復讐の為に命を捨てさせるなんてことはやめさせたかったけど、僕は何も言えない。

彼女の言う通り、僕は彼女が一番「助けてほしかった」時に駆けつけてあげられなかった。

守ることも、救うことも、出来なかった。

生きていればいいことがあるなんて、言えない。今までなかったからこそ彼女は今、復讐と死を選んだのだから、そんな「あるかもしれない」なんて曖昧なもので今更踏みとどまってくれるわけがない。

でも、何か言わなくちゃいけない。  
止めなくちゃいけない。

君が死んでほしくないのは、事実だから。

君が不幸のまま復讐の為に死ぬのではなく、幸せになって笑って生きていてほしいのは本当だから。

「無駄ですよ、それ」

「え？」

思わず、僕と自殺志願の子の声が重なった。

しれっといつの間にか、初めからここにいましたよ言わんばかりに彼女は、フェンスの向こう側、女の子の隣に腰かけていた。

「……エヒメちゃん？」

\* \* \*

僕の呟きに何の反応を見せず、エヒメちゃんは隣の女の子を見上げて言う。

「復讐なんて、生きてるからできるんですよ。自殺じゃ復讐なんかになりませんよ」

「なっ！」

エヒメちゃんは本当にいつからいたのか、彼女の言い分を理解したうえで否定した。

否定された女の子は怒りで顔を赤らめるけど、エヒメちゃんはそれを興味なさそうな無表情で……見たこともない冷めた目でただ見つけて、彼女が何かを言う前に淡々と言葉を続ける。

「今あなたが注目をされているのは、あなたが生きて叫んでるから。」

あなたが死ねば、まあ確かにニュースにはなるでしょうけど、この怪人が毎日のようにゴロゴロ出てくるご時世ですよ？

災害レベル『虎』が2，3体も出ればあなたの自殺なんて一気に扱いが小さくなって、『鬼』ならたぶん真っ先に報道する必要なしと消される程度。

自分の命の価値、思い上がってませんか？」

あの子の自殺を、エヒメちゃんも止めようとしているのだと思っ

エヒメちゃんのレポートなら、彼女の腕でも掴みさえすれば、最悪一緒に落ちても落下途中でレポートすれば無事着地出来るから、危なくて本当はやって欲しくないけど最悪は任せようと思っていた。でも、エヒメちゃんは冷めた目で、女の子を突き放す。

最後の希望であつた復讐を、無意味と断じる。

「なっ……なっ……」

エヒメちゃんに何かを言い返そうとするけど、怒りか絶望が邪魔をして女の子は何も言えない。

ただエヒメちゃんだけが、静かに語る。

あまりにも残酷な、現実の話が続ける。

「人の死が、なぜ生きている人間を傷つけるかわかりますか？」

それは、その人にとつてはまだ死んでいないから。心の中であまりにも鮮明に生きて、熱を持って存在しているのに、現実にはもういない、もう新たな思い出を刻んでくれないという矛盾が摩擦を起こして、傷になるんです。

あなたが今ここで生きていても相手の心の中すでに死んでいるのなら、現実で死んだって無意味なんですよ」

唇を噛みしめて、女の子は泣き出した。

泣きながら、嗚咽を漏らしながら、途切れ途切れに彼女は言葉を絞り出す。

「……じゃあ……どうすれば……いいのよ?」

その問いにも、彼女は冷めた答えしか返さない。

「さあ? 私はあなたじゃないんだから、私が決めるわけにはいかないでしょう?」

エヒメちゃんは全く、女の子を慰めない。

どこまでも冷たく、酷薄に突き放す。

けれど、それが彼女の自殺を思いとどまらせた。

「ただ、ここで死んでもあなたの願いは叶わず、尽きるだけってことわかります。」

幸せになるのも、不幸になるのも、幸せにさせるのも、不幸にさせるのも、それらは全部生きているから出来ることで、死んだらそこが



終点。

あなたの不幸はそこで終わるでしょうけど、誰も不幸になんかできませんよ。

むしろ、『死人に口なし』と言わんばかりに、自分たちが被害者だと言いつ張って、あなたの死はあなたが憎む相手に、同情という施しを与える材料になりかねないと思いますけど？」

エヒメちゃんの言葉はあまりにも残酷で後ろ向きだけど、希望を語るより彼女に対して説得力があつて効果的だった。

彼女には生きる未来への希望がなく、「死」という復讐こそが最後の希望だった。

その希望を吹き消して、無意味にさせることでエヒメちゃんはあの子を生かそうとしている。

……そう思いつつも、僕には気になった。

エヒメちゃんの冷めた目に、嫌な予感が悪寒となつて止まらなかつた。

「……うう……ひつく……」

女の子はもう何も言い返さない。

ただ、フェンスにしがみついて、俯いて泣きじゃくるだけ。

僕が一步、二歩と近づいても何も言わない。

死ぬ気はなくなったのは、間違いない。

……でも、彼女は同時に最後の希望まで失った。

そんな子を助けてどうなるんだろうと、心のどこかで僕が僕に問う。

その自問に答える前に、エヒメちゃんは立ち上がって言った。

ついさつきまでの冷めた目が嘘のような、晴れ晴れとした笑顔で彼女は立ちがって女の子に言う。

「でもまあ、辛い現実と現在から逃げる一番の有効手段であることには、間違いないですけどね」

「え？」

泣きじゃくっていた女の子が顔を上げ、エヒメちゃんを見る。

エヒメちゃんはその顔をまつすぐに見捨て、彼女の手を掴んだ。

「生きてても死んでも願いが叶わないんなら、もういつそ終わりにしてしちやえばいいじゃないですか？」

案外、飛んだ先で良い逃げ場を見つけれられるかもしれないし「柔らかな笑顔とあまりにも開き直った結論の言葉とともに、彼女は、エヒメちゃんは、落ちた。」

女の子の手を掴んだまま、一緒に落ちていった。

「エヒメちゃん!？」

叫んで走ったけど僕はフェンスに思いっきりぶつかる。僕が思いつきりぶつかっても、フェンスは破れも外れも壊れもしなかった。僕は、フェンスを、金網を掴んでそれを握りつぶさんばかりに握って叫んだ。

「ちくしよおおおおおおおおおおおおつ!!！」

何もできなかつた！僕は、俺は、ヒーローなのに結局何も出来なかつた！

ただ、見るだけしか出来なかつた！

エヒメちゃんと一緒に落ちるあの子の顔を、俺を見て「助けて！」と叫んだあの子を、「生きたい」と言ってくれたあの子を助けることが出来なかつた！

「なんだ。答え、ちゃんと決まってるじゃないですか」

背後で、声が聞こえた。

泣きじやくる女の子の嗚咽と、わかり切っていたことを確かめるような声が、聞こえた。

「ごめんなさい、無免許ライダーさん。心配かけて」

振り返った先には、エヒメちゃんがいつものように少し困ったように笑っていた。

\* \* \*

大股で僕は二人の元に向かい、まずは立っているエヒメちゃんの前立。

そして、僕はこの日初めて、女の子の顔を打った。

さすがに手加減はしたけど、結構強く打ってエヒメちゃんの頬は赤くなる。

でも彼女はビックリもしなければ泣きもせず、ただ穏やかに、そしてやっぱり少し困ったような微笑みを浮かべていた。

その笑顔でわかる。君は全部、ここまで全部覚悟のうえでやっていったんだね。

それでも、僕は……

「エヒメちゃん。俺は君のしたことを絶対に許せないし、許さない。

俺はもちろん、サイタマ君やジェノス君だって同じはずだ」

落とされるよりいつそ自分の意志で落ちた方が、覚悟をしてるからレポートの失敗もなくて合理的だったのかもしれないし、なによりこの子から「生きたい」を引き出すには確かに一番有効な手段だ。

そこは否定しないし、出来ない。

それでも、僕は絶対にこの子のしたことを許さない。

「でしようね」

けれど、僕に叱られることも覚悟の上で貫いた彼女には、それこそ何を言っても意味がない。

だからエヒメちゃんへのお説教は僕以上に許せなくて怒るであろう二人に任せて、僕はもう一つのしなくちゃいけないことに専念しよう。

僕は未だに泣きじやくって、腰が抜けたのか座り込み続ける女の子の前に膝をついて、その子の頭に手を置いた。

その瞬間、彼女は大きく怯えて肩を震わせた。

僕は、その子の頭を撫でた。

君に触れる手が全部、君を傷つけるためにあるんじゃないことが、君を安心させたいと思つて触れる手もあることを教えたくて、伝わることを願つて、頭を撫でる。

「……助けてあげれなくて、ごめん」

そして、今更過ぎる謝罪をする。

ごめん、本当にごめん。

ヒーローなのに君を救える言葉が思い浮かばなくて、君が一番助けてほしかった時に駆けつけることが出来なくて、

助けてあげれなくて、ごめん。

女の子は顔を上げない。

そりやそうだろ。いくら謝ったって、無意味だ。

言葉は行動が伴って、初めて重さと説得力が生まれるんだ。

助けてあげられなかった僕がいくら謝っても、何の意味もない。

だから――

「次は必ず、助けるよ」

そう、約束するしかなかった。

「絶対に、君がどこにいても駆けつける。絶対に君を理不尽に傷つける全てから、守るよ」

自分の言ってる言葉が、どれだけ無謀なものかはわかってる。それでも、あの日の深海王の時のように、わかっているでもそれはやらなくちゃいけないことなんだ。

貫かなくちゃいけないことだから。

「絶対に君を、守るよ」

僕の約束は、一方的なものつもりだった。

……でも――

「……………本当？」

消え入りそうな声で、彼女は尋ね返した。

何もできなかった僕の何を信用してくれたのかはわからない。

だけど、ほんのわずかでも、僕の言葉は彼女の心に届いた。

「うん。……約束するよ」

僕は小指を立ててそれを証明しようとしたら、女の子は「子供みたい」と言って、少し笑った。

本気で破ったら呑む覚悟なんだけどなあ、針千本。

そんなやり取りをしていたら、いつの間にか警察や屋上まで上がってきてた。

僕はさっそく、大人に囲まれて「自殺未遂なんて人騒がせなマネを！」と怒られて怯える女の子を庇いながら、ふと思う。

いつの間にか、ここにやってきたようにレポートで帰ったであろうエヒメちゃん。

あの子の言葉の重み、説得力はどんな「行動」が伴って、生まれた

ものだったのかを、少しだけ考えた。

……彼女は一度、「飛んだ」ことで「跳ぶ」ことを覚えたんじゃないだろうか？

### 三者三様日常断片・その二

【キングさんと妹】

いつも通り部屋で俺は漫画を読み、エヒメは編み物、ジェノスはノートになんか書くかパソコンをいじってるかという、個々で好き勝手やってる時にエヒメが呟いた。

「……ブラストってどんな人なのかな？」

エヒメの口から全く知らない人間の名前が出て来て、まずは驚く。言ってる内容からして本人も知らん人間らしいが、こいつが会った事もない人間に興味を持つなんて……と感心してしまった。

「ブラスト？ S級1位がどうかしましたか？」

俺がエヒメの成長を喜んでいたのにこのわかりやすくそして余裕のない弟子は、また男というだけで目の前に居もしない奴を敵認定して威嚇する。

おい、ジェノス。俺は妹と弟子の恋愛に口出しなんか面倒だし俺が色々虚しくなるだけだからしたくないけど、さすがにそろそろ口出すぞ。

「いえ、この前の集會に最後まで来なかったことをふと思い出して、どんな人なのかなー？ って思っただけです。

……S級1位なら、お兄ちゃんと同じだけ強い人なのかなーとか思ったんですけど、どうなんでしょうね」

ジェノスの架空の敵に対する威嚇に気付いてないのか、それとも理由はわからなくてももう慣れたのか、エヒメは華麗にスルーして質問に答える。

後半の言葉で結局こいつは他人に興味を持ったわけじゃなくて、俺の事を考えてたつてのが分かった。

まったく、いつまでこいつは俺にべったりなんだか。

それを叱らないで、このままできさせてる俺が呆れる資格なんてないけどな。

「ああ、なるほど。確かに気になりますね。協会関係者も、最高幹部しか奴の正体を知りえないそうです」

エヒメの答えに納得して、ジェノスは威嚇をやめて普通に答える。それで俺も確かにヒーローのトップに立つ奴がどんな奴か、……俺よりも強いのかどうかは気になって、漫画を置いてジェノスにさらに訊く。

「お前も何も知らないのか？ 一応、同僚だろ？」

「すみません、先生。俺たち他のS級にさえもブラストの情報は機密扱いで、奴が集会などに自主的に来ない限り顔すらわかりません。」

……けど、強いと言えばブラストよりもキングが有名ですね」

その答えにさほど期待はしてなかったが少しだけ残念に思ったら、それを察したのかジェノスは別の奴の名前を上げた。

「キング？ 誰だそれ？」

「……先日のS級招集で来ていたヒーローの一人ですよ。」

S級7位、左目に三本の傷跡がある金髪の大柄な男で、何でも先生を差し置いて『地上最強』と謳われているらしいですよ」

ジェノスが説明するが、思い出せない。あの集会で俺が話したのは、武士のおっさんと超能力のクソガキ（なんか俺らより年上とか言ってたけど）と、あとはエヒメの友達の兄貴くらいだからな。他の奴は全然覚えてないわ。

「あ、そういえばこの前、そのキングさんに会いました」

俺が記憶をほじくり返してたら、会話からフェードアウトしていたはずのエヒメが割り込んできた。

「この前？ S級招集の時ではなくてですか？」

「はい。この前、ゼンコちゃんとおバッドさんと一緒に出掛けた日に……ただでさえまたジェノスの奴が威嚇モードになったのに、エヒメの言葉で威嚇が戦闘モードに切り替わりやがった。」

おい、ジェノス。ここにそのバッドってやつはいないぞ。

っていうかエヒメ、お前は何でこの重苦しい空気の中、一人平然と笑って話を続けていられるんだよ。

「まあ、たまたま歩いてたら私が落としたハンカチを拾ってくれた程度なんですけどね。向こうも、S級の集会で会ったことを覚えてなさそうでしたし。」

それより、私すごく恥ずかしい思いをキングさんにしちやっただんですよね」

「わかりました。キングを焼却してきます」

「ジェノスさんが何を理解したかが私にはわからない!!」

流れるようにキング抹消を決意して、しかも立ち上がって本当に今から焼却しに行きそうなジェノスをさすがにエヒメが慌てて止めた。

……お前、マジで何言ってるの？　そしてマジで焼きに行く気満々か。

「ジェノスさん、落ち着いて！　キングさんのせいで私が恥ずかしい思いをしたわけじゃないですから！　私が一人勝手に言い間違えて、恥ずかしかっただけですから！」

エヒメが必死で止めたら、ジェノスも「言い間違い？」と訊き返して再び座ったので、とりあえずS級同士の戦いは回避できたらしい。でもエヒメ、たぶんこいつがキングって奴を焼きに行こうって思った理由の半分は、ただお前に関わったからだ。恥かいたかどうかは、割と後付けだろうな。

「ええ。落としたハンカチを拾ってもらって顔を見た時、キングさんだってわかったんですけど、……ほら、あるじゃないですか。わかっているのに、学校の先生に向かって勢いよく『お母さん』って呼んじやう事。

私、思いつきり『ありがとうございませう、お兄ちゃん』って言っちゃったんですよ。

キングさん、『……いや、気にするにや』って囁んじやうくらい困惑させちゃいました」

「……ああ。それは確かに、恥ずかしいですね。

けれどそれは、先生をとて信頼している証拠ですから気にしなくていいと思います。エヒメさんにとって、善意Ⅱ先生だからこそ自然に起こった間違いですよ」

エヒメがジェノスの気をキング抹殺から他の事に向けようとして、自分の恥ずかしい失敗を語ったが、気は確かにそれたけどこいつの生真面目さも何か別の方向に向いてしまつて、エヒメが余計に恥ずかし



そうにしている。

こいつ的にはフォローされたかったんじゃないやなくて笑い飛ばしてほしいんだよ、ジェノス……。

何かあんまりにもエヒメが可哀相になって来たので、俺が助け船に似たような失敗談を話してやる。

「そうだ、気にすんなよエヒメ。」

俺も面接の時に、先生をお母さんと呼ぶのとは逆パタで自分の事を『兄ちゃん』って言ったことあるぞ」

「……先生、それは何というか……いい、お兄さんですね」

「……なんか、ごめんねお兄ちゃん」

ちよつ、お前ら。本気で慰めにかかるな。

\* \* \*

どうでもいい後日談だが、俺もキングと会う機会があつてそこであいつの秘密を知ってしまったんだけど、俺的にはキングの秘密よりもあいつが買ってやろうとしてたゲームが気になった。

あいつはシューティングゲームと間違えたって言ってたけど、……「ドキドキ♡シスターズ」か。

……こいつが噛んだのって、困惑じゃなくてまさかエヒメに「お兄ちゃん」って言われたのが嬉しかったからじゃないよな？

まあ、間違えたというのなら信じよう。うん、ヒーローが人を疑っちゃダメだよな。

……でもキング。お前、エヒメにあんま近寄んな。

### 【フラッシュユキさんと名前】

先生は基本的に、人の名前を憶えない。

先生が名前を覚えるというのにはある一定以上どこかしらを認めている人間だけであり、俺が知る限りですぐに覚えた名前は無免ライダーさんぐらいだ。

先生ほどの傑物ならばたいの人間が同じような面白みのない人間なので、記憶に残らないのは当然だろう。

そしてこれは最近知ったが、実はエヒメさんも人の名前と顔を覚えるのは苦手らしい。

エヒメさんの場合は過去のトラウマによる人間不信の所為か、先生と違って名乗られた直後に名前を間違えたり忘れる事はないが、やはり興味のない相手は少し間が空くとすぐに忘れるらしい。

実際、入院していた時にあんなにしつこくやつて来ていたステインガーとイナズマックスの名前を、既に忘れていた。

前提が長くなつたが、まあ何があつたかというただの笑い話だ。先生とエヒメさんと俺で朝食を取つた後、俺が洗い物、先生が洗濯、エヒメさんが部屋の掃除をしていた時、掃除機をかけ終えたエヒメさんが俺に尋ねてきた。

「すみません、ジエノスさん。S級に長い金髪で刀を持った男の人がいましたよね？ あの人の名前なんでしたっけ？」

唐突な問いに思い浮かんだ条件に合う同僚であるS級ヒーローの名ではなく、何故そんなことを訊くのかを尋ね返したのは、嫌になるほど幼稚な嫉妬だ。

会話はしていないとはいえ会つた事がある相手の名前を忘れて尋ねている時点で、相手に興味がさほどないことぐらい察しても良かったのに、俺は他人の男を話題にあげただけでへそを曲げた。

俺がこんなバカげた嫉妬をしてるなんてエヒメさんは気付かず、いつものように穏やかに笑いながら掃除機をかけながら見たニュースで奴が出てきたのだが掃除機の音で名前が聞こえず、出てきそうでてこない、思い出せないのがもどかしかったから尋ねただけと答えてくれた。

「初め聞いた時、ソニックさんに似ているなーって思ったんですけど、そう考えたら関節のパニックしか浮かばなくなつて……」

「誰ですか、それ？」

ソニックという名で直つた機嫌がまた急降下したが、その後に出てきた謎の人物名なのか二つ名なのかよくわからないものが素で疑問だったので、思わず訊いた。

どうやら先生が音速のソニック（笑）の名前を言い間違えたか覚え

間違えたかして、本人に向かつて叫んだ名前らしい。

先生、よくそこまで本来の意味にかすつてもいけないのに語感だけは絶妙に合っている名前が出てきましたね。これは確かに、妙に覚えてしまいうさだ。

そんなことを考えていたら、エヒメさんが「ジエノスさん、わかりますか？」と小首を傾げて尋ねてくる。

そのあどけない動作にないはずの心臓が高鳴る錯覚を覚えるが、同時にやはり幼稚で醜い嫉妬がまたジワリとにじみ出る。

だからさつさと名前を教えて、話題を変えてしまおうと思った。

「たぶん、閃光のフラッシュですよ」

「ああ、そっか。本当にソニツクさんと同系統な名前だったんだ」

ポンと手を打って、エヒメさんはようやく納得して晴々とした顔になる。

が、何故かその晴々とした顔は少し不満げなものに変化して、言葉を続けた。

「そんな変なヒーローネームにするのなら、もっと外見でわかるものにしてくれたらいいのに」

何故か唇を尖らせて八つ当たりを始めたエヒメさんの幼い言動が少しおかしく、そして微笑ましく、俺は口角が緩むのを感じながら変えようと思っていたはずの話題を続行した。

「番犬マンのような外見ならともかく、奴はこれと言って特徴がありませんからそれは難しそうですね」

「そうですね。でももし、つけるとするなら……」

エヒメさんがまた何故か真剣に数秒考えて、そして真顔で言った。

「……前髪ジャーマン？」

思わず吹き出してその場に蹲り、エヒメさんとベランダから戻ってきた先生に心配をかけてしまい、申し訳なかった。が、サイボーグで良かったとも同時に思った。

生身なら間違いなく、腹筋が攣っていた。

というより、実は発想とか言葉のセンスがそっくりですよ。

サイタマ先生とエヒメさんって。

「アマイマスクとカツコよさ」

お兄ちゃんがまた私との約束を破って怪人退治に行っちゃって、その不満をまた電話でエヒメおねーさんに訴える。

ごめんね、おねーさん。私の愚痴ばかりで迷惑かけてるのはわかっているけど、おねーさんのお兄さんがバッドお兄ちゃんと似たような人らしくて、おねーさんは私の言いたいことを全部わかってくれて、そして私が一番欲しい言葉をいつもくれる。

だから、ついつい甘えてしまう。

今日もおねーさんは電話の向こうで私のいう事を全部きちんとしてから、お兄ちゃんを庇うようなことは言わずに、「怪我せず帰ってきてくれたら安心するし、こっちも遠慮なく八つ当たり出来るのね」と言ってくれた。

本当にその通りだよ！

「もう今日は簡単に許してあげない！ アマイマスクのサインだけじゃなくて、直接会わせてくれるまで許してあげないんだから！」

「……ゼンコちゃんは、アマイマスクのファンなの？」

私の言葉におねーさんは意外なところに反応して、訊き返す。

「？ うん。大ファンってほどじゃないけど、好きなドラマに出てたから、一回くらい会ってみたいなーって思ってるの」

「……そうなんだ。会わせてもらえるといいね」

何だかいつもより歯切れの悪い言葉に、浮かんだ考えがあった。

「おねーさん、もしかしてアマイマスクのこと、嫌い？」

一瞬、おねーさんもファンで会いたいのかな？ って思ったけど、声の感じからして遠慮してるというより困ってるって感じだったから、たぶんこっちなんだろうなあ。

まだ直接会って遊んでもらったのは2回しかないけど電話はいっぱいしてるから、顔を見なくてもおねーさんがどう思ってるかはだいたいわかってきたと思う。

「……あー、ごめんねゼンコちゃん。でも、嫌いって程じゃないよ。

ちよつと……苦手なだけ」

私の考えは正解だったみたいで、おねーさんは気まずそうに申し訳なきさうに謝るから、私はなるべく明るく言った。

「おねーさん、気にしなくていいよ。私も大ファンってわけじゃないから、別にそんなことで怒らないよ。」

私、アマイマスクよりおねーさんの方が好きだから、ぜーんぜん気にしてないよ」

実際、アマイマスクのファンであることを馬鹿にされたら怒るけど、おねーさんがファンじゃないことに怒るほど私はわからずやじゃない。

人の好みはそれこそ人それぞれだもん。同じものが好きじゃないのは残念だけど、仕方がないことだし私には思わない。

だからそう言ってみただけど、大好きなおねーさんと同じ話題で盛り上がるのが出来ないのが少しだけ残念で、私はつい「でも何で、アマイマスクが苦手なの？」って訊いちやった。

おねーさんは私がファンだから気を遣って言わないようにしてたのに、私が「気にしないから教えて」と駄々をこねたら話してくれた。「えーと……ドラマとかを見てたら演技が凄く上手だなーと思うけど、……何というか演技が上手すぎて、『本当の彼』がまったく見えなるところがなんか苦手だなーっていつも思っちゃうの。」

……何ていうか、人間味がないように私には思えるの」  
おねーさんの答えにビックリしたけど、なんか納得した。

そう言えばアマイマスクは色んなドラマや映画に出て、色んな役をやってるけど、確かに一つも「この役はなんか合ってるな」って思ったことがないや。

優しい恋人役もすごく怖い殺人鬼の役も、アマイマスクはいつも完璧に演じてるから、私は「本当のアマイマスク」を全然知らない。

芸能人が普通の人に「本当の自分」なんて見せるわけないのはわかってるけど、それでも少しくらいは見えてきそうなものなのに、アマイマスクのイメージが私の中で固まらない。

……うん。確かに意識してみたら、気持ち悪くて好きになれないか

もしれない。

「そっか。なら仕方ないね。」

でも私は、顔がカッコイイから好きだな」

私の答えにおねーさんは申し訳なさそうな感じを消して、少し笑った。

「ふふっ、でも私、アマイマスクよりバツドさんの方がカッコイイと思うよ」

おお、おねーさんがお兄ちゃんを褒めた。

これを教えたなら、お兄ちゃん喜ぶだろうな。お兄ちゃん、おねーさんの事大好きだから。

「あとジェノスさんの方が綺麗だし、ソニックさんの方が美人だし、バングさんの方が渋いし、アトミック侍さんの方が男らしいし、童帝君の方が可愛いし、タツマキさんの方が勇ましいと思うな」

……これは言わないであげた方がいいな。

ただでさえ最近S級に入ってきた人とおねーさんが凄く仲が良いらしくて、お兄ちゃんマジ泣きしてたし。

「つていうかおねーさん、もしかしてアマイマスクの顔も嫌い？」

「ううん。そんなことないよ。イケメンだなーとは普通に思う。」

でも、あの人イケメンではあるけど逆に言えばそれ以外に特徴ないから私、髪形変えられるとわからなくなるんだよね」

なんかすごい勢いで他の人の方がカッコイイって言われたから、そもそも顔が嫌いなのかなと思ったら、逆に顔が嫌いって言われた方がマシそうな答えが返って来た。

そしてこれも、納得してしまった。

うん、確かにアマイマスクの顔を説明しろって言われたら、難しいよね。

私が納得しつつもどう反応したらいいかで悩んでいたら、電話の向こうでお姉さんがもう一回笑った。

「でも、私『たち』にとって一番カッコイイのは、やっぱりアマイマスクじゃないよね？」

おねーさんの言葉に、私も笑う。

うん、そうだね。

アマイマスクがどんなにイケメンでも、絶対に勝てないぐらいカッコいい人を、私たちは知ってる。

私とおねーさんの声は、自然と重なった。

「私のお兄ちゃんが、世界で一番カッコイイ」  
だから、早く帰って来てね。お兄ちゃん。

六人目、「優しいおじいちゃん」

スーパーの買い物かごを一つ取り、エヒメ嬢はまた申し訳なさそうに謝る。

「本当にごめんなさい、バングさん。せっかく招待してくれたのに、ジエノスさんは失礼なことを言っちゃうし、お兄ちゃんは図々しいし……」

今日は兄ちゃんから送られた伊勢海老が、チャランコとわしでは食いきれなのでサイタマ君たちを招待したんじやが、チャランコが白菜を買って来なかったことでジエノス君とチャランコが諍いを起こし、それを収めるためにわしは白菜をスーパーまで買いに行くと言ったのじやが……。

エヒメ嬢が兄とジエノス君の無礼を恥じて、テレポートという能力もあることから自分が買いに行くと言わず、だからと言ってこちらが呼んだ客に買い物頼むわけにもいかずそこでまた少しもめたのじやが……、結局エヒメ嬢とわしが買い物に行くことになった。

サイタマ君が「あいつの強情さに勝てたためしがない」と言っておったのを実感したわ。

意志が強いのも責任感があることも良いことじやが、この子はちと一度決めたことは何でも思いつめすぎよる。

まさか白菜を誰が買いに行くか行かないかで、自分が行かなければ死んで詫びるしかないと言わんばかりの顔をされるとは思わなんだ。「エヒメ嬢が気にせんでもええんじやよ。二人の言うことくらい、ちよつと生意気になって来た孫と思えばかわいいもんじや。

サイタマ君の言う通り、孤独なジジイの飯に付き合っていると思ってくれたらそれで良い。

それより、お客さんのエヒメ嬢を移動手段にしてしまつてすまんのう」

わしの言葉にエヒメ嬢は、まだ少し困つたままだが表情を笑みに変えて返答する。

「それこそいいんです。遠慮しないでください。



それより、早く白菜を買って帰らないとたぶんお兄ちゃんが先に食べちゃいますから、急ぎましょう」

そう言って、野菜売り場の方に歩いてゆく。

……こうしてみると、どこにでもいる普通の女の子なんじゃが。

いやはや、本当に難儀な子じゃ。

白菜だけではなくもう少し食材を買い足しておこうと思い、少し他の売り場もわしとエヒメ嬢で回る。

「……あの、バングさん。豆腐買いすぎでは？」

「ん？ 5人で食うのならこれくらいはいるじゃろ？」

「すみません、バングさんの中では豆腐は一人何丁食べる計算になってるんですか!？」

わしが豆腐を10丁ほど買い物かごに入れると、初めは控えめな指摘じゃったのがわしの被せたボケに元気よく突っ込んだ。

ふむ、サイタマ君に対してよりはまだ遠慮があるが、やはり大人しくしておるよりこういう事を言ってくれる方が安心するのう。

わしがそう言って笑うと、エヒメ嬢は恥ずかしそうに、唇を尖らせた。

「私が遠慮しなくなったら、バングさんにもお兄ちゃんにしてみたいなビンタが炸裂しますよ？」

「あれは武道家として一度、手合わせをしてみたいと思わせるほどの一撃じゃったから、むしろ望むところじゃのう」

「自分で言っというてなんです、もう本当にあのビンタは忘れてくれませんか!？」

そんなやり取りをしながら、他の野菜やうどん、飲み物を買ってゆく。

兄以外の身内がおらんわしには、なかなか新鮮なやり取りじゃな。

武の道を生き、独り身を通したことに後悔はないが、たまには「もしも家庭というものをわしも持っていたら」やら、「子や孫がいたら」と考える時もある。

……孫娘がいたら、こんな感じかのう。

そんなひと時の、わしには持ち得なかつた、選ばなかつた「日常」を

噛みしめておると、まだ少し拗ねた様子でエヒメ嬢はわしに言う。

「もう本当にあのビンタは火事場の馬鹿力みたいなものなんですから、忘れてくださいよ。私は、バングさんが期待しているような武術の才能なんてありませんよ」

どうもわしが今日招待したのは、まだ勧誘を諦めていないという下心にこの子はちゃんと気付いていたようで、先手を打って断りを入れた。

が、そう言われて諦めるような柔軟さにはないんじゃないかと、エヒメ嬢。

「いやいや、サイタマ君から聞いたが、昔はエヒメ嬢の方がサイタマ君より運動神経も良かったんじゃない？ それなら期待もするわい」

「……私はただの器用貧乏で、お兄ちゃんは興味がないことは何もしない、やる気が出るまでが遅いだけですよ。」

お兄ちゃんは言葉通り『やれば出来る人』で、私はお兄ちゃんと比べると高が知れています」

わしの言葉にエヒメ嬢は謙遜と思える言葉で返すが、瞳はやけに昏い。

……しもた。どうもわしは地雷を踏んだようじゃ。

わしは、この子の過去を全く知らん。

本人の様子やサイタマ君やジェノス君を見とればなんとなく、何があったかの想像くらいは出来るが、例え詳しい事情や過去を知っておってもわしの言葉などさほど意味はない。

……この子の4倍近く生きてきても、この子の闇を照らし、傷を癒す言葉一つたりとも知らんというのは情けない。

「……才能があっても力の使い道を間違えるようなら、そやつに武を教える価値はない。」

エヒメ嬢、わしはな、君なら力の使い道を決して間違わんと思うのじゃ。だから、サイタマ君より、ジェノス君よりも流水岩碎拳を教えたいとおもっている」

しかし、知らんからと言って何も言わず黙っておくことは、この子にこんな昏い瞳をさせたままでは、何の為に今まで生きてきたのか、

そしてこんな年になっても「ヒーロー」をやっておる意味がまるでない。

だから、わしは語る。

この子がせめて、強大で凶悪な力から自分の身を守る術を与えたいと思う訳を。

強大な力を「暴力」ではなく、別の何かに昇華してくれるのではないかと期待をかけてしまう訳を。

「前に話したじゃろ？ 他の弟子を再起不能にして、破門にした弟子がおつたと。

あやつは才能の塊じゃった。物覚えが良くて、一を聞いて十を知るところか一を見て百を学び取るほどにな。

……じゃが、あやつはわしが教え、自ら学び取った力の使い道を間違えた。誰かを傷つけ、痛めつける為にその学んだ力を使った。

……わしはもう、同じ間違いを犯したくないんじゃよ。

じゃから、エヒメ嬢を弟子に取りたいと常日頃、思うんじゃ。

『逃げる』為に生まれた力で、誰かを守り、救うことを、『逃げぬ』ことを選んだおぬしなら、決して間違わんとわしは思うんじゃ」

……あの日、サイタマ君が隕石を破壊し、その二次被害でZ市が半壊したことを売名行為の為にランニングシャツのヒーローと、そやつらに煽られた市民に責められておつた時、そんなサイタマ君を庇って、守るために「自分の所為だ」と叫んだこの子を見た時から、思っておつた。

逃げるための力で、あんなに怯えながらも大切な人を守るために自分を貶めて守ろうとしたこの子なら、決して力の使い道を間違えない、と。

サイタマ君にも同じことが言えるが、既に力のある彼よりも力がなく、なのに選んだ道は力があつても地獄のように苛烈な道じゃ。サイタマ君より、こちらに手を貸したいともうのは当然じゃろう。

……正直に言うと、あの宇宙人を庇ってアマイマスクに対峙した時、この子の語った生き方はして欲しくないと思つたのが本音じゃ。

あれは汚物にまみれた茨を、裸でかき分けながら進んでいくような

ものじゃ。サイタマ君ほどの力があってもそれを貫くのは至難じゃというのに、ただ逃げるしかないはずのこの子ではアマイマスクの忠告通り、いつか必ず破滅するじやろう。

けれど、この子はその道を選んだばかりではなく、既に歩いて行つてしまつとる。

それを今更止めるといふ事は、そこに至るまでのこの子の傷を、痛みを、それに耐えて歩んできたという今までを「無価値」と断じることじゃ。

わしがエヒメ嬢の選んだ生き方を、道を否定するのは、この子が傷ついてほしくないからであつて、その生き方が、貫いた先が無価値なんぞ思えやせん。

逃げずに突き進んだ先に、誰もが救われて幸せになるという結末を夢見て、何が悪いんじゃ？

だからこそ、わしはこの子に力を与えたい。

闘い方が下手で、必要以上に相手を痛めつけ、壊してしまうわしが得た答えである流水岩碎拳を、この子なら上手く使えると思うんじゃ。

……あのバカ弟子とは、違つてな。

「……私はお兄ちゃんが約束を破つたら、わざとじゃなくても怒つて殴るような人間ですから、私だつてきつと力を得たら間違えますよ」  
エヒメ嬢はわしの言葉にしばらく間を置き、わかつておつたがやはり否定して、勧誘を断る。

ああ、わかつておる。おぬしは絶対にわしの勧誘はもちろん、何の力も欲しないことを。

おぬしは誰よりも痛みを知る道を選んで歩いているからこそ、誰かを傷つけることを恐れている。

力の使い道を間違えないからこそ、力をそもそも欲しない。

……そこまでわかつていても、それでも与えたいと思うのはジジイの余計なおせっかいじゃ。

「……そうか。……それでも、気が向いたらいつでも来なさい。戦うのが嫌なら、攻撃のさばき方だけでも、防御の型だけでも教えちやる

から」

じゃから、わしは何度断られてもしつこく誘う。

この子の傷を癒すことが出来んのなら、闇を払うことも出来んのなら、せめてその傷がこれ以上増えんことを、闇が深まらんことをただ願って。

武の道に生きてわしに出来ることは、これしかないからのう。

「……ありがとうございます」

エヒメ嬢はまた、困ったような笑顔でわしに礼を言った。

きつと真面目にすべてを学ぶ気がないのに、自分にとつて都合のいいものだけを得ようとするのは凶々しいとも思い、この子は護身すらわしから学ぼうとは思わない。

結局、わしがこの子にしてやれることはない。

が、まあいいじやろ。

とりあえず、自信なさげで光を失っていた眼に、ちやんと光が再び灯ったのじゃから。

\* \* \*

「……バングさん、一つ、良いですか？」

会計を終えて、買い物かごからビニール袋に商品を詰め替えながら、エヒメ嬢は問うた。

「何故、他の弟子の皆さんは辞めたのに、チャランコさんだけは残ったんですか？」

一瞬、質問の意味がよく分からなかったが、チャランコは素人から見ても根性がある奴には見えんからのう。他の門下生が恐れてやめたのに、あやつだけ残るのは確かに傍から見ても不思議じやろうなと納得して、わしは答える。

「何、単純にあやつはその他の門下生が辞めた原因であるガロウが暴れた時、さぼって道場に来てなかったからだけじゃ。」

じゃからあやつは、ガロウが暴れたところもやられた門下生も見ておらんし、それを見てた門下生から話もろくに聞いておらん筈じゃから、未だにガロウのことを特に恐れてもおらんのじやろう」

わしの答えにエヒメ嬢は何も答えず、何かを考えるように中空に視

線をやってから質問を重ねた。

「……もしかして、そのガロウって人はバングさんのお弟子さん全員を再起不能にしたわけじゃないんですか？」

「どうやらエヒメ嬢は、ガロウはその場におった弟子全てを再起不能にしたと思っていたようじゃなかったらしく、わしは否定する。」

「いや、あやつが再起不能にしたのは、あやつに次ぐ実力者ばかりじゃ。」

強さを極端に求める奴じやったから、どつちにしろチャランコはあ  
の場におつても怪我はせんかったじやろうな」

情けないとも思うが今現在唯一の弟子の運の良さに今更気づき、わ  
しが笑うとエヒメ嬢も笑った。

エヒメ嬢もチャランコの無駄な運の良さに笑っておるのかと思つ  
たが、続いた言葉でその考えは否定される。

「なんだ。バングさんの教え、そこまで間違えてないじゃないですか。」

その人、『弱い者いじめ』はしない人なんですね」

言われて、チャランコの運の良さ以上に今更なことに気付いた。

——ああ、そうじゃ。

あのバカ弟子は才能の塊で、それに驕ってわしの留守中に他の門下  
生を「実践」と言つて痛めつけ、体に傷、心に恐怖を刻み付けた。

力の使い道を、間違えた。

けれどあやつは他のバカ弟子、ニガムシなどとは違って一つだけ絶  
対に間違えないものを持つておった。

他の奴らはどんなに叱りつけても、まだ未熟な新入りに技を試した  
りして痛めつけ、才能ある者を潰そうとしたり、暴力で奴隷のように  
自分に従わせる馬鹿者がおったが、……あやつは絶対にしなかった。

良くも悪くもあやつは弱いものに興味がなく、後輩の面倒を見てや  
ることはなくて、挨拶しても睨み付けるような奴じやったが……、あ  
やつは一つだけ、絶対に間違えはせんかった。

……弱い者いじめという、一番間違えてはいけない力の使い方だけ  
はせんかった。

「……ボコボコにしたのは、ちと悪かったのう」

「もし、また会えたら謝ればいいんですよ。悪いことしたのは事実なんですし」

気まずげにわしが呟けば、エヒメ嬢はまだ少しおかし気に笑いながらそう答えた。

……やれやれ。慰めるつもりが慰められるとは。

このシルバーファンング、一生の不覚じやな。

七人目、「姉のような、妹のような……」

……ムカつく。

別に休みたいなんか言っていないのに、他のヒーローに頼むからとか言った協会の奴らも、私がわざわざ怪人情報を見てやって来たのに、私の到着を待たずに爆発四散してる怪人も、そして何度も何度も先回りして私の獲物を横取りしてる、どこの誰かもわからない奴が一番ムカつく!!

結局、私は怪人で憂さ晴らしも出来ずにただあてもなく、フラフラその辺を飛び回る。

何なのよ、普段はタツマキ様こちらですあちらですって振り回して、私がいなくちゃ怪人を倒すどころか市民を守ることすらほとんど出来てないくせに、普段からこれくらい仕事しなさいよ、どいつもこいつも!

「? タツマキさん?」

私が役立たずな同僚どもを心の中で罵りながら飛んでいたら、下から声が聞こえた。

「あ、やっぱりタツマキさんだ。見回りですかー? お疲れ様です」

ちらりと視線を下に向けると、見覚えのある顔がへらつと笑って手を振ってた。

……普段なら忙しいから無視するんだけど、暇だから相手にしてあげるわ。

暇だからよ! あんただからじゃないんだからね!

「勘違いするんじゃないわよ!!」

「何を!」

降りてきた私の言葉に、エヒメは困惑しながら叫び返した。

つい意味不明な八つ当たりをしちゃって、私は顔をそらしながら「何でもない」って誤魔化す。

エヒメも蒸し返す気はないらしく、「お仕事は大丈夫ですか?」と訊いてきた。

「ふんっ。今日は珍しく、雑魚しか出ないし、他の奴らもちやんと仕事



しているみたいね。

いつもこうだったらしいのに。まったく、どいつもこいつも私に頼ってばかりで嫌になるわ」

「頼りがいのあるリーダーは大変ですね。お疲れ様です」

私の愚痴になかなか殊勝な言葉を返されたことで、少しだけ苛立ちが治まる。私の周りの奴らも、これくらいの可愛げが欲しいものだわ。

「そういうあんたは何してんのよ？ 買い物？」

少し気分が良くなったから、そのまま雑談を続けてみる。

エヒメも特にこの後用事とかはないのか、私の問いにやたらと嬉しそうに笑って「はい」と答えてから、両手に抱えていた袋の中身を見せる。

「セールだったんで、たくさん買っちゃいました」

「……何これ？」

やたらと嬉しそうなどや顔で言いながら中身を見せられたけど、私には何が嬉しいのかどころか、これが何なのかすらよくわからないんだけど？

何これ？ カラフルな綿？

「羊毛フェルトです。これを専用の針でチクチク刺して、形を整えて固めていって、マスコットを作るんです」

さすがに説明不足だったことに気付いたのか、エヒメは少し決まり悪げに笑って、説明を付け加えたけど、それでも私にはよくわからない。

「針で刺して固まるの、これ？」

色ごとにビニール袋で包装されたその羊毛フェルトやらを一つつまみあげて、私は訊く。どう見ても、綿みたいにもこもこしたもので、布の中に詰めるならまだしも、これ単品でマスコットなんて作れそうにないんだけど？

「はい。もちろん普通の縫い針とかじゃダメですけど、専用の針先に小さな凹みのある針を刺していけば、羊毛の繊維同士が絡まって、圧縮されて硬くなっていくんです。」

あ、出来上がったのがこんな感じですね」

「作ったのがあるのなら、それをさっさと見せなさいよ」

エヒメは長々と説明した後になって、見本となるものを持っていたことを思い出して、そのマスコットがついた財布を取り出した。

そして財布から、丸っこい黒猫のマスコットを取り外して、私に見せる。

「あはは、そうですね。すみません。」

でも、こんな感じですよ。しっかりと刺して作れば、小さくなるけど結構硬くて丈夫なマスコットになるんです」

私は、エヒメの誤魔化すような謝罪も、マスコットの説明もろくに聞いてなかった。

ただ、エヒメが自分で作ったらしいその黒猫を、無心で見えた。

真っ黒い毛に、私と同じエメラルドグリーンの吊り上がった眼。

それは、無性に妹を連想させた。

「……タツマキさん？」

エヒメが不思議そうな顔で私の顔を覗き込んでやっつと、自分がどれだけボーっとそのマスコットを見ていたのかに気付いて、とっさに顔をそむける。

不覚。自分がどんな顔をしてたかはわかんないけど、とにかくマヌケ面してたに決まってる。そんな顔を、選りにもよってこの子に見せるなんて……。

エヒメは急に顔をそむけて何も言わない私に、きよんとした顔でしばらく眺めていたけど、自分が持つ猫のマスコットを見て、ふと笑った。

……その笑みが、「仕方ないなあ」とでも言いたげな、妙に余裕ぶつた笑顔が気に入らなかった。

10歳近く年下のくせに、私にそんな顔向けんじゃないわよ！

「……何よ……」

そう思いつつも、完全に拗ねた口調と声音になっていることは自覚してる。ガキっぽい反応をしてしまう自分が本当にイヤ。

私のそんな思いを知ってか知らずか、エヒメはやっぱり妙に余裕

ぶった笑顔のまま、「いえ」と一度断っておきながら、言葉が続けた。「タツマキさん。少し、付き合ってくださいませんか？」

\* \* \*

「針は曲がったり折れたりしないように、ゆっくり垂直に刺してください。」

羊毛フェルトは、硬めに折りこんでおいた方が、針を刺す回数が少なくて楽ですよ」

「それくらい、言われなくたってわかるわよ！」

オープンテラスのカフェで、私はエヒメの指示に従って、羊毛フェルトのマスコットを作ってみる。

……暇だったから、「ちよっとお茶しませんか？」って誘いによってあげて、そしてやっぱり退屈だったから、丁度材料も針もあるからってことで、エヒメの趣味にちよっと付き合っただけなんだから！

別に、妹になんか似てるマスコットが欲しくなったとか、フブキにあげたくなったりとか、あげるんならエヒメに作ってもらうんじゃないかと、自分で作ったものになりたいとか、そんなこと考えてないんだからね！

「そこんところ、わかってる!?!」

「はい。私に付き合ってくれてありがとうございます」

私の八つ当たりに、普通に笑って答えるんじゃない！ 何か余計に腹立つ！

私はその苛立ちを、羊毛に針でぶつける。

……超能力でぶっ飛ばしたり、ねじ切るとはまた違って、ちよっとこれはこれでストレス発散にいいかもしれない。

結果が壊すとか潰れるとかじゃなくて、きちんとした形になって、物になってくのも、……何か新鮮で悪くないわね。

「針先が下に敷いてあるマットに届くくらいまで刺すと、フェルトがより硬くなりますから、ふんわりとした作りにしたければ、浅く刺し続けてくださいね」

エヒメは私に作り方を教えつつ、この子も何かを作るつもりか、淡

い緑のフェルトを取り出す。

そして、手袋をしたままだとやりにくいのか、レースの手袋を外して、火傷の痕が残る手で適当に羊毛を筆った。

「……本当、あんたはバカね」

その火傷痕を見て、私は呟く。

本当に、この子はバカよ。能力が違うとはいえ、同じ超能力者としては情けないくらいに、力の使い道を間違えてる。

「何であんたは、その『力』で逃げないのよ」

私は、頭になる予定のフェルトに針をぶっ刺しながら、訊く。

「逃げるために、逃げたくてその力をあんたは自分で作りあげて、そしてここまでコントロールできるようになったんでしょ？」

あんたがやってることは、自転車で海を泳ぐようなことよ。使い方が間違えてるところか、ただの重荷にしかなくてないわよ」

私も私よりもはるかに弱いフブキとも違って、攻撃に向いてる力じゃないくせに、能力の希少さは私よりも上だから、どこまでも危なつかしくて、戦えないのなら逃げるしかないはずの子。

それなのに、このバカは何故か逃げない。

逃げないどころか、あんたみたいな弱っちいのを守るのが仕事なのに、情けなく負けた馬鹿を助けようとして、その見ていてこっちが痛くなる傷を負う。

そんなバカに、前にも似たようなことを尋ねたけど、もう一度訊いてみる。

「何であんたは、弱いくせにでしゃばって、助けようとするのよ？」

エヒメは、あの時と同じように一回きよんとしてから、困ったように笑う。

「ただ、後味悪い思いをしたくない、『どうして助けなかった？』と、周りから責められたくないだけですよ」

困ったように、けれどどこか開き直って、綺麗事なんかじゃない、自己中心的な答えを返す。

あの日と同じように。

私が、ヒーローやってる理由と同じような答えを。

「あつそ」

予想通りの答えに、私はカフェオレを一口飲んでから少しだけ意地の悪い言葉を続ける。

「つまりは、その火傷の原因であるあのポンコツサイボーグを助けたのも、あれが目の前で壊れたら後味悪いだけってことね」

「……タツマキさんはジェノスさんに何の恨みがあるんですか？」

エヒメも紅茶を飲みながら、少しだけ抗議でもするように私を睨み付けるけど、そんな視線、痛くもかゆくもないのよ。

「だってあなたの答えはそういうことでしょ？」

「私にだって、どうでもいい人とそうじゃない人はいますよ。」

どうでもいい人は、放っておくのも後味が悪いから嫌々助けますけど、そうじゃないのなら……それは自分が死にたくないから、もはや自分の心の中に住み込んで一部となってしまうた人だから、その人を喪うという事は、私の心の一部が死ぬという事だから、……だから、命を懸けて助けます」

エヒメは紅茶の水面に視線を落として、そう語った。

命を懸けて、自分の命の為に、他人を守ると。

「……ま、結局は自分の為であることに変わりはないんですけどね」

そしてそのことを、やっぱり自己満足、エゴだと語る。

「そうね。けど、それでいいんじゃない？ 所詮、信用できるのは自分だけなんだから、自分の為に生きたらいいじゃない」

そして私もそれを否定しない。

人との繋がりなんか必要ない。どうせ、力ある者はない奴らに利用されて終わりなんだから。

それなら、自分の為だけに生きるべきよ。

……本当なら、他人を心に住ますことも私としては否定したいけど、そこまで言ってやる義理もないから、何も言わない。

だってこの子は結局、妹に似たところがあっても、私に似たところがあっても、私には何の関係もない赤の他人だもの。

今はほんの一時の気まぐれで、付き合っただけ。

私はフブキ以外を信じないし、必要としない。

あんななんか、いらぬ。

「……その考え、結構楽になれますね。……でも」

エヒメは私の答えを一度肯定したうえで、やっぱり困ったような笑顔のまま言った。

「私、タツマキさんのこと、信用してますよ。」

強くて、真面目で、優しく、面倒見が良くて、私のことを心配してくれたら、助けてくれましたから」

……ああ。

こいつは本当に、バカだ。

\* \* \*

『出してー！ 私を置いて行かないで！』

ベッドから跳び起き、舌を打つ。

昔の夢を見た。

最悪な夢。

外に出たくて、フブキに会いたくて、超能力が使えなくなったと嘘をついて、独房に閉じ込められて、そして合成獣のサンプルが逃げ出して、研究員どもは我先に逃げて、私を置いて、私を見捨てて……

それだけでも最悪なのに、もつと最悪なのはこの夢は現実とは、過去とは少し違う。

『出してー！』

期待なんかしてなかった。けれど、子供の私はそれでも縋った。

誰かが来てくれることを。

あの独房から、出してくれることを。

『今後のキミのために一つだけ教えておくよ。』

いざというときに誰かが助けに来てくれると思ってはいけぬ  
私を助けてくれた人がいた。

けれどその人さえも、他人を信じるなど言った。

この世界は弱肉強食だと、今日はたまたま運が良かったただけだと、自分の力だけで、何とかしろと言った。

あれだけ強い人でも、この世全ての人は救えない。

だから、自分で何とかするしかない。

それが私の真理。

……なのに――

独房の鉄格子から見えたのは、私に牙を向けてよだれを垂れ流す合成獣でも、黒い短髪にマントが特徴的なあの人もなかった。

自分の身の丈の倍以上ある合成獣から私を守るように、あの人は全然違う細い両手を広げて、ガタガタ震えながらも絶対に逃げないで、引かないで、立ち向かった背中が見えた。

……初めに謝ったのは、あのビクビクおどおどした様子が、昔の妹に似ていたから。

助けてやると言ったのは、あの子の考え方が、他人を助ける動機が私に似ていたから、少しでも私に重ね合わせてしまったから。

それだけ……それだけだったはずなのに。

あの日、別に本当は助けたくもないのに宇宙人を庇って、アマイマスクに立ち向かったあのバカを見て、思ってしまった。

あのバカ以上に、バカな考えがよぎってしまった。

……もしもあの子が、エヒメもあの研究所にいたのなら――

「……何考えてるのよ。私は」

夢の内容を忘れてたくて、とりあえず水でも飲もうとベッドサイドの灯をつけたのが間違いだった。

そこに飾ったものを見て、私はまた舌を打つ。

……不格好な黒猫と、緑色の鳥のマスコット。

猫は私が作ったもので、鳥はあいつが……あの子が……エヒメが作ったもの。

『空を飛ぶタツマキさんが、本物の鳥みたいに綺麗で気持ち良さそうに飛んでたから、なんとなくタツマキさんイメージで作ってみました』

そう言つて、私に押し付けるように渡してきた鳥を、思わず超能力で浮かび上がらせた。

浮かび上がらせて……結局、元の位置に戻す。

ゴミ箱や壁に叩き付ける気には、どうしてもなれなかったのは、その鳥が私に似てるから。自分に似たものを粗末に、乱暴に扱うことが

出来なかった。

ただ、それだけよ。

……あの子がくれたなんて、何の関係もない。

私はもう水を飲む気にもなれなくて、ベッドの中で膝を抱えて言い聞かせる。

一人で大丈夫。人は信用できない。

いざという時に、誰かが助けに来てくれると思ってはいけない。

私は強い。私は強いから、一人で大丈夫。あの時だって本当は、あいつの助けなんていらなかった。

私一人でも、あそこからは出れたんだ。

そう、だから考えるな。あんな馬鹿な考え。

……あの子が私を、独房から青空のもとに連れ出してくれるなんて夢、二度と見るな。



八人目、「しつかりした大人」

「マスター！ すみません、ちょっと来てください!!」

舎弟たちと街を見回っていると、ちよつとトイレに行つてくると言つてコンビニに寄つたはずの舎弟、タンクトップタイガーが俺を引きとめた。

「何だ？ 指名手配の賞金首でもいたのか？」

「いえ、そういうのじゃないんですけど、前から話していた『あの女』がいたんすよ！ コンビニに!!」

「あの女」と言われても俺にはピンと来なかつたが、タイガーの言葉に兄のブラツクホールが「何!?! あのテレポート女か!?!」と言ひ出して、やつと思ひ出す。

ああ、そういえば何度か話を聞いたな。

テレポートという特殊な力を使って、タイガーにいきなり攻撃を仕掛けて逃げた女の話を思ひ出す。

正直、自分の舎弟がやられたことに対する屈辱や怒りよりも、階級がC級かつ相手は特殊な力を持っているとはいへ、ヒーローが一般人の女相手に一撃で倒されたという事実を情けなく思う気持ちの方が強いんだがな。

まつたく、いくらテレポートで予測不可能な場所に突然現れるとはいへ、それ以外はタツマキのような力もないのだろうか？

ならタンクトップの動きやすさを最大限に使つて、避けるなり防御なり出来るようにしろ。何のためのタンクトップなんだ。

しかし舎弟がやられたのは事実で、そのことに関して何の落とし前をつけないで黙っておくのは、タンクトッパーの名折れだ。

それに女でなおかつ指名手配や賞金首になつていないとしても、ヒーローに攻撃する特殊能力者が危険であることは間違いない。

「どこだ。急ぐぞ」

「はい！ こつちですー!」

相手がテレポーターなら、それこそ能力を使って逃げられたらいくらタンクトップの動きやすさを駆使しても、見つけることは至難だ。

だからこそ逃げられる前にまずは確保すべきと判断して、俺と他の舎弟たちは先導するタイガーの後を追う。

「あのコンビニで……あれです、あれ！　今、雑誌売り場で立ち読みしてる女です!!」

タイガーが立ち寄ったコンビニを指さした先で雑誌か何かをパラパラめくっている女は、まだ少女と言った方がよさそうなほど幼げで儂げで、どこからどう見てもヒーローに通り魔的な攻撃を加えるようには見えない。

タイガーとブラックホール以外の舎弟たちも、話を聞いて想像していたのとはおそらく真逆に当たる少女に呆気を取られる。

「いや、何かの間違いじゃねーの？」

タンクトップペジタリアンが思わずタイガーに他の舎弟の心の内を代弁して尋ねるが、兄弟二人は見た目に騙されるな！　あの女は犯罪者やS級ヒーローもたらしこむ悪女だと口汚く罵るのを聞いていたら、頭が割れそうなくらい痛くなってきた。

見た目に騙されるなは、まあ良いだろう。正論だ。

でもお前ら……、全て本当のことを言ってるとは思ってなかったが……

「！　そこで何をしている。タンクトップマスター」

頭痛を堪えて俺がこいつらどうしようかと考えていたところで、呼びかけられて振り返ると……俺がとにかく謝らなくてはいけない相手の一人が、不穏な音を立てながらそこに立っていた。

新入りのS級16位、ジェノスだ。

タイガーとブラックホールは、奴の登場で明らかにうろたえる。

ああ、そうだよな。お前らが言っていた「たぶらかされた、だらしなくて情けないS級」とはこいつの事だから、どこから話を聞いていたかが不安なんだろう。

そしてジェノスの方も、俺よりも明らかにタイガーとブラックホールの方を敵視し、警戒して睨み付けている。

この状況で俺がヒーローとして、集団を率いるリーダーとして、人として、そして一流のタンクトップパーとしてすべきことはただ一つ。

隙あらば逃げ出そうとしたタイガーとブラックホールの兄弟の頭を俺はわし掴んで、そのまま互いの頭をまずは叩き付け、そしてその頭を掴んだまま俺はジェノスに向ってに腰を曲げ、自分の頭を下げた。

「……うちの舎弟が迷惑をかけたようで、すまない」

「……………かけられたのは俺ではなく、先生とエヒメさんだ」

とりあえず俺の言葉と行動で多少の誠意は認められたのか、不穏な音を止めてジェノスは言いつつ顎で方向を指す。

振り返るといつの間にも俺らの存在に気付いたのか、S級招集の時に出会い、そして船が墜ちた時に移動で世話になったエヒメという少女が、困惑で目を丸くしてこちらを見ていた。

\* \* \*

「……ほう。先生をインチキやらほら吹きだの、それこそ根も葉もない誹謗中傷をして市民を煽った事で、エヒメさんの怒りを買って自業自得な攻撃を喰らったことを、貴様らは『卑怯な方法で襲い掛かって来た通り魔』と言ったのか？」

そして今、貴様らは何をするつもりだった？ 自分たちの仲間とリーダーに、都合のいいことだけを吹き込んで、エヒメさんの名誉を貶めて、多勢に無勢で何をするつもりだったんだ？」

「ジェノスさん、すみません。焼却砲はさすがにやめてください。人間が蒸発するのは、さすがに見たくないのです」

とりあえず他者の迷惑にならないように、コンビニの駐車場の端にでも俺たちは移動し、タイガーとブラックホール、そしてジェノスとエヒメという少女に「本当の事」を問い詰めた。

……結果、俺の頭痛はさらに増した。

「あの女」が彼女であることを知った瞬間から、タイガーが一方的な被害者ではないことは確信していたが、まさかここまで綺麗な逆恨みだとは思いたくなかった。

ジェノスが掌どころか腕全体から砲門を解放して今にも舎弟二人を焼き払おうとしているが、止める気にもなれない。新人潰しの拳句、ヒーローでもない子に逆恨みで俺を利用して集団リンチを企むこ

いつらを、本気で消し去って欲しかったくらいだ。

俺や他の舎弟たちにも呆れられて見捨てられていた二人に救いの言葉を掛けたのは、彼女の兄を除けば最大の被害者である本人だった。

しかし本人も止める理由はただ単に、ジェノスの最大火力で消し炭すら残らないであろう二人が蒸発する瞬間を見たくないだけだった。そりやそうだろう。

ジェノスはその言葉でさすがに砲門を閉じるが、今にも二人を殺しかねない目で睨み続け、睨まれてる兄弟は自分が敵に回した相手の恐ろしさを今更になって実感し、謝罪の言葉も言えずにただその場で震えあがっている。

もう情けなさで泣きたくなってきた。しかしここで「そいつらが全部勝手にやった事」と言って二人を切り捨てて見捨てるのは簡単だが、それこそタンクトップの名折れだ。

舎弟にタンクトップの似合う存在になれと教え、筋トレを重ねてきたが、心根までタンクトップが似合うように教育していなかった俺が、その責任から逃げるわけにはいかない。

「すまない、ジェノス。それと……エヒメさん。こいつらのしたことは、ヒーロー以前に人としても最悪だ。

こいつらの所業は、協会に俺から報告しておく。確実に資格剥奪になるだろうから、それで手打ちにしてくれないか」

「いやです」  
俺が謝罪と殺す以外の方法としてとりあえず上げた、こいつらの償いとしての「ヒーローの資格剥奪」を、彼女は即答で断った。

その答えというか即答っぷりに俺や舎弟たちはもちろん、ジェノスさえも目を見開いて、庇うように自分の後ろにやっていた少女を見ていた。

俺たちの視線を、彼女は真っ向から見据えて、言う。

「この人たちが資格を失うことが、どうして私やお兄ちゃんに対する謝罪や償いになりえるんですか？」

……それを問われると、こちら辛い。

彼女の兄に対してしたことは時間が経ちすぎているのとJ市の件で、今更こちらからあの時の悪評はブラックホールのデマだったことを公表し、その責任を負って辞めても、名誉回復どころか下手したらさらに大きな悪評が尾びれとして付く可能性の方がはるかに高い。

彼女と初めて会った日、アマイマスクに対して彼女が言っていた言葉が蘇る。

被害者は一生被害者で、加害者も一生加害者。

犯した罪に対して償いなどできない。

そういうたぐいの事を、この少女は言っていた。

「……俺が言うのもなんだがな、君の考えはアマイマスクとはまた違う方向で頑なだ。

許すことを強要するつもりはない。が、償いも許されないのなら、……『間違える』こと、『失敗する』ことも許されないのなら、人はどうやって生きてらいいんだ？」

俺はあの時、この子の言葉を知って思ったことを問うた。

舎弟が俺の教育不足で許されないことをしたこの場で言うことじゃないのはわかっていたが、それでも、この子には言っておかなければならない。

あの時、まずはアマイマスクから守ることを優先して言えなかったことを。

アマイマスクも間違いだが、君も間違えているという事を。

「君の言葉は正しかった。けど、同じようにアマイマスクの考えだって正しい。

この世には話を聞く時間を与えてはいけない、今すぐに排除しなければならぬ悪もいる。あの時はそうじゃなかったから、アマイマスクが劣勢だったただけだ。

君は信念を持って、本気であの考えを、生き方を実行していることに疑いはないし、それは素直に尊いと思う。

けれど、それでも君の考えは、正しくても大きく間違っている」「ジェノスが金の瞳を俺に向ける。どうやら俺も、敵認定されたようだ。」

だが、どんなに憎まれても言わせてもらう。

傷しかつかないという道に突き進む子に、注意もしないで見えぬフリをするために俺は、タンクトップを着こなしているんじゃない。そんなバカなことから、体を張って止めて守るために着こなしているんだ。

「こいつらの事が許せないのはいい。それだけのことをしたのだからな。

でも、償いを『無意味』と断じるのはやめろ。それは、君自身の首を絞める言葉だ。

……君はまだ若い。だから、必ずどこかで間違え、失敗する。

それは当たり前前で、許されていいことなんだ。償いさえすれば、許されるべきことなんだ」

俺の言葉を、彼女は黙って聞いていた。途中で割り込んで、自分の主義主張を訴えることをせず、ただまっすぐに俺を見据えて最後まで聞き、そして……

「タンクトップマスターさんは、とても立派な『ヒーロー』ですね」  
穏やかに、嬉しそうに笑って言った。

自分の生き方を否定されても、「間違えている」と言われても、彼女は怒りも悲しみもせず、自分より俺の言葉で殺気立っていたジェノスをポカンと拍子抜けさせた。

「そうですね。私も、自分でも頑なというよりバカな考えだなーって思います。そもそも、別に私だっていちいち自分がされた嫌なことを全部覚えてるわけでもなければ、してしまった悪いことを許してほしいと思って、償いを求めますよ。

……でも、そうやって『許されるから失敗をしていいんだ』と思っ

てしまったら、その考えに甘えちゃいそうじゃないですか？

だから、自分を律するために言い聞かせるんです。

被害者は一生被害者で、加害者だって一生加害者だって」

思ったより、彼女は自分の頑なさや歪みを自覚していた。  
が、この自覚は別に良い意味はない。むしろ、俺の言葉が無意味だったと思い知らされた。

……この子は、俺の言葉なんて、俺の考えなんてとつくの昔に自分で辿りついて、自問自答した結果、それでもあの道を選んだのか。はつきり言つて、俺から見たらこの子の考えや生きると決めた道は無意味だ。真面目に貫こうとすればするほど、他人はもちろん、自身醜さや弱さを思い知つて、傷ついて、いつか必ず破滅する。そんな結末しか、想像できない。けれど、それもわかつたうえで貫くのならば、……たまに口出しする程度にとどめておこう。

無意味だと誰かに言われても、それを無価値にしたくないこだわりや気持ちはわかつてるつもりだ。

だから、せめてたまに口出そう。

この子がいつか、自分の選んだ道を諦めたくなった時、引き返したくなつた時、その諦めが罪悪感にならないように。

ここまで強固に意思を固めているのなら、俺の否定的な口出しくらいでは今更迷わないし、傷つかない。

……俺の口出しで迷つて傷つくようになったのなら、俺の言葉を言いつて、盾にでもして戻つて来たらいい。

それくらいは、してやるさ。ヒーローだから。

そんなことを勝手に考えて決意していたら、エヒメという弱いのに強情でどこか歪んでいるくせに真っ直ぐに突き進む少女は、少しだけ申し訳なきような苦笑をして、俺に言う。

「ごめんなさい、マスターさん。なんか、誤解される言い方しちゃつて。」

私が言いたかつたのは、この二人の償いに意味はないとかじゃなくて、ヒーロー資格剥奪はそのまんま、償いにならないっていう意味です。

だつて正直言つてこの人たち、マスターさんの部下と思えないくらい、ヒーローじゃなくなった方が何しでかすかわからないくらい性質が悪いじゃないですか」

言われて、また頭痛がぶり返した。

俺の事を評価してくれたのは嬉しいが、もう完全にこいつらは犯罪

者予備軍じゃなくて犯罪者扱いされてるのか。いや、実際にそうだからもう何ともいえん。

が、この子が何を言いたかったのか、何を望んでいるのかは、今の言葉でよくわかった。

「……ああ。本当にすまない。返す言葉もない。先ほどの提案は撤回しよう。」

そして、約束しよう。

こいつらは絶対に、ヒーローをやめさせない。身も心も鍛え直して締め上げて、どこに出しても恥ずかしくない、超一流のヒーローに、そしてタンクトップパーに教育し直すことを、約束する」

俺の新たな償いの提示に、タイガーとブラックホールはこれからどんなしごきをされるかがわかっていないのか、命の危機も資格剥奪の危機からも脱出したと思いい、感涙する。

その様子をジェノスが不愉快そうに睨み付けているが、不穏な音が聞こえない所からして提示した償いの内容に不満はないらしい。

そして肝心の本人は、満足そうに微笑んで答える。

「ありがとうございます。タンクトップが似合うかどうかは、正直どうでもいいですけど」

……本当に正直な意見だな。



九人目、「隣がもはや当たり前」

エヒメさんが一着の服を手にして、俺に笑顔で話しかける。

「ジェノスさん、これはどうですか？」

「エヒメさんが選んでくれたものなら、俺は何でもいいですよ」

これは正直な俺の気持ちそのままだったが、エヒメさんには選ぶ気がないと思われたのか、少しだけ不満げな顔をされた。

「そんなことを言わず、もつときちんと見て選んでくださいよ。せつかくジェノスさんはカッコいいんですから、似合うものを着て欲しいんです」

……ヤバい。俺の服を選んでくれるだけでも嬉しすぎるのに、このセリフはヤバい。

俺は今日一日、この人と一緒にいてコアが暴走せずに済むのかどうかさがさつそく不安になった。

きっかけは他愛のない話。

俺はサイボーグの特性上、服をよく破損する。怪我の心配が薄いので、あまり攻撃を避けないからだ。

そして肩のパーツの構造と、掌だけではなく腕全体に焼却砲の砲門があるため、袖のある服は着ることが出来ない。

なので、服の消耗が激しいわりに着れる服が少なくて少し困るという事を雑談で交わした時、エヒメさんは当たり前のように提案してくれた。

「私が直しましょうか？ ジェノスさんが着れるように」

初めはもちろん遠慮した。が、彼女は本当に物を作ったり何かを手直ししてアレンジしたりすることが好きらしく、俺が断ったらかなり本気で残念がられた。

俺としてはして欲しくないのではなく、ただエヒメさんの手を煩わせるのが申し訳なかったのであって、むしろその申し入れはこの上なく嬉しかった。

だからそのことを伝えて、本当に迷惑でなければ頼みたいと言えば、この上なく嬉しそうに笑ってもらえたのは俺も嬉しかった。……

嬉しかったが、正直に言うところ「エヒメさんの申し入れがこの上なく嬉しかった」という部分を、もつと気にして欲しかった。

贅沢は言うまい。今が十分、俺の身に余るほど幸福な時間だろうと自分に言い聞かせる。

そう。エヒメさんと二人つきりで買い物というこの状況は、……世間一般から見たら「デート」と言えるような今の幸せをただ噛みしめる。

定期メンテで博士のラボから直接エヒメさんと待ち合わせたせいで、先生が酷い汚名を被った元凶である二人と出会ったことは災難だったが、それも結果として良い方向に転んだのだからさっさと忘れて、俺はエヒメさんに任せるだけではなく自分でも服を選ぶ。

「ジェノスさんはハイネックの服が似合うと思うですけど、大丈夫ですか？」

「はい、腕が動かしやすく、戦闘に支障が出なければ基本的にこだわりはありません」

そんな会話を交わし、サイボーグなってから考えたこともなかった、故郷や家族と同時に失ったはずの穏やかな幸せを噛みしめていた。

……噛みしめようとしていた。

が、先ほどから俺たちに向けられる気配が、俺の穏やかな幸せも日常も許さず、苛立たせる。

殺気などといった、明らかに危険な気配ではないのがまた厄介だ。

殺気というほど積極的でも覚悟を決めている訳でもない、粘着質でありながら言い訳がましい、ドロドロとした臆病で卑屈な怒気が一番、表現として正しいだろう。

初めの方は、俺が偶然ではなく完全に意図して俺たちをつけていることを把握していなければ、気のせいかと思う程度だった。だからエヒメさんを不安がらせるのも悪いので、警戒は緩めないまま放置していたんだが……。

さすがにそろそろ、俺の我慢が限界だ。

危害こそはまだ加えそうにはないが、エヒメさんも先ほどから後ろ

を振り返ることが多くなってきた。勘が良ければ、違和感を覚える程度にまで相手は醜い感情を膨れ上がらせていた。

「……エヒメさん、少しだけここで待っていてくれませんか？」  
「え？」

俺の言葉に、エヒメさんは不安げに顔を歪ませた。

自分ではなく俺の身を案じて泣きそうな顔をする人に、訳はあとで必ず話す、怪人などではないから心配はしないで欲しいと言いつつ聞かせ、俺は店の外に出る。

そして、先ほどからずっと俺たちをつけ回していた、ろくに隠れもごまかしも出来ていなかった素人の前に俺は立ちはだかった。

「先ほどから何の用だ？」

バレバレの尾行をしていたのは、女子高生二人。……今日は平日なのだが、制服のまま真つ昼間から何をしてるんだこいつらは？

学生が学校をさぼっているのを補導するのはヒーローの仕事の一部なのか、それはさすがに警察に任せるべきなのかを若干迷っていたら、その女子高生達は状況をわかっていないのか、眼を輝かせてた甲高い声を上げる。

「やだー！ 話しかけてもらえちゃったー！」

「超ラッキーじゃん！ あの、すみません！ S級16位のジエノスさんですよね！」

……予想はしていたが、どうも二人とも俺のファンらしい。

正直言つて、俺は自分のファンの存在をありがたいとか嬉しいなどと思つたことがほとんどない。

ファンレターも、子供が拙くとも精一杯頑張つて「カッコいいです」などと書いてくれたのを読むのは、コアの奥底、心が温まるが、文章どころか字そのものが崩壊して、「超」や「ヤバイ」以外の言葉を知らないのか？ と思わせるような手紙は、読むのがただただ苦痛なだけ。

こういうミーハーに騒ぎ立てて、俺が何をしたかではなく俺の顔だけを見て好かれても、何も嬉しくはない。

「だったらどうした？ 今はプライベートだ。俺たちに干渉する暇が

あるのなら、学校に行け。時期的に、まだテスト期間などで早く帰れるという訳でもないだろう」

だから俺は愛想など見せずに、さっさと話を切り上げてここから立ち去るように促すと、女子高生たちはあきらかに不満そうな顔をする。

……唇を尖らせて俺を見上げるその様は先ほどのエヒメさんと同じ仕草なのに、どうしてこちらはこんなにも醜悪なんだ？

それはただの俺の惚れた欲目というものか、それとも本人の心根が現れ出ているのか。

その答えは、簡単に出た。

「えー、そんなかったいこと言わないでくださいよー」

「プライベートなら、私たちとあそびましようよー。息抜きもマジ大事ですよー」

……俺には連れがいることを先ほどからつけまわして知っているくせに、その存在を無視して俺を誘う凶々しさと身勝手さに反吐が出る。

俺の腕に絡めようとした腕を、手加減は十分したが拒絶を露わに振り払って、最後の忠告を口にする。

「早く学校に行け。俺の忍耐が残っているうちにな」

俺が振り払ったことか、俺の言葉か、それとも両方か。とにかく俺の反応がよほど気に食わなかったのか、二人は顔を歪めて俺を睨みつける。

自分の心の醜さをそのまま顔に表して、二人は叫ぶ。

「はあ？ 真っ昼間から女といちゃついているヒーロー失格にいわれたくないんですけどー？」

「つーか、ヒーローが彼女とか作っていんですかあー？」

……お前らにとつて、ヒーローとは何なんだ？ アイドルか何かと勘違いしてないか？ イケメン仮面の所為か？

言ってやりたいことは山ほどあったが、どうしてこういう時、女の口はこちらが挟む隙間もなく絶え間なく聞くに堪えない言葉を吐き出せるんだ？

声もやけに甲高くて、頭が痛くなる。

いい加減、本気で焼却砲で消し去ってしまいたくなってきたが、それはもちろん、このまま無視してエヒメさんの元に戻るのも愚策の上ない。

こいつらは嫉妬の対象である本人を前にしたら、特に強く罵られたらパニックを起こして怯えて何も言えなくなるエヒメさん相手なら、喜々として甚振る人種だ。

だからここで、俺を好きだけ罵って満足して帰って欲しかった。

……なのに、この人はやっぱり大人しく待っていてくれなかった。

「ちよつと顔が良いからってチョーシ乗りすぎなんじゃ……」

「も、もう、なにやってんの!？」

俺を一方的に攻め立てるバカの言葉を、ぎこちなく遮ってエヒメさんはいきなり俺の腕に抱き着いた。

……情けないことに、俺はエヒメさんのいきなりかつ予想外すぎるその行動に完全にフリーズしてしまった。

……誰か当たるところか挟まったあの感触に、神経の代わりに全感知能力を総動員させてしまったこの時の俺を殺してくれ。

フリーズしてる俺と、いきなり割って入られてさすがに呆気を取られてる女子高生をしり目に、エヒメさんはやはり少しぎこちないまま、俺に対して使っていた敬語をなくして話しかける。

「何、私を置いてナンパなんかしてるの!？」 信じられない! もう、早くいくよ!」

そう言つて、エヒメさんが俺の腕を引いてその場から去ろうとしてようやく、彼女は演技でこの二人から穏便に、俺を引き離そうとしていることに気付いた。

気付いたが、元々アドリブに弱い性分とまだ腕を挟む実に魅力的な感触が思考をかき乱して、俺は何も言えなかった。

……これが意外なことに、実はよかった。俺とエヒメさんとの間には大きな認識の差異があった事を、この時は気付いてなかったからだ。

「! ちよつ! 待ちなさいよ!」

女子高生が俺とエヒメさんを引き留めるが、エヒメさんはそれを掻き消すように怒ったふりをして俺に言った。

「お昼飯はお兄ちゃんの奢りだからね！」

「……………はい？」

まさかの、恋人ではなく兄妹設定だった。

\*\*\*

エヒメさんのセリフで、先ほど以上に意表を突かれた女子高生を無視して人波にまぎれて、完全に引き離れたところで通行の邪魔にならない端によつてから、エヒメさんが俺に頭を下げる。

「ごめんなさい、ジエノスさん！ 何かいきなりアドリブで割り込んじゃって!!」

「……………いえ、いいんです。むしろ助かりました」

エヒメさんの謝罪に、俺が返せた言葉はそれだけだった。

いえ、貴女の気遣いは本心から嬉しいですし、間違いではないです。むしろ正しいです。

貴女を「恋人」とあの二人は誤解してましたから、テレポートで逃げて、俺や貴女がネットやツイッターなどで情報が拡散されて攻撃される可能性が高かった。

だから兄妹で買い物ということにしたのは、わかっていますよ。

どう見ても兄妹に見える容姿じゃないですけど、俺がサイボーグなので顔が似てない言い訳なんて何とでも出来ますし、プロフィールの類も公開してませんから、違うという証拠も見つけられません。

ええ、良い考えです。いい考えでしたけど……………

どうせ家族や身内なら、嫁になってください。

……………そんな俺の本音を言えるわけもなく、馴れ馴れしく話したことや約束をまた守れなかったことを悔やんで謝るエヒメさんに、俺は気にしてない、むしろ上手くあしらえなくて心配をかけたことを謝ったら、謝罪合戦になっていることに気付いてエヒメさんは笑ってくれた。

……………ああ、もうこの笑顔で全部吹っ飛んだ。

俺たちは互いに謝るのをやめにして、丁度いいから昼食にしよう

話をまとめる。

俺は先ほどのトラブルの詫びと二人から引き離してくれた礼に、本当に昼食をご馳走させていただきいと伝えればエヒメさんが遠慮するといった他愛ない会話をしながら歩き始めた時、ゾクリともうないはずの神経に悪寒が走った。

センサーではなく唯一の生体部品である脳が、危険を告げる。

完全な勘でしかなかったそれは、予言のように正確だったが遅すぎた。

「きゃあっ！」

「！ エヒメさん!？」

彼女の短い悲鳴と、カシヤリというシャッター音がほぼ同時に響き、俺はとつさに彼女の肩を掴んで抱き寄せる。

「いたっ！」

その反射的な悲鳴は、手首か肩かはわからない。

けど、俺はその言葉にとつさに手を離れたのに、向こうは離さなかった。

年は20代半ばだろうが妙に不健康そうな男がニヤニヤと、粘着質で汚らしい笑みを浮かべながらエヒメさんの手首を掴み続けて、ケータイのカメラを彼女に向けたまま語りだした。

「……やっぱり、彼氏なんかじゃないんだ。そうだよな。君には俺がいるもんな。俺を助けてくれたのに連絡もしてくれないで、今日やつと会えたと思ったらこんなことして……俺に嫉妬させたかったの？

あはは、本当に可愛いな」

「はっっ！」

エヒメさんも見覚えのない奴に手首を掴まれていることに怯えつつ、その言葉に困惑の声を上げる。

どう考えてもこいつは、おそらく深海王の件か何かでエヒメさんに助けられ、勝手に妄想を膨らませて、一方的に自分の恋人扱いをしている。

俺が初めから感じていた、あのドロドロとして醜く、そして積極的に危害を加える勇気もない臆病卑屈な気配はあの女子高生だけでは

なく、こいつからのもあつたのだろう。厄介なことにこいつは、あの女子高生達よりはるかに身を隠すのが上手く、バレバレなのが二人もいたせいで俺はこいつの存在に気付かなかつたことが、口惜しくて仕方ない。

「何の話だ？ さっさとその薄汚い手を離せ!!」

俺は奴の言葉に膨れ上がる怒りと殺意を押さえつけ、声を上げた。

本当はその手を今すぐにもぎ取ってやりたかったが、相手は怪人でも俺のようなサイボーグでもなければ、痴漢被害というにもまだ微妙なことしかしていない。

ありえないだろうが人違いか何かで悪気がなかったのなら俺の暴力行為は洒落にならず、エヒメさんに更なる迷惑をかけるだけなので、俺は今すぐに殴り掛かりたい衝動を抑えて叫んだ警告に男は最初の一瞬は怯えたが、卑屈そうな笑みを張り付けて言い返す。

「な、何だよ!? ヒーローが善良な一般市民を脅すのか!? 妹が可愛いからって、妹の交友関係や恋愛にまで口出すんじゃないよー!」

「恋愛」の言葉で、ブチつと頭の中で何か切れた音を確かに聞いた。ステインガーやイナズマックス、金属バット相手に俺は幼稚で醜い嫉妬をしてきたが、この感情と比べたらそれらはずいぶん可愛らしいものだ。

奴らのように、馴れ馴れしくも自分たちなりに彼女を尊重して慈しんでいたのとは全く違う視線。じろじろとエヒメさんの顔と胸を交互に見てニヤニヤ笑うこいつは、彼女を「人」として見ていないし、扱っていない。

性欲の対象でしかない、汚らしい欲望のはけ口としか思っていない分際で、その自分の感情を「恋愛」と言い表したことに、憤怒と憎悪が焰のように燃え上がる。

が、幸いなことにその感情は爆発して、人間相手に焼却砲フルパワーを撃ち出す悲劇は起こらなかった。

「いえ、そもそもあなた誰ですか!？」

エヒメさんが至極当然だが今更なことを、困惑しながら叫んだことで少し氣勢がそがれたからだ。



向こうも言われて当たり前なのにどんな妄想が展開されていたのか、信じられないと言わんばかりの顔になって、叫び返した。

「そんな！ 俺の事を忘れたのか!？」

「忘れる以前に、会ったことがありません!!」

まさかの断言に、俺もストーカーも一瞬言葉を失った。

いや、こんな奴をフォロワーする気はありませんが、たぶん深海王の件で貴女が助けた一般市民だと思えますよ、エヒメさん。もしかしてそのことすら忘れてませんか？

エヒメさんの天然が炸裂したことで俺の怒りや憎悪の大部分が吹き飛んだが、相手はむしろ屈辱だったのか、顔を歪めて真っ赤に変色させ、そしてエヒメさんの手首を掴んだままもう片方の手を振り上げた。

\* \* \*

「……………何のつもりだ?」

怒りのリミッターが振りきれると、逆に冷静になるとは聞いていたが、今日初めて、それを実感した。

エヒメさんを気遣って引き離れた為、幸いにも奴の腕がもげることはなかったが、それでも奴にとっては相当な痛みだったらしく、左手を抑えて地べたでひいひいと豚のような悲鳴を上げている。

そんな悲鳴を無視して、俺は握りつぶしたケータイをパラパラと落として、再び問う。

「貴様、自分が何をしようとしたかを理解しているのか?」

……………こいつは、エヒメさんから「会った事もない」と言われ、その言葉を理解した瞬間、エヒメさんの顔をめがけて、持っていたケータイを投げつけた。

とっさにそれを受け止めて、エヒメさんから奴の手を引きはがして彼女を自分の背後にやったが、一度霧散したはずの憤怒と憎悪が、先ほど以上の業火となって俺の胸の内を焼き尽くす。

俺が受け止めなければ、あのケータイは彼女の目に当たっていた。目はさすがに偶然だろうが、顔は完全に意図的に狙って投げつけていた。

「……貴様は、自分を助けたくれた人に恩義を感じるどころか、欲望のはけ口として身勝手に認定したあげく、自分の事を覚えていなければ八つ当たりで危害を加えることを、『恋愛』というのか？」

答えなんか期待していない問いを口にしながら、俺は奴の頭を掴み上げ、そのまま持ち上げた。

周囲が騒然とするが、そんなのはもはやどうでもいい。傍から見たらヒーローが一般市民を暴行しているように見えるだろうが、こいつを「善良な一般市民」として扱わなければならないのなら、こいつに制裁を与えることが出来ないのなら、ヒーローの資格なんていらない。

「助けてくれたこと、守られたことに対して好意を持つのは良い。だが、それだけに甘えてどうして彼女を助けよう、守ろうとは思わない？」

ただ助けられたこと、守られた自分を情けないと思わないんだ？

……貴様が愛しているのは自分自身だけだ。他人を、この人を自分の都合のいいように扱いたいだけの、汚らしい欲望を聞こえの良い言葉で飾り立てるな」

そのまま、俺は掌の砲門に熱を集める。

このままこの汚物を焼き払ってしまいたかった。その後の事なんて何も考えていなかった。

「ジェノスさん、ダメですよ」

そんな俺の愚行を止めたのは、想像の中とはいえ女性として一番屈辱的で絶望的に汚された彼女本人だった。

俺がストーカーを掴みあげる手は逆の手に触れ、握り、彼女は真つすぐに俺を見て静かに告げる。

「私としては、その人を焼き払ってもジェノスさんに感謝するか、手を煩わせたことを申し訳なく思うだけで、その人に対して思うことは何もありません。

でも、それでも相手の言い分を何も聞かず、こちらの感情のみで制裁を下すことは決して褒められたことじゃない。きつと、ジェノスさんが酷く非難されてしまう。

……私はそれが、この人が生きていることよりもずっと嫌です。  
だから、やめてください」

性善説を信じて綺麗事で相手を庇うでもなく、彼女は相手の為ではなく、俺の未来を案じて止めた。

俺のしようとしたこと、正義ともヒーローともほど遠い、八つ当たりが一番近い行為を肯定した上で、俺のしようとしたことの価値を認めた上での制止の言葉は、憤怒と憎悪に滾った俺を緩やかに、優しく熱を冷ましていった。

「……大丈夫です。心配をおかけして、すみません」

「おい、そこで何をして……ジエノス？」

俺がエヒメさんに謝ったと同時に、周囲の人間が呼んだのか、まだこのあたりを見回っていたらしいタンクトップマスターとその舎弟たちがやって来て、トラブルを起こしていたと認識されていた俺らを見て、一瞬呆ける。

俺は、未だ悪あがきでジタバタと暴れるストーカーをそのままタンクトップマスターに渡す。

「傷害の現行犯だ。ついでにストーカーでも訴えたい。とりあえず、身柄を拘束してくれ」

説明とは言えない簡潔すぎる俺の言葉だったが、タンクトップマスターはそれだけで事情をほぼ察したのか、そのストーカーを俺から受け取って警察や協会に連絡をする。

後の面倒事は任せろと奴が言い、タンクトップタイガーとブラックホールの兄弟も汚名返上の為か、それともただ弱い人間に強く出る性分なだけかストーカーをしっかりと捕まえているので、俺とエヒメさんはその好意に甘えてその場から離れた。

エヒメさんは当事者がさっさと離れてしまうことに申し訳なく思ったようだったが、タンクトップマスターやその舎弟たちも彼女の様子に気付いていたからか、むしろ早く離れるようにと言い、俺はエヒメさんをほとんど無理やり連れだした。

顔色を真っ白にさせて、俺を止めるために握った手はずっと震え続けていた人を、これ以上あの汚物と関わらせるわけにはいかなかった

た。

\* \* \*

「……ごめんなさい、ジエノスさん。迷惑をかけて」

「エヒメさんの所為じゃありません！ あれは向こうが勝手に妄想を広げて、それをこちらに押し付けただけです！ あなたは完全に被害者です!!」

少し歩いたところでベンチを見つけ、そこにエヒメさんを座らせると彼女はまず初めに謝り、俺はその言葉を必死になって否定した。

迷惑なわけがない。彼女は何も悪くない。どうして、人を助けたことで彼女が罪悪感を持たなければならぬ？

俺の説得が効いたというより、俺があまりにも情けない継るように彼女に「貴女は悪くない」と訴えていたことが、彼女に心配をかけてしまいしまい、エヒメさんは困ったように微笑みながら、「もう、大丈夫ですよ」と伝えて、手袋に覆われた手が俺の頬を撫でた。

慰めるつもりが、慰められる。俺は実に情けない。

もう何度目かもわからない自分の無力さを嘆きながら、それでも手の震えが治まっていたことに安堵して、そのまま俺も隣に座る。

少しだけ休みたいという彼女の要望に応え、ただ無言でそのまましばし座っていたら、エヒメさんがうつむいたまま、呟いた。

「……愛は『与える心』。恋は『求める心』」  
「え？」

唐突な言葉に意表を突かれていたら、彼女は曖昧に、困ったように笑いながら言った。

「プリズナーさんが教えてくれた、恋と愛の違いだそうです。……私、恋愛ってものが全然わからなくて、そんな私でもわかるようにプリズナーさんは丁寧に教えてくれて……、私は『愛』を知ってるから、『恋』もしてみろって言うてくれたんです。

女の子は恋をしている時が一番きれいだからって、言うてくれたんです」

正直、プリズナーがそんなまともなことを言ったということに衝撃を受けて、エヒメさんが語る内容が頭にちゃんと入ってこなかった

が、一瞬の間を置いて続けられた言葉が、鮮明に俺の脳に届いた。

「……でも、今日、やっぱり怖いなって思ってしまったんです。プリズナーさんはそんなつもりで言ったんじゃないってわかっていますけど、……あの人の行いも一種の『求める心』、……『恋』だというのなら……私にはあんな、誰もを傷つける感情を持ちたくない」

「あれは、『恋』なんかではありません」

完全に反射で、言葉が出た。

「あれはただの『劣情』です。汚らしい欲望を奴が勝手に、聞こえのいい言葉で言い繕っただけに過ぎない。おそらく自分でも本当は自覚してるでしょう。」

「……あんなもの……『恋』ではありません」

他の誰かを愛して、恋するくらいならずっとこのまま、この人が「恋」など知らないまま置いてほしいという気持ちは、正直ある。

俺だって実際は、あの男と大して変わらない。彼女に対して、自分で自分を殺したいと思えるほど、汚い欲望を抱いている。

でも、……それでも、この想いは、この願いだって本当だ。

諦めて欲しくない、怖がってほしくないと願うのは、確かだ。

確かに恋は、物語のように美しいだけじゃない。汚らしくて醜い自分を思い知り、自身が裂かれるよりも焼き尽くされる以上の痛みを何度だって味わう。

それでも……何気ない一瞬を、言葉を、この上ない永遠の幸福にしてくれるのは、……俺が4年前に失った幸せを再びこの手の中に取り戻せたのは、確かに「恋」だった。

だからどうか、俺じゃなくてもいいとは素直に言えないけれど、それでも、諦めて欲しくなかなかった。

「……エヒメさん。プリズナーの言葉が、貴女が『恋』を恐れる理由になるのなら……別の意味を知ってください」

「……別の、意味？」

愛と恋の違いなんて考えたことなどなかったが、今ならはつきりわかる。

プリズナーの言葉も、その違いと意味も正しいと思うが、俺にとつ

ては違う。

「ええ。……俺は、愛と恋の違いは、こう思っています」

あの男が、エヒメさんが痛がっても身勝手に離さなかった手首に触れて、そこに痛みや痕がないことを願いながら、……今日の出来事がこの人の「傷」にならぬことを祈って、口にする。

「愛は『命を懸けて守る』こと。」

そして恋は、……『命に代えても貫く』ことです」

貴女を愛しているから、貴女を悲しませても守りたい。そして、恋をしているから、貴女を悲しませないという誓いを貫きたい。

ただそれだけの、俺の願いを口にした。

エヒメさんは顔から申し訳なきも、怯えも、諦観も消して、きよとんとした顔でしばし俺と顔を見合わせてから、口元をおかしげに綻ばせた。

「……ジエノスさん、それはすっごくロマンチックな答えですね」

……自分でもロマンだのそういうものとは無縁だと思っただけで、改めてそう言われると一気に羞恥が沸き上がる。生身なら間違いなく、顔が茹蛸のような色になっていただろう。

「……でも、すごく素敵。プリズナーさんの答えも納得したし、好きですけど、ジエノスさんの答えの方が、私、好きです」

……今一瞬、嬉しさのあまりエネルギーコアの熱量が急上昇した。危うく、自爆するところだったのを何とか、「俺じゃなくて、俺の言った言葉が好きただけだ！」と自分に言い聞かせて落ち着かせる。

「……ジエノスさんに『恋』してもらえた人って、幸せでしょうね」

……じゃあ、貴女は幸せですか？ と訊き返す余裕など、俺にはなかった。

あつたとしても、そんな勇気はまだないから、同じことだがな。

\* \* \*

余談の後日談だが、この日の事を帰った後に心配をかけたくなかったが、あとになって他人から知られるよりは良いと思い、先生に報告した。

……先生は、ストーカーが逆上してエヒメさんにケータイを顔に向

かって投げつけたというくだりで一瞬だけだが、すさまじい殺気を放った。

その殺気は隕石の時や深海王の時より短く、一瞬で霧散したが……そのどちらよりもすさまじかったことで、うぬぼれるつもりはないが、俺は思う。

もしかしたら俺は、実は世界を救ったのかもしれない、と。

## S級改め、ただのファンクラブ

メールでS級の招集を通知された時は、ジエノスに行く気はなかった。

それは以前の隕石のような一刻を争うものではなく、「地球がヤバイ」という予言の対策会議の為だったから。

正直、ジエノスはメールを見た瞬間、協会にはバカしかいないと呆れたものだ。

前回の集会は、ある意味で幸運だった。

A市はS級がほぼ全員そろっている状態でも何もできないほどの一瞬で、完全崩壊してしまったのは確かだが、もしあの宇宙船が攻撃したのが他の都市なら、ヒーロー協会がA市ではなく他の都市だったなら、確実に被害は都市一つでは済まなかっただろう。

S級を一か所に集めるという事は、その都市以外を危険に晒すという事。

災害レベル「竜」が現れても、駆けつけられるS級がいないという最悪の事態に陥る可能性を全く考慮せず、予言の具体的な内容もいづごろ起こるかもわかっていないことについて対策会議など愚行以外の何物でもない。

だから当初は行くつもりなど全くなかったが、ふとジエノスは一人の人物と彼の言葉を思い出し、その言葉の意味を問い詰める為だけに今日、メタルナイトが造り上げ、要塞と化した協会本部に足を運んだ。

そして運よく、会議室へと続く廊下で目当ての人物を見つけ、声をかける。

「駆動騎士」

「！……ジエノス君か」

「メタルナイトはお前の敵だ」と自分に告げた、サイボーグかロボットなのかもよくわからないヒーローは、モノアイで一度ジエノスの姿を確かめてから、すぐにそらす。

その動きだけで、自分が話しかけてきた理由を察しつつ答える気はないこともジエノスは理解するが、それで引くくらいなら初めからこ



ここには来ない。

だから駆動騎士のモノアイの動きは無視して、彼は廊下でそのまま問い詰める。

「……あれはどういう意味だ？ 貴様は俺の何を知り、どういう意味で『敵』と言ったんだ？」

「……言っただろ？ そのうちわかると」

「そのうちとはいつの事だ？ 今は奴に近づくなとも言ったな？ なら訊くが、いつなら近づいてもいいんだ？」

貴様は、この要塞を見て何も思わないのか？ これほどの規模の建造物を七日で竣工する科学力を持つ奴に時間を与えるという事は、奴に更なる力を与えることと同義だろ？」

ジェノスの言葉に、駆動騎士は答えない。ジェノスと違って頭部は人の造形をほとんどしておらず仮面じみているので表情を読み取ることも出来ず、彼は話すべきかを悩んでいるのか話すつもりが毛頭ないのかすらわからない。

ただどちらにしても、ジェノス自身に引く気はない。

「奴が俺の敵かどうかはともかく、何かを企んでいるのなら早急に手を打つべきだろう。」

貴様はあのA市崩壊のように、またしても後手に回って多くの被害を出すつもりか？」

ジェノスの言葉に、駆動騎士がもう一度モノアイをジェノスに向ける。

何を言うつもりだったのかは、ジェノスにはわからない。

「ちよつとそのポンコツサイボーグ!!」

甲高い罵倒と本人が言葉通り飛んで来て、ジェノスと駆動騎士の間に割り込んできたからだ。

会話に物理的に割り込んできたタツマキに、思わずジェノスは顔を歪ませて睨み付けるが、彼が文句をつける前にタツマキのよく回る舌が、ジェノスに割り込む隙を与えずにマシンガントークを掃射し始めた。

「エヒメがあんたとデート中にストーカーに襲われかけたのは本

当なの!?

何やってんのよ役立たず！ ちゃんとそのストーカーはぶっ殺したんでしょうね!? 殺せなくても、もう二度とエヒメに近づけないように身も心も再起不能にしたんでしょうね!?

っていうか、私の許可も得ずに何エヒメとデートしてんのよこのむつつりサイボーグ！ エヒメに変なことしたらひねりつぶすわよ！」

「何故お前の許可が必要なんだ!？」

「ジェノス君、それは正論だけどツツコミどころとしては何か間違えている」

何とかジェノスが口を挟むが、いきなり怒涛の文句に混乱しているのか、割とどうでもいい部分に突っ込みを入れて、駆動騎士がやんわりとそのことを指摘する。

が、そんな突っ込みと指摘で二人が冷静さを取り戻すわけがなかった。

「必要に決まってんでしょ！ あの子、危機感つてもんが完璧にないでしょ！ 狼から子羊を守るのは、ヒーロー以前に人として当然よ！ 特にあんたにはセクハラの前科があるんだから、エヒメの半径30キロ以内に近づくんじゃないわよ!!」

「前半は概ね同意するが、後半は言いがかりだろうが!」

やはりジェノスのツツコミは、正論ではあるが何か間違えている。これはもう混乱ではなく、逆に真面目にタツマキの言葉を全部聞いたうえで抗議しているのだなど駆動騎士はいらんことに気付いて、ただ二人の子供のような舌戦を眺める。

止めようにも口を挟む余地がまったくなかったからだ。

このただでさえ收拾のつかない二人の言い争いが、さらなる混乱を招き寄せる。

「ジェノス君がエヒメ嬢とデートしたとは本当か!？」

「サイボーグさん、『付き合ってください』って言ったの!? デートは『どちらにですか?』ってボケられた結果!？」

「貴様らどこから湧いた!？」

まさかのS級最年長と最年少が、会議室からわざわざダッシュしてこちらにやって来て、ジェノスにエヒメとのデートについて問い詰めた。

そして問い詰められる本人はキレた。

信じられないことにこのジジガキコンビ、S級の中ではまとめ役で常識人ポジションだったりする。

そんな常識人が実に楽しそうにジェノスにエヒメとのデート、具体的にはどこまで関係が発展したのかを根掘り葉掘り質問攻めにし、さらにその二人の言葉に被せるようにタツマキが、「こんな融通効かないクソ生意気なポンコツは認めない!」と、お前はエヒメの姉どころか父親か? なことを言い出し、まさに廊下はカオスの有様。

ジェノスが、そろそろ焼却砲でこいつら一掃しようと思いついたタイピングで、彼の思い切りのよすぎる決断に気付いたのか、妙に硬い音が二回なった。

駆動騎士が両手を叩き、とりあえず全員の注目を自分に集めたところで、彼は穏やかに言う。

「はいはい。周りの迷惑だから、もうこれ以上騒ぐのはやめろ」

実にシンプルな諫めの言葉にバングと童帝は気まずげに笑い、タツマキもまだ不満そうだがさすがに黙った。

ジェノスもやや疲れた顔で「……ああ、そうだな」と同意した所で、駆動騎士は続けて言う。

「こういう話は立ち話じゃなくて、椅子に座って飲み物でも用意してじっくり聞くのが一番いいだろ? 会議の開始予定時間まであと30分もあることだしな」

「お前もか、駆動騎士!!」

まさかの事態に共和制ローマの独裁者のようなセリフを、思わずジェノスは叫んだ。

ジェノスの叫びは、駆動騎士の言葉で「味方を得たり!」とばかりに目を輝かせたバングと童帝に黙殺され、彼はバングと童帝のアームに連行され、そのまま会議室へ。

駆動騎士のこの場のノリは、ジェノスからの質問を誤魔化すため

だったのか、それとも本心だったのかは本人しか知りえない。

\* \* \*

会議室の席に着き、ジェノスは頭を抱えて思う。

「……どうしてこうなった？」と。

「……すまん。金属バットがまだ来ていなかったから、話しても別にトラブルにはならんと思ったのだが……タツマキがちよっと……」

「……もういい、タンクトップマスター。次からは気をつけろ」

項垂れるジェノスに現況の原因と言える、エヒメとのデートとそのトラブルに関わり、それを話してしまったタンクトップマスターの謝罪をいい加減に流す。

タンクトップマスターとぷりぷりプリズナーとゾンビマンの同情の目線も、やけに目を輝かせて自分とエヒメとのデートを聞きたがるバングと童帝も、二人ほどではないが面白がつてこちらを眺めているアトミック侍とクロビカリも、何を考えてるかわからない駆動騎士も、バカバカしいと言わんばかりに無視しているキングもキングで不快この上ないが、こいつよりはマシだと思いながら、ジェノスは頭を上げて睨み付ける。

ジェノスの視線をもものともせず、娘の結婚相手を見るような眼力で逆にタツマキは睨み返し、相変わらず甲高い声で吠える。

「あんたは何の為に全身機械にしてんのよ!? 変態にエヒメが触れられる前に排除出来ないんなら、センサーも武器も意味ないでしょ!」

あー、本当にポンコツね、ポンコツ! おもちやのロボットの方が可愛らしいだけあんたよりマシよ!!

つていうか、童帝! あんたも何とかしなさい!」

「え!? 僕!」

怒涛の勢いでジェノスを責めたてるタツマキに、ジェノスが反論、元凶のタンクトップマスターが責任を感じてフォローをしようとするが、彼女の口は高速で回り、そして矛先も急速に変化して誰もついて行けない。

いきなり話を振られた童帝が、食べていた飴を落としそうになりながらも尋ね返すと、タツマキは彼を指さして命令する。

「あんだ、あの警戒心のないバカの為に今すぐ防犯グッズ作りなさい！」

「具体的に言うとも自動的に相手を去勢するようなのを!!」

『気持ちにはわかるがそれは処刑具だ!!』

タツマキ以外の男勢、つまりはその場にいるS級ほぼ全ての、生身の奴らはもちろんどう見ても生身じゃないジェノスと駆動騎士まで一瞬内股になって叫んだ。

おそらくこの場にはいない者もいたら、同じ反応をして同じことを叫んでいただろう。それは普段はまとまりがまったくない、個性爆発、単独主義の集まりであるS級が男だけとはいえ心が一つになった実にいらぬ奇跡の瞬間だった。

「……さすがにその防犯グッズの域を超えた処刑具はどうかと思うが、タツマキちゃんの心配もわかるな。」

あの子はどうも、警戒心がないというより自分に向けられる好意に鈍い。その好意が良識を持った善良なものなら……相手がご愁傷さまですむが、今回のような劣情が元のものすら気付かない可能性が高いからな。

ジェノスちゃん、これからも気を付けてやってくれ」

「……言われるまでもない」

プリズナーの言葉に若干「お前が言うな」と思いつつ、ジェノスは心に決めていた誓いを口にする。ちなみにジェノスは「ご愁傷さま」のあたりで、プリズナーにやたらと同情の視線を向けられていたことに気付いていない。

「何が『言われるまでもない』よ。実際はのうのと近づかせちゃったくせに。あー、これだから無能は嫌ね。私だったら、エヒメの周囲1キロ以内に絶対に近づけないで、ミンチにしてやれるのに」

「黙れ。手加減を知らないクソガキが。あの人はあんな汚物の方が再利用できてマシな存在すら、俺が非難されるのを嫌がって排除を止めた人だ。そんな彼女に罪悪感を無駄に背負わせる気か?」

タツマキの嫌味をご丁寧に応答して反論するジェノス。そしてそれをこちららもご丁寧に反応して憤慨するタツマキにバンクは苦笑し

て、軽口を叩く。

「もういつそ、エヒメ嬢を交代制で守ってやった方が良さそうじゃな」  
「バングとしては軽い冗句のつもりだったが、タツマキと童帝が、「その手があつたか！」と言わんばかりの顔をして、バングは自分の失言に気が付いた。」

この二人、本気である。

「そっか、おねえさんを守るのはサイボーグさんの専売特許じゃないですもんね！ 僕、火・水・金は塾があるからそれ以外担当で！」

「……いつ出勤要請が来るかわかんないけど、放っておくより手元に置いて連れまわした方が安心よね」

「貴様ら勝手に決めるな！ バングも余計なことを言うな!!」

本気で当番制を検討し始めた二人にジェノスはツツコミ、バングにもキレル。

「すまん、本気にするとは思わなんだ」

割と本気でバングは謝ったが、その謝罪で許せるほどジェノスの怒りは小さくなく、ついでに二人はガチで本気だった。

「いいじゃないですかー！ 恋人ポジションはサイボーグさんか金属バットさんに譲りますから、僕はおねえさんの弟ポジションにつきたいんですよ！」

「わ、私はどうしてもというんなら、姉代わりになってあげてもいいだけなんだからね！」

「金属バットには譲るな！ あとタツマキ、頼んでないから帰れ!!」

もはやツツコミではなく私的な要求を叫びつつ、ツンデレというのが理解できていないジェノスはタツマキのセリフをそのまま受け取り、辛辣に言い捨てる。

意外に「頼んでないから帰れ」という言葉にショックを受けて、タツマキが言い返さなかったが、この隙と言わんばかりに他の者が悪ノリを口にしないで、カオスは続行。

「ははっ！ 童帝が弟で、タツマキが嬢ちゃんの姉なら、俺は兄貴にでも立候補しようかね」

先ほどからクロビカリに「若えつてのはいいもんだ」と言いながら、

このカオスなやり取りを眺めていただけのアトミック侍がそんな軽口を叩いたが、くそ真面目なジェノスが淡々と言い返した。

「既に素晴らしい実兄がいる。そして、貴様なら父親が妥当だろうが」  
「俺はまだ37だっつーの！俺の娘なら10代の時の子になるじゃねーか！」

アトミック侍がジェノスの言葉にキレて反論するが、返されたのは他のS級から、「お前老けてるから問題ねえよ」だの「凶々しいわ」だの至極当然だが本人的には予想外だったらしく、本気で凹みだした。その凹みを励ます者はクロビカリくらいしかおらず、他の者はまだ悪ノリを続け、ジェノスのツッコミが終わらない。

「そうか、実兄がいるのならやはり俺が狙うのは姉ポジションか。タツマキちゃんがライバルなんて、恐ろしいが少し楽しみ気もするな」  
「どちらのポジションもあり得ないから、諦めろ！」

「……別に兄が一人じゃなきやダメなわけでもないだろう」  
「キング、お前も参戦するな！」

「……困ったのう。こんなに孫はわしもいらんのじゃけど」  
「何を自然にエヒメさんを孫認定してるんだクソジジイ!!」

怒涛の突っ込みをよそに、ボケまくるS級達。もはや本気なのか、ジェノスをからかっているだけなのかは、おそらく本人たちもよくわかっていない。

「あー良かった。年下は僕だけだから、弟ポジションのライバルはいないや」

「……金属バットは17だぞ？ 彼女はジェノスと同年らしいが？」

童帝の眩きに、もはや收拾がつかない事態に頭を悩ませてたタンクトップマスターが何気なく口出すと、童帝は本気でシヨックを受けた。

「え!! 金属バットさん、ガチで高校生だったの!？」

「お前はあの学ランをなんだと思ってた？」

「キャラ付け」

身も蓋もないことを言い出し、天才少年は金属バットがジェノスに

恋人ポジションを譲って、弟ポジションを狙ってきた場合の勝率を計算しだしたタイミングで、その本人が会議室に現れた。

「おう、結構集まってんな」

「金属バットさん、僕が弟ポジションを確立するまで無駄だと思うけどサイボーグさんと恋人ポジション争い頑張つて!!」

「いきなりなんだクソガキ!! 無駄とはなんだ無駄とは!!」

部屋に入ってきた瞬間、出会い頭に喧嘩を売られてもちろん金属バットはキレて、そのまま流れてカオスは続く。

同時にやって来た閃光のフラッシュのみがそのカオスに対応できず、困惑したまま同じくカオスに対応できず項垂れていたゾンビマンにどういふ状況なのかを尋ねた。

死ねない男ゾンビマンは、死んだ目で答えた。

「……協調性がない奴らに協調できそうなきっかけが出来たのはいいが、そのきっかけが原因で戦争中だ」

「意味が分からんわ」

ちなみにこのカオス、会議開始予定の3時間後まで続いて、結局「地球がヤバイ」の対策会議などできやしなかった。



十人目、「今はまだ会えない」

その日、エヒメとジェノスはS市に来ていた。

とは言っても二人一緒に行動を共にしていたわけではなく、エヒメは私事で買物に、ジェノスは見回りをしていていた。

ただ、ジェノスの見回りはヒーローとしての責務ではなく、個人的な理由がほぼ100%だったりするが。

深海王の件といい自殺未遂の少女の件といい、エヒメを一人にしておくと彼女は自分に科した「逃げない」という誓いで暴走することをジェノスははつきりと学習し、「この人はもう一人で外に出してはいけない」と一歩間違えたら犯罪者一直線の結論を出して、最近では完全に自立起動型セコム状態だった。

本日ももはやエヒメ専用ヒーローとなったジェノスが、「買い物に行く」と言ったエヒメについて行こうとしたのだが……今回はさすがに一緒にはいけなかったからこそ現在の、せめて同じ地区で何かあつたらすぐに駆けつけられるように待機を兼ねての見回りである。

本人と保護者であるサイタマの許しがなければ完全にストーカー案件なことをやらかすほどの過保護っぷりを見せていながら、本日の買い物について行かなかった理由はエヒメが真つ赤になって、「……深海王とかの所為で、結局買えなかったから……」と言ったからだ。

あの日、そもそも自分について行かなかった理由を思い出し、また察することが出来なかったことを土下座で謝ったのは言うまでもない。

そんな訳で自分の察しの悪さを後悔しつつジェノスは見回りを続けていたら、ケータイが鳴る。

開いて表示されている番号を見ると、そこに表記されていたのは「バング」と登録した番号だった。

隕石の時に事態がほぼ終わった後、割と強引に連絡先を交換され、会えばおちやらけて腹が立つが基本は常識人な為、無意味な連絡はよこさないことを良く知っているのでジェノスは「珍しい」と思いながら通話ボタンを押す。

この時はまた夕飯か何かの誘いか、それともヒーローとしての緊急要請かと思っていたが、バンクは開口一番、挨拶も抜きに尋ねた。

『ジエノス君！ エヒメ嬢は今、一緒におるか!?』

「いきなり何の話だ、バンク。説明しろ」

良くも悪くもどのような状況でも飄々とした調子を崩さず、余裕を常に携えた老人の切迫した様子に、ジエノスは低い声で短く答えた。

それだけでバンクの方も自分の質問の答えは「NO」であること、そしてその説明内容次第では今すぐに彼はどんな行動にでも移す意志を読み取り、ジエノスが初めて聞くような真剣な声音で彼も端的に説明した。

\* \* \*

「……くそっ！ やはり、あの場で焼き払うべきだった!!」

バンクからの説明を聞き、通話を切ってジエノスはすぐに探知機能を作動させながら、今更どうしようもない後悔をする。

「エヒメ嬢を襲ったストーカーが、拘置所で怪人化して脱走した」

バンクからの説明は、要約すればこれで終わった。

エヒメのしたことをジエノスは否定などしたくないが、彼女のジエノスに対する心配と気遣いは最悪の方向に向かってしまった。

エヒメを襲ったストーカーは、似たような妄想を過去に何度もこじらせては同じようなトラブルを起こして執行猶予中だった為、エヒメが被害届を出した時点で奴が実刑を喰らうことは確定していた。

身柄はすでに捕らえられ数年は出てこないことが確定だったので、ある意味ジエノスもサイタマもエヒメも安心していたのだが、奴は自分自身のコンプレックスとエヒメに対して逆恨みを募らせた結果、その醜悪な精神が身体を変容させて人外に成り果て、自分を拘束していた施設を破壊して脱走した。

それだけでも最悪この上ない事態だというのに、ジエノスにとっても最も許しがたいのは……その怪人と化したストーカーが脱走したのは既に三日前。

そしてそのストーカーによる被害がもうすでに出ている事を、ヒーロー協会は自分たちに全く何も知らせていなかったという事。

協会が、制約は多いがそれでもほぼ完全に能力を使いこなせている。テレポーターのエヒメを欲しがっていることは知っていた。その理由がヒーローや市民の為ではなく、上層部や協会に寄付金を贈る富裕層の為であることも。

奴らは怪人化したのがエヒメに執着している犯罪者であること、怪人となってもその執着は薄れるどころが増幅して、彼女に似た少女を手あたり次第に暴力を振るって重傷を負わせていることを知ったうえで、エヒメを手に入れるためにその怪人と変わらない最低最悪な計画を立てた。

その怪人にエヒメを襲わせて、間一髪のところまでヒーローに助けさせて恩を着せ、怪人に襲われる恐怖を煽って、もうすぐ完成予定のA級以上のヒーローなら無料で住めるヒーローズマンションに移住を勧め、家賃無料とヒーローが警護してくれる安全性を盾に自分たちの安全確保のために働けと要求する、お粗末極まりないことを考えた協会をジェノスは、今すぐ焼き払って更地にしてしまいたい衝動を何とか抑えて、エヒメの反応、もしくは怪人らしき高エネルギー反応をサーチし続ける。

しかし何故バングがこんな最低で愚劣な計画を知ったかというところ、この計画でエヒメが怪人に襲われて助ける役、ヒーローのありがたさを骨の髄まで知らしめるためにギリギリまで助けるなど命令されたのは、S級最下位の獄中ヒーローぷりぷりズナーだからだ。

協会上層部はヒーローとはいえ万年服役中でなおかつ男色家のプリズナーなら、少女が怪人に襲われて泣き叫んでもギリギリまで助けず、最悪の事態一步手前で助けろという命令もポイントや恩赦という条件を与えたら喜んで従うと思っていたのだが、残念ながら彼は善良な人間を傷つけることが出来ないからこそ獄中ヒーローなんて矛盾したものになった男だった。

命令を受けて表向きは喜んでその条件を飲んだが、それは自分が受けないと先日の会議にて割と本気で「妹にしたい」と言って騒いだ、心配になるほど無垢な少女を助けられないからであって、臭蓋獄を出てすぐに彼は条件を反故して他のS級達に連絡を取り、協会の思惑をぶ

ちまけて助力を求めた。

その助力の一人がバングであり、S級で唯一エヒメとジェノスの直接的な連絡先を知っていた為こうして電話をかけてきたわけだが、事態は本当に最悪極まりない。

まず、童帝が怪人の目撃情報や被害者がどこで襲撃されたかのデータを分析し、怪人が潜伏してそうな地域を特定したが、そこは選りにもよって今現在ジェノスがいて、そしてエヒメがどこかで買い物をしているこのS市であるということ。

ジェノスがこの場にいたのが幸運かもしれないが、エヒメもいるのはわかっているのに、具体的にどこにいるのかがわからなければ意味がない。

今まさにまたあの汚らわしい存在に、人を辞めた汚物に襲われている可能性が通り、ジェノスは自分のコアが凍る錯覚に陥る。

そしてバングは、当たり前だがジェノスよりも先に狙われている張本人に連絡を取ったが、……そのケータイに出たのは、エヒメではなく兄のサイタマだった。

エヒメは、ケータイを家に忘れて出て来てしまっていた。

バングは同じ説明をサイタマにもして、彼もこちらに向かっているとジェノスは聞いたが、それは安心できる情報ではない。

サイタマは戦闘では無類の強さを誇るが、それ以外は基本的に普通の人間だ。

怪人を見つけるにせよ、妹を見つけるにせよ、彼は自分の足で走り回って探すしかないのです、怪人がエヒメを見つけてしまっただけは何もかもが遅すぎる。

エヒメの性格からしてその怪人と出会ってしまったら、そして怪人が先日のストーカーで、自分が原因で変貌したと知ってしまったら、確実に責任を感じて自分で何とかしようとする。

逃げることなど選んではくれないことを、痛いくらいにジェノスは知っている。

(↑・高エネルギー反応！・これか!?)

ジェノスは感知した反応の元に走り出した。

そこに彼女がいないことだけを、まったく別の場所で何も知らないまま笑っていることだけを願って。

\* \* \*

「はあ!? こいつじゃねーのかよ!!」

「最初に特徴言っておきなさいよ! 役立たず!!」

『言う前に二人とも電話を切ったんでしようが!! とにかく、おねえさんを狙ってる怪人は、腕の筋肉だけが肥大しすぎてバランス悪くムツキムキなブサモンだから! 芋虫みたいな怪人じゃないから!!』  
ジェノスが感知した高エネルギー反応の場所にたどり着いた時には、そのエネルギー反応の元と思われる某金曜ロードショー常連アニメに出てくる蟲を連想させる巨大芋虫が、グチャグチャに潰れた挙句にねじれてミンチになっていた。

そしてその死体の前で、金属バットとタツマキがケータイに向って二人で怒鳴り、通話相手の童帝も周りに聞こえる程の声で怒鳴り返していた。

S級二人の出勤に今更驚くほどの意外性もなければ余裕もなく、ジェノスは躊躇なくその言い争いに割り込んで訊いた。

「童帝! それ以外に何か特徴はあるか!? 顔は人間の頃と変わっていないのか!?!」

金属バットとタツマキが「新入り!?!」「ポンコツ!」と驚き、呼びかけ、そして責めるように睨み付けるのを無視して、ただジェノスは怪人と化したストーリーカーの情報を求めた。

『サイボーグさん!? ……うん、協会が隠匿した情報をハッキングして見てみたけど、人間の頃と顔は変わっていない。特徴はさつき言った通り、不健康な肥満体にクロビカリさんみたいな腕っていうバランスの悪い身体だ!』

目撃情報からして、S市にいる可能性は95%以上! 他の周辺の街には、シルバーファンク、ぷりぷりプリズナー、タンクトップマスターが見回っていてくれるから、三人はS市を徹底的に探して!」  
童帝の方も一瞬驚いたが、いちいち何故この場に居るのかを尋ねる余裕もなければ、その質問の意味もないことを理解して、彼はジェノ

スの要求に応え、指示を飛ばす。

「わかった。また何か情報があれば連絡しろ」

「勝手に通話切んな！　　っていうか、新入り！　　いつの間に来たんだよ!?!」

「ちよつとポンコツ！　　エヒメは一緒じゃないの!?!　　どこにいるの!?!」

金属バットのケータイの通話を勝手に切って再びジェノスがサーチを始めたが、バングや童帝ほど冷静さを保っていない二人に怒鳴られて、探索に集中できずに怒鳴り返す。

「うるさい！　　エヒメさんはこの街に……S市にいるが、ケータイを忘れていて連絡が取れない！　　だから頼むからあの人を見つけてることに集中させてくれ！」

ジェノスの悲痛な訴えに二人は一瞬言葉を失って、顔から血の気も一気に失われた。

自分たちが思った以上に最悪の状況だと知り、金属バットは怒りと自分の無力さへの嘆きが入り混じった顔、タツマキは唇を噛みしめて今にも泣き出しそうな顔で、二人がジェノスにぶつけどころのない叫びをぶつけかけた時、状況を何一つ知らない者から奇跡のような言葉を掛けられた。

「あれ？　　ジェノス君？　　もしかして、エヒメちゃんと一緒に来てたの?？」

乱暴にブレーキをかける音の後、不思議そうな声で問いかけられ、思わずジェノスだけではなく金属バットとタツマキも勢いよく振り返って、怪人出現と聞いて駆け付けた無免ライダーを盛大にビビらせた。

「無免ライダーさん、エヒメさんを見かけたんですか!?!」

「あのバカ、今どこにいのよ、さっさと教えなさい！」

「おっしやよくやった！　　さっさと教えやがれお願いします!!」

いきなりS級3人に取り囲まれた拳句にエヒメの居場所を食い気味で訊かれて、無免ライダーはまず困惑する。

「え？　　っていうか何でS級が3人も?？」

「はあ？ 今はそんなことどうでもいいでしょ！」

「お前は黙ってる！」

その反応にタツマキが苛立って怒鳴りつけ、ジエノスはそれを咎めてから現状を要約して伝えようとした時。

「……無免。……エヒメを見たのか？」

ジエノスがバンクの電話を切ったのは、今から5分ほど前。バンクがエヒメのケータイに電話をしたのは、そのさらに10分ほど前。

Z市のゴーストタウンからこのS市には、車やバイクを飛ばしても1時間以上は余裕でかかる距離を、15分ほどで駆けつけた。

部屋着の草臥れたTシャツと短パンに、朝のゴミ出しなどに履くサンドルという格好のまま、サイタマは珍しく息を切らして額の汗を拭い、そしてS級二人や無免はもちろん、ジエノスさえも初めて見るような悲痛な顔で叫んだ。

「どこだ？ あいつはどこにいたんだ!? 教えてくれ、無免!! エヒメはどこにいたんだ!？」

それだけで、十分だった。

無免は現状を全く理解できていなかったが、大切な友人が着の身着のまま汗だくになって妹を探しているのに、それに協力しない訳がない。協力する理由に、言葉はいらなかった。

彼は愛車のペダルに足をかけ、声を上げる。

「こつちだ！ 僕もさつきチラツと見たただけだけど、間違いなくエヒメちゃんだった!!」

理由を問わず協力を率先して実行したそのヒーローに、サイタマとジエノスはもちろん、金属バットとタツマキも文句や疑う言葉を吐かずについてきた。

彼のその行動に、背中に二人が何を見て、何を思ったかは知らない。けれど確かに二人は信じて、その背をただ追った。

\* \* \*

そして5人は、たどり着く。

無免が怪人出現の情報を得て向ってる最中に、エヒメを見かけた商店街に。

……その途中で金属バットとタツマキが倒した芋虫の親玉らしい、「昆虫王」と名乗るカブト虫、カマキリ、蝶、バッタなどを混ぜ合わせたような巨大な虫と遭遇したのだから、5人全員で「邪魔だ!!」と叫んで倒した。

無免はジャステイス号に乗ったまま轢き、金属バットはその武器であるバットをフルスイング、タツマキは近くに止めてあったトラックを超能力でぶつけ、ジェノスはゼロ距離焼却砲を放ち、サイタマは軽く薙ぎ払って一蹴したのは余談だろう。

しかしさらにその余談を続けると、その昆虫王は真っ先にかましたサイタマの一撃で頭部が粉々になって死亡して、無免やジェノスはもちろん、金属バットとタツマキの攻撃も無意味であり、普段の二人なら自分たちが一撃を入れた時に相手がすでに死亡していたこと、その一撃を与えたのがサイタマであることに気付けただろうが、二人どころかこの出来事は5人全員が「何か障害物をどけた」くらいにしか認識しておらず、結局二人はサイタマの実力を知ることにはなかった。

「ごめん、このあたりでチラツと歩いているのを見ただけなんだ。急いでたから、話しかけることも出来なかった」

「そうか……。十分だ。ありがとうな」

無免ライダーの悔やむような言葉にサイタマは肩に手を置いて礼を伝えるが、表情はまだ固い。

無免がエヒメを見かけてから10分も経っていないのなら、まだここに居る可能性は高いが、かなり規模が大きい商店街で人通りも多く、探すのは容易ではないくせに人通りのない裏路地に通じる道も多いため、怪人側に都合のいい立地。

その事実にはジェノスは歯噛みしながらまたサーチを始めるが、辺りを見渡していた金属バットが「あっ！」と声を上げる。

「あれじゃねえか!? あの白いワンピースの!!」

その言葉に、エヒメの今日の服装が金属バットの言う通り白のワンピースだったことを思い出し、サイタマとジェノスは同時にそちらに顔を向けるが、同時に失望した。

「……いや、違う」



サイタマの言葉に、タツマキが金属バットに「期待させんじやないわよ役立たず！」と怒鳴りつける。が、金属バットを責めるのは酷だった。

彼が間違えた相手は、髪の長さといい、服装の好みやセンスといい、エヒメにかなり似ており、顔は見えないが後姿ならほとんど見分けがつかなかった。

即座にサイタマとジェノスが違うと判断したのは、長いスカート丈を好むエヒメと違って、相手は膝上丈だったからに過ぎなかった。

「うん、違うね。僕が見たのも、もつとスカートが長くて……!?!」

無免も確認で相手を見ながら語っていた言葉は途中で切れ、彼はいきなり自転車を走らせた。

無免ライダーの行動に4人は驚き、そのまま彼の行動を目で追うだけしか出来なかったことを、のちに4人はヒーローとして悔やむ。

彼が一番初めに気づき、そして行動に移したのだ。

エヒメによく似た少女の背後が陽炎のように揺らめき、そして揺らめきがうつすら人の形に色づいたこと、アンバランスな腕が少女に向って殴り掛かろうとしていたことに彼だけが気づき、そして向かった。

「ジャステイスアタック!!」

無免は叫んで自転車に乗ったままの体当たり攻撃を仕掛けるが、その声に反応して怪人は、少女に振り下ろすはずだった腕をそのまま裏拳に変更して、無免ライダーを自転車ごとふっとばした。

「無免!」

「無免ライダーさん!!」

吹き飛ばされた無免ライダーを受け止めようと師弟が駆け出すが、タツマキが念動力で受け止めて、その間に金属バットが駆け出した。

「てめえかっ!! エヒメさんの狙う変態クソヤローは!!」

童帝の言葉通り、不健康にぶよぶよとして青白い肥満体に筋骨隆々としたアンバランス極まりない両腕を携えた男が、人間の頃と変わらぬ卑屈な笑みで、けれど人間の頃以上に醜悪に笑って、そこにいた。

何かを勝ち誇るように、金属バットを無視して、ジェノスの方を見

て笑った。

同時に、男の体が掻き消えた。

「なっ!？」

振り下ろされたバットは地面のコンクリを砕いたが、そこに生き物を叩き潰した感触はない。

「はははははっ! 驚いたか?! これが生まれ変わった俺の力だ!!」

どこか粘ついた印象のある声が響くと同時に、ジェノスの目の前の風景が歪んだ。

同時に思いつき殴りつけられ、思わず膝をつく。

「透明化!？」

タツマキが無免ライダーと周囲の人間を超能力で守りながら、その怪人の能力に驚愕する。

そう。奴は怪力以外の力も、怪人となることで得ていた。

怪力は彼のコンプレックスと気に入らない奴を叩きのめしたい、欲望の対象を力づくで支配したいという願望の現れだろうが、こちらは卑屈で臆病で卑怯な奴の性質が全面に現れ出た能力。

とつさに両腕で交差させ、唯一の生体部位である脳を保護する頭部を守りながら、ジェノスは熱源反応センサーを起動させるが、自分の周囲には怪人と思わしき熱源反応は存在しない。

視覚だけではなくジェノスの高感度センサーにも反応しない隠密性は、怪力よりもはるかに厄介だった。

攻撃をする時、陽炎のように空間が歪んだりちらりと姿が垣間見えることがあるが、変にこざかしい奴はうろちよるとその辺を走り回りながら、ジェノスを殴り、蹴りつけ、その辺の物を投げて攻撃を続けるので、まだ周囲に人がいるこの場では、ジェノスの周囲拡散型の焼却砲や、タツマキの広範囲攻撃も躊躇われ、反撃のしようがないジェノスは完全にサンドバッグ状態となる。

「サイボーグ! あんたはそのまま、避難が済むまでそれを引き付けておきなさい!」

タツマキは一度舌を打ってからジェノスに命じ、ジェノスも「早くしろ!」と乱暴に応じた。

幸いながら、相手の怪力はおそらく熊と同程度。一般市民にとつては脅威だが、ジェノスにとつては何撃受けようが損傷の心配ないレベルの為、奴の執着が自分に向いている間に何の遠慮もなく焼却砲を放てるよう避難が完了するまで待てば、それで良かった。

なのに、奴は自ら地雷を踏み抜いた。

「死ね！ 顔がちよつといいからつて俺から全てを奪ったお前なんか死ね!!」

お前なんかに渡さない！ あれは俺のものなんだよ!!」

「——あれ？」

ジェノスをただサンドバッグにしていれば、市民の避難完了までは確実にあったはずの寿命を、自ら投げ捨てた。

奴は一番触れてはいけない逆鱗に、触れてしまった。

\* \* \*

「……誰の事、言ってるんだ」

タツマキに言われて、奴を引き付ける囷をジェノスに任せて金属バットと市民を誘導していたサイタマが、静かに言う。

怪人の姿は見えない。おそらく、テキトーに声がした辺りを見ているだけのはず。

なのにジェノスは、確信していた。

サイタマの視線の先に、奴がいることを。

「……あいつは、物なんかじゃねえんだよ」

急にあたりが静かになり、サイタマの声が商店街にやけに響く。

悲痛な、何かに耐えるような、堪えるような、静かな声で彼は続ける。

「あいつは、物なんかじゃない。誰の物にもならないし、誰にももう利用なんかさせない。」

あいつは好きなこととして、好きなものに囲まれて、好きなように生きるべきなんだ。やりたくないことなんてもうたつたの16年でやりつくしたんだから、あとの人生は全部『好きなこと』で埋め尽くして、笑って生きなくちゃいけねえんだよ！」

血管が浮き出るほどに拳を握り、叫んだ。

周囲の商店のガラスが割れたのはその音量か、それとも彼の怒りに耐えきれなかったのか。

「エヒメは、お前なんかの玩具じゃねえんだよ!!」

振り上げた拳をジェノスは止めるべきだと判断したが、妹の全てを汚して踏みにじり、奪い尽くして壊そうとした者へのサイタマの怒りに声が出なかった。

あの日、エヒメが襲われかけたという報告をした日、世界の滅亡を懸念するほどの殺気に怖気づき、何も言えなかった。

ただ心の中で、叫ぶしか出来なかった。

「この世界に、エヒメさんはいるんですよ」

世界を終わらせる一撃を止める言葉は、声に出なかった。

ジェノスの口からは、出なかった。

「! あれ? 近い? え? お兄ちゃん? 何でここにいるの?」  
何の前触れもなく、空間を渡って軽やかに降り立った少女は呆けて言う。

兄の振り上げた拳の直線上に立ち、彼女は、エヒメはただ不思議そうに首を傾げた。

\* \* \*

そういえば、兄であるサイタマの所にだけは、どんなに離れていても彼女は感知してそこに辿りつくことが出来ると聞いていたことを、ジェノスは思い出す。

ただ兄に会いたいの一心で生み出された力を使って、まったく状況も事情も分からないまま、彼女はそこに降り立った。

兄の前に現れて、呆けるサイタマを見て彼女自身も呆ける。

最初にエヒメへ、逃げろ、離れろと言ったのはジェノスか、タツマキか、金属バットか、無免許ライダーか、サイタマかはわからない。

エヒメの目の前が、サイタマの目の前が、兄妹の間に揺らぎが生じる。

二人を隔っていたものが、姿を現す。

「お前なんか、俺を裏切ったお前なんか死ぬっ!!」

透明化を解除したのと同時に、怪人と化したストーカーの振り上げ

た右腕が、風船のように膨らみ、筋肉がさらに肥大化して右手だけで成人男性ぐらいの大きさに変容する。

どうやら透明化を解けば怪力がさらに増す能力だったらしく、攻撃のたびに陽炎のような揺らぎが発生したり、たまに姿が見えたのはそのせいだろう。

怪人は透明化を完全解除してフルパワーで、奴は執着の対象を叩き潰そうとした。

エヒメは突然現れた、一番新しくて生々しいトラウマを前にしてただ目を見開いて固まった。

誓いなど関係なく、恐怖で頭が真っ白になってテレポートで逃げる発想すらなくなっているのは明白。

ジェノスは焼却砲を、タツマキは超能力、金属バットはバットを持って怪人に飛び込み、無免ライダーも体を起こして立ち向かおうとしていたが、誰よりも何よりも、サイタマが速かった。

妹の体を抱きしめ、包み込み、怪人の一撃から己の体を盾にして守ったのは、誰よりも何よりも早かった。

サイタマは敵を屠ることではなく、妹を守ることを、選んだ。

「ぎゃああああああああああつっ!!」

タツマキに右手をねじられ、ジェノスに焼き払われ、金属バットに殴られた右手はもげ、怪人は絶叫を放ちながらその姿を掻き消す。

また完全に姿も気配も隠した怪人を、彼らは誰も探さなかった。

「エヒメさんー!」

「エヒメ!!」

口々に少女の安否を祈って呼びかけるが、その声を掻き消して、叫んだ。

「何で来たんだこのバカ! 怪我はないか!? どこも痛い所はないな!?!」

あるのに我慢して黙ってたら、お前でもぶん殴るぞ!!」

抱きしめてた妹から離れ、けど肩を掴んで揺さぶりながら、サイタマは怒涛の勢いでエヒメに問う。

相変わらず状況把握が出来ていないエヒメは、「え? お、お兄ちゃ

んが探してた漫画を見つけて、ケータイを忘れてたから直接買って帰ろうか訊こうと思つて跳んだんだけど……」と、まず初めの文句を質問として受け取って、素直に答えた。

「それはどうでもいいんだよ！ 怪我があるかないか答えろ!!」

「へ？ え？ あ、うん。ない。ないよ。どこも、ない」

サイタマに怒鳴られ、混乱をさらに深めながらもエヒメは答える。それでようやくサイタマは安心したのか、肩を落として深く息を吐くと同時に、もう一度妹を抱きしめた。

「……お兄ちゃん？」

「……なら、良かった。……お前が無事なら……痛い思いを何もしてないなら……もう全部どうでもいい。」

「……お前が無事なら、もうそれだけでいい」

サイタマはただそれだけを呟いて、妹をしっかりと抱きしめ続けた。

さすがにタツマキでさえも実兄ということをかそのことを咎めず、結果としてまだ事情を知らないエヒメは兄からの抱擁と、周囲の妙に優しい視線という羞恥に襲われるが、それでも兄が取り乱すほどの心配をかけたことだけは理解した。

だから彼女は、兄を押しのけたり「離れて」と叫ぶのではなく、その背中に手を伸ばし、自分も抱き返す。

そして、サイタマの胸の中で伝える。

「お兄ちゃん、心配かけてごめんね。助けてくれて、ありがとう。」

「……それと、お疲れ様」

妹の謝罪と感謝、そしていつもの言葉を聞いて、サイタマは妹をようやく抱擁から解放する。

優しく、穏やかに笑いながら。

\* \* \*

「童帝か？ エヒメ嬢を狙っておる怪人らしきのを見つけたんじやが……。いや、倒したのはわしじやない。わしは、ボコボコで虫の息になつとるのを今、見つけたところじや」

童帝から、「S市で新たな目撃情報が出た！ 奴がS市にいるのは

確定です！」と連絡が入り、念のために周辺の地区を探していた3人の内、一番S市に近かったバングがS市に向かったところで発見したものを、ケータイで報告する。

「何？ 確認するから写メを送れ？ わしやそんな機能は使えんぞ。ドローンを飛ばすから、住所言え？ ああ、その方が助かるのう」

童帝からの要求に応えるため、バングは電柱か何かでこの辺の住所を探しながら、チラリと怪人をもう一度見た。

童帝が言っていた通り、不健康な体にアンバランスな腕なのは確かだが、その右腕はもぎ取られている。

それだけではなく奴の体はいつそ殺してやった方が慈悲なくらいに、徹底的に破壊しつくされていた。

関節部は全て砕かれ、鼻と喉は潰され、歯もほぼ全て折られている。腕だけならばタツマキあたりがやったのかと思うが、その破壊の痕跡が全て素手で行われたのを、同じ徒手空拳の使い手であるバングは見逃さない。

しかし、ここまで急所を徹底的に破壊し尽くす倒し方をするヒーローは思い当たらない。

プリズナーもタンクトップマスターも、どんなに怒りに満ちていてもこのような残酷な方法は取らず、サイタマなら相手は爆発四散しているだろう。

一番近い戦闘スタイルはバング自身だが、さすがに敵を倒したことを忘れるほど耄碌はしていないので、結局見当はつかなかった。

……しかし、ヒーローに限らずに考えれば心当たりが一人だけあった。

的確な急所破壊の攻撃をしつつ、命を取らない力加減。

それは以前までなら相手を痛めつけ、甚振ることを目的とした悪癖と解釈して頭を痛める種だったが、今なら別の解釈ができる。

いつそトドメを刺してやるのが情けと思っただけでも、それができない甘さ。

才能の塊でありながら、力の使い道を間違えているのではなく自分と同じく力の使い方がとつともなく下手だったのかもしれないバカ

弟子を思い出し、バンクは口元を少しだけ緩ませた。

「まあ、どちらにせよやりすぎじゃと説教はするがな」

しかし、説教の後に個人的にはよくやったと親指を立てる自分を想像しながら、バンクは近くにあった自販機から住所を読み取って、童帝に伝えた。

そして、童帝が確認の為にカメラを取り付けたドローンがやってくるまで、他の者へ、特にバンクが聞いたこともない底冷えする声で、「……その怪人はどこにいるんだ？」と尋ねて駆けつけたであろうサイタマに、連絡を取る。

今現在、誰がエヒメを連れて帰って、怪人が捕まる、もしくは倒されるまでの警護をするかの戦争が勃発していることなど、知る由もな

く。  
……破門したバカ弟子が、すぐそばの公園のトイレで手を洗っている最中であることにバンクは気づきもしなかった。

相手も同じく、目と鼻の先に元とはいえ師がいることなど夢にも思わず、念入りに手を洗っていた。

自分の拳を汚したのが血だけならさほど気にするような性格をしていないが、さすがに腹を殴ってかかった嘔吐物は不快この上ないからだ。

しかし、いくら手を洗っても不快感が消えないことにさらにイラつく。

不快感が消えない理由は分かっている。

その不快感は嘔吐物だけではなく、自分が倒した怪人と、自分の行動そのものから生じているものだから。

あれは怪人ではなく、変な力を身に着けた卑屈で卑怯で最低な犯罪者にすぎないと、彼は自分に言い聞かせる。

自分の憧れるものではない、自分がなりたい存在ではないと言いつ聞かせるが、じゃあ自分は何になりたいという疑問が同時に湧き上がる。

……万人に平等に理不尽な恐怖を与える存在になるとしたら、今日の自分の行動はそれから一番ほど遠いことを自覚しつつ、そのことを



不快に思いながらも後悔はしていないのがまた不快だった。

歩いていたらたまたま、命からがらヒーローから逃げ出したのか、片腕を失った怪人を見つけただけだった。

その怪人のヒーローに対する恨み言にすら興味がわからないほど、自分の理想とは程遠い怪人を無視してそのまま立ち去るつもりだったが、怪人の恨み言はヒーローではなくまったく別の関係ない存在に矛盾が向かった瞬間、無視できなくなった。

『絶対に、あの女だけは許さない！ あれは俺のものなんだ！ だからどうしようが、俺の勝手だろ!!』

自分を痛めつけたヒーローではなく、自分の欲望の玩具にしたいだけ女に下劣な言葉を吐き散らす怪人を、気が付いたら殴り飛ばしていた。

透明化という厄介な能力を持っていたが、攻撃の瞬間に陽炎のように揺らぐ空間こそが奴の居場所と気づくのはあまりに簡単で、同時にその揺らぎを見つけてから攻撃を避け、反撃することも天才と謳われた彼には容易いこと。

そうやって思わずぼこぼこにしたが、得たのは不快感だけという事実のため息しか出ない。

……それでも、放っておくことなどできなかった。

女子供が理不尽と不条理の犠牲になることだけは、昔からどうしても嫌だった。相手によってはためらいなく攻撃することも見捨てることもできるが、ただ「女」という情報だけでは、どうしてもあるひとりを連想して、放っておけなかった。

それは自分の夢を阻む、邪魔をするものでしかないことを知っているから、彼は眼をそらす。

昔の記憶から目をそむけて「彼女」を見ないようにするが、目をそらしてもそれ以外の感覚が、全身が未だに覚えている。

もう10年はすでに経っているのに、色褪せずに「彼女」は自分の心の中に住み続けていた。

『ひいちゃん』

年上だったが、そう呼んで勝手に慕っていた。会えばいつも笑っ

て、挨拶を交わしてくれた。

小学校の行事でたまたま知り合っただけで、関わった機会は全部で10に満たないほどの希薄な関係。

誰もが「たかが」とか「たいしたことない」と言って切り捨てる、日常のささやかな瞬間とやり取り。

彼にとっては10年、失えずに保ち続けるほどの価値と意味を持つ思い出と存在。

「たかが」と「たいしたことない」と言って切り捨てられて、取りこぼされて、踏みにじられた、けれどどうしてもほしかったものを、年上だけど自分より小さな両手で拾い集めて、傷だらけになってもその「たかが」と言われたものを自分にくれた、あまりに弱くて、だからこそ誰よりも尊い人。

蛇口を止めて、水に濡れた両手を見つめて思い出す。

「彼女」が差し出してくれた、小さくて柔らかで温かかった手の感触を。

何もしてやれなかった自分の手を、思い出してしまった。

「……くそっ！」

不快感は別の何かに変化して、彼はその変化した感情に名をつけずにトイレから出てくる。

無力感や後悔とは名付けない。それはもうすでに、山のように抱えているものだから。

トイレから出てきて、何かいい気分転換出来そうなものはないかと何気なくあたりを見渡すと、一人の不細工な少年がベンチで本を読んでいた。

その本のタイトルを読み取って、口角を釣り上げる。

その本のタイトルは彼にとって不快そのものだが、もしもタイトル通りなら、内容が自分の想像通りなら、それは彼の目的に都合がいいものだったからだ。

「よう、坊主。何読んでるんだ？」

上から本を覗きこんで話しかけるとやたらといい体格とガラの悪い顔にまず少年はおびえるが、なるたけ優しく笑って「面白そうじゃ

ねえか」と言つてやれば、少しだけ警戒心を解いて誕生日に買ったも買ったばかりのヒーロー名鑑だと話し出した。

どんな内容かを尋ねたら少年は相手も同じヒーロー好きなのかと思ひ込み、買ってもらったばかりの宝物の自慢を兼ねて、得意げに説明を始める。

古参はもちろん、ここ最近登録された新入りヒーローまで顔写真とプロフィール付きで、特徴的な戦闘スタイルを持つ者はその戦闘スタイルの解説までも載っていることを楽しみに話、彼はベンチの背もたれに行儀悪く座り、楽しげにただ聞いた。

「……へえ、そいつは強そうだな」

怪人に憧れる人間、ガロウは楽しげに獲物をそこから探し出す。

もう彼の頭の中には片隅にすら、「彼女」のことは残っていないかった。

心の奥底の一番柔い部分に、何があつても忘れえず、失えずにそこにいることを、知つていながら知らないふりを続けた。

## ジェノスVSソニック編

### 本日も厄日

今日はひじきとか洗剤とか特売品が多かったから、私とお兄ちゃんとジェノスさんの3人でスーパーに出かけた帰り、珍しい人を見つけた。

「お兄ちゃん、あそこにキングさんがいる」

帽子を被ってさらにパーカーのフードを被ってるから、すぐくわかりにくいし怪しいくらいだけど、特徴的な目の三本傷ですぐにわかった。

恥ずかしながら人の顔と名前を覚えるのが苦手な私でもすんなり覚えることが出来たくらい、ヒーロー名だけどシンブルな名前と特徴のある顔立ちなのに、お兄ちゃんは私の言葉に「誰？」って首を傾げる。

……お兄ちゃん、前にも話題にあげたよ？

「S級集会にも来ていたヒーローです。サイタマ先生を差し置いて、最強の称号を手に行っている男です」

前に話題となった時とほぼ同じ説明を、ジェノスさんにさせちゃった。ごめんなさい、ジェノスさん。兄妹そろって、人に疎くて。

まあそれはいいとして、ジェノスさんは少しかキングさんが一般的な普通の商店街で何してるのかを疑問に思ったようだけど、正直私はキングさんに何の興味も用事もないので「家が近所かもしれないね」と適当極まりない回答をしながら、頭の中は今日買った食材でこの先一週間の献立について考えていた。

ただたまに、知人とも言えないけど他人よりは知ってる人を見つけた。それだけの出来事かと思っていたんだけど、急に騒ぎ始めた人の声が私の日常を終了させる。

いや、これも日常の一部と言われたら、否定できないんだけどね。

「怪人よおおおー！」

「子供を近寄らせちゃ危ないぞー！」

周囲の騒然と混乱にジェノスさんは険しい顔をして、ひじきのお買  
い得パックの箱を持ったまま私を守るように抱き寄せる。

あー……自業自得だけど、これは守るといふか私が勝手にどつかい  
かないように警戒されてるんだろうなあ。信用されてないな、私。そ  
れだけのことをしたし、最近はずっとトラブル続きだったから仕方ないけ  
ど。

私がテレポートでトラブルの種のもとに飛びこまないように、がっち  
りホールドしながらジェノスさんはお兄ちゃんにすぐに怪人退治を  
しようかと話を持ち掛けたけど、急に思い直す。

「キングの実力を見る良い機会かもしれません。様子を見ましょう」  
「ああ。そういえばあの人の戦ってるところ、見たことありませんね」

ジェノスさんの提案で集会があった日、宇宙船をどうするかでクロ  
ビカリさんに意見を求められて答えた彼の言葉を思い出す。

あんな上空に構えられていたら何もできないと言っていたし、あの  
日も今日も武器らしきものは何も持っていないから、バングさんやお  
兄ちゃんと同じ、徒手空拳で戦うタイプの人なのかな？

どうもジェノスさんは、お兄ちゃんではなくてキングさんが最強の  
称号を得ていることが気に食わないらしく、どの程度の実力を持って  
いるのかが知りたいらしい。

そしてお兄ちゃんも、顔はいつも通り覇気もやる気も感じられない  
無表情だけど、ジェノスさんの提案に「そうだな」と答えたあたり、キ  
ングさんに興味があるらしい。

敵じゃないから戦えないだろうけど、もしも噂通りの強さならお兄  
ちゃんの虚しさに共感して、友達になれるかもしれないもんね。

どっちも仕方がないなあと思いつつながら、私たち三人はとりあえず電  
柱の陰に隠れた。

……どうでもいいけど、怪人の次に私たちが排除されても文句言え  
ないくらいに怪しくないだろうか、この行動。

\* \* \*

「我が名はG4。『組織』によって作られた機神なり」

合成音声とすぐにわかる無機質な声だけど、しゃべり方はやたらと

滑らか、これだけで結構な技術を使っていると素人の私でもわかる。

キングさんの前に現れた怪人は、2メートル近いキングさんが子供に見えるくらい巨大で、そして強そうなロボットだった。

私から見たら強そうで派手なロボットだなーとしか思わないけど、ジェノスさんが言うには正義の天才科学者、クセーノ博士に改造してもらった自分より性能が上かもしれないらしい。

ジェノスさんの放射砲やその他の戦闘に用いる機能はもちろん、味覚を感じられるようにしたりと細やかな人間らしい感覚まで与えられる博士さんが天才なのは疑いようもないけど……、実は前から思っていました。ジェノスさん、なんで博士さんを言い表す時わざわざ、「正義の」ってつけるの？

博士さん本人が自称してるのかな？ そうだとしたら、私の博士さんの印象がちよつと変わるんですけど。

ジェノスさんが勝手に言ってるんなら、とりあえず博士さんに同情を送ろう。

私はついつい、私自身があまり興味のある出来事ではないからどうでもいいことを考えていたけど、キングさんは何かそのロボットと話してから、S級集会でも鳴りっぱなしだったどつどつどつと音を立ててどつか行っちゃった。

どうもロボットはキングさんを使って自分の性能テストと、キングさんの戦力データを取りたかったらしく、でもキングさんはトイレに行きたかったから先に行かせてくれと言ったららしい。

……マイペースな人だ。お兄ちゃんと本当に気が合うんじゃない？

ロボットは10分の猶予を与えて、1分遅れるごとに10人殺すという条件を付けてそれを許可して律儀に待ってる。

動きといい言葉といいかなり人間らしくて高性能だけど、こういう律儀というか融通が利かないあたりが実にロボットらしい。

何か忠犬みたいに待ってる姿は、ちよつと可愛いかもしれない。

そんな風に呑気に考えられたのは、猶予の3分くらい。

5分、6分、7分と経つにつれて、さすがに私はもちろんジェノス

さんも苛だった様子を見せる。

キングさんが帰ってこない。それだけなら、他力本願な話だけどジエノスさんもお兄ちゃんもいるから別に良いんだけど、人類最強と謳われているキングさんに戦いを挑んだロボットということで、周囲の人間がまったく避難をしてないのが大問題。

これが他のヒーローなら、危機感なく見学するにしてもよほどの馬鹿じゃない限り、さすがに巻き添えの危険性くらいは想像してもっと遠くから見てるんだろうけど、キングさんはお兄ちゃんみたいに一撃でいつも怪人を倒しているらしく、周囲の人たちの危機感はゼロに近い。

このまま、もしもキングさんが初めの猶予10分に間に合わなかったら……

私はその可能性に背筋を凍らせたけど、周りの人たちは全くその可能性に気付かない。自分が犠牲になる可能性というものに、思い至っていない。

根拠もなく「自分は大丈夫」と思い込む人たちをどうしたらいいかわからなくて、頭がグチャグチャになってきたタイミングで、私の肩を抱く手の強さが増し、頭にはぼんつと温かな手のぬくもりが降って来た。

お兄ちゃんが視線はロボットに向けたまま、私の頭に手を置き、ジエノスさんは私を心配そうに見てしっかりと自分に抱き寄せる。

「お兄ちゃん？ ジエノスさん？」

「お前は余計なこと考えんな。何とかすんのは、俺とジエノスの仕事だ。」

お前の仕事は、……「仕事を終えた俺たちを労うことだ」

「ええ。俺たちにどうか、任せてください。……必ず、帰ってきますから、どうか貴女は信じて待っていてほしいんです」

私が呼びかけると、お兄ちゃんはそっけなく念押し、ジエノスさんからは後悔がにじむ懇願された。

私がまた感じなくていい責任を感じて、一人で暴走してたのを二人はお見通しだったみたい。

「……………めんなさい。うん、大丈夫。今日はちゃんと待つ。信じて、待ってますから」

さすがにここ最近、特にこの間の怪人になったあのストーカーでたくさんの人に迷惑と心配をかけたから、今日はもう本当に大人しくしていようと誓う。

うん、今日はこの大人しく待つという誓いから逃げない。

「……………だから、ジェノスさんも無茶しないでくださいね」

けどせめて、これだけは言わせて。

人の事なんか言えないことをいっばいやらかして来てるけど、それでもジェノスさんも自分がサイボーグだからって、手足の一本二本がもぎ取られることをこの人は何とも思わない。

……それが私は、前々からずっと嫌だった。

ジェノスさんは私の凶々しい頼みごとに、一瞬固まる。たぶん、お前が言うなどか思われてるんだろうなあ。

でも優しい人だから、そういう事は言わずに穏やかに笑って、「はい」と答えてくれた。

ジェノスさんの答えに私が安心したら、「俺の心配はしねーのかよ」ってお兄ちゃんに言われたけど、……………ジェノスさんの焼却砲を至近距離から喰らって、被害が服だけだった人に何の心配をしろと？

何？ 公然わいせつ物陳列罪の心配？

私がお兄ちゃんにそんな軽口を叩こうかと思った、無機質な声が響いた。

「時間だ」

タイムリミットが来てしまった。

キングさんはまだ、この場に戻って来ない。

それなのに周囲の人たちは、「おつかしいなー」とか言って騒ぎだしただけど、誰も自分がロボットの言った、「1分遅れるごとに10人殺す」の10人になる可能性を考えていない。

あまりに危機感も想像力もない、バカな野次馬。

けれど、私もそんなバカの一部だった。

ロボットは無慈悲に、強大な剣を振るう。



私に向って、一直線に。

『え!?!』

さすがに私はもちろん、お兄ちゃんとジエノスさんも同時に声を上げる。

どうやら私は、「1分遅れるごとに10人殺す」の第一号に設定されたらしい。

ここ最近のトラブルは私の自業自得ばっかだと思うけど、さすがに今日のは私、運以外は悪くないよね!?!

何なの!?! 厄日というか厄年なの!?! 私、数え年で今二十歳だから本厄じゃなくて後厄のはずなんだけど!?!

パニックってそんなバカでどうでもいいことしか考えられなかった私はもちろん、何もできなかった。

っていうか、レポートで逃げたらジエノスさんも一緒に跳んで、お兄ちゃんだけ置いてけぼりになる。たぶん支障は何もないけど、さすがにそれは何かお兄ちゃんに悪い。

そしてスーパールの袋を両手に下げたお兄ちゃんよりも、私がバカなことをしないように抱き寄せて、そして私をたぶん初めから守ってくれるつもりだったのか、荷物を地面に全部置いてたジエノスさんの方が、行動は早かった。

私に向って真っ直ぐに振り落とされたロボットの剣を、私をしつかり抱き寄せたまま殴って砕き、そしてそのままジエノスさんは右手を飛ばした。

何それ初めて見た新機能!?!

ジエノスさんは極太のワイヤーで繋がった右手首を、ブーストで勢いよく飛ばして、ロボットに拳が接触した瞬間、ブーストの勢いをさらに増して思いっきり殴りつける。

巨大なロボットが吹っ飛んで背中を地面に叩き付けて倒れる。

ロボットを殴り飛ばした勢いでブーストの熱風が吹き付けてきたけど、ジエノスさんがしつかりと抱え込んでくれたのでそこまで酷くない。せいぜい、髪が乱れたぐらいの被害で済んだ。

ワイヤーを引き寄せて自分の右手首を回収してジエノスさんは私

に、「大丈夫ですか!? どこか怪我は!?!」ともものすごく心配そうに尋ねられたから、私は大丈夫と答える。

ジェノスさんの方もどこも怪我はなくて、一応お兄ちゃんも確認に見ただけど、何かちよつと楽しそうな顔で「何それ、ロケットパンチ?」とか言ってた。

ああ、うん、お兄ちゃん。ロケットパンチが男のロマンなのはわかったから、もうちよつと空気読んで。

けどこんなことを考えてる私だって、空気を読めてない。

かなり派手に倒れたけど、ジェノスさんが自分より性能が上かもしれないと言われたロボットはすぐにジェノスさんも持つてる肩のブーストを使つて起き上がり、そのまま足を振り上げた。

「! 先生!」

「わっ!」

ジェノスさんはお兄ちゃんを呼びかけて、そのまま私をお兄ちゃんの方に突き飛ばし、自分一人で踏みつけてきたロボットの足を受け止めた。

「ジェノスさん!?!」

「ジェノス、手貸そうか?」

お兄ちゃんに抱き留められた私が叫び、お兄ちゃんはいつものようにやる気なく尋ねる。

「いえ!」

さすがに高性能なだけあって、見せしめ第一号に設定した私に執着するという融通の利かなさはなく、自分の邪魔をするジェノスさんを優先排除対象にしたらしいロボットの踏みつけに耐えながら、ジェノスさんはお兄ちゃんの申し入れを断った。

お兄ちゃんがぶつちやけテキストに出した課題である、「S級10位以内に入れ」というものを達成するにはこれくらい独力で倒さなくちゃいけないと叫んで、彼は焼却砲でロボットの足を壊して踏みつけから脱出し、そのままロボットに向かって殴り掛かりに行った。

……最低でも災害レベル鬼と自分で言った相手なのに、もう既に顔にヒビが入ってるのに、なのにジェノスさんはロボットの足を壊した

後、ロボットに殴り掛かる前に私に向って、微笑んで言った。

「エヒメさん、いつてきます」

……ああ。今日は本当に厄日だ。

こんなに近くで私は、何もできないまま待つてなくちやいけないなんて。

言う資格なんてないけれど

ジェノスさんの「一人で戦う」を聞き、私とお兄ちゃんはその辺の人たちに避難するように呼び掛けることに専念する。

ジェノスさんの武器の特性上、周りに人がいない方が有利に働くはずだからこれくらいはせめてやらせてほしかった。

けどお兄ちゃんは、何かチラチラとどこかを見て落ち着かない。

戦ってるジェノスさんの方じゃなくて、むしろ全然別の方向をさつきから見てる。

「お兄ちゃん、どうしたの?」

「……いや、さっきキングっぽい奴が全然違う方向に走っていくのが見えただけ」

「はあ!」

お兄ちゃんの答えに、思わず驚愕と非難めいた声が出た。

え? ちよつ、まさかキングさん逃げたの!? 何で!?

お兄ちゃんが見たのはまだ本人とは決まってるけど、今ジェノスさんが必死で戦ってるのに、たまたまこの場にいただけの無関係な彼に押し付けて逃げたと思い、私の中に怒りが満ちる。

けれどお兄ちゃんの表情と眩きを聞いたら、その心のうちに満ちる感情が変化した。

「……強くなりすぎて、戦うのが嫌になったのかな?」

どこか遠くを見るような目で、お兄ちゃんはそう呟いた。

私には全く理解できない。でも、お兄ちゃんが虚しさを抱えていることだけは知っている。

その虚しさが、誰にも共感してもらえないことを寂しがっていることだって、隠してるつもりだろうけど、知っている。

「……お兄ちゃん、行っていいよ」

「は?」

だから私は言った。

小指を立てて、お兄ちゃんが安心して自分と同じものを抱えているかもしれない人の元に行けるように、約束する。

「今日はちゃんと大人しくするから。ジェノスさんが心配だし、今、レポートで家に帰っちゃったら、ロボット倒した後でジェノスさんに心配かけるだろうからここにいるけど、余計なことほしくないから。大人しく、ジェノスさんが勝つのを信じて待ってるから。」

だから、お兄ちゃんはキングさんのところに行ったらいいよ」

お兄ちゃんはちよつとだけポカンとしてから、笑ってくれた。困ったような、私に自分の考えがばれてたことを少し恥ずかしがるような笑顔を浮かべて、私の小指に自分の指を絡めて約束する。

「ちよつと行ってくる。すぐに戻るから、マジで大人しくしてろよ」

\* \* \*

お兄ちゃんがキングさんらしき人が逃げた方向に走って行つてすぐぐらいに、決着が着いた。

身体の割には動きが俊敏だったけど、この狭い住宅地ではその身体の大きさやパワーを満足には生かせないで、ロボットはジェノスさんの動きに翻弄される。

そしてジェノスさんがロボットの大ぶりな一撃を避けると同時に、ロボットの肩の後ろあたりに飛び乗って、うなじあたりに両掌の焼却砲をゼロ距離で放った。

ロボットは内部から焼き尽くされて、関節部から火が噴き出して爆発し、すごい煙を上げる。

「ジェノスさん！」

私はやった本人が爆発に巻き込まれたかと一瞬失礼な心配をしたけど、ジェノスさんはもちろんそんな間抜けな失敗はせずに焼却砲を放って即座に飛び上がったらしく、軽やかに着地して私に「大丈夫です」と言ってくれた。

その顔にはヒビがあったけど、それ以外の被害は服ぐらいであることにホツとして、私はジェノスさんに駆け寄った。

それを止めようとはしなかったという事は、ジェノスさん本人も戦いは終わったと認識していたんだと思う。

「ジェノスさん、あのロボットはもう大丈夫ですか」

「ええ。内部構造を融解させたので、もう動けないでしょう。でかい

身体がこちらには幸いでした」

ジェノスさんの言う通り、煙がだいぶ薄れて見えたロボットは、炎が吹き上げた関節部からマグマみたいな液体がどろりと溢れ出ている。

……ジェノスさんの焼却砲の威力つてもものすごいな、と改めて思う。

そして今ほどは威力がなかったとしても、ジェノスさんの焼却砲の巻き添え喰らっても全裸になっただけなお兄ちゃんの規格外さも思いう知る。

どうしようお兄ちゃん。私、ちよつとお兄ちゃんを人間と呼べる自信がない。

そんなことを考えてながらロボットを眺めていたら、ロボットは自分の上半身の重さに耐えきれず、下半身は立ったまま上半身が崩れ落ちた。

それだけならもう完全に壊れたなーで終わった話なんだけど、その崩れたロボットから、その残骸の中から何かが動くのを確かに見た。

「！ エヒメさん、下がってくださいー！」

ジェノスさんも同じものに気付き、私を背にやって叫ぶ。

ロボットの中から出てきたのは、子供くらいの大きさで、壊れた外側と比べたらシンプルで可愛らしい、玩具じみた印象のあるロボット。

どうやらこちらが本体で、外側のは見かけ通り鎧の役割でしかなかったらしい。

私はジェノスさんの指示に従って、背を向けるのはむしろ危険そうだから後ろ向きに一步、二歩と歩き出したけど、ロボットの行動の方が速かった。

頭、肩、膝に当たる部分が上下にスライドして、中から砲門らしきものがいくつも見えた。

それを見て、ジェノスさんは私にだけではなく周囲の人たちにも「離れろー」と叫んだ。

同時に、いくつものレーザーが全てジェノスさんに向かって発射さ

れた。

他の人たちはともかく、自分に一番近くにいた私が光の速度からは逃げられないと思ったのか、ジェノスさんはとっさに私の腕を掴んで抱え込む。

自分の身を盾にして守ってくれたのは、私がやろうとしたことにとっても好都合だった。

「……いー… いない!?!」

ロボットがレーザーの狙いであるジェノスさんがその場からいなくなつたことに気付いて、声を上げる。

とっさにロボットの後方に跳ぶのが、成功して良かった……。ジェノスさんが守ろうとしてくれたおかげで、私から抱き着いて驚かせてしまふとかもなかったし。

私がホツとするのもつかの間、ジェノスさんは何かを悔やむように顔を若干歪めて、私から手を、体を離す。

「ありがとうございます。けど、エヒメさんはすぐに避難を!」

そう言い捨てて、彼は大量のレーザーを携えたロボットに向って行った。

「ジェノスさん!」

私の呼びかけに振り向いてはくれず、そのまま彼はレーザーに体を裂かれ、焼かれながらも突き進んでいった。

何もできなかった。

待っていてほしいと言われたのだから、その通り待っていれば良かったくせに、それでも私は何かしたかった。

でも、何もできず私はただ、ジェノスさんの戦いをただ見ているだけだった。

\* \* \*

「……はあ」

同時についた溜息に、気まずい沈黙が数秒。

「……なに落ち込んでんだよ?」

「……お兄ちゃんの方こそ」

家の中でそれぞれ、お兄ちゃんはゲーム、私は羊毛フェルトに針を

プスプス刺しながら互いに溜息をついた理由を訊くけど、どっちも答えない。

まあ、聞かなくもお互いにやっぱりわかってるんだけどね。

私たち兄妹の溜息の理由は、どっちも昨日の出来事が原因。

お兄ちゃんはキングさんに対する期待外れ。

詳しくはお兄ちゃんが話さなかったし私も訊いてないけど、どうもキングさんはそんなに強くなかったらしい。

それもたぶんお兄ちゃん基準じゃなくて、世間で噂されてるような實力はもちろん、S級という階級も過大なレベルなんじゃないかな？ そう思うのは、お兄ちゃんの反応が失望も強いけどなんか同情してるといふか、困ってるようなそんな感じの反応が端々に見えたから。

たぶん、キングさんは腕力じゃなくて知略を駆使して事前に計画を立てて敵に打ち勝つのか、もしかしたらものすごく運が良くて、その運のおかげで自分の實力以上の怪人に打ち勝てたのか。そんな感じで、今の実力に合っていない地位についてちゃったんだろう。

とにかく、一人でいきなりあんなロボットと素手で戦えと言われて戦える人じゃなかったから逃げ出してしまって、それを追いかけたお兄ちゃんにその秘密を知られたってところかな。

逃げてジェノスさんに面倒事を押し付けたことに関しては思うことはあるけど、私の「逃げない」とキングさんの「逃げる」はベクトルが真逆だけで、身勝手なのは一緒。

私に責める権利はない。怒ってるのだから、巻き込まれたのがジェノスさんだからであって、これが他のよく知らないヒーローなら、そのヒーローさんは災難だなあで終わるもん。

だから私としては、お兄ちゃんの「あいつはあいつで、何か苦労してるっぽい」という言葉を信じて、許しは今のところ出来ないけど気にしないことにする。

何だかんだでお兄ちゃんとキングさんは友達になったみたいだから、もうそれでいいや。

金欠でここ最近全然できなかったゲームも貸してもらって、出来るようになってお兄ちゃん、嬉しそうだし。



結局、折り紙は連鶴が折れるようにはなっただけど、趣味にはならなかったもんね。

で、私の溜息の原因はというと、自分の無力さとかそういうのに落ち込んでると、ジェノスさんがまだ帰ってこなくて心配だから。

拡散レーザー砲で遠距離から絶え間なく攻撃されて、ジェノスさんは焼却砲を放つことも、近づくことも出来ずに防戦に強いられていたけど、さすがはヒーローの試験に満点合格した人。

どんなに強力でもレーザーは所詮、光の集合体。周囲に粉塵や煙、水蒸気で満ちてしまえば光そのものが拡散してそれは凶器ではなくただの生温い光に成り下がることに気付いて、彼は消火器を投げつけてロボットの射光口を一瞬塞いだ隙に、消防隊とかが使う消火用の採水口を力任せに開いて水をぶちまけた。

その水がジェノスさんの焼却砲でまだドロドロに溶けていたロボットの鎧に当たった瞬間、周囲を真っ白に染め上げる水蒸気が発生してレーザーを封殺し、さらにあのロケットパンチで手首と腕を繋ぐワイヤーで拘束して、叩きのめして勝利した。

うん、ここまではいい。ここまでなら、自分は本当に何もできない役立たずだったなーと凹む程度で終わる。その程度の凹み、もはやいつものこと。

……私が心ここにあらずで溜息連発するほどに心配なのは、その水蒸気の中から出てきたジェノスさん、ロボットに勝利したジェノスさんはまたしても半壊していたから。

いや、初めて会った時とか深海王の時と比べたらだいぶマシで、半壊とまでは言わないかも。

左腕がもげて、顔の右半分が怪我というか壊れていたぐらいだから、せいぜい1/4壊つてところ？

……でも、壊れた顔というか頭からは、彼の唯一の生体部品である脳が露出していた。

それを見て焦って、ジェノスさんに大丈夫なのかを半泣きで問い詰め、今すぐに跳ぶから早く博士さんのところに行こうと急かしたのは、今思うとめっちゃくちや恥ずかしい。

怪我してるジェノスさんにもものすごく心配させてしまったのも申し訳ないし。

私が混乱したせいで、むしろジェノスさんが私を落ち着かせることに時間を割かせてしまったし、それに結局私はジェノスさんを博士さんの元へ送ることすらできなかった。

博士さんはいくつかラボを持っていて、前回私がジェノスさんを送って行ったラボは公にしてもいいというか若干困的な意味合いが強いラボだったけど、たぶん今いるラボは特に重要で、よほど信頼してる相手にすら場所を教えるはいけない所らしい。

ジェノスさんは私を信頼していない訳ではないという事を必死になって主張してくれたし、ジェノスさんの一存で決めて教えていいものじゃないことくらい初めからわかっているから、別のそこは全く何も気にしてない。

ただ、タクシー代わりにもならなかった自分に、凹むだけ。

そしてジェノスさんは大丈夫だってさんざん言ったし、その大丈夫の根拠も聞いた気がするけど、私はあの脳みそ露出のインパクトが強すぎて言われてもろくに聞いてなかったし、今も覚えてない。

でも、私が駄々をこねてたらいつまでたってもジェノスさんが博士さんのところに行けず、治してもらえないからってことだけを理解して、送るのを諦めた。

ジェノスさんは明日には全部治してもらって帰ってくるって言ってたけど、……もう夜だし晩御飯も食べちゃったのに、ジェノスさんはまだ帰ってこない。

一応、ジェノスさんの分も作ったのになー。

「……はぁ」

「……大丈夫だったの。本人がそう言ったんだろ？　ちよつと遅くなってるだけだ」

私の溜息に、何も言ってなかったのにやっぱりお兄ちゃんは全部わかっていたらしく、誰がとは言わずに私を慰める。

「……うん、わかっている。……ありがと、お兄ちゃん」

お兄ちゃんの気持ちは嬉しいけど、それでも私の心から不安は消え

ない。

あの、脳が露出したジェノスさんの顔が頭から離れない。

お願いだから、帰ってこれないのならせめて電話だけでもして。声だけでも聴かせて、もう一度「大丈夫」って言って欲しい。

そう思いながら、自分のケータイに目を向けたタイミングでチャイムが鳴り、同時に声が聞こえた。

「エヒメさん。先生。夜分遅くにすみません」

のちのお兄ちゃんが言うには、「テレポで移動したとき並みのスピードはあつた」というくらい、私が玄関に向かうのは早かつたらしい。

\* \* \*

「ジェノスさん！」

玄関を開けてまず初めに、彼の顔を確かめた。

あまりに早すぎる私の登場に面食らったジェノスさんの顔は、相変わらず黒い目の金の瞳と金髪が特徴的な、綺麗な顔。

もちろん脳はもう露出してなくて、ヒビだつてどこにも入っていない。黒い目さえ除けば、どこから見ても普通というにはちよつと整いすぎてるけど、人工的なものだとは思えない、人間の顔。

私は完全に治ったその顔に、思わず手を伸ばして両手に頬を挟むようにして触れる。

「……良かった。ちゃんと治してもらったんですね」

「え……あ、は、はい……。……あの、エヒメさん……」

ものすごく困惑した様子で遠慮がちに言われて自分が今、どんだけ馴れ馴れしいことをしてるかに気付き、私は慌てて手を離す。

「！……ごめんなさい、ジェノスさん!! いきなり失礼なことしちゃつて！」

「いえ！ 大丈夫です！ 全然、気にしませんから!!」

謝る私に、ジェノスさんも焦ってフォローを入れてくれる。

そのいつものやり取りに、私の中にさっきまでわだかまっていた不安が消えていくのを感じながら、ジェノスさんにフォローしてくれたお礼を言うと同時に、ふと気づく。

ジェノスさんの腕が、前までとは明らかに違うものになっていることに。

この人の腕はメインウェポンだから定期メンテのたびにマイナーチェンジしてたけど、今回はよく見なくても一目で今までとは違うことはわかった。

「腕の方も、治してもらったんですね」

「はい、G4のパーツを使って新しく、さらに強化してもらいました。……その所為で思ったより時間がかかってしまい、迷惑かと思いましたがせめて帰って来たことだけでも伝えようかと」

私はジェノスさんの言葉に、「気にしなくていいんですよ。お疲れ様です」と言つてから、ジェノスさんの言葉の中に、何か気になる単語があつた事に気付く。

……G4のパーツ？

G4って確か、ジェノスさんが戦つたあのロボットの事だよね？

「？ エヒメさん？」

急に黙つた私を不思議に思い、ジェノスさんが声をかける。

そんな彼に、私は問う。

「……ジェノスさん。その腕は、あなたが戦つたロボットのパーツを使つたんですか？」

「？ ええ。認めるのは癪ですが、奴は俺よりも機能はもちろんパーツ自体の質もよく、奴の内部構造をクセーノ博士に解明してもらい、なおかつそのパーツを使用したら、俺はさらに強化できるので……」

「すぐに博士さんのところに行くつて言つたじゃないですか!!」

気がついたら、叫んでた。

ジェノスさんの言葉を途中で遮つて、私は発作的に叫んだ。

「すぐに博士さんのところに行つて治してもらうつて、ジェノスさん言つたじゃないですか!! 何でロボットの部品を悠長に拾つて持つて帰つてるんですか!! 私を先に帰らせた後で、そんなことしてたんですか!」

「え、エヒメさん？」

「ちよつ、お前らいきなり何してるんだ？」

私のいきなりの剣幕にジェノスさんについては行けずに困り果てて、お兄ちゃんもびっくりしてリビングから出てくるけど、私の言葉は止まらない。

グチャグチャになった頭の中でグルグルと回る感情が全部、留まることなく発作的に溢れ出る。

「あんな怪我してるのに！ 脳みそが出ちゃってたのに！ どうしてすぐに博士さんの所に向かわなかったんですか!？」

ジェノスさんは脳さえも壊れたら機械にしちやえばいいと思ってるんですか!？ 本物のロボットになる気!？ バカですか!？

どうしてあなたはいつもいつも、自分が怪我することに頓着しないんですか!？ 腕がもげて、顔が砕けてもケロッとした顔で『問題ない』って、こっちの心境がいつも大問題なんです!!

あなたは、本当に言葉通り痛くもかゆくもないのかもしれないかもしれませんが、こっちが痛いんです!！

あなたが怪我をしたら、その怪我を代わってやりたいくらいに痛くて痛くて仕方ないのに……どうしてあなたは毎回毎回戦うたびに体の大部分が欠損するんですか!？」

わずかに残った冷静な部分で、「お前が言うな」って言っている。

わかっている、これは自分にも言えること。私がジェノスさんやお兄ちゃんに言われてもいいことを、自分を棚に上げて私は叫んでいる。

……でも、それでも、私は我慢できなかった。言わないでおくなんて、出来なかった。

「腕や足なら、まだ我慢しますよ！ 黙ってますよ！ でも、今回はあなたが唯一残した人間の部分が露出してたんですよ！ それは、パーツの交換で直るものじゃないんですよ!？」

それなのに、あなたは強くなるためにロボットの残骸集めを優先したんですか!？ もし、その状態でまた同じくらい強い怪人が現れて、その露出した部分を狙われてたらどうしてたんですか!？」

「え、エヒメさん、すみません！ 俺が悪かったです！ だから落ち着いて……」

「落ち着いたって、あなたがすぐ博士さんの所に行ってくれなかった

事に変わりはないでしょう!!」

私の怒涛の言葉に何とか割り込んだジェノスさんの言葉を、理不尽な言い分でぶった切る。

ジェノスさんが真つ直ぐに博士さんの所に向わなかったのが変わらないのなら、私が懸念した事態が起こらずに、無事彼は帰ってきてくれたのも事実。

もしも話の意味はないと言いながら、私はその「もしも」に怯えて、ジェノスさんに当たり散らす。

「もう知らない! 知らない知らない知らない!! ジェノスさんなんか知らない!!」

私のしていることは、自分の事を全て棚に上げた最低な八つ当たりだつて事は分かっているのに、グチャグチャな頭と心は暴走し続けて、言葉が止まらない。

私は泣きながら、何とか私を落ち着かせようとするジェノスさんもお兄ちゃんも無視して、大声で叫んで玄関を乱暴に閉めた。

「ジェノスさんなんて、大っ嫌い!!」

喧嘩するほど仲が良い

……どうしよう。

ジェノスが怪人じゃなくてエヒメの所為で死ぬかもしれん。

いや、前々から何度もこいつ殺されかけてるけど。主に、エヒメの無自覚殺し文句で。

でも今回はなんつーか、マジで死ぬかもしれん。

すまん、ジェノス。へそ曲げてるだけだから、明日になれば機嫌が直るなんて言っつて。でもいつものパターンならマジで次の日になったら「酷いこと言っつた」って自己嫌悪はしてても、怒ってなかったはずなんだ。

……エヒメ。何でお前、また3日もへそ曲げてんの？

\* \* \*

何か隕石の時みたい、またこいつは暇さえあれば何かをひたすら作り続けている。

あの時とは違って今回はジェノス相手に怒って、そして口を利かないじゃなくて一応は話しかけられたらちゃんと答える。……ものすごく、キレながらな対応だけだな。

慣れてる俺からしたら口を利く分マシなんだけど、ジェノスは話しかけるたびに「何ですか!？」って乱暴に言われて、そのたびにシヨツクでフリーズしてる。

ジェノス、気にすんな。口を利くのはまだマシな方だ。明日には機嫌が直ると言い続けて、フリーズを解凍してきたけど……まさか3日続くとは思わなかった。

さすがにそろそろ何とかしないと、あいつは「もう死んで詫びるか……」とか言い出して、ガチで自爆しかねない。

だから俺は、何かを編み続けてるエヒメに言った。

「エヒメ。いつまでへそ曲げてる気だ？」

俺の言葉にエヒメが肩を一度震わせたが、こっちを向かない。

それでもお構いなしに俺は言う。

「お前さ、自分でもわかってるんだろ？ お前があいつに言ったこ

とは、そのまま自分に返ってくることも。

お前があんなこと言って怒った気持ちはわかるし、そのことを責めるつもりはねえよ。

でもな、相手が反省して謝ってるのにその話も聞かずにへそを曲げ続けるのは、さすがに注意するぞ」

こいつが3日前にジェノスにぶちまけた言葉は、マジでお前が言うなって話だったけど、それでも言いたくなる気持ちはわかった。

確かに脳みそ出てるのにさっさと帰って治してもらわないで、何かロボットのパーツを集めてから帰ったって知ったら、そりゃムカつくわな。

別にこいつだって、柵にあげたくてあげたわけじゃない。そもそも、怪我したくていつもしてるわけじゃないのも知ってる。

つか俺も怪我したらエヒメが泣くっていうのをわかったうえで、敵に立ち向かったりエヒメを庇ったことは何度もあるから、俺だって言う資格はねーよ。

ないけど、言う。

お前が怪我したら俺が痛いんだって何度だって言うし、何度だって自分から怪我しに行くのはやめろって止める。

だから、あの日こいつがキレたこと自体を責める気はねーよ。ジェノスがそれだけ、自分の事を柵に上げてでも言っただけくらいに心配だったってだけの話だろ？

ただ、今のこいつはピリピリしすぎてて、ジェノスが何か言う前に威嚇して全然話を聞こうとしない状態だ。

一喝されたら即座にすぐ引くあいっつもあいつなんだけど、せっかく俺以外にも人付き合いが出来るようになったのに、このままじゃジェノスと出会う前に逆戻りだ。

だからさ、エヒメ。聞かせてくれよ。

俺はお前が悪かったら注意するし、嫌なことを言うかもしれないけど、せつど、お前がどんなに悪くたって俺はずっとお前の味方だから。

お前が何にそんなに怒ってるのかを、教えてくれよ。

「……………お兄ちゃん」



毛糸と編み棒を置いて、エヒメは俺に向き直る。

向き直った瞬間、こいつは無言でぼろぼろ涙を零しやがった。

うおおおい！ いきなし泣くな！

「ちよつ、すまん！ 言い過ぎたー！」

「……違つ……お兄ちゃんは……悪くないの……。ジエノスさんも……悪くないの……。」

私が……悪いの……でも、……わかんないの」

俺が思わず謝ったら、エヒメが泣きながらたどたどしく話し始めた。

「……わかってるの。……私は、自分を棚に上げて、どれだけ……酷いことを言ったか。……すぐく……酷い八つ当たりを……したってわかってるの。」

……いつも寝る前に、……朝起きた瞬間から、……今もずっと私、ジエノスさんに謝らなくっちゃって……思ってた。許してもらえなくても……、謝らなくっちゃって……思うの。

……でも、ジエノスさんの……顔を見るたびに、頭がグチャグチャになって、腹が立って、……謝る言葉がどこかに行って、……また責めたててしまいそうになるの」

えぐえぐと泣きながら話すエヒメに、箱ティッシュを渡して話を聞く。

うーん。半分くらいは俺の予想通りというか、いつものパターン。謝らないんじゃないかって、自己嫌悪でいっぱいになってどう謝ったらいいかわかっていなかったみたいだけど、何か後半が新しいパターンだな。

「何でまたジエノスを責めるんだ？ 何がそんなに気に入らないんだよ？」

正直、そこがまったくわかんねーから訊いてみた。

俺から見たら、ジエノスはこのつにキレられた後は、別に地雷を踏んでねーぞ。そもそも、踏む前にこいつがジエノスの言葉も接触もシャツアウトしてる状態だし。

エヒメはティッシュで涙を拭って、一回鼻をかんでから、さらに

ちよつと間をあけて答えた。

「……………謝るから」

「は？」

予想外すぎる答えに、思わず固まる。

いや、確かにあいつはエヒメに「大っ嫌い!!」宣言を受けた直後は、俺が揺すつても割と強めに殴つてもフリーズが解けないで、そのまま1時間くらいうちの玄関先で固まつてたし、もうずっと捨てられた子犬みたいな常に大ショックを受け続けてる顔をしてるし、空気は重し暗いし、エヒメに会うたびに土下座の体勢に入るのは……………うん、ウザいな。

でも、それを言うか？

「……………私が悪いのに……………謝るから」

俺が固まつてたら、エヒメが補足を加えた。

あ、そういう理由？　ウザいからじゃねーのか。良かったなジェノス。

何故か俺の方がジェノスをウザがつてるわけじゃないことを知ってホツとしていたら、エヒメはテーブルを一回、バンツ！　と強めに叩いて、キレだした。

「私が悪いんだからジェノスさんは私に怒ればいいのに、何で謝るの!？」

自分の事を棚に上げて、守られるばかりで何もできない私の事を怒ればいいのに、あの人ずっと自分が悪いって思つて、ずっと謝つて、こんなバカなことで拗ねてる私なんかウザいって思えばいいのに、普通は思うのに何であの人は私の事、全然責めないの!？」

もうやだ！　何が何だかわかんなくて頭がグチャグチャになる!!」  
ヤケクソでキレて叫んで、そのままテーブルに顔を突っ伏した。

いやー、ジェノスがお前を責めないで謝り続ける理由を俺は知ってるけど、「お前のことが大好きだからだよ」つて言つても逆効果だよな、これ。いや、さすがに始めから言う気はねーけど。

「何なんだ、お前は？　ジェノスに嫌われたいのか？」

「それは絶対に嫌!!」

エヒメが何を言いたいのかがわからなくなって、あり得ないのはわかってるけど一応訊いてみたら、予想通りの答えが予想より早く、即座に返って来た。

エヒメは突っ伏したまま、一回泣いてキレたことで少しは落ち着いたのか、また少しずつだが話し始める。

「……嫌われたくないから……だからこそ言って欲しいのに……、私の悪い所を言っただけで、どうしてほしいのか、どうなって欲しいのかを言っただけなのに、あの人は私に説教はしても、結局私を縛らないで、好き勝手させてくれる。」

それは嬉しいけど……時々、すごく寂しい。……お前なんかどうでもいって言われてるみたいで、……いつか、私が知らないうちに愛想が尽かされそうで、しかもそのことすら言わずに黙って離れていかれそうって思っちゃう」

うわー。ジエノス、お前のこいつを尊重する愛情が、何かすげーひねくれてネガティブに解釈されてんぞ。

……でもまあ、仕方ねーか。

素直に好意を受け取れないのは、向けられる好意を好意だって気づけないのは、仕方ない。

こいつは好意のフリをした身勝手なクソに、利用されて絞りつくされて奪い尽くされて、何もかもなくしてそのまま捨てられた。

俺の事を信じてくれただけでも、奇跡なんだ。

……っーか、ジエノスの気持ちは全く気付いてないくせに、こいつジエノス大好きだな。

どういう好きかはまだわかんねーけど、そもそも人に嫌われんのが怖くて、人前で委縮していい子ちゃんになろうとするこいつが、あそこまでキレた時点でジエノスにだいたい甘えてるし、素を見せてもいって信用してるんだな。

「じゃあ、そう言えよ。3日前みたいに、もう一回本音をぶちまけたらいいだろ？」

俺がそういうと、またエヒメは肩を震わせてもう一回泣きだした。だから、いきなり泣くなっつーの！ 今度は何が悪かったんだ!?

エヒメはテーブルに突っ伏したまま、泣きながら呟く。

「……また、あんな風に怒ったら……絶対に嫌われる。」

……もうやだ。嫌われたくないのに、嫌いたくないのに、謝り方がわからない」

いや、ぶつちやけジエノスが未だにシヨックを受けて気にしてるのは、お前の「大っ嫌い!!」宣言だけだから。

他のは普通にお前が心配してたから出た言葉だつてことはわかってるし、どつちかというところまで怒るほどに心配してくれたのは嬉しかったつて、本人が言つてたし。

だから、今さつき言つたことを全部話したらむしろ喜ぶとは思うけど……ダメだな。結局あいつは、エヒメに謝つて終わるだけだ。

「あー、わかった。」

エヒメ。お前はジエノスと『ケンカ』がしたいんだな」

俺の言葉に、エヒメは顔を上げる。目は真っ赤で涙の痕がくつきり残つてるけど、表情はきよとんとしてる。

本人も気づいていないことを、そのきよとん顔に指を突き付けて言つてやる。

「お前はジエノスに対して不満がぶつちやけあるけど、自分がその不満をぶちまけて直せつて言えるほど立派な人間じゃないこともわかつてる。」

だからジエノス側の不満も聞いてやりたいのに、あいつがそれを言わないで自分が全部悪いつてことにして、謝つて話を終わらせんのが腹立つんだろ?」

エヒメは目を見開いてから、コクコクとうなずいた。どうも、自分でも整理できずにわかつていなかつたみたいだが、まとめてみたらこういうことだ。

「お前は、ジエノスともつと仲良くなりたいつてことなんだな」

喧嘩するほど仲がいい。

つまりはこういうことだ。

こいつはケンカするほどに自分の素を見せて、不満をぶつけて、でも相手からの不満も知りたいし素を見せて欲しい。

そして、仲直りをしたい。

こいつ、元々そんなにうまくなかった人付き合いが、中学と高校のイジメとそっから俺とだけしか付き合わない引きこもり生活で完全にめちやくちやになって、ケンカの仕方もわからなくなってたってことか。

エヒメは、もはや呆然と言わんばかりの顔で俺を見る。

そして、顔をくしゃくしゃに歪ませて、泣いてないのに泣き顔の方がマシなくらい悲しそうな顔をして、言っちゃいけないことを言ってしまった事を悔やむような顔をして、言った。

「——うん。……私、ジエノスさんと仲良くなりたい」

……悪いな、ジエノス。

お前の味方にはなつてやれねーわ。

俺はプロヒーローである前に、お前の師匠である前に、こいつの兄貴でヒーローなんだ。

だから俺は、エヒメの頭に手を置いてぐしゃぐしゃに髪をかき回してから言つてやる。

「んじゃ、兄ちゃんに任せろ」

お前ら、ケンカしろ。

自己完結行き止まりをぶち壊せ！

強くなりたいと願うのはやめたはずなのに、俺はまた子供のよう  
ただ思った。

強く、なりたかった。

あの本体も一瞬で溶かし尽くす火力があれば、本体の存在に気付い  
た時点で間合いに入れるほどのスピードがあれば、あのレーザーに耐  
えられるほどの強度があれば……。

俺がもつと強ければ、彼女はあんな辛そうな顔をしなかったのに  
……。

エヒメさんは約束を守ってくれた。

大人しく他の市民の避難誘導を行う以外は何も危ないマネなんか  
何もせずに、怪我一つなく待っていてくれた。

なのに俺の方は、何も全く守れなかった。

外装を破壊しただけで全てが終わったと油断してエヒメさんを近  
づけ、彼女をあゝの拡散レーザー砲の脅威に晒した。

エヒメさんならテレポートで逃げただろうが彼女の性格上、俺を  
置いては逃げられず、もしくは怯えてとつさにテレポートすることは  
出来ない可能性が高かったのだから、絶対に確実に安全と言い切れる  
まで近づけるべきじゃなかったのに、学習能力のない俺は彼女が笑っ  
て駆け寄ってくれたことにただ浮かれていた。

そして、せめて彼女だけは守ろうと抱きしめて庇ったつもりが、俺  
の方が助けられた。

エヒメさんのテレポートで助けられた時、自分の不甲斐なさど無  
能っぷりで死にたくなかった。

あれではエヒメさんを庇ったどころか、エヒメさんのテレポートで  
逃げる為に縋ったも同然だ。

そして、何とかあのレーザーを無力化して倒したのはいいが、彼女  
の「無茶をしないで欲しい」という願いを、俺は全く叶えられなかつ  
た。

G4の一撃で俺の唯一の生体部位である脳が露出してしまった事

が、エヒメさんには相当衝撃的だったらしく、彼女が泣いて何も悪くなどないのに自分が真つ先に標的になったせいだ、自分が何もできなかったからと自責し、謝った。

彼女に心配をかけて、感じなくていい責任を負わせ、そしてたくさん泣かせて悲しませた……。

彼女を泣かせたくなかったから、涙など見たくなかったから、あの人はいつも笑って、誰よりも何よりも幸せになって欲しくて、幸せにしたくて、エヒメさんを傷つける全てのものから守りたかったから……

だから俺は、自分を苦しめた敵の体を、パーツを拾い集めてクセーノ博士の元に持ち帰った。

もつと強くなるために。

「……馬鹿か、俺は」

もう何度目かわからない自責と自嘲を、先生の玄関先で呟く。

馬鹿かじゃない。大馬鹿者だ、俺は。

彼女が何で泣いてたのかも、わかっていなかったのか？

彼女が泣きながら縋って頼み込んだのは、願ったのは何だったのかも聞いてなかったのか？

俺を心配して、俺の損傷を彼女は「怪我」と認識して、一刻も早く修理ではなく治療してほしくて、あんなにも泣いて泣き縋って俺を送り届けようとしてくれたのに、どうして俺は彼女の不安を長引かせたんだ！

もう夜も遅かったのに、チャイムを鳴らしてすぐに飛び出て来てくれるほど俺を心配してくれていたのに！

俺の頭部が直っていたことを、あんなにも嬉しそうに安堵して喜んでくれたのに！

なのにどうして俺は、彼女がくれたもの全てを踏みにじるようなことをしたんだ!!

……嫌われて、当然だ。

もう俺の顔なんて見たくもない。そう思われて当然なのはわかっている。

こんな酷い裏切りをした俺なんか、許してもらえないわけがない。なのに俺は、今日も先生宅に、エヒメさんの元に訪れる。もう一度、もう一度だけでいいから、チャンスが欲しかった。そうしないと俺は本当に、何の為に彼女を泣かせたのかがわからなくなる。彼女をあんなに泣かせて、心配をかけさせた意味がなくなる。

エヒメさんはあまりにも愚かな男を心配して、無意味に悲しんだだけになってしまおう。

だから、お願いします。

許さなくていいんです。

俺の事が嫌いなら、それでいいです。

もうあの笑顔が、俺に向けられなくてもいいんです。

ただ、まだ俺に貴女を守らせてください。

その為に、貴女を泣かせてまでして得た力なんです。

俺は今日もまた、ただそれだけを希いたくて先生宅のチャイムを鳴らした。

\* \* \*

チャイムを鳴らしていつものように名乗るが、いつもほど声が出せないでおそらく中に俺の声など届いていない。

けれど、この郵便さえもヘリヤドローンを使わないと届かないゴーストタウンで訪問販売などが来るわけもないので、先生もエヒメさんも来客が俺だという事はわかっていよう。

現に中から先生が「おう。開いてるから入れ」と言われ、俺は「失礼します」と声をかけ、お邪魔する。

リビングにはこちらを振り返る先生と、その対面にエヒメさんがいた。

が、俺の姿を見てすぐに掻き消えた。

レポートしたのはすぐにわかった。昨日までは顔を合わせるくらいはしてくれたのに、もう能力を使ってまでして俺に会いたくないと思われるほどに嫌われた事実もショックだったが、それ以上の衝撃だったのが、掻き消える前に見たエヒメさんは眼を真っ赤にして涙の



痕を鮮明に残していたからだ。

「せ、先生！ エヒメさんは?! エヒメさんはどこに消えたんですか!?

俺が探しに……いえ、俺が行ったら逆効果ですよね……けどサーチくらいは……」

「落ち着け。あいつはアパートの屋上にでもいるから、とにかく落ち着いてそこに座って、まずは俺の話を聞け」

まさか、俺がいない所で先生の前で泣くほどに俺に会いたくなかったのか、それとも何か別の事で泣いていたのか、どちらにしる彼女が泣いていたことは確かだったので、俺は大いにうろたえて先生に一喝された。

「屋上?」

何故場所特定が出来ているのかと思えば、先生は俺と二人で話しかかったので俺が来たらひとまずそこにいろと、エヒメさんに言っていたらしい。

とりあえず遠くに行っていない、センサーを起動させていれば怪人の出現などに俺も先生も即座に対応できる距離であることに安堵し、先生に言われた通り俺は先生に向き合って座る。

……何を言われるかは覚悟していた。

おそらく、俺は破門される。

先生の最愛の妹を全く守れず悲しませてばかりで、嫌われてもしくこく近寄ろうとする俺など、先日の怪人と化したストーカーと変わらない。

兄なら、家族なら、エヒメさんを大切に思うのなら、俺など殺してでももう近づかせないが正しい対応だろう。

そのことをわかつていながら、……「それでも」と思ってしまう自分が浅ましい。

……先生がいるのに、いつでも、どんなに憎い敵が目の前にも、怨敵に怒りや憎悪をぶつけるのではなく、大切な人を、妹を、エヒメさんを守ることを最優先して行動できる人がいるというのに、俺はただ願う。

どうか、俺にまだチャンスを。

エヒメさんをまだ、守らせてくださいと心が泣き叫んだ。

「ジェノス、お前ちょっとエヒメとケンカして来い」

「はい？」

\* \* \*

予想外すぎる言葉に力が抜けて、思わず前のめりに倒れそうになったところを何とか堪える。

若干前のめりになったまま、俺はおそらくマヌケ面を下げた先生に尋ね返した。

「……ケンカ……ですか？」

「そうだ。ちょっとあのアホに不満でも文句でも何でもいいから、本音をぶちまけて来い」

尋ね返しても、意味がわからなかった。

「いえ、あの、不満なんてありませんし、そもそも俺が怒らせて悲しませて、自業自得で嫌われたのにケンカなんて……」

「あーっ!! てめーら面倒くせえんだよ!!」

長くて遠回しな話を好まない先生が早速、俺の言葉をぶった切って俺を怒鳴りつける。

「お前らはどうしてどっちも、相手の話を聞かずに自分の中で勝手に完結するんだ!?! しかもどっちも明後日どころか真逆の方向に突っ走ってやがるし!!」

お前ら二人がアホなのはもう俺はよくわかったから、お前ら本音トークしてその勘違いをさっさと正せ!!

お前らどっちも互いを大好きすぎだろいい加減にしろ!!」

怒涛の勢いで先生に怒鳴られた。場違いなことに、実は先生とエヒメさん、怒り方も似てるなと思ってしまった。

そんな風に現実逃避じみたどうでもいいことを考えたのに、先生の最後の言葉がグルグルと頭の中を駆け巡る。

いや、この言葉がどうしても処理できなかったからこそ、あの要点がずれた考えだ。

『お前らどっちも互いを大好きすぎだろいい加減にしろ!!』

今の状況ではあり得ない言葉。

俺が抱く気持ちとは違うとしても、友愛や親愛ですらもうあの日に失われたはずなのに。

それなのに、先生は言った。

「せ、……先生……それは……どういう意味で……」

「お前、本当に頭が一番融通利かねーな。それが唯一の自前のもんだろ。しっかり使えよ」

自力で何とかフリーズを解いて先生に尋ねると、先生はテーブルに頬杖をつけて俺を呆れ果てたような目で見た。

そして、問う。

「お前さ、三日前に言われたセリフが例えば俺が言われてたのなら、どう思うんだよ？」

「どう思うって……もちろん……あ」

シミュレートした瞬間、先生が何を言いたかったのを理解して、思わず羞恥で顔を手で覆うようにして項垂れる。

先生が呆れ果てていたわけも、よくわかった。これはもう、呆れるしかない。

……俺は本当に、ロボットだったG4よりも融通が利かない石頭だ。言葉をそのままに受け取りすぎだろ。

……エヒメさんが先生の怪我を心配したのに先生が治療より他の事を優先して後回しにして、そのことを怒って泣いて「大嫌い!!」と叫んだら、本当にエヒメさんが先生を嫌いになったかと俺は思うか？

そんな訳ないだろ。

先生が「大嫌い」と言われた場合、それは本音と言えば本音だろうが、先生が嫌いになったという意味ではない。

大好きな兄を大事にしてくれない兄自身が大嫌いという意味で叫んだことくらい、俺にだってわかる。

「……先生、……俺は自惚れていいんですか？」

失礼だがとても上げられる顔をしていないのでうなだれたまま先生に尋ねたら、見ていないのに先ほど以上に呆れられたのがわかる声で答えられた。

「あいつは嫌ってる奴には、怯えるか緊張のし過ぎで逆にキレられねえよ。」

お前、あいつにしよつちゆうキレられてる俺をなんだと思ってたんだ？」

……ああもう、俺は先生の言う通りアホだし、俺が自分で思った以上にバカだ。

あの人は先生と同じとまではいかなくて、俺に甘えてくれたんだろうが。

\* \* \*

自分の壮絶な勘違いと、俺は泣かせて心配をかけた挙句に「杖になる」という約束もまた果てせてなかったことを、せっかく甘えてくれたのにそれを支えられずただ狼狽えるだけだったことに自己嫌悪が襲うが、先生の続けられた言葉でそれも吹っ飛んだ。

「お前らさあ、俺が言うのもなんだけど、マジで何で人の話を聞かずに自分らの中で自己完結するんだよ？」

エヒメもお前が謝って全部自分が悪いで終わらせんのは、自分なんかどうでもいいから面倒くさがって、さっさと話を終わらせたいからって思い込んでたぞ」

あまりに想定外すぎる解釈に、思わず顔を上げて前のめりで先生に「何がどうなってそんな解釈に!？」と問い詰めてしまった。

エヒメさん、誤解です！俺ですが、先生の言う通り明後日どころか真逆の方向ですそれ！

「俺が知るか！だからそういうのを訊いて、アホな決めつけしてんじゃないねー！ってキレて、そんで誤解を解いてこい！」

お前ら本当に面倒くせえんだよ!!

嫌われるのが怖いんなら、初めから人と関わろうとすんな！嫌われてももっかい好かれ直す気もねー奴にエヒメはやらねーからな!!」  
思わず先生の名言をまたノートにメモしようとするが、今日はノートを持ってきておらず、そしてそんなことをしてる場合ではなかった。

何もかもがあまりに先生の言う通りだ。

嫌われるのが怖いのなら、人と関わらなければいい。

誰かと関わりたいのなら、自分が傷つく覚悟を持ち、相手を傷つける可能性を知り、そして傷ついてもまだその人と関わりたいのなら、相手の傷を癒せる人間になるべきだ。

許されなくてもいい？

俺の事が嫌いでもいい？

あの笑顔が、俺に向けられなくてもいい？

そんなの嘘だ。

あの人に嫌われたからって諦めきれるような気持じゃないから、続ったのだろう。

もう一度、チャンス。彼女を守る権利をくださいと希ったのだろう。

その先でまた、許されることを期待したんだろうが。

「……先生、ご迷惑をおかけしてすみません！　そして、助言をありがとうございます!!」

俺はまず土下座で、俺の勘違いでエヒメさんの怒りも悲しみもまたさらに長引かせた事、そのことで先生に心配をかけた事を詫び、こんな愚かな俺を見捨てずに助言を与えてくれた礼を伝える。

そして、先生からの返答を待たずに立ち上がる。

「ケンカは出来るかどうかはわかりませんが、エヒメさんと話してきます!」

本音で俺が何を思い、どうしてあの日、エヒメさんの願いを無視してしまったのか、どうして俺が謝ったかを全部、話します!」

もう勘違いなどされないように、全部話します!!」

俺の宣言に、先生は少しだけ笑って言ってくれた。

「おう。ついでにあいつに不満やら、直してほしい所とかして欲しいことがあるんなら、それも全部ぶちまけろ」

「はい!　不満はありませんが、言いたいことは全部言ってみます!」

結婚してくださいと言ってみます!!」

「それは言わんでいい!!」

先生から叱責されて、自分のとんでもない発言に気付く。

危うく、ケンカや本音トークどころではなくなるところだった。

お前らがケンカするんかい

アパートの屋上のフェンスにもたれかかって、私は膝を抱えて座り込む。

「……お兄ちゃん、結論が大きっぱすぎだよ」

お兄ちゃんがまとめてくれた内容は、私のグチャグチャに頭をかき乱していたものをすっきり整理してくれた。

そうだ。私は、ジエノスさんともっと仲良くなりたいたいんだ。

仲良くなりたい、好きだからこそ言いたいことがたくさんあって、それがあの日に溢れ出て、私は今それを全く抑えることが出来てなかったんだ。

ジエノスさんの自分自身を人間扱いしない所が、あの人が好きで大切だからこそ許せなくて、大嫌いで叫んでしまった。

そのことが後悔だらけなのに、きつと言うのを我慢しても後悔してたんだろなあ。

言う資格がなくても、言いたかった。

自分を大切にしてくれなかった。

何で自分を大切にしてくれないのか、その理由を知りたかった。

そうやって自分のして欲しいことだらけで、それを悪いと思ってるからこそ、あの人にも言ってくれなかった。

私の悪いところも、不満も、直したいから言ってくれなかったのに、あの人はずっと、自分が悪いと言って謝ったのが、嫌で嫌で仕方なくて、八つ当たりをして、その八つ当たりで自己嫌悪するのに、ジエノスさんがその八つ当たりすら自分の所為だって思って謝って、またそれが嫌での無限ループ。

心の中で乱れてグチャグチャにもつれて絡まっていたものが、すっきりしたのは良い。私が何を求めていたのか、私の反省すべきところはどこだったか、わかった事はいいことだ。

……でもね、お兄ちゃん。

「冷静になった頭で改めて『ケンカしろ』って、何の羞恥プレイ？」

自分で望んでおきながら、ちよつと今から起こるであろう本音トー

クの恥ずかしさに悶絶する。

いやだつて、頭に血が上つてる時ならともかく、すつきり落ち着いた頭で考えたら、私、ものすごく恥ずかしいこと言わなくちやいけないじゃん！

何？ 私、ジエノスさんが大好きでそしてこれからもずっと大好きになりたいから、嫌いなどころを直してください！ 私もジエノスさんに好きになつてもらいたいから、悪いところは直すから言つてください！ つて言えばいいの？

もうこれ、ケンカじゃなくてただの告白!! 絶対に何か勘違いされる！ ジエノスさんを困らせるだけならまだしも、引かれたら私、立ち直れないんですけど!!

お兄ちゃんに迷惑をかけて、お兄ちゃんに協力してもらつておいてなんだけど、私は何か今までとは全く別の意味と理由で、このまま逃げてしまいたい気持ちでいっぱいだった。

うん。人に迷惑をかけておいて「逃げたい」と思った私の罰なのかな？

今日のこの後の出来事全ては。

\* \* \*

「はあ」

「一人で何、塞ぎこんでるんだ。うつとうしい」

「へ?」

しゃがみこんで、膝を抱えて俯いて溜息をついた私に、頭上から声をかけられた。

ジエノスさんじゃなくて、久しぶりだけど聞き覚えのある声。

顔を上げると、人の顔と名前を覚えるのが苦手な私でも、めったに会わない人だけど、絶対に忘れられない人がそこにいた。

「……ソニツクさん?」

「何だその顔は? 不細工だな」

わかりきった事を問いかけると、ソニツクさんは呆れたように一回鼻を鳴らして、辛辣な言葉を投げつけられた。

「不細工なのは自前です。放つておいてください」



さすがにズバツと言われてちよつと傷つき、私が唇を尖らせて言うけど、この人がそういう反応で少しでも「言い過ぎた」とか思ってくれるわけがない。

私の言葉に彼は、実に面倒くさそうな顔をしてさらに言い返す。

「その腫れた目は自前じゃないだろうが。自分から不細工になっておいて、人の言葉で拗ねるくらいならそもそも泣くな」

……この人はこういう所があるから、危ない人だつてわかっているも、お兄ちゃんの敵だつて知っていても、嫌いになれないんだよね。

心配も慰めもしてくれないけど、前々からこの人は細やかなところをちゃんと見て、気付いてくれる。

プレッシャーに弱くて、慰めや心配をされたらいっぱいになるくせに、誰にも気づいてももらえないとそれはそれで落ち込む面倒くさい私にとって、この対応が実は一番楽で助かったりする。

「そうですね」

もちろん、私のそんな心情なんか知らず、ただ単に自分が気付いたことを言いたかったから指摘しただけのソニックさんは、私が笑って同意したのを不思議そうな顔で見下ろしていた。

「ところで、ソニックさんはどうしてここに？」

とりあえず私は立ち上がって、来訪理由を尋ねてみた。

まあ、大体わかってるけど。私服じゃなくて体のラインを強調どころか、もうボディペイントかっつてくらいのぴっちりなこの忍者装束で、私たち兄妹とジェノスさんぐらいいしか住んでいないゴーストタウンにたまたま偶然でこの人がやってくるわけがない。

「わかり切つてることをいちいち訊くな」

「そうですね。でも、よく家がわかりましたね。それだけ、お兄ちゃんが大好きですか？」

お兄ちゃんと戦いに来たことくらいわかっている。ここで私と話しているのも、たまたま屋上に私がいるのを見つけて、お兄ちゃんが面倒くさがって逃げない保険の為に捕獲しておきたかったことであることも。

でもちよつとくらい、世間話くらいしてもいいじゃないという文句

と要望も兼ねて、私が冗談を口にしたら本気でソニックさんに嫌がられた。

「気色の悪い発言をするな」

「あはは、ごめんなさい。でも、お兄ちゃんに勝つことに執着してお兄ちゃんを求めているソニックさんって、見ようによつてはお兄ちゃんに恋してるみたい」

「貴様、よつぽどその舌はいらんようだな」

顔を引き攣らせて苦無を取り出したので、さすがに謝っておいた。でも、思っちゃったんだもん。自分でも言っておいて気色悪いと思うけど、プリズナーさんとジェノスさんの「恋」の定義がある意味で、ソニックさんがお兄ちゃんに対しての感情とぴったり一致するなーって。

まあ、大前提としてソニックさんの「求める心」も、「命に代えても貫くこと」も、憎悪から来てるってのがあるけどね。

言い訳でそんなことを話したら、ソニックさんは恋と愛の違いに関して、鼻で笑った。

「アホらしい。恋愛なんぞ、性欲を詩的に表現しただけだろう」

あなたはそう言うタイプですよね。絶対に言うと思った。

「リ्यूーノスケですな」

「何だ、知ってたのか」

私がソニックさんの言葉の元ネタである文豪を口にしたら、素で思ったことを言った偶然の一致ではなくて、わかって使ったみたい。

じゃあ、これは知ってるのかな？ 知ったうえで、使ったのかな？ 「ソニックさん、その言葉はその部分だけ有名になってしまったけど、続きがあるそうですよ。」

『恋愛はただ性欲の詩的表現を受けたものである。少なくとも詩的表現を受けない性欲は、恋愛と呼ぶに値しない』

……それは恋愛を馬鹿にする言葉じゃなくて、むしろ恋愛を馬鹿にする人を馬鹿にしてる言葉ですよ」

私の補足に、ソニックさんは続きを知らなかったらしく軽く目を見開いて驚いていた。

その後、恥ずかしそうに眼をそらして「自分の考えは前半だけだ」とでも言うかと思ったら、ソニックさんはそのまま数秒間私と目を合わせて、そして一歩踏み出した。

指先まで黒衣に包まれた手が私の頬に触れて、ソニックさんは少しだけ面白そうに口の端を吊り上げて言った。

「そうかもしれないな」

まさかの否定じゃなくて同意に驚いたけど、この人が何を思って同意したのかという、ものすごく気になる部分は訊けなかった。

「貴様何者だ!? エヒメさんから離れる!!」

……忘れてたというか、現実逃避してた。そうだよ私はこの人を待ってただよ。

でもこのタイミングで来ないで欲しかったなジェノスさん!!

\* \* \*

ジェノスさんは焼却砲を構えて、しよっぱなから完全臨戦態勢。

そしてその態勢のまま、私のすぐ傍というか私に触れてる人が誰なのかを認識して、大真面目な顔と声で言った。

「! 貴様はあの時の変質者!!」

「誰が変質者だ!!」

……ああ、そういえば二人は完全な初対面じゃなくて、互いがどういふ相手か認識してないまま、深海王の時に一回出会ったらしいことを思い出した。

その時、ソニックさんが威風堂々なぐらいに全裸だったらしいことも思い出し、思わず遠い目になる。

ソニックさん、怒って否定してるけど、ぶっちゃけ全裸じゃなくて今の格好でも、正直割と変質者です。

「エヒメさん! その変質者から今すぐに離れてください!!」

ジェノスさんの言葉は彼の認識からして正しい判断なんだけど、私にとってはソニックさんは何だかんだで恩人だし、警戒する必要のない人だし、でもジェノスさんに「この人がソニックさんです」と言っても、お兄ちゃんの敵と認識して余計に排除しそう。

私が困惑してどうしたらいいかわかんなくなつてオロオロしてた

ら、ソニックさんがジェノスさんに対してうつとうしそうに顔を歪めて、私に「あいつはお前の何なんだ？」と尋ねてきた。

「ジェノスさんはお兄ちゃんのお弟子さんで、私の……」

「つまりは金魚の糞の雑魚か」

私の説明を全部は聞かず、ソニックさんは勝手にまとめて、そして私の首を掴んで引き寄せ、ジェノスさんと対峙する。

「！ エヒメさんを離せ!!」

「五月蠅い。雑魚に用はない。」

俺は、音速のソニック。サイタマのライバルだ。今日は決着を着けに来た。わかつたらどけ。邪魔だ」

私を人質に取られたと思ったジェノスさんが、空気がピリピリとして肌が痛くなるほどの怒気と殺気を放って叫ぶけど、ソニックさんはどこ吹く風と言わんばかりの態度で自分の要求を口にする。

ジェノスさんはソニックさんの名を聞いて、そして彼には珍しい嘲けるような笑みで口元を歪ませて言う。

「音速のソニック（笑）。貴様だったのか変質者め。」

……その手を今すぐに離せば、エヒメさんの恩人であることを考慮して、せめて楽に死なせてやる」

「ジェノスさん、出来ればもつと考慮と譲歩をして欲しい!!」

思わず、どう足掻いてももう殺すのが決定事項になつてることにツツコミを入れてから、何とかジェノスさんを説得する。

「ジェノスさん！ 私は大丈夫ですから！ この人はそこまで警戒する必要のある人じゃ……」

「エヒメさん！ 貴女は俺とそいつ、どちらが大事なんですか!?!」

「はいっ!?!」

私の言葉を遮って、何かすごく恥ずかしいセリフが聞こえてきた！  
空耳だよね!?!

「答えてください！ 俺は……ずっと貴女がそいつの事を語るのが、恩人で大切な人だと語るのが嫌でした!!」

俺よりも……そいつの方が、先生の命を狙うそいつの方が貴女にとって重要で大切な人なんですか!?!」

なんかさらに恥ずかしいこと言われたーっ！

このタイミングで、ソニックさんの前で本音トークするの!? 羞恥プレイのレベルが格段に上がった！

「……馬鹿なのかあのガキは」

いやもうジェノスさんの他意のない大真面目なセリフだろうけど、どこの少女漫画よ? なセリフに顔から火が出そうになっていたら、ソニックさんが呆れ果てたように言う。

「俺に決まってるだろ。守るところか今も痕が残る怪我を負わせたポソコツが、何を思いあがってるんだ?」

こっちも何言ってるんですかソニックさん!? 何故、ノツたし!!

ソニックさんの顔を見たら、ニヤニヤとチエシヤ猫のように笑って、大シヨックを受けてるジェノスさんを見てる。完全に面白がってるよこの人!!

「ジェノスさん、気にしないでいいですから!! ソニックさんが勝手に言ってるだけですから!!」

とりあえず私がジェノスさんに誤解を解いておくと、私の首を掴む手が少しだけ力を増して、ソニックさんが不愉快そうに言う。

「何だ、エヒメ。お前はあの役立たずの方が、俺より頼りになると言う気か?」

ソニックさん、何でいきなり張り合いだしたし!? 何なの、最強にこだわってるのは知ってるけど、こんな時も一番じやなきや嫌なの!! 知らないけどあなた、私より年上だよな! 子供か!!

「……あなたの場合は強い弱い以前に、性格の問題で頼りにはしてません。頼りにしたら、それこそあなたは私を見捨てるでしょうが」

軽く首を絞めあげられつつも私がかすれた声で答えると、ソニックさんが「それもそうだな」と納得して力を緩めた。

もう何なのこの状況は!?

そう叫びたい気持ちでいっぱいいいっぱいなのに、状況は私の理解を置いてけぼりにして進んでいく。

私の首にかける右手の力が緩むと同時に、いきなりソニックさんの左腕が私の腰に回って、そのまま抱き上げられて跳ぶ。

ソニックさんが直前までいたその場所に、ジェノスさんが飛び込んできて、フェンスは壊れて地面も大きくえぐられた。

「はっ！ あのポンコツはお前がどうなつてもいいみたいだな」

「そんな訳ないだろう！ 今すぐにその人から離れるストーカー忍者！！」

私を抱えたまま、ソニックさんはその辺の建物から跳び回って手裏剣やらなんやらをジェノスさんに投げつけ、ジェノスさんはそれを避けたり破壊しながら、私とソニックさんを追い掛け回す。

……私の今の状況は、何なの？

あれかな？

私の為に争わないで！ って奴？

いや、違うでしょこの状況は。そもそもこの二人、どっちかが余計なことを言わなければこの争いは起こらなかったよね？

「先生のライバルを名乗るだけでもおこがましい恥知らずだというのに、軽々しくエヒメさんに触れるな！ 今すぐに離れろ！ この露出狂変質者！！」

「ヒーローごっこにうつつを抜かして、結局なにも守れなかった無能が吠えるな！ ガキは帰って母親の乳でも吸ってろ！！」

あなた達、私をダシに争うな。

## 彼女の災難、男どもの役得

クソ生意気で気に入らないから、サイタマより先に排除してやろうと思っただけだ。

エヒメを連れまわすのは、サイタマを逃がさないための保険であると同時に、あまりに分かりやすく青臭いあのサイボーグの反応が面白かっただけだ。

それ以外の意味などない。

それ以外の意図なんか、ない。

……ないが、さすがにこの反応はムカつくな。

エヒメ、お前は何で俺の腕の中でさつきからずっと無言で遠い目をしてるんだ!?! もう少し何か反応はないのか!?!

キヤーキヤー騒がれるのはごめんだが、何でこいつはこんなにも他人事なんだ!?!

この腕の中の女のあまりにも大人しいと言うより、俺たちに対して呆れ果てて、ただじつとして嵐が過ぎ去るのを待っている反応にムカついていたら、耳元にサイボーグがブーストか何かで飛ばした拳がすすめる。

「ちっ!」

サイボーグがワイヤーで自分の拳を回収して、惜しいと言わんばかりに舌を打ったことに、こっちも舌打ちする。

遊んでやってる俺のスピードに追い付けているくらいで、良い気になるなクソガキが!

「そんなにこいつが大事なら、しっかり受け取れよポンコツ!!」

「え!?! ちよっ!?! ソニックさんの人でなしいっ!!」

「エヒメさん!」

ビルから工場らしき建物に飛び移っている最中、エヒメを宙に放り出してやると、さすがにエヒメも目を見開いて俺を睨みつけ、サイボーグは俺のことなど忘れてエヒメを受け止めようと、肩のブーストを起動させた。

サイボーグがエヒメを受け止めた瞬間、爆裂手裏剣でも投げつけて

エヒメごと排除しても良かったが、それだと俺の気が済まんから、サイボーグがエヒメを抱き留める直前に、エヒメを奪ってついでに奴の頭を踏みつけてやる。

俺のスピードがああの程度だと思われるのが無性に気に入らないから、速さを見せつけてやった。

ついでに、何も守れない「ヒーロー」の無能さも思い知っただろう。

お前は何も守れない。

お前が「命を懸けても守る」ものも、「命に代えても貫く」ことも、お前の手の中にはない。

工場の敷地内に着地した俺は、それを奴に見せつける。

俺の腕の中に納まるエヒメを見せつけた。

「どうした？ いらんのか？」

「……し、死ぬかと思った……」

エヒメの恐怖と驚愕でバクバク言ってる心臓の鼓動を無視して同じく着地したサイボーグに尋ねてやると、奴は顔を上げて睨み付け……そのまま一瞬目を見開いて固まった。

あまりに隙だらけだが予想外の反応に俺も一瞬戸惑うが、奴が硬直したのはほんの刹那。

次の瞬間には、殺気が先ほどまでとは比べ物にならないほどに膨れ上がり、両手をこつちに向けて突き出し、ガシャガシャと音を立てて変形させ、俺に向かって叫んだ。

「その手を今すぐに離せ変質者！ いや、性犯罪者!!」

「はあ!!」

変質者というだけでも身に覚えのない中傷だと言うのに、さらにレベルが上がったことに怒りを覚えたが、俺の腕の中でエヒメが「あ」といきなり気の抜ける声を上げた。

「あ……あの……ソニツクさん……手……」

「はあ？ 手？ ……あ」

そしてそのまま急に、妙にしおらしい態度というか声音になって、「手」と言うので、そのまま自分の手を見てやっと、俺の右手が今現在、エヒメのどこをしつかりつかんでるかを自覚し、同じような声を上げ



た。

ああ、こいつの鼓動がそりやはつきり伝わるわけだ。

俺の右手は後ろから回り込むようにしっかりとがつり、エヒメの胸をわし掴んでいた。

今日は今までと同じく露出はないのに、今までとは違って乳のかさを強調する格好だから、しっかりと掴む指で形が変わる柔らかさもよく見える。なかなか、視覚の暴力というにふさわしい光景だった。

「何で指摘されてからわし掴むんですかーっ!!」

「うおっ!」

エヒメが叫びながら身をねじって振り向きざまに放ったビンタを、間一髪で避ける。

正直、若干の混乱と本能の暴走で油断していたとはいえ、あいつのビンタにはかなり本気で避けた。くそっ、なんだかんだでさすがはサイタマの妹と認めざる得ないな。

俺が避けてエヒメから手を離れたことで、あいつはテレポートで俺から離れて、サイボーグの横に出現した。

「エヒメさん!!」

砲門だったらしい腕を元の腕に戻して、トマトみたいな顔になって自分の胸を隠すように両手で抱いてるエヒメを自分の方に庇うように抱き寄せる。

……俺から逃げ出しておいて、そいつに抱き寄せられるのはいいつてか。

……ああ。無性に気に入らない。

俺から奪い返すことなどできなかつたくせに、俺に追いつくことなどできなかつたくせに、俺に一発も攻撃を当てれなかつたくせに、自分が守ってやってるといふ面をしてそいつに触れるクソガキが、無性に気に入らない。

そんなクソガキの元に、真っ先に向って行ったあいつが気に入らない!!

「エヒメさん! 大丈夫ですか!? 少しだけ待っていてください!

今すぐにあの性犯罪者を消し炭、いえ、蒸発させますから!!」

「そこまでは望んでません!! アフロぐらいでお願いしますす!」

「地味に厭な注文を付けるな! そもそもそんなもんをぶら下げてるお前が悪い!!」

「どんな逆ギレ!?!」

サイボーグが俺に向かってまた腕を向けてきたのを、止めてるんだか嫌がらせの注文何だかよくわからんことをエヒメが叫んだから、思わず逆ギレしてしまった。

逆ギレだとは自覚してるが、謝る気はさらさらない。

あんなもん、手の内になれば揉むわ。

「そもそもなんだ、今更になってうぶい反応しやがって。散々、抱き着いて押し付けてきたのはそっちだろうが」

俺がついでにテレポートの時に躊躇なく抱き着かれたことを暴露してやると、サイボーグが青臭い嫉妬と憎悪でさらに殺気を増幅させる。

が、エヒメの方はただでさえ赤い顔をさらに赤くさせて、「そんなこととして……」と何故か途中で言葉が止まって、固まった。

……ちよつ、お前、まさか……

「……………え? あ、当たってたん、ですか?」

「嘘だろお前!?!」

「嘘でしようエヒメさん!?!」

サイボーグと叫びが重なったが、そんなことはどうでもいい! 気にしてなかったんじゃないかと、自覚がなかったのか!?

ド貧乳ならともかく、そのサイズで!?! 嘘だろ!?!

エヒメは自分のテレポートでしてきたことを鮮明に思い出したのか、頭から湯気が出そうなぐらいに赤くなって、涙目でサイボーグに絶って訊いた。

「え? あ、当たってたんですか? ずっと?」

「えっ!?! あ……そ、その……すみません!!」

狼狽えつつも、さすがに嘘についても慰めにはならんからかサイボーグが認めると、エヒメは「何で言ってくれなかったんですか!?!」と逆ギレしだした。

男がそんな美味しい状況で言う訳ないだろ。

っていうか、そのサイボーグにそんなにしょっちゅう引つ付いて、テレポートしてたのかお前は。

俺の中でまたふつふつと、怒りとも苛立ちとも言い表すには微妙な感情が沸き上がる。

だが、俺がその感情をどちらかにぶつける前に、エヒメの逆ギレに対してサイボーグが目を泳がせたことでエヒメは全てを悟ったのか、顔の赤みが少しだが治まった代わりに軽蔑するようなジト目になって、まず一步サイボーグから身を引いて、そのまま10メートルほど後方にテレポートした。

「エヒメさん!？」

「あーははははははははははっ!!」

エヒメの対応と、それに焦るクソガキの反応に俺の中に湧き上がったものが吹き飛んで、思わず腹を抱えて笑った。

今の俺の心境を、端的に表すと「ざまあwwwwww」だろう。

そのことが気に食わなかったのか、エヒメの無自覚発覚で思わず忘れて薄めてしまっていた殺気を復活させて、俺に掌を向けてきた。

そこにある砲門が光る。レーザーか何かかを撃ち出す気か。

どちらにしろ、真つ直ぐに正面から撃ち出す前にその腕を落としてやろうと、俺が構えた瞬間、心理的にも物理的にも引いて距離を取っていたエヒメがまた、テレポートで俺と奴の間に現れて叫んだ。

「ジエノスさん! やめてー!」

一瞬、エヒメの言葉にサイボーグの方は迷うが、俺は気にせずそのまま奴の腕、ついでに頭も落としてやろうかと刀に手をかけ、それに気づいたのかサイボーグの方も砲門の光をさらに強める。

しかし、エヒメの言葉で俺たちは戦いを止めざるをえなくなった。

こいつ、俺の事を心配したわけじゃなかった。

「ここ、元化学工場です! 火はやめて!!」

「なっ!？」

言われても既に止められなかったからか、サイボーグは腕を上げて上空に火砲をぶっ放し、俺の方もすでに走り出していたので止められ

ず、暴発されても厄介なので、刀を振るわずそのままエヒメとサイボーグの横を通り過ぎて止まった。

……通り過ぎた際、まだまだ本気じゃなかったとはいえ俺のスピードがなかなか強力な風を生んだ。

その風が、まあ、あれだ。うん。サイボーグが火砲を上空に撃ち出した所為で、熱かったのとまぶしかったから両手で頭や目を庇ったのも、あいつにとっては災難だったな。

ぶわりと、風を含んでめくれ上がり、それが元通りになってもしばらく、俺たちは無言だった。

エヒメは今更、元通りになってからスカートを押さえつけて、また湯気でも出しそうな顔になって、俺たちに訊いた。

「……み、見ましたか？」

「ガキ臭い水玉の事か？」

「放っておいてください!!」

正直に答えたら、キレられた。

見ましたかってお前、スカートのの中に入れてるシャツの裾もへそも見える勢いでめくれ上がったのに、わざわざ聞くな。

「というか、俺よりその木偶の方が至近距離で見てるだろうが」

そのことを指摘すると、腕を上空にあげた体勢のまま固まっていたサイボーグが、ハッと現状に気が付きどもりながら、エヒメに言った。

「だ、大丈夫です、エヒメさん!! 可愛かったです!!」

「感想なんて聞いてない!!」

敬語もなくして、エヒメがブチ切れた。

当たり前だ。何を言ってるんだあのガキは。パニくりすぎだろ。いや、喜びすぎなのか？

「もう知らない! ジエノスさんもソニックさんも変態!!」

「エヒメさん!!」

「俺ごと変態扱いするな!!」

「お前はどうか考えても変態だろうが! 露出狂の性犯罪者が!!」

怒りと羞恥でテレポートを使えることを忘れてるのか、それとも怒りと羞恥で集中できないから使えないのか、エヒメは走ってどっかに

行き、サイボーグがそれを追いかける。

別に俺としては、あいつらの事は放っておいてサイタマの所に向つても良かったのだが、俺はサイボーグに攻撃を仕掛けながら、エヒメを追った。

住所を掴み、いつでも勝負を挑めるサイタマよりも、今はこいつらを引き離したくて仕方がなかった。

守れもしないくせに、俺より弱いくせに、あの光に、薄闇の近くに、いることが気に食わない。

こいつのような無能の所為で、薄闇が完全な闇になることが、あの日のようにあの目から光が喪われることが気に食わなくて仕方がなかった。

その光を消すのは俺だ。

その女を壊すのも、泣かせるのも、絶望させるのも、困らせるのも、拗ねさせるのも、笑わせるのも、か細い光を、薄闇を守る役割も、お前のようなガキには絶対に譲らない。

お前のものになっても、譲らない！

## 兄VS妹

ジェノスを送り出して20分ほど経つけど、エヒメもジェノスもまだ帰ってこない。

どっちもなんかグダグダと考える奴らだから、ケンカというか本音トークはまたなんか小難しい話を長々と続けてるだけだつてことは想像ついてるんだけど……ジェノスの奴、「言いたいことを全部ぶちまける」つて言つたからつて、マジで告白どころかプロポーズしてんじやねーだろうな。

やめろよ、マジで。告白ぐらいならあのアホは多分斜め上に解釈してスルー出来るけど、プロポーズはさすがにパニック起こすぞ。

まあ、そんなパニックくらいなら後で俺が「あれはジェノス渾身の冗談だ」つて言つてやれば信じるから別に良いか。

すまん、ジェノス。付き合うのは今からでもいいけど、さすがにせめて成人するまでは嫁にはやらん。

ジェノスよりも、エヒメが問題だよな。あいつはどこまで何を話すのか。

今更ジェノスはエヒメが昔、どんな目に遭つてどんな思いをしたかを知つて、エヒメに対して引くとは思わねえ。

ただどういう反応をするのか、なんて答えるのか、そしてどんな答えと反応がエヒメにとっての「正解」なのか、実は俺も未だに分かっていない。

ジェノスの奴は俺がエヒメを助けたとか思つてるけど、俺はあいつが逃げ出した日からずっと一緒にいてやることしかしてない。

それ以外、出来なかった。

だいたいこの事情は分かつてるつもりだけど、肝心なエヒメ自身の気持ちとかを俺は全然わかつていない。

物を落とすとか何かを片付け忘れるとかそういう些細な失敗どころか、足音を出しただけでこの世の終わりみたいな顔をして、「迷惑かけてごめんなさい」と謝るあいつを見ていたら、あいつに「何があった?」なんて傷口を抉つたあげくに塩を塗りこむようなこと、出来な

かった。

俺にできたのは、何も聞かずに俺がバカやることであいつの頭の中を、昔の事から俺への心配とか怒りとか呆れでいっぱいにして忘れさせてやることと、……「あいつ」に奪い尽くされて見失った、エヒメの自信とか自分の価値とかを認め直させるために、好きなことをやらせて、褒めてやったくらいだ。

エヒメの本音に……あいつの絶望に俺はまだ向き合っていない。だから、なんていえないのか俺にはわからない。

……ジエノスは悪くないとわかっていても、あいつが昔のことを思い出して、昔みたいになっちゃったら、たぶん俺はジエノスを許せねーだろうな。

そう思っている、向き合っていない俺では助言なんて出来ない。師匠としてもヒーローとしても、兄としても本当にダメだな、俺。

でも、これでも実は期待してるんだぜ、ジエノス。

エヒメが俺と暮らすようになってから、「面倒くさいけど後味悪いから」じゃなくて、「助けないと死んでしまいたいくらいに後悔するから」で助けようとしたのも、俺に「助けて」って言ったのも、お前が初めてなんだぜ。

ただ、俺以外に付き合いがあるのがお前だけだったってのもあるだろうけど、それでもあんな風に俺相手みたいにキレたのを見たのは、エヒメが人間嫌いになる前、子供の頃も含めてお前が初めてなんだ。

俺は長い話も難しい話も嫌いだから、細かい部分を見落として「それの何がそんなにつらいんだ？」って思ってしまうことはよくあるから、だからなんだかんだでエヒメと似た者同士なお前ならエヒメが望む答えを出してくれるんじゃないかな？ とか思いながらゲームやってたら、キングのデータに上書きでセーブしてしまった……。

やべえ。勝手にあいつの部屋から持ってきたうえに、データ消すつて……まあいいか……つてよくねーよな……

俺が焦っていたら、玄関のチャイムが鳴って知らん声が何か言ってる。誰だよこの忙しい時に！

「あ、新聞なら間に合ってます」

「我々はセールスではない！ お前よりランクが上のヒーローだ！」  
玄関に出てとりあえず断っておいたら怒鳴られた。

俺に怒鳴る男を中央にいる女が制して、そして口を開く。

「はじめまして、新人のサイタマさん。」

私は地獄のフブキ……と言えばわかるかしら？」

「え？ 全然わからん。誰？」

正直に答えたらちよつと間を置いてから、やたらと下まつげが長い男がB級1位だつてことを教えてくれた。

だからとりあえず労つてから何の用かを聞いてみたら、またこいつらは間を開ける。

何なんだよお前ら。俺に用があるならさっさと見えよ。

とりあえず下まつげがフブキつて奴に挨拶するのがしきたりだとかいうから、言われた通りに挨拶したらフブキに「ヒーロー業界にも派閥がある」という事を聞かされた。

なんかグダグダ話されて意味わからなかったし、俺はキングのゲームのデータをどうすべきかという問題で忙しいから帰つてもらおうとしたら、フブキがようやく本題を話し始める。

「私の傘下に入りなさい。そうすればB級上位のポジションを守つてあげるわ」

一瞬意味がわからなかったが、どうも自分の手下集め兼、新人潰しの一環らしい。

もちろん俺は断る。何でヒーローに上下関係が必要なんだよ？

断ればすぐさまフブキの手下の男二人が襲い掛かってくると思つてたから、俺は拳を握つてすぐさま吹っ飛ばせるようにしてたけど、その予想はちよつと外れた。

「……そう。じゃあ、あなたはいいわ」

……あなた「は」？

「あなたの妹、テレポーターらしいわね。その子を渡したら、あなたは私の傘下に入らなくても邪魔しないであげる。協力はしないけどね。」

妹さんの衣食住はもちろん保証してあげるし、彼女の働き次第では、学校とかも援助してあげるわ。どう？ 破格の条件でしょう？」



……こいつは、何を言ってるんだ？

沸き上がった感情を、何とか押さえつける。キレるな。思い出すな。

「あいつ」の事なんか、思い出すな。

「あいつ」よりこの女は真つ正直に切り出すだけマシだ。

……だけど、絶対に許さねえ。

エヒメを道具みたいに扱ったこと、利用させると堂々と言い切った事を許さない。

何とか押さえつけたつもりだけど、俺のマジギレは漏れ出ていたらしくフブキ達は顔を青くさせてた。

それでもさすがはリーダーか、フブキは虚勢を張って俺を睨みつけて皮肉をぶつける。

「あら？　まるで妹思いな普通のお兄ちゃんね。こんなゴーストタウンに妹を閉じ込めて、利用してる人には見えないわ。演技が上手なのに、世渡りは下手なのね」

「はあ？」

思わず、怒りが吹っ飛んで困惑が声に出た。

言いがかりというか、何だその決めつけ？　何で俺がエヒメを利用どころか、こんなところに閉じ込めてるってことになってんだよ？

「何だその話？　勝手に作んな。そもそも、テレポートを使えるあいつをどうやって閉じ込めるんだよ？」

俺が素で疑問なところを突っ込むと、フブキが目を丸くする。

「……あなた、深海王の時に妹さえも利用して犠牲にしてとどめを刺したじゃない」

きよとんとした顔で答えるフブキは、たぶん嫌味ではなくて素だった。

そんで言われて、思い出す。

あー、そういや言ったわ。無免やジェノスやエヒメを馬鹿にするムカつく奴がいたから、そんな感じのことを言ったわ、俺。

「いや、あれ嘘だから。むしろ、あの後アホなことすんじゃないってめちゃくちゃ怒ったから。」

そういう訳で、妹もお前にはやらん。帰れ」

とりあえず誤解の理由がわかって俺はすつきりしたから、話を終わらす。

その誤解を前提にフブキの話を思い出すと、むしろこいつは最低な兄から妹を救い出そうとしてくれてたこともわかったから、怒りもなくなつた。

ごめんなー。そっちが誤解してたとはいえ、こっちも誤解して。

さすがに新人潰しする連中に口に出して謝る気は起きなかつたから、心の中だけで謝つて部屋に戻ろうとしたら、まだ話があつたのかフブキが「ちよつと待ちなさい！」って声をかける。

「嘘つてどういうことよ!? テレポーターだとか、S級にスカウトされたつてのも嘘なの!？」

「いや、そこら辺は本ただけど? 嘘つてのは俺はあいつのことを利用してないし、これからだつてする気はねえつてことぐらい」

俺の答えの何がそんなに不思議なのか、またフブキは目を見開いてポカンとする。

そして、こいつは訳が分からないと言いたげな顔のまま叫んだ。

「あなたは自分より出来のいい妹がいて、何とも思わないの!? コンプレックスを感じないの!？」

利用もしなければ、排斥しようともしない! どうして傍に置いておけるの!？」

「いや、普通に妹だからだけど?」

お前、何言つてるんだ? 俺の答えにまた絶句すんなよ。俺の方が訳わかんねーだけど。

「……マツゲ! 山猿!」

今後一切のヒーロー活動できないように、痛めつけてあげなさい!」

フブキは俺の言葉にまたポカンとした後、唇を噛みしめて男二人に命令した。

まあ、そいつらはすぐに吹っ飛ばしておいた。女を殴るのは気が進まないけど、面倒だからこいつも軽く殴つて気絶させようかなと思

ながらも、俺はフブキに言う。

「お前それじゃ生き残れねーぞ、フブキ」

なーんかこの女、話長いしクソ生意気でムカつくけど、放っておけねーんだよな。

\* \* \*

俺が手下を吹っ飛ばしたことにキレたのか、フブキも臨戦態勢に入る。

肩にかけてあったコートを落とす、代わりにその辺の砂利を浮かび上がらせた。

こいつも超能力者か。

似たような攻撃はボロスの船でもう喰らったことがあったから、一応やめとけとは言ったんだけどフブキの方は聞きやしねえ。

「死なない程度に殺してあげる！」とか言いながら、その辺にある砂利を俺に向ってぶつけて吹っ飛ばし、竜巻みたいに回転させながら俺の周囲を囲んで、やっぱり砂利をぶつけまくる。

ボロスの部下より攻撃方法が細やかというか、良くも悪くも女らしいなーとか思いながら、普通に俺はその竜巻から抜け出して、降りてきたフブキの後ろに回った。

「ヒステリー女か。トップの器じゃねーな」

俺の声に気付いてフブキが振り返るが、俺はそのまま間合いを詰める。

「お前は生き残れない。ヒーローをわかってない」

そしてそのまま言ってやる。

「世の中にはとんでもなく強くて悪い奴がたくさんいる。そいつらに立ち向かうのが、ヒーローだ」

お前の間違いを、指摘してやる。

「たとえば、たった独りでもな」

たとえば、自分を慕って信じてくれる弟子がいても。

いつまでも心配して、不安を抱えながら待つ妹がいても。

そいつらを大切に思うからこそ、独りで戦わなくちゃいけないんだ。

「自分より弱い手下を集めて強くなった気でいるお前には無理だ。

そのままじゃいつか泣かされる。強い怪人が出て来ても、手下は助けちゃくれねーぞ」

ここまで勢いで言っつて、ようやく俺自身がこいつをなんかほつとけない理由がわかった。

ああ、そうか。

こいつはあいつと真逆の立場だけど、している事は本当に真逆のくせに、行きつくところは、こいつの破滅は3年前のエヒメそのものなんだ。

そう思うと拳に込めた力が、一気に抜ける。

もう俺には、こいつを殴れない。

だから代わりに、言葉に力を入れる。

「派閥？ 新人狩り？ ランキング？ 関係ねーじゃねえか。

ヒーローなめんじゃねーぞ、この野郎！」

「黙れ！ お前に私が築き上げた地位を渡してたまるか！」

俺の言葉にキレて、フブキは地面を持ち上げて俺を挟んで潰すわ、さつき以上の礫と一緒に空気の塊みたいなもんを撃ち出して俺を吹っ飛ばすわ、瓦礫をぶつけまくりながら、何をトチ狂ったんだか大振りのカッターみたいなものを持っておれに突っ込んできた。

……その涙目はマジでやめろよ。

何でお前は考え方もやってることも真逆なのに、やたらとエヒメに似てるんだよ。

そう思いながら、とつさに手を伸ばすと同時にちらつと見えた。

ソニックと、ソニックに向って十八番の焼却砲をぶつ放そうとしてるジェノスが。

お前ら何してんだ!?

\* \* \*

「ジェノスさん、今、人がいましたよ!! 工場の時もそうですけど、もっと周りを見てください」

「何故、俺だけに言うんですか!?!」

「ソニックさんは言ってもどうせ聞かないからです!!」

とつさにフブキを庇って前に出たら、エヒメがテレポートで現れて  
ジエノスを叱りつけ、珍しくジエノスが即座に謝らずに反論してる。

……お前ら、ケンカしろとは言ったけど、なんか違うぞ。

っていうか、何でソニックがいるんだよ？

## なんて他人事な核弾頭

二人のセクハラに怒りと羞恥で頭がいっぱいになってひたすら走っていたら、家の前まで戻ってきちゃった。

……そしたら、何か竜巻みたいなのが発生してるわ、女の人がお兄ちゃんを吹っ飛ばしてるわというカオスな状況にぶち当たった。

えつと、……何これ？

とりあえず戦ってる相手はタツマキさんみたいな超能力者らしいので、巻き添えと邪魔にならないように適当な建物の中にテレポートで避難して二人の様子を眺めて見るけど、やっぱり状況がわかんない。

お兄ちゃん、その女の人は誰？ 敵なの？ 修羅場なの？

お兄ちゃんに呼びかけて止めるとかした方がいいのかと思ったタ イミングで、私を追いかけてながらまだケンカしてた二人もやって来て、よりにもよってジェノスさんがお兄ちゃんと女の人の至近距離で焼却砲をぶつ放しちやったし！

どうしてあなたは周りをあまり見ないのかな？！

とっさにお兄ちゃんが前に出て女の人を後ろに庇ったのが見えたから良かったけど、あれはさすがにどうよ！ と思ってジェノスさんの元まで跳んで注意したら、またなんかソニツクさんを引き合いに出してきたし！

どんだけソニツクさんが嫌いなジェノスさん！？

「とにかくジェノスさん！ お兄ちゃんとその女の人に謝ってくださいさい！！」

「!? 先生ー！」

本当に周りが見えてなかったらしく、お兄ちゃん存在すら気付いていなかったジェノスさんがお兄ちゃんに謝り、私は女の人の方に駆け寄る。

「あの、なんか状況はわからないけどごめんさい！ 大丈夫ですか？」

「……え、ええ。このくらいは大丈夫。……それより、あなた達S級と

繋がりがあるの!？」

綺麗な黒髪にスタイル抜群のおねえさんが、頭から血を流していたからハンカチで傷口を押さえながら尋ねると、彼女は戸惑いながら答え、そして訊き返す。

この状況で何でそんな部分を気にしてるんだろう?　と思っていたら、ジエノスさん本人がお兄ちゃんの弟子だと答えて、そして同時にこのおねえさんが何者かに気付く。

「お前はB級1位、地獄のフブキか」

私は全く知らない名前だったけど結構有名な人だったらしい。ジエノスさんはフブキさんを睨み付け、お兄ちゃんを新人潰しの対象にして返り討ちに遭ったのだらうと指摘したら、お兄ちゃんに「お前の巻き添えに遭ったんだよ」と突っ込まれた。

さすがにそれは悪いと思っただらしく、ようやくジエノスさんがフブキさんに謝ろうとした時……

「爆裂手裏剣!!」

無視してて悪かったけど、もうちよつと我慢して空気読んでソニックさん!!

\* \* \*

ソニックさんに当たった瞬間爆発する手裏剣を投げつけられて、全部命中したのにジエノスさんはびくともせず、街燈の上にバランスよく乗ったソニックさんを睨み付けて言う。

「ふん……非力だな。こんなもの百発食らおうが損傷は受けない」

「一発も俺に当てれんくせに強がるな木偶が」

皮肉の応酬をして、ソニックさんが街燈から飛び降りる。

ソニックさんが飛び降りる衝撃で割れた街燈の破片と一緒に軽やかに降り立ち、この人独特の獲物をいたぶる猫のような笑みを浮かべて、宣言した。

「サイタマ、そしてエヒメ!　よく見ておけ!　弟子をスクラップにしたら次はお前らの番だ!」

……お兄ちゃんはともかく、私は何の番ですかソニックさん。もう訳わからん。

「……エヒメ。これ、何がどうなってるんだ？」

「正直、私がそれを一番知りたい」

お兄ちゃんもソニックさんの宣言に困り果てて私に尋ねるけど、私  
が知りたいよ、マジで！

何で私とジェノスさんじゃなくて、ジェノスさんとソニックさんが  
ケンカ始めてるの!?

私たち兄妹、そしてフブキさんを置いてけぼりに、何故か二人しか  
わからない争いを続けているジェノスさんが手でお兄ちゃんと私を  
制して言う。

「先生、こいつは先生だけではなくエヒメさんもつけ狙う、執念深くて  
変態のストーカーです。」

二度と現れないよう、俺がこの場で消してやります」

「それ、やめてくださいって言いましたよね！」

私にもう何度目かわからない突っ込みを入れるけど、ジェノスさん  
は「大丈夫です。せめて楽に死なせます」といらん譲歩しかしてくれ  
ない。

ジェノスさん、それ全然大丈夫じゃない！

ジェノスさんの皮肉も宣言も、ソニックさんの方は余裕の笑みを浮  
かべて、「お前みたいなのロマに俺が消せるか」と言い返す。

割とソニックさんの挑発に乗りっぱなしだったジェノスさんだっ  
たけど、今回はその挑発には乗らず、静かに言う。

「俺がいつ、実力を見せた？ あれは貴様がエヒメさんを抱えている  
か、近くにエヒメさんがいたからだ。」

貴様の負けだ」

宣言と同時に、何かを起動させたのか服の上からでもわかるほどに  
胸部が一瞬光り、そしてその直後、ジェノスさんの姿が掻き消えた。

私の目がジェノスさんの姿を次に捉えたのは、ソニックさんの背後  
に回った時だった。

ジェノスさんの拳をソニックさんは男性とは思えない柔軟さでご  
自慢のスピードで避けたけど、戦闘バージョンの時にいつも巻いてた  
マフラーが、ジェノスさんの拳で引き千切られて破られた。



そのまま、ジェノスさんは猛攻。

ソニックさんに有効打は与えられてないけど、ソニックさんの方が攻撃することも出来ずほぼ防戦に強いるほどのスピードでひたすら攻めるのを、何とか私とフブキさんは目で追う。

「……全く、見えない」

フブキさんが茫然と呟くのが聞こえて、ちよつと焦る。え、私、少しは見えるんだけど、私の動体視力、実はおかしい？ お兄ちゃんを「人間じゃない」って私、実は言えない？

深く考えると凹むだけだからちよつとその事実は忘れて、二人の戦いにさらに集中して見てみると、さつきからジェノスさん、わざわざあんまり意味もなくソニックさんの背後に回ってる気がする。

それに気づくと同時に、ジェノスさんがいったん止まって、ソニックさんもジェノスさんから離れて止まった。

「頭の糸クズを取ってやったぞ」

そう言いながら、ソニックさんの綺麗に結い上げてた髪を掌から落とす。

大人げなっ！ やっぱり気の所為じゃなくて、スピードでソニックさんに張り合ってたよこの人！

大人じゃないけど、未成年だけど、大人げないよジェノスさん!! ソニックさんは髪を奪われた事か、自分よりも速いというジェノスさんの主張にか、どちらにしてもものすごくプライドを傷つけられたらしく、屈辱で顔を歪ませてその場に仁王立ちになって叫ぶ。

「この……糞……」

「油断したな、音速のソニック」

けれど最後まで言い切る前に、ジェノスさんがまたソニックさんの背後に回った。

「ソニックさん！ ジェノスさん！」

とつさに私は二人の名前を叫んだけど、ジェノスさんのマシンガンのような乱打は止まらず、ソニックさんを撃ちすえた……と思った。

ジェノスさん本人も、完全にとらえた自信があっただろう。

「!? 避け……は!?」

まず自分の拳が空を切ったことに対する驚愕。そしてその直後、出来の悪い立体映像のようにぶれて揺らめく4人のソニックさんに囲まれていることに、見学してる私たちと同じようにジェノスさんも驚愕した。

「ははは、情けない奴だ！ 驚いたか？ 自信満々の連打が空を切った感想はどうだ？」

特殊な歩行技術と超高速な身のこなしよって残像を発生させる奥義！ 四影葬！」

実に忍者らしい技を使つて、ジェノスさんをまた挑発するソニックさん。

……ジェノスさんも大人げないけど、それ以上にこの人が大人げないわ。

大人げがまったくない忍者は、刀を引き抜き技名を叫んでさらにスピードを上げて、私の目からも見えなくなる。

おそらくジェノスさんのセンサーやサーチも役に立たなくなってしまったのか、ジェノスさんは腕全体、今まで見たこともない位置の砲門も解放して、その砲門が全て光を灯す。

え？ ちよつ、ジェノスさん!? また周りが見えてなくなつてません!?

「お兄ちゃんジェノスさん止めて!!」

「言われんでも止めるわ!」

頭に血が上つて(……:脳は生身だけど血つてそういうえばあるのかな?)、このあたり一帯を焼い尽くそうと思いきりの良過ぎる行動を取ろうとしたジェノスさんは、ソニックさんの攻撃が決まる前に、お兄ちゃんの手刀を脳天に受けて倒された。

勝負の邪魔をされたソニックさんは、不服そうな顔でお兄ちゃんと私を睨み付けて、「弟子を救つたつもりか?」と訊く。

「家の前で爆発されると迷惑なんだよ」と、お兄ちゃんはシンプルに止めた理由を答え、私は倒れてもまだ起き上がってソニックさんと戦おうとするジェノスさんに駆け寄つて言う。

「ジェノスさん、本当にもういい加減にしてください!」

お兄ちゃんや私の事を心配してくれているのはわかっていますけど、あなたの身体は人や周りを巻き込んでケンカするためのものなんですか!？」

「!.....いいえ.....すみません、俺の冷静さが足りずに、事態を大きくさせてしまいました」

さすがに3連続周りを見てなかったことにキレた私の言葉に、ジェノさんは衝撃を受けたような顔になって、今度は何も反論しないで素直に謝った。

うん、ジェノスさんの方は反省してくれたんならもういいや。

問題はこっちの大きな子供なんだよなあ。

私はジェノスさんの傍らで片膝をついた状態で、ソニックさんに言う。

「ソニックさんの方も、ジェノスさんは関係ないんですからもう、ケンカなんてやめてくださいよ」

「そのクソガキの方から、変質者だのストーカーだの言って売ってきただろうが。クソ生意気なガキを矯正して何が悪い?」

あーもー、どうしてこの人はここまで大人げないんだが。負けず嫌いにも程があるでしょ。

「ソニックさんの目的は、お兄ちゃんでしょう? なら、横道にそれていいんですか?」

お兄ちゃんとの勝負の為というのなら恩返しで協力しますけど、ジェノスさんとのケンカの為なら私は何も協力しません。無理でも無謀でも、止めます」

私の言葉に、まだ倒れたままのジェノスさんが「エヒメさん! もうこいつに恩を感じる必要なんかありません!」と訴え、お兄ちゃんの方は「お前は俺があいつと戦うのはいいんか」と突っ込まれ、フブキさんには「これはどういう状況?」って目で見られた。

ごめんねフブキさん。何かビックリするほど蚊帳の外にやっちゃって。でもごめん、ちょっと待ってて。

とりあえず、今はジェノスさんやお兄ちゃんを無視して、ソニックさんを説得する。

「私はあなたとジェノスさんの争いなんか見たくないんです。どつちも手加減なんかしないで、殺し合いになることがよくわかりましたから。」

言ったでしよう、ソニックさん。あなたが何を考え、どんな意図で行動したんだとしても、あなたの行動は私の命を繋いでくれたから、私のヒーローだと。そして、それはジェノスさんも同じです。

お願いですから、私の大切な人を傷つけないでください。ジェノスさんも、あなたも含めて」

私の言葉に、ソニックさんは何とも表現しづらい顔をした。

不満そうにも見えるし、苛立っているようにも見えるけど、どこか嬉しそうにも見える顔を一瞬して、それから何を思いついたのやら、口の端を吊り上げて笑った。

「エヒメ。ちよつとこつちに来い」

ソニックさんはどう考えても何かいらんことを企んでる顔をして、人差し指でちよいちよいと招いた。

「何のつもりだ、音速のソニック！」

「おい、ソニック。何する気だ？」

ジェノスさんもお兄ちゃんもソニックさんの表情の不穏さに気付いて、ジェノスさんは怒鳴りつけ、お兄ちゃんは私を庇うように前に出るけど、本人は飄々と答える。

「別に大したことじゃない。恩を返してもらっただけだ」

……どう考えても嫌な予感しかない。何を企んだ、あの負けず嫌いは。

「……もうジェノスさんとケンカしないって、約束してくれますか？」

「エヒメさん!？」

嫌な予感しかしないしジェノスさんには悪いけど、少しは機嫌を直してくれたうちに交渉しておく。そうしないとこの人はしつこいから、マジでケンカが終わらない。

「もともとそいつから売ってきたケンカだ。そのガキが何もしなければ、放っておいてやってもいい」

その答えに私は溜息をついて、お兄ちゃんとジェノスさんに「ごめ

んなさい」と伝えた。

「おい！ エヒメー！」

「エヒメさん!!」

二人の心配する声に罪悪感がものすごく湧くし、何か余計なことを企んでるのはわかってたけど、どうせこの人が私を使う目的はお兄ちゃんとの勝負、対一の勝負に持ち込む為でしかないことはわかっている。

何かちよつとしたことはされるかもしれないけど、ソニックさんの性格からして命の危険はないだろうし、人質になるだけでソニックさんが少なくとも今日はもう、ジェノスさんとケンカしないでくれるんならありがたい。

そんな考えで私は跳んで、ソニックさんの隣に降り立った。

降り立ち、ソニックさんの方に顔を向けた瞬間、ぐいつと後頭部を押さえつけられた。

………えーと、間近で見たソニックさんは、前々から思ってたけど本当に中性的な美人さんでした。目つきが致命的に悪いけど。

髪が長いから女の人っぽく見えるのかと思ったけど、短くても女の人っぽかったです。

でも体は割と筋肉質で、ちゃんと男性でした。ジェノスさんと私をダシにして争っていた時、抱きかかえられてた時も思ったけど、結構腹筋も胸筋もビキビキで硬かった。

うん、そんな感じでやつぱり男性だなーと思うけど、男の人でも唇は柔らかいんだね。少しカサついて荒れてるけど、この人が唇のケアなんかするわけないから当然か。

後、手を出すのも早いね。この場合は、手じゃなくて舌？

重ねた瞬間、躊躇なく入れますか？ 手慣れてますね。

息継ぎはどうやればいいんだろう？ 鼻で呼吸すればいいの？

………ところで私は何で、自分がいきなりキスされてるのをこんなに、他人事のように考えてるんだろう。

ああ、あれか。私、混乱してますわ。

## エヒメは 混乱 している

妹が目の前で盛大にセクハラされた場合、どうしたらいい？

これがこの前のストーリーカーみたいなのに、エヒメが嫌悪感しか抱いてない相手だった場合、話は簡単だ。ぶっ飛ばせばいい。手加減できるかどうかは別だけどな。

けど、その相手がエヒメにとつての恩人で、本人も何かと庇ったり気にしたりするほどに慕っている相手なら、兄ちゃんはどうしたらいいんだ？

エヒメが嫌がって抵抗するそぶりを見せたのなら、考える前に体が動くだろうけど、あいつハトが豆鉄砲を喰らったような顔で固まって、されるがままなんだけど。

「……なあ、これは兄としてソニックを殴った方がいいのか？」

思わず後ろで未だ座り込んでるフブキに訊いた。

同じ女な分、こいつに訊いた方がエヒメの気持ちもわかるんじゃないかなと思って訊いてみたんだけど、「……むしろこのまま見なかったことにして、帰ってあげた方がいいかもね」って答えられた。

正直そうして帰りたい気持ちもあるけど、そうはいかぬーだろ！

ジェノスの奴、もはや不穏な音すら立てずに倒れたまま固まってやるし!!

長かったのか短かったのかわからない、つかわかりたくもない時間が過ぎて、ソニックの口がエヒメから離れて、あいつは自分の唇を見せつけるように一度舐めてからどや顔で言った。

「まあ、これで勘弁してやろう。ありがたく思え」

その横暴な言葉に、エヒメはハト豆な顔を継続させて答えた。

「……ご、ご足労おかけしました？」

「お前は何を言ってるんだ？」

おう、ソニックその通りだ。もっと言ってやれ。

……思わずソニックの返しに同意して、応援してしまった。

いや実際、お前は何を言ってるんだエヒメ。

パニック起こしてんのはわかったけど、もうちょつと反応を起こし

やすいパニックにしてくれ。兄ちゃんはまだ、ソニックに怒るべきなのか放っておくべきなのがわかんねーよ。

愉快というかまさに愉悦って感じで笑ってたソニックも、まさかの頓珍漢すぎるエヒメの返しに困惑していたら、俺の後ろからガシヤンガシヤンと何かが変形する音が聞こえてきて、振り向きざまのどつきにフブキに言った。

「フブキ、悪い！ ジェノスを押さえつけろ!!」

「えっ!? わ、わかったわ!!」

いきなりな指示にも拘らずフブキは素直に伝えてくれて、超能力でジェノスの体を上から地面に押さえつけてくれたんだが……コンクリの地面が陥没してるのに、それでもジェノスは立ち上がろうとしようがる。

「――！ 殺す!! 貴様だけは絶対に俺が、この手で地獄の底まで叩き落として焼き尽くして殺し尽くしてやる!!」

こいつがサイボーグになったきっかけ、家族や故郷を奪った暴走サイボーグの事を話してる時以上の殺気を放ちながら無理やり体を動かして、焼却砲をソニックに向けるジェノスに俺は、何とか説得する。

やめろよお前！ 絶対お前の全力、被害がソニックだけで収まらないんだよ!!

「落ち着け！ とりあえず落ち着けジェノス!!」

「止めないでください先生!! 後生ですから奴だけは！ 奴だけは俺に殺させてください!!」

ジェノスが今にも血の涙を流しそうな勢いで叫んでるっていうのに、ソニックの方はエヒメで得られなかった期待通りの反応が返って来たのが嬉しいのかニヤニヤ笑っていやがるし、アホな妹はとうとうさすがにハト豆顔が焦った顔になって、ジェノスに言う。

「ジェノスさん、ダメですよやめてください！ 家が壊れますから!!」

うん！ 俺もそれが心配で止めてるけど、お前が言う事じゃねえよ!!

まだパニックってんのかお前!?

パニック継続中なのか、ソニックのしたことなんか気にしてないの



か判別がつかん発言をしたエヒメに、ジエノスはフブキに押さえつけられながら血を吐くような叫びで問い返す。

「エヒメさん!! 何故、まだそいつを庇うんですか!?

そんな性犯罪者を、貴女の唇を無理やり奪った奴なんかを、どうして!!」

いや、さっきのは全くソニックを庇ってなかったぞ? と突っ込みを入れるのも躊躇うぐらい真剣に、悲痛な声を上げて尋ねたジエノスに、エヒメは真顔で叫び返した。

「あれはキスじゃありません!!」

『じゃあ何なんだ・何なの・何なんですか!?!』

まさかの全否定に、全員のツツコミが芸術的なまでに唱和した。

そしてそのツツコミに、やっぱりエヒメは真顔で堂々と答えやがった。

「マウス・トウ・マウスです!!」

お前はいったいいつ、心肺停止したんだよ!?

ダメだこの妹! まだ盛大にメダパニ継続中だ!!

俺が妹の残念っぷりに頭を抱えなくなってきたのに、さらに頭が痛くなる事態になる。

「それなら、どうして俺に任せてくれなかったんですか!?!」

「お前は何を言い出してんだジエノス!?!」

エヒメの発言を真剣に受け取んな! っていうか、真剣に受け取ったうえでもその発言はおかしいだろ!

俺がジエノスの欲望丸出しの発言にツツコミを入れていたら、さすがにエヒメのボケが予想外すぎて呆気を取られてたソニックも後ろで何か呟いた。

「人工呼吸で舌は入れんだろ」

お前も突っ込むところがおかしいわ! っていうか入れたんか! 聞きたくなかったわ!!

ヤバイ! エヒメの混乱があまりにも斜め上すぎて、こいつらもメダパニに感染してやがる! ボケの收拾がつかねえ!!

「ああ、もうエヒメ! とりあえずお前はジエノスの傍にいてこいつ

が暴走しないように止める！ それ以外もう何もしやべんな!!」

「え？ あ、うん、わかった!」

もうこれ以上あいつが何か言えばそれこそ事態の收拾がつかなくなりそうだから、とりあえず俺はエヒメに指示を飛ばすと、素直にこいつはテレポートで戻って来た。

同時にもう大丈夫と思っただのか、それとも限界だったのか、フブキがジェノスを抑えつけるのをやめたので、ジェノスはブースト起動させたんかって勢いで飛び上がってエヒメに駆け寄って、あいつの肩を掴んで揺さぶる。

「どうして貴女は素直にあんな奴のところに行ったんですか!?

大丈夫ですか!? ハンカチしかありませんが、これでとりあえず拭ってください！ 今すぐに歯ブラシと歯磨き粉とうがい薬と消毒液も用意しますから!!

あとは、カウンセリング！ トラウマにならないようにカウンセリングを受けましょう!!」

「……えーと、カウンセリングはジェノスさんが受けた方がいいような気がします」

おい、エヒメ。正論だけど、お前が言うな。

お前の所為だよ、そいつのテンパリ具合は。

「……アホか、あいつら。どこまでガキなんだ」

「そんなガキの付き合いにちよっかいだすなよ、お前も」

ジェノスとエヒメのやり取りを面白くなさそうに見ながらソニックが言うから、俺は言い返す。

お前、別に俺はあいつの恋愛に口出しする気はねーから、エヒメがいいならジェノスだろうがお前だろうが俺は良かったけど、今回はさすがに怒るぞ。

主にエヒメの為というより、これからジェノスがクソ面倒くさいことになるという俺の八つ当たりで。

「ソニック、お前の目当ては俺だろ? こいつらにちよっかいだすな。面倒くさくなるから。」

お前しつこいから、たまにはマジで相手してやる。かかってこい。

……あと一応、エヒメにちよつかいを出したからってことで怒ってもいいよな?」

「え!? わ、私に訊かないで!!」

「じゃあ誰に訊けばいいんだ!?!」

マジで一応、兄としては怒るべきだろうと思いつつ俺がエヒメに確認で尋ねたら、ジエノスに未だ説教なんだか心配なんだか嫉妬なんだがよくわからんことを言い聞かされていたエヒメが叫び、俺とソニックが思わず同時に突っ込んだ。

……俺もこんなことを聞いている時点でエヒメにつられて混乱してたけど、あいつまだ混乱してんのか。

「あ、そうだね! 私、当事者だった!!」

「エヒメさんすっかりしてください! 奴にされた記憶は欠片も残さず全て消去して、あいつに対しては嫌悪と警戒心だけを残してください!!」

「……すごく器用なことを要求してるわね。どうやんのよそれ?」

……もうあいつらは放っておこう。

ソニックの方も話がこのままだと進まんと悟ったのか、エヒメのボケをなかったことにして「この時を待っていた」とか言い出した。

「お前を殺すために編み出した究極奥義………見せてやる!」

「うん。見せろ」

正直、お前がやらかしたキスシーン以上に驚くものはないと思うんだが、それを言ったらまた話が進まなくなるから、一言で終わらせる。

「究極奥義、十影葬!!」

ソニックがそう叫んだ瞬間、ジエノスに見せたみたいにソニックが分裂した。

しかも今度は一気に十人。

おお、これはけっこう凄いかもな。

俺も残像は出せても、こういうふうバラバラの動きをした残像はだせないから。

でも、「数」なら俺が上か。

そんなことを考えながら、約束通り「マジ」で相手をしてやる。

「必殺 ッマジシリーズ」

マジ反復横跳び!!」

俺はマジで反復横跳びをしながら、通り過ぎてやったらソニックがそのまま吹っ飛んだ。

\* \* \*

「ちよっ!? ソニックさん!?!」

そしたらまたエヒメがソニックの心配をして、ジェノスの殺気がヤバいことになる。

「お前、まだこいつのこと心配すんのかよ?」

「その技名とそんな倒し方じゃなかったら、たぶん心配も同情もしなかった!!」

俺が突っ込んだら、エヒメに突っ込み返された。何だよ、俺の所為かよ。

エヒメが倒れたソニックに駆け寄ろうとしたのを、ジェノスはがっしり腰に手を回してホールドして防ぎ、「エヒメさん! そんな奴を何故いつもいつも心配するんですか!?!」と問い詰める。

それに対してのエヒメが、「倒され方がかわいそうだから!!」とその答えが一番かわいそうじゃね? なことを言ってる間に、倒れてたソニックはいつの間にかどっか行っちゃった。

あ、良かった。さすがに顔見知りか弟子に消し炭にされるのを見るのは嫌だったから、さっさと逃げてくれて助かった。

あいつ、しつこいけど引き際は結構いいのが不幸中の幸いだな。

とにかく面倒事は一つ片付いたけど、……どーすっかなこれ。

ジェノスはまた説教が止まらなくなってるし、フブキは何かいつの間にか蚊帳の外にやっちゃってたし。

「おい、お前らとりあえず家の中に入るぞ」

もうどうしたらいいかわかんねーし、疲れたし喉も乾いたから、マジでとりあえずな提案を試してみたらそこに異議はなかったらしく、全員が立ち上がる。

その際、ジェノスがまだエヒメに唇の消毒をどうたらこうたら言ってたんだが、エヒメがそれを聞きながら真顔で言った。

「はい、ちゃんとしませす！ ……とところで唇ってどうやって取り外す  
んでしたっけ？」

「俺でも出来ませんよ!?!」

……あかん。あいつまだメダパニってるわ。

ここにいいいいよ

私は一番になれなかった。

頭脳も体力も要領の良さも、同い年相手はもちろん、子供の頃からその辺の大人よりはるかに上だった。

そして何より、生まれ持った超能力があった。

誰もが私を褒め湛えた。周りはいつても私に期待した。

なのに、満足感を得られたことは一度もない。

理由は簡単。

「フブキさんはすごい」と私を讃える言葉の前か後に、必ず入る言葉があったから。

「さすがは、タツマキさんの妹!」

……誰もが私の持つものは、あの姉の妹なら持っていて当然という前提で褒めて期待して、そしてそれ以上は何も求めない。

私を姉の下位互換としか見ていなかった。あの姉を決して越えられないと、初めから諦められていた。

私より劣った人間が、私をいつも憐れんで見ていた。

だから私は、姉の事が……、お姉ちゃんが――

\* \* \*

「あの姉のおかげでこれまでの人生の中で何かに一番になれた事はなかったわ……。」

だからB級1位になった時に思ったの……。私はこの地位のまま、B級以下のヒーローを束ねて、単独主義の姉を超えて見せるって」

サイタマとなんだかよくわからない三角関係の戦いがとりあえずは終わって、彼の部屋に戻って私は、ここにやってきた理由というよりそもそも何故、「フブキ組」なんて派閥を作って、自分の仲間集めと新人潰しを行っている理由を話した。

……こういう自分の弱みになることなんか誰にも話すつもりはなかったんだけど、彼に話してみたくなった。

聞きたくなかったの。

彼が、サイタマが私のコンプレックスを知って、どう思うかを。

そして彼の妹が、エヒメという子が、コンプレックスを与える側であるこの子が私の話を聞いてどう思うかを。

……まあ、後はちよつとした同情ね。

だって私が何か話さないと、エヒメって子がジエノスに説教され続けてるんだもの。

それが真つ当な説教なら「ご愁傷さま」としか思わないけど、9割がたあの忍者に対する嫉妬とヘイトスピーチみたいなものだし。

何て言うか……私も確かにびっくりはしたけど、今時キスぐらいでここまで動揺する10代って珍しいわね。

どんだけ青臭くて純粹なのよ。

私の話でジエノスの気がそれたのか、それとも自分でももう恋敵の忍者を話題にあげたくなかったのか、私が何故A級に上がらないのかを尋ねて、その理由を答える。

……いきなりS級になったあなたにはわからないでしょうけど、世の中には人の身では越えられない化け物がいるのよ。

その化け物であるイケメン仮面、アマイマスクについて教えるとか何かジエノスが叱るような目でエヒメの方を見て、睨まれたエヒメも気まずそうに眼をそらした。

……あなた、何かしたの？ イケメン仮面に？

何かやたらと気になる反応だったけど、たぶん尋ねたらジエノスの説教が再開しそうだからそのまま話を続行させて、サイタマに忠告する。

「私達個人の力では、上に行くことは難しいのよ！ 徒党を組んで何が悪いのよ」

私の言葉にサイタマは、漫画なんかを読みながら悪くはないけどフブキ組に入る気はないと言いつ切る。

その答えはもちろん、そもそもその態度が気に入らなくて苛立ったことにエヒメは気付いたのか、「お兄ちゃん、もう少し真面目に聞きなよ」と兄に注意してから私に向き合った。

「……フブキさん」

真顔で、彼女は私に問いかける。

私や姉と同じ超能力者だけど、まったく違う力の持ち主。  
戦えない、か弱い、守られる側の人間。

姉と同じく、他者に劣等感を与える優秀な存在。

そんな子が私の話に、何を思っただんて答えるかが気になると同時に怖かった。

同情されるのが、憐れみの目で見られるのが一番嫌だったけど、何故か無性に私のしてきたこと、している事を肯定されるのも嫌だった。

……それは結局、優れて恵まれた者からの慰めだとしか思えなかったからでしょうね。

結局、私はこの子にどんな答えを望んでいたのかはわからない。

「本当に、お兄ちゃんが欲しいですか？ お兄ちゃんを組織に入れたら、絶対に胃が痛いどころですみませんよ？」

「はあ？」

ただ真顔で発せられたこの言葉だけは、同情や慰めとは別方向で同じくらい望んでなかったことだけは確かよ。何言っただんこの子？

エヒメは困惑する私の肩を掴んで、真顔のまま私への説得を続けた。

「フブキさん、うちのお兄ちゃんのマイペースっぷりを舐めちゃダメです。」

今もこうしてフブキさんを見無視して、漫画を読んでいる人ですよ？

C級からB級に昇格したのも、週一ノルマが面倒だったっただけの人ですよ？

組織に属したからって、お兄ちゃんが目上の人を立てるとか、命令通りに行動するとかするわけじゃないんです！ むしろお兄ちゃんがやらかすことの責任をフブキさんが取らなくちゃいけないことになるんですよ!?!

胃が痛いとか穴が開くどころか、胃が消滅しますよ！ 絶対！

「エヒメさん。フブキが困惑しています」

段々とヒートアップしてきたエヒメをジェノスが制止して、やっと説得からただの兄の愚痴になって来たトークが止まった。



「あ、ごめんなさいフブキさん！ つい熱くなっちゃって」

「……エヒメ。熱くなるほどに俺は迷惑だつてことか、それは？」

さすがにエヒメの怒涛の兄が自由人過ぎるといふ愚痴にサイタマが口を出すと、エヒメはきよとんとした顔で振り返って言ったわ。

「え？ うん」と、ものすごい普通に。

言われてサイタマは、「……お前には言われたくないけど、自覚がある分言い返せねえ」とか呟いて、また漫画に視線を下ろす。

……実にバカらしいやり取り。

内容は嫌味の応酬みたいな感じだけど、二人の様子からして相手の言葉をさほど気にしておらず、普通にどちらも流してる。

間合いを知りきった兄妹のやり取りそのもので、……本当に普通の、自然体で仲の良い兄妹。

……どうしてこの二人がこんなにも仲がいいのかが、私にはわからない。

エヒメは確かに戦闘能力はないでしょうけど、それでも「超能力」なんて特別なものを持つてるのに、C級最下位からヒーローになったあなたとは違って、試験なしでS級のスカウトをされた子だつていうのに、サイタマには妹に対して卑屈なところも、嫉妬も、妹を利用してやろうという傲慢さも見えない。

妹の修羅場を気まずそうに困って私に「どうしたらいい？」と訊いて来たり、妹のボケに面倒くさそうに対応してジエノスの説教は止めなかったり、そのくせ私の「妹をよこしなさい」にはこっちが危機感を覚えるほどの殺気を出す。

過保護過ぎない、だからと言って無責任に放置もしない、いいお兄ちゃんだと思った。

私の行動や人間関係を制限して、悪気はないんでしょうけどナチュラルに私を見下す姉とも、そんな姉へのコンプレックスで我ながらにねじ曲がって、プライドが高いくせに卑屈でエゴイストな私とも違う。

年上の、それも結構な歳の差がある姉が優秀な私の方が、まだ周りも私自身も経験の差ということで納得したり諦めもつく部分がある

けれど、彼の場合は年の離れた妹だっというのに、余計に劣等感が肥大してもおかしくないっというのに、それでも彼はごく普通に、私が何故そんなことを訊くのが不思議と言わんばかりの顔で言った。

「あなたは、自分より出来のいい妹がいて、何とも思わないの!？」

利用もしなければ、排斥しようとしてもしない! どうして傍に置いておけるの!？」

そう尋ねた私に、「いや、普通に妹だからだけど？」と即答した。

……私が訊きたかったのは、その「普通」だったことに気付く。

気付いたけど、訊く前に別の答えが返されて訊けなかった。

サイタマが漫画を一冊読み終わり、私の後ろにある本棚にそれを直すついでに、彼はごく自然に私の頭に手を置いた。

「え?」

そしてそのまま、こつちのヘアセットが乱れることなんか一切気にせず、わしわし頭を撫でられた。

「ま、あんま気にすんなよ。どうしても気になるなら、あれだ。発想を転換してみろ。」

『私が本気を出して、お姉ちゃんを追い抜いたらお姉ちゃんの立場がなくなる』とか思ってたなら、少しは楽になるんじゃないやね? 実際、妹に追い抜かれるってなかなか凹むし」

わしわしと乱暴に髪を乱しておきながらそんなことを言っつてこいつは、漫画を直して次の巻を手にしたらまた自然に手を離す。

完全に、特に意識してやっていない自然な動作に私は反応できずに呆気を取られ続けた。

私が呆気を取られてるっというのに、ジエノスもエヒメも私の反応に気付かない。サイタマがやったことをおかしいと思わない。

それほどに自然だったんでしょね。この男が女の髪に触れること、「妹」の頭を撫でて慰め、励ますことというのが。

その証拠に、エヒメが少しだけ悲し気に「お兄ちゃんは気にしてたの?」と尋ねると、サイタマはやっぱ自然に手をエヒメの頭に伸ばす。

「多少はな。でも、お前が褒められるのは俺と違って努力をしてきた

からってことは知ってるから、そりやそうだろうなとしか思わねーよ。

言われたくなけりや努力したら良かったのにしなかった俺が悪いんだから、お前は気にすんな。

あ、もしかしたらフブキのねーちゃんもそんな感じかもな。お前に追い越されたくなくて、でも姉のプライドで努力してるところを見せたくなくて、隠れて頑張ってるのかもしれないな」

妹の頭をわしわしと撫でてフォローして、ついでなのかすらよくわからないけどまた私もフォローされた。

そのフォローは的外れであることは私が誰よりも知っているけれど、あの姉は努力なんかせずに子供の頃から今の私よりも強力な超能力者で、息をするのと同じくらいの感覚で能力行使をしているのは、私が一番知っているけれど……

そのフォロー自体に何の意味もない。

けれど、私はそのフォローをしてくれたという事、私を同情するでもなければ憐れみで私の実力やしたことを認めるわけでもなく、ただ「気にすんな」と言ってくれて私を楽にしてくれようとしたことが……認めるのは癪だけど、悔しいけど、……嬉しかった。

……不思議な男。

S級のジェノスが弟子なのは、あの戦いでS級クラスの実力の忍者に圧勝したことでまだ納得だけど、自分より下の評価を受けてる兄を妹は見下していないのに、卑屈に気を遣うでもない。

自然体で迷惑なところは迷惑と言いつつ、なのに兄に慰められると、頭を撫でられるとこの上なく幸せそうな顔をする。

この直後に何故かやって来たキングとも、あまりに自然体で接していた。

キングに対して怯えるでも遜ってゴマすりするわけでもなく、ゲームを壊したことを申し訳なく思いつつも子供のようには誤魔化そうとして、そしてキングもまるで10年来の友人くらいの気楽さで、サイタマと会話をしている。

実際、昔からの友人か何かなのかと思つてエヒメに訊いたら、彼ら

が出会ったのは3日前だと聞かされて、絶句した。

「……どうして……S級がB級なんかと楽しそうに……」

私の呟きに、エヒメは一瞬きよとんとしてから笑って言った。

「フブキさんも、お兄ちゃんと付き合ってみればわかるんじゃないでしょうか」

今度は私がその言葉に、きよとんとする。

「私もお兄ちゃんも、フブキさんのお仲間にはなりませんけど……でも、『お友達』にはなれると思うんです。

だから、……暇があればまた来てください。今度は、お茶菓子くらい出せますから」

笑ってそんなことを言うエヒメにジェノスは、「エヒメさん、こいつは先生を新人潰しの対象にした奴らですよ。あなたの事も利用しようと思いました」と言われて当然な忠告をしたけど、エヒメはどこ吹く風と言わんばかりに言い返す。

「フブキさんは、利用というより保護してくれようとしたんじゃないですか。

誤解ですけどそこまでしてくれた人には礼を尽くさないといけませんし、フブキさんが他人の私をそこまで考えて保護を実行しようとしてくれた優しい人だから、私はともかくお兄ちゃんの友達になつてくれたら嬉しいんです」

……保護なんかじゃなくて私は本心から利用するつもりだったのに、衣食住の保証とかは交渉材料とちよつとした同情でしかなかったのに、「優しい」とこの子は言つて、笑つて「ここにいてもいい」と言つてくれた。

この階級なんて何も関係ない、私が望んだものじゃないけれどなぜか妙に心地のいい空間に、私の居場所を用意してくれた。

「……気が向いたらね」

私が返せた言葉は、そんな可愛げがない言葉だけ。

ジェノスは私の答えを不遜・無礼と受け取って、私を睨み付けたけど、エヒメは笑つて「楽しみにしています」と答える。

……年下に私の意地が見透かされているのが気に入らなかつたけ

ど、それでも私はここに入り浸るんだろうなあと、未来予測は容易かった。

……ここにいたら、サイタマやエヒメを見てたら、私が求める「答え」が見つかるかもしれないと、期待したから。

どうしてこの兄妹が、こんなにも私達姉妹とは違うのか。

サイタマの言う、「普通」とはなんなのか。

私はお姉ちゃんのことをどう思っているのか、わかる気がした。

## 真っ直ぐに歪んでいる

ソニックさんはとりあえず五体満足で帰ったし、フブキさんも何だかよくわかんないけどお兄ちゃんと争う気はなくしたみたい。勧誘は私を含めて諦めてはいないみたいだけど。

お兄ちゃんがキングさんのゲームのボタンを潰したあげくにデータ消したのは、もうお兄ちゃんが解決しろ。さすがにそれは私にはどうしようも出来ない。

うん、とりあえず今日起こった面倒事のほとんどは片付いた。……ほとんどは。

「エヒメさん、少しいいですか？」

私を黒と金の目で真っ直ぐに見据えて尋ねるジェノスさんに、「嫌です」と言えるわけがなかった。

「……はい」

正直に言うともまた逃げ出したい気分いっぱいだけど、何故かゲーム談義でちよつと盛り上がってるお兄ちゃんとキングさんとフブキさんを置いて、私はジェノスさんと一緒に外に出る。

ちよつと改めて、ジェノスさんと本音トークしてきます。

\* \* \*

お兄ちゃんたちに聞かれるのが恥ずかしかったからとりあえず場所を移しただけで、また屋上に行くのも面倒だったからジェノスさんの部屋の前で私たちは向き合う。

そして、ジェノスさんはまず開口一番にキュインキュインと怖い音を鳴らしながら言う。

「エヒメさん。貴女には悪いですが、俺は本気で奴が、あの音速の残念忍者が嫌いです。もう存在を認知するのも嫌悪するほどに、奴は俺にとって許されざる存在です」

でしようね。もうフォローできる点がない。残念忍者ってところも含めて。

本当にあの人は色々と凄いんだけど、その凄さが全部台無しになるほどに残念なのかな？

「——けれど……」

私がソニックさんの残念なところを思い出して遠い目になったら、いつの間にかジェノスさんから不穏な音が止んでいた。

「貴女にとっては、……大事な人なんですね」

悲し気に、痛みに耐えるように、ジェノスさんは言う。

……この人にこんな顔をさせたくなんか無いのに、この人が「そんなことない」という言葉を望んでいることくらいわかりきっているのに、私はそれを言ってもあげれない。

「……はい」

私にとって、ソニックさんも大事な人であることは確かだから。

今日、セクハラされた拳句にジェノスさんに対する嫌がらせであることをされたけど、それでも私はどうしても嫌いになれない。

この答えは、私の為を思つてあんなに怒つてくれたジェノスさんを余計に傷つける言葉だつていう事はわかつてる。

それでも、ケンカはして欲しくない。

仲良くして何て言わないから、互いに干渉しないで別々の所でいいから、幸せであつて欲しい。

私がソニックさんにそう願う理由を、悲しげに視線を落として押し黙るジェノスさんに語る。

「あの人の事は、たぶん何があつても嫌いにはなれません。

……お兄ちゃんに、似てるから」

「はい？」

悲しげな顔が、心底不思議そうな顔に変化する。

「……似ているところ、ありますか？」

「私から見たら、結構」

そう訊き返されるのは予測してたけど、ここまで「信じられない」って顔をされるとは思つてなかったから、つい苦笑してしまう。

でも、本当。

私にとってソニックさんは、お兄ちゃんに似てる。

「結構、努力家なところとか、でもその努力をわざわざ口に出したからない所とか、細かいところを実はちゃんと見ていてくれるところと

か、負けず嫌いで大人げない所とか……。

何気なくて誰にでも探せばありそうな共通点だけど、それでも、どうしてもあの人にお兄ちゃん的面影を見てしまうんです。

……だからでしょうか。他にも嫌いになれない、つい庇ってしまいう理由はあるんですけど、第一で絶対に嫌いになれない理由はそれなんでしょうね」

私の身勝手でエゴイストなところを見ても笑い飛ばすところとか、細かいところに気付くけど、慰めも何もせずただ指摘して流すところとか、嫌いにはなれない、傍にいて楽な理由、なんだかんだで好きなどころはたくさんあるけど、きつと私があの人に心を開く理由の一番はそこ。

結局、私は未だにお兄ちゃんしか信用できてないんだなあと、自分の成長してなさに呆れていたら、ジエノスさんに両肩をがしつと掴まれた。

「奴が嫌いになれないのは、気にかけるのは奴が、エヒメさんにとって先生に似ているからなんですネ!？」

そしてそのまま食い意味に、念押しで聞かれた。

え？ そんなにお兄ちゃんとソニックさんが似てるってのが、ジエノスさんにとっては嫌？

「エヒメさんにとって、奴は『兄』のような存在であって、決して『異性』として気にかけている訳じゃないんですネ!？」

そこまで言われて、何が言いたいかやつとわかる。

ああ、何かジエノスさんにも変な勘違いされてたんだ。

まあ、好きでもない人にキスされて、盛大に混乱したけど嫌がりはしなかったのを見たら、勘違いもされるか。

……今思うと、私は本当に意味不明な混乱してたなあ。

何だ「ご足労をおかけしました」って？ 意味不明にもほどがある返しすぎる。

「いえ、違いますよ。私は前も言った通り恋とか愛とかよくわかってませんけど、ソニックさんはそういうのじゃないと思います。

さっきの……えーとあれも、むしろソニックさんの顔が中性的すぎ



て男の人にされたって気がしないから、あんまり意識しないというか、気にならないというか、事故つてことで忘れようつて割り切りが出来ると言うか……。

まあとにかく、ジエノスさんが気にするほど、私はトラウマなんかになってませんよ」

ジエノスさんはソニックさんがやらかしたあの嫌がらせが、私のトラウマになっていないかを心配してくれているのはもう散々、未だに口どころか喉もスースーしてミントの味しかしないくらいいうがいや歯磨きをさせられたことでよくわかったから、私が本当に大丈夫つて念押ししたら何故か微妙な顔をされた。

安心は一応してくれてるみたいだけど、何かちよつと残念そうだったり、何かに憐れんでいるようにも見える顔だった。

……私、女のくせにキスに全く夢持っていないことを憐れまれてるのかな？

「……割り切りが、出来るんですか？」

微妙な顔のまま訊かれて、あーやつぱり私の残念っぷりを憐れまれてると思つて答える。

「えーと……そもそもあれをカウントしてしまつたら。悲しいだけじゃないですか。あんな、お兄ちゃんとジエノスさんに対するただの嫌がらせをカウントしちやつたら」

私の答えに、ジエノスさんの表情が一変する。

何と形容したらいいかわからない微妙な顔から、信じられないと言わんばかりに目を見開かれて、こつちも驚いた。

そして私が「どうしたんですか？」と尋ねる前に、彼は問うた。

「……貴女にとってあれは……奴がしたことは、……俺や先生に対する嫌がらせでしかないのですか？」

ただ奴は、……それだけを目的に……あんなことをしたと思つていいんですか？」

その問いに、私は首を傾げた。

「はー」

私は、この答え以外になんて答えればいいのかわからない。

「だって私なんかを、誰が好きになるんですか？」

ジェノスさんの表情が、また変わる。

今にも泣き出しそうなのに、泣くことさえも出来ないぐらいにその感情でいっぱいになって、絶句していることはわかったのに、私は何も言えないで、何もできないで、何もわからなかった。

どうしてこの人が絶望しているのかが、私にはわからなかった。

今はこれでいい

……前々からずっと感じていた違和感の正体が、やっとわかった。俺のはもちろんその他の奴らの好意に気付かない鈍感さは、過去のトラウマによる人間不信であることはわかっていた。

けれど、この人を「人間不信」と言い表すことにいつも釈然としな  
いものを感じていた。

そうとしか言えなかったのに、この人がどこまでも「人間不信」らしくなかった。

今、わかった。

普通の「人間不信」はそもそも、人間の善意を信じない。人間が善意というものを持ち、見返りなしで自分を助け、愛してくれるという事を信じないのに対し、エヒメさんはどれだけ傷つけられても裏切られても、人に対する善意を信じて疑っていない。

この人は、人間を信じていない訳じゃない。

どこまでも先生と同じく、真つ直ぐで尊い人間性をどんなに傷ついても保っている。

……けれど、この人は歪んでいる。

誰よりも真つすぐで曲げられることがなかったからこそ、曲げることが自分でも出来なかったこそ、この人はあまりにひどい歪みを抱えていることに気が付いた。

……この人は好意に疎いのではなく、無意識だが意図的に「好意」から目をそらして別物に解釈をしている。

自分が相手に好かれていいるから優しくしてもらえてるという相手の下心に気付かないのは、鈍感だとか純粹だからではない。

これは、相手が優しいから誰にでも同じことをすると思いい、その優しさがいつ自分の元からなくなっても、相手に裏切られてもいいようにの予防線だ。

……人の善性を信じているのに、自分にその見返りを求めない善意や愛情が与えられない、与えられたとしてもそれは一時の「おこぼれ」でしかないと思っていることに、……自分が誰かに愛されて

大切にされていることを信じられないということに、気付いてしまった。

\* \* \*

「……ジエノス……さん？」

俺を見て、俺の様子のおかしさに不安げな顔をして呼びかけるエヒメさんは、本心から俺を案じてくれていることがわかる。

けれど俺は何も答えられない。

何でもないと言って誤魔化して笑うことも、この歪みを指摘することも出来ない。

指摘など……出来るわけがない。

「だって私なんかを、誰が好きになるんですか？」と彼女が言った時、エヒメさんの顔が悲しげに歪んでいたり、何かを諦めたような寂しげな顔をしていたら、どれほどマシだったか！

……この人は、まるで今の天気を口にするように、ごく当たり前と言わんばかりの口調と笑顔で言い切った。

……自嘲ですら、なかった。

いったい何があれば、何をされたらこんな顔であんなことを言えるようになるんだ!?

もうあれは、諦めたでも、信じられなくなったとも違う。

この人は、誰からも愛されれない、善意など与えられないという絶望に適応したんだ。

深海魚が暗闇で必要のない目を退化させるように、一度落ちた絶望の底から浮かび上がることも出来ずに、「相手は自分の事が好きなのかもしれない」という期待を失うことで、その期待を必要ないと切り捨ててそこに適応してしまった。

そうしないと生きてはいけなかったから、当たり前のようにそれを受け入れてしまった。

……この人は自分をエゴイストと言いながら、多くの人を本心から大切に思い、心配して、その身を投げ出しても守ろうとするのに、先生以外の誰も信じていない……、いや、もしかしたら先生すらも「兄」という責任感で自分に気をかけてくれているとしか思っていないの

かもしれない。

あまりにも酷い、真っ直ぐなのに、真っ直ぐだからこそ歪んでいる彼女の「世界」に、……ここまで歪められた彼女の「絶望」に、俺は絶望した。

そしてエヒメさんは、自分がどれだけ悲しいことを言ったのかすらもわからない、適応してしまった絶望の世界に気付かないまま、……貴女が助けを求める側だというのに泣き出しそうな顔で俺に手を伸ばす。

俺が守れなかった、俺を守ろうとした、大きな傷を残したその手で、流れない俺の涙を拭うように指先は頬に触れて、言う。

「ジエノスさん、大丈夫ですか？」

助けを求めて誰かに縋るための手すらもぎ取られたのに、誰かを助けようと伸ばし、差し出す手は、涙を拭う指先だけは手放さなかった人が、俺の絶望を案じた。

俺は、エヒメさんが伸ばした手に自分の手を重ねる。

彼女を悲しませた、「大嫌い」だと言われた手を、あまりにも痛々しい小さな手に重ねて伝える。

「……そんなこと、言わないでください」

俺の本音を、目のそらしようがないように、真っ直ぐに。

「俺は、貴女が好きです」

\* \* \*

俺の告白にエヒメさんは目を丸くさせ、俺に触れていた手は反射で引こうとするが、その手を掴み離さない。

彼女が無意識に、俺の言葉を別の意味合いに解釈しないように、エヒメさんを見据えて言葉を続ける。

「俺は、エヒメさんが好きです。」

サイタマ先生の妹だからではありません。先生がいてもいなくても、貴女に出会っていたのなら、俺は貴女に必ず惹かれていたでしょう。

貴女の、穏やかな笑顔が好きです。貴女がいつも自然に俺を『サイボーグ』ではなく『人間』として扱ってくれるのが、嬉しかった。

貴女が俺の幸せを願ってくれたおかげで、俺の復讐を肯定しながらそれだけに全てを費やすのは間違いだと言ってくれたおかげで、俺の世界は一変しました。

「貴女と一緒にいる時が、俺が一番幸せです」

ただ思い浮かぶがままに、自分の気持ちを羅列する。

恋慕でも愛情でもない、ただの好意に過ぎない、「好き」という幼くて単純な、ただそれだけの気持ちを全て言葉にする。

恋慕や愛情は、伝わらなくてもいい。

それを今、伝えるのは俺の身勝手以外の何物でもない。

それを伝えてしまったら、このあまりにも真つ直ぐな歪みを抱えて絶望に適応したこの人の負担にしかならない。

やっとの思いで適応した世界を壊す、毒にしかならない。

……けれどそれは、ただの好意であっても同じことだ。

諦めて、捨てて、忘れて、それがないことを、手に入らないことが当たり前だと言い聞かせて適応させたのに、この人にまた裏切られて失う恐怖を背負わせるだけだという事はわかってる。

それでも、俺は――

「……正直、好きになれないところだってあります。

いくら言っても危ない行動をすることで、音速のソニックに対して無防備すぎるところとか。

けれど、それらも一つ一つが貴女を……、エヒメさんという存在を構成する大切な一部ですから、俺は貴女の好きにはなれないところも含めて、貴女が好きです。

……だから、もう……言わないでください。

俺が、いますから。

エヒメさんの事が好きな人間は、ここに俺がいますから」

それでも、俺は知っていてほしかった。

この世界は、貴女が思うような見返りを求めない善意なんかほとんどない、誰もかれもが裏で見返りを求めて下心が存在する下劣な世界だけど……、それでも、求める見返りが「貴女の幸福」である人間もいることを、貴女の前だからこそ正しい人間でいられる者がいること

を。

……貴女が俺に言ってくれたように、俺に「幸せになってもいい」と言ってくれたように、貴女は助けを求めてもいい、逃げてもいい、そして何より、誰かに好きになつて欲しい。

幸せになりたいと、望んで欲しい。

俺は絶対に裏切らないと約束するから、だからどうか信じて欲しかった。

……そこまで思つて勢いで言つたのはいいのだが、完全な勢いだけで一気に言つたので気が付かなかった。

いつの間にかエヒメさんの表情は呆気を取られたものではなく、俺が掴んでいない方の手を口元に持ってきて俯き、耳まで真つ赤にしていることに今更気づき、俺も気恥ずかしくなる。

「……………えっ……………と……………あ、ありがとうございます」

真つ赤になつてうつつむいたまま、エヒメさんは消え入りそうな声で答えた。

その反応と言葉からして好意そのものは伝わつたようだが、思つた以上にきちんと伝わつていたのがまたさらに恥ずかしい。

告白のつもりはなかったが、もしかしたらむしろ今のタイミングでは色んな意味で伝わって欲しくない方の「好意」まで伝わってしまったのかと不安がよぎつたが、わずかに上げた顔の表情と言葉がそれを否定する。

「……………でも……………あんまりそういう……………ストレートな言い方は……………しない方がいいと思います。

えっと……………私はすごく嬉しかったですよ！ 嬉しいんですけど……………ご、誤解してしまいそうなので……………」

赤面しながら困つたように笑つて、エヒメさんは言う。

やはり気付いていなかったことにホツとしつつ、……………ここまで言つても「好意」以上には決して取らない、彼女の絶望の根深さをまたさらに見せつけられ、俺は泣きたくなくなる。

けれど、泣けない。たとえば俺が生身であっても、泣きはしない。

「……………そうですね。」

けれど、これだけは誤解しないでください」

俺が泣いたらこの人は、その手で縫るのではなく自分の手を差し出して涙を拭うから。

だから俺は精一杯、サイボーグの利点を生かして、この乾いた目を笑みの形に細めて言う。

「俺は、本心から貴女が好きです。」

同情や哀れみで言った訳でも、先生のついででもない。俺はエヒメさんという人が好きです。だから、俺の好きな人の事を誰も好きになる訳ないなんて……」

「わ、わかりました！ わかりましたから、もう言いませんから、すみませんもう勘弁してください!!」

エヒメさんの手が俺の口を押えて、さらに顔を真っ赤にさせて叫ぶ。

確かに、これはやりすぎた。俺がエヒメさんの立場なら、確実にコアが暴走して自爆していただろう。

俺は掴みっぱなしだったエヒメさんの右手を離すと同時に、俺の口を押える左手を剥がして「すみません」と答えた。

……この時はおそらく自然に、笑えていただろう。

エヒメさんが、赤面しつつも安堵したように笑ってくれたから。

「……ごめんなさい、ジエノスさん。えつとなんだか……心配をかけたしまった」

笑いながら謝罪する、……自分の言ったことの何が悪かったかをまだよくわかっていないエヒメさんに、胸の奥、コアと同じ場所にある違うものが軋むように痛む。

それでも……今はこれでいい。そう、思えた。

赤みがまだ強く残る顔で、エヒメさんは顔を上げて笑って俺に言うてくれたから。

「でも、本当にそう言ってくれて、嬉しいです。」

私も、ジエノスさんの事が大好きですから」

その言葉は、俺とは違って本心から「ただの好意」でしかないことくらいわかっている。



「……私も、自分を蔑ろにして大事にしてくれないジエノスさんを、どうしても好きにはなれません。あなたが好きだから、傷ついてほしくないから、そこは何かあっても許すことは出来ません。」

……でも、あなたがそういう人だからこそ出会い、そして何度も助けられたのは本当ですから……。私も、ジエノスさんの好きになれないところ、許せないところ、大嫌いなところを含めて、あなたが好きです」

それでも、嬉しかった。

全然守れてなんかなかった俺を、貴女に助けられっぱなしで、悲しませて泣かせてばかりの俺に「助けられた」と言ってくれたこと、彼女を泣かせてまでして手に入れた力を、「大嫌い」と言われたこの手を含めて、価値を見出してくれたこと。

そして何より……

「だから……私はあなたと『ケンカ』がしたかった。

私は、全然ジエノスさんに好かれてる自信なんかなかったから、そのくせジエノスさんに求めているものがあつたから、……。だから私は、あなたにも私に何かを求めて、訴えて欲しかった。

だから……えーと……な、何か色々あつたし想像とは違うけどりあえず、お互いに言いたいことを言えたように満足してます!!」

最後は恥ずかしさの限界を迎えたようで、一気に言つて話を無理やりに終わらせたことに、思わず吹き出す。

「笑わないでくださいー」と少しだけ怒るエヒメさんに謝りながら、俺は胸の奥の無力感に言い聞かせる。

今は、これでいい。

この人は自分が好かれている、自分を好いてくれる人が少なくとも一人はいると知ってくれた。

今は求めるものがあまりにささやかでも、それでも何も求めないで自分が諦めていることを知らないままにいるよりは、ずっとマシだ。

エヒメさんの絶望はあまりに根深くて、先生ですら3年かけた今でもそこから引き上げられないのなら、俺が無理に引き上げてしまったらそれこそ、この人は耐えきれずに壊れてしまう。

だから、これでいい。

今はその絶望の底から1ミリでも浮かび上がったのなら、少しでも自分に向けられる「好意」に気付けるようになったのなら、……その手で誰かに何かを求めるようになったのなら、それでいい。

この人が少しでも幸福に近づけたのなら、もうそれだけで十分だ。

だから今はもう、これ以上は何も言わない。

今は何もできないのなら、これからしてゆけばいいと無力な自分に言い聞かせる。

……とりあえず、俺の告白あたりから何か勘違いして聞き耳を立てている地獄のフブキとキングをそろそろ焼却するところから始めるか。

## 全員迷走中

「おい、エヒメ。明日ちよつとフブキと勝負しに行くんだけど、お前も来るか？」

「意味わかんないよ、お兄ちゃん」

フブキさんにまた勧誘で呼び出されていたお兄ちゃんが帰って来たかと思ったら、開口一番にそんなことを言い出した。

何があつてそんな話になつたの？ フブキさん、死にたいの？

何とかお兄ちゃんから詳しい話を聞きだしたら、フブキさんはお兄ちゃんを説得しても無駄なら勝負しようという発想に至つたらしい。

うん、詳しく聞いても意味不明だった。フブキさん、何か迷走してませんか？

「で、なんかサイタマ組を連れてきてもいいとかなんとか言つてたけど、急に明日つて言われても誰が来れるんだよ？」

お兄ちゃんはぶつくさ言いながら、私からケータイを借りて誰か呼べそうな知り合いを探している。

別にフブキさんは一人でもいいって言つたらしいけど、「あなたの人望はその程度つてことね」という言葉をちよつと根に持つてゐるみたい。

つていうか、フブキさんにとっての正々堂々つて何だろう？

そんなことを思いながら、私は玄関を出て隣の部屋に行く。

もうお兄ちゃんから話はいつてるかもしれないけど、どちらにせよ絶対について行くであろうジェノスさんに、同じヒーロー同士だからお手柔らかに、この間みたいに話を聞かれていたからつて焼却しないように説得しておかなくちゃ。

\* \* \*

翌日、指定された会議室にやつて来た即席サイタマ組メンバーを見て顔を青ざめたフブキ組の皆さんに、申し訳なく思った。

うん、そりや青ざめるよね。

だつてメンバー、私とお兄ちゃんの他は、ジェノスさん、バングさん、キングさんとS級ばかりだもん。

お兄ちゃんから「お前から誰か呼んどくか？」と言われて一瞬、童帝君とバッドさんを思い浮かべて、でもこんなことで呼んで手伝ってもらうのは悪かったからやめておいたけど、今は違う意味でマジでやめておいてよかったと思う。

フブキさんがどんな勝負を仕掛けてくるのかはわかってないけれど、それでもS級5人つただけで十分プレッシャーで死ぬる。

今の3人でも何人か死にそんな顔色だし、ジェノスさんはお兄ちゃんをしつこく勧誘して自分の下につかせようとするフブキさんを嫌って、しよっぱなから殺気を飛ばしてるし。

「貴様ら……、先生の貴重な暇な時間を無駄に使わせて……ただで済むと思うな……」

「ジェノスさん、実に言ってることが意味不明です」

とりあえず私はツツコミを入れて、ジェノスさんが「これが一番手っ取り早いから」と言っただけで焼却砲を撃ち出さないように見張っておく。

フブキ組の皆さんがジェノスさんの殺気に身の危険を感じている中、フブキさんは既にジェノスさんは弟子、キングさんとお兄ちゃんは友達だっただけを知ってたから、来て意外に思っているのはバングさんだけらしく、比較的顔色は良く「想定内」と言っている。

……ジェノスさんが来ることをちゃんと想定していたのなら、たぶん勝負方法は戦闘じゃないんだろうな。

そこは想像ついてたけど、なんだか悪い予感がする。

まあ、悪いと言っただけでも悲劇というか茶番が起こりそうだな意味でだけ。

茶番と言っただけでもいい予感ではないことは確かだから、何とか回避したいなと思っただけなのに、ジェノスさんに穏便に済ませましょうと説得しているうちに、お兄ちゃんが勝負の同意書をろくに読まずにサインしちゃった。

「ちよっ、お兄ちゃん！　そういうのは一度私に見せてからサインしてって言ってるでしょ！」

予想通り、「負けたチームは勝ったチームの出す要望を何でも聞く

こと」と書かれてあったのに気付かずサインした本人が、「やっべ」って顔をする。

キングさんがお兄ちゃんに、説明書や利用規約をちゃんと読めと注意してくれるのはいいけど、ジェノスさんどころかバングさんも「勝てば問題ない。つまりは、全力で勝ちに行く」モードに入っちゃったじゃん！

ジェノスさん、バングさん、落ち着いて！

このメンバーで場所を移さず、椅子や机を片付けるだけで済ましている時点で、勝負方法はあなた達の得意分野じゃないことに気付いて！！

\* \* \*

「バングさん、右がバングさんの操作キャラです！ とりあえず、ガードをしてください!!」

「セレクトボタンを連打すんなって!! それ挑発だから！ 技じゃないから！」

先鋒を買って出てくれたバングさんに、私たち兄妹が必死になってゲームの操作をバングさんに教えてアドバイスを飛ばすけど、ゲームなんてほとんどしたことがない80歳越えのバングさんにはやっぱり無理だった！

バングさんは本気で勝ってフブキ組の皆さんを門下生にしようと思っていたらしく、負けて無言で凹むバングさんが見ていられない。

ああもう、本当にお兄ちゃんああいう書類はちゃんと読んで！ 読まないのなら、私に見せてよ！

初めからこういう勝負だっただけでわかっていたのなら、せめてゲームの種類とかくらは交渉して、バングさんでもまだ操作できそうなパズルゲームとか、皆でフォローできる多数対多数のゲームにできたかもしれないのに！

そしてやつぱり、ジェノスさんもゲームはほとんどしたことなかった……。

ってというか、開始即行でコントローラーを握りつぶした……。

ジェノスさん、格闘ゲームとかで力を入れてボタンを押せばダメー

ジが上がりそうな気がするのはすぐよくわかるけど、上がらないから力加減して！

そんな感じで、結局二人が30秒もかけずに負けちゃった……。

まあ、バングさんともかくいつまた焼却砲を撃ち出すかわからなかったジエノスさんが大人しくなったのはいいことだと思っておこう。

それでも思わないとやってられない。

幸いながらこのゲームはお兄ちゃんも私もやったことがあるから、とりあえず操作方法がわからなくて即KOだけはないでしょう。

……そんな風に思っていた時期が、私にもありました。

「実は俺もこのゲームやったことがあるんだよな。バングやジエノスら素人を相手すんのは勝手が違うぜ。

「ここらで一勝して……」

『K・O！ パーフエクト！』

……わっかかりやすいフラグを立てて、即座にお兄ちゃんが負けました。

私はお兄ちゃんもしか基本的にゲームをしたことがなかったから知らなかったけど、どうもお兄ちゃんはゲームがあんまり強くないみたい。

お兄ちゃんのバングさんやジエノスよりもいつそ気持ちの良い負けっぷりを見て、フブキさんが「さあ、後はエヒメとキングのみ!!」と言って高笑いする。

その言葉に、シヨックで死んだ目になっていたお兄ちゃんがいきなり何か含み笑いをしました。

……お兄ちゃん？ どうしたの？ 気持ち悪いよ？

「ふふふふふふ……」

舐めんなフブキ！ エヒメは結構ゲームが強いぞ!! 俺がだいたいがゲームに飽きるきっかけは、エヒメに負けたのが原因だ!!」

「それはあなたが弱すぎるからじゃない？」

お兄ちゃんがいきなり立ち上がってフブキさんを指さして堂々と宣言するけど、フブキさんがさっきのを見ていたら至極当然なことを

言い返す。

「うっ……、い、いや、そんなことねーぞ！ こいつは凝り性だし手先が器用だから、見たこのない技を繰り出すし、ストーリーモードの難易度ハードとか一人で余裕でクリアしてるし！」

一瞬フブキさんの指摘にお兄ちゃんは傷ついたけど、気を取り直して胸を張って珍しく私を他人に自慢する。

お兄ちゃんにゲームとはいえ人前でこういう自慢をしてくれるのは、恥ずかしいけど嬉しいのは確か。

……確かなんだけど、私は……

「むしろフブキ、格ゲーで良かったな！ 選んだゲームが落ちもの系パズルゲーなら間違いなくエヒメの独壇場だ！」

こいつは淡々ときっしり画面限界まで埋めて一気に消すのが大得意だからな！」

「先生、気持ちはわかりますがもうそれ以上は何も言わないであげてください！ エヒメさんがプレッシャーで死にそうです!!」

「エヒメ嬢!?!」

「エヒメちゃん!?! 顔色真っ白だけど大丈夫!?!」

ジェノスさんが気付き、お兄ちゃんに注意してくれたけど、遅かった。

キングさんの言う通り、私の顔色は悪いと言うより血の気を完全に無くして真っ白になっているんだろう。手足が妙に冷たく感じるのもその所為かな？

手足はガタガタ震えて、今この場に立っているのがやっとで、とてもじゃないけどあのゲームがあるところまで歩いて行けそうもない。

バングさんとキングさんはもちろん、敵であるはずのフブキ組の皆さんも私の様子に気付いて驚き、「大丈夫か!?!」と声をかける。

「!? うおっ！ しまった！ エヒメ、ちよつ、しっかりしろ！」

俺が悪かった！ 気にすんな！ 負けてもお前の所為じゃないから、悪いのは速攻で負けた俺らだから気にすんな!!」

お兄ちゃんが私の肩を掴んでガクガク揺さぶって、何とか私のプレッシャーを取り除こうとしてくれる。

周りのみんなに心配をかけるのが申し訳なくて、でもそこまで私を案じてくれるのが嬉しかったから少しは緊張が解れて何とか私は、笑ってお兄ちゃんに「もう大丈夫」と伝えることが出来た。

「……ウン。大丈夫ダヨー、オ兄チャン。私、頑張ルヨー」

「全然大丈夫じゃないだろお前!? キングがやってたゲームの妹みたいなしやべり方になってんぞ!!」

「ちよつ、サイタマ氏!! それは言わんといて!!」

あははー。心配性だなお兄ちゃんは。

うん、大丈夫。大丈夫。私は大丈夫。

何かお兄ちゃんが「やつぱお前はしなくていいから!」と説得してるけど、そんな訳にはいかない。

バングさんに迷惑をかけるわけにはいかないし、私の様子に戸惑いながらも「……しよ、勝負方法や勝った時の条件に変更はないわよ!」と言うフブキさんにジェノスさんはまた殺気を飛ばしてるし、私が負けたら面倒なことが起こるから、私が頑張らなくちゃいけない。

うん、大丈夫。このゲームはやったことあるから、ちゃんとハードモードもクリアしたんだし、超必殺技とかも出せたし、大丈夫。

あれ、でもこのゲーム最後にやったのいつだっけ?

火傷を負う前だったよね、少なくとも。

そういえば手を火傷してからゲームは一度もしてなかった。いや、大丈夫だよ。だって縫物も編み物も折り紙も、その他もろもろ出来るじゃない。

うん、大丈夫。大丈夫。

ほら、自分の得意な操作キャラを選べば……あれ? 私はどのキャラが持ちキャラだったんだっけ?

何か全部同じキャラに見える……あれ、そもそもテレビと現実の境目がわからなくなつて……

「あ」

ごとりと、いつの間に持っていたのかわからないコントローラーが、私の手から落ちる。

同時に貸し会議室にも沈黙が落ちる。



その瞬間、私の目が熱くなって何だかわからないけど視界が滲んで  
いって……

「……はい！　ちやつちやと『練習』終わらせて、『本戦』を始めるわ  
よ！

これは、ゲームなんてしたことがなさそうなメンバーぞろいのサイ  
タマ組が、少しでもゲームに慣れるまでの練習!!　サイタマ組のメン  
バーが一巡したら本戦開始!!

初めからそういう勝負方法だったわね、リリー!!」

「えっ!?　あ、はい！　そうです！　見せられませんが、絶対に見せ  
られませんけど同意書にそう書いてあります!!」

これは練習です!!」

「すまん、フブキ！　恩に着る!!」

沈黙を破ったのはフブキさんの二回手を叩く音と、早口で何かを誤  
魔化すというか勢いで押し切ってごまかす気満々の言葉。

フブキさんは絶対に私のあまりに情けない様を見ていられなく  
なつて、私のプレッシャーを何とかなくそうと苦肉の策でとりあえず  
今のは「練習」と言い張り、他のフブキ組の皆さんも「さすがはフブ  
キ様、お優しい!!」とアドリブで同意して、誤魔化した。

その言葉で私の身体をガチガチにしていた力が抜けて、浮かび上  
がってきた涙も引つ込む。

それを見て、もうどうしたらいいかわからなくて困惑させてしまっ  
ていたバングさんとキングさんもホツとした様子を見せてくれて、  
ジエノスさんも殺気をひっこめて「少しは見直したぞ」とフブキさん  
に言ってる。

ああ、なんていうか本当にごめんなさい！

やつぱり私、全然だめでした!!

とりあえずフブキさんの「練習」発言で、多少はまともに頭が働く  
くらいの冷静さが戻って来たからフブキさんにお礼と謝罪を伝えた  
ら、フブキさんは腕を組んで「初めからそうだって言ってるでしょー」  
と言い張った。

……やつぱり、フブキさんとタツマキさんって姉妹なんだなあ。

ツンデレっぷりがそっくりすぎる。

私はそのツンデレっぷりに少し和ませてもらったけど、やっぱり緊張が抜けきらず結局すぐに負けた。

でもまあ、このやり取りでフブキさんの性格がだいたいわかったから、負けて「フブキ組」に入るのは別にいいやとも思えた。

何だかんだでこの人と、そしてフブキ組の人たちはいいい人だと思う。

私にプレッシャーをかけた方が有利だったのに、それをせずに解消する方を選んでくれたこの人たちは、新人潰しとか問題点はあるけどちゃんとしたヒーローだと思えた。

だから、せめてバングさんとキングさんは無理言って協力してもらっただけだからと勘弁してくださいとだけ説得しようと思っていたんだけど……この後キングさんの番で私はもう本当にフブキさんとフブキ組に土下座したい気分になった。

……キングさん、お兄ちゃんからゲームが好きですごく上手いとか聞いてたけど、まさか練習・本戦合わせて60連勝するとは思わなかった。

ごめん！ フブキさん！ 練習とか言う必要なかった!!

気に入られました

……勝っちゃった。

キングさんが一人で、60連勝で勝っちゃった。

「……なぜキングが……信じられない……サイタマ組……たったの5人で……私は30人以上を率いて挑んだのに……人脈ですら劣ると言うの？」

「フブキさん、落ち着いて！ これ人脈はあんまり関係ない！ たまたま、キングさんがゲーム超強かつただけだから!!」

そのショックでフブキさんのメンタルがなんかヤバいんだけど、もうどうしたらいいのこれ!?

っていうか、フブキさんがこんな状態なのにお兄ちゃん、「じゃあ、俺らの勝ちだから飯でもおごってくれ」なんてよく言えるね！

むしろ私はフブキさんにご飯をご馳走したいくらいだよ!!

ただフブキさんの方もプライドの問題か、ただ単に律儀な性格だからかはよくわかんないけど約束を違える気はないらしく、お兄ちゃんの「飯おごれ」に対して力なく「……いいわ」と応えて今現在、皆でレストランにでも向かってる最中なんだけど……

「このままではまずい……。この男にランキング順位を抜かれる気がする……。私が必死で守ってきたB級一位の座を……」

フブキさんのメンタルは回復しないまま、何かずっと独り言をつぶやいてて怖い……。

「お主はどうも、肩ひじ張って上っ面ばかりを気にしておるのう。」

若いんじやから、もうちよつと気を抜いた方がいいと思うぞ?」

「……今回はたまたま俺の得意分野だっただけで、別にフブキ氏やフブキ組が劣っていたわけではないんじや……」

「ほら、フブキさん！ バングさんもキングさんも、こう言ってるわけですし!!」

もう必死でお兄ちゃんとジエノスさん以外でフブキさんをフォローするけど、フブキさんは全然回復しない。

だめだ、自虐自嘲の負のスパイラルにはまってる！

しまいには、いつまでたつてもブツブツずつと言ってるフブキさんをうつとうしく思ったのか、ジエノスさんが「置いて行きましよう」とか言い出すし！

出来るか、そんなこと！

お兄ちゃんも、ジエノスさんの意見を「いや、まだ飯おごってもらつてねーし」で却下しない！

そしてフブキさん！ 私らのフォローは聞かずに何でお兄ちゃんとジエノスさんの会話だけはしつかり耳に入ってるの!?

「そうよね……。もう私の価値なんて、それくらいしか……」

「フブキさん!? フブキさん無価値だとか言ったら、人類の9割はガチで無価値以下のゴミですよ！」

自信を無くして私たちにご飯をおごることだけが自分の価値とか言い出したフブキさんに、私は必至で説得する。

いやマジでこれだけ美人でスタイル良くて、強力な超能力を持ってあれだけの人数をまとめ上げるカリスマがあるこの人が無価値なら、人類はゴミしかないよ、フブキさん！

私は思ったことをそのまんま口に出してフブキさんを褒めてみたけど、お兄ちゃんというかキングさんにボツキリ折られた自信は一向に回復しない。

……この人、タツマキさんがコンプレックスなのはわかったけど、何でここまで自信がないと言うより打たれ弱いんだろう？

超能力では確かに叶わなくても、タツマキさん本人には絶対に言えないけどスタイルは圧勝してるし、向こうはそんな気がないからしてないだけかもしれないけど多人数をまとめ上げるとか、今回みたいに戦闘が不利なら別の自分たちが有利な状況を作り出すこととか、お姉さんより優れてる所なんかいっぱいあるから、私からしたら何を気にしてるのかがよくわからない。

そんなことを考えていたら、怪人発生の警報が流れた。

災害レベル「虎」と聞いて、凹んでいたフブキさんも含めて全員が真面目な顔になり、キングエンジンが鳴り響く。

「行くぞー」

お兄ちゃんの声に不満を唱える人はおらず、全員がその怪人の元まで急いだ。

……怪人退治で、フブキさんの自信が少しでも回復したらいいんだけど。

\* \* \*

結果は、ダメでした！

バングさんとジェノスさんのコンビネーションが綺麗に決まって、お兄ちゃんがいつも通りワンパンで倒して、フブキさんの出る間がなかった。

……お兄ちゃん。せめてカッコよく決めてくれたらまだしも、糸まみれでもものすごくカッコ悪く終わらせちゃったから、フブキさんが余計にショックを受けちゃってるし……。

……怪人退治も出来ない私なんて、何でヒーローやってるのかしらね?」

「フブキさん！ キングさんもしてないから！ 怪人にとって相手が悪すぎただけだから!!」

私がそう言ってフォローしてみるけど、やっぱり何の慰めにもならない。

もう本当にどうすりゃいいの、この人!? って思っていたら、「おねえさん！」と高い声と同時に私の腰になかなかの勢いで子供が飛びついた。

「童帝君?」

「おねえさん、Y市に来てたんですね！ 知ってたら油断なんかせず僕がああ怪人を倒して、カッコイイ所を見せたのにー」

私が視線を下ろすと、ランドセルからなんかものすごいアームがまだ仕舞い直しきれていない童帝君が、私の腰に抱き着いて無邪気に笑っていた。

何でここに童帝君が? って一瞬思ったけど、そういえば童帝君のラボはここ、Y市だった。

そりゃ、怪人発生と聞いたら童帝君が出るよね。

「……おい、童帝。エヒメさんが迷惑がってる。離れろ」

ジェノスさんがお兄ちゃんに引っ付いてる糸を剥がしながら言うけど、私は別に構わなかったのでもそのまま童帝君と会話する。

ぶつちやけ、ちよつとフブキさんの相手に疲れたから癒されたい。「いいんですよ、ジェノスさん。童帝君も、お疲れさま」

言いながら頭を撫でると猫のような笑顔で気持ちよさそうにしながら、「あ、そうだ。お姉さんも見てください!」と言って、持っていたものを見せた。

……えーと、何これ？

目が八つあるオカメのお面？ 岡目八目？ ダジャレかな？

「これは僕が新開発した、『オカメちゃん』です。」

これで人物を映すと筋肉量とかその他を測定して、肉体強度を測定できるんです」

「へえ。擬態とかが出来る怪人の発見とかにも使えそうだから、いいですね」

「あ、いいですね。その使い方。でもまだまだ試作段階なんですよね。さつきの怪人も、上半身と下半身で強さが違って、レベル測定を見誤ったし……。」

「そうだ、ちよつと皆さんも測定させてください」

童帝君が頼みに私は別に良かったので見ても良かったら、数字は30。一般的なC級ヒーローを100としているから、私の数値は普通に一般人レベルだけど協会の職員さん（男性）より高いらしい。

……何にも嬉しくないな、この情報！

バングさんはすごい数字が出そうと期待したけどそういうのは苦手だからと言って断り、ジェノスさんはサイボーグだから「肉体強度」は測定できないらしい。

だからお兄ちゃんとキングさんを測ったんだけど、結果はどちらも測定不能。

お兄ちゃんは弱すぎてエラー、キングさんは強すぎて測定できる上限がカンストしたって童帝君は思ってるけど、たぶん逆だよ！

っていうかキングさん、本当はあまり強くないんだらうなって思ってたけど、本当に強くなかった！

とりあえず童帝君に、あの蜘蛛の怪人を倒したのはお兄ちゃんだから、お兄ちゃんもカンストしたんだよ、私より弱いはないよ、つていうかそれは私が嫌だよ！ つて主張しようとしたけど、童帝君はなんかまだ落ち込んでブツブツ言ってたフブキさんを測定し始めた。

……フブキさんつて、超能力者だから別に体はさほど鍛える必要ないよね？

「ちよつ、童帝君！ ストップ！ フブキさんは測らないで!!」  
嫌な予感しかなかったら止めたけど、遅かった。

「あ、今度は測定できた。『地獄のフブキ』。『19』」  
やっぱり、かなり低かった！

そして、フブキさんがOTLのポーズで落ち込んだじゃった!!

「19……。私の強さ、C級以下……」

「フブキさん、ちよつと一回深呼吸して落ち着いて！」

あなたの戦闘スタイルなら筋力なんにも関係ない！ そして女としてこの数値、高くても嬉しくない!!」

いきなりOTLのポーズになったフブキさんを見て、童帝君が「……おねえさん、僕は何か悪いことしたんでしょうか？」と若干引きながら訊いてきた。

「……童帝君はあんまり悪くないよ。強いて言えば、タイミングが悪かったかな？」

私はそう答えるのが精一杯だった。

ただでさえ何を言っても凹む精神状態だったフブキさんが、わかりやすい数値で「弱い」と断言された……。つて思い込んでるんだろうなあ。フブキさんなら、あんまりその数値関係ないはずなのに。

まあ、とにかくもうボロボロだったフブキさんの精神をへし折る最後の一撃には十分だったらしく、フブキさんは顔色を真っ青にしている。

さすがにその様子を見ても、「早く飯食いに行こうぜ」とはお兄ちゃんも言えなかったらしく、面倒くさそうに一度溜息をついてからまだ蜘蛛の糸にまみれてる手袋を脱いで、フブキさんの頭を撫でた。

「ほら、もういい加減落ち着けて。」

何でお前はそんなに、順位とか数値とか頭数とか、上っ面の部分を気にしすぎるんだよ?」

お兄ちゃんはフブキさんの頭を乱暴に撫でて、ぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜるけど、フブキさんはされるがままでやっぱり最悪の顔色のまま、譫言のように答える。

「ふふふ……あなた達みたいなタイプには理解できないでしょうけど、上っ面は大事なよ。」

自分を他人より強く見せるためには……人より高いポジションで……なるべく隙を見せないこと……。あの人もそうしてたし……。いつも高い所について隙が無かった」

……フブキさんの言いたいことは、私には少し理解できる。

順位とか頭数とか結果とかそういうわかりやすい「優れた証拠」がないと、逆に「劣っている証拠」もないのにバカにして見下す人はいるし、隙を見せた瞬間、相手の全てを奪い取って行く人もいる。

上っ面が大事で必要なのは、確かにお兄ちゃんにはわからないだろうけど、事実だ。

……でも、それは――

「? それじゃ素の本気を出せないだろう?」

私がお兄ちゃんを言う前に、お兄ちゃんが心底不思議そうな顔をして言った。

お兄ちゃんにはわからない。だからこそ、惑わされずに行きつく。あまりにも簡単で、貫くにはあまりに困難な真理をこともなげに言いきる。

「周りを気にすんな!!」

「先生! エヒメさん! 周囲に無数の生体反応があります!」

お兄ちゃんが言い切ると同時に、ジェノスさんが声をかけ、同時に童帝君も声を上げた。

「! 子蜘蛛だ!! 怪人の死骸からウジャウジャと散り始めたぞ!!」

「やばい! そいつは寄生型みたいだった! 一匹でも逃がしたら大変なこと……」

お兄ちゃん達より前に戦っていたヒーローさんも顔を青ざめて声



を上げ、他の全員も顔色を変える。

地面の蜘蛛は普通の蜘蛛サイズで、倒すの自体は多分簡単だけど数が多すぎて一匹一匹を潰していたら、大半が確実に逃げられる。

ジェノスさんが周囲拡散系の焼却砲が一番手っ取り早くて確実だけど、もう倒したと思つて警報が解除されたせいで見物人が多くて、撃ち出すことは出来ない。

お兄ちゃんもバングさんも周囲拡散型、広範囲系の技なんかないし、キングさんはオカメちゃんで論外だって判明した。

だから、私は叫ぶ。

あなたしかいないと。

「フブキさん!!」

「言われなくとも……わかってるわよ、そんなこと……!!」

その答えは、お兄ちゃんの言葉に対してか、私の呼びかけに対してか。

どちらにしろ彼女の顔はもう自信をへし折られて失って、泣きたいのに今まで築き上げたプライドの残滓で泣くことも出来ない顔なんかじゃない。

自信はまだ回復してないだろうけど、何かをふっ切ったような顔でフブキさんは言い切つて、ぶわりと彼女の周囲の気流が上昇する。

「あなたや姉が私より強くたつて関係ない……」

私は私のやり方でいく!」

空気の流れを操つて、フブキさんは器用に子蜘蛛を全部かき集めて、そしてそれを握りつぶすように一気に丸めて潰した。

そして指をパチンと鳴らしたら、まだしつこくお兄ちゃんにこびりついていた蜘蛛の糸も全部は剥がれ落ちる。

「さつきはちよつとキングの凄さに動揺して調子が狂っただけ!

……とはいえ、今回の負けは認めるわ。今日の所は大人しく帰るけど、まだ諦めたわけじゃないからね。それじゃ……」

いつもの調子を完全に取り戻したフブキさんに私はホツとしたけど、お兄ちゃんは「帰んな。約束通り飯おごれ」と言い出した。

もう本当に空気を読め、お兄ちゃん!!

\*\*\*

久々の外食は美味しかったし楽しかったけど、予定よりだいぶ遅くなっちゃったなあ。もう外が真っ暗だ。

……ちなみに予定よりだいぶ遅くなった理由は、フブキさんが注文の際に念密なカロリー計算をして時間がかかったから。

彼女のあのスタイルがどうやってでき、そして維持されているかの一端を理解した。

うん、私には無理だ！

で、お会計の後、私がフブキさんにご馳走になったお礼を伝えたら、「気にしないでいいわよ」とそっけない返しの後に私から目をそらしながら、ポツリと言った。

「……悪かったわね」

「はい？」

いきなり何のことについての謝罪か、そもそも私に謝ってるのかすらわからなかったから、私が問い返すとフブキさんは目どころか顔をそらせて語りだす。

「私が落ち込んだ時に、色々言ってくれたのに話を私が聞かなかったこととか、……あなたがああいう手段が嫌いなのに巻き込んだこととかよ！」

……ああ、前半はともかく後半は何のことかと思ったら、あの勝負方法の事か。まあ、確かにあの数の暴力とだまし討ちみたいな方法は私のトラウマスイッチの一つだけど、どれも避けようと思えばいくらでも避けられたものだから、実はさほど気にしてない。

褒められた手段ではないのは確かだけど、こつちが避けようと思えば避けたチャンスはいくらでもあった、むしろ甘いくらいだったと私は思ってる。

っていうか、フブキさんは何だかんだで誠実で優しいよね。もっと卑怯なマネをしようと思えばいくらでも出来たはずなのに、それをしなかったんだから。

「大丈夫ですよ。フブキさんも、気にしないでください。……フブキさんは優しいですね」

私がそう答えると、フブキさんはきまり悪げに「……優しくなんか  
ないわよ」と答える。

それを、私は否定する。

「優しいですよ。それと、自分の悪いと思ったことはちゃんと謝って、  
至らないと思ったところを認めるのは人として凄いいと思います。」

「……だからこそ、『フブキ組』の皆さんは、フブキさんについて行く  
んだと思いますよ」

フブキさんがそらしていた眼を、私に向けてくれた。

きよとんとした顔で私を見るフブキさんに、私は伝える。

「上っ面が大事」と言った彼女に、それに同意をしながら否定する。

『フブキ組』の皆さんは、フブキさんの『上っ面』に惹かれて、それ  
目当てで一緒にいるわけじゃないですよ。」

フブキさんを尊敬して『この人についてゆきたい』と思ったから、だ  
から皆さんは『フブキ組』なんです。……皆さんはフブキさんの『上っ  
面』じゃなくて、『内面』が大事なんだと思います」

上っ面が必要で大事なのは、それしか見ていない「敵」相手の時だ  
け。

フブキさんは、少なくとも「フブキ組」の皆と一緒にいる時は、そ  
んな上っ面なんか必要ない。

私がプレッシャーで潰れそうなとき、そのまま潰すのではなく助け  
ることを選んだこの人に躊躇いなく同意したあの人たちは間違いな  
く、フブキさんの上っ面なんかどうでもいいはずだから、そのことを  
伝えて少しでもこの人が肩ひじを張らずに休めるようになってほし  
かった。

「……バカね。あなたは」

フブキさんは、妖艶な美女は子供のように無邪気に唇を綻ばせて  
言った。

「言われなくても、知ってるわ。そんなこと」

「……どうやら、私の言葉は余計なお世話で杞憂に過ぎなかったらし  
い。」

けれど私もその答えが嬉しくて、自然に頬が緩んだところでお兄

ちゃんやジエノスさん達が呼ぶ。

「おい、エヒメ何してるんだ。帰るぞ」

「エヒメさん、電車がなくなりませよ」

その声に私が「今行く」と答える前に、がしつと私の両肩が掴まれてそのまま抱きしめられた。

背中の圧倒的な質量と弾力に思わず同性でも顔が赤らんだのに、それを押し当ててる本人は楽しげにお兄ちゃんたちに言った。

「サイタマ。あなたの妹、今晚貸して」

## 少年一人のボーイズトーク

……どうしてこうなった？

俺はウーロン茶を片手に、事の始まりとどこから間違えてこの惨状になったのかを思い出す。

始まりそのものは、フブキの一言だろう。

あの女が一方的に勝負を吹っかけてきて先生の貴重な暇な時間を無駄に使わせた挙句、負けた分際で図々しく「この子、気に入ったから一晩貸して。エヒメもいいでしょ？ むさくるしい男に囲まれてばかりじゃなくて、ガールズトークでもしましょう」と言い出したのが始まりだ。

俺はもちろん「ふざけるな」と一蹴したが、先生は奴との勝負の時に珍しく先生自身がエヒメさんの地雷を踏み、フブキのとりなしで何とかエヒメさんが落ち着いたことを気にしていたらしく、「エヒメがいいのなら」と許可を出してしまい、エヒメさん自身も「私も、フブキさんともっとお話をしたいです」と言われては、もう俺に口出しする資格はない。

まあ、これはいい。気に入らないとは思っているのは事実だが、それは俺の個人的な感情でしかない。

あの女はプライドが高い癖に打たれ弱くて卑屈で姉とは逆方向で同じくらい面倒くさいが、しようと思えばできたはずなのにエヒメさんにさらにプレッシャーをかけて潰すという卑劣な手段は取らなかった。

エヒメさんが泣き出しそうになった時、真っ先に「これは練習！」と苦しい言い訳を押し通したあいつは、問題は色々あるが信頼に値する人間だと思う。

エヒメさんの同性のご友人は、今のところ金属バットの妹とタツマキくらいであって、どちらも年の差が大きい。

フブキとも4歳差なのであまり近いとは言えないが、それでも前述の二人よりはマシだろう。

彼女にはもっと人との繋がり、誰かから向けられる好意に触れてほ

しいと先日、心から思ったところだったので、そういう意味ではフブキがエヒメさんを気に入ったことはありがたかった。

もちろん、俺の個人的な感情は別だがな！

そんな訳でエヒメさんはそのままフブキの家に泊まることになり、エヒメさんがいないのなら先生は自宅に帰る必要もないので、面倒なのとフブキ組とのゲーム勝負リベンジの為にキング宅に泊まると言い、実はバングも負けたことを気にしていたのかそれに便乗し、俺も先生ばかりに負担をかけるわけにはいかなかったので、結局男勢は全員キングの自宅に向かった。

そして初めのうちこそ俺やバングは先生やキングに教えてもらいながらゲームの特訓を行っていたが、俺もバングもゲームをやればやるほどこういうものは性に合わないと感じ、先生とキングもそれを感じ取ったのだろう。

先生には申し訳ないが、未熟な俺では戦闘技術だけではなくゲームの技術も磨くという二足わらじは無理だと伝え、先生も俺はこのまま自分のしたいことをすればいいとおっしゃってくれた。

そんなわけで日付が変わるころには、ゲームの特訓はもはや強さの頂点に行き着いた先生とキングのみが行い、バングはそれを「最近のピコピコは映像も音もすごいう。映画でも見ているようじゃ」と言いながら見ていた。

……間違いのきつかけは、いつしか俺以外の全員が飲みだしたビールやチューハイだろう。

成人越えの人間が夜中に集まったら、下戸揃いでもない限り酒盛りになるのは当たり前前だということは、未成年の俺にはわからなかった。

もちろん、酔っ払いが引き起こす惨状というものも……

俺は未来の惨状を知らずにキング宅の冷蔵庫にあるものを使ってテキトーにつまみを作り、リビングで持って行ったタイミングで無自覚に呟いた。

おそらく、これが惨状のきつかけだ。俺の自業自得か。

「……エヒメさんは大丈夫でしょうか？ フブキの奴が勧誘の為に余

計なことを吹き込んでいないといいんですが」

「ジェノス、お前もうそれ10回くらい聞いた」

フブキがエヒメさんに危害を加えるなどという心配は、勝負の時の言動で「それはない」と信頼はしていたが、本人も「勧誘を諦めるつもりはない」と言っていた為、いつい不安がよぎり、そしてそれはすべて声に出していたらしく、先生からあきれられたような目で注意された。

……この時までには、普通だった。

先生はいつもと変わらぬ表情で、いつもと変わらぬ平坦な声音で、缶ビール片手にゲームをしながら、俺の心配ごとを一蹴した。

「あいつは強情だし、俺と違って話をちゃんと聞かずにハイハイ返事するやつじゃねーから、大丈夫だって。むしろフブキが言い負けて、泣いてんじゃねーか？」

まあ、エヒメは誰よりも何よりも可愛いから、心配するのは無理ねーけどな」

「はい、そうですね。それは分かっていますが先生の言うとおりの心配で……サイタマ先生!? 今、なんて言いました!？」

あまりに自然に言われたのと激しく同意だったのでスルーしてしまった発言に、数秒遅れて俺は思わず聞き返した。

キングとバングも、同じく言われた瞬間はスルーして、それより前の「フブキが今頃、泣かされてる」という発言で笑っていたが、俺と同じタイミングで先生の意外な言葉に気づいたらしく、同時に飲みかけた酒を嘔き出していた。

サイタマ先生! 貴方がエヒメさんのことを誰よりも何よりも大切にしていることは知っていますが、それをこんなさらかと口に出す人じゃなかったですよね!？」

俺達三人の驚愕に先生の方も驚き、きよとんとした顔だがやはりいつも通り、良くも悪くも気が抜けている顔と口調で言った。

「は? 何が? エヒメが世界で一番かわいいのは当たり前だろ?」

……先生の体温や心拍数を測定してみたが、平常と変化はなかった。

しかし、だからこそ俺は確信した。

普段通りのテンションでこんなことを言いだす先生は、間違いなく酔っている。

\* \* \*

酔っていることは確信したが、見た目に反して前後不覚なレベルなのか、ただ本音が出やすくなっているだけかまでは判別がつかなかった。

どちらにせよ俺から脈拍などは正常と聞いたバングとキングは驚愕しつつも安心し、ついでにバングは何かを企んだように笑った。

……この時にでも、俺がバングを殴って寝かせてしまえばよかったのかもしれない。

「のう、サイタマ君。エヒメ嬢がおらず、男しかおらんいい機会じゃから、ジエノス君と腹を割って話してみたらどうじゃ？」

妹の婿になる心構えとかをのう」

「何を言ってるんだ、くそジジイ!!」

とりあえず先生の本音が出やすくなっているのをいいことに、バングが先生にそんな話題を切り出して俺は怒鳴ったが、……いつもなら「何もねーよ。っーか面倒くさい」とでも言っただけでゲームを続行しそうな先生が、「それもそうだな」とコントローラーを置いて俺に向き直られた時は正直、弟子になったばかりの頃に手合わせで死を覚悟した時以上に緊張した。

わかってはいたが、本心から俺に言いたいことがなかった訳じゃないんですね、先生。

わかってます。俺がエヒメさんに任せるにたりうる男でないことくらい、わかってます。

ですがどうか、お手柔らかに……と思いつつながら、俺は先生の真正面で正座するしかなかった。

「俺が先生の話の聞くのはいいが、それを酒の肴にするなその二人!!」

ただこれだけは言っておいたがな。

俺の怒号など痛くもかゆくもないと言わんばかりにバングは飄々



と笑いながら「花も月も紅葉も雪もないのじゃから、若人の初々しい色恋の花を肴にして何が悪い？」と言い出し、キングに至っては真顔で、「自分に縁がないのだから、他人の話を茶化すくらいしてもいいだろう」と言い切った。

「俺の作ったチーズ厚揚げとタコきゅうキムチでも食ってろジジイ！」

キングは諦めるな！ まだ頑張れ!!」

とりあえずそジジイには俺が作ったつまみの皿を出して、キングに対しては思わず励ましてしまった。

そして先生の方はとうとやはり酔っているからか、俺たちの言動を呆れたような視線も向けず、だからと言って真剣でもない、奇妙なまでにいつも通りの表情で律儀に待ってくれていた。

……何なんだ、あの状況は？

俺は改めて向き直った時、先生は缶に残っていたビールを一気に呷って飲み干してからまず言った。

「ジェノス。うちの妹はアホだし大人しそうに見せかけて全然大人しくないし気も弱くねえ意地っ張りだ。そのくせにすぐ泣く面倒くさい奴だけど、世界で一番可愛い。だから、好きになるのは当然だ」

……ああ。全面的に同意しますが、やっぱり先生は酔っているなと思っただ。

俺がそう思った瞬間、先生の顔が真顔になり、先生は床にビールの缶を叩き付けてそのまま勢いでフーリングを少し割り、缶を潰して平面にして俺に言った。

「だけどな、まだ嫁にはやらねーからな！ 最低でも成人するまでは絶対にはやらん!! 以上！」

「はい！ 肝に銘じます!! って、え!? 以上!?」

俺が先生の言葉に返答し、言葉通り肝に銘じるために頭の中で反復してやっと短すぎる、というか最低限過ぎる言葉であった事に気付く。

ちよっ、先生!? 本当にそれでいいんですか!?

最低でも成人するまでって、1年ありませんよ!!

「何じゃサイタマ君。言っておきたいことはそれだけか？」

俺と同じく先生の短くシンプルなおかつ緩い条件に呆気を取られていたバングが尋ねると、先生は再び新しい缶ビールを開けて飲みながら、「おう。だって一番大切なのは、エヒメ自身の気持ちじゃねーか」と答えた。

そこは本当に本心であることに、俺は改めて先生の人としての出来の良さに敬意を抱いた。

「ふむ、本当にサイタマ君は兄の鑑じゃのう。という事は、サイタマ君はジエノス君に『妹が欲しければ、自分と勝負して勝て』などとは言う気はないのか？」

「ある訳ねえだろ。エヒメが一生、結婚できなくなるじゃねーか」

そしてその後サラツと行われた会話は、正直心からホツとした。

いえ、言われても諦めませんし絶対に何度負けても必ず勝つ気でいますけど、本当にその条件を出されたらエヒメさんは誰が相手でも一生結婚が出来なくなる。

が、そんな俺の安堵は酔っ払いジジイの発言で台無しになる。

「ふむ、じゃあやはりその役目はわしに任せてもらおうか」

「お前はエヒメさんの何なんだ!？」

「大丈夫じゃよ、ジエノス君。わしは本気でわしに勝てる相手じゃないと認めんとは言わん。ただこう言われても、そしてわしに叩きのめされても諦めない気概があるかどうかを知りたいだけじゃから、それさえわかれば負けても許可してやろう」

「ふざけるな！ 貴様に負けることを前提で語るな！ 結婚する前に貴様の葬式を上げてやるわ!!」

「ジエノス氏、落ち着いて。まだ君はエヒメちゃんにプロポーズしてないから」

キングに指摘されてその通り、まだ前提条件に立っていないことに気付いて俺は羞恥とジジイにからかわれた苛立ちで茶を呷る。

その後何故か、キングがやはり真顔で俺の肩に手を置いて言った。

「それに、まだシルバーファンングだからいい。たぶんエヒメちゃんとジエノス氏が結婚すると聞いたなら、タツマキちゃんも同じことを言い出すし、本気で殺しにかかるから気をつけて……」

「……………ああ。もうその光景が目には浮かんだ」

キングに言われて俺は思わず遠い目になった。

S級の大半がそうだがあの女、タツマキは何故かやたらとエヒメさんを気に入っている。

それだけならやはり俺の個人的感情さえ抜きにすれば別にいいことなのだが、あいつは他の奴らよりその執着が妙に強く、エヒメさんから他者を引き離して自分の手元で独占したがっている節がある。

まず間違いなく、俺に限らずあいつはエヒメさんが誰かと交際する、結婚すると言ったらバングのように相手の実力や気概を確かめる為ではなく、エヒメさんに近づく悪い虫認定して排除しようとするだろう。

……本当にバングよりも厄介だな！

先生にそれをされたら恐ろしいどころか絶望しかないが、排除されてもまだ納得できる分マシだが、お前だと釈然としないにも程があるわ！

あいつは本当にエヒメさんの何なんだ!?

俺が本気でタツマキとの戦闘を想定して考え始めた時、キングが先生に「それにしても言いたいことがそれだけって、サイタマ氏はジェノス氏を信頼してるんだな」と言い出した。

それに対して先生は、やはりとても酔っているとは思えない様子でさらりと答えた。

「何言ってるんだ？ エヒメが良けりや俺は誰でもいいんだ。ジェノスは確かに信頼してるけど、別に俺はあいつが良けりやソニックでも良いぜ」

「先生!! そいつだけは!! そいつだけはやめてください!!」

あの忌々しい音速の残念忍者の名が出た瞬間、俺は土下座で頼み込んだ。

あいつに奪われるくらいなら、タツマキの方が億倍マシだ!!

俺の土下座の懇願にキングとバングが引いたのは、顔を上げなくてもわかった。引きながら、二人は「ソニック」について尋ねて先生は「エヒメの命の恩人」を答えてしまい、バングが何やら誤解した。

「いかんぞジェノス君。男の嫉妬は見苦しい。サイタマ君に頼るのでなく、自分で自分を磨かなければ意味はないじゃろ」

「あいつは確かにエヒメさんの命を助けたかもしれないが、もうその恩はエヒメさんの胸をわし掴んだことでマイナスでいいだろうが!!」

俺の暴露で先生含め3人が酒を嘔き出し、バングが訳知り顔で俺を叱責したことをとりあえず詫びた。

そして先生から殺気が滲みだし、詳しい話を促された。

が、さすがに捏造して先生の怒りを煽るといふ卑劣なマネはしたくなかったのと、先生には悪いが奴だけは俺の手で殺したかったので、正直に割と事故に近かった事の起こりを話すと先生は殺気を引っ込めると同時に、何故か真顔になった。

先ほど、「まだエヒメを嫁にはやらん」発言よりも真剣な面持ちになつて、先生は俺の肩に手を置いて言う。

「ジェノス。それに関してはソニックが正しい」

「サイタマ先生!?!」

何を言ってるんですか!?! と言葉を続けたかったが、それより先に先生は真顔のまま真剣に語りだしたので俺は何も言えなかった。

「ジェノス。俺はエヒメのに関して、抱き着かれて押し当てられても『何か柔らかい物体』としか思わねーけどな、それが他人だったら、別に好みでも何でもねーフブキでも揉んでいいのなら揉みたい。手の内にあつたら、揉む。

それが男つてもんだ」

……先生の言葉が終わつても、「何を言ってるんですか!?!」とは言えなかつた。

俺の場合は人物が逆だが、先生の言い分に同意してしまった……。

もう本当に、エヒメさんすみませんごめんなさい。

俺が自己嫌悪と凄まじい罪悪感に襲われていることを察したのか、バングが同情するような目で俺の肩に手を置き、そして言った。

「ジェノス君、気にするな。男は乳が好きで当たり前前の生き物なんじゃ。わしも今ではもうすっかり枯れきつておるが、あと10ほど若けりゃサイタマ君と同じように思う」

「お前は何を言ってるんだ!？」

それで励ましているつもりか、ジジイ!

というか、あと10若くてもお前は古希だろうが! もっと枯れて落ち着け!!

俺がバングにそう突っ込んだが、先生はなぜか嬉しそうに「じいさん、話が分かるな!」と言い出してしまい、そのまま先生とバングで女性の胸の話になっていった。

……先生がこういう話題をあげた事などなかったのでストイックな方だと思っていたが、酔っているからかそれとも普段はエヒメさんに気を遣っているからなのか、嫌いではないんですね、こういう話題。幸いながらバングはこういう話題で俺をからかう気はないらしく、二人は俺に対してコメントを求めることはなかったが、それでも聞いているだけでエヒメさんに土下座で謝りたくなる内容に俺は頭を抱えた。

本当にごめんなさい、すみませんエヒメさん。男はバカな生き物なんです。そうです、俺も好きです。胸。

そうじゃなかったら抱きつかれて当たるときに動揺もしませんし、とっくの昔に指摘してました。正直、役得だと思っていました。というか何ですかあの、「何だこれは!? 餅か!？」と思うほどに柔らかくて理性の大半が一気に溶けるほどの破壊力は!?

……俺が話を聞いているだけで混乱したのか、エヒメさんに土下座しようが切腹しようが多分許してもらえないことを考え始めたタイミングで、先ほどから黙っていたキングがいきなり、床に拳を叩きつけた。

その音で俺も先生もバングもキングの方に視線を向けると、キングはキングエンジンを盛大に鳴らしながら重々しく言った。

「……お前ら、いい加減にしろ」

言われて、バングと先生が気まずげに笑って顔を合わせ、俺も安堵した。

ああ、意外とゲームをする俗物っぽいところがあったが、やはりこの男は戦いに心血を注ぐストイックな男なのだろう。だからこうい

う話題は嫌がって止めてくれたと思い、感謝したのは大きな間違いだった。

キングはもう一度、床を叩いて主張した。

「巨乳だけじゃなくて、貧乳も話題にあげなくちゃかわいそうだろ!!」

巨乳には夢と希望が詰まってるのは確かだが、貧乳は周りに夢と希望を与えるんだ!!」

「貴様は何を言ってるんだ!？」

本日一番通報した方がいい発言をかましやがった。別にキングに對していい印象などほとんどなかったが、この瞬間に俺のキングの株が大暴落したのは言うまでもない。

俺だけじゃなく先生とキングも盛大に引いた様子を見せたが、キングはそれをもとせずに貧乳について熱く語り出し、それに対して先生とキングは反論したりと、白熱した議論になるのには数分もいらなかった……

\* \* \*

いろいろ全部を思い出して、また頭が痛くなっていた。

もういい。別に悪いことばかりではなかったのだから、これもいつかはいい思い出になると思おう。

疑ってなどはいなかったが、先生がどれだけエヒメさんを大切に思っているかが分かっただけでもいいことだ。そして、なんだかんだでキングも先生の代わりにエヒメさんの結婚相手がどれほどの覚悟を持つものなのかを確かめようと思うほどに大切に思っている。

他者の好意を信じることができない、認識できない絶望の中にいる彼女だが、これだけの好意や愛情に囲まれて包まれているのだから、いつか必ず彼女はあの絶望から抜け出せる。

俺はそんな未来を思い浮かべて、ウーロン茶を呷る。

……いつの間にか、先生たちの議論は胸の話から逸れて尻だの脚だのといったマニアックな話題に移行した猥談を続ける現実から逃避しながら。

ちなみに、全員が語りつくしたからか酔いがやっと回ったのか、眠

りについた時には既に日が昇り始めていた。

## 遅効性核弾頭

……もう私、お嫁にいけません。

「エヒメー、ごめんってば。もうしないから出てきなさい」

「エヒメさん、すみません！ ごめんなさい！」

フブキさんとフブキ組の一員、三節棍のリリーさんが謝りながら声をかけるので、私は部屋の隅のカーテンにくるまったまま顔だけ出して、二人に恨み節をぶつけた。

「……なんで私はお風呂上りにいきなり、胸をもまれなくちやいけな  
いんですか!？」

女性二人から何故か受けたセクハラを訴えたら、男物のワイシャツをパジャマ代わりにしたフブキさんは悪びれずにしれっと、「あまりにやわらかそうだったから、つい」と答えられた。

「自前があるでしょ！ 自分の揉んでください!!」と私が叫んだら、フブキさんはやはり悪びれずに「私のは形と弾力には自信があるけどあんまり柔らかくはないのよね」と、確かに素晴らしい弾力だった自分の胸に視線をやって言い切り、リリーさんは遠い目になって、「……自前の……ですか……」と言いながら自分の胸を撫でてた。

……リリーさん、なんかすみません。

まあ、恥ずかしかったけど同性だし二人とも私が本気で嫌がった夕イミングですぐにやめてくれたので、実は口で言うほど根には持っていない。

せつかくのお泊りでこれ以上拗ねて楽しい時間を無駄に過ごすのはもつたいたないので、私はカーテンにくるまって籠城はやめて出てくることにした。

\* \* \*

フブキさんに「泊まっていきなさい」と言われた時はびくりしたけど、私は友達の家にお泊り会的なことがしたことがなかったので、実はちよっと憧れてたから嬉しかった。

いきなりで何の準備も持ってなかったから、テレポートで家に戻ってパジャマとかを取りに帰ろうとしたけど、テレポートとはいえあの



怪人発生率が半端ないあのゴーストタウンに一人で行き来するのはジエノスさん達から猛反対されて、「じゃあせつかくだからもう一人くらい呼びましょう」とフブキさんがリリーさんを呼んで、色々貸してくれたりこちらに向かう途中のコンビニで調達してくれたのも、本当にありがたい。

いきなりフブキさんに「今夜、泊まりに来なさい」と言われた挙句に、パシリにされたリリーさんには嫌味の一つや二つくらい言われてもおかしくなかったのに、リリーさんはすごく快く私に接してくれている。

つていうか、私が「いきなり巻き込んでごめんなさい」と謝ったら、「いえー・むしろ、ありがとうございませす！ 本当にありがたいございませす!!」と両手をつかまれて拝む勢いでお礼を言われた。

……うん。もう迷惑じゃなかったのなら、なんでもいいや。深くは考えないでおこう。

彼シャツ状態のフブキさんを、幸せそうに見ているリリーさんなんて私には見えない。

リリーさんから少し目をそらして、とりあえずベッドに腰掛けて手招きしているフブキさんの方に向かっていくと、私が手が届く範囲までやってきた時、フブキさんに手首を捕まれて、そのまま捕獲される。

「ちよつ、フブキさん!! 何するんですか!?!」

私を捕まえて、そのまま自分の横に座らせて後ろから抱きつく形で拘束する美女は妖艶に笑い、「さあ？ 何すると思う？」と恍ける。

本当に何する気!?! リリーさんも助けて！ そんな「うらやましい」と言いたげに指をくわえて見てないで！

私があわてて手足をじたばた動かすのが面白かったのか、フブキさんは艶やかな笑みからおかしそうな笑いに変化させて、わずかに腕の力を緩める。

「あはは、そんなに焦らなくてもいいじゃない。言ったでしょ？ ガールズトークをしましょうって。」

そして、ガールズトークといえば、恋バナでしょ？」

……ええ。言いましたね。ガールズトークをしましょうと確かに

言って、私もフブキさんともっとお話がしたいと言いました。

言いましたけど、それは本当に勘弁してください！ 私が一番の不得意分野なんです!!

私がそう叫んで何とか勘弁してもらおうと足掻くけど、フブキさんは「あら、何言ってるのよ。私の目の前で三角関係を繰り広げたくせに」と言い出し、リリーさんは眼を輝かせて身を乗り出した。

「三角関係!?! あの鬼サイボーグにライバルがいるんですか!?!」

ジェノスさんが三角関係の一边だと確定されてる!?!

「どっちもそんなじゃありません！ そもそも三角関係じゃないです！ 三角じゃなくて平行線3本です!!」

「鬼サイボーグに盛大に告白されてたじゃない。忍者にもディープキスされてたし」

「あれは告白でもキスでもありません！ ただの本音トークと嫌がらせです!!」

私の主張に、フブキさんは一度ため息をついてから拘束するように抱きついて腕を離し、私はそのままレポートでまた部屋の隅に退避して、カーテンにくるまる。

もうお願いですからこういう話題は勘弁してください!!

「……本当にこういう話題が苦手なんですわね」

リリーさんが苦笑しながらのセリフに、私は無言で首を上下に振る。苦手というか、わからないですし想像できないんです。

プリズナーさんやジェノスさんの言葉で、少しは憧れとかそういうものを抱くようにはなりませんが……私が好きになってもどうせ意味ないし、って思ってしまう。

手に入らないものを求めるのは虚しいから、はじめから諦めているのは分かってる。

それこそが、どうしようもなく淋しいことだっけともわかってる。

けれど私にはやっぱり、よくわからない。想像できない。

求める心も、命に代えても貫きたいことも、わからない。

……さすがにこんなことを口に出すと空気が重くなるのは分かつ

ていたから言わないでおくと、フブキさんがあきれたような表情で「でもキスされても、嫌悪とか感じてないでしょ？ 普通、好きでも嫌いでもない男からいきなりファーストキスを奪われたら、修復不可能なくらい好感度はマイナスになるわよ」と言われた。

だからフブキさん、ソニツクさんにされたそれはもう本当に話題に出さないで!!

「……何とも思っていないわけじゃないですよ。次に会えば、一発殴ろうかと思っはいます。

……でも、どうしてもあの人は嫌いになれないですよ」

もう話題にあげてほしくないんだけど、「何とも思わないものは何とも思わない」と言っても、フブキさんは納得してくれないから、前にジェノスさんに言った通りのことをフブキさん達にも説明してみた。

フブキさん、この前の話をキングさんと出歯亀してたけど最初の方は聞いてなかったらしくて、私の説明を聞いてきよんとしてからなんかもものすごく微妙な顔をして、同じく微妙な顔をしてるリリーさんと顔を見合わせた。

そういえばジェノスさんも同じような顔をしてたなあと、思い出す。

ジェノスさんの場合は、もつといろんな感情が入り混じった複雑そうな顔だったけど、二人の顔は隣みが強い。

「……忍者もなんていうか、気の毒ね」

「私は詳しくは知りませんが、忍者はリードどころか自爆したことでだけは分かります」

二人の会話に私はただ首を傾げた。

リリーさん？ ソニツクさんは自爆なんかしてませんよ。いえ、あの意味お兄ちゃんのライバルを自称するって時点で壮大な自爆といえは自爆ですけど。

「まあ、あんたがああの忍者を男としてまっつたく意識してないのはよくわかったけど、それでもファーストキスを奪われたことも気にしてないのは意外ね。そういうのに夢を持ってそうなタイプに見える

のに」

「あー……。そもそもあれをキスとカウントするなら、ファーストじゃないので……」

「誰?! いつごろの話?!」

「鬼サイボーグさんは知ってるんですか?!」

私が最後までいう前に、ものすごい勢いで二人が食いついてきた。

なんで私のファーストキスにそんなに興味津々なんですか!?

「……相手お兄ちゃん、小学生になるかならないかな頃の話ですけど?」

もともと話すつもりでいた内容を語ると、目に見えて二人は肩を落とす。だから、恋愛はわからないし苦手って言ったじゃないですか!

そんな私が、まっとうなキスの体験してるわけないでしょ!

「何? 将来はお兄ちゃんのお嫁さんになるー的なやつ?」

「いえ、ジャングルジムで遊んで落ちそうになったところをお兄ちゃんが助けてくれたのはいいんですけど、互いに頭をぶつけた時に勢い余って唇もぶつかっただけです」

「それはもう、ただの事故!!」

フブキさんに「本当にこの子、ブラコンね」と言わんばかりの目で訊かれたから、ブラコンは自覚してるし当時5歳前後の私はともかく、それでキスしたのなら年の離れたお兄ちゃんの名誉が危ないと思いきつちり真相を語ればフブキさんだけじゃなくリリーさんからも同時に突っ込まれた。

わかってますよ。だから、カウントしてないんじゃないですか。私だってあれは、ぶつけたおでこ鼻と口が痛かった記憶しかありません。

私のただひたすらに痛くて虚しいだけのファーストキス話に、何故かフブキさんの方が残念そうに頭を抱えた。

「……まあ、鬼サイボーグにとってはまだ、朗報かもね。忍者に奪われるよりは、尊敬してる相手との他意がない事故の方が……」

「なんでそこでジェノスさんが出てくるんですか?」

確かにジェノスさんはソニックさんがやらかした嫌がらせが私の

トラウマにならないかをすぐ気にしてくれたけど、あまりファーストキスがソニックさんじゃなくてお兄ちゃんだったって事実はある人に関係ない気がするんですけど？

私が心底不思議に思って尋ねたら、リリーさんは「マジですか？」と言わんばかりに目を見開いて、フブキさんはまた呆れたようにため息をつく。

そしてベッドから立ち上がって、私に近づいて訊いた。

「エヒメ、あなたは本気でそれを言ってるの？」

「え？……何が……でしょうか？」

少しだけ怒っているような、苛立っているような様子で問われ、思わず及び腰になりつつも尋ね返す。

私にはフブキさんが何で怒って苛立っているのかはもちろん、質問の意味さえもよくわからない。

ただひたすらに頭の中で、フブキさんが指した「それ」の心当たりを探るけど見つからない私をフブキさんはしばし見下ろした後、もう口紅は落としたはずなのにそれでも瑞々しくて真っ赤な唇を開いて言った。

「エヒメ。あなた、鬼サイボーグが自分にキスしてきたところを想像してみなさい」

「はい？」

あまりに唐突すぎる命令に、間抜けな声が反射で上がる。

「いいから、今すぐに想像して考えてみなさい！ 想像できませんって言ったら、またあなたの胸をリリーと一緒に揉むわよ!!」

「どんな脅し文句ですかそれ!?!」

女性にあるまじき脅し文句を叫ばれた。目が本気だった。

なので私は訳がわからないまま頑張って想像してみようとする。

「……あれ？ ジェノスさんの口の中ってどうなってるんでしょう？ 歯と舌はあったと思うんですけど、唾液は分泌……されてないともうか？」

「エヒメさん！ 違う！ そこは気にしないでいいです！」

「確かにそこはそこで気になるけど、もつと手前を想像して色々疑問に持ちなさい!!」

しようとしていきなり疑問にぶち当たり、その疑問を口にしてみたら「そこはいい」と突っ込まれた。

うん、そうですよね。

でも本当にジェノスさんとキスなんて……何がどうあってそんなことする状況になるんですか？

想像がまったくできないで、私は頭を抱えたり顎や口に手をやったりしながらウンウン唸って考える。想像しないとまた同性から盛大なセクハラを受けるけど、これもすでにセクハラだよな？ 私に対してなのか、ジェノスさんに対してなのかがもうよくわかんないけど。

……あーダメだ。全然イメージできなくて全く関係のないことを考えてしまう。

っていうか「そこはいい」って言われたけど、ジェノスさんの口は本当にどうなってるだろう？

顔は基本的にあの目以外、質感も含めて人間に近く作ってくれてるみたいなんだよね。ひびが入るけど、頬とかは普通に柔らかいし唇も柔らかかったし……。

……………唇？

自分が何でジェノスさんの唇の感触を知っているのかが一瞬素で疑問だったけど、そーいやあの告白みたいな本音トークに耐えきれず、ジェノスさんの口を思いっきり手で押さえたってと自己回答で解決する。

解決した瞬間、また疑問が浮かぶ。

私、どっちの手で押さえたっけ？

そして、私が想像しよう、考えようと思って唸って、何気なく口元にやった手だったとしたら、丁度自分の唇が当たっているそのあたりに、あの人の唇が――

「!？」

「? エヒメさん?」

私がいきなり何気なく自分の口元を覆うようにやっていた手を離

して、その掌を凝視すると言う奇行に、リリーさんは不思議そうな声を上げる。

フブキさんがどんな顔をして、どんな反応をしているかはわからない。それを確かめる余裕は私にはない。

想像できない。イメージできない。

だって、何がどうなつてそんなことをジエノスさんが私なんかにするのかがわからなかったから。ありえなかったから。

なのに……なのに……、もうあれから数日たつてるのに、もう何度も何も意識せずに手を洗つたのに、そもそもこつちの手がジエノスさんの唇に触れたのかどうかも定かじゃ無いのに……間接キスかと思っただけで、脳裏にあまりにもリアルな映像が流れこんできた。

どうしても置き換えなんかできなかつた場面が、置き換えられる。

ソニックさんの男性にしては細くて長い指先ではなくて、無機質で武骨で危なっかしくて、でも優しくて大きな手が私の後頭部を包み固定して、押さえつけるのを。

黒い眼球に金の瞳があまりに自分の視界に近いところを。

掌で触れた、思ったよりも厚みのある柔らかな唇が私の――

頭に血が上る。顔が熱くて、頭が熱くて、何も考えられないのに、考えたくないのに、目まぐるしく映像が、情報が、言葉が、感情が駆け巡る。

『愛は「与える心」で、恋は「求める心」だ』

打ち碎けなかつた隕石。力尽きて項垂れていたあの人に、一直線に向かつて行つた体。

ただ、あなたに会いたかった。

『愛は「命を懸けて守る」こと。』

そして恋は、……「命に代えても貫く」ことです』

自己嫌悪で死にたくなるぐらい、自分の弱さが嫌だった。自分の身勝手さが嫌だった。

それでも生きたかった。「助けて」と望んでしまった。

自己嫌悪も忘れて、その願いをなげうって、「安全なところで、必ず帰ってくる」と信じて待つ」の約束も破つて、それでも助けたかった。

この手が焼け落ちてでも、逃げずに貫きたかった。

ずっとずっと目を閉じて、耳を塞いで、自分の体を焦がすこの感情から気づかないふり、見ないふりをしていた。

見えてない。聞こえない。だから、存在しない。

そう自分に言い聞かせて、思い込ませていたけど、そんな訳がない。だって私はあの人が好きだから、もっと好きになりたいと求めた。あの人に好きになって欲しいと、求めてしまった。

あの人と言う「不満」を、「私の悪い所」を、命に代えても直していきたいと思った。

貫きたいと思ってしまった。

存在しない訳がない。

ずっとずっと前から、当たり前前のようにそこにあって、もうとつくの昔に私から切り離せない一部になっていた。

『俺は、貴女が好きです』

私なんかを、あの子はそう言った。

だから、もう言い訳は許されない。

「え？」

顔を上げるとフブキさんが実に楽しそうに笑っていた。

「エヒメ。『わかった』でしょう？」

ああ、もう逃げ場はどこにもない。

降伏するしかない。



私は、ジエノスさんに恋をしていると。

\* \* \*

そこから、記憶は曖昧。

フブキさんとリリーさんに色々話した気がするし、逆に色んな事を訊いた気もする。

私は何も話さず、ただ二人からの話を聞いていたような気もするし、もしかしたらあの後すぐに横になったような気さえもする。

ただ、これだけは確か。

私はあれからずっと、どんな顔でジエノスさんに会えばいいのかを考えてた。

そしてその答えは、レポートで一人先に帰って来てからも、お兄ちゃんの「ただいま」の後に続いた、「お邪魔します」の声が聞こえた今も、わからない。

## トラウマ克服編 リア充爆発計画始動

もうどうしたらいいかわからない。

……フブキさんに私の「気持ち」を自覚させられて数日たった今でも、私は何もわからずただ悶々と自分一人で考える。

ああ、もう！ 私は本当にどうしたらいいの!? もう今までどうやってジェノスさんと顔合わせて話をしていたかが全く思い出せない!!

「……はあ」

「……エヒメ。お前が今編んでるの、マフラーじゃなくてセーターじゃなかったっけ?」

「え? ああ?」

お兄ちゃんに指摘されて、自分が編んでるセーターの前身ごろがえらく長くなってることに気付く。

もうこれじゃ、マキシ丈のワンピースですらないよ！ お兄ちゃんの言う通り、やたらと幅が広いロングマフラーだよ！

どれだけ自分が心ここにあらず状態で編んでたんだと呆れながら、毛糸をほどいていくけれど、これはジェノスさんにあげようと思っていたノースリーブのセーターであることを思い出し、一時停止。

私は何で、無自覚でこんな彼女っぽいことを平気でやろうと思っただの!?

もう誰か、自覚前の私を殺して！ 自覚後の私でもいい!!

「おーい。エヒメー」

「! え? 何? どうかしたの、お兄ちゃん?」

「お前がどうかしつぱなしだよ」

一時停止した私の目の前で手を振って呼びかけるお兄ちゃんに返事をして訊いてみたら、もったもんな答えが返された。

そうだね。私はもう挙動不審どころじゃないのはわかってるよ。

わかってるけど、もう本当にどうしたらいいかわかんないし、どう

しようもないんだよ！

私は心の中でそう叫んで、テーブルに突っ伏す。

もうお兄ちゃんにも、どんな顔を見せればいいかわかんない。

「……お前さ、話したくないのなら、話してお前が傷つくようなことなら、何も話さなくてもいいけど、話して楽になることなら話せよ。」

俺が嫌なら、俺には話せないんなら他の誰でもいいからさ」

突っ伏す私の頭を、いつものように撫でてお兄ちゃんが言う。

うん、そうだね。ありがとう、お兄ちゃん。

お兄ちゃんの言ってることは正しいし、心配してくれてるのもうれしいよ。

……でも！ マジでお兄ちゃんには言えない！

だってお兄ちゃん、めっちゃ悪気なく自然体でジェノスさんに暴露しそうなんでもん!!

暴露されたら、私が爆発する！ だから絶対に言えない！

……言えないけど、私は突っ伏したまま視線だけを上げてお兄ちゃんに尋ねる。

「……ジェノスさん、気にしてた？」

「あー……。お前が『大嫌い』って言った時と比べりゃ全然マシだけど、なんつーか日に日に落ち込んでるな。」

前のが痛恨の一撃を喰らってHP1でギリギリ行動してたのなら、今は一定時間ごとに弱ダメージ与えられてるってところか」

私の質問にお兄ちゃんは気まずそうに一度目をそらしてから、嘘についても意味はないと判断したのか正直に答える。

そして、わかつてはいたけど、私の所為だけど、罪悪感が槍となってブスブスと私の心に突き刺さる。

もう前に思わず言っちゃった「大嫌い」だけでも、枕に顔を押し当てて悲鳴を上げながらのたうち回りたいのに、私は今何やってんの？

……フブキさんに自覚させられてから、私はまともにジェノスさんに対応できてない。

お兄ちゃんが帰って来て、いつも通りジェノスさんも家に来てくれた時、私はユデダコ状態だった顔を隠すのが精一杯で、今みたいに

テーブルに顔を突っ伏しつて隠していたら、具合が悪いのかと思った心配されて、それでさらにパニックを起こして、そのままテレポトで逃げちゃったし……。

ああ、もう、最悪極まりないよこれ!!

幸い、ケータイは持つてたからテレポトで逃げてすぐに連絡された時、電話越しでも緊張で声が裏返るし、通話を切っちゃいそうになっただけど何とか、「ジェノスさんの所為じゃないですか!」ジェノスさんは何も悪くないですし、私は怒ってなんかいませんから! ジェノスさんの事大好きですから、気にしないでください!!」って言うことが出来て、その後に戻ってお兄ちゃんに訊いてみたら、別に気にしてなかったって教えてくれた。

っていうか、今思い返したら盛大に告白してるよ私! ああ! もう本当に死ぬ私! 何で自覚後も自覚前も、「大好き」が平気で言えんの!?! いや、平気じゃないけどさ!!

「……お兄ちゃん本当に迷惑ばかりかけてごめん。……でもお願い、もう少しだけジェノスさんにあなたは何も悪くないって言っておいて」

「わかってるっの」

もう思い返したら恥ずかしいことしかしていない私は、またテーブルに突っ伏してそれだけをお願いするのが精一杯だった。

本当に、どうしたらいいんだろう?

私の所為で、あの日からジェノスさんは私に気を遣って家に来ない。

ケータイで何かとメールをくれるし、私もさすがにメールはさほど動揺も緊張もしないで読めるし返せるし、本当に前みたいに怒っていないことはお兄ちゃんに伝言を頼むだけじゃなくてメールでも伝えましたし、お兄ちゃんに頼んで夕飯のおすそ分けとかもしてるから、そこは誤解されていないと思う。

……でも、いくら「怒っていない」「あなたの所為じゃない」と言われても、いきなり逃げ出してそれから顔を合わせていない私の対応は、最悪そのもの。

……愛想尽かされても、おかしくないよね？

そんな当たり前の考えに、目頭が熱くなる。

それが嫌なら、せめて挨拶くらいできるようにならなくちゃってつてことくらいはわかり切ってるのに、今の私じゃ想像の中でさえジェノスさんに何かを話そうと思っただら盛大に噛む。

どうしよう、どうしようと考えて、答えがわかってるのに実行できない自分が嫌で、そんな自己嫌悪が元々欠片もなかった自信を食いつぶして、さらにどうしようかと考える悪循環にはまっていたら、玄関でチャイムが鳴った。

ジェノスさんかと思っと思わず体が強張る。

今すぐに扉を開けてあの人に会いたい気持ちと、テレポートで逃げ出してしまういたい気持ちがぶつかり合って、何もできず動けないでいた私の代わりに、お兄ちゃんが立ち上がる。

けれど、お兄ちゃんが扉を開ける前に高い声が響いた。

「サイタマー、エヒメー、いないの？」

私が今現在、こんな状況に陥っているある意味元凶だけど、恨むのはお門違いだし今はやって来てくれたことがありがたかった。

「フブキさん？」

\* \* \*

本人の宣言通り、懲りずに勧誘にやってきたフブキさんを取りあえず招き入れて、私はお茶の用意の為に台所に立つ。

緻密なカロリー計算をしていた人なので、お菓子はいるかな？ と

思っつて訊こうと思っつたら、いつの間にか台所にやって来ていた。

「エヒメ」

そして、にやりと濃く紅を掃いた唇を吊り上げて、尋ねる。

「どう？ 何か進展はあった？」

その言葉が、堰き止めていた涙を決壊させる。

「!? え!?! ちよつと!?!」

いきなり声を上げずにボロボロ泣き出した私に、フブキさんはもちろん、狼狽する。

困り果てたフブキさんがお兄ちゃんに助けを求めるけど、お兄ちゃ

んはゲームをしながら、「ちょうど良かった。フブキ、ちよつとそのアホの話を聞いてやってくれ」と丸投げしてさらに困らせたので、私とは何か涙の合間に、小声でフブキさんに話す。

進展どころか、逃げてばかりでどうしようもないダメな自分と現状を。

「……動揺するのはわかってたけど、ここまでとはね。ちよつとごめん」

台所の片隅で、フブキさんが私の頭を撫でて謝った。

「フブキさんは……悪くないです……。私がもう……一人でテンパって訳わかんなくなってるんです……」

とりあえず誰にも話せなかったここ最近のモヤモヤと自己嫌悪を吐き出してすつきりして涙も治まった。

でも何も解決はしてない事実凹凸。

うん、仕方ないよね。私に向き合って行動しないといけないことなんだから。

「ごめんなさい、フブキさん。いきなり困らせて、迷惑かけて」

フブキさんに謝罪して、お詫びになるのかどうかかわらないけど出来るだけ丁寧に茶葉を蒸らして、美味しくなるようにお茶を淹れる。

お茶菓子も「もらう」と答えたフブキさんは、パンの耳で作ったラスクを台所で齧りながら、私がお茶を淹れるのを見ながら訊いた。

「ねえ、エヒメ。あんたとしては、鬼サイボーグとせめて今まで通りに話したいくらいには思ってるのよね？」

改めてそう問われて、湯呑にお茶を注ごうとしていた私の手が止まる。

「……………はい」

くらいなんかじゃない。切実に、自覚する前に戻りたいと思うぐらいに切望している。

あの人と両想いとか、気持ちを伝えるなんて大それたことなんか、とてもじゃないけど夢見ることさえできない。

だからせめて、あの日常を続けていきたい。

せめて……ジェノスさんが他の誰かを選ぶまで。

自分でその未来を想像しただけで、心臓は軋むように痛んだけど、それでも私はその位置に自分が立てるとは思えない。

私なんかをそういう対象じゃなくても「好き」だと言ってくれただけで、思ってくれただけで奇跡なんだから、これ以上求めるのはもう「恋」じゃなくて子供のわがままだ。

だからせめて、せめて今まで通りに……と望むのに私は、隣の部屋に行つて「いきなり逃げ出してごめんさい」と謝ることすら出来ない。

……「逃げない」と科した誓いをとことん守れない、弱くて卑怯な自分が本当に嫌になる。

またそんな自己嫌悪に襲われながらも、リビングに持つていこうと思ひ、淹れたお茶とラスクをお盆に乗せたところで、フブキさんに手を掴まれた。

「あなたの性格をよく把握しないうちに自覚させちゃった私の責任つてことで、きっかけになつてあげるわよ」

「はい？」

しれつと意味がよく分からないことを言ったかと思つたら、フブキさんは私の手を掴んだまま歩き出した。

「え？ フブキさん!？」

この人にはさほど力がないはずなのに、超能力を使っているのか私は抵抗できずにつれていかれる。

台所を抜けてリビングを無視してそのまま玄関に向かい、私が靴を履くのももどかしいと言わんばかりにちやつちやと進んで、隣の部屋に。

「!? フブキさん!？」

隣の、ジェノスさんの部屋の前にフブキさんが立った瞬間、ひっくり返つた声が出た。

思わず反射でレポートを使いそうになつたけど、フブキさんに手を掴まれた状態で使つたらフブキさんの腕がもげる可能性にギリギリのところまで思い至り、跳ぶのを思いとどまつた。

その隙にフブキさんは、ジェノスさんの家の玄関チャイムを鳴ら

す。

「エヒメさん!？」

直後、チャイムの音が終わる前にもものすごい勢いでジエノスさんが玄関を開けて私を呼んだ。

たぶん、私のひっくり返った声が聞こえていて、それで慌てて出て来てくれたんだろう。

そこまで心配してくれたことが嬉しくて、だからこそどうしたらいいかわからなくなって頭が真っ白になって、私は何も言えないままその場に固まる。

ジエノスさんは私を見て一瞬笑ってくれたけど、何かに気が付いたように目を見開いたかと思ったら、視線をフブキさんに移して低く言った。

「地獄のフブキ! エヒメさんに何をした!?! 泣かせたのか!？」

言われて、ついさつきまで泣いてたから目が充血していることに気が付き、それでジエノスさんがフブキさんを誤解したので、私はフブキさんの所為で泣いたんじゃない、ゴミが目に入ったんです! と言って誤魔化そうとしたけど、やっぱり緊張で言葉にならず、代わりにフブキさんが不敵に笑って答えた。

「そうよ。ついでに言うところ最近、エヒメがあなたを避けてる原因を作ったのも私」

誤解を解くどころか助長させる言葉を自ら吐いて、ジエノスさんの殺気は膨れ上がる。

けれどフブキさんはそれをものともせず、一枚の紙を取り出してしれつと言った。

「だから、そのお詫びをしようと思って来たの。

これ、あげるわ。今日までだから二人で行ってきたら?。」

フブキさんの言葉と取り出されたものに、ジエノスさんの殺気は霧散して呆気を取られたような顔になる。

私の位置からじゃ見えないことを察して、フブキさんは「あげる」といった紙を私の方にも見せた。

「……映画のチケツト?。」



「そうよ。もらいものだけど、私が好きなジャンルじゃないから、あげるわ」

唇を吊り上げてフブキさんは答えるけど、私は現状が理解できずにまた固まる。

え？ 今日までってことは今すぐにジエノスさんで行けってこと？

いや、無理無理!! 緊張で心臓吐き出す!

あれ？ でも映画なら大半の時間はそっちに集中して会話とかせずに済むからマシ？ 終わったらその映画について話せばいいから、何を話せばいいかも考えずに済む？

いやでも、そこに行くまでどうしたらいいの!?

っていうか、映画なんてそんな、で、デートの定番みたいなところにジエノスさんで行けっておっしゃるんですかフブキさん!!

「……何を企んでるんだ？ 地獄のフブキ」

私が脳内で一人騒がしくパニックっていたら、さすがに殺気はなくなっただけど、ジエノスさんの警戒心と怒気を復活させてフブキさんに問う。

元々、ジエノスさんにとっていい印象がない上にさっきの言葉で完全に疑ってかかる様に、フブキさんは肩をすくめる。

「別に何も」

「恍けるな！ そもそも、貴様はエヒメさんに何をしたんだ？ 答えろ!!」

「……あ、ま、待つてくださいー!」

ジエノスさんが誤解したままフブキさんを責め始めて、私は何とか声を絞り出してそれを止める。

私を心配してくれているのか、それとも面白がっているのかはちよつと判別つかないけど、それでも私の為に、私が望んだ「今まで通り」のきっかけになるうとしてくれたフブキさんにこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「ふ、フブキさんは何も悪くないんです！ さっきはああ言ったけど、それは私を庇って……えつと……あの……」

でもジェノスさんを前にしたら、数日ぶりにまともに顔を見たせいで、何を言ったらいいのか、自分が今どんな顔をしているのか、今日の格好は変じやないかとか、余計なことばかり気になって、頭が真っ白になって言葉が出なくなる。

「エヒメさん!? いいんですよ、無理にそいつを庇わなくても!」

そんな私を心配そうに見て、さらにフブキさんに対して誤解を深めるジェノスさんとにかく何かを言わなくちゃと完全にパニックた私は、思わず玄関前で叫んだ。

「わ、私はジェノスさんと映画を見たいです!!」

「……………何を言ってるの私!?!」

フブキさんを庇え! 何で自分の欲望をそのまま声に出してるの

!?! バカなの!?! 死ぬの!?! うん、死ぬ私!!

今すぐに穴を掘ってそのまま化石になるまで埋まりたい発言をして、沈黙が落ちる。

本気で誰か今すぐに私を殺してくれないかと思いついたところ、沈黙が破られた。

「……………俺も……………です」

ジェノスさんが視線を明後日の方向に彷徨わせて、手で口元を隠して言った。

「……………俺も……………貴女と……………見たいです」

……………殺される前に、私は心臓が破裂して死ぬかもしれない。

まだ終わってない

「あー、楽しかった」

「……お前、人の妹を着せ替え人形にすんなよ」

エヒメを送り出して一息つく私に、我関せずの姿勢を見せていたサイタマが呆れたように突っ込んだ。

「いいじゃない。どうせ早く準備が済んじゃったならそれこそその子また、緊張とパニックで逃げ出しちゃうんだから、ギリギリまで可愛くしてあげただけよ」

そう。エヒメがただ単にパニック起こしただけだけど、鬼サイボーグとデートしたいとちゃんと自分で言えたから、私は鬼サイボーグにチケットを押し付けて先に行かせて、その間にエヒメの服のコーディネートやらヘアセットやらをつい今さっきまでしてやった。

一緒に行かせたら絶対にあの子は逃げ出すか、緊張で体調を崩すのが目に見えてたからね……

鬼サイボーグの方は一人でエヒメに向かわせることを反対してたけど、エヒメ一人で跳ぶのならレポート一回で済む距離だったのと、私が「女に身支度の時間も与えてあげないの？」と言えば、渋々だけども承してたわ。

「可愛くしてそっちに送ってあげる」と言ったら、「エヒメさんはいつでも可愛い」と真顔で言い返して、エヒメを羞恥で殺しにかかったけど。

あー、それにしても本当に楽しかったから、またチケットかなんかを融通してエヒメにデートコーデしよう。

私が普段好む服の趣味とは違って、あの子が似合う服もあの子自身の好みもお人形そのものって感じで、本当に着せ替え人形で遊んでた頃を思い出して楽しかったわ。

ゆるふわ系って男受けが悪いから、あんまりデートに着せるべきじゃないかしら？　とも思ってたけど、今更あの惚れこみすぎてる鬼サイボーグに男受けとかそういうのを考える必要もないから、好きに着せてやれたし。

ただ、露出はないけど胸はちよつと強調する格好にしておいた。あの鬼サイボーグは絶対にむつつりだと、私が勝手に確信してるから。

「……まあ、でもありがとな。色々」と

私が次はどんな格好にさせようか、今度は道具を持ってきて本格的にメイクもしてみようかと考えていたら、サイタマがエヒメが用意してそのまま放置してしまったお茶菓子を持ってきて、ついでお茶も淹れ直してくれた。

「どうやら今日は、歓迎してくれるみたいね。」

私はラスクに手を伸ばして、パリパリと齧りながら相変わらず客がいてもマイペースなサイタマに尋ねる。

「サイタマ。あなたはエヒメが自覚したことに気付いてるんでしょ？」

エヒメは隠して気付かれていないつもりだったでしょうけど、いきなり泣き出したエヒメを心配せずに私に丸投げした時点で、「こいつ、全部わかってるな」とこちらは気付いた。

まだ知り合って十日くらいしか経ってないけど、妹が泣いても放置するような兄ではないことくらいはもうよく知っている。

「あれで気付かぬーのは、ジエノスクくらいだろ」

そして予想通りの答えを、こちらを見もせずサイタマは言い切った。

「でしょうね。むしろ、何であの鬼サイボーグはあんだだけわかりやすい反応をするエヒメに気付かないのかしら？」

「だから、今日来てくれたのは割とマジで助かったわ。」

「あいつ、自己嫌悪で死にそうな顔してたのに、俺が口出ししたら今度は羞恥で死にそうだったからな。そもそも、俺だと告れとしか言えぬーし」

「確かにそれが、あらゆる意味で手っ取り早い解決法だけど……」

ゲームをしながらだけど、サイタマは素直にもう一度、私に「助かった」と言った。

恩を感じてるのならそれに着せてフブキ組に勧誘しようかと思っただけど、私はお茶と一緒にその言葉を飲み込んだ。

そもそも私がイラツとしたからという理由で、無理やりこじ開けて自覚させたのが原因。

さすがにそれで恩を着せるのはこっちが罪悪感を抱くから、やめておくことにする。

そして勧誘の言葉の代わりに、私は別の言葉を口にする。

「サイタマ。あの子は何で、『自分は誰にも愛されない』って思い込んでるの?」

\* \* \*

私の問いに、サイタマの動きが一瞬止まる。

そして、深々とため息をついたかと思ったらゲームをやめて、私と向き合って逆に聞き返す。

「あいつ、まだそんなことを言ってるのか?」

「直接、そういうことを聞いたわけじゃないわよ。でも、ちよつと会話したらわかるでしょ。」

だってあの子、他人の心の機微には敏いのに自分に向けられた好意は妙に鈍いじゃない? わざと目をそらして慌てるようにしか見えないわよ、あれ」

鬼サイボーグの方は別に、どうでもいい。むしろあんなにわかりやすいのに気づかれないで、振り回されているのを見るのは面白いからこのまま気付かない方が私的にはいいくらいよ。

ただ、エヒメ自身が自分の気持ちすら目をそらしているのが、気になって苛立った。

……昔の自分を、姉に「本当に、私がいないとフブキは全然ダメなんだから」と言われていた頃の私に、自信を根こそぎ奪われて卑屈なあの頃の私を思い出すのが嫌だったから、頑なに閉じている目を無理やりこじ開けて見せつけてやったのに、あの子は未だに「自分の気持ち」は自覚しても、鬼サイボーグの気持ちには全く気付いてない。むしろ卑屈さが悪化してたことにビックリよ。

サイタマは私の言葉に、右手で頭を抱えてもう一回溜息をついた。

そしてようやく、私の問いに答える。

「ぶっちゃけ、俺もよくわかってねーんだよ」

「あら？ そうなの？」

意外な返答に私が聞き返すと、サイタマは顔を上げていつものやる気も覇気もない顔に、自嘲をわずかに滲ませて言葉を続けた。

「何かジエノスにしる他の奴らにしる、俺とエヒメは昔から今みたいに使ったりだと思ってるみたいだけだな、元々はさほど仲良くない、ケンカをしないのはするほど一緒にいないからって兄妹だったんだよ」

その答えを意外に一瞬思ったけど、よくよく考えたら歳の差6歳で男女の兄妹なんてそんなものだろうと納得した。

私の場合は、歳の差こそは同じようなものだけど、同性だしそれ以外にもいろんな事情でお姉ちゃんが私に使ったりになるのもある程度は仕方ないと納得してるけど、ごく普通の家庭環境なら、むしろ疎遠な兄妹関係が普通か。

「エヒメが小学校卒業した頃には、俺も高校を卒業してそのまま親元から離れたし、あいつも全寮制の中学に進学したから、それからあいつがああなる3年前まで、会ったのは……多くて3回ってとこだしな」

「……待ってサイタマ。全寮制って、エヒメはお嬢系の女子校？」

サイタマもラスクを齧りながら話す内容で、気になった部分があったから尋ねてみたらこともなげにこいつは答える。

「おう。あいつは俺と違って出来が良かったから、親が期待して良い学校に行かせたがって、すげーお嬢様学校に行ったんだ」

その答えに、私は溜息をついて頭を抱える。

「……もういいわ。だいたい、何があったかわかったから」「マジでか」

私の答えに、さほど驚いた様子を見せずにサイタマは言った。

うん、わかるわよ。あんたには、男にはたぶん説明してもわかんないでしょうけどね、女ならそれだけでどれだけの地獄をあの子が経験したかは察することが出来るのよ。

サイタマはラスクを一つ食べきって飲み込んでから、私に訊く。

「……なあ、フブキ。エヒメには何があったと思う？」

俺は、あいつが誰に何を奪われて、どれだけ傷ついたかは知ってるけど、何をされたかはわかってないんだ。

多少は知ってるけど、周りが『自分は悪くない』って言うために他人を売って色々言ってきただけだろうから信用できねーし、もうボロボロで全部自分が悪いと思い込んでたあいつにはとてもじゃねーけど、訊けなかったし……

……あいつがされたこと、俺はしてないよな？」

無表情で、どこを見ているのかもよくわからない目で、サイタマは訊く。

……バカね。あなたがそんなこと、する訳も出来るわけもないじゃない。

「私も想像でしかないけど……どう言ったらわかるかしらね？」

たぶんあの子がされたことは、女独特の陰湿さが全面に出た嫌がらせだから、男には説明しても「はあ？ そのくらいで？ しょうもない」とか言いそうなのよね。

「えーと、サイタマ。あなたが例えば鼠だとして、象に踏みつぶされるのと、生きながら数万匹の蟻にたかられて食われて死ぬの、どっちが嫌」

「蟻に決まってんだろ。何だその例え？」

こいつなら鼠でも象を倒しそうだなと思いつつ尋ねてみたら普通に返されたけど、やっぱり何でこんな例えが出てきたのかはわかってない。

「女のいじめや嫌がらせって、まさしく生きながらに蟻に全身を少しずつ食われて奪われて死んでいくようなものなのよ。」

それが初めは爪や髪って部分からだから、男はもちろん女同士でも相手が上手なら『そのくらい大したことない』とか『嫌がらせなんて大げさ』とか言われて、本人も『そうなのかな？ 私が大ききで被害妄想なのかな？』って思っちゃうのよ。

そうやって我慢しているうちに、周りが気付かない内にどんどん全身が齧られて、本人も激痛で苦しんでるのに、『大げさなんだ。被害妄想なんだ』って思い込んで我慢して、最後には食い尽くされて骨も残

らない。そんなところね」

補足を加えたら思う所があったらしく、顎に手をやってサイタマは考え込む。

昔の嫌なことを思い出したのか、表情は私が初めて見るような険しい顔で、彼は呟く。

「……あいつ、俺の所に逃げ出して来た時には、俺が気付きもしないような足音を出しただけでも謝って、ずっと部屋の隅で声も出さないように、息すら最低限にしかしちやいけないって思い込んでたのか、口を両手でずっと塞いでたんだ」

サイタマの言葉に、ゾツとした。

おそらく、足音を立てるだけでもこれ見よがしに遠巻きで嘲笑い、息するだけで舌打ちでもされてきたんでしようね。

これを、「たかが」とほざく奴は想像力がなさすぎる。

確かに一回これをされた程度で、そこまで病むのならそいつ本人が弱すぎるだけだけど、毎日周りの人間全員にそんなことをされて、自分の行動すべてが嘲弄され続けても心を壊さない人間は、元から心がないとしか私は思えない。

「……ただでさえ閉鎖的になりがちな女子校で全寮制なら、何かのきっかけでクラスや学年の権力者を敵に回したら、もう逃げ場はないからね。」

可哀相だけどあの子はいじめっ子だけじゃなくて、少なくともクラスのストレス発散のサンドバッグになったんでしようね」

集団に一人、生贄を用意してそいつだけを甚振るようにしたら、その集団の団結力が上がるというのは、有名な話。

何がきっかけかは知らないけど、まさしくエヒメは生贄にされて、壊し尽くされて、何もかも奪われてやっとな逃げ出す術を、テレポートなんて力を得たことは明白。

……そりゃ、「自分は誰にも愛されない」と思い込むわけよ。

あの子が今、他人と関わるだけでも奇跡みたいなもんじゃないの、それ。

サイタマ自身もそう思っているのか、今更、私の説明でやっとな妹の



苦しみを具体的に想像できたことを悔やんでいるのか、テーブルの上で握りしめた拳をただじつと見ている。

その拳で殴りたいのは、あの子をそこまで追い詰めた相手か。

それとも、自分自身か。

それは私にはどうでも良かった。

ただ、いつまでも目の前で険しい顔をされてたらせつかくのお菓子がまずくなるから、言ってやる。

「だからサイタマ。あなたが何も訊かないってことを選択したのは正しいわよ。ただでさえ自分が全部悪いんだって逆に加害妄想の域に達してそうなのその時のエヒメから話を聞いたら、よくわからなくなつてトドメを刺しそудなもの」

空気が読めてるのか読めてないのか、とりあえず思ったことをそのまま言うのは確かだから、エヒメの説明次第では「ああ、そりやお前が悪いな」とか言い出しそудだからね。

だから何も訊かないでただひたすらに妹を大事にして、穏やかな日常を与えてあげたのが正解。

こいつは「さほど仲の良い兄妹じゃなかった」って言ったけど、どう考えてもエヒメが逃げ出してくる前から、良いお兄ちゃんだったのは確か。

だって事故で妹とキスしちゃうくらいに、遊ぶ妹を気を付けて見てたし、助けようとしたんだから、こいつの「さほど仲良くない」は当てにならない。

大事に大切に、あの子がやりたいこと、行きたい場所に制限なんかかけず自由にさせて、守るべきところは全力で守り続けたからこそ、今のエヒメなんでしょうね。

……正直、エヒメがうらやましい。

私の言葉に、サイタマはきよんととして、それから笑った。

「……言ってるな、それ」

こいつの笑顔を見たのは、初めてかもしれない。……どうでもいいけど。

どうでもいいけど、何故か妙に頭に残って、それを消し去りたくて

お茶を呷る。

飲み干したらどうも本当に今日は感謝をしているのか、「おかわりいるか？」とサイタマが訊いてきたから、「もううわ」と答えておいた。そして台所に歩いて行つたサイタマに私は、ラスクをポリポリと食べながらそちらを見もせずと言つておく。

「……でもね、サイタマ。気を付けておきなさい」

「は？ 何をだよ？」

口の中にあるラスクを飲み込み、要領を得ないと言いたげなサイタマに女の陰険な執念深さを忠告する。

「エヒメをイジメた奴が、あの子を『ストレス発散のサンドバッグ』としか見てないのなら、まだマシよ。あの子自身には何の興味もないってことだから。」

でも、あの子を自分より下、見下し要員だと思つていたのなら、あの子の持っているものはすべて自分のものだって思い込んでる奴だったのなら……、デートのお膳立てした私が言うのもなんだけど、今のあの子にもしも出会ってしまったら、そいつは確実にまた、エヒメの全てを壊し尽くして奪い尽くそうとするわよ。絶対に」

サイタマからの返事は、妙に間が空いた。

「——ああ。肝に銘じておく」

私の言葉でサイタマがどんな顔をしていたかは知らない。

ただその一言で、テレパスでもサイコメトラーでもない私でも、彼の心の声はわかった。

「許さない」って、言つたんでしょよね。

## 女神と絶望

「エヒメさんは、ホラーが平気なんですね。……正直、意外でした」  
「……というより、推理物が結構好きなんです。そういう要素がある作品だと、何故か探偵役と張り合ってひたすら謎解きに集中してしまわうんです」

今すぐに穴を掘ってそのまま化石になるまで埋まりたい、パート2。

……私の脳の容量は何なの？ 8ビットしかないの？ ところでん式なの？

あんだだけ緊張してたくせに、映画が凄く自分好みで面白かったら何で終わった直後にここ数日間の気まずさ忘れて、「面白かったですね！ でも私、主人公より先に事件の真相わかりました！」ってジェノスさんに言ってるの？

しかも映画、ミステリ要素が強いとはいえホラーだよ!! 女としてこの反応や感想は盛大に間違えてる！

ここは映画の最中にキヤーキヤー悲鳴あげるのが、可愛げのある女の子の反応だよ！ 悲鳴あげた覚えはないよ！ ジェノスさんも「終始、真顔でした」って言ってたよ!!

……もう本当に死にたい。

今更になって羞恥心が舞い戻って来て、私は映画が終わった後にとりあえず入ったカフェのメニューで顔を隠して言い訳する。

「そういうえば、推理物をよく読んでましたね」

私の言い訳にジェノスさんは素直に納得したような声で答え、そして映画の感想を続けた。

「俺は幽霊とかそういう非科学的なものは信じていないので、ホラーものには興味がなくて今まで見たことがないジャンルでしたけど、確かにあれはいい作品ですね。」

推理や恋愛、サスペンスの要素をうまく取り入れて、ラストも後味の良いハッピーエンドでしたし」

「……そうですね。私、終盤の告白のシーンがすごく好きです」

……本当、ジェノスさんはいい人だし優しいなあ。

私はまだここ数日の挙動不審を謝れていないし、今だってまた挙動不審が再発してるのに、そのことを触れずにいつも通りに接してくれる。

映画館に到着した時も、フブキさんがちよつと本気を出して色々ど気合いを入れすぎて……本当にデートみたいにしちやつたこの格好に一瞬唾然としたのに、引かれて当然だったけどやっぱり恥ずかしさで耐えきれなくて「やっぱり着替えに帰ります！」ってもう一回テレポートしそうになった私を捕まえて、「……可愛すぎて見惚れました」ってフォローしてくれたし。

でもジェノスさん。フォローは嬉しかったけど、嬉しすぎて死ぬかと思いました。

私の心臓がジェノスさんのエネルギーコアみたいに自爆機能があったら、間違いなく爆発してました。

そんな恥ずかしいやり取りを映画前はしてたのに、何で映画を見た後に私はすっかり忘れてんの!? ああもう、そこが一番恥ずかしい!! ……でも、「映画の話題」という共通の話題の種類があるおかげで、ジェノスさんの顔をまだまともには見れないけれど会話は出来るようになったから、もう結果オーライってことにしよう。

そう思わないと、マジで私は死ぬ。

「ああ、あのシーンは良かったですね。序盤の授業のシーンでわざわざ出てきたシメイとソーセキの雑学が、あそこに繋がるとは思いませんでした」

「ですね。私、この二人の『I LOVE YOU』の訳が好きですから、それをうまく使ってくれたのは嬉しかったです」

失礼だから言わないけど、恋愛のシーンにジェノスさんが食いつくのは意外だなあと思いつながら、私はさらに感想を伝える。

あのシーンは本当に良かったなあ。主人公をずっと見守って助けてくれていた幽霊のヒロインに主人公が告白して、「死んでもいい」って言ったのに対して、ヒロインが返した答えは、「私もあなたと月見がしたかった」だった。

序盤の日常シーンで出てきた雑字を上手く使って、自分も愛してるけど告白に応えられないというのを言い表した、切ないシーンだった。

まあ、ラストで実は幽霊じゃなくて幽体離脱、本体は植物人間状態だったけど魂が戻って来て意識が復活したという若干ご都合主義な真実が発覚したけど、それでもやっぱり物語はハッピーエンドが良いよね。

「……ああいう、ひねった言い回しの告白が好みですか？」

またもやとろてん式に映画の内容を思い出して忘れていた緊張が、意外すぎる質問で舞い戻ってきて、私はティーカップを口元まで持ってきたところで一時停止。

飲んでなくて良かった。飲んでたら一時停止じゃなくて、絶対にむせて咳こんでた。

っていうか、ジエノスさん何その質問!?! なんでそんなところに食いついてるの!?

頭の中がまたパニックになるけど、人前ということもあってかわずかな理性がそれを表に出すのを防いで、私は口元まで持ってきたカップをそのまま受け皿に戻して、何とか答えた。

「……そう……かもしれない。……されたことがないですし……考えたこともないですけど……、ただ『好きです』って言われるより、ああいう言い方がいい……好きだと……思います。」

……でも、シメイの『死んでもいいわ』は訳としては好きですけど……言われたくはないですね。……好きな人が死んじゃうのが、一番嫌ですから」

私、変なこと言ってないよね? 「ジエノスさんと映画が見たいです!」って叫んだみたいに、自分の欲望丸出しなこと言ってないよね? とひたすらそのことだけを考えて答えを絞り出したら、ジエノスさんは普通に「そうですか」と相槌を打つ。

その返答とごく普通の様子にほっとしたのもつかの間、ジエノスさんはコーヒーを一口飲んでから、言った。

「覚えておきます」

その言葉にカップを持ち上げようとした私の手がまた止まる。

聞き間違いだと予防線を張る自分と、それはどういう意味かと知れたがる、期待する自分で頭がぐちゃぐちゃになる。

どういう意味かと訊いて、私はどうするの？

何を期待しているの？

だって私なんかを、誰が……

『もう、いらない』

私なんかを……誰が——

『だってエヒメ、あんたもう何の価値もないじゃない』

「エヒメさん？」

視界が過去から現実に戻る。

私と向かい合っているのはあの日の「絶望」じゃなくて、心配そうに顔を歪める人。

あの日からお兄ちゃん以外で初めて、一緒にいて楽しいとか、安心できるとか思った人。

たくさんの何かをほしいと求めて、命に代えても貫きたいことを、私に教えてくれた人が、悲しげな眼をして言った。

「……すみません。やはり、俺といるのはまだ苦痛ですよね」

「!? そんなことないです!!」

思わず、声を上げた。

ジェノスさんだけじゃなくて、周りのお客さんや店員さんも一齐に目を丸くして私の方を見たので、血が顔に集まってすごく熱い。

また穴があつたら埋まりたくなりながら、またジェノスさんの顔が見れなくなつて俯いて、それでも私は言葉を続ける。

これだけは、絶対に言わなくちゃいけないから。

私が誤解されるだけならまだしも、心配をかけた挙句にこの人を悲しませるなんてあつてはならないから。

だから、言わなくちゃいけない。

「……ごめんなさい、ジェノスさん。ずっと、理由も言わずに避けてて

……。

でも、違うんです。あなたと一緒にいるのが苦痛だからとか、そうなんじゃないんです。本当に、お兄ちゃんに伝言してもらった通り、メールの通りなんです。

……私の都合で、私のただ言いたくないってわがままですけど、理由は言えないけど、本当にあなたが嫌いだとか、あなたが悪いとかじゃないんです。

……今、言えるのはこれだけですけど、私の言ったことは本心です。本当に、本当に私は……ジエノスさんのこと——」

言おうとした言葉は、臆病な私が堰き止めてしまつて言葉に出来なかつた。

けれど、言わなくてもいいと言うように、わかっていると伝えるように、……お兄ちゃんがいつもしてくれるように、私の頭の優しい重みが加わる。

体温はなくて、硬くて、無機質。

お兄ちゃんの手とは全然違うけど、お兄ちゃんと同じくらい安心してきる大好きな手が私の頭を、壊れ物でも扱うみたいに、自分が触れていいのかを迷うように、怖々と、優しく、ゆっくりと撫でたくれた。

「……もう、大丈夫です。……もう、いいんです。

すみません、あなたの言葉を疑つてしまつて。でも、もう大丈夫です。ちゃんと、わかりました」

その言葉と優しい手が、私の爆発しそうだった心臓の鼓動を落ち着かせる。

顔を上げると、ジエノスさんが穏やかに笑つてくれた。

その穏やかな笑顔で、ジエノスさんは言葉を続けた。

「エヒメさん。俺も、貴女のことを——」

「怪人だーっ!!」

「……………」

私とジエノスさんの間に、何とも言えない微妙な沈黙が落ちる。

カフェの外が騒がしいけど、警報は鳴っていないし建物とかが倒壊する音も聞こえない。

聞こえてくるのは逃げ惑う人の悲鳴のみということ、つい今さっき発生したか現れたなんだろうな。

災害レベルは、わからない。けど、鬼や竜だと現れてすぐにシヤレにならない被害が出るから、虎か狼あたりの可能性が高い。

だから、ジェノスがいなくても大丈夫な可能性の方が高かったけど、お兄ちゃんに憧れて師事するこの人が目の前で起こった出来事を他人任せにする訳がなかった。

「……エヒメさん、少し待っていてください。3分で戻りますから、ここで待っていてください！ 行つてきます！」

「お、お気をつけて!!」

訳なかったけど、それでも「空気を読め！」と言いたげに苦虫をかみつぶしたような顔をして、私との約束を守つて走つて出て行つた。

3分つて。そんなカップラーメンが出来上がる時間で倒される怪人つて……

少し怪人に同情しながら、それでも私も怪人に「空気を読め」と思う。

……ジェノスさんは、なんていうつもりだったのだろうか？

「俺も」と言つたあの人は、私が言おうとして言えなかった言葉を言おうとしてくれたのか。

……私の「好き」と、あの人の「好き」は違うのか、同じなのか。期待なんかしたくないのに、そんなことを考えてしまった。

\* \* \*

「エヒメさん、遅れてしまつてすみません！」

「十分すぎるくらいに早いですよ！」

ジェノスさんは帰つて来てすぐに、ものすごく申し訳なさそうに謝つた。

確かに3分では帰つてこれなかったけど、元々そこは本気にしてなかったからいいのに。つていうか、5分足らずで帰つてくるとは思つてなかった。

これは予想通り、災害レベルは狼程度だったんだろうなあ。

とりあえず私が「お疲れ様です」と労つてから、倒してすぐに帰つ



てきちやって良かったのを尋ねると、ジェノスさんが向かった時には既に黒い鎧のB級が一人いたらしく、その人に後始末を任せてきたらしい。

……誰だか知らないB級ヒーローさん、活躍の場を奪って面倒事だけ押し付けてごめんなさいと、私は心の中で謝っておいた。ジェノスさんってたまに横暴だよね。

さすがに怪人が現れる前の話を何事もなかったように続けられる気は、私はもちろんジェノスさんにもなかったらしく、ジェノスさんは少しだけ乱暴にコーヒートを叩いて、軽く愚痴る。

「怪人は一撃で倒せたので約束通り3分で戻るはずでしたが、俺のファンらしき連中に捕まってしまい、遅れてしまいました……。怪人より、悪気はないがこちらの都合を考えない凶々しい、ああいう連中が俺にとっては厄介でした。怪人と違って殴ったり、焼却するわけにもいきませんし」

「……………そう、ですね」

ああ、ダメだ。

やっと本人に謝れたことで、ジェノスさんも「わかった」って言うてくれたことで安心して、少しは前みたいになっちゃんと話せるようになったと思ったのに、私はジェノスさんの話で今まで思ったことがない、感じたことのない気持ちで胸がいっぱいになって、おなじみの自己嫌悪に陥る。

……わかってる。ジェノスさんの口ぶりからして、そのファンの事を何とも思っていないことくらい。むしろ私を優先してくれて、そのファンに対して悪感情を懐いてるくらいだっことは、わかっているよ。

今までなら素直に、「イケメンなジェノスさんは大変だなあ」で終わってた。

それ以外に思うことなんか、何もないと信じて疑っていなかった。

なのに、今は違う。

ジェノスさんに、訊きたかった。

そのファンの子は、可愛かったですか？ 美人さんでしたか？

……あなたが好きになってしまいそうな人でしたか？ とどうしようもないことを訊きそうになった自分が、まったく知らない誰かに嫉妬して、ジェノスさんの言葉を信じ切れたいない自分が嫌で嫌で仕方がない。

「……エヒメさん」

声をかけるジェノスさんの顔が見れない。

敏く私の様子の変化を、いきなり落ち込んでいる私を心配してくれるのが申し訳なくて、そんな優しい人が幸せになれるかもしれないきっかけを心の底から嫌がってる自分が嫌で、顔が上げれない。

「今日はもう、帰りましょうか」

ジェノスさんが私に気を遣ってくれているのはわかってる。

でも、私は帰るのなら一人でこのままテレポートして消えてしまいたい。

街中でジェノスさんと一緒に歩く勇気がない。

私なんかが、この人に釣り合う訳がないことがわかっているから。

自覚していなかった時だって、釣り合っていないことはわかっていた。だからこそ、恋人だとかデートだとかそういう誤解はされないだろうと開き直っていられたけど、今は違う。

……せめて前みたいに話せたら、それだけでいいなんて嘘だ。

私は、浅ましい。

堂々とこの人の隣に立つてずっと傍に寄り添っていられる肩書が欲しいと、この心は軋むような痛みで訴えている。

その痛みを、私は無視する。我慢には、慣れてる。

「そうですね」と答え、少しお会計でどちらが払うかをもめてから、結局ジェノスさんにご馳走になって店から出る。

デートみたいなきことを、しないで欲しい。

期待なんかしたくない。何も望みたくはない。何も欲しくない。

この人と一緒にいることが幸せだからこそ、この「恋」をしたくなかった。

それさえなければ、ただただ「好き」であるだけならば、私はずっとただそれだけでずっと幸せだった。

「エヒメさん」

そんな後ろ向きなことを、もう誰に当たってるのかもわからない八つ当たりをしていたら、ジエノスさんが呼びかける。

「……話したくないのなら、話して貴女が傷つくようなことならば、何も話さなくてもいいです。無理して、話そうとは思わないでください。

……けれど、話して楽になることならば、俺はいつでも、何でも聞きます。……俺が嫌なら、先生でも、バンドでも、誰でもいいです。貴女の話聞いてくれる人は必ずいますから……だから、自分一人で抱え込まないでください」

お兄ちゃんが言ってくれたことと、同じことを言ってくれた。

……その言葉は、とても嬉しい。

だけど、だからこそ泣きたくなる。泣き叫びたくなる。

言いたいよ。言ってしまいたい。

あなたが好きですと、人としてとか、友人としてとかじゃなくて、この世で唯一の特別な人として好きだって。

愛してるって、あなたに恋をしたって言ってしまいたい。

けれど、言えない。

初恋は実らないなんて言葉では、慰めにならない。

この人に拒絶をされたら、もうそれこそ私は生きていけなくなる。

だから私は、本当に言いたいことを胸の中に仕舞いこんで、ジエノスさんの望みを叶えてあげられないで、一人で抱え込んで、それでも言おうとした。

「ありがとうごさいます」って言いたかった。

その言葉が嬉しかったのは、本当だから。だから、言いたかったのに言えなかった。

「あ、あの、鬼サイボーグさん！」

後ろから呼び止められた声に、ジエノスさんだけではなく私も立ち止まる。

「あの、さつき助けられた者ですけど、もう、お時間は大丈夫ですか？」

「サイン、もらえますか？ あと握手も！」

ジェノスさんがさつき言っていた、フアンの人たちであることはすぐにわかった。

私が自己嫌悪に陥った、何も知らないのに、ジェノスさんも邪険に言い捨てていたのに、それでも嫉妬した相手だけど、今はそんな気持ちには湧きおこらない。

嫉妬も、疑心も、自己嫌悪も、そんなものが生まれる心の余裕はない。

頭が真っ白になる。手足の動かし方がわからない。呼吸の仕方さえもこれで合ってるのか不安になって、乱れる。

頭の中に埋め尽くす言葉は、「ごめんなさい」の一つだけ。

聞き間違いだと、よく似た声なだけと言い聞かせることも出来ない。

3年たっても、「彼女」の声だと確信してしまった。

何もできない私が出来たことは、ただただ祈ること。

どうかお願いだから、気付かないで。

私が誰かを気付かないで、そのまま無視して。

お願いだから、お願いですから、気付かないで。

今だけは、私の様子がおかしいことなんか気づかないで私の心配なんかしないで私の名前を呼ばないで――

「!? エヒメさん！ 大丈夫ですか!？」

……………ジェノスさんの言葉で、彼に一方的に話しかけていた声が止まった。

刹那の沈黙を破ったのは、懐かしい声音。

「エヒメ？」

手足の動かし方さえ思い出せなかった私の身体が、操られたように振り返る。

私と同じ年くらい、4人の女性。

そのうちの一人が、前に出る。

豊かで豪華なウェーブがかかった銀髪に、元々良かった素材を限界まで磨き上げた美貌。

そしてまだ10代だとは思わせない、女王然としたカリスマと貫録

は3年前から向上しつつ、変わらない。  
わずかな期待は、打ち砕かれた。

「ヘラ……」

女神と絶望が、そこに立っていた。

今、ここにゐるもの

後悔が消えない。

何度も何度も、俺は思い出して後悔をし続ける。

何もかもが終わった後も、先生に「お前の所為じゃない」と言われ  
ても。

俺だってそれをやったのが別の誰かだったのなら、責める気は起き  
ない。

未来予知も人の心も読めないのなら、仕方がない出来事だったと相  
手を慰める。

なのに、俺は俺自身を許せずに後悔をし続ける。

……どうして俺はあの時、彼女の名を呼んでしまったのだろうか？  
と。

\* \* \*

初めは「誰だ？」と思った。

つい数分前に倒した怪人、以前にエヒメさんを狙ったストーカーが  
成り果てたのと同じブサモンらしき怪人に目をつけられていた4人  
組であること、俺がエヒメさんの元にすぐに戻ろうとした時に騒いで  
引き留めた奴らであることに気付いたのは、そのうちの一人だけが少  
し印象に残っていたからだ。

目を引く豪華な銀髪に、赤というやたらと目立つ色なのに下品な派  
手さはなく、上品なドレスじみたワンピース。

そしてそれらを引き立て役として完璧に調和させている、完成され  
つつもまだどこか幼さを残した怜悧な美貌。

少なくとも10代であることは間違いないというのに、その女を言  
い表すなら「姫」ではなく「女王」もしくは「女帝」が相応しい貫録  
の持ち主で、丁寧に頭を下げて「助けていただきありがとうございます」  
「お願いします」と言っただけ、俺を見上げているはずなのに見下ろされ  
ているように感じる眼差しと、感謝よりも「褒めて遣わす」とでも思っ  
ていそうな言い草が嫌でも印象に残った。

正直言っただけを言われる前から、一目見た瞬間からあのプライドの

高さだけはそっくりなサイキック姉妹を、特にフブキを連想させる高慢さが全開で良い印象がなかった。

だからそいつも含めて話はほとんど聞かずに、何とか「急いでいる」と言い捨ててエヒメさんの元まで戻ってきた。

あの後も俺を探していたのか、それとも偶然か。

どちらにしてもこの時の俺にとっては面倒で迷惑なのは確かだったが、小さくてささやかな街中を見回りなどで歩きたびに起こる出来事ではなかった。

それにエヒメさんを巻き込んだことを申し訳なく思い、こいつらがエヒメさんに対して失礼なことを言わないか、無視されているエヒメさんは不快に思っていないかだけが心配だった。

だから、万が一にもあのストーカーのように物を投げつけられるなどの暴力行為から守れるように、エヒメさんを自分の傍らに引き寄せた。

その時、ようやく気が付いた。

異様に強張った身体。深い呼吸と浅い呼吸がめちやくちやに入り乱れた息。

真っ白な顔色で、目を見開いてその場で固まるエヒメさんに動揺して、俺は最悪の反応をしてしまった。

「!? エヒメさん! 大丈夫ですか!」

奴らの前で、名前を出してしまった。

ヒヨドリの囁りのように一方的に話しかけていた連中が、静かになる。

数秒も満たない沈黙が、やけに長く感じた。

その沈黙を破ったのは4人組の中心、10代にして女王の貫録を持つ女が、年相応よりやや幼く見える呆けた顔で呟いた。

「エヒメ?」

その声にぎこちなく、自分の意思で動かしているとは思えない動きで、震えながらエヒメさんは振り返り、かすれた声でそれは言ったのか、溢れ出たのか。

「――ヘラ……」

深海王に追い詰められていた時の方が億倍マシなくらい、畏縮して、絶望に染まった顔をしていた。

相手の名前がエヒメさんの口から出てきた時点で、どういう関係なのかは察することが出来たのに、彼女をイジメて、絶望に叩き落としただ奴らだという事はわかっていたのに、エヒメさんのあまりの怯えようにパニックを起こした俺は、何もできなかった。

あの時点で、抱き上げてでもその場から無理やり離れたらよかったのに、俺はエヒメさんの肩を掴み、「エヒメさん!？」と呼びかけることしかなかった。

そんな俺の行動が気に入らなかったのか、ヘラと呼ばれた女は一度鼻を鳴らしてから高慢に言う。

「……久しぶり。3年ぶりかしら？ 元気そうで何よりだわ」

血の気が引いて真っ白な顔色で、小刻みに体を震わせるエヒメさんに奴はいけしやあしやあと言い、リーダー格の言葉に調子に乗ったのか他の二人も口を出す。

「やだ、エヒメったら緊張してるの？ お腹でも痛いのか？ それなら早く帰った方がいいんじゃない？ 鬼サイボーグさんの迷惑になっちゃおうし」

「そうそう、私たちがイジメてるみたいに見えるし、早く帰りなよ」

リーダー格の下位互換、劣化コピーとしか言いようのない外見と、貫録やカリスマをただ根拠もなく相手を見下してふんぞり返ることと勘違いしている女どもの言葉に、血の代わりに頭に殺意が駆け巡る。

そうやって、この人を甚振ってきたのか。

そうやってこの人から全てを奪って、今も奪い続けているのか！

「ルビナス、ベラドンナ。黙りなさい」

俺がそう叫びそうになったタイミングで、意外にもリーダー格が止めた。

「え？ ヘラ？」

ニヤニヤと醜悪に笑いながら、怯えるエヒメさんを一方的に言葉で甚振っていた奴らは、中心人物が止めるとは思わず呆けた顔をする



が、それを横目で見ながらヘラという女は淡々と続けた。

「聞こえなかった？ 黙りなさいと私が言ったのよ。私が」

言ったのは、命じたのは自分であることを強調すると、取り巻き二人が卑屈そうな笑みを張り付けて、目を逸らして黙った。

人を引きずり落として見下して甚振る奴らとは違い、自分が高みにいることを自覚して、それを当然である自然体の貫録は、素直に見事だと思わず感心してしまった。

けれど、この女は別にエヒメさんを庇った訳ではないのだろう。

おそらく、取り巻きではなく自分自身の手で彼女を傷つけたかっただけだ。

「……………ごめん……………なさい……………」

息切れをしながら、震えながら、俯いて自分の足元だけを見ながらも、エヒメさんは声を絞り出す。

そこまでして必死で紡ぎ出した謝罪を、この女は不愉快そうに顔を歪めて舌打ちした。

「……………それは何に對しての謝罪？ 3年たつてもまだ、それしか言えないの？」

「黙れ！」

ヘラという女の言葉で怯えたように体を震わせ、空気漏れをしたポンプのようにヒュウヒュウと苦し気な息になってきたエヒメさんの肩を抱き、自分に引き寄せてそのまま背を向ける。

俺の一喝でさすがに一瞬押し黙った隙に、エヒメさんの背を押して無理やりだが歩かせてその場から立ち去ろうとした時、声をかけられた。

「ま、待って！ ヒメちゃん！」

「ミラは黙ってなさい!!」

リーダー格のヘラでも、黙れと言われた取り巻きの者でもない声がエヒメさんを呼び止め、ヘラはヒステリックにその声の主を叱責した。

そしてエヒメさん自身は、ビクリと体を大きく震わせて、その場がくりと座り込む。

「エヒメさん!」

真っ白な顔色のまま地面に手を突き、過呼吸一步手前の呼吸でただ彼女は震え続ける。

そんな彼女に、女王は言う。

「……また、逃げるの?」

今度は、俺が睨み付けても怯まなかった。

むしろ俺など眼中にもないと言わんばかりに、エヒメさんを睨み付け、そいつは言い捨てた。

「3年前から、全然変わってないのね。」

言いたいことがあるのなら、言いなさいよ。ごめんなさいごめんなさいってそれだけ言って、また逃げる気?

……卑怯者」

「黙れ!!」

開きかけた砲門を、叫ぶことで何とか押さえつける。

「貴様が……それを言うのか?」

3年前から彼女が変われないのは、お前らが全てを奪ったからだろうが!

この人から、尊厳も自信も幸せも逃げ場も、貴様らが全てを壊して奪い尽くしたからだろうが!!」

俺の叫びに、取り巻きどもはそれぞれ目を逸らす。

だが、女王は一度目を見開いただけで、怯まず、揺るがない。

自分が加害者であることなど自覚がないと言うより、自分以外の相手は甚振っても構わない、それが自然で当然だと中世の貴族のようなことで思い込んでいるのか、ただ俺の言葉で屈辱そうに唇を噛み、顔を歪めた。

元々、期待などしていなかったがやはり良心に訴えるのも無駄だと思いい知らされ、俺は今すぐにあいつらを焼き払いたい衝動に駆られるが、その衝動はあまりにもか弱くて悲痛な手によって別物に変わる。

「……エヒメさん」

俺の指先に、握ると言うよりは引っかけると言った方が正しいくら

いの力加減で、それでも、誓いではなくただ恐怖で畏縮して逃げるこ  
とが出来なくて座り込んでしまった人は、確かに俺の指先を掴み、  
言った。

「ち……がう……の……。ヘラは……違う……違うん……です……」

俯いたまま、どこを見ているのかわからない虚ろな目で、全身を震  
わせて、歯をガチガチと鳴らし、息絶え絶えに彼女は自分を「卑怯」と  
罵った相手を擁護する。

……ここまで、あいつらはこの人を追い詰めたのか？

自分がすべて悪いと加害妄想で、相手を庇って謝るしか出来なくな  
るぐらいに追い詰めておいて、まだこの人を苦しめるのか？

そして俺は、何もできないのか？

「ちが……う……ヘラは……ちが……ごめんなさい……ごめんなさい  
……ごめんなさい……」

「エヒメさん……もういいです！……もういいんです!!」

繰り返す言葉を遮って、俺は叫ぶ。

何をしてるんだ、俺は。

俺が今すべきなのは、あいつらを焼き払うことでも、自分の無力感  
を思い知らされることでもないだろうが。

自分の不甲斐なさに死にたくなるのも後回しにして、俺はエヒメさ  
んに「失礼します」と声をかける。

声をかけても、エヒメさんは顔色悪くただただ壊れたスピーカーの  
ように、「ごめんなさい」を繰り返すだけだったが、悪いが俺は彼女の  
返事を待たずにそのまま抱き上げる。

そして、奴らを見捨てて一刻も早くここから立ち去ることを優先し  
た。

振り返らず、奴らの方を一切見向きもせず、俺はエヒメさんをしつ  
かり抱きかかえてその場から走り去った。

\* \* \*

気が付いたら、ゴーストタウンにいた。

ただひたすらに、あいつらから離れることを考えて、走った。

電車やタクシーの存在を忘れて、エヒメさんを抱き上げてただ走り

抜けた。

……エヒメさんは俺の腕の中で、抵抗もせず、遠慮もせず、ただひたすらに謝り続けていた。

「ごめんなさい」と奴らに、……あの忌々しい女王に、しなくてもいい謝罪を繰り返し続ける。

まるでそう言わなければ、生きていることも許されないと思っっているように。

「……貴女は、悪くない」

腕の中で、どんなに離れても畏縮して硬直したままのエヒメさんを抱きしめる力が増す。

痛いや苦しいと訴えることすらしない。それすら感じているのかどうかも怪しい。

おそらく、俺の言葉なんて聞こえていないのは、わかっている。

それでも、俺はただただ彼女に訴えかけた。

「貴女は何も悪くない。悪くないんです。謝らなくてもいいんです。

俺は、貴女の過去を知りません。何があったかはわかりません。

それでも……それでも、俺は貴女の味方です。たとえ何を知って

も、何があったとしても、貴女の味方であり続けます。

だから……だから、お願いします……」

誰もいない無人街で、俺は立ち止まる。

腕の中で人形のような顔色で、絶望に染まったままの顔で、泣くことも出来ず謝るしか出来ない彼女に懇願する。

「もう、これ以上……自分で自分を傷つけないでください」

この人は謝罪を口にしてはいるが、許しを求めているようには見えなかった。

……求めていないことなど、とつくの昔から知っている。

この人は、「加害者は永遠に加害者」だと言った。

……その価値観を、被害者であるはずの自分自身に当てはめて、許されないこと、拒絶されることが前提で、それこそが自分の贖罪としてただ謝っていた。

そんな贖罪、しなくていいのに。

許されないのは、拒絶されるのはあなたが罪深いからではなくて、あいつらがただ貴女を苦しめたいから、何もかもを奪い尽くしたいからでしかないのに。

「エヒメさん……。話したくないことなら、何も、誰にも話さなくていいんです。話して、吐き出して楽になりたいことなら、いくらでも吐き出してください。

でも……。貴女が言って辛くなるだけの事は、言わないでください。お願いします。

俺は……。貴女が何も話してくれないより……。貴女から辛い話を聞くよりも……。それが一番、……。辛い」

自分のこの言い分が卑怯なのはわかっている。

許されるためではなく贖罪で謝罪する彼女なら、「貴女の為」と言うより「俺の為」と言った方が、自分の殻に閉じこもったこの状態でも言葉が届くのではないかと思った。

自分の為には何もしてくれない、我慢ばかりをして俺に甘えてなどくれないこの人の性格を、利用するしかなかった。

……。杖になどまるでなれていない、いつもいつも彼女を傷つけてばかりな自分を本当に殺してしまいたい。

そう、思っていた。

俺の卑怯な思惑通り、エヒメさんは謝罪を口にするのをやめた。

「……。エヒメさん、かなり飛ばして走ってしまいました。どこか痛い所はありませんか？」

返事を期待せず、ただ少しでもあいつらの事を忘れさせたいの一心で、思いつくままに話をしながら、俺は歩いていく。

今日の映画のこと。昨日、先生からおすそ分けとってもらった肉じゃがのこと。今日の夕食は何にするかなど、思いつくままに日常を、あいつらに奪われることなどない、先生が築き上げ、守り抜き、……。そして俺も守ってゆくと誓った日常をただ話す。

もう貴女は何も奪われない、貴女は幸せになっていいと、伝え続けた。

「……。……。自分が、わからなくなったんです」

音速のソニックとあまり思い出すべきではない諍いを起こした廃工場前を通ったあたりで、エヒメさんは蚊が鳴くような声で呟いた。

脈絡は全くない。何の話かはわからない。

けれど俺は、黙ってただ聞いた。

「……自分の何が正しいのか、何が悪くて何が良いことなのか、歩き方も、息の仕方もわからなくなったんです。

私の言う事、やる事、考えも全てが悪い、迷惑、カッコ悪い、つまらない、邪魔って言われて、扱われて、自分がしたはずの事が誰かのものになって、していない事が私がした事になって、自分が今、起きているのか、夢の中なのか、自分が今、動かしている指先は本当に自分の手なのか、自分の意志で本当に動かしているのかさえも、わからなくなっただけです」

吐き出して、楽になっただけなのかは俺にはわからない。

身体の震えは酷くなり、目に涙が浮かんでいる。

俺の服に、胸元に縫りついて、彼女は語った。

3年前に、何を奪われたかを。

絶望を。

「何もわからなくなっただけで、怪我をしたのが自分なのか相手なのか、自分が何をしようとしたのか、何をしたのかもわからなくなっただけで、何も、何も私にはなくなっただけで、もうなくなっただけで、全然、私が私だって証明するものなんか何もなくなっただけで、ことに気付いて、私は、私は——」

何を言えればいいかわからなかった。

彼女はここにいます。

俺は彼女を知っている。

そんな言葉が、どれほどの救いになる？

「だから……私はある日、飛び降りた——」

何もかもが嫌になっただけじゃない。

何もかもを捨てたくなっただけじゃない。

何もかもを奪われて、壊されて、なくして、自分の命さえも他人のもののように感じて、その違和感に耐えきれなくなった人に、今もその違和感が付きまとい、生きていくことに罪悪感を抱くこの人は、

どうやったら救われるんだ？

俺は、俺の胸に顔を埋めてただ泣きじやくるエヒメさんを抱きかかえたまま、歩く。

「エヒメさん」

ただ一つだけ、救いになんかならなくとも、あまりに多くのものをなくした彼女に俺が与えられるものはこれしか思い浮かばなかったから、それだけを伝える。

「俺は、貴女に出会えて幸せです」

貴女が自分自身とその命を、たとえどんなに俺や先生が否定しても違和感を拭えず、罪深いと思っけていても、……それでも、貴女と出会って貴女が俺にくれたもの全てが、愛おしい。

例え他人のものでも、どんなに罪深くて、それでも俺は貴女が生きていてくれることが嬉しい。

貴女がいるから、俺は生きている。

貴女の生に、価値はある。

……エヒメさんから返事はなかった。

ただほんの少しだけ、俺の服を掴み、縋る手が強くなった。

死んでもいいけど死ねない

自分の部屋で床に座り込み、ベッドにもたれかかる。

何もする気が起きなかった。

食事も、自分のパーツの簡単なメンテもせず、到底眠れないこともわかっていった。

PCの電源をつけて少しは何かを調べておこうとも思ったが、自分は何も知らないことに気が付いて、結局何もしないまますぐに電源を落とした。

飛び降りたと彼女は言ったが、それがどこなのかも、あいつらとの関係は俺の想像通りクラスメイトかどうかもわからない、知らないことに気が付いた。

知っていたからと言って、それを今更調べて何になるのかさえもわからない。

ただ、何かがあった。

3年前から変われないで、逃げ出せない、今もお絶望の世界で生きていることにすら罪悪感を抱くエヒメさんに、どうしても何かがあった。

先生が3年かけても救い出せない彼女を、俺なんかが容易く救えるとは思っていない。

けれど、俺はエヒメさんの一つ一つはささやかで何気ない言葉や行動で、大きく変えられた。

あの人が俺の事を「その人」ではなく「そのサイボーグ」と呼んでいたら、俺への対応が警戒心から他人行儀で事務的なものだったら、俺の復讐に関して全肯定、もしくは全否定していたら、もしくは興味を示さず何も言わなかったら、先生の強さの秘密を聞かされて落ち込んでいた俺が、適当にあしらわれていたら……。

どれもこれも、されてもされなくても文句など言えないささやかなことばかりだ。

けれど、一つでも欠けていたら俺はきつと、あの人に恋などしなかった。



良くて友人、悪ければ先生の妹としか思わなかっただろう。

4年前に失った全てと同等の、もう二度となくしたくはない大切な存在になんて、ならなかった。

小さくて、ささやかで、俺自身も「大したことがない」と思っただけで切り捨てて見向きもしなかったけれど、本当は欲しかった、必要だったものをあの人はくれたから……。

俺自身が救いになれなくても、俺の何かで救いのきつかけに、材料になればいい。

その為に何かがどうしてもしたかったが、結局なにも思い浮かばずただ俺は無気力に座り込んでいただけだ。

……結局、慰めることも出来なかった。

エヒメさんを抱きかかえたままアパートの前に戻った時、丁度フブキが帰るタイミングだったらしく、先生も何があったのか珍しくフブキを見送るために出て来ていた。

先生もフブキも、俺がエヒメさんを抱きかかえて帰って来たことに状況が把握できずひどく驚いていたが、俺が「先生」と呼びかけた時、エヒメさんが顔を上げて先生の方を見れば先生の表情が一変した。

エヒメさんを物扱いした、あのストーカーの成れの果てに対して見せた、堪えきれない怒りと悔やんでも悔やみきれない後悔に歪んだ顔だった。

「エヒメー」と先生が呼んだ瞬間、俺の腕から彼女は消えた。

密着していたらその触れているものと一緒に跳ぶはずなのに、彼女は一人で空間を渡り、先生の、兄の元に跳んで、その胸の中で泣き叫んだ。

「お兄ちゃん……。お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん!!」

いきなり抱き着いて泣きじゃくる妹を先生はしっかりと抱きしめて、背を軽く叩いて頭を撫で、少しでも落ち着くように安心できるようにとしながら何があったかは訊かず、ただただエヒメさんに言い聞かせた。

「……大丈夫だ。大丈夫なんだ、エヒメ。」

お前は兄ちゃんが守ってやるから、だから、大丈夫だ」

先生はエヒメさんが不安げに「お兄ちゃん」と呼び続けるのが治まるまでそう言い続け、泣くのはやめないが少しは落ち着いたあたりで俺と、さらに状況が理解できなくなつて困惑しているフブキに、「悪い。こいつを連れて帰るわ」とだけ言つて、そのまま俺と同じように抱きかかえて自宅に戻つて行つた。

フブキに何があつたのかを訊かれたが、どうしても答える気にはなれず後日にしてくれと言えば、素直にあの女は「……わかつたわ」と答えた。

だが、悔やむように顔を歪ませて「……私、チケツトをあげない方が良かった？」という質問に俺は、「……すまない」としか返せなかつた。

フブキは何も悪くない。

エヒメさんはまだ情緒不安定だったが、完璧に避けられていた昨日までとは違つて俺とまた話してくれるようになったきっかけや、俺を後日からかうためだとしてもエヒメさんは着飾らせて「デート」らしいお膳立てをしてくれたことに関しては、素直に感謝している。

あいつらと出会つてしまったのは、運が悪かつただけだ。

だけど、俺はフブキから一刻も早く離れたかつた。会話ができる余裕などなかつた。

フブキは何も悪くないとわかつていても、あの女に……ヘラを連想させるあいつと会話をしていたら、間違いなく俺はフブキに八つ当たりをしていただろう。

そうして、部屋に戻つても俺は何もできないことを悔やみ続けることしかできない。

……エヒメさんから全てを奪つたあいつらに対する憎しみを、募らせる以外何もできなかつた。

\* \* \*

ただひたすら自分を責めて、想像の中で何度奴らを焼き尽くしたかは覚えていない。

けれどそんな無意味なことでも時間だけは潰れたことを知つたのは、玄関のチャイムが鳴つた時。

「ジエノス、ちょっといいか？」と、先生が扉の向こうから声をかけてきた時だ。

それでようやくもうとつくに日が落ちていることに気付くが、それはどうでも良かった。

俺は即座に立ち上がって玄關に向かい、扉を開けてすぐに先生の要件をお聞きするのではなく、図々しくも俺がまず訊いた。

「先生！ エヒメさんは!？」

「泣きつかれて寝たよ。だから、ちょっと上がらせてくれ。話が聞きたい」

俺の無礼さを先生は咎めなかった。それはいつもなら先生が寛容だからだろうが、今回はそんな余裕もなかったからだろう。

どんな怪人と戦った後でも見たことのない、先生の疲弊しきった様は見えていらなかった。

俺は先生を招き入れる。

元々この部屋は俺が寝ることと、あとは私物置き場としか使っておらず、誰かを招くことを想定してなかったので椅子や座布団の類もなく、ベッドに腰かけることを勧めたが、先生は「いや、いい」と断って床に胡坐をかいた。

飲み物の有無を尋ねてもそれもないと答えられ、俺は先生と向き合って正座すると、サイタマ先生は頭痛を堪えるように頭に片手をやって率直に俺に訊いた。

「ジエノス。何があった？ 悪いけど、俺はあいつからは何も聞いてないんだ」

先生の問いこそが、エヒメさんの傷の深さだろう。

誰よりも何よりも信頼している兄にすら、吐き出すことが出来ないほどの「トラウマ」そのものと再会してしまい、そして何も出来なかった自分を悔やみながら俺は、流れていないはずの血を吐く思いで伝えた。

「……へラに……出会いました」

「誰だそれ？」

しかし、即答で返された言葉に若干気が抜けた。

忘れるものなのか？ と一瞬思ってしまったが、先生にすらエヒメさんは何も語らなかつたという事を思い出し、エヒメさんがいじめられていたことは知っていてもその主犯格であろうあの女の事はまるつきり初めから知らないのかもしれないと思ひ直す。

しかし俺がヘラの外見の特徴、ついでにその取り巻き達の事を説明すると怪訝な顔をしていた先生の顔がみるみる険しくなり、俺の説明を途中で制して止めた。

「わかつた。思い出した。……わかつたから、『あいつ』の名前を出さないでくれ。

あいつ……エヒメは未だに、街中とかTVで同じ名前を聞くだけで過呼吸を起こすんだ。……俺も、ブチ切れて八つ当たりしそうになるからやめてくれ」

……忘れていたわけではなく、忘れようとしていたのか。

それほどまでに奴は、エヒメさんだけではなく先生さえも傷つけたのか。

「……すみません」

俺が頭を下げると、「謝んな。お前は悪くねえよ」と先生は言ってくれるが、エヒメさんが奴と出会ったことを知って先生の顔に疲労の影が増している。

先生は項垂れていた頭を上げて、そのまま勢いでのけぞって天井を仰ぎ見ながら呟く。

「……わかつてはいたんだけどな。臭いものに蓋してるだけで、何も解決してないことは。

でも、マジで全然、……未だにあんなに怯えて、3年かけて取り戻したものが全部ぶっ壊れるくらい何も癒えてなかつたのは……さすがに堪えるな」

口元を引き攣らせた自嘲の笑いが痛々しい。

ヒーローとしてあまりに気高く、尊い矜持を持つ先生にとって、未だに誰よりも何よりも救いたい存在が、何も救われていなかったことを思い知らされたのは、もはや存在否定に近いのだろう。

だからか、先生は俺なんかに初めて、弱音らしき言葉を口にした。

「……俺は、3年前に『ヒーロー』なんか目指さないで、『あいつ』を殺してもエヒメの前にもう二度と現れないようにした方が良かったのかもな」

相手は怪人でも怪物でも、指名手配犯ですらない。イジメを行っていたとはいえ未成年の少女であり、そのイジメすらも認知されていないのなら善良な一般市民として扱われる。

それを殺すのは、この世から排除するのは、ヒーローとしてはもちろん人としても最低な行いなのに、俺は否定できない。

……あそこまで人を生きながらに殺し尽くした奴らが「善良」で、そんな汚物を排除することが「悪」だなんて、俺には納得できない。出来るわけがない。

それでも、俺は答える。

「……サイタマ先生。それは、間違いです」

先生の言葉を、おそらく初めて否定する。

「貴方がその手を『奴』の血で汚してしまったら、それこそエヒメさんは全てを失います。」

……だから、お願いします。

何もかも奪い尽くされて、壊されて、自分の命すらも自分のものと思えなくなってしまったあの人に唯一残された、『奴ら』に奪われることなく守り抜いた『エヒメさんのヒーロー』を、否定しないでください

何もかも失い、飛び降りて、そうやって彼女はきつとその時に「跳ぶ」という手段を得たのだろう。

命すらもなげうってようやく、残ったただ一つの元にたどり着けたのだろう。

それほど……エヒメさんにとって先生は、何よりも手放せない、手放したくない大切な人で、抛り所だったはずだ。

ヒーローになろうと志した時から、とつくの昔から先生は間違いなく、エヒメさんのヒーローだった。

だから、先生の弱音を仮定の話であっても肯定してはいけない。

先生の手が「奴」の血で汚れてしまったら、それこそエヒメさんは

先生が周囲から非難されようがされまいが関係なく、「自分の所為だ」と罪悪感を抱き、自分が疫病神だと思い込んで、……あとはどうなるかと「終わり」でしかないだろう。

また、自ら命を断とうとするのか、それとも言葉通り生きた屍になるか。

おそらくはその、二通りしかない。

「……ああ。わかってる。悪い。今のは忘れてくれ」

俺が言うまでもなく、先生の方がその最悪の結末を理解していたのか、すぐに前言を撤回して俺は安堵する。

やはり先生はどこまでも気高く、どれほど傷ついても「正しき」を見失わない人であることを再確認していたら、ふと先生が俺の言葉で気になる部分があった事に気付いたらしく、少しだけ疲労や怒りの色を薄めて俺に尋ねた。

「そういや、ジェノス。お前、何で知ってるんだ？」

……エヒメが、自殺未遂したことを」

「俺、話した覚えねーぞ」と首を傾げる先生に、帰り道でエヒメさんが話してくれたことを伝えると、先生は目を丸くした。

その様子に俺の方も呆気を取られて、「先生？」と呼びかけると、今度は先生が破顔した。

ただでさえめつたに笑わない先生が、今にも泣きそうな顔をして笑った。

泣きそうであったが、それは悲しみや悔し涙の類ではない。

零れ落ちたとしたらそれは、うれし涙であることがはっきりとわかるほど、嬉しそうに先生は笑った。

「……あいつ、お前には話したのか」

先生の言葉に驚愕する。

俺の表情で察したのか、俺が訊く前に一度首を横に振ってから先生は答えてくれた。

「あいつ、何があったのかも、何をされたのかも、何で飛び降りたのかも、俺に話したことねーよ。俺が積極的に訊かなかったってのもあるけど、いくら『話して楽になるなら話せ』って言っても、一度も話さ

なかった」

「……あの人は、どんな思いで俺に吐き出したのだろうか？」

おそらくは、先生に話すと先生が激しく悔やみ、自分を救えなかったことに対して罪悪感を抱くから、だから俺に吐き出した程度だろう。

兄が大切だから吐き出せば少しはマシになれるものも決して吐き出せなかったが、俺ならまだ出会ってもない頃の話だから、さほど重荷にならないと思ったから話した。それくらいの気持ちに過ぎないことは、わかってる。

そうしないと、俺は自惚れる。

エヒメさんが先生ではなく俺を選んでくれたと、俺になら話してもいいと思ってくれたと、バカげた自惚れを頭から追い出す。

が、どうしても吊り上がる口角は手で覆い隠すしかなかった。

不謹慎なのはわかってる。話してくれたからと言って、俺は結局何も出来なかったことには変わらない。

……それでも、どうしようもなく嬉しかった。

先生も、エヒメさんが胸の内に抱え込み続けた重荷を、わずかでも俺に吐き出したことに安堵して、うれしげに、そして少しおかしそうに笑って呟く。

「……そうか。全部がまたぶつ壊れて、なくしたわけじゃねーのか」

先生はそんなつもりはないだろうが、その言葉でまた不謹慎な喜びが俺の胸を占める。

3年前に奴らに奪われて壊されたものになかったもの、再会した今も壊れずに、失われずに、エヒメさんが持ち続けるものに、俺が含まれているのなら……俺は奴らに決して奪われず、壊されないことを誓おう。

「……先生、俺が原因でエヒメさんと奴らが再び関わってしまい、まことに申し訳ありません」

俺は改めて先生に、頭を下げる。

先生は「だからお前の所為じゃねえっつーの」と言ってくれるが、どんなに先生やエヒメさん自身が俺を擁護してくれても、エヒメさんが

繰り返し言い続けた謝罪のように、俺は俺自身を自分のしたことだからこそ一生許せない。

だからこそこれは、許されることを望む謝罪ではなく、一つのけじめと俺の決意証明だ。

「俺がきつかけで、俺が原因で、エヒメさんに一番思い出させてはいけないことを思い出させてしまいました。」

あの人は、俺に一番辛かった時期の事を話してくれましたが、俺は何もできませんでした。

……そんな、無力で無能で、未だに何一つ先生の足元にも及ばない不肖な弟子ですが……、お願いします。

これからもエヒメさんを、俺の大切な人を守らせてください」

先生に対して失礼な言葉であることは百も承知だが、あえて「先生の大切な妹」ではなく、「俺の大切な人」と言った。

失礼でも、無礼でも、先生を敵に回してでも、それでも俺にとって守りたいくらいにあの人が大切だと言う意思表示を、先生は苦笑と「恥ずかしい奴」での一言で片づけた。

「……言われなくなつて、任せるっつーの。お前は、俺にはもつたいない最高の弟子だよ」

俺の意思表示に対する返答は一言だったが、その一言で終わらせた理由は、身に余るほどの光栄な信頼と評価だった。

「ありがとうございます」

「いちいち土下座すんなつて！」

若干本気で迷惑そうに言われたので頭を上げると、今度は呆れたような言葉を続けられた。

「つたく、お前は本当にクソ真面目でエヒメが大好きだな。もう結婚しろ。そして爆発しろ」

「……そうですね」

クソ真面目は昔からよく言われてきたことで、そして結婚に関してはぜひともしたいので肯定する。

「というか、先生。「少なくとも成人するまで絶対に嫁にやらない」と言ったことは忘れてるんですね。やはりあの日は、実は結構酔って



いたのか。

そして後者はもう言われなくてもすでに何度かしかけているが、それだけは出来ない。

「しかし、前者は今すぐにでもしたいですが、後者は先生からの命令でも無理です。

俺は死んでもいいですけど、死ねませんから」

先生は俺の言葉に、「当たり前前だ。死んだら殺すぞ」と矛盾した返答をして笑った。

……その言葉を聞きながら俺は、バカなことを考えた。

シメイの「死んでもいいわ」は好きだけと言われたくないと言ったあの人は、この言葉なら喜んでくれるだろうか？ と。

月が綺麗な夜の夢、と……

一歩足を踏み出せば、クスクスと嗤われる。

その声に息を飲めば「何してんのよ！」と怒声が飛ぶ。

とつさに謝ろうとするけど、声が出ない。

何も言えないまま立ち尽くすと、舌打ちされて呼吸の仕方もわからなくなる。

周囲に人はいない。

ただ、汚泥のような不定形のものが、血走った目で私を見てる。

ニヤニヤと嘲笑って、睨み付けて、私の全てを否定する。

その視線から逃げ出したいのに、足は動かない。

ああ、そうか。

もう私の足はないんだ。

ぬらりと、複眼のようなものが光る。

足元から、足だった部分から、私をざりざりと噛み千切り、齧り取り、咀嚼して、私を食い荒らしてゆく。

「ずるいずるいずるいずるいずるい」

無数の蟲が、人の顔をした蟲が口々に同じ事を永遠と繰り返しながら、私を食い尽くしていく。

「何であんたばっかり。私だって欲しい。私に頂戴。あんたばかりなんてずるい。欲しいの。いいでしょ？ 私がもらっていいよね？

何でダメなの？ ずるい。私のなのに。私のなのよ。あんたのなんて、ある訳ないじゃない」

何を言っているのかわからない。

何が正しいのか、どう反論したらいいのか、私が間違えているのか、何をしたらいいのか何もわからなくなっていく。

考える力さえも食い潰されて、蟲が私の身体を、全身を、私を、私だったものを覆い尽くす。

最後に残された眼球が、私を見下ろす彼女を映し出す。

食い尽くされたはずなのに、その声は鼓膜を震わせた。

「卑怯者」

ヘラの言葉で、私だったものが、私の残骸が悲鳴を上げる。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!

「絶叫して、私は逃げ出した。」

彼女の言う通り、私は卑怯者だ。

\* \* \*

「わかった。思い出した。……わかったから、『あいつ』の名前を出さないでくれ」

気が付くと、そこにいた。

夢であることは初めからわかっていたけど、いきなり悪夢から場面転換して、目の前でお兄ちゃんとジェノスさんが向き合って何か話している。

状況がわからずあたりを見渡せば、自分の家のはずなのにただでさえ少ない家具がさらに減って、ないはずのベッドが置いているからやっぱり夢だ。

もしかしたら隣のジェノスさんの家設定かもしれない。入ったことがないから知らないけど、なんとなくこの寝る為だけの部屋という感じがそれっぽい。

そして何よりも二人が私に気付いた様子がないから、ああこれは疲れてたりストレスが溜まったらよく見てたあの夢だ、と気付く。

いつもは知らない場所をフラフラと探索するだけで、知ってる人が登場なんて一度もしたことがないはずなのに、今日は珍しい。

……それほど、私にとってストレスだったんだろう。

どこか遠くに、私なんか誰も知らない所まで逃げ出したいんじゃないやなくて、どうしてもお兄ちゃんと……ジェノスさんに会いたかったんだろうね。

けれど、会った所で意味はない。

ただでさえ夢でしかないのに、二人は私に気付かない。

私の姿は見えず、私の声は聞こえない。

私はただ、幽霊のようにそこに立ち尽くして二人のやり取りを見ているだけしか出来なかった。

項垂れていたお兄ちゃんが、いきなりのけぞって天井を仰ぎ見る。

見た事のない悔やむような泣くのを堪えてるような、それを誤魔化すような歪んだ笑みを張り付けて、自分がしてきた事は、この3年間の意味がなかったと嘆いても、私には何もできなかった。

違うよ。お兄ちゃんは、十分すぎるくらいに私を助けてくれたよ。何が得意だったのか、何が好きだったかもわからなくなってた私に、私の好きだったもの、得意だったものを思い出させてくれた。

歩き方も、呼吸さえもどうやっていいかわからなくなってた私の一つ一つを、「頑張ったな」「よく出来たな」「すげーな」って褒めてくれて、私にどうやって生きてらいいかを教え直してくれたのは、お兄ちゃんだよ。

お兄ちゃんがいなかったら、私は何処にも行けないまま、何にもなれないまま、誰でもなくなっただけ消えるしかなかったんだよ!!

そう叫んでも、お兄ちゃんは振り返ってくれず、全然違う方向を見て呟く。

「……俺は、3年前に『ヒーロー』なんか目指さないで、『あいつ』を殺してもエヒメの前にもう二度と現れないようにした方が良かったのかもな」

……やめて。

お願いだから、やめて。いやだ。そんなことを言わないで。

お兄ちゃんが夢を諦めるなんて、ヒーローであることを後悔なんかしないで!

お兄ちゃんは、ヒーローだよ!

昔からずっと、ずっとずっと私のヒーローだよ!

だから私は、もう自分に何もなくなっただけ、自分がわからなくなっただけ、生きていていいのかもわからなくなっただけ、飛び降りても、それでも本当は死にたくなくて、取り戻したくて、自分を思い出さなくて、助けて欲しかったから、だから……跳べたのに。

お兄ちゃんの元まで、跳べたのに……

お願いだからお兄ちゃん……、そんなことを言わないで。

私なんかのせいで、お兄ちゃんのしたいことを、夢を諦めないで……

「……サイタマ先生。それは、間違いです」

お兄ちゃんに届かない声を張り上げて、泣くしかない私の声が代弁するように、ジェノスさんは言った。

「貴方がその手を『奴』の血で汚してしまったら、それこそエヒメさんは全てを失います。」

……だから、お願いします。

何もかも奪いつくされて、壊されて、自分の命すらも自分のものと思えなくなってしまったあの人に唯一残された、『奴ら』に奪われることなく守り抜いた、『エヒメさんのヒーロー』を、否定しないでください」

見えてない、聞こえていないのは、一度も私に視線を向けないことで明白なのに、まるで私の声が聞こえたかのように、彼は私の言葉を、お兄ちゃんに伝えたい願いを言葉にしてくれた。

ジェノスさんの言葉に、私の願いにお兄ちゃんは少し気まずげな顔をして、撤回してくれた。

……ごめんなさい、お兄ちゃん。

お兄ちゃんだって、弱音を吐きたくなる時だってあるのは分かってる。そんな弱音を吐かせたのは、私だってこともわかってるよ。

でも、お願い。それだけは言わないで。

私は大丈夫だから、ちゃんと頑張るから、救われるから、だからどうか「ヒーロー」であることを後悔だけはしないでと、私に気づかないお兄ちゃんの背中にするようにしがみついた。

我慢するから、立ち直るから、明日にはいつも通りになれるようにするからって、出来もしないのはわかってるくせに、それでもお兄ちゃんにあんな顔をさせたくないから、お兄ちゃんのしてきたことを無意味にしたいくないから……

お兄ちゃんが悲しむから、心配するから、誰も幸せになんかなれないから。

だから、話しちゃだめだと思ってた。自分の中で、どこにも出て行かないように閉じ込めて、抱え込んでいた。

それなのに……、それなのに――

「……あいつ、お前には話したのか」

お兄ちゃんは、笑った。

今にも泣きだしそうなのに、すごく喜んでいるのがわかる声と顔。私が、昔を思い出してまた何もわからなくなって、どうやって償えばいいのか、私に何の価値があるのかもわからなくなって、抱え込む余裕がなくなったから溢れ出してしまった言葉。

ジェノスさんの重荷になるとわかっていたくせに、どうしてもこの人に受け止めてもらいたい、この人から私の意味と価値を教えてもらいたいと思ってしまうって、吐き出した言葉を、吐き出してしまったことを、お兄ちゃんは喜んだ。

誰も幸せになれないと思ってた。

私がお慢をしていたら、それでいいと思ってた。

吐き出してしまった時、ジェノスさんの辛そうな顔が見ていられなかった。

吐き出したって、楽になんかなれないで後悔だけが積み重なった。

……なのに、お兄ちゃんは喜ぶんだ。

私が辛いことを我慢せずに、吐き出したってことを。

そしてジェノスさんも私が吐き出した時、あんなに辛そうな顔をしていたのに、……私が話したということ喜んでくれた。

もう、十分なのに、私と出会えたことを幸せだと言ってくれただけで私は十分なのに、ジェノスさんは改まってお兄ちゃんに頭を下げて語った。

私が吐き出したことを「話してくれた」と言っって、十分すぎるくらい嬉しくて、だからこそ弱くて何もできない私が嫌で泣いたのに、「何もできないかった」と自分を責めて、自分を無力だと語って、それでも無機質なはずの金の瞳は生きているものにしか出せない強い輝きを帯びて、まっすぐにお兄ちゃんを見て言った。

「これからも、エヒメさんを、俺の大切な人を守らせてください」

——なんて、都合のいい夢。

気づかない方が幸せだった、諦めた方が楽なのに、期待なんかしない方が傷つかずに済むのに。

そう思っているくせに、そう思っただけで逃げようとしているくせに、私の深層心理はあまりに凶々しくて貪欲だ。

逃げられないのはわかってる。

だってもうこれは、私の贖罪じみた誓いなんかもう関係ない。

正真正銘、ただの私の願望で逃げたくないだけなんだから。

この人が好きだって気持ちから、もつとこの人に近づきたいという望みから、私は逃げ出せない。

……大丈夫。もう本当に、強がりなんかじゃないよ。本当に私はもう大丈夫だよ。お兄ちゃん。ジェノスさん。

私はちゃんと、「私」だってわかった。

もう誰にも、神様にだって奪い取らせない、守り抜くつてもものがある。ちゃんとある。

私の世界の柱と、私が歩いていくための杖だけは、誰にも渡さないし壊させない。

贖罪なんて後ろめたい気持ちから強迫観念のようにするんじゃないよ。私自身が決めたことだから、大切なものを守るためのことだから。

だから、もう逃げない。ちゃんと立ち向かえる。

……今すぐには、まだちよつと無理かもしれないけど。

でも、もう私は折れない、挫けないよ。

たとえ夢でも、夢だからこそ、私が何を望んでいるのかがよくわかったから。

お兄ちゃんがこんな風に笑えるように、ジェノスさんに本当にそう言ってもらえるように頑張ろうって、目標を持てたから。

だから、……もう大丈夫。

「つたく、お前は本当にクソ真面目でエヒメが大好きだな。もう結婚しろ。そして、爆発しろ」

でもお兄ちゃん、夢の中でさえデリカシーがないのはどうよ!!

やめて! ただでさえ現実でもジェノスさん、たまにリアル爆発起こしかける時があるのに、夢だと本当に爆発しかねないから本当にやめて!!

幸いながら、私の深層心理もそんな展開は当たり前前だけど望んでいなかったから、ジェノスさんは爆発しなかった。

代わりに、少し困ったように笑いながら言われた返答に、私が爆発しそうになった。

「……そうですね。しかし、前者は今すぐにでもしたいですが、後者は先生からの命令でも無理です。」

俺は、死んでもいいですけど死ねませんから」

——ああ、本当に私の欲望と願望が丸出しで恥ずかしくて、なんて都合のいい夢。

\* \* \*

「おはよう、お兄ちゃん。トーストは何枚食べる？」

朝、いつものように朝ごはんの準備をしながら起きたお兄ちゃんに挨拶をしたら、お兄ちゃんは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしながら、「……2枚」と答えた。

ハト豆な顔になるのは予想できてたけど、それでも答えるのは予想できなかったからちよつと笑ったら、お兄ちゃんがもはや幽霊でも見るような顔になって、私に「お前、大丈夫なのか？」って問い詰めた。

「あー……えーと、まだ頭の中でグチャグチャしてる部分はあるし、正直、また会ったらって思ったら外に出るのが怖いけど……でも、大丈夫だよ。」

だって、お兄ちゃんとジェノスさんがいるし」

私が本音で答えたら、お兄ちゃんの方もそれが強がりとか心配をかけるための言葉じゃないことを理解したのか、とりあえず納得はしてくれた。

どうして昨日あそこまで昔みたいに息することすら忘れかけて何もできなくなってた私が、ここまで回復した理由の理解はできないみたいだけど。

そりやそうだ。

でも、ごめんお兄ちゃん。説明は恥ずかしすぎて出来ない。

まあ、もともと結果が良ければそこに至る経緯なんかどうでもいい人なので、少し釈然としないものはあっても深追いはしないで、お兄



ちゃんはいつも通り着替えて布団をたたむ。

そして、折り畳みのテーブルを組み立てたところで、私は意を決してお兄ちゃんに言ってみた。

「……お兄ちゃん。……ちよつとお願いがあるんだけど……、えつと、あの……ジエノスさん、呼んでもいいかな？」

久しぶりに、みんなで朝ごはん食べませんか？ って」

私の頼みごとに、またお兄ちゃんはポカンとした顔になる。

けど、そのあと優しく笑って言ってくれた。

「そうだな」って。

まだ自分で「朝ごはんを一緒に食べませんか？」と誘う勇気はなかったから、お兄ちゃんに言ってもらったらジエノスさんはすぐに来た。

そして、「おはようございます」とあいさつした私を見て、お兄ちゃんと同じようにポカンとしながら「……おはようございます」とまさしくオウム返しで挨拶。

うん。わかってたけど、やっぱり私の回復っぷりはおかしいよね。ごめんなさい二人とも、なんか朝から困惑させて。

とりあえず私はジエノスさんに昨日のことを謝ったら、ジエノスさんは「いいんです、それは！ むしろ俺が原因なんですから、謝らなideてください！ それより、エヒメさんが大丈夫なんですか？」と心配を再燃させてしまった。

その心配が申し訳ないけど、それでも私を大切に思ってくれていることがありがたくって……同時に昨日の私にばかり都合のいい夢を思い出して、恥ずかしくなる。

けれど、ジエノスさんにこれ以上心配をかけるわけにはいかないから、私は顔に集まった熱があまり目立っていないことを祈りながら、答える。

「はい。おかげさまで」

私の答えに、ジエノスさんとお兄ちゃんが不思議そうに顔を見合わせた。

\* \* \*

許さない。

どうしていつもあいつばかり、私の欲しいもの、私ができるはずだったもの、私のものがあいつのものになるの？

あいつさえいなければ良かったのに。どうしていつもあいつばかり褒められるの？

私は何をやっても、「もっと頑張れ」「どうしてこんなことも出来ない？」って言われ続けて、どうしてあいつは「すごい」とか「よく頑張った」とか言われるの？

あいつのせいだ。あいつが私のそばにいるから、私が比べられるんだ。

いつもいつも、特に頑張らなくても何でもできる卑怯者。

いつも好きなことしかしてなくせに、私と違って周りから褒められていい気になってる嫌な女。

パパもママも、私が一番かわいい、うちの子が天才って言ってくれたのに、いつのまにか言ってくれなくなった。

「あの子は出来るのに、どうしてあなたは出来ないの？」って言うようになった。

ふざけんな。

あいつが宿題をいつもちゃんとやるのも、部屋の片づけや家の手伝いをするのも、忘れ物をしないのも料理が出来るのも、テストの点がいいのも全部、あいつが好きでやってるだけじゃない！

好きなことを好きなだけやってるだけで、それがたまたま勉強と

かってだけじゃない！

あいつが好きなことを好きなだけやってるんだから、私が好きなことだけを好きなだけやって何が悪いの!?

だから全部、奪い取ってやった。

ううん、返してもらっただけ。だって元は私のものなんだから。

あいつさえいなかったら、私がいらないはずだったものなんだから。

私のものを横取りしていたんだから、利子をつけて返してもらって当然よね？

だから、たつぷり甚振ってやった。

周りはみんな、私の味方。みんな、あいつのいい子ぶりっこは大嫌いだって言って、面白いくらいに私の思う通りになった。

あいつが足音を立てるだけでも下品な歩き方と言って嗤って、息をしたら酸素の無駄使いと言って舌打ちをしてやれば、あいつはもう何もできなくなった。

ただ「ごめんなさい」を繰り返す人形になって、それもそれで面白かったけどすぐに飽きた。

だから、もういらないと行ってやったら、あてつけのように飛び降りやがった。

バツカじゃないの？

それで脳みそもぶちまけて、つぶれたカエルみたいになって死んだから少しは面白かったのに、超能力なんてものを身に着けて、逃げ出した。

何よ。もう何もなくなったと思ったからいられないと思ったのに、まだあるじゃない。

あいつは私から奪ったものを、私のを返さずに逃げ出した。

卑怯者、卑怯者、卑怯者!!

そして、3年たった今も私に返さずのうのうと現れて、そして私からまた奪う卑怯者。

私を助けてくれたのに。

あの不細工で気持ち悪い怪人は、「可愛い子は俺の嫁」とか言っただ。

「私狙いなのは明白だった。」

だから、彼が助けてくれたのは私。ほかの女はみんな、ついででおまけ。

あの人は、あのヒーローは、鬼サイボーグは私を助けてくれたのに！

私のなのに、それなのにあいつは気持ち悪く媚びた格好をして、私からまた奪った。

許さない、許さない、許さない。

いつもいつもずるいのよ、卑怯者。

私のんだから、あんたのものなんかこの世にないんだから、だからまた、返してもらおうわよ。

いいでしょ？

ねえ……エヒメ。

## 真実探し

エヒメさんが『奴ら』と再会して2日経つが、今のところエヒメさんは拍子抜けするほどに問題はない。

また『奴ら』と鉢合わせをするのが怖いのか、以前なら「一人で大丈夫です!」と言つてきかなかつた買い物も、俺や先生が行くと言えば素直に任せてくれるくらいで、それもこちらが提案しなければやはりいつも通り一人で行くとうとする。

強がりが無理をしているのではなく本当に平気らしいと先生も不思議そうながら断言しており、俺から見てもエヒメさんは2日前どころかフブキの家に泊まる以前と同じように穏やかで、俺が知るいつも通りのエヒメさんだった。

……何故かまだ多少俺に対してぎこちない部分があるが、それでも2日前よりずいぶんマシになっている。

何があつてエヒメさんが一晩であそこまで立ち直つたのかは、俺にとつても先生にとつても謎でしかないが、強がりではなく本当に平気なら喜びこそすれ文句はない。

不思議で気になるのは事実だが、問い詰めてむしろトラウマをえぐり返したら最悪なので、俺は先生と同じようにあの日のことを話題にあげず、ただいつも通りの日常を送る。

……送りながらも、もう後悔などしないように俺は行動する。

意味があるのか、何になるのかはわからない。

それでも、もう無知を言い訳にしたくない、悔やみたくないの一心で今できることを探して行動する。

「……が、さすがにこれはきついな」

独り言をつぶやいて俺は、目頭を押さえた。

眼精疲労とは無縁だが、精神的に疲れてつい生身だった頃と同じ動作をしてしまう。

それほどまでに、これは見ているだけで辛い。

PCモニタに羅列された不平不満に嫉妬、他人の不幸に対する黒い喜悦なんてやはり人間が見るものではないな。

ここ最近というか2日前から以前のような日常を送る傍ら、俺が自宅に帰ってからの日課としてPCで情報収集を始めてみた。

エヒメさんを絶望に追い詰めた、「奴ら」に関して、そして3年前に「何が」起こったのかを調べ続けている。

しかし、俺はこんな身体だから機械系ならそこらの素人より詳しいが、ネット関連、特にハッキングなどは専門外だ。

ネットに関しては普通か少し詳しい程度の俺にできることは、奴らがツイッターやフェイスブックなどのSNSで情報を公開していないかを期待して本名で検索してみたり、先生から聞いたエヒメさんが中退した、奴らの母校である女学校の関係者だとプロフィールなどで公開している者を総当たりで閲覧するしかない。

まず、本名で検索は完全な空振りだった。

まあ、これはよほどの馬鹿ではない限り、今時個人情報をもそんなに簡単に公開する奴はいないので、そこまで馬鹿ではないと言う可能性の排除の為に一応やってみただけなので、初めから期待などしていない。

問題は、いくら漁っても3年前、正確に言うとエヒメさんが学園に在籍していた頃、リアルタイムで近況を記した人物のSNSやブログ等が存在しないことだ。

これはエヒメさんが在籍していた学園自体を調べてみたら、理由は簡単にわかった。

今時珍しい幼稚舎から短大まで付属の名門女学校は、よく言えば純粹培養のお嬢様を育てて悪い虫がつかないようにするため、俺の感想を率直に言えば、男にとって都合のいい女に洗脳して閉じ込める檻ではない。

そんな学校だからか、好奇心旺盛で影響を受けやすい思春期に、良くも悪くも情報が溢れかえっているネットを生徒に近づけないことに徹底しているようだ。

全寮制というのもあって特に必要性もないのでケータイの所持は完全禁止、今なら小学校で始めるPC関連の授業も高等部に上がるまで一切なし、高等部での授業もワード・エクセルなど事務・会計系ソ

フトの使い方くらいしか教えないと、学園のHPで堂々と記されていた。

だから、別にエヒメさんが在籍していた時期に限らず、この学園の生徒でネット環境に触れられるのは短大生、もしくは寮制ではない初等部くらいであり、中等部・高等部の生徒のSNSやブログ・サイトはそもそも存在しないようだ。

コネか何かを使ってケータイを持ち込んでいる者はおそらく存在はするだろうが、プロフに学校名をごく丁寧に記載すれば即座に見つかって没収されるので、結局存在しない。

「お嬢様学校」くらいに濁されたら絞り込みようがなく、当時をリアルタイムで記した情報を探すのは諦めた。

偏見かもしれないが、今時の10代少女でSNSに登録していない、ブログやサイトを持っていない人間が少数だろうと思えば、他人事の野次馬根性、保身や言い訳で汚されてはいるだろうが、先生も知らずエヒメさんが語らない「真実」の一端が知れると期待した分、この事実はさすがに凹む。

まあ、まったく何もわからなかったわけじゃない、エヒメさんの同窓生はちょうど今年卒業してネット環境に触れられるようになり、そのことにはしゃいでさっそくSNSを始めているものが多く、多少は情報が入っただけマシだがな。

とりあえず、ヘラという女については少しわかった。

どうもあの女は学園の創立者のひ孫、現理事長の姪にあたり、学園に対して莫大な寄付金を収める、比喻や誇張ではなくまさしくあの学園の女王と呼ぶべき権力者だった。

……もうこれだけで、何故エヒメさんがあそこまで何もかもを奪われて、そこまでされても逃げ出せず、そして誰も、生徒はおろか教師も助けなかった理由に想像がつく。

あの学園はあの女の王国。どんな暴政もまかり通り、そしてあいつに都合よく隠し通される魔境だったのだろう。

ただ少なくともあの女は、表向きは厳格で正義感が強くて真面目で付き合いづらいが、特に自分の出自をひけらかさず、むしろ理不尽なほ

どに厳しい規則は理事長である叔父に直談判するリベラルな人間だったと同窓生や他の高校や中学に進学していった後輩らしき人間が、SNSなどで語っているが多い。

中にはひたすらにこきおろしている輩もいるが、あの女を仇である暴走サイボーグと同じくらい憎んでいる俺でも、明らかにただ単に家が金持ちであり、本人がとてつもなく美人であることに嫉妬して、揚げ足取りのあら捜しで捏造でっち上げの誹謗中傷をしていることがわかるものが多かった。

しかし、尾ひれがついているのだろうか事実が元であろう悪い話も少なくなかった。

学費免除の特待生を、退学に追い込んだ。

一般家庭出身の編入生を、自殺に追い込んだ。

これらの話が時々話題に出ており、ヘラを褒め称えていたアカウントもその話題に関しては特待生や編入生の自業自得などと責任転嫁して擁護していたが、「退学」や「自殺に追い込んだ」ということ自体を否定するものは皆無だった。

先生が言うに、エヒメさんがこの学園に進学したのは親の期待にこたえたいが家庭の経済事情から私立中学に進学は厳しかったので、特待生制度を利用したらしい。なのでこの「特待生」「編入生」は間違いなく、エヒメさんだろう。

この俺が知りたい過去のキーワードは探せばチラチラと出てくるのだが、昔の話なのと当事者たちではない、そして一般公開のSNSで出す話題ではない為、やはり確信的な部分を語っているものは探しても探しても見つからない。

とりあえず、ヘラ擁護派が語るエヒメさんを自殺や退学に追い込んだ理由は、エヒメさんが学園で何らかの「トラブル」を起こしたからであり、自殺は当てつけの狂言、退学はそのトラブルの責任を取つてであり、ヘラ否定派はその「トラブル」はヘラの自作自演であり、自分より成績優秀だったから、あるいは理由など特になくただ単に気に入らなかつたからイジメた拳句に自殺未遂にまで追い詰め、そのまま精神を壊して中退したが定説だということがわかった。



……これは、後者が正しいのだろうか。本人を知っていれば、どう考えても狂言の自殺未遂なんてありえない。

まあ、レポートという能力がこのタイミングで覚醒してしまったのなら、そんな噂が流れても仕方がないと客観的に考えれば納得するのだが、ヘラを擁護するために被害者であるエヒメさんをさらに貶める奴らに対する怒りで、昨日俺がパソコンを壊しかけたのは余談だ。

とにかく、真実に近いの情報はヘラを気に入らないと非難している側を探した方が誇張されているものでも見つかるだろうと判断して、今日もひたすらに同窓らしき人物のSNSを探して読み漁っているのだが……だいぶ嫌気が差している。

欲しい情報がまったく手に入らず、ただひたすらに悪意だけを見ていたらそうなるのも当然か。

PCの時計を見て見れば、もう日付はとつくの昔に変わっている。

結局、今日もエヒメさんが濡れ衣を被せられたと思われる「トラブル」が具体的にどんなものだったかもわからない。

ただひたすらに、くだらない嫉妬と不平不満ばかりを目に通したという事実が、さらに俺の精神を疲労させる。

今日はもう情報収集を切り上げるのはいいとして、少しは昔のことがわかった昨日と違って、今日は何の収穫もなく無駄な時間を過ごし、ストレスを溜めただけというのがさすがに虚しい。

このまま眠ると寸前まで読んでいた陰鬱な愚痴がそのまま夢に影響されそうなので、何か気分転換に本でも読むかと思ったが、今日届けられた俺宛てのファンレターが入った段ボールが目に入る。

正直、俺宛てのファンレターは俺の写真を見て勝手にイメージした評価を一方的にぶつけてきて、「誰の事を語っているんだ、こいつは？」と思うものも多く、読んでも嬉しいより困惑して疲弊することが多いのだが、ネガティブな内容ばかりを読んできた今は、何でもいいからポジティブなものを目にしたかったので丁度いい。

そう思いながらも、やはり読むならラブレターどころかストーリーカー手前なものではなく、直接助けた人間からの「ありがとう」や、子供が純粹に憧れてくれて送ってくれた、どんな時でも活力になるものが

いいので、箱の中の手紙を選別する。

中身を見なくても最近はどういう手紙がそういうストーリーカー手前なのか分かるようになってしまったのは、良いことなのかどうか微妙だな。

俺は封筒にやたらと立体的なシールを張り付けているもの、手がラメだらけになりそうなペンで住所や宛名、封筒のふちに装飾を書き加えている手紙を見つけては、とりあえず横に分けて置いておく。

少しでも印象に残りたいのか、それともどの手紙よりも先に読んでほしいと工夫を凝らした努力は認めるが、こういう手紙ほどストーリー手前な内容が多い。

もちろん違う場合の方が多いのだが、正直言ってここまでガツガツしてる時点で、少なくとも中身もテンションが高くて読んでて困惑するものが9割だ。

まあ、判別しやすいだけ便利だと思いつつながら仕分けを続けていたら、気になる封筒を見つけた。

シールやラメ入りペンで封筒を目立たせるのは基本的に両面、片面なら宛名の方を装飾したものでわかりだが、その手紙は何故か宛名の方はそっけなく黒のボールペンで「鬼サイボーグ様」とヒーロー協会の住所だけで、裏面の差出人の方をやたらと装飾していた。

これだけなら「ナルシストなのか？」で終わるが、その差出人の名前は本名ではなかった。

偽名でもなかった。

ただ、自分が何者かをそこに書いており、それだけでどうしてこちら側を目立たせたのかを理解した。

俺が乱暴にその手紙の封を開けると、やはり封筒の派手さとは異なり中身の便せんは一枚きりで内容も短い。

シンプルな要件と、自分の連絡先、そして本名らしき名前だけが書かれていた。

深夜だったが俺は即座にこのに書かれたメアドに、『こちらも訊きたいことがある。近日中に直接会って話せないか?』と送った。

さすがに自分のケータイやPCのメアドを知られるのは危険だと

判断し、フリーのメアドを使ったが。

ここに書かれているのが事実だと、本人が送ったものだという保証はないのだから、このくらいの警戒はしておくべきだと判断した。

夜中にも拘らず、5分足らずで返信があった。とにかく目立つように、中身を見てもらえるようにと努力しただけあって、向こうも手紙を送ってから連絡をずっと待っていたのだろう。

そのまま俺と相手は明日の昼前に乙市の適当な場所で会う約束を取り付けて、とりあえずやり取りを終了させる。

俺はベッドに腰掛け、もう一度便箋に目を落として思い出す。

2日前、いや既に3日前になっているか。

あの日に会ってしまった、エヒメさんのトラウマそのものである連中を思い出す。

『ヒメちゃんについて話したいことがあります。どうか連絡をください』

便せんに書かれていた用件はこれのみ。

封筒に書かれていた差出人の名前は、「ヒメちゃんの幼馴染」

便せんに締めくくりに書かれていた本名らしき名前は、「ミラー  
ジユ」

脳裏によぎったのは、「ミラーは黙ってなさい」と叱責された、唯一エヒメさんの中傷も罵倒もせず、「待って」と呼び止めた女だった。

## ミラーージュの話

「ご、こんにちはー。遅れてごめんなさい!」

指定した公園のベンチで座っていたら、指定時間から30分ほど遅れてやってきた女は、3日前に出会った時の記憶通り、「ミラ」と呼ばれていた女だった。

……俺は最初、あのヘラという女の集団は3人組だと思っていた。たぶん怪人に襲われかけていた時も傍にいただろうが、こいつのみあの3人とは雰囲気の違いすぎてよく覚えていない。

友人同士ではなく、たまたま傍にいた他人としておそらく認識していた。

それぐらいに、地味で特徴がない。

服装はあの3人と似たような落ち着いて上品な格好だが、全身に相応な手間隙をかけて磨き上げて美貌を維持してであろうあの3人とは違い、この女は「自分自身」という素材に何の手入れもしていない。

ややふくよかな体型に分厚い眼鏡、化粧つ気がない顔、伸ばしっぱなしの髪という、清潔感はあるが身なりにさほど気を使っているようには見えない。言葉が悪いのは百も承知だが、表面だけを取り繕った田舎者が、一番このミラーージュという女の印象を表しているだろう。

まあ、それはどうでもいい話だ。とりあえず、記憶通りの本人がやってきたことに俺は少し安堵する。

エヒメさんの幼馴染と名乗るこいつのフリをして、あのヘラという女かその腰巾着が手紙を送ってきたのかと警戒していたが、それは杞憂だったようだ。

そうだとしても、ここにやってきたのなら俺に手加減できる自信がないことを除けば好都合だった。

「ごめんなさい! バスがなかなか来なくて……この辺もよくわからなくて道に……」

「かまわん。急にこちらから指定して決めた時間と場所だ。気にしてない」

分厚いメガネをずり落としそうならいオロオロとうろたえて、言い訳を口にするミラージュに遅刻の件は気にしていないと伝えれば、言い訳をするのはやめたがまだどこか怯えているような、卑屈な目で媚びるような愛想笑いを顔に貼りつけた。

正直、初めに見た時に感じた第一印象通り、会話どころか見ているだけでも苛立つ苦手なタイプだとこの対応で確信する。

あのヘラという女は忌々しい怨敵でしかなく、奴の第一印象もさほどいいものではなかったが、それでもあの一挙一動が計算されつくした優雅で上品な所作の印象は悪くなく、女性らしさを強調しながら弱々しさも幼さも全く感じさせない、誰よりも何よりも堂々とした貫禄には、素直に感服した。

そんな気に入らなくとも認めざる得ない部分があるやつとは違い、目の前のこの女に関してははつきり言って、エヒメさんを非難していなかったという点以外に、俺には評価できる部分がない。

というか、評価も実はしていない。あの中ではまだマシだと思っているだけだ。

容姿そのものはごく平凡で決して悪い訳ではなく、下着同然の格好と仮面のように厚塗りした化粧の女よりはよほど俺にとって好印象なくらいなので、そこを奴らやエヒメさんと比べて非難する気はない。

ただ、清楚だとか落ち着いているなどと好意的に表しても、陰陽で答えるのなら間違いなく陰側の容姿に性格も陰側なせいかな、悪い意味でそれらが相乗効果をもたらして、言葉の一言一言、動作の一つ一つがどうしても良い印象を与えない。

どこまでも卑屈で弱く、エヒメさんのように諦めているなりに何とかしよう、何かを成そうという気概もなく、何もしないけど助けてほしいと言ってるようで、庇護欲よりもただ苛立ちだけが湧き上がる。

完全に偏見であることは理解しているが、そんな印象がどうしても離れず、俺は未だにまだ謝った方がいいのか、ベンチに座った方がいいのかを迷ってオロオロしている女に、座るように促した。

話をするのだから、喫茶店かどこかに入った方が良かったのかもし

れないが、こいつと長話をする気はどうしても起きず、少しでも手つ取り早く終わらせるために場所移動はしない。

ミラージュが隣に座ってすぐに、話を切り出した。

「……3年前、エヒメさんに何があつたんだ？」

俺がこの女に聞きたいことは、この一つだけだ。

\* \* \*

ミラージュは自分の手を握ったり離したりを繰り返しながら、告解室で懺悔でもするように弱々しく話し始める。

「……何が、始まりなんでしょね？」

元々、ヒメちゃんとヘラちゃんはすごく仲のいい、親友って言うていくくらいの友達だったんですよ」

「親友？」

その言葉のあまりの空々しさに、思わずオウム返ししてしまった。

ミラージュは俺の言葉に、困ったような苦笑というにはやはりどこか卑屈な笑みを浮かべる。

「……この間のを見たら、鬼サイボーグさんが信じられないのは無理ないでしょうけど、ヒメちゃんとヘラちゃんは中等部で同じクラスになってからすぐに仲良くなって、半年もたたないうちに私よりも、ヘラちゃんの幼馴染のルビちゃんやベラちゃんよりも、二人の方が仲良くていつも一緒にいるくらいでした」

……ヘラとエヒメさんが友人になったきっかけを聞いて、泣きたくなかった。

俺が泣くようなことじゃない、お門違いなのはわかっているが、あまりにも皮肉だ。

エヒメさんがあんなにも綺麗に笑って「お友達が出来ました」と報告してくれた、金属バットの妹との出会いと同じ、折鶴だった。

きっかけは入学してすぐに担任が事故か何かで入院してしまい、生徒が一人何羽とノルマを決めて、千羽鶴を折った事だった。

「ヘラちゃん、名前の通り女神みたいに美人さんで何でも出来る人なんです。……性格も、名前の元ネタの女神みたいにきついけど。

でも、手先は不器用らしくて折り紙とかお裁縫とか料理とか、そう

いうのは苦手だったんです。すっごいお金持ちだから、裁縫や料理は自分でやることじゃなかったからかもしれないけど。

それで、上手く鶴が折れないけどプライドが高いから『教えて』とも言えないし、ヘラちゃんは幼馴染のルビちゃんやベラちゃんもどこか遠慮してるくらい、家柄も資産も雲の上の人だから『教えてあげろ』って言うのもあれだし……って皆思ってたんですけど、ヒメちゃんだけが普通に話しかけたんですよ。

たぶんそれが、二人が仲良くなったきっかけです」

その光景は、目に浮かぶ。

先生と同じように家柄だの階級だの相手に付属するものに興味がなく、困っている人間がいれば助けることが当然だと思っっているあの人なら、教師からも一線を引かれている女王相手でもごく普通に話しかけるだろう。

「どうしたの？ 大丈夫？」と。

そして、上手く折れていない、破れていたり皺だらけの折り鶴を見ても笑わず、見下さず、憐れまず、「こうしたら綺麗に折れるよ」と教えて、上手く折れたのを見て「うん、可愛い」と言っただけで微笑む姿が、あまりに鮮明に浮かぶ。

微笑ましくて穏やかで、だからこそ今となってはどうしようもなく悲しい光景だ。

「……けど、今思えばその頃からヘラちゃんはヒメちゃんが気に入らなかつたのかもしれない。」

ヒメちゃんがヘラちゃんよりすごい所は、初めのうちはそういう手先の器用さくらいだったんですけど、元々ヒメちゃんはほとんど練習とか勉強もしないで何でもできる子だったから、どんどんヘラちゃんの成績とかに追いついて、ヘラちゃんはしっかりして真面目だけどきつい所があるから嫌ってる人も少なくなくて、ヒメちゃんはよく人に気を遣ってくれる人だから、学級委員とか生徒会長にはヘラちゃんよりヒメちゃんが良いなって言う子がどんどん増えていったんです。

……ヘラちゃんは、自分の立場がヒメちゃんに奪われるって思ったのかもしれない」

ミラージュの言葉が事実だとしたら、エヒメさんはどうしようもなく救われない。

彼女の善意も友情も初めから一方通行だったという事実は、確かに「自分は誰にも愛されない」という絶望に縛られるのも無理はない。

「だから、……あんなことをしたのかな？」

「あんなこと？」

俺に語ると言うより独り言のように音量を落として呟いた言葉だったが、俺の耳というより集音機能はしつかりその呟きを鮮明に拾い取り、訊き返す。

ミラージュは目を逸らして指で毛先をいじりながら、言い訳がましく「証拠はないんです。ただ、今思えばそうかもっていう私の想像なんでしょうけど……」と前置きして答えた。

「えつと……中等部の2年の最初の頃だったと思うんですけど、ヘラちゃんのベッドのマットや布団、枕とかに大量の縫い針が刺しこまれてたつて嫌がらせがあつたんです。幸い、針が何本か表面から飛び出てたから、横になる前にすぐに気付いて怪我はしなかつたんですけど。」

……その縫い針は、ヒメちゃんのものだったんです。ヒメちゃん、趣味が物作りだし、うちの学校はミツシヨン系で、教会系列の孤児院とかに寄付するためのバザーをよく開催するんです。その商品づくりのエースだったから、いろんな種類の針をいっぱい持ってたし、折れたり曲がったりした針はまとめて捨てるつもりで、使わない貯金箱を専用のゴミ箱にしてて、……その針のストックと捨てる予定だった針が盗まれて使われて、……ヒメちゃんが犯人扱いされちゃったんです」

ミラージュの話を聞いて、あまりのバカバカしさに一瞬言葉を失った。

「なんだそれは？ その学校にはバカしかいないのか？ エヒメさんのものだからと言って、だから彼女が犯人なんて短絡的にもほどがあるだろうが！」

「も、もちろん、ヒメちゃんのものだったからっていうのは証拠にはな



らないから、結局犯人は不明で終わってますよ！ 本当に犯人扱いなら、ヒメちゃんはこの時点で退学にされてます!!」

俺がつい苛立ちのまま声を荒げると、ミラージユは怯えたように早口で補足を加える。

「……つまり、公的にはエヒメさんは私物を盗まれて嫌がらせに使われた被害者だが、ヘラとその取り巻きにはそう思われなかったという事か？」

「……………はい」

弱々しく頷き、ミラージユは続きを語る。

その続きは、予想も想像も出来ていた。

それでも、俺のコアの熱量が荒れ狂うほどに胸糞の悪い話だった。嫌がらせがあつてすぐにヘラはエヒメさんに対して掌を返して、友人どころかクラスメイトとしても扱わなくなった。

普段はエヒメさんが話しかけても無視して、自分の雑用をやらせる時はエヒメさんが他に何かをしてても呼び出し、押し付ける。

エヒメさんは自分の私物が嫌がらせに使われたことに必要のない罪悪感を懐いていたのか、ヘラの理不尽な要求に応え続けた。

その扱いが被害者でも何でもない他の連中にも伝播して、エヒメさんのスクールカーストが最下位に貶められるには一月もいらなかったらしい。

「元々、自分の家柄とか家の資産とかで上下関係を作っちゃうような環境でしたから、ヒメちゃんはどんなに成績が良くても『学費免除してもらわないとうちに通えない貧乏人』扱いだったんです。私も、成金ってバカにされました」

初めからエヒメさん本人ではどうしようもないことで判断し、見下していた連中は、女王の庇護をなくした瞬間、彼女が持つ全てを奪い、もぎ取り、釜取り取った。

課題や雑務を押し付け、私物を盗み、壊し、外出許可はもちろん、長期休暇に実家へ帰る届け出も握りつぶされて、彼女の功績は誰かが奪い取り、誰かが犯した罪は彼女に押し付けて、そうやってあの人から自信も尊厳も、誰かに助けを求める意思も、幸せになりたいという気

持ちすらも奪い、何を言われてもされても自分が悪いと思い込み、謝る以外できなくした。

……そして――

「……3年前のあの日は、ヘラちゃんの誕生日だったんです」

まるで小公女のように、あの女……ヘラの誕生日はもはや学園の大イベントだった。

寮の食堂を飾り付け、奴の親や親戚、学園のOGや後輩、クラスメイトから贈られたプレゼントの山が積み上げられた、夕食時は子供のお遊びではなく本物のパーティが行われるのが毎年恒例だった。

……その準備をエヒメさん一人に押し付けて、準備した本人は自室に一人閉じ込めるのも、当たり前になつていた。

「……パーティの途中で、ヘラちゃんが自分のおばあさんからのプレゼントが届いてないことに気付いたんです。

ヘラちゃん、ヒメちゃんが嫌がらせで盗んだんだって決めつけて、ヒメちゃんの所に文句を言いに行つたんです。……あの頃から不思議だつたんですけど、ヘラちゃんは何故カルビちゃんもベラちゃんも連れず、一人で行く、一人でいいって言い張つたんです。

それで……しばらくしたら言い争うと言うか、ヘラちゃんがすごい声でヒメちゃんを責めたてたからビツクリして皆で見に行つたら、ヘラちゃんがボロボロに破れて汚されたマフラーを持って、ヒメちゃんを指さして叫んだんです。

『おばあさまがくれたプレゼントを、こいつが台無しにした!!』って。

……その直後です。ヒメちゃんが、『ごめんなさい』って言って、5階の部屋の窓から飛び降りたのは」

項垂れ、泣けもしないのに涙を隠すように頭に手をやって、それでも確かめるために声を、言葉を絞り出す。

「……自作……自演か。……プレゼントを破損させたのも……針も……」

ミラージュが呟いた「あんなこと」の推測を口にすると、呟いた本人は両手で髪をいじりながら、同じように俯いて答える。

「………はい。……どつちも証拠はやっぱりないけど……、誰も連

れずに一人でヒメちゃんのところに行つたのは怪しいですし、針も……うちの学校、友達同士でも自分達の寮室以外は入っちゃダメなんです。盗難とかのトラブルになるから、一緒に宿題とかお話とかしたければ、自由時間に談話室に行かないとダメなんです。

で、そういうルール違反を寮母や生活指導の先生に告げ口したら内申が上がるから、皆が見張りあつてたりするから、意外とこのルールは守られてるし、誰にも見つからずに他人の部屋を出入りするのはかなり難しいです。

……でも、ヘラちゃんなら……」

「どこで何をしようが、告げ口など出来る奴がいない……ということか」

針を盗みに入った時点では、少なくとも表向きの関係は友人なのだから、別に誰も不思議には思わないだろう。

そして、学園の女王が規則違反をしたと告げ口し、微々たる点数稼ぎをして奴を敵に回すより、見て見ぬフリの方が得なのは明白。

……どう考えても不自然な嫌がらせが発生したのなら、なおの事だ。

歯を模した強化セラミックを割らんばかりに噛みしめる。

その頃は知り合つてないどころか、まだサイボーグにすらなっていないと言うのに、何もしてやれなかった自分が悔しくてたまらない。

彼女は気付いているだろうか？

おそらく、気付いているだろう。少なくとも、針の件以上にお粗末なプレゼントの濡れ衣の時点で針もヘラの自作自演と気付き、その上での人は謝って、身を投げた。

そんなことをするほど、友人にそんなことをさせてしまうほど、自分が嫌いで、自分が悪かったと、エヒメさんは自分を責めて、飛び降りた。

何もかも奪われた彼女に残されたものは、最愛の兄以外に残されたものは、自分がわからないという違和感と、背負う必要のない罪悪感だけだった。

そして今も、その贖罪を続けている。

あまりに痛々しくて、それこそ無意味な贖罪を。

……覚悟はできていたつもりだった。知ったからと言って、あの人に何かできることがある訳ではないことも、わかっていたつもりだった。

だが、想像以上の理不尽と不条理な過去が俺の無力感を苛み、憎悪を過熱させる。

そこまで甚振り、蹴り、傷つけ、奪い、壊して、そして殺し尽くしておいて、再会すればまた殺すのか。

あの人の心を未だに何度も何度も殺し続けるあの女が、憎くて憎くて仕方がなかった。

……それでも、この憎しみは何も生まない。

エヒメさんの幸福には繋がらないと俺は自分に言い聞かせ、ベンチから立ち上がってミラージュに礼を言う。

「……礼を言う。時間を取らせて悪かった」

それだけを伝えて、帰ろうとした。

エヒメさんの顔が見たかった。理由は全くわからないが、以前と同じように穏やかに楽しそうに笑ってくれる彼女を、どうしても見たかった。

彼女は生きていることを、壊されても、奪われても、取り戻して新しく手に入れたものもあることを確かめて、安心したかった。

「あ、あの、ま、待ってください」

俺はただその一心で帰路につこうとしたのを、ミラージュは服の裾を掴んで止める。

「あの、私の話も、お願いも聞いてください!!」

……ああ、そうだった。こいつもエヒメさんについて話したいことがあると言って、そもそも俺に手紙を送ってきたことを今更思ひ出す。

さすがに自分の要求のみを押し通して、相手から何も聞かずに帰るのは凶々しく無礼だったと反省し、「すまない」と一言謝罪して俺はミラージュの「話」、「お願い」とやらを聞いた。

ミラージュはもじもじと体をくねらせて、上目遣いで俺に言った。

「……あの、……お願いします！ ヒメちゃんに伝えて欲しいんです！  
！ごめんなさいって！」

その言葉に、思わず俺は即座に答えてしまった。

「バカか、貴様は」

## 加害者は誰だ

ミラージュは俺を見上げる。

まずは何を言われたかわからないと言いたげな顔をして、そして信じられないという驚愕に変化したかと思ったら、卑屈そうな目で媚びるように笑いながら、聞き間違い、何かの間違いを期待して、こいつは「え？」とだけ言った。

「伝えてどうするんだ？　それで、貴様は自分の『罪』が消えると思っ  
ているのか？」

その期待を俺は潰す。

完膚なきまでに、潰さねばならない。

こいつが許されたという勘違いを起ささないように、潰しておくかねばならない。

「貴様は本気で、エヒメさんに悪いと思ってるわけじゃない。ただ、エヒメさんを見捨てた罪悪感から逃げて、忘れる為だけに、『許された』  
と思い込むために、俺に伝言を頼んでるんだろう？」

……ふざけるな。俺からしたら、貴様もヘラやその取り巻きと同罪だ」

「そんな！　私はそんなつもりじゃ……」

「何故、最初にエヒメさんについて何も訊かなかった？」

俺の言葉を否定しようと、言い訳を口にしようとしたのを遮って、尋ねる。

ミラージュは言葉に詰まり、酸欠の金魚のように口をハクハクと動かすだけで何も答えられなかった。

「貴様は、エヒメさんについて話したいことがあると手紙に書いていたくせに、俺が先に質問をすることを許した。そして、何も訊かずに俺の問いに答え、話が終わった後も言いたいことはエヒメさんが今どうしているか、まだ怯えているのか、また自殺未遂なんて真似をしてないかという質問ではなく、代わりに謝ってくれだったな。」

……本気であの人に罪悪感を抱いているのなら、歩くことも出来ず過呼吸手前だったエヒメさんが、今は大丈夫なのかを心配するはずだ

ろうが。

そもそも貴様は3日前、何故彼女を引き留めた？ あんなに怯えていたのが見えていなかったのか？ あの人を本気で案じていたのなら、逃がしてやろうとは思わなかったのか？ そして、引き留めておいて何故、何も言わなかった？ 何か言いたいことがあって引き留めたんじゃないのか？ 何故、ヘラに叱責されて黙り込み、奴に言わせたい放題で何もしなかった？」

ベンチの前で俺は立ったままミラージュを見下ろし、矢継ぎ早に問い詰める。

ミラージュは答えない。答えず、引きつった笑みを張り付けて、目を逸らすだけだ。

「……そもそも、高等部を卒業して何故、貴様はまだヘラについて回ってるんだ？ 在学中はどうしても付き合いが切れないのは仕方がないが、卒業という絶好の縁を切る機会があっただろうが。」

貴様は今、短大生か？ 付属の短大に進学したのか？ 就職なり他の学校に進学するなり、奴から離れようとは思わなかったのか？ それとも、どうしてもその学校で学びたいことがあったのか？

幼馴染を生きながらに殺し尽くした女の傍で、媚びへつらって腰巾着になってまでして、したいことがあるのか!？」

目の前の女は、何も答えない。

その沈黙こそが饒舌な返答だった。

「……貴様は、エヒメさんに何も言わなかった。誹謗中傷をせず、見下して甚振りはしなかった。……が、彼女を助けようともせず、ただ見ていた。」

「……3年前も、そのずっと前からそうだったんじゃないか？」

「……わ、私の家はあの学校じゃ全然、たいしたことないから、私だってバカにされてたし……私じゃどうしようも……」

やっと言葉を発したかと思ったら、自分が何もしなかった言い訳。

何もしなかったのではなく、何もできなかったと言い張る保身を俺は鼻で笑う。

「……バカにされてた、か。」

貴様がバカにされていた時、エヒメさんは何をしていた？ 貴様のように、バカにする連中の後ろで媚びへつらって何も言わず目をそらしていたのか？」

ミラージュは再び、貝のように口を閉ざす。

するわけないよな。あの人がそうやって長いものに巻かれて、強い者の威を借りて後ろに隠れる生き方ができていたのなら、そもそもこの現在は存在しない。

「エヒメさんは貴様を庇ったのだろうか？ 助けてくれたのだろうか？」

……貴様は、自分を助けてくれた人に何をした？」

俯いて目を合わせようとせず、何も言わない、石像のようにただじっとしている女に、俺は無意味だとわかっていながら問いかける。

……そうやって、自分の都合の悪いこと、見たくないこと、聞きたくないこと、言いたくないことは、全部見ないで聞かないふりをして、ただひたすらに黙ってやり過ごしてきたんだろう？

自分は何もしていないから何も悪くないと、保身を言いつくろつて、強いもの背に隠れて、おこぼれをもらって、生きてきたんだろう？

「貴様がどう生きようが、俺には興味がないから別にいいんだがな、あの人に何もしないで見捨てた分際で、これ以上あの人に甘えるな」

謝りたいから会わせてくれたの、謝罪の手紙を渡して欲しいでも、彼女の傷の深さを考えていない身勝手な自己満足だが、まだ自分で行動に移しているだけマシだ。

こいつは俺を使って一方的に言い捨てて、自分が背負う罪悪感を今度はエヒメさんに、「謝られたのに許せない」という罪悪感として押し付けようとしただけだ。

「貴様が自分自身にどう言い訳してもな、貴様は加害者なんだ。そして、どんなに謝つても償つても、それは変わらない。貴様は永遠に、死んでもエヒメさんを傷つけた、生きながらに殺した、決して許されない、何をしても責任なんか取れない加害者だ。

過去を話してくれたことには感謝している。が、それくらいで帳消しになるようなことじゃない。貴様のしたこと……いや、しなかつた



ことはな」

エヒメさんがアマイマスクに語った、彼女が自分自身に科した生き方を口にして、責め立て、そして俺は背を向けた。

俺がこんなことを言う資格がないのはわかっている。自分がただ八つ当たりをしているだけだというのは、理解している。

それでも、たとえ聞いていなくても、どうせ今まで通り目をそらして逃げるとしても、少なくとも今だけは向き合わせておきたかった。

意味があつたのかなかったのかわからない、ただ八つ当たりしても何も晴れない消化不良な思いだけを抱えて歩を進めると、公園の出口に差し掛かったあたりで「待って」と、もう一度呼び止められた。

何も答えず、足のみを止める。まだ何か言い訳をする気か、どこまでも自分のしたこと、しなかったこと、罪から逃げるつもりかと思っていたが、それは間違いだった。

「……3日前、ヒメちゃんがいなくなった後にヘラちゃんと言ってたんです。スマホを持って、『お仕置きしなくちゃ』って呟いてたんです」

それは罪滅ぼしのつもりか、それともやはり自分は悪くない、ヘラの方がもつと悪いと言いたいだけか、それはもはやどうでもいい。

「……どういう意味だ、それは？」

振り返り、灼熱する憎悪を押しえつけて尋ねると、ミラージュはベンチに座ったまま、俯き膝の上で両手を固く握り、全身を震わせている。

俺に怯えているのか、それともここにはいない女王に、ヘラの幻影に怯えているのかはわからない。

怯えつつも、奴は答えた。

「………わかりません。ルビちゃんやベラちゃんは、ニヤニヤしてそうよね、そうしましょうとか言っていましたけど、私には何も教えてくれませんでした。」

……でも、そのあとしばらく3人でスマホをいじってましたから……多分ツイッターか何かを……」

「アカウントは知っているのか？」

もう「スマホ」という単語が出た時点で、想像がついた。

セリフを遮って尋ねた問いに、ミラージユは無言で横に首を振った。

わかっていたが、こいつはやはりあいつらの友人ではなく、おそらくは下僕として扱っていたエヒメさんの身代わり、奴らにとって自分たちを引き立て、自分たちが優れていると思ひ込むための見下し要因でしかないのだろう。

許すつもりは毛頭ないが、この女のコバンザメのようなみじめな生き方には憐みを覚えてしまい、それ以上の追及は出来なかった。

「そうか。……情報提供は、ありがたかった」

それだけを言って、俺はまた歩き出す。

ヒーローどころか人としてマナー違反なのはわかっていたが、ケータイを歩きながら操作する。

エヒメさんの本名で、検索する。

\* \* \*

本業は機械工学系だが、俺の知り合いの中でネット関連に一番明るい人物が、朗らかに了承を口にする。

「いいですよ。でも、鬼サイボーグさんなら言わなくてもわかっていると思いますけど、ダイレクトに顔写真や本名を晒しているのならともかく、ちよつとぼかして書かれていたら、そのいじめっ子たちに社会的制裁は難しいですよ」

「わかっている。むしろ、社会的制裁が可能なほどに情報流出されている方が恐ろしい」

「それもそうですね。まあ、そこは既にサイボーグさんが検索して調べたんでしょ？ その再会しちゃった時に写真を撮られたとかもでない限り、そいつらがぶちまけられるおねえさんの個人情報って3年以上前のものですし、本名が晒されていないのなら、あまり意味も効果もないと思いますよ」

電話口の童帝が、子供に言い聞かせるような言い草で、俺を落ち着かせようとするのが余計に俺を苛立たせるが、言っていることは正論なので、俺は一息ついて自分を落ち着かせる。

……誰にも、先生にもこれ以上負担をかけたくなかったので、誰にも頼らないと決めていたのだが、ミラージユの言葉、ヘラがしたであろうことがそんな俺の自己満足では解決できないことを悟らせ、俺は童帝に連絡を取った。

このガキはふざける時は殴りたくなるくらいに年相応かつ盛大にふざけるが、腐つても若干10歳でS級ヒーローに認定された天才児だ。真面目にやるべき時はちゃんと真面目にこなして、暴走もしないので信頼は出来る。

何より腹立つことは抑えられないが、こいつも相当エヒメさんを好いて懐いているので、ほとんどエヒメさんの過去について説明などしなかったにも関わらず、事情を察して協力を即答で応じてくれた。

「それも理解はしている。だがネットで一番厄介なのは、火のない所にも煙を容易に立たせることが出来ることだ」

「そうですね。ないことないこと書かれたら、悪魔の証明でどうしようもなくなりますもんね。」

でも、僕だつて神様じゃないんですから、ほぼノーヒントのこの状態で、そのヘラつていう人のSNSを見つけるのは至難だつてことは理解しておいてくださいよ」

「ああ。見つからなくても責める気などない。恩に着る」

「別に着なくていいですから、見つけたらおねえさんに僕がどれだけ頑張つて、どれだけすごいことをしたのかをきちんと伝えておいてください」

「切るぞ」

調子に乗り始めたので、返事を待たずに通話を切った。

しかし、実際に童帝に任せたことは砂漠から一粒の砂金を見つけるようなものだ。至難どころか、見つけたら奇跡だろう。

……とんでもない無茶を頼んだのはわかっている。

そして童帝が言った通り、俺が検索してもエヒメさんと同名の他人しか引つかからなかったのなら、ここまで心配することではないのはわかっている。

3日前に写真を撮られる際は与えていない、3年ぶりの再会ならエ

ヒメさんの近況や現住所など知るはずがない。

少なくとも即座に本人が特定されるような情報は、ぶちまけたくても奴らは持つておらず、本名も写真も晒していないのなら、どんな虚偽を書かれても本人特定がさらに困難になるだけで意味はない。

俺の心配は杞憂であることは、わかっている。

……わかっているが、嫌な予感が止まらない。

ないはずの神経に虫が這うような悪寒が全力疾走し、コアが心臓のように激しい動悸の錯覚を起こす。

頭の中で何かがチリチリとくすぶり続ける。

何かを見逃しているような、どこか違和感を覚えるが、それが何なのか、俺の感じている違和感はどこなのかがわからず、ただもやもやとした不安としてまとわりつく。

何かをしなければ、行動に移さなければ、見逃しているものに気付かなければ手遅れになりそうな気がして仕方がない。

「ジエノスさん？」

「おーい、ジエノス。何してんだ？」

説明不可能な不安に苛まれてひたすら速足で歩いていたら、声をかけられた。

「エヒメさん？ 先生？」

「お前何、おつかない顔して歩いてんだよ？」

「ジエノスさん、何かあったんですか？」

顔を上げると呆れたような顔で先生と、少し驚き心配そうなエヒメさんが並んで立っており、辺りを見渡してようやくここは、ゴーストタウン付近のスーパー近くだということに気が付いた。

「……いえ、何でもありません。それより、お二人は買い物ですか？」

「はい。今日はお一人様一つ限りのものが多いから」

「ついでだ。お前も来いよ」

ミラージュと会って話を聞きに行っていたことは先生にも話していなかったので、俺は何でもないと誤魔化し、先生に言われた通りついてゆく。

エヒメさんはいつものように、奴らと再会してしまう前と同じよう

に「付き合わせてしまつてごめんなさい」と、困つたように微笑む。そんな変わらぬ光景を、日常を体感しても、まわりつく不安は変わらない。

「……いえ。先生やエヒメさんのお役に立てるのなら、光栄です」だからせめて、出来ることをする。想像できる限りの最悪を想像し、対策を取る。

エヒメさんの個人情報がぶちまけられていないは確かめた。

俺には手出しできない領域まで精通している人物に、さらに念入りに調べてもらうように頼んだ。

エヒメさんの隣には先生がいる。

エヒメさんは、強がりなんかじゃなくて本当に笑えている。

大丈夫だと、俺は自分に言い聞かせる。

不安が杞憂でなくても、それは必ず打ち破れると信じて、俺も先生と同じくエヒメさんの隣を歩く。

……理不尽は、希望も対策も覚悟も何もかもを無意味なほど唐突に訪れ、何の予兆も順序も理屈もなく圧倒的に壊し尽くすからこそ「理不尽」であるという事を、俺は知らなかった。

俺は「敵」がエヒメさんに対して懐いているものは、「悪意」だと思ひ違いをしていた。

それはあまりにも幼稚で身勝手に、誰にも理解などできず、理解すべきではない「狂気」であることを、誰も知らなかった。

## 始まりの独占欲

「……なんか、ごめんなさいジエノスさん。お兄ちゃんがバカなことばっかして」

「いえ。どんなことでもお役にたてるのでしたら光栄です」

ジエノスさんはいつもの無表情でそう言ってくれるけど、私は顔から火が出そうだった。

お兄ちゃん……いくら特売のセール品が取られそうだったからって、「イケメンで評判の鬼サイボーグがここにいるぞー！」って叫んで、同じくセール品狙いの主婦にジエノスさんを囲にすんな！

ジエノスさん、めっちゃポカンとしてたよ!!

そんなことまでしてセール品の白菜をゲットしたお兄ちゃんはというと、今日で最終日の3000円以上で1回くじが引ける福引で、買うものはもう全部買ったけどあと数百円が足りなくて、何か他に買いたれてるものはないか、ストックしておいた方がいいものはないかを探しに行つて、もう恥ずかしいから私はジエノスさんを連れてスーパーの外で待つことにした。

たかが福引の為に血眼になってスーパーをうろつかないでよ、お兄ちゃん……。

またヒーローなのに不審者として通報されても、もう知らん。

そうやってお兄ちゃんに八つ当たりなんだか正当な怒りなんだか、自分でもよくわからない事を考えて、ジエノスさんと二人きりだという事に意識を向けられないようにしてみるけど、無理だった。

前よりはだいたいぶマシになったけど、やっぱり緊張する！ 何を話したらいいかわかんない！

私はこういう時、自覚する前ならどんな会話をこの人としてたのかを思い返そうとしていたら、ジエノスさんの方が声をかけてきた。

「……あの、エヒメさん。大丈夫ですか？」

「へ？ な、何がですか？」

そんなに私はまた緊張のあまりにキョドっていたのかな？ と不安になったけど、ジエノスさんは心配そうに、でも言いにくそうに迷

いながら言葉を続ける。

「いえ……あの……最近、外に出たがらなかったの……。あの、もう帰りたいのでしたら俺から先生に伝えておきますので、……気を遣わないでください」

ジェノスさんの言葉に申し訳ないやら、でも心配してくれたことが嬉しいやらで、ちよつとどういふ顔をしたらわからなくなる。

気を遣つてるのはこの人の方だ。3日前のことを口には出さずに、それでも私がまた彼女たちと再会してしまうことを恐れて、怯えていたことを知っているから、だから「先に帰つてもいい」なんて言つてくれた。

「……ジェノスさん、ありがとうございます」

その気遣いも心配も、すごく嬉しい。だから、まず初めに私は感謝を伝える。

そして、再び逃げないと誓つたあの日から決めていたことを、しなくちゃいけないことを口にする。

この人にこの事を伝える事も、私があの日を決めた「しなくちゃいけないこと」の一つだから。

「でも、私は少し……期待をしているんです。また彼女に………ヘラに会うことを」

私の言葉に、ジェノスさんは信じられないと言わんばかりに目を剥く。

「!? エヒメさんっ……」

「……私、近い内に彼女に会いに行こうと思うんです。彼女に会わなければ、それこそ私は3年前から、これからもずっと変わらないことを実感しましたから。」

……向き合わなくちゃいけない、逃げちゃいけない事なんです。これだけは、どうしても」

何かを言いかけたジェノスさんの言葉を遮つて、私は決意を口にする。

買い物袋を握る自分の手が震えているのはわかつてる。こんなことを口にしても、まだ覚悟は全然決められていない、怯えている

のが丸わかりだ。

それでも、そんな情けない私を見てもジェノスさんは、「やめろ」とも「無理だ」とも言わなかった。

今にも泣きそうな目で、歯を食いしばって出かかった言葉を堪えて、「……そう、ですか」とこの人は言った。

私を思って、私が傷つくのを嫌って、止めようとしてくれた。

けれど、このままではいけないことをこの人もわかってきているからこそ、私の決意が鈍らないように、言わないでいてくれたんだろう。

……本当に、優しい人。

だから、私は甘えてしまう。この人の、「杖になる」と言ってくれた言葉に。

「……だから……あの……ごめんなさい、ジェノスさん。……無理には言いません。できればいいんです。本当に、ジェノスさんの都合が合えばいいんです。っていうか、嫌なら遠慮せずに断ってください!」

「え? は、はい! ……え? な、何をでしょうか?」

自分で自分に断られても凹まないように言い聞かせるための念押ししていたら、肝心の頼みごとを言わないまま話を終わらせてしまい、ジェノスさんを困惑させてしまった。アホだ、私は。

羞恥で顔が熱くなり、何かジェノスさんの心配とは別の意味で消えてしまいたくなるけど、何とか気を取り直して私はジェノスさんに頼む。

「え、えつと……へ、ヘラに会いに行く時……、出来ればジェノスさんも一緒に来てほしいんです。

……また、前みたいになにに情けない姿を見せると思いますし、迷惑をかけると思いますけど……それでも……」

「はっ」

最後まで言い切る前に、はつきりと言われた。

顔を上げるとジェノスさんの表情に困惑はすでになくなって、真っ直ぐに金の瞳が私を見据えて大真面目に、彼は答える。



「はい。ぜひとも、一緒に一緒させてください。……今度こそ貴女を守り抜きますから、どうか俺も連れて行ってください」

これも羞恥と言えば羞恥だけど、またさつきとは別の感情が大きく混ざって、私の顔を真つ赤に染め上げる。

ああ、思い出すな！ 3日前の夢なんて！ 私の事を自分の大切な人と言ってくれたのも、結婚をぜひしたいとか死んでもいいけど死ねないって言ったのは、私の夢！ 願望なんだから、現実のジェノスさんには何にも関係ないんだから、期待するな!!

「？ エヒメさん？」

「!? あ、ありがとうございます……」

真つ赤になって固まる私を、不思議そうかつ心配そうに見られて呼ばれて、何とか金縛りが解除される。

私が声を絞り出してお礼を伝えると、まだ不思議そうだけどとてりあえず心配する必要はないと思ってくれたのか、顔を覗き込むのはやめてくれた。

「いえ、礼を言われるようなことでは……、というより、エヒメさんが俺を頼ってくれるのは嬉しいですし光栄ですが、先生には頼られないのでしようか？」

ジェノスさんは謙遜の途中でお兄ちゃんに私が頼らないことを疑問に持ち、尋ねてきた。

「……お兄ちゃんでも確かに頼りになるんですけど、頼りになりすぎて甘えて、たぶん3日前以上に情けない醜態を見せてしまいそうだから……。」

あ、ジェノスさんが頼りにならないとか思ってるわけじゃないですよ！ 私にとってお兄ちゃんと同じくらい、ジェノスさんは頼りになるすごい人ですから！ ただ、ジェノスさんの前なら私、少しでもカッコよくなるうと意地を張れると言うか、頑張ろうって思えるからジェノスさんが良いんです！

ジェノスさんじゃないと、ダメなんです!!」

その問いにあまり深く考えず正直に答えたけど、ジェノスさんの事を頼りにならないと言ってるように聞こえる言い方だと気付き、慌て

てフォローを入れていたら、「何言ってるんだ、お前？」と後ろからお兄ちゃんが声をかける。

「お兄ちゃん、おかえり。福引はどうだった？」  
「……外れた」

振り返って訊いてみたら、若干遠い目をしたお兄ちゃんが、福引をするためにまだストック有るのに買ったであろうトイレットペーパーと、残念賞の同じくトイレットペーパーを掲げて見せた。

……うん、まあ、……ど、ドンマイ？

「えーと……か、かさばって買うのが面倒だから、3人で買い物の時点で良かったね。腐るものでもないし！」

「無理にフォローせんでいいわ。……っていうか、お前マジでジェノスに何言った？ さつきからフリーズしてんぞこいつ」

「え？ !?! ジェノスさん?! 何か久しぶりに煙出てますよ!!」

言われてさつきからジェノスさんからの反応がないことに気付いて見てみたら、なんか出たらいけなさそうなところから煙を出しながら固まっていた。

懐かしい反応だなこれ！

久々すぎてどうやったたらこれ解凍できたんだっけ？ ってパニックってたたら、まったく私が関係ないことでフリーズは解凍された。

《緊急避難警報、緊急避難警報。Z市にて怪人が発生しました。災害レベル 〃虎〃》

怪人発生の警報が流れ、お兄ちゃんとジェノスさんの顔が真剣になる。

煙は止まって代わりにキュイイイインと高い音がした後、ジェノスさんが生体反応センサーで怪人がどのあたりにいるのかを特定してお兄ちゃんに報告する。

「先生！ 怪人の現在地はここから南西……おそらく駅周辺です!!」  
「わかった。エヒメ、ちょっと行ってくるわ。ジェノス、エヒメを頼む」

お兄ちゃんの買ったものをその場に置いて、駅の方に走って行く背中にも、「いってらっしゃい」と私は声をかける。

私もジェノスさんも、災害レベルが虎なら方が一にもお兄ちゃんが危ないっていうのはないと信じ切っていたので、周囲の人たちが逃げ惑う中、普通にお兄ちゃんがいつも通りすぐにワンパンで片づけて帰ってくるのを待っていた。

私はその時に考えていたのは、「お兄ちゃん、あんまり怪人の返り血を浴びないで終わらせたなら良いな」ぐらいだった。

「駅の方ならそんなに遠くないのに、怪人の姿は見えませんし、何かを壊す音とかも聞こえませんか」

「そうですね。それでも災害レベルが虎なら、小型ながらに厄介なタイプなのでしょう。まあ、先生なら問題は……!?!」

お兄ちゃんが向かって言った方向に目を凝らしながらとジェノスさんが話していたら、急にジェノスさんの顔が険しくなる。

またキュインと高い音がして、金の瞳が小さなレーダーのように変化する。

どうかしました？ と私が訪ねる前に、ジェノスさんは信じられないと言いたげに目を見開いて呟いた。

「……もう一体、怪人が発生してます」  
「!?!」

ジェノスさんの言葉に数秒遅れて、警報がもう一回鳴り響く。今度は録音されたテンプレートな音声じゃなくて、焦りが目に見える肉声。

《緊急避難警報！ 緊急避難警報！ Z市上空にて、巨大怪鳥出現!!

建物から絶対に出ないように！

災害レベルは「鬼」!!》

今度は、ジェノスさんのセンサーに頼らずとも「災害」はどこにいるのかわかった。

鳥のように真っ黒な羽毛に覆われた、遠目から鷹や鷲を思わせる猛禽系の飛行機くらいはある鳥が、よりにもよって駅とは、お兄ちゃんが向かった方向とは真逆の方向から現れ、降り立ち、地面の虫でもついでに街を、建物を破壊している。

怪人と怪鳥が同時出現、しかも怪鳥のレベルが怪人より高く、巨体

なので脅威が良くも悪くもわかりやすい所為で、周囲の人たちのパニックがさらにひどくなる。

最初の警報で駅からこちらに逃げていた人たちが、怪鳥出現でこちらに舞い戻り、たったの数秒あたりが人で埋め尽くされる。

「ジェノスさん！ 私、お兄ちゃんを呼んできましようか!？」

溢れかえった人波に流されないように、はぐれないように私をしつかり抱き寄せてくれているジェノスさんに提案した。

ジェノスさんはお兄ちゃんに言われた私を頼むという言葉と、怪鳥を倒さなくてはいけないという使命感で板ばさみになっていることは分かっていたから、とりあえず思いついたことを口にした。

私の提案にジェノスさんは一瞬迷ったけど、辺りの逃げ惑う人たちやジェノスさんに気づいて「あの鳥を何とかして！」と助けを求める声で、今すべきことは、現状でベストな手段はジェノスさんが怪鳥の方に今すぐ向かい、私はお兄ちゃんをレポートで怪鳥の元まで連れてくることだと判断してくれた。

ただ、この人がごつだ返しの状態では私がちゃんとレポートできるかどうかを心配してくれたのか、人をかき分けて人がいない建物と建物の間、裏路地的な所まで私を連れてきて、彼は私に言い聞かせる。「エヒメさん、無理は絶対にしないでください。先生と怪人が戦闘中という可能性もありますので、出現場所は先生のすぐそばではなく、出来れば近場の屋内で、細心の注意を払ってください」

「はい、大丈夫です。約束します」

ジェノスさんからの忠告に頷くと、少しだけ安心したようにジェノスさんは表情を和らげてくれた。

「ありがとうございます。それでは、行ってきます」

彼も私との約束を守って、そのままブースを起動させてビルとビルの間を三角飛びで屋上まで上がって行き、建物を飛び移りながら怪鳥の方まで向かっていった。

ジェノスさんが屋上まで上がっていったのを見送ってすぐに、私もレポートで跳ぶつもりだった。

この時、ジェノスさんからの忠告を破って、何も考えずにただ「お

兄ちゃんの側」とだけ座標指定をしていた方が、結果論としては良かったのかもしれない。

お兄ちゃんがどのあたりかを探ってから、その近場を座標指定するために集中していなかったら……、逃げ場を塞ぐように、路地の入口に人がいることに気づいていれば良かった。

すぐにテレポートをしていれば……「彼女達」の存在に気づいていれば少なくとも……、人は死ななかったのに。

\* \* \*

いきなり背中を殴られて、私はそのまま前のめりで転ぶ。

何が起こったのかが全く理解できず、私は地面に膝と手をついた状態のまま固まった。

背中には痛いけど、痛む範囲と痛みそのものの強さで、その攻撃は拳や蹴りでもなければ、バットののような棒状で攻撃力が高そうなものではない事はわかった。殴られた瞬間、殴った武器そのものの重心や形が変化していたから、おそらくショルダーバックをハンマー投げのようにぶん回したんだろうと、パニックゆえのやたらと無意味な冷静さで推理してしまい、結局私は逃げ出す機会を失う。

「何、いい気になってんのよ。このブス！」

聞き覚えが全くない声で罵倒され、さらに状況が分からなくなつて困惑していたら、髪をつかみあげられて、無理やり顔を上げさせられる。

……私の背後にいたのは、声と同じくまったく見覚えのない女性が三人。

人の顔と名前を覚えるのが苦手だから、私が忘れていただけかとも思ったけど、おそらく正真正銘、私とは面識がない他人だと断言できた。だって3人とも、私と年齢が結構違うから。

というより、この3人は仲間なの？　と思うほど年齢も背格好もバラバラだ。

私の髪をつかみあげているのは、メイクがきつくスカート丈をぎりぎりまで短くした女子高生。

その背後で私を親の仇のような目で、忌々しそうに睨みつけている

のは、髪をきつちり結び上げて、服装も上等そうなスーツのいかにもキャリアアウーマンって感じの人と、イチゴ柄のワンピースに白いレースフリルたっぷりのリボンでツインテールにして、ウサギのぬいぐるみを抱きかかえたいいわゆる甘口リ姿の……どんなに頑張っても30半ばよりは若く見えない人という謎すぎる組み合わせ。

そのあまりの共通点のなさが、自分が今そんな連中に襲われているという現状や自分のトラウマを想起させる状況に対する恐怖を上回って、私を困惑させる。

いや、もう本気であなたたち誰？　むしろ私を誰かと間違っていない？

「……あ、あなたたちは、誰？　誰かと、間違っていないですか？　私は、エヒメっていうものですけど」

髪を掴まれたまま私は訊いてみたけど、女子高生は「名前なんかどうでもいいのよ」と鼻で笑って答える。

その様子からして、向こうも私の名前さえ知らないようだけど、人違いではないらしい。

さらに訳がわかんなくなっただけで、抵抗したらいいのかどうかすらわからなくなっただけでじっとしていたら、キャリアアウーマンみたいな人が一歩前に出て来て私を見下ろして尋ねる。

「あなた、鬼サイボーグの何なの？」

「は？　ジェノスさん？」

いきなりジェノスさんのヒーローネームが出てきて、さらに訳わからなくなっただけで訊き返したら、平手で私の頬をその女は張り飛ばした。

私が殴られても、髪を掴んでる女子高生は手を離さなかつたので、ぶちぶちと勢いで何本か髪が抜けた気配がする。

殴られた私を見て、女子高生はニヤニヤ笑い、甘口リも同じように笑いながら、デコリすぎて重そうなスマホを操作して、キャリアアウーマンはヒステリックに喚く。

「何、本名で呼んでんのよ？　あなたたちと違って私は彼と親しいアピール？　浅ましいのよクソガキがっ!!」

あんななんて認めない！　鬼サイボーグのファンはみんな、あんな

が恋人だなんて認めてないんだから!!」

はあっ!?

キャリアウーマンの発言で、殴られた怒りも恐怖も困惑さえも吹っ飛んだ。

何それどういうこと?!? 心当たりないんですけど?!? ってとつさに叫びそうになったけど、声に出す前にわずかに残っていた冷静な部分があつ込んだ。

あるわ、心当たり。っていうか、心当たりしかないわ。

まったく繋がりが見えなかった3人だけど、おそらくは熱狂的なジエノスさんのファンなんだろう。ファンクラブが存在してるらしいから、そのオフ会かなんかでもしてたのかもしれない。

もしかしたら、Z市でよくジエノスさんを見かける、スーパーむなげ屋でよく買い物してるって情報でもつかんで、この辺でジエノスさんを探していたのかもしれない。ああ、お兄ちゃんがジエノスさんを囮にして騒いでたから、それで見つけたのもあり得る。

とにかく、ジエノスさんのファンであるこの人たちは、私と一緒にいて、親しそうで、しかも警報が流れたら抱き寄せて庇ってくれるジエノスさんを見て、恥ずかしいし全然違つて悲しいくらいだけど盛大な勘違いをして、そして自覚してるけどあまりの釣り合わなさにキレてこの状況か。

訳わかんなかった疑問は氷解したけど、だからと言ってこの状況に納得できるわけなかった。

「……離して」

3人がそれぞれ、私のことをブスだの役立たずだのトロくさいだの色々言ってるのを無視して、私は要望を口にする。

このままテレポートしたら、私の髪を掴んでる女子高生の腕がもげる……なら別にいいか。私は勘違い逆恨みで、リンチしようとしてくる人の腕の心配をするような聖人なんかじゃない。

ただこの状況でテレポートしたら、相手の腕じゃなくて私の髪が頭皮ごとこつちに残りそうだから、離してもらわないと困る。

まあもちろん、これですんなり離してくれる人だったり、離すよう

に説得してくれる人なら、そもそもこんなことしない訳だ。

全員、私が口答えしたことを気に入らないと言わんばかりに睨み付け、けれど口元はさらに甚振る口実ができたからか、喜悦に歪んでる。

……昔、あの針の事件の後、ヘラから話してもらえなくなって、ご飯と一緒に食べてくれなくなってしまうからの、クラスメイト達の顔と同じ顔。

ただ気に入らないから痛めつけたいだけなのに、自分が正しい、相手が悪いと思いつきたくて、とにかく難癖を探して、気に入らないくせに気に入らないところを見つけるのが楽しくてうれしくて仕方がないと言っている顔。

それは、私のトラウマの一つ。息の仕方さえも忘れそうなくらいに、怖いもの。

「はあ？ 何言ってるのよ？ あんた、自分の立場わかってうぐっ!!」私の髪をさらに強く引き上げたタイミングで、女子高生のむこうずねを思いつき蹴りつけた。弁慶の泣き所にかかどが綺麗に入ったから、女子高生は悶絶の声を上げて反射で手を離れた。

蹴られた足も反射で上げて片足立ちになったから、軽く手で押しただけであっさり後ろに倒れて、今度は頭を打ったのかまた悶絶する。

パンツ丸出しで痛い痛いと呼いて喚く女子高生と、私の反撃についていけずポカンとしているキャリアウーマンには、持っていた買い物袋をもつたいないけど思いつきり体をねじって投げつけたら、これまた綺麗に弧を描いて顔に直撃した。

鞆の形状からして、最初に背中を殴ったのはこいつだから遠慮や罪悪感はない。

自分でも意外なくらいに、体が動いた。トラウマそのものの理不尽と暴力に襲われても、私の頭に占める感情は恐怖じゃなかった。

逃げない、諦めない、諦めたくないと自覚したら、開き直ったら罪悪感はまったく感じなかった。

……私があの人にあんなにふさわしくないのは、わかっているよ！

あんたたちに言われるまでもなく、私が一番よく、泣きたいくらいにわかっているよ!!



でも、それでも一緒にいたいんだ！　ふさわしくないんなら、ふさわしくなってやるって決めたんだ!!

例えば私と同じ「好き」じゃなくても、それでもあの人は私のことを「好き」と言ってくれたのだから、その言葉は私にだって否定なんかできない。

お前たちになんか……、「ヒーロー」に恋い慕いながら、多勢に無勢でこちらの言い分を聞かずにリンチすることを、まるで聖戦のように語るお前らなんかには、否定させてたまるものか!!

お前たちこそ、あの人のファンどころかあの人を想うだけでも私は許せない!!

盛大に押されたトラウマスイッチによる恐怖より、私が自覚して開き直った独占欲と怒りが上回り、ただ私はブチ切れて反撃した。

でもこれ以上はやめておこう。良心が傷んだのではなく、私もこいつらと同類になってしまうという保身が訴えたから、私は撮影しながらSNSで実況でもしていたのか、スマホを持ったままポカんと固まってる甘ロリは無視して、お兄ちゃんの元に跳ぼうと思った。

もうお兄ちゃんなら最初の怪人は片付けて、怪鳥の方に向かってる可能性が高かったけど、下手したら怪鳥の方も既に倒してそうだけど、とにかくここに残ってもいいことはあるわけないから、この場から離れようと思った。

「……なんなのよ、あんた。生意気なのよ！　ブスのくせに！　ガキのくせに！　高校もまともに出れなかったバカのくせに!!」

けど、その言葉がまた私のテレポートの邪魔をした。

集中できない、無視なんかできない言葉が、聞こえた。

ただ偶然、私とジェノスさんが一緒にいるのを見かけたただけの奴が、言えるわけのない罵倒を確かにした。

「……なんで……知ってるの?」

叫んだ甘ロリの方に思わず尋ねるけど、彼女は仮面のように厚塗りした真っ白なファンデーションが、ひび割れて崩れ落ちそうなくらいに顔を歪めて睨み付けるだけで、私の問いに答えてなどくれない。

何故、私が高校を中退していることを知っているかを答えず、彼女

はぬいぐるみではなく、ぬいぐるみ型のバッグだったウサギから、取り出した。

抜身の出刃包丁を。

「はっ！」

意外すぎるし思い切りもよすぎる凶器を取り出され、私はまた判断を間違える。

凶器を出されてすぐにどこでもいいからテレポートで逃げれば良かったものを、包丁が出てきた瞬間、恐怖や困惑さえも完全にすっ飛んで、頭が真っ白になった。何をすればいいのかわからなくなつたというより、何を考えたらいいかもわからなかった。

いきなり包丁なんかを取り出されたら、私だけじゃなくて仲間内でも私と同じ反応はおかしくないはずだけど、私に買い物袋をぶつけられて鼻血を出すキャリアウーマンと、パンツ丸出しでのたうちまわっていた女子高生は、包丁に怯えたり引いたりなんかせず、後ろから私の体にしがみつかれて、思考がやっと回復する。

……計画的だった。見つけたこと自体は偶然かもしれないけど、おそらく彼女たちの目的はジェノスさんじゃなくて、私。

ジェノスさんにまわりつく「悪い虫」である私を、はじめから排除するつもりで、……最悪本気で殺すつもりで探していたことを悟つた。

女子高生も、キャリアウーマンも、ギラギラとした輝きに満ちているけど、どこを見てるのかわからない狂気に染まった目で、私を睨みながら実に楽しそうに笑ってる。

私の死を本気で願って、楽しみにしている。

ウサギを地面に投げ捨てて、甘ロリも同じ笑顔で包丁を片手にゆっくり、颯るように近づいてくる。

あまりに現実味のない光景に状況。

展開が速すぎて訳がわからなくて頭がついて行かず、ただ私は見ていることしか出来なかった。

むせ返るような錆の匂いと、真っ赤に染まる光景を。

頸動脈を搔つ切ると本当に噴水のように血があふれ出るというこ

とを、妙に冷静に私は眺めてしまった。

「貴様は本当に、トラブルを引き寄せる天才だな」

だるま落としのように、体のパーツがバラバラに崩れ落ちてゆく光景は、初めて出会ったあの時の再現。

それを意識したのかどうかは、わからない。

ただまた、私は闇を人の形にしたような、闇そのもののような忍者に助けられたのは事実。

……けれど今回は、素直に感謝は出来ない。

3体のバラバラになった死体と血の匂いに耐えられず、私はその場に座り込み、嘔吐した。

## レウコクロリデイウムに似てる

この日、Z市にいたのは偶然に過ぎない。

忍具の補充と研ぎに出していた刀を受け取りに来ていただけだ。

忌々しく屈辱的だが、まだ俺はあいつに、サイタマに追いついていないことを、あのバカバカしい「マジ反復横跳び」とやらで思い知った。

もちろん、それであいつに挑むのをやめるだの、殺すことを諦めるつもりは毛頭ない。

いつかではなく次こそ必ずあいつに勝つと決めて、そのために俺は武器も選びに選び抜いていたら、怪人が現れたと警報が鳴る。

愚鈍な一般人向けの玩具ではなく、本職の為の忍具なんて扱う店がカタギなわけもないので、店員も客である俺もそんな警報、しかも災害レベル虎程度など思うことはなく無視していたが、ほぼ間を置かず鬼レベルの災害が現れたのは、さすがに少し驚いた。

そして鬼レベルなら奴が、サイタマが倒しにやってくるかもしれないと思いつき、店を出た。

認めるのは非常に屈辱的で癪だが、奴に敵わないことを思い知らされてまだ日も浅い内に、再戦を挑む気はさらさらない。

ただ、そもそも俺は奴が俺以外の相手と戦っている所を見たことがないことに気付き、奴の理不尽なまでの強さやスピードの秘密や、それを攻略するヒント、弱点などを探れないものかと思いつき立ち、俺は怪人の元に向かったただけだった。

その途中で、偶然見つけたただけだ。

エヒメが、どう見ても痴話ゲンカの域を超えた面倒事の渦中にいるのを、見つけたただけだ。

事情は知らん。知る気もなかったから、説明も求めなかった。

ただ、無性に気に入らなかつたから始末したまでだ。

リスクを負う覚悟などなく、多勢の力と相手の良心に頼って自分の欲求のみを押し通す奴らの愚かさ、他人事でも不愉快極まりなかった。

研ぎ終えたばかりの刀が、何の意味も価値も見いだせない層の血脂でさっそく汚れたのが不快だが、まあ試し切りにはなったか。

そんなことを考えながら刀を鞘に直し、その場に座り込むエヒメの顔を見てふと、現状があの日、この女と初めて出会った時の再現であることに気づく。

あの日とは、違う部分の方が多いがな。

場所といい、俺が忍び装束ではなく私服であることといい、俺が殺したのは怪人ではなくどんなに愚かで汚らしくとも人間であることといい、エヒメが返り血にまみれていることといい、共通点の方が少ないくらいか。

……初めて、俺が人を殺す場面をこの女は見た。

知識としては知っていただろうが、今初めてこいつは俺がどういう人間かを正しく認識して、そして目の前に散らばる人だったもの残骸とその匂いに耐えきれず、嘔吐した。

それを、黙って俺は眺め続ける。

こいつがいるのなら、近場にサイタマがいる可能性は高かったが、もはや俺の興味はサイタマからこいつに移る。

相変わらず俺の予想をとことん裏切るこの女の目が、俺の足をこの場にとどめる。

俺が人を殺しても、「怯え」ではなく「怒り」の色を宿した目が無性に気になった。

\* \* \*

あらかた胃の中のを全部吐き出して、エヒメは服の袖で口元をぬぐって俺を睨み付ける。

前から思っていたが、お前は本当に見かけによらず男前というかワイルドというか、勇ましいところが妙にあるな。

「なんだ？ 文句があるなら聞いてやる。言ってみろ」

「私に関しての情報源がどこなのか、訊けませんでした」

俺が少し挑発もかねて言っていると、まっすぐに俺を見たままこの女は即答しやがった。

殺すほどのことはしていないだの、俺に人殺しをして欲しくなかつ

ただの、蕁麻疹が出てきそうな綺麗事でもほごくかと思ったら、やたらと現実的な文句だったので、思わず俺は素で「それはすまん」と謝ってしまった。

「……いえ、助かったのは事実ですから……わがまま言つてすみません。それから、ありがとうございます」

むせ返る血の匂いで気分が悪いのか、顔色悪く頭を押さえつつもこいつは自分の非を認め、俺に謝罪と礼を口にする。

「何だ。殺しそのものに文句でもつけるかと思つたら、案外素直だな」「……さすがに自分が殺そうとしてた相手には、同情はあまりしません。」

それに、……あなたが『人殺し』であることは初めからわかつていたことです。思うことはありませんけど、それは私の想像力や理解、覚悟が足りなかっただけのことだから、ソニックさんにぶつけちゃダメでしょう?」

顔色やその様子からして明らかに殺人人に対して拒絶反応を起こしてるど知りつつ、先ほど以上に挑発を試してみても、この女は淡々と答えるだけ。

その目に、激情を宿しながらも俺にぶつけてはこない。

「……なら、お前はいったい何に怒っているんだ?」

目の前に俺がいながら、俺を見ていないようなその態度が気に入らなかつた。

苛立つ理由はそれだけだ。

こいつの怒りの対象が気になる理由は、それだけだ。

青い顔でふらつきながら立ち上がり、まっすぐに俺を見てエヒメは答える。感情を押さえつけていた声音に、怒気をかすかに溢れだたせて。

「……この事態を引き起こした、私の情報を餌にして自分の手を汚さずに私を排除しようとした、思い込みが激しくて問題はあつただろうけど、それさえなければ私を襲うなんて考えなかつた、ソニックさんに殺されなかつたし、ソニックさんも殺さないで済んだのに、こんな事態を引き起こした私の『敵』と、こんなことを引き起こすまで逃げ

て放置し続けていた『私』にです」

「……同情しないと言いつつも、俺が「人殺し」だということはおわかっていると言いつつも、殺すほどではなかったただの俺に人殺しをして欲しくないだの、蕁麻疹が出そうなことを思いながらもお前は、俺のしたことを肯定して、お前が怒り、そして見据えるのはそれか。」

本当にこいつは相も変わらず、どうしようもないほどに光にも影にも属さない薄闇だな。

闇を肯定しつつも決して闇と同化しない女は、バラバラになった死体から何かを探して、拾い上げた。

「何をしてるんだ？」

拾い上げたのは、確実に重くなって使いにくいくらいにカバーを装飾したスマホ。

血で汚れたその画面をやはり袖でワイルドにぬぐって電源を入れるが、パスが掛かっていたことに舌打ちしてからエヒメは答える。

「……私を取り囲んでた時、スマホを操作してたから……SNSかなにかに実況してたなら、……私のことを少し知ってた理由がわかるかもって思ったんです」

「そもそも、お前はいつたい何があって、こんなところでリンチされていたんだ？」

答えられても、そもそもその事の発端を知らなければ意味がよくわからなかったので尋ねてみれば、原因はエヒメ自身ではなくあのポンコツサイボーグであることに思わず笑った。

こいつ、本当に厄介ごとを引き寄せる天才だな。

「はっ！ つまりはあの木偶は散々お前を守るだのなんだの言っておきながら、肝心な時にいないどころか逆恨みの元凶になっていたわけか」

「……別にそこは良いんです。思い込みが激しくて自分勝手な人に好かれた責任を求めるのは、間違いです。」

私を襲ったこと、殺そうとしたことの罪は彼女達だけが背負うべきもので、ジェノスさんには何の関係もありません。

……それよりも私はどうやってこいつらが、『私』を知ったのかが気

になります」

他の奴らの鞆を漁って、スマホを取り出しながらエヒメはあの役立たずを擁護するのが気に入らない。

「あのサイボーグのストーカーだったのなら、あれを調べる片手間でお前のことも知れるだろうが」

暗に自分のストーカーにさえも気づかなかった役立たずと言ってみるが、「それはないです」と即答で否定したのも気に入らない。

が、その根拠を聞いて俺も少し気になった。

「この人たち、私の名前すら知らなかったみたいなのに、私が高校をちゃんと出てないことは知ってたんです」

スマホは全部パスが掛かっており、そこから情報を得ることを諦めたエヒメがため息まじりで答えた言葉で、思わず俺も考え込んだ。

サイボーグのストッキングでもしていたら、とうかしていなくても、こいつと一緒にいるところを少し聞き耳立ててさえいれば、会話から名前くらいは普通に知れるだろう。

執着対象はサイボーグの方だから、エヒメの方は聞いていても興味がなかったから覚えていなかったと一瞬考えたが、本気かどうかはさておき、包丁なんぞを持ち出すほどに嫉妬して憎悪する対象の名は忘れんだろう。

名前を知らないとすつとぼけただけだとしても、恍ける意味はなく、何よりこいつが高校をちゃんと出ていないという情報はどこから得た？

「お前が平日の昼間でも普通にその辺をうろついているからそう思っただけの、テキストな罵りじゃないのか？」

「多分違うと思います。学校に行っていないとせにとかじゃなくて、学校をちゃんと出てないくせにって言ってましたから」

確認で尋ねてみて返された答えで、確かにその発言なら根拠も何もない罵りが、偶然事実だったではないと納得する。

「学校に行っていない」「学校に行けなかった」ならともかく、「学校をちゃんと出ていない」は、こいつが進学はしたがドロップアウトしたこと、普通に進んでいれば卒業をしている歳だということを確認して



いないとまず出てこないセリフだ。

「……こいつらに見覚えと、情報漏洩の心当たりは？」

「見覚えはないです。人の顔と名前を覚えるのは得意じゃないですけど、そもそもあまり人と関わらない引きこもり生活ですから。」

漏洩の心当たりは……あります」

さらに念押しで質問を重ねてみると、エヒメは自分のケータイを取り出して、操作しながら答える。おそらくはその、「心当たり」にあたっているのだろう。

が、指がガタガタと震えっぱなしなので、ガラケーでうまく打鍵できずいる。

ネットに繋ぐだけでも1分近くかかるほどにまったく落ち着いていない、体はこの現状、死体に囲まれて殺人者たる俺と二人きりというこの状況を全力で拒絶しているというのに、変わらずこの女はここにいる。

怯えではなく、怒りをその目に灯して。

こいつを押さえつけて、抵抗できずにいたこいつに包丁を突き刺さうとしていた女どもとは違う、自分がこれからすべきことを、そのリスクを理解したうえで覚悟を決めた目で、「敵」を見据えていた。

エヒメの手から、ケータイを抜き取り検索画面を開いて問う。

「何を調べたらいいんだ？」

ポカンとマヌケ面で俺を見上げてエヒメは答えないので、「早く言え」と急かせば、こいつは笑った。

いつもの緊張感のないへらつとした笑みよりぎこちないが、それでもこの女は俺に笑いかける。

……本当に、こいつはバカだ。

だが、この現状を理解できていない笑みはいつもより早く掻き消える。

サイタマと無駄によく似たマイペースさを持つてこいつでも、一瞬しか忘れられないほどの怒りを再び目に灯し、はつきりと答えた。

「ジエノスさん……鬼サイボーグのファンクラブ系の掲示板を探してください」

\*\*\*

何で俺がああポッコツのファンクラブなど検索せねばならんのだ？ と検索単語を打ち込む時点で嫌になったが、幸か不幸か検索作業に時間はかからなかった。

……本当に、俺はともかくこいつにとっては幸か不幸かわからんな。

「はっ！ 本当にあのサイボーグは、何の役にも立たんな。スクラツプにした方が、環境にもいいんじゃないか？」

目にしたものの率直な感想を言いながら、エヒメにケータイを渡す。

エヒメはその画面に表示されたものを見ても、表情自体は変わらなかつた。心当たりがあつたのなら覚悟も決めていた、想像通りのものだったからだろう。

顔立ちそのものはほとんど変わっていないが、今よりだいぶ幼い、おそらく中学生ぐらいの頃の自分の写真が晒されたネット掲示板をただ見ていた。

燃え盛る業火のような怒りを、その目に湛えてながら。

見つけるのは簡単だった。

さすがにネットマナーが行き届いた健全なファンサイトの掲示板には書き込まれていなかったが、率直に言うとうと妄想ダダ漏れで頭がいかれてる奴らが集う、アンチ・アングラ系の掲示板では完全に祭り状態で、レスが追い付かない程だ。

名前こそは晒されていないが、顔を全く隠していない写真と、高校を中退したあの、自殺未遂をしたあの、学校で傷害やら盗難事件を起こしたあの書き込まれていたら、そりゃ他人の不幸が好きで仕方ない奴は騒ぎ立て、自分こそがああサイボーグの理解者だという妄想を懐いてる奴は、この情報をぶちまけている奴の甘言にも乗るだろう。

「鬼サイボーグをこのクソ女から解放してください」を前書きにして、何度も何度も執拗にエヒメの個人情報を書き込む人物の名を、俺は覚える。

何故かそいつは、デフォルトの「名無し」ではなく、「6月」という

コテハンを使っていた。

「おい。この『6月』に心当たりはあるのか？」

「……ありますよ。嫌になるくらいに、外れて欲しかったくらいに、ありますよ！」

無表情で画面をスクロールして読み取っていたエヒメが、俺の問いに八つ当たりのように声を荒げて答えた。

胸を押さえてゼイゼイと全力疾走をした後のような呼吸をしながら、エヒメは初めて見せる感情のままに吐き捨てた。

「……………また、お前は利用するだけ利用して、奪って、そして捨てる気か。あの、寄生虫がつ！」

純度の高い憎悪を吐き出して、胸を押さえながら、ぜんそく患者のような呼吸をしながら、エヒメはふらつきながら歩き出す。

返り血を浴びたまま、俺よりもこいつの方がどう見ても殺人犯な格好のまま、路地から出ようとしたのでさすが腕を掴んで止めた。

「おい。何してる。そのまま出て行ったら、職質どころじゃないだろうが」

単純に息苦しくて体が辛いからか、それとも呼吸を阻害するほどの怒りを抑えつけるためか、やたらと緩慢な動作でエヒメは振り返り、言葉は弱々しく、けれど目と言葉はどこまでも強く俺に答える。

「……………ごめん、なさい、ソニックさん。……………はな、して……………。行かなくちゃ……………」

私、こいつだけは許せない……………。私は……………今度こそ……………」

「別にお前がどこで誰をどうしようがどうでもいいがな、自分の特性を忘れてるんだか使えないんだかな精神状態で行って、何になるんだ？」

エヒメの主張をぶった切って言ってやれば、怒りに滾っていた眼がきよとんと丸くなり、数秒間を置いてこいつは言った。

「……………あ、そっか……………。テレポルト……………すれば良かったんだ」

……………忘れてたのか、この女。

本当にお前にテレポルトは宝の持ち腐れだなと嫌みの一つや二つでも言おうかと思ったが、その前に相変わらず空気を読まないこの女

は言う。

ふわりと柔らかく微笑んで、エヒメは言った。

「ありがとう、ソニックさん」

その礼は、何に対する礼かは知らない。

尋ねる前に、電源でも落としかのようになり、こいつは急にぶつ倒れたからだ。

「!? おい！ エヒメっ!?!」

とつさに抱えて呼吸を確かめてみるが、起きてた時よりもずっと安らかな呼吸をしながら、この女は寝やがった。

状況的に気絶と言った方がいいのだろうか、寝てるとしか言いようのない無防備な顔が無性にムカついたので、このまま地面に転がしてやろうかと思ったが、同時に少し気になることに気付き、転がすのは後回しにして俺はエヒメを抱きかかえてみた。

間違いなく、以前抱きかかえて跳び回った時と体重に差分はない。40キロ半ばと言った所か。

……間違いなく、差分があっても1キロ2キロ程度だと言うのに、それでも違和感が消えない。

妙に、エヒメの体が軽く感じる。

まるで、魂でも抜けたようにその身体は軽かった。

むせ返る血臭。

壊れた人形のように散らばる、人だったものの残骸。

その中心に悠然と立つ、返り血を一滴たりとも浴びていないのに死体よりも濃い死の匂いをまとった男。

その腕の中に彼女はいた。

全身が血で汚れ、青白い顔は目を伏せて、ピクリとも動かずに生きてなど、いないかのように。

\* \* \*

怪鳥は強さだけで言うなら、俺一人でも倒すことができた。

というより、あの怪鳥が災害レベル「鬼」認定されているのは、強さそのものよりも嘴に強力な毒を持つ特性上からの認定らしく、生身ではない俺にとってそれは何ら脅威にならない敵だったが、俺の戦闘手段と場所、そして相手が「鳥」だということが最悪だった。

的としてでかいので焼却砲で焼き尽くすのは容易かったが、先生と初めて出会った時の蚊とは違って市民の避難が完全には出来ていない市街地で空を飛びまわる鳥を燃やしたら、火だるまのままどこに墜落するのかわからない。

最悪は俺の所為で街一つが壊滅する可能性もあったので、俺は先生が来るまでの時間稼ぎに集中するしかなかった。

先生が俺の元に援護に来てくれたのは、俺が戦いだして5分もかからなかっただろう。

先生の傍らにエヒメさんがいないのは、先生が危ないから避難していろと彼女に指示を出したからだと信じて疑わなかった。

……怪鳥をいつも通り一撃で体は大穴を開けて倒した先生に、「エヒメはどうしたんだ？」と訊かれるまでは。

先生は、エヒメさんと会っていなかった。

ただ俺が言った通り駅の方に向かって怪人を探して倒した後、ついでにと思って怪鳥の方にやってきただけだった。

エヒメさんがレポートで先生を呼び、援護に来てもらうはずだった

た、そのつもりであのスーパーの近く、人波に流されてしまわないように建物と建物の間の裏路地まで連れてゆき別れたことを説明しながら、その裏路地に先生と戻ったことは言うまでもない。

……そこで見た光景は、あまりに凄惨な地獄絵図。

その中央で俺にとつての何よりも忌々しい怨敵の一人が、彼女を抱きかかえていた。

今すぐにもその両腕をもぎ取ってエヒメさんを奪い返し、骨も残さずに焼却してしまいたかった。

しかし奴は、俺や先生が何かを言う前に、こちらを嘲笑しながらほざいた。

「感謝しろよ。貴様らがくだらない『ヒーロー活動』をしている間に、貴様らにとつて『ヒーロー活動』より大事じゃないこいつの命をまた、守ってやったんだからな」

「意味の分からない戯言をほざくな！ 貴様、エヒメさんに何をしたい？ 今すぐにその人を離せ!!」

焼却砲を構えながら叫んだ俺の言葉も奴は鼻で笑って、エヒメさんを抱きかかえたまま代わりに足元に転がっていた腕をこちらに向かつて蹴り飛ばした。

抜身の出刃包丁を握りしめた女の腕が、俺と先生の足元に転がる。

「……ソニツク、何があつたんだ？ エヒメに怪我はないのか？」

俺がその腕の意味を、この死体はいったい何をしていたのかが理解できずに情けなく困惑するしかなかった中、先生は冷静に淡々と目の前の男に、ソニツクに問う。

いつも以上の無表情に感情が見当たらない声音だからこそ、この人の胸の内に怒りが満ちて荒れ狂い、それを必死で押さえつけていることはわかった。

ソニツクの方もそれが分からぬほど愚かではなかったらしく、怯えるように身をわずかに引くが、それでも奴の唇は嘲りに歪めたまま動く。

「少なくとも、俺はこいつに何もしていない。今も寝てるだけだ。

というか、なんなんだこいつは？ 誇張なく言葉通りいきなりぶつ

倒れて寝たぞ。ナルコレプシーか何かかなのか？」

寝ているという言葉でようやく彼女の胸は上下している、確かに呼吸をしていることに気付いてわずかながらに心に余裕が生まれたが、彼女にそんな睡眠障害などないことは今までの付き合いで断言できる。

奴の言葉を信じてても信じなくても、彼女が急に気絶した原因はどう考えてもソニックであることに疑いを持たなかった。

「ふざけるな！ 貴様の言葉を信じたとしても、どう考えても貴様のしたことが原因だろうが！ この惨状をエヒメさんの目の前で引き起こしたのは、貴様だろうが!!」

一生肉が食べられなくなってもおかしくないこの殺戮を、エヒメさんの目の前で犯したことが許せなかった。

ただでさえ傷だらけの心に新たな傷を刻み付けておきながら、いけしやあしやあと「守った」などとほざく奴を、許すことなどできなかった。

……それは、奴の方も同じだとは俺には気付けなかった。

「……貴様が、それを言うか？ 大口だけ叩いて結局は何も見えていない、何も守れない無力で無能なクソガキの分際で、それを言うか？」  
嘲りが消える。

代わりに浮かび上がったのは、青い焔のような冷たい印象を持ちながらも何もかも焼き尽くすほどに高めた灼熱の憤怒。

その侮辱の言葉に当然こちらもさらに怒りの熱が高まるが、同時に奴の唐突な変化に若干困惑する。

「どういう意味だ？ ソニック、マジで何があつたんだ？ こいつらはエヒメに何をしたんだ？」

先生が一触即発状態の俺とソニックの間に入り、再び問う。

先生の方も、奴の様子の変化に少し困惑しているのが隠しきれいなかった。

ソニックは先生の問いに答えず、エヒメさんが気を失いながらも握っていた彼女のケータイを手から抜き取って、それを先生の方に投げつけた。

「それを見れば、『誰』が『元凶』なのかわかるんじゃないか？」と、こちらを見下しながらも憐れむように、奴は言う。

意味が何も分からなかったが、先生は困惑しつつもケータイの中を見て、そして目を見開いた。

「!？」

後ろから覗き込んだ俺も、そこにあるもの、書き込まれている言葉に、絶句する。

画質は荒く今よりかなり幼いが、エヒメさん自身の写真が顔に何の加工もせず公開されて、彼女の過去が最悪かつ醜悪な方向に誇張されて、書き込まれているネット掲示板。

本名は晒されていないが、それはエヒメさんに関する事柄を中心に調べても検索に引つかからないようにするための小細工でしかない。「見つけるのは簡単だったぞ。彗星のごとく現れた、期待の新人S級ヒーローには熱狂的なファンが多いからな。

愛されてるな、『鬼サイボーグ』

厭味つたらしく奴は俺をヒーローネームで呼ぶが、何も反論は出来なかった。

警戒した。できる限り情報収集をして、対策も取った。考えうる限りの可能性を考えて、行動に移していたつもりだった。

……俺はあまりも愚かだ。

俺が原因で、俺に話しかけてきたことがきっかけで再会してしまったというのに、どうして俺に関連するものを調べなかった？

俺に彼女はもつたいない、俺ではエヒメさんには釣り合わないという意識が、盲点となって最悪の裏目に出た。

実際はどうであれ、客観的に見て年の近い男女が一緒にいれば、まず思い浮かぶ関係は恋人だ。

そして俺は、俺にとつてどうでもいい他人から見て、俺自身はどう思われるかなど気にしたことがない。俺の外見だけが好きなら勝手に好きでいればいいし、幻滅したのなら勝手にしておけばいいししか思わない。

自分に人気があるかないかなど、気にしたことなどなかった。ス



トーカーじみた手紙をもらっても、「読まなければ良かった」以上の感情を抱いたことがない。

……ファンとはもはや言えない、ストーカーじみた存在を認知していながら、俺はその存在に危機感を抱いていなかった。

エヒメさんと「恋人」になりたいと強く望んでいたが、それは今の自分ではありえないことをよくわかっていたからこそその願望だ。他人から見ても自分たちが、俺の望み通りの関係に見えるのが自然だとは思えなかった。

何度か俺のファンだと名乗る連中がエヒメさんに対して失礼な対応をしたことがあったのに、それでも無意識に自分がそこまで執着されるほどではないと思ひ込み、有り得ないと可能性から外していた。

俺の所為でエヒメさんが嫉妬されるなんてありえないと、俺は愚かに思い込んでいた。

「自分のストーカーの存在に気づきもせず、こいつ一人をわざわざ人目につかない、襲いやすい場所に置きざって赤の他人を助ける。ずいぶんと楽しそうな『正義ごっこ』だな。ヒーロー」

ソニックの皮肉に、嘲弄に、蔑みに、何も反論できない。

どうして俺は、こんな逃げ場のない場所に彼女を置き去りにした？ 包丁などを持ち歩いていたということは、ある程度は計画したうえでの行動だ。どこかでつけられていると気づけても、よかったはずなのに。

怪人が出て周囲がパニックを起こしていたが、何の言い訳になる？

一歩間違えたら、一瞬でも奴が、ソニックがエヒメさんを見つければ遅ければ、こいつが気まぐれを起こさず助けようと思わなければ、ここに散らばり転がる肉片はエヒメさんだったかもしれないというのに!!

「……………だいたい、何があったかはわかった。まあ、ありがとなソニック。そんで、とりあえずエヒメを返せ」

一通り目を通した先生が、また感情が見当たらない淡白で平坦な口調で言った。

エヒメさんのケータイを握りつぶすことで何とか怒りを押さえつ

け、ソニックに妹を返すように要求する。

先生の要求に一度ソニックは鼻を鳴らしてから、物のようにエヒメさんを投げ渡す。

乱暴に放り投げられても、エヒメさんは起きる様子もなく、声も上げず、ただ静かに眠り続けて先生の腕の中に納まった。

先生は血にまみれたエヒメさんの体を抱きかかえ、抱きしめる。

ソニックは何もしていないと言っていたが、よく見れば頬は殴られたのか赤くはれており、髪や服も大きく乱れている。

今更、奴がエヒメさんに危害を加えたとはさすがに思わない。今、この場に散らばる残骸どもが行った、暴行の跡であることは明白だ。

「先生、エヒメさんは……」

「ジェノス」

俺の言葉をさえぎって、先生は言った。

何よりも大切な妹を、この世のすべてから守るように、誰にも触れさせないと誓うように抱きしめ、抱きかかえて、振り向きもせずに語る。

「……悪い。お前の所為じゃない、お前は悪くないってのはわかってるんだ。お前に責任なんかねーよ。お前だって被害者だ。お前は、悪くない。わかってるんだ。それはわかってるんだ！」

「……けど、今は、今だけは何も言うな。……お前は悪くないってわかっていても、八つ当たりだってことはわかっていても、それでもぶつけてしまいそうなんだ」

「……いつそその怒りのままに、ありとあらゆる罵詈雑言でも、世界の滅亡さえも危惧する拳でもぶつけて欲しかった。」

しかし先生の尊い人間性がそれを許さず、俺を悪くないと語り、憎悪も何もかも自分一人で抱え込んで、俺には何も渡してなぞくれなかった。

それこそが俺にとって一番つらく、残酷で過酷な罰であることなどきつと先生は知る由もないだろう。

エヒメさんを先生に投げ渡したソニックは、ご自慢のスピードを強調して去りはせず、むしろ異様に緩慢に歩いて、先生と俺の横を通り

過ぎる。

すれ違いざまに奴は言った。

『6月』に心当たりはあるか？」

「はあ？」

あまりに唐突な問いかけに素で声をあげると、奴は振り返りもせず、やはり緩慢に歩きながら言葉を続ける。

「エヒメの『敵』の名だ」

……何のつもりで奴が俺と先生に尋ね、同時に教えたのか、その意図はわからない。

ただ、あまりに愚かであつた自分と、卑劣な手段に頭が沸騰して見逃しかけていた情報……、エヒメさんの個人情報掲示板でばらまいていた奴の固定ハンドルネームが「6月」であつたことを思い出し、頭の中に刻み付ける。

奴を許す日など訪れず、いつか必ず俺の手で殺すと決めていることに変わりはないが、偶然でも気まぐれでも今日、奴がエヒメさんを見つけてその命を救つたこと、そして見逃しかけていた情報を提供したことに関しては素直に感謝しよう。

ソニックがその場から完全に立ち去つた後、目覚めないエヒメさんを抱きかかえる先生に、俺は声をかける。

「……先生。この場合は俺がなんとしますから、エヒメさんを連れて帰ってください。その返り血でこの場にいれば、彼女が疑われてしまいます」

「……ああ。……頼む」

先生の返答はソニックの歩みと同じく緩慢だったが、エヒメさんを抱きかかえ、建物の屋上まで駆け上がってそのままビルとビルの屋上を飛び交って、彼女が人目にさらされないように去ってゆくのはあまりに俊敏だった。

俺だけが、肉片とともに残された。

早く行動に移らなければと思いつつも、俺のケータイを取り出す動きも先生やソニックのことを言えないくらい緩慢だった。

全員、その理由は同じだろう。

胸の内の滾る憎悪を押さえつけることに精一杯で、どうしても動きが緩慢になった。

まだ、この憎悪を爆発させてはいけない。

これをぶつける相手は、決まっているのだから。

\* \* \*

「……削除依頼は出して即刻削除してもらいましたけど、やっぱり痛いですね。3日間も執着して情報を出されていたのは」

「……すまない。完全に俺のミスだ」

ソニツクの起こした惨劇を何とか警察に誤魔化して伝えて、事情聴取から解放されてすぐに俺は童帝と連絡を取った。

ソニツクの為ではなくエヒメさんの為に、自分は死体をただ見つけただけと言い張り、先生が初めに退治した怪人がちようど似たような殺し方をするタイプだったので、それに襲われたのだろうと判断されて、俺の証言はあっさり信じられてすぐに解放された。

真犯人を知っていながらそれを庇う真似をしたことに良心は痛むが、ネットの情報に踊らされて人を傷つけ、殺すことも厭わなかった奴に同情するのはバカバカしいと同時に思う。

遺族もそんな逆恨みの返り討ちにあつて死んだよりも怪人による殺人、自然災害のような防ぎようのない出来事で死んだと思っただ方がマシだろうと自分に言い聞かせ、俺はこの出来事を頭の隅にまで追いやった。

……決して忘れられない俺の罪であることはわかっている。

けれど今は、それに目を向けている余裕などない。

電話で童帝に、奴らのSNSを探してくれと頼んでいたがそれは見当違いだったことを伝え、そしてエヒメさんの晒された情報を出来る限り消してくれと頼めば、さっそく手を打ってくれたが、わかっていたがネットで一度公開された情報を完全に消すことはできない。

「……別にサイボーグさんが罪悪感を背負う必要はないと思いますよ。僕だって『そっちか!』って思ったし、やっぱり晒されてる情報は古くて名前や住所とかは晒されていないから、少し時間をおけば風化しますよ」

童帝の慰めの言葉を、「そうだな」と実に適当に返す。

確かに理屈ではそうだ。ネットの情報量はあまりに膨大だからこそ、長くても数カ月もすれば埋もれて風化して、誰もが忘れ去る。

が、決して本当に消え去りはしないのが、ネットの特性だ。

掲示板のレスを削除しても、それを見た人間の記憶を消し去ることは出来ず、写真はデータフォルダに、内容はコピーしてメモ帳にでも保存してしまえば、また新しくどこかで面白おかしく晒されて、利用される可能性は低くないし防ぐこともできない。

俺たちは相手に先手を許した時点で、完全敗北していた。

「……すまない。迷惑と面倒だけをかけたな」

「それは別にいいんですけど……サイボーグさん、お願いですから先走らないで下さいね」

俺の謝罪に、童帝の方が年上のように落ち着いた様子で俺をなだめた。

「……何の話だ？」

「おねえさんをいじめた人だからって、そのヘラって人のところに殴り込みに行かないで下さいよって言ってるんですよ。」

気持ちばかりですが、僕だってできるんなら今すぐに最強装備一通りそろえていきたいくらいですけど、相手は社会的にだいぶ力がありますし、ヒーロー協会のスポンサーもやっていますから上層部に顔も効くはずですよ。

なので、何の証拠もなく相手を痛めつけたら、鬼サイボーグさんや僕自身に社会的制裁を落とされるならまだマシですよ。それこそ、またエヒメおねえさんが狙い撃ちで、今度こそ社会的に抹消されかねませんから、……行動に移すなら慎重にお願いします」

俺を止めるのではなく、ばれないように、もしくは大義名分を作ってからやれという発言に、わずかだが強張っていた顔が緩む。

「……ああ。肝に銘じておく」

俺は改めて礼と詫びを入れて電話を切り、目の前のモニタを睨み付ける。

童帝の発言でわずかに緩んだ顔が、再び憤怒に歪むのを感じる。

短い事情聴取を終えてすぐ、俺は近くのネカフエに入りPCを操作しながら童帝と会話していた。

ソニックから告げられた「敵」。エヒメさんの情報をばらまき、俺のストーカーを煽って彼女を傷つけ、殺すことも厭わなかった「6月」という名。

「6月」と言われただけではさすがに意味不明だったが、それがあの掲示板に写真と情報をばらまいていた奴の固定ハンドルネームなら、心当たりは簡単に浮上した。

まあ元々、全寮制の学校で中学生の頃のエヒメさんの写真を持っている奴という時点で容疑者など限られている。

どう考えてもあの女の……ヘラの仕業としか思えなかった。

……けれど同時に、もう一つの心当たりを、可能性を俺はその名前に見出した。

その心当たりを探るため、俺は電話をしながらまたSNSをひたすら探していた。

そして……候補は少なくはなかったが、ここ最近頻繁に書き込み、投稿をしているせいか検索上位に上がっていた為、思った以上に早く見つけることが出来た。

……「ヘラ」はミラージュが語ったように、ある神話に登場する女神の名だ。

そしてその神話は、近接する他の地域の神話とあまりに似た系統の話や性格、見た目なので同一視されている神が多い。

例えば、最高神「ゼウス」と「ユピテル」。月の女神「アルテミス」と「ディアナ」。

そして……、「ヘラ」と「ユノ」。

「ユノ」のスペルは、「Junno」であり、これは英語で「6月」を意味する「June」の語源。

最高神の妻、結婚と家庭を司る女神を表す月だからこそ、「6月の花嫁」「ジューンブライド」なんて風習が存在する。

……本名で登録するほど馬鹿ではなくても、自分の本名にちなんだアカウントや登録名にする奴は多い。

もしもという可能性に縋っただけだったが、自分自身が好きなのが、自分だけを愛しているというのが「June」というアカウントといい、顔はスタンプで隠しているが取り巻きにでも取らせたのかやたらと多い自分の写真でよくわかる。

写真といい、内容といい、いつ頃始めたのかも見てみれば今年の3月の終わり頃、高等部を卒業した時期と一致する。

間違いなく、ヘラのSNSだと断言していいだろう。

……この掲示板に晒した写真と同じ……さすがにこちらは自分の保身のために目線だけ入れたものを載せて、「ム力つくこの女をめちゃくちゃにする方法募集中」などと書き込んだ、今すぐにでも八つ当たりでモニタを壊したくて仕方がないものだが、同時にこれこそいい「大義名分」になる。

……童帝にこのSNSの存在を教えれば、奴ならこの登録者の個人情報ハッキングしてさらに確固たる証拠に出来たかもしれないが、俺は伝えなかった。

電話口で、わざとSNSは見間違いだったからもう探さなくていいとまで言った。

その理由は、あまりに幼稚な自己満足だ。

上手くいけば、童帝に頼らずとも俺自身の手で「確固たる証拠」を手に入れることが出来るかもしれないという期待から、俺は言わなかった。

『協力してくれるって言ってくれた人たち、皆ありがとう！』

ほんと、この女ってマジム力つくでしょ！ わかってくれて嬉しい！！

じゃあ、早速なんだけど今日、作戦会議しない？ もしよかったら今日のAM0時にB市に来てほしいな！』

つい数時間前に投稿された文面。

エヒメさんをまた……いや、今度は直接的に、そして最も最低な方法で何もかもを壊して奪って殺し尽くす仲間をまったく悪びれずに募集して、そして実行しようとしていた。

一般公開の設定なので募集した側も立候補した側も本気ではない

可能性が高いが……どちらもやってこない可能性の方がはるかに高いのはわかっていたが、俺はPCの電源を落として向かう。

奴のSNSで指定されていたB市に、指定されていた場所まで。

……「確固たる証拠を自分で掴めるかもしれない」こそ、俺にとつての大義名分であることは自覚していた。

ああ、そうだ。俺は証拠など、大義名分など本当はどうでもいい。ヒーローとして、人として終わってしまったてもいい。

ただ、奴をこの手で殺したかっただけだ。

\* \* \*

豊かで柔らかそうな、絹糸のような銀の髪が目の前で揺れていた。ヘラの髪だ。

「……準備、しなくちゃ」

唇を噛みしめて、彼女はケータイを折りたたむと同時に振り返る。

私の方に一直線に向かってくるけど、私に気付くこともなく彼女はそのまま突き進んで通り抜けて、私の後ろのクローゼットを乱暴に開けて、服をめちやくちやに取り出して、自分の着ていた服も脱ぎ捨てる。

しばらく悩んだ末に、結局着替えたのは何故かまだ取って置いてたらしい、高等部のジャージ……。

たぶん、動きやすくてあんまり目立たない服がそれしかなかったんだろう。

それに今の季節にはまだ早いフード付きのコートを着て、後は財布とケータイ、車の鍵という最低限のものだけを持って出る。

屋敷の中でメイドさんや執事さんがヘラに「お嬢様！ どうしたんですか!？」と尋ねるけど、彼女は「うるさい！ 邪魔!!」とヒステリックに叫んで、車に乗る。



そして乱暴にエンジンをかけて、発車させた。

私は黙って、彼女の後についてゆく。

それしか、出来なかった。

……今はまだ、何もしなかった。

## 守護者

血まみれの服を脱がせて拭いて着替えさせても、エヒメは全く目を覚まさなかった。

苦しそうだとか魔されてなんかはいないが、別に気持ちよさそうでもなく、マジで「寝てる」としか言いようのない爆睡してる。

これ自体には、別に心配や焦りはない。こいつがテレポートのキャパオーバーした時がこんな感じで最低丸一日は寝続けて、起きたらケロツとしてる。

慣れる程の経験はしてねーけど、慌てる程でもない。

……ただ、聞いてねーけど状況からしてこいつがキャパオーバーするほど、テレポートを使つたとは思えないんだよな。

それでもう一つ、妙に気になることがある。

気のせいだと思う。けど、妙に違和感を覚える。

だから俺はエヒメを布団に寝かせて、電話する。

「フブキ組に入りたくなくなったら、いつでも連絡しなさい」と言つて渡された連絡先、エヒメが「捨てたら失礼でしょ!」とか言つて、とりあえず冷蔵庫に張り付けてて良かったわ。

「あら、サイタマどうしたの? ついにフブキ組に入る気になった?」

「いや、ちげーけどちよつと聞きたいことがあるんだ」

開口一番、挨拶もなしにフブキは相変わらずなことを言うから、俺も挨拶抜きで本題に入った。

「お前、自分の超能力以外にも詳しいか? っていうか、テレポートについて何か詳しいか?」

「……エヒメに何かあったの?」

俺の質問に答えず、逆にフブキは訊き返す。当たり前か。そういやこいつにはまだ、ジェノスがエヒメを抱きかかえて帰つて来た日の説明をしてなかったな。

「まあ、色々あったし何か知らん間に解決したと思つたら、またややこしいことになってるんだ。」

その説明はあとでするから、とりあえず俺の質問に答えてくれない

か？」

長い説明は苦手だからとりあえず後回しにしてくれと頼んだら、フブキも「いいわ」と答える。

「でも私は正直言つて、超能力者じゃない普通の人間よりは詳しいかもしれないってレベルよ。」

能力がそもそも私とエヒメじゃ別物だし、テレポーターも少しは知り合いがいるけど、エヒメと違って物を数メートル先に跳ばすのが限度だったり、コントロールできず危機的状況とかに陥らない限り発動しなかったりとかで、エヒメの能力に似てるようだとぶん原理が違ってそうだから、参考になるとは思わないわね」

フブキの前置きに、そりやそうだろうかと納得する。けどそれでもやっぱり、今まで調べもしなかった俺よりは詳しいだろうと思ひ、フブキに訊く。

「なんかさ、能力の使い過ぎで体重が軽くなるとか、逆に重くなるとか、そういう副作用ってあったりするか？」

「はあ？」

もうたつたの一言で、「訊わからん」という心境をよく表していた。

いや、気持ちはわかるし俺が言った本人だけども、そこまで「こいつは何を言ってるんだ？」でいいかげんな声を出すなよ。

「……軽くなるのは、まだあり得るかもね。超能力つてたいがい、脳から精神エネルギーを出して、それをコントロールすることだから。だから大体の超能力者は、頭というか脳にダメージを負った場合、それが脳震盪とか一時的なものでも回復するまで使用不可か、コントロールが大いに乱れるわ。逆に、一般人が脳にダメージを得て精神エネルギーを放出・コントロールすることが出来るようになった事例も多いわね。」

まあ、そんなんで基本的に集中力がどの能力でも必要だし、脳もたぶん普通の人間が使わない部分まで使用してるでしょうから、使いすぎたらその分カロリーを盛大に消費して痩せるってことは、……あってもおかしくはないんじゃない？

私はそこまで行く前に、脳が自動でブレーキをかけるから経験ない

けど。あと、重くなるはちょっとどう考えても理屈が出てこないわね」

思ったより真面目に答えてくれたのはありがたいが、俺の説明が悪くてなんか微妙に今のエヒメの状態にフブキの説明は合わない。

「んー、なんかそういうのじゃねえっつーか、軽い重いつて言うのも何かマジで体重が重くなってる、減ってるとかじゃないんだよ」

「はあ？ 余計に意味わからないわよ」  
だよな。

「俺も意味わかんねーよ。何て言えばいいのか……エヒメ、テレポートするとどんどん疲れがたまっついていって、それが限界を迎えたらそのままぶっ倒れて丸一日くらい目が覚めないんだ」

「ああ、前に本人から聞いたわ。けど別にそれは珍しくないわよ。体力の代わりに精神力を使うから、限度を超えたら電池が切れたみたいに倒れて泥みたいに寝るはよくある副作用で、それ自体は別に心配するようなものじゃないわよ」

「あー、俺もそこは心配してねえ。よくあることだつてことは知らなかったけど、もう何度か経験してるからな。」

……でもな、今もそんな感じで寝てるんだけど、何かいつもと違うんだよ」

電話で説明をしながら、横で眠るエヒメに目を向ける。

息はしてる。顔色も悪くない。寝返りも寝言も言わないけど、これはいつもこんなもんだ。

手首を持ち上げてみたら、脈も普通にある。

いつもの、キヤパオーバーした時と変わらない寝方だ。今までの経験上、心配する必要はないはずだ。

……だけど、違和感がまとわりついて離れない。

「なんかき、いつもならキヤパオーバーでぶっ倒れた時、別にこいつが太った訳じゃないのにやたらと体が重く感じてたんだ。意識を失った瞬間、ずんつて一気に重くなるような気がするんだ」

「それも別に、超能力者とか関係なく普通じゃない？」

人間に限らず生き物なら、抱きかかえられる時とかは相手や自分の

負担にならないよう、重心とかを無意識に考えて体を任せるから、意識を失って全身が弛緩してる状態だと、相手からしがみついてくれるとかしてくれないから、同じ体重でも体感的に重くなるはずよ」

それも原理はよくわかってなかったけど、そういうもんだとくらいに理解はしてた。

別にエヒメに限らず、気絶してる人間と意識が多少でもある人間とじゃなんとなく重さが違うなーと思ってたし。

だから、なんとなく重く感じる程度なら何も気にしなかった。いつも通りだと思った。

「……じゃあ、軽く感じるって場合はあるのか？」

俺の問いに、フブキは何も答えなかった。「はあ？」という声すら上げず、何かを電話の向こうで考え込むような息遣いだけが聞こえる。

「なんか今日のエヒメは、いつもと違って『軽く』感じたんだ。きつちり体重測ったわけじゃねーし、そもそもこいつの正確な重さなんか知らねーけど、体重がガチで減ったとかじゃないというか……あー、もうなんていえばいいんだろうな」

ただでさえ長え話も分かりやすい説明も苦手だつづうのに、俺がそもそも訊きたいことをどう説明したらいいかわからなくて、頭をぼりぼり掻き筆る。

「なんかいつもが水を吸ったスポンジなら、今はカラカラに乾いたスポンジというか……中身がないような気がするというか……」

「意味わからないわよ、サイタマ。中身って何よ中身って、まさか魂が抜けたとか……」

俺が何とかわかりやすく例えようと頭をひねらせて選んだ言葉を一刀両断したかと思ったら、フブキがまた黙った。

「フブキ？」

声をかけると少し間をおいて、フブキは答えた。

「……サイタマ。かなり突拍子がないけど、ちょっと説明がつく仮説が浮かんだわ。」

エヒメ、本当に魂が抜けてるのかもしれないわね」

「はあ？」

今度は俺が、「意味わからん」と「何言ってるんだこいつ？」を代弁した声を上げた。

「もちろん、本当に幽体離脱してるとは思っていないわよ。私、幽霊とかそういうのは信じてないし。」

でも超能力は脳から精神エネルギーを放出して、それをコントロールするのが基本って、初めに言ったじゃない？」

「ああ。そうだな」

俺の反応にフブキが少しムキになったような声をあげて補足する。

とりあえず俺の方も、余計な口は挟まずにフブキが思いついた「突拍子のない話」をまずは聞いてみることにする。どんなに突拍子がなくても、そもそも体重変わってないはずなのに妙に軽いつて突拍子のない事態が起こってるんだから、結論もそりゃ突拍子がねーだろう。「この『精神エネルギー』は、正確には何なのかはわかっていないわ。これをそれこそ『魂』と仮定したら、私たち超能力者は体から自分の魂の一部を引きずり出して、私やお姉ちゃんみたいな念動力ならそれを手足として自由に操ってる、千里眼とかなら目の機能だけ遠くに飛ばしてるってことになるわ。」

「ここまでOK？」

「まあ、なんとなくはわかる」

フブキの確認に頷く。というか、初めの超能力の説明より、こっちの方がイメージしやすくて納得も出来た。

「そう。で、エヒメの能力って基本的に『自分が逃げる』事が主体だから、自分が触れてる物や相手も一緒に跳ぶはついでなんだっけ？」

あの子、能力が目覚めた初めの頃と違って、服もちゃんと一緒にレポートしてたの？ 理屈の上じゃ、裸になってもおかしくないわよね？」

「ん？ いや、さすがにマッパになった事はないけど、そういう初めの頃は上着とか靴とかだけが一緒に跳ばないで、その場に縄ぬけした後みたいに残ったのがよくあったな」

いきなり話が変わったことに首を傾げながら、俺は答える。

「そういうあったな、そんなこと。たぶん初めの頃のあれは、あいつ

の肌に直接触れてるかどうかと一緒に跳ぶ条件だったんだろう。

「そう。……それで話が戻るんだけど、超能力者の基本が本来なら体の内側から出ることがない、もしくは微弱に出続けてるけどコントロールのしようがない精神エネルギー、『魂』を自分の意思で出し入れしてコントロールすることなら、エヒメの能力も基本中の基本である基礎は、『エヒメの体がどこかに跳ぶこと』じゃなくて、『エヒメの魂だけがどこかに跳ぶこと』になるんじゃないかしら？」

どういう事情でそうなったかはわからないけど、初めの頃の上着や靴だけ残されて跳ぶのと同じように、コントロールが上手くいかなくてその子、体を持っていき忘れてテレポートをしてるんじゃないか……って言うのが、私の仮定なんだけど」

んなアホな……と切り捨ててやりたい話だったけど、言われてふと思い出した話がある。

たまーにエヒメが話す夢の話だ。

「……そういや、たまにこいつ変な夢見たとか言う時があるわ。幽霊みたいに自分が誰にも見えない声も聞こえない、壁とか自由にすり抜ける存在になって、知らない場所をフラフラ好きに歩き回るだけなんだけど、妙にその夢の場所とかガリアルだとかなんとか言ってたわ。

……しかもその夢、テレポートが使えるようになる前によく見てたとか」

「……それ、体を持っていける程のパワーやコントロールがなかっただけで、その頃既に能力が目覚めてたんじゃない？」

だよな。

俺が想像した通りの事を、フブキがまとめてくれた。

つーかマジでその説明だと、他のも色々説明がつくんだよ。

状況的にむしろレポートを使っていなかったはずなのに、キャパオーバーみたいな状態になってるのも、体を持っていき忘れてどこかをこいつがウロウロしてるんなら、そりゃ突然ぶっ倒れてこうなるわ。

体が重く感じるのは、最初にフブキが言ったように体が完全に弛緩

してるからなだけの可能性が高えけど、今の軽く感じるのはそれこそ物理的じゃねえけど、体の中にあるはずのものがないからだ。

……このアホ妹、どこに行きやがったんだ!?

どこまでも斜め上の行動ばっかどつて、全然大人しくしていないこのアホを心の中で怒鳴りつけて、溜息をつく。

「あー、納得したわ。フブキ、たぶんマジでそれ当たってるぜ」

俺に言葉にフブキは少し嬉しそうに、「そう?」と言ってから、一度気を取り直すように咳をして「それで? 何でそんなことを訊くような状況に、エヒメはなったの?」と訊いていた。

いきなり訳わかんねー質問をしたし、エヒメの事をマジで心配してくれてんのはわかってるから、俺としてはちゃんと答えるつもりだった。

「悪い、フブキ。説明はちよつと待ってくれ。また後でかけ直す」

電話口の「え? ちよつと! 待ちなさいよ!」という声を無視して切る。

悪い、フブキ。ちよつとこつちを片付けたら、すぐに連絡するわ。「で、きつきから何の用だよ、ソニック?」

俺は振り返ってベランダに顔を向けると、確かに鍵をかけて閉めたガラス戸が開き、私服からいつものやたらぴっちりした服に着替えたソニックが入ってきた。

おい、土足で上がんなよ。

\* \* \*

「安心しろ。今日はお前を殺しに来たわけではない」

土足で人ん家に入ってきてても悪びれず、薄ら笑いを浮かべながら別に初めから心配してなかったことをソニックは言い出す。

「逆に今日もいつものように殺しに来たとか言ってきた方が、いっそ尊敬するわ」

もう土足で上がんなとか、いい加減諦めろよというのもバカらしく、素直に思ったことを口にしたなら、それが気に入らなかつたのかソニックの顔から薄ら笑いが消えて、苛立ったような顔になる。

「……貴様は本当に、面の皮が厚くて実に『ヒーロー』向きだな」



「はあ？」

一度鼻を鳴らして言ったソニックの言葉が皮肉であることくらいは理解できたが、いきなりなんでそんな皮肉を言われなくちやなんねーのかわからなくて、フブキの突拍子のない仮説を聞いた時と同じ声上がる。

それもまたソニックは嘲笑する。

俺が自分のバカさ加減に気づいていないことを嘲って、苛立って、八つ当たりのように叫んだ。

「自分の妹よりも他人を優先して、自己満足の為の『ヒーロー活動』は楽しいか？ 肝心な時に傍に居ることさえも出来ず、傷つけ、奪われて、その残骸を回収することしか出来ない分際で、それでも貴様は正義だのヒーローだのよく名乗れるな」

……反論する気はなかったし、出来る部分もなかった。

ソニックの言うとおりだ。

俺はあいつも守りたい、大事にしたいと思いつつながら、悲しませたくないっていつも思っているくせに、いつだって優先するのはエヒメじゃなくて他人、そして俺自身だ。

守りたいのも、悲しませたくないのも、結局突き詰めて考えればエヒメの為じゃなくて、俺の為だ。

俺が怪我したあいつを、泣くあいつを見たくないだけにすぎない。そうやって他人や自分を優先して、あいつの側から離れて、あいつを見てやれなくて、あいつは何度だって怪我をして、たくさん嫌な思いをして、あらゆるものを奪われて、俺がしてやれることはかろうじて残ったものをこれ以上奪われないように、壊されないように回収することしかしていない。

守れてなんかいない、ソニックの方がよっぽどエヒメを守ってくれたことなんかわかってる。

だからこそ黙って聞いていたのに、ソニックは相手にされていないとも思ったのか、こめかみに青筋を浮かべて、一気に距離を詰める。

俺は、動かない。

ただ眼だけでソニックの動きを追う。

ソニックは俺の首に刃物、なんか忍者がよく投げたりして使うクナイってやつを突き付けて、俺に言う。

「いらんのなら、俺によこせ」

何を？ と尋ねる必要はない。

俺の後ろでのんきに魂はどつかをうろつき、体は寝てるアホのことを言ってるのはわかりきってる。

「貴様らのような正義ごっこにうつつをぬかし、優先順位を間違えて、結局何も守れない愚か者に奪われ、壊されるのは業腹だ。

貴様らが壊すくらいなら、守る気がないのなら俺によこせ」

……それも、もしかしたらいい選択かもしれないと思った。

「ヒーロー」を選んだ俺やジェノスには出来ない、多くの他人や世界そのものよりたつた一人をしがらみなく優先して守れる、怪人ではなく普通の人間を躊躇なく殺せるこいつの方が、今日のようによっぽど俺らなんかよりもエヒメを守れる。

少しだけ、そんなことを考えた。

「やらねえよ」

考えただけだ。了解することなんか欠片も頭に浮かびもしなかつたくせに、ただ無意味に考えて、俺は首に突き付けられたクナイを掴む。

本気で突き刺す気なんかなかったのか、ソニックはクナイを俺に握れたら素直にそれを離して身も引いた。

「いらん訳ねーだろ。こいつが自分の意志で誰かを選んで、俺から離れるんなら俺は何も言わねえ。そんな資格も権利もない。こいつが幸せになれるのなら、誰だっついいい。

だからこそ、俺が勝手に誰かにやる気もねえ。

俺はお前の言うとおりに、自己満足で、趣味でヒーローやってる。いつも優先順位を間違えて、こいつに限らず守りたいものを守れなくつて後悔は山ほどしてきたよ。

……だからこそ、妥協はしない。俺は何度間違えても、何度失敗しても、それでもヒーローを続けるし、こいつが俺の側がいいっていうんなら、絶対に手放さない。そうしないと、それこそ俺はこいつを傷

つけて、守れなかった過去の意味がなくなる。

後悔して挫けて立ち止まって、そんなこととして傷ついて守れなかったエヒメが救われるか？ そんな訳ねえよ。

俺はエヒメを守れなかったし、傷つけたし、救えなかったからこそ、立ち止まる訳にはいかねえ。こいつが言った『私のヒーロー』を、俺がもう後悔したくないからなんて理由で諦めてたら、それこそエヒメが傷ついたことも無意味になる。

だからやらねーし、ついでに言うところヒーローだってやめねえよ」

ソニックの皮肉に、俺はもはや開き直った。

だってしょうがねーだろ？

俺が辞めたくなくて、エヒメも、どんだけ傷ついてても、俺がバカやって泣かせても、それでもあいつ自身もやめてほしくないって願ってるんだ。

お前がたとえ、エヒメの為を想って俺に「ヒーロー」を諦めさせようとしてたんだとしても、やめねえよ。

趣味だからこそ、好きでやってるからこそ、……あいつを守りたいのは義務とかそんなんじゃないやなくて間違いなく俺の意志だから、好きでやってることだからこそ、絶対に妥協も諦めも出来ねえんだよ。

しばらく、俺とソニックは狭い部屋の中で睨み合っていたけど、ソニックの方がまたバカにするように鼻を鳴らして、睨み合いは終わる。

「勝手にしてる。俺には何ら関係ない。」

……貴様の意思も、そこで寝てる阿呆の意志もな。俺が欲しいと思っただのなら、勝手に奪うまでだ」

そう言っつて、ソニックはベランダに出る。帰るのかよ。

……お前、何しに来たんだよ。俺に喧嘩を売りにというより、いつそ「妹さんを俺にください！」って言いに来たも同然だったぞ。殺伐しすぎで、しかも俺どころかエヒメの意志も無視してたけど。

「ソニック、お前さ、エヒメのことが好きなのか？」

思わず、今更なことを尋ねてしまった。ぶっちゃけ気づきたくなかったし、ジエノスとは違って素直に認めるとは思わなかったし、何

よりエヒメに執着してるのは間違いないけど、恋だとか愛だとかそういう感情とは限らなかつたから訊きたくなかつたけど、なんか思わず訊いてしまった。

……執着してるのは知ってたけど、まさか俺にはつきりと「よこせ」というほどだとは、思っていなかつたからかもしれない。

ソニックは振り返り、鼻で笑った。

「貴様は実にバカだな」

その返答は予想通りだった。

「貴様は、好きでもないものを欲しがるか？」

続けられた言葉は、予想とは真逆で思わず俺は眼を見開いた。

予想外に素直な言葉、俺の問いを肯定する質問返しに驚いていたら、そんな俺をバカにするように薄ら笑いを浮かべながらソニックはベランダから飛び降りて、そのままどっか行つた。

……マジであいつ、何しに来たんだ？

まあ、いいか。

なんだかんだであいつとの問答で、最近頭の中でごちゃついていた考えに整理がついた。

ああ、そうだ。

3年前のことを後悔するのはバカらしい。どうやってももうその頃には戻れないんだ。もう俺は、ヒーローという道を選んでここまで来たんだ。

あいつをたくさん泣かせてまでして選んで、ここまで来たのに今更になって「やっぱやめる」と言ったら、それこそあいつは何のために泣いたんだ？

例え結果として俺がこのままヒーローを続けていくよりもやめた方が、あいつが泣かなくなつて、傷つかなくなつて、幸せになれるとしても、あいつが過去に傷ついて泣いて、救われなかつたことには変わりない。

その変わらない過去の行きつく先を、「エヒメの所為で夢を諦めた」なんて結末にするわけにはいかない。

たとえどんなに遠回りでも、俺は「エヒメが幸せになつた」って結

末にしなくちやいけないんだ。

そもそも俺はその為に「ヒーロー」を目指したんだ。妥協して諦めたらそれこそ、本末転倒だ。

「……だから、悪いな。エヒメ」

眠るエヒメにそれだけ声をかけるけど、相も変わらず何の反応もしない。

……本当にマジでお前は今、どこにいるんだよ？

逃げたかったのか、それともまた変な暴走を起こしたのかしらねーけど、早く帰ってこい。

これからもまだまだ、傷つけて泣かせるダメなヒーローでダメな兄ちゃんだけどさ、絶対にお前が幸せで笑って終わる結末を作るから、そこにたどり着いて見せるからさ。

だから、早く起きろよ。

目が覚めて俺がいなくちや、お前は不安がるだろ？

起きるまで傍にいてやるから、だからさっさと起きろ。

さっさと起きてそんで、お前の「敵」を倒しに行こう。

そんなことを考えながら、エヒメの寝顔を俺は眺め続けた。

フブキに連絡するってのは、すっかり忘れていた。マジですまん。

\* \* \*

真面目だから法定速度はきっちり守っていたけど、それでも出していいぎりぎりの最高速度で乱暴に運転を続けて、たどり着く。

お兄ちゃんが半年くらい前に倒した巨人の所為で壊滅して、未だ復興が進んでいないB市。

巨人が倒れこんで、建造物が何もかも倒壊した地域からギリギリ外れてはいるけど、それでも近隣地区だから巨人が倒れた衝撃の地震で、倒壊こそはしなかったというレベルの被害を受けた建物。

……私たちの母校だ。

確か警報が出てたおかげで、生徒や教師の避難は済んでいたから犠牲者は出ていない。

けど、建物そのものの被害が大きく、もともと古い学校だったから、そろそろ改修か建て替えかという話が出てたので、これを機に全然別の場所に学校を建て替えたというのを、最近知った。

ヘラたちと再会してから、前に進もうと決めたから、ようやく勇気を出して調べた結果だ。

知った時、なんだかんだでもものすごく寂しく感じた。

この場所は……決して悪い思い出ばかりではなかったから。

楽しかった記憶も、間違いなくあった場所だったから。

ただヘラにとってはそうではないのか、彼女は乱暴に車を止めて、コートのフードを被って車から降り、ほとんど叩きつける勢いでドアを閉める。

カギはかけないで、そのまま廃校になった赤煉瓦造りの豪華な洋館にも見える校舎内に、早足で向かっていった。

カギはかける必要がないと思ったのか、それともそんなこととも思いつかないほどにあせって急いでいるのか。

ただ彼女は、ケータイを握りしめて、唇を噛みながら呟いた。

「……許さない。絶対に、許さないんだからね。エヒメ」

私が傍らに居ることなんか気づかず、彼女は私を「卑怯者」と言った時の顔で呟き続ける。

「またバカな真似するんじゃないわよ。……絶対に、許さないんだから！」

## 虚構の女王

当の巨人化した怪人はキングによって倒されたが、それでも被害は防ぎきれず半年以上経った今でさえ被害の爪痕が痛々しく残る地区に、似つかわしくない高級車が一つの建物前で乱暴に止まる。

建築物としての外観は残っているが、巨人による被害の余波か、通う人間も手入れする人間がいなくなったからか、それとも元々が古い所為か、妙にわびしくて不気味な廃校。

赤煉瓦造りで外観も学校よりも洋館を思わせ、元は素晴らしく豪華な学校であったことを想像させるが、日が落ちZ市のゴーストタウンとさほど変わらない崩壊した街の中に佇み、外壁には生命力旺盛な蔓のツタで覆い尽くされて、もはや豪華や優雅という形容は完全に風化し、不気味さしかここには残っていない。

そんな廃校は、周囲が壊滅してるためか門や扉を施錠していない。必要なものは全て運びだし、壊すのを待つだけの建物にわざわざ施錠を施す必要性を感じなかったのだろう。

仮に施錠してあっても、この女には無意味。鍵くらい、用意してるからここを指定したはずだ。

今の季節にはやや早いロングコートのフードを目深にかぶり、それで顔を隠したつもりかどうかは知らないが、場違いな高級車から女が、ヘラが降り立った。

校舎の屋上で俺が立っていることなど、気づきもしない。

……今、奴の前に俺が降り立ち、フルパワーの焼却砲を放てばどうなるだろうか、考えた。

復興が進んでいないため、このあたりはZ市のゴーストタウンと同じく人がいない。

いるのはヘラと、奴より先に正門ではなく裏門側に車を止めて俺よりも先に来ていたらしい、あのバカげたSNSの誘いに乗ったらしい奴らが校舎内にいるだけだ。

ヘラを骨も残さず焼き払い、この校舎も奴らの車も全て跡形残さずに焼却しつくしてしまえば、あとは「センサーで怪人らしき反応を発

見し、交戦した」と言い張れば、誰にも疑われないのではないか？

仮に奴らがこちらに向かったという証言も、俺が見つけた時には既に怪人に襲われて亡くなっていたと言えば……

……そんな悪魔の囁きを振り払う。

殺してやりたい。今は暴走サイボーグより、ソニックよりも奴を、ヘラを殺したくて仕方がないのは事実だ。

けれど、それはダメだと自分に言い聞かせる。

あの人は、先生だけではなく俺の事も同じくらい頼りになると言ってくれた。

「私のヒーロー」と言ってくれた。

だから、ダメだ。

先生の手が奴の血で汚れてしまったら、それこそエヒメさんが今度こそ本当に何もかも失うように、俺の手を汚してもあの人は喜びはしない。

先生よりは傷が浅くとも、必ずあの人は自分を責めるのが自惚れではなく目に見える。

自分の所為で俺が罪を犯したと自分を責め立てるのが分かっているから、俺は憎悪に燃える自分自身に言い聞かせる。

自分は「ヒーロー」なのだ。たとえ何にも勝てなくとも、何かを守り誰かを救う存在なのだ、言い聞かせる。

「大口だけ叩いて、結局何も見えてない、何も守れない無力で無能なクソガキ」と脳裏に蘇ったソニックの言葉を振り払う。

……俺は、ヒーローだ。あの人がそう言ってくれたんだ。

何度も傷つけて泣かせても、それでも意味を見出して、価値を与えてくれたんだ。

だから、貫かなくてはならないんだ……。

\* \* \*

荒れ狂うコアの熱を、憎悪を押しえつけ、俺はセンサーで連中の動きに集中する。

SNSの誘いに乗った連中はともかくヘラは立場上、物理的な制裁ならばあとでこちらに社会的な報復をしてることが、童帝に言われ



るまでもなく予測できる。

それが俺に向かうのならいいが、エヒメさんに向えば最悪だ。

だからこそ、同じく社会的な制裁でまずは奴から「権力」や「後ろ盾」という力をそぎ落とさなければならぬ。

所詮は俺やエヒメさんと同じ、まだ20にも手が届いていない未成年だ。

奴の取り巻きは奴自身のカリスマに盲信してる輩よりも、その後ろ盾を恐れてか、おこぼれが欲しいだけの寄生虫どもが大半だろう。

奴の犯罪教唆の証拠さえつかめたら奴の家は、家族は良識的だろうが娘がああ育つも納得な外道だろうが、どちらにしろ結末はそう変わるらん。

良識的なら、娘に相応の罰を正しく与えるだけだ。外道なら娘を切り捨てるか、もしくはその証拠を捨てさせるためにこちらの要求の大半を飲むだろう。

奴から後ろ盾と取り巻きさえ奪えば、後はおそらくこちらから行動を移す必要などないはずだ。

一人では何もできない、周囲を利用して自分の手を汚さないのは、臆病な本質の現れだろう。自分の手で自分の憎む相手を排除する勇氣など、奴にはありはしない。

周囲が誰も助けてくれなくなったのなら、箱入りで世間など何も知らない近視眼的な奴など、簡単に淘汰される。

仮に何もかも失った捨て鉢で直接的にエヒメさんに被害を与えようものなら、それは俺にとって都合がいい。

それは今度こそ彼女の傍にさえいれば、防げることだ。

そして何より、奴を焼き尽くすいい「大義名分」になるのだから。

……エヒメさんを悲しませないために、これ以上傷つかないように抑えつけていた欲望が、全く抑えられていないことに苦笑する。

ああ、俺はヒーロー失格だ。

相手の更生など期待していない。破滅と俺自身の手で排除できる機会ばかりを望んでいる。

上っ面しか取り繕えていない、本質は奴らとそう変わらない、どこ

までも身勝手に醜い自分を嫌悪しながら、それでもこの上っ面だけを最後の砦にして、俺は行動する。

そろそろ場所を移動しなくては。センサーで現在地や動きは掴めているが、何を話しているかは屋上からでは集音機能を最大にしようがさすがに拾えない。

SNSで指定されていた場所は、職員室。

廃校になって日が浅いためか、昔のHPは未だに残っていたので見取り図は簡単に拾えて、しつかり記録した。

その見取り図を思い返ししながら、俺はヘラや他の連中と鉢合わせしないルートを検索したところで、センサーが二つの気配を捉える。

スピードからしてどちらも車。

まだ、あんな畜生にも劣る誘いに乗る輩がいたのかという忌々しさと憎悪を、歯を食いしばって堪えながら、俺のすべきことは変わらなうと言いつつ聞かせ、センサーを後から来た奴ではなく校舎内の連中に集中させる。

そのタイミングで、妙なことが起きる。

ヘラは3階の職員室に一直線に向かっていたのだが、階段を駆け上がって3階に辿りついたあたりで一度、足を止める。

そして、そのまま階段を駆け下りた。

俺の存在に気付かれたのかとも一瞬思ったが、屋上にいる俺を校舎に入る前ならともかく校舎内なら俺と同等の高感度センサーでも内蔵されていない限り無理だ。

センサーはヘラ以外の動きも伝える。

職員室の中いた奴らが階段を駆け上がり、そして駆け下りる足音でヘラの存在に気付いたのか、職員室から出て来て何人かがヘラを追った。

それだけでも状況がわからないというのに、同時に耳障りな音が鳴り響いた。

ガラスの割れる音だ。

窓ガラスが割れたことで屋上にも集音機能を最大にしても、硝子の破碎音以上に耳障りな声が聞こえてきた。

「ちくしょう！ 逃げやがった！」

「追え!!」

酒やけしたようなかすれたがなり声と、おそらく逃げたヘラを脅すのと逃げられたことに関しての八つ当たりで、さらにガラスを破壊する音が聞こえる。

それは、センサーの動きと連動していた。

事態がまったくつかめない。

だが、体は勝手に動いた。

階段を降りるという無駄な時間は駆けず、俺は屋上からそのまま飛び降りた。

右手は屋上の縁を掴んでそのままワイヤーで落下し、3階の職員室の窓を蹴破って中に入る。

まだ数人、髪は元の色がわからないほどに抜いて、顔面や体のそこからかしこにピアスを開けた、似たり寄ったりな連中が酒を飲んで、俺が現れたいきなり現れた現状を理解できず、一瞬間を開けてから叫んだ。

「な、何だお前は!」

「ちよっ、お、鬼サイボーグ!? な、何でS級ヒーローがこんなところに!」

もちろん俺はそんな叫びを無視して、手首を回収しながら左手で一番近くにあった机を奴らに投げつけた。

スチール製の机は近くの棚や他の机を巻き込み、派手な破壊音を上げて落下して奴らは沈黙する。

センサーの生体反応に減少はないので、生きてはいるだろうからそのまま奴らは放っておき、俺はセンサーを起動させたまま位置情報を確認しながら職員室を出る。

出る前に、ざっとだが見渡した職員室内、連中が持ち込んだもので何故、奴らがヘラを追う理由を察して、再び奴らを殺そうと誓う。

職員室内に散らばっていたものは、行きがけにでも購入したと思われる酒類、つまみだけではなかった。

デジカメにガムテープ、手錠、そして後は言いたくもない、記憶か

ら抹消してしまいたいもの。

……SNSで堂々と犯罪に誘う女の誘いに乗るほど、こいつらはバカではなかった。

それ以上に、最低な汚物だった。

ああ、そうだな。エヒメさんを襲えば、彼女自身に非はないのだから勇気さえあれば、戦う意志さえあれば簡単に訴えられる。

そんなリスクのある相手を襲うより、犯罪の共犯を募った奴を襲った方が、向こうにそもそも弱みがあるのだから、泣き寝入る可能性が格段に高い。

SNSに載せていた写真も、顔の大部分を隠していたがそれでも美人だとわかるぐらいの容姿だった。

多少の損得勘定が出来るのなら、エヒメさんよりもヘラを選ぶだろう。

……ただ、わからないのがヘラは何故、職員室に入る前に逃げただ。

まあ、俺には会話がさすがに拾えなかっただけで、外からでもわかるほどに下劣な会話をしていたせいで、自分が募った相手は自分の権力が通用しない鬼畜であった事に気付いただけだろうと、勝手に結論を出す。

そして、その結論が出ると同時に、ヘラと奴を追った鬼畜どもを追う足が急に重くなる。

パーツの不備ではないことは明白。

俺の心に忠実に、俺の全身のパーツが機能を低下させる。

何をしているんだ？ と俺が自分に尋ねる。

あの女を助けるのか？ という問いに、俺は答えられない。

あいつがエヒメさんにしようとしていたことがそのまま、自分に返ってくるだけ、ただの因果応報だろうと語る自分の声に何も言い返せない。

憎しみの連鎖を断ち切ることなどできない、許すことのできない俺が俺自身に囁き、誘う。

見捨ててしまえと。

それが奴にとって一番ふさわしい罰だと、俺は自分の手を汚さずに、最も憎い女に復讐が出来るると甘言を語り掛ける。

俺は、何も答えられない。

足は粘土質の沼でも歩くように重く、走ることなどできない。

………なのに、進む。

ヘラは逃げ回っている。そのまま下に、とりあえず1階に降りてしまえばいいものの、パニックを起こしているのか、2階で逃げ回っている。

その方向へ、ヘラの元へ、緩慢だが、あまりに重くて本心ではそちらに向かいたくないことなど誰の目からでも丸わかりだ。

それでも、亀やナメクジの方がまだ早いくらいの歩みでも、俺は向かった。

……何故、あの女を助けようとするんだ？

ヒーローだからか？

一番大切な人を今もお殺し続ける女を助けて、彼女は助けてやらないのか？

彼女を守れも救えもしない「ヒーロー」に、何の価値と意味がある？

自分自身のその問いに、俺は答えられない。

それでも、進んだ。

わからないけれど、心の大部分は自分自身の悪魔に屈しているくせに、屈することなくどうしようもなく残ったたったの一欠片が、俺を動かす。

それは、良心なんかではない事だけはわかってる。

もつともつと単純でバカで、それでも失えない、屈してしまえばもう俺は戻れないほどに大切な理由であることだけはわかっていた。

けれど、俺の歩みでは間に合わないことは明白だった。

向こうから、パニックに陥りながらもここの生徒だったただけあつて、地の利があつたヘラ自身が、四人の男から逃げて、逃げて、牛歩で階段を降りていた俺の前に現れなければ、間に合わなかった。

同時に、俺がいなければ奴は階段からそのまま一階に降りて、自分

の車まで逃げ切ることが出来たかもしれない。

階段の踊り場で、三階から降りてくる俺を見つけ、目が合う。

三日前の、俺より背が低いのにこちらが見下されているような高慢さは面影もなく、見も知らずの男に追い掛け回された恐怖でぐしゃぐしゃの泣き顔で、俺を見上げる。

俺を見てまずは、信じられないと言わんばかりに目を見開き、そして口を開く。

「エヒメは……」

何を言いたかったのかは、わからない。

空気圧縮で撃ち出す音にしてはかなり派手な音と共に、ヘラは「あぐっ！」と短い悲鳴を上げてその場に倒れた。

同時に周囲のガラスも割れ、地面には雪のように白い小さなものが散らばる。

B B弾だ。しかしいくらサバゲー用でも至近距離で撃つたのならともかく、それなりの距離で厚手のコートを着てる人間一人を悶絶させる程の威力は普通はあり得ない。

十中八九、違法改造した物だろう。

廊下から、「やーっと捕まえたよ」「鬼ごっこはもう終わりだぜ、おじよー様？」という下卑た声が聞こえる。

位置からして、俺にまだ奴らは気付いていないらしい。

ヘラは倒れ伏し、泣きながら悶絶し、それでも奴らから逃げよう腕を伸ばす。

這いずってでも逃げようと足掻くその姿を、俺は見下ろして見ている。

見捨ててしまえと、俺自身が囁く。

俺の心の大部分が、その声に同意する。俺は本心から、それを望んでいた。

奴がどんな目に遭おうが、自業自得、因果応報だと思えなかった。

それでも――

階段を飛び降りる。

甚振るために、近寄ってくる絶望を味合わせるためにゆっくりとヘラに近づいて来ていた暴漢どもは、俺が現れたことで職員室に残っていた奴らと同じ反応をする。

「な、何だお前は!？」

「ちよつ、お、鬼サイボーグ!? な、何でS級ヒーローがこんなところに!？」

少し笑えるくらいに同じことしか言わない前列二人を、俺はまず同時に回し蹴りで壁に叩き付ける。

そして悲鳴を上げてモデルガンを掃射する後列の一人は、そのまま真っ直ぐに向かってゆく。

やはり思った通り、違法改造している事は自分の身に受けてよくわかる。至近距離なら体に穴が開いてもおかしくないレベルまで威力を上げて、下手したら本物よりも威力が中途半端な分、拷問に適している悪趣味なものだ。

だが、俺には何の意味もない。

俺は自分に向けられたモデルガンを一閃してブチ折り、紙細工のように壊れたそれを茫然と見ていた男の腹を一発殴りつければ、奴は白目を向いて倒れ伏す。

最後に残った男の持つ武器は小さなナイフが一本。そんなもの、何の訳にも立たないとさすがに察して逃げ出すが、俺はその場から動かず、手首から先だけを飛ばす。

ブーストで勢いをつけた俺の拳を逃げる暴漢の背中に叩き付け、奴はそのままT字の廊下突き当りの壁にめり込んだ。

ワイヤーが手首を回収する。

同時に俺が自分に訊く。

何故、この女を助けた? と。

助けたわけじゃない。助けたかったわけじゃない。と、今度はやけにあっさり答えることが出来た。

そうだ。別に俺はこいつを、ヘラを助けたつもりはない。

……ただ、見えたから。

ただの幻視。俺が「あの人ならこうするだろう」と勝手に懐いてい

るイメージ。

そんな人だからこそ、この女が許せない理由であると同時に、どうしても「見捨てる」という選択を選べない理由。

見えたからだ。

あの深海王の時のように、俺に声援を送ってくれた少女を抱きしめて庇った時のように、あのA市壊滅の時のように、宇宙人をアマイマスクから庇った時のように、倒れ伏すヘラを暴漢から庇うエヒメさんが見えたから。

幻覚でも、幻視でも、そのエヒメさんと俺は確かに目が合った。

声は聞こえなかった。けれど、確かに聞こえた。

彼女は泣き出しそうな顔で、自分の無力さを何よりも悔やみながら、それでも俺に言ったんだ。

「助けて」と。

俺は、ヘラを守ったわけじゃない。守りたかったわけじゃない。

例え幻覚でも、彼女を守りたかった。

彼女に対して胸を張れない自分になんてなりたくなかった。

ただ、それだけだ。

俺は、「エヒメさんのヒーロー」でありただただだ。

\* \* \*

ひとまず、先に校舎内にいた下種どもはこれで全部のはずだ。

そういえば、ヘラが来た後にあと二人こちらに向って来ていたことを思い出し、そいつらは今どのあたりなのかを確認しようと戦闘とも言えないものだったが、一応切っていたセンサーを再び起動させようとした時、俺の手が掴まれた。

掴むと言うよりかろうじて引っかけると言った方が正確な力加減だったが、俺には不快で今すぐに掌のパーツ交換をしたい衝動に駆られる。

俺がその手を振り払おうとする前に、モデルガンのダメージから多少は回復して起き上がり、俺の手を掴んだヘラが言った。

「エヒメは、どこにいるの?」

「はあ?」



ヘラは、三日前に出会った時の女王然とした容姿も雰囲気もかなくなり捨てて、涙目で、鼻声で叫んだ。

「エヒメはどこなの!? こいつらは何なの!? エヒメにも何かしたの!?」

ねえ！ お願いだから教えて！ エヒメは、あの子は今どこにいるの!?!」

「おい！ 何の話をしてるんだ!? SNSでお前がこいつらを誘ったんだろう!?!」

俺が言い返すと、ヘラは一瞬だけ目を丸くして答えた。

「……SNS? 何、それ?」

その言葉に、「お前は何を言ってるんだ?」と訊き返すことも出来なかった。

俺の言葉が途切れたら、またヘラは涙ながらに狂乱して叫ぶ。

乱れた髪を振り乱し、逃げ回ったせいでコートもジャージもほこりまみれで、ところどころ破れているところすらある。

手や顔にも小さな傷がいくつかあり、けれどこの女はそれらを一切気にせず、泣きながらやけに古そうな、そして子供っぽいデザインのケータイを握りしめて、訴えかける。

「お願い！ 三日前の事は謝るから！ 酷いこと言ったのは謝るから、教えて!!」

私……止めないと……あの子がまたバカなマネをするのを……止めないといけないの！ 今度こそ、あの子を止めないといけないの!! 今度はちゃんと信じるから！ 疑わないから！ だから……だから!!」

その姿に、連想した。

巨大隕石の時、先生が「いってきます」と言うのを忘れてしまい、そのまますぐには戻らなかつたことで、エヒメさんが不安のあまりにレポートのし過ぎで今にも倒れそうになりながらも、先生を探しに行くと言っていた時を思い出す。

「お願い教えて！ 早くしないと、あの子がまた飛び降りちゃう!!」

泣きながらエヒメさんの安否を、彼女の「自殺」を案じて止めよう

とする女が、今まで俺が抱いていた「ヘラ」という女のイメージを完全に瓦解させる。

そして、弱々しくとも決して俺の手に縋って離さない繊手が、記憶を想起させる。

三日前の、記憶を。

『ち……がう……の……。ヘラは……違う……違うん……です……』

立ち上がれない、過呼吸手前の呼吸で、全身を震わせて俯きながらも、訴えた言葉。

……まさか！

先生はヘラの名を出した時、「誰だそれ？」と即答した。

先生は、名前を出すなど言った。

町中で同じ名前を聞いただけでも過呼吸になるほどトラウマだからと説明した。

俺はヘラを見て、誰を連想した？

その人物とエヒメさんの仲はどうだ？

寝具に針を埋め込んだ？ 誕生日のプレゼントを台無しにした？

そんな自作自演に何の意味がある？

学園の女王がわざわざ、被害者を演じる必要があるか？

ネットに極端に触れさせない学園の方針。その学園におそらく幼稚舎から通っているヘラ。

今、この手に握ってるケータイは何だ？

あいつは、俺になんて語った？

ヘラはなんて答えた？

「何のこと？」ではなく、「何、それ？」だ。

……あの人は、なんて言った？

深海王に立ち向かい、アマイマスクの殺気から戦い抜いたあの人が、トラウマそのものと再会したからと言って、心にもない擁護をすると思っているのか？

そんな訳ないだろ。

どんなに怖くても、それでも、あれだけは言わなくてはならないことだから、彼女は言ったんだ。

エヒメさんは、言ったんだ。

「ヘラは違う」と。

「……バカか、……俺は、……逆、だ」

あまりの自分の馬鹿さ加減に立ちくらみを覚えた。

俺の様子のおかしさに、ヘラの方も少しは冷静さを取り戻したのか、戸惑いながらも狂乱して泣きわめき、すがりつくのはやめて、俺を見上げる。

歳よりもどこか幼い、女王の虚栄が剥がれ落ちた少女に俺は訊く。

「……何が、送られてきた？」

「え？」

訊き返すにヘラに、再度尋ねる。

「お前は……!?!」

もうほとんど予測はついている、ただの確認にすぎない問いだったが、最後までは言えなかった。

風切り音もなく、電灯のついていない廃校の闇にまぎれて飛んできた、何の躊躇もなくヘラの首を狙って投擲した刃を俺は掴み取る。

わずかだが刺激臭を放つその苦無なら、ヘラが偶然よけることができてもかすただけで手遅れだろう。

……それくらい本気で、あいつはこの女を殺しにかかった。

「何のつもりだ？ 音速のソニック!!」

ゆらりと、闇の一部が一段と濃くなり、人の形を作る。

「それはこちらのセリフだ。偽善者が」

## 彼女を食い荒らした蟲

昼間、去って行った時とは違い訳の分からんTシャツの私服から、以前と同じ忍び装束で奴は現れた。

おそらくは、ヘラが来た後に感知していた生体反応のうち一つはこいつだったのだろう。スピードからして車かと思っていたが、このスピード狂忍者にとってそれは小走り程度にすぎなかったのか。

それにしても、こいつは何故いつもいつも、俺にとつて面倒で厄介で最悪のタイミングでばかり現れるんだ!?

「だ、誰!？」

ヘラもソニックの存在に気づき、怯えた声を上げる。俺が彼女の前に立ちほだかり、ソニックと向き合うと、奴は俺の行動を不愉快そうに鼻で笑った。

「貴様は虫唾が走るほどに模範的な『ヒーロー』だな。目の前にいる者なら何でも手当たり次第に助けて、感謝される。なるほど、貴様程度の安い自尊心を満たすには、効率的で合理的だ」

奴の見当はずれな嫌味を無視して、だが視線を外さずに後ろのヘラに言う。

「逃げろ。自分の車まで逃げて、全速力で走らせろ」

G4のパーツで改良した俺の最高速度を上回った奴相手ではそれでも分は悪いが、すぐ側にいるよりはマシだ。

しかし、俺の言葉にヘラは「でも……」と躊躇する。

何に躊躇しているのかは、わかった。だから言つてやる。

お前が今日、ここに来たのはあまりに残酷な罠であったことを。

「エヒメさんは、ここにはいないー!」

「……え?」

奴が何度も尋ねて、知りたがっていた情報を答えても、その情報を受け止めきれずに俺の後ろでヘラは呆けた声を上げる。

「ここにはいない! お前に送られてきたメールは全部ウソだ!」

現状を、与えられた情報を理解できず困惑して硬直しているヘラを動かす言葉をぶつける。

逃げるよりも、助けを求めるよりも先に出てきた言葉が、エヒメさんについてだった。

なら、これで立ち上がれるだろう。

「早く行け!! エヒメさんに謝りたいんだろ!!」

「!」

背後で立ち上がる気配と同時に、目の前に影が、闇が迫る。

まだ本気を出す気はないのか、追いつける。

ヘラの背中を切り払おうとした刃を掴み、握り折る。

ソニックはさつさと刀から手を離して、俺を飛び越える。刀は初めから匣か!

ブーストを起動させつつ、防火扉をもぎ取って投げつける。

さすがに狭い廊下、階段でそんなものが投げつけられたら避ける場所に限られているので、上手くソニックとヘラを分断することが出来た。

ヘラは俺の言葉が効いたのか、ソニックといい俺といいかなりの無茶をしているが、それを気にしたり怯えた様子はなく、一目散に走って階段を駆け下りる。

無駄に後ろに回って速さの主張という挑発は、さすがに今回はしない。そもそもこの手狭な空間でそんなことをする余裕は俺にも相手にもないが、奴のスピードを生かせないのは俺にとつて都合がいい。奴自身の腕力といい、武器の威力といい、それらはどれも俺の装甲を超えていない。

避ける必要がないのなら、狭くても奴よりは動きようもある。

「おい、ソニック! 貴様はどうやって、ヘラのことを知った!?!」

そんな考えで若干余裕が生まれ、応戦の合間に尋ねてみると、奴は鼻で笑いながら答える。

「はっ! エヒメの現在の写真ではなく昔の写真しか晒せていない時点で、その頃の知り合いであることは明白だろうが! 見るからに辛気臭いお嬢様学校の制服だったから少し調べたらすぐにどこの学校かは分かったし、学校が分かればあの女にたどり着くのも簡単だろうが! 『6月』なんてわかりやすいヒントもあつたしな!」

なるほど。むしろこいつは仕事柄、事前に情報をつかんでおくことが重要なはずだ。

俺よりはるかに断片的なヒントから目的の情報を掴みとることは長けていたのか。

だが、こいつも同じ罠にはまっている。

エヒメさんの写真や情報を晒したあの「6月」という名は、「ジューンブライド」の由来くらいを知っていれば誰でも即座にヘラを連想する名前。

エヒメさんの母校を知り、そこからヘラを知って奴は6月〓ヘラと結び付け、あとは俺と同じよう「June」で検索して、見つけたのだろう。あの、SNSを。

その名は、まんまと狙い通りにだまされた俺が言うのもなんだが、あまりにわかりやすすぎて逆に怪しいくらいの罠だった。

あのSNSに誘導させるために、寄生虫が自分の宿主の名を騙っただけだ。

「ソニック!! お前は間違えている!! あの女は、エヒメさんの敵じゃない!! 先生はあの女の、ヘラの名を覚えていなかった!!」

弾丸のように撃ち出される苦無や手裏剣を叩き落としながら、ソニックに怒鳴りつけてヘラを「敵」ではないと判断した根拠を叫ぶが、ソニックは「あのハゲの記憶力が当てになるか!! 俺の名も忘れてた男だぞ!!」と返してくる。

「それは貴様が先生にとって覚えるに足らぬ雑魚だからだろうが!!」と率直な感想を言い返せば、「死ぬ、ポンコツ!!」と叫んで前方回転蹴りをかましてきたので、それを防いで聞き返す。

「貴様は、先生の名を忘れたことがあるのか?」

ソニックはいぶかしげな顔になって飛びのき、俺に言い返す。

「バカか、クソガキが。あの忌々しい奴の名など、忘れたくとも忘れるわけが……」

途中まで言っつて、自分の言葉が、その心理こそが根拠になることに気づいたのか、奴は目を見開く。

そう。どんなに忘れたくとも、忘れようと努力していたとしても、

先生にとって妹のすべてを奪い取って、壊しつくして、今なお殺し続ける怨敵の名を忘れるわけがない。

ただでさえ短くて元ネタも有名な女神の名だ。「ヘラ」という名が上げられて、即座に思い出せない訳がなかったんだ。

俺はあの時、自分で思った疑問に勝手な回答を与えず、もっと注意深く先生の様子を窺うべきだった。

誰の名を挙げた時点で先生の顔が険しくなったか、「もういい」と言ったのはどのタイミングだったのかに気づきさえすれば、このような勘違いは起きなかった。

あの寄生虫になど、利用されなかった。

俺の悔恨は、奴の返答で中断される。

奴のあまりにも低い声音、そして静かで酷薄に言い切った。

「それがどうした？」

疑似神経に、回路に氷水が走ったような悪寒。

奴は俺の言葉を信じていないのではなく、はじめから眼中になどないと言いたげに言い切った。

「それがどうした？ 貴様は何を俺に期待しているんだ？」

俺が今、ここにいるのはあいつの為だとも思っているのか？

……はっ！ バカらしく、そして青臭い。

老婆心で教えておこうか、偽善者のクソガキ。この世には、他人の為にできることなど何もない。あるのは全て、自己満足だ」

元々童顔だったが、髪を短くしてやればさらに幼く、俺より年下のような容姿でありながらどこまでも深く、冷たく、暗い目で悟ったように奴は語る。

「俺が今、ここにいるのは俺自身の為だ。俺の獲物を、俺の許可なく横からかすめ取ろうとした害虫を潰し、殺す。ただそれだけの話だ。

あの女が実は無関係だったのなら、次の容疑者を殺しに行く。手間は増えるがそのストレスはその手間の数だけ容疑者を殺せばいい。それだけの、シンプルな話だ」

あまりの暴論に一瞬、言葉を失う。

「……思い切りがよすぎるだろ、貴様」

「ウダウダと無意味に考えて、目的を見失う間抜けよりはマシだ」

いつそうらやましいほどに自分本位で、揺るぎなくて歪まないその考えに素で感想を口にする、ソニックは再び皮肉気に顔を歪ませて苦無を二つ、二刀流のように構えて俺に向ってきた。

比較的、他の部位と比べて強度が低く、そして機能が多い眼球部を狙いすました攻撃を防ぐ俺に、奴は攻撃の手を緩めず、嘲りの笑みを浮かべたまま語る。

「いらんのなら、よこせー」

何をだ？ と尋ねる間もなく、言葉は続く。

俺自身も訊く気など、わかりきっていたがな。

「いらぬから、あんな状況と場所で、無防備に置き去りにしたんだろう？ どうでもいいから、同じ失敗を何度も何度も学習せずに繰り返すのだろうか？

それなら、俺によこせ。いらんのなら、俺の手で何もかもを汚して染めて潰して壊し尽くしてやる」

その言葉に、体の回路ではなく生体部品である脳のどこかが、ブツリとキレた。

脳裏に浮かんだのは、こちらを一瞬横目で見て、見せつけながら彼女の唇を奪ったあの瞬間。

あれを思い出してしまったら、わずかでもあつた昼間の出来事による感謝や負い目など吹き飛んだ。

「誰がっ！ やるかっ!!」

苦無を叩き折り、そのままブーストを起動させて連打、マシンガン・ブローを放った。

頭に血が上って何も考えずに放ったそれは、俺にとって有利なこの場でも容易くよけられて、校舎の壁を破壊しただけだった。

それこそが、奴の狙いだった。

俺が殴り砕いた壁の穴から見えたのは、正門。

その正門前に止めた車に駆け寄るヘラの後ろ姿が、見えた。

「近道製造、感謝する」

厭味つたらしく奴は言って、駆けた。



初めから奴は俺の言葉を、疑いもしてなければ信じてもしなかった。俺など、眼中になかった。

ヘラが実際はどんな人間なのかなど、奴自身が語った通りどうでもいいことだったのだろう。

こいつも俺と同じく、振り上げた拳を誰にでもいいから振り下ろしてぶつけたかったただけだ。そのぶつけるに最適な相手が、ヘラだっただけにすぎない。

この場は自分には不利だということを奴自身も冷静に判断していたからこそ、離脱に専念するのではなく、俺と応戦しながら俺を誘導し、ヘラへの最短距離の為に俺を利用して壁を破壊させた。今までの言動は全て挑発ですらなく、俺はまんまと利用されたにすぎない。

俺は本当に、学習が下手で周りを全く見ていない。自分のバカさ加減に死にたくなりながらも、全速力を出してソニックを追うが、届かない。

ヘラは、校舎が破壊されたことすら気づいていないのか、まったく後ろを振り向かずに車に一直線に走り、ドアを開ける。

入るな！ 逃げ場を失う！ と叫ぶつもりだった。

だが、ヘラが自分の車のドアを開けた瞬間、センサーが自動で起動した。

同時に、思い出す。

こちらに向かってきていた生体反応は二つであったこと。

ヘラは、車のカギをかけていなかったことを。

俺の意志関係なくセンサーが働く場合は、故障以外ではただ一つだけ。

危険物を……高エネルギー反応を感知した場合だ。

「逃げる！ 爆弾だ!!」

俺の言葉に反応したのか、それとも意味は理解しきれず、ただ思ったよりもはるかに近い距離から声が聞こえたことに驚いただけなのか、車に乗り込みかけた体制のままヘラは、目を丸くして振り返った。

ソニックは、最初から変わらず俺など眼中になく、俺の言葉に興味を抱かず、ただ無表情でヘラの肩を掴んだ。

その手には闇夜でも切っ先が輝く苦無が握られていた。

ヘラが現状を理解する前に、ソニックの苦無がヘラの喉を切り裂く前に、俺が二人の元にたどり着く前に、狂気の結晶が炸裂した。

\* \* \*

車まで数メートルという至近距離にまで近寄らないと感知できなかっただけあって、爆弾の威力は大したことがない。

高級車ゆえに耐火性が高いというのも抜いても、車内で爆発しておきながら車が炎上していない時点で確実に、ネットで拾えるような製造法で素人が作ったものだろう。

下手したら、車内で閉じ込められた状態で爆発しても死なない可能性の方が高い、派手な花火にすぎないレベルのものだったけど……殺意は低くとも悪意の高さはもはや人間の域を超えている。

俺は、たまたま飛んできて関節部に刺さった「釘」を引き抜く。刺さったというより挟まったと言った方が正確で損傷はないが、それももちろん俺だからに過ぎない。

低コストで作る爆弾の威力が、低いのは当たり前だ。それを補うのに使われる手段が、爆弾に釘などを埋め込み、爆発したときにその釘を四方八方に炸裂させること。

しかしこれも爆弾単品よりは爆弾らしい威力になる程度に過ぎず、少なくとも即死させてやれるものではない。

出血多量で嘔り殺すためか、致命傷には至らない拷問じみた怪我を負わせるためのもの。

こんなものを用意するほどの狂気に、言葉を失う。

俺だけではなく、後ろの二人も同じく何も言わずにただその場に散らばり、地面を派手にえぐり穿つ釘の欠片や、爆発でめちやくちやになった車内を眺めている。

……爆弾が炸裂した瞬間、俺の背後に二人はいた。

俺はそのまま自分の頭部だけを守り、吹き飛んできた釘の散弾からソニックはともかくヘラを守った。

ソニックがあそこからでも、あのタイミングでも逃げられるのはまだ予測していたが、ヘラを連れて避けたのは意外だった。

とつさだったのか、何らかの意図があったのかはわからない。

本人も、目を見開いて驚いたような顔をしていたから、おそらくは本人さえも意外なとつさだったのだろう。

「……何……これ？」

呆然とヘラが、自分の車の惨状をようやく理解したのか、呟く。

その問いの答えには想像はつくが、まだ答えられない。

答えるために、俺はセンサーを起動させる。

ソニック以外にやってきていたもう一人を探していると、ソニックが「くそっ！」と声を荒げた。

「……クソガキの方でも守っているのかと思ったら、こっちか。こいつはともかく、俺に余計なことをするな!!」

突然、意味が分からない事を喚きだした。独り言にしては盛大に声を上げて怒鳴ったかと思ったら、不愉快そうに奴は顔を歪めて俺と向き合う。

「おい。この女じゃないとしたら、誰が『6月』なんだ？ 貴様には見当がついているんだろう？」

一体何の気まぐれか、ヘラが本当に「6月」がどうかなどどうでもいいと言っていた奴が、ヘラを殺すのはやめて、本物のエヒメさんの敵に狙いを定めたらしい。

今までの言動を悪びれず、掌を返すのが気に食わないが、ヘラを殺すのをやめたのは俺にとっても都合だ。

こいつにヘラを殺されたら、それこそ俺はエヒメさんにどんな顔で会い、なんて詫びればいいかわからない。

だからここは、こいつへの殺意に耐えて、こいつがまた気まぐれを起こさないように答える。

「ちようどいい。今、向かってきている」

センサーは奴の動きを捉えている。

猛スピードで車を走らせ、こちらに向かってくるのは「心配のあまりに駆け付けた」というポーズか。

それとも……。

ライフラインが断絶されて、あたりに人工的な光がない正門前が急

に光で満ちる。

俺は特に問題などなかったが、ソニックは目の前に手をかざして光を抑え、ヘラは座り込んだまま目がくらんだのか、光の方から顔をそむける。

光は、ヘッドライトだ。

小さくて玩具じみた、曲線の多いフォルムの軽自動車。逆光で色はよくわからないが、おそらく色も玩具じみた明るい色をしているのだろう。

そんないかにも男より女性向けの可愛らしい車が、一直線に向かってきた。

スピードを緩めなどせず、むしろアクセルを全力で踏み込み、殺意ではなくただただもういらぬゴミを壊して捨てるように、その車は光で目が眩んでいるヘラに向かって突進してきた。

ソニックは白けた顔をして、動かない。

元々期待などしていなかったので、俺が前に出てその車に向かってゆくとさすがにブレーキをかけた。

高くて生理的に嫌な音が響き、ソニックとヘラは耳を塞ぐ。

車は俺の前で止まることは出来なかったが、俺が片手で止めるには十分なほどに減速していた。

ボンネットは派手に凹み、エアバッグが飛び出てきて運転手の身を守るが、勢いが強すぎたのか相手は鼻を抑えて悶絶している。

「こいつか？」

あまりにも唐突で、そしてあからさまな悪意にソニックはもはや驚く気も起きずに白けた顔を続行して尋ねる。

「ああ。こいつが、エヒメさんの『敵』だ」

俺の答えに、やっと光に眩んだ痛みが引いて目を再び開けたヘラが絶句する。

俺の言葉よりも、見覚えのある車を見たからこそその絶句なのかもしれないが。

俺は未だに運転席で悶絶している奴を引きずり出すべく、運転席のドアをもぎ取った。

…俺は本当にバカだ。

先生から、人の言葉を自分の中で独自解釈するのはやめろと言われたのに、まったくその注意を生かしていなかった。

俺は振り上げた拳を下ろす、具体的な人物が欲しかったただけだ。

その相手にヘラを認定し、俺の思い込みに都合が良かったから信じ込んでしまった。

信用できる相手ではないことなど、わかり切っていたのに。

奴の話が俺にとって都合がよくて、そしてつじつまもある程度は通っていた。

違和感を覚えながらも、ぎこちない何かを感じ取りながらも、それを無視していた。

寝具に針を埋め込んだのも、プレゼントを台無しにしたのも、自作自演？

そんなこと、する意味などないんだ。学園の教師さえも逆らえない学園の権力者が、わざわざ被害者を演じる必要などない。

エヒメさんが気に入らないのなら、ただそう言えばいいだけだ。

それだけで、具体的に何をしろと言わなくても、むしろそんなつもりなどない、ただの愚痴にすぎなかったとしても、ヘラの取り巻きは勝手にご機嫌取りの一環でエヒメさんに嫌がらせをしただろう。

奴は言った。「スマホを操作しながら、『お仕置きしなくちゃ』と言っていた」と。

ヘラが今も大事そうに持っているのは、かなり古そうなガラケーだ。エヒメさんを名乗ったであろう偽メールが届いたことに疑問を抱かないということは、おそらくあれはエヒメさんも知っている連絡先。寮生活以前から使用している、ネットには繋がらないキッズケータイだ。

そしてヘラはSNSを、「何のこと?」ではなく「何、それ?」と言った。存在自体を疑問に思っていた。

こいつは学園の方針通り、おそらく家でもネット環境に未だほとんど触れていない。だから、「SNS」という言葉自体が通じなかった。

あんな自己愛をさらけ出したSNSはもちろん、ファンサイトの掲

示板に写真や情報をぶちまけることなどできやしないんだ。

ああ、思い返せば思い返すほどに、穴だらけの話だ。

鵜呑みにした俺を殺してやりたい。

本当はもつと早くに、ヘラがエヒメさんのトラウマではないことに気づいてもよかった。

俺がヘラを見て、「フブキに似ている」と感じた時点で、エヒメさんが怯えている対象がヘラではないと判断するべきだった。

ヘラがエヒメさんのトラウマそのものなら、こいつとよく似た雰囲気を持ったあの女に、エヒメさんが懐くわけないだろ！

俺は、先生の言葉を思い出す。

「名前を聞いただけでも過呼吸になる」とサイタマ先生は言った。

エヒメさんはヘラの名前を、はじめから自分で言えた。

過呼吸になったのは、歩き方さえも思い出せなくなるほど怯えたのは、ヘラに呼びかけられた時ではなかった。

「待って！ ヒメちゃん！」

エヒメさんはこの呼びかけで、膝から崩れ落ち

「ミラは黙ってなさい!!」

この名が、呼吸の仕方さえも忘れさせた。

エヒメさんは、立ち上がることもすらできず、呼吸すらも忘れても、それでも俺に伝えた。

「ヘラは違う」と。

こいつの名など、一度たりとも出てこなかった。

「貴様は、罪悪感から逃げ出したかったのですらなかつたんだな」

この女は元から、罪悪感など持ち合わせていない。自分が悪いなど、心の底から思っていない。だから、俺に伝言を断られたとき、何を言われたのが理解できなかったんだな。

「何も悪くないけど罪悪感を抱いて謝罪する、健気で優しくてかわいそうな悲劇のヒロイン」を演出するただけに、俺を呼び出した女を車の中から引きずり出す。

ヘラは眼を見開いて、エヒメさんを食い荒らし、そして今はお前自身を食いつぶそうとしていた寄生虫の名を呼んだ。

「……ミラーージュ」

## 愛 for I

俺に車から引きずり出されても、ミラージュは相変わらず卑屈そうな目で媚びるような半端な笑みを貼りつかせていた。

ソニックは、一瞬意外そうな顔をした。

そうだろうな。この女は一見、おかしな言い方だが悪い意味で犯罪を犯せるような人間には見えない。

地味で目立つ部分は特になく、オドオドとした挙動がいかにも気弱で要領も悪そうで、加害者だとしても主犯や首謀者ではなく、騙されて脅されて利用されている人間に見える。

俺もそう思っていた。

きつとヘラも、エヒメさんもずっとそう思っていたのだろう。

「……ミラージュ。……なんで、あなたがここに……」

「よ、よかったヘラちゃん！ 無事だったんだね！」

困惑しているヘラに対し、ミラージュはいけしやあしやあと心配していたと語りだし、それをソニックが鼻で笑う。

「無事？ つい先ほど、その車で轢き殺そうとして人間がいう言葉ではないな」

「あ、あれはあわて過ぎてブレーキとアクセルを間違っちゃっただけです!!」

即答の言い訳にソニックは一瞬目を丸くさせて、そして初めて見る表情を浮かべる。

嘲笑でも憐憫でもなく、先生の怒気を目の当たりにした時のように慄いたのとも違う、薄気味悪いものを見るように顔を歪ませた。

当然の反応だ。

この女はあの、何の躊躇も見えなかった暴挙を即答で言い訳して、謝りもしない。真に心配をしていたのなら、その言い訳が事実でも謝罪をほぼ反射で口にするようなこの状況で、だ。

こちらを騙したいのならなおのこと、大げさに謝罪を表すべきこの状況で、こいつは俺らが絶句している意味がわかっていないのか、キョロキョロあたりを見渡して、やはり媚びるように笑う。



間違いなら、仕方ない。

人を轢き殺しかけておいて、こいつはあの言い訳だけで俺たちがそう言っただけ、自分は許してもらえると信じて疑っていい。

自分が悪いことをしたという自覚が、何もない。

今すぐこいつの手を離してしまいたいぐらいに、不快で、気持ちが悪かった。

自分の悪事がばれないように保身で心にもない言動を行う人間の思考とも違う、ソニツクのように悪事を開き直っている代わりに許しなど初めから求めていないのとは真逆。

自分は許されて当然だと信じて疑われない暴君の思考が、理解できず、気持ち悪くて仕方がない。

「え？ あなの？ どうしたの、ヘラちゃん？」

この場にいる自分以外の人間全員に引かれていることに気づいていないのか、ミラージュはヘラに尋ねる。

状況の説明を求めているというより、ヘラが俺に「私の友達にひどいことをしないで！」とでも言うことを催促しているように見えるのは、俺の邪推ではないだろう。

「ミラージュ……なんであなたがここにいるの？ 何しに来たの？」

今更だが至極当然な疑問をヘラが口にした瞬間、媚びるような笑みが、卑屈な目が不満そうに歪んだのを確かに見た。

俺だけではなく、ソニツクも、ヘラも見たのだろう。そして同じことを思っていたのが、全員にとって当たってほしくなかった予想が当たったことを確信して、顔を歪めた。

その不満を、いつもの媚びる笑みで隠す。媚びるようなのではなく、実際にこいつは媚び続けていたんだ。

弱くてかわいそうな自分を助けてくれない不満を隠して、それを許す自分を上手く演出しているつもりのお笑いだったのだろう。

「わ、私はヒメちゃんからメールが届いて……。ヒメちゃん、メールでヘラちゃんだけは絶対に許さない、昔、自分がされたみたいに全部奪ってやるってメールが届いて……。それで、ヒメちゃんもヘラちゃんも心配で……」

「黙れ」

ソニックが全力で引いていた顔から、感情を掻き消して命じた。俺もこの女の気味の悪さが吹き飛んで、怒りが再び燃え上がる。ヘラも限界まで目を見開き、歯を食いしばって奴を睨み付ける。

3年前の閉鎖的で、常に贄を求めているあの学園内では上手くいったかもしれないがな、この中で一番「エヒメ」という人の事をわかっていないのは、貴様だ。

誰が、そんな太陽が西から昇った方が現実的な話を信じるか。

「……エヒメさんの自殺を匂わせるメールを送って、ヘラを呼び出して貴様はどうするつもりだった？」

「え？」

怒りのあまり掴む腕の力を込めながら、尋ねる。

ミラージュは俺の言葉に不思議そうな顔をして見上げたが、こいつの伝言を断った時と同じ完全な無表情の俺を見て、すぐさま目を逸らした。

どう見てもそれは、意味の分からない濡れ衣を着せられた反応ではない。幼子のように、ばればれの嘘を黙ることで誤魔化そうとしているだけだ。

「貴様は、ヘラのふりをして、ヘラになりきったSNSで三日……いやもう四日前か。四日前にエヒメさんの写真を晒して、男に彼女を襲わせようとしたな？ 最初はエヒメさん本人を本当に襲わせようとしていたんだろうが、俺がお前の計算外に同情もせず、彼女の情報を一切流さなかつたことで、計画を変更したのか？」

ヘラ自身を襲わせて、暴行から逃げ出した時の保険かどめのつもりかは知らんが、手製の爆弾まで使って、その犯人の濡れ衣をエヒメさんに着せて、自分は『止めたかつたけど止められなかつた』と言って泣きつく気だったのか？

表向きの動機はあり、空間を超越するあの人にアリバイの意味はほぼないから、上手くいくと思っただけか？

登録にフリーの捨てアドを使うのが、少し調べたらSNSから貴様に辿りつく術などいくらでもある。お粗末極まりない計画だな」

かなり俺の想像が大部分を占めるが、おそらくそんなに大きな間違いはないだろう。

当事者の一人であるヘラ自身が、何も言わないのが良い証拠だ。

あの狂乱とやけに大事そうに、連絡を待つように握りしめていたケータイ。あれで十分、想像できる。

ヘラは、ミラージュが偽装したエヒメさんの遺書もどきなメールを送られてきて、ここにおびき寄せられたただけだ。彼女は被害者と言っていないだろう。

……おそらくは3年前から、その前からずっと彼女は、エヒメさんをはじめていた首謀者ではなく、エヒメさんと同じ被害者だ。

ミラージュに騙され、親友という関係を壊され、真面目で正義感の強い性格ゆえに誤解してしまい、無実のエヒメさんを糾弾して傷つける加害者に陥れられた被害者だ。

ヘラを擁護し、褒め称えるSNSこそ、多少の誇張があっても正しかった。

ミラージュの話は、穴は多いが筋こそは通っていた。こいつは呼吸をするように嘘をつけるが、嘘自体は全く上手くないので、あれは事実あつた出来事を改変したものだろう。

おそらくは、自作自演の嫌がらせを行ったのはミラージュ本人であり、そこをヘラに置き換えただけで、ヘラが率先して嫌がらせや雑用の押し付けをしたのは嘘だ。

そんなことをするようなら、4日前に会った時、取り巻きのエヒメさんを嘲る言葉を黙らせたりはしない。

ヘラの対応は褒められたものではなかったが、エヒメさんが性質の悪い嫌がらせをした加害者だと思いついてしまったのなら、あれくらいの嫌味を言いたくなる気持ちはわかる。

ヘラは箱入りゆえの視野狭窄でミラージュの自作自演を信じてしまい、親友を軽蔑して自殺未遂にまで追いつめてしまった。

そして一番閉鎖的な時期を過ぎ、短大に進学したことで視野が広がり、再会した後で何かしら思うことがあつたのだろう。

呼吸さえままならないエヒメさんが自分を、「ヘラは違う」と庇って

いるのを見て、過去の事件の不自然さに、エヒメさんが無実であったことに気づいたのではないか？

だから彼女は、俺がエヒメさんを連れて帰る際に追い打ちの言葉など何もかけなかった。

だから今、ボロボロになっても、男どもに襲われかけてもここにいる。

状況の不審さに気付いて逃げても、1階にすぐ下りなかったのはパニックになっていたからではなく、ここにいると信じ込んでいたエヒメさんを探していたのだろう。

「鬼サイボーグさん、何を言ってるの？」

ミラージュは俺に腕を掴まれたまま、目をそらしながら、気弱げで卑屈そうに、けれど図太く自然体で恍けた。

……こいつは、はつきり言って頭が悪い。想像力がなく、嘘が下手で策略家には程遠い。初めから、偏見だと思いつつも感じていた通りの人間だ。

なのにどうして、どいつもこいつもこの女に振り回され、騙されたのかは今よくわかる。

嘘は下手だが、息をするように躊躇いなく罪悪感もなく即座につけることと、こいつの挙動が不審なのはいつものことだから、話の整合性におかしなところがあっても、嘘ではなく混乱でもしているのだろうと思ってしまうことと、何より少し会話するだけで苛立たせるこの性格が、話をさっさと終わらせようと思い、ろくに内容を吟味しないからだ。

「ねえ、とりあえず離してくださいよ。きっと何か、誤解してるんですよ。

……ねえ、ヘラちゃん。どうして何も言ってくれないの？ お願いだから、ヘラちゃんもサイボーグさんに何か言ってよ」

俺からそらした視線を、ヘラに向ける。卑屈に媚びながら、けれど何一つとして遠慮などしていない、凶々しい目で懇願する。

轢き殺しかけた相手に、自分を助ける、と。

「……あなたなの？ 私の携帯電話にエヒメの名前で、死ぬ前にもう

一度だけ話がしたいなんてメールを送ったのは？

……今日……私にした事だけじゃなくて……私の名前を使って、エヒメに課題や雑用を押し付けたのも、あの子への嫌がらせは私が扇動してるって噂を立てたのも!!」

当然、ヘラは懇願というにはあまりにおぞましい要求を無視して叫ぶ。

「おばあさまのプレゼントを台無しにしたのも、エヒメじゃなくてあなただったの!? 盗んで切り刻んでいたのを止めたのは、あなたじゃなくてエヒメの方だったんでしょ!？」

「へ、ヘラちゃん?」

涙を浮かべて、過去を悔やみながら怒りをぶちまけるヘラにミラージユは、戸惑ったように声をかける。

こいつは未だに、現状を理解できていない。

どうして自分の言葉が信じてもらえないのか、ヘラが自分を助けてくれないのかを、心底不思議に思っている。

ヘラが何に怒っているのかを、理解できていない。

そんな怒りをぶつけても無意味な相手に、それでもヘラは泣き叫んでぶちまけた。

「あなたが……お前が、お前がおばあさまのプレゼントを取り戻そうとしてくれたあの子に、全部罪を着せたの!?! いけしやあしやあと被害者面して、エヒメに濡れ衣を着せたの!?!」

エヒメに……あの子に怪我をさせておいて!!」

自分を騙したことよりも、自分に汚名を被せたことよりも、自分に贈られたものを台無しにされた事よりも、ヘラはエヒメさんに濡れ衣を着せたこと、傷つけたことに対して3年たっても消えない怒りを爆発させた。

……エヒメさん、貴女の言う通りですよ。

彼女は、ヘラだけは違う。

貴女の言葉通り、誤解ですれ違ってしまっただけで、ヘラは今でも貴女の親友だ。

だからこそ、貴女は謝罪をするしかなかったんですね。

ヘラに真実を話せず、逃げ出してしまった事……、この寄生虫であるミラージュの危険性をわかっていながら、新たな宿主にヘラが選ばれたことに気付いていながら、ミラージュを非難する、真実を叫ぶ舌さえ奴に奪われた貴女はヘラに忠告さえもできず、いつか自分と同じように破滅させられる親友に罪悪感を懐いていた。

だから、謝罪を拒絶されて、許されないことを思い知る贖罪をするしかなかったんですね。

ヘラは親友を疑い、信じられなかったことを悔やみながら、髪を振り乱して泣き叫ぶ。

そこにはもう高慢な女王も、貫録と威厳が溢れる女神の面影もない。

歳よりも幼い、エヒメさんと同じく3年前から変われない、立ち止まったままの少女がその元凶に、彼女たちの歩む足を食い尽くした寄生虫に叫んだ。

「何とか言いなさいよ!!」

その言葉に、いつしか俯いていたミラージュは答えた。

「……………うっぎゅー」

吐き捨てた。

自分が壊したものの、奪ったものの、傷つけたものに対して怒りを、慟哭を、あまりに身勝手に汚いたったの一言で終わらせた。

「エヒメエヒメエヒメ、どいつもこいつもいつもいつもあいつの事ばかり! バツカじゃないの!」

怪我!? あいつがなんか喚きながら、あの安っぽいマフラーを引張ってきたからじゃない! 私がカッター振り回さなかったら私が怪我してたんだから正当防衛でしょ!! 破れたのだからあいつが引張ったから、やっぱりあいつの所為じゃない!

何でもかんでも私のせいにするんじゃないわよ! 何でいつもいつも、あいつは好きなことしかしてなくせに、あのクソ女のわがままは許されて、頑張ってる私が悪いことになんのよっ!!」

猫を被っているつもりが、被りきれていないと思っていた。

俺の想像よりもはるかに、こいつは自分の本性を上手く隠してい

た。

被っていた猫をかなぐり捨てて、本性をさらけ出したミラージュの逆恨みに、口を挟むことなど出来なかった。

怒涛の勢いで吐き出されたのは関係ない。逆恨みと言うのも生ぬるい、常人では考えつかない、破綻どころではない狂った論理で自己を正当化するこの生き物のおぞましさ、思考を真っ白に染め上げる。

「うざい！うざい！うざい！…… どの時もこいつもうざっ!？」

さらけ出した本性のまま、ただひたすらに自分の罪をエヒメさんに、周囲に、自分以外の誰かに押し付け、ぶつける言葉が途中で途切れる。

額の中心部に深々と卍型の手裏剣が突き刺さり、醜悪に怒り狂い、嘲り嗤った顔のまま軽くのけぞる。

「死に晒せ」

ただ一言、自分の要望だけをソニックは口にした。

俺を見て、何故さっさと始末しない？ と言いたげな目をする。

その目でようやく、怒り狂った思考が、あまりのおぞましきで真っ白になっていた思考が、まともに働く。

……… どうして、この女は何も言わない？ とあまりに遅い

疑問が沸き上がる。

エヒメさんからメールがあったと、あまりにも酷い虚偽の内容を聞かされた時から、怒りで手加減など忘れて握りつぶさんばかりに掴んでいるこの腕は、なぜ今も潰れていないのか。

その疑問に答えるように、ドロリとあふれ出した。

「!？」

掴んでいた腕を離し、飛びのき、ヘラの前に、ソニックはともかく彼女だけは何が起こっても巻き添えにならぬように真後ろにやって、俺は焼却砲を放った。

「え!？」

「ほう」

チャージなしだったが人ひとり消し炭にするには十分な火力にプ

ラスして、奴の軽自動車のガソリンに引火してかなり派手に爆発、炎上する。

ミラージュのありえない主張とソニックの躊躇ない投擲で、茫然としていたヘラが俺の行動に驚愕の声を上げ、ソニックの方は追い打ちにしても派手な俺の行動に、感心したような声を上げる。

その様子からしてあれを見たのは、溢れ出したものが見えたのは、至近距離で見下ろしていた俺だけのようだ。

「おい、ソニック！ 今だけは休戦だ！ それが不満なら帰れ！ お前の相手をしてる暇はない!!」

俺が振り向きもせず、焼却砲を構えたまま告げた言葉に「はあ？」と奴は声を上げたが、説明は求めなかった。

「……痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!」

死ねっ!! もう皆、私をいじめる奴らなんか皆、死ね死ね死ね死ね死ねええええっ!!」

業火の中、影が揺らめく。

狂気の絶叫が響き、俺の背後でヘラが息を飲む。

焰の中から、人影が歩み寄る。

額に刺さった手裏剣を抜き取って、投げ捨てる。

その額から溢れ出たものが燃え尽きた服の代わりに体を覆い、ドレスじみた様相になっている。

銀の、液体にありえない光沢をもつ液体。

水銀のようなものが、ミラージュの額から溢れ出続ける。

「!? 怪人!?!」

ソニックが声を上げる。

お前の所為で怪人化したとでも言っただけでやりたい気もしたが、明らかにそれは言いがかりだったのでやめた。

ソニックの手裏剣がきつかけのように見えるが、おそらくそれは表層化するきつかけ、言葉通り薄皮一枚で偽造していたものが漏れ出たにすぎない。

俺が手加減を忘れて掴んでいた腕に対して、苦痛を訴えなかった時点である女は、既に人間をやめていた。



いつから？ を問うのは、もはや馬鹿らしい。

あの女はとつくの昔に、怪人に成り果てていた。見た目が変化していなかったから、誰も気づかなかっただけだ。

あの、ヘラのフリをして、自分はヘラのように美しく優秀で家柄も素晴らしいと思ひ込んだSNSは、今年の3月から始めていた。エヒメさんと再会して、嫌がらせに利用したのはついだ。

俺と昼間会って、そこで自分の想い通りにならなかったからといって、わずか数時間で爆弾など作れるわけがない。

こいつは初めから、だいぶ前から、誰かにいつか使う予定で用意していたのだろう。

それぐらい、この女はとつくの昔に狂い果てていた。

この女は、卑屈でありながら凶々しくてしつこい性格ゆえに、今まで他人からあらゆるものを与えられてきたのだろう。

与えないと被害者面していつまでもまとわりつくから、関わりたくないの一心で与えて黙らせて、そして育ててしまった。

自分は何をしても許される、何でも望めば与えられる特別な存在という、実際とは真逆の自分を信じて疑わない、自己愛の怪物を。

\* \* \*

ジェノスさんもソニックさんも、なんだか初めはヘラを誤解してたみたいけど、二人とも誤解が解けてよかった。

ソニックさんはともかく、ジェノスさんには説明しておくべきだったのになかったのは本当に悪いから、後で謝らないといけない。

誤解をしていたのにヘラを助けてくれたジェノスさんには、いくらお礼を言っても言い足りない。

あの掲示板を見て、「6月」という名前を見てから頭が真っ白になって、ヘラを助けなくっちゃという思いだけで、私はいつしかここにいた。

ヘラの性格と、パソコンの電源落としてと言ったらコンセントを躊躇なく抜くヘラが、3年たったからってあんなこと出来るわけがないから、あれはヘラのフリをしたミラージュであることは、すぐにわ

かったから。

そしてあんな、自分の盾にしている相手を加害者に仕立て上げるやり方をするのは、新しい寄生先を見つけて、それに取り入る為だということは、よく知ってる。

……私にしたことを、さらに酷く、卑劣にあいつはまたやった。

私の所為だ。

私がヘラにミラージユのしたことを話してさえいれば、こんなことは起こらなかった。

ヘラは世間知らずだけど決して馬鹿じゃないから、話してさえいれば警戒してすぐにミラージユの本性に気付けたはずなのに、私は怯えて何も言えなかった。

……ヘラが、私の言うことを何も信じてくれなかったらどうしようって怯えて、私は何も言わずに逃げ出した。

ごめんなさい、ヘラ。

私はあなたの言う通り、卑怯者だ。

だからせめて、守りたかった。ミラージユが何を企んでるかはわからなくて、初めはまた自作自演でヘラを陥れようとしているのかと思っただけなら誰かに、おそらくはジェノスさんにヘラが何かをしたように見せかけたのなら、私がヘラの傍にいて、ジェノスさんに誤解される前に、ヘラを離脱させてしまえばいいと思っただ。

……私はまだ、期待してしまってた。ミラージユが、そこまでするとは思っていなかった。

男にヘラを襲わせようなんて、そんなことまでしようとしてたなんて、思いたくなかった。

ヘラを何度もテレポートで逃がそうとした。

でも、何故かうまくテレポートが出来ずに、車に戻したり校舎の外に出すこともできずに、何とか捕まりそうになったら少し位置移動して逃がすしか出来なかった。

むしろヘラを余計にパニックに陥らせてしまった。私のことには無意味ではなかったと思うけど、迷惑の方が大きい。

フブキさんが、超能力を人に対して使う場合、相手の精神力によって効き方が大きく変わると言っていた。

思い返してみると、私のテレポルトは誰かと跳ぶ場合は基本的に同意して跳んでいたから、相手の精神力とかあまり関係なく、望んだ場所に跳べたんだと思う。

ヘラの場合、私が見えていない、気付いていないからどこに跳ぶかの同意がまったくできていなかったのと、彼女には一人で逃げるにはいけない理由があったから、だから校舎の外にすら跳ぶことが出来なかった。

……ヘラは、ケータイを握りしめてずっと言っていた。

「エヒメ……どこなの!」と、私を探してくれてた。

自分を襲おうとしている男がいるからこそ、私がここにいると信じ込んでいる彼女は、私を探してくれた。

私が畏にはめたなんて一切疑わずに、ずっと探してくれた。

ごめんなさい、ヘラ。ずっと逃げて、あなたを置いていった。

あなたが信じてくれないかもなんて不安を抱いて、私の方こそが疑って、本当にごめんなさい。

何度謝っても謝り足りないけど、そもそもこんな聞こえていない状態じゃ意味がないのはわかってる。

だから、もう少しだけ待ってて。

ごめんなさい、ジエノスさん、ソニツクさん。

たくさん心配と迷惑をかけて。

それでも、ヘラを守ってくれてありがとう。……ソニツクさんはかなり危なかったし、守ってないけど。

そして、願います。

もう少しだけ、ヘラを守ってください。

私に来るまで、その化け物を育てた責任の一端は私にあるから、私がちやんと責任を取ります。

すぐに戻ります。だから、それまで願います。

私の親友を、どうか守って。

## 後悔を終わらせよう

日付がそろそろ変わりそうな時刻になっても、サイタマは飽きもせず妹の寝顔を眺めていた。

いや、正確にはとづくに飽き飽きしていたが、漫画を読むにしても自分も寝るにしても居心地が悪かったため、早く起きろと思いつながら眺めるしかなかったただけなのだが、とにかく幸運なことにサイタマは出かけることも寝ることもなく、連絡手段のある部屋の中で起きていた。

狭いワンルームで電話が鳴った時、反射で驚いてからまず彼が思ったことは、「あ、フブキに電話かけ直すの忘れてた」であり、こんな時間まで律儀に待っていたことを感心するべきか、呆れるべきか迷いつつ、とりあえず本心から悪いとは思っていたので受話器を取って開口一番に謝った。

「悪い、フブキ。忘れてたわ」

「おじさん！ おねえさんと鬼サイボーグさんはどこ?! 家にいるの!?!」

しかし、電話をかけてきた相手はフブキではないどころか、サイタマの言葉を無視してまずはじめに尋ねた。

他人に対しての記憶力が極端に悪いサイタマでも、その甲高い子供の声で電話主が誰かを知る。正直言って、子供の知り合いは彼しかないという消去法で判断しただけだが。

「えーと、童帝だっけ？ いきなりなんだ、こんな時間に。エヒメなら爆睡中だ。ジェノスは……あれっ？ そういやあいつ、帰ってきてねーのか？」

言いながら、サイタマは受話器をもったままベランダに近づき、隣をうかがう。覗き防止の衝立でももちろん部屋の様子は全くうかがえないが、電気がついていない事だけはわかった。

サイタマは昼間の自分の言葉を、またあの真面目すぎて融通の利かない弟子がいらないくらいに重く受け取っているのではないかと不安になったが、電話口の童帝は逆にサイタマの言葉で少し冷静になっ

たらしい。

「おねえさんはとりあえず、そこにいるんですね。……なら良かった。最悪の事態は防げそうですね。」

……っていうことは鬼サイボーグさん、もしかして僕より早くSNSに気づいてB市に向かったのかな？ 先走るなって言ったのに……ご丁寧にケータイの電源切ってるし……」

「おい、何の話だよ？ 勝手にそっち一人で納得すんな」

童帝がぶつぶつ独り言を唱え始めたのをサイタマが止め、電話をしてきた理由、いきなりエヒメとジェノスの所在を尋ねてきた訳の説明を求めた。

「えっと、すみませんおじさん。実は僕、鬼サイボーグさんから頼まれて、ちよつとおねえさんを苛めていた奴のSNSとかを探してたんです。……すみません、結局行動が遅すぎて、意味はあまりなかったですけど」

「いや、俺はネットとかそういうのが全然ダメだから、行動してくれただけでもありがたい。助かった。……っか、SNSってなんだ？」  
サイタマが礼を言いつつ素朴な疑問を口にして、童帝は電話の向こうで今時珍しい人だなと思っただけだけ笑った。

「SNSはソーシャルネットワークサービス。ツイッターやフェイスブックとかのことですよ」

「ああ、あれか。何の意味があるのか全くわからねーからやったことないけど、なんか独り言を日記みたいに書き込む奴だろ？」

身もふたもないくせに突っ込みどころだけはあるサイタマの認識だが、そのあたりは今はどうでもいいので童帝も「もうそれでいいです」とスルーで流す。

「とりあえず、おねえさんを苛めてた奴のSNSをさつき見つけたんです。で、そのSNSも鬼サイボーグさんのファンサイトの掲示板みたいにおねえさんの写真や個人情報晒されて、しかもおねえさんを襲う計画と共犯者を募っていました」

未だにSNSがよくわかっておらず、そこに写真や個人情報が晒されたことに対する重大性にピンと来ていないサイタマだが、エヒメを

襲う計画と聞き自分の顔が強張ったのを感じた。

受話器を怒りで握りつぶさないようにだけを注意しながら、サイタマは「それで？」と話を先に促す。

促して、思わず脱力した。

「そいつ……ヘラはさっそく今日、参加希望してきた共犯者をB市で廃校になったはずの母校に集めて計画を……」

「待て。ヘラって誰だ？」

電話の向こうで童帝が絶句している間、サイタマは自分が想像していた相手とは全く別の名前が出てきたことで、とりあえず怒りの熱が冷めた頭で考える。

思い出せないが、どこかで確かに聞いた名前の心当たりを探る。

「……え？ おねえさんを苛めてた相手って、主犯ってヘラって人じゃないの？ 長い銀髪で、冷たい印象の美人で……、ちよつと雰囲気が地獄のフブキに似ている感じですけど、おじさん知ってます？」  
そこまで言われて、思い出した。

3日前にジェノスが出会ったと語った相手であることだけではなく、3年前に自分も一度だけ会ったことがあることを、3日前と同じく思い出す。

エヒメが自殺未遂をやらかしてサイタマの元に逃げ出した後、彼女は日常生活すら怪しいぐらいの精神状態だったので、エヒメの代わりに中退の手続きを行うためにサイタマは一度だけ、あの学校に出向いたことがあった。

建物そのものがかび臭くて辛気臭いとサイタマは感じていたが、それ以上に教師も生徒も、他人を見たらまず初めに見ることがあらゆるで、そのあらを見つければ見つけるほどに嬉しそうに見下してきて、口からは嫌味しか出てこない人間で構成されたあの空間が、気持ち悪くて窮屈で、何より異常だった。

元から学歴に興味のなかったサイタマでも、高校中退というレッテルは妹の人生にかなりのハンデになることを案じていたが、その心配が吹っ飛ぶほどの魔境を目の当たりにして、とにかくここから一刻も早くエヒメとの縁を切るために書類の内容もよく読まずサインだけ

した。

そして校長室から出て、帰ろうとしたときに出会った。

豊かな銀髪が目を引き、妹と同じ年、自分より6歳年下だというのに自分よりはるかに堂々とした少女が、唇を真一文字に結んで眉間にしわを寄せて睨みつけていた。

睨んでいると、初めは思った。

その少女は首を傾げて見返すサイタマを黙ったまま大股で歩み寄って来て、伸長差で見上げているはずなのに見下しているような目と声音で「エヒメのお兄さん？」と尋ねられた。

高圧的な声音と目つきだった。

だけど、サイタマはその少女に悪い印象を抱かなかった。

睨んでいたのではなく泣くのをこらえていたのが、目のふちにたまった大粒の滴で明らかだったから。

サイタマが肯定すれば少女は持っていたものをサイタマに突き出し、「いらなかったら捨てて」とだけ言ってサイタマに押し付け、そのまま優雅にターンして一度も振り返らずに去って行った。

自分の手の中に残された、何度も何度も綺麗に折り直したと思われるくしゃやくしゃで不格好な折鶴を一つ見下ろして、サイタマはよくやく妹から聞かされた友達の話を思い出した。

折鶴がきっかけで仲良くなったと、互いに実家を離れて初めて戻ってきた盆休みで語っていたことを思い出した。

サイタマはすっかり忘れていた、……この直後の胸糞が悪くなる自分の最大の後悔そのものの出来事に塗りつぶされてなかなか思い出せない、唯一あの学校で自分が「良かった」と思える記憶を思い出し、そして受話器に向かって思わず突っ込んだ。

「ちげーっ!! ジェノスの奴、勘違いしてやがる! そういやムカつきすぎて、訂正すんの忘れてた!

主犯じゃねーどころか、そいつはエヒメの親友だ! エヒメのトラウマは、ミラーージュっていう奴だ!!」

「ええっ!?!」

いきなり前提をひっくり返す情報を与えられ、童帝が珍しくパニツ

クを起こす。

「え？ でも名前が……いや名前なんてどうでもつけられるか。 え？ もしかしてこれ、別人のSNS？ いやでもおねえさんの写真や情報が晒されてるし……」

「……なあ、俺はSNSつてのがよくわかんねーから思うことなのかもしれねーけど、それって他人がそのヘラってやつのふりしてできるものじゃねーのか？」

童帝がパニックを起こしたことで、逆に落ち着いたサイタマが尋ねる。

「え？ 普通にできますし、好きな漫画やゲームのキャラになりきってる人とかもいますけど、このSNSの場合は写真が……!？」

サイタマの問いに答えることで、若干10歳でありながらヒーロー協会に専用のラボを与えられるほどの天才児は気づく。

彼もまた、振り上げた拳の落としどころに都合の良かったヘラを無意識に悪役に仕立て上げていただけだということに。

SNSを見た時、かすかに感じていた違和感を思い出して童帝はもう一度「June」のSNSをぎっと流し見してみる。自己愛だけを綴った文章は無視して、写真だけを見て彼は絞り出すような声で咳く。

「……………自撮りが、ない。 1枚も……、こんなナルシスト全開なSNSで……」

「June」と名乗るSNSには、スタンプで雑に顔を隠した銀髪的美人が、ヘラの写真がいくつもいくつも載せてあり、その人物こそが自分であるように、自慢話だけを飽きもせずずっと語っているが、よく見てみたら一目でわかる。

その写真は、誰かから撮ってもらったものばかりで、ケータイの自撮り機能や鏡を使って写したものは1枚もない。

新しく買った服や化粧品について語っているときもあるが、その新しく買った服をハンガーにかけて吊るして撮った写真はあっても、それを着た自分の写真は1枚もない。せいぜい、化粧品や小物を手に持って写している写真が稀にあるくらいだ。



スタンプで顔を隠しているせいでわかりにくいだが、よく見たらヘラの写真もポーズをとっているものが少なく、隠し撮りではないかと思えるものがほとんど。

別に相手は、ジェノスや童帝を騙すつもりでわざわざ、こんな手の込んだSNSを作ったわけではないのは明白だった。だからこそ、この写真の違和感に気付くことが出来なかった。

このSNSが開始されたのは、今年の3月初め。

半年以上、この「J u e n」はヘラのふりをして、ヘラになりきって、自分はヘラのような美人で成績優秀で家柄も素晴らしいお嬢様だと思いついていた狂気に、寒気が走った。

「……おい、どうした童帝?」

天才の自分でも知り得ない、想像など出来れば一生したくないと思う狂気に絶句していたが、サイタマの呼びかけで何とか冷静さを童帝は引きずり戻す。

「……すみません、おじさん。僕はとんでもない間違いを犯していたようです。」

それと、おそらく鬼サイボーグさんも間違えています。ヘラさんを、おねえさんの敵だと完全に思い込んで……おそらく今はB市にいます」

「B市? なんでもまたそんな、ここ以上になんもないところ?」

自分が何も考えずに巨人を殴り倒して、結果的に壊滅させてしまったことをすっかり忘れて、サイタマが尋ねる。

「さつきもちよつと言いましたけど、ヘラさんのフリをしたSNSで、おねえさんを襲う計画を立てるから直接会おうって誘いかけてるんですよ。で、その待ち合わせ場所がB市の母校です。」

……これ、このSNSの本人がバカ正直にやってくるのならまだ話は簡単ですけど、もしもヘラさんが騙されて代わりにここにおびき出されたら……」

比較的冷静だと思っていた自分も、頭に血が上ってサイタマに言われるまであの不自然な写真に気づかなかったくらいである。

ただでさえエヒメのことになると極端に心も視野が狭くなるジェ

ノスが、今更になつて本人を前にして気づけるわけがないと童帝は判断した。

そして同じことを、サイタマも考えていた。

「……わかった。ジエノスのことは俺に任せろ。止めてくる。」

それで悪いけど、お前はそのSNSつてやつが本当はミラージュつてやつのものなのかとか調べてくれるか？ 俺、マジでそっち関係なんにもわかんねーんだよ」

サイタマはそれだけを一方的に言つて、童帝の「え？ おじさん、止めてくるつて今から向かう気？ Z市からB市に？」という疑問を無視して勝手に通話を切った。

そして、未だ眠り続ける妹の、額にかかる前髪を指でどけて声をかける。

「……悪い、エヒメ。俺の説明が悪くて、ジエノスが誤解してるみたいだ」

また勝手に突っ走りやがつてとはもちろん思っているが、これに関しては昼間と違つて八つ当たりをする気はない。むしろ、気持ちはよくわかる。

相手を間違っているだけであり、ジエノスが抱くエヒメを守れなかった後悔と、エヒメを傷つけた敵に対しての憎悪は、サイタマが抱え続けたものと同じものだから。

……サイタマは、ずっと前から知っていた。

エヒメの幼馴染であるミラージュという少女が、信用ならない相手であることをサイタマはエヒメよりも前に、3年どころか10年近く前から気づいていた。

フブキが思ったように、「たいして仲が良くない兄妹」と思っているのはサイタマ本人くらいであり、サイタマとエヒメは間違いなく昔からかなり仲のいい兄妹であったが、サイタマの言葉が全くの間違ひというわけではない。

6歳差の異性の兄妹なので、二人には共通の幼馴染や友人が存在しない。

互いに相手の友人の名前なんて一人でも顔と名前を覚えていれば

いい方なくらいだった。

サイタマにとってミラージュは、顔も名前も認識していない、妹の友達の一人でしかなかった。

あの日、ミラージュがエヒメの夏休みの宿題を台無しにした日までは。

小学何年生のころか覚えていないが、ちまちまとした作業が好きなおエヒメが図工の宿題で花火のちぎり絵を作ったのは良いが、ミラージュが「自分も同じようなを作りたい。参考にしたいから少し貸して」と言ってきたところ、ジュースか何かをぶちまけられて台無しにされ、ミラージュは母親に連れられて謝りに来ていた。

遊びに行ってたのか学校の補修だったのか、とにかく出かけていたサイタマが帰ってきた時にはもう謝罪も済んで、「子供のしたことだから」「わざとじゃないのだから仕方がない」で話は終わりかけていた。

サイタマも同じように思っていたので、初めから口出しする気はなかった。

が、出来た花火の絵を真つ先に自分に見せてきたエヒメが、泣くのをこらえるようにして汚れてグチャグチャになったその絵を大事そうに持っているのを見たら、せめて頭でも撫でたやりたくなかった。

そう思つて、サイタマはミラージュの横を通り過ぎてエヒメの方に向かつていったのだが、横を通つた際にふと横目で見たミラージュの表情で、目を見開いて立ち止まってしまった。

俯き、えぐえぐ泣き続ける少女の口元は、確かに吊り上っていた。醜悪な笑みを、サイタマは確かに見た。

が、いきなりやってきて立ち止まったサイタマを、母親が「どうしたの？」と声をかけた時にはミラージュは両手で顔全体を隠してしまいい、その笑みの確認などできなかつた。

サイタマが出来たのは、エヒメをそこから自分の部屋に連れ出してやることだけだった。

エヒメを連れ出して、そこで話を聞いて初めてサイタマは、相手の名前と幼馴染と言えるだけ付き合いが長い相手であることを知った。

エヒメとしては別に好きな相手ではないこと、親同士の付き合いと、向こうがクラスが離れても「ヒメちゃんヒメちゃん」とやっているので突き放せないことも知った。

10歳になったかならないかという歳でありながら、自分よりはるかに大人みたいな笑顔を浮かべて、「あれでも、マシになったんだよ。前まではなんでもやってやって、頂戴頂戴ばかり言って、代わりに誰かがやってくれるまでずっと泣いて暴れてたのが、自分でやるようになったから……。だから、仕方ないよね」と言ったことを覚えている。

……サイタマは、話さなかった。

自分が見たものが一瞬だったので自信がなく、妹の「大丈夫」という言葉を信じてしまった。

嫌いならそのうち縁も切れるだろうと、自分の人付き合いに当てはめて、楽観視していた。

ミラージュという少女は信用ならない相手であることを忠告せず、ただサイタマは台無しにされた絵を手伝ってやるから作り直そうと言って、励ましただけだった。

そのことを数年後、後悔することになるなど知る由もなかった。

おそらくその後も何度か見かけるくらいはしていたはずだが、「妹の友達」ではなく「ミラージュ」という個人を認識して再会したのは、3年前。

ヘラと出会った直後、くしゃくしゃの折鶴を手の中で弄り、ほんの少しだけあの学校に救いを見出しながら帰ろうと廊下を歩いていたら、後ろから結構な勢いでぶつかられた。

思いつきり背中に肘が入った時点で、わざとタックルを決めてきたのは明白だったが、あの規則にうるさい静謐な校舎内でそんなことをやらかす奴がいるとは思わず、当時はまだ普通の人間であったこともあり、サイタマは派手に転んだ。

「大丈夫ですか!？」といけしゃあしゃあと声をかけながら、その女は前に回ってきて手を差し出した。

「立てますか?」と、ミラージュは言った。

顔立ちなどは昔とさほど変わりはないが、そもそもサイタマでなくとも人の記憶に残りにくい、特徴のない地味な容姿だったので、顔を見ただけでは思い出しはしなかつただろう。

けれどサイタマは、一目でその少女がミラーージュであることを察した。

転んだ際に自分の手から吹っ飛んで落とした折鶴を踏み潰した挙句にぐりぐりと踏みにじりながら、卑屈な目で優しく微笑んでるつもりだろうが、実際は醜悪極まりない笑みを浮かべて手を差し伸べるその姿に、あの日の謝るフリをして妹の作った物を台無しして、それを責めることも出来ずに黙って耐えていたエヒメをおかしそうに楽しそうに笑っていた横顔が、鮮明に蘇った。

息をすることも、生きていくことすら罪だと思うほど、妹の全てを奪い、壊し、殺しつくして殺し続ける相手が彼女であることに気づいた。

「お前がっー」と叫んで胸倉を掴みあげたが、場所と相手が悪くてサイタマは危うく婦女暴行で通報されかかったが、幸いながら妹の友達が饞別でくれた折鶴を踏みつぶされてカッとなったというサイタマの言い分は、明らかにサイタマではなく少女の小さな靴跡がついた折鶴が証拠となって信じてもらえなかったが、ミラーージュがわざとやったという言い分は妹可愛さの被害妄想ということにされた。

既に自分の言い分を聞いてもらえないという理不尽を体験して、だいぶ慣れて大人になったと思っていたサイタマでも、例え許されなくても、地獄に堕ちてもいいからこいつらを殺してやりたいと思うほど、一方的な決めつけだった。

エヒメの尊厳を踏みにじって貶めて体裁を守る学園関係者を殺さずに済んだのは、こんな地獄の中から逃げ出してきて、ただ自分だけに助けを求める妹の存在があつたから。

サイタマは、「ヒーローになる」と決心した僅か半月後に、最大の敗北を経験してあの学園から去つたのを思い出した。

あまりに苦々しい、最大の後悔を思い出しながら、サイタマは笑う。眠る妹に、それでも心配をかけないように笑いかけて彼女に告げ

る。

「やられっぱなしじゃ、ヒーローなんて言えねえよな。

もしかしたら、ちょうどいいチャンスかもしれないから、行つてくるわ。……今度こそ、あいつに勝ってみせるから……、だから悪りーけど待っててくれ」

昼間に殴られ、まだわずかに赤みと腫れが残る頬を優しく撫でて、サイタマは大急ぎでヒーロースーツに着替えて出て行った。

後悔を終わらせるために、迷いなく彼はB市に向かう。

\* \* \*

サイタマが着替えて部屋から出て言った直後、火傷の痕が痛々しく残る手が、ピクリと動いた。

## 鏡像遣い

サイボーグが放った火がガソリンに引火して、地獄めいた業火となる。

その焰の中から、呪詛をまき散らして幽鬼のように奴は現れた。

「皆、死ね！ もういらない！ お前らなんか、私の邪魔ばっかして私をいじめる奴らなんて、皆、全部、消えて無くなれ!!」

額に刺さった手裏剣を抜き取って投げ捨てて、血の代わりに水銀のような液体を明らかに体の容量以上に垂れ流しながら、ミラーージュと呼ばれていた、怪人に成り果てた女は醜悪に顔を歪めてこちらを睨み付ける。

外見こそはまだほぼ普通の人間と言っているだろうが、垂れ流される液体以上にその言動と、光と呼ぶにはあまりに汚いギラギラとした目の輝きが、完全に人間の域など飛び越えている。

「ちっ！」

予想以上に厄介な事態と相手であることに、思わず舌を打つ。

まだ武器は残っているが、あのポンコツとの戦闘で半数近くを消耗してしまったのが痛い。

完全に殺すつもりで投げつけた手裏剣が効いていない事、サイボーグが手加減や遠慮なしで放ったであろう炎すら「痛い」で済ませている事からして、こいつの装甲はかなり硬い。

何よりあの溢れ出続ける液体が正体不明で、接近戦は少なくとも液体の正体がわかるまで避けるべきだ。

「おい、ポンコツ。勝手に壊れるのも死ぬのも構わんが、邪魔だけはするな」

「それはこちらのセリフだ！」

手裏剣を取り出して、俺はサイボーグにそれだけ要求する。気に入らんが、今だけはお前の言う通り休戦してやる。

だが、トドメは譲らん。

これを、俺の手で始末する。

俺の獲物に、俺のものに余計なちよっかいを出した貴様は、もつと

も卑劣で不愉快な手段であの光を消そうとしたこの害虫だけは、俺の手で排除しなければ気がすまん。

「貴様も、邪魔をするな」

俺は横目で、未だ座り込む女を見て言った。

別にこの女に言った訳じゃない。

見えはしない、そもそもあの電話でサイタマが女と語っていた仮説は半信半疑だった。

だが、あの爆発間際のテレポートで確信した。

俺が「テレポートがあるだろ」と指摘してすぐに、体すら邪魔だと判断して置いていったあのバカが、この女を守っていることを。

あの「6月」という名を見て、あの怪人がこのヘラという女のフリをしていたことに気付いた時の怒りようと怪人化してる事からして、別に殺すこと自体にあのお人好しでありながらシビアなエゴイストであるあいつなら、文句を言いはしないだろう。

ただ、俺に元とはいえ人だった存在を殺すことを嫌がる可能性は十分あったので、まだそこにいるのかどうかもわからんが釘だけは刺しておく。

「……ヘラ。お前は逃げろ。おそらく守りながら戦える相手ではない」

サイボーグが背後の女に顔を向けず、命じる。

女は一瞬何かを言いかけるが、結局何も言わずに立ち上がり、背を向けずに後ろ向きにジリジリと後退していく。

ここにおいても自分は役に立たないどころかお荷物であることをよく理解し、背を向けて逃げればそれこそ狙い撃ちされる可能性もわかっている。

良い判断をする女だと素直に感心していたら、この女とは逆にどこも評価できる部分はない愚かな怪人は、その後退を耳障りな声で囁く。

「逃げるの!? いつもいつもあーんなにえらそーにしてくせに、結局あんたは一人じゃ何にもできない、親の七光り脛かじりの臆病な卑怯者なのね!」



「なっ！」

これ以上ない「お前が言うな」というセリフが癪に障り女は声を上げるが、サイボーグの「無視しろ！」と言う叱責で黙る。

黙りはしたが、女は足を動かさない。

よほどあの発言がプライドを傷つけたのか、怒りに滾った目を見開き、唇を噛みしめて怪人となった寄生虫を睨み付ける。

額から未だに水銀らしきものを垂れ流す怪人は、ニヤニヤ笑いながら無駄に回る舌で、さらに自分を柵に上げた発言を続けた。

「何を今更になつていい子ぶつてんのよ？ バツカじゃないの？ ルビナスやベラドンナにチャホヤされていい気になつて、二人から嫌われて陰で死ねばいいのにとかわれてるのも知らないくせに、今更になつてまだエヒメの親友アピールって、痛々しいんですけどー」

他人に興味のない俺でも、殺意が湧くほどに見当はずれで言いがかりに過ぎない罵倒に、思わずまた手裏剣を投げつけそうになつたのを何とか堪える。

あの寄生虫は、精神こそは裏社会で生まれ育つた俺でも見たことのないほどに腐りきっているが、二元はと言えば殺しや戦いに縁などない、ただの人間の小娘だ。

今も、俺やポンコツとはいえS級らしいこのサイボーグを敵に回していることに危機感もなく、隙だらけで殺そうと思えば既に10回は殺せているが、俺もサイボーグもあいつの言い分に殺気を募らせるだけで、動かず様子をうかがうことしか出来ていない。

あの額から垂れ流れる正体不明の液体が、厄介すぎる。ただの血の代わりならいいのだが、先ほどから沸騰したかのように泡立つだけではなく奴の左右に二か所、噴水のように液体が盛り上がり、そしてアmeerバ状の生き物のように不気味に蠕動しているのが、俺らの行動に迷いを生じさせている。

あの液体に何かが起きる前に、奴が何かをやらかす前に奴を殺すべきなのはわかっているが、既に液体は奴の周囲数メートルに及んでいる。あれが何なのかわからず、あの液体に飛び込むのは自殺同然だ。

業腹だが、俺はサイボーグがあ液体にやられて液体の効果が判明

することを期待しながら、ただいつでも動けるように構えることしか今は出来なかった。

こちらが本体ではなく液体を警戒していることに奴は気付きもせず、むしろもはや目的を忘れて、怒りに耐えて黙っているヘラという女を凶星を突かれて何も言えないと勘違いしたのか、醜悪な顔をさらに醜く歪ませて嗤い、さらに嘲る。

「ホント、何、今更になって自分が被害者ですって顔してんの？ あんただってエヒメに生徒会の仕事を押し付けてたくせに、濡れ衣着せないではこつちのセリフよ。いい子ぶりつこの口うるさい偽善者！」

エヒメが飛び降りたのだって、あんたの所為じゃない！ 親友アピールしたいのなら、あの時、私じゃなくてあいつを信じてあげたらよかつたんじゃない？ あの、『ごめんなさい』しか言えなくなった、根暗な役立たずを!!」

「ミラージュッ!!」

さすがに他人事であっても不快指数が限界に達し、あの液体が何であつても構わず手裏剣や苦無を投擲しかかった時、俺よりも先にサイボーグが叫び、もう一度掌の砲門から炎をぶつ放す。

先ほどのとっさの一撃とは違って、動力でもチャージしていたのか、炎の色が赤から青に変化して真っ直ぐ奴に向って行く。

「ひい!!」

やはり戦いなど何も知らない愚かな元小娘は、自分の馬鹿な発言が炎となって還元したことに気付きもせず、今更になって怯えて子供のように両手で頭を抱えて座りこむ。

その反応からして、あれは本人の意思ではなく完全な自動発動型なのだろう。まったくもって、面倒極まりない。

水銀のような液体が波打ったかと思えば、それは巨大な壁となってあの怪人の周囲から湧き上がり、取り囲む。

そして銀色の壁は鏡のように俺たちを写し、サイボーグが放った炎を写し、その水面に炎が触れるとそれは周囲一帯、四方八方に弾き返した。

「二なっ!?!」

奴の意思か自動で壁になるくらいの効果は予想できていたが、この反射は想像しておらず、腹立つことにサイボーグと同じタイミングで声を上げてしまった。

俺はもちろん、サイボーグも絶句しているエヒメが守っていた女を抱きかかえて、降り注ぐ火の粉を避ける。

分散した分、炎の温度は落ちて威力がだいぶ下がっていたのが不幸中の幸いだったが、そう言っただけ慰める気はもちろんない。

「おい！ 邪魔だけはするなと言っただろうが、役立たず！」

「うるさい黙れ！ そもそも貴様が、あの液体が溢れ出る原因だろうが!!」

とりあえず木偶人形に文句をつけながら、試しに一つ手裏剣を投げつけてみると、それも液体に沈むでも刺さるでもなく、つるりと滑るようにして反射して、明後日の方向に飛んで行った。

ああ、くそっ！ あのクソ女！ とことん、自分は傷つきたくない、自分が背負うべき痛みを誰かに責任転嫁したいらしいな！

拡散して跳ね返っていた炎があらかた消えて、ポンコツは抱えていた女を下ろしてその背を押す。

「今のうちに、逃げろ！ とにかく、ここから離れろ!!」

顔色を青くさせて、唇を強く噛みしめて、女は長い銀髪をなびかせてその場から走り去って行った。

顔色の悪さと何かに耐えるように噛んだ唇は、騙されていたとはいえ友人関係だった相手が化け物に変貌した恐怖か、それとも別の何かは俺には興味なかった。

そんなことよりも、防御力が半端ないあの液体をどうするかだ。

俺が手裏剣を刺したことであの液体が溢れ出たが、まさかあの液体だけで構成されるほど体が作り変わっているとは思えない。

おそろくどこかに、核となる部分があるはずだ。

あの液体が壁を作るより早くあの怪人の間合いに飛び込む自信はあったが、その「核」の位置がまったくわかっていない、そもそも「核」があるのかさえも可能性の話で定かではないのが痛い。

だが、サイボーグの方も同じことを考えているのか、カチツと音が

すると同時に以前のよう胸部が光る。

俺には劣るが、こいつもそこそこにスピードを出せる。せいぜい、囿に使うか。

そう思いながら、噴水のように湧き上がっていた液体の壁が徐々に低くなってゆき、またただの水たまりになるまで待った。

「……ふふふ。あはははははははははは!!」

やっと、やっと私は救われるのね! この理不尽で奪われてばかりだった世界から、やっと私は本当の私になれるのね!!」

壁の向こうで喚きたてる、妄想で頭が沸いてる発言にイラつきながら待っていた。

液体の水位が下がって、ようやく液体の流出が止まった女は額に縦一文字の傷跡を残して、ニヤニヤ嗤っていた。

嗤いながら、奴は俺らに宣言する。

「もう、あんたたちはいらぬ。死んじやえ、『偽物』」

言うと同時に、二つの銀が弾丸のように飛び出してきた。

一つは俺に向って人の腕ぐらいの大きさのもの。

もう一つはサイボーグに向って人ひとりほどの大きさのものが飛び出し、俺たちは別に示し合わせたわけではないが同時に飛びのく。

これだけでも無性に不快だというのに、またしても同じタイミングで、「なっ!」と驚愕の声を上げてしまった事が不快で仕方がない。

そしてそれ以上に、飛んできたものがどちらも気に入らない。

俺に飛ばしてきた人の腕ほどの大きさのものは、比喻ではなくまさしく人の腕。

それを縄のような銀の紐で、怪人の傍らに奴を守るように佇む「それ」は回収する。

サイボーグを仕留め損なった、愚鈍な「それ」も同じくすぐさま奴の傍らにバックステップで戻り、やはり守るようにして刀を構える。「もういらぬ。私には、私を、私だけを守ってくれる本物がいるんだから。だから、あんたたちなんて、『偽物』なんかいらぬ。消えちやえ」

頬に両手を当て、うつとりとした恍惚の気持ち悪い笑みを浮かべて

奴は語るが、今は奴の言葉や表情よりもその傍らに寄り添う、「それ」らが不快で仕方がない。

銀の光沢を持ち、細部は再現されていないがシルエツトだけでわかる。

あの液体で作られたであろう、俺とサイボーグを模した人形が奴を守るように、庇うように寄り添っていたのがこの上なく不快だった。

さほど多くないが、人間から変質した怪人なら今までにも見てきた。

怪人化した理由や原因はそれこそ千差万別だが、人体実験で体を弄られた、寄生型の虫や何かに乗っ取られたという外部が原因の奴らを除けば、基本的にその人間が執着していたものや願望が、変質した姿や能力に現れることは、すでに経験で知っている。

この女、とにかく傷つきたくない、自分を傷つけるものに自分は無傷のまま傷つけ返したいと、自分の言うことを聞かない他人はいらない、自分に従順な奴隷だけが欲しいという、妄想でも凶々しい願望を形にしやがった。

ああ、本当に何も評価できるところはないくせに、人を苛立たせて不快にすることだけは天才的な女だな！

人形とはいえ、あんな犬のクソにも劣る女を守る自分も不快だが、一番不快なのは俺を模しているくせに、あのポンコツを仕留めることも出来ない鈍足さだ。

こちらを偽物扱いするのなら、それぐらい忠実に再現してみろ。

そんなことを思いながら人形を睨みつけていたら、主の「殺して！」という命令に従って人形が再び、俺たちに向かってきた。

先ほどと同じく、俺にはサイボーグの人形が拳を振り上げて、サイボーグには俺の人形が刀を振りかざして向かってくる。

が、どうも俺だけではなくサイボーグの方も明らかに、本体より性能が劣っている。

屈辱極まりないが、俺から髪を奪った奴ほどの速さもなく、地面を殴りつけてもアスファルトにひびが入るだけ。奴ならもつと派手に砕くくらいは出来ると、先日のいざこざで把握している。

相手の実力を正確に把握できていないからか、それとも奴自身が弱いからか、人形の性能はコピー元の本体より劣化すると判断し、俺はその辺の塀や明かりのついていない街燈を跳躍して反動をつけ、銀の木偶人形に技を放つ。

「風刃脚!」

俺の前方回転蹴りが人形の顔面に当たり、頭から奴は地面に叩きつけられる。

横目でちらりと見えたサイボーグと銀人形の俺の戦闘も、本体の俺よりはるかに劣化した人形が、サイタマに邪魔されたからとはいえ殺しきれなかった奴を倒せるわけもなく、わき腹に蹴りを決めて吹っ飛ばしていた。

あの壁は厄介だがこちらの人形の方はそうでもないと思った時、俺が蹴り飛ばしたサイボーグの人形も、サイボーグが吹っ飛ばした人形も、水風船が破裂するような音を立てて形が崩れて元の液体となる。

その液体は白い煙を上げながらすぐに蒸発してその場には残らなかったのだが、俺はそんなことを気にしてはいられなかった。

「ぐっ!」

急に、腹部に痛みが走った。激痛というほどではないが、鈍痛というには大きな痛み。

殴打された、アバラにひびが入った痛みだと一瞬の間において脳が理解するのだが、同時に困惑も招きよせる。そんな攻撃を食らった覚えがないのだから、当たり前だ。

地面につきかけた膝を堪えてこの痛みの原因を探っていたら、サイボーグと目があった。

奴は左手で顔の左半分を押さえている。その隙間からは、ひび割れが覗いている。

あんな愚鈍な木偶の攻撃を食らったのか? と嘲る気も起きなかった。奴がそんな攻撃を食らっていないことは、俺自身の目ではつきりと見ていた。

だが、その破損個所には覚えがあった。

向こうも目を見開いて、右わき腹を押さえる俺を見る。貴様も、覚

えがあるのか。

「あはははははははははは!! どうしたの? もう終わり?」

狂った哄笑を上げて、怪人はこちらを嘲る。

嘲りながら、奴の周囲の液体がまた沸騰し、盛り上がり、蠕動する。人の形を、俺とサイボーグの形を作っていくが、今度はそれぞれ一体ずつではない。

自分の周りを取り囲むようにして、10体近くの銀人形が作られた。

本当に貴様は、他人を不快にさせることに関しては神がかつているな!

というか、俺はバカか!

あの液体でできた人形なら想像がついても良かっただろうが!

……あの人形は、攻撃のダメージをモデル本人にそのまま反射させるのか!

こうなると人形の性能が劣化しているように見えたのも、わざと実力以下に見せかけていた可能性が出てくる。

厄介どころではない、最悪の能力であることに気づき、俺は苛立ちに任せて舌を打つ。

……が、同時にわずかだが安堵してしまった。

性能が劣つていても数で押されたら不利な上に、あの能力。これでは性能も偽っているのなら本気でこの場に「奴」がいなくて良かったと、屈辱的で忌々しいが心の底からそう思った。

「奴」の代わりがこの金魚のクソのサイボーグであることに、ほんのわずかな安堵を覚えて何気なく目を向けると、サイボーグの方も顔面にひびが入った所為で飛び出かけた黒い眼球から金の瞳をこちらに一瞬向けた。

おそらく同じことを考えていたことが十分に察することができて、余計に苛立ちが増した。

「まだまだ、私のナイトはいっぱいいるんだから! 私を苛めてバカにした分だけ、酷い目に遭いなさい!!」

怪人の宣言と同時に、人形どもが再びこちらを襲いかかる。

ちっ！ ポンコツの人形が向かってきたのなら何の躊躇もなく全部倒せたというのに、今度は全て俺の人形が俺の方に向かってきた。

どれもこれも俺をモデルにしたとは思えん愚鈍さで、むしろ全部粉々に切り刻んでやりたかったが、それは盛大な自殺になることはわかっているの、俺は歯を食いしばって防戦する。

先ほどのサイボーグや俺の人形は、俺や奴の返ってきたダメージからして別に殺すほどのダメージでなくとも、与えたら形が崩れてそのまま蒸発することは理解したが、どれほどのダメージで倒れるのかが計れない。

もしかしたら軽い一撃程度で形を保てなくかもしれないが、先ほどと同じだけのダメージとなると、一撃一撃なら耐えられるが蓄積するとかかなり辛いので結局は手出しできない。

ただ、この人形を生み出すことであの液体をかなり消耗し、奴の周囲に池のようにたまっていた液体は、だいぶ嵩が目減りしていた。

これならば、壁の内側、奴の間合いまで潜り込むことが出来るかもしれない。

人形どもの性能が悪いことのいいことに、俺は人形どもの攻撃を避けながら、手裏剣や苦無を奴に向って投擲する。もちろんそれらは先ほどと同じように跳ね返るが、戦闘慣れしていない奴はその壁だけで防御は充分だというのに、身の危険を感じて早急にこちらを始末させる為、さらに人形を生み出す。

それが自分を守る壁を削っている、愚行だともわからずに。

「おい！ ソニック！ 今、手裏剣が奴の壁の反射ではなく、普通にこつちに飛んできたぞ！」

俺の苦無を一本掴んで、ポンコツが自分の人形を相手にしながら文句をつけてきた。

「貴様が周りを見ない、無様な立ち回りしか出来ないせいだろう。むしろ邪魔だからさっさと自分の人形を自分で始末して自滅しろ」

俺が至極当然な返答をしてやったというのに、クソガキは勝手にキレてまた熱線を放射する。

狙いこそは怪人の方だったが、奴の鈍重な炎はあの壁の反応速度に



劣っていることくらい、本人もわかっているだろう。だからあれは、反射で俺や俺の人形を狙った意趣返しのものか？

「邪魔をするなど言っただろうが、クソガキが！ あれの前にお前の方から始末つけるぞ!？」

「休戦が不満なら帰れと俺は言っただろうが！ どうも、貴様の方から排除した方が効率は良さそうだな!!」

目障りなガキはもう敵意を隠す気もなく、砲門をこちらに向けてきた。

大人しくしておけば近くでうろちよろするくらいは見逃してやろうと思っていたが、いい加減邪魔だ。

俺は動きが遅いくせに空気が読めない自分の人形を思わず殴り飛ばして、火薬仕込みの手裏剣を片手に奴へと飛びかかった。

「やってみろ！ ポンコツが!!」

「何、私を無視してんのよ!!」

人形とサイボーグの相手に苛立っていたところ、こんな状況でも自分が中心でないと気が済まないバカの空気を読まない発言に、頭の中で何かが盛大にキレた。

「うるさい、邪魔だ!!」

思わず持っていた爆裂手裏剣を、サイボーグではなく糞ウザい奴にブン投げた。

そして腹立つことに俺と全く同じことを同じタイミングでサイボーグも叫び、奴は掌を怪人に向けた。

もちろんそのどちらも銀の壁に阻まれ、手裏剣も熱線も四方八方に反射して俺はともかく人形どもが何体か壊れ、蒸発した。

自分の背中や手足に焼ける痛みを感じ、歯を食いしばる。この程度の痛みなど、大したことではない。

ただ普段なら決して喰らわないようなこんな攻撃とも言えないものを喰らってしまうあの愚鈍な人形の俺と、その人形から反射されるダメージをどうしようもできない自分に腹が立つ。

まあ、俺の手裏剣が人形に刺さったのか、ボディに傷や焼け焦げが出来た奴を見れば少しは溜飲が下がったがな。

「あ、あははははははははははは！ 無駄よ無駄!! あんたたちの攻撃なんか、ゼーんぜん怖くない!!」

壁の向こうからこちらを嘲笑する声上がり、怖くないと言いつつも壁が蠕動して、そこから何体か蒸発した人形が補充に現れた。本当に、先の事を何も考えていないバカだなあの女！

まあ、結果としてはさらに壁の液体を減らすことに成功したからいいだろう。

そう思いながら、自分の人形の攻撃を避けつつ壁の水位が下がっていくのを再び見ていた。

壁の向こう側で、怪人は相変わらずニヤニヤ笑っていた。

人形を生み出した所為で、だいぶ壁に使える液体が減り、もう全面ではなく前面にしか壁を構成できなくなったことに気付きもせず。

背後から、校舎に戻って拾って来たらしい、捨てたはずの折れた俺の刀を持って迫りくる女の存在に奴は、気付いていなかった。

「ミリアアアアアジユウウウウツツ!!」

泣きながら、憎悪であり憤怒であり絶望でもある焔を瞳に灯して、怨嗟とも慟哭とも取れる叫びをあげて、サイボーグに折られてずいぶん刀身が短くなった刃をその女は、ヘラは振るった。

あの怪人にトドメを刺すのは俺だ。それは絶対に、誰にも譲らないつもりだった。

……だが、気まぐれが起こった。

サイボーグではなく、あの娘になら譲ってやってもいいと思った。だから俺は、何もしなかった。

「ヘラっ!?!」

サイボーグが止めるつもりなのか、二人の女の元に向かつてゆくの黙って見ていた。

ヘラが俺の刀を振るうのを、ミラージユが「は？」と間抜けな声を上げて、愚かにも振り向くのもただ見ていた。

折られてボロボロの切っ先が、ミラージユの汚い両目を切り裂くの

をただ見ていた。

伝えたいことがあった

どうして？ という私の問いに、納得のいく答えを返してもらったことはない。

お父様とお母様はいつもいつも、「後でね」「そんなこと知らなくていい」「お前は黙って私たちの言う事だけきいていればいい」としか言わなかった。

答えなど、一度たりともくれなかった。

おばあさまは、悲し気に、泣き顔のような笑顔でいつも私の頭を撫でて言った。

「強くなりなさい。自分の本心に言いたいことだけは、伝えたいことだけは伝えられるように。叫ぶ声だけは、誰にも奪われずに守りきれられるくらいに」

おばあさまの事は大好きだったけど、その答えだけは納得がいかなかった。

好きにはなれなかった。

……どうして、他の子みたいに私は遊んじゃダメなのか。何故、クラスメイトなお父様のライバル会社の子供だからって、友達になるどころか話しかけることすらダメなのか。何でおばあさまが「庶民」の出だからと言って、お父様も実の娘であるお母様もおばあさまをバカにするのが、わからなかった。

ずっと昔から知っている。

私の周りには、理不尽と不条理ばかりだという事を。

私が納得できるものなんて、何一つないことを。

それでも、私は尋ね続けた。

「……ねえ、何でなの!?! どうして!?!」

そうして、私は選択を間違えた。

「——ごめんなさい……へー」

\* \* \*

全然平気だった。辛くもなんともなかった。

だっていつものことだから。私の前では「ヘラ様、ヘラ様」なんて言っておべっか使って、いらなと言っているのに勝手な事ばかりして、それでご機嫌取りできていると思っている人たちが、陰で私を悪く言うことくらい、いつものことだった。

「やっぱあの針の件、女王様がやったらしいわよ。エヒメとミラージユの寮室から出てくるのを見たっていう子がいるもの」

……私がやってもいけないことが私のせいになってることだって、いつものこと。

お父様のライバル会社の子が、喫煙で退学になったのだって私のでっち上げたことになっていた。

そんな噂を率先して、面白おかしく語って広げているのはルビナスとベラドンナだってこともわかっていた。

遠巻きでみんな、私を悪く言ってることなんて昔から知ってる。

だから、私は大丈夫。いつものこと。いつものこと。いつものように、背筋を伸ばして、堂々としていればいい。

「ヘラ」

一人で大丈夫だったのに、私は強くならなくちゃいけなかったのに、それなのにあの子は私が張り巡らせる棘をすするとすり抜けて、いつだって気が付いたらすぐ傍で笑っていた。

「食堂に行こう。今日のお昼は何かな?」

あの子の、エヒメのルームメイトにたちの悪い嫌がらせという事件が起こって、不祥事を嫌った叔父が警察はもちろん、保護者にも何も言わずにもみ消した。

そのせいで犯人はわからず、無責任な噂ばかりが飛び交う。

噂で犯人は、二分されていた。

犯人は私かエヒメかという噂で、二分されていた。

理由は単純。ルームメイトのエヒメなら寝具に針を仕込むなんていつだっていくらでもできるし、私なら自分の寮室以外の入室禁止という規則を破っても、寮母や生活指導の教諭に密告する奴はいないから。

ただそれだけ。

まあ、言っちゃなんだけど動機で容疑者を絞るのは無理だったから、仕方ないと言えば仕方ないと実は思っていた。

エヒメのルームメイトであり幼馴染のミラージュは、要領が悪くて人に迷惑ばかりをかけて、はつきり言つてクラスどころか学年レベルで嫌われている。

要領が悪いだけならここまで嫌われることはありえないんだけど、彼女はその要領の悪さを直す気がさらさらなく、むしろ何でもかんでも「できないから代わりにやつて」と他人に押し付けるのが最大の問題。

「だいたい「やつて」と言われるのはエヒメで、エヒメは「手伝つたり教えるのは良いけど、自分でやらないとダメ」と言つて断るんだけど、ミラージュは結局自分ではやらない。

それが宿題とかなら本人が痛い目を見るだけで済むんだけど、彼女はバザーの商品づくりや班ごとの合同課題すらも全く手を付けず、ぎりぎりになつて「だつて私じゃできないんだもん」と言つて泣き出して、大勢の人に迷惑をかけた。

その所為で生徒はもちろん教師までも、ミラージュがエヒメに「やつて」と言い出したら、エヒメに「やつてあげたら？」と言いついて、押し付けるようになってしまった。

私がいくら言つても、彼女は泣くばかりで一向に改善しないし、もはやエヒメも後で他人やたくさんの人が迷惑を被るよりは……と思つてしまつてる。

あれが幼馴染、それも自分の意志で友達になつたのではなく、親の人間関係の延長で付き合わされているのは、本気で同情したわ。

私もルビナスとベラドンナとは全く同じ理由で幼馴染だけど、まさか彼女たちがマシだと思ふ日が来るとは思つていなかったわよ。

そんな幼馴染のお世話役同然で、学年が上がったらルームメイトも変更になるはずなのにエヒメは据え置きのまま、拳句の果てにほとんど消去法で嫌がらせの犯人扱い。

どいつもこいつもバカばかりで、嫌になる。

エヒメはおとなしそうに見えて激情家だから、溜りに溜まったストレスの発露はあんな陰湿な方向に向かない。間違はなく人前だろうがどこであろうが、ミラー・ジュの顔にビンタして言いたいことをぶちまけるといふ方向に向かうはず。

エヒメな訳がないのにそんなこともわからず、正直言つてミラー・ジュが怪我しなかったことを残念に思ってるくらいの奴らが、エヒメを悪く言うのが許せなかった。

だから、大丈夫。私が悪く言われるのは、私が犯人だと思われるのは、大丈夫。

こんなのいつものことだから、慣れてるから大丈夫だった。

一人でも大丈夫だった。

「へー、端切れでシユシユを作ったんだ。へーにもあげる。お揃いだよ」

あなたがいってくれるのなら、もっと大丈夫だった。

あなたがいってくれたから、大丈夫だった。

——なのに、……私は一番最低な裏切りをした。

\*\*\*

「……どうして？ どうしてですか、お父様！ どうして、エヒメと付き合うなんて言うんですか！ もう私は、14歳です！ 子供ではありません！ 私の友人関係に口出しをしないでください！」

ある日いきなり家に呼び戻されて、お父様から「エヒメというクラスメイトと、今後一切付き合うな」と言われた。

大企業重役の娘でもなければ家柄がいいわけでもない、ただうちの学園の偏差値を上げる為に叔父曰く、「入学を許してやった下賤な家の小娘」であるエヒメと私の仲がいいことを、快く思っていないことは知っていた。

けれど、両親や叔父の選民思想に私は同調どころか軽蔑していたから、エヒメと付き合い始めた頃に言われた嫌味に、「中学生にもなつても人柄を見抜けぬほど愚かには育っておりませんので、ご安心を」と

言い返してやったし、エヒメは真面目な優等生で、家柄とか資産とかエヒメ自身にどうにかできるものじゃないこと以外は完璧だったから、それ以上は何も言えなかったのでしょうね。

なのにあの人は、私の名を呼んだことがあるのかさえ怪しい父は、無駄にお金をかけたゴルフクラブを磨きながら言った。

「ルームメイトに嫌がらせ、それも寝具に大量の針を仕込むなんて悪質極まりないことをする相手との付き合いを、許せるわけがないだろう」

「それは噂にすぎません！　そして、噂で判断されるのならば、私だって同じ悪質極まりない人間です!!」

私が即座に反論したら、あの人は机を乱暴に叩いて、顔を真っ赤にして怒鳴り散らした。

「そんな噂が立っているからこそだろうが！　そもそも、お前がそんな付き合っても何の得にもならない相手と友達になったから、こんな噂が立っているんだらうが！　もう子供じゃないというのなら、自分の立場を理解しろ!!」

いいか！　お前にそんな悪評が立てば、そんな娘に育てた親ということで俺にも悪評が立つんだ！　その悪評が元で取引先から信頼を失えば、どうなるかも想像が出来ないか!?!　お前の軽はずみな行動で、社員が何百人も、下手したら全員路頭に迷っても不思議じゃないんだ!!

そんな庶民の小娘一人と一緒にいたいだの遊びたいだのいうお前のわがママが、許されると思っているのか!!」

……子供ではないと強がって、粹がったけれど、私はあまりに子供だった。

世間を知らず、想像力がまるでなく、その言葉を鵜呑みにしてしまった。

信じていないくせに、信用なんか何もしていない人だったのに、私は父の言葉を真に受けた。

私がそんな嫌がらせをするような娘に育てたなんて悪評、私のこと以外は事実なのね。



そんな噂程度で信頼を失うってことは、初めから信頼なんてないも同然だつてことに気づかず私は、最低な選択をしてしまった。

「……はい。……申し訳ありません……お父様」

私は、親友を裏切った。

\* \* \*

手紙で、もう今まで通り話せない。あなたも私に話しかけないで、とだけ伝えることしかできなかった。

何度も何度も書き直して、でもどれもこれも自己弁護でしかなくて、私があの子を捨てるのにこんな見苦しいものを見せたら、あの子は私を心配するのはわかっていた。

嫌われて当然のことをするのだから、いつそ諦めがつくくらいに嫌ってほしかった。

だから結局、事情なんか何も書かず、絶縁するとだけしか書かなかった。

「ごめんなさい」も、「ありがとう」も、書かなかった。

最低な手紙をあの子の机の中に入れて、その手紙に気づかずいつものように私に話しかけたあの子に、「私に関わらないで」と拒絶した。

あの子の、何が何だかわからないという顔を無視して立ち去った。

……なのに、あの子は話しかけてきた。

「へー。生徒会の資料作成、手伝おうか？」

手紙を読んでない訳じゃない。現に今までのように食堂に行こうとか、何か物を作ろうという誘いはなくなった。

代わりに私の仕事を手伝うという口実で、以前と変わらない態度で私に接してくれた。

あの子は何も、変わらなかった。

なのに、私の所為であの子の全てが何もかも変わり果てた。

……私と絶縁したことを知ったとたん、エヒメの周りにいた連中は掌を返した。

エヒメは何も変わっていないのに、一度も成績の自慢どころか自分

から成績を話題にあげたことなんてないのに、厭味つたらしいがり勉と陰口を叩かれ、エヒメの都合を考えずにあれ作ってこれ作ってと群がっていたいたくせに、彼女が作るアクセサリーや小物を貧乏くさいと言つて嗤つて壊し、そのくせ気に入ったものがあれば奪い取つた。

悪口や強奪、暴力なら学級委員や生徒会役員という立場が私にはあつたから、叱責して止めることができた。それなら、教師や叔父、ルビナス達が父に告げ口しても、「クラスの長、生徒の長として責任を果たしただけです」と言い返せば良かったから、だから、あの子を守れると思つた。

最低な裏切りの罪滅ぼしくらいは、出来ると思つていたのに……

エヒメは日に日に弱つていくのを、私は唇を噛みしめて見ていただけだつた。

あからさまないじめは私に止められるのを知れば、連中はさらに陰湿卑劣な手段で、あの子を甚振り、傷つけ、あの子の尊い全てを壊しつくして殺しつくした。

あの子の方をチラチラ見ながら、クスクス笑う。

食堂であの子に「一緒に食べよう」と誘つておきながら、あの子に一切話を振らずに空気のように無視する。

どれもこれも、注意すれば「気の所為よ」で嫌がらせを否定できるくせに、精神的に追いつめる方法でエヒメは甚振られ続けた。

「エヒメ！ 暇なら会議室の掃除をしておいて！」

私が出来たことは、必要のない用事を押し付けてあの子をあ空間から、あの連中から引き離すことだけだつた。それしか、私はしなかつた。

私は父に屈して、親友が生きながらに一番残酷な処刑をされていくのを、ただ見ているだけだつた。

それなのに、あの子はいつも私に言つた。

「……ごめんね、ヘラ。いつもありがとう」

恨んでほしかった。嫌つてほしかった。それしか私にできる償いなんてなかつたのだから、私を責め立ててくれたらよかつたのに、あの子は私が手紙に書けなかつたこと、伝えられなかつた事をいつも口

にした。

いつしか、あの子の口からきく言葉は、「ごめんなさい」だけになった。

それを、あれしか言えなくなったと連中は嗤った。

お前らにはわからない。

あの子はいえしか言えなくなったんじゃない。お前らにどんなに傷つけられても、私が最低な裏切りをしても、あれだけは手放さないように守り抜いたことなんて、絶対にわからない。

あの子は言ったんだ。

ごめんなさいしか言えなくなったあの子は、自分から私の誕生パーティーの準備をするって。

そんなのいらなかった。虚飾にまみれて、聞きたくないおべっかばかりを使うやつらに囲まれたパーティーなんかしたくなかった。

そんなことの為に、もう心がボロボロなのに、他人にいろんなことを押し付けられてほとんど寝ることも出来ていなかったあの子にさらに仕事なんて押し付けたくなかったのに、あの子は弱々しく、けれど確かに笑って言ってくれた。

「私が、ヘラの誕生日を祝うためにできるのは、これしかないから」

あの子は、おばあさまが私になれと言った通りの強い子だった。

伝えたい事を伝える声だけは、何があっても守り抜く子だった。

……そんな強いあの子に、裏切った癖に私はずっと甘えていた。

あの子から、あの子が守り抜いた叫ぶ声すら奪ったのは、私。

どうして、私はあの子を信じなかったんだろう？

\* \* \*

息切れして、今にも膝から崩れ落ちそうになりながらも、私は階段を上がる。

あの鬼サイボーグさんが、ちょっと生死の心配をしてしまうくらいにあの男どもはぶちのめしてくれたけど、それでも回復してまた襲い掛かってくる可能性があることはわかってた。

それでも、私は校舎に戻ってきた。

避難の為じゃない。それならせめて1階にいればいい。また2階に戻る必要なんかどこにもない。

それでも私は、私がエヒメに何か酷いことをしたと誤解していたのに、それでも私を助けてくれたヒーローの厚意を無駄にして、戻って来て探す。

……SNSっていうのが何の事はわからないし、それを使った嫌がらせは確かに濡れ衣だけど、エヒメに酷いことをしたというのは、誤解なんかじゃない。

私は、最低だ。

あの子に嫌われて当然なことをしたのに、いつそ嫌って欲しかったとか思いながら、あの子に甘えて、縋りついて、あの子をこの地獄に引き留めたのは間違いなく私。

そんなことをしておいて、私はあの子を信じてあげられなかった。

……誕生日、エヒメがいないのなら、私を本当に祝ってくれる人がいないのなら、あんなパーティーに意味なんかなかったのに、弱い私は何も言えずお飾りの主役として、ただ心にもない「ありがとう」「嬉しいわ」だけを繰り返していた。

プレゼントを開けてみたらと誰かに言われて、私は無性におばあさまのプレゼントを見たくなった。

病気で余命を宣告されて、ホスピスで穏やかな余生を送っているはずのおばあさまは、あまり自由に動かなくなった指先でも私に手作りの何かをくれるはずだった。

毎年、おばあさまが作ってくれた物を、お父様やお母様はいつも貧乏くさいとバカにしていたけど、私はおばあさまが心を込めて作ってくれたものが、あの人たちがくれるお金さえかければいいと思っっているものの100倍嬉しくて、大好きだった。何よりの宝物だった。

だから、エヒメがいないあの場所で、私は自分の身内の中で唯一敬愛して信頼するおばあさまに縋りつきたかったのに、確かにあったはずなのに、前日にはもう届いていたはずなのに、おばあさまのプレゼントの小包はそこにはなかった。

エヒメを疑ってなんかいなかった。本当よ。これだけは、本当。

この時は本当にエヒメが盗んだなんて発想は全くなかったし、おばあさまのプレゼントがないと訴えて、周りの奴らが「準備をしていたエヒメが怪しい」と言い出した時は、はらわたが煮えくり返ったくらいだった。

「何か知らないか、ヒメちゃんに聞いてくる!!」と言い出して、食堂を飛び出たのはミラージュだった。

あんな奴、エヒメを他の連中と嘲笑ってるくせに、エヒメに散々迷惑かけて世話をしてもらったくせに何の擁護もせず、そのくせやつぱり何でもエヒメに押し付ける最低な寄生虫が大嫌いだった。

でも、相変わらずエヒメとルームメイトで、もう私がエヒメの近況を知るにはあいつを通すしかなかったから、付き合いを続けていた。

大嫌いだったくせに、エヒメを食い荒らす寄生虫だってことはわかっていたくせに、あいつがあんな風に自分から行動するわけないことくらい想像ついても良かったのに、私は何も疑わなかった。

「二人で大丈夫。……それにヒメちゃん、ヘラちゃんには最近、会うの辛いつて言ってたから」

その言葉を真に受けて、そう言われて当然なことをしてきたくせに図々しくシヨックを受けて、私はそのまま一人であいつをエヒメの元に行かせてしまった。

「何するの!?! やめてヒメちゃん! 痛いーっ!!」

ミラージュの金切り声したのは、あれから数分後。二人の寮室じゃなくて、共同トイレに二人はいた。

……きつとミラージュはそこに、盗んだおばあさまのプレゼントを隠してた。そこでズタズタに切り裂いてからそれを部屋に持って行ってから、「ヒメちゃん何してるの!?!」と叫ぶ予定だったのでよね。

その杜撰な計画を実行する前に、たまたまトイレにやってきたエヒメに見つかって、エヒメはミラージュからプレゼントを奪い返そうとしてくれた。

それをあいつは、持っていたカッターをめちやくちやに振り回し



触が、今も消えない。

エヒメの黒髪が宙で波打った光景が目には焼き付いている。

上履きだけを地面に落として掻き消えた光景は、それから1年以上毎日夢に見た。

「……わかつてるわよ。私が、一番悪いことくらい!」

3年前のあの光景を鮮明に思い出して、自己嫌悪と怒りのあまり眩暈がする。

カチ割れそうな頭痛を堪えて、私は月と星の灯だけを頼りに探す。

「……これでいいか」

あちこちがありえない程破壊された廊下や教室には、あのいきなりやってきた忍者が投げつけたであろう手裏剣や苦無が落ちていたけど、武器どころか包丁すらまともに握った覚えのない私にまだ扱えそうな刃物は、これしかなかった。

刀身が半分くらいの長さになってるけど、やはり鉄の塊だからずいぶんと重い。

でも柄が、持ち手がある分手裏剣よりはマシだし、長さも苦無よりはあるから適当に振り回すだけでも十分だと思えた。

私は、折れた刀を拾って階段を駆け下りる。

これからやる事は、復讐なんかじゃない。

あなたの為なんかじゃない。

あの子の所為なんかじゃない。

私の、八つ当たりなんだ。

\* \* \*

「ヒメちゃんは今、どうしてるんだろう?」

あの子がいなくなっても、ミラージュは私の傍から離れなかった。

エヒメの代わりに、今度は私に寄生していることはわかっていた。

拒絶すれば良かった。あんたなんか大嫌いだと言ってやれば良かったのに、私は唯々諾々とあいつの要求を呑むしかなかった。

あいつが「やって」と言い出したことを断れば、これ見よがしに眩

いてきた。

エヒメがどうしてここにいないのか。エヒメは今頃、どうしているのか。

あの子を地獄に引き留めていたくせに、あの子にトドメを刺した私を責めたてた。

あいつの面倒を見て、甘やかすことがあの子への償いになる訳ないことなんてわかっていたけど、エヒメの名前を出されたら私はもう、「やめてー」と叫ぶことも出来なかった。

ただあいつを黙らせる為だけに、私はあいつの奴隷に成り果てた。でも、もうどうでも良かった。

エヒメに何もしてあげれなかった、何もしなかった私に、したいことなんてなくて、あつてもそんなことをする資格なんて、幸せになる権利なんかなかったから、だから私は私の家や親のおこぼれを食い散らかすあいつらに抵抗せず、勝手にさせておいた。

そうやって何にも楽しくない、何も感じない付き合いを続けて、怪人に襲われても思うことは「ああ、また死ねなかった」だけだった。ミラージュたちが、鬼サイボーグを追っかけるのもどうでも良かった。彼の顔すら、私はろくに見てなくて覚えてもいなかった。

私の心に感情を呼び戻したのは、あの子だった。

鬼サイボーグの傍らで、彼に何よりも誰よりも大切そうに守られている、それなのに怯えきって「ごめんなさい」としか言えないエヒメと再会してしまった。

泣きたいくらいに嬉しかった。

泣きたいくらいに悲しかった。

3年前とは違って、可愛らしい格好をして大切に誰かに守ってもらえているあの子に会えて嬉しかったけど、3年たってもあの子の傷は何も癒えていなかったことを痛感したから。

そして最低な私に蘇った感情は、あまりに身勝手な思いも生み出した。

「……………ごめん……………なさい……………」

謝らなければいけないのは私の方なのに、私を責めないで謝るあの



子に腹が立った。

そんな資格なんかなくせに、私に謝るあの子が許せなかった。

「……それは何に対しての謝罪？ 3年たってもまだ、それしか言えないの？」

あの子の声を奪ったのは私自身のくせに、謝るだけでそれ以外は何も言ってくれないで、去って行ったあの子を、「卑怯」だと思っただけだった。

「言いたいことがあるのなら、言いなさいよ。ごめんなさいごめんなさいってそれだけ言って、また逃げる気？」

……卑怯者」

ねえ、言つてよ。何でもいいから。大嫌いでも、最低でもいいから、私が全部悪いんだから、私にトドメを刺してよ。

私なんか大嫌いになって、私を切り捨てて、忘れて、あなたを守るその人と幸せになつてよ!!

弱い私は、何も言えなかった。

最低な私にできたのは、もう最低を貫くことだけだった。

死ぬ前に私と話したいなんて言い出して私に頼ってくれるなんて、あの子を今度こそ助けられるかもしれないことに期待する資格なんて、私にはないんだ。

あの子にはあれだけボロボロになつても、信じられる、逃げ出して飛び込めば助けしてくれるお兄さんと、私の言葉を自分が言われたかのように怒ってくれる人がいる。

もう、私なんかいらぬ事はわかつてるし、それは良いことなんだ。だから、私は最低を貫く。

ただ自分の為に、自分の八つ当たりの為に、行動する。

「ミリアアアアアアジユウウウウツツ!!」

遠回りした甲斐があつて、奴の後ろに回り込めた。

私は、ただ全てを壊したいの一心で叫んで、刀を振り上げた。

全部全部、壊れてしまえっ!!

エヒメを食い荒らして、奪い尽くして、殺し続けるお前なんて！  
エヒメを蔑んで、犠牲にして肥え太る父や学園、私の家なんて！  
あの子を裏切った私なんか全部全部壊れてしまえばいい!!

\* \* \*

がむしやらに振り回した刀が、真一文字にミラージユの目を切り裂いた。

血の代わりに銀色の液体がまた噴きだして、私の顔にかかる。

……料理すらほとんどしたことない私は、初めて知った肉を切り裂く感触と人間ならあり得ない液体が噴きだして私に降りかかってきたこと、そしてミラージユの甲高い鳥の鳴き声のような絶叫に慄き、体が動かなくなった。

何もかも壊すつもりだったのに、私が死んでも、もうこいつがエヒメにだけは手を出せないようにするつもりだったのに、私は結局また、何もできなかつた。

サイボーグさんが私の名を呼んで、こちらに走ってくるのが見えた。

けれど、ミラージユの体から、額の傷から垂れ流された銀の液体の壁に阻まれる。

違う。私のしたかったことはこんなんじゃない。あの子の大切な人に、危ない真似をさせる為じゃない。

私は私の責任を負わねばならなかつたのに、私の体は動かない。

「へラアアアアアアツツ!!」

両目を切り裂かれたミラージユが両手を突き出す。

目が見えていないはずなのに、その手はまっすぐに私の首に伸びてきて、爪を立てて締め上げた。

呼吸と一緒に声が、言葉が胸の奥に閉じ込められる。

何も叫べないまま、私の首を絞めて、私の体を持ち上げてミラージユは「死ね！ もうあんたなんかいらなのよ!!」と叫び続けた。

ああ、私はここで終わるんだ。

何にも出来ないまま、最低なまま、死にたかつたのに後悔だけを残して、凶々しく「死にたくない」と思いながら死ぬんだ。

脳裏に、昔の光景が浮かんでは消える。

お父様やお母様、ルビナスやベラドンナは一切登場しなかった。大好きなおばあさまさえ、出てこなかった。

あの子との思い出しか、浮かんでこなかった。

初めて話しかけたのは、ミラージュに「やって」と折鶴を押し付けられていたから、「ちゃんと自分でやりなさい。あなたも、甘やかさない」と注意した。

エヒメは手元を見もせず、それでいながらも綺麗な鶴を折りながらしれつと私に言った。

「いいの。先生の怪我の快癒を祈らず、無理やり折らせても意味はないでしょ」

見た目に反して結構毒舌で、だけど気持ちのいいことを言う子だなと思って、気に入った。

私のくしゃくしゃの鶴を見て、あの子は「一生懸命折ったのがすぐよくわかる。可愛い」と笑って言ってくれた。フォロージャなくて、本心からそう思ってくれているのがわかるくらい、その鶴を大事そうに手に取ってくれた。

おばあさまと同じ、なんでも作り上げる器用な指先がうらやましくて、あの子が物を作っているのを見るのが好きだった。

……ああ、やっぱり死にたくないなあ。

あの子に、伝えたかったなあ。

私と出会ってくれて、対等な友達になってくれて、たくさんの尊いものをくれてありがとうと言いたかった。

何にもしてあげられなくて、ただあの子の強さに甘えて縋り付いて、信じることですらできなかったことを、許されなくてもいいから謝りたかったなあ。

……4年前、あの子が別の高校ではなくうちの高等部にそのまま進学すると知った日を思い出す。

あの子ならうちの学校以上にいい高校にいくらでも行けたはずなのに、エヒメはあの地獄に残った。

無理やり口実を作って二人きりになって、あの子を問い詰めて、どうして逃げ出さないの!? どうしてこんな所に残るの!? と私が訊けば、弱々しく儂げに笑って答えた。

「だって、ヘラのこと大好きだから」

その答えに納得なんかできなかった。エヒメですら私の「どうして？」に納得のいく答えなんかくれなかった。

でも……ただ唯一、好きな答えだった。

——言いたかったなあ。

私も、あなたが大好きだって。

「ヘラッ!!」

私を呼ぶ声が聞こえる。

手放しかけていた意識が覚醒する。

私の首を締め上げるミラージユの背後、壁の色が一部変わっている。

真っ赤に焼ける金属の色をしたその壁が破れ、サイボーグさんが飛び出してきた。

同時に、上空から黒い影が、闇そのものが飛び込んできて、ミラージユの腕に何か突き刺さる。

苦無と、手裏剣がいくつも突き刺さり、私の首を締め上げていた指が離れる。

膝から崩れ落ちる私が見ていたのは、そのまま拳を固めて腕を振りかぶったサイボーグさんと……

「ヘラに、触るな!!」

空間が陽炎のように歪んだ瞬間現れた、パジャマ姿のエヒメが、私

とミラー・ジュの間に割って入って現れたあの子が思いっきり、ミラー・ジュの顔を蹴り飛ばしている瞬間だった。

エヒメの蹴りの一瞬後に、サイボーグさんのこぶしも右頬にめり込んで、そのままミラー・ジュは地面のコンクリートを抉りながら数メートル吹っ飛んだ。

座り込む私を、同じく座り込んだエヒメが泣き出しそうな顔で言う。

「へー！　大丈夫!!」

私は答えた。

「……大丈夫よ」

大丈夫。

あなたさえいてくれるのなら、私は何もかも大丈夫。

## 自己愛蜃気楼

テレポートを繰り返してやっと学校の正門前までたどり着き、まず最初に見たものは、変わり果てたミラージユに首を締め上げられているヘラだった。

「ヘラッ!!」

抵抗の意志すら見せなかったヘラを呼び掛けると、ヘラは眼を開けた。

同時に、ミラージユの腕に手裏剣や苦無がいくつも突き刺さり、ヘラの首から指が離れた。

背後の壁は焼けた鉄の色をして溶け、そこから服や体は焼け焦げただけで、熱に耐えきれず融解している部分もあるのに、それでもヘラを助けようとしてくれたジェノスさんが見えた。

私がおかをする必要はきつとなかった。むしろ手出しは邪魔でしかなかったと思う。

けれど私はそんなことも考えつかず、もう一回テレポートをしてヘラとミラージユの間に入った。

ヘラを助けたいとか、これ以上ジェノスさんやソニックさんに迷惑をかけれないとか思ったわけじゃない。

ただ単に、完全にむかついたからとつきにやっただけだった。

「ヘラに、触るな!!」

ただブチ切れて、思いっきりミラージユの顔にハイキックを決めた。

決めた直後にジェノスさんがミラージユに殴り掛かって、地面を抉りながら吹っ飛んで行ったけど、もう私は蹴り飛ばした時点で興味の対象がミラージユからヘラに移っていた。

座り込むヘラの首にはミラージユの手形がくつきりと残っていて、爪で皮膚を抉られた傷が痛々しかった。

それでも、ヘラは言った。

大丈夫かを尋ねた私に、顔をくしゃくしゃに歪めて、目にいっぱい涙を溜めて、けれどどこかいつもと同じように……、5年前、私た

ちが堂々と親友だと言いあえていたあの穏やかな日々の彼女のよう  
に、笑って言ってくれた。

「……大丈夫よ」

そのたったの一言で、私は安堵した。

その涙交じりの笑顔で、私は救われた。

ヘラがまだちゃんと笑えること、笑顔を忘れていないことが私に  
とって何よりの救いだった。

\* \* \*

安堵すると同時に、体の力が抜けて地面に私がぺたりと座り込み、  
その直後に「エヒメさん!!」と声をかけられる。

見上げて、私の胸の内がまた新たな罪悪感でいっぱいになった。

手足は一本も欠けることなく健在だけど、傷と焼け焦げだらけ。表  
面だけかもしれないけど、融解している部分も多く、顔の左半分には  
ビが入って左目は飛び出かけている。

そんな状態でも、ジェノスさんは私とヘラを守るために、私たちを  
背にやって向き直る。

ふっとぼして未だ地面に倒れこんだまま「痛い痛い痛い痛い痛い  
いいいっ!!」と、水銀みたいなのをまき散らしながら叫んでのたうち  
回っているミラージュと、彼女を庇うように囲むジェノスさんとソ  
ニツクさんを模した人形と対峙する。

……何あの人形、気持ち悪い!!

モデルの二人には悪いけど、誰を模しているかはわかる程度の再現  
度なのに動きが妙に滑らかだからか、不気味の谷とはまた違う、マネ  
キン人形が動く恐怖というか……とりあえず何とも言えない不気味  
さと気持ち悪さがある。同じ外見のがうじゃうじゃいっぱいいると  
いうのも、気持ち悪さを担ってるのかも。

あと、個人的にかなーりムカツと来た。

いらないけど、ジェノスさん人形があいつを守ってると思うとム  
カツと来た。ソニツクさん人形に関して……、人形でもあれを守ら  
ないといけないなんて大変だなあと同情した。

「何だ、体ごと持ってきたのか。道理でこの女が乱入してきたわけだ。

取りに一旦戻っていたのか」

いつの間にか私のすぐ横にソニックさんが呆れたような目で見下ろして、ジェノスさんがものすごい形相でソニックさんを睨み付けた。

ソニックさん、ヘラごとテレポートした後のセリフでわかってたけど、やっぱり私がいたこと気付いてたんだね。

見えてる様子はなかったから、どうやって気づいたんだろう？

「エヒメさん、事情は後で説明しますから、今はヘラを連れて逃げてください」

ジェノスさんはソニックさんを睨み付けた後、真顔に戻って私に言った。

こちらは完全に私が身体を置き去りにして、ずっとヘラの傍にいたことに気付いていないからか、たぶんあれがミラージュだつてことを私は気付いていない、もしくは気付いてシヨックを受けてると思ってるのかな？

ジェノスさんの言葉に、ソニックさんは鼻を鳴らして「邪魔だ」と言う。そこまでジェノスさんと意見が合うのは嫌なの？ とちよつと呆れつつ、私は言わなくちゃいけないことがあったので、二人に伝える。

「……あの、とりあえずヘラだけでもどこか安全な場所に避難させたのはやまやまなんです……、私、集中力が乱れると座標指定が上手くできなくなるんです」

私の言葉に、ジェノスさんは背中越しでも困惑が見て取れて、ソニックさんは怪訝な顔をした。が、ソニックさんの方は私の足に目をやって、目を見開いた。

はい、その通りです。

「すみません、さっきのハイキックで足をやっちゃいました」

蹴った所為で足の筋を痛めた、ねん挫した程度なら大丈夫だったと思うけど、ミラージュは怪人化したせいかわらぬ蹴った時の感触が何かもう鉄を蹴り飛ばしたみたいだった。

その所為で、たぶんこれ確実に骨がやられてる。折れてはいないと



思うけど、蹴ってまだ数分しか経ってないのにもう立てないくらい痛くて、だいぶ熱を持って腫れあがってるのが良い証拠。

「バカだろ、お前!!」

「バカじゃないの、あなた!?!」

ソニックさんはもちろん、首を絞められていたショックからか「大丈夫」と言ってから茫然としていたヘラからも突っ込まれた。うん、自分でもそう思う。

ジェノスさんだけが、「大丈夫ですか!?!」と言ってくれたけど、もしかしたら足じゃなくて頭の心配だったかもしれないか思ってしまった。

「何してるのよ、あなたは! バカじゃないの!?! 何で蹴った方が大怪我してるのよ!!」

ああ、もうなんであなたは本当に、自分の事はいらなくらいに我慢するくせに、他人のことには全く大人しくしてくれないの!?! 服装もこんなんだし!!」

私の自滅に色々とショックが吹っ飛んだのはいいけど、ヘラの心配性などところと説教癖が出て来て、私の肩を掴んでガクガク揺さぶりながら、半泣きで色々と言われた。

ソニックさんはもう完全に呆れ果てた様子で見下ろしていたけど、ジェノスさんは私の足を心配して強張っていた顔を、少しだけ緩ませた。

安心したような優しい目に、私も心配と迷惑をたくさんかけたことを申し訳なく思いつつも嬉しくなった。

うん、もう大丈夫だよ、ジェノスさん。

私はちゃんと、ヘラと向き合える。もう、ただ「ごめんなさい」と言っただけを遠ざけて逃げて、結果として贖罪どころかヘラを傷つけるなんてことはしない。

もう私は自傷みたいなマネはしない。

ヘラと仲直り、出来ましたよ。

「何で……何であんたが出て来んのよ!!」

そんなほっこりしていたら、憎悪を込めた絶叫が響き渡る。

再び、全員がそれに目を向ける。

環境が悪かったのもある。周りが甘やかしすぎた。叱らず放置していたことが、彼女の歪みを肥大させたことは明らか。

その要因の一人が私なのだから、私が責任を取らなくちゃいけない。

けれど、あの時もつと厳しくしていれば……という後悔はほとんどない。

たぶん、私がいてもいなくても彼女は同じ怪人にいつか成り果てていたと思う。

例え周りがもつと厳格に、「要求を呑んだ方が楽だ」とか思わず断るべきことは断っていても、いつかこの結果に辿りつく。そしてそれは、早まることがあっても遅らせることは出来ない。

だって、一番彼女に影響を与えるであろう彼女の両親は、親バカなところはあったけど常識の範囲内だった。モンペやクレマーと言われるほど、彼女を非常識に甘やかしはしなかった。

彼女の自己愛は、優しい虐待の成果じゃない。

どちらかというと、彼女のあまりのわがままに心が折れて、更生させることを諦めて娘に関わりたくない、逃げたいの一心で全寮制の学校に入れた節があった。

彼女は、私の幼馴染は、ミラージュは初めから、自分以外を愛さない怪物だった。

だから私は、それこそ体も心に見合った姿に変貌したのを見ても思うことは、罪悪感よりも諦観であり、驚きも恐怖もない。

彼女が怖くて仕方がなかったのは、あの自己愛と悪意そのものの彼女と自分が同じ人間だと思っていたから、いつか何かのきっかけで自分や他の人もミラージュと同じになってしまわないか？ という不安からだったんだろう。

初めから怪物だったと知った今では、恐怖は納得に変化してしまっただけ。

そしてミラージュ自身には、怒りや憎悪、嫌悪があるけど、怪人と化した彼女を見て初めに思い、そして今も大きな割合を占める感情

は、憐憫。

同情はしないし、悲しいとも全く思わない。

けれど、初めから決められていたであろうこの結末には、憐れみを覚えた。

やっと起き上がったミラージュは、腕や顔から銀の液体を垂れ流して、自分を守る人形の隙間から私に恨み言を吐き散らす。

「何で、あんたが出てくんの!? 何であんたは、まだ生きてるのよ! 死ね! 死んでなさい! あんたなんかもういらなくなって言ったじゃない!! あんたはまた私から、私のものを全部奪う気なの!!」

……この世全てのあらゆるものを際限なく欲しがって、それが自分のものであることを疑わない。

だからこそ、事実そうであっても決して幸せになれない彼女に私は答える。

「私はあなたから何も奪う気はない。ただ、自分の物を守るだけ」

この返答に何の意味もないことはわかってる。

これは彼女に理解させる為ではなく、ただ自分に改めて自分のすべきことを言い聞かせて、確認してるだけ。

現にミラージュは、子供のように甲高い声で泣き叫んで主張する。

「嘘つき嘘つき嘘つきいいっ!! 奪ったじゃない! 盗ったじゃない! お前さえいなければ、お前が余計なことをしなければ、全部私のだったのに! いい子ぶりっこで私のパパとママを盗ったくせに! 先生から褒められるのも、私の好きな男の子も全部、媚び売って盗ったくせに!!」

ミラージュが狂乱してヒートアップしてゆくのに比例して、私はもちろんジェノスさんやソニックさん、ヘラも完全に白けてゆく。

何ていうか、もはや怒りを覚えるのもバカらしい。

怒りの上限を超えると冷静どころか白けるということを教えてくれたミラージュは、さらに泣きわめきながら被害妄想を声高に叫ぶ。「何で私ばかりこんな目に遭うの!? 私をいじめてそんなに楽しい!? 私の事、そんなに嫌いなもの!?」

「え、うん」

「え？」

思わず、本当に思わず完全な反射で、素で即答したらなんか心底不思議そうな声が上がった。

一秒前まで耳が痛くなるほどに泣きわめいていたのが急に泣き止んで、ミラージュは「え？」と問い返した。

ミラージュのその言葉に、こちらは4人全員がフリーズする。

数秒の間を置き、私は心の底からの本音をもう一度口にした。

「……うん。あなたのこと、昔から大嫌いだったよ」

私の本音に返ってきた言葉は、怒りと困惑が混ぜ合わさった「はあ!？」だった。

その反応に思わずこっちも「え？」って声を上げて、なんとなく横にいるヘラとソニックさんを見る。

「いや、不安がるな。お前の答えが正しい」

「ええ。私も大嫌いだから、好きだと思ったことは一度もないから安心なさい」

「エヒメさん、大丈夫です！ 貴女は何も間違っていないから、自信を持ってください！」

「ですよー！」

あまりに本気で不思議そうだったので、私がおかしいのかな？ と思ってしまったけど、横のソニックさんやヘラだけじゃなくてジェノスさんも振り返って、私が正しいと断言してくれた。

けれど全員、たぶん私と同じ不安を一瞬感じていたんだと思う。みんな、私の「ですよー！」で一瞬、安心したような顔になったから。

納得できないのは、ただ一人。

「……ない。……ありえない。ふぎげんな！ あんたがそんなこと言うなんて、私を、この私を嫌うなんて許さない許さない許さない許さないいいいっ!!」

水銀が仮面のように顔全体を多い、そこにぼっかり空いた口から怨嗟をただ繰り返す。

その様子に、言葉に、思考に私以外の全員が引く。

私は、やつぱりただ憐れんだ。

自分が大好きで、自分以外の生き物は皆、自分の奴隷だと彼女は思ってる。けど、何故か見下しているくせに、自分と対等と思っていないくせに、彼女は愛されたがっている。

愛に飢えているという訳じゃない。ただただ、何もかもが欲しいだけ。

自分の所有物を、得られるはずだった幸せを不当に奪われ続けた、世界で一番不幸な悲劇のヒロインが自分だとあなたは思っているでしょうけど、世界で一番不幸なのは正しい。

あなたは、たとえあなたの望み通りすべてがあなたのものだとしても、決して幸せになどなれない。

……それは何故かを、教えても無意味なんでしょうね。

私の哀れみも、他3人からドン引きされてることに気が付けないまま、ミラージュはただただ狂った論理で自分がいかに不幸なのか、私がかどれほど非道なのかを訴え、嘆く。

「何で何で何で、いつもいつもあんたばかり得して、私は何も得られないの!? こんなに私は頑張ってるのに！ ヘラと違って、手入れしなくちゃ誰にも見向きされないブスと違って、私は自然体なのに、あんたと同じようにしてやってるのに、何でいつもいつもいつもあんたばかりいいいいいい!!」

ミラージュの恨み言に、ジエノスさんとソニックさんが素で「……元が別物だろうが」と同時に呟いて、何か睨み合ってた。

二人とも、そう言ってくれるのは嬉しいけど、今ここでケンカはやめてくださいね。

そしてブスと言われたヘラ本人が、そのことは気にした様子もなく、何か感心したように呟いた。

「……あれ、エヒメの真似のつもりだったの?」

うん、正直私もびっくりした。

ミラージュ、私は確かに化粧はほとんどしないけどスキンケアはしてるし、髪も美容院であまりカットしないのは、毛先をそろえるくらいは自分で出来るからだよ。身だしなみには気を使っていたよ。

あなた、言葉通り本当に何もしいじゃない。美醜の問題じゃなく



「は？」

「え？」

「え？ な、何事!？」

「何だ、自滅か？」

4人がそれぞれ、予想外の出来事に困惑の声を上げて、ミラージュと人形を飲み込み、球状になったその銀の液体の塊をただ眺めていた。

液体が中にいたミラージュを飲み込んで丸まって、巨大で綺麗な球状になったけどそれは30秒も持たず、チョコレートのように表面が溶けてまた液体となって行く。

その溶け行く球の中から、声が聞こえる。

「ふふ……ふふふふふふ……。そうよ。これよ。これこそが、正しいの。今までは何かの間違いなの」

ミラージュの声が聞こえる。

つい1分ほど前まで泣きわめいて狂乱していたのが嘘のような落ち着きを見せる声音に、寒気が走る。

今こそ、私はヘラと逃げるべきだったと思う。だけど、体が動かなかった。

それは他の人たちも同じ。

誰も、何も言えずにただその塊が溶けきるのを、中から何が出てくるのを待ってしまった。

銀の塊が、地面にぺたんこ座った人の形になってゆく。人形の方は全部溶けてしまったのか、人影は一人。

ただの人の形をした、男か女かもよくわからない銀色の人形だったそれからも、銀の液体が流れ落ちて行き、中身が露わになる。

露わになり、全員が絶句した。

服装は先ほどまでと同じ、銀の液体がそのままドレスのようになっていたのだけど、今は髪さえも髪にはありえない金属の光沢を持ち、不気味に蠕動する一塊の液体になっている。

そして額、ソニックさんが初めに手裏剣を突き刺した傷跡はぱっくり開いて、そこから手のひら大の眼球がぎよろぎよろと辺りを見渡し

た。

第3の目は瞳は無機質な銀で、鏡をそこにはめ込んだようだった。けれど、私たちが絶句したのはそこじゃない。もう今更、彼女は体すら人間のカテゴリから外れているのはわかっていたから、これくらい驚くことじゃない。

「やっと、取り戻した」

その場に座り込んだまま、恍惚と自分の顔に両手をやって、ミラー  
ジュだったものは眩いた。

その怪人は、私の顔をしていた。



## 悪い想像は悪い現実を呼ぶ

自分と似てる顔というものは、実際に見ても本人はピンとこないものだけど、さすがに自分と同じ顔はわかる。

例えば、髪が水銀状の何かに変質してようが、額に鏡そのもののような目が、ぎよろりと覗いていようが。

ぺたんといわゆる女の子座りの体勢のまま、私と同じ顔をしたその怪人は、ミラージュは頬を上気させながら唇を吊り上げて歪めた。

こちらを見下す笑みで、言った。

「私だってあんたなんか大嫌いよ」と。

その言葉はもう今更どうでも良かったので、率直に思ったことがやっぱり反射で口から出た。

「気持ち悪っ！」

「エヒメ、気持ちはわかるけど自分の顔!!」

そしたら横のヘラから突っ込まれ、ソニツクさんから「自分で言うなよ」と呆れられ、ジェノスさんからは、「エヒメさんはあんな表情しません! いつもお綺麗です!!」と謎のフォローをいただいた。

「え? あ、ありがとうございます?」

「礼を言ってる場合か! またパニくってるのかお前は!」

思わずジェノスさんのフォローにも反射でお礼を返したら、ソニツクさんに頭をどつかれた。それをジェノスさんが、「ソニツク、貴様!」とか怒るけど、怒らないでジェノスさん。今のは間違いなく私が悪いから。

私が叩かれた頭を押しさえながらとりあえずジェノスさんを止めていたら、ソニツクさんはジェノスさんに睨み付けられるのも怒鳴られたのも無視して、一度舌を打って私とヘラに指示を出す。

「いいから、お前ら二人はさっさと逃げろ。貴様ら、あれがああなった原因は自分達だと責任を感じるのには勝手だが、はつきり言ってここに残られた方が邪魔だ」

ソニツクさんの指示にジェノスさんもやや不満そうながら、同意して私とヘラに補足説明してくれた。

「……癩ですが、そいつの言う通りです。二人は避難してください。

……奴の能力は、最悪です。あの液体の壁だけでも厄介ですが、奴が生み出した人形はダメージをそのままモデル本人に反映させます」  
そこまで言われて、ヘラは顔色を変えてミラージユを見た。

ミラージユはうつとりとした顔で、地面に溜まった液体に自分のと  
いうか私の顔を映して眺めている。

……私じゃないのに私がナルシストみたいでひたすら恥ずかしく  
て微妙な気分だからやめて欲しいけど、……能力的にそんなこと言っ  
てる場合じゃないよね。

「……あれ、下手にミラージユに攻撃したら、私に反映されるってこと  
ですよね？」

人形じゃなくてミラージユ本人だし、私みたいになりたいという願  
望で変化しただけなら、ただ単に顔が変わっただけの可能性も十分あ  
る。

……でも逆に、私がミラージユと同等のダメージを負うだけじゃな  
くて、ダメージがそのまま私に反射されてミラージユは無傷という可  
能性もある。というか、あいつの性格からしてそっちの方が高い。

「……エヒメ。私の背中に捕まりなさい。攻撃されそうな時だけ、テ  
レポートをお願い」

ヘラがミラージユを視線で射殺せそうな目で睨み付けながら、そう  
提案した。

「は？ え、おんぶするってこと？」

いきなりの提案で私は困惑する。確かに足の痛みでテレポートが  
安定しないけど、短い距離なら何とかできそうだから断るつもりが、  
「文句言わない！ ジム通いしてんだから、あなたぐらい背負って逃  
げれるわよー！」で私の提案は却下された。

「……エヒメさん、ヘラの言う通りにしてください。痛みで集中でき  
ないのなら最悪、位置指定を失敗して奴の攻撃範囲内に出現してしま  
うかもしれない。痛みのせいでいつもより限界が早いかもしれないま  
せん。

とにかく、テレポートはなるべく使わず逃げてください」

ジェノスさんにもヘラの言う通りにしろと言われて、申し訳ないけど私はヘラの背中に捕まった。

ジェノスさんの言う通り、いつもの精度でレポート出来る自信はなく、痛みだけじゃなくてここに来るまで、そして幽体離脱状態でも校舎内を逃げ回ってたヘラに使ったりしてたから、実はキャパに余裕はあんまりない。

キャパオーバーになったら私は役立たず以外の何でもないから、ここは大人しくいう事をきいて、少なくともヘラだけは守ることに集中する。

「……ごめんなさい、ヘラ。ジェノスさん。ソニックさん」

私の謝罪に答えた声を謝った3人の内の誰でもなく、ミラージュだった。

「あら、結局逃げるのね。けど今度は逃がさない。もう二度と私の邪魔をさせない。絶対にもう、私の邪魔させない!!」

うつとりとした顔のまま前半は歌うように語っていたのが、急に目を吊り上げて歯をむき出しにして睨み付け、宣言する。うつとりした顔もやめてほしかったけど、その般若顔もやめてくれないかな！

割と私としては切実だけど、そんな要求を叫ぶ暇はない。

ミラージュの周りにたまった液体が噴水のように盛り上がったかと思ったら、粘土のようにうねうねと形を変えて、人の形になってゆく。

細部は相変わらず再現されてない大雑把な造形だけど、モデルが誰であるかくらいははつきりとわかる銀の人形が出来上がる。

「逃げてくださいー!」

「邪魔だ! さっさと行け!!」

ジェノスさんとソニックさんが同時に指示を出して、ヘラは私を背負って走る。

運動神経が良くて、体力もある方だったし本人がジム通いしてると言ったのも本当だろうけど、別にそれはスタイル維持の為に人ひとりを背負って逃げる為じゃないから、ヘラの走る速度は歩くよりはマシ程度。

何度も「大丈夫?」「やっぱり、私は自分で何とかするよ」と言いたかったけど、私がか何を言いかけるとヘラが凄いい目で睨み付けてきたので、言えなかった。

怒ってるんじゃないやなくて泣きそうな目で、頼ってよと言いたげな目で見られたら何も言えない。

だから、私はヘラの背中で一言だけ告げる。

「……ヘラ。ありがとう」

ゼイゼイと荒い息を吐きながら、それでも決して足は止めずに動かしながら、ヘラは呟いた。

「……あなたたつて人は、本当に……」

最後までは言ってくれなかった。

まあ、大体何を言おうとしたかはわかってるから別に良いんだけどね。

\*\*\*

「殺して! 凶々しく私の顔でいるあれを! もう誰のものにもならないようにズタズタにして!」

ミラージュの命令に従って、10体近くのジェノスさんとソニックさんを模した人形が私たちの方に迫ってきた。

「凶々しいのは、貴様の方だろう!」

「俺を再現しきれないノロマが、ここから先に行けると思うか?」

それを、本物のジェノスさんとソニックさんが食い止める。

共闘というほど協力はせず、互いに互いを無視してるだけだけど、奇跡的にケンカせずに入形と戦ってくれている。たぶん自分たちに向かつてきた人形が、自分の人形だからだろうけど。

……二人とも、相手の人形だったら喜々として壊しにかかるんだろうなあというのが容易く想像ついた。二人とも本当に、仲良くはしなくていいから大人げをもっと持ってほしい。

ただ、人形の能力を既に二人は体験してるから戦うつもりはさらさらならないらしく、どちらもヘラと私が逃げる時間を稼いでくれているだけで、防戦に徹している。

私達さえいなければ、防戦にしてももっとマシンなはずだと思い、歯

噛みする。

ヘラも悔しそうに歯をギリリと噛みしめて鳴らしたので、私はヘラに謝りつつ提案する。

「ごめん、ヘラ。やっぱりテレポートを使うよ。悔しいけど、何もできないのは辛いけど、私たちがここにいるのは本当に邪魔でしかない」  
誰かと一緒に跳ぶ場合、その相手と行きたい場所が一致していなければ上手く飛べないのは、ついさっきまで背後霊のようにヘラについて回っていた時に学んだから、ヘラにテレポートすることを同意してもらうために話す。

「……意地を張ってる場合じゃ……なさそうね……」

ヘラは悔しそうだけど了承してくれたので、私は足の痛みを無視して集中する。

が、私たちがテレポートで逃げようとしているのを察したのか、人形が思ったよりも効果的な作戦に出た。

……もう一度言うけど「人形が」、だ。ミラージュじゃなくて、たぶん確実に人形側が考えてやらかした。

自我とか知能があるとは思えないけど、ロボットの思考ルーチンでもミラージュよりは賢かったらしい。

「ひっ！ な、何するの!?!」

「げっ!」

「くそっ!」

背後で同時に、ミラージュの悲鳴と文句、ソニックさんの驚愕まじりのきまり悪そうな声、ジェノスさんの悪態が聞こえた。

思わず振り返って見たら、ミラージュが座り込んでた位置に銀の壁、それに反射してジェノスさんの焼却砲らしき熱線と、ソニックさんの手裏剣やら苦無やらが四方八方に飛び交ってきた。

「何事!?!」

一気に長距離を跳ぼうと思ったけど、どこに反射した攻撃が向かってくるかわからないこの状況でそんな集中が出来るはずなく、私はとにかくヘラに当たらないようにとつさに跳んでジェノスさんとソニックさんの近くに戻ってしまった。

たぶん本能的に、この二人が安全地帯だと認識したんだろう。せつかく走ってくれたのに、ごめんねヘラ。

ヘラの努力を台無しにしちゃったけど、ヘラの怒りは私じゃなくてジェノスさんとソニックさんに向かう。

「何でまたあの壁に攻撃してんですか?! 反射するの知ってるでしょう!」

ヘラの怒りと素で疑問に思ったであろうことをぶつけられたら、二人は明後日の方向に目をやって、答えた。

「……ソニックの人形がそこにいたので、つい」

「ポンコツの木偶人形がそこにいたからだ」

「隙あらば相手を殺そうとしない!!」

とりあえず、ヘラと一緒に二人を叱っておいた。

どうも自分の人形の猛攻が少し治まったと思ったら、ミラージュのすぐそばかつジェノスさんが攻撃しやすい方向にソニックさん人形が、ソニックさんの攻撃しやすい所にジェノスさん人形が立っていたらしい。

守るにはあまりに隙だらけの棒立ちで普通に罠だと思つてよかったのに、相手は人形と正直言ってバカだと認識してるミラージュだったからか、それともそんな可能性に思い至らないくらいにお互いを殺したかったのか、思わず攻撃を仕掛けた瞬間に人形は溶けて液体に戻り、そして壁を作り出して反射という見事な自滅をやらかしたらしい。

もう本当に何してんの、二人とも!

ただでさえ人形の特性上、別に二人に直接攻撃しなくてもそれこそジェノスさん人形とソニックさん人形が同士討ちを始めたらもうはやなす術なくなるのに!

現に今も、本体二人は反射された攻撃を避けきる、防ぐが出来てるけど人形がほぼ全滅して、ジェノスさんの体は切り傷だらけだし、ソニックさんは火傷だらけだし!

私とヘラが半泣きで二人の馬鹿さ加減を叱りつけたら、ジェノスさんは平謝りしてくれたけど、ソニックさんは拗ねたような顔でそっぽ

むき続けた。

本当にあなたは大人げないな！

「……ふふふ、そうよ。今更気づいた？ あんたたちを殺すなんて簡単なのよ！ 同士討ちさせればいいだけ！ ほら、早く殺し合いなさい!!」

『あ』

私とヘラの叱責で、ミラージユが今まで考えつかなかった一番効率のいい戦い方を知ってしまった。

つて言うか、自分は初めからそのやり方を思いついていたけど、やってなかっただけよというふううに記憶を即座に改竄するのは、相変わらずすごいなとしたくない尊敬をいついしてしまう。

お前、ついさっきの悲鳴と文句は何なんだ？

そんな若干コントみたいなやり取りになってしまったけど、洒落にならないことを命令されて全員が顔色を変える。

それを額の目すら楽しそうに歪ませてミラージユは見てたけど、しばらくしたら困惑と不満に歪んだ。

そしてこちらも、困惑する。

人形はヘラの命令に従わず、ただ棒立ちをしているだけだった。

「な、何してんのよ！ 私を命令を何でできないのよ!!」

ヘラが座り込んだまま、ヒステリックに怒鳴りつけるとジェノスさん人形とソニックさん人形がそれぞれ一体ずつ動き出したけど、どちらも動きがやけに緩慢だった。

主の命令に従うのが面倒くさいと言ってるような、やけに人間臭い動作にさらにこちらが困惑してつい全員で観察してしまう。

ジェノスさん人形は本体よりはるかに雑な造形の砲門を開いて、ソニックさん人形は自分の体の水銀を武器に変えてお互いを攻撃する。

ちなみに、ジェノスさん人形の場合、砲門から出て来るのは熱線でも炎でもなく、やはり体を構成している水銀そのものだった。ただ、ウォーターカッター並の勢いで出るの、本物より延焼の危険性がなだけでまだマシだけど十分脅威な代物だった。

けど、それは互いには意味がないらしい。

ソニックさん人形の苦無や手裏剣も、ジェノスさん人形のウォーターカッターも、どちらも元は自分たちを構成する液体の所為か、互いの体に当たった瞬間それはドプリと飲み込まれて、人形は無傷のまま平然と立っている。

『……………』

気まずい沈黙が、しばらく続いた。

ああ、そりやジェノスさんとソニックさんの仲が険悪通り過ぎていることを見越して、自分たちとミラージュを囷にして自滅に追い込むくらいの思考ルーチンがあるのなら、同士討ちくらい思いつくよね。それをしないってことは、無意味だとわかっていたからしなかったんだね、人形は。

……自分の能力くらい、把握してるよ!!

と、全員が心の中でミラージュに突っ込んだのは言うまでもない。口に出さなかったのは、あまりのそのマヌケっぷりに全員が脱力しきっていたからだろう。

もうなんていうか本当に、バカは罪の典型例だな!

まあでもこちらとしては、想定していた中で最悪の戦法が不可能だということが判明したのは僥倖。

「へー、すまないがもう一度エヒメさんを背負って、エヒメさんが安心して集中できる所まで離れてくれ。今度こそ、時間を稼ぐ。エヒメさんは奴らの射程範囲外まで出たら、出来るだけ遠距離にテレポートしてください」

ジェノスさんはへらと私にそう言って頼み込む。さすがにもうなるべくテレポートするなというのは誰にとつても不利でしかないのに、失敗が起こりにくい安全地帯に入るまでなるべくするなに指示は変化していた。

元々こちらもそのつもりだったのでへらと一緒に頷き、再び私はへらの背中に捕まって、へらは私を背負って立ち上がる。

そのタイミングで、ようやく自分の命令が無意味極まりないショットから立ち直ったというか、逆ギレをミラージュはかます。

「ふざけんな! …… としていつもいつも、こんなに頑張ってるのに私は



上手くないのかなの!?

ああ、もう死ね! 皆死ね! どいつもこいつも消えて無くなれ!!」

水銀の髪と化した頭を掻きむしり、ヒステリックにミラージユが喚き散らすと、彼女の周りの液体からさらに人形が次々と生み出される。

酷い例えだけど、虫の卵から幼虫がウジャウジャと孵化するような光景で気持ち悪い。って言うか、あの厄介な壁を作る分の水銀を残さなくていいのかな? としなくていいはずの心配をしてしまうほどに、続々とミラージユは人形を生み出し続けた。

「数で押す気か」

ソニックさんが舌打ちしながら吐き捨て、ヘラが「だ、大丈夫なの?」と思わず尋ねる。

最強を自負するソニックさんにとってその問いは侮辱以外の何物でもなかったけど、さすがにバカにしたのではなく純粹に不安から言い出したヘラにキレる程、傍若無人ではなかった。

「問題ないからさっさと行け! あんな俺を再現しきれていない、劣化コピーなどいくら集まってもただの烏合の衆だ!」

怒鳴りつけられ、ヘラはソニックさんを睨み付けるけどケンカしてる場合じゃないので、とりあえず私が「ごめんね、ヘラ。ソニックさんは素直に『心配するな』って言えない人なの」と代わりに謝っておいたら、今度は私がソニックさんにすごい目で睨まれた。

だって本当の事じゃない。

「エヒメさん、心配せずに先に行ってください。」

懸念してましたが、先ほどからの戦闘でどうも奴らの性能がモデル本人より劣化してるのは演技ではなく事実のようです。1対1ならともかく、数で押すのなら相手に倒されてモデルを道連れという戦法を使わなくてもいいので手加減する理由にはなりませんから、人形はモデルの5、6割程度の性能は事実でしょう。その程度ならば、そこまで脅威ではありません」

ジェノスさんが私たちを安堵させるために、さらに補足を加える。

が、人形の数からしてモデルの半分くらいの強さだと言われても決して安心できるものじゃないことは、私もヘラもわかってる。

二人の「大丈夫」も「心配するな」も、ヘラが足を止めないように、私のテレポートが失敗しない為の嘘であることくらい、わかっている。わかってるからこそ、私たちはその優しい嘘を無駄には出来ない。

「……無茶はしないでくださいね」

私がそれだけを伝えると、ヘラは走り出した。

同時に、人形たちが私とヘラを追い求めて駆け出し、それをジェノスさんとソニツクさんは相変わらず協力はしないけど、完全に食い止めた。

幸か不幸か、人形は先ほどと同じく自分たちのモデル相手に向かって行くので、隙あらば相手を殺そうと思ってる二人いだけど、こちらが同士討ちになることはなさそう。

自分の人形だから防戦以外できないけど、相手の人形が向かってきたら確実に喜々として殺しにかかってまたしても自滅は目に見えていたからホツとして……次の瞬間、疑問が沸き上がった。

待って。どうしてあの人形は、モデル本人に向かってるの!?

二人が陰悪であることを理解して、自分たちを囮にしてさっきの自滅に追い込んだくらいだから、あの人形には痛覚とか明確な自我は多分ない。

だからと言ってミラージュの分身でもないのは、能力者本人が人形の同士討ちは無意味だということも知らない、囮にされたことに文句を言った時点で明らか。あれはある程度の人工知能が組み込まれたロボットみたいなものだと思う。

痛覚や死に対する恐怖がないのなら、ただ合理性だけで戦うのなら決して仲間じゃない、むしろ人形やミラージュごと殺したいと思ってることを隠しもしてない二人相手なら、本人の人形じゃなくて相手の人形をぶつける方が良いに決まってる。

どうして、それをしないのか。

その疑問こそが、ミラージュの反則的な能力の何かに繋がるのではないか。

そう思つて、私は振り返る。  
そして見た。

二人がとつさに、自分たちの人形以外のシルエットが見たから、少しでも人形の数を減らしたい一心か、やっぱり隙あらば相手を殺したかっただけかはわからない。

ただ、攻撃する直前にそれが、ジエノスさんの人形でもソニックさんの人形でもないことに気付いて、動きを止めてしまう。

彼らの前に現れでて、彼らにしがみついて動きを止めた人形は、ヘラの姿をしていた。

ソニックさんの方はしがみつかれたヘラを振り払つて、自分に襲い掛かる自分の人形から逃げれたけど、ジエノスさんはヘラにしがみつかれたまま、自分の人形のウオーターカッターで左腕を切断された。

それとほぼ同時に、ヘラが転んだ。ソニックさんが人形にした、振り払つて突き飛ばしたのは別に怪我するほどではなかったけど、私を背負つて走っているヘラに反映されたら、走つてはいられないものだった。

「きゃあつー！」

悲鳴を上げて倒れるヘラが、私の足を離してしまったのは無理もない。むしろとつくの昔にプルプル震えていたから限界だった。

同時に、私もヘラの背中にしがみついたままだと倒れたヘラを下敷きにしてしまうと思つて、とつさに手を離してしまい、私は投げ出される形でヘラと同じく地面に倒れた。

最悪の判断をしてしまった。

「何してんだ、馬鹿が!!」

「エヒメさん!・逃げてください!」

ソニックさんが怒鳴りつけ、ジエノスさんが片腕をなくした状態で叫んだ。

一体、ソニックさんの人形がヘラの人形を使われたことで二人の防衛ラインを越えて私たちに迫つて来ていた。

水銀で作りに出した刀を携え、本人よりは遅いけど常人が反応できる訳ないスピードで。

ソニックさんとジェノスさんは、他の人形がこちらに来るのを防ぐのに精一杯で、私がテレポートで逃げるしか方法はないのに、私はヘラから手を離してしまった。

「ヘラっ!!」

私は叫んで這いずって手を伸ばし、ヘラもヒューヒューと苦し気な息をしながら立ち上がろうとしたけど、間に合わないのは明確だった。

……私たちしかいなかったら、ね。

\* \* \*

「エヒメエエエエっ!!」

私の名前を叫ぶ声と同時に、私とヘラの目の前にミラージュが仕掛けた爆弾の爆発から放置しっぱなしで忘れてた車が飛んできた。

幸い、私やヘラやもちろん、ソニックさん人形にも車本体がぶつかることはなく、壁の役割を果たしてくれた。

「な、何なの!? 誰!? 何してるの! 早く私を守りなさい!!」

相変わらず座ったままのミラージュが、いきなり車が吹っ飛んできたことにパニックを起こし、こちらにとつては幸運な事に、人形を全て自分の元に戻して自分を取り囲んで守るように命じる。

そして、車を素手でぶん投げた張本人は、凝った肩をほぐすようにグルグル回しながら、言った。

「……よう。3年ぶりだな、ミラージュ」

私が何もかも失っても、決して失えなかった、いつだって私を守ってくれる、私を救ってくれる、誰よりも何よりも頼りになる、私にとつて原点であり、理想であり、本物である最高のヒーローがやって来てくれた。

……くれたん……だけど……

『来んなああああーっ!!』

「え!? 何で!？」

私や危うく車の下敷きダメージ反映するところで顔色最悪のソニックさんはもちろん、お兄ちゃんをよく知らないヘラどころか、まさかのジエノスさんも敬語をかなぐり捨てて叫び、見事に唱和した。

お兄ちゃん！ 誰よりも何よりも私は頼りにしてるし強いと信じてるけど、だからこそ人形の再現率が5割程度でもこの能力を聞いた瞬間、私、「お兄ちゃんがいなくて良かった！」って思ったよ！

口に出したら何かフラグになっちゃいそうだったから言わなかったのに、どうして起こって欲しくないことに限って現実になるのかな!?

お兄ちゃんは何も悪くないけど、まさかの全員から「来んな」と叫ばれて、シヨックを受けつつ茫然としていたら、ミラーージュが「だよ!？」と叫びながら、自分を取り囲む人形の隙間からお兄ちゃんを見た。

額の、鏡のような瞳を持つ目玉がお兄ちゃんを映し出す。

ゴポリと、泡が弾けるような音がして、また新たに人形が生み出される。

モデル本人がそもそもシンプルな所為か、その人形が一番本人に似ていた。

「……あれは、製造者責任ってことで」

「……異議なし」

「お、お兄さん、頑張ってください！」

「先生……、申し訳ありませんがお願いします」

「だから、何なんだよ!？」

お兄ちゃんの人形を前にして、とりあえず全員で押し付けておいた。

いつてきます

造形が一番シンプルなのに、その人形が1体、形作られるのに比例して数体のジエノスさん人形とソニックさん人形が溶けた。

他の人形数体分の液体を使って密度を上げて、1体の人形が生まれる。

シンプルなヒーロースーツにマント、手袋。そして一番シンプルでありながら特徴的な頭を再現してそこに佇む銀人形に、モデルであり状況がわかっていないお兄ちゃん以外、全員の顔が引きつった。

そして全く悪くはない、むしろ助けに来てくれたんだから感謝しなくちゃいけないんだけど、ちよつと今はどうやっても感謝できないお兄ちゃんは、いきなり散々な対応をされたことにキレた。

「何なんだ、お前ら！ 別に助けに来てやったとか言つて恩着せる気はねーけど、来んなはないだろ！ 来んなは！！ そもそも、あれは何なんだ!? つーか、あれがミラージュだよな!? エヒメの顔してるけど！」

もうとにかく簡潔に説明しろ!!」

「ミラージュが怪人化した」

「能力はオートで反応してミラージュを防衛し、攻撃を反射させる壁と、劣化とはいえ相手の能力コピーした人形を複数体生み出すことです」

「しかもその人形は、くらったダメージをモデル本人に反映させる」

「そして、お兄さんのコピー人形が今あちらに」

「ごめん！ 俺が悪かった！」

リクエスト通り、4人で簡潔に説明してみたら「来んな!!」発言に納得して、謝ってくれた。

そして、お兄ちゃんはミラージュの前に佇む自分の人形を見て咳く。

「……どうすんだ、あれ?」

こつちが聞きたい。

「……な、何? 誰? な、なんでもいいから早くあいつらをやつ

ちやつて!!

あいつを、エヒメを今すぐに殺して!!」

ミラージュはお兄ちゃんが乱入してきたことに混乱しつつも、とりあえず敵認定をしたらしく、人形たちに命令した。

そして、真っ先にその命令通り動いたのはお兄ちゃんの人形。

「エヒメさん!」

片腕を失っても、ジェノスさんは私を気にかけて叫ぶ。

お兄ちゃんも一瞬だけ振り返って、私を見た。

何も言わなくても、その目で何が言いたいかはわかる。

「……っ! ごめんなさい!」

私は取り残す3人に謝罪の言葉だけを残して、ヘラにしがみついて跳んだ。

逃げる悔しさと無力感、助けに来てくれたお兄ちゃん、守ってくれたジェノスさんやソニックさんを置いて行く罪悪感で心はぐちゃぐちゃだけど、ヘラだけは守らなくっちゃと思いがあつたから、学校の屋上という今の精神状態では上出来の位置と距離を取れた。

けど、お兄ちゃんのコピーなら劣化してもこの距離じゃ危ない。普通の学校よりはるかに校門前から校舎への距離があつても、それは焼け石に水同然。

だからもう一回飛ばうとした、瞬間。

「きやああっ!!」

「!?!」

どごおおおんっ!! とものすごい音がして、一瞬学校が揺れた。

振り返って見て見ると校門が完全に崩壊し、お兄ちゃんが投げつけたヘラの車は消滅して、先ほどまで私たちがいた場所は直径10メートル近いクレーターになっている。

「なっ……………」

ヘラはその惨状に、絶句する。

そして私はその横で、胸を撫で下ろした。

「良かった。思った以上に再現できてない」

「ちよつと待って、エヒメ! 貴女のお兄さんどれだけ強い!?!」

言われて当然のことを突っ込まれた。

「ごめん、ヘラ。私にも、人形が足元にも及んでない事しかわかんない。」

見下ろしてよく見てみると、クレーターの端にお兄ちゃんとジェノスさん、見えにくいけどソニックさんも確認できた。

私のテレポートが間に合うぐらいの速さであの威力なら、あの3人なら逃げきれると信頼できたけど、その姿に心からホツとする。

「……とりあえず、あの人形はお兄ちゃんの強さを半分どころか0.01%も引き出せていないみたいだから、今すぐ地球が終わるってことはなさそう。もしくは、主のミラーージュが近くにいるから手加減してるのかな？」

どつちにしろ、思ったよりはだいぶマシな状況みたい」

「……ああ、うん。それは僥倖だけど、あれで0.01%もないって、あなたのお兄さんは何者なの？ 失礼だけど、人類にカテゴライズしていいの？」

たぶんダメ。

さすがにそんな正直な返答してもヘラが困るだけだし、私も何か微妙な気持ちになるから答えず、私はまたヘラにしがみつく。

「ヘラ、このままもつと離れるよ。お兄ちゃんの人形がさらに作られたらここでも危険だから」

私の言葉にヘラは悔やむように、申し訳なさそうに顔を歪めて、頷いた。

私も、心の中で謝りながら目を閉じて集中する。

集中なんかできない、心は乱れきってるけど、ヘラだけは巻き込まない。安全な場所に連れて行かなくちゃいけないときつきのようになり聞かせて、私は跳んだ。

もう足の痛みなんか、ほとんど忘れてた。

私の心を乱すのは、飛ぶのに余計な重さになってるのは、戦えない弱い自分に対する憤り。

だからこそ、少しでも遠く、壊滅して人がほとんどいないこの地区から、B市から出なくちゃ。ヘラを安全な場所に、誰かに守ってもら



わなくつちやいけない。

私は、またここに戻ってこなくちやいけない。

\* \* \*

幸い、B市から出る必要はなかった。B市の外れは被害が少なく、既に復興していたからそこまでのテレポートですんだ。

私は、人工的な明かりが見えたことにホッとして、ヘラに言う。

「良かった。ヘラ、ここまで来たら大丈夫だよ。

それと……ごめん。後は、お願い。ヒーロー協会に応援を……能力的に呼ばれた方が、さらにややこしくなるか。でも情報が変に錯綜しても危ないから、協会に事情だけでも……」

「戻る気？」

ヘラはしがみついていた私の腕を掴んで、言った。

眉間にしわを寄せ、唇を真一文字に結んで睨み付ける。

よく怒っていると誤解されるけど、これはヘラが泣きそうなのを、泣きたくて仕方がないのを必死で我慢している顔だって知ってる。

「……行かせないわよ。バカなの、あなたは？ あなたが戻って、何になるっていうのよ！ ただでさえあいつはあなたの姿を写し取った事で、あなたを人質にしているも同然なのに、本人が舞い戻ってどうすんのよ!!」

あなたが戻って、どうするの!?! どうなるの!?! あなたに、何が出来るって言うのよ!!」

ついさつきまどとは逆に、ヘラが私にしがみついて叫ぶ。

周囲の人たちがボロボロのコートとジャージのヘラと、パジャマ姿で片足が大怪我の私をギョツとした目で見て遠巻きで見てるけど、ヘラはもう周りなんか見ていない。

ただただ、私があそこに、学園に、皆が戦っている場所に戻らないように、しがみついて叫ぶ。

「あの人たちが何のために私たちを……あなたを逃がしたのかもわからないバカなの!?! 違うでしょ!?!」

……お願いだから、もう大人しくしてて。お願いだからもう、……傷つかないでよお……」

我慢してた涙が一粒こぼれると、涙腺が決壊して後から後からとめどなく溢れ出て、滂沱の涙になってしまった。

それでもヘラはしゃくりあげながら、ずっと訴え続ける。

私に「行かないで」「危ない事はもうしないで」と。

それは、ヘラだけじゃなくてお兄ちゃんやジェノスさんも、私に望んでいることは知っている。もしかしたら、ソニックさんだって少しくらいは思ってくれているかもしれない。

何より、私がお兄ちゃんに願いつけて、今もなお望んでいる事。

だから、ヘラの気持ち痛みほどわかる。

わかったと言って抱きしめ返せば、ヘラは安心する。ヘラだけじゃなくてお兄ちゃんたちも安心してくれる。

それが一番正しい、私のすべきことなんだっていうのはわかってる。

……ごめんね。ヘラ。そしてジェノスさんにソニックさん。

あなた達の望みを、私は叶えてあげられない。

お兄ちゃんには、謝らない。

だって私は、どうしようもなくお兄ちゃんの妹だもん。

「……ヘラ。私は、もう逃げたくないの。あの日みたいに何も言えなのまま、何もしまいまま逃げ出すのはもう嫌なの」

すすり泣くヘラの頭を撫でながら、答える。あなたが一番、望まない答えを。

「私はミラージユに会っても、彼女に何が言いたかったのかはもうわからない。そもそも、あいつは何を言っても無駄だし、あいつの為にできることなんか何もないのは、3年前に思い知った。

だから……私があの場合に舞い戻ったって、何が出来るのかなんかわからない。きっと何の役にも立たないのは、わかってる。

……でもね、ヘラ。私はどうしても、戻らなくちゃいけない。戻って、もう一回ミラージユに会って、そしてやらなくちゃいけないことがあるの」

もう続ける言葉すら言えず、嗚咽だけを漏らしながら、それでも私にしがみついて離れないヘラに伝える。

「私はね、あいつの横っ面に一発、思いっきり殴らなくっちゃいけないの」

私の宣言に、ヘラは盛大にむせた。

そんなに予想外かな？

別に今更、ミラージユを救おうとか人間に戻そうとなんか思っていない。彼女は怪人である方が正しいと思うし、そしてミラージユは救われない。

誰がどうしようが、望み通りこの世の何もかもを手に入れても、彼女は永遠に救われない。

だから今更、そこをどうこうしようとは思わない。後味は悪いけど、彼女は自分からそういう結末に直進していったのだから。

だから、あいつの事はもう考えない。

私は私らしく、身勝手に自己満足のわがままを貫く。

例え、あいつの横っ面にビンタを入れたら、そのダメージが全部私の元に反映されるだけだとしても、それでも私はあいつを殴らなくっちゃいけない。

積年の恨みと怒りと、ほんのわずかに残った情や後悔をその拳に乗せて、渾身の力で引っ叩いてやらないと、私は前に勧めない。

あいつに奪われた、前に進む足を取り戻せない。

「……だから、ごめんなさい」

「……謝らないでよ」

咳き込んでむせていたヘラの背中を撫でながら伝えると、呼吸が落ち着いたヘラは不機嫌そうに言った。

「あなたは悪くないわよ。あいつを100回殴ったってお釣りが出るくらいの権利があるんだから。むしろ、あれをまだ助けなくっちゃとか言いだしたら、私がぶん殴ってたわよ」

不機嫌そうに、決まり悪そうにヘラは早口で言う。

これも怒ってるとよく誤解されるけど、違うことを私は知っている。

「……わかったわよ。それは確かに、どんなに危なくてもやらなくっちゃいけない事よ」

私の腕を掴んでいた手の力が緩む。ヘラが、顔を上げる。

ぐしゃぐしゃの泣き顔で、化粧なんかもう完全に落ちてるし、髪もボサボサである学園にいた頃では考えられないヘラの姿。

「行ってらっしゃい。さっさと、私の分まで殴って、そんで帰って来なさい」

決まり悪そうに、こちらが口を挟む余地なく早口で語るのは、照れ隠しだということを知っている。

あの学園で……あの牢獄では決して見れなかった、何よりも誰よりも綺麗な笑顔でヘラは私を見送ってくれた。

「うん。ヘラ、行ってきます」

## One Punch Girl

思った以上に人形は先生の強さを再現できておらず、全員が安堵する。

元々、先生相手では半分も再現は出来んだろうと思っていたが、予想通り再現できる強さには上限があるのか、強敵には変わりないが俺が万全なら倒せるのではないか？　と思える程度だ。

人形を生み出した本人は先生の強さに全く気付いておらず、劣化や粗悪品という言葉でもやさしいレベルの再現しかしていないにも拘らず、その強さが予想外だったのかポカンとした顔で、先生の人形が一撃で作り上げたクレーターを眺めている。

人形どもは、何もしないで棒立ちしている。

おそらくこいつらの最優先命令は、「エヒメさんを殺す」ことで、その獲物であるエヒメさんと一緒にいたヘラはすでにセンサーの反応から消えている。

完全に俺や奴らが感知できる範囲外まで脱出したせいで、最優先命令が実行できず、新しい命令を待っているのだろう。

主本人より頭がいいように見えたが、やはり別に自我があるわけではなく、応用や融通の利かないロボットのようなものらしいな。

「先生、エヒメさんとヘラの反応が消えました。レポートで避難してくれたようです」

とりあえず先生にそのことを伝えようと、少しだけ安堵したように先生の表情が緩む。

「そうか。じゃあ、チャツチャと片付けるぞ。早くしねーと、あのアホ妹は友達を安全な所に置いてきたら、絶対に戻ってきやがるからな」

先生の言葉に俺は苦笑して何も答えなかったが、心の中で同意していた。

「片付けるのは良いが、どうするつもりだ？　とりあえず、あのさらに輝かしくなった貴様自身の人形は貴様が自己責任を取れ」

先ほどから黙っていたソニックが、傲岸不遜な態度で口を挟む。

「うるせーな、わかってるよー！　っていうかささらに輝かしいってなん

だ!? 頭か!? 頭のことか!」

先生、侮辱されて腹が立つ気持ちはわかりますが、そこはどうでもいいです。

……だが実際、どうすべきなんだ？

ただでさえ人形もあの壁も厄介極まりないのに、あの寄生虫はエヒメさんの姿を映し取っている。

人形はある程度のダメージを与えたら、液体に戻って蒸発することはわかってるので、なるべく避けたいが最悪は死なない程度に手加減しながら、自分の人形相手に戦えばいい。

壁も、俺の焼却砲をゼロ距離フルパワーは反射や拡散しきれないと、いうことも先ほど学んだ。

だから残された問題は、エヒメさんの姿になった奴をどうするかだ。

あれでは、彼女本人を人質にとられているも同然で、こちらは手出しができない。

人形や壁をすべて消費し尽くして、奴から戦う術を奪っても問題だ。

あの女の性格からして、血液代わりのあの液体が消費したからといって、自傷して補充はしないと断言できる。

戦う術さえ奪えば生け捕りそのものは容易いが、問題はどうかやればあの変身が解けるか、だ。

ただエヒメさんの顔になっただけで、人形と同じ性質を、ダメージ反映という能力を持っている根拠はないが、その低い可能性に期待するには分が悪い。

もしも自分が変身した相手に人形と同じ、受けたダメージを反映させる能力を持っていたら、倒すのはもちろん、その変身を解かないままヒーロー協会に引き渡せば、奴にどのような処分を下されてもそれはエヒメさんと連動する。

奴の厄介極まりない能力を考慮すれば、即座に始末すべき存在であるが、同時にあの最強の盾になり得る液体は兵器開発者にとっては喉から手が出るほど欲するものだ。ただ生け捕って軟禁はありえない。

無関係どころか被害者であるエヒメさんが、奴と同じだけ苦しむことを、「尊い犠牲」と言って強いるのが目に見えた。

絶対に、協会に奴を引き渡すわけにはいかない。だが、見逃すわけにもいかない。

見逃してもこいつはその温情に気づかず、間違いなくエヒメさんに逆恨みを募らせる。

仮にエヒメさんが執着の対象から外れても、こいつは絶対に他者を不幸にしないと生きてゆけない存在であり、見逃していいわけがない。

……どこまでも他人を利用して、宿主の陰に隠れていい気になっている、忌まわしい寄生虫だ。

もう何度目かわからない、奴に対しての苛立ちで舌を打つ。

先生も不愉快そうに顔を歪めて、「けど、マジでどうすつかなー」と悩んでいる。

ソニックは自分で話題にあげながら、特に案も出さずに黙って見ていた。

その視線は先生の銀人形に向けられているようで、微妙に外れていた。

その視線の先をたどってみると、先生の背後の人形たち、ミラージユを取り囲んで守る俺とソニックの人形を見ていることに気づくと同時に、俺は自分の人形の変化にようやく気が付いた。

「……あ、あははっ！　しょっぱい変な奴が来たって思ったたら、意外とやるじゃない！　ほら、何してるの!?　早く、早くあいつを、エヒメをぶっ殺してよ!!」

自分が生み出したものの予想以上の威力に呆然としていたミラージユが、ようやく心に整理をつけたのか、嬉しそうに、楽しそうに、虫の翅や足をもいで遊ぶ子供のような、残忍な笑みで顔を歪ませた。

ただでさえ不快な種類の笑みが、あの人と同じ造形の顔に浮かんでいることが、不愉快極まりない。

エヒメさんはもうとっくにレポートで離脱していることに気づかず、わかっていても追いかけて見つけて殺せと言っているのかもし

れないが、ミラージュはエヒメさんに未だ執着している。

もちろん人形は、自分の察知能力外、もしくはは行動範囲外から出て行った対象を追いかけるといった人情や融通は利かせてくれない。

「貴様は何がしたいんだ？ 自殺なら一人で勝手にやれ」

ミラージュの命令に反応せず、棒立ちのままの人形たちの代わりに反応したのは、ソニックだった。

ミラージュは一瞬、ソニックの言葉の意味がわからなかったのか、ポカンとした顔になる。この表情はエヒメさんそのものなのだが、またやけに腹が立つ。

が、「意味わかんないのよ！ 何で私が死ななくちゃいけない訳?!」と、エヒメさんならどんなに怒っても決してしない、見下しや嘲りを含む歪んだ憤怒の表情で叫ぶ。

その言葉や激情をソニックは鼻で笑って、言葉が続けた。

俺と先生は黙っている。

この場合、俺や先生よりもこの厭味ったらしい男が適任だろう。

奴の大きな矛盾を指摘するのは。

その指摘が、ミラージュの変身を解く理由には十分だろう。

……俺も、ソニックも、おそらく先生も、そう思っていた。

この時は。

「貴様は本当に、自分の能力を把握していないな。いや、わかつたうえで目を逸らして、矛盾した願望が叶うと信じて疑わないのか？ どちらにせよ、奇跡の馬鹿であることは変わらんか」

「だから、意味わかんないって言ってるんでしょ!? 何なのアンタ！

殺すわよ!?!」

ヒステリックに喚くミラージュに、ソニックは薄ら笑いを浮かべて言った。

「立てないんだろ？ エヒメの顔になった時からずっと。左足が痛いんだろう?」

何かを喚こうとした口が止まる。

屈辱にエヒメさんの顔を醜く歪ませて、三つの目で奴はソニックを睨み付ける。



肯定の証には、その反応だけで十分だった。

「貴様の能力は、『コピー』や『反射』ではなく、『鏡』そのものなんだろう？」

指をさし、指摘する。距離が遠いので、どちらに指をさしているかはわからない。

エヒメさんの顔になってから、まったく動かず、立ち上がることもなく座り込み続けたミラージュか。

先ほど、ヘラの人形にしがみつかれたことで俺が人形に左腕を奪われたのと同じように、左腕を欠損している俺の人形を指さしたのは、わからない。

まあ、どちらでも同じことだ。

ソニックの言う通り、奴の能力の本質はコピーでも反射でもなく、『鏡』そのものだろう。

だから、人形までも俺と同じく左腕が欠損した姿になっている。

細部が再現されない雑な作りの人形だったので、俺が片腕を欠損するまで気付かなかったが、この人形は一方的にダメージをモデルに反映させるのではなく、モデル本人のダメージも人形に反映される。相手の現状をそのまま映し取っているだけで、常に万全の状態をコピーなどは出来ないんだ。

そしてそれは、人形だけではなく他人の姿を映した奴も同じ。

「貴様の命令は、自殺志願同然だということにも気づいていないのか？」

立つことも出来ない足の痛みにすら気付かないのだから、まあ無理もないか。貴様の脳みそは他人の猿真似、それもモデル本人の足元にも及ばない劣化に劣化を重ねた出来損ないしか作れない汚液に変わり果てて、溶け出たのだからな！」

「うるさい!!」

ソニックのネチネチといたぶる言葉にヒステリーを起こし、耳を両手で押さえてミラージュは叫ぶ。

「うるさい！　これは私の顔よ！　私のよ！　あいつが偽物で私の方が私こそが私が私が私が私が本物なのよ!!」

死ね！ 偽物は皆、全部、私のものを奪う偽物はみんな死んで!!」  
ソニックの顔から、薄ら笑いが消えて引きつった顔になる。

完全に、ミラージュの発言に引いていた。

「……火に油を注いだだけだったな」

先生がボソリと呟いた。

ソニックに対して事態がややこしくなった恨み言を言いたくなつたが、「じゃあお前はあの反応を予想できたか!？」と言われたら反論は出来ないの、俺は黙っておく。

予想できるか。足の痛みで立つことも出来ないのに、そのことを指摘されてもエヒメさんの姿に執着して変身を解かないまま、彼女をなお殺そうと叫ぶ狂気なんか、誰が想像できる!?

もはや愚かだの頭が悪いという言葉では説明できない。

何故、この女は自分以外を愛していないくせに、自分のしようとしている事が無理心中同然だという事を、ここまで頑なに否定する?・

何故ここまで「元の自分」を否定するのかが、俺にはわからなかった。

\* \* \*

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね!!」

ミラージュが呪詛を喚き散らすと同時に、先生の人形がミラージュの元まで舞い戻った。

そして、足元に溜まる水銀を吸い上げる。

ミラージュの傍らに突っ立っていた俺やソニックの人形も全て、溶け崩れて液体に戻り、その液体がまた吹き上がって蠢き、新たな形を作る。

50体近くはいた俺とソニックの人形を全て溶かし、壁の分まで使果たしても、先生の人形は5体ほどしか作れなかった。

が、先ほどの1体で深海王クラスの強さだ。

ミラージュ本人がそう思ったのか、人形が判断したのかはわからないが、確かに俺やソニックの劣化人形複数よりも、戦力としては十分だろう。

壁も、エヒメさんの姿をしているのならどうせ、その変身が解けな

い限りこちらは攻撃できないから必要ない。

ああ、本当にあの女は人を不快にさせる天才だ。

こちらの方が泣き叫びたいくらいに、なす術がない。

「今すぐあいつらを殺しなさい、ハゲ!!」

「誰がハゲだっ!!」

ミラージユの命令で先生の人形がこちらに向かってくると同時に、先生が今怒るべきところはそこじゃないことを叫んで、同じように突っ込んでいった。

「先生!」

俺が呼びかけても、先生は止まらなない。

ソニックは先生が走り出した一瞬あとに飛び上がり、手裏剣を構えた。

先生の人形にぶつけるつもりだったのか、このどさくさに紛れて、人形やミラージユに先生が殺されるくらいなら、その前に自分で殺すつもりだったのかは知らないが、どちらにせよそれは先生に危害を加える行為だ。

だから俺は残された右腕をソニックに向かって構えて、砲門を解放した。

味方になることは元々望んでいないから別に構わんが、先生の邪魔をするくらいならここで始末しておいた方がいいだろう。

ソニックも俺の行動に気づき、器用に空中で体勢を変えて標的を先生から俺に変更して、手裏剣を投げつけようとしてきた。

が、俺の焼却砲もソニックの手裏剣も、撃ち出されることはなかった。

ボシュッと破裂するような音が聞こえたと同時に、何かキラキラと舞い上がり、降り注ぎ、白い煙を上げて蒸発してゆく。

それは、水銀のような鏡の雫だった。

「殴った!」

ソニックと本日何度目かわからない唱和をしてしまったが、この時ばかりは不快感より驚愕が上回った。

先生の方に視線を戻せば、人形が5体から一気に2体に減ってい

る。

そしてその2体も、まさかの3体瞬殺が予想外だったのか、ミラー  
ジュの傍らに跳び戻った。

「せ、先生!?! 大丈夫ですか!?! 爆発四散してませんか!?!」

「落ち着け、ジェノス! 爆発四散してるんだとしたら、今お前が話し  
てる五体満足の俺は何なんだ!?!」

「……むしろ何故、五体満足なんだ? 腕力やスピードだけじゃなく  
て、防御も化け物か貴様は」

ダメージ反映することを伝えていたので、さすがにいつものような  
一撃瞬殺はしないし出来ないと思っていたら、まさかのいつも通りす  
ぎる展開に俺は混乱して、見ればわかることを訊いてしまった。

先生は俺に落ち着くように言ったが、落ち着いたら落ち着いたら  
で、ソニックの言葉が否定できない。

……先生、一気に3体が爆発四散する一撃を与えたのに、何故貴方  
は無傷なんですか?

「な……な、何で!?! なんで自分の人形に攻撃できんのよ!?! 何で、生  
きてるのよあんたは!?! 何なのよ!?!」

ば、化け物! こっち来ないでよ化け物!!」

相変わらず、お前が言うなの見本のようなことをミラージュは喚き  
散らし、その侮辱の言葉を許す気は毛頭ないが、パニックを起こす気  
持ちだけは理解した。

自分の人形が他人を傷つけるくらいなら、自分が傷つく覚悟で始末  
するというのは実に先生らしいとは思いますが、まさかのいつも通りの攻  
撃をするとは思えず、仮に手加減はしていたけれど人形が脆すぎたに  
しても、何故あなたは無傷なんですか、先生?

困惑しながら俺はそのことを先生に尋ねる。

まあ、ご自分のありえない強さを筋トレで得たと信じて疑わない人  
だから、実は答えに期待してなかった。

が、先生は不思議そうな顔をして、逆に聞き返した。

「? お前ら、気づいてなかったのか? あれ、自分の人形を自分で攻  
撃したら、ダメージ反射は無効だって」

『はっ。』

またしても同時に、しかも今度はミラージュまで声を上げた。

その反応に先生は、さらに不思議そうな顔になって首を傾げる。

「……あれ？ もしかしてお前ら、自分の人形とは一切戦わないで、相手の人形とだけ戦ってたのか？」

うわっ！ だとしたら俺、あぶねえ!! 完全に自分の人形に自分の攻撃は無効だと信じ込んで攻撃したわ!」

今更になって、自分のやったこと、人形に与えたダメージがそのまま自分に返ってきた可能性に、先生は顔を青くしているが、こちらの衝撃は先生の比ではない。

「あ、あの、先生!? 何がどうして、そのような考えに至ったのですか？」

俺が何とかその衝撃をねじ伏せて尋ねると、先生はエヒメさんによく似ている、きよとんとした顔で即答した。

「だってお前ら、どう見ても自分で自分を攻撃したみたいなのがねーじゃん。ジェノスはなんか焼け焦げとか溶けた跡があるけど、ソニックは火傷だけで切り傷まったくねーじゃん。」

前の騒動から考えたら、ジェノスには悪いけどお前がソニック本人に当たったより、ソニック人形に当たってたって考えた方が自然だろ?」

先生の指摘で、思わず俺とソニックは同時に相手の方を向き、互いの傷や損傷を確かめた。

……ああ。先生の言うとおりだ。

俺はヘラが特攻してきた時に、あの壁を破壊するためにゼロ距離焼却砲を放った所為で、自分の攻撃の余波を受けてわかりにくいけど、ソニックを見れば一目瞭然だ。

奴の傷は、おそらく俺が初めに人形を蹴り飛ばした時に脇腹に負った打撲と、火傷のみだ。

奴の武器である手裏剣や苦無の投擲による切り傷や刺し傷は一切ない。

俺もソニックも初めの一体で、「この人形は受けたダメージをそのままモデルに反映させる」と学習してしまい、その後は自分の人形ば

かりが攻め込んできたので、防戦に集中してしまつて気づかなかつた。

2度やらかした俺とソニックの自爆。ミラージュの壁による反射での無差別攻撃で、俺やソニック本人は拡散して四方八方に飛び交つた熱線や投擲武器をよけることができたが、人形はほとんどあれで壊れて、そのダメージがこちらに反映した。

……さすがにこちらは避けることで精いっぱいだったので、人形がどの攻撃にあたつて壊れたかなど見ていないが、確実に俺の人形はソニックの武器、ソニックの人形が俺の焼却砲の熱線だけを喰らつたというのは、ありえないだろう。

どちらも平等に喰らい、壊れたと考えた方が自然だ。

そもそも思い返してみたら、防戦に集中していたとはいえ、多少は自分の人形を殴るなり蹴るなりしていた記憶はある。

それに関してのダメージはあつたか？

痛覚のない体が災いして気づかなかつた。俺の攻撃は、俺自身に何の影響も与えていなかった。

「……ははっ！ ああ、そうだな。サイタマ、貴様の言うとおりだ。そのウスノロサイボーグの攻撃も避けられない出来そこないの人形が、俺の攻撃を避けられるわけがない。それなら、俺の攻撃は俺には反映しないと考えた方が、確かに自然だ」

ソニックが頭痛を堪えるように片手で自分の頭を押さえて、哄笑を上げる。

獲物を甚振る凄絶な猫のような笑みを、無邪気であるからこそ何よりも残酷で邪悪な笑みを浮かべて、奴は再びミラージュに言った。

先生の説明を理解できていないのか、信じられないのか、唇を噛みしめて憎悪に滾つた歪んだ顔でこちらを睨み続ける奴に、奴自身が知らなかったこの能力の「本質」を告げる。

「貴様の能力は、『鏡』だ。鏡像を傷つければ、実像が傷つく。まあ、当然だな。鏡は実像そのものを映すだけなのだから、鏡像が傷ついているのなら、実像も同じ箇所には傷を負っていないなければならない。

……だが、実像が自分を映している『鏡』を割った場合は、どうだ

？ 鏡が割れて鏡像は傷だらけだが、実像は無傷であることに何の矛盾も起きん。

鏡に映っている本人以外が、鏡像を、鏡を傷つけることは不可能だからこそ、他者に与えられた傷はその矛盾を修正するために、傷が実像に反映されるが、鏡に映っている本人が鏡を壊すことに、鏡像のみが壊れることに矛盾などない。ただただごく当たり前の出来事として、処理される。

……貴様は、初めから能力の正体を明かしていたんだな。

『蜃気楼<sup>ミラーージュ</sup>』！ 実像がないと何の意味もなく、実像と比べれば何の価値もない、実に貴様にふさわしい、猿真似以下の能力だな!!」

「うるさい!!」

ソニツクの精神的に甚振ることを目的とした懇切丁寧な説明も、奴は頭を振って耳を塞いでなかったことにしようとする。

血走った目でこちらを睨み付け、嗤う。

エヒメさんの顔でありながら、もはやその仮面は半分以上剥がれ落ちていくようなものだった。

奴の顔に浮かんだ笑みは、エヒメさんの顔になる前の、本性を現す前の媚びた卑屈な笑みだった。

「それが、なんなのよ!? それが、どうしたっていうのよ!? それで!? 結局あんたたちは、私を殺せるの!? この顔を、壊せるの!」

自分の顔であることに執着していたのが、一転変わってエヒメさんの顔であることを認めて、自分自身を、写し取った他人を人質にする。どこまでも見苦しく、そのくせこだわりも誇りも何もない女だ。

……ああ、そうか。

ようやく、この女がなんなのかを理解できた気がする。

……こいつは、何もないのか。

「バカか、お前は」

ぼんやりと俺がそんなことを考えていると、先生が心の底から呆れた様子で言い切った。

「人形がそうなら、お前だって普通に考えたらそうだろうが。俺らには確かに手は出せねーけど、お前の実像……エヒメならお前をぶん殴

れるんだ」

エヒメさんと同じ造形でありながら、絶対にありえない卑屈な目に、怯えが宿る。

「……ば、バカは、あんたじゃない！ あいつ、逃げたじゃない！ あんたたちを見捨てて、一人勝手に逃げた卑怯者で、ここにいないじゃない！」

その怯えからも目をそらして、奴はまたエヒメさんに見当はずれな侮辱をする。一緒に逃げたはずのヘラの存在を抹消しているのは、混乱して素で忘れていいのか、とことん自分の都合のいいように改竄するの脳みその所為なのかは、わからない。

ただ、ここまで見当違いだと怒りさえも浮かんでこない。

もはや、憐みを覚えるまでとなってきた。

先生も同じなのか、ただ一度深いため息をついてから俺とソニックに言う。

「おい。俺が残り二つを自己責任でぶっ潰すから、お前らはあいつを守ってくれ。」

多分そろそろ、『来る』ぞ」

先生の言葉の意味が、分からなかったのはミラージュだけだろう。

俺とソニックが同時に走り出し、自分に向かってくるのはエヒメさんを見捨てて、自分に攻撃するためでも思ったのか、「ひいっ!!」と悲鳴を座り込んだまま後ろに後ずさった。

先生の人形が、ミラージュを守るために俺たちに向かってくるが、俺たちよりも後に動いたのに、先生は軽々俺たちを追い越して、人形にそれぞれ一撃を入れて四散させる。

先生のアシスト、そして本当は先生一人でも十分だったはずなのに、俺に花を持たせようとしてくれたことに深く感謝しながら、俺は駆ける。

守らなければならない。

この何もかもを焼き尽くし、傷つける為だけだった手に他の意味をその人は与えてくれた。だから、その意味を実行せねばならなかった。



ミラージュは、気づいていない。

俺とソニックが駆けつけた時には、自分の背後に陽炎のような揺らぎが発生していたことに。

先生の人形が瞬殺されて、呆然としているミラージュは気づかない。

自分の背後に、同じ顔をしていながら全くの別物が立っていることに。

「ミラージュッ!!」

「え?」

呼ばれても、何が起きているのかは気づかなかっただろう。

ただ、ポカンとした顔で反射的に振り返った。

その顔に、自分と同じ造形の顔に何の躊躇もなくエヒメさんは、思いつきりビンタを一発叩きこむ。

相変わらず、バングが絶賛するのも納得な素晴らしい一撃だった。

## 蜃気楼を追う者

実はヘラを人通りのある所まで送ったあたりでキャパはかなりギリギリだった。

ものすごく体がだるくて、道端でも今すぐぐっすり眠ってしまいたいくらいだったけど、私は腫れあがってる自分の足を叩いて痛みで何とか睡魔を追い払って、何度も跳んだ。

ミラージュのすぐ後ろに出現できたのは、運が良かったのか私の執念かはわからない。

っていうか、どっちでもいい。

ただ私は、何よりもしなくちやいけないことを実行した。

「ミラージュッ!!」

「えっ？」

私は、ポカンとした顔で振り返った私の顔に思いつきり、渾身の力を込めてビンタを叩きつける。

勇気がなくて何もできなくてただ逃げた、3年前の私を殴り飛ばした。

\*\*\*

殴ったはずみで左足に体重をかけてしまったせいで、そのままバランスを崩して私は倒れこむ。

ミラージュは、左側に振り向いた顔が殴られた勢いで、右側に振り向くような形になる。

能力的に私のビンタが私のそのまんま還元してもおかしくなかったのに、私の頬はまったく痛みを訴えず、代わりに殴られ、その勢いで回った頭からずると、腐って皮が剥がれ落ちた果実のように、肌色から銀の液体に変化したものが顔から剥がれ落ちた。

私の顔が剥がれて、露わになったのはヘラに切り裂かれた両目の傷が痛々しい、元のミラージュの顔。

ミラージュは元の姿に戻ったことで両目の痛みも思い出してしまったのか、左手が自分の目を押さえつける。

右手はまっすぐに、爪を立てて私の首に向かってきていた。

私の顔になっても、ミラージュの顔に戻っても変化のない、額の人間らしさどころか生き物らしさが皆無な、無機質な鏡の目で私を映しながら。

その目を見て、気付く。

彼女はやはり、どうあっても救われないことを。

「エヒメさん!!」

ミラージュの手が私の首に届く前に、私は包み込まれた。

あまりに硬質で、体温などない冷たい黒鋼の身体。

全身いたるところがもうボロボロで、表面だけかもしれないけど融解している部分もある。

何より、左腕を失って戦う術はもう右腕にしかないのに、その腕をこの人はためらいなく、私を抱きかかえて、包み込むために使ってくれた。

ミラージュに砲門を向けて、ミラージュを排除するためではなく、私を守ることを選んでくれた腕の中で思う。

私はやっぱりこの人が、ジエノスさんが大好きだと改めて、どうしようもないほどに思い知らされた。

「あああああああああつっ!!」

そんな場違いな感情は、鳥の鳴き声のような絶叫で吹き飛ばされる。

ジエノスさんが私を抱きかかえたまま振り返り、私も彼の肩越しにミラージュを見ると、ミラージュはヘラに切り裂かれた両目ではなくて、額を両手で押さえている。

その隙間には刃の部分がすべて埋まった苦無が見えた。

「つちー・そこは核じゃなかったか!!」

ソニックさんが手裏剣を扇のように広げて構え、舌打ちする。

また、ソニックさんが刺した額から水銀のような液体が、液体の鏡があふれ出るけど、ソニックさんはそれが人形や壁になる前に、片を付けるつもりらしいことを察して、ジエノスさんは私をさらにしっかりと抱きかかえて「エヒメさん！ 捕まっついていてください！」と言って跳んだ。

直後、マシンガンを掃射したような勢いで手裏剣や苦無がミラー  
ジユの身体に突き刺さり、ミラージユはハリネズミのような姿にな  
る。

口からは苦痛の絶叫、全身からは鏡の液体を吹出して、倒れ伏す。  
人間でも怪人でも、もう死んでいても不思議ではないほどの傷を  
負った。

……それでも――

「……たい……痛い……痛いよ。……助けて。……痛いのは嫌……死  
ぬのは……嫌……」

それでも、ミラージユは生きていた。

お兄ちゃんの元まで戻ったジエノスさんも、お兄ちゃんも、そして  
残っていた武器をすべて撃ち尽くしたソニックさんも、その生命力の  
強さに目を見開いて絶句する。

そしてまた、あふれ出た液体が沸騰するように泡立って、噴水のよ  
うに盛り上がる。

「ちっ！」

その様子にソニックさんも飛びのき、代わりにお兄ちゃんが拳を固  
めて足を踏み出した。

……多分、ここで何も言わず、お兄ちゃんに任せられた方がミラージユ  
は幸福だった。

お兄ちゃんにトドメを刺された方が、きっと彼女は永遠に本人が知  
り得ないけど、幸福だった。

でも、……ごめんなさい。

誰に謝ったのかも、私自身はわからない。

ただ、ミラージユではない事だけは確か。

「お兄ちゃん、やめて」

私はただ、自分の為だけに言った。

お兄ちゃんが、元とはいえ私の幼馴染で、心はともかく体は人間  
だった彼女を殺す罪悪感など背負わせたくないから。

ただそれだけの為に、私は彼女は止めた。

「……エヒメ？」

不思議そうな顔をして振り返るお兄ちゃんに、もう一度同じ言葉をかける。

「やめて。お兄ちゃん」

私がどんな顔をして言ったのかは、わからない。

ただソニックさんは不愉快そうな顔になつて鼻を鳴らし、ジェノスさんは悲しんでいるようにも怒っているようにも悔やんでいるようにも見える顔で私を見下ろす。

そしてお兄ちゃんは、全てを受け入れるように笑つて言った。

「……大丈夫だ。エヒメ。兄ちゃんに任せろ。兄ちゃんはヒーローなんだから……」

「違う」  
どんな顔をしていたのかはわからない。でも、たぶん今にも罪悪感で死にそうな顔をしていたんだと思う。

お兄ちゃんはそれを、ミラージュが死ぬことか、それともお兄ちゃんにトドメを刺す役割を押し付けたと思つて罪悪感を抱いているのかと思つたんだろうけど、それは違う。

「……お兄ちゃんがトドメを刺さなくても、時間の問題。だから、何もしないで。」

「……もうミラージュは、人形なんか作れない」  
「え？」

私の言葉に、お兄ちゃんは振り返る。

ミラージュの体中から溢れる液体は、噴水のように盛り上がったかと思つたら、粘土やパン生地をこね合わせるみたいに動いて人の形になるけれど、それは本当にかろうじて人の形を作りたかつたんだろうなあという程度の造形。

雪だるまよりは人間らしい程度の人形は、しばらくすると溶けかけのアイスのように頭の部分が崩れ落ち、体も融解して液体に戻る。

そして液体がまた人形を作り出すけど、同じことを繰り返す。

液体は蒸発を始めているのか、うっすらと白い煙らしきものが上がっている。

その中心で、ミラージュは倒れ伏したままもう体中に突き刺さった

武器の一つも抜き取れず、弱々しく眩き続けるだけ。

「痛い……暗い……何も見えない……怖いよ……何で……どうして私  
が……怖い……見えない、何も……見えない」

「……どういふことだ？」

「死にかけて、もう力を行使できんのか？」

ジェノスさんはその光景を見て眩き、ソニックさんは凝った肩をほぐすように肩を回しながら、もはや興味がなさそうに言った。

「……それもあると思いますけど、たぶん人形が作れないのは、目も  
う見えないからだと思います」

興味はないだろうけど、私は口にする。

教えたかったというより、ただ吐き出したかっただけ。

胸の内に溜めておくには重すぎる、心の澱を、私が知っているミ  
ラージュという幼馴染だった存在について、ただ吐き出した。

「彼女は、他人の心の内とか本質と、そういうものに興味を示しませ  
ん。自分がうらやましいと思ったものを欲しがるか、自分と相容れな  
いものを馬鹿にして見下すか。それしか出来ません。

……けれど、同時に彼女には『自分』というものがありません。誰  
よりも何よりも自分本位で、自分だけを愛しているのに、彼女は肝心  
な『自分』がないんです」

それこそが、この怪物の本質。

「……私がミラージュを殴ってもダメージ反映が起きずに、変身が解  
けたということは、ミラージュの人形ってモデル本人の攻撃は反映さ  
れなかったんですね」

私はジェノスさんを見上げて尋ねる。

私の言葉に、驚きよりも沈痛な顔をしていたジェノスさんは無言で  
頷く。

ああ。この人も気が付いているんだ。

ミラージュが、求めていたものが何であるかを。

「私、二人の人形がモデル本人の方にしか襲ってこないのを不思議に  
思っていたんです。どう考えても、逆の方が躊躇なく攻撃してくるだ  
ろうから効率がいいのに。」

……あれは多分、ミラージュの矛盾した願望をそのまま、人形が実行していただけだと今は思うんです。自分が相手に成り代わりたい、自分が本物になりたいと心から願っているのに、『自分』がないミラージュは実像がなければ、真似して、自分の代わりに行動して何かを得てくれる人がいないと何もできないから、同時に本物を、実像を心から失いたくないとも思っています。

……だから、殺そうとしているのにわざわざ効率が悪い方法で、長引かせたのだと思います。……彼女の無茶苦茶な矛盾を、実行してたんでしょね」

私の話を無表情で黙って聞いていたソニックさんが、顔を歪ませた。戦った本人だからこそ、彼女の殺意が本物だったことはよくわかってるはず。

だからこそ、その無茶苦茶な矛盾を実行しようとしていた、実行できると思っていた彼女が理解できずに、気味悪がっているのが見取れる。

「意味わかんねーよ」と、いつものように覇気はないけれど、いつもと違って苛立っているような、怒っているような口調でお兄ちゃんは呟いた。

「結局、あいつは何がしたかったんだ？ あいつは、何なんだ？」

相変わらず人形を作りだそうとしては壊れるを繰り返す銀の水溜りの中で、「痛い」「助けて」「暗い」「嫌」を繰り返し呟き続けるミラージュを、気味の悪さと困惑、そして憐みが入り混じった眼差しでお兄ちゃんは問う。

その問いに、私は答えた。

「なんでもない。ミラージュは、何もない」

そうとしか、答えられなかった。

何がしたかったか？

その答えは、単純明快。ただ全てを、何もかもを貪欲に欲しがった。言葉通り、何もかも。

「ミラージュは昔から、全てを欲しがってた。可愛いもの、綺麗なものの、新しいもの、高級なものはもちろん、他人からしたらありふれて

いたり、むしろ汚くていらぬものと思えるものでも、誰かが大切にしていたらそれを欲しがって奪い取ろうとした。

物だけじゃなくて、称賛や恋人、他人の幸せも全て自分の物だと思つて疑わつていゝなかつた。

……けれど同時に、彼女は幸せな人だけではなく、不幸な人間さえもいつも羨んで妬んでた。彼女は、不幸で憐れまれること、同情されることさえも欲しがつていたから。

世界で一番幸せになりたがつてゐるのに、同時に世界で一番不幸になることも彼女は同じくらい、心から望んでゐるの」

「自分」を持たない、「自分」がない彼女は何もかもを欲しがるけれど、本当に欲しいものがなんなのかは本人が一番わかつてゐない。

いつも他人の評価や評判に振り回されて、自分で見て決めた価値や意味を持つてゐないから、何を得てもいつも満たされない。

だから全てをがむしやりに、際限なく無差別に欲しがらるのに、彼女が得た時点でそれは意味も価値も失つて、いつも虚像に成り果てる。

……彼女の両親が何を思つて、この名前を付けたのかはわからないけど、娘が初めからあまりに歪で、そして空っぽだったことに気づいてゐたのかもしれない。

彼女はその名の通り、いつだつてたどり着けない、触れられない、意味がない蜃気楼を追い続けていることに、彼女本人が何も気づいてゐない。

「……『自分』があれば、目が見えなくなろうが、自分で望んだ理想の何かを頭の中で生み出せる。けれど、彼女は他人の真似をして、他人に寄生して、他人に依存してきた彼女に、理想なんてない。何も、ないの」

私の言葉を、ジェノスさんが引き継いで終わらせる。

「だから、もう何も奴は生み出せないんですね」

もう人形は、人の形すら作り出せない。かろうじて雪だるまのようになつたかと思つたら、溶け崩れる。

彼女の眩きの通り助けてほしいのは本心なのに、彼女は空想でさえも、自分だけの味方になつてくれる白馬に乗つた王子を生み出せな



い。

うわべしか見ていない、中身なんて何も無い彼女は、ただただ誰かの鏡像でしかなかった彼女は、実像を映す目を失った時点でもう、何もできない。

何もできない、死を待つことしかもう出来ない彼女を私はただ見つめる。

いつそトドメを刺して楽にしてやりたいという気持ちはある。

でも、それはお兄ちゃんたちの手を汚してほしくないという気持ちを上回ることはない。

私が抱く罪悪感は、ミラージユをこのままトドメを刺せるのに刺さず、見殺すことではない。

「……ごめんなさい、ジエノスさん」

私は私を守るように抱きかかえてくれていたジエノスさんに謝って、自力で立とうとする。

ジエノスさんは何かを言いかけたけど、言葉にせず黙って私を離してくれた。

そして、私が足を引きずってだいぶ小さくなった銀の水溜りに近づくのを誰も止めなかった。

私が沸騰するように泡立つ鏡の水に足を踏み入れて、そして倒れ伏すミラージユの傍らに膝をつく。

「痛い……嫌だ……暗いよ……痛いよ……嫌……もう嫌……」

ただ痛みと暗さ、そしてそれが嫌だということだけを訴えるミラージユに私は問う。

「ミラージユ。あなたはどうしたかったの？」

私はさつき言った通り、彼女のことを大嫌いだった。好きだったことは多分、一度も、一瞬もない。

けれど、それでも縁を切らなかつたのは、親の人間関係の延長だったからだけじゃない。

彼女がしてきたこと、彼女にされたことを許す気はもろろんない。

自分勝手にわがままで傲慢で強欲な彼女が大嫌いだったけど、同時に何を得てもつまらなそうな、満たされない彼女に同情をした。

彼女が傷つき、嫌われ、不幸になるのは自業自得でしかなかったけど、どうやつても幸せになれないのは彼女自身の所為ではない。神様がミラージュに「自分」というものを与え忘れたことだけは、ずっと憐れんでいた。

……だから少しでも、自分で何かをやらせたかったんだけど、これはもう本当に今更ね。

私が今できることは、ただ問うことだけ。

訊いて、その答えに私は期待する。

誰も映せなくなった、もう誰の鏡像でもなくなったミラージュが、本当の彼女が何を答え、求めるかをただ訊いた。

「ミラージュ。あなたは、どうしたかったの？ 何がしたかったの？」  
けれど、彼女は答えない。

「暗い……見えない……見えない……痛い……寒い……ヤダ……嫌……」

聞いていないのか聞こえていないのかも、わからない。

「ミラージュ。死にたくないの？ 助かりたいの？」

「……嫌……嫌……やだ……いや……いや……いや……いや……」

もう「助けて」も「死にたくない」も彼女は言わない。

ただ、この現状が嫌だということだけしか彼女は口にしない。

現状が嫌であることは確かなのに、それをどうしたいかを彼女は口にしない。出来ない。わかっていない。

彼女は正真正銘、本当に何もなかったことをただ私は知る。

銀の水はもうほとんどない。ほとんどが蒸発してしまい、ミラージュの身体からも水蒸気らしきものが上がってる。

ああ、きつともう本当に終わりなんだろうと私は思いながら、最後に問う。

「ミラージュ。あなたは幸せになりたかったの？」

ミラージュの口が、ハクハクと動いた。

声はなかった。

言葉はなかった。

ただもう声も出す力もなかったのか、それとも答える言葉が本当に

なかつたのかも、わからない。

ただ彼女は白い水蒸気になって消えてしまった。

蜃気楼を追い求め、蜃気楼でしかなかった彼女は、そんな子がいた証さえも残さずに消えてしまった。

それが悲しいのか、寂しいのか、それともなんとも思っていないのか。

それさえも、私にはもうわからない。

## 世界が終わらない日までの秘密

あっさり、日常が舞い戻った。

ミラージユが何も残さず消えた後、それからあまりにいつも通りの日常だった。

私の怪我をジェノスさんが心配してくれて、今すぐに病院に行こうと私を抱きかかえてくれたところで、何故かソニックさんが「貴様のようなウスノロに任せたら、病院に着く前に骨が癒着する」とか言っ  
てケンカ売るし、ジェノスさんはそのケンカを律儀に買っちゃうし、お兄ちゃんは二人をほっといて私だけ連れて帰ろうとするしで、ある意味ミラージユ相手よりも大変だったけど、悲しいことにこれは私の日常だ。

本当にジェノスさんとソニックさんは、仲良くしろなんて無茶ぶり  
はしないから、嫌いならいつそ互いに無視していかないものとして扱っ  
てくれないかな。

いくら私が何言っても、ソニックさんはもちろん、ジェノスさんもお兄ちゃんが止めても殺気出しまくりに殺す気満々だったし。

幸い、お兄ちゃんが事前になんか童帝君とやり取りしてたらしいのと、ヘラがヒーロー協会の支部に連絡を入れたことで、しばらくしたら童帝君がわざわざ援軍に来てくれたのを察して、ソニックさんが面倒事を嫌って帰ってくれたから、殺し合いは起きずに済んだけど。

そういえばソニックさん、最後になんか私に言いたげだったけど、あれはなんだったんだろう？

まあ、それは今度あつた時にでも訊くとして、それにしても今回は、たくさんの人に迷惑をかけちゃった。

お兄ちゃんやジェノスさんはもちろん、ソニックさんは完全に通りすがりの無関係だったのがつつり助けてもらったし、童帝君も私が晒された情報を削除してくれたらしいし、そういえばフブキさんにも迷惑と心配をかけたことを謝ったけど、まだ映画のお礼を全然してなかった。

……思い返してみたら、私はほとんど何もしてなくて迷惑ばかり

かけたなど、またいつもの自己嫌悪。

私の日常は、変わらない。

約15年くらい付き合ってた幼馴染が、心にも見合つた怪人に成り果てて、そして彼女の本質通りの結末を迎えても、私の日常に変化なんてない。

私のトラウマそのものだった彼女がこの世から消えても、彼女が残した傷は相変わらず残ってる。

自分が好かれてる自信なんてない、迷惑をかけて申し訳ないと思うのは、嫌われるのが怖いからでしかない。

色々と吹っ切れたつもりだけど、劇的に私も日常も変わりはない。相変わらず私はお兄ちゃんとジェノスさんくらいとしかほとんど関わらない、引きこもりでしかない。

私にとっては何よりも大きな転機と思われた出来事だけど、そんなの世界にとってはあまりに些細で微細でどうでもいいことしかなくて、結局世界はいつも通り回ってる。

「エヒメさん」

そんなことを思いながら、バスの心地よい揺れに身を任せて目を閉じていた私にジェノスさんが声をかける。

「すみません、起こしてしまつて。もう少して着きますよ」

「いえ、こちらこそ居眠りしてしまつてすみません。起こしてくれてありがとうございます」

実際は眠ってはいなかったんだけど、わざわざそんなことを言うのも野暮なので、私はお礼を言いつつちようどバスが下りる予定の停留所に停車したので、病院で借りている松葉杖を持って立ち上がる。

ジェノスさんが立ち上がる際に手を貸してくれたけど、その後は私を先に行かせて彼は他人のような距離感を開けて歩き、バスから降りる。

傍から見たら知り合いというより、怪我人に気遣ってくれた優しい人という距離感は、まだファンサイトの掲示板に私の個人情報晒されて間もないからということ、わざとそうしてくれている。

私の方も、帽子と伊達メガネ、普段はめつたに履かないシヨールパン

レギンスという変装ってほどではないけど、とりあえずイメージを変えてみた。

晒された写真は中一のころだし、もう掲示板やSNSからはあらかた消したと童帝君が言ってくれていたので、そこまで大げさにしなくても大丈夫でしょう。

まあ、本当は二人で出歩くなんてしなければいいんだけど……これはどうしてもジエノスさんについてきて欲しかった。

私のどうしようもないわがままでしかなかったんだけど、ジエノスさんは私が何かを言う前に、むしろあの人が申し訳なさそうに謝りながら、「ご一緒させてください」と言われたのは記憶に新しい。

私はそんなあの人の優しさに甘えて、一緒に来てもらう。

指定されていた喫茶店は、偶然だろうけどあの日、ジエノスさんと映画を見た帰りに立ち寄った店。

そこで私とジエノスさんは、近くだけど別々の席に座って待った。ヘラを、待った。

\* \* \*

ヘラからの手紙が届いたのは、数日前。ジエノスさんのファンレターにまぎれて届いたらしく、ジエノスさんが私に渡してくれた。

ジエノスさんが差出人の名前を見てすぐに、私に向けて出した手紙だと思っただけのまま渡してくれたけど、確かに私の住所や連絡先がわからなかったから、ジエノスさん宛てに協会経由で出したのは当たっていたけど、ほとんどが普通にジエノスさん宛ての内容で少し困ったのは余談かな？

手紙にはジエノスさんに謝罪する文章が、彼女らしく長々と丁寧に書き連ねられた後に、私に会いたい、もし会ってくれるなら今日の2時ごろ、この喫茶店に来てほしいと書かれていた。

手紙に一言たりとも、私に關してのことはそれ以外書かれていなかったのが、なんとも言い訳が嫌いなヘラらしい。

まあ、私も手紙で一方的に謝られたり語られたりするの嫌だから、会ってほしいと言ってくれたのは嬉しい。

……結局、あ後は会えないでそのまま別れて帰っちゃたもんね。

グラスの水を飲みながらそんなことを考えていると、ジェノスさんが少し心配そうにこちらを見ていることに気づいて、私は「大丈夫ですよ」と伝えるつもりで笑う。

大丈夫。私は劇的になんか変わっていないけど、自分に自信がなくて人を信じきれない身勝手な臆病者だけど、少しは変わりましたから、大丈夫。

もう、ヘラに会うのが怖いなんて思いません。むしろ、会いたくて会いたくて仕方ないんです。

私はちゃんとあの日、ヘラと仲直りしたから大丈夫です。

そんな思いを込めて笑うと、ジェノスさんも少し笑ってくれた。

直後に喫茶店のドアベルが来客を告げる。

ウエイトレスさんが「おひとり様でしょうか？」と尋ねる声に「待ち合わせをしているの。先に来てるかもしれないからちよつと中を見せて」と答える声に反応して、私がそちらを振り向く。

振り向いて、思わず5秒くらい固まってからジェノスさんの方に視線を向けた。

ジェノスさんも視線だけそちらにやっていたけど、彼女の姿を見て目を見開いてから私を見た。

その反応からして、あれは私の見間違いや人違いじゃないはず。

もう一度、振り返って確かめると彼女も、ヘラも私に気づき「エヒメ！」と言って笑って駆け寄ってくれた。

その声と顔、笑顔は間違いなくヘラなんだけど、それ以外が数日前……いや、私が知っているヘラとは何もかもが違った。

腰まであつた豊かで豪華でよく目立った銀髪は、うなじがかるうじて隠れるくらいにすっきりバツサリ切り落とされて、シンプルだけどドレスのような優雅さがあつた服装は、パーカー・デニム・スニーカーとかカジュアル極まりない恰好。

相変わらず美人ではあるけど、化粧も最低限でいつも醸し出していた女王然としたカリスマが薄れて、どこからどう見てもごく普通、活発な女子大学生がそこにいる。

呆然としている私を見て、「そこまで驚かなくていいじゃない。そ

んなに似合わない？」とヘラが苦笑しながら向かいに座る。

「え、いや、全然変じゃないけど、似合ってるし相変わらず美人だけど、今までのイメージと違い過ぎて……。え？ どうしたの？」

今更だけど、私はヘラのイメチェンについて尋ねた。

「格好自体に意味はないわよ。ただのやたらと遅い反抗期だけ。こういう格好が実は好きだったとかでもなくて、ただ今までしたことなかった恰好を試しにしてみようと思っただけよ。」

だから、そのうちまた全然違う系統の格好になるかもしれないし、最終的には元の方向性に戻るかもしれないけど、今のところは気に入ってるわ」

ヘラはメニューを見もせずアイスコーヒーだけを注文して、答える。

そしてもう一回、苦笑しながら話す。

「私、ずっと私の周りに味方なんかいないと思ってたの。だから、何があっても私の家のこととかに興味を持たないで、私だけを見て対等に扱ってくれるあなたに、ずっと甘えて依存してたわ。形が違えど、私はあいつと……ミラージュとさほど違いなんてないわね」

そんなことないよ、という言葉は、穏やかだけど強いヘラの眼差しで止められる。

私はただ黙って、ヘラの話聞く。

あの日から変わった、ヘラの話、ヘラの世界の話聞いた。

「だからあの日、勝手に家を飛び出た拳句に怪人に襲われたとか面倒事に巻き込まれたのは、すぐさま父親の耳に入って、もう下手したら学校を辞めさせられてどっか適当な金持ちと結婚でもさせられるかと思ったら、意外なことになーんにもなかったわ。」

……執事やメイドたちも、私と同じことを思っていたようね。そして、私に興味のないあの人たちは自分から私についての情報を集めなにかしないから、自分たちが報告をしなければ私が面倒事を起こしたという事実はなかったことになることも、みんなわかっていたみたい」

テーブルの上で頬杖をついて、笑って語る。



それは昔、私が裁縫だったり折り紙だったり、何かを作っているときにただ見ていた仕草と笑顔。

あまりに懐かしい光景。

「私、自分で思っていたより周りに恵まれていたみたい。頼れば父親の理不尽な命令を無視して、こっそり奨学金とかについて教えてくれたり、アルバイト先を紹介してくれたりする人なんていっぱいいたわ。」

……私は、何を恐れていたのかしらね？」

ヘラは両手を上げて思いつき伸びをして、そしてそのまま天井を仰ぎ見ながら語る。

「私はただ単に、何もしない自分を正当化してただけ。子供じゃないのに子供のまま甘えていただけなんでしょね。もう行こうと思えばどこにだって行けたのに、なんでもできたのに何もしなかっただけっていうのを、思い知らされたわ。」

ついでに、この怪人が毎日のように現れるわ、人間が怪人になるわというご時世、いつ死んでもおかしくないとってことも思い知ったから、これからは後悔しないようにと思つて、とりあえず今は親に内緒でアルバイトを始めて、お金を貯めるところ。

そのお金で、一人暮らしを始めるのが今の私の目標ね」

そこまで言つて、ヘラは顔を私の方に戻す。

私の良く知る、凜とした同い年なのに威厳があつてかつこい笑顔じゃなくて、ちよつと困っているような迷っているような、でも楽しそうな笑顔だった。

人間らしい、笑顔だった。

「……楽しみだね」

その笑顔に、言葉に、目標に私はそれだけを返す。

心配事はいくつもある。正真正銘箱入り温室育ちのヘラが、アルバイトをうまくやっていけるのか、さすがに独り暮らしとなると親に内緒は出来ないから、そこは説得するのか、それとも家出して絶縁する気かとか、言いたいこと、訊きたいことはたくさんあった。

でも、世間知らずでも決して愚かじゃないヘラなら、こんなこと私

が言うまでもなくわかっていることくらい、こつちもわかっている。先のことをどの程度、具体的に考えているのかとかはわからない。もしかしたら、案外何も考えていないのかもしれない。

心配だけど、口を挟むのはきつと余計なお世話なんだろう。

自分の意志で、親が敷いたレールの上以外を歩くと決めた彼女の出端を折るのはただの無粋。

だから私は、心配や不安を口にせず、彼女が歩むと決めた道を肯定する。

「引越し祝い、必ず渡すから招待してね」

私の言葉に、ヘラは「もちろんよ」と笑って答えてくれた。

注文のアイスコーヒーが届いたら、ヘラは今の格好からは似合わない丁寧な仕草で一口飲んで、話を続けた。

「……エヒメ。私、必ず一人暮らしを始めたら、あの家を出たら絶対にあなたに連絡して招待するわ。……絶対に、何年かかっても必ず。」

……だから、エヒメ」

何が言いたいかは、聞かなくてもわかる。わかってしまう。

私たちは、それぐらいに心を通わせた。それなのに、すれ違ってしまった。

その溝は、まだ埋められない。

「何年後でも、楽しみにしてるよ。ずっと待ってる」

ヘラの言葉を最後まで聞かず、私は答えて紅茶を啜る。

わかった。わかってるよ、ヘラ。

ヘラが会って話したかったのは、私に昔のことを謝りたいと誤解を解きたいとかじゃないことくらいわかっているよ。

ヘラだって、わかっているんでしょ？

私たちは友達だけど、あなたのことが大好きだけど、大好きだからこそ私たちは罪悪感を抱え込む。

どんなに謝っても、それを本心から許してもらえても、私たちは自分自身を許せない。お互いがお互いを信じきれなかった自分を許さない。

だから、私たちは言わない。

ごめんなさいを、言わない。

それは互いの罪悪感をさらに重くさせるだけだから。

私たちは誤解が解けても、仲直りしても、昔のような関係に戻るには時間がまだ足りない。

今のまま付き合っても、互いの罪悪感で摩耗して疲弊して、いつか破綻するのが目に見えている。

……ミラージュにつけられた傷は、そう簡単には癒されない。

だから、私たちは離れ、別れるしかない。

この傷が癒されるまで、溝が埋まるまで、罪悪感が薄まるまで私たちは、再会の約束を交わして、そのいつかまで私たちは会えない。

「――ありがとう」

ヘラは私の答えに少しだけ瞳に涙を浮かべて、それでも笑って答えた。

けど、何かを思いついたのか真面目な彼女にしては極めて珍しい表情を見せた。

悪戯を企むような、少し意地の悪い笑みで小声になって彼女は言う。

「でも、エヒメの方から呼んでくれてもいいのよ。……あそこで座ってるサイボーグさんとの結婚式とか」

「!? ヘラッ!!」

何言ってるの!? っていうか、何!? もしかして私の気持ち、バレバレ!?

ヘラの言葉に思わず真っ赤になった私を、ヘラはおかしげに見て笑ってるし、私たちの様子をうかがっていたジエノスさんは、私の奇声と奇行に困惑してなんかオロオロしてるしで、もう私は顔がテーブルから上げれないくらいに恥ずかしい。

……とりあえずジエノスさんの様子から、別にヘラの発言は聞こえてないらしいことだけが救い。

あああつ! っていうか、思い出しちゃった!

今まで、夢だと思ってたのがテレポートの暴走だつてことを、その後お兄ちゃんとフブキさんから教えられて、思わず顔を赤くさせたら

いいのか青くさせたらいいのかな出来事を思い出しちゃった!!

……いや、全部が本当にレポートで体を持つていき忘れの事故とは限らないし、あれが本当に夢の可能性はある。うん、あれは夢だ、夢！ 私の願望に忠実なただの夢!!

隣の入ったことがないジエノスさんの部屋を見たら、夢か幽体離脱でレポートしてたかもう一発でわかるけど、とりあえず夢ってことにしておいてお願い!!

そうしないと、私の心臓は爆発しそうだし、自覚した時以上に私はもうジエノスさんとどんな顔して話せばいいかがわからなくなるの！

ジエノスさんが私のことが今すぐに結婚したいとか、死んでもいいけど死ねないとか言ってくれるくらい好きだなんて、私の夢だから!! 「……あの、エヒメさん？」

「え!? は、はいっ!? って、あれ? ヘラ!?」

もう必死で自分に言い聞かせていたら、ある意味今一番声をかけてほしくなかった人から声をかけられて、飛び上がって顔を上げたら、ジエノスさんが困った顔してテーブルの傍らに立っていて、ヘラの姿はどこにもなかった。

「すみません、ヘラはバイトの休憩時間を抜け出していたようで、先に帰ると伝えてくれと言われました……」

困った顔でジエノスさんがヘラからの伝言を私に告げる。

「い、いえ。すみません、なんか目の前にいるのに私が一人勝手に取り乱して……」

あの、ヘラは他に何か言ってますでした？」

とりあえず、ヘラを引き止められなかったことを悔やむような顔をしているジエノスさんに謝り、そして訊く。

ヘラ、余計なことをジエノスさんに言っただけじゃないよね？」

「いえ、特に何も。俺に迷惑をかけたと言って謝られたくらいですね。俺の方も酷い誤解をしていたので、謝罪するいい機会でした。

……本当に、エヒメさんの親友なんですね。誤解していた自分を殺してやりたいくらいに、恥ずかしいです」

ジェノスさんはヘラが出て行ったであろう扉を見つめて、答える。たぶん、私たちのやり取りの事を言ってるんだらう。

私は事前に、ジェノスさんに伝えていた。

私たちはどちらも謝らない。いつか必ず、また会おうと約束するだけで終わると。

伝えておかないと、ジェノスさんは本当にそれでいいのかと、きつと見ていてやきもきすると思ったから伝えておいたけど、まさか予言のように本当にその通りのやり取りだとは思わなかったんだらう。

うん、そう。

私たちは親友で、お互いに何を言うつもりだったか、何が言いたかったとかの想像はつく。

想像がつくし、分かり合ってるけど、それでも顔を見て言葉にして伝えておかなくちやいけなかったから、今日は会っただけ。

そうしないと、崩壊するという事を3年前に知ったから。

「誤解は私やお兄ちゃんが説明できてなかったのが悪かったので、もう気にしないでください」

言いながら、もう店を出ようとして立ち上がるのを、ジェノスさんはまた手を差し出して手伝ってくれる。

その手を取り、「ありがとうございます」と私が言うと、ジェノスさんはものすごく申し訳のない顔をした。

「……礼を言ってもらえるようなことを、俺はしていません。思い返せば、今回の出来事はほとんど俺が元凶です」

一瞬、言ってる意味がまったく分からなかったけど、ジェノスさんは自分のファンというかストーリーカーに私が襲われた事、そもそもミラージュとの再会は自分が原因だったことを言っているのだと気が付く。

「……すみません、エヒメさん。俺の所為で迷惑という言葉で済ませられない事ばかりに巻き込んで。……今日も、俺と一緒にの方がよっぽど危ないのに、関係のない俺がわがままを……」

「ジェノスさん」

ジェノスさんの言葉に割り込んで、止める。

さすがにちよつと腹が立ったから、別に迫力なんてないだろうけど下から睨み付けて私は言う。

「私は、ジェノスさんと一緒に良いです」  
「え？」

よつぽど予想外な言葉だったのか、ジェノスさんの黒い目がまん丸く見開かれた。

言いたいことは色々あった。

ミラージュと再会したのは、ある意味幸運と言ってよかった。そうじゃなければ、ヘラが私と同じかそれ以上にひどい破滅を迎えていたはずだから。

あのストーカー三人に関しては、ジェノスさんだって被害者と言えるのだから、私に罪悪感を抱く必要なんてない。

どちらの出来事も、私とヘラが和解するには必要だったのだから、変な話だけど感謝してるくらいだとか言おうと思ったけど、でも、私が選んだ言葉は自分の欲望そのものだった。

でもこれは、あの日、パニくって思わず叫んだのとは違う。

自分の意思で告げたと言葉だ。

「……たぶん、ジェノスさんの所為じゃないですとか、私は何も気にしてませんと言っても、気を病むのはわかっています。私も、同じようなことを考えて、今日、ヘラとあんな結末を迎えたのですから。

でも、これだけは覚えておいてください。誤解しないでください。私は、どんなに傷ついても、どんな結末を迎えても、ジェノスさんと一緒にいたいんです。隣を歩いて、普通に会話して、笑って、そうやって過ごしてたいです」

もう、伝えなかったことで後悔するのは嫌だから、ただその一心で私は伝える。

そして、伝えておいて後悔する。

これ、どう聞いても告白！

もういつそプロポーズの域にまで達してる！

とにかく誤解されたくない、伝えておきたい一心で恋心をオブラートに包み忘れた自分の馬鹿さ加減が恥ずかしくって、そのまま私は停

止してしまった。

ジェノスさんも、かろうじて好きだとか愛してるを言っていないだけの、告白同然の言葉に固まっちゃってるし！

どうしよう、どうしようとしてそれだけが頭の中でグルグル回っていたら、ジェノスさんが眩くように尋ねる。

「……いいんですか？」

「え？」

その問いが、私のフリーズを解凍する。

「……俺は、貴女の隣にいてもいいんですか？」

目を丸くして、きよとんとしてるのどこか泣きそうで、泣き笑いに近い顔で再びジェノスさんは訊いたから、だから私は答えた。

「……隣が、いいんです」

許可ではなく、私自身が望んでいると告げた。

私の答えに、一瞬だけ間を置いて彼も答える。

「俺もです」

微笑んで、ジェノスさんは言ってくれた。

「俺も、エヒメさんの隣がいいです」

\* \* \*

結局、変装も他人の距離感で歩くのも意味はなかった。

ジェノスさんは私の隣で、ギブスをはめた足を気遣って歩いて病院に付き添ってくれた。

「ジェノスさん」

いつもの距離感、自覚する前と変わらない位置にいてくれる人に、私は語る。

「私、ジェノスさんに秘密があるんです」

「秘密？」

唐突な告白に、ジェノスさんはきよとんとした顔で私を見下ろした。

その少し幼げな何気ない表情にも、心臓を跳ね上がらせる私は本当に重症だと思う。

「はい。……今は、どうしても勇気が出なくて言えない、秘密にしてお

くしかない事です。

誰よりも何よりも、あなたに伝えたいのに、あなたに知って欲しいのに、今はまだ言えない秘密です」

私のトラウマそのものがいなくなっても、私は劇的に変わってはいくれない。

相変わらず私は、ネガティブで自信がない臆病者の引きこもりで、誰かに頼ってばかり。

自分が何よりも望んでいることが、本当かもしれないという、叶うかもしれないのに、傷つきたくない私はあれは夢だと予防線を張って、結局逃げてばかり。

……でも、そんな私なのに、この人は私の隣が良いと言ってくれた。安心するように、喜ぶように、柔らかくて優しい笑顔でそう言ってくれた。

「けれど、……言いますから。必ず、ジエノスさんにその『秘密』を、教えますから。話しますから」

……あれが夢ではなかったとしたら、本当にジエノスさんがあんな風に私を想ってくれているのなら、ごめんなさい。

もう少し、もう少しだけ待ってください。

私はまだ、大好きなあなたの言葉を信じる事が出来ないくらいに自信も勇気もない人間だから、あなたの事を疑いたくないから。

例え夢でも、現実でも、そんなの関係なくあなたが好きだと伝えられるように、私は一歩一歩前に進んでゆきますから。

「だから、その日まで隣にいてください」

ついさつきはもつと恥ずかしいことを言えたのに、今の私にはこれが精一杯。

告白じゃなくて、ただのわがままにすぎない言葉。

そんな唐突で、意味の分からないわがままだったのに、ジエノスさん答えてくれた。

「はい」

隣がいいと言ってくれた時と同じ、笑顔で。

「楽しみにしています」



私の秘密が、あなたを傷つけるものかもしれない、とても汚くて醜いものかもしれないのに、そんなこと思いつきもしていないのか、それさえも受け入れてくれるのか、そんな期待をしてしまう笑顔と言葉だった。

「ありがとうございます」

その笑顔と言葉に、礼を伝える。

ああ、大丈夫だ。

私は必ず、この人に秘密を伝えられる。

未だにあれが現実だとは思えない、そんな自信は多分これからも得られないと思うけど、それでも私はそんなこと関係なく、ちやんと言えらる。

だって、どんな結末を迎えても、ただただ伝えたいという気持ちがあるから。

ジェノスさんが好きだって、私は言いたいから。

今はまだ、それを告げるとこの隣にいることはもうできなくなる可能性に身が竦んでしまう。

だから今は、この隣にいる時間を噛みしめる。

「……ジェノスさん。一応、私その秘密を話す日は決めているんです。だから、たぶんそう待たせることはないと思います」

隣で大好きな人と歩きながら、私はさらに告げた。

「そうですね。……それがいつかも、秘密ですか?」

少しだけ、寂しげな表情をして尋ねる彼に私は答える。

「いいえ」

これは、秘密なんかじゃない。

告げる日を決めているのは、そうしないときっと私はまた逃げるから。

そして、もう一つ。

「シババワの予言が外れた日と、決めているんです」

きつと私が世界が終わるときに一番後悔するのは、この人に気持ちを告げなかったこと。

だから、絶対にその後悔をしないように、私に何が出来るかなんか

まったくわからないけど、出来るだけの事をするように。

絶対に、世界が終わりなんて来ないようにするために、最後まで足掻くために、この日と決めた。

世界が続いて行くと決まった日に、私はその続きをあなたと歩みたいと告げたい。

私の答えに、ジェノスさんはもう一度微笑んだ。

「それは……一日でも早く訪れるようにしないとダメじゃありませんね」  
心から楽しそうに、笑ってくれた。

## ガロウ編

あなたを覚えている

「？ 鬼サイボーグ？ それと……もしかしてエヒメさん？」

足の骨のヒビの経過を病院で見てもらって帰る際、ジェノスさんの手を借りながら病院の入り口まで歩いていたら、すれ違いざまに聞き覚えのある声に呼び止められる。

私の足の怪我の経緯が経緯なので、ジェノスさんが自分はともかく軽くとはいえ変装してる私もちやんと「エヒメ」と認識した相手にものすごい勢いで振り返って睨み付け、ついでに砲門を解放した掌を向ける。

「ジェノスさん、落ち着いて！ SNSや掲示板を見た人より知り合いの可能性が高いから落ち着いて!!」

あまりの過剰防衛に、相手の人は怯えて両手をあげて完全降伏の体勢で固まり、私も慌ててジェノスさんのオーバーキル手前な防衛反応を止める。

気持ちは嬉しいけど、本当に落ち着いて！

私の晒された写真はかなり前のだし、あなたと一緒にはいえその写真や普段とはだいぶ違う系統の格好してるから、一目で私だつてわかるのは晒された情報を見ただけの人じゃなくて、普段の私もよく知ってる人の可能性が高いから!!

「そ、そ、そうだ！ お、俺だよ俺!!」と、ジェノスさんに焼却砲を向けられている人が、パニックのあまりか名前は名乗らず、何故かオレオレ詐欺の常套句を口に出しちやつてるけど、少しは落ち着いたらしいジェノスさんが腕を下げて怪訝そうな顔で相手をよく見て、それから軽く目を見開いた。

とつさにジェノスさんの後ろに庇われた私も、背中越しに覗き込んで見てようやく相手が誰であるかに気付く。

顔の大部分が大きな絆創膏で隠れてるし、まだ少し腫れやあざが残っていてわかりにくいけど、その人はバングさんの道場の一番弟子

かつ唯一の弟子で名前は……な、何だっけ？

あ、ヤバいでしょう。名前が出てこない。確か……チャ、チャ……チャラ……チャランポン？ ダメだ、絶対に違う。むしろ違つて欲しい。

私が名前を忘れたせいで声を掛けられないから曖昧に笑つていたら、ジェノスさんの方が先に声を掛けた。

「お前は確か……チャランコか？ バングの所の雑魚の」

「ちよつ、ジェノスさん!? 何言つてるんですか!?!」

名前を忘れてた私が言う資格はないだろうけど、とんでもなく失礼なことを真顔で言つたジェノスさんをとりあえず叱りつけて、チャランコさんに頭を下げる。

「す、すみません、チャランコさん！ 何か重ね重ね失礼な真似しちゃつて!!」

「……いや、別に良いよ。それより、どうしたのこんなところまで？ その足、大丈夫？」

チャランコさんがものすごく微妙な顔をしてたけど、もうたぶんジェノスさんがお兄ちゃんや私以外の人にはかなり傍若無人なところがあるのを学習してしまつたのか、若干悟つたような遠い目で許してくれてから、私の足のギブスに気付いて心配の言葉を掛けてくれた。

「お前には関係ない。帰りましょう、エヒメさん」

「ジェノスさん！ 心配してくれた人にそんなこと言つちやダメですよ！」

なのに、ジェノスさんはまたしても酷いことを言うので、もう一度私は注意する。

どうしてこの人は正義感も責任感も強い良い人なのに、時々ひどく無礼千万になるのかな。

ジェノスさんは注意したら私に「すみません」と謝つてはくれたけど、未だにミラージュの事に責任を感じてるからか、あまり人前に私を出すこと、それも自分と一緒にいる所を見られたくないのか、チャランコさんにこの場で詳しく話す気はないらしい。

「エヒメさんの怪我の経過は良好だ。お前が心配するようなことはない。ついでにバングにもそう伝えておけ。中途半端に怪我したとだけ伝われば、S級全体が騒ぎそうだから問題ないと念押ししろ」  
……だからどうして、あなたはそう私とお兄ちゃん、あと博士さん以外の人には横暴なのかな？

本当に私の心配を色々してくれているのはすごく嬉しい、嬉しすぎて恥ずかしくってこのままレポートで逃げ出してしまいたいくらいだけど、そろそろ本気で「失礼すぎです！」って怒ろうかと思ったら、チャランコさんの方が、「待つてくれ！」と呼び止めた。

「悪い、ちよつと待つてくれ。っていうかバング先生のこと話があるんだけど、時間あるか？」

ジェノスさんの腕を掴んでかなり真剣な顔をして尋ねてきたチャランコさんに、私とジェノスさんはどちらもきよんとしながら顔を見合わせた。

「……えっと、チャランコさんのお時間が大丈夫ですか？ 家で良ければ、お話は聞けますけど……」

顔を見合わせてから、私がさっきまでのお詫びを兼ねて提案する。

ジェノスさんが「エヒメさん！」とちよつと怒ったような声を上げたけど、悪いけど聞こえないフリをする。

私も名前を忘れて失礼だったけど、今日の失礼はだいたいあなたの所為だよ。ジェノスさん。

\* \* \*

家に帰ったらキングさんとフブキさんも遊びに来てくれていたので、チャランコさんは少し話しづらそうだったけど、フブキさんとはもかく同じS級のキングさんなら何かわかるかもしれないと言えば、全部話してくれた。そして私は、その話してくれた内容を頭の中で反復しながら首を傾げる。

「バングさんがそんなことしたんですか？ ……どう考えても、言葉通りじゃなくて何か他に理由があるでしょうね」

私の言葉に、ジェノスさんとチャランコさんは同意を示すように頷いてくれた。

どうもチャランコさんの怪我の原因はバングさんで、いきなり「実戦稽古」と言い出してチャランコさんに教えながらではなく一方的にぼこぼこにして、拳句の果てに「才能がない」と言って破門を言い渡したらしい。

けど、バングさんはものすごく温厚で優しい好々爺の見本みたいな人だから、言葉通りチャランコさんの才能のなさに見切りをつけたりはしないと思う。

むしろ、私やお兄ちゃんたちを弟子にしたがっていたくらいだったのに、何でいきなり唯一の弟子であるチャランコさんを破門したんだろう？

チャランコさんが武術を悪用したのなら、お仕置きとしてそういうことはしそう……というか、チャランコさんが唯一の弟子になるきっかけの兄弟子でそうしたはずだけど、それならそうだとはいきり言うだろうし。

あと、チャランコさんの方も普通に良い人で、言っちゃなんだけど諦めが早くて気も弱い方だから、良くも悪くも武術を悪用なんてしないと思う。

だから、一番可能性が高いのはバングさんの言葉も行動も本意ではなく、自分が泥を被つてでもチャランコさんを自分から離して「無関係」と言い張れる関係にしたかったんじゃないかな？

でも、そうだとしたらバングさんに何があつたんだろう……。

すごく嫌な想像ばかりが頭の中でぐるぐる回って、私が不安で今にもバングさんのところまで跳んで本人を連れてきて問い詰めようかとまで思いつめたのを察したのか、ジェノスさんが心当たりを話始めてくれた。

「……エヒメさんが心配するのでもあまり言いたくなかったのですが、おそらくは“人間怪人”ガロウと自分の巻き添えにならぬようになりましょう」

ジェノスさんの言葉に、私は言葉を失って眼を見開いて言葉を失う。

チャランコさんは、自分の兄弟子の名前が出たことに驚いて、「なぜ

奴が!？」と訊き返すと、ジェノスさんは全く何の事情も知らないチャランコさんに少し呆れながら、詳しく説明をしてくれた。

「バングの元弟子ガロウは、ヒーロー協会本部に凶悪怪人として指名手配され、バングはその討伐に名乗り出た」

「怪人!? ガロウは人間じゃなかったのか」

チャランコさんの「人間じゃなかったのか?」という問いには、ジェノスさんは答えなかった。

協会本部で何かあったらしいけど、相変わらず色々と後ろ暗いことがあるからか協会はそのトラブルを隠蔽したから、どうして彼が怪人、それも「人間怪人」と呼ばれているのかまでは、どうやらジェノスさんでもわからないみたい。

……ただ、私はなんとなくその理由に予想がついた。

ジェノスさんの心遣いは嬉しいけど黙っていたことにちよつと腹が立ったり、その内容でバングさんの行動がすんなり納得がいったり、でもバングさん一人で背負いこまなくてもいいのにと悲しくなったり、また都合の悪いことは隠蔽する協会に憤慨したり、いろんな感情と感想が生まれたけど、私の中で一番割合が大きくて、俯きながら小さく、それでも確かに声に出してしまったのはただ一つ。

「……………まさか……………」

バングさんからの話で、何度か聞いたその名前。

ずっとただの同名だと思ってた。だって私の知っている彼と、バングさんから語られるその人とは全くイメージが重ならなかったから。

けど今は、はつきりと重なってしまった。

私の知っている「あの子」なら、「人間怪人」と呼ばれる理由は……

「…………エヒメ。お前またなんか隠してるっーか、一人勝手に悩んでねーか?」

お兄ちゃんの言葉でとっさに顔を上げると、皆が私をきよんとした顔で見っていた。どうも、私の思わず出た言葉は私が思うより声が大きかったのかもしれない。

でもほとんど何も言わなかったから、ジェノスさんもチャランコさんも、お菓子を食べながらただ聞いていただけのフブキさんも意味が

わからずただきよとんとしている中で、お兄ちゃんだけはキングさんとゲームをしながらあつきり私の心の内を見抜く。

そしてその発言に、ジェノスさんが黒い目を見開いて私の肩を掴んで詰め寄ってきた。

「!? エヒメさん！ まさかもしや、ガロウとも面識があるんですか!?

どこですか!? 何があってそんな危険極まりない奴と関わってしまったんですか!? 答えてください！ 今すぐに焼却してみせませから!!」

「ジェノスさん、落ち着いて！ そしてお願いですから焼却しないでください!!」

うん、ジェノスさん！ 私は自分一人で悩んで何も言わなかったことで、あなたやお兄ちゃんに迷惑をかけたなり、事態をさらに大きくやこしくした前科があるから、こうやって詰め寄られるのは仕方ないけど、結論大雑把すぎ！

何でもかんでもとりあえず焼却しようとするのやめて本当に!! 私だけじゃなくてほかのみんなも同じことを思ってくれたらしく、チャランコさんやフブキさん、ゲームをしていたキングさんも一時中断してジェノスさんを止めてくれた。

けど、やっぱり私に前科があるから、一番最初に「おい、ジェノス。落ち着け」と止めてくれたお兄ちゃんが、ジェノスさんのクールダウンと同時にゲームのコントローラーを床に置いて、私と向き合っている。

「で？ 実際のところはどうかなんだ？」

口調も顔もいつもと変わらない無気力さなのに、眼だけは真剣に真っ直ぐ私を見据えるから、ギブスで正座が出来ない分、私の背筋は自然と真っ直ぐになる。

他の人たちも私をじつと見て、私の言葉を待ってくれるけど、なんかすごくいたたまれない。

「……えーと、初めに言っておくけど、隠してたとか悩んでたとかじゃないの。むしろ、迷ってたと言うかなんというか……」



私は首を傾げながらどう説明しようかささらに頭を悩ませていたら、ジェノスさんが身を乗り出して私に説得するように言った。

「エヒメさん。何度も言いますが言いたくないことは言わなくて良いですが、自分一人の中にため込むのはどうかやめてください。そうやって、あなた一人耐えるのを見て救われる者など、どこにもいないのですから、どうか吐き出して楽になることなら全部吐き出してください」

「……あ、ありがとうございます」

ジェノスさん、気持ちには本当に嬉しい。こつちも何度も言うようだけど、本当にすごく嬉しい。

でも、違う。私が言いよどんでる理由は、そうじゃない。

「エヒメ？」

人の心の機微に関してはかなり鈍感なお兄ちゃんだけど、私のことは細かく気が付いてくれるから、どうも私の様子から自分やジェノスさんが心配しているような内容ではないことを察したのか、ちよつと変な顔をしてもう一度私を呼ぶ。

ああ、うん。もうそのまんま話してしまおう。言い繕った方がなんか面倒くさいことになりそうだし。

「えつと……、バングさんの元一番弟子だった『ガロウ』っていう人に心当たりがあるのは確かなんですけど……、同名の他人である可能性が高いんです。だって、その子と私が出会って知り合ったのは、小学生の時ですから」

私の答えに、お兄ちゃんは「やっぱそんなもんか」と言わんばかりにため息をついて、他の皆さんは一拍間をおいて「は？」と声を上げた。

ごめんなさい、なんか色々思わせぶりな態度を取っちゃって。

\* \* \*

小学生の時、「縦割り学級」という6年生から1年生が何人かずつのグループになって、上の学年の子が下の学年の子の面倒を見ながら遊んで交流するという行事が確か、年に一度あった。

私の知る「ガロウ君」は、私が10歳かそれくらいの時にその行事

で同じグループになった一つ年下の男の子。

縦割り学級での交流は年に一回だけだしグループは毎年変わるから、その行事で彼と関わったのはその一度だけ。

だから、他の学年の頃にその行事で同じグループになった子とかは同じ学年の子くらいしか覚えていないけど、あの子だけは覚えていた。

縦割り学級が終わっても、ガロウ君は学校内で私を見かけたら挨拶をしてくれたし、ちよくちよく話をした記憶があるから、私はあの子を普通に友達と認識して覚えていた。

「……なるほど。すみません、早とちりをしてしまつて」

「いえ、私も前科がいろいろありますし、思わせぶりな態度を取つてしまつてごめんなさい」

私が「ガロウ」という名前を聞いて不安を感じた理由である、私の知るガロウ君とその出逢つた経緯を軽く話すと、ジェノスさんが何故、言うのを迷つて悩んでいたかを理解してやつと完全に落ち着いてくれた。

だつていくら不安を感じても、本人の保証がないどころか交流はあつたと言つても学年も違えば性別も違う。友達と認識していたと言つても、私とあの子は「ちよくちよく話をした」程度の付き合ひ。

仮に本人だと確証を得ても、私は彼の現在の連絡先どころか当時の連絡先も住所も知らないのだから、ここで話してもほぼ意味はないんだもん。

「で？ その『人間怪人』とエヒメが知つてる『ガロウ』は同一人物っぽいのか？」

私の話を聞いて、お兄ちゃんとキングさんはまたゲームをしだし、フブキさんもちやぶ台に頬杖をつきながら、いかにも一応というか暇だからこの話題でいいやと言わんばかりに尋ねる。

ジェノスさんもフブキさんと同じことを、こちらは先ほどと比べて冷静だけどすごく真面目に「どうなんだ？」とチャランコさんに確認するけど、私とチャランコさんはほぼ同じタイミングで首を傾げて、「……さあ？」と申し訳ない答えを告げる。

「う〜ん……。髪の色とか歳は一致するけど、そもそも俺、その『ガロウ』とは親しいどころか、俺が弟子になってから割とすぐに破門になったから、話した覚えもマジでないな」

首を傾げながらチャランコさんは半年以上前の記憶を掘り出して、「ガロウ」の外見特徴とかを探してくれるけど、チャランコさんが語る「ガロウ」は、「ガタイは良いし背も高いけどやせ形で、顔立ちは整っている方だけど致命的に目つきが悪い」という、特徴があるんだかないんだかだし、私の方も下手したら最後に会ったのは10年以上前なので、互いの覚えている限りの情報を交換しても何の参考にもならなかった。

そんなの尋ねた側の二人もわかっていたからか、「やっぱりか」という顔をしてフブキさんはお茶を飲み、ジエノスさんは私を励ますようにフオローの言葉をくれた。

「……おそろくは、エヒメさんの言うとおりの同名の他人でしょう。クラスや職場に必ずいるほどありふれていませんが、珍しいとも言えない名前です。歳や髪の色は一致してませんが、髪なら後でいくらでも変えることが出来ますから、あまり参考にはならないでしょう。」

……何より、エヒメさんのご友人だったその『ガロウ』とバングの元弟子の『人間怪人』とは、性格が全然違うのでしょうか？」

……そう。

私の知るあの子と「人間怪人」ガロウとは、少なくともチャランコさんの話を聞いた限りかなり性格が違うみたい。

チャランコさんは自分で言ったように、顔と名前が一致してる程度でガロウのことを本当によくは知らないけど、とりあえず好戦的で喧嘩っ早くて乱暴で、一応稽古は割と真面目に受けてたけどバングさんに対して敬意を持つてるようにも見えない、見かけどおりガラが悪い人だったらしい。

私の知る「ガロウ君」は、チャランコさんが話すその人物とは真逆に近い。

私の知ってるあの子は、大人しくて真面目で優しい子だった。

格闘技どころか外で走り回る遊びより、部屋の隅で昆虫の図鑑とか

を読むのが好きな子だったと思う。

というか、私があの子に話しかけたきつかけは確か、グループの中でいまいち輪に入れなくて、独りでポツンと遊んでいたからだったりする。

チャランコさんは自分の元兄弟子を、「ガキ大将とかいじめっ子の典型みたいなタイプ」と言ったけど、私の知る彼は逆に「いじめられっこの典型」で、実際にいじめられていた。

どこまでも噛み合わない、二人の「ガロウ」。

ジェノスさんの言うとおり、たまたま同じ名前と同じ年頃の他人だと思っておけばいいのはわかっている。その可能性が高いことだってちゃんとわかっているよ。

「でも、いじめられっ子が成長期で体が大きくなったり、一念発起で格闘技を習って強くなってから、昔の鬱憤が爆発していじめっ子に反転するってのもよくある話だよね」

キングさんがゲームをしながら呟いた言葉に、ジェノスさんが「余計なことを言うな!」と言わんばかりにもものすごい勢いと眼力でキングさんをにらみつけるから、キングエンジンが部屋の中で鳴り響く。

何も知らないと確かにこの音、なんか迫力あるよね。本当はただの凄い心拍なだけらしいけど。

けど実際、その可能性は十分あり得た。ジェノスさんもわかっていたんだろう。だから、キングさんの言葉であの反応だ。

私を少しでも安心させて、心配事を取り除こうとしてわざと口には出さないで、「別人だ」と言い切ってくれたんだ。

10年近くあれば外見はもちろん、性格だって真逆になってもおかしくない。

いじめられっ子だったから、暴力なんか振るえないなんて理屈はない。キングさんの言うとおり、むしろ今までの鬱憤を晴らすため、もしくは昔の自分を認めたくなくて隠すために、今までは真逆に振る舞うのは全然おかしいことじゃない。

だから、ジェノスさんがフォローしてくれたけどやっぱり、私の知る「ガロウ君」と「人間怪人」は同一人物の可能性が決して低くはな

い。

ないんだらうけど……

「……そういえば、そうですね。」

何か、あの子がそういう『いじめっ子』になるのが全然想像がつかなくて、その可能性に思いつきませんでした」

思わず私は笑って思った通りのことを言ったら、ジェノスさんやキングさんだけではなく、チャランコさんとフブキさんも、きよとんとした顔でまた私を見る。

……え？ 私、何か変なこと言ったかな？

私が自分の言ったことを反復しておかしなところはないか確認している、いつしかフブキさんはきよとん顔から何かを面白がる愉快犯的な笑みを浮かべていた。

「ずいぶんとその『ガロウ君』を信頼してるのね。もしかして、初恋の相手とか？」

「フブキ！ 不謹慎なことを言うな！」

フブキさんの言葉に今度は私ぎよとんとして、ジェノスさんが代わりに怒ってくれた。

うん、もしフブキさんの言うとおりガロウ君が初恋の人なら、そもそも「人間怪人」がガロウ君と同一人物かもしれないという話題なのだから、それを面白がって笑いながら尋ねるのは不謹慎だよ。ジェノスさんは優しくして真面目だから、怒ってくれただけだよ。

頭の中に蘇った、あの日のお兄ちゃんとジェノスさんの会話を「あれは夢!!」と言い聞かせて追い払って、顔が赤くなっていないことを祈りながら私は、手を振ってフブキさんの言葉を否定する。

「違いますよ、フブキさん。今ぐらいの歳ならまだしも、小学生にとっては1歳でも歳の差って大きいですから、年上はともかく年下の子は失礼かもしれないけど恋愛対象にはなりませんよ」

「そっぴやそっぴね」

私の言葉にフブキさんはあっさり納得して、ジェノスさんは「ですよね！」と力強く同意してくれた。

「けど、本当によく覚えてるな」と、私が「小学生の頃の友達」と話し

た時点で、「あ、そんなに心配する話題じゃないわ」と言わんばかりに、キングさんとのゲームを再開してたお兄ちゃんが話しかける。

聞いていないようで相変わらず、さりげなくきちんと聞いてくれるお兄ちゃんが嬉しくて、けど同時にそのお兄ちゃんの優しさが胸の奥を小さく、けれど確かに痛む棘になる。

お兄ちゃんの所為じゃない。ただ私が、思ってしまっただけ。

『ひいちゃん』

俯いて、何度も何かを言いかけるけど言葉にならなくて、必死で言いたいことを、自分の考えを、感情を、望みを、訴えたい何かを形にしようとしていたあの子を思い出してしまっただけ。

あの子の声を、聴きたいなあと思っただけ。

「俺なんて、小学校どころか高校の同級生すらほとんど覚えてねーな」「お兄ちゃん、それはさすがに記憶力より他人に対する興味の有無の違いだと思う」

「っていうか、サイタマ。あなた、ぶつちやけ友達いるの?」

あの子を思い出して感傷的になっていた所に、お兄ちゃんが「それはどうよ?」なことを言い出して、思わず感傷が吹っ飛んで素で突っ込めば、フブキさんが同時にかなりキツイことを言い出した。

あれ? そういえばお兄ちゃんって、家に友達を連れてきたこととかあつたっけ?

私がちよつと気づかなければ良かったことに気付くと同時に、お兄ちゃんが「と、ととと友達くらいいるわ!!」と盛大にどもりながら言い張った。

その発言に私とフブキさんは、生ぬるい目で「……そうだね」「……そう」と言うしかなかった。

「さ、サイタマ氏! 俺は間違いなく友達だから!!」

「先生! 先生ほどの傑物ならばついてゆけるものがないくて当然です! 相手が弱すぎただけですので、気にすることではありません!!」

「うるせーお前ら! 気を使うな!!」

キングさんとジェノスさんはお兄ちゃんに気を使ってフォローし

てくれたけど、お兄ちゃんの心を癒すには至らずむしろブチ切れた。どうか、ジェノスさんのはフォロージャじゃない。努力は認めるけど、割とトドメだよ。

\* \* \*

……こんな感じで、結局いつものグダグダな雑談の内に話が終わってしまった。

私は気付くべきだったことに何も気付かず、せつかくのチャンスを棒に振ったことを翌日知る。

あの時、チャランコさんがいつの間にか何も言わず、会話に加わらなかったことを不審に思えばよかった。

彼が何を決心して、覚悟を決めたことに気付けなかった。

翌日のニュースと朝刊でタンクトップマスターさんとその舎弟さん達、無免ライダーさん、そしてチャランコさんが「人間怪人」ガロウによって重傷を負ったと知って、私は今更意味のない後悔をする。

チャランコさんの様子のおかしさに気付いていれば、彼の「流水岩碎拳の一番弟子」という誇りと覚悟に気付いていれば、チャランコさんはもちろん、マスターさんやその舎弟さん達も、無免ライダーさんも、怪我なんかしなかったのかもしれないのだから。

『ひいちゃん……、怪人だって頑張ってるんだよ』

「人間怪人」が本当にあの子か、そうじゃないか確かめることが出来たかもしれないかったのに。

『人気者が勝って、嫌われ者が負けるなんて、悲劇だ』

あの子との声を、言葉を、聴けたかもしれないのに。

君は聴いてくれた

ただの脳筋だと思っていたが、脳筋なのは間違いないがさすがはS級。

なんかただのパンチを、「タンクトップパンチ」とかアホな技名つけている筋肉バカというかタンクトップバカだが、そのパワーは本物だ。

腹に入ったそのパンチで俺が血を吐き出すと、タンクトップマスターが「悪いが、とどめだ」と言っ腕を振りかぶる。

……タンクトップマスターよお。確かにお前のパワーは怪人並みだ。

けど、お前は攻撃手段も怪人並みだ。単純なんだよ。どれもこれも。

もうお前の技は、動きは、全て見切った。

正義は終わりだ、ヒーロー。

悪を執行する。

「ちよつと待ったアアアーツ!!」

タンクトップマスターの攻撃にカウンターを決めてやろうとしたら、邪魔が入る。

「あごしッー」

俺の代わりに殴られたのは、初めに潰すつもりだったC級あたりの見回り中らしき自転車に乗った兄ちゃん。

何やってんだ、こいつ？ つーか、まだいたのかよ。

S級が釣れたのなら、C級の雑魚なんかどうでも良かったから逃げてりやよかったのに、何故かまだいたこの兄ちゃんはこれまた何故か俺の代わりに殴られて、拳句の果てにタンクトップマスターに啖呵を切りやがった。

「は……恥ずかしくないのか！ S級ヒーローともあろうものが！ チンピラ相手にトドメを刺そうなんて！」

もう勝負はついている！ 彼はすでに動けないほど負傷している！



俺の実力すらも全く測れず動けないと思い込んでいるC級ヒーローは、自分の身を盾にして俺を庇った。

自分を襲おうとしていた、こいつからしたら通り魔でしかない俺を。

周りの筋肉どもは、「ヒーロー様に手を出す方が悪いんだろうがー」だのなんだの、お前の方がチンピラだろうがなことを言って、このC級を罵倒する。それでも、こいつは逃げないし退かないし揺るがない。

「やめろ、お前ら」

筋肉どもの罵倒を、リーダーであるタンクトップマスターが止める。

「確かに彼の言う通りだ。俺は人間と喧嘩するために、タンクトップを着こなせるようになったわけじゃない」

お前のそのタンクトップ崇拜は何なの？ というツツコミが頭によぎったが、舎弟どもを諫めた後に俺に視線を向けて子供に言うように、告げられた言葉でそんな呑気な考えは吹っ飛ぶ。

「これに懲りたら、二度と他人に危害を加えるな」

……………

『ダメだよ。ガロウ君』

「……………わかったよ。」

帰るよ。暴れて、悪かったな」

俺は、ふらつく足でヒーローたちから背を向けて、帰る。

自分を襲おうとした俺を庇ってくれたC級と、舎弟をボコボコにされたのにそれを許すS級ヒーローに感謝して、反省……………

『ダメだよ。ガロウ君』

「嘘。てめーら皆殺しコースに変更は無<sup>ね</sup>え」

する訳ねえだろ、偽善者どもが。

\* \* \*

「ああ、だと思った」

振り返って啖呵を切った時には、俺の顔程ある拳が目前だった。

「お前からは邪悪しか感じない。大きな障害になる前にここで消えてなくなれ！」

あー、はいはい。自分らの邪魔になる前に、倒せそうなうちにぶっ潰すのね。

それが、お前の「正義」か。

それが、お前の「ヒーロー」か。タンクトップマスター。

気が付くと、相手の腕を俺の腕がすり抜けて、タンクトップマスターの顔面に拳がカウンターで入る。

そしてのまま、急所に連打。

完全に最初の一撃が鼻に決まって、反撃することが出来ずにタンクトップマスターは扉まで吹っ飛んで膝をつく。

あーあ。使っちゃったよ。流水岩砕拳。

『この馬鹿弟子が！ 力の使い方を覚えよって……』

頭の中でジジイの顔とウザい説教が蘇る。これだから使うのは嫌だったけど、まあいい。こだわりは捨てるか。

このジジイの方が、マシだしな。

頭の中に浮かぶ姿も、声も、言葉も、「うるせえ、クソジジイ」で済ませられるこいつの方が、何倍もマシだ。

「おやおや、S級ヒーローが膝をつくとは」

俺の挑発に、タンクトップマスターは「少し驚いたただけだ」と言い張るが、引きつったその顔で虚勢がバレバレだぜ？

そもそも、足腰ガクガクじゃねえか。ろくに立ち上がれもしねえくせに、意地だけは立派なもんだな。

まあ、いい。そんな意地、すぐにぶっ潰してやるよ。

「アハハ、そーかい。じゃあもつと、驚いてもらおうかな。お前はそこで見ている。」

怪人ガロウによって、お仲間が全滅するシーンをなあ」

俺の宣言に、奴は一瞬だけ啞然としたように目を見開いてから、驚

愕する。

「ガロウ？ 例の“人間怪人”か!？」

あ？ 何だよわかってなかったのか。つか、何だよその“人間怪人”ってのは？

怪人ガロウって言ってんだろが。

まだ正式に怪人扱いされていないことに腹が立って、その苛立ちを発散させるために俺はさっさとこいつの舎弟共を血祭りにあげようと、既にリーダーを置いて逃げの体勢に入ってる筋肉ども元まで歩く。

「ま、待て！ そいつらには手を出すな！」

おい、立派だな。自分を見捨てて逃げようとしてる部下でも、大切なかね。

けど、俺の後ろで手を伸ばして懇願するだけで何もできないんだろ  
う？

言っただろう、タンクトップマスター。お前はそこで見てろ。

それが嫌なら、立ち上がれ。

言葉で怪人を止めようなんて、甘いんだよ。

「ジャステイスクラッシュ!!」

俺がタンクトップ軍団を血祭りにあげる前に、タンクトップマスターの懇願の直後、後ろから大声で技名を叫んでなんか物音がしたから、そのまま掴んで地面に叩き付ける。

何だ、お前まだいたのかよ。C級。

つかさあ、お前は今、何しようとした？

技名を叫ぶわ、自転車のこぐ音がうるさかったわで全然奇襲になつてなかったけど、お前、何してんだよ？

『ダメだよ。ガロウ君』

ガンガンとC級ヒーローの頭を地面に叩き付け続ける間中、声が聞こえる。

うるさい。黙れ。黙れっ！ 黙ってくれ!!

何がダメなんだ？ 何でダメなんだ!?

こいつのしたことが良くて、俺のしてる事の何がダメなんだ!?

後ろから攻撃？ ヒーローが？

お前さ、さつきなんて言ってた？  
恥ずかしくないのか？

そりゃこっちのセリフだ。

ついさつきまで庇っていた奴が、庇う価値がないどころか、チンピラじゃなくて怪人だった。

なら、掌返してぶっ殺そうとするのは全然かまわない。

けどな、お前は、後ろから奇襲してんだよ？

それが、ヒーローのする行動か？

自分を襲おうとした通り魔でも、必要以上の暴力を振るわれるのを止めたヒーローが、するべき行動なのか？

『ガロウ君、大丈夫？』

あの子のように、庇っておきながら……………

『大丈夫。大丈夫だから、気にしないで』

あいつらがあの子にしたように、お前は後ろから攻撃を仕掛けるのか!?

\* \* \*

散々地面に叩き付けて動かなくなったC級の頭を掴みあげ、見せつけて俺はタンクトップ軍団に言う。

「よお。お前らも、来いよ」

何してんだよ？

何でお前らは、こいつをボコってる俺に何も言わないんだよ？

何で、誰も向かって来ないんだよ？

「ガロウ！」

向かってきたのは、回復したタンクトップマスターだけだった。

っーか、お前も後ろから攻撃か。

どいつもこいつも、こだわりやら美学ってもんがないのかね。

ジジイの顔がよぎるからって程度とはいえ、使い勝手のいい流水岩

碎拳を封印してた俺がバカみたいじゃねえか。

裏拳を一発入れたら、タンクトップマスターは倒れた。

おいおい、マジで？

もう倒れんのかよ？ もう、動けないのかよ？

「用済みだ、タンクトップマスター。さて、残るは掃除だけだな」

C級に邪魔される前と同じように、お前の舎弟をぶっ潰すと宣言するが、今度は懇願さえもしない。完全に意識を飛ばしてやがる。

……S級って言っても、所詮は15位。下から数えた方が早い奴は、この程度か。

落胆しながら俺が再び、タンクトップ軍団に近づけばようやく奴らは俺に向かってきた。

「この野郎！ この人数を相手に勝てると思ってるん」

多勢を武器にこっちに向かってきた奴らを、まずはまとめて4人ぶっ飛ばせば、大半が引いて俺に向かってきたのは一人だけ。

そいつのリーダーと似たような単純で、リーダーとは比べ物にならない程貧弱なパンチを避けて後ろに跳べば、坊主頭のタンクトップはそのまま俺を追ってきた。

俺のすぐ後ろが塀だったから、どう受け身を取ろうが隙が生まれると思つたのなら良い判断だ。

俺以外が、相手ならな。

俺は塀のわずかなとっかかりに掴んで完全に体を塀に張りついて、しやがみこんだままの体勢で止まったせいで、目算が外れて坊主の蹴りは俺の寸前で空ぶる。

その所為で逆に生まれた隙を、もちろんこっちは見逃さねえ。

肘鉄を入れて地面に降りて、次の獲物に視線を向ける。

タンクトップ軍団はどいつもこいつも、ヒーローの集団とは思えねえ醜態を見せて逃げ回った。

全員でのしかかって押さえつけようとはしてきたが、もうそれは俺という「悪」を倒すためではなく、何とかして自分たちが生き延びるための悪あがきだ。

俺はそんな、ヒーローなのかただの筋肉集団なのかよくわからない

ものを、ひたすらに叩きのめす。

『ダメだよ。ガロウ君』

頭の中の声を、無視する。

「そこまでだガロウ！ 道場の面汚しめ！

くらえ！ 流水岩碎拳!!」

後ろから俺の所為で弟子がいなくなったはずの、もうあのジジイ以外は使う者がいない武術名を名乗り、背後から飛び込んできた奴がいた。

見覚えがあるような男だったが、着ているものには嫌になるほど見覚えがあった。

ジジイの道場の道着だ。

何だ、まだいたのかよ弟子。

良かったな、クソジジイ。俺どころか俺がいた頃の弟子たちの中でも、間違いなく一番弱いクソ雑魚でも、あんなかび臭い道場を誇りに思うような弟子がいて。

だけど、その弟子ももう終わりだ。

「うぼっ!？」

俺が顔面に一発拳を入れると、それだけで3メートルは吹っ飛んでいった。

それでも立ち上がって向かってくるこの弟子は、未熟どころじゃねーほどの雑魚だが、そこらに転がるタンクトップ共よりはずっと見所がある。

まあ、だからといって見逃す理由なんかねーから、そのまま同じようにこの弟弟子をボコっておく。

これでもう真正正銘、ジジイの道場に弟子はいなくなるだろう。

それが嫌なら、さっさと来いよ。クソジジイ。

弟子も助けられないで、何がヒーローなんだよ？

\* \* \*

結局、俺がヒーローども全員と名前も知らない弟弟子を動かなくな

るまでボコつても、クソジジイや他のヒーローどもはおろか、一般人さえも通りかかることはなかった。

もしかしたら、通りかかったけど関わるのが嫌で逃げたのかもしれないけどな。

……ヒーローを倒すほど、怪人として成長していく気がしたから始めたヒーロー狩り。

この理屈が正しければ、大量のヒーローと下位とはいえS級を狩ったことで、俺はずいぶんとレベルが上がったはずなのに、ただひたすら今は嫌な気分だ。

こんな気分は一月ぐらい前に、あの透明化するキモイ怪人をボコつた時以来か。

……くそっ！ 最近やつと、忘れかけてたっていうのに、あのC級とタンクトップマスターめ。

俺は根城にしている小屋まで歩きながら、ひたすらに何度も邪魔してきたC級ヒーローと、タンクトップマスターに内心で悪態をつく。

あの偽善者ども……、何が「恥ずかしくないのか」だ。何が、「これに懲りたら、二度と他人に危害を加えるな」だ!!

後ろから奇襲を仕掛けて、何もできずに立ち上がることも出来なかった分際で、俺を庇うんじゃないやねえ！ 俺に説教するんじゃないやねえ!!

『ダメだよ。ガロウ君』

何度も俺を止めようとした、俺を叱った声を聞きたくなくて、耳を塞ぐ。

けどその声は俺の頭の中からしてるから、俺の行動に意味なんかなくて、むしろ耳を塞いだことでおさらはつきりと聞こえてきた。

小さな女の子の、俺より一つ上なのに当時の俺とそう変わらない、下手したら俺より小柄だった女の子が言う。

『ガロウ君、どうしたの？ 何があったの？』

俺を叱る前に、俺の話を聴いてくれたあの子が脳裏に蘇る。

もう、やめてくれ。何も言わないでくれ。何も訊かないでくれ。

俺にはもう、話すことなんてないんだ。

「……………俺は怪人だから、悪いことをするのに理由なんかないんだ。……ひいちちゃん」

だからどうかもう、俺なんか放っておいて。



## 私の願い、あなたの望み

「君達がわざわざお見舞いに来てくれるなんて、嬉しいよ。サイタマ君。エヒメちゃん」

ベッドの上で無免ライダーさんは、穏やかに笑って言ってくれた。良かった。新聞やニュースで怪人に襲われて重傷って聞いた時はすごく心配だったけど、思ったより元気そう。

「……おう。バナナ、ここに置いていいか？」

お兄ちゃんもいつもと変わらない覇気のない表情だけど、声がすこしだけ安心したように柔らかくなってる事にも私はホツとする。

新聞で無免ライダーさんが重傷って記事を見て、私より先に「見舞いに行くぞ」って提案したくらい、心配してたもんね。

……でも、お兄ちゃん。病室で堂々とバナナを置いて自分で食べるのはやめて。

「君が食べるのか……」って、無免ライダーさんも困惑しちゃってるじゃない！

「ごめんなさい、無免ライダーさん！ お見舞いのお菓子はこっちです！ ちゃんと持ってきてますから！」

とりあえず私は謝ってお兄ちゃんを押しつけて、朝、近所のスーパーで買った菓子折りを渡す。

急だったから、かなり適当になってしまったのが本当に申し訳ない。

「いや、大丈夫だよ、気にしてないから。むしろ、気を使わせて本当にごめんね。エヒメちゃんは足を怪我してるのに……」

優しい無免ライダーさんはこう言ってくれるけど、私が入院した時はこの人も重傷だったのにすごくお世話になったから、また今度、ジェノスさんが定期メンテナンスで来れなかったから、ジェノスさんと一緒に来れた時にでも改めてもつとちゃんとしたものを贈ろうと決めた。

しばらく私と無免ライダーさんとで「大丈夫だから気にしないで」と遠慮の応酬をしていたら、朝ごはんのバナナを一本食べ終わって

やっと、お兄ちゃんが再び口を開く。

「ヒーロー協会の新聞にでかでかと載ってたから。たった一人の怪人に、数十人のヒーローがやられたって。」

良かったな、生きてて。バナナやるよ」

あ、一応そのバナナはお見舞いのつもりでもあったんだね。

……何にも持ってこなかったよりマシなのか、バナナ一房だけって手ぶらの方がマシなのか、もう私には判別がつかない。

何というか、本当にごめんなさい、無免ライダーさん。気に障ったらのなら、遠慮なく怒っていいですよ。

幸い、無免ライダーさんは本当に気にしていないらしく、バナナを受け取りながらお兄ちゃんの言葉というか、新聞の内容に訂正を入れた。

「……協会は犯人を怪人指定してはいるけれど、彼は人間だったよ」

「え?」

「えっ? 怪人じゃないのか?」

この時まで、私もお兄ちゃんも新聞やニュースの内容を鵜呑みしていた。

無免ライダーさんは深海王の時のように、自分の階級では手が出せないレベルの敵と戦って、重傷を負ってしまったのかと思ってた。

相手が、人ならざるものだと疑っていなかった。

「人間だった……。怪人を名乗る人間だ……。あるいは、まだ人間、と表現すべきか」

無免ライダーさんの続けられる説明に、私の鼓動を刻むペースがどんどん早くなってゆく。

協会が怪人指定する「人間」という話題を、昨日のチャランコさんの話を思い出してしまう。

……ううん。本当は、新聞やニュースで知った時から、被害者が無免ライダーさんやタンクトップマスターさんやその舎弟のヒーローだけじゃなくて、チャランコさんも被害に遭っていることを知った時点で、「まさか」と思ってた。

私が今日、お見舞いに来たのは無免ライダーさんたちが心配だった

からがもちろん第一だし大きな理由だけど、私は安心したくて、新聞に書かれていた通り、彼らを襲ったのが本物の「怪人」であることをその口から証言してほしかったのも確か。

けど、私の期待は簡単に打ち砕かれた。

お兄ちゃんが、「ただの不良か……」と尋ねたけど、無免ライダーさんは「恐ろしく強い人間だよ……」と、さらに私の期待を砕いてゆく。うん。わかっているよ。わかっていたよ。

……あなたをこんなに痛めつけたのは、あの人なんですわね。

バングさんの一番弟子だった、人間怪人。

でも、もう少しだけ私に期待させてください。

信じさせてください。

『ひいちゃん』

私の知っているあの子では、「ガロウ君」ではないと、信じさせてください。

\* \* \*

お兄ちゃんはいつも通り覇気のない顔で、「ああそう……。魚類の怪人とどっちが強いかわかるか？」と質問を重ねる。

もしかしたら、無免ライダーさん達を襲った「人間怪人」が、私の知っている「ガロウ君」かもしれないという話をしなかった。

たぶん、気を使ってくれたんだと思う。昨日の話は、忘れてないはず。

だって尋ねながら私の頭を一回、「心配すんな」って言うように撫でてくれたから。

「うーん……。深海王もとんでもなかったけれど……今回は何か違うんだ」

「!?」

妙に歯切れの悪い無免ライダーさんの答えに、私とお兄ちゃんは一緒に首を傾げる。

無免ライダーさんも、自分で疑問に思っている部分を何とか説明しようとして、ベッドの上でわずかに首を傾げながら、やっぱり歯切れ悪く語る。

「一方的にやられただけの僕でも感じた違和感……。強さの種類が違  
う……。何て言えばいいのか……」

『技』だ。奴は高度な武術を使う」

その曖昧な説明と、無免ライダーさんの疑問に、隣のベッドから  
あつさり答えが投げ出された。

無免ライダーさんが無理して腕を伸ばして、隣のベッドが見えるよ  
うにカーテンを引く。

「シルバーファングは厄介な魔物を育ててしまったようだな」

……同じ病室だったんですね、タンクトップマスターさん。

無免ライダーさんのお見舞いが終わったら、この人の方にも行こう  
と思っていたから、ある意味好都合。

そんなことを思って軽く会釈しながら私は、用意していたタンク  
トップマスターさんのお見舞いのお菓子を出そうとしてただけど  
……

「あの人……なんか急に会話に入ってきたけど誰か知ってる？」

「タンクトップマスターさんだよ！ S級の！ 新聞に載ってたし、  
会った事もあるし、お世話になったって私、話したよね!？」

相変わらず、人の顔も名前も覚えなお兄ちゃんが言っちゃった。

一応、声のトーンは落としていたけど、無免ライダーさんとの会話  
より少し音量を下げた程度でしかないから、確実に聞こえた。お兄  
ちゃん、声に覇気がないのに何故か妙に聞き取りやすく通る声して  
るから、その程度の気遣いは無意味だよ。

まあ、一番無意味なのは思わず突っ込みを入れちゃった私なんだけ  
ど。

反射で入れたから、声を押さえるところか病室で迷惑なくらい大き  
な声を出しちゃった……。

お兄ちゃんとボケと私の突っ込みにタンクトップマスターさんは  
もうどっちに怒ればいいのかやらって顔してるし、無免ライダーさんは  
ものすごく気まずそうで、私はものすごく恥ずかしくてテレポートで  
逃げ出したくなったのに、お兄ちゃんはやっぱり神経の図太さがすご  
い。

「ああ〜！　　そういや新聞に載ってた!!　　一番ボコボコにされた人だって」

「せめて一番食い下がったと言え!」

「なんか本当にもう、愚兄がすみません!!」

私の突っ込みで思い出してくれたのは良いけど、何でそういうこと言うのかな!?

それじゃあタンクトップマスターさんが一番弱かったみたいじゃん!　　マスターさんの言うとおり、一番強くて食い下がったからこそ一番ボコボコにされちゃったんだよ!!

お兄ちゃんの率直すぎる言葉に私が頭を下げると、タンクトップマスターさんは「……いや、君は気にしなくていい」と言ってくれた。

そうだよ。私が気にすることじゃないよね。

お願いだから、そこでまたバナナを食べ始めたお兄ちゃん!　　あなたが気にして!

そんな抗議を込めてお兄ちゃんを睨み付けてみたけど、お兄ちゃんは全く気にせず朝ごはんを食べるのを続行。

そりゃこれくらいで反省してくれる人なら、とつくの昔にもう少し空気を読んでくれる人になってるはずだよ。

むしろ、タンクトップマスターさんが、「ボコボコにされた」という発言を気にして、片手で頭を抱えて項垂れた。

「くそッ……、情けない話だ。この俺としたことが……。」

まさかあんな若造に不覚を取ろうとは……。まったく、武術とは厄介なものだ。これまで……。どんな怪物が相手だろうがほとんど一撃で退治してきた俺が……。」

その言葉に、お兄ちゃんが反応したのを私と無免ライダーさんが気づく。

お兄ちゃんはタンクトップマスターさんのベッドに近づいて、バナナを一房もいで手渡した。

「バナナやる」

「ん?　　ああ、ありがとう」

唐突なお兄ちゃんの行動に、困惑しつつもお礼をちゃんと言うマスターさん。

お兄ちゃん、ちよつとこの人を本気で見習え。

もちろん、ある意味では傍若無人や唯我独尊という言葉を体現しているお兄ちゃんが気にして見習う訳もなく、珍しくお兄ちゃんは笑った。

「で……その話。詳しく聞かせてくれ」

何かを期待するように、不敵に笑うお兄ちゃん。

タンクトップマスターさんの言葉に、お兄ちゃんは期待した。

「俺の攻撃が全てかわされ、いなされ、流される。どんな強力な攻撃でも……、まず当たらなければ意味が無いだろう」

「そりやそうだ」

私はともかく、お兄ちゃんとタンクトップマスターさんはA市壊滅の時に会ったきりだから、当然マスターさんはお兄ちゃんの反応や質問がよくわからず困惑してる。

困惑しつつも、タンクトップマスターさんはお兄ちゃんに相手のこと、武術がどれだけ厄介なのかをわかりやすく丁寧に教えてくれた。

この人、たまに変なこと言い出すけど本当にいい人だ。

相手の攻撃の威力をそのまま利用して返すカウンターの脅威や、急所を狙われる厄介さ、従来の怪人や怪物は自分の持っているパワーをそのまま無茶苦茶に使って周りや相手を破壊するのに対して、彼は……人間怪人は理的に、合理的に「人間を壊す方法」を熟知して使ってくることをわかりやすく教えてくれた。

ここまでわかりやすく、「ヒーローを倒す方法を知っている」と言い切られても、お兄ちゃんの表情は変わらない。

相変わらず不敵に、お兄ちゃんは笑ってる。

何に期待しているかなんて、わかりきっている。

自分と同じように、一撃で怪物や怪人を倒してきたこの人をこころで傷つけた相手なら、この人が「厄介」と語る武術なら、お兄ちゃんは自分が抱える「強い相手と戦いたい」という飢餓を満たせるかもしれない。

そんな期待をしてることなんか、一目瞭然だ。

そして私は、危ないことはしないでほしいけど、お兄ちゃんの飢餓を満たせることを望んでる。

お兄ちゃんの期待を壊したくない。邪魔したくない。

……でも——

「シルバーファングが奴を倒せるか俺にはわからないが……、誰かが止めなければ被害が拡大する一方だ」

「人間怪人」の脅威をタンクトップマスターさんが語り終えて、話はまだめに入る。

「怪人を名乗る人間によるヒーロー狩り……。これは社会全体の治安を揺るがす大問題だ。

このまま野放しにはできん……。俺もすぐに復帰するつもりだ」

タンクトップマスターさんの言葉に、無免ライダーさんも動かせる限り首を動かして、深く頷いて同意している。

マスターさんだけじゃなくて、無免ライダーさんも多分すぐに復帰するつもりなんだろう。

その行動も意思も、とても尊いもの。

私が定義する「ヒーロー」に合ったもの。

この人たちが語る言葉は、どこまでも正しいことだったのはわかっている。

わかっている。わかっているよ。

例え一般人を傷つけなかったとしても、ヒーローが重傷を負って一時的にでも現場に出ることが出来なくなれば、それだけ怪人による被害が酷くなる可能性が高い。

そもそも、チャランコさんを傷つけている時点でもう、「ヒーロー狩り」じゃない。

どんな信念や思想があつたとしても、「彼」がしたことは許されていいことじゃない。

『ひいちゃん……、怪人だって頑張ってるんだよ』

……あなたのしたことは、「悪いこと」なんだよ。

例えどんなに頑張っても、許されないことなんだよ。

許しちや、いけないことなんだよ……。

「何、凹んでるんだよ」

ポンツと、私の頭にいつもの暖かな重みが乗った。

そしてそのままぐしやぐしやに髪をかき混ぜて、私のうじうじした考えを吹き飛ばすように、乱暴にお兄ちゃんは私の頭を撫でた。

「大丈夫だ。きつと違う。こんなことする奴じゃなかったんだろ？」

仮になんかの間違いで、道を踏み外してこんなことをしてるのなら、ちゃんと話は聞いてやる。聞いて、『バカなことしてんじゃねえ』って注意してやる」

そう言つて、お兄ちゃんは私に笑いかけてくれる。

何かを期待するような、さつきまでの不敵な笑みじゃなくて、いつものように「心配すんな」つて言つて私を安心させてくれる笑顔。

……ああ。本当にちゃんと、昨日の話を覚えていてくれたんだ。

\*\*\*

昨日、もしかしたらバングさんの一番弟子だった、怪人と名乗る人間が私の知る「ガロウ君」じゃないかという話は、途中で脱線したらそのまま本題に戻つてこれず、グダグダなまま話は終わってしまった。

まあ、真面目に本題から離れずに話していたとしても、昔すぎる話だから結局のところ、何も出来ることなんてなかったとは思う。

で、いつの間にかただの雑談になって、フブキさんやキングさん、チャランコさんが帰つて、いつも通りお兄ちゃんとジェノスさんと晩御飯を食べた後、お兄ちゃんとジェノスさんはそれぞれ別々にだけど、同じことを言つてくれた。

「エヒメ。お前はどうしたいんだ？」

「エヒメさん。貴女は何を望みますか？」

二人とも、私にそう尋ねてくれた。

皆から「きつと違う」と言つてもらつても消しきれない不安に気づいて、気を使つてくれた。

その気遣いは嬉しいけど、ものすごく申し訳なくて、「大丈夫です」とか「なんでもない」と言つてごまかしてしまいたかった。



自分のわがままであることをわかっていたから、言うべきじゃない  
と思った。

でも……………

『…………ひいちゃん』

信じたくない。

信じられない。

違つて欲しい。

でも、もしも本当にあの子なら、あの子が道を踏み外してしまった  
のなら、その理由はきつと…………

『だって…………たつちゃん…………クラスの皆…………先生…………お父さん  
が…………』

誰も、聴いてあげなかったから。

周りの人が言ったことを全部、真面目に受け取つて、考えて、だか  
らこそ納得できなかった、訊きたかった、訴えたかった、叫びたかつ  
たたくさんの何かを、誰も聴いてくれず、聴いてあげなかったからだ  
と思つたから。

だから、私はお願いした。

「ごめん、お兄ちゃん」

「ごめんなさい、ジェノスさん」

最近、ミラージュの事で迷惑をかけたばかりなのに、お兄ちゃん  
にもジェノスさんにも、私は縋り付いてしまった。

「どうか、お願い」

わがままだけど、タンクトップマスターさんでも、S級でも勝てな  
かつたくらいだから、私の望みを優先して戦おうとしなかったら、  
ジェノスさんどころかお兄ちゃんさえも危ないのかもしれないけど  
…………、それでも、私は二人に縋り付いて頼んでしまった。

「話を聴いてあげて」と。

もう、嫌だから。

ヘラの時みたいに、私が何らかの行動をしておけば、あんな結末に  
はならなかったと後悔するのは嫌だから、だから他力本願で恥ずかし  
いけど、頼み込んだ。

……お兄ちゃんは、そんな私のわがままを実行しようとしてくれるんだね。

ねえ、お兄ちゃん。

本当に私の友達だったら、たとえミラージュのように怪人に成り果てていても、きつと私はあの子をミラージュのように見捨てる事が出来ないことも、わかってるんでしょ？

きつと、お兄ちゃん自身も殺せないこともわかってるんでしょ？  
本気で戦えなくなることわかっても、お兄ちゃんは私の願いを叶えてくれようとしてくれるんだね。

私の期待は壊さないでいてくれるのに、自分の期待は諦めてようとしてくれるんだ。

私が凹んで落ち込んでいるから、そう言ってくれるのなら。

その為に自分の期待を捨ててくれるのなら、わたしがすべきことはひとつだけ。

「……うん。……大丈夫。もう、本当に大丈夫だよ。」

ありがとう。お兄ちゃん」  
笑って、伝える。

本当に本当に大丈夫だってお兄ちゃんに信じてもらえるように、本当にお兄ちゃんの言葉が嬉しかったから、私は精一杯笑って伝える。

酷いわがままだけど、私はお兄ちゃんが自分と同じくらい強い敵と戦うなんて危ない目にあって欲しくないし、人間怪人がガロウ君なら、例え殺さないように手加減しても、問答無用で殴って終わらせるなんてこととして欲しくない。

だから、お兄ちゃんの期待を捨てないでなんて言えないから、言えないのなら私は、お兄ちゃんが望んだことを実行できるようにしたい。

落ち込まないで、あの子じゃないと信じて、笑って、お兄ちゃんが全てを解決するのを家で待って、お兄ちゃんが帰って来る居場所を守らなくちゃいけないって思った。

そうしないと、何のためにお兄ちゃんが自分のしたいことを我慢したのかわからなくなっちゃうから。

「……そうか。ならいい」

私はちゃんと笑えていたみたいで、お兄ちゃんは少し安心したように笑ってから、またタンクトップマスターさんに向き直って言った。

「まあ。その『人間怪人』が何にせよ、とりあえず見つけなくちゃ話になんねーよな」

「あ、ああ。そ、そうだな……。階級を無差別、ヒーローを見つけては手当たり次第だから、こちらから見つけるのは困難だがな」

お兄ちゃんにいきなりまた話を振られて、マスターさんは少し戸惑いながら答える。

っていうか、当たり前だけど私とお兄ちゃんのやり取りは、タンクトップマスターさんと無免ライダーさんには意味不明だったらしく、二人ともポカンとした顔で見てるのによく気付いて、私は恥ずかしさで逃げたくなったのに、お兄ちゃんは何にも気にしないで話を続行できるのがやっぱりすごい。

尊敬はしたくないけど。

「なーに、ヒーロー狩りをしてるんなら大丈夫だろ」

「？ サイタマ君、何か考えでもあるのかい？」

妙に自信満々に言ったお兄ちゃんに、無免ライダーさんが尋ねると、お兄ちゃんはドヤ顔で言い放った。

「考えなんて立派なもんじゃねーよ。ただ、S級を倒してノリにノツてるとしたら……。そろそろ俺を狙いに来るってことだろ！」

………病室に、気まずい沈黙が落ちた。

お兄ちゃん。私はお兄ちゃんもはや人類の枠にとどまらないくらい強いのは知ってるし、無免ライダーさんもどこまで正確かはわからないけど、お兄ちゃんの実力が階級にあってないのは理解してるよ。

でも、お兄ちゃんは世間ではB級上位で割と強いヒーロー扱いかもしれないけど、わざわざ「ヒーロー狩り」で積極的に狙いに来るほどじゃないからね？

そのことを冷静に指摘すべきかどうか、私と無免ライダーさんは迷った結果、ノーコメントを貫かせてもらった。

タンクトップマスターさんの、生暖かい視線がものすごくいたたまれなかった。

## 約束は果たせない

「しかし、また面倒なことが起こってんだな」

無免とタンクトップ何とかっておっさんと、じーさんの弟子のチャンポンだっけ？ その3人の見舞いに行った帰り、ついでにスーパ―によって買い物しながら何気なく俺は言った。

やつと3年前……いや、それ以上前からエヒメを苦しめていた問題が後味は良くないけど解決したと思ったら、間を置かずにもまた問題が発生してマジで何なんだよ？

エヒメ。お前自身は本当に何も悪くないけど、疫病神かなんか取り憑いてないか？

「……ごめんね、お兄ちゃん」

横でカートを押しながら歩くエヒメが、俯いて悲しそうな顔をして謝った。

昨日も、こんな顔をしてこいつは俺に謝ってた。たぶん、ジエノスにも同じような反応だろう。

謝る事じゃねーのに、お前の所為なんかじゃない、こいつに悪い所なんて何も無いっていうのに、未だに何でもかんでも自分が悪い、自分のわがままに振り回して申し訳ないと思う所は、ミラージュがいなくなろうが友達と和解しようが、やつぱそう簡単には変わらねーか。

まあこれは本当に昔から、物心がついたころから今よりはひどくないつて程度でこんなだったし、しようがねーか。

「ごめんなさい」で終わらせなくなっただけで、十分だ。

「話を聴いてあげて」なんて、今までのこいつだったら俺たちに悪いからと思つて絶対に言わないで、自分一人で何とかしようとしやがるからな。

素直に頼るようになっただけ、ずいぶんマシだ。

だからもつとお前は素直になれ。もつと甘えろ。

甘えすぎなら、ちゃんと叱つて止めてやるから。

そんなことを考えながら、俺はまたエヒメの頭に手を置く。

「何に謝ってるんだよ。別にお前が謝る事じゃねーだろうが。」

お前の友達かどうかなんか関係なく、ヒーロー狩りなんかしてるんならそれを止めるのは俺の仕事だし、そのついでにお前の友達なら話を聞いて、ついでにアホなことはやめろって説教するくらい、大した手間じゃねーよ」

ぐしやぐしやと髪をかき混ぜるようにして頭を撫でてやると、エヒメは嬉しそうに笑う。

「……ありがとう。お兄ちゃん」

そう言っただけで安心したように笑う妹に俺も安心して手を離したら、何かエヒメは急に真顔になって「でもね、お兄ちゃん」と俺に詰め寄ってきた。

え？ 何だその反応？

「お兄ちゃん、私のわがままだけど本当に、本当に話を聴いてあげてね。」

本当にあの子は、ガロウ君は良い子だったの。ただ、口下手というか、真面目に考えすぎて色々細かい所までけっこう理詰めで考えるから、どうしても長い話になると思うけど、お願いだから『話が長い！ 20文字以内にまとめて来い！』なんてこと言わないでね。

ジェノスさんみたいに自発的に話したことになるともかく、こっちから訊いてるのにそんなこと言われたら、普通にキレるから」

……どうも俺は、妹にあんまり信頼されてなかったらしい。

いや、これは仕方ねーんだけどな。なんせ前科があるし。そして俺自身も、ジェノスが初めて家にやってきた並のクソ長い話をされたら、エヒメの頼みだっただけのことを忘れて素で同じことを言いそうだと思うった。

「……お、おう。……もちろん、ちゃんと全部話を聞いてやるから、心配すんな」

「……一応言っとくけど、聞くだけってのもやめてね。話し終わった後に、『今の話を聞いて、どう思った？』って訊かれて『話が長い』とだけ返されるくらいなら、お互いに初めから何も聞かない話さない方がマシだからね」

俺がエヒメの念押しに、ちゃんとわかっていると答えてもまだ念押し

された。

そしてそれも普通に俺は言いそうだったから、つていうかエヒメの念押しが無かったらマジで言ってたかもしれないので、思わず目を逸らして「わ、わかっとするわ!」と答えておいた。

まあ、もちろん俺のそんなごまかしが通用する訳がなく、エヒメは「言っておいて良かった」と言わんばかりの呆れたジト目で俺を見られたけどな。

「……それと、お兄ちゃん。話してくれないからつてまずは殴って少し大人しくさせようとかも、出来ればやめてね。誰か、他のヒーローさんや一般人に危害をくわえようとしてたり、お兄ちゃんでも危ないって思えるほどの強さならもちろん無理しないで欲しいけど、そうじゃないのなら問答無用でとりあえず殴るは本当にやめて。」

それやったらあの子、もう絶対に心ひらいてくれなくなると思うから」

「ああ、もううっせーな! 全部わかってるっーの!!」

さすがに念押し of 念押し of 念押しをされて、キレた。

お前は俺の事を信頼してんのかしてないのか、どっちだ!?

そう訊き返してやりたかったが、それより先にエヒメにキレ返された。

「だつてお兄ちゃん、あんなに頼んでたのにソニツクさんを女の子にしかけたもん!!」

「ごめん! 兄ちゃんが悪かった!」

そうだった! これも前科あったわ俺!

エヒメの命の恩人だつて話を聞いてて、それがこいつだつてわかつたのに、わざとじゃねーけど金的かましちやつてたわ!

ごめん、エヒメ! そりや信用できずに念押しするわな!

………ついについて最近、公園で会った時もまた事故だけど金的かましちやつたのは言わないでおこう。

\* \* \*

「エヒメ、先に帰れ。俺ちよつと、他に買うもんがあるから」

ゴーストタウンの入り口あたりで、エヒメに買ったものを渡して頼

む。

こいつ一人で帰すのはちよつと心配だけど、これくらいの距離と荷物の重さなら、休憩挟まず家まで一気にレポートできるはずだし、ジエノスもそろそろメンテ終わらせて帰ってくるはずだから、大丈夫だろう。

一緒に連れて歩くには、生もの買っちゃったし。

エヒメも素直に荷物を受け取って、ついでに尋ねた。

「何買うの？」

「カツラ」

何も考えずに即答して、俺は後悔した。

おい、エヒメ。俺の答えに「ああ……ついに……」って顔すんな。止めるべきか、「いいんじゃない？」と言うべきか悩むな。まだ俺は地毛を諦めてねーよ。

「変装の為のカツラだ！ チャンポンがチケットくれた武術大会に出場するなら、髪型と色くらいあいつに似させておいた方がいいだろうが！」

「え？ お兄ちゃん、本気で替え玉出場する気なの？」

俺が何の為のカツラか説明したら、気まずそうな顔から呆れたような顔になる。どっちにしろそんな反応かよ。

「お兄ちゃん、賞金は確かに魅力的だけど、替え玉ってバレたらそれこそどうなるかわかんないんだよ？」

会場から追い出されるだけならまだしも、イベントを台無しにした損害賠償とか払わないといけなくなるかもしれないし、チケットくれたチャランコさんにとつても迷惑で済めばいい方だよ？」

呆れつつも、エヒメは俺に忠告する。

わかってるっーの。賞金に目が眩んだわけじゃねーよ。いや確かに日給300万は魅力的だけど……。それがなきや、とりあえず見とくかくらいにしか思わなかったかもしれないけど……。

けどこんな賞金を出すことは、それなりに規模がでかい大会なのは確実だから、マジで300万の為に無理するつもりはない。

エヒメの言う通り、チャンポンの迷惑になるし損害賠償なんて払え



るわけねーから、エントリーとかで怪しまれたらすぐにやめるつもりだし、試合も無理に続ける気はない。

「わかってるわかってる。ばれそうになったら、すぐに棄権して逃げらっつーの」

「うーん……それならいいんだけど……。お兄ちゃん、対戦相手にちゃんと手加減できる自信ある？」

安心させるつもりでそう言ったら、エヒメにはまだ不安材料があったらしく、俺にまた念押ししてきた。

……エヒメ。お前は兄ちゃんをなんだと思ってるんだ？

「おい。怪人ならともかく、人間、しかも犯罪者でもない奴をぶっ殺すわけねーだろうが」

「うん。そこはちゃんと信頼してる。疑ったことなんてないよ」

さすがにちよつと凹みつつ不満げに俺が言い返すと、エヒメは即答した。

その答えにちよつと呆気を取られていたら、そのままエヒメは何であんな念押しをしたのかの補足をする。

「でも、武術のプロとお兄ちゃんは戦ったことがないでしょう？」

タンクトップマスターさんが言ったように、お兄ちゃんの攻撃を全部避けて受け流してカウンターで返せるけど、体の丈夫さは普通の人間かそれよりちよつと上くらいの人相手に手加減できる自信ある？」

「あー……確かに。ちよつと自信ないかも」

言われて納得。

確かに俺は殺すわけにはいかない、本気を出すわけにもいかない、そのくせいつもの普通の人間を相手にするくらいの力加減じゃ手も足も出ないなんて奴とは戦ったことがないわ。

あのおっさんの言う通り、武術っていうのが一撃必殺を得意とするおっさんや俺の天敵なら、俺がフルボッコならまだしも、うっかり手加減間違えてただ試合に出ただけの一般人をいつもの怪人みたいにしてしまう可能性は確かに低くない。

「ま、試合だから『あ、これいつも以上の力出さなきゃ無理だ』って思ったらすぐに棄権すればいいだろ。」

ってというか、その辺のことを知るために出るんだから、それを理由に辞めたら意味ねーだろ」

「それもそうだね」

エヒメに言われて俺も不安になったが、そもそも俺が武術の強い奴に当てるはあるかってチャンポンに訊いたのは、そういう相手とはどう戦ったらいいかを知るためだ。

エヒメの友達かもしれないガロウって奴相手にぶつつけ本番するわけにはいかないからそう言うくとエヒメも納得して、ついでにすぐに棄権するって言う宣言に安心したのか少し笑った。

「うん、わかったよ。でも本当に、無理も無茶もしないでね」

「わかってるわかってる。約束するよ」

約束するといえはやつとこいつは完全に安心して、「じゃ、先に帰っておくね。あんまり遅くならないでよ」と言って、レポートで帰る。エヒメが消えてから、俺はゴーストタウンから背を向けて歩き出す。

にしても、カツラってどこに売ってるんだ？

なんかあれを意識したら負けだと思って、売ってる店が目に入っても頑なにそらしてきたから、こういう店を探せばいいかさっぱりわからん。

つーか今回のことでしか使わねーんだから、本格的な高い奴はいらねーんだけどな。

\* \* \*

色やら髪型やら値段が手ごろなカツラを求めて、日が暮れても町の中をブラつきながら俺は、昨日のエヒメの話进行を思い出す。

「いい子なんだよ。私の知ってる『ガロウ君』は」と、エヒメは何度も言ってた。

ヒーロー狩りなんかするような子じゃ、あんな酷いことを出来るよ。うな子じゃなかったと、あいつ自身が怪我をしたみたいな痛そうな顔で、何度も言い続けた。

自分に言い聞かせているというより、あいつは何かをひどく後悔してた。

あいつの親友に、ミラージュのことを何も言えなかった時みたいな顔をしてた。

どうしてそんな顔をしながら、何に後悔しているのか。

どうしてその「ガロウ君」が、ヒーロー狩りだのなんだの出来るような奴じゃないと、今も信じてるくせに、「人間怪人」がただの同名だと思えないのかが、わからなかった。

「……あの子、ヒーローが嫌いだったの。怪人が、悪役の方がかつこよくて好きだって……。」

『人気者が勝って嫌われ者が負けるなんて、悲劇だ』って、あの子は言ってたの」

そう言われるまで、わからなかった。

教えられて、あいつがあんなにも何を悔やんでたのかがわかって、さっそくエヒメの「話を聴いてあげて」って頼みを果たせなくなりそうだった。

何、ウチの妹に抱え込まなくていい罪悪感を背負わせてるんだよ？

って八つ当たりしそうだわ、俺。

……どうしてあいつはマジで、いらぬものばっか背負って抱え込んで手放さないんだか。

お前の後悔は、そこか。

「ガロウ君」ってやつがいい子だってことを今も信じて疑わないのに、同じ名前の別人だって思えないのは、そこか。

お前は、いつかそいつがいい子だからこそ、いい子そのまま「怪人」になるかもしれないことをわかっていたのに、何もできなかった、何もしなかったって思っただけで悔やんでるのかよ。

「人気者が勝って嫌われ者が負けるなんて、悲劇だ」か。

確かにそうだな。

同じようなことを考えたこともあった。

中学に上がった頃とか、俺には俺の言い分があるのに教師やクラスメイトは何も聞いてくれなかったことか思いだしたじゃねーか。

まあ、あれは今思えば普通に俺が悪い部分の方が多いけどさ。宿題やってこなかったとか、呼び出されてたのに遅刻して来たとか。

けど、したくなかったからやらなかったんじゃないで、本気で存在を忘れてたから頑張つて昨日と今日の分の宿題をちやんとしようとしたのに、「この遅れは一生取り戻せない」って言われたら訳わかんねーし、それを普通に正直に答えたら「教師を舐めるな」って何なんだよ？

未だにあの教師の言い分は理解できないで、理不尽だと思う。

あの教師、俺みたいに禿げろ！ いや、俺みたいにいっそツルツルじゃなくて、うぶ毛みたいな貧弱な毛がちよぼちよぼ残ってる、一番カッコ悪いのに諦めがつかないタイプの禿げになれ！ とか割りとは本気で思うくらいに、今もムカつく思い出だ。

ただ、俺は嫌なことはさっさと忘れるタイプだ。

それで、ヒーローやってる立場で言うべきことじゃねーけど、別に優しくもない。

守る相手を選ぶつもりはねーけど、エヒメとかジェノスとか無免とかを守るのと、俺の事をハゲとか言つてついさっきまで馬鹿にした奴を守るのは、さすがにやる気が全然違う。後者の場合、守るのはさすがにそんなんでも目の前で死んだら後味悪いから見捨てられないだけで、そいつが怪人の血や内臓でもひっかぶったら、「ざまあー！」と素で思う。

そんな俺だから、ムカつくことを言われてもそれが納得がいかないうる理不尽な言い分でも、「うるせーな」で終わらせて、そういう奴は俺の話は聞かないんだから俺だって聞く必要はねーだろとか思つてろくに話を聞かずにすぐ忘れるから、ストレスもあんまりない。

……それが、出来ない奴だったんだろうな。

エヒメは言った。

優しく、真面目な子だったって。

きつとそいつは、俺と似たような体験をした。

俺よりひどかったかもしれないし、傍から見たらずっと軽い、些細なことだったかもしれないけど、まあきつと何か理不尽な目に合わされたんだろう。

それを俺みたいに忘れてスルーして、「言いたい奴は言わせておけ

ばいい。俺は俺で好きなことをする」って考えが出来ない、優しい奴だったんだろう。

俺とは違って相手の話をちゃんと聞いて、大真面目に受け取って考えてどうして相手がそんなことを言うのか、自分はどう思っているのか、自分はどうしたらいいのか。

そういう面倒くさいことを考える奴だったんだろうな。

バカな俺でもわかる。そんなことをしてたら、自分の意見を言う前にパンクしてぶっ壊れるってのが。

エヒメがそういうタイプだ。

だからあいつは今、不安で仕方がないんだ。

そいつがどんな破滅に向かって行ってるのかが、あいつには想像できるんだろう。

傷ついて考えて傷ついて考えて考えて考えて、考え抜いて傷つき抜いた先の答えが何故か「人間怪人」やら「ヒーロー狩り」なんて迷走してどうしてこうなった？ な結論じゃ、本気でそいつは救われない。

始まりは、自分を傷つけた相手さえも受け入れて、分かり合おうとしたことなのだから。

だからエヒメの頼みごとをきいてやりたいし、俺だってそんな奴を「怪人」と呼んでぶっ殺すのはもちろん、戦いたくない。

……けどな、ぶっちゃけた話、俺の考えた通りだとしたらこれ、話を聴く程度で何とかなるもんか？

エヒメと同じタイプならそれこそ、更生するのに年単位かかるんじゃないかね？

まあ、だからと言って何も聞かずに問答無用でブン殴ったら、それこそ何も解決しない。

例え何年かかっててもまずは話を聴いてやらないと何も始まらないだろうから、エヒメの信頼を取り戻す兄貴の面目躍如も兼ねて、真面目にやるとすつか。

と言っても俺の考えは見当はずれかもしれないし、そもそもやつぱり同じ名前の別人って可能性も別に低くないはずだから、とりあえず

今は「人間怪人」の事よりも明日の試合の事を考えよう。

「あー！」

グダグダとした考えに結論を出して切り替えたタイミングで、こんな時間まで探してたお目当てのものを発見する。

「ようやく見つけたー！」

デイスカウントストアの店頭に並んだ、パーティー用のカツラを見て思わず声上がる。

やっぱりこういうものを探すなら、こういう何でも屋的な店だな。安いし。

「探したぜ……」

しかも髪形も色もちょうどいい感じのが一つだけあるわ。

色は少しチャンポンより茶色っぽい気がするけど、まあそこまでこだわる必要もねーか。

よし、変装用のカツラはこれで決定だな。

……決まったのはいいんだけど、何か前に立ってるにーちゃんがどいてくれねえな。

何を悩んでるんだよ？ 一発芸でもやらされんのか？ そのカツラは選ぶなよ。っていうか、取れねーからどいてくれよ。

ちようどそう頼もうかと思つたタイミング、前のにーちゃんが振り返つた。

「えっ？」

同時に、何故か俺の肩におもつきしチョップをかましてきた。

「……何すんだ。誰だテメー」

別に痛くもなんともねーけど、さすがに出会い頭どころか振り返りざまのチョップはムカついた。

「カツアゲする気か？」

結構ガタイが良い奴だから俺に入れた一撃に自信があつたのか、ケロッとしてる俺を見てめっちゃビビってるにーちゃんの首筋に俺もチョップを落としておいた。

「買ひ物の邪魔すんな」

カツアゲしてきたにーちゃんをとりあえず寝かせて、俺は目当ての

物を買う。

その後、店を出てもにーちゃんはまだ気絶してたから、他の通行人の邪魔にならないように、端にでも寄せておいた。季節柄、まだ外で寝ても凍死の心配はねーだろう。

\* \* \*

もちろん、俺は気付いてなかった。

この時、俺は盛大にエヒメとの約束を破ってしまったことを。

って言うか、気付けるか！ この時のカツアゲしてきたと思っただにーちゃんが、「ガロウ君」だなんて！

俺、悪くねーよな！ 仕方ないよな、あの状況は!?

けど、ごめんエヒメ！

話聞かずに問答無用で殴っちゃった!!

君が確かに好きでした

夢を見た。

起きたら忘れるような、淡い夢を。

昔のことが断片的で、繋がっているようで繋がっていない夢を見た。

二度と見たくない、覚えておきたくない、夢だった。

……失えない、「夢」だった。

\* \* \*

図書室の隅で、本を読んでいた。

本が特別好きだと言う訳じゃない。ただ、隠れていたかっただけだ。

だって何もしないで教室にいたら、たっちゃん達がまた「ヒーローごっこしようぜ」って言うってくる。

ヒーローごっこは嫌いだ。だって僕はいつだって、怪人役しかやらせてもらえない。

それから、たっちゃんやさぶちんやよっちゃんが攻撃するのを避けたら怒られる。

ジャングルジムの一番上から飛び降りて蹴られたら、大怪我するに決まってるから避けたのに、そのことは謝ったのに、さぶちんは僕を押しさえつけて、たっちゃんは僕の顔を何度も踏んだ。

もう嫌だ。もう怪人役は嫌だ。ヒーローごっこも嫌だ。

だから、休み時間のたびに図書室に行くようになった。たっちゃんは漫画以外の本は嫌いだから、ここにいたらきつと見つからない。

ヒーローごっこに誘われないで済む。

だから、ここでずっと本を読んだ。

読み終わった本を本棚に直して、新しく面白そうな本はないか探す。

昆虫図鑑は全部見ちゃったからどうしようかと思って何気なく見上げてみたら、本棚の上の方に「昆虫のなぞ」って本があった。

それに興味を持ってその本を取ろうと背伸びするけど、チビの僕



じや届かない。

椅子か何か持ってきたらよかったんだけど、面倒くさいなと思つてピョンピョン飛び跳ねて取ろうとしてたんだ。

そんなことをしてたら、女の子が椅子を持ってきて俺のすぐ横に置いてその上に乗つて、本を先に取つた。

「あ……」

それを見て、言えたことはただそれだけ。

僕が先に見つけたとか、僕が読みたかつたとか、言えなかつた。

当たり前だ。ちよつとした手間を面倒くさがつて、先に取られたんだ。言う資格なんかない。

だから、諦めて他の本を探そうとした。

探そうと、したんだ。

………でも

「はい。ガロウ君」

「え？」

他の本を探そうとした僕に、その子は自分が取つた本を差し出した。

ポカンと見返した僕に、その子は首を傾げて言った。

「あ、もしかしてこの本じゃなかつた？ どれ？ どの本が、読みたかつたの？」

……よく見たら、女の子に見覚えがあつた。

少し前に「縦割り学級」っていう、他のクラスや学年の人たち話したり遊んだりしようっていう1年に1回のイベントがあつて、そのイベントで同じグループになった一つ上のおねーさんだった。

同い年の子にも、年下の子にも自分から話せなかつた僕に、色々と話しかけてくれた人だった。

かくれんぼでじゃんけんに負けて鬼になつたのに、僕にむりやり鬼を代わらせようとした6年生に「じゃんけんでもう決まつたのに、ずるい」って言つてくれた人だ。

話しかけてくれたけど恥ずかしくつて、下の学年の子がすごくおねーさんに懐いてずっと離れなかつたから、「ありがとう」も言えない

でイベントが終わっちゃったことをずっと後悔してた。

……僕の事なんて、僕の名前なんて覚えていないと思ってた。

僕は、もう一度椅子の上に乗ったおねーさんの服の裾を掴んで言った。

今度は、言えた。恥ずかしくって、心臓が爆発しそうなぐらいドキドキしたけど、ちゃんと言えた。

「あ、……ありがとう。ひいちゃん」

おねーさんに懐いてた下の学年の子たちが呼んでた呼び方を、僕もずっとしたかった。

おねーさんは、……ひいちゃんは僕がいきなりそう呼んでも怒らないで、笑って言ってくれた。

「名前、憶えててくれたんだ」

……ああ。

あまりに些細で、何気ない、ありふれた出来事だ。

「たかが」で済まされるような、価値なんか無いに等しいものだ。けど、それでも十分だろう。

「恋」だの「愛」だの、そういうものになるには足りない、こんなちっぽけなものでも……

「好き」になるきっかけとしては、十分すぎた。

\* \* \*

「ねえ、ヒーロー協会って儲かってるんでしょ？」

「バカなこと言っちゃいかんよキミ」

ケバい女と、小太りのオッサンが何かを話してる。

オッサンは、ヘラヘラ笑って言っている。

「協会の財源は基本的に民衆からの寄付なんだから、そのお金は平和のために有意義に使われてね、平和維持にはウンとお金がかかるんだよ。」

足りないくらいだ。儲かっちゃいないさ」

ご立派な御託を並べ立てているが、オッサンはキャバ嬢だかホステスに貢ぐのも遊ぶのも平和のためと嘯いている。

拳句の果てに、「ヒーローは美しくあるべき」とはほざくただのナル

シストにしか見えねえアマイマスクをエサに、「ほっぺにチューしてくれたらな」とか言い出した時は、もはや笑えてきた。

いい気分だったのが台無しにされたから、だから腹いせに殴った。それだけだ。

それだけなのに、ジジイは言った。

「女子供には案外優しい所があるんじゃない」

道場で座禅を渋々組まされていたら、ジジイは飄々と笑いながら言った。

「そんなんじゃないよ」

殴ったのは、ただムカついたからだ。ただでさえ嫌いなヒーローだの正義だのを、わかりやすい私利私欲の言い訳にしてるおっさんにムカついただけだ。

明らかにセクハラを受けることが仕事の女なんか、どうでもいい。何も関係ない。

そういう返せば、ジジイは「何じゃ、つまらん」と本気でつまらなそうに吐き捨てる。

「おヌシはまだ18じゃろう。チャランコのようにモテる為に武術を学べとは言わんが、まったくおなごに興味を持たぬのは、それはそれで不健全じゃよ」

お前は弟子に何を勧めてるんだ、クソジジイ!!

思わず座禅が崩して立ち上がって怒鳴ろうとしたら、ジジイはおもつくそ俺の背中を素手でぶん殴って再び座らせる。

「集中力が足らん」って、誰の所為だ!!

俺が睨み付けて抗議しても、このジジイはやはり柳のように、流水のように受け流す。

「しかしガロウよ。おヌシは本当に好きになったおなごの一人や二人おらんのか？」

守りたい人でもいれば、その短気さも暴力癖もどうにかなるじやろ。何なら、見合いでもするか？ ポンブお兄ちゃんにでも頼んで、弟子の娘や妹の器量よしでも紹介してやろうか？」

「黙れ耄碌クソジジイ!!」

俺が何かを言えば言うほど、このジジイは面白がってからかっているだけだという事はわかつているが、このクソジジイはいらん所ばかり年の功を發揮して、俺が無視できねえ隙をチマチマ突いてきやがる。マジでうぜえ。

黙れよ。10代に見合いを勧めんな。

そんなもんに興味はない。

守りたい人なんていない。

……………守りたい人なんて、もう……

\* \* \*

「ガロウ君。どうしたの?」

先生は僕の話聞いてくれなかった。

先生だけじゃない。たっちゃんもさぶちんもよっちゃんも、クラスの皆も、そしてきつと家に帰ったらお父さんもお母さんも、僕の話なんか聞かずに、僕を叱るんだ。

遊びと現実の区別もつかないのかって、遊びでマジギレした僕がおかしいって。

僕が暗くて友達がいなくて嫌われ者で、たっちゃんは人気者だから。

だから僕が全部悪いことになるんだ。僕の言いたいことや、僕の考えなんか、どうでもいいんだ。

皆そう言って、僕の言葉なんて聞いてくれなかった。

なのに……………ひいちゃんは……………

「どうしたの? どうして泣いてるの? その怪我はどうしたの?

痛い? 大丈夫?」

ひいちゃんは、泣いてる僕にハンカチを貸してくれた。

たっちゃんやクラスメイトに殴られて蹴られた怪我に、絆創膏を貼ってくれた。

それから……………それから——

「……………たっちゃんがいつも……………僕を怪人役にするんだ。嫌だって言っても、……………いつも僕を……………」

たっちゃんの攻撃を避けたら……………みんな僕を押さえつけて殴る

んだ……。たつちゃんは人気者だから……。皆が僕を悪いように言うんだ。

僕は……。僕は確かに暴れたけど……。でも……。僕は……。僕は……。ひいちゃん……。僕は………」

ひいちゃんは先生みたいに、僕の言いたいことを途中で遮ったりしなかった。

たつちゃんやクラスの皆みたいに、僕の言葉を笑わなかった。

お父さんみたいに、納得のいかない答えを「そういうものだ」で終わらせなかった。

僕の話全部聞いてくれた。

全部ちゃんと聴いてくれた。

それから、言ったんだ。

「ダメだよ。ガロウ君」

ひいちゃんは、僕を叱った。

「そういう時はね、暴れるんじゃない。『助けて』って叫ぶの」

僕が怪人だからじゃない。僕が嫌われ者だからじゃない。僕が悪いからじゃない。

……。僕が、間違えたから。だからひいちゃんは、僕を叱った。ひいちゃんはその間違いを、教えてくれたんだ。

「暴れちゃったら、暴力を振るっちゃったら、どんな理由があってもその分はガロウ君が悪いことになっちゃうの。だって、ガロウ君だってどんな理由があっても、殴られるのも蹴られるのも嫌でしょう？　それは、誰だって同じ。」

相手が悪いのなら、絶対に暴れちゃダメ。相手が悪いってことを先生たちがちゃんとわかってくれても、相手を叩いちゃった分だけガロウ君も悪いって叱られちゃうから。相手が何もしなかったら、ガロウ君だって暴れなかったのに、そんなことで叱られたら損なだけ。

……。だから、次からはもう絶対に暴れないで。代わりに、大きな声で『助けて』って叫んで」

ひいちゃんは僕の間違いを教えて、僕の悪かった部分を叱って、それから小指を立てた。

指切りげんまんをしようって、言った。

約束、してくれたんだ。

「今日みたいに、学校でなら私の教室にも聞こえるくらいに叫んで。そうしたら、私が絶対に助けに行くから。」

ガロウ君をいじめるなって、たつちやんを叱るから。先生やクラスの皆に、ガロウ君の話を聞いてあげてって言うよ。

学校じゃなくても、公園でもどこでも、酷いことをされたら助けてって叫ぶんだよ。そうしたら、絶対に誰かがその声を聞いてくれるから。

私はガロウ君の声が聞こえたら絶対に、どこにいても駆けつける。絶対にガロウ君を助けるよ。

他の人だって、助けてくれるよ。……少なくとも、言ってくれないとわからない。私も、誰も、ガロウ君を助けられない。

だから、言つて。大きな声で、『助けて』って」

僕を助けてくれるって、約束してくれた。

……ヒーローごっこは嫌いだ。

それは人気者が嫌われ者の弱者を一方的に叩き伏せる社会の縮図だから。

誰が何の役をやろうが自由と言いながら、ヒーローは結局人気者しかやる権利はなくて、僕には絶対に番は回ってこない。

僕は負けるしかなかったんだ。

そういうシナリオしかなかった。……なかったはずなのに……。

……僕はヒーローにはなれなかった。

けれど、ヒーローに助けてもらえたんだ。

……ひいちゃんは、ひいちゃんだけが、僕の大好きなヒーローだった。

\* \* \*

黄金ボールは、俺よりも酒を優先した。

ジョッキを手刀でぶった切つても、酒がもったいねえとわめく酔っ払いだった。

近くの駐車場でやろうと言い出しておいて、路地裏で後ろからパチ

ンコをぶつ放すようなやつだった。

加勢に来たバネヒゲも、場所を変えようとは言わなかった。

逃げ道の限られた場所なら、あいつの必殺技「踏無暴威」<sup>トムボウイ</sup>が優位だからな。

……ああ、そういうえばあいつらは俺が『人間怪人』かどうかの確認はしたけど、訊かなかったな。

『ガロウ君。どうしたの?』

あの子のように、どうして暴れたのかなんて訊かなかった。

『怪人』を名乗る訳なんて、眼中にもなかった。

「やめろ。そんなくだらんことのためにキミ達を集めた訳ではない」

「地球がヤバイ」対策に、裏社会のならず者を集めたヒーロー協会の役員がそう言った。

汚物を見るような目で、俺に「どうして暴れた!?’と訊いておきながら、俺の言い分を全て途中で遮って何も聞きはしなかった先生達<sup>あいつら</sup>と同じ目で、「帰れ」と言った。

「戦車砲パンチ!!!」

信念が信念がとか言ってたおっさんのパンチを全部そのままカウンターで返してやれば、腕の関節が3つくらい増えた。

信念なんか、何の役にも立たない。

そんなもので、怪我をしないなんてありえない。

『やめて!!』

なのに、あの子は立ち向かったんだ。

それしかなかった。信念しか、約束しかなかった。

一つ年上だけど、俺と同じくらいか俺より小柄だった女の子が、何一つ優位なものなんてなかったのに、3対1だったのに、石を投げつけられても、それでも絶対に屈しなかったんだ。

『遊びは、皆が楽しんでなくちゃ遊びって言わない。嫌がる子が一人でもいたら、あなた達のはたただのいじめだ』

石をぶつけられても、あの子はたっちゃんに言ったんだ。

「確かにお前はもう人間ではない。……………クスだ!」

あの子は、言わなかった。

たっちゃんにもさぶちゃんにもよっちゃんにも、「あなた達のしてることをは、悪いことだ」って叱つても、クズだとかバカだとか、悪口は言わなかった。

どんな理由があっても、暴力も悪口も振るってしまえば、言っしまえば、その分こつちが悪いことになるからダメだと俺に教えてくれたから、それを実演してくれたんだ。

例えばどんなに自分が、傷ついても。

『ガロウ君、大丈夫？』

好きだった。大好きだった。

ヒーローなんて嫌いだった。

人気者だけが救われて、弱い嫌われ者が踏みにじられるシナリオが大っ嫌いだった。

圧倒的多数の意志で、俺の言葉なんか押しつぶされて理不尽に消えて、殺されていくしかない世界が大っ嫌いだった。

けど、あの子は……ひいちゃんは俺の言葉を全部聞いて、自分が傷ついても俺を守ってくれた。

俺の「助けて」を聞き逃しはしなかった。

俺が訴えかけたものを、全部拾ってくれた。

俺が欲しかったものを、全部与えてくれた。

大好きだった。大好きな人だった。

だから俺は……、俺は——

『ひいちゃん、僕はひいちゃんの——』

\* \* \*

黒い水が滴っている。

『今日、学校が終わったらお出かけするの！』

少し早いけど誕生日のお祝いをしてもらうんだって、朝、校門前で会った時にひいちゃんは教えてくれた。

お嫁さんみたいに、可愛い真っ白なワンピースがすごく綺麗だった。

……その真っ白なワンピースが、ドロドロに汚れてる。

真っ黒な水が、ひいちゃんの全身を濡らして、汚して、台無しにし



て、ひいちゃんを泣かせた。

……………大嫌いだ。

ヒーローなんて！ 正義なんて！ そんなものは全部、大っ嫌いだ！！

あの子を助けてくれなかったのなら、そんなもの意味が無い！

あの子を泣き止ませてくれないものなんか、大っ嫌いだ！！

どうしてあの子が、ひいちゃんが泣かなくちゃいけない？

どうして、ひいちゃんが助けてもらえないんだ？

俺を助けたからか？ シナリオを無視したからか？

嫌われ者を助ける奴なんか、ヒーローは助けてくれないのか！？

許さない許さない許さない！！

ひいちゃんを助けてくれなかったヒーローなんて、ひいちゃんを否定する正義なんて、認めない。許さない。嫌いだ！

誰もひいちゃんを助けてくれないのなら……

誰もひいちゃんの「助けて」を聞いてやれないのなら……

それなら、俺は……俺は——

\* \* \*

「む……俺は……で何を……」

気が付いたら、ゴミ捨て場だった。ゴミ袋をベッド代わりにして俺は眠ってた。

……な、何でこんなところで俺は寝てんだ？

くそっ！ 昨晚の記憶が曖昧だ。

ただ、たぶん酒は飲んでねえ。

匂いはしねえし、やたらと延髄のあたりが痛むが頭は別にどうってことはねえ。

曖昧だが何人かヒーローを狩ったのは確かなはず。破けた服と、手足の傷が良い証拠だ。

ヒーローと戦って、延髄に一撃を喰らってしまったってところか？

しばらく首を押さえながら曖昧な記憶を掘り返すが、結局曇りガラス越しのような記憶しか蘇らない。

まあ、いい。黄金ボールとバネヒゲ。A級二人を狩ったのは確か

だ。

思い出せないという事は大したことじゃないと俺は言い聞かせ、俺は根城にしている小屋に今日は戻るとする。

とりあえず、手足の応急処置と次の獲物の品定めをしようと思った。

……無理に思い出そうとすれば、思い出したくないものを思い出してしまいそうだったから、俺はわざと考えないようにした。

思い出したくない。自分がどんな夢を見ていたかなんて。

『ガロウ君、大丈夫？』

思い出したくない。

もう、好きであってはいけない人の事なんか。

怪人の俺はもう、あの子の事なんか好きじゃない。好きであってはいけない。

そんな資格はもうないんだ。

## 少しの後悔

ああ、最悪だ。

やっぱり要請なんか無視して、ゼンコの買い物に付き合っただけで良かった。

そんなこと出来るわけがない、無視した方が絶対に後悔することをわかっているのに今更すぎる後悔をしつつ俺は援軍にきたB級とC級に指示を飛ばす。

「突進来るぞ!!」

ムカデ長老とかいう、災害レベルじゃなくてサイズがガチで竜レベルの大怪蟲が道を挟り、その辺の建物を屑ってなぎ倒して俺達に、ヒーロー協会の幹部とその子供を狙って突進してくる。

親子はB級とC級の二人に任せて、俺はその虫の頭目がけて金属バットをフルスイングで叩き墜とす。

あの親子はなあ、正直言って「次、皿をレーンに戻したら殺す」と心に決めたくらいムカつくクソガキとバカ親だ。

そもそも、タンクトップマスターも病院送りにしたヒーロー狩りがヒーローだけじゃなくて協会の幹部にまで手を出したから、不用意に出歩くなつて言われてんのに何でお前ら、「庶民飯が食いたい」つてだけで俺を護衛に着けて出歩いてんだ？

こっちは重大な任務だつて言うから、ゼンコとの約束を後回しにして、そのことでゼンコに怒られた挙句にまたエヒメさんに俺が約束を破ったとかの愚痴を吹き込まれることが確定してまできてやったのに、何で怪人と戦う以上の地獄を味わわねーやいけねーんだよ!?俺が何をしたらって言うんだ!?

いや、エヒメさんならゼンコに何を言われても俺がゼンコとの約束が面倒だったからテキトーな言い訳して破ったなんて誤解はせず、むしろゼンコの怒りを宥めてくれるから俺にとつて好都合っちゃ好都合だけど、それでもエヒメさんが知ってる俺の情報がゼンコの愚痴による俺の恥ずかしい話ばかりってのはさすがにちよつと……つて、そこはどうでもよくねーけど今は関係ねえ!!

あー！ くそっ！ ムカつきとさっきの眠気覚ましに気合入れた所為で血が足りねーのと、早く終わらせてーって焦りの所為で自分でも何が言いたいのかわからなくなってきた。

……けどな！ とにかく！ あの親子はムカつく、ぶっちゃけお前をあの親子だと思ってバットぶん回した方が気合い入るくらいにムカつくけどな！

だからと言って、てめーらが殺したり襲ったりしていい理屈にはならねーんだよ！！

俺のフルスイングでも、ムカデの体にヒビどころか久しぶりに殴った俺のバットを持つ手がジンジンと痛むぐらいだが、それでも奴は直撃コースだった顔を避けた。

そこが弱点ってことか。

なら、そこを狙うしかねーな。

\*\*\*

……あー、一瞬意識とんだ。

ここどこだ。ってか、あれがムカデ長老か。結構飛ばされたな俺。まあ、S市の外にまではさすがに放り出されてないからマシか。

しかし、必殺気合い怒羅<sup>ドラゴン</sup>厳し<sup>ト</sup>ばきであれの顔面をしばきまくったけど、あんまりダメージ入った様子ねーな。

けどまあ、他の所をぶん殴った時より手ごたえはあったから俺の性には合わねーけど、ひたすら地道にぶん殴りまくるか。

「あくあ、急いで戻らねえと……」

「な……ちよつと待ちやがれ！ 金属バット！」

面倒な泥仕合いになりそうだなと思いつながら、俺がバット担いでムカデの所に戻ろうとしたら声を掛けられた。

なんだ？ 逃げ遅れた一般人か？

「生きてんなら話は別だ！ ……っははは！ S級2匹目ヒット♪」

逃げ遅れて助けでも求められてるのなら、悪いが面倒だと思つたらそうじゃなかった。そもそもこいつは確実に俺の助けなんかいら

ねえ。

俺とそう変わらねえほどガタイは良くて、なんかところどころ怪我はしてるがそれをろくに手当もせずケロツとした顔でいられる奴は、頼むから逃げるくらいは自分で何とかしてくれ。

もちろん、俺がそんなことを頼む必要なんかなかった。

「こつから先は俺が相手だ。テメエを狩るぜ」

……この時の俺はまだ、相手が一般人だと思ってた。

たまにいる、腕つぶしに自信ある奴が空気読まず俺に腕試しを挑んでくるのかと思ったから、俺はバットでムカデを指して避難するよ  
うに言った。

「……何言ってるんだ、バカ。さっさと避難しとけ。あのムカデが見え  
ねーのか？」

が、その考えは甘すぎた事を即座に思い知る。

背を向けた俺の顔面目掛けて、こいつは躊躇なく突きをぶちかましてきた。

そんなもんを食らうほどふぬけてねーからバットで俺はガードするが、こいつはヒーロー協会にS級になる際に特注で作らせたどんな  
怪人相手でも折れない、曲がらない、変形しないバットに自分の拳ど  
ころか指がピンポイントでぶつかったつーのに、まったく痛そうなそ  
ぶりを見せねえ。

むしろ、余裕を表して薄ら笑いを浮かべてやがる。

……ああ、くそつ！ 俺はバカか。俺が何であるの親子の護衛してた  
のかすつかり忘れてたわ。

「ヒーロー狩りの……、怪人を名乗る人間……。そうか……。テメエが  
タンクトップマスターが負けたっていう……」

「そう、俺がそのガロウだ」

かあ……。よりによつて面倒くせえ時に面倒くせえ奴が出てき  
やがった。

ゼンコ。兄ちゃん頑張るけど、めっちゃ頑張るけど買い物いけな  
かったらごめん。この埋め合わせは絶対にするから、せめてエヒメさ  
んに報告するのは今日のことだけにしてくれ。

俺が昨日、お前が見てたアニメの最終回で号泣したこととかは暴露しないでくれ。頼む。

\* \* \*

あー、くそっ！ 最悪だ最悪!!

ただでさえ血が足りねーっのに、こいつは何なんだ!?

俺のスイングをのらりくらり躲して出来た隙に攻撃をぶち込むくせに、なんか手加減でもしてんのか致命傷は与えて来ねえ。

「その出血量……意識を保つのがギリギリのはず。それと……何か所か骨折もしているな。その状態で倒れないのはヒーローの意地か?」  
しかもこうやって合間合間に訳のわかんねーことをなんかぐちゃぐちゃ言っただけ攻撃をやめるし。

こいつ、マジで何がしたいんだよ?

こいつの訳わかんねー言動が気にならねーとは言わねーけど、気にしてる余裕はねえよ。

お前の後に巨大ムカデが控えてんだ。チンタラ時間かけてる暇はねーんだよ。

すぐにでもぶっ倒れるとでも思ってた俺が、いつまでも倒れない事に「どういう原理だ?」とか言い出すから、「気合いだ気合い」と答えてからついでに言っただけでやると、ようやく自分からケンカ吹っ掛けておきながらどつか覇気がなかったこいつが、真正面から俺を見た。

……マジでこいつは何だ?

話を聞いた時は自分が一番強いと思ってたただのバカかと思っただけ、こんな時に空気読まずケンカ売ってきたからそうだと確信した。だから俺の中で見逃さないものの中に、カツアゲと並んでこいつが、ヒーロー狩りが加わった。

確信した……はずなのに、どうしてか今のこいつを見るとその確信が揺らぐ。

俺がお前なんか相手にしてないと言えど、こいつの顔は強張った。確かに、ムカついたように目を見開いた。

けど、その見開いた眼は……少しだけ嬉しそうに見えた。

俺が相手にしていないことに対してはムカついているが、俺がまだあ

の大ムカデを倒すことを諦めていない事を喜んでるように見えたのは、俺の気のせいかな？

「いつまでその気合いが保つか、ちょっと遊んでやるよ」

そう言っただけでフェンスから飛び降りて地面のタイルをさらにその下のコンクリートと踏みつぶしてマンホールを跳ね上げたかと思ったら、そのまま俺に全力投擲。

それをバットでまっすぐに打ち返したが、その先にヒーロー狩りは既におらず、俺の背後に回ってシルバーファングみたいな乱打をぶち込んで来た。

うん、気のせいだわ！ 俺の目の錯覚だわ間違いない！！

何が「遊んでやる」だ。何が「死ぬまで続ける気」だ。

遊びじゃねえんだよ！ 全部！！

今日、呼び出された任務はクソみてーな奴等の子守りっていうクソそのものな任務だったけどな！ 俺が無視してたらあの寿司屋の時点であのバカ親子は死んでたかもしれないねーんだ！！

俺がこうしてお前の遊びに付き合わされている間に、あのムカデが暴れ回って人が死んでるかもしれないんだ！！

俺が！ やらねーと！ 取り返しをつかない事が起こったかもしねーんだよ！！

俺さえいけば簡単に何とかなかった事が、取り返しをつかない事として今も起こってるかもしれないねーんだよ！！

遊びで取り返しをつかないもんを生み出してるんじゃないよ！

「死ぬまで」なんていうお気楽な発想で、ケンカ売って時間を取らせんな！！

「俺はそんなに甘くないよ。勝つまでだ」

俺の気合いでぶん回し続けたスイングを嘲笑ったヒーロー狩りに、バットを構え直して答えてやる。

死ぬまで？ ふざけんな。俺はぜってえに死なねえよ。

俺がここで死んだら、こいつを倒してもムカデを倒せずに死んだら、俺は何でゼンコとの約束を後回しにして、楽しみにしてたゼンコを怒らせて悲しませたのかわからなくなる。

怒って悲しんで、それでも我慢してくれたあいつの我慢が無意味になる。

だから死なねえし、負けねえよ。

あいつが我慢しただけ、ゼンコが我慢してくれる良い子だったからこそ世界は救われた。

そう言っただけが傲慢するために、ゼンコが自分を誇れるように、その為に俺は勝つまでやめねえよ。

「……それはそれは、殊勝なことだ。」

ますますテメーの心が折れる瞬間みたくなっ……」

最後まで言い切る前に、脳天にバットを振り下ろす。

テメーなんぞに俺の心が折れるかバーカ。

折れてたまるもんか。

『失敗の責任なんて、大きい小さい関係なく誰にだって取れない。あとからプライゼロにすることや、結果として良い方向にもっていくことが出来ても、失敗した時、何かが傷ついたり損したり、永遠に失われてしまったことは覆らない』

あの人はそう言っただけ、立ち向かったんだ。

足を震わせてながら、終わった後に腰を抜かすほど一杯一杯だったのに、それでもあの人は真つすぐあいつを……アマイマスクを見据えて、一歩も引かずに言っただけだ。

『「死」という一番取り返しつかない失敗を、「正義」だなんて語らせない！』

「今」を「結末」になんかさせない！

結果が大事なら、なおさら「今」を大事にしろ！」

取り返しのつかない事をさせない為に、誰もあれ以上加害者にならないようにする為に、あの人は立ち向かった。

『何かを「悪」と決めつけて排除こそ、責任を、この先に起こりうる最悪から目を背けて、もう大丈夫と自分を騙したいだけだ！』

……それはいつか必ず、破綻する。人は自分に嘘はつけても、隠し事は出来ない。

いつか必ず、あなたが犯した「取り返しつかないこと」は、あな



たの全てを奪って潰して壊して焼き尽くして殺し尽くす。

だから、逃げるな。現実から、現在から、悪や正義で二分なんか決してできない、灰色から。

その灰色を、白か黒かを決定づけるのは、私たちが『今』行う、行動次第なんだから』

あの人は……エヒメさんは生き残った宇宙人だけじゃなくて、あのクソムカつくアマイマスクも救おうとしたんだ。

自分が殺されそうになっても、バカにされて何もわかってねえ言いがかりをつけられても、それでも救うために立ち向かったんだ。

折れなかったんだ。最後まで戦い抜いたんだ。

だからアマイマスクにあの人は勝ったんだ。

だから……俺が折れる訳にはいかねえんだよポケッツ!!

「必殺……気合い……野蛮トルネード!!」

\* \* \*

シルバーファングの一番弟子っていう話、忘れてた。

まさか野蛮トルネードを全部受け流されるとは……。

けど、俺の腹に張り手だかなんかをブチ込んで俺を吹っ飛ばした事で、やっと隙が出来た。

おい……。まだ終わってねーよ。

言っただろ？ 死ぬまでなんてお気楽な考えでじゃねーんだよ。

勝つまで、俺はやめねえよ!!

「お兄ちゃん!!」

俺をぶっ倒したと思って背を向けて歩き出すヒーロー狩りに、後ろからバットを脳天にぶち込む気だったがいきなり呼びかけられたその声で、俺は振り下ろしたバットを気合い全力で止める。

……何で……ここに？

完全な不意打ちを取ってたのに、それでも迎撃態勢を取ろうとしたヒーロー狩りは俺が寸止めたことが理解出来ねーのか、ポカンとした顔で固まる。

……やっぱ、こいつなんか変だ。  
今なら俺をもう一回、今度こそとどめを刺せただろうにこいつは何  
もしない。

ただ驚いて頭が真っ白になって動けないなんて可愛らしいもんな  
ら、俺はこんな苦勞してねえよ。

こいつは絶対、訳わかんねえなりに反射で迎撃くらい出来るはずな  
のにそれをしない。

おかしい。変だ。……けど、正直その訳のわからなさに俺は今、助  
けられてる。

「バッドお兄ちゃん」

「……チツ」

何で、ここにいるんだよ？

やめろ、来るな、呼ぶな。こいつの訳の分からない硬直はいつまで  
続くのかもわからねーんだから、お前は巻き添えに遭う前に逃げろ!!  
そんな俺の心の声なんて口に出してたって聞く訳ないよな、お前は  
!!

「何してんの？ その人だれ？」

「妹……？」

ヤバい。気付かれた。ヒーロー名じゃなくて本名だったから気付  
かれないかもって期待してたが、やっぱ無理だった。

だから俺はなりふり構わず叫ぶ。

「ゼンコー！ 来るな!! こいつは……ブツ!!」

「お兄ちゃん!!」

今度は俺が最後まで言う前にぶん殴られて黙らされる。

ああ、クソっ！ ゼンコー！ 頼むからマジでさっさと逃げてくれ!!

頼むから……俺にもうこれ以上、お前との約束を破らせないでく  
れ。

「寸止めの理由は知らねえが、絶好のチャンスを逃したな」

守るから……。買い物もピアノの発表会も破ったけど、これだけは  
守るから。守り抜くから。

お前の前で暴力は見せないって約束だけは守るから……。

「もし……さっきのを食らってたら勝負はわからなかった。だがこれでもう完全にお前に勝ち目はねえ！」

だから、だから早く逃げてくれ！」

「次はきつちりトドメを刺させてもら……」「ダメ!!」

ゼンコは俺とヒーロー狩りの間に割りこんだ。

俺の盾になって、ヒーロー狩りに向かって啖呵を切る。

「お兄ちゃんは私の前で暴力を見せないって約束したの！ だからもう終わり！ 終わり!!」

あの日の……アマイマスクに立ち向かったエヒメさんのように……。

……ゼンコ。エヒメさんみたいなおねーさんになりたいって言うてたし、俺もなれって言うたけどな……、そういう所は似なくても良かったんだぜ？

……似ても、文句なんてねえけどさ。

文句はない。あの人のあの震えながらも、怯えながらも一步も引かなかったあの姿に、あの生きざまに、肯定してやれないけど、「そんな生き方はやめろ」って言うてしまいたいけど、それでも確かに魅せられて惹かれたのは間違いないから。

けど、……一応ヒーローだったアマイマスクと違ってこいつにはあの人と同じ意地が通用しねえんだよ！

……そう思った。

なのに、こいつはやっぱり訳わかんねえ変な奴だった。

間に入ったゼンコごと俺を殴り飛ばしはせず、けれどゼンコの体格じゃ俺を庇いきれないからゼンコを避けて俺に攻撃することだっでしょうと思えばできたはずなのに、こいつはしなかった。

こいつはさっきの、ゼンコに呼びかけられた俺みたいに全力で振り下ろしかけた拳を空中で止めて、そして目を見開いて固まった。

信じられないものを見るような目で、俺を庇うゼンコをしばらく見下ろし続けて、それからポツリと呟くように、何かが零れ落ちたように言った。

「……………ひいちゃん？」

その呟きに、思わず俺は「……はあ？」と声に出した。  
なんか……人の名前……それもこいつには似合わない滅茶苦茶可愛らしい呼称がでてきたんだけど……俺の聞き間違いか？

俺の上げた声でヒーロー狩りは自分の失言に気付いたように舌を打って、「ひいちゃん」という誰かをなかったことにする。

「何でテメエらの家庭内ルールに合わせなきゃならねえんだ？」  
なかったことにしてゼンコと俺に言う。

そうだ。こいつに俺らの約束なんて、それがどんな思いで交わして守り抜こうとしているかなんて関係ない。

俺はその約束を破らないとお前を守れない。だから、頼むからこいつの気が変わらない内に、お前を「邪魔」と認識してゴミを捨てるように排除しようと思っていない内に、逃げてくれゼンコ。

そんな俺の想いを込めて「危ないぞ」とゼンコにいうが、この強情娘は聞きやしねえ!!

「ケンカ終わり!!」

そう言い張って、俺の前から引かないゼンコをヒーロー狩りは、ガロウはやけに冷めた目でしばらく見下ろし、無造作に右手を振り上げて……

「……そう言えば俺も番犬マンを狩りに行くところだった。

俺だってバカに割ける程、暇じゃねーよ」

ポリポリと自分のうなじを搔いて、萎えた様子でんなこと言い出した。

ああ？ テメーが吹っ掛けてきたケンカだろうが!!

思わずそう言ってせっかく納まりかけたケンカを続ける所だったが、ゼンコに止められたのとあいつはマジでもうこれ以上俺と戦う気がなくなったのか、「命拾いしたな、金属バット」とか捨て台詞を吐きながらも去って行く。

ムカつくしやっぱり訳わかんねー奴だったけど……、正直助かった。

「つーか、ゼンコ。マジで何でお前がここにいんだよ？」

「電話でネズミ寿司だつて言ってたから、近くまで来てみたの。そしてたら怪獣が出てきたから……」

「あっ!？」

ゼンコに軽く説教しつつ訳を訊いてみたら、また俺は肝心なことを忘れてた。

「しゃべってる場合じゃねえ……! あの子がヤベエ状況なんだつた! 急がねえと……」

やべえ、ムカデとムカデに狙われてる親子を忘れてた!!

ゼンコには悪いが、先に帰ってるように言つて俺はムカデの元に向かう。

が……

「やめよーよお! 死んじゃうよお! 買い物行こうよお!! ……もう!

わからずやつ!!」

ゴン!

……ゼンコは俺のズボンにしがみついて止めてたが、俺に引く気がないと判断した瞬間、俺から金属バットをもぎ取つてそれで俺の頭を殴りやがった。

……ゼンコ。お前、エヒメさんみたいなおねーさんになるんじゃないのかよ?

マジである人見習つて、もっとおしとやかになつてくれよ……。

そんなことを思いながら、バットじゃなくてゼンコの平手でもぶつ倒れたであろう程限界だった俺は、その場に崩れ落ちて意識を手離した。

「……おねーさんが言つてた通りにしちやつたけど、さすがにやりすぎたかなあ?」

幸か不幸か、ゼンコの眩きは気絶した俺には聞こえなかった。

\* \* \*

後悔したくないからしなかった。

あのクソ親子の護衛だって知った時点で、無視して帰ることも考えただけしなかった。

ゼンコとの約束を後回しにしたことも後悔するが、それ以上に俺は無視したことで、誰かが死ぬこと、取り返しのつかない事が起これば後悔することをわかっていなかったから。

絶好のチャンスだったのに、ヒーロー狩りの脳天にバットをぶち込むのをやめたのだって、後悔しない。

ゼンコの前で暴力はもちろん……相手が何であれ後ろから不意打ちなんてところ、見せるわけにはいかねえ。

綺麗事だけじゃやってられないのはわかってる。

綺麗事だけじゃ救えない。取り返しのつかない事は増えて大きくなる。

けれど……それでもヒーローの仕事は綺麗事を実践して実現することだから。

これはあの人の言葉ではなく新入りだった鬼サイボーグの言葉だが、あの人も……エヒメさんもそうだと信じて疑っていなかったから。

俺もそう思ったから。

だからせめて……ゼンコの前だけでは、ヒーロー協会をクビになっても、自分でやめても、ゼンコのヒーローであることだけはやめたくないから。

だから俺は、貫き通した。

そのことを誇りに思っても、後悔なんて絶対にしない。

……けれど、一つだけ今日の出来事で俺がしたことには後悔がある。

『……………ひいちゃん?』

俺を庇う、俺の盾になってあの人のように立ち向かったゼンコを見て誰かの名前を、似合わねえやたらと可愛らしい呼称で呼んだあいつ。

……あいつに、訊けばよかった。戦う前に、「何でヒーロー狩りなんてしてるんだ？」って。

そうすれば、今も喉に引つかかるように気持ち悪いモヤモヤした疑問が……あいつのまるで手加減しているような言動も、ゼンコに免じて退いたような行動も少しは説明ついたかもしれない。

……あいつの目に映ったゼンコが、一瞬エヒメさんに見えた訳がわかったかもしれない。

誰でもなれる

「誰かあ!! 助けてくれええええ!!!  
!!」

声が聞こえた。

「怪人があ!! ここに怪人がいるんだ!!! すごく悪い奴が……誰かあ  
あ!! 誰かいませんかあああああ!!!」

なりふり構わない、プライドとか意地とかをかなぐり捨てた、子供  
が泣きじやくるような声が聞こえる。

「怪人に襲われているんだああ!! お願いだ! 誰か助けてく  
れーっ!!」

このままじゃ殺される! 助けてくれええええええええ!!」

ただひたすらに、本能による恐怖で言葉さえも失いそうなか、繋ぎ  
とめた理性で振り絞って求める「生きたい」「死にたくない」という叫  
びが聞こえる。

「そうだ……ヒーロー……!! 聞こえてたら……こつちに来てく  
れーっ!! 誰でもいいから助けてくれえええ!!」

ヒーロー!! ヒーロー頼む……来てくれええええ……!!」

ヒーローを求める声が、聞こえた。

だから、私は呼びかける。

私の最高のヒーローに。

「お兄ちゃん!!」

「おう」

呼びかけたただけでお兄ちゃんは何もかもわかっているから返事を  
してくれた。

いつもの覇気がない返事じゃない。久しぶりに聞く真剣な、助けを  
求める人を案じて、怪人の強さなんかどうでも良くてただあの声の主  
を助けることしか考えていない声。

私の一番心配になっってしまうけど一番大好きな声でお兄ちゃんは  
応じてくれた。



そしてその声のまま言葉を続ける。

「けどちよつと待ってくれ！ まだズボン履いてない!!」

その声でそのセリフは聞きたくなかった!!

「お兄ちゃんゆっくり着替えすぎ！ ああ、もう！ 早く履いて着替えて!! っていうかズボンだけでも履いたのならもういいでしょ!」

もう問答無用で連れて行きたかったけど、さすがにパンツ姿やズボンを半脱ぎか半履き状態で来られたら助けられた方がものすごく困惑するだろうから、私はお兄ちゃんを急かしつつ公衆トイレの前で待った。

!!  
っていうか、着替えず道着のまままで良かったんじゃないお兄ちゃん

\* \* \*

「……なんか、身も蓋もない強さの兄でごめんなさい」

ぶっ飛んで来た怪人の生首を前にしてポツカーンとしているスイリユーさんに思わず私は謝る。

なんか、私はもちろんお兄ちゃんも謝る必要なんかないだろうけど本当にごめんなさい。めっちゃ泣いてたのに、お兄ちゃんを案じて、お兄ちゃんが恩人だからみすみす殺されないように止めて、けれど止めきれなかったことを悔やんで私相手に泣きながら謝ってたのに……、お兄ちゃんたらやっぱりいつも通りスイリユーさんたちが手も足も出せなかったゴウケツっていう怪人をワンパンで終わらせちゃったし。

そして戻ってこないし。

あれだな。「外で凶悪な怪人が大量発生して、ヒーローの手が足りない」、「人間を怪人化させる」ってスイリユーさんが言ってたから、そのまま他の怪人たちを倒しに行ったな。

それはいいことだから文句はないけど……、せめていったん帰ってきてスイリユーさんになんか声かけてあげてよ。このまま放置は、訳わかんناすぎて可哀相だよ。

「……いや、彼が無事で奴を倒せたのならそれが一番だからいいんだけどね」

もう反応に盛大に困りつつも、スイリユーさんは私の謝罪に対してそうフオローしてくれた。

ありがとうスイリユーさん、気を遣ってくれて。けどその気遣いがむしろお兄ちゃんのマイペース傍若無人ぶりを際立たせて辛い。

……けど、この人変わったなあ。

ここで何があったのかは、私は知らない。お兄ちゃんがチャランコさんじゃないのがばれて……はないのか、まだ一応。

けど、前の大会の優勝者がマスクで顔を隠して他の選手になりすましてたせいで、今回からマスクや被り物は原則禁止、事前登録がなければカツラも被り物とみなされて規約違反だったから、結局お兄ちゃんは規約違反で失格になっちゃった。

その後、このスイリユーさんがお兄ちゃんに興味を持つちゃったからしばらく試合というか勝手に挑んで戦いは続いてたんだけど……お兄ちゃんも結局「武術」とは「なんか動きがカッコイイもの」としか認識しなかった挙句、スイリユーさんの動きを真似しようとして全然カッコよくないヒップアタックでスイリユーさんをぶっ飛ばしちゃった。

……私、もう一回この人に謝った方が良いな。

まあその謝罪は後ですとして、その後は本格的にチャランコさんじゃないとばれたらまずいからってことでお兄ちゃんは逃げて、私もレポートでお兄ちゃんの元まで跳んで逃亡のお手伝い。……普通に犯罪者だ、私達。

そんなことしてたから、私たちが逃げた後にここで何があったかなんて具体的には知らない。

けど、想像くらいはつく。

スイリユーさんは初めにお兄ちゃんがいつも通りぶっ飛ばしたのが、お兄ちゃんが2回戦で当たった優勝候補のバクザンだって言っただ。そしてこの吹っ飛んできた生首は、初代優勝者だったらしい。

試合に出てた人達はみんなボロボロで気を失ってるけど、スイ

リユーさんと同じくらいボロボロなのはイナズマックスさんとスネックさんだった。

そして二人は、試合の時に着てた自分の流派の道着じゃなくてヒーローとして衣装。武器であり防具である格好をしている。

……あなた達は、戦ってくれたんですね。あの深海王の時のように。

ごめんなさい、名前を素で忘れてて。試合前にお兄ちゃんがボロ出してないか心配で控室を見に行った時、話しかけられて本気で焦りました。顔は覚えてたんですけど名前を綺麗さっぱり忘れてました。

……私、二人に土下座した方がいいな。

それもひとまず後回しにして、私はついついスイリユーさんをじつと眺めていたらスイリユーさんは私の視線とその意味合いに気付いたのか、倒れ伏したまま苦笑した。

「……はは。……キャラが違うって思ってるだろ？」

うん……自分でもそう思うし、今はチョーシこいて彼らを侮辱してた自分が恥ずかしいよ」

私は相当わかりやすく心境を顔で語っていたのか、スイリユーさんは自分でキャラが変わったことも自分の非も認めて力なく笑う。

そう。この人はたぶん善人の部類だろうけど、強いのと要領が良いのが合わさってかなりチャラくて、そして無神経だった。

正直言って私は苦手どころか嫌ってた。

試合前、控室前でお兄ちゃんと話してた私をナンパしたのはぶっちゃけ迷惑だったけど、まだ良い。むしろあれは、一緒に来てたジェノスさんがスイリユーさんを焼却しようとするし、イナズマックスさんも武器である靴を何か履き出すしで、スイリユーさんのナンパをどうにかするよりも二人を止める方が普通に大変だった。

苦手じゃなくて嫌いだって思ったのは、イナズマックスさんとスネックさんの試合での言葉の所為。

何度もお見舞いに来てくれたイナズマックスさんも、深海王を倒すための囷として利用したスネックさんの名前もすっかり忘れてた私が憤るのは偽善でしかないけど、それでも許せなかった。

イナズマックスさんのヒーローとしての矜持に対して、「強さを求めた理由は、テキトーに楽しんで生きていくため」「俺の方が強くてごめんね」と言った。

スネックさんに対しては、ヒーローの存在意義やしてきたことを全否定するような言葉を吐き、それを「自然淘汰」で片づけた。

私はそれが、許せなかった。

この人はイナズマックスさんに本心から謝ったわけじゃない。本心だとしてもそれはそれで酷く無神経な言葉に変わりはないけど、まだマシ。

だってそれは、イナズマックスさんの矜持を尊いと思っっているのは本当だから。

けれどこの人はたぶん悪意というほどではない、友達に対するちよつとした冗談程度だけど「言ったら悪いな」ぐらいはわかっていたのに言った。

相手が傷つくとまではいかなくとも、愉快ではない言葉であることくらいはわかっていたはずなのに言ったこと。

そしてこれはほぼ八つ当たりだけど、スネックさんとの試合の最中、つていうか下手したら今もだけどジェノスさんは怪人退治をしていた。

協会から怪人の出現情報と出動要請が多数届いていたから、ジェノスさんはあんなにお兄ちゃんの試合を観戦するのを楽しみにしてたのに、お兄ちゃんが試合に集中できるように一人で向かってくれたんだ。

ついつい心配しすぎて何もできないくせに余計なことをしでかしてしまう私に、安心させるために「大丈夫です。絶対にすぐ、戻りませぬ。だから俺がいない間の試合を後で教えてください」と笑って言うてくれた。

だから私は今も心配で仕方ないけど、また余計なこととしてあの人に心配をかけて傷つけたくないから待っていたのに……それなのにこの人は、「その場しのぎで平和を演出したって、世界は大して変わらない」と言った。

あの人が……ジェノスさんが戦ってくれているから、あのスーパー  
ファイトという大会は呑気に続けることが出来ていたのに。

例えばスイリユーさん本人が余裕で勝てる相手でも、スイリユーさん  
と出会う前に戦って倒してくれる人がいるからこそ、「テキトーに楽  
して生きる」が出来るだなんてこと想像もせずに彼はヒーローを侮辱  
し、否定したのが許せなかった。

でも……今は……。

「……今は、どう思ってますか？」

倒れ伏すスイリユーさんの傍らに座ったまま、私は訊く。

意識があつて会話出来てるから余裕に見えるけど、一番バクザンと  
いう元人間の怪人に甚振られて酷い傷を負っているから、他の人もも  
ちろんだけどスイリユーさんをとにかく早くテレポートで病院に連  
れて行くべきなのはわかつてる。

だからお兄ちゃんは私をここに置いて行ったこともわかっている  
けど、つついっ私はそれよりも自分のしたいことを優先してしまう。

ごめんね、スイリユーさん。でも、これは貴方が嫌いだからしてる  
嫌がらせなんかじゃないよ。

「今も、『俺の方が強くてごめんね』とか、『その場しのぎの平和を演  
出』って思ってますか？」

私の意地の悪い問いに、スイリユーさんは一瞬きよんとしてから  
また苦笑して答えてくれた。

「……まさか。あんなことを言つた数時間前の俺に助走をつけて蹴  
り飛ばしたいくらいだ。

……俺より弱かったのに、それを俺が思い知らせた、彼らの矜持や  
誇りを踏みにじつたのに、ゴウケツに甚振られる俺を見て嘲笑われて  
も自業自得なことをしたのに、彼らは俺が逃げる時間を稼ごうとして  
くれたんだ。

思い知つたよ、人は暗闇に叩き落とされた時に、どんなにか細くて  
も小さくてもいいから、光を求めるものなんだって。ただそこにある  
だけで、それだけで生きてゆける希望……それこそがヒーローなんだ  
な」

本当に、この人は変わった。

自分がどれほど、無神経に酷いことを言っていたのかをちゃんと知ってくれた。

彼らのもたらす平和がたとえその場しのぎでしかなかったとしても、それがどれほど尊いものなのかを理解してくれた。

「スネックさんとマックス君に謝らないとな……」

だから私は自嘲気味に笑うスイリユーさんに言う。この人は変わってくれたけど、今度は自分を卑下しすぎているから今までとはまた別方向に間違えてしまいそう。

だから、言っておく。

「そうですね。けど、それよりも先に言わなくちゃいけない事がありますよ」

「？」

不思議そうな顔で見上げるスイリユーさんに私は教える。

『ありがとう』ですよ。ヒーローにとって『ごめんなさい』よりもこの言葉が一番の糧に……怪人たちと戦う為の力となるものなんですよ」

周りの評価を求めないお兄ちゃんやジェノスさんも、誰か一人にでもこの言葉を言われたらとても嬉しそうだから。

どっちも表情が乏しくてわかりづらいけど、雰囲気は柔らかくなつて満ち足りたような優しい目になるから。

そしてそれはお兄ちゃんやジェノスさんの二人だけじゃなくて、私の知る他のヒーローさんもそうだから。

だから、自分を卑下しすぎて価値を貶めて謝りすぎないで。

残酷だけど、あの二人よりあなたの方が強いのは事実。それを二人は思い知っているから。

それでもあなたに逆恨みなんかせず、自分自身を不甲斐ないと思つて奮い立ち、あなたが一般人で自分たちがヒーローだからというだけで、あなたも手出しできなかった相手に立ち向かったのだから。

あなたが自分の価値を貶めたら、自分なんて守ってもらう価値なんかなかったと言うように謝ったら、それこそあの人たちは自分のして

きたことに意義も意味も見いだせなくなってしまう。

だからどうか、決して忘れないで伝えて。

あなた達によって救われたことに対するお礼を、「ありがとう」と。そう願って私が教えると、もう一度スイリユーさんはきよとんとしてから今度は苦笑や自嘲の笑いではなく普通に吹き出して笑いだし、自分でダメージを負う。

肋骨とか折れまくってるから痛いだろうに、それでも私の言葉の何がおかしかったのかスイリユーさんは「あいたた……」と言いつつ笑い続ける。

……えーと、私、そんなに変なこと言ったかなあ？

「ははは……。あー……そっかー。……ヒーローの一番の糧は『ありがとう』か……」

笑いながらスイリユーさんはゴロリと仰向けになり、納得したように呟く。

そして私もその呟きで、何であんなに笑ったのかを納得した。

「俺、少しはあの二人があいつに立ち向かう『糧』になれたんだ……」  
納得と同時に、私の心配は杞憂で余計なお世話だったことを知る。  
そっか、言うまでもなくちゃんと助けに来てくれた時にあなたは言ったんだ。

「少しなんかじゃないですよ。……すごく、力になったはずですよ」

この人は無神経ではあったけど、思った通りいい人であったことがハッキリ証明されたのが嬉しくて、私も笑った。

\* \* \*

「ごめんなさい、スイリユーさん。後回しにしちゃって。今から病院に飛びますね」

スイリユーさん本人が、「俺は意識あるから気絶してる奴等を先に運んでやって」と言ってくれたから、お言葉に甘えて私は気絶してた出場者の生き残りの方たちを先に病院に運んで、最後のスイリユーさんに謝った。

そして、彼と肩を組むような体勢になって跳ぼうとした時、スイリユーさんはボソツと言ったから一旦、レポートはやめる。

「もう、引退するしかないと思っただけど……」

もう既に何度も今日はテレポトしてるし、デーブさんとかジャクメンさんとかニガムシさんみたいな巨漢が多かったから一度に跳べる距離が短くなって同じ距離でも回数が増えた所為で、私のテレポトのキャパはわりとギリギリ。

たとえ独り言でも集中力が途切れたら危ないのでひとまず話を聞くことにすると、やはりそれは独り言ではなく私に対する問いだった。

「こんな大怪我したけど……、怖さを克服するのにどれだけかかるかわからないけど……なりたいたい目標が出来たんだ。

——ヒーローになれるかな？ 俺も」

「なれますよ、誰だって」

私の即答にスイリユーさんはポカンと目を丸くする。

きつとお兄ちゃんなら「知らん」の一言で終らせるけど、ある意味私の言葉の方が無責任でお兄ちゃんの方が誠実な答えかもしれないけど、私の答えはそれしかない。

「スイリユーさん。言つときますけどお兄ちゃんは初めからあんな存在自体がバグみたいなの強さ持ってた訳じゃないですからね。むしろ運動神経も別に悪くはなかったと思いますけど、際立って良かった訳でもなかった人ですよ。」

あのゴウケツやバクザンという怪人たちのレベルは知りませんが、絶対に彼らより低いレベルの怪人相手に今のあなたぐらいの怪我を負ったことは何度だってあります。

怪人が怖いのは当たり前です。怖いから、退治しようとするんですから。

だから……決して強くなかったお兄ちゃんだってなれたんですから、なれますよ。ヒーローには誰だって」

スイリユーさんに語りつつも、私の答えは本当は違う人に語り掛けていた。

『ひいちゃん』

お兄ちゃんがこの大会に出ようと思った理由の一端。



怪人だって頑張ってるって訴えて、怪人に憧れていたあの子。

怪人に憧れていたけど、キラキラした目であの子は確かに言ってくれた。

『ひいちゃん、僕はひいちゃんのヒーローになるよ!!』

どうしてあの子がそう言ってくれたのかも私はわかってない。それくらい、あの子とは友達だと思っっているくせに繋がりが薄かった。

それでも、この答えは本当。

あなたがそう言ってくれたのが嬉しかったのは、今も変わらない本当だから何度だって言うよ。

断言する。

「なれますよ。誰だってヒーローになれます」

嫌われ者だからヒーローになれないなんてことはないよ、ガロウ君。

だってあなたは嫌われ者じゃない。

私はあなたの事が好きだから……、なれるよ。

「……そっか。彼も……サイタマ君も弱かった時期があるのか。なら、自信が持てるな」

私の言葉は他の誰かに向けた無責任なものだったけど、それでもスイリューさんは納得してくれた。

そして「ついでにエヒメちゃん、サイタマ君に伝言をお願いしますいい？」と言われたので私は安請け合いです。

「弟子にしてくれないか？ ってサイタマ君に伝えて欲しいんだ」

「あ、絶対に無理です。伝言するまでもなくお兄ちゃんは断りますし、あとぶつちやけ私、あなたが苦手なのでなって欲しくありません」

けどその安請け合いは速攻で破棄してしまった。ごめんスイリューさん、反射で言っちゃった。

本当にごめんなさい。でもお兄ちゃんはジエノスさん一人で色々な意味で手いっぱいだし、確実に真面目なジエノスさんとあなたは相性が悪いし、そして嫌いではなくなったけどあなたが苦手なのは変わ

らないんですよ。

「君、見た目に反して結構キツイな!!」

私のお兄ちゃん並みに身も蓋もない答えにスイリユーさんも反射で突っ込み返す。

うん、見た目に反してるかどうかは知らないけど、私の性格は間違いないなく良くはないですよ。

というか、何でお兄ちゃんとソニックさん以外の皆は私の性格を変に美化させるのかなあ？

変わらない君、変わり果てた俺、変わらない僕

……まさかの返り討ち。

戦う前はイケると思っただが……見通しが甘かった。

縄張りのQ市以外の被害に興味はないとか、あのガキのヒーロー名鑑の情報通りだったのが幸運だ。そうじゃなけりゃ、悔しいが多分逃げ切れなかった。

っーか、何だよあいつは。あざとい人気取りであんな格好してる着ぐるみ野郎かと思ったら、本物の変人かつ化け物じゃねえか。

パワーもスピードも想定をはるかに上回り、加えて相性も悪かった。四足戦闘スタイルの番犬マンには人間向けに磨いた俺の技が一切通用しなかった。

……思えばジジイから人外の化け物の戦い方なんて教わってねえな。つてことは逆に言えば俺の武術は行き止まりなんかじゃなくてまだまだ改良の余地があるってことか。

俺はまだ強くなれる。もつともつと、俺は強くなれる。

そう言い聞かせて俺はがむしゃらに走って逃げてたどり着いたZ市をふらつきながらテクトーに身を隠せる場所を探す。

……言い聞かせて、俺は強くなれると言い聞かせて脳内で番犬マンとの戦闘シミュレーションを繰り返し返すことで思考を満たして、記憶に蓋をする。

金属バットの妹によって、あまりにも鮮やかに蘇ってしまった記憶を。

『やめて!!』

俺を庇って、俺の盾になってくれたあの子の記憶をなかったことにする。

ない。そんな記憶はない。ないんだ。

俺を庇ってくれた子なんていない。

俺を助けてくれた人なんていない。

『ガロウ君、どうしたの？ 大丈夫？』

……俺の話聴いてくれた人なんて、俺の心配をまず最初にしてく

れた人なんていないんだ。

怪人の俺にそんな人は必要ない。いらぬ。あつてはならないんだ。

だから……だから……どうか頼むから消えてくれ。

『ひいちゃん、僕はひいちゃんの——』

なれる訳がなかった戯言をほざく俺なんか、消えてしまえ。

\*\*\*

気色悪い。気色悪い。気色悪い。

番犬マンとの戦闘シミュレーションで思考を満たそうとしているのに、こじ開けられた記憶が思考を侵食してゆく。

あの子のことを思い出させる。そしてその記憶が柄でもない事を俺にさせる。

……気色悪かったただけだ。気分が悪かったただけだ。

ずっと観察していた視線が気色悪かった。観察されるのが大っ嫌いだから、出てきたあのヘドロのクラゲをぶっ潰したんだ。

俺の都合だ。俺の気分が悪かったから、ずっと俺を観察してたあいつらが気に入らなかつたから、だから潰したんだ。

俺だけの都合で、俺だけの為だった。

『うっひっひっひっ……、金属バットの妹ちやくくん……。人質は何人いてもいいよねえ〜』

あのクラゲの言つてたことなんか関係ない。

金属バットの妹を狙つてたことなんか、俺には何の関係もない。どうでもいいことだ。

『バーカバーカ！ ざまーみろ!!』

関係ないんだ。こんな記憶。

『ひいちゃん！ ひいちゃん!!』

『大丈夫。大丈夫だから』

……ただ、気に入らなかつただけだ。

逃げたくせに、あの子に論破されて、あの子の正しさに何も言い返

せなくて自分が悪いってことを突き付けられて、ヒーローごっこなんかじゃなくてイジメだつて言いきられて、ヒーローなんかじゃないただのいじめっ子だつてことから逃げ出したくせに、あいつらは俺に向き直つて「大丈夫？」と訊いてくれたあの子に石を投げつけた。

一人じゃ何もできないくせに、明らかに自分より弱い奴に、それでも卑怯な手を使わないと怖くて何もできないくせに、俺があそこまで追い詰めたから金属バットが気絶して隙だらけの妹を攫うなんて不愉快だっただけ。

あいつらの為に俺が何かをしてやったように思えたから、気分が悪かっただけだ。

あいつらに……、たっちゃんたちに似ている気がしたから許せなくて、気に入らなくて、気色悪かった。

俺のことを対等とも思つてないくせに、上から目線で「仲間にしてやる」とほざいた鳥の着ぐるみ野郎だつてそうだ。

興味ねえんだよ。俺は誰とも、何ともつるむ気はねえ。

俺は強いんだ。一人で大丈夫なんだ。他の誰かなんてむしろ邪魔だ。

だから君だつていらぬ。

『ガロウ君、大丈夫？』

大丈夫なんだ。俺はもう大丈夫なんだ。

君の方が大丈夫なんかじゃなかったくせに。血こそは出てなかったけどこぶは出来た。あいつらは年上とはいえ女の子の頭目がけて石を投げつけた。ぶつけてきたのに、それでも「痛い」と言えば俺は間違いなく泣いたから……、あの子は俺の為に「大丈夫」って言い張った。

俺の所為で、俺がいたから泣くことさえも出来なかったんだ。

大丈夫。俺は大丈夫。独りで大丈夫。

だからいらぬ。君なんていなくてもいい。必要ないんだ。

最初からいらぬ方が良かったんだ。

『いい気味だ』

最初から出会ってなければ、関わってなければ、存在してなければ

良かったんだ。

そうしたら俺は……………

『ひいちゃん…………、ごめんなさい…………』

俺さえいなければ、あの子は泣くことなんてなかったのに。

\* \* \*

番犬マンと戦ってる最中や逃げきった直後は本心から俺はまだ強くなる余地があるという実感で興奮して気分が良かったのに、時間が経つほどその興奮は冷めて行つて、番犬マンとの交戦前の出来事が、こじ開けられた記憶が俺の頭の中を駆け巡る。

ああ、気分が悪い。

体も金属バットと番犬マンとの2連戦で疲弊しきつて休息を求めている。

けど、正直言つてこのまま寝たくねえ。

…………寝たら、それこそ夢を見る。

もう見てはいけない夢を。

あの子の夢を見てしまうから。

何か気分転換になるもんはねえかと思つて何気なく顔を上げた瞬間、俺の思考はようやく別のもので埋め尽くされる。

前から自転車を押して歩いている男。遠目からではただそれだけの一般人だったが、顔がある程度までわかる距離にまで近づいて気付く。

あの特徴的な左目の三本傷。

間違いねえ。キングだ！

『地上最強の男』、S級ヒーローのキングじゃねえか!!

そうか、Z市は怪人の出現スポットだったな。だからこんなところで狩りに来てたのか。

…………どうする？ こっちは手負いだが、こんな路上で遭遇するなんてまたとないチャンスだ。

体は動くし、痛みも感じてねえ。

ついさつきまでの最悪な気分なんか嘘みてえに、むしろ最悪だったからこそ反転した瞬間にこの上なく気分が昂って力が漲って来る。

こいつを狩れば、俺が地上最強だと証明される。

俺は独りで大丈夫だって、胸を張って言える。

そう考えたら、かつてないほど感覚が研ぎ澄まされているのを感じた。

予測しろ!! キングの視線・体勢・重心の変化を観察して、次の反応を!!

駆ける俺のリーチまであと3mといったところで、ようやくキングは俺に視線をよこす。

余裕だな。さすがは地上最強の男。俺にはキングエンジンすらかける必要はないってか!?

てめーの次の動きは読めてるんだ!

その余裕は驕りだってことを思い知らせてやるぜ!!

「お兄ちゃん、ただいま」

え？

\* \* \*

唐突に、手品のように魔法のようにキングの傍らに現れたことへの驚きよりも先に驚いたのは、あまりに変わってなかったから。

もちろん、10歳くらいだった小学生が20歳近くなって全く変わってないのはあり得ねえ。

大人になってた。

今でも小柄な方だけど、あの頃よりずっと背が伸びて大人っぽくなっていた。

なのに、変わっていない。

ずっと自分に言い聞かせてた。

昔の記憶だから思い出補正って奴で美化してる。現実は大したことがない。

そう言い聞かせて、あの子は俺の頭の中にしか存在しないも同然だと思おうようにしていた。

あんなに綺麗な人が、俺を庇ってくれるわけがない。

俺なんかを助けてくれるほど、優しい人なんかいない。

そう言い聞かせていたのに……なのに……なのに……。

記憶の中の彼女をそのまま10歳ほど大人にしたような人だった。

俺の記憶に思い出補正なんかなく、あまりに鮮明で正確すぎた事を思い知る。

一目でわかった。彼女が現れて話しかけている相手なんか見ええないし、声も俺の耳には届いていない。

名前なんか聞こえていない。音を意味のある単語だと認識できなかった。

キングさえも、もう見えない。

あの子しか見えない。

「うん、皆病院に連れて行ったよ、ひとまず、命に別条がある人はいなかった。」

あ、キングさんこんにちは。って、どうかしたんです……か……。

誰かに話しかけていたあの子が、キングに気付いてこちらを向き、そして気付く。

俺を視界に入れて、ただその場で呆然と立ち尽くすしかない俺と向き合って、あの子は軽く目を見開いて言った。

「……ガロウ……君？」



ああ、何で君まで一目でわかっちゃうんだよ。

こんな俺は変わったのに。変わり果てたのに。もう、あの頃の俺なんかどこにもいないのに。

それなのに君にとって俺は、あの頃のままなのか？

「……………ひいちゃん」

## 助ける理由

スイリユーさんたちを病院に運んだらすぐに帰れるかと思ってたけど、そんなことなかった。

当然か。怪人達が大量発生・出現しているのはC市だけじゃなかったのもあつてか病院は怪我人でごった返していたし、私が運んできた人はスイリユーさん以外は気絶、唯一意識があつたスイリユーさんが一番の重傷だったから色々事情を説明して時間がかかっちゃった。

まあその分、私のレポートのキャパが回復したから別にいいけど。

事情を話して時間を置いたのが休憩になつたつてのもあるけど、私のレポートに限らず超能力は精神力がエネルギーらしいから、その時の気分によつて能力の精度とかが変動するのはよくある事。

私の場合、病院で看護師さん達に事情を話している最中にジェノスさんから連絡が来たことで、現金なことに全回復。

ジェノスさんが試合の途中で抜け出してから全然戻つてこないのは、怪人たちがあちらこちらで暴れ回っている所為で倒してもきりなく引つ張りだこになつてただけ。

あの人は無事。絶対に大丈夫。

そう言い聞かせるのも限界近かつたから、ケータイが鳴つた時はジェノスさんからだつてこともわかつてなかつたくせに、病院の中で看護師さんと話してる最中だつていうのに構わずケータイを取り出して見ちゃつた。ごめんなさい、看護師さん。

結果としてはジェノスさんは無事ではなかつた。

けど言っちゃなんだけども通り命に別状はない程度に大破だから、しちやいけないのはわかつてるけどひとまずホツとした。

命に別状はないけど動けなくなつてしまつたようだから、クセーノ博士のドローンに回収されて治してもらつてるところらしい。

またしても自力で動けなくなるほど怪我……じゃなくて壊れてしまつたのは、ジェノスさんは悪くないとわかつていても「どうしていつもあなたは!」と怒りたい気持ちはある。

けどそれ以上に無事で良かったという安堵と、博士に回収されてすぐに自分の体を治してもらったことよりも優先して私に連絡を入れてくれたことをつい嬉しく思う。

各地で高レベルの怪人の大量発生、それに伴うヒーローたちの負傷という大事件と異常事態の真つただ中だというのはわかってはいるけど、私にとってはジェノスさんが無事という事を知っただけでもう何も問題ないと思って、とても軽やかに跳ぶことができた。

お兄ちゃんの元まで、一足飛びで帰ってこれた。

「ただいま、お兄ちゃん」

私がレポートでお兄ちゃんの隣に現れると、お兄ちゃんはいつも通り覇気のない顔と声で「おう、お帰り」と答えてくれる。

この様子からして、やっぱり格闘大会を襲撃した怪人はお兄ちゃんにとつていつもと変わらない怪人だったんだろうな。

それと服の汚れがほとんどないから、怪人もほとんど倒せてないのかも。

そういえば格闘大会の怪人も、初代優勝者の方はスイリユーさんをお兄ちゃんが2回戦で場外にしちやっただ人に任せて帰ってつたっけ？

お兄ちゃんが怪人退治に向かう少し前に、怪人たちは暴れるのをやめて引き上げてしまったのかな？ お兄ちゃん、本当に何かとタイミングが悪いよね。

けどそうだとしたら、この怪人の大量出現は偶然なんかじゃなくて計画的かつ組織的なものだってことだよな。

……一体、何が起こってるんだろう。

不謹慎極まりないことにジェノスさんから連絡があったことですっかり吹っ飛んでいた不安、スイリユーさんから聞いた「怪人が『怪人になれ』と言つて『怪人細胞』というものを食わせ、食べた者は怪人になった」という話から懐いたものと同じ不安が過つた。

けどお兄ちゃんがあまりにいつも通りぼけーとしてるもんだから、ついつい私も緊張感とかそういうシリアスを構成するものが抜けていつて、「ま、いいか」で過つた不安を片付けてしまう。

考えても答えが出ない、規模が大きすぎる問題は私の管轄じゃない  
と思いを放棄して、お兄ちゃんにジェノスさんから連絡があったこと  
やスイリユーさんたちは病院に運んで命に別状はなかったことを話  
している、横からドツドツドツドとバイクをふかすような音が聞こ  
えてきた。

「あ、キングさんこんにちは」

なんか聞き覚えのある音だと思って振り返ったら、キングさんが  
いた。キングエンジンだった。ごめん、キングさん。めっちゃ近くな  
のに気付いてなかった。

けどキングさんもさすがに私と違って私が現れた事には気付いて  
いるでしょうけど、私が挨拶しても言葉を返すどころかこちらを気に  
もせずになすすぐ前を見る。

傍から見たら迫力のある真顔だけど、私は既にこれは怖さと緊張の  
あまりに真顔になってるだけなのを知ってる。っていうか、近くでよ  
く見たら冷や汗がだらだら流れてるのがわかるし。

何？ どうしたの？ 怪人でもいるの？ でも、横のお兄ちゃんは  
無反応だしなあ……。

「どうしたんです……か……」

そんなことを思いながら小首を傾げながらキングさんと同じ方向  
を見て、私は言葉を失った。

「？ エヒメ？」

お兄ちゃんはキングさんに続いて私までその場で固まってしまっ  
たことを不信がって声をかけるけど、私はお兄ちゃんに何も返せな  
かった。

キングさんの前、2 mほどの距離を開けてそこに立っているのは2  
0歳前後の男の人。

上背こそはキングさんの方が高いけど、体のラインがはつきり出る  
服なのもあってものすごく鍛えていることが一目でわかる体。

目はつり上がっているし三白眼どころか四白眼だから、どんなに好  
意的に見ても人相は良いとは言えない。

わからなくても、思い出せなくてもきつとおかしくなかった。

結び付けられない方が自然だった。

けど……けれど……その眼は……私の前で棒立ちになって、今にも泣き出しそうなその眼は……

『ひいちゃん……、ごめんなさい……』

それは間違いなく、あの日のあの子の眼だった。

\* \* \*

「……ガロウ……君？」

呼びかけたというより、零れ落ちた。

会えて嬉しかったのか、彼が私の知る「ガロウ君」でない事を望んでいたのかさえも、私にはわからない。

けれど、私の言葉に応えるように私と向き合うその人は……、私よりも年上に見える程にもう「男の子」ではなくとても強そうな「男の人」になった彼は言った。

「……ひいちゃん」

とても懐かしいその呼び方が、彼は私の知る人ではないという可能性を殺し尽くす。

どこか期待していた可能性が殺されたにも拘らず、私は少し嬉しかった。

私のことを覚えていてくれたこと、私だとわかってくれたことが嬉しかった。

もう10年くらい経つのに。私は背が伸びたくらいだろうけど、あなたはこんなに変わったのに、私のことを覚えてくれていたんだ。

こんなにも、お兄ちゃんみたいにムキムキに強そうになって………つて、ちよつと待って。

「!? ガロウ君！ どうしたのその怪我!?!」

「!?」

彼が間違いなく私の知る「ガロウ君」であることを確信して、懐かしさと大人になった彼を見て月日の流れを感慨深く思ってたけど、それどころじゃない事に気付いて私は思わずレポートでガロウ君の

前に現れて詰め寄った。

何で私は呑気に、「ガロウ君、すつごいムキムキ」とか思ってたの!? 傷だらけじゃない!! バカなの!? 筋肉フェチなの、私!? 筋肉よ  
りボロボロの服と血まみれの顔とかに注目して心配してやれ!!

「ど、どうしたの!? 怪人に襲われたの!? 大丈夫? 痛くない?  
って、痛くない方がヤバイよねこの怪我!!」

「は? え? ちよつ、ひいちちゃん! だ、大丈夫だから! 俺は大丈  
夫だから!!」

「ああ、ど、どうしよう……どうしよう……。な、何か止血できるもの  
……。ああ、ハンカチしかない! 絶対に足りない!! す、スカートを  
破いて包帯代わりに……」

「絶対にダメだ!! しないでいい!!」

「え? そ、そう? じゃあ、救急車? あ、私の方が早いわ。ガロウ  
君! 病院まで跳ぶから掴まって!!」

「いや、捕まるって何? っていうか、ひいちちゃんさつきも今もどこか  
らどうやって……」

「……お前ら、とにかく落ち着け」

「きゃん!!」

パニくって怪我人のガロウ君に詰め寄ってもはや心配の押し売り  
をしている私を見かねて、お兄ちゃんが後ろから私の頭にチョップを落  
とす。

お兄ちゃんからしたらものすごく優しく頭に手を置いたくらい  
の力加減なんだろうけど、それでも私には結構な衝撃で思わずその場に  
しゃがみ込んだ。うう……痛い。

でも、おかげでちよつと冷静になった。何してんの、私? ガロウ  
君、めっちゃ困惑しちゃってるじゃん。

自分のテンパリ具合を恥ずかしく思いながら、私は頭を押さえて  
しゃがみこんだまま顔を上げる。お兄ちゃんとガロウ君に謝るつも  
りだったんだけど……

「!? ひいちちゃんに何しやがるんだてめえ!!」

今度は何故かガロウ君がお兄ちゃんの胸ぐら掴んでブチ切れてた。

何事!?　なんでこうなってるの!?

「が、ガロウ君!　待ってどうしたの!?!　やめてストップ落ち着いて!!」

胸ぐら掴まれてポカンとしてるお兄ちゃんが余計にイラツと来たのか、ガロウ君は殴りかかろうと拳を振りかぶるので私はその腕に飛びつくようにして宥めて止める。

するとガロウ君がお兄ちゃんを離してくれたのは良いんだけど、ガロウ君のパニックはまだまだ全然納まってない。

「ひいちゃん!　大丈夫か?!　怪我は?　こぶ出来てないか?」

「つか、どうしたんだよその手と足は!?!　救急車に運んでもらうべきなのは、俺じゃなくてひいちゃんの方だろ!?!」

お兄ちゃんから手を離れたかと思ったら、今度は私の手を握ってオロオロしながら私を心配しつつガロウ君はキレる。

「っていうか、手と足?　足は確かにこの間の勢いに任せたハイキックで骨にヒビ入って未だにギブスしてるけど、手は別に……って、ああそういうえば手袋してなかった。」

深海王の時に私は両手に火傷を負って、後遺症とかは全くないけど皮膚の変色とかそういう痕は残ってる。

それをジェノスさんはもちろん、他の人たちも気にして心配される嫌だったからなるべく手袋とかをして隠してたんだけど、流石にあれからだいたい経つので私はもちろん私の周囲の人たちや一番気にしていたジェノスさんも見慣れちゃったから、ここ最近手袋つけるのをすっかり忘れてた。

ガロウ君は私の両手を握ると言うよりまさしく壊れ物を扱うように、気を使って包むようにして、私よりだいたい背が高いのに私を見上げるような、縋るような目をして訊く。

「ひいちゃん、大丈夫なのかよこれ!?!」

昔よりずっと乱暴で怒っているようにしか聞こえない口調だけど、昔と全く変わらない目をしていた。

誰かの痛みを自分の事のように思っ、泣きそうになる優しい所は変わってないんだね。

「……大丈夫だよ」

だから私も答える。昔のように。昔、ガロウ君が今と同じように、自分が怪我した時よりも私の怪我を心配してくれていた時のように。ガロウ君が包むように握っていた手の中から自分の右手を抜き取って、彼の逆立った髪に手を伸ばす。

ほら、この手は大丈夫。痛くないよ。ちゃんと動くよ。  
優しいあなたの頭だって、撫でれるよ。

これだけは変わらないし、変える気もないと証明する。

「大丈夫。この手はちよつと痕が派手に残ってるだけで完治はしてるし、足も折れてないよ。ヒビは入ってるけど経過は順調。」

心配してくれてありがとう。でも、本当に大丈夫だから……安心して」

言ってるでなんだけど私の言葉はあんまり説得力はない。現にガロウ君の眉間にしわが寄っていて、全然納得してる感じじゃない。

けどさすがに今の自分ほどではない事くらいは理解したのか、ちよつとまだ不満そうに唇を尖らせつつ彼は無言で頷いてくれた。

そのタイミングで、蚊帳の外にやつちやつたお兄ちゃんが口を挟む。

「エヒメ。こいつが『ガロウ君』か？」

「ああ？」

お兄ちゃんが私にそう尋ねて、予想外のタイミングでの再会とガロウ君の大怪我で吹っ飛んでた、何で私はガロウ君に会いたがっていたのかを思い出して戸惑うけど、その戸惑いが態度とかに現れる前にガロウ君が反応。

何故か彼は、ガラ悪く巻き舌で威嚇するような声を出してお兄ちゃんを睨み付ける。

え？ 何でガロウ君はさつきからお兄ちゃんにこんなにもケンカ腰なの？

私からしたらガロウ君が何に怒って、そして警戒してるのかよくわかんなかったけど、次の言動でやっと気づいた。

「何なんだよ、さつきからテメエは……、いきなりひいちゃんを殴った



奴がひいちゃんを気安く呼ぶんじゃない!!」

私を庇うように私の前に出てお兄ちゃんにガロウ君はそう啖呵を切った

あ、ガロウ君。お兄ちゃんのことをただの不審者だと思ってるわ。不審者呼ばわりされたお兄ちゃんは、いつもならさすがにちよつとはシヨックを受けて怒って訂正入れるんだけど、今日のお兄ちゃんは怒るより気になることでもあるのかちよつとポカンとしてから突っ込む。

「いや、お前の方が気安いって言うかめちやくちや呼び方可愛いな」  
お兄ちゃん、突っ込むところはそこ? いや、正直私もちよつと気にしてたけど。

「うっせー!! 勢いで連呼しちまってから今更、先輩とかさん付けで呼んだらそっちの方が気まずくて恥ずかしいだろ!!」

そしてガロウ君も丁寧に応答しなくていいよ。っていうか、そんな理由だったんだ。

いいんだよ、好きに呼んで! 呼び捨てでもいいんだよ!! 別にひいちゃんのままでも、ガロウ君がいいのならいいし!!

「エヒメが先輩ってことは、やっぱお前が『ガロウ君』で間違いないんだな。

何でさつきは、キングにすげえ勢いで向かって来たんだ? 危うく蹴っ飛ばすところだったぜ」

「どれもこれもテメエには関係ねーだろ!! マジで何なんだ、てめーは!!」

お兄ちゃんはガロウ君がキレまくっているのに、あまりにもマイペースに話を続けるからガロウ君は再び拳を固めて足を軽く開いて、勢いではなく体勢を整えてまでして殴り掛かろうとするから私は慌てて止めに入る。

っていうかお兄ちゃん! 自分が何者かくらいは自分で言つてよ!!

「ガロウ君、違う!! 何か盛大な勘違いしてる!!」

この人、私のお兄ちゃんだから気安い呼び方してくれなきや私が凹

むし、さっきのチョップはむしろ私がガロウ君を困らせてからこそしたことだから!!」

「……………は!? 嘘だろ!? どこも似てねえ!!」

「ごめん本当!! 似てなくてごめん!!」

ガロウ君の前に出てお兄ちゃんを庇いながらガロウ君の勘違いを正すと、ガロウ君はポカンと目を丸くしてから反射で「嘘だろ!」と叫び、私も思わず反射で謝った。

するとガロウ君は私の手足の怪我に気付いた時みたいにオロオロと困った様子を見せながら、数回私とお兄ちゃんを見比べる。そしてしばしの間を置いてガロウ君が発したセリフは、「……………み、耳の形が似てる……………かもな」だった。

ガロウ君! 気を遣ってくれたのは嬉しいけど無理に似てる所を探さなくていいから!!

「……………うん、とにかく君ら全員、落ち着いて」

このグダグダすぎて全員が何をどうしたいのかわからない再会は、キングエンジンが納まったキングさんのとりなしで何とか仕切り直せた。けど、空気は気まずいままだった。

何ていうか本当、最初にテンパってごめんなさい。

\* \* \*

「え、えっと、ガロウ君。久しぶり」

とりあえずキングさんのとりなしで仕切り直して私が改めて挨拶すると、ガロウ君は私から眼を逸らして気まずげに頭を掻きながら言った。

「……………ああ、そうっすね」

それだけで、話は終了。

えっと……………どうしよう……………。

お兄ちゃんやジェノスさんに「話を聴いてあげて」と頼んでおきながら、私が彼の話を聴く以前に会話を続けられない。

だって実際、何をどう聞き出せと?

ヒーロー狩りをしてる人間怪人ってガロウ君のこと? そうだとしたら、何でそんなことをしてるの? って訊けど? 訊けるかそん

なこと。つていうかこれ、ガロウ君がその人間怪人と同名なだけの無関係なら失礼極まりないわ。

そもそも、昔の彼の話だって私の話術で聞き出した話じゃない。たまたま、辛くて吐き出した気持ちを抱え込んだタイミングで私と出会って、私が「どうしたの？」つて訊いたからガロウ君が話してくれただけ。

だから私には、明らかにさつきまでのやり取りが恥ずかしいから気まずくなってるだけじゃない、どこかしら「拒絶」が見て取れるガロウ君から上手く知りたいことを聞きだす術なんかない。

でも、このままここで別れる訳にはいかない。そんなこと出来ない。

けど、どうしよう。本当に何も浮かばない。ガロウ君の怪我を理由に、テレポートで病院に運ぶ？ そうしたら少なくとも彼と一緒にいれる時間はもう少し稼げる。

「なあ」

「……なんすか？」

そんな風に考えて、「病院に行こう」と提案する前にお兄ちゃんがガロウ君に話しかけ、ガロウ君は勘違いしてた時よりはマシかな？ つてくらい不愛想だけど一応は応じてくれた。

でもお兄ちゃん……、まさか「ヒーロー狩りしてるじーさんの弟子つてお前？」つてストレートすぎる質問するつもり？

この人ならやる。この人はすつごく単純にめんどくさいという理由で、駆け引きとか言葉の裏の読み合いなんてできる訳がない。

けどそんなストレートさこそがこの場合は確実に事態をややくささせるから私は止めるつもりだったんだけど、お兄ちゃんの問いは私の予想以上にシンプルかつ遙か斜め上だった。

「お前、エヒメの事が好きなのか？」

何を言いやがりますか、この愚兄は!?

「……は？」

お兄ちゃんのものすごく脈絡のない突発的な質問に、思わずガロウ君は口と目をポカッと開けてそのまま絶句。

けど数秒後、傷口から止まっていた血が吹き出すぐらい一気に顔を真っ赤にさせてお兄ちゃんに向かって怒鳴る。

「！!? な、なななな何言ってるんだてめーは!？」

そ、そんな凶々しいこと思ってる訳ねーだろ!! 確かにひいちちゃんは昔っから可愛いし優しいし天使だけど、俺なんかが好きになっても迷惑なだけだろーが!!」

「いや、その答えからしてお前めっちゃエヒメが好きだよな?」

うん、お兄ちゃんの言う通りだよガロウ君。すごく嬉しいけど、ものすごく恥ずかしいことをあなたは言ったよ。

っていうか、ガロウ君の中で私はどうなってるの？

「ガロウ君、とにかく落ち着いて。お兄ちゃんが変なこと言って本当にごめん。あの人の言う事は基本、気にしないで」

私としてもテレポートで逃げ出したいくらい色んな意味で恥ずかしいけど、またしてもガロウ君がお兄ちゃんに殴り掛かりそうだし、ガロウ君も恥ずかしさの所為で出血してるしで、とにかく彼の出血だけでも止めようとハンカチを彼の頭の傷に押し当てながら説得する。

けど彼のセリフは完全に勢いだけで言ったものらしく、私の存在を忘れていたのかガロウ君は私が触れた瞬間、大きな音に驚いた猫のようなアクロバティックな動きで私から離れて、余計に真っ赤にさせてしまった。

どうしよう。ガロウ君の私に対する過大評価が恥ずかしいけど、それよりも羞恥の所為で出血がひどくなってるガロウ君が普通に心配。このまま出血死はしなくても、貧血で倒れられたら申し訳がなさすぎる。

「だ、大丈夫だよ、ガロウ君!」

私はそんなある意味ガロウ君に失礼すぎる心配から、警戒する猫に近づこうとするどう見ても怪しい動きで距離を詰めつつ彼のフオローを試みた。

「私も、ガロウ君の事が大好きだから！ ほら、一緒一緒！ 両思いだよガロウ君!!」

「エヒメちゃん。そのセリフどう考えても逆効果」

私のセリフを、後ろからキングさんが突っ込む。その通りだよ！

ガロウ君、余計に顔を赤くして血をだらだら流して固まっちゃったじゃん!!

またしてもその場がグダグダになって、私は八つ当たり気味にその元凶であるお兄ちゃんを睨み付けるけど、お兄ちゃんはいつも通りの覇気のない顔をして、「……ジェノスがいなくて良かった」とか呟いてまったく気にしてない。

相変わらずマイペースに、お兄ちゃんは言った。あの質問の意味の答えである言葉をガロウ君に告げる。

「なんつーか、アホな妹で悪い。で、そんなアホの心配を真っ先にしてくれて、ありがとな」

お兄ちゃんの言葉に、私もガロウ君も言葉を失う。

さつきから絶句してたけど、意味合いが変わる。

ガロウ君からしたらお兄ちゃんの訳の分からなさが増したただけかもしれないけど、私はどうしてあんなことを唐突に訊いたのかを理解してしまった。

やっぱりお兄ちゃんは、面倒くさいことを嫌ってストレートに尋ねただけ。

ガロウ君がヒーロー狩りであるかどうかよりも、そんなことをするほど怪人に憧れる理由よりも、お兄ちゃんにとって一番知っておきたかったこと、知っておかなくちゃいけなかったからこそ、訊いてくれたんだ。

私の怪我を真っ先に心配して、私に暴力を振るっただけだと思っただけだ。お兄ちゃんをガロウ君は許さなかったから。ガロウ君は私のことを守ろうとしてくれていたから、お兄ちゃんはその真意を知りたかったんだ。

お兄ちゃんは、ガロウ君が私のことを「好き」だと思ってくれているのなら、もうお兄ちゃんはそれ以上の話を聴かなくてもガロウ君を

信じようと思ってくれたんだね。

例え、ガロウ君が本当にヒーロー狩りをしていても、そこには何か訳がある。言葉通りの「怪人への憧れ」による身勝手な暴力ではないことを信じてくれたんだ。

……ごめんね、お兄ちゃん。脈絡がなさ過ぎたのは事実だから睨んだことは謝らないけど、迷ってた事は謝るよ。お兄ちゃんとしては、そっちの方こそ謝らなくていいと思ってるかもしれないけどね。

でも私は、迷って怖がって訊きたいのに聞けなかった。逃げないと誓っているくせに、また逃げようとしていた私自身を許せないから。だから、そんなつもりはなくてもお兄ちゃんが背中を押してくれたのだから、もう迷わないし逃げないよ。

「ガロウ君、病院に行って手当てしてもらおう？」

私はまだポカンとしてるガロウ君に言った。

話を聴くための時間を作る為じゃない。弱い私が逃げ場を塞いで覚悟を決める為の時間稼ぎじゃない。

ただ、あなたがもう痛い思いをして欲しくないから、その為だけに連れて行きたい。

……私は、あなたを傷つけずにあなたの傷を聞き出せるほど口が上手い訳じゃない。

だから、あなたの話は絶対に全部、最後まで聞くけど何も訊かないよ。

あなたが話してくれるまで、訊かないよ。

訊かないまま、信じ続ける。

あなたは私の知るガロウ君だって。

昔から変わらない、優しい子だって。

\* \* \*

私の言葉で余計にポカンとしちゃったガロウ君に申し訳なく思いつつ、私は一方的に話を続ける。

「さっき、いきなり私現れたでしょ？ 私、テレポートが使えるようになったんだ。すごい？」

それ使って病院まで行こう？ お兄ちゃん、ガロウ君を連れて行く

から先に帰ってて」

「おう。つーか、キングの家に寄るわ。この前見つけたハメ技で、今度こそこいつをぶちのめす」

お兄ちゃんも文句や心配はないらしく、普通に応じてキングさんに「覚悟しろよ」と言ってる。でもお兄ちゃんが発見したあのハメ技、実はハメ技って言えるようなものじゃないんだけどなあ。リーチが長い分、攻撃と攻撃の間も長いからキングさんならたぶん余裕で……っていうか私でも反撃できるよ。

まあ、それを指摘するのは無粋すぎるから、私は曖昧な笑みを浮かべてお兄ちゃんに「いつてらっしゃい」と言ってみてガロウ君に手を差し伸べる。

けれど、ガロウ君は私の手を取らない。

私のテレポートを信じてないとか、訳が分からなくて困惑してるからじゃなくて、私の手を払いのけるほど積極的ではないけど、明確に彼は私を拒絶してた。

「……ひいちゃん、ありがと。心配してくれて」

ガロウ君は私の手を取らず、笑って言った。再会して初めて、彼の笑顔を見た。

昔の笑顔とは全く違う、何かに耐えるような笑顔で彼は昔のように優しく言う。

「でも、大丈夫だから気にしないでくれ。俺はほら、もうこの通り昔のひ弱ないじめられっ子じゃない。」

こんな怪我、つばでも付けりや治るからひいちゃんは気にしないでいいんだ。それより、自分の心配しろよ。テレポートが使えるようになったのよくわかったけど、今日も怪人がそこらかしこで暴れ回ってたんだから、他人の事より自分を優先しろって」

自分は大丈夫だと、ガロウ君は笑って言い張る。

怪我だらけのボロボロの姿で、どう見ても痛くない訳がない姿なのに、それでも彼は自分は平気だって言い張った。

「ほら、俺はこの通り強くなったんだから、もうひいちゃんが助けなくてもいいんだよ」

笑って、少しおどけるように力こぶを作って見せて彼は言う。

「……違うよ、ガロウ君」

だから、私は伝える。

あなたにどんなに拒絶されても、これだけは伝えなくちゃいけない。知ってもらわなくちゃいけない。

勘違いなんてさせない。

「ガロウ君。私があなたを心配するのも、助けたいと思うのも、あなたが弱いからじゃない。ただ単に私があなたの事が好きで、痛い目に遭って欲しくなくて、悲しい思いなんかしてほしくないから助けるの。」

誰かを助ける理由に、その人が弱いとか善人だとかそういうのはないとは言わないけど、一番の理由にはならないと思う。一番の理由は、その人が好きだからっていう身勝手なものだよ。

けど、だからこそ私は例えガロウ君がどんな怪人もパンチ一撃で爆発四散できるほど強くても心配だし、……『助けて』って言われたら相手がいじめっ子だろうが怪人だろうが何であっても助けたいよ。

……だから、ガロウ君。私を心配してくれるのは嬉しいけど、一人で抱え込まないで。痛いのなら痛いって言って。助けて欲しい時は、『助けて』って叫んで。

絶対に、助けるから。助けたいから、助けるから」

私の言ってる事はただのワガママ。ガロウ君の心配を、思いやりを無駄にすることだったのはわかってる。

それでも、ガロウ君に知ってもらいたかった。

ガロウ君が強くなったのは、嬉しいよ。けど、そんなことを理由に一人になろうとしないで。独りで大丈夫だなんて、言わないで。

大丈夫なら、そんな悲しそうに笑わないでしょ？

私が勝手に助けたいだけだから……だから……だから……私の事がいららないのならいい。けれど……誰かに助けを求めることそのものを拒絶しないで。

「……………マジで変わってねえな。ひいちゃんは」

私の答えに、ガロウ君は呆れたように言った。



私の頭に、少し躊躇しながら手を置いて。

「ありがとな、ひいちちゃん」

私の手を取らないけれど、ガロウ君は私の頭をお兄ちゃんのように撫でて言う。

「……ずっと、会いたかった。けど、きつと会ってもわかんねーって思ってた。忘れられてるだろうし、覚えてくれてたって気付いてもらえないと思ってたから、……一目で気付いてもらえて嬉しかったよ」

お兄ちゃんのような遠慮なしの雑さじゃなくて、むしろ遠慮そのもののような手つきだけど、とてもその撫で方が優しいと思えたのは同じ。

だけど、ガロウ君は私の頭を撫でて私の横を通り過ぎる。

「だから……これで俺は十分なんだ。

もう、十分すぎるくらいに俺は助けてもらったから……大丈夫なんだよ、ひいちちゃん。

っーかさあ、流星に少しは俺が男だってこと意識してくれよ。年上たって1歳しか変わらない女の子に助けられっぱなしって、かなり情けないだろ?」

そう言って笑う顔はやっぱり何かに耐えるような悲しげなものだけど、もう私はそれ以上彼には踏み込めない。

今はまだ、踏み込めない。

ガロウ君は私を拒絶してるんじゃないかと、何かに怖がっているように見えるから……だから今は踏み込んじゃダメだ。

だから、踏み込まないまま伝える。

「……うん、そうだね。ごめんね、ガロウ君。

……でも、お願いだから忘れないで。あなたが弱いとか強いとか、正しいとか間違ってるのかなんて関係なく、私はあなたを助けたいって思ってる事だけは……、そしてそれは私だけじゃない。あなたが『助けて』と言うだけで、何も知らなくてもただ助けたいって思っ、助けようとする人はいっぱいいるから。

だから……忘れちゃダメだよ。『助けて』って言葉だけは……絶対  
に」

私の言葉に、ガロウ君は振り返らなかつた。「わかつた」とかそういう言葉は返さなかつた。

けれど、振り返らないまま彼は片手を上げてくれた。やっぱり、拒絶しきれない優しさは何も変わってない。

マジで変わってないのはあなたの方だよ、ガロウ君。

「……これで、良かったんだよね？」

ガロウ君が歩き去つた道から目を離すことが出来ないまま、私は言う。

答えを求めてた訳じゃないけど、後ろからキングさんの「エヒメちゃん……」と心配する声が聞こえる。

私の頭を、遠慮なしの雑さで撫でられるのと同時に。

キングさんの所に行くと言いつつ、私とガロウ君のやり取りを黙って待っていてくれたお兄ちゃんは、何も言わずに私の頭を撫で続ける。

お兄ちゃんの優しさに私はただ甘えて、零れ落ちそうな涙をこらえて言う。

「……お兄ちゃん。ガロウ君、いい子だったでしょ？ 私の言つてた通りでしょ？」

「……ああ。そうだな」

「……だから、これでいいよね？」

お兄ちゃんは何も答えない。答えなくていいよ。いいわけないのはわかつてる。

ガロウ君の様子からして、何か後ろ暗い事情があるのはもう間違いない。なんかキングさんにすごい勢いで向かつて来てたことからして、キングさんに挑もうとした可能性は高い。

……彼が「ヒーロー狩り」の、「人間怪人」とただの同名である可能性はほとんどないことなんて、もうわかつてる。

そして彼がヒーロー狩りだとしたら、そこにどんな事情があつたとしてもその行為は許してはいけないもの。

話を聴かずに一方的に痛めつけて捕らえるのは酷いことだけど、このまま放つておくのは論外であることはわかつてる。

彼の事が好きで、だからこそ強いとか弱いとか関係なく助けたいって思うのならなおさら、このまま放っておいたらいけない。

助ける為にも止めなくちゃいけない事はわかっている。だけど、私は踏み込めなかった。

だってあれ以上踏み込んだから、それこそガロウ君が逃げ出すだけならまだいい。

……ガロウ君が壊れてしまいそうな気がしたから、踏み込めなかった。

「……大丈夫だ、エヒメ」

答えなんか知らない。いいわけがないのも、私が悪いのもわかっているのに、お兄ちゃんは言う。

「助けるさ。俺もあいつの事、気に入ったからな」

私のヒーローは、断言してくれた。

ヒーローだからじゃない。それが仕事や義務だからじゃない。

お兄ちゃんのヒーローは趣味だから。

趣味だから……好きだから助けると笑って言ってくれた。

「……ありがとう。お兄ちゃん」

だから、私も笑えた。笑って、安心して言えた。

そっか、好きになってくれたのなら……安心だね。

あなたがどんなに悪いことをしても、間違っている……絶対に助けるよ。

好きだから、助けることを諦めないよ、ガロウ君。

\* \* \*

お兄ちゃんのおかげで少しは楽になったけど、それでも私の中で後悔やガロウ君は大丈夫なのかっていう心配や不安が重くのしかかっていた。

それが綺麗さっぱり吹っ飛んだのだから、ある意味感謝すべきなのかな？

「はい、もしもし！……え？」

結局、ガロウ君を病院に運ばなかったことで私もキングさんの家にお邪魔しようか、それともキングさんがうちに来るかという話をしてる最中にケータイが鳴った。

ジェノスさんからかと思ってたまたキングさんが引く勢いでケータイ取り出して電話に出たけど、ジェノスさんじゃなかった。っていうか、「ジェノスさん」って言わなくて本当に良かった。

「え？　ちよつ、急に何言ってるんですか？　っていうかどこにいますかああなたは？」

最初に会った海岸近くの森？　そこにいるんですか？　え？　そこでもう一度電話しろ？　何なんですか、その用心深さは……。そんな警戒するくらいなら、何で飲料水を切らすんですか？　お腹でも壊しました？　……。あ、切られちゃった」

「？　エヒメ。誰からだったんだよ」

一方的に「飲み水を持ってこい」って要求をされて切られ途方に暮れる私に、私以上に訳がわかってないお兄ちゃんは怪訝な顔をして電話相手が誰だったかを尋ねる。

私は一瞬悩んだけど、ジェノスさんがいないのをいいことに正直に答えた。ごめんね、ジェノスさん。

「えつと……。なんかソニックさんが具合悪いみたいだから、お水持ってちよつと様子見てくる」

「……ジェノスにはばれないようにしろよ」

ある意味ソニックさんのことも信頼しているからか、それとも面倒くさいだけか、お兄ちゃんはそれだけ言って止めなかった。

っていうか、ソニックさん本当に何があつたの？

何か、「……やはり火を通したのが悪かったのか？」とか呟いてたけど、火を通した方がお腹壊す食材って何？　もうそれが気になってガロウ君の事が吹っ飛んじやったよ!!

## ヒトとしての生への未練

お兄ちゃんやジェノスさんを警戒したからか、何度かテキトーな場所を指定されてやっとたどり着いたのは、怪人による被害でZ市と同じくゴーストタウンになった街の廃ビル内。

そこで横になっている顔色悪いソニックさんに、訊いても答えてくれないのはわかってるけど、つついっ私に訊いてしまう。

「……ソニックさん、本当に一体何を食べたの？」

「……うるさい」

ソニックさんは体を起こして私からペットボトルを奪い取り、予想通り私の質問を無視する。

そんな「これ以上追究したら殺す」って言わんばかりの殺気を飛ばさないで欲しい。だってプライドの高いあなたが私に看病……は頼んでないけど、それでも手助けを求める程にお腹壊す食材は、普通になりよ。

っていうか、この人が割と残念であることは前から知ってたけど、私が思っている以上というか、私が思っていた方向性とはまた違う方向で残念だな。

この人が残念に見えるのはお兄ちゃんに関わるから、本来は暗殺者とか闇の世界の住人って言葉のイメージそのものな人なのに、理不尽すぎる強さのお兄ちゃんに振り回されている所為で、やることなすことがギャグっぽくなっちゃってると思ってたけど……この人、単品でも割と残念だ。

だってこのビルのトイレに貼ってあった、手書きであろう「食べられる野草一覧」が突っ込みどころ満載だった。

「よもぎ」と書かれた欄にはチューリップ、「クレソン」と書かれた欄にはベニテングダケっぽい茸、「ぜんまい」にはウツボカズラが描かれていて、植物名と絵柄が一致してるのはキャベツとヒトクイクサだけだった。

っていうか、キャベツは野草じゃねえよ。ヒトクイクサについてはもう知らん。

だからある意味、お腹壊したことに關しての疑問はもうない。あれを見たら、むしろよく今まで生きて来れたなど感心したよ。

……いや待てよ？ この人の認識であれらが食べられる野草なら、ソニックさんのお腹は相当頑丈なんじゃない？ 忍者なんだから、幼いころから少量の毒で体を慣らしておくって訓練もしてそうだし……。あれ？ マジでこの人、一体何を食べてお腹を壊したの？

「……おい、何を考えてる？ 俺を見て、憐れむような納得したような不思議がるようなら意味不明な百面相をするな」

私が持ってきたスポーツドリンクを半分ほど飲み干したソニックさんが、ギロリと睨み付けながら突っ込んだので、これ以上この疑問を抱いていたら私は八つ当たりで殺されかねないから、もう忘れることにする。

うん、忘れよう。お腹壊した心当たりが「火を通した事」という、「逆だろ!!」とツツコミを入れたくて仕方がない食材のことは。

……いやごめん、無理。マジであなたは一体何を食べたの？

\* \* \*

忘れられないものすごく気になるけど、ソニックさんからしたら弱ってる自分を見せることが、この上なく不本意であることはわかってるので、この人の機嫌をこれ以上損ねることはしないでおく。

お腹を壊して具合が悪くても、私を殺すくらいはそれこそ片手間で済むほどの実力者であることはわかってるので、私はもう余計なことは言わずに買ってきていた飲料水を置いて、話を変えた。

「ソニックさん、料理できる所とありますか？ お粥でも作っておくので、お腹の調子がマシになったら食べて下さい」

私が持ってきていたもう一つのスーパーの袋を抱えて言うと、ソニックさんはきよとんと目を丸くしてから、不愉快そうに私を睨み付けた。

「……いらん。もう用は済んだから帰れ」

「別にあなたを憐れんで、言ってる訳じゃないですよ。ただ単に、先日は迷惑をかけすぎてまた恩を増やしたから、少しでも返したくて勝手にやりたいと思っただけです」

この人が何を不愉快に思っているかなんてわかり切っているから、私は用意していた通り答える。

まったく、本当にプライドが高いんだから。

……そんなあなたが、例え本気で水分だけでも確保しておかないとヤバいと思ったから、背に腹は代えられずに私に頼ったのだとしても、実は結構嬉しかったんですよ？

どうせこの廃ビルなんて、使い捨ての一時的な拠点でしかないでしょうけど、それでも私に自分のアジトを教えた事。私に頼ってくれたことが、嬉しかったんですよ。

ガロウ君にどんな事情や理由があったとしても、助けたかったのに差し出した手を取ってもらえなかった、拒絶された直後だったから、なおさらだね。

あなたにとってはそんなつもりどころか、私の事情や心情なんて知ったこっちゃないでしょうけど、私にとっては自分の存在意義を肯定してもらえたように思えたんですよ。

だから、何か出来ることがあるのならさせてくださいよ。

ここまで自分の心情は語ってないけど、私にさっさと帰る気がないことを察したのか、ソニックさんは舌打ちしてからこの上なく忌々しそうに、吐き捨てるように言った。

「……………割と放任なサイタマならともかく、あのクソガキが来たら面倒だ。それとも、お前があのガキを説得でもするのか？ お前より俺が大切だよ」

あ、なるほど。プライドだけじゃなくて、体調悪い時にジェノスさんが私を心配して、このアジトを突き止めてやって来るのを警戒してたから、「帰れ」か。

うん、あの人が心配してくれることは嬉しいし、そもそもが私の自業自得とはいえ、確かに時々惚れてる側の私がマジで引くレベルの過保護っぷりと、あとソニックさんに対する毛嫌いっぷりを考えたら、ノーヒントでもここを突き止めてきそうだな。

そしてソニックさん本人は絶対に認めないけど、今の体調最悪状態でジェノスさん相手は不利すぎるから、厄介ごとを引き寄せかねない

私はさつさと消えて欲しいよね。

うん、納得。でも、納得したけどそれはやっぱり、私が退く理由にはならなかった。

というか、今日に関してはソニックさんの心配、杞憂なんだよね。

なので私はその杞憂の根拠を伝える。

「あ、大丈夫です。ジェノスさん、怪人との戦闘で怪我してしまって、博士さんの所で治してもらおうそうですから、今日一日は動きたくても動けません」

ジェノスさんには本当に本当に申し訳ないんだけど、こんなことは本心から思いたくないんだけど、このタイミングで大破してくれて良かったよ。

あの人が心配する理由もわかるけど、私はソニックさんに割と助けられっぱなしで恩があるから、助けを求められたら助けたいし、少なくとも絶対に死んで欲しくないって何度も何度も言ってるのに、あの人がしてくれる譲歩は、「苦しむ暇なく一瞬で殺す」だからなあ……。

ジェノスさんにもう少しでも大人げがあれば、ソニックさんに対して仲良くなれとは言わないから自分には関係ないことなら無視できる程度の大人げがあれば、ジェノスさんの怪我を「良かった」なんて思わなくて済むのに。

どうしてあの人は他の人に対しても傍若無人なところがあるとはいえ、ソニックさんに対しては特にムキになって本気で殺しにかかるんだろう？

私の答えにソニックさんはいつも通り、「学習能力がない奴だな。いつそ頭も機械してしまった方が、よほど賢くなるんじゃないか？」とジェノスさんを皮肉るけど、明らかに苛立っていた様子が薄れて余裕が見えた。

認めないんだろうけど、ジェノスさんが来ない事が確定してホッとしたんだろうね。

ある意味私もホツとしてるから気持ちにはわかるんだけど、それでもあの人の侮辱は許さない。

「違います。あの人は同じ失敗を繰り返しているのではなく、前に進



むことをやめないし諦めない人ですから、以前よりも強いとわかってる相手でも立ち向かって、同じような結果を出してしまうんです。

結果は同じでも立ち向かった相手が前より強い相手ならば、ジェノスさんはちゃんと学習してますます強くなっています。

今回だって元人間とはいえ伝説級らしい格闘家で、実際にA級のプロヒーロー二人と、その二人以上の実力を持つ人をまさしく一蹴した怪人相手だった上、その前に怪人を7体もほぼ間を置かず倒してだいぶ消耗していたんですから、生き残っただけでもジェノスさんは十分凄いですよ」

ジェノスさんにソニックさんへの好意的な話題がタブーのように、ソニックさんにジェノスさんをフォローして評価する話は絶対に地雷だとわかっていたけど、私がさっさと帰らない理由以上にこれは退けない。

あの人への想いを自覚したのなら、あの人が語ってくれた「恋の定義」を否定したくないから、絶対に退かないと決めて、私は命に代えてもジェノスさんはあなたが思うほど弱くも愚かでもないと言えた。初めのうちは私の予想通り、この上なく不愉快不機嫌そうになってソニックさんは私を睨み付けてきたけど、途中から反応が予想外に変化する。

一瞬、眉が跳ね上がったかと思ったら、私から少し気まずそうに目を逸らした。

ほとんど勢いで私は語っていたので、言いきってからソニックさんの反応に気付いた。

だからそれがいったいどのタイミングだったのか、ソニックさんは私の言葉のどこに反応したのかはわからない。

「……怪人化した人間とは、先日のミラーージュのような奴か？」

立てた片膝に頬杖をついて、私から目を逸らしたままソニックさんは訊く。

あれ？　そこ？　そこに反応したの？

なんかソニックさんらしくない所を気にしてるな。この人、そんなことに興味を持つ人だっけ？

それとも「またあんなのが出たのか？」って思ってるのかな？ それならまだ納得かな。ミラージュみたいな動機と経緯で怪人になった奴が他にもいるとしたら、そりゃドン引きでしょうね。

「いいえ。幸いと言えるかどうかはわかりませんが、彼女のような自主的というか自業自得ではなく、怪人によって人為的に怪人に変えられたそうです。」

私はよく知りませんが、怪人細胞？ っていうものを取り込んで怪人になったそうです。あと、同じように人を怪人に変えて仲間を増やそうとしているらしいです」

「そいつとサイタマは戦ったのか？」

「はい。いつも通り瞬殺でした」

私がちよつとソニックさんらしくないなと思いつつ答えると、これまたソニックさんらしくない質問をされた。けど、らしくない事を疑問に思う前にほぼ反射で即答しちゃった。

するとソニックさんは、ジェノスさんによって短髪になった頭を乱暴に掻き毟りながら、「くそっ!!」と悪態をついた。

え？ どうしたのソニックさん？

「……いや、そいつに適性がなかったただけだ。そうだ。俺なら、この音速のソニックならばそれこそレベル竜を超越する怪人に……」

「は？ ソニックさん、何言ってるの？ お腹を壊しただけじゃなくて、熱も出てませんか？ 迷走どころか本末転倒してますよ。」

ちよつと本当に、横になって休んでくださいよ。薬も買って来ましょうか？」

私が困惑していたらブツブツとソニックさんが何かを呟きだし、その呟きがあまりにも彼らしくなかったので、本気で心配になってしまった。

私の言葉が耳に入るのかどうかも怪しい様子だったけど、幸いながらソニックさんは私の言葉を認識してくれた。

「……迷走？ 本末転倒……だと？」

頭を掻きむしりながら項垂れていたソニックさんは、項垂れたまま血走った目をこちらに向けてきた。

あ、これ幸いじゃないわ。むしろ私、地雷踏んだわ。

……え？ 何で？ 地雷どこ？

「……お前は、俺が怪人になってもサイタマに勝てないと思っているのか？ むしろ怪人になったら、それこそ勝てるわけがないと思っているのか？」

「いや、勝てる勝てない以前に怪人になろうって手段を選んだ時点で、お兄ちゃんどころかソニックさんは自分で自分を侮辱してるじゃないですか」

今すぐレポートで逃げ出したいほどの殺気をぶつけられながら問われた言葉に、これまた反射で答える。

待って、ソニックさん。私には本気で、今あなたが何にブチ切れているのかわからない。

そして私の答えに、ガチギレの殺気が一気にしぼんでいった理由もさっぱりなんですけど？

「……侮辱？ 俺が俺を、怪人になることで侮辱？」

項垂れていた顔が上がり、元々童顔な顔がまたさらに幼く見えるポカン顔で、私の言葉をオウム返しする。

ソニックさん、マジで熱出てませんか？ 何でそんなにおかしな事ばかり言うんだろう？

「侮辱でしょう？ そんな深夜の通販番組で紹介される痩せるサプリみたいなノリで、あなたの今までの努力を超える力が手に入るものに頼るなんて。」

それにお兄ちゃんは人間の出来る範囲内の努力で今に至った人なのに、人間をやめることでお兄ちゃんを超えて何を得るんですか？ それで満足できるんですか？ 出来たとしても、その次はどうするんですか？

今までの自分を全否定することで得た力と結果の先で、あなたは何を目指すんですか？」

ソニックさんの疑問に答えるつもりが、逆に怒涛の質問返しになってしまった。

けど、本気で私にとって今のソニックさんの言動が訳わかんなくて

疑問。何でこの人、怪人になりたがってるの？

意識が実は、熱で朦朧としていないだろうか思えない。

だってこの人は、絶対に認めないだろうけど相当な努力家だ。

生身でサイボーグのジェノスさん以上のスピードを出せる時点で相当だし、この体脂肪は一桁だろうけど筋肉だってスピードの為、軽量化の為にギリギリまで絞っているであろう体型を見れば、そう思える。

何より、お兄ちゃんの「マジ反復横跳び」で吹っ飛ばされた時とか、ミラージュの時とかでちよつとこのボディライン丸出しの服が破けて体の一部が見えたけど、その体は新旧を問わない傷だらけだった。

明らかにあれは全身に及んでいるし、古傷はともかくこの人の強さからして新しい傷は負けたからついたものでもないはず。

あれは自分でつけたもの。自傷なんかじゃなく、強くなるために負ったもの。

動機は何であれ、ジェノスさんと同じく前を向いて進み続けたからこそ負った努力の証だ。

それを、そこまでして得たものを、それまでの時間も労力も何もかもを否定して無価値に落とすようなものに頼ろうとするなんて、ソニックさん本気で大丈夫なの？ が私の正直な感想だ。

この人がお兄ちゃんを殺したがっているのは、悪気なんて一切ないっていうか、お兄ちゃんはマジで何も悪くないけど、それでも圧倒的な強さで、ソニックさんの自信や努力を完膚なきまでに否定してしまっただけなのに。

自分の今までを否定されたくないからこそ、お兄ちゃんを超えたいんでしょう？

なのに何で怪人に……、それも食べたらなれるなんてお手軽な方法を取ろうとするのかな？

本当に迷走の果ての本末転倒じゃない。

そんなことを思いながら私はソニックさんからの答えを待っていたけど、返ってきたのは答えじゃなくて質問だった。

「……お前は、俺が怪人になる訳ないと思っっているのか？」

「当たり前でしょ」

\* \* \*

うーん。本当にこのソニックさんをどうやって寝かせよう。相当ヤバいぞ、これ。

もういつそ、お兄ちゃんを連れてきて気絶させた方が早いかも。

「ミラーージュのような自分の心の問題で無自覚で自然に変化した怪人ならともかく、自分から意図的に怪人にはならないでしょ？」

そんな手段を取る人なら……、そんな今までの努力を否定して、これからの可能性を諦めてしまえる人なら、そもそもお兄ちゃんに勝とうなんて執着しないんじゃないですか？

痛い思いも努力するのも嫌だから怪人化なんて楽な方向に逃げようとする人が、何で何度負けてもお兄ちゃんに向かってくるんですか」

私も私で本末転倒な解決法を考えつつ、ソニックさんの当たり前すぎて何でこんなことを訊くんだろう？ としか思えない質問に答えたら、ソニックさんはしばらく沈黙した後、いきなり私の前から姿が掻き消えた。

「……誰が『何度負けても』だ。俺は負けていない。一時的に退いてやっただけだ!!」

「うわっ!! 思ったより元気！ でもお腹ゴロゴロいってるから安静にしててくださいよ!!」

消えたかと思ったら、私の後ろに回って首に手を回して羽交い絞めにしながらキレられた。

体勢は地べたに座っている状態でのあすなろ抱きが一番正確な体勢だけど、この人相手ではときめかない。今はじやれてる程度だけど、これはこれ以上バカなことを言ったら首を折るぞって意味の体勢だ。

っていうか、そこ!?! そこに反応するの!?! 本当にもう負けず嫌いで、ジェノスさん以上に大人げない人だな!!

私がジタバタもがきながらも「ごめんなさい！ 負けてません！ ソニックさんは戦術的一時退却をしているだけです!!」と言い続けて

いたら、少しは首に回る腕の力が緩んだけど拘束は解いてくれない。  
ソニックさんは私をまるでクッションかぬいぐるみのように前抱  
きしたまま、私が後ろを振り向けないように、自分の顔を見せないよ  
うに、私の頭に顎を乗せてポツリと零した。

「……ヒトとしての生に、未練はない。……あいつに敗れた時点で、俺  
は死んだも同然だったのだから」

私に「負けてない」と言い張っていたくせに、ソニックさんは自分  
の敗北を認める発言をする。

いや、一応相手をお兄ちゃんだと言っていないから、ソニックさんの  
にはセーフなのかな？

もちろんこんなことを口に出したら、その時点で私の首はボツキリ  
折られるだろうから、黙って話を聴く。

普通に気になったから、聴きたかったってのもあるけど。

熱による世迷い言だと思うけど、何であんなことを言い出したのか  
が知りたかった。

「このままいくら修行を重ねても、あいつに勝てるビジョンが浮かば  
ない。だが、何としても勝ちたかった。諦められなかった。だから  
……そのための手段など選んでいられなかった」

そこまで言って、ソニックさんは黙り込む。

私に話せることはそこまでなのか、それともこの言葉が全てなの  
か。

どっちにしろ、ソニックさんやっぱり具合が悪い所為か、なんか妙  
な迷走してるなあ。

まあ、努力が嫌だから怪人化に頼ったんじゃないやなくて、努力だけでは  
超えられない気がして追い詰められたから血迷ったのなら、まだあの  
怪人になりたがる発言は納得だ。

それ以外は、全然納得も理解も出来ないけど。

「自分の手で勝ちたい、相手より強いことを証明したいと思ってる時  
点で、どう足掻いてもヒトそのものじゃないですか。死んだも同然な  
のにそんなことを思って行動に移すなんて、どんだけアグレッシブな  
悪霊なんですか」

ソニックさんに羽交い絞めにされたまま、私はまずは正直な感想を言ってみた。

いやマジでソニックさんが死んだも同然な存在なら、サダコとかカヤコ以上に行動派すぎる悪霊じゃねえか。

「勝てるビジョンが浮かぶ相手としか、ソニックさんは戦う気がないんですか？ お兄ちゃんは、レベル狼相手でも勝てるビジョンなんて浮かばなかった時期がありますよ。それでも、貫き通したから今があるんです。」

お兄ちゃんに出来たことが、ソニックさんには出来ないんですか？」

そしてわざと少し、挑発するように私は言ってみる。

一瞬、私の首に回しているソニックさんの腕に力が入るけど、私の首を折るのにも締めるのにも全然足りないの、私は気にせず言葉を続ける。

「勝てるビジョンが見えなくても、目標のお兄ちゃ……目標の人が見えてるんだから、いいじゃないですか。その人にひたすらまっすぐ向かって行けば。それにあっさり超えられたのなら、それこそ今までは何だったんだ？ って拍子抜けしません？」

あと、怪人になったソニックさんがその人に勝ったとしても、それで勝ったと言えるのはソニックさんではなく、怪人細胞の方ですよ。気持ち悪い肉の塊の方があなたより優れているなんて、あり得ないでしょう？

……だから、水分しつかりとつて休んで落ち着いてくださいよ。私を知っている強いあなたを侮辱する程、今のあなたには余裕がなくて迷走していますよ」

ソニックさんは何も答えない。ただまた少しだけ腕の力が強くなった。

私を逃がさない為でもいつでも首を折れるようにでもなく、本当にただ抱きしめているだけだと錯覚してしまいそうな力加減。

縋るような抱擁に思えた力のまま、ソニックさんはまたしても、ポツリと零すように呟いた。

「……お前は、人間のまま俺がサイタマを超えられると信じているのか？」

あ、認めようとしなかったのに名前出した。本当にソニックさん、弱ってるなあ。

「ええ、もちろん。けど、ソニックさんが強くなる分、お兄ちゃんもまたさらに強くなると思ってますけど」

私は正直に、言わない方が良いとわかってる部分まで答えた。

だって前半の肯定だけじゃ、私のブラコンぶりを知ってるこの人じゃ、口先だけの言葉だと勘違いされそうなんだもん。

ソニックさんが強くなることを信じて疑わないのは本当だけど、いくら恩があつてなんだかんで信頼している人とはいえ、やっぱり私の一番はお兄ちゃんなのは間違いないから、今のお兄ちゃんを超えることは信じてても、お兄ちゃんに追いつけるかどうかは別。

っていうか、これはソニックさんを信じてないんじゃないかと、私がお兄ちゃんに期待しているという話。

そのことを理解してくれていたからか、ソニックさんは私の言葉にマジギレはしなかった。

あすなる抱きのまま後ろから両頬をつねる程度に機嫌を損ねちゃったけど。

「痛い痛い痛いですソニックさん！ ブラコンの戯言だと思って見逃がしてくれてもいいじゃないですか!!」

「うるさい、黙れ。貴様は本当にそそらせておきながら、即座に萎えさせってくるな。」

くそっ！ 腹を壊してなければいい機会だから食ってやったのに……」

私が喚いて抵抗するけど、本当にお腹壊して調子悪いのか疑うほどに拘束は解けないし、私の頬をつねるのをやめてくれない。

っていうか、食うって何？ 変なもの食べてお腹を壊したのに、何を食ったがってるのソニックさん。意外とこの人、食い意地はってる？

そんなことを思っていたら、唐突にソニックさんは私を離して、そ



のままトイレに向かう。

あ、また波が来たのかな？

私はもちろんソニックさんも気にしないで欲しいはずなので、唐突なソニックさんの行動を突っ込まずスルーして、勝手にお粥でも作ろうと私は台所かアウトドア用のコンロとかを探そうとしたんだけど、トイレからちよつとスルー出来ない音が聞こえて、思わずそちらに振り返った。

いや、ソニックさんの名誉の為に言うけど、下痢特有のあの音が凄かったとかじゃないよ。

どつちにしろ汚い話だけど、そういう音じゃなくて明らかに嘔吐しているような声と音が聞こえたから、心配になっただけ。

お腹を壊してるんなら嘔吐もあり得るけど、そこまで調子が悪かったの？

お粥よりも、薬を買ってきた方が良くない？　けど、嘔吐してるんなら飲み薬なんて症状落ち着くまで意味ないから、しがみついても病院に連れて行くべき？

予想外の症状に私はパニックを起こしてオロオロしていたら、思ったよりも早く、そして元気そうにソニックさんはトイレから出てきて、口元を乱暴に拳で拭いながら言った。

「……ふん。元々、都合よく利用するだけで手を組む気はなかったかな。血迷ってあの、過去の栄光にしがみつく老害共に借りを作らずに済んだのは、僥倖とでも思っておくか」

「……ソニックさん、何の話ですか？」

「こつちの話だ。お前には関係ない」

なんか顔色は悪いまま、でも妙にすっきりした顔で訳の分からない事を呟くので私は尋ねるけど、ソニックさんは答えてくれず一蹴する。

ただ、私を真っ直ぐに見てこの人は、私に宣言した。

「エヒメ。俺は怪人にはならんぞ。ヒトのまま、俺は全てを超えてやる」

その答えに、私が返せたの反応はもちろん困惑。小首を傾げて、私

は当たり前前のことを言うしかなかった。

「……知ってますけど？」

「そうだな」

私の答えに、ソニックさんが満足げに笑った理由はわからない。

けどまあ、体はともかく精神的な調子が戻ってくれたのなら、別に  
もう何でもいいや。

\* \* \*

その後、ソニックさんは何かを振り切ったのか「さすがに腹が減つた。なんか作れ」と言って甘えてくれたので、予定通り私はお粥を作る。

その最中、ソニックさんは横になりながらまたなんかブツブツ呟いてた。

「……吐き出したから完全な影響はないだろうが、多少はやはり影響があるようだな。まあ、この程度は俺を露払いに使おうとした慰謝料だと思つて、ありがたくだいておくか。

……くくつ。体が軽い。この感覚……まだ慣れるまで時間がかかりそうだが、嵌っていた袋小路から抜け出すにはちょうどいい、目先の目標だ。

待っている、サイタマ！ 新たなパワーを得た俺が、今度こそお前の息の根を止めてやる!!」

……ソニックさん。何言ってるかほとんどわからないし、やる気を出してくれたのは別にいいんだけど……、体が軽く感じるのはお腹壊したから痩せただけな気がする。明らかにちよつとやつれてるし。

っていうか、あなたの体格からして脂肪はもちろん筋肉も限界まで削つてらるだろうから、痩せたとしたら失える体重分のものって水分だけだね？

とりあえず水のんで本当に寝てください、音速の残念忍者。

理由にはできない

「今までずいぶん調子に乗ってくれたじゃねえか。今日がてめえの最期だぜ……?」

オラオラオラア! 連続弱下キック!! 俺が発見したハメ技だ! ガードを解いた時が無限ヒット地獄の始まりだぜえ……!」

はははっ!! ついにキングにほえ面をかかせる時が来たようだな!!

こいつ、俺がたまには負けたいのなら負けさせてやるとか言っておきながら、ハンデとして指2本しか使わねえってほざきやがって……。それ、普通は勝たせてやるためのハンデだよな!? 何で俺を負かすつもりなのにお前がハンデ負ってるんだよ!

そこまで俺はゲーム弱くねーよ!!

第一テーマはゲームの事になると大人げなさすぎなんだよ。

何で協力プレイしてんのに、お前がアイテム全取りしてんだよ。俺は初期状態でボスに挑まなくちゃならないってなってるのに、何が「俺一人で勝てるから大丈夫」だ! 協力プレイする意味ねーだろ! 俺の存在がハンデってことか!?

けどその余裕もここまでだ。

女キャラとかなんか可愛いキャラしか使わねーお前は知らないであろう俺のハメ技で、今日こそお前の自信をボツキリ折って……

「わかってないな……。ハメ技というのは、こういうものを言うんだよ」

……は!? え? ちよっ、今何が起こった!?

待て待てマジで待て!? 何で俺のキャラ、バニーガールに転ばされてそのまま空中から落ちてこねーの!?

《K・O!!》

おい待て! もう終わってる! KOって言った!! お前はいつまでハメ続けるんだ!? もうヒット数とつくの昔にカンストしてるわ!!

「くっ、糞ゲー! 糞ゲーだね!!」

\*\*\*

「……サイタマ氏、ごめん。調子こいて5分間ハメ続けたのは大人げなかった……」

何だよあの連続ヒット……。

ありえねえだろ。

「……サイタマ氏ー？ 聞いてる？ 怒ってるの？ 凹んでるの？」

次はもつと速い連続弱キックで絶対に勝つ。

よし、そうと決まれば早速特訓を……。

「……サイタマ氏。そういえば俺は思うんだけど、サイタマ氏の悩みてエヒメちゃんがいれば万事解決じゃない？」

「は？ エヒメが何だった？」

「ほら、そういう所。サイタマ氏がエヒメちゃんの話話を絶対に聞き逃さない間は大丈夫だよ」

いや、なんかキングはしみじみ納得してるけど訳わかんねーよ。何の話だよ？

「サイタマ氏、強くなりすぎて相手から学習して吸収するものがなくなつたとか、人としての感性がどんどん鈍って来るとか話してたじゃん？」

俺がコントローラーを置いてキングと向き合ってみると、キングがそういうえばこいつん家でゲームするきつかけである話を語り出す。

あー……そういうえばそうだ。そんな話をしてたんだったな。

「なんかあの時は忘れてたと言うか、当たり前の前提すぎて頭から抜けてたけど、相手から学べるものがないはともかく、サイタマ氏はエヒメちゃんの事に関して人としての感性とか感情が鈍る事なんてないでしょ。」

そもそも、サイタマ氏は孤独だと思ってるけどそれはエヒメちゃんに失礼じゃない？」

……確かに。俺も当たり前すぎて悪いけど忘れてた。

そうだ。俺は怪人に負けて流す悔し涙の味も、接戦の末の勝利の感動も忘れたけど、エヒメをミラーージュから助けてやれなかった無力感や悔しさはもう解決したと言える今でも忘れられない。

あいつがああ透明化するストーカーの怪人に襲われてなかった、怪我也何もしてなくて心底ほっとした。無事で良かったとうれし涙が零れそうになった。

そして何より、エヒメはずっと俺の側にいてくれた。

俺がヒーローを始めた頃、怪人との戦いで大怪我して帰って来るのが当たり前の頃から俺を心配して、俺の怪我に泣いて、それでも俺を送り出してくれて帰って来たら「お疲れ様」と労わってくれた。

俺は孤独である訳がない。

エヒメがいる限り、例えば一緒に住んでなくても俺は孤独じゃない。

……だけど

「そうだな。けど、なんつーか……俺がヒーローをやってる理由、続ける理由にあいつが関係してるのはいいいけど……俺がヒーローとして楽しむ理由にあいつを使ったらダメだろ」

俺は置いてたコントローラーを持ち直してもっと速い弱下キツクの特訓を再開しながら言うと、キングが後ろで「え？ 何で？ とうかそれ、違いあるの？」って訊いてきた。

あるに決まってるんだろ。

「あいつを悲しませたくない、泣いてほしくない、痛い思いなんかしないで欲しいからヒーローやってんのに、俺がヒーローとして楽しむ理由にあいつを使うってことは、あいつの不幸を俺が望むってことになるじゃねーか。」

出来るか、そんなこと。それなら俺はこのまま怪人退治がワンパンで終って、退屈なままがいいに決まってる」

俺の答えにキングは一拍おいてから、「サイタマ氏はエヒメちゃんに関わると最強で最高のヒーローになるよね」とか言った。

何だよ、それ褒めてるのか？ 当たり前のことだろ、こんなん。

けど……うん。これも当たり前すぎて改めて考えたことはなかったけど、そう思えば俺が退屈なのを何とかしたいって気持ちには変わりねーけど、退屈であることも悪くないと思えた。

俺が退屈に思うほど簡単に怪人を倒せるという事は、あいつは俺が怪我するんじゃないか、死ぬんじゃないかって心配をしなくて済むっ

てことなんだから、俺は喜ぶべきだったんだ。

キングが言った「強くなっただけで目的地にたどり着いたって勘違いしてる」は、まさしくその通りだ。

隕石の時に俺が約束を忘れてあいつを大泣きさせたくせに、俺はまた大事なことを忘れかけた。

ミラージユの件が最近あつたくせに、あいつは俺やジエノスが特に何もしなくてもたったの一日で自力で回復して笑うようになってたから。俺が知るより、いつの間にかずいぶんと強くなってたから。

エヒメの存在が当たり前すぎて、あいつが楽しそうに幸せそうに笑っているのが何もしなくても当然あるものだといつの間にか思い込んで、軽く見てたんだろうな。

キングの言う通り、俺は最強のヒーローにはなれているのかもしれないけど、最高のヒーローなんじゃねえわ。

俺はうっかり、自分の楽しみの為にまたあいつを泣かせるところだった。

「……ありがとな、キング」

\* \* \*

「え？ 何が？」

キングが言った「最高のヒーローとは何か」「理想について考える」は、言われた時は余計に悩みが漠然としてさらに退屈になりそうだと思うんだけど、エヒメのことを考えたらなんとなく俺がなりたいたいもの、目指したい理想がわかった気がした。

何より、俺が自分で「当たり前前だろ」と言っておきながら、自分の楽しみの為にあいつに心配をかけて泣かせてたかもしれないってことに気付けたのは良かったから礼を言ったけど、キングは何もわかってねーみたいだ。

説明するのは面倒だし、さつきハメ続けられたことを思い出したらムカついて、礼なんか言わなくても良かったかもしか思ったからそれ以上は何も言わず、俺はひたすら弱下キツクの繰り返し。

「……ところでサイタマ氏」

TV画面にうつすら映るキングが、やけに気まずそうな顔をしてま

た俺に話しかける。何だよ、俺はお前の所為で忙しいんだよ。

「これも今更だけど……なんかサイタマ氏がすつごくナチュラルに見送ってたから言えなかったんだけど……、いいの？ エヒメちゃんを一人で、そのソニックって人の所に向かわせて？」

またエヒメの話題だったので俺は無視できず、けどこれは大したことない話だったからゲームを続けたまま答える。

「まあ、大丈夫だろ。俺よりもあいつの方がソニックの扱いをわかってるし、ソニックも体調悪いって嘘ついて騙してなんかするってタイプでもないし。」

っていうか、お前にソニックのこと話したっけ？」

「あ、覚えてないんだ。前にフブキ組とゲーム勝負して、そのまま俺ん家にジェノス氏とシルバーファングさんと泊まった時にサイタマ氏は話してたよ。ジェノス氏のライバルでしょ？」

あー、あつたなそんなこと。けど、話したっけ？ 何か久々に飲んだせいか変に酔いが回ったのと真夜中テンションの所為でクソくだらねー猥談で盛り上がったことは何となく覚えてるけど、ソニックの話なんか何の流れで出たんだ？

けどジェノスのライバル認識されてるってことは、間違いなく話したんだろ？

「ふーん。まあ、合ってるような間違ってるような……。」

キング、ジェノスに今日のこと絶対に言うなよ。クソ面倒くさいことになるから」

「言うまでもなくわかってる」

ひとまずキングの答えに納得して、ついでにエヒメがソニックの看病に行ったなんて事実をジェノスが知った時の面倒くささに今更に気付いて俺はキングに口止めすれば、こいつはキングエンジン鳴らして即答。

お前……そこまで怖いのか？

「……というか、サイタマ氏。本当にいいの？ 何で心配してないの？もしかしてサイタマ氏、そのソニックって人がしたこと忘れてない？」

その人、エヒメちゃんにセクハラしたんじゃないの？」

少しキングエンジンが落ち着いたところでキングがまだしつこく、エヒメを一人でソニックの所に行かせて良かったのかを訊くから意味わからなかったけど、最後の言葉で俺の弱下キックを繰り返してた手が止まる。

………思い出したくない事、思い出しちゃった。

エヒメがやたらと斜め上なパニック起こして、そんでもってあいつ自身は自分がされたことをさほど気にしてなかったからすっかり忘れたけど、そうだ！ あいつは俺とジェノスへの嫌がらせと、エヒメの朴念仁ぶりにキレていきなりエヒメにキスをかました奴だった!!

あれはマジでエヒメが気にしてないから俺も別に今更怒る気はねーんだけど……、そうだよあいつはいきなりそんなことをやらかす奴なんだから、二人つきりにしたらダメだろ！

いや、エヒメが言うには腹を壊してるらしいから、これが嘘じゃない限りは最悪の事態には……。

なんだかんだで正々堂々とした戦いとかを好む奴だし、そもそも多少の体調不良はプライドが邪魔して俺はもちろんエヒメにもつていうかエヒメにこそ見せないだろうから、ここでエヒメに頼るってことはマジでヤバいってことだし……。

あー！ けどエヒメの看病で体調が回復したらヤバイ!!

あいつ、ソニックに対して何度か助けられたから妙に懐いて信頼してるから、絶対に押し倒されてもとっさにレポートで逃げるが出来ねえ!!

絶対にキスの時みたいにポカンとして変なパニック起こしてるうちに食われるわあのアホは!!

「さ、サイタマ氏ー。自キャラがもう死んでるけど、気付いてる？ つてか、大丈夫？」

キングが何か言ってるような気がするが、俺の耳には言葉どころか音としても認識できないほど、俺の頭の中には「やばい」の一言で埋め尽くされる。

ジェノス。お前の殺意を大げさに思っただん引いて悪かった。う



ん、あいつは殺しておくべきだったわ。

「……さ、サイタマ氏?」

そう結論付けたらやつとキングエンジンの音が聞こえたから、俺はコントローラーを置いて今日はひとまず帰ると言うつもりで振り返る。

「……キング、ちよつとソニックを殺してくるわ」

「キングさん、お邪魔しま……って何!? 何事!? どうしたのお兄ちゃん、ジエノスさんみたいなこと言い出して!!」

「エヒメちゃん、ナイスタイミング!!」

うっかり今日はもう帰る理由の方を俺が言ってしまったタイミン  
グで、エヒメがキングの部屋の中にテレポートで現れたから、エヒメ  
は思いっきり困惑しながら突っ込み、キングはエヒメに拝む勢いでな  
んか今ここに現れたことを感謝してた。

警戒心がなさ過ぎて心配だったアホが、どっからどう見て無事に  
帰ってきたことで俺の方も暴走してた不安や心配が納まって、とりあ  
えずエヒメの突っ込みに「何でもねーよ」と答えておく。

いや、マジで暴走しすぎだろ俺。ジエノスの気持ちがわかるってな  
んだ。たぶん、あいつの気持ちがわかるようになったらそれはそれで  
ソニックよりヤバイ。

エヒメがいくら心配してもそのさらに斜め上に暴走して面倒かけ  
るからエヒメ本人も俺も許してるけど、あいつの過保護さと悪い虫認  
定の厳しきはマジでヤバイ。

「本当に? ソニックさんにマジ反復横跳びで吹っ飛ばすどころか粉  
みじんにしない?」

「しないしない。っーか、あいつはマジで何だったんだよ?」

あいつと実力が拮抗してるジエノスと違って俺はマジで殺す気にな  
れば殺せると思ってるからか、エヒメは本気でソニックを心配して  
念押しするけど、俺は速攻で黒歴史化したさっきの言動をなかったこ  
とにしたいからコントローラーを握り直してテキトーにあしらいな  
がら、話を変える。

「うーん。やっぱりお腹を壊してたみたいだけど……ものすごく具合

が悪いのかと思っただらそうでもなかったみたいな……」

「なんだよそれ？」

俺のテキトーなあしらいにエヒメはムツとしつつも、看病して来たエヒメ自身も謎だったらしく腕を組んで首を傾げながら答える。

けど結構早く帰ってきたことといい、こいつは困惑してるけど心配はさほどしてない事からして、まあ大したことはなかったんだろう。

そんでもって大したことなかったのにエヒメが無事ってことは、俺の心配は兄バカの過保護だったって訳か。

「エヒメちゃん、その人が何を食べたのか結局わかった？ 火を通した方がお腹壊す心当たりになる食材」

エヒメが無事に帰ってきたことで、やっぱりさっきの心配はやりすぎだったと思っていたら、キングがお茶をエヒメに渡しながら訊く。

何をこいつは訊いてるんだ？ って思ったけど、最後の発言で納得。ああ、そういえばそんなこと言ってたらしいなソニック。思い出すと俺も気になるぞ、その食材。

「いえ、さっぱりです。でも、あの人は思ったより食い意地が張ってるのに、食べ物知識が危うい人だと判明したので、気にするだけ無駄です。」

ソニックさん、クレソンを茸だと思ってるし、変なもの食べてお腹壊してるのに『腹を壊してなかったら食ってた』とか何故かまだ食べることを考えてましたし」

エヒメはキングの質問に呆れきった様子で、ソニックがそりや腹壊すだろって要因を話したんだけど………おい、このアホ。本つつ当にこのアホ!!

最初の方は確かにソニックがアホだって話だけどな、ソニックの発言は食い意地張ってるからじゃねえよ！ そいつが食いたがつてんの、どう考えてもお前だアホ!!

ソニックの事ほとんど知らねーキングでも察してるのに、何でお前はわかってねーんだよ！ よく無事に帰ってこれたな！

ジェノスが良かなくて良かったとか思ってたけど、これジェノスが良かったわ！ 全然過保護じゃねーわあいつ!!

「……エヒメ。ちよつとここに座れ」

「え？ 何？ 何事？ 何されるの私？」

握り直したコントローラーをまた即行で床に置き、俺の前に座るように言うとエヒメは素直に座るが、こいつは相変わらず全くわかってない。

そんなわかってない妹に、ソニックがどういう意味で「食う」と言っただかを説明は、いくらデリカシーがないと散々言われてる俺でもさすがに出来ねえよ。

とりあえず、「ソニックと会う時は俺かジェノスを連れて行く事」を約束させるか。

## 絶対に認めない

……どうやって、一体いつねぐらにしている小屋に帰ってきたのかは覚えていない。

気が付いたらここで寝ていた。

思い出せる直前の記憶は、あの子の……あの人のことだけ。

「……変わってなさすぎだろ。ひいちゃん」

ぼろいソファアーの上に横たわって、思わず素の感想が口から零れた。

ああ、マジであの子は、あの人は、ひいちゃんは変わってなかった。外見こそはそりや大人になってたけど、それも俺の記憶の中のひいちゃんをそのまま大人にした美人になってただけで、良くも悪くも意外性なんかなかった。

変わってなかった。ひいちゃんは何もかもが、俺の記憶通りだった。

『ガロウ君！ どうしたのその怪我!?!』

会って真っ先にしたことが、俺の心配だった。

俺の怪我でパニックを起こしてどうしようどうしようって泣きそうになるわ、文字通り俺の傍まで跳んで来て手当の為に何の躊躇もなく自分の履いてるスカートを包帯代わりに破こうとするわ、テレポーターで俺を病院まで運ぼうとするわ……、相変わらずお人好しすぎるだろ。

……っていうか、ひいちゃん。テレポーターって何？ 何でンなもん使えるようになってんだ、あの人は。

今更になってひいちゃんの特技？ が気になるが、それはすぐに「どうして?」という他の疑問に押し潰されて消える。

……何で、あんたは変わってないんだ。どうして、あんなにも昔のままなんだよ。

何で自分のハンカチや服が俺の血で汚れても一切気にせず、俺の手当てをしようとするんだよ。

足にギブスが必要な怪我してるのに、絶対にすっげーキレイだった

はずの手に火傷の痕が、色が変わるどころか皮が引き攣れて柔らかいのにガサガサした感触になって、年寄りみたいな皺が出来てるつてのに、何が「大丈夫」だよ。

何が……何が……。「私も、ガロウ君の事が大好きだから！」だ。

……何で、どうしてあんなことを言えるんだ？

『え、えつと、ガロウ君。久しぶり』

なあ、ひいちゃん……。あんたは俺がヒーロー狩りをしてることも、ヒーロー協会から「人間怪人」って俺が呼ばれてることも知ってたんだろ？

どういう経緯で知り合って具体的にどういう関係かはさっぱりだが、あんたはよりにもよってキングと親しげだった。

……俺のことを何も知らなかった訳じゃないんだろ？

だから、なんかグダグダになってたところをキングのとりなしで仕切り直した時、あんな顔をしたんだろ。

……俺の怪我なんかよりも酷い傷を負っているような、痛そうで辛そうなのに、それを必死で隠して、俺に心配をかけないように笑ってたんだろ？

なのに……。なのに……。どうしてあんたは……。君は……。

『ガロウ君、病院に行つて手当てしてもらおう？』

何で君はあんな辛そうな笑顔をしたのに、俺なんか未だ女々しく君のことを好きのままであることを知つてあんなに嬉しそうに笑つて、手を差し伸べるんだよ。

『……違うよ、ガロウ君』

自分はそうやって「大丈夫」って言い張り続けるくせに、何で俺の「大丈夫」にはあんなにも寂しそうな顔をするんだよ。

『私があなただを心配するのも、助けたいと思うのも、あなたが弱いからじゃない。ただ単に私があなただの事が好きで、痛い目に遭つて欲しくなくて、悲しい思いなんかしてほしくないから助けるの』

何で、俺にまた「助けて」って言葉を与えようとするんだよ。

……ひいちゃんが何であんなことをしたのか、俺にはわからない。けど、ひいちゃんが何を思つて俺に手を差し伸べてくれたのはわか

る。わかってしまう。ひいちゃんがあまりに変わってなかった、俺の記憶通り過ぎた所為で俺の勝手な期待じゃないってことを確信してしまう。

ひいちゃんは俺がヒーロー狩りじゃない事を期待した訳でも、俺が人間怪人じゃないと信じた訳でもない。

あの人は、俺が怪人でも俺のことを好きだと言ってくれた。俺が怪人でも、ヒーロー狩りでも、俺を助けようとしてくれた。

昔のように、俺の間違ってている所、悪い所を「ダメだよ」と叱るけど、その前に俺がどうしてそんなことをしたのかを訊こうとしてくれたんだ。

俺の悪くない所を、悪いことをしても守りたかったもの、訴えたかったものを知ろうとしてくれたんだ。

俺の話を、聴いてくれたんだ。  
「……何でプロヒーローよりも、ひいちゃんが一番ヒーローらしいんだよ」

一体いつ用意したのかも覚えていない濡れタオルで額の汗をぬぐいながら、俺は当たり前のことをぼやく。

そう。当たり前だ。あの人が、ひいちゃんが一番ヒーローらしいのは当たり前のことだ。

俺のヒーローの定義は、あの人だから。ひいちゃんこそが俺のヒーローだから。

ヒーローなんか嫌いで怪人に憧れていた俺が唯一好きになった、憧れた、正しいと思えたヒーローだから。

……だからこそ、俺は怪人になった。

彼女こそがヒーローだから。

彼女だけがヒーローだから。

よ。だから、だから俺は怪人に——ならなくちゃいけないんだよ。

……ああ、ヤバいかもな今の俺は。

熱が引かない所為か、思考がおかしい。

この思考から離れたい、あの人のことを忘れたいからこそ何も考えずにいられる戦いをしたいのに、熱の所為で体がろくに動かないって、この悪循環に陥ってる。

……いつそ、あの人との再会も熱の所為で見た夢、俺の妄想だったらしいのに。

そんなことを考えながら、俺が体を起こしたタイミングで誰かが小屋に入って来た。

このタイミングで、追っ手か!? とさすがに焦ったが、暗くてよく見えねえけどそれは明らかに子供だった。

何だ? 真っ昼間から肝試しか?

「ここで何してる?」

訊くと言うより脅して追い払うつもりで言えば、ガキは逃げずに答えた。というか、ビビりすぎてむしろ腰が抜けて逃げ出せねえみたいだな。

「(こ)……(こ)……この小屋は……ぼ、僕たちの……秘密基地で……」

追い払いたいのには俺のしたことは逆効果でどうすつかと考えていたら、答えた声に聞き覚えがあることに気付く。

ついでに眼も慣れて、ガキの顔が見える。

そのガキはここ最近では見覚えがありすぎるガキだった。

「おい、お前。公園のベンチで『ヒーロー名鑑』読んでたガキじゃねえか」

「え? ……あ!」

やたらと特徴のあるブサイクなガキだから確かめる必要はないと思っただが一応訊いてみると、ガキの方も気づいてビビりまくってた様子が一気に気安くなった。

「怪人好きなおじさん!」

おじさんじゃねーって何度言わす気だ、クソガキ。

\* \* \*

……クソツ！ 昨日、ひいちゃんと再会してからここに帰って来るまでの記憶がねえから、たぶんどこかで見つかつてつけられたんだろうな。

ガキから借りたヒーロー名鑑で名前や階級を確認しながら、俺はひたすらこの状況を打破する方法を考える。

人数が多いがS級はいねえし、一番高くてA級8位だからいつもなら余裕だが、流石に連戦に次ぐ連戦で満身創痍、認めるのはこの上なく癪だが今の俺では不利すぎる状況だ。

まあ、不幸中の幸いかこのガキがヒーロー名鑑を今日も持ってたことと、どいつもこいつも目立ちたがり屋で自分の必殺技やら戦闘スタイルを一般人でも手に入る名鑑に公開してるから、ここから対策を立てていくか……。

「!?」

「ひえっ!? 何の音……!?」

そんな風に考えながら、改めて外にいる連中のデータを讀もうとしたタイミングで、外からドルルルルと低い音が響く。

たぶん、マシンガンとかガトリングみてーな連射式の銃火器の音だ。つてことは、デスガトリングの仕業か。

「さっさと出て来い、ヒーロー狩り！ 気付いてるはずだ！ そんな小屋では籠城するには心許ないだろう!!」

ちっ！ 時間がねえ!!

つていうか、さっきガキが戸を開けようとした時の殺気といい、今の発言といい、あいつらこのガキが小屋の中にいるつてこと気付いてねーのかよ!?

昨日のうちに俺とこの小屋を見つけたつてことは、そのまま俺が出て行かないように見張ってたはずだよな？ なら何で気付いてねーんだよ!! つーか止めるよ、入るのを!!

気付いてるなら、威嚇してる余裕なんかねえだろ！ 俺を怪人だろが凶悪犯だろうがとにかく危険視してるんなら、ガキの心配しやがれ!

それとも俺がガキ相手に、周りにバカにされないアドバイスをして



やるとは思ってねーのか？ ガキなんか小屋に入った時点で俺に殺されてるだろうから、気を使わなくていいってか？

……そうだとしたら、お前らマジでヒーロー名乗る資格ねえぞ。ヒーローじゃねえなら狩る気も起きねえよ。

ある意味、お前らこそが怪人だの悪役だのに相応しいわ、屑どもが。

「……ガキ、お前は床に伏せてろ」

このままこいつを真正面からはもちろん、小屋の裏手側の壁に穴でもあけて逃がしてもあいつらは俺が逃げ出したと勘違いしてこのガキに攻撃しかねないから、俺がガキに命じて最低限の情報を詰め込んだヒーロー名鑑を投げ捨てる。

ステインガームにてーにリーチが長いとはいえ接近専門なら、まだ勘違いで攻撃を仕掛けても直前に止めることができるだろうが、飛び道具メインのデスガトリング達はもちろん、鎖ガマとスマイルマンも途中で止められるような武器じゃねえ。

このままテメーはじっとしてろ。ガキ。

丁度いい。実践してやるよ。「周りにバカにされない方法」をな。

「……頼む。小屋は撃たないでくれ」

……そう思ってた小屋から出たのに、俺の口から出たのは命乞いにも取れるような言葉だった。

暗い小屋の中から外に出て、眼がくらみそうな光を見たことで思い出してしまったからつい、言ってしまった。

『助けて欲しい時は、「助けて」って叫んで』

口にすれば、その先を聴いてくれるのではないかと期待してしまっただ。

「素直じゃんか。降参か？」

けど、俺の期待はやっぱり無駄だった。どいつもこいつも、俺自身ではなく小屋を撃つなという言葉の意味を考えない。

マジで小屋に入ったのを見逃してるのか、それとも俺を捕まえるなり倒すなりに必要な犠牲だと思ってるのか、何で小屋を撃って欲しくないのかを訊かない。ガキの事を何も訊かない。

「馬鹿言え。お前らを狩った後で気持ちよく寝る為の寝床がないと困

るからな」

だから俺は諦めた。ガキのことは俺も話さねえ。

どうせ、話してもこいつらは信じない。下手に俺が小屋に固執したら、それこそ俺が勝っても嫌がらせの最後っ屁で小屋に攻撃しかねないから、これ以上小屋について注文を付けるのはやめる。

こいつらに……ヒーローに期待するだけ無駄だ。

今までの全員がそうだった。どいつもこいつも、こつちの話なんか聴きやしねえで自分の言い分ばかりべらべらしゃべる。

「顔色が悪いぞ。やはり弱っているようだな」

怪我して弱ってる相手を見ても、チャンスだと思つて喜ぶだけで心配なんかしねえ。

自分も俺ほどじゃないとはいえ怪我してるつーのに、パニック起こして泣きそうなぐらい心配して、手当てしながら病院に行こうなんて言わねえ。

「生け捕りにして、協会に連行する。」

犯行動機やお前と通謀する存在の有無など、絞りあげて吐かせる」俺を理解する為じゃねえ。

俺の何が間違つて何を正したら俺がもうそんなことしないのかを考えて、俺を思つて、俺を助ける為には俺の「理由」を知りたがるんじゃないかねえ。

むしろ俺を「理解できない異常者」として排除したいからこそ知りたいんだろ？

俺の言い分を、俺の訴えをバカにして嗤う為に訊くんだろ!!

あいつらのように!!

「流石はヒーロー様だ。殺さないでくれるとは、お優しいこつた」

俺の皮肉をただの強がりを受け取つてデスガトリングは「助かったと思うなよ」と、なーんにもわかつてねえ発言をのうのうとこまます。

お前らさあ、マジでヒーロー名乗つてて恥ずかしくないのか？

ワイルドホーン、「ただの粹がった若者が怪人なんか名乗ったことを後悔するんだな」とか言つてるけど、お前らがしてる事つて何なんだよ？

見殺す気じやなくてマジで気付いてないとしても、てめーらの怠慢でただのガキが小屋に入り込んだんだぞ？

しかも、あのガキの話じゃ他のガキに「中に入って出て行けって言ってこい」って言われて入ったんだぞ？

なら、近くにそんな命令したガキがいたはずだ。

そいつらにも気づいてないのか？ そいつらは帰したけど、中のガキには気付いてないのか？

気付かなかったのか？

中にもう一人、子供がいるってことを黙ってる卑怯なガキの嘘に。そんな発想もない程、平和ボケした世界しかお前らは知らないのか？

友達だと思ってた奴に、嫌がらせをしたら面白い反応を返すオモチャ扱いされて、危ない目に遭わされる子供なんかお前らの世界には存在しないっていうのかよヒーロー!!

お前らの仕事に、そういう子供に気付いて助けることは含まれてねえってか!!

「てめえらこそ、ヒーロー名乗ったツケは大きいぜ。

——— 今にわかる」

お前達にヒーローと名乗る資格はねえけど、だからと言って見逃すにはお前は屑すぎた。

あの子と、あの人と、「本物」とは違い過ぎた。

お前らの存在は、あの「本物」に対して侮辱にも程がある。

俺はひとまず小屋の上に飛び上がって、銃口や矢の狙いを小屋から離して宣言する。

お前らをカウントなんかしたくないけどな、よくよく考えたら俺が今まで狩ってきた奴も全部「偽物」だった。

「本物」はいなかった。昔も今も、たったの一人だけだった。

だから光栄に思え。てめえらなんか絶対に絶対に絶対に認めねえけど、カウントしてやるよ。

「ヒーロー狩り！ お前らで100人突破だ!!」

\*\*\*

気分悪い。

8人相手に、思った以上に自分たちの戦闘スタイルの相性を考えて俺の対策を練って厄介だった相手に、俺もさすがに一人も倒せてねえ内に毒矢をくらって囲まれた時は諦めかけた奴らを全滅出来たって言うのに、達成感は何も得られない。

当たり前だ。やっぱりこいつらはヒーローじゃなかった。

カウントする価値どころか、「偽物」扱いだつてもつたいないくらいだ。

俺を確実に倒すために精鋭を集めたと言いながら、S級がいなかった理由はただの嫉妬。

なんかグダグダ長ったらしく語ってたが、結局のところは協会内で立場や扱いが破格で世間からもキヤーカーキヤーカー言われて大人気なS級がうらやましかつただけだろ？

何が「S級以外にも優秀なヒーローは存在することを世間に知らしめてやる」だ。

ガキが小屋に入ったことも、そのことを黙って逃げたガキの嘘も見逃し続けたお前らのどこが優秀なヒーローだ。

お前は、お前達は俺がしている事が許せないから、俺が悪だから、俺から誰かを、何かを守るために俺を倒したいんじゃないんだな。

俺にとってお前らは俺が本物の怪人になる為の階段であつたように、俺はお前たちにとって「倒さねばならない悪」じゃなくて、ただの道具か。

自分たちの見栄の為の道具でしかなかった。自分の見栄の為に、何かゴチャゴチャやってる怪人協会とかいうのは後回しか。

人質がいるつてのに、それよりも自分がチャホヤされる為の功績を優先する奴のどこがヒーローだクソツタレ!!

……達成感どころか胸糞悪いのは、あいつらがクソ以下の自称ヒーローだったからだ。

強かったのは認めるが、テメエらを倒して得た経験値なんて糞と一緒にひねり出してしまいたいくらいだ。

「……………あのガキは、関係ない。」

初めから関係ない。ただ、あの屑どもが怠慢でバカだったせいであのガキが死んだら、それは俺の所為になる。

「小屋にガキがいる」と言っても、やっぱり信じないで何の躊躇もなくガトリングを連射して来たバカだ。

最後まで、何かを守る為でも助ける為でもねえ、ただただS級に嫉妬して張り合おうとしてただけの奴等が、ガキが死んで素直に自分の怠慢を、バカだったことを認める期待なんか出来ねえ。

絶対にあいつらは自分の保身で俺に全部の罪を擦り付ける。俺が殺したことになる。

そうなれば俺が目指す絶対的な恐怖を万人に与える怪人ではなく、あの屑どもの所為で弱っついガキを殺して満足する変態に成り下がる。

それだけはおめんだつたから、生かして逃がしたかっただけだ。

ただそれだけ。あとは何も関係ない。

俺を見て泣いて逃げた事なんか、喜ぶことだろ。

あのガキの恐怖が、俺を怪人にする。

俺の今のテンションは全部、あの屑どもの所為だ。

ただ、流石に疲れ果てたのと毒の所為で頭がクラクラするから、余計にテンションがダダ下がるだけだ。

「……………とりあえず……………手当てを……………」

み……………水……………、その前に……………水を一口……………」

だからガキの事なんか忘れて、逃げたガキなんか放っておいて、まずは肩に刺さったままの毒矢を引き抜き、俺はフラフラしながらこの体を休ませることを考える。

今の俺じゃ、それこそジジイの道場に残ったあの弟弟子にすら負けるかもしれない程にズタボロの限界だ。

まずは手当てと休憩だ。とにかく、少しは休んで体力を回復させねえとC級の雑魚相手でも逃げることは……………」

「!?」

ドン！ と地面を揺らしてあたりに土煙が舞い上がる派手な衝撃と音が俺のすぐ背後からした。

最悪だ。もう応援がきやがった。

しかも、この派手な登場の仕方からして一般人に毛が生えた程度のC級とかじゃねえ。

「応援要請の信号を確認したので来た。発信源は……、あいつの端末か」

淡々と、俺の背後でそいつは言う。

キュインキュインとかなんかモーター音みてーな音がしてるから、十中八九サイボークだとはわかっていたが……このタイミングでお前が来るのかよ。

金髪に嫌味なくらいにおキレイな顔、白目部分が黒い眼。

ヒーロー名鑑に目を通さなくても、こいつはわかる。

S級の新人でありながら順位を順調に上げていつてる鬼サイボーグだ。

そいつは気絶する直前か、それとも動けないが未だ意識はかろうじてあるのかもしれない、自分を呼んだであろうジャージ眼鏡を一瞥してから、俺になんかレーザーでも出しそうな砲門がある掌を向けて言った。

「見たところ、例のヒーロー狩りか」

そいつの言ってる事なんか頭に入らなかつた。さすがにこの状況でS級が釣れたことは喜べねえ。

情けねえが、この時の俺の思考は逃げの一手だった。

……だけど、その思考すら吹き飛ばされた。

忘れたかつた。頭の中から消し去りたかつたから、何も考えずにいられる戦いがしたかつたのに、胸糞悪い結果だがある意味ではその願いは叶っていたのに、忘れられるわけがなかつたものがこじ開けられて溢れ出す。

「……お前がヒーロー狩り、……『ガロウ』なら一つ訊きたい。

—— 『エヒメ』という人を知ってるか？」

……何で、お前の口からその名前が出てくる。

キングといいこいつといい、ひいちゃん、一体何があつてどうやって知り合つたんだよ？

そんなことをつい思いながら、答える。

「……知らねえよ」

知らない。あの子を、あの人を知ってるのは「ガロウ君」であつて俺じゃない。ヒーロー狩りの、怪人の俺はあの子の事なんか知らない。

だから、もう守らなくていいんだ。助けなくていいんだ。俺は絶対に言わないから。

助けてなんて言わないから。

だから……今更になつて俺の話をお聴こうとするな。

あの子にだつて言わなかつたことを、お前らに話す訳ねえだろ偽物どもが!!

知りたい

エヒメさんからの「話を聴いてあげて」という続けるような、願いのような頼みはもちろん叶えるつもりだった。

だが、俺は普段から自分でも狭いと自覚して呆れる心が、あの人の事になると更に狭量になる。

あの人はそういう人だと知っているのに、そういう人だからこそ惹かれたくせに、エヒメさんが「ガロウ」をひたすら気に掛けることは正直気に入らなかった。

エヒメさんの望みを叶えたいのは、ただあの人を思っただけじゃない。俺が行動することで、少しでもガロウの事で頭が一杯になっっているあの人の視界に入りたかったという願望は、認めたくないが多大にある。

エヒメさんや俺の命の恩人とも言える無免ライダーさんにまで俺は嫉妬をむき出しにしたのだから、「ガロウ」本人を前にしてしまえばあの人があんなにも悲しげに、自分の無力感に苛まれながらも俺に願った、俺に頼ってくれた「話を聴いてあげて」という願いは最悪の形で果たせないかもしれないという不安があった。

……だが、俺の不安はガロウの答えによつて霧散する。

「……………知らねえよ」

「エヒメ」という人を知っているか？ という俺の問いに、ガロウは答えた。

吐き捨てるように否定する。

あまりに分かりやすい、虚偽の答えだった。

俺が到着した時には既に満身創痍で、かなり好戦的だと聞いていたのに、俺を前にしても挑むどころか逃げ腰だった。

さすがにこの状態で俺が相手では勝ち目は薄いどころではないと思ひ、逃げる算段を立てていたと考えるのは、俺の自惚れではないだろう。

なのに、俺の話を聞いているのかどうかすら怪しかったのに、こいつは「エヒメ」という名に反応した。



俺と向き合っていないながら周囲や俺の隙を探っていた眼が、俺自身を見ていなかった眼が「エヒメ」という名が出た瞬間、俺に焦点が合った。

そして……こいつは自分で「知らない」と答えておきながら、その瞬間の顔は見ていられないものだった。

今まさに刺されたような、その痛みを耐えるような苦痛に歪んでいた。

それほどまでの痛みを耐えながら、痛みを感じながらこいつは切り捨て、否定する。

「エヒメ」という人など知らない、彼女を切り捨てた。

切り捨てたはずの自分の方こそが切り捨てられたような顔で。

……俺がこいつの話を聴こうと思ったのは、エヒメさんに頼まれたからだ。

あの人をこれ以上不安がらせたくないというだけではなく、あの人に感謝されたいという浅ましい見返りを求めている、ヒーローとしても人としても未熟で身勝手な理由で動いているのであって、決してこいつの為ではなかった。

けど……今は純粋に、エヒメさんの頼みは関係なく、俺自身の意思で「知りたい」と思えた。

ここまで……俺と同じくらい彼女を想っている事が一目でわかるくせに、それなのに彼女を「知らない」と切り捨てた理由を知りたかった。

結局、彼女のように純粋に奴を助けてやりたいとは思えない自分が嫌になる。

ただ俺には奴が、いつか俺もそうなってしまおうのではないかと思わせる未来の末路に見えたから知りたかっただけだ。

やはりどちらにしても身勝手で自分のことしか考えていない、浅ましい動機だ。

それでも……、確かに知りたかったんだ。

傷つけたくないと、思ったんだ。

\* \* \*

「……………何のつもりだ？」

エヒメさんを「知らない」と言い張って俺を睨み付けていたガロウが、俺の行動を見て苛立ちと戸惑いを半々にしたような声音と顔で訊く。

まあ、訊かれて当然だろうな。俺もあの顔を見るまで、ここまでする気はなかったのだから。

「見ての通りだ」

俺は両掌の砲門を閉じ、そしてそのまま両手を上げた降参のポーズで答えた。

いや、自分で言っておいて見ての通りではないか。俺に降参をする気はない。

「お前と戦う気は、お前に危害を加える気はない。お前の攻撃はさすがに避けて防御もするが、俺はこの通り攻撃する気はない。」

……………だから、どうか俺に話してほしい。お前がどうしてヒーロー狩りを行っているのか。どうして、怪人になりたがっているのかを」

降参する気はないが、敵意がないことを表すためのポーズであることを告げるが、当たり前だがガロウは信じない。むしろ、不愉快そうに顔を歪ませた。

ガロウからしたら、そう言っただけで油断させる算段としか思えないのはわかってる。特にサイボーグである俺だと、素手で手を上げて距離を取っていても、このままガロウに攻撃を仕掛ける術なら実際にいくらでもあるのだから、俺の誠意が伝わらないのも仕方がない。

「……………つは！ さっすがはヒーロー、それも世間でもてはやされてるS級ヒーロー様だぜ！」

殺さないでまずは説得してくれるとは、お優しいこった!!」

ガロウは俺の言動に皮肉で返す。それは予測していたが、その皮肉は俺を挑発していると言うより、自分の怒りが爆発しないように少しでも抑える為のものに思えた。

それほどまでに、発言そのものは軽いが声は苛立ちに満ちて、強い憎悪と拒絶が言葉と俺を睨み付ける眼にこもっていた。

先ほどの「知らない」という発言以上に吐き捨てる、まさに唾棄す

るような言葉だった。

どうやら、俺の想定以上に俺の誠意は伝わっていないようだ。

というか、「ヒーロー」全般に対してこいつは強い不信感を懐いているように見えた。

その反応は説得なんて無理だと判断するには、諦めるには十分だったかもしれない。

けど、それは出来ない。

「……優しいのは俺じゃない。お前の話を聴こうと思えたのは、俺自身の意思じゃない。

俺は優しいどころか、心も視野も狭い。自分の感情に振り回されて、少し考えればわかった簡単なことも、ただ振り上げた拳を力いっぱいに落としたいの一心でそれを見逃し、取り返しのつかない間違いを犯しかけた大馬鹿者で、本来なら身も心もS級どころかヒーローと名乗ることすらおこがましい、その程度の器と実力だ」

俺の発言は信用されないのはわかっているが、それでも俺にできる誠意の証明は、このポーズと言葉を尽くすことしかない。

だから、話を聴くためにまずは語る。俺の話を、俺がお前の話を聴きたいと思った理由を、真摯に。

「俺はただ、頼まれたからまずは確認しただけだ。お前が『ガロウ』ではなかったら、あの人を知る『ガロウ』でなければ、躊躇なく焼却していただろう。

……たとえお前にどのような事情があったとしても、それを考慮どころかそんなものがあつたことすら想像せずに……一方的に『悪』だと判断して、排除していた」

ああ、自分で言っておいて改めて俺がしていたであろうことを考えると、ガロウの気持ちがよくわかる。

怪人への憧れやヒーロー狩りの動機は想像つかないが、ヒーローに對しての不信感なら俺自身の事だけで十分に想像がついた。

……あの人を、エヒメさんを知っているのならなおさらに、俺など信じられんだろうと納得してしまう。

だが、納得して退く訳にはいかない。

「それが大きな、ヒーローとして致命傷の間違いであることをお前で理解した。お前は、エヒメさんの友人であるなし関係なく、話も聞かずに排除すべき危険人物ではない」

俺の発言に、ガロウはもう一度鼻で笑う。

「おいおいどーした、鬼サイボーグ!! お前、目玉ぶっ壊れてんじやねーの？」

危険人物じゃない？ 俺が？ お前にはここで伸びてるヒーロー8人が見えてねーのかよ!?! それとも、自分と同じS級じゃねーとヒーローどころか人間扱いもする気ねーのか!?!」

肩の傷を押さえていた手を広げ、俺に見せつけるようにして俺の発言を、自分が危険人物ではないということを否定する。

確かに8人のヒーロー、それも一般人に毛が生えた程度の下位C級ではなく、B級でも上位の実力派達を満身創痍になりつつも撃破したこいつは、普通に考えたらむしろ危険極まりない。

エヒメさんの頼みがなければ、そう思っただけ何も言わず、訊かずに排除していた。

彼女が心配している相手だとわかっていても、彼女にこれ以上心配してほしくないという偽善でしかない自己満足の為に、こいつを焼却して存在ごとになかったことにしていたかもしれない。

けれど、俺は知った。

知ってしまった。

こいつが誰に反応して、その人を「知らない」と言うことがどれほど辛かったのか知ったから。

だから、俺は迷わずに答えた。

訊き返せた。

「何か、理由があったのだろうか？」

ガロウは俺が即答で訊き返したことに、氣勢がそがれたようにキョトンと目を丸くして言葉を失った。

その隙に俺は手を上げたまま、さらに言葉を続ける。

「お前がしたこと、相手がヒーローかそうでないかなど関係なく、暴力で重傷を負わせたことは許されぬ。それは裁かれ、償うべき罪だ。

そこは擁護する気はない。エヒメさんだってそうだろう。

だが、お前は怪人のように身勝手な欲望や醜悪な自己満足の為に、人を傷つけている訳ではない事くらいは、人の心の機微に疎い俺でもわかる。

……お前はエヒメさんが信じた通り、根が善良で真面目過ぎるからこそ、道を間違えてしまっているように俺には見える」

お前の話は聞くが、お前の罪はなかったことにするわけではない事を俺が明言しても、ガロウはその点に関しては不満そうな反応は見せなかった。

が、俺が「何か理由があった」と確信した理由に対しては、あからさまに不快感をあらわにして舌を打ち、そしてエヒメさんの名を出せば駄々をこねるように、俺の言葉に被せてその名を掻き消そうとするようにして否定する。

「……だから、知らねえって言ってんだろ！ そんな奴!!」

泣き出しそうになりながらも、奴はエヒメさんを「知らない」と言い張る。

痛々しきしかないその否定が見ていられなくなり、俺は本心からそんな自傷のような否定はやめろという思いから、「下手な嘘だな」と正直な感想を口にする。

だが、上手い嘘などつけぬほど切り離せない、切り捨てることなど出来ない人を、「知らない」と言わねばならない理由があるのか、意地を張っているというより何かに怯えているように、その恐れる何かから隠すために、守るために見えるほど「知らない」を貫き通す。

「知らねえよ!! 知る訳ねえだろ!!」

天使みたくに可愛くて、天使よりも優しく、何かいつもいい匂いがしてそこにいれば周りの空気がキラキラ光って見えるひいちゃんなんて知らねえよ!!」

「滅茶苦茶知ってるだろ、お前!!」

しかし本当にガロウにとってのエヒメさんは俺と同じくらい切り離せない心の中心にいる所為か、「知らない」と言い張っているのにこいつの本音が勢いで飛び出て、ただでさえなかった説得力が今完全に

消し飛んだ。ついでにシリアスな空気も。

けれど俺に、「空気を読め」と言える資格はない。

「そんな、周りの輝く空気どころか天使の羽や輪も時々見える人なんて、エヒメさん以外にいるか!!」

何故なら俺も、あまりの説得力はないが心の底から同意見なガロウの発言に釣られて、常日頃思っている事を同じく勢いだけで言い放ったからだ。

「待て！ 羽は俺も見えるけど輪はダメだろ!! それじゃひいちゃん、死んでるみたいじゃねーか!!」

「！ しまったその通りだな！ だが、それぐらいにあの人は天使ということだ！」

「おう、それは同意見だけど………って、俺が言うのもなんだけど何だこの話?! 乗っかるんじゃねーよ!! 何話してんだ俺ら?!」

しかもそのまま、二言三言の数秒間とはいえ普通に意気投合してしまった。

ああ、うん。その通りだな。俺は何を言ってるんだ。命に別状はなさそうだが、重傷を負ってるヒーローたちを放置してまで、何してるんだ俺らは。

あまりにバカらしいやり取りを互いに素で行ってしまった所為で、俺はもちろんガロウもかなり気まずそうになってしばし沈黙するが、しかし俺はある意味このやり取りをして良かったと思う。

やはりこの男は、有無を言わずに排除すべき悪ではないと確信できたから。

間違いなく、エヒメさんの見かけではなく中身に惹かれ、「天使」と称するこいつが根っからの悪であるわけなどない。

そう確信したからこそ、余計に本心から知りたくなった。

俺と同じようにあの人を見ているのなら、あの人を優しさに惹かれ、想うのならば何故、あの人を悲しむとわかり切っている「ヒーロー狩り」をする理由が真摯に知りたかった。

\* \* \*

「……ガロウ。お前は何故、ヒーロー狩りなどをしている？」

何故、そこまでして怪人になりたがるんだ？」

「……………お前よくあのやり取りの後でシリアスに戻れんな」

もう一度俺は、手を上げたままガロウの動機を尋ねると、ガロウは心の底から呆れたような、呆れが一周回って感心の域に達したような微妙な顔と声音でまずは呟く。

だが奴も、俺の改めて訊き返した問いで当初の不信感や不快感を思い出したのか、ガロウの怒気がじわじわと復活する。

「…………理由？…んなもん、もう何度だって言ってるっーの!!」

俺が怪人だからだよ！俺は最強の怪人になりたいから、ヒーローどもを狩って経験値稼ぎしてるんだよ!!

怪人だから、悪いことするのに理由なんかねーんだよ!!」

自分が人間であることを否定して怪人だと言い張り、怪人になりたいとガロウは叫んで答えた。

だが、ガロウ。お前は俺の認識がお門違いで俺の目は節穴だと言いたいのもかもしれないがな、その答えこそが俺からしたらお門違い、お前が「怪人」ではなく「人間」の証明だ。

「怪人こそ、理由もなく暴れ、人を傷つけやしない。むしろ奴らは、自分している事を『悪』だと認識しない。

奴等は自分の欲望を正当化して他者の命や尊厳を、大切な何もかもを踏みにじって蹂躪するからこそ排除されるべき人類の敵だ。

怪人を『悪』と認識し、自分の罪を正当化しないお前が怪人である訳がない」

ガロウ、俺から見たらお前は主張は、行動は「怪人」として破綻している。

俺にはお前が一般的な怪人のように、自分より弱いものを甚振るところで愉悦を感じることができるようには到底思えない。

そもそもこいつがしている事はヒーロー狩りという、C級でも一定以上の強さが保証された者、強者であるべき者ばかりだ。

ヒーロー以外の被害者が協会の役員一人だけならば、それは例外中の例外だと考えた方が自然だろう。

こいつは返り討ちに遭う可能性が高い者しか狙っておらず、良くも

悪くも一般人という弱くて当たり前な者など眼中にないのは確か。

初めから弱い者いじめなんてあまりに怪人らしいことを、こいつはしていない。

「……………黙れ」

俺がガロウの言い分を否定すると、奴は俺の発言に反論はせず低く唸るように命じる。

反論は出来ないからしないのか、それとも奴自身が俺の主張を否定したくないと思っっているのかはわからない。

それを知る前に、奴は俺を拒絶する。

だが、お前が怪人になりたがる「本当の理由」を話してくれるのならいくらでも黙ってやるが、そうでないのなら黙りはしない。

最低でも、これだけは言わせてもらおうぞ。

「そもそも、お前が人類の敵や悪人になれる訳がない」

手を上げたまま俺は断言する。もしかしたら、呆れている様子が隠せてなかったかもしれない。

それぐらい、俺からしたらあの「知らない」の発言時点で明白すぎる事実だったのだから。

「エヒメさんの事が好きな奴が、悪事など働ける訳ないだろうが」

俺がこの言葉を、こいつは根っから腐った悪人ではないという絶対の確信を得た根拠を口にした瞬間、ガロウが押さえ込んでいた感情が、怒気が爆発した。

「黙れって言ってんだろ!!」

どこからどう見ても満身創痍で、俺が現れた時は逃げることにしか考えていなかったのが嘘のような勢いと気迫で、俺に殴り掛かってきた。

単純に、一直線に飛び込んで殴り掛かってきただけなので、回避はもちろん出来たが、戦意がないことを示す両手は上げ続けることが出来なかった。

怪我の度合いから油断していたのもあったが、それを抜きにしてもその体勢を維持したまま回避できる勢いではなかった。

もしも避けずにまともにくらっていたら、生身ではない俺でもただ



では済まなかったことを如実に、俺が避けて地面に叩きつけられた拳によって抉られた地面の深さと広さで表している。

だが、その程の驚異的な戦力を前にしても俺に戦う気は起きない。むしろ更に霧散してゆく。

それは瘡癩を起こした子供のような行動だった。そうにししか見えなかったが、凶星を突かれた逆ギレには見えなかった。

俺には、自分の言い分に聞く耳を持つてもらえず、的外れな説教をされて、それを「違う」と訴えているように見えた。

ガロウは振り返り、俺を睨み付ける。

怒りで頭に血が上ったせいかわい傷口から止まりかけていた血が噴き出し、それがうつつとうしかったからかぐしやぐしやと頭を掻き毟るようにして、髪に血を擦り付けて拭う。

血で髪が赤く染まり、怒りのあまりかそれとも怪我の影響か、右目のみを真っ赤に充血させて奴は叫ぶ。

「そんな人は知らねえし、俺は誰が何と言おうと怪人なんだよ!!」

俺が、俺こそが！ 怪人協会なんて目じやない、どんなヒーローも敵わない！ 最強の怪人だって証明してやるよ!!」

そう叫んで、宣言して、俺の言葉を全否定して奴は俺に襲い掛かって来る。

その叫びは、その主張は、望みは嘘には思えなかった。

だけど、俺は自分の確信を捨てられない。あの確信は未だに揺るがない。

奴の宣言は、奴自身の望みでありながらガロウの本意とは違う、「そうでなければならぬ」という呪縛に思えた。

……また更に、奴の怪人を目指す「真の理由」を知りたくなった。

なあ、ガロウ。一体お前に何があったんだ？

何があつてお前はそんな義務を通り越して強迫観念のように、「怪人にならなくては」「悪でないければ」と思っているんだ？

なあ、ガロウ。

お前が怪人にならないと、エヒメさんは救われないのか？

今更になつて

全てが癪に障る。

ひいちゃんのことをよく知っていると見せつけるように、あの人のことを理解しているように語ることも。

全身のいたるところに武器を仕込んでいくくせに、両手を上げることで戦意がないと抜かす白々さも。

偽物の分際で、あの人のように、あの子のように、ひいちゃんのように俺の話を聞こうとすることが何よりも気に入らない。

信じない。信じられるか。

間に合わなかつたくせに。

あいつら8人が全滅して、あのガキも逃げてからやつと来たくせに。

誰も助けられなかつたくせに、手柄だけをかつさう為に来たとは思えないタイミングで来た奴の事なんか、誰が信じるか!!

けど一つだけ……もう忘れたいがひいちゃんが天使だつてこと以外に関して一つだけ、お前の主張に同意してやるよ。

『エヒメさんの事が好きな奴が、悪事など働けるわけないだろうが』

ああ、そうだ。

あの人の外見しか見てないカスならともかく、あの人の内面を、あの尊さを知って惹かれたのなら、悪事なんか出来る訳がねえ。

……だからこそ、良い証明になる。

鬼サイボーグ。お前とあの人がどういう関係かは知らないが、知りたくもねーけど、あの人と親しいのなら、お前が傷つけば、壊れたらあの人が悲しむのならない証拠だろ？

あの人が悲しむとわかっていることをする俺は、あの人の事なんか好きじゃない。あの人を、エヒメなんて人、ひいちゃんなんか知らないって証明になる。

証明してみせる。

あの子なんて知らない。

あの人なんて好きじゃない。

—— さよなら。ひいちゃん。

\*\*\*

「もうやめろ。命を縮めるような真似をするな」

俺の攻撃を最初の宣言通り、回避と防御はするが反撃は全くしない鬼サイボーグが憐れむように言う。

うるせえよ。と言ってやりたいが、悔しいが今の俺には呼吸だけが精一杯だ。

シューターの矢の毒が回って視界も霞み、ガンガンに撃ち抜かれた足は限界を訴えてガクガクと俺の意思関係なく震える。

こいつに憐れまれて当然なぐらい、今の俺は満身創痍どころか半死半生だ。

けれど、そんなの関係ない。

今の俺に、逃げるなんて選択肢はない。

こいつをぶつ倒すんだ。こいつをぶつ壊すんだ。

そうしないと、俺はいつまでたっても弱くて情けない「ガロウ君」のままだ。

「怪人ガロウ」にはなれない。

……けれど、どうする？

こいつがあのだげけた宣言通りに攻撃しない所為で、カウンターが強みの流水岩碎拳はほとんど意味がない。

万全なら他の流派の武術でも使えばいいが、この状態じゃ使い慣れたもはや反射反応の流水岩碎拳以外は付け焼刃すぎて逆に決定的な隙を作りかねない。

付け焼刃でも、もっとトリツキーなものならこいつの意表を突けるかもしれないけど………ん？ トリツキー？

……ああ、いいサンプルがあるじゃねえか。ちょうど昨日戦ったばかりの最高にイカれた戦い方をしてた変人<sup>ヒーロー</sup>が。

怪人の俺がヒーローを参考にするのは癪だが、それを言ったら流水岩碎拳もヒーロー<sup>あのクソジジイ</sup>のものだ。

拘りは捨てる。思い出せ、あの動きを思い出せ!!

「!?」

俺の期待通り、俺がいきなり犬みてーな四足移動をし出したことで鬼サイボーグは意表を突かれとっさに俺に向かつて最初のように左腕を、街一つを火の海にしたとか山の形を変えたとか災害レベル竜の巨大隕石を砕いたとかいう噂の高熱砲を向ける。

が、すぐに奴は目を見開いてその砲門を掌ごと閉じた。

……ああ、ムカつくけど、悔しいけど認めてやるよ!

俺の流水岩砕拳みてーに、お前にとつて武器を向けてその高熱砲をぶっ放すことはもはやお前の意思なんか関係ない反射だろうに、それを確かな意思を持って止めたつてことは、ためーの「戦う気はない」つて言葉は嘘じゃねえことは認めてやるよ!!

初めのひいちゃんの名前を出してきた時は、昨日のひいちゃんとのやり取りを見られていたせいで、暗にひいちゃんを人質に取ってるつていう意味かと思った。

こいつの言葉なんて、ヒーローの言葉なんて何も信じる気はなかった。そんな価値はねえことを、もう何度も思い知らされたから。

だけどお前は、ひいちゃんがどんな人かを癩だが理解していた。

間違いなく、俺と同じものを尊いと思つてひいちゃんに惹かれてやる。

だから、お前だつて悪事なんか働けねえ。ひいちゃんに頼まれたのなら、ひいちゃんと同束したのなら、それを破る事なんかできない。破つておきながら嘘について自分を正当化するなんてマネはしねえ。

お前は本気で、俺と戦わず、俺を傷つけずに俺を救おうとしている事は認めてやる。

「お手」

鬼サイボーグがとっさに攻撃をしかけ、それを途中で無理やりやめたからこそできた隙に後ろに回り、空いていた右腕にしがみつくようにしてもぎ取った。

お前の言葉に嘘なんてないこと、お前の誠意は認めてやる。

だが、受け入れやしねえよ。

俺は怪人なんだ。怪人になるんだ。

その為にこれは、お前をぶっ倒してぶっ壊すことは必要なことなんだ。

「昔から精密機械の扱いは得意なんだよ！　主にぶっ壊すのはなあ！」

そう言いながらその腕を抱えて一旦距離を置くが、俺が抱えていた腕は活きのいい魚のように動いて俺の腕から逃れ、もぎ取ったはずの切断面のブーストを発動させてそのまま鬼サイボーグの元に戻って難なく元通り接着。

くそっ！　手ごたえがあまりなかったのは初めから外れる構造だったのかよ！！

「悪いな。さすがに昨日の大破から博士に無理を言っただけで修理してもらってすぐにまた壊れる訳にはいかない。

……いや、俺の手足を壊すことで気が済んでお前が動機を話してくれるのなら、それはやぶさかでもないのだがな」

俺に向かつて、本気で申し訳なさそうに言うのが更に癪に障って頭に血が上る。

外れてもお前の意思で動くのなら、掌の高熱砲はさすがに放てなくても俺の首をその手で絞めることくらいは出来たはずなのに、俺がしがみついた状態のままブーストを放てば俺をその辺の木や地面に叩きつけることや火傷を負わせることは出来たはずなのに、こいつはやっぱりそれをせずに自分の腕を回収するだけにとどめた。

本当に、間違いなくお前は俺と戦う気がないことを証明し続ける。もうそれはわかっている。認めてるっつーの！！

けれど、俺はテメーを「本物」と認めた訳じゃねえ！！

あの人に頼まれたから、あの人が見たから動いてるテメーなんて、それこそひいちゃんの偽物だろうが！！

「……しつけないだよ！　なんだ、子供がいたからって言えば満足なのかよ！！」

ただでさえデスガトリグ達の屑つぶりに苛立ってたところに、存在自体が気に入らなくて癪に障るこいつの言動で頭に血が上って、も

う自分でも何を言っているのかが俺にはわからなかった。

「そこで伸びてる屑どもは、あの小屋に子供がいたって言うのに、いじめっ子に無理やり一人で中にいる俺に文句つけて来いって命令されて入り込んだのに、そのことに気付かず小屋ごと攻撃しそうだったんだよ！」

俺の言うことなんか何も信じなかったから応戦してぶっ飛ばしたって言えば満足か!?

そう言えば、お前は信じるって言うのかよ!!」

答えなんか、求めてなかった。

なのに、このクソサイボーグは……

「信じる」

真つ直ぐに俺を見て、言いきりやがった。

「むしろ、納得した。お前は好戦的だが、状況判断には長けている。俺を見てまず初めに逃げることを考えたのなら、退くことに対して強い忌避感も持っていないのだろう。」

なら、この8人という人数、そして武器からして近・中・遠距離対応可能なバランスの良いメンバー相手なら、正面から迎え討つことよりもやはり逃げることを選択するのが自然なはずだ。

……それはしなかったのは、出来なかったからか。

下手に逃げたら、あの小屋にまだ誰かがいることにヒーローたちが気付いても、それが無関係な子供ではなくお前の仲間だと勘違いされ、確認せずに小屋ごと集中砲火を受けていたかもしれない。

……少なくとも、それが可能なデスガトリングだけは倒しておかないと、お前は逃げる事が出来なかったんだな」

……やめろ。

今更になつて俺を信じるな。俺の話の聞くな。

お前は間に合わなかったんだ。こいつらは全員、俺がぶっ倒した。ガキは泣きながら、俺を恐れて逃げた。

「お前がヒーローに不信感を持つ訳だ。百歩譲ってお前の話が信じられないのは仕方ないが、そもそも警戒している相手の所に子供が入り込むのを見逃した時点で、ここまでボコボコにされたのはその怠慢の

罰と言ってもいいな。

まあ、もちろんだからと言ってお前のしたこと、暴力自体は擁護で  
きんが」

俺がガキを庇ったなんて事実はない。そんなもの、ヒーロー達の視  
点からはもちろん、ガキ本人にとつても自分がヒーロー達に殺されて  
たかもしれないなんて想像もついてないだろうから、あいつにとつて  
も俺はただヒーローをぶちのめした怖いおじさんでしかない。おじ  
さんじゃねえけど。

俺がヒーロー達をぶつ倒した。ぶちのめした。それが正史なんだ。  
俺が悪で、あんな怠慢で嫉妬にまみれた屑どもでも、あいつらが人  
者の正義なんだ。

もう全部が終わったんだ。終わりきった後でノコノコやって来た  
お前が今更、あの人のように……ひいちちゃんのように……

「暴力は擁護しない。だが、それ以外は讃えるし、認める。」

お前はやり方以外、何も間違えてなどいない」

思い悩むような険しい顔か俺を憐れむような顔しかしなかった奴  
が、俺に向かって笑いかけて言った。

あの人のように、あの子のように、俺が悪いと断言するんじゃない  
て、俺が間違えたから叱るのであって、俺を言葉を聞いて、俺を信じ  
て――

「黙れ!!」

「!?」

気が付いたら、鬼サイボーグの顔面に俺の拳がめり込んでいた。

自分でもいつのまに、3mは開けていたはずの距離を詰めていたの  
かなんてわからない。

鬼サイボーグもわかってなかっただろう。こいつは攻撃はしな  
かったが、回避と防御は遠慮なく行っていたから、甘んじて受けたん  
じゃなくて素でくらった。

流星に生身の部分がほとんどない所為で重すぎて吹っ飛ぶことは



なく、むしろ俺の拳のダメージの方が深刻かもしれないが、痛みなんかなかった。そんなものを感じる余裕なんかねえ。

顔面にひびが入り、何が何だかわからねえって顔してる鬼サイボーグの胸ぐらをつかみ、叫ぶ。

「今更なんだよ!! どうして?! お前がヒーローだつて言うんなら!! あのひと、ひいちゃんと同じ『本物』ならどうして……。」

——— どうして、あの時に来てくれなかった!?!」

今更なんだ。全部が今更すぎるんだ。

ヒーローは遅れて来るものとか言うけど、遅れすぎだ。遅すぎたんだよ。それじゃ、意味ねえんだよ!!

あの時来てくれなかったのなら、意味はない。あの時いなかったのなら、何もしてくれなかったのなら、助けてくれなかったのなら……

『大丈夫。大丈夫だから……泣かないで。ガロウ君』

あの時、ひいちゃんを助けてくれなかったのなら意味なんかねえんだよ!!

\* \* \*

俺の言うつもりなんかなかった言葉に鬼サイボーグは、ぶん殴られた以上に訳が分からないという顔をして、胸ぐらを掴まれたまま口を開く。

たぶん、「どういう意味だ?」とでも言いたかったんだろうが、それはさっきの言葉以上に元から答える気なんかない。

けれど、元から答える気なんかなかったが、俺の意思関係なくそんな暇がなかったから、そんな問いがなかったから俺は答えなかった。

「今だ。『ヒーロー狩り』を援護しろ!!」

「了解」

「!?!」

そんな声と一緒に、鬼サイボーグの背後の地面が盛り上がりつつ何匹もの怪人が飛び出して、鬼サイボーグに、俺に胸ぐらを掴まれて無防備に背中を晒すこいつに手を伸ばす。

「ちっ！」

とつさに鬼サイボーグを横手にブン投げ、的がなくなつて勢い余つて俺に向かつて来た怪人たちに流水岩碎拳をぶち込んだ。

「ガロウ!？」

鬼サイボーグは怪人に高熱砲の砲門を向けながら、俺を案じるように叫んで呼ぶ。

うっせえよ。何、俺の名前を呼んでんだ。こいつらが何なのかわかんねえけど、お前を狙つてるのは一目瞭然だろ。

俺がぶつ飛ばしても、まだこいつらが出てきた穴から援軍がゾロゾロ出てきてるつつーのに、俺の心配してんじゃねえよ!!

「もく、何するんですかガロウさん。まあ、今のはこちらもいきなりでしたから、訳わからずとつさの正当防衛だったことにしてあげますよ」

鬼サイボーグの言動でまた苛立っていた俺の背後に、いつのまに現れたのか植物の怪人が現れて訳の分からない事を言う。

「何なんだ、テメエらは？」

「怪人協会です。ガロウさん……貴方をお迎えに上がりました。ピンチなんですよ？ 助けてあげます。ウチの上の者が貴方の功績を讃えて、幹部として招待すると言つてるんですよ。良かったですね」  
訊いてみても、答えは訳わかんねえものだった。つーか、昨日の金属バットとの後に遭つたあれか、お前ら。

「またテメエらか……。いらねえ。失せろ」

植物怪人の勧誘を一蹴するが、昨日の鳥と違って今度は退く気がないらしく、体である蔦から棘を生やしながらこいつは俺を無理やり連れていく気らしい。

が、その前に自分たちの戦力を驕っていたことをこいつらは思い知らされた。いや、思い知る暇もなかったかもな。

「ぐお……」

「ギャッ!!」

穴から這い出てきた第二弾の怪人どもを、鬼サイボーグは腕に仕込んでいた刃物で切り刻んで瞬殺。

そして俺の背後の怪人はその光景に「うそっ!？」と驚いている間に、あのクソ重い身体から信じられない身軽さとスピードでこちらに飛び込んで頭を切り裂く。

「ヒーロー狩りという行動と表向きの主張だけ知れば、怪人協会が目を付けるのは当然か。」

だが、怪人協会きさまらにそいつは渡さない」

そう宣言しながら、こいつは俺に向かって掌を向けた。が、その数秒後に目を見開いて何かを言いかける。

俺も気付いていたから振り返って身構えるつもりだったが、もう体が限界なのと向こうが歳考えずに元気すぎる所為で間に合わなかった。

「バング!!」

背後から思いつきり俺に跳び蹴りをかましたジジイの名を鬼サイボーグが呼ぶ。

そしてジジイも、鬼サイボーグとはただの同僚じゃなくて個人的な付き合いでもあんのか、ヒーローネームじゃなくて名前と呼んだ。

「ジェノス君……。ここはむしろに譲ってくれんか？」

「!? 待て! バング! 違う! 俺はお前を怪人だと……」

鬼サイボーグはジジイの言葉に訂正を入れようとするが、ジジイの背後から縦に二つの目が並ぶ怪人が襲い掛かって、それをジジイの兄貴であるボンブがぶっ倒す。そのやり取りの所為で、あいつの声は、訴えは掻き消えた。

ああ、わかつてるよ。もう疑ってねえよ。

お前が俺に高熱砲を向けたのは、俺に攻撃する為じゃねえ。

俺の背後からすげえ勢いで近づいて来たこのジジイをまた新手の怪人かと思つて、それを排除するつもりだったんだろ？

で、ジジイはジジイで鬼サイボーグが俺にトドメを刺そうとしてるって勘違いしたんだろ？ ジジイ、あの蹴りはある意味俺を庇ってるつもりかよ？ マジでいらねえよ。

っーかお前ら、知り合いなら互いに報連相しっかり取れや。

「穴から出てくる化け物共はこっちに任せろ。バング。お前はガロウ

を！」

「サンキュー、お兄ちゃん。」

さて……、久しぶりじゃのう。ガロウ」

自分で蹴り飛ばした俺の元までやってきて、ジジイは俺に語り掛ける。

鬼サイボーグがまだ、「待て!!」と叫んでいるのを聞かずに、ジジイは言う。

「なんちゆう姿をしとるんじゃ、オヌシは……。終わらせてやる……。かかってきな」

……終わらせる。ははっ……笑わせるな!

終わらせねえよ。終わってるとしたら、もうとっくの昔に終わってるんだ!

全部が今更で、もうどうしようもないけど、それでも考えて足掻き抜いて貫いたのが今なんだよ!!

お前も間に合わなかったくせに、あの最後に道場に残った弟弟子を俺がボコっていた時に現れなかったくせに!

お前も話を聞く気なんかねえくせに。今も、破門する時も問答無用だったくせに!

お前だって俺は認めてねえんだよ!

ヒーローだなんて認めねえ!!

## 俺の所為

俺の方が若くて体力があるなんてメリットは、ただでさえ満身創痍なこの状態じゃ意味がないのに加え、そもそも技の練度が桁違いであることを思い知らされる。

ジジイらしくない派手な猛撃を、俺は砂で目つぶしと番犬マンの動きの模倣で何とか逃れるが、俺の援護に来たとかいう怪人たちはポンプと鬼サイボーグによつて全滅してた。

その所為でポンプが自由になって、最初に倒したヒーローどもを人質に取るという手段が使えねえ。

が、同じく自由になった鬼サイボーグが怪人が出てきてた穴の側から離れずジジイに言う。訴える。

「バング！ 待て！ そいつは、ガロウはエヒメさんの友人だ!!」

鬼サイボーグの言葉に、ジジイは一瞬反応する。ひいちゃん、ジジイとも面識あんのかよ。ひいちゃんの間関係、どうなってんだ？

「！ なんと……エヒメ嬢とこやつが……」

なるほど。なら、なおさらにしつかりケジメを付けねば、エヒメ嬢と合わす顔がないのう」

「何でそうなる!? 話を聞け、クソジジイ!!」

そのとおりだよ、このガンコジジイ!!

人の話を聞かねえガンコジジイのくせに、やってる事は元一番弟子が弱り切ったところを兄貴と一緒にタコ殴りって極悪すぎるだろ！

しかもその一緒にボコボコ殴つて来るの兄貴は、旋風鉄斬拳の達人じゃんかよ！

こいつら、武術界の大御所が二人がかりなんて恥も外聞もねーのかよおおお!!

俺の顔面に遠慮のない蹴りをぶち決めて、ジジイは言った。

「ワシの『一番弟子』 チャランコの痛みを知れ！ ガロウ!!」

弟弟子を「一番弟子」と言つて、俺の存在はなかったことにされた。

ああ、結局俺はどんなに強くなつても同じか。強いかわいかなんて関係ない。弱くても愛嬌があれば、要領が良ければ人気者の正義で、

そうじゃない俺は嫌われもので、何を言っても聞いてもらえない悪役だ。

『何でお前、空気読めないの？ 怪人役なのに。ちよつとガロウ押さえてて』

『おっけー』

『ジャステイスマンキーク！ 怪人、ガロウンコマン撃破く〜！』

走馬燈って奴か、ずいぶんと懐かしくて嫌な記憶が蘇る。

クラスの人気者でお調子者、弱い者いじめが大好きな嫌な奴なのに、運動神経が良くてモテて人気者だった、大嫌いだったたっちゃんを俺を嘲笑っている。

俺はいつまでたっても弱い、自分にイジメられる怪人役の「ガロウ君」だと言うように。

『遊んでただけなのに、ガロウが怒り出した！』

『なんなの、こいつ』

クラスの奴等が遠巻きに俺を見て、俺を非難する。

たっちゃんが何をしていたか、嫌だと言ってる俺を無理やりヒーローごっこに付き合わせて殴る蹴るをしたのを見ていたくせに、「遊んでただけ」だと言う。

『たっちゃんが優しいから調子乗った』

『きもっ』

『ヒーローごっこしてて、ガロウがたっちゃんにマジギレしたらしい(笑)』

『何それ、こいつ何考えてんの!?!』

『たっちゃんが可哀相だ!!』

あいつらには俺なんか見えていなかったんだ。俺の言葉なんて本気で聞こえてなかったんだ。

そうとしか思えない。そう思わないとやってられない。

あれを、あの地獄を「遊び」と言える神経が普通だと思うくらいなら、俺が透明人間だったと思った方がマシだ。

『何で暴れたりしたんだ?』

『先生、たっちゃんがいつも『ヒーローごっこで怒ったって聞いたけ

ど、本当なのか？」

『いつも僕が怪人役で『遊びと現実の区別もつかないのか！』

『違うんです。たっちゃんは人気者だから皆、僕が悪いように言うんだ』

『お前が暴れたんだろ！ 窓が割れたらどう責任を取るんだ!?!』

『違う!!』

同じ言語で話しているはずなのに、まったく会話が成立しなかった。

俺が暴れた訳を尋ねているはずなのに、俺の言葉は全部途中で遮られる。何を言っても結局、「お前が暴れたからお前が悪い」で終わる。

理由なんかどうでも良かったのなら、何で訊いたんだよ？

怪人役が嫌なんじゃない。

ヒーロー役がたっちゃんなのが気に入らなかったのか？

いや、そんな話じゃない。

俺はヒーローごっこを通じて、圧倒的理不尽さを感じたんだ。

誰からも好かれていて人気者が、誰からも嫌われている弱者を一方的に叩きのめすという構成。

これは単なるいじめではない。大衆が認めた子供番組を忠実に再現したごっこ遊びなんだ。

何の役をやろうと自由だが、ヒーロー役は周囲の了承を得たうえで成り立つもので必然的に俺の出番は回ってこない。

当然だが怪人役が勝つというシナリオは最初から存在しないので、俺は必ず負けなければならない。

何が正義だ！ 何が悪だ！

結局は多数派の意思によって俺が殺されていくだけだ！ 許せん！ 理不尽！

根拠は上手く解析できんが、俺は怒っている！

ただ、わからせてやりたいんだ！

弱者の一撃をくらわせてやりたい！

善悪の立場を否定してやりたい!!

『どうしたの、ガロウ君?』

「いい加減にしろ!! このクソジジイども!!」

\* \* \*

二つの光景が、重なって見えた。

『どうしたの? どうして泣いてるの? その怪我はどうしたの? 痛い? 大丈夫?』

小さなあの子が、ひいちゃんが泣きべそかいてる俺の涙はもちろん、鼻水だって全く嫌な顔せず自分のハンカチで拭いながら、俺を真っ直ぐに見て訊いてくれた。

誰も聞いてくれなかった、誰にも聞こえていなかった俺の声を、言葉も聴いてくれた。

「!? ジエノス君!? 一体何を!？」

「何をも何も、俺は初めからお前達を止めてるんだ! 耳がまだ遠くないのなら話を聞けジジイ!!」

鬼サイボーグが自分の両腕を飛ばして、ジジイ二人をワイヤーで拘束して怒鳴る。

話を聞かないガンコジジイ共に、マジグレして訴える。「話を聞け」と。

『……たっちゃんがいとも……僕を怪人役にするんだ。嫌だって言っても、……いつも僕を……』

ひいちゃんはたっちゃんやクラスの奴等のように俺の言葉を嘲笑いなんかしなかった。

先生みために、途中で遮ったりしなかった。

泣きじやくって、自分でも何が言いたいのかわからない滅茶苦茶な話でも、最後まで聴いてくれた。

「そもそも、エヒメさんが俺に頼む以前にお前が誰からも頼まれるまでもなく話を聞くべきだろうが!!」

何でお前はガロウの話を聞いてやらないんだ、バング!!」



鬼サイボーグはジジイを締め上げながら、マジグレし続ける。

自分の「やめろ」という制止の言葉をジジイどもが聞いてなかったから怒ってるんじゃないかって、こいつは俺の話を聞かなかった事、俺の話を、俺が何でヒーロー狩りをしているのか、どうして怪人に憧れるのかという理由を訊こうとしなかったことにマジグレしていた。

『ガロウ君は偉いね。他の子を庇ったんだ』

ひいちゃんは、俺の話を聞いてまず最初にそう言って褒めてくれたんだ。

俺だつて忘れてたこと、俺だつて意識してなかったことに気付いてくれた。

俺がたつちゃんに目を付けられたきっかけ、他の俺と同じように暗くて、俺よりもずっと気が弱かった子にたつちゃんがジャングルジムから跳び蹴りして、それを「危ないよ」と言つて止めたことを聞き逃さず、あの子は「偉いね」と言つてくれた。

俺の悪い所、間違つた所、ダメな所だつて見逃さずに叱るけど、あの子は、あの子は俺だつて忘れてた、気付いてもいなかった正しい所をちゃんと見つけて、讃えてくれた。

「お前にとつてそいつは、話を聞く価値もないバカ弟子なのか!？」

そいつは！ ガロウはな！ 俺を庇ったんだぞ!! 怪人協会の怪人どもが穴から奇襲をかけてきた時、不利な体勢だつた俺を横手に突き飛ばして、俺に襲い掛かって来た怪人を自分で倒したんだ!!

それでも、お前は何も訊かずにケジメと称して問答無用でリンチするののか!？ 力の使い方を間違えているのはどっちの方だ!!

今のお前なんかより、ガロウの方がよほどヒーローらしいわ!!」

そんなつもりはない。ただ邪魔だつただけでしたことなのに、……けど確かに、今思えば何で俺はあの時、ただ掴んでた胸倉から手を離すんじゃない、怪人どもの方に突き飛ばすでもなく、自分が迎え撃つために、あのクソ重い鬼サイボーグを横手にブン投げたのかはわからない。

俺にもわからない俺の行動を、鬼サイボーグは「自分を庇った」と解釈してジジイに訴えかける。

ジジイの間違いを指摘して、マジギレして、そして俺を讃える。  
俺をヒーローだと言った。

『お前達！ ガロウに謝りなさい!!』

『……いじわるで怪人役ばかり押し付けて、嫌がってるのに殴るのをやめなくてごめんなさい』

勝ったんだ。ひいちゃんはたっちゃん達に、ヒーローだった、正義だった、勝つことが決定されていたはずの人気者のたっちゃん達に勝ったんだ。

公園でまた、俺が怪人役をやらされてボコボコにされてた時、ひいちゃんが俺を見つけてくれた。

約束通り、ひいちゃんは俺が必死で叫んだ「助けて」って声を聞いて、探してくれた。見つけて、庇ってくれたんだ。

たっちゃん達はヘラヘラ笑って、遊びだつて言い張って、遊びでマジギレするひいちゃんをダサイ、俺なんかを庇うなんてキモイってバカにしたけど、ひいちゃんは一步も譲らなかつた。

『遊びは、皆が楽しんでなくちゃ遊びつて言わない。嫌がる子が一人でもいたら、あなた達のはたただのいじめだ』

その主張を絶対に譲らなくつて、たっちゃん達も言い返せなくて、あいつらは「キモイんだよ、バーカ!!」って捨て台詞を吐いて逃げた。

……逃げたはずだった。

『ガロウ君、大丈夫?』

たっちゃん達が逃げて、怪我した俺を心配してくれて手当てをしてくれてた最中、あいつらは、たっちゃん達は後ろからひいちゃんに向かつて石を投げてぶつめた。

血こそは出なかつたけど、こぶが出来た。それでも、あの子は泣いて心配する俺に安心させるように、笑って「大丈夫」って言い張ったんだ。

そしてその怪我が、決定打になった。

一歳年上とはいえ女の子に怪我、それも後ろから石を投げつけたことに「ヒーローごっこ」という言い訳は通用しなかつた。

そしてひいちゃんは、たっちゃんのように弱い者いじめでストレス

発散して、他の奴等に優しくできる偽物じゃなくて、誰に対しても本当に優しくして、成績もすごく良くて真面目な優等生だったから、ひいちゃんの言葉がたちちゃん達よりずっと信頼された。

『私の事はいいんです。私の事より、ガロウ君に謝って。ずっといいめてきたあの子に』

謝らせる為に先生がたちちゃん達をひいちゃんに引き合わせた時、ひいちゃんはそう言ってくれたらしい。

だから、先生はやつとたちちゃん達がしてたことをイジメだと認め、俺にも謝らせた。

たちちゃん達は明らかに本心から反省していない、ふてくされて口先だけの謝罪だったけど、それでも謝った。

謝っても謝らなくても、もうたちちゃんは今まで通りの誰からも好かれる人気者ではなかった。

俺のように皆の嫌われ者にはさすがにならなかったけど、取り巻きは明らかに減ってた。「女の子に怪我させた乱暴者」って影でコソコソ言われるようになった。

勝ったんだ。ひいちゃんは俺に教えてくれた正しいやり方を全部実行して、完全に勝利したんだ。

ヒーロー役が回ってこない、怪人役しかやらせてもらえない俺が勝つシナリオなんてなかった。

けど、俺はヒーローに助けてもらえる立場にはなれた。ひいちゃんという本物だからこそ、たちちゃんという偽物は負けて、俺は救われるというシナリオなら存在した。

ひいちゃんが、作ってくれたんだ。

「……………ああ……………。そう……………じゃった……………。」

……………そうじゃ。……………そうじゃった。こやつは……………他の弟子とは違って、言わなくても……………これだけはせんかった。……………弱い者イジメだけは……………絶対にせんかった」

鬼サイボーグの言葉に、自分を拘束するワイヤーを外そうともがいていたジジイがその足掻きをやめて、がっくり項垂れながらブツブツ呟く。

ジジイの様子を見て、鬼サイボーグはジジイ共の拘束を解く。

ボンブの方は何が何だかわからんって顔をしてるが、顔を上げたジジイは皺だらけの顔でもはつきりわかるほど眉間にしわを寄せて、悔やみに悔やみ抜いてるって顔をして言った。

「……ガロウ。すまなかった」

俺に、謝った。

自分がしたことが正しくないと、間違っていたと、たっちゃん達とは違って本心から悔やんで、俺に悪いと思っ、後悔してジジイは俺に謝った。

……多数派の意思で、俺が殺されていただけだった。そのはずだった。

俺にヒーロー役は回ってこない。俺が勝つ未来なんてない。

そう思ってた。

けど……、俺はヒーローになれなくても、怪人が勝つというシナリオがなくても。

……俺が救われるという未来なら、あるのか？

『助けて欲しい時は、「助けて」って叫んで。

絶対に、助けるから。助けたいから、助けるから』

俺が「助けて」と言えば、それは手に入るのか？

もう呼吸さえも辛い、自分でも何で立っていられるのかわからない状態で、それでも口が動く。

かすれた声が紡ごうとする。

けれど、その前にジジイが言った。

悔やみながら、それでも喜ぶような顔をしてジジイは、ゆっくり俺に歩み寄りながら言った。

「ガロウ……。オヌシなんじゃろう？ 半月ほど前に、エヒメ嬢のス

トーカーを……。あの透明化する怪人をわしらの代わりに倒してくれたのは。

すまなかった……。再会したら、やりすぎたのは叱るつもりじゃったが、それでも褒めるつもりじゃったのに……。そのことも忘れてわしは……」

.....は？

ひいちゃんの……ストーカーの怪人？

\* \* \*

記憶が蘇る。

片腕を失った、ぶよぶよとしたデブの体に気持ち悪いムキムキの腕をした怪人が、ひたすらに恨み言を喚いていたことを。

『絶対に、あの女だけは許さない！』

自分を痛めつけたヒーローに対して怒ってるんだと、初めは思った。それなら無視して、立ち去るつもりだった。

けど、あいつは……

『あれは俺のものなんだ！ だからどうしようが、俺の勝手だろ!!』

男の俺でも胸糞が悪くなる、下劣なことを喚いていた。

ヒーローじゃなくて、ただ自分の玩具にしたい女が思い通りにいかなかったことに、理不尽で悍ましい逆恨みを募らせた。

……あれが、あいつが、……ひいちゃんのストーカー？

あいつが言っていたこと、あいつがしようとしていたことに、ひいちゃんはいいつの脅威に晒されていたのか？

ひいちゃんがあんな奴の脅威に晒されて、あんな奴に狙われて、怖い思いをしたのか？

ひいちゃんがそんな目に遭ったのに、お前達はいいつを取り逃がしたのか!?

「つつつつっげんな!!!!」

『!?!』

爆発した感情のままに、両こぶしを地面に叩きつけて地盤を割る。

近寄るんじやねえよ!! クソジジイも! 鬼サイボーグも!!  
血迷ってバカなことをするところだった。

何が、「助けて」だ。

何が、「ヒーロー」だ。

そんな資格、俺にはない。

そして、お前らにもねえよ!!

「あいつは……あのクソはひいちゃんを『あれ』呼ばわりしやがった。  
……ひいちゃんを、性欲の道具扱いしてたっていうのに、何のうのう  
と逃がしてんだ!!」

何、俺に呑気に感謝してんだよクソジジイ!!

俺がいなかったら、俺が放っておいたら、ジジイが見つけれなかったら、どうする気だったんだ!?

あの子が、あの人、ひいちゃんが一番、女の子として死んだ方が  
マシな目に遭ってたかもしれないっていうのに、なのにただの偶然で  
解決したからって終わったことにしてんじやねえよ!!

物語ならそこで終わりの一件落着でもな、人生が続いてるんなら終  
わりじゃねーんだよ!!

物語じゃなかった。ヒーロー番組じゃなかった、だから……だから  
……ひいちゃんが完全に、完璧に勝ったのに、俺はひいちゃんによつ  
て救われたのに!!

それなのにあの子は、あの方は、ひいちゃんは――

『ごめなさい。廊下でふざけてたら持ってた墨汁が手からすっぽ抜け  
て……、それで汚れを落とそうと思ってバケツで水を汲んで……』

あいつらは、たつちゃん達はそう言い訳した。そして先生はそれを  
鵜呑みにした。

習字で使った道具を洗うためにトイレの水道まで行く途中、道具を  
持ったまま廊下でふざけていたことは叱ったけど、あいつらがたまた  
ま廊下で鉢合わせて俺と雑談してくれたひいちゃんに墨汁と水を  
ぶっかけたことは、「悪気のないただの事故」ってことにした。

どう見ても、どう考えてもそんな訳ないのに、わざとだったのにそ  
の証拠がないから、今度は怪我じゃないからあいつは……あのことな

かれのクソ教師は面倒事を嫌ってそれ以上追究せずに終わらせやがった!!

あいつらは、たちちゃん達は俺とひいちゃんの会話で、ひいちゃんはその時着てた服がお気に入りワンピースだったことも、学校が終わったら少し早い誕生日の祝いで出かける予定だったことも、それをすぐくひいちゃんは楽しみにしてたことをわかった上で、その全部を台無しにするためにあんなことをしたんだ。

……俺と話してさえないなければ、そんな情報をあいつらが知らなければ、あいつらは何もしなかったのに。

俺がいた所為で、俺と話した所為で、俺を助けた所為でひいちゃん  
は……………。

『お前、あの女の事大好きだよなー。』

お前の所為であんな目に遭ったんだから、あいつはもうお前のこと  
なんか大っ嫌いだろうけどなー』

たちちゃんはニヤニヤ笑って、そう言った。

俺の所為だと、俺の所為でひいちゃんが泣いたと。

俺さえいなければ、ひいちゃんはあるな目に遭わなかったと。

『いい気味だ』

俺の所為でひいちゃんは――

「こんなところで終わってたまるか!!」

一向に収まらない怒りのままに、近くのごん太い木をブチ折って、  
それを抱えてジジイ達に襲い掛かる。

終わらせてたまるか。終わってねえんだよ!

終わってるとしたら、もっと前だ。

俺がひいちゃんに助けを求めてしまった時点で、終わったんだ!!

あの時の俺の弱さがひいちゃんの涙に繋がるのなら、俺は貝のよう  
に口を閉ざして、一生みじめで負け続ける嫌われ者の弱者でいるべき  
だったんだ!!

もう何をしたらって今更なんだ。あの時のひいちゃんを助けられな  
いのなら、ヒーローも正義も意味がない!

あの人の不幸の原因になった俺に、正義なんて必要ない!!

……もう終わってるんだ。だからこそ、終わらせてたまるか。

『大丈夫。大丈夫だから……、泣かないで。ガロウ君』

あの人が不幸なまま、それでも俺なんかを気遣って笑うなんて結末のまま終わらせてたまるか!!



## 成長の証明

怪人たちが出てきた穴の、正確な居場所や数がつかめない生体反応などいっそ無視していればよかった。

もっと早くに、バングたちを止めるべきだった。

バングなら、ガロウは決して自分が強いと驕って弱者を甚振っているのではないと理解すれば、謝罪して話を聞くと確信していた。

俺よりもガロウと付き合いの長いバングならば、バングが謝罪すれば和解する。和解さえすれば、ガロウは怪人になりたがる動機を話すのではないかと期待した。

少なくとも、自分の命を縮めるような無理な抵抗はやめると思っていた。

「こんなところで終わってたまるか!!」

俺はバカだ。

俺と同じくらいあの人を、エヒメさんを想っている事がわかっていたのに何で、あんな楽観的な期待をしていたんだ。

こいつは切り離せない心の中心に住まう人さえも、切り捨てようとしていた。

バングたちにリンチされていた時以上に、痛みに耐える顔で奴は「知らない」と言った。

エヒメさんすら捨てようとしている奴が、それほどの覚悟をとうに決めている奴が今更、止まる訳がないんだ。

こいつの言う通り、あの忌々しいストーリーカーをのうのと逃がした無能な俺達なんかを、信頼する訳がなかった。

\* \* \*

「壊れた身体からだで……」

「何じゃこの力は!？」

俺がバングたちを止めた時点でいつ落ちてもおかしくない状態だったというのに、バングが謝罪と感謝のつもりで告げた怪人のこと

……半月ほど前に起こったエヒメさんのストーカーが怪人化して、彼女を狙っていた事実はガロウにとつての大きな地雷、限界を超える起爆剤になったようだ。

奴はもたれかかるとしていた背後の大木を折り、それを両腕で抱えて振り回し、バングたちに襲い掛かる。

「ガロウ！ わしが悪かったからもうやめてくれ!!」

それ以上やれば……オヌシ本当に死ぬぞ!!」

バングが自分の非を認めて謝罪しながら、ガロウに縋るような懇願を口にするが、もはや頭に血が上っているどころではないガロウの耳には届かない。

これはもう、エヒメさんにもガロウにも悪いが「攻撃しない、危害を加えない」という宣言を守っていたら、それこそガロウを見殺しにするようなものだとは判断して、俺は心の中で何度もガロウとエヒメさんに謝りながら、まずはバングたちにしたようにワイヤーで拘束を試みるが、それを放つ前に気付く。

「バング！ 上だ!!」

ブースターで飛ばすはずだった腕をとっさにそちらに向け、焼却砲の砲口を開く。

が、殺す気どころかダメージも最小限に抑えるつもりでの拘束用の機能と、一撃で排除するつもりでの焼却砲という、まったく別の機能を瞬間的に切り替えることは出来なかった為、俺は出遅れて間に合わなかった。

上空から勢いよくこちらに下降してきたのは、成人男性ほどの大きさで、不自然なほど派手な色彩の鳥だった。

鳥は俺やバングたちとガロウとの間に舞い降りてきたが、地面に足を付ける前に一度大きく羽ばたいた。

サイボーグなので重量が3桁の俺はさすがに吹っ飛ばせなかったが、それでも前に進めない、足を踏ん張らせないと後ろに倒れ込みそうになるほどの風量をこちらにぶつけられたのだから、当然俺以外の人間はただでは済まない。

バングとポンブどころか、鳥の後ろにいたはずのガロウさえも吹っ

飛ばされ、鳥は俺やバングたちは無視してガロウの肩を足で掴んでそのまま飛び去ってゆく。

くそっ！ 穴からの生体反応を気にしすぎて上空はノーマークだったが、まだガロウを狙う怪人が残っていたのか！！

とことん自分の警戒や行動は裏目にばかり出ることになりながら、俺は両腕をスナイパーライフルモードに変形させ、バングに命じる。

「バング！ あの怪人は俺が撃ち落とすから、ガロウはお前が走って受け止める！！」

かなりの無茶を言っている自覚はある。現にボンプは「おいおい……」と呆れたような声を上げているが、俺の言葉にバングは一瞬だけ間を置いてから応える。

「！ ……ああ。もちろんじゃ。怪人は任せるから、ガロウはわしに任せろジエノス君！！」

そうだ。俺がガロウを焼却しようとしていると勘違いした時の、自分の歳を考えていないスピードが出せるのなら、出来るはずだろう。今度こそ、正しくちゃんと弟子を守ってやれ。

もう既に鳥は俺達から大分距離を取っているが、それでも俺はバングなら間に合うと決めつけて、照準を合わせる。

ガロウを巻き込むわけにはいかないが、半端なダメージで生かしても厄介ごとにしかならないだろうから、確実に一撃で殺せるように火力は高めつつレーザーのように火線が細くなるように砲口もギリギリまで小さく開き、チャージしたエネルギーを解放す。

「聞こえるかあ？！ ガロウは俺が連れていく！！ 今、地上にいる奴は全員潰していい！！」

だが、俺がライフルモードの焼却砲を放つ直前、鳥の怪人は思ったよりも流暢に人間の言葉を発して、何かに指示を飛ばす。

その言葉を無視して俺は焼却砲を撃ち出し、バングもガロウを受け止める為に走り出すが、俺達は何もかもが甘かった、楽観視していたことをまたしても思い知らされる。

「後は任せただぞ！！ ムカデ長老！！」

地震が起こったように、世界が揺れた。

俺に背後を確認する余裕がなかったのも、これは後からボンブに訊いた話だが、背後の粗末な小屋ごと地面を割って、それは現れたらしい。

黒鉄のような甲殻に覆われた体をくねらせ、それは俺達の前に現れ、バングを足止めして俺の焼却砲は自らを盾にして防いだ。

ライフルモードだったので、見た目こそはいつもの焼却砲より劣って見えたかもしれないが、範囲を極限まで狭めてエネルギーの分散を最小限に抑えた為、威力はむしろ同じだけのエネルギーで普通に放つより高かったはず。

……なのに、俺の焼却砲はそれを貫通するどころか、傷すらつけられなかった。

そのことを嘲笑うように、複数の目がこちらを見下ろす。

そして相手にとっては少し体勢を整えた、身じろぎをした程度だろうが、その程度の動きがまた世界を揺らし、地面を割り砕いていく。

俺とバングたちは、気絶しているヒーロー達が地割れに巻き込まれぬよう保護することが精一杯で、ガロウが鳥の怪人に連れ攫われるのを、ただ無力感に打ちひしがれながら眺めることしか出来なかった。

いや、眺めることすらも出来ない。それすら巨大すぎるその体に邪魔をされて、もうガロウも鳥の怪人の姿も見えない。

昨日、S市で暴れ回った災害レベル竜、大怪蟲ムカデ長老が忌々しくて仕方なかった。

\* \* \*

——俺がもつと強ければ。

もう何度も何度もしてきた後悔が、また胸と頭を占める。

そしてその後悔のままに、勝算など皆無だというのに俺はバングの忠告を無視して、ムカデ長老に挑みかかった。

わかっている。全部わかっている。自惚れてなんかいない。

生身でありながら俺より実力者だと、癪だが認めているバングとそ

の兄であるボンブの、二人がかりの大技、技の極致の直撃をくらって  
も、砕けたのは外殻だけ。

それも脱皮という形でむしろ回復とパワーアップさせてしまった  
相手に、俺が一人で勝てるわけがない。時間稼ぎだって数秒も出来る  
かどうか怪しい相手であることくらい、嫌になるほどわかってる!!

『ジェノス君、一人でやると言うのか？ それは賛成できん……』

『勝ち目がないとわかってて、そんなに無茶するもんじゃない、若モン  
には未来がある』

『ジェノス。無茶だけはするでないぞ』

俺のしている事は無謀な蛮勇で、バングやボンブ、そして博士の思  
いを踏みにじる自己満足でしかない事はわかっている。

『ジェノスさん……。どうか無理しないでくださいね』

そう言っただけ昨日、見ているこちらの胸が張り裂けそうな程に心配し  
ながらも、俺を信じて送り出してくれた彼女が、どれほど悲しむかな  
んてわかってる。

もう何度も何度も俺は、一番悲しませたくない人を俺自身の弱さの  
所為で悲しませた！

けれど……。俺を想ってくれる人がみな望むからと言って、ここで  
俺は何もせずただ逃げるだけでいいのか？

本当に……。それでいいのか？

……………いいわけがない!!

その一心だけで俺はムカデの巨大すぎる体に飛び乗り、ひたすら奴  
の顔を目掛けて焼却砲を撃ち放つ。

人間の老人じみた不気味なあの顔や目ならば、体より装甲が柔いの  
は確実だ。ライフルモードでも貫通どころか、穴すら穿つことが出来  
なかった体は無視して、ダメージが通りそうな所を俺を執拗に狙い、  
撃ち続ける。

だが、体と比べて柔くともムカデの装甲は全身が俺の攻撃力より上  
回っているのか、いくら撃ち続けても何発命中させて派手な爆発を起  
こしても、ムカデは一向にひるみすらしない。

焼却砲が、火や熱は効果が薄いのなら、俺の砲ではパワー不足だと

いうのなら。

効果がほとんどないと見切りをつけたなら、俺は肩と掌のブーストを起動させて、さらに上空に飛び上がる。

……俺がもつと強ければ。

こんな奴、サイタマ先生のように一撃で倒す力があれば、ガロウをみすみす連れていかれることはなかった！

連れていかれても、すぐさまに追って取り戻すことができた!!

こいつのことだけではない。

俺がもつと強ければ、あの穴の中の生体反応に気付いても、穴から離れても対処できるという余裕や自信が持てるほどの強さがあれば。

バングとボンブの隙を、ガロウが落ちる直前まで見つけることができないうほど弱くなければ。

あの二人の攻撃の盾になれる程の頑強さがあれば、武術など何も知らなくても、あの二人の攻撃を見切って防ぐことができる程の力があれば、サイタマ先生のように強ければ初めから、バングがガロウを傷つけることなく止めることができたの!!

それが出来ていれば、少しは奴からの信頼を勝ち取れたかもしれない。

ガロウは俺達の説得に、応じてくれたかもしれない。

……少なくとも、慕っているバングが誤解とすれ違いで大切な友人であるガロウを傷つけたという事実にあの人が、エヒメさんが傷ついて悲しむ未来などなかったはずなのに!!

いつもと同じ後悔。

けれどいつもと違って、怪人を倒せない事ではなくガロウを連れていかれた、ガロウに対して何もできず傷つけただけという後悔が、俺を突き動かす。

どけ。邪魔だ。消えろ。

あの人の願いを叶えるために、あの人が心から安心して笑ってもらう為に、ガロウを取り戻すのに怪人協会との戦いは避けては通れないのかもしれないが、貴様らなんかを相手にしている暇はないんだ!!

太陽を背にしてムカデの目をくらませ、俺はそのまま飛び上がった

時以上の出力で肩のブーストを起動させて一気に下降。

俺の身長以上のムカデの顔に飛び降り、俺の体重とブーストの勢い、そして重力が相乗された両腕のブレードをムカデの両目に突き刺した。

ムカデの瞼ですら俺の攻撃力をその装甲は上回っており、眼球も普通の生き物からは考えられぬほど頑強なものだったが、流石に俺の体重と重力、ブーストの勢いまで相乗されていれば、その装甲を貫通することができた。

もちろん、それだけで終わらせるつもりはない。

「デュアルブレードラッシュ!!」

ブーストの勢いをそのままに、俺はひたすらに俺の攻撃が唯一通用する部位であるムカデの眼球にブレードを突き刺し続ける。

やっと有効打を少しは決めることができたが、それでも俺の無力感と焦りは消えない。

こんなものは有効打とは言えない事を、本当はわかっている。ノーダメージよりはマシという慰めすら出来ない。

こいつの人間のような顔の部分の目を潰しても、ムカデらしい顔の部分にまだいくつも目は残っている。

森林公園外の市民が避難するまでの時間稼ぎになっているかも怪しい足掻きしか、俺は出来ていない。

足掻けば足掻くほどに、自分の弱さを思い知る。心が折れそうになる。

だが、折れる訳にはいかない。折れてたまるものか。

「すり潰れる!!」

意味などないに等しい足掻きに意味はあると言い聞かせてムカデの目を刺し続けていたが、ムカデは俺の左足に噛みついて拘束し、そのまま身をねじって自分の体の節目に俺ごと頭を突っ込む。言葉通り、自分の体で俺をすり潰すつもりのようなのだ。

またすぐに博士の手が必要なほどの破損は避けたかったが、ここでサイボーグの利点を生かさなければ意味がないので、俺は噛みつかれた左足を自分でもぎ取って離脱する。

だが、ムカデの触手じみた尾が俺を捕らえ、そして大鎌じみた顎が俺の体を上下に二分した。

地上でバングの「ジエノス君!!」と俺を案じる、悲鳴のような声が聞こえる。

しかし俺には、そこまで心配をかけていることに対する罪悪感さえも懐く余裕はなかった。

ただひたすらに悔しかった。自分の弱さに腹が立って仕方なかった。

上半身と下半身が別れ、重力のままに落下するしかない俺を真下で見上げながらニヤニヤ笑うムカデに、サイタマ先生と出会ったきっかけである蚊の怪人を思い出す。

あの時も、俺は上下が二分されて自爆以外になす術をなくしていた。

……俺は、あの時のままなのか？

あの時から何も変わっていないのか？

「そんな訳……あつてたまるか!!」

俺は確かに未だ先生の足元にも及んでいないかもしれないが、それだけは絶対がない。未だにあの頃から何も変わっていない訳ないと駄々をこねるように俺は叫び、コアのエネルギーを全力全開に起動させた。

自爆する気はない。あの頃は、生き延びることなど考えてなかった。怪人に負けて無様に死ぬぐらいなら、その怪人を道連れにすることを望んで、自分の命を軽んじ続けていた。

そんな俺の命はもちろん、博士の負担が大きい俺自身はパーツを交換すれば済む破損を、怪我と認識して心配して悲しんでくれる人、そして俺の自分を軽んじる姿勢を本気で怒ってくれた人と出会えた。

その人から、たくさんの尊いものを教えてもらった。

抱えきれないほどに大切に、愛しいものももらった。

復讐を肯定してもらいながら、幸せになってもいいという許し。正義とヒーローの違い。強くなるために必要な、「逃げない」を貫く覚悟。



そして、人間らしいあまりにも穏やかでありふれた日常の幸福。強くなりたいと願うのではなく、強くなると誓ったんだ。

復讐の為ではなく、あの幸福を、日常を守るために、これからも続けてゆくために俺は強くなると誓って今まで歩み、足掻き、走り続けていたというのに、あの頃と同じように自爆しかもう手がないなんてあつてたまるか！

死んでたまるか!! このまま、戦力外であつてたまるものか!!

コアのエネルギーを肩のブーストに回して出力全開で無理やり落下していた下半身に追いつき、接着する。

ガロウの時の腕のように自ら外したものではないから、かなり無理やりだがあのまま上半身だけよりはマシだ。

そして下半身を接着しても俺は肩のブーストの勢いを止めず、むしろ残された右足のブーストも起動させてさらに勢いをつけてムカデの顔面、狙い通り人間らしい顔の方ではなくムカデの方の顔の口、歯に全身の勢いをつけた蹴りを入れる。

そこは体の装甲よりは柔いかもしいが、それでも俺の焼却砲でダメージを与えることが出来なかった部位。

ムカデではなく人間の顔の部分を狙った方がまだ効果的だったかもしれないが、それはせいぜい時間稼ぎにしかならない。いや、下手に半端なダメージを与えて先ほど以上に暴れ回られたら、この巨体からして被害が森林公園の外にも向かってしまう。

だが、ここでこの牙を砕いてぶち抜けば、まだ活路はある！

俺でも、こいつに勝つことができるかもしれない。

勝ってみせる。

諦めてたまるものか！

「うおおおおおおおおおおおおっ!!!」

肩、肘、右足の脛や左足の膝、全身のブースターを片っ端から起動させて、歯に当たった状態でも俺は勢いを緩めない。

遠目から見たらムカデが火を噴いているように見えるほど勢いを付け続け、俺の体そのものを弾丸にしてその歯を、牙を砕く。

「うっっっ！ しまった……」

蹴り碎いた勢いのまま、俺はムカデの口内に入り込んだ。

ムカデも俺の狙いが何であるかを察したのか、奴は焦ったような声を上げる。

思った通り、流石に体内は普通の生き物らしい柔らかかった。

だがこいつはある程度なら自分の体内さえも自在に動かすことができるのか、口内から食道当たりの位置まで入り込んだ俺を内側から自分の体で挟み込んで動きを封じ、そのまま消化液を分泌しだす。

「数秒で完全に溶かしてやる!!」

くぐもったムカデの声に、無理やり肉の壁を押し上げてスペースを作りながら言い返す。

「溶けるのは、貴様の方だ」

俺の狙いはこれだ。

バンクたちでも外殻しか破壊できない程の装甲なら、破壊しても脱皮で回復してしまうのなら、内側から破壊してやる。

俺は先ほどの蹴り、ジェットドライブアローの反動で服が燃え尽き、消化液によつて装甲も溶かされてむき出しになったエネルギーコアから直接放つ。

今の俺に出せる、最大威力である超螺旋焼却砲をムカデ長老の体内から放った。

\* \* \*

超螺旋焼却砲を放った反動で、先ほどとは逆に俺はムカデの口から吐き出されてそのまま地面に落下する。

蚊の怪人の再現の次は、深海王の再現。同じ結果ばかり出す自分の弱さを、改めて思い知る。

だが、それでもあの頃よりはマシになったと思った。

そう。敵を倒せず無様に倒れ伏すしかなかった……エヒメさんに絶望させた拳句に、あんな一生痕が残る火傷を負わず結果よりはずつと……

「……………」

俺が無理やり体を、首を動かしてムカデの様子を窺うと、ムカデは口や体の節から俺の焼却砲による火を噴きだし続けていた。

だが、その火の勢いは徐々に衰えてゆく。そして火の勢いに反比例して、俺を見下ろすムカデの目の光は強くなる。

炎を噴き出していた体の節は、火が衰えて消えると同時にミチミチと音を立てて、焼けただれていた体が再生してゆく。

体だけではなく、あの人間のような顔も、俺が蹴り砕いた牙さえも同じように……。

嘘……だろ？

俺の心に対する答えのように、再生した老人の顔が俺を見下ろして嘲笑う。

ムカデの足が、俺の体を貫いて踏みつぶそうと高く掲げるのが見えたが、もはやボディの損傷やエネルギーの使い過ぎなど関係なく、俺に動く気力などなかった。

またしても……俺では……勝てない……。

守れない……。何も……。世界も……。あの人の約束も……。

「逃げるぞー」

あの頃よりマシにすらなっていない。あの時より良かったことといえば、エヒメさんがこの場にいらない事しかないということを知り、心が折れかけていた俺をバングが抱えて走り出す。

ムカデの消化液まみれで、コアから直接超螺旋焼却砲を放った影響の熱もまだ冷めきっていないにもかかわらず、バングは自分の肩や腕が焼けるのを一切気にせず、ポンプに他のヒーロー達を任せて森林公園を走り抜ける。

おい、やめろバング。こんなところでお前がエヒメさんの再現をするな。

余計に、自分の何も変わっていない所を思い知って情けなくなる。自分が無力であること、弱いことを思い知って泣きたくなる。

そんな八つ当たりの文句を言う気力だつてなかった。

なのに、自分の弱さを思い知って無気力状態なのに、それでも俺はまだ諦めることが出来ない。

俺に足りないのは何だ？ あんな奴がまだ他に何匹も残っているのか？

そんな連中を前に、俺はただ指を啜えて見ていることしか出来ないのか？

「バング！　まずいぜ、このままじゃ森林公園を抜けちゃう！　街で犠牲者が出るぞ!!」

あと……こんな人数を抱えたまま長くは走れん！　今年いくつだと思つとるんじゃ!？」

俺がいくら考えても答えは出ない。答えも結果も出せないまま、事態は悪い方向に進んでゆく。

普段はすぐに調子に乗るうつとうしいジジイだが、ただでさえS級の中でも良識的で責任感が強いバングは間違いなく、俺の言葉の所為で自分がガロウにしたことに罪悪感を懐いていた。

その罪悪感が、この事態は全て自分の責任だと思わせて、あのような行動を取らせた。

バングは抱えていた俺をそこらの木にもたれかからせて、ムカデと正面から対峙して言った。

「二か八か……お兄ちゃん。人生最後の全力を出すぜ」

バカか、お前は。

自分を棚上げて、まず思った。

お前、自分が死んでも市民はもちろん、俺を守る気か？

俺に、ガロウの救済を託す気か？　あいつの話を聞かずに兄と二人がかりでリンチした自分よりも、俺の方がまだ信頼を得られるとでも思ったのか？

ふざけるな。俺があいつを救いたがっているのは、結局はエヒメさんに頼まれたから。エヒメさんと約束したから。エヒメさんを悲しませたくないからに過ぎない。

あいつの為なんかじゃないんだ。あいつの為になんか、何も行動していない。

あいつを真に救えるのは、エヒメさんやお前のように、あいつを心から思う者だけなんだ。

話を聞かない、俺以上に自分で勝手に思い込んで思いつめるガンコジジイにそう言つて怒鳴りつけるつもりだった。なんなら、もはや自

壊しかかっている自分の腕を投げつけても良かった。

「やせませんよ」

だが、それを実行する前に凜とした声音がバングを止める。

舞い降りるように、そこに初めから存在していたかのように自然に現れた。

現れた瞬間、それが誰かを認識した瞬間、世界が塗り替わる。

絶望的な状況に変わりはないのに、モノクロだった世界が色づき、煌めいた。自分の無力さを嘆いていた絶望は吹き飛び、何としてもこの世界を守らなければと思えた。

諦める気などなかったのに、それでも立ち上がる気力をなくしてはたはずなのに、その人を前にしたら足を失っていても立ち上がった。

この深海王の再現で唯一の良かったところは彼女がいらない事、彼女が危険な目に遭っていない事だったはずなのに、彼女がいれば自分はこんなにもまだ戦えたことを知った。

「エヒメさん!？」

バングの前に現れ、バングを庇うように前に立ってムカデと対峙するエヒメさんは、俺の呼びかけに答えてはくれなかった。振り返らなかつた。

当たり前だ。そんなことをしている余裕などない。そんな事をする為に、彼女はここに来てくれたのではない事くらいわかっている。「バングさん! ジエノスさんを連れて私に触れて!! そっちのおじいさんも、その人たちをしっかりと抱えたまま私に触れてください!! ここまでムカデと距離が近ければ、直撃はなくても余波に巻き込まれます!!」

エヒメさんがそう指示を飛ばすと同時に、森林公園の俺達の現在地から別方向で、拡声器を使った声が聞こえた。

「ムカデ長老く〜! おい、害虫!! お目当ての “ブラスト” を連れて来たぞ!!」

キングの声だった。そして奴が「連れてきた」と言っているのは俺どころかバングも姿を見たことがないS級1位「ブラスト」だど!?

キングの発言から、このムカデはブラストと因縁があるようだ。お

そらく、ブラストを連れて来たというのはムカデを自分に引き付ける為の嘘。

エヒメさんがここにいるということは、キングだけではなく先生もいるということだろうから、ムカデに関してはもう何も心配しなくていいだろう。

だが、エヒメさんの言う通り俺達の位置がヤバイ。ムカデはキングの挑発に乗って俺達から方向転換したが、体が巨大すぎてまだ俺達はムカデと至近距離すぎる。

キングや本当にいるかもしれないブラストがどのような攻撃手段なのかはわからないが、この巨体と再生能力を持つムカデを殺すには、それこそ先生並の一撃必殺が必要だ。

そしてそんな攻撃が、ムカデ単独の被害に納まるわけがない。本当にエヒメさんの言う通り、この距離では直撃は避けても、洒落にならない余波をくらう。

俺やバングならまだ先生の拳圧で吹っ飛ぶくらいで済むが、負傷しているヒーロー達がヤバイ。

そのことをバングも瞬時に理解したのだろう。いきなり現れたエヒメさんに面食らうボンブに「お兄ちゃん、エヒメ嬢の言う通りにしてろ！」と指示を飛ばし、俺を抱え直して自分もエヒメさんの肩を掴む。

だが、俺はまだろくに動かない体を無理に動かし、バングから離れようと足掻きながらエヒメさんに言った。

「エヒメさん！俺は置いて行ってください!! この人数だと貴方の負担が大きすぎる!!」

エヒメさんのテレポートは一度に跳ぶ距離と重量が反比例する。重ければ重い程、彼女は一度に跳べる距離が短くなって、今のよう瞬時になるべく距離を取りたいのなら、かなり短い間隔で何度もテレポートを繰り返し返さなければならない。

それがどれほど彼女の負担なのかは、俺には想像もつかない。

だが、この場合は俺が一番彼女の負担である事、そして先生の攻撃の余波に巻き込まれても唯一の生体部位である脳を、頭部だけでも守れたら後は何とでもなる俺を置いていくのがベストであることくら

いはわかってる。

なのに……、彼女は……。

「ここであなたを置いていったら、何の為に来たかわかりませんよ」  
俺の言葉に、俺がベストだと判断した提案を「意味がない」と言い切った。

……エヒメさん、……自惚れてもいいですか？

その言葉は、貴女が俺の為に来てくれたという意味だと思ってもいいんですか？

そんな恥ずかしくなるほど自意識過剰なことは当然訊ける訳もなく、エヒメさんはブツブツ何かを呟きながら真っ直ぐに、もう俺たちなど眼中にないからこそ辺りの木をなぎ倒して地面の岩を弾き飛ばしながら身を翻す天災じみたムカデを見据える。

その眼に恐怖はない。その横顔は、誰よりも何よりも美しかった。

「……何のためのレポートだ。私はいつまで、自分だけ逃げられたらいいって思ってるんだ!!」

エヒメさんは自分を奮い立たせるように、呟いていた言葉を叫びに変えると同時に一瞬の浮遊感。その浮遊感がなくなった時には、景色は変わっていた。

俺達の目の前には、ムカデ長老がとてつもない形相と勢いでこちらに向かって来ていた。

そして、そのムカデの老人の鼻っ柱に拳を叩きこむ背中が見えた。

エヒメさんは10人を超える人数を一気に、一度に一番の安全圏まで、俺達とはほぼ反対方向の森林公園入口にいた先生の元まで連れてきてくれた。

\* \* \*

改めて、先生のすさまじさを今まで以上に間近で拝見した事で、思わず言葉を失う。

もはや自分の無力さを嘆くのも馬鹿らしくなって、いつそ清々しく思える程の一撃だった。

バングとボンブは二人がかりの連撃でようやく全身の外殻を破壊したというのに、先生は一撃でもう再生など出来る訳がないと確信で

きるほど粉々にムカデ長老を吹き飛ばしたのだから、劣等感を覚える余地もなく痛快としか言いようがない。

「ジエノスさん……」

俺がそんな風に思いながら先生の背中を眺めていたら、エヒメさんが俺を呼びかけた。

エヒメさんは俺の傍らに膝をつき、かなり無理をしたのか血の気の引いた青い顔色で、両目一杯に涙を溜めて俺を見ていた。

その涙を見たら、先生に与えられた痛快さや清々しさは消え、あの戦いの最中に苛み続けた無力感が襲い掛かって来る。

自分が本当に、何も成長していない事を思い知った。俺は何も変わっていないのに、この人はとても強くなったことも知った。

深海王の時なら、この人数を一気にここまで連れて跳ぶことなんかできなかったはずなのに、この人は「自分一人だけが逃げる為の能力」であることを嫌って、俺達を助ける為に限界を超えてくれた。

なのに俺は……、ガロウから何も訊き出せなかった拳句、怪人に連れ攫われ、そしてこのムカデだって結局倒せなかった。時間稼ぎにはかろうじてなったが……、ダメージらしいダメージを与えることなど出来なかった。

深海王の時と何も変わっていない。成長していない。あの時と同じように、俺は貴女を守るところか悲しませてばかり……

「ジエノスさん！」

「——え？」

自分の無力さに落ち込んで何も言えなくなっていた俺に、エヒメさんは泣きながら俺の胸に縋りつき、そして言った。

「無事で……良かった……」

……悲しませてばかりだと思った。また俺は彼女に心配をかけて、だから泣かせてしまったと思っていた。

俺が弱い所為で泣いていると思っていた。

けれど、彼女は……エヒメさんは……。

「ジエノスさん……。おかえりなさい。……お疲れ様」

しばらく俺の胸に縋りついて泣いていたエヒメさんが顔を上げ、



言ってくれた。

まだその両目から涙は溢れている。けれど、彼女は笑っていた。俺に心配をかけぬように強がっては、心から安堵している、喜んでいてくれる事がわかる笑顔で彼女は、ここまでボロボロになった俺を「無事」と言ってくれた。

「……はい。……ただ今、戻りました」

だから俺も、笑って答えられた。

約束を……、必ず「いつてきます」と言ったらどんな怪人相手でも生きて戻ってきて「ただいま」と答えるという、先生と同じ約束を果たすことができた。

……ああ。俺はまだまだ弱くて、戦力外かもしれない。けれど、成長していない訳ではない。

あの時とは、深海王の時とは違って、どんなに望んでも動かさなかった体が動く。

この人の涙をこの手で拭えるのなら、俺はまだこれからも折れずに、どんな敵にも屈せずに進める。そう思えた。

「ジェノス、大丈夫か？ また派手にやったな」

「先生」

エヒメさんが少し落ち着いたのを見計らっていたのか、エヒメさんが泣き止んで俺から離れたタイミングで先生が俺に安否を確かめる声を掛けてくれた。

それは十分光栄で、そしてエヒメさんのおかげで失いかけていた自信は取り戻していたが、それでも俺には一刻も早く、もつと強くなりたいという渴望があった。

ムカデ長老を粉碎した先生の一撃が、その軌跡である木々が薙ぎ倒れて巨大な轍わだちのようになった地面こそが強さの象徴、俺が目指すべき場所へ至る道そのものに思えた。

なので、サイタマ先生に唐突だろうが改めて尋ねてみた。

「先生、俺に足りないものは何だと思えますか？」

「え？ パワーじゃね？」

「多分絶対に違う!!」

先生の答えに俺が納得しかけたが、即座にエヒメさんに「違う」と否定された。

そして先生は、「ジエノスさんが真に受けるから、テキストに答えるな!!」とエヒメさんにその場でしばらく叱られてしまった。

何というか……、余計なこと訊いてすみません、先生。

三人にとつてのガロウについて

(フブキの場合)

フブキ組が全滅させられた。まあ……半分は姉の所為だけど……。それはひとまず横に置いて、これは緊急事態。

ここ……サイタマの家をフブキ組の支部として会議する必要があるわね。

流石のサイタマも、この怪人の大量発生には一人だと手を焼いてるでしょうし、あいつのことだからどうせ怪人協会の事もヒーロー狩りの事も何も調べてないはず。

ああ、そういえばヒーロー狩りはエヒメの小学生の頃の友達だった可能性もあるらしいわね。

それはエヒメの考えすぎな杞憂だと思うけど、万が一そうだとしたらなおさら念動力で拘束して無力化出来る私が必要でしょう。

ええ、考えれば考える程に私よりあいつにメリットがあるのだから、嫌とは言わないわね。むしろ、向こうから協力してくださいって言う立場よね、普通は。

まあ、あいつにそんな素直さとか殊勝さは今更期待してないし、ここはリーダーとして器の大きさを見せる為に、私の方から提案してあげるわよサイタ……

「はい」

誰!?

サイタマの家のインターホンを押して出てきたのは、サイタマでもエヒメでも鬼サイボーグでもなく、仙人じみた風格のおじいさんだった。

え？ 本当に誰この人？ 部屋……というかマンション間違えた？

「お？ お友達かな？ さあ、入って入って！ お客さんだぞ、サイタマ君」

あまりに予想外な人物が普通に出てきたことで茫然としていたら、おじいさんが私に入るように勧めてからサイタマを呼ぶ。あ、良かった

た。部屋やマンションそのものを間違えた訳ではなかったのね。

けど、ということは余計に誰よこのおじいさん！ 何？ サイタマとエヒメの実の祖父とか？

そう思いながらもはや通い慣れたサイタマの家の短い廊下を歩いて部屋に向かうと、見慣れた部屋にサイタマはいるけど見慣れたエヒメと鬼サイボーグの姿はなく、代わりに見慣れないシルバーファンクと見慣れたくないキングがいる……。

何なのよこれ!? どういう状況なの!?

シルバーファンクと面識があるのは、この前の勝負の時に連れてきたから知ってたけど、彼もよく家に来るほどの仲だったの!?

そうだとしても、何でサイタマの家で鍼灸してるのよ!?

「あ……またフブキ氏、遊びに来たようだよ」

「ねえ……何で……お前の攻撃一発で俺の育てたモンスターすぐ死んだのかな……? レベルめちゃくちゃ上げたはずなんだけど……」

そして何であなた達二人は、こんな時でもいつもと変わらず呑気に対戦ゲームなんてしてるの！ しかも今時見ないような、分厚い携帯ゲーム機で!!

本当に何なの、この状況!? エヒメはどこ!? 鬼サイボーグがいたら話がややこしくなりそうだからいらないけど、エヒメがいないとこの状況に誰も説明やフォローを入れてくれないんだけど!?

「ん? 何でお前いの?」

「緊急事態よ!!」

死んだ目で携帯ゲームを眺めていたサイタマがやつと私に気付いてかなりムカつくことを言い出したけど、幸いというべきか私は状況の訳のわからなさに混乱してたからか、その発言はスルーして本題にさっさと入る。というかエヒメがいないのなら無理にでも話の主導権を握らないと、たぶん永遠に私は蚊帳の外だわ。

「フブキ組の皆がやられたのよ! 今回の怪人組織はかなり危険よ!!

ゲームとかしてる場合じゃなくて……っていうか、本当にエヒメはどこ!? 鬼サイボーグもいないし! まさかあの二人、こんな時だっというのにデートでもしてるの!? そうするのは平和で私が暇で

こっそり尾行できる時にやりなさいよ!!」

「フブキ氏、本音が出てる」

「ただどあまりにもサイタマのいつも通り過ぎる言動に苛立って、いつもなら「お兄ちゃん！ フブキさんに失礼でしょ!!」と言って叱るエヒメがいない八つ当たりと、そのいない理由になりうる鬼サイボーグとちよつと面白そうなことになってんじゃないかという期待が、つい混乱してた私の口から飛び出してキングに突っ込まれる。

「いや、あいつら隣のジェノスの部屋にいるから」

ゲームどころか横になりだしたサイタマに呆れたような目で見たのは屈辱だけど、そんな目で返された答えに私の方が更に呆れたわよ。

ちよつと待つてよ、エヒメ。そして鬼サイボーグ。あなた達、こんな時に何で本当にいい感じで二人つきりになってんの？

「ああ、別に二人はお家デートしとる訳じゃないぞ。

ジェノス君がつい先ほど、怪人との戦いで動けはするが戦闘は無理そうな程に壊されたから、少しはマシになるように自力で出来る限り直すと言つてな、エヒメ嬢はその手伝いを買って出ただけじゃ。

ジェノス君の部屋におけるのも、その為の道具がそっちにあるのとこっちはわしらがおるから狭くて、工具や部品を広げにくいからじゃ」

私の呆れた表情が内心をよく表していたようね。

シルバーファンクが横になったまま手を振って私の考えを否定し、ついでに何で自分たちがサイタマの部屋に集合してるのかを話してくれたわ。

「どうやら、最初に私を迎い入れたのはシルバーファンクの実兄で、彼らはヒーロー狩りを追っていたらしい。」

で、鬼サイボーグと交戦中だったヒーロー狩りを発見して、シルバーファンクが元師匠としての責任で討伐しようとした最中に「怪人協会」と名乗る奴等の襲撃に遭って、鬼サイボーグは大破、シルバーファンクたちも負担が大きかったらしく、サイタマの家で休ませてもらっていたそう。

なるほど……。それなりに皆、修羅場だったようね。

だというのに……。なのに何で？ 何でこの男はいつも通りでいられるの!?

「きつとすごい強かったんでしょ!? 怪人協会の奴等、半端じゃないわ!」

ねえ、サイタマ！ 落ち着いたふりしてさすがにちよつとは焦ってるんでしょ!？」

「いや……。別にいつもの事だし。俺的には怪人より、やっぱりガロウって奴はエヒメの友達でヒーロー狩りで、しかも怪人に攫われたってことの方が焦るわ」

「どこが焦ってるって言うのよ!? っていうか、それはマジなの!？」

サイタマは相変わらず横になりながら言うから突っ込んでから、割と衝撃的な事実を聞かされて思わず訊き返す。

「え？ 本当にヒーロー狩りはエヒメの小学校の時の友達だったの?」

それ本当？ 確定してるの?」

「確定も何も、昨日偶然だけど再会したんだよ。で、ジェノスやジーさんが今日会ったガロウと外見とかエヒメの呼び方が一致してるから、まず間違いなく同一人物だよ」

私の念押しの上に、サイタマはやっぱりしれつと答える。

エヒメの杞憂だと思っていた懸念がまさかの的中に、柄じゃないけどデートのお膳立てをしたらトラウマと再会して帰ってきたエヒメを思い出してついつい心配してしまう。

「会ったの!？ それ、本当にエヒメ大丈夫？ あまりに変わりっぷりにあの子、シヨック受けてない?」

『あー、大丈夫大丈夫』

けど私の心配は、サイタマどころかキングとシルバーファング、更にはその兄のボンブにまで即答で「する必要ない」と否定された。

……。え？ どういうこと?」

あまりに謎な断言の根拠が気になって、ランキングの為の功績程度にしか興味なかったヒーロー狩りについて、私は尋ねてしまう。

「……。ねえ、そのヒーロー狩りってどんな奴だったの?」

「エヒメの事が好きすぎる奴だった」

「エヒメちゃんが大好きだった」

「エヒメ嬢の事が好きすぎるのお」

「あの嬢ちゃんがめっちゃくちゃ好きだな」

うん。実は訊くまでもなく知ってた。

本当にエヒメの友達と同一人物なら、そうだろうなって思ってたわよ!!

\* \* \*

(バングの場合)

サイタマ君の部屋を借り、お兄ちゃんに針を打ってもらいながらわしは考える。

……きつとわしは、最初から何もかも間違えてたんじゃろうな。

『強くなりたいんだ。強くならなくちゃいけないんだ』

目を閉じれば昨日の事のように思い出せる。初めて出会った時の事を。

親御さんが、「性根を鍛え直してほしい」と言っつてわしに預けた子じやった。

若い頃のわしは、自分一人が圧倒的な最強になればすべての悪を討ち消すことができると思っつておつた。しかし長い年月の修業と戦いの日々で得た答えは、どんなに頑丈な柱でもたつた一本では平和ちゆうもんは支えられんということじやった。

だからわしは、強者が更なる力を身に着けるより弱い立場の人々に力を与えてやることの方が重要じやと悟つて、自分一人で生み出し自分と共に朽ちるつもりじやった岩砕流水拳を世に広めようと思つた矢先、たまたま怪人に襲われていたのを助けた夫婦にそのことをちよろつと話したら、「自分たちの粗暴な息子にせひとも、そのような考えを与えて欲しい」と頼まれたのが、あの子を……ガロウを弟子にした

きっかけじゃ。

最初はどのような小生意気な小僧かと思つたら、やせつぽつちのほとんど何もしゃべらん子供で、まあ確かに口は悪いがそれ以外はむしろどの辺が粗暴なのか不思議に思つたわ。

いつまでたつてもわしを先生とも師匠とも呼ばず「ジジイ」で通し、他に弟子が出来ても弟弟子の面倒を見てやるどころか、挨拶さえもろくにしてやらん奴じゃつたが、それはただの反抗期で済む程度。

むしろあやつは、そういう礼儀に関しての事以外は優等生と言つても良かったのう。

鍛錬はもちろん、道場の掃除も何だかんだで真面目にやって後輩に押し付けることはしない奴じゃつた。

よく友達と喧嘩したとかで、怪我をして道場に来る子じゃつた。ガロウは、「友達じゃない」といつも言つておつたのう。

……今になって思えば、この否定で気付くべきじゃつた。あの子は親御さんが言うような粗暴な子じゃなくて、むしろ本当に粗暴な子にイジメられておるからこそ、自分の身を守るために反撃しとるだけじゃということに。

けれどわしは、愚かなことに気付かんかった。

男同士なら、遊びでも取っ組み合つて怪我するのが当たり前じゃと思つておつた。喧嘩しても友達なら「ごめんなさい」と謝れば、それで終わつて仲直りできるもんじゃと信じておつた。

あの子が親御さんの言うような粗暴な子ではないとわかつておつたのに、親なら子がいじめられておることに気付くと思つておつた。わしもガロウの両親もガロウの傷に、痛みにも気づくことが出来んかった。

訊かなかつた。

初めて道場に訪れた時、ガロウが両親に無理やり送り込まれて不満そうではなく、自分の意思をもつてわしを真っ直ぐに見据えて宣言した言葉の真意を。

訊くべきじゃつた。たとえ答えてくれなくとも、疑問に思うべきじゃつた。



どうして、ただ強くなることを望むのではなく、まるで義務のように言うのかを。

強くなりたいと望むのは男としての本能のようなものじゃと思つて、具体的な理由や深い意味などないと思ひ込んでおつた。わしは子供というだけで、そんな風にガロウの真摯な決意を軽く見ておつた。そんなんじやから、わしは初めから最後までガロウから信頼を得ることなんぞ出来んかったのじやろう。

ただ、あの真つ直ぐな目を一目で気に入つて、わしはもはや親御さんからの頼みなど忘れてガロウに武術を教えた。

あの時は、この子ならわしの教えを正しく理解して身に着けてくれると思つたんじや。

……そう思つたはずなのに、何故わしはいつもいつもガロウのことを信じてやらなかつたのか。

いつしか、「友達とのケンカ」で怪我して道場に来ることはなくなつたが、あやつは誰かに怪我をさせて親御さんやわしが呼び出させることがたびたびあつた。普段は挨拶さえもしない弟弟子をボコボコにして、道場から追い出したこともあつた。

そのたびに叱りつけた。……話を聞いてやらんかつた。氣付くべきじやつた。

あやつが怪我をさせる相手はいつも、同級生をカツアゲしてた悪ガキ、電車で女子供に絡んでた酔っ払い、武術を悪用している者などという、暴力は擁護できんが殴りたくなる気持ちはよくわかる奴等ばかりであつたことに。

そんな奴等ばかりだつたからこそ、わしは他の弟子たちを半殺しにするまでガロウのしたことを叱つても破門はしなかつたというのに、わしは氣付けんかつた。

あやつは、弱い者いじめをしないどころか弱い者いじめを見て放つておくことが出来ん奴だつたことに。

あやつが傷つけた相手は明らかにあやつより弱いものであつても、そやつらがしたように……被害を訴えることが出来ず泣き寝入るしかない弱者を甚振つておきながら、屁理屈で自分の行いを正当化する

のではなく、暴力という間違ったやり方じゃが正そうと、弱者を救おうとして、そしてやり方が間違えている事をわかっておったからこそ、あやつは自分を正当化は絶対にせんかった。

悪い子ではないとあの真っ直ぐな目を見て思ったからこそ弟子にしたのに、わしはあやつのもう一つ美点を当たり前じゃと思って、褒めることも認めることもせず、悪い所ばかり叱りつけてきた。

考えれば考える程、思い返せば思い返すほどに信用されなくて当然じゃな。

わしは……無駄に歳を重ねただけの愚か者じゃ。

あやつが何に絶望して、その絶望から強さを求めた事なんか考えもつかなかった。

そしてそれは、今もわからん。

わしの知らない、わしに弟子入りする前のガロウをエヒメ嬢から教えてもらったも、あやつのもう一つの絶望は未だに見当がつかん。

わしはただ単に一緒にいた期間が長かっただけで、あやつにとって信頼するに値しないジジイであつたんじやろうな。

……エヒメ嬢と違って。

あの子はガロウのことをわしよりもよく理解しておった。

ガロウと関わった期間は10年ほど前の1年未満、関わった機会など両手で足りる程なんて信じられんくらいに。

10年近い付き合いのわしは、他の弟子を半殺しにしたこともヒーロー狩りも、ただ自分の強さに驕った愚行としか思わなかった。

あやつを信じてやらなかった。

エヒメ嬢は初めから信じ続けた。

ガロウのしたことには何か理由が、意味がある。

あやつをしている事は、声にならない助けを求める声であることを信じておった。

……ガロウよ。おヌシを破門にしておらんかったら、ジェノス君がおらんかったら、間違いなく何としてもエヒメ嬢をおヌシの嫁するためにわしは奮闘するほど、あの子はいい子じゃ。そしておヌシの見る目に間違いはない。

……そんな見る目のあるおヌシなら、やり方を、力の使い方を、手段を大きく間違えておるがそれ以外は……心根の部分は怪人なんぞとは程遠く、何も間違えてないと今なら思える。

じゃが、ガロウよ。

おヌシは、一番大切なものをきつとわしよりも正しく理解して、間違えておらんのじやろうが、同時に最も大切なものを……、やり方を致命的に間違えておる。

じゃから……何もかも間違え続けて、信用も信頼も得られなかった耄碌ジジイじゃが、それでもわしはおヌシの師で……おヌシはわしの一番弟子じゃから、その責任は取る。

「……バング」

うつぶせてわしが決意を固めておつたら、それを察したのかお兄ちゃんはわしを案ずるような顔をして話しかけてきよった。

「……ジエノスっていう兄ちゃんやあの嬢ちゃんの話からして、お前さんが後悔して落ち込むのはわかる。わしもお前の言い分だけ聞いて味方するんじゃないやなくて、冷静になって宥めるべきじゃったと思つてる。

だがな、あんまり自分一人の所為だと思ひ詰めるな。そもそも、それが原因で今の結果なんじゃからな」

……ああ、そうじゃのお兄ちゃん。

わしは勝手に思い込んで思いつめて、ガロウと心中する覚悟でガロウを探したからこそ、この結果じゃ。

少しでもガロウを信じていれば、こんなことは起こらんかった。

わしがジエノス君やサイタマ君、エヒメ嬢に頼っておつたら……少なくともエヒメ嬢は、わしがガロウを傷つけたということ悲しみはしなかつたはず。

そのことがまたわしの罪悪感を大きくさせてゆく。

「ボンブお兄ちゃんや。もう心配せんでくれ。

……大丈夫じゃ。もうあんなことはせん。あんなこと、誰に対しても何の詫びにもならんことを思い知ったからのう」

じゃが、お兄ちゃんの心配はちよつと今更すぎて見当違いになつて

いる事をわしが伝えると、お兄ちゃんは一瞬間を置いてから苦笑して「そうだな」と応じる。

「どうやらボンブお兄ちゃんも思い出したようじゃ。」

大丈夫。あのムカデの時はガロウを連れ攫われた挙句に、ジエノス君まで止めることをできずあんな目に遭わせたことで、もはや死んで詫びるしかないと思いつめてしまったが、もうあんな風に自分の命を投げ出すような真似はせん。

エヒメ嬢に、言われたからもう。

『……私はバングさんが大好きですけど、これだけは……ガロウ君の話は今まで一度も聞いてあげなかったということについては、絶対に許せません。』

……バングさんがガロウ君のことを思ってくれているからこそ、許せないです』

わしの元弟子のガロウとあの子の友達のカロウ、そしてヒーロー狩りのガロウが間違いなく同一人物だと確定した時、わしは土下座でエヒメ嬢に謝ったが、エヒメ嬢は悲しげな眼をしたままわしを「許せない」と言った。

そのことをショックに思うより、許せないのにわしを「大好き」と言ってくれることの方が申し訳なかった。

許されなくて当たり前じゃ。わしだってそんなこと望んでおらん。なのに……あの子にはジエノス君のように怒鳴って怒って、わしを「ヒーロー失格」と言う権利はあったのに、言われて当然じゃったわしに手を差し伸べて、まったく別の言葉を、わしに与えられるとは思ってなかった言葉をくれた。

『だから、こんなところではもちろん、ガロウ君を怪人たちから助ける時だって「人生最後の全力」なんて絶対に許しませんよ。』

バングさんはこれから、ガロウ君に許してもらうまで頑張ってもらわないといけないんですから』

許されることなんか望んでなかった。そんな権利はわしにはないと思っておった。

しかしエヒメ嬢は悲しげではあったが笑って、わしにそんな未来が

訪れることを信じて、その未来の為にまだ足掻くことを望んだ。

それは今ここで、ガロウやエヒメ嬢たちを守って死ぬことよりも過酷な余生かもしれない。わし自身がわしの余命を全部使っても償いきれんと思っておるのだから。

けれど……それはわしが望んではいけない、そんな権利はないと思つて諦めた、わし自身が本当は望んだ未来じゃつた。

「……ガロウよ。わしが悪かつた。……だからこそ、今度こそ絶対に止めちやる」

お兄ちゃんがまた勘違いしないように、今度は決心を口に出す。

ガロウ。もうわしは間違えん。だから、おヌシも間違えるな。

おヌシにどんな事情があつたのか、どれほどの絶望が本来ならしなかつたであろう暴力をおヌシが振るうようになってしまったのかは、未だに見当もついていない、何もわかつてないわしじやがこれだけはわかる。

おヌシのしている事は、わしの間違い以上にエヒメ嬢を悲しませて傷つける。

そしてそれは、おヌシも本望じゃないじやろう？

あのストーカーの怪人の事も、「もう終わった事」にせず真つ直ぐに向き合っていたからこそ、わしらを許せなかつたんじやから。

\* \* \*

(サイタマの場合)

「ここに座つて！ 今から皆で作戦会議を開くわよ！」

フブキがうちのちやぶ台をバンバン叩いてんなこと言うけど、こいつマジで何しに来たんだ？

とりあえずじーさんやキング、そんで俺はジェノス経由でヒーロー協会からなんか聞かされてないかを訊かれたから、別に何もと答えておいた。

じーさんやキングの方もそう。ってというか、通信機を二人ともなくしたらしい。たぶんジェノスもなくしてんだろうな。あいつ、服どころか体もムカデの消化液で溶かされて全裸だったし。

協会からの情報がないってわかると、今度はどう動くかを訊いてきたからこれもとりあえずジェノスは最低でも今日一日は戦えねーぞと言つといた。

まさかあいつの体を作ったり治したりしてる博士も、パワーアップさせた数時間後にあそこまでぶっ壊れるとは思ってないだろうな。

じーさんたちも腰やら足を痛めてるから、少なくとももうしばらくは休まねーと動けねーっていうし、キングはやたらと真剣な真顔で「俺も少し別件で用事があったような」とか言い出す。

「じゃあ今、動けるのは私とサイタマだけってことね……」

キングまでテキトーな言い訳で断ったせいで、なんか俺とフブキと一緒に動くことが決定事項みたいになってやがる。フブキもその前提で俺になんか言ってるし。

あー、エヒメやジェノスがいない時に俺に長い話すんなよ。

ただでさえ、一応はソニックスのおかげで思ったよりマシだけどき、昨日ガロウって奴に再会した所為でエヒメが「あのまま放っておいて良かったのかな?」「やっぱ無理してでも話を聞きだすべきだったかな?」「せめて怪我の手当てくらいはちゃんとしとけば良かった」みてーに悩んで不安がって後悔しまくりで、俺もあいつに約束したからにはどうしたらいいかでこれでも色々悩んでるんだよ。

拳句の果てに、ガロウは怪人たちのクラブ活動的ななんかに攫われたから、エヒメが更に不安がってやがる。

これもジェノスのおかげって言うべきか、動けるだけいつもよりマシだけど結構ハデにあいつがぶっ壊れたから、エヒメの関心が目先のジェノスに行ってるつつーか、あいつ自身もそっちに集中させて今にも不安でその辺にテレポートしまくってガロウを探したい衝動を抑えてる感じなんだよなあ。

あー、くそ。面倒くせえ!

いや、エヒメとの約束を守る事とかガロウを助けることを面倒くさ

いとほ思つてねえよ。

けど、そこに至るまでがどう考えても面倒くさい。

ただでさえどこにいるのかわからんガロウを探すのは面倒だから、あいつが俺をヒーロー狩りで狙ってくるのを待ってたのに、あいつは昨日会った時もキングに一直線で俺を全然狙わなかったことを思い出すと、面倒くさいという気持ちとはまた別のムカつきが生まれた。

うん、思い返したら何なんだ、あいつは。

あの時の俺はコスチューム着てたんだから、いつもだけど私服のキングより俺の方がヒーローらしくかったのに何でキングに一直線なんだよ？

何で俺は眼中にないんだよ？ ハゲマントだからか？

しかも、あいつエヒメに言われるまで俺をエヒメの兄貴だつてわかってなかったな。

まあ、似てないのは知ってるから見てわからんのは仕方ねーけど、あいつの方が先にエヒメに気付いてたよな？ だからキングに一直線だったのに立ち止まって、何かポカンとしてたんだよな？

……エヒメ、めつちや普通に俺を「お兄ちゃん」って言って話しかけてたのに、あいつは俺をエヒメの兄貴だと思わず、軽い突っ込みを暴力だと思つて不審者扱いしたのか？

エヒメの為にあそこまで怒つて、あんな怪我してたのにエヒメを守ろうとしてくれたのは感謝してるし、あいつが悪い奴だとは思えねーのは変わらねーけど、どこまでも悪気なく俺を無視してたのがかなり今更だが、結構ムカつく。

いや、俺を無視してた、まったく相手にしてなかったのはまだいい。ガロウつて奴の事を考えてたら、更に思い出しちまったじゃねーか。ジエノスとジーさんたちが言つてたこと。

あいつ、半月くらい前のエヒメのストーカーだった怪人をボコつてくれた奴だったんだな。

そのことはマジでいくら礼を言つても足りないくらいに感謝してる。

けど、俺と同じように感謝して礼を言おうとしたジーさんにあいつ

はキレたらしい。あのストーカーにトドメを刺せず、のうのうと逃げたことに。

そのことに言い訳する気はねえ。あいつの言う通りだと思う。

あの場ではエヒメを守るのを最優先したことに後悔はもちろんねえけど、あいつがああな怪人を見つけてボコってくれなかったら、誰もあの怪人を見つけれず逃がして今も野放しのままだったらと思っただら、背筋が凍る。

俺はあの時、エヒメの無事を確認したら誰がエヒメを家まで守って連れて帰るかで喧嘩してるS級<sup>あいつら</sup>たちを「アホか」と思っただけで眺めるんじゃないくて、そいつらにエヒメを任せてあの怪人を探すべきだったんだ。

もう二度と、エヒメにあんなふざけたこと言うどころか思うことすら出来なくさせる為に動くべきだった。

そう思ってるから、やっぱりガロウがエヒメの為にキレたのはありがてえと思うだけだ。

……ありがてえって思うからこそ、ムカつく。エヒメとの約束を破って、ぶん殴りそうになるくらいにな。

ガロウ。お前何であのストーカー怪人を逃がした俺らにマジギレしたくせに、俺の突っ込みさえも許さないくらいにエヒメを守ろうとしてんの、何やってんだお前？

そこまでエヒメ大好きで、俺よりもずっとエヒメをしつかり守ってやろうとしたくせに、何でお前はあいつが一番悲しむようなことしてんだよ？

「ねえねえ、どうする？ 本部は本部で特別対策班が作戦を立てると思うんだけど、こういう時にB級以下ヒーローの行動の起こし方が今後の評価にも響くはずだし、私たちも何か活動出来れば………聞いてる？」

フブキが長い話をしてるけど、俺は全然聞いてなかった。

あの時は「俺は何で趣味でヒーローを始めたんだっけ？」「ここまで強くなったのなら、次は何したらいいんだ？」って考えると、あいつのエヒメ大好きっぷりに気を取られて気にしてなかったけど、思い返せ



ば思い返すほどにあのガロウって奴の事がムカついてきた。

いや、エヒメの事を本気で、特にギブスしてる足ならともかくひでえけど痕であって完治してる火傷だってあいつは泣きそうな顔で心配してくれてたから、嫌いではねーんだよ。むしろ、嫌いじゃねーからこそあいつのやってるのがマジで許せなくなってきた。

「……許せん」

『は?』

俺の心の声はそのまま口に出た。脈絡ゼロで言ったから、フブキはもちろんキングやジーさんたちはポカンとした顔で俺を見る。

ああ、やっぱり俺はモヤモヤ悩んで考えるのは性に合わねえわ。

エヒメが今にも泣きそうなくらいに不安がってるのに、それを我慢して笑ってるのならなおさら俺は悩んでなんかいらねえ。

「あいつ……、ストーカーの事で俺達にキレといて、自分は何してんだ?」

んなこと呟きながら、俺は手袋をはめてマントを付けて家に残すキングやジーさんたちに「帰るんなら隣のエヒメに声かけていってくれ」と言つて、家から出ようとする。

「サイタマ君!？」

「ちよっ、サイタマ氏どうしたの?」

「え? まさかサイタマあなた、ヒーロー狩りに怒ってるの? ヒーロー狩りを探す気? 居場所はわかってるの?」

流石に俺の行動は思い付きの行き当たりばったり過ぎて、全員が困惑してるけど俺にやっぱりやめる気はない。このまま家にいても暇だし。ゲームはキングの所為でやる気なくしたし。

だから、俺は玄関開けながらとりあえずフブキの問いに答える。

「捜すんだよ。それで、エヒメとの約束だから話は聴くけど、内容次第ではぶん殴る。」

あとついでに白菜買って来る」

エヒメ。悪い。あいつのことを気に入ったのは本当だけど、だからこそお前がどうい奴かをわかってるのに、お前がそういう奴だからこそお前の事が好きなのに、お前をあんなにも不安がらせるあいつが

俺は許せない。

だから、例えば誰かをそれこそ怪人何とかに人質に取られて、ヒーロー狩りはそいつらの命令でさせられてたとかならともかく、俺に納得できない理由でお前を悲しませてたんなら、せめて一発ぶん殴る。絶対に怪人たちから助けてやるし、話も聞く。頑張つて長い話でも聞くけど、これだけは俺だつて譲れねえ。

そんな意気込みで、いつもの「行つてくる」つて言うのと一緒にエヒメに謝つて宣言しところかと思つて、俺は隣のジェノスの部屋のドアを開ける。

ジェノスは片足無くしてたし、エヒメが出ようとしても結局ジェノスが「俺が出ますからー」とか気を使うのが目に見えたから、インターホンを鳴らさずそのままドアを開けて普通に中に入ったのは、俺なりの気遣いのつもりだった。

が、玄関入つてすぐに「インターホン鳴らせば良かった」つて後悔する。

ただでさえあいつの部屋は家具とかが最低限にしかないし、廊下からワンルームに繋ぐドアは開けっぱだったから、玄関開けたらすぐに目に入ったわ。

ジェノスの横に座つてあいつの肩に頭をもたれかかるようにしてエヒメと、エヒメを何か抱き寄せようとしてるジェノスを真正面から見て、二人と目が合っちゃまったよ……。

「お、お兄ちゃん!」

「せ、先生!」

やめろ、慌てて距離取るな。余計に気まずすぎるから。

この気まずすぎる鉢合わせで、エヒメが恥ずかしがってキレてジェノスはジェノスでなんか土下座で俺に謝るもんだから、結局俺は「話は聴くけどぶん殴るかもしれない」つてことを言えなかった。

……………まあ、言つても俺がエヒメに土下座する羽目になることをこの数時間後にやらかしちまったけど。

正直、この鉢合わせ以上にすまんかったエヒメ。そしてガロウ。マ  
ジごめん。

## 絶対に大丈夫

「ジエノスさん、背中側の外すボルトはこれで全部ですか？」

あの……大丈夫ですか？ 私、外してはいけないものとか外してません？」

私がジエノスさんの指示通り、ジエノスさん一人では応急処置が出来ない背中側のパーツを処置しつつ、つい不安になって尋ねる。

雑貨やアクセサリー制作を本業にしてるから手先には多少の自信はあるけど、精密機器の製作や修理はしたことも学んだこともないし、しかも家電とかじゃなくてジエノスさんの体なんだからちよつとした間違いでも取り返しがつかない。

自分で手伝いを買って出たくせに、「もし間違えてすぐ大事な部分に傷でもつけたら」というプレッシャーが凄い。

「はい、大丈夫です。むしろとても丁寧で助かってますから、安心してください」

けどジエノスさんはいつものように優しく笑って、私の不安を穏やかに溶かしてくれる。

火傷のように溶け爛れた顔が痛々しいけど、それでも私はその笑顔に安堵を覚えていた。

ジエノスさんが修理を終えてもうすぐ帰って来ると連絡してくれたけど、協会から支給された応援要請とかが届く端末で緊急の要請があつて、そちらに向かうから遅くなることだつてこの人は丁寧に連絡してくれた。

メールでだけど、「いってきます」と私に伝えて、私の不安を少しでも軽くしようとしてくれたことをその笑顔で思い出して、私の胸の内にあたたかくて幸福なものが満たされる。

けど、すぐにその暖かで幸福なものは穴が開いた器から零れ落ちるようになくなって、別の不安が私の中を満たす。

あと、羞恥と罪悪感も。

あああつっ！ 何で私はガロウ君が怪人たちに連れ攫われてるつて時に、ジエノスさんにときめいてるの!?

初めて入ったジェノスさんの部屋にドキドキしてるんじゃない！

あの夢の通りの物が少ない殺風景な部屋であることなんて今はどうでもいい！ ガロウ君の無事が確定してから存分に悶えとけ!!

ごめんなさい、ごめんなさいガロウ君。あなたのことを蔑ろなんかにしないよ。けど、恋愛脳で浮かれてる私で本当にごめんなさい。

「……あの、エヒメさん」

「!? は、はいー!」

急に頭を抱えて悶えだした私を不審に思っただけでジェノスさんが引きつつも心配してくれたと思ったけど、幸いというべきかジェノスさんは私の挙動不審に気付いていなかった。話しかけたのは、まったく別の理由。

「……すみません、エヒメさん。俺は、貴女との約束を守りませんでした」

「!? 何言ってるんですか! ジェノスさんは、ガロウ君が向かって来ても攻撃しないで話を聞こうとしてくれたんですよ!」

十分すぎる程、約束を守ってくれたじゃないですか!」

振り返って言ったジェノスさんの謝罪に、思わず浮かれてる自分の自己嫌悪とか羞恥が吹っ飛んで反射で否定する。

私には本気で、この人は何故こんなにも申し訳なさそうなのか、私との約束を守らなかったと思っただけかかわからなかった。

むしろ私との約束なんて、私がバカな期待をしているだけだと一蹴されても私は文句を言えないものはず。

特に8人のヒーローを振り返りにしたばかりのガロウ君を見て、何か事情があるんだなんて普通は思えない。私の語った昔のガロウ君なんてそれこそ昔の話で、今はただの危険な犯罪者としてしか認識されないのは……私としては辛いけど仕方がないこと。

それなのに、ジェノスさんは私が最も望んだ対応をしてくれた。

あの子の話を聴こうとしてくれた。話してくれず、襲い掛かっても回避と防御に専念してガロウ君を傷つけないでくれた。

ガロウ君が言った「子供がいたから、それに気づいてないヒーロー達から守った」という主張を信じてくれた。

そしてバングさんを止めてくれた。バングさんに「話を聞け」と言つて、バングさんが見逃し続けていたガロウ君の良い所を伝えて、バングさんはガロウ君に謝ってくれた。

結果としては何故か、ガロウ君はジエノスさんにもバングさんにも心は開いてくれず、彼のヒーロー狩りの真の動機とかはわからずじまいだけど、それはジエノスさんの所為な訳ない。

ガロウ君が怪人協会に攫われたのだから、もちろんジエノスさんの所為じゃない。

だけどジエノスさんはピンセットでつまんだ小さなボルトを床に敷いた新聞紙の上に置いて、うつむいたまま酷く悔やんでいる顔で言う。

自分の所為だ、と。

「……ありがとうございます。……けど、どうしても俺は後悔してしまふんです。

俺がもっと強ければ、先生のせめて足元程度にでも及んでいれば……怪人どもにのうのうとガロウが攫われることはなかったのではないか……。

少なくともバングの行いをもっと早くに止めることができたのではないかという後悔が、しても仕方がないとわかっているんですが……、どうしても考え続けてしまふんです」

ジエノスさんの言葉に、この人が何に対してこんなにも後悔しているのかを知つて、私はまた心の中でガロウ君に謝る。

ごめんなさい、ガロウ君。あなたをダシにするような幸福を噛みしめて。

あまりにも幸福だったから、私は俯くジエノスさんの隣に座り直して、そのまま少しだけ体を傾ける。

コツリとこの人の肩に頭を預けるようにして、私は心に思ったことそのまま言葉にする。

「……ジエノスさんは、『ヒーロー』なんですね」

「……………えっ？」

自分でもわかっている脈絡がない私の発言に、ジエノスさんは不思議

議そんな声を上げる。けど、なんか妙に間が長かったな。

「ジェノスさんの後悔は、全部ガロウ君の為の事なんですね」

ちよつと私がジェノスさんの反応の遅さを不思議に思いつつ、顔を上げてそう言えばジェノスさんはちよつとだけきよんとしてから、何かに気付いたように軽く目を見開いた。

そして少し恥ずかしげに、気まずげに淡い笑みを浮かべてくれる。たったこれだけで、思い出してくれたんだ。覚えていてくれたんだ。

昔というほど前ではないけど、私たちが出会って間もない頃、お兄ちゃんがプロヒーローになってすぐぐらいの頃に何気ない雑談のつもりで語った、私の『ヒーロー』と『正義』の定義を。

「……ジェノスさん。こんな時に……あなたがこんなにもひどい状態なのにこんな風に思うのは不謹慎でしょうけど、私、結構嬉しいんです。

あなたは……初めから優しい人だったけれど、出逢った頃は復讐の為に強さだけを求めている節が強かった。復讐の為に無関係の人を巻き込むような人ではなかったけど、余裕のなさから視野を狭めてあなた自身が最も望まない犠牲を出しかねなかったから」

「そうですね。実際、あの時いたのが先生でなかったら俺は怪人退治の名目で一般人を焼き殺した犯罪者になる所でしたし」

ジェノスさんにもたれかかったまま、私が続けた言葉にジェノスさんは珍しく冗談のトーンで、お兄ちゃんとのファーストコンタクトのやらかしを語った。

それは、私の最初の「不謹慎」に対しての「そんなことない」「気にしてない」っていう答えなんだろう。

ああ、やつぱりこの人は変わってないけど変わった。

正しくて優しい人であることは初めからだけど、あの頃はまるで今のガロウ君に対してのような心配を懐く程、危うげだった。

でも、もうこの人に自分から地獄へ堕ちてゆきそうな危うさはない。

「ジェノスさんは優しいから……、あなたは本質的に勝てばそれでい

い『正義』ではなく、周りの人が救われないとあなた自身が救われない『ヒーロー』だと思っていましたから……酷い感想ですけど、あなたの後悔が嬉しいです。

ガロウ君をそこまで思ってくれているのはもちろん、あなたが目先の『怪人を倒すこと』ではなくその先のことを、ガロウ君を救うという目的を見失っていないからこそその後悔が……すごく嬉しいです」

後悔をして欲しい訳ではもちろんないけれど、この人はお兄ちゃんとの出会いといい、ソニツクさんとのケンカといい、頭に血が上ってしまうとすぐに周りが見えなくなる悪癖があったから、この人の後悔が「あの大ムカデを倒せなかった」じゃなくて終始ガロウ君のことを思った後悔だったのが、すごく嬉しい。

それにこの人の余裕の無さからくる視野狭窄は、無関係な誰かが危ないというだけじゃなくてジェノスさん自身が自分の命を軽んじていた時も多かったから。

蚊の怪人は自爆することで、心中することで倒そうとしたらしいし、あのロボットとの戦闘で脳が露出してるのに、悠長にロボットのパーツを拾ってた時とかも、「強くなる」って目的しか見えてなかったからこそしたこと。

この人の「もつと自分が強ければ」という後悔は、怪人を倒すための機能だけを追加してこの人の尊い人間らしさとかを食い潰してしまっただったから……、だから私は嬉しくて仕方がない。

誰かを思っているからこそその後悔だから、この人は自分の命を軽んじない。

今日も酷い怪我というか損傷だけど、それでも深海王の時よりずっとマシ。

災害レベル鬼だった深海王より強い竜レベルだったあのムカデ相手に、似たような結果と状態だけあの時よりずっとマシなのは、この人の成長とパーツの向上という博士さんの努力だけじゃなく、きつと、この人自身に「死んでも倒す」じゃなくて生きることが諦めない気持ちがあったからだと思ってる。

だから……私はとても幸福。



幸福だから、この人が余裕を持ってくれたくれたことが嬉しいから、信じていられる。

信じ続けるんだ。

ガロウ君は無事だったって。

怪人に攫われても、無事だったって信じよう。

だってここで私が一人勝手に、ガロウ君の居場所の見当もついてないくせに手あたり次第にレポートしてガロウ君を探したら、それこそ私は昔のジエノスさんのことを何も言えなくなる。

余裕がなくて視野が狭くて自分の命を軽んじてる。しかもジエノスさんと違って、自分自身すら守れない誰かに助けってもらってばっかりな私は余計に性質が悪い。

けれど見捨てる事なんか出来ないから……、攫われたことを知って、バングさんのやり取りを知って、昨日のあなたを知っているのなら、私に出来ることなくても、お兄ちゃんやジエノスさんに頼るしかない他力本願でも助けたいから。

だから今は、信じ続ける。

それしか、出来ない。

\* \* \*

「……すみません、エヒメさん。あなたのガロウへの心配を煽るような弱音を吐いて」

勝手に喜んで、そしてまた勝手に暗い気持ちになって黙り込む私なんか、情緒不安定すぎて面倒くさいだろうに、ジエノスさんはそんなそぶりを一切見せずにまた申し訳なさそうに謝った。

けれど今度は、悔やみに悔やみぬく痛々しさはなく強い意志が感じられる声音で言葉が続く。

「大丈夫です。エヒメさん、奴は……ガロウは絶対に無事です。」

あいつを生け捕りにするために投入された怪人の数からして、怪人協会にとってガロウはよほど欲しい逸材だったのでしよう。そして、『怪人細胞』とやらは自分の意思で取り込まなければ効果を発揮しないのであれば、ガロウの意思を無視して無理やり人を辞めさせることもありません」

言い切った。

それは根拠とは言えないもの。希望的観測とすら言えない、妄想に近いこじつけであることくらいジエノスさんもわかっているはず。

けれど、それでもこの人は言い切ってくれた。大丈夫だと。

私の不安を、心配を少しでも減らすために言いきってくれた。

特に私がスイリユーさんから聞いた「怪人細胞」については、ガロウ君は怪人になりたがっているのだからむしろ、怪人たちに殺されることはなくても人間を辞めてしまいかもしれないという大きな不安になるのが普通なのに、この人は「自分の意思で取り込まなくてはならない」を根拠に「有り得ない」と言ってくれた。

ジエノスさんの「絶対に大丈夫」は私を励ます為の言葉であって、根拠なんて残念ながらない。

けれど、あなたはガロウ君が「怪人細胞」を使って人間を辞めることだけは絶対しないと、そこだけは励ましなんかじゃなくて確信してくれているんですね。

私がソニックさんに対して懐いている信頼のように、あの子が自分から「怪人細胞」を受け入れることはないと思ってくれているからこそ、私を励ます根拠になると思ってくれた。

それがまた嬉しくて、私はまたもう少しだけジエノスさんに自分の体をもたれかからせた。

「……そう、ですね。ガロウ君は、ジエノスさんやバングさんも万全だったら危なかったって言うくらい強いんですから、大丈夫ですよ。ね。」

怪人に攫われても……負けませんよね」

ジエノスさんの励ましに、「絶対に大丈夫」という言葉に私は同意して、自分でも自分なりに納得する理由をこじつけでもいいから言い聞かせる。

大丈夫。あの子は、ガロウ君は自分でも言ってたじゃない。少しは自分が男であること、年下とはいえ1歳しか違わない事を理解しろって。

逃げるしか能がない私より、彼の方がずっとずっと強いんだから大

丈夫。そう信じてあげない方が、きつとあんなに見ただけでわかるほど強くなつたガロウ君に対して失礼だ。

そう、言い聞かせる。

「……ええ。そうです。それに奴は逃げる選択肢がない程に意地を張るタイプでも戦闘狂という訳でもないので、そうそう無茶はしないはずです。」

怪我をしている事をわかった上で怪人協会も奴を攫ったのだから、怪我人の役立たずだからすぐに殺すというのももあり得ないと思われまます。奴自身も、怪我が治るまで返事は保留にでもして時間を稼ぐくらいは考えつくでしょうし、それなら怪人協会の元の方が下手したら他のヒーローに早々狙われず、安全かもしれません」

けれど、どんなに言い聞かせて不安で今すぐに飛び出してガロウ君を探したい、彼が無事であることを確かめたいと訴えるように震える指先に気付かれていたのか、ジェノスさんは更に言葉を続ける。

私の不安を取り除こうと、必死になってガロウ君が無事である可能性を、根拠を見つけて教えてくれる。

「だから……、助けに行きましょう。博士には負担をかけて申し訳ありませんが、明日には俺の体の修理を終えることは出来るはずです。」

だから、俺の身体が直つたらすぐにも奴を探し、そして助けに行きましょう。……一緒に」

「えっ？」

ジェノスさんの励ましに、慰めに返事して、この指先の震えを止めないといつまでもジェノスさんは心配する。

そんな風に思っていたのに、ジェノスさんが続けて言った発言に私の意図していない理由で、不安と焦りによる震えが止まる。

「……一緒に？ 私も……行つていいんですか？」

顔を上げてジェノスさんの言葉をオウム返ししてから、訊き返す。私にとって都合のいいように解釈してる、もしくは聞き間違いで勘違いしているのではないかと思っていた。

「はい。」

エヒメさん。貴女は俺が守りますから、どうか一緒に来てくださ

い」

けれど、ジェノスさんは私の期待通りどころか期待以上の肯定で返してくれた。

肯定してくれるとしたら、一緒に来てもいいという許可をくれるのは、留守番してると言っても勝手に不安がつて暴走して勝手に行動して余計に迷惑をかけた前科がありすぎるから、それなら初めから目が届く場所にいた方がマシと思われただけだと思っていたのに、ジェノスさんは「来てもいい」じゃなくて「来てほしい」と望んでくれた。「正直……あのムカデ相手に俺はこの通り先生が来るまでの時間稼ぎにしかならなかったのだから、貴女は安全な場所で待っていて欲しい」と思っています。

……けれど、俺やバングではガロウを怪人協会から救出することは出来ても、ガロウ自身を救うことは……説得できる自信がありません。そしておそらく先生も同じでしょう。

奴が信用しているのは、奴に言葉が届くのは貴女だけです。

だから、どうか一緒に来てください」

ジェノスさんが語る来てほしいと望む理由は、ガロウ君が絶対に大丈夫だと私を励まして慰めてくれた言葉以上に、私にとっては根拠と云うか自信がないもの。

私は自分がそこまで、ガロウ君にとって重要な位置にいる人間だとは思えない。

ガロウ君が私のことを覚えてくれたこと、一目で私だとわかったことといい、昨日のお兄ちゃんとのトンデモ発言によるガロウ君の反応からして、ガロウ君が私のことを慕っていた、好いていてくれるのはさすがに自己評価最低の私でもわかってるけど、私には私なりに「ガロウ君にとって私が唯一、信用している相手」だとは思えない根拠がある。

だって、私は確かにあの子がいじめられている時に庇って、出来る限りの事はしたけど。

助けたつもりだった。あの子のいじめは解決したと思ってた。

だけど、子供で今以上に浅はかだった私の所為で事態はより陰險な

方向に向かってしまった。

その結果が、あれだ。

『ひいちゃん……、ごめんなさい……』

あの子をいじめていたいじめっ子にされた嫌がらせを目の当たりにした時、ガロウ君は自分がリンチされていた時よりも痛そうな顔で、今にも泣き出しそうなのに泣くことさえもシヨックすぎて出来ないと言わんばかりの顔をして私に謝った。

そしてそれをきっかけに、あの子は私に話しかけてくることはなくなつた。

学校内で見かけても、私に気付いたらすぐに逃げ出してしまうようになって、私たちの交流は完全に途切れてしまったんだ。

それはあの嫌がらせを自分の所為だと責めて、自分が私に関わらなければと思っているからか、それとも私といると余計にあのいじめっ子から逆恨みをされるから関わりたくなかったのかはわからなかった。

昨日、再会してお兄ちゃんの脈絡のない質問であの子が私を好いてくれている事を知るまでは。

……私としては、後者が良かったなあ。

私は結局、あの子を助けるどころか何も悪くないあの子を余計に傷つけて、遣わなくていい気を遣わせただけなのだから。

だから、私はどうしても自分がガロウ君にとって重要な位置にいる人間だとは思えない。

けれど、私は私の事なんか何も信用してないけれど、どこも評価してないけれど、私が信じている人がそんな風に私を評価して、信じて言ってくれているのなら……。

「はい」

自分の事は信じられなくても、この人を信じているから。  
プレッシャーに弱くても、この人の期待には応えたいから。

この人の信じる私は、私になりたい私だから頑張れる。

そして何より、やっぱり私の自己評価通りガロウ君にとって私は重要な立ち位置の人間じゃなかったとしても、私はあの子を助けない、

その為に出来ることなら何でもしたいから。

結局、私はいつも通り自分がしたいからという自己中心的で自己満足な理由でジェノスさんの「来てほしい」に応じた。

「ジェノスさん……、本当にありがとうございます」

不安だけど、心配だけど、けれどそれは明日まで、ジェノスさんが博士さんに治してもらったなら、明日になれば自分のしたいことを我慢せずに出れるという打算的というか即物的な理由だけど、ひとまず今すぐにガロウ君を探しに行きたいという気持ちが落ち着く。

うん、落ち着けばガロウ君はひどい怪我をしていたからこそ、丸一日くらい意識が戻らなくて怪人たちもガロウ君を怪人になるように勧誘したり、ならないなら殺すって脅しも出来ないんじゃないかなって期待も出来る。一日ならこの期待は、きつと私にとって現実逃避の妄想じゃなくて有り得る可能性だ。

そう思ったらまた更に落ち着けたから、私はジェノスさんにお礼を言うのとジェノスさんは少し困ったような笑みを浮かべながら、「礼を言うのは俺の方です」と答える。

え？ 私、ジェノスさんにお礼を言ってもらえるようなことしたっけ？

「エヒメさんは……俺がガロウの為に行動して、だからこそこの結果に後悔していると思ってくれていますが……、恥ずかしながら俺はガロウの為の行動なんて何もしていません。」

俺は、貴女を悲しませなくなかったから、貴女がガロウの事で無茶をして欲しくなかったから、貴女が行動する前に自分で行動していただけです。……ガロウ個人のことなど、眼中にありませんでした」  
恥じるように俯いてジェノスさんは懺悔のように語るけど、それは全然ジェノスさんが謝ったり、悪く思う必要がないこと。

ジェノスさんにとつてガロウ君は他人もい所なんだから、私経由でも助けようと思ってくれただけでも私は拝む勢いで感謝すべき事なんだから。

つていうかジェノスさん、嬉しいけど嬉しすぎて一回爆発したくなるからそんな臆面なく「貴女の為」なんて言わないで欲しい。

そんな風に思ったから、最後の希望以外を告げて「気にしないてください」というつもりだったけど、その前にジエノスさんが言葉を続けた。

「ガロウの事など眼中になかった。貴女がいなければ、俺は『罪』はあつても決して『悪』ではない相手に『正義』という大義名分を振りかざして、傷つけていました。

貴女がいなければ知る由のなかったでしょうが、それを言い訳にしたいほど奴は……ガロウは根が善良でした。

奴がとつさに俺を怪人から庇うような、子供を庇ってどれほど不利な状況でも戦い抜ける相手であったことを知らずに、怪人協会の怪人どもと同列に扱ってしまうという結果を出さずに済んだのは全て、貴女のおかげです。

エヒメさんが偶然、ガロウと友人だったから奴の本質を知っていただけではなく、貴女が俺に『話を聴いてあげて』と頼んでくれたからこそ、俺は一番『ヒーロー』として犯してはいけない間違いを犯さずに済みました。

だから……ありがとうございます、エヒメさん」

……ああ、やっぱりあなたがお礼を言う必要なんかありませんよ。

礼を言うべきなのは私です。

気遣いではなく、本心からあなたは私のワガママを、「話を聴いてあげて」という願いに感謝してくれているんですね。

私のワガママに価値を見出してくれるんですね。

私は本当に、ガロウ君に土下座すべきだ。

大切な人が不幸だから自分も不幸であるべきなんて考えは間違いだとかわかってはいるけど、少なくとも今は浮かれるべきではないのも確か。

絶対に大丈夫だと言い聞かせて信じてても、それでも彼が危うい状況であることは間違いないのに、それなのに私は今、どうしようもなく幸福すぎる。

身勝手で不謹慎でごめんなさい。

けれど、今のこの幸福はきつとこの先の未来でどんなに辛いことがあっても、挫けず、逃げずに歩いてゆける力になってくれるという確信もあるからこそ、私はガロウ君に心の中で謝り続けながらこの幸福を噛みしめる。

謝りながら、同時に心から思う。

私はジェノスさんが本当に大好きだと。

「ジェノスさん、私——」

「おーい、エヒメ。ちよつと俺、ガロウって奴を探しに……………」  
あまりに幸福だからこそ心からの想いがあふれて言葉として零れかけた瞬間、インターホンとかノックもなくガチャといきなりドアが開いて、お兄ちゃんが何か言いながらジェノスさんの部屋の玄関に顔を出す。

そして私とジェノスさんを見て気まげな顔をし、私たちの方はきよとんとそのまましばし無言で見つめ合う。

……………ジェノスさんに私は体や頭を預けるようにもたれかからせた態勢のまま、それをバツチリお兄ちゃんに見られている状態で。

!!!??

「お、お兄ちゃん!」

「せ、先生!」

私、何してるの!?! 恋人でもない人に人が多くて狭いとかそんな理由もなく、何でこんなにも密着してるの!?! 何でこんなに馴れ馴れしすぎることにしてんの私!!

っていうか、ジェノスさんめちゃうケロツとしてるけど言ってみれば大怪我人だから! その大怪我人にもたれかかるって何だ!?! 恋人でもっていうか、人間としてしちゃダメだろ!!

あと、ジェノスさんが今はほぼ全裸って状態なのも今思い出しちゃった!

いや、ジェノスさんの体に見たくないものも見られて困るものもついてないし、それに部屋に帰った時点でパンツは履いてくれてるけど……って、それならパンツだけ履かれた方が気まずい! 黒単色のめっちゃシンプルなトランクスをばっちり見ちゃってるよ!!



パニくりながら、私はとっさにジェノスさんから飛びのくように距離を置くと、ジェノスさんは何故かお兄ちゃんに向かって土下座で謝りだす。

けれどお兄ちゃんはその土下座謝罪を止めずにそのまま、「……いつてくる」と一言だけ言っただア閉めて行った。

何しに来たの、お兄ちゃんは!?

そして私はさつき、何を言おうとしていた!? つい最近、まだ言う勇気がないから世界が終わらない日まで秘密って宣言したことをものすごい勢いだけでぽろつと言いきってしまった!

バカなの私!?! このタイミングで来てくれてありがとうお兄ちゃん!!

でもノックするかインターホンを鳴らすとかくらいはしろ!!

折れるしかなかった

「……………あの、ジエノスさん。どうぞ……………」

「……………すみません。ありがとうございます」

エヒメさんがぎこちなく、俺が頼んだ通りのボルトやナットといった細かいパーツを仕分けて俺に渡してくれる。

それを俺も、この上なくぎこちなく受け取って礼を言う。

……先生が出て行ってから、再び俺はエヒメさんに手伝ってもらいながら自分の身体の応急処置をしているのだが、ものすごく気まずい。というか、申し訳なさすぎる。

ああああっ！ 俺は何してるんだ!? 何をしようとしてた!?

ガロウが怪人協会に攫われた所為でエヒメさんが不安で仕方ない状況で、何を俺は浮かれてる!! 俺に寄り添うようにもたれかかってくれたのは、俺だからじゃなくて不安で不安で仕方がないからに決まってるだろ!

良い雰囲気だったなんて俺の勘違いだ!

というか、良い雰囲気になんかなるか! 俺は今、パンイチだ!!

エヒメさんの前でパンツ一枚だけなんて、正気か俺は!?

何故、俺は部屋に戻ってきてパンツを履いた!? パンツを履くならズボンも履けばいいのに、「応急処置をするから、ズボンは邪魔だな」と何故思った!?

それなら俺の身体には猥褻物陳列罪になるようなものはないってないのだから、いつそのこと全裸のままの方がマシだろうが! パンツを履いた所為でパンツという見られたくないものが全開ってどういうことだ!?

恋人でも家族でもない女性を抱き寄せるなんてただの痴漢行為でしかないのに、それ以前に自宅内とはいえそんな関係の女性の前で着用衣服がパンツのみって俺はただの変質者だろうが!! しかも俺の場合、「全裸よりはマシ」という言い訳すら出来ん!!

エヒメさんに訳が分からず困惑されるのが一番俺にとって幸せな反応で、良くてもドン引き、最悪は俺という存在がトラウマになるよ

うなことを俺はやらしかけていたのか!?

先生、俺が浮かれて暴走して思い上がったことをやらかす前に来てくださってありがとうございます!

けれどインターホンを鳴らすかノックは正直、して欲しかったです

!!

「……あの、ジエノスさん。他に何か……することありますか?」

俺が今すぐ床にのたうちまわりたいほどの羞恥を堪えてもくもくとパーツの処置をしていた所為で、エヒメさんが蚊帳の外となつてしまっていた。

申し訳なさそうに俺に尋ねるエヒメさんの声でそのことに気付き、ひとまず謝つてから俺は先ほどのやらしかけた事とか、今からズボンを履くのはまたさらに気まずいからパンイチ続行のままであることを無理やり頭の端に押しつけて考える。

エヒメさんに手伝って欲しい部分や、機械工学等の知識や経験のないこの人でもわかるであろう手伝いはもう既に済んでいるのだが、もちろんそう言つて隣の自宅に帰るように言うのはただの恩知らずだ。

そもそも、俺がエヒメさんの「何が手伝えることはありますか?」という言葉に甘えた理由の本命は、パーツの処置ではない。その手伝いはむしろ、時間稼ぎと建前でしかない。

エヒメさんにパーツの処置の手伝いをしてもらいながら、何とかエヒメさんが傷つかない言い方や訊き方はないかと思索したのだが、元からそういう気遣いが苦手かつ、この人と出会うまで他人に嫌われることなどなんとも思わなかった所為で何も思い浮かばなかった。

だから結局、俺はストレートに訊くしかない。

「あの……、エヒメさん。手伝って欲しいことはもうないのですが、教えて欲しいことがあるのですが……」

「? はい、私に答えられることなら何なりと」

俺の問いにエヒメさんはきよとんと目を丸くして、栗鼠のように首を傾げつつもそう答えてくれたので、自分の言葉がエヒメさんを傷つけないこと、エヒメさんの傷を抉らない事を祈りながら問う。

「ガロウと何があつたのかを、もう少し詳しく教えてもらえませんか

？」

\*\*\*

数少ない些細な情報から虚実を見極めて繋ぎ合わせて真実にたどり着く、そんなミステリー小説のような探偵の役割が俺には全く向かない事はい最近のやらかしで理解している。

俺は自分の怒りで振り上げた拳をぶつきたいという一心で、後になって思えば違和感だらけだったというのにエヒメさんの親友をエヒメさんの敵だと勘違いしていたのだから。

だが、そんな俺でもこれだけはわかる。

『今更なんだよ!! どうして?! お前がヒーローだって言うんなら!! あのひと、ひいちゃんと同じ「本物」ならどうして……』

唐突だったが油断していた訳ではないのに、俺が反応できぬ勢いで距離を詰めて俺を殴ったガロウは、俺の胸ぐらを掴んで叫んだ。

今更で手遅れだと言いながら、本人だってどうしようもなかったとわかっているはずのことを諦めきれず、「どうして」と問うた言葉。

『どうして、あの時に来てくれなかった?!』

一番助けて欲しかった時に来てくれなかったことを責める言葉。

もうヒーローなんて存在を信じられないという意味を表記した憎悪の言葉。

だけど、何かに期待しているような、諦めきれない悪あがきのような言葉。

その言葉が指す「あの時」は……、ガロウがいじめられていた時ではないことくらい、俺でもわかる。

奴が言った「あの時」とは、ヒーローが現れて助けて欲しかったのはガロウ自身ではなく、エヒメさんのことであることくらいわかった。

……それがわかったからこそ、俺は嫌な想像をしてしまう。

ただでさえガロウの凶行に酷く傷ついているエヒメさんが更に傷つく、けれど決してガロウを責めることは出来ない動機を想像してしまった。

「詳しく……ですか？」

「ええ。もちろん、貴女が以前話してくれたことに嘘があるとは思ってません。

ただ……ガロウと話してみても俺は奴のことを知らなすぎると痛感したので、もう少しでも情報が欲しくて……」

傾げた首の角度を少し深めて問い返すエヒメさんに、嘘ではないが本当の事は1割程度の理由を語る。

いや、以前話してくれた内容、ガロウがいじめられっ子でエヒメさんが奴を庇ったという話を疑っている訳ではないというのは少し嘘だ。

エヒメさんの自己評価はミラージユの所為で最低どころか未だにマイナスだから、この人が語った情報は普通とは逆の意味で実はあまり信用ならない。

この人の話だけを信用したら、いじめられて泣いていたガロウにハシカチを貸して、何があったのかを聴いてやっただけになるが、これだけでも十分に尊い行いだ絶対それだけじゃないと俺は確信している。

なので詳しく、思い出せるだけ具体的に何があったかを話してもらったら……予想通りエヒメさんは完全な無自覚で自分のしたことのひとつを「大したことじゃない」と思ってた省略していた。

エヒメさん、話を聴いてあげただけではなく「ヒーローごっこ」と称したリンチを直接止めて、いじめっ子からガロウを庇ったのならその事を話してください。あと、後ろから石を投げつけられたことも。

昔の話で怪我也少し大きめのこぶで済んだから大したことないとエヒメさんは言うが、俺からしたら今からでもそのクソガキだった奴を探し出して焼却したいぐらいだが、それはひとまず横に置こう。

とりあえず、その話でガロウのヒーローに対する不信感や憎悪は理解できた。

だが、それで終わったのなら今現在の状況が理解できない。

エヒメさんが怪我をしたから……そのおかげなどと言いたくないが、しかしそうとしか言いようがない。

ガロウへの暴力は同級生かつ男という性別もあって、それこそ入院

レベルの大怪我でもしない限りは「子供故に手加減が出来なかったが遊びの範疇」と思われていただろう。下手したら、入院レベルの大怪我でもそれはあくまで「不幸な事故」扱いで、嚴重注意に留まったかもしれない。

が、奴らの所為で怪我したエヒメさんは年上だが一つしか違わない小柄な少女であり、しかも彼女といじめっ子たちに接点はなかった。そんな接点のない少女に後ろからの投石は、決して「遊び」と言い繕うことは出来ない。だからこそ問題になり、そのまま芋づる式にガロウに対してのイジメも明るみに出て、いじめっ子たちは処分を受けた。

処分と言っても小学生だから、教師からの説教とガロウ本人に謝った程度だが。

しかしそのような自分が責任を負いたくない教師が行った、クレームを付けられぬポーズとしての説教よりも奴らにとっては、自分たちのスクールカーストでの立ち位置が地に落ちこそはしなくても最上位からかなりの下位まで落ちた事こそが屈辱的で効果的な罰になっただけは。

俺としてはエヒメさんの怪我が軽症であってもこの上なく許しがたくて不満だが、ハッピーエンドと言っていはいはずの結末だ。

本当に、これで終わっていたのならな。

「エヒメさん。……ガロウへのいじめは解決したんですか？」

訊きたくないが、訊くならもつとこの人が傷つかないように上手く訊きたかったが、俺にそんな器用な言い回しは何も思い浮かばない。だからやはり直接的に尋ねることしか出来なかった。

ここで終わっているのなら、ガロウはヒーロー嫌いではあるかもしれないがヒーロー狩りなんてしなかっただろう。

むしろあいつはエヒメさんを、エヒメさんだけを「本物のヒーロー」だと認識して崇拝している節が強い。なら、エヒメさんに憧れて怪人ではなくヒーローを目指すのが自然ではないか？

そんな俺の憶測を肯定するように、エヒメさんは少し悲しげに目を伏せてから答えてくれた。

「……いいえ。むしろ、私が余計なことをした所為で事態がより陰険な方向に向かってしまったんです」

俺の嫌な予測は当たってしまった。

エヒメさんは自分が具体的にガロウに対して何をしたかは最初の話ではほとんど語らなかったが、それでもこの人は解決していたのならそれは話したはず。

自分のおかげだと自慢する訳ではなく、そもそもそんな認識などなく、ただガロウが救われたことを自分の事のように喜んでいるからこそ語ったはずだ。

それを語らなかったということは、解決などしていなかった。だからこそエヒメさんはなおさら、自分の行いを無意味だと思ったからわざわざ語らなかったんだ。

正直言つて聞きたくなかった。この人がこんなにも悲しげな顔をして語る、クソガキの陰険極まりない嫌がらせの話などさせたくなかった。

しかもこれが、自分がされて嫌だったから悲しげな顔をしているのならまだマシだ。

この人は自分のされたことなんてまったく気にしていない。

エヒメさんが悲しんでいるのは、ガロウが傷ついたからだ。

「……ガロウ君は『俺の所為だ』つて言つて私に泣いて謝つて……、それからあの子は私と関わらないように、学校で会っても逃げ出してしまふようになったんです」

寂しげな目で俯いて、エヒメさんはそう締めくくった。

誕生日の祝いとして、学校が終わったら近場の遊園地に出かけて少し良いレストランで食事をする予定だった。そしてその日は、お気に入りの白いワンピースを着ていたらしい。

その事を校内の廊下で出会ったガロウと雑談で話していたら突然後ろから墨汁を、そして追い打ちのように水を被せられた。

お気に入りだったワンピースは墨汁で無残に汚され、拳句に季節が冬だったのもあってエヒメさんは追い打ちで被せられたバケツの水の所為で酷い風邪をひき、放課後の誕生日の祝いだったはずの予定は

キャンセル。

そしてその嫌がらせの犯人は、もちろんガロウをいじめていたクソガキ共だ。

しかも今度はわざとではない、事故だったという言い訳が成り立ってしまい、注意程度で終わってしまった。

おそらく教師も追及するのが面倒くさく、わざとだと認めさせてもそれは以前のことを反省どころか逆恨みしていた証拠となり、ひいて自分の指導不足が明らかになるとでも思ったからこそクソガキの言い分を真実ということにして、わざとだと証明できない被害者側を折らせたと思うのは、俺の偏見や被害妄想ではないだろう。

まさしく陰険としか言いようがない胸糞が悪くなる話だというのに、その当事者であり被害者のエヒメさん自身は全く自分のされたことと自体を嫌な思い出だとは思っていない。

けれどそれは本心から気にしていない訳でも、我慢して耐えているのではなく、自分自身の事など気にかける余裕もなくガロウのことをエヒメさんが気にしているのは、あの締めくくりで明らかだ。

そして、この顛末はやはり俺の一番当たって欲しくない予想の通りだった。

いや、下手したら俺の想像よりもなお酷く惨いかもしれない。

おそらく……ガロウの怪人願望は本心ではない。あれは自責による贖罪とヒーロー願望の挫折、そして自己嫌悪による自嘲あたりが正確だ。

自分を庇って守ってくれた、奴にとって憧れで理想そのものの「ヒーロー」だったエヒメさんを守れなかったどころか、その原因……エヒメさんがクソガキに逆恨みをされ、その嫌がらせが最高に効果的なタイミングで行えるお膳立てをってしまったのが自分であることに責任を感じ、背負わなくていい罪悪感を背負って拗らせた結果がアレなのだろう。

ガロウはクソガキ共に謝罪された後、エヒメさんに今度は自分がエヒメさんのヒーローになると告げたらしい。

けれど、自分の所為で嫌がらせをされて、お気に入りのワンピース



も、楽しみにしていたイベントも全部台無しにされた事で「自分がヒーローになれる訳がない」とでも思ってしまったところか。初めはミラージュの悪意や狂気に気付いたが何もできなかった後悔と自責かと思っていたが、ガロウは何も悪くない、非や責任は間違いないのだが、エヒメさんが嫌がらせを受けた原因は奴自身であるのは間違いないという事実が惨すぎる。

俺もつい最近……俺さえいなければ起こらなかったこと、俺のかなり拗らせたファンというかもはやストーカーという言葉さえも生ぬるい犯罪者に、この上なく忌々しいがあ音速の残念忍者がいなければエヒメさんは怪我どころか殺されていたかもしれないということがあったから、「自分さえいなければ」という自責や自己嫌悪は嫌になるほどわかる。

だが、それでも俺の方がマシだ。

あのストーカーどもにエヒメさんが狙われたのは間違いなく俺の所為だが、あいつらがエヒメさんの情報を知ったのも、あいつらの狂気を煽ったのもミラージュという、誰も擁護しようのない元凶がいる。

あいつとエヒメさんが再会してしまった原因もまた俺だが、同時にエヒメさんの親友であるヘラとも再会するきっかけになれたからこそ、結果としてはあの再会のきっかけになれて良かったと思える。

ストーカーによるリンチと殺人未遂も、ミラージュとの決着のきっかけになった。

ただ単にエヒメさんが頑張ったからこそ良い結果になったのであって、俺のおかげだとは絶対に思わない。思えない。だからこそ、自責や自己嫌悪は消えない。

だが、俺がいなければ一生ミラージュと再会せずに済んだとしても、エヒメさんはヘラの事で気を病み続けただろう。

そして俺がいなくてもミラージュがいる限り、似たような悲劇はいつどこで起こったとしてもおかしくなかったという事実が、卑怯な責任転嫁であるのはわかっているが俺の罪悪感を少しは軽くする。

少なくとも、自分の所為だと責めて折れて何もしなくなつてはそれ

こそあの人が無駄に、無意味に傷ついただけになると自分を奮い立たせることができる。

それは俺が自分の歩みを止めない理由になり得ても、俺が折れる理由にはならない。

だが、ガロウの場合は違う。

奴は本当に何も悪くないのだが、クソガキとエヒメさんの接点、エヒメさんがクソガキに逆恨みされるきっかけはガロウで間違いなく………ガロウさえいなければ起こらなかった。

クソガキにいじめられ続ける不幸な子供はいただろうが、学年が違うんだ。エヒメさんはその不幸な子供の存在に気付けなければ、どんなにエヒメさんが善良でも庇う事など出来ない。そのクソガキとの接点などなく、当然逆恨みだつてされる訳がない。

酷い嫌がらせを受けたエヒメさんを目の当たりにしたことで、ガロウは自分の存在そのものがこの結果を招いたと気付いてしまった。

そして善良だから、原因であっても非や責任は何もなかったというのに背負わなくてもいい罪悪感を背負い込み、だからこそ折れてしまったのだろう。

「ヒーロー」という夢を、挫折してしまった。

「……ガロウ君は私を『ヒーロー』だつて言ってくれたのに、あんなに情けない姿を見せた挙句に私の所為で嫌がらせが陰険になったんだから……ヒーローじゃなくて怪人に憧れるの当然の成り行きかもしれないですね」

「！ 違います！ そんなことは絶対にありません!! そもそも、ガロウはもちろんエヒメさんは何も悪くないのですから、自分の所為だなんて言わないでください!!」

自分の当たつて欲しくない想像のほとんどが当たっている、しかも外れている部分はより悪い方向が真実だったことで言葉を失い、話してくれたエヒメさんに何のフォローもしていなかった所為でこの人は元々懐いていたであろう自責をより深めた呟きを零し、俺は慌てて否定する。

エヒメさんは俺の言葉に、淡く微笑んでくれた。

だが、俺の否定を受け入れてはくれない。

「ありがとうございます、ジエノスさん。……けど、違うんです」

フオローした俺を、フオローすべき俺をエヒメさんの方がフオローするのように、悲しげな瞳のまま笑って彼女は静かに告げる。

「確かに私は悪いことはしていない。正しいことをした。それは否定しませんし譲りません。」

ガロウ君が暴力を振るわれ続けて、あの子の話を誰も聞かないことが正しいなんて、絶対に認めませんから私はあの時の主張はたとえ世界中の人から否定されたって撤回しません。

……だけど、庇い方が……いじめっ子に対してとかの対応を間違っただとは思っているんです」

幸いながら、エヒメさんはガロウを庇ったこととその理由、クソガキどもを「悪」と断じたこと自体に関しては、自分が悪くて間違っていたとは思っていなかった。

あまりに痛々しい「逃げない」と誓いを貫く強情さをここでも発揮しながら……、そこまで強い意思を持っているこの人でも、もはや意味のないIfを夢想してしまうほどに……、「間違えた」と後悔してしまうほど折れてしまった、クソガキ共に折られたものを語った。

「……あれ、私への嫌がらせではなかったんです」

「——え？」

\* \* \*

その前提の否定は俺の想像を全て壊すものだったので、俺は思わず呆けた声を上げる。

そして、エヒメさんが悲しげに酷く悔やみながら語ったあの「嫌がらせ」の真の意図を聞き……知ってしまった俺は、思わず目を見開いて言葉を完全に失ってしまった。

「……？ ジエノスさん？」

エヒメさんがきよとんとした顔で俺を呼びかけるのは見えていたし、声も聞こえていたが何の反応も取れなかった。

俺が完全にフリーズしてしまったことにエヒメさんは困惑している。そのことに、俺は内心でわずかに安堵した。

この人は俺がガロウに対してあまりの痛ましきによる同情やクソガキへの憤りでフリーズしているのではないことには気付いているが、俺の具体的な感情にはおそろく気付いていない。

俺がガロウの絶望を追体験しているような状態であることに気付いていない。

何もわかっていないからこそ困惑しているという事がおそらく唯一の幸いであり、気付いて欲しくないから俺は一刻も早くこのフリーズを解凍して何か誤魔化す言葉を吐くべきなのに、俺は何も言えない。

それほどまでに、俺の不器用さなど無関係で誤魔化す言葉など浮かばないほどに理解が、ガロウの絶望が俺の生身の脳を叩きつける。

……そうか。……ガロウ、お前は折れるしかなかったのか。

エヒメさんは気付いていない。自分が語った、クソガキ共が嘲笑ってガロウとエヒメさんに突き付けた嫌がらせの意図が、あまりにも子供の浅慮でありながら陰湿な残酷さがガロウの何を折らせたのかを。

けれどそれは、仕方がないこと。気付いていないのはエヒメさんが鈍いからでも、自己評価がマイナスだからであることも無関係で、気付かない方が普通のことだ。

実際俺も、エヒメさん視点でその真意を聞いた時はガロウに対しての同情しかなかった。

ガロウの視点でその真意を見て、気付けた。俺はガロウよりマシとはいえ、似たような罪悪感を懐いているからこそ、気付けたことだ。

……俺は、ガロウの怪人になりたがる動機は言ってみれば妥協の産物だと思っていた。

奴の本質の善良さからしてむしろガロウはヒーローに、それこそヒーロー協会に所属している職業としてのプロヒーローではなく、利など求めず他者を救う先生のような、そしてエヒメさんのようなヒーローになることこそが奴の本当の願望のはずだ。

だが、ヒーローになって一番守りたかった人であるエヒメさんは自

分がいなければ起こらなかった嫌がらせを受け、その事に罪悪感や無力感による自己嫌悪が「俺はヒーローになれない」と思わせ、挫折してしまった。

けれど自分がヒーローになる夢は折れて諦めても、エヒメさんが理不尽な不幸に遭い続けることだけは看過できなかった。だから自分の代わりにエヒメさんを救ってくれる、守り続けるヒーローを探し求めていたのが「ヒーロー狩り」の動機で、そしてこの動機だとエヒメさんが元凶になってしまうからこそエヒメさんを庇う為に、彼女は無関係だと言い張る為に「怪人になりたい」と主張している。

「ヒーローになる」という部分だけ折れて妥協してしまっているが、全てはエヒメさんの為、エヒメさんを守るからこそが奴の行動理念。

そんな風に思っていた。

……妥協だと思っていた。折れてしまったからこそ、奴は「ヒーロー」ではなく「怪人」の立場からこの人を守ろうと妥協してしまっただと思っていた。

……違う。むしろ逆だ。

ガロウは妥協できなかった。

エヒメさんがあまりにガロウを完膚なきまでに救い過ぎたからこそ、エヒメさんをガロウが真の正義だと認識しているからこそ、奴は妥協できなかった。

だからこそ、折れるしかなかったんだ。

全てが折れて、反転して、奴は「ヒーロー」ではなく「怪人」になるしかなかったんだ。

「……エヒメ……さん……」

何も語らない、けれど明らかに酷いショックを受けているとわかる顔でフリーズしているであろう俺に、エヒメさんは困惑を超えて今にも泣き出しそうな顔でオロオロと狼狽えたので、俺はムカデ長老から吐き出された直後以上に自由の利かない体を無理やり動かし、彼女の両肩を掴む。

何とか声を、言葉を絞り出す。

「貴女は……どうか……自分の所為だと思わないでください」

それしか言えなかった。

「貴女は……何も悪くない。だから……ガロウを思うのならば……だからこそ絶対に、自分を責めないでください」

気付かない、気付けないのが普通とはいえ、エヒメさんは必要以上に自罰的な人だからこそガロウの絶望に、折れるしかなかった、折れてしまったものが何であるかに気付ける可能性は高い。

というか、この人は「自分が悪い」と自責してガロウ視点に立っていない、立つたとしても必要以上に自分を悪くして見ているからこそ気付いていないのであって、おそらくこの人も正しく「ガロウの視点」で嫌がらせの「真意」を知れば間違いなく気付く。

だから、俺のこの懇願はむしろ逆効果だ。俺が気付いてしまったことをこの人が気付かないで欲しいと願うのなら、いつそのこと今の自責したままの方が良いのはわかっている。

それでも、言わずにはいられなかった。

ガロウに同情してと言うより、完全に俺自身とガロウを同一視してしまっただけだからこそ、俺は自分の為に懇願しているだけだ。

「貴女が自責すればするほど……、ガロウは貴女に救われたからこそ、救われなくなる……。ガロウの方こそ、『自分の所為で』と思って自分を責めるから……。だからどうか……。お願いします。」

……貴女の所為なんかじゃない。貴女は誰よりも何よりも正しいことをして、間違いなくガロウを救った。……その事だけは、ガロウを思うのならば絶対に否定しないでください」

俺の言葉、継るような懇願にエヒメさんはまたしても困惑を先ほど以上に大きく懐きながらも頷き、「はい」と返事してくれた。

しかしその返答を得ても俺は安心することが出来ず、エヒメさんの肩を掴んだまま俯き、祈り続ける。

どうか、俺が気付いたことなんか全部俺の思い込みであり妄想のよいうなものであってほしい。

俺の想像が正しいのであれば、どうかこの人はこのまま気付かないでくれ。

……気付かないでくれ。

ガロウの現状は、ガロウに何の責任も非もないがエヒメさんがクソガキ共から嫌がらせを受けた原因であるのは間違いないのと同じであることに。

エヒメさんが完全に完璧に理想的なまでにガロウを救ったからこそ、ガロウは自分が懐く「正義」や「ヒーロー像」に一切の妥協が出来なくなった。

だからこそ、ガロウは「ヒーロー」ではなく「怪人」になるしかなかった。

エヒメさんは何も悪くない。何の非もない。ある訳がない。

だけど、ガロウが妥協できなかったからこそ折れてしまった、怪人になること以外の選択肢を失ってしまった原因が自分であることにどうか気付かないでください。

そして……気付いてしまったのなら、貴女はどうか折れないで欲しい。

貴女が自分に科した「逃げない」という誓いを妥協してほしい。貫き通すことを諦めて欲しい。けれど、どうか折れることだけは……「自分の所為だ」と自責して、妥協できなかったから、諦めることができなかつたからこそ折れて反転してしないでください。

俺はそう、信じてもない「神」に祈り続けた。

真面目なところ悪いが、違う。そうじゃない。

《お前も気を付けろ。隣にいる人間を信用するな。

正義を為すなら、自分一人で足りる。そのくらいまで力を蓄えて……温存しておけ。童帝》

メタルナイトことボフォイ博士は、相変わらず長々と「自分は何もしない」事に対する屁理屈をこねて通話を一方的に切る。

本当に何年たとうが状況がどうであれマイペースというか自己中心的で、自分の発明や実験にしか興味がなくせに正義がどうのこうのと自分が行動に移さない理由だけはご立派な人だ。

「はあ……。時間の無駄だった……。早くアジトを見つけないと……」

予想通りの返答だったけど、どうしても元助手という立場というか感傷というか……。僕は博士に対する期待や信頼を捨てられない。元助手だからこそ、あんなことを訊いても答えてくれず時間の無駄だったことはわかってたのにな。

だからこの愚痴こそが本当の時間の無駄。それに博士はアジトの場所は教えてくれなかったけど、メタルナイトの機体を破壊した「怪人王オロチ」という存在の情報を知れただけまだマシだ。

そう僕は自分に言い聞かせて、糖分取って脳に深呼吸させながら再びアジト割り出しに戻る。

けど、その前に気を取り直したことでふと思いついた。

アジトの正確な位置はわかってないけど、協会職員に寄生して伝言して来た怪人によってアジトは乙市のゴーストタウンにある事だけは確定している。

そして、何故かその危険度S級のゴーストタウン在住の人たちを僕は知っている。

その人たちの存在を思い出し、もしかしたら何か知っている事、アジトの心当たりとかあるんじゃないかと思って僕は、ちようど人払いさせていたからついだと思つてケータイを取り出して連絡を取る。

取りつつ、思い返す。つい先ほど言われたばかりの一応は恩師であ



る博士の言葉を。

『お前も気を付けろ。隣にいる人間を信用するな』

自分勝手にダメな大人だとは思っているけど、僕は何だかんだであの人を尊敬している。

「教えないことで人質を見殺すか、教えることで人質のみならずお前達の死をも招くかだ。俺は正義に基づいた上で、合理的に考え、選択する」という言葉には反感しか湧かないけど、こっちはちよつとだけ僕のことを心配しつつ期待してくれているのかな？　と覚えて受け入れられる。

だから、きつとあの人がいなければ、あの人と親しくなければ僕は連絡なんか取らなかつた。

何か情報があるとかそんな期待はせず、疑心暗鬼になっていただろうね。

ボフォイ博士。僕は何だかんだであなを尊敬して、期待して、信じているよ。

「あ、鬼サイボーグさんこんにちは。

時間がないので単刀直入に訊きますけど、怪人協会のアジトの心当たりってありますか？　なんか、乙市のゴーストタウンにあることは間違いないですよ」

《……本当に単刀直入だな。ちよつと待ってろ》

挨拶だけしてそのまますぐに本題に入った僕に、鬼サイボーグさんは呆れたような声で感想を呟くけど話は早い。

どうやらおねえさんが一緒にいたみたいで、電話の向こうからエヒメおねえさんに少し席を外すことを告げるやり取りが聞こえる。

……本来なら、乙市のゴーストタウンに籍を置いているなんて怪しすぎるよね。博士の言葉がなくても、信用なんかできない。

特に鬼サイボーグさんは新参だし、結構派手な活躍はしてるけど信頼出来る程の実績はやっぱりS級どころかプロヒーローになった日も浅すぎて皆無に等しい。

頼りにするより、スパイかと疑う方が自然だ。

けど、博士。僕はこの人を、この隣人を疑うことは出来ないよ。

《エヒメさん、少し席を外しますのでお好きにくつろぎな部屋ではないですね。すみません……、座布団すらない、まさしく物置兼寝る為だけの部屋で》

《い、いえ！ 大丈夫です！ あの、確かに別の意味でくつろげませんが、ものすごく緊張してますけど、役得というか悶えそうなほど嬉しいというか……》

……こんなやり取りを聞かされても、「ああ、またいつもの爆発案件か」としか思わないぐらいに、僕にとって鬼サイボーグさんは隣人だ。友達ではないけど、ただの同僚やS級ヒーローとしての後輩でもない。

なんて言えばいいのかわからない関係だけど、僕にとって貴方が怪人協会のスパイな訳ないって信頼の実績はとつくの昔に山積みだ。

《あの、ジェノスさん。せっかくですから、童帝君に伝言をお願いしてもいいですか？

ミラージュのSNSの件でのお詫びとお礼を》

もちろん貴女もね、おねえさん。というか、貴女の存在あってこそ  
の信頼だけど。

\* \* \*

部屋を出たようなドアを閉める音の直後、「童帝」と鬼サイボーグさんが僕を呼びかけたので、やっぱり僕は前置き抜きで話し始める。

「鬼サイボーグさん、おねえさんと自宅デートですか？ ついにそこまで関係が進んだなんて、お二人の進展を見守っていた僕は感慨深いですよ」

《時間がないんじゃないかなかったのか？ 切るぞ》

二人のやり取りからして、どうもエヒメおねえさんが鬼サイボーグさんの家にいるっぽかったので、ついつい僕はいつもの調子で軽口を挟んでしまい、鬼サイボーグさんに軽くキレられた。

「すみません、後手に回ってイライラする事ばかり積み重なっていたので、つい日常を求めてしまいました」

で、話を戻しますけど鬼サイボーグさん、アジトの心当たりはありますか？」

《悪いがない。俺がここに住み出した頃から、既に毎日怪人が現れるのが日常だった。怪人協会のアジトがあると知られて納得したくらいだ》

「……鬼サイボーグさん、よくそんな所におねえさんを住まわせていますね?」

僕の期待がもう一度空ぶったことに対する落胆よりも、鬼サイボーグさんの返答によって改めて知ったZ市ゴーストタウンの危険性と、そこに何故か住むおねえさんとのギャップに思わず呆れて素で訊いた。

って言うか実は前々から疑問だった。

おねえさんは少々訳ありなのと、逃げることに特化したテレポーターだからか危機感がちよつと……いやだいぶ欠けている所があるから、頭が痛くなるけどそこにのほほんと住んでるのはまだ理解できる。

でもおねえさんが大好きすぎて、地獄のフブキに対するタツマキちゃんみたいに過保護な鬼サイボーグさんが無理やりにもおねえさんをもつと安全な地区に引越させない理由が、僕には全く想像できない。

《先生がいるから問題ない》

僕の想像できなかつた理由は、あつさりシンプルに即答。

あ、そういえばいたね。おねえさんにはヒーローやってる実のお兄さんのおじさんが。えーと、ヒーローネームはハゲマントだっけ?

あの人、あまり自己主張しないし言っちゃなんだけど存在感とかオーラの的なものがないからヒーローどころか一般人扱いしちゃうけど、よく考えなくてもこの結構傍若無人な鬼サイボーグさんが敬意を持って師事して、そしてあのキングさんと親しい時点で全然ただものじゃないよね。

あと、オカメちゃんでの肉体強度も「測定不能」って出てたっけ。ついつい僕は低すぎて意味で解釈しちやっただけど、おねえさんがあの鬼レベルの怪人を倒したのはおじさんだって言ってたから、あれはキングさんと同じ意味での測定不能だったんだろうな。

まあ、流石にキングさんと同レベルってのはあり得ないだろうけど。測定の上限が9999だったから、1万も1兆も同じく「測定不能」って出るからね。

……改めて考えたらあのおじさん、むしろなんでC級最下位からヒーローになったの？ 何でまだB級なの？

S級になれなかったのはあのオーラなすぎが災いしてアマイマスキの眼鏡に合わなかったんだろうけど、鬼サイボーグさんとキングさん、そしてシルバーファンングさんにも確か認められている実力者なのにC級スタートって……むしろどうやってたならそうなるの？ 何？

筆記が合格最低ラインだった？

まあ、それは横に置いて……アジトの心当たりがないのは残念だけど、あのおじさんが戦力になるという情報は僥倖だ。鬼サイボーグさん経由で協力を要請しよう。

というか、おじさんより正直言って僕はおねえさんが人質救出作戦に協力してほしい。切実に。

僕がおねえさんを慕っているのは、あまり関係ない。僕のかっこいい所を見せたいとは思うけど、そんな余裕ない相手であることはわかっているからね。

けどおねえさんはテレポーターとして優秀だから、人質救出には欲しい人材なんだよなあ。

それにおねえさんがいたら、絶対にS級たちへの指示が楽になる。同じ指示でも僕が出すのとおねえさんからのお願いって形で出すのとじゃ、絶対に皆のやる気が違う。特にタツマキちゃん。

絶対にタツマキちゃん本人は認めないだろうけど、地獄のフブキに對してと同じくらいタツマキちゃんはおねえさんを気に入ってるから、おねえさんがいたらタツマキちゃんのやる気を出すカンフル剤になると同時に、面倒くさいからってZ市の地盤ごとひっくり返しかねないタツマキちゃんを止めるストップパーにもなってくれるんだよね。

あと、ケンカ腰になりがちなたツマキちゃんと他のヒーローたちの緩衝材にもなってくれるし……あ、どうしよう。むしろテレポーターじゃない、タツマキちゃんのお守りだけで十分すぎるかも。

けど……救出作戦のメンバーがS級だけならおねえさん参入は喜ぶ連中が多いけど、……サポートメンバーにアマイマスクがいるんだよなあ。

っていうか、あの人は絶対素直にサポートに甘んじてくれない。  
S級と一緒にアジト突入するって言って聞かなそう。

ハゲマントのおじさんをメンバーに入れるのは、プロヒーローだし今はB級の上位らしいから別に文句は言わないだろうけど、あの人とおねえさんをまた会わせるって……アジト突入前にアマイマスク対S級（エヒメおねえさんファンクラブ要員）の死闘が始まるよ……。少なくともタツマキちゃんが間違いない、殺しにかかる。

《……童帝。時間がない所悪いが、少しいいか？ 話しておきたいことがある》

僕がどうやって、アマイマスクを丸め込む……のは無理だろうから、彼におねえさんの存在を隠して参入してもらえるかを悩んでいたら、鬼サイボーグさんがちよつと躊躇いがちに訊いてきた。

こういう時じゃなくても他愛のない雑談をするような仲じゃないし、ぶつちやけ鬼サイボーグさんは空気が全く読めない人だけど、僕が怪人協会のアジト割り出しの役目を担っていることがわからない程バカじゃない。まず間違いなく、何らかの関係がある事だとわかってきたから、僕は「なるべく手短、簡潔にお願いします」と続きを促す。

けど、聞かされた話で僕の口から真っ先に出た言葉こそ話の本筋に全く関係のない、僕個人の感想だった。

「エヒメおねえさんの人間関係、どうなってるの？」

人間怪人ガロウと友達って、マジですかおねえさん？

\* \* \*

《それは俺も思わなくはないが、ただの偶然だ》

僕の感想に同意しつつ、鬼サイボーグさんはさっさと話を本筋に戻す。

《とにかく俺の個人的な印象に過ぎないが、奴……ガロウの本質は善良だ。罪はあっても悪ではない。……出している被害が被害だ。信

じてくれとは言えんが……」

「いえ、信じますよ。僕はもう手一杯なので直接調べることは出来ませんが、他の方に頼んで病院に運ばれた、そのガロウを襲撃したヒーロー達から話を聞いてみましょう。」

確証は得られなくとも、ガロウの『子供がいた』発言に信憑性があるかないかくらいはわかるはずですよ。そして信憑性があるのなら、怪人協会にいるであろうガロウの保護を他のメンバーもしてしてくれるかもしれませんし、少なくとも怪我で動けない状態を『チャンスだ』と思つてトドメを刺す可能性を下げることは出来ます」

僕が即座に信じるといふ宣言だけではなく、鬼サイボーグさん……というかエヒメおねえさんが望むであろう答えを告げれば、電話の向こうで鬼サイボーグさんは呆気に取られているのか言葉を失う。

そんなに意外？ 確かに甘い対応だとは思うけど僕も、そして他の皆も「ヒーロー」ですよ。

貴方の言う通り罪はあつても悪ではないのなら、和解できる余地があるのなら傷つけないと思うのは普通ですよ？

……まあ、もちろん例外もいるけどね。イケメン仮面とか、アマイマスクとか……。

「つていうかぶつちやけた話、ガロウの相手をする余裕なんてないんですよ、こつちには。」

だから相手する必要がないのならしませんし、むしろ一緒に怪人協会と戦ってくれるのなら諸手を挙げて歓迎しますよ」

ついでに僕がヒーローとしての倫理以外の理由、かなり打算的だけど切実な方の理由を本当にぶつちやけると鬼サイボーグさんは「ああ」と納得したような声を上げる。

「……それを望むのなら提案なんだが、……怪人協会のアジトに突入する作戦にエヒメさんを参加させてることは出来ないか？」

納得した声音の後、鬼サイボーグさんは少し悩むように間を置いてからしてきた提案に今度は僕が言葉を失う。

え？ その提案、鬼サイボーグさんがするの？ いつもの過保護っぷりはどうしたの？

《ガロウの本質は善良でも、おそらく奴を説得して暴走を止められるのはエヒメさんだけだ。それに、エヒメさんはガロウを思うあまりにかなり思い詰めている。このままだと彼女一人でガロウを探し、助け出そうと行動しかねない》

「ああ……。確かにおねえさんならそうなるでしょうね。うん、それなら最初から側にいらしてもらった方が何かと都合ですよね」

僕が絶句してる理由を察したのか、やや慚然とした声音で鬼サイボーグさんはある意味いつも通り過保護だった理由を語って僕も納得。

っていうか、エヒメおねえさんが他の男をそこまで心配しているのに嫉妬せず、むしろ庇っているし助けようとしている鬼サイボーグさんが凄く新鮮。これは、「ガロウの本質は善良」という鬼サイボーグさんの印象に説得力が増すな。

けど、言われてみれば「人間怪人ガロウ」は確かに、実力はともかくやっていること自体は怪人どころか悪人とは言いづらい。

……かなり今更だけど、気付いた。

ガロウの被害に、死人は出ていない。

奴が出したヒーローに対する被害は、洒落にならない。特に最初の被害者の一人、A級6位のブルーファイアなんて腕を挽がれたけど、逆に言えば一番ひどくてそれぐらいだ。

かなりの重傷なのは間違いないけど、それでも今後のヒーロー活動を諦める必要はない。サイボーグ技術による義手でも作れば、十分に取り返しのつく程度って言ってもいい。

っていうか、ガロウの出した被害を思い返せば思い返すほど、奴が「怪人」を自称することを疑問に思う。

だって最初の被害からして、ガロウがかなりの危険思想を主張したとはいえ、シツチさんがヒーロー達に「つまみ出せ」って指示したからこそ起こったことだ。ガロウから手を出したわけじゃない。なんだかんだでガロウは、ヒーローに先手を許してる。

そして、ガロウはヒーロー達を全滅させた後、シツチさんが集めたチンピラたちも、「お前らは人間側。俺は怪人側」と言っただけで全員ボコボ

コにしたらしいけど、シツチさんには手出ししてない。

向かってこなかったから、弱すぎて相手にする気にもならなかったから、自分の凶行の生き証人が欲しかったから。シツチさんを襲わなかった理由はいくらでも考えられるけど、「お前らは人間側。俺は怪人側」と言ってたのにチンピラたちも殺してないことを考えたら、奴の主張に反して結果が甘すぎる。

そもそもガロウはシルバーファングの一番弟子、……流水岩碎拳の使い手って時点で奴の自称に疑問を持つべきだった。

シルバーファングさんが強すぎて忘れるけど、あれって敵を倒すことよりも自分や周りの身を守ることに特化してる護身術が主の武術だよ。ガロウの主張や願望が言葉通りなら、その武術は一番目的に合ってるよ。

更にエヒメおねえさんと友達で、イジメから助けてもらっておねえさんのことを未だに敬愛してて………え？ 待って。マジでガロウ、何で怪人になりたがってるの？

鬼サイボーグさんの印象に僕が納得すればするほど、今度はガロウ自身の主張が謎を増して一瞬僕は混乱する。

何だこいつ？ 主張と行動が実はかなり矛盾してるぞ？

……矛盾。ヒーローを倒したいけど、殺したくない。

……いや、そうじゃないのかも。ガロウの主張と行動が矛盾してるんじゃないくて、そもそもガロウの主張も行動も本意ではない、本意なのは「殺したくない」という部分だけだとしたら………。

《？ 童帝？ どうした？》

納得した後にもまた黙り込んだ僕を、鬼サイボーグさんはいぶかしげに呼びかける。

その呼びかけに僕は一瞬の混乱から浮かんだ、僕の疑問に説明がつく仮説から意識をこちらに呼び戻した。

「……すみません、ちょっと今後の事を考えてました」

僕は嘘ではないけど本当のことでもない言い訳で誤魔化す。

そして本当ではないけど嘘ではない証拠に、鬼サイボーグさんの提案に対して答えた。



僕の仮説は、教えない。

ガロウは怪人協会におねえさんを人質に取られているからこそ、あんな主張とヒーロー狩りなんて凶行をしているという仮説は教えない。

だって、この仮説が正しければ………鬼サイボーグさんすらも本意ではないけど、今も進行形で僕たちを裏切っているのかもしれないから。

そしてそれを責める気にはなれないからこそ、僕は鬼サイボーグさんの提案に提案し返した。

「おねえさんをアジト突入に参加してもらうのは僕も賛成です。

だけど、鬼サイボーグさん。貴方は参加しないでください。表向きは、非公式でおねえさんとハゲマント、そしてシルバーファンングと突入してください」

\* \* \*

「？ 何だそれは？ お前達が囮で俺達の方を本命にするつもりか？」

「その意図もありますが、単純にアマイマスクもこの突入作戦に関わっているんです。だから僕としてはおねえさんの参加はかなり嬉しくてぜひ！ と言いたいくらいなんですけど、おねえさんを公式に参加させると、突入前にひと悶着どころか戦争が起こります」

《ああ。とりあえず俺とタツマキがあいつを殺すな。間違いない》

僕の提案にももちろん鬼サイボーグさんは訳が分からないと言いたげに質問してきたけど、僕の答えにすんなり納得してくれた。

これも嘘じゃない、本当の理由だけど僕の提案の理由としては1割程度の割合。

そしてまたさらに僕は、決して嘘じゃないけど割合としては低い部分を語って、サイボーグさんが何か疑問に思う余地をなくす。

「それと、僕はあり得ないのをわかってますけど傍から見たら怪人出現のホットスポットである乙市のゴーストタウンに住む貴方達は、怪人協会のアジトがそこだとわかった今ではかなり怪しいんです。あと、シルバーファンングもガロウと交戦して取り逃がしたのは、弟子に

対する甘さと取られるでしょうね。

そこもまたアマイマスクにいちやもんを付けられそうですから、それなら彼と顔合わせなんかしない方が全員にとってモチベも下がらなくていいでしょう?」

僕のさらに重ねた理由にサイボーグさんも「確かに」と納得を重ねてくれた。

あまりのあっさり納得具合に、もしかしたら僕の真の意図に気付いているのかもしれないと思ったけど、それは別に何の支障にもならない、むしろ好都合なので僕はそのままどうやって突入作戦の時刻や突入場所の指定をするかの打ち合わせを始めた。

この人は、現在進行形で僕たちを裏切っているのかもしれない。これは僕からヒーロー協会の作戦を、情報を抜くスパイ行為なのかもしれない。

けれど、それが本意でないことを僕は疑わない。

この人が裏切っているのだとしたら、それはエヒメおねえさんを人質に取られているから。

それ以外にあの人を助ける選択肢がないからだ。

さつき普通にお家デートしてるような声が聞こえていたから、怪人に攫われてた訳ではないのは確か。けれど怪人協会がヒーロー協会に送ったメッセージ……、協会の職員に怪人が寄生していたという事態を考えたら、あの人があるところにいるというのは安心できる理由にはならない。

場所が場所だ。鬼サイボーグさんや実兄のハゲマントさんだつて四六時中おねえさんの側を警戒して離れない訳じゃないのだから、おねえさんがそういう怪人に寄生されて体内に爆弾を抱えている状態に陥ってしまうのは十分にあり得る。

ただ、あの電話の向こうの声の感じからして、少なくとも自覚ないだろうけど。っていうかその自覚があつて自由意思が少しでも残さされているのなら、あのおねえさんは間違いなく自分が誰かの重荷になるくらいなら、躊躇なく自分で自分の命を絶つ。

……そう考えると、ガロウのやけに矛盾してると思えた言動にも説

明がすんなりつく。

ガロウは何らかの拍子で怪人協会に目を付けられ、そしておねえさんを敬愛していることまで知られてしまい、おねえさんを人質に取られた。だから本意じゃないヒーロー狩りをしていた。

きつと今の状況……、怪人協会が本格活動する為の前準備としてヒーロー協会の戦力を削れと命令された。だからあんな「自分は怪人だ」と主張して、ヒーロー狩りをしているのに一番取り返しのつかない結果は……、ヒーローを殺すことはなかった。

この仮説なら、鬼サイボーグさんがガロウを庇って、シルバーファングさんも自分の非を認めて謝ったのに、ガロウは説得にも和解にも応じず更に暴れた事にも説明がつく。

おねえさんを思い、おねえさんを助けたかったからこそ、ガロウは自分を救おうとしてくれた人たちの手を振り払うしかなかったんだ。

そして、鬼サイボーグさんが怪人協会がガロウを攫ったとしか言っていなかったけど、この時に鬼サイボーグさんたちもおねえさんの身体に、爆弾の役割を持つ怪人が寄生している事を知らされたのなら……。

この仮説が正しいのなら、僕だつてきつと怪人協会の脅迫に逆らえない。

だから、ガロウも鬼サイボーグさんも責めやしない。

だけど、ガロウはともかく鬼サイボーグさんは信じているから、この信頼を裏切らないでくださいよ。

貴方はおねえさんを人質に取られたからと言って、相手に唯々諾々と従う人でない。むしろ絶対に相手を許さないからこそ、虎視眈々とおねえさんを救う方法を探し、それがどんなに困難でも実行する気しかないことを僕は信じてます。

その為におねえさんから離れず、怪人協会からの指示に逆らつてないけど貴方が本意ではない裏切り行為をしなくて済むように状況を整えてあげます。

おねえさんを守る協力者として、シルバーファングさんも付けます。状況的に、シルバーファングも同じ脅迫を受けている可能性が高

いし。

だから、貴方達が僕らと一緒にではないけど、怪人協会に突入する言い訳のお膳立てはしたんですから、おねえさんに寄生している怪人をどうやったらおねえさんが傷つかずに排除できるか、必ず見つけ出してください。

どうか絶対に、おねえさんを助けてくださいよ。

## サイタマ、エヒメに土下座する未来決定

『どうしたの、ガロウ君?』

小さなあの子が俺に尋ねる。

俺は、何も答えない。答えられない。

『怪人だって頑張ってるのはわかるよ。怪人だって、守りたかったものがあるのもわかる。』

けど、その為に誰かを傷つける手段を取るのは間違いなんだよ』

ひいちゃんは困ったような、悲しげな顔で俺に教える。

確かこれは……ああ、カニ魔人の話か。

ジャステイスマンでただ綺麗な海を取り戻したかったカニ魔人を応援してた俺に、たちちゃん達のように変なものを見る目で嘲笑いはしなかったけど、ひいちゃんは俺の感想に同意はしてくれなかった。

カニ魔人が3対1で不利だったのに善戦してた、変なタイミングでご都合主義な雷さえ落ちなければ勝てたこと、それぐらいに頑張っていたことは認めてくれた。

カニ魔人の切実な望みをバカには絶対にしなかった。

けれど、カニ魔人を「悪」だと断じた。

『……でも、ひいちゃん。それだとジャステイスマンも「悪」だよ』

俺の疑問に、ひいちゃんは更に困ったように眉を下げて、答えた。

『そうだね』

ジャステイスマンだって、ひいちゃんにとっては正義じゃなかった。

そのことにほんの少しだけ、ホツとしたことを覚えている。

『誰かを守るために誰かを傷つけるしかないって状況は、いっぱいあるからね……』

「正義」って、難しいよね』

そう言っ、困ったように淋しげに悲しげに笑うひいちゃんを見ると、胸の奥が痛くなつたから俺は言った。

「ひいちゃん」

けど、言えなかった。

小さなあの子が大人になって、困ったような淋しげで悲しげな顔で俺を見ている。俺と向き合っている。

血にまみれた俺を。

自分の血なのか、あの偽物どもの血なのかわからないぐらいに汚れた俺なのに、それでもあの人は火傷の痕が痛々しい手を伸ばして俺に触れる。

俺に触れてくれるのに、ひいちゃんは俺を突き放す。

『ごめんね、ガロウ君』

やめてくれ……。謝らないでくれ……。

ひいちゃんは何も悪くない！ 君が悪い訳がない！！

悪いのは何もかもが中途半端だったくせに身の程知らずだった俺だ！！

『助けられなくて……。ごめん』

違う……。

違う番う違う！！

ひいちゃんは間違いない俺を助けてくれた！！ 俺は救われたんだ

！

ひいちゃんが正しいんだ！！ ひいちゃんは間違ってるんかない！！

だからどうか……。言わないでくれ。

俺の願いは、怪人である俺が切り捨てるべきなのに捨てられない人は叶えてくれなかった。

あの日のあの子……。墨汁まみれで濡れ鼠になりながらも、泣くのをやめて俺に笑いかけたあの笑顔で……。自分を責めるくせに俺に何も渡してくれなかった笑顔であの人は言う。

『ヒーローなんかじゃなくて、ごめんね』

「違う!!」

叫ぶと同時に跳び起きた。

……。ここはどこだ？ 俺は生き延びたのか？ 記憶が曖昧だな。

初めは結局鬼サイボーグやジジイにやられて、ムシヨにぶち込まれ

たのかと思った。そこはそういうイメージにぴったりの檻の中だったからな。

が、辺りを見渡すと小さなテーブルの上に手紙が一枚置いてあり、それを読めば大体事情と状況は把握できた。

クソツ！ 結局俺は怪人協会なんかに関わられたのかよ。

助かったとは思えねえ。むしろ邪魔をされたとしか思えないから、恩着せがましい手紙を丸めて捨てて、さっさとここからおさらばしよう。

服はありがたくもらうけどな。さすがにパンイチで出歩く、変態怪人として名を遺す気はない。

鉄格子の扉を、蹴りで吹っ飛ばして外に出る。だが、外に出たところで俺にはどこをどう進んだらいいのかわからん。

っていうか、頭が上手く回らねえ。未だに体中がすげえ痛い。手足は重い、頭痛もする。喉も乾いてるし、腹も減った。

ジジイと鬼サイボーグはどうなった？ あのムカデ相手に………どうでもいいか………

淀んだ空気に血の匂いが混じってるな。吐きそうだ。それに静かすぎて耳鳴りがしてくる……。地下深くか？

取り留めないことを考えながらテキトーに歩いていたら、声が聞こえた。

切羽詰まって泣き叫びながら命乞いをする声だ。その声の方向に意識を向ければ、やけに人………というか生き物の気配があるので、ひとまず身を隠しながらそちらに向かって様子を窺う。

「見逃してくれえ！ 俺達が悪かったあ！ もう二度と齒向かうようなことはしねえよ!!」

広間の中心で7人の男女が泣きながら取り囲む怪人たちに命乞いをしてる。

全員バトルスーツを着てるが話してる内容からして、プロヒーローじゃなくて外部の傭兵部隊みたいだな。何つー無謀なことを………

そんな風に呆れて眺めていたら、声が聞こえた。

(隠れてもいいから、もうちょっと待っててね。ガロウ君)

その声は頭に直接届く。テレパシーか。

ということとは、あの一つ目玉のずんぐりむっくりは超能力者か。……なんか、無性に気に入らねえ。あれとひいちゃんかなり大雑把なくくりとはいえ、同じ存在ものに分類されるのが嫌だ。

どうでもいいことを考えて身の程知らずな傭兵どもの末路を眺めていたら、G5とかいうロボットの口添えでどうにかそいつらは怪人の手駒ではあるが、生き延びることができたようだ。

……まあ、それもどうでもいい。

「ふー……、ふっふっふ……」

まーだ……人間の匂いがするね。とつくに気付いているんだよ……」

とりあえず傭兵たちの処遇が決まったところで、見た目こそは人間に近いが、だいぶぶっ飛んでる奴が俺の方向に振り返る。

「出てこおい」

命令をきく義務も義理もないが、このまま無視するのもこいつらを恐れて逃げたみたいで癪だから、お望み通り出てきてやる。

「やあ、ガロウ君。早いお目覚めだね」

さつきから指示を出して、怪人どもを抑えきれてはいないが統率してたから、この目玉が怪人協会とやらの頭かと思っていた。

が、広間に入って気付く。出入口口から窺っているだけじゃわからなかった。でかすぎて逆に見えなかった。入っても、やっぱりでかすぎるのとピクリとも身じろぎもしないから、生き物だと気付くまで少し時間がかかった。

なんだ、奥にいるあのデケエのは……？

「静かに。今から彼と大事な話をする」

俺に疑問にもちろん周りの怪人どもは答えず、口々に勝手なこと言っただけで騒ぐのを目玉が制して、これまた勝手に話を進める。

「俺に……どうしてほしいんだ？」

勝手に物事が進むのは気に入らねえから、あえて俺は話をさっさと進める。

こいつらの都合なんかどうでもいい。協力する気はない。ただ、何



も知らないまま利用されるのは嫌だからこそ、何を望んでいるのかは知りたかった。

目玉の要求は端的に言えば、鳥の怪人が言っただろうがそれは。馬鹿馬鹿しい。何度も断っただろうがそれは。

なのに、目玉は上から目線で俺が望んで、喜んで入ると思っっているように、俺に「条件」を付けた。

「我々には君が本当に『怪人』なのかまだ判断できない。君が本物の怪人であることを証明してみせてくれ」

クソくだらねえ疑念の為につけられた条件を、「ツノでも生やせつてか」と皮肉れば、後ろの置物のようなデカブツが「条件」とやらをやけに重々しく、もったいぶって告げる。

「——ー日やる。」

誰でもいい。ヒーローの首を持ってこい」

オロチとやらの言葉に、虫の怪人が「そりやわかりやすい。躊躇いなくヒーロー殺せりや、立派な怪人だ」と同意した。

……その言葉にかすかな反意を覚えたが、その反意は具体的な言葉にならなかつたので、ひとまず俺はとつくの昔に条件を満たしてるところを告げる。

「……………ヒーローの命なら、午前中の戦いで……」

だが、俺の言葉は俺を邪魔してここに連れてきた鳥ヤローに遮られる。

「残念な知らせだが、シルバーファングたちは生き残っているぞ！

ムカデ長老は倒された!!」

思わず、目をかっ開いて鳥怪人を凝視する。

……生き残った？ あのままさしく災害としか言いようのないムカデ相手に、ジジイどもと鬼サイボーグだけならまだしも、俺がボコつた8人も？

鳥怪人の言葉が信じられず、鳥怪人の方を見ていたのに、俺の目に鳥怪人は映らない。

俺に見えるのは、手品のように魔法のように軽やかに降り立って現

れ、そして笑うあの人だけ。

『ガロウ君。来たよ』

俺の、言つてもいない「助けて」に応えるようにその幻影は笑っていた。

夢で見た悲しげな笑顔じゃなくて、嬉しそうで誇らしげな、誰よりも何よりも綺麗な笑顔だった。

\* \* \*

《ヒーロー協会の体たらくを見ればわかるとおり、人類側に勝ち目はありません。全面降伏すべきです》

「怪人様に迎合せよ」だの「全面降伏」だのと書かれた旗やプラカードを掲げて、拡声器で自分達だけ助かろうと浅知恵を絞ったくだらない主張が、聞きたくもないのに耳に届く。

《怪人様の味方に付くというものは我々と共に行きましょう！

常識や倫理観が塗り変わっていく世界で生き抜くのです!!》

「うるせえぞー!! 怪人の味方になるくらいなら死んだ方がマシだっつーの!」

俺でも同意も共感も出来ない主張に対して、癩だがほとんど俺と同じ意見を叫び返した男に、拡声器でアホなことをがなり立てていた男が、プラカードを掲げていた取り巻きに指示を出す。

《丁度いい! ならばあなたを生贄の第一候補にしましょう!! 捕まえろ!!》

……胸糞が悪い。

ただ単に自分が助かりたくて、他の誰かに嫌なもんを全て押し付けたいだけのくせに、表面上は「人間の種の保存の為」と言い張る屑どもが、ただでさえイラついていた俺を更にイラつかせた。

お前ら、その主張が本音なら犠牲になるべきなのは、生贄になるべきなのは怪人を迎合しない奴等じゃなくて、迎合してるお前らであるべきことをわかつてるのか?

わかってないよな。お前らはただ自分が助かりたい、その為なら何

も悪くない赤の他人を平気で差し出せるくせに、それがどれだけ外道な行為かを理解しているから、そんなことを出来る自分がクソであることを認めたくないから、上っ面だけ「人間の為」って言ってるだけだもんな。

お前らは人間の味方でも、怪人の味方でもない。自分だけが可愛い、ただのコウモリだろうが。

そんな風に思ったのと、あとはたまたま俺が初めに文句をつけた男と向かってきた馬鹿どもの直線上にいて、避ける方がむしろ面倒くさかったから、デコピンでそいつらをぶっ飛ばしておいた。

「生贄制度で自分達だけ助かろうなんて、怪人を舐めすぎだぞ、テメエら」

色々言いたいことがあったが、けれど上手く言葉にできなかったし、下手でも伝えようって気にもなれなかったから、とりあえず俺はそれだけ言ってそのままテキトーに歩を進める。

それにしても、怪人協会の影響で人間社会がこうも簡単に揺さぶられるとは、拍子抜けだな。

既にこんな状況だと、俺という最強の怪人だ大々的に出現した時のインパクトが薄れちまわないか不安になってきたぜ……。

俺の不安を肯定するように、どつかのビルについたTVでニュースキャスターが、各地で自棄を起こした馬鹿どもの馬鹿なやらかしを告げ、えらそーなおっさんが大げさに嘆く。

「へけしからん輩もいるものですね。怪人が暴れているからといって、相対的にヒトの罪が軽くなる訳ではありませんよ」

こういうおっさんの主張は大体、癪に障って納得できた試しがなかったが、これだけは心から同意できた。

その通りだ。

怪人協会が中途半端なことをしやがるから、威勢だけのクソどもを増長させる……。

『いい気味だ』

……あいつらと……たっちゃんと同じように。

俺が弱いくせに身の程知らずの半端者だったから……、だからあい

つらは痛い目に遭っても反省なんかせず、むしろ意地になって増長したんだ。

いっそのこと、俺は弱いまままでいた方が良かったんだ。

そうすれば……あの人は——

……やめろ。もう思い出すな。

もう俺はあの人の「ガロウ君」じゃないんだ。殺せなかったが、殺す気だったんだ。ひいちゃんと親しい関係であろうあいつを、鬼サイボーグもバングのジジイも殺す気だったんだ。

あの人の大切な人を、あいつらよりも外道で卑劣で最悪な手段で奪って壊して踏みにじる気だったんだ。

そして今も、そのつもりなんだ。

怪人協会あいつらなんかどうでもいい、怪人協会に幹部として入りたい訳でもないが、俺が怪人になる為、俺が「怪人」だという証明に必要なことなんだ。

ヒーローを殺すことが、怪人の証明になるとは思っちゃいねえ。

けれど、あの人が大切に思う奴等を……鬼サイボーグやバングのジジイをこの手で殺せば……、あの人を悲しませれば、俺は誰が何と言おうと間違いなく怪人だ。

もう決めたんだ。だから迷うな。躊躇うな。

俺は怪人なんだ。だから、知らない。好きなんかじゃない。

あの人の事なんか。あの子のことなんて——

「うわあー！ 喧嘩だ！ 止めろー！」

考えるなど言い聞かせているからこそ考えてしまうのは、血は足りないわ腹は減ってるわでイライラしているから。

だから俺は、テキトーに目についたファミレスに入ろうとしたら、その出入り口でジジイの胸ぐらを酔っ払いのオッサンが掴んで暴れてた。

通行人がそのおっさんを何とかなだめようとするが、おっさんは酒臭い息と唾を飛ばしてがなり立てる。

「どうせ俺達はみんな怪人に殺されちまうんだ！ 我慢なんかしてられっか！」

おっさんが自棄を起こして、ジジイや通行人をどうしようが俺には関係ない、どうでもいいことだが、俺は腹が減ってるんだよ。なんでわざわざここでやる？

「おい。店の出入り口で邪魔なんだよ。消えろ」

ムカつきつつも俺にしては相当穏便にまずは口で言っただけなのに、おっさんはさつき喚いた言葉通り我慢する気がないからか、折り畳みのナイフを取り出して俺に突き付ける。

俺はそのっ切っ先を折って、そのままおっさんの目玉に突き付ける。

「消えろ」

我慢なんかしてられない？

なら、他人の我慢も期待してんじゃねえよ。

……どいつもこいつも半端で、自分の都合がいいように物事が進むと信じて疑わない馬鹿どもばかりで胸糞悪い。

そしてこんな奴等と俺がそう変わらないという事実が、更に俺を苛立たせる。

違う。違うんだ。

俺はあの酔っ払いやくだらない主張をしてたカスどもはもちろん、半端に脅すだけでバカに自棄を起こさせても、人間そのものに絶望を叩きつけることは出来ていない怪人協会の奴等とも違う。

俺は奴等とは違う。

こんなクソどもも黙らせる、真の恐怖を作り出す。

——だが、今は腹が減りすぎた……。

\*\*\*

ファミレスで肉メニューを全制覇して、そのまま食い逃げしたのはいいが、さすがにマラソンはきつかった。

腹を満たしたことでだいぶマシになったが、やっぱり本調子には程遠い。これじゃ、まだ鬼サイボーグに戦う気がないとしても勝てないな……。

だとしたら……どうするか。傷が癒えるまでどこかで大人しくしとくべきだろうが、その大人しくできる場所なんか、癩だが怪人協会

しか思い浮かばねえ。

だが、肝心の怪人協会も「先に条件を満たせ。そうしたら保護してやる」と言っている。

……まあ、今のバッドコンディションな俺でも、C級どころかB級下位くらいなら余裕だ。テキトーにそいつらを狩ってひとまず、追っ手の心配がない休める場所を確保するのが、合理的なんだろうな。

けど……それは気に食わない。

元々、あいつらの仲間になる気はねえ。指図を聞いてやる気もねえ。

ヒーローを狩るのは全部俺自身の為であって、怪人協会あいつらの為なんかじゃねえ。

そもそも、ヒーローを殺せば怪人として認められるって、どういう理屈だ？

条件出された時から納得してなかったけど、改めて考えれば考える程に訳が分かんねえよ。それは怪人じゃなくて、ただのヒーロー殺しだろ。

怪人って言うのはもつとこう……その現場に居合わせないような連中も、恐怖に陥れるような存在つか、なんつか……。

そうだ。だから俺は、テキトーな雑魚ヒーローを狩る訳にはいかない。

雑魚ヒーローを殺しても、そいつが弱かったからで終わる。俺を恐怖する理由にはならない。

俺が狩るべきなのは、殺すべきなのは、ジジイか鬼サイボーグだ。

そいつらを狩れば、殺せば……少なくともあの人は………

『だ、大丈夫だよ、ガロウ君！』

私も、ガロウ君の事が好きだから！ ほら、一緒一緒！ 両思い

だよ、ガロウ君!!』

あの人が「大好き」だと言ってくれた「ガロウ君」はいなくなる。

あの人にとっての怪人に、俺はなれるんだ。

だから、絶対に俺はあいつらを——

「痛い！ 痛いよ!!」

声が聞こえた。

聞き覚えのある声が聞こえたから、特に意味のない反射で俺はその声が出た方向に目を向ける。

高台になっっている道路から見下ろせる公園に、ガキどもがいた。

パツと見ただけなら鬼ごっこかなんかで遊んでいるように見えるが、さらによく見て何を言っているのかを注意したら、それは「遊び」でないことが一目で知れる。

「おい、タレオ。お前どうして無事だったんだよ？」

「お前も怪人なんじゃねーの？」

「やーい、怪人ブサイク！」

「痛い痛い痛い!!」

ニヤニヤ嗤いながら3人が1人のガキに石を投げつけたり、顔を突ねってひっぱたりしている。

言っている事もやっていることも、絶対に遊びじゃない。

「遊び」で片づけていい光景じゃない。

「——やめろっ!!」

深呼吸で吸った息をそのまま音量にした声で俺が言えば、ガキどもはビビってそのまま一目散に逃げ出した。

いじめられてたガキだけが、腰が抜けたのかそれとも甚振れたせいで体が痛くて逃げ出すことも出来ないのか、その場に膝をついている。

そんなガキに、俺は歩み寄って声を掛ける。

「何てヒデエ面で泣いてるんだ。こりゃ、いじめられるわ。可哀相に」  
なんでわざわざ近づいて話しかけたのかは、わからない。

そもそも、「やめろ」と叫んだ理由すら俺には、自分の事なのにわからない。

叫んだのも、話しかけたのも、俺にとっては反射みたいなものだったとしか言いようがない。

本当に可哀相だと思ってる訳でもねえ。こんなの、嫌味だ。

それなのに、このガキはただでさえブサイクな顔を涙と鼻水にまみれて更にブサイクにしつつも、顔を上げて俺を見て、俺が誰だか理解

した瞬間に目を輝かせた。

昼間、あの小屋で俺と会った時の様に。

「おじさん!」

「おじさんじゃねー!! 俺はまだ18だぞ!」

何度言つても俺をおじさん呼ばわりするガキに素でキレて言い返すと、ガキはまた怯えてぐずりだす。

それが鬱陶しかったから、俺はもう関わりたくなくてそのまま背を向けた。

「さっさと帰れ。もう日が暮れる。また怪人が出るかもしれねえぞ」

その言葉だつて、特に意味のない反射。自分が何を言っているのかもよくわかってなかった。

言つた端から内容を忘れるような言葉だつた。

……自分で言つた言葉はすぐに忘れたくせに、ガキが鼻水啜りながら言つた言葉は嫌になるほど耳に残つた。

「……………おじさん……………ごめん。……………お昼は逃げちやつて……………」

泣きじやくりながら、ガキは言う。何度言つても、俺が18歳だつてことが信じられないのかおじさんと呼ぶ、ビビりなのか神経図太いのかよくわかんねえガキは、そのまま言葉を続けた。

「僕……………ちゃんと見てたのに……………。ヒーロー達がおじさんを退治しようとしてたけど、やっぱりあれは間違いだつたんだよね……………。」

だつておじさんはあの時……………、銃弾から僕を守ってくれたんだから!」

俺にビビつて泣いて逃げたガキが、俺に怒鳴られて泣き出すようなガキが、今度は逃げずに零れる涙を必死にこらえて鼻水を啜りながら、俺に近づいて言う。

「今だつてそうだ。助けてくれた……………」

俺に、手を伸ばす。

俺に縋るように、まだ半泣きだがそれでも笑つてガキは俺に向かつて言う。

無邪気に、信じて疑わない目で。

「きつとおじさんは正義の味方で—————」



「やめろ」

その伸ばして手をすり抜けて、俺はガキの口を手を押さえてそれ以上癩に障る言葉が出ないようにする。

ガキと向き直って見下ろし、睨み付けて、明確に怖がらせるつもりで低い声で言い捨てる。

「鳥肌立ったぞ」

あまりにもバカらしくて気持ち悪いガキの勘違い発言に、鳥肌どころか蕁麻疹が出る。

何が「助けてくれた」だ。何が「正義の味方」だ。

俺は何も、正しいことなんかしていない。する余地がなかったなんてただの言い訳だ。

俺は正義じゃない。ヒーローじゃない。

だから、そんな目で見るな。俺に期待するな。俺に手を伸ばすな!!

「おい、食い逃げ犯!!」

ぐつぐつ煮えたぎるような苛立ちのままに叫びそうになったところで、後ろから叫ばれた。

最初は俺のことだとわからなかったが、ああ、確かにしたわ、食い逃げ。

自分がしたことを思い出したら、ノルマ義務があるC級あたりのヒーローが追ってきたのだろうと思つて面倒くさかったが、そのヒーローの言動は俺の予想に反してというか、訳わかんねえ方向で裏切つた。

「この野郎! 食い逃げなんて……!! 全くいいタイミングでやりやがってこの野郎!

今回だけ許す!!

それじゃあ、一応注意したということ……」

「待ておい、なんだやそりゃ!?!」

お前、何しに来た!?

何か最初から言ってる意味がおかしいが、追ってきたのに見逃すのかよ!?! せめて食い逃げした理由を訊いてから、その理由次第で見逃せよ!!

「俺を退治しに来たんじゃないのか？ 怖気づいたか？ ヒーローネームは何だ!？」

マジで訳わかんねえこと言うだけ言って帰ろうとするハゲヒーローに突っ込み返せば、そいつは足こそは止めたが振り返らず、ボソボソつとよく聞こえない呟きを零す。

マジで何だよ、こいつ………ん？ よく見りゃこいつ………何か、見覚えがあるな。

産毛どころか毛穴さえ見当たらない毛根死滅の頭に、黄色いコスチューム………そんであの耳の形は………って、こいつ！ ひいちやんの兄貴じゃねーか!!

昨日からわかってたけど、マジで訳わかんねえことしか言わねえなこいつ!!

けど、ひいちちゃんの兄貴ってことは、こいつは俺が「ガロウ君」だから食い逃げを見逃すってことか？

妹の後輩だから、友達だから、情けを掛けてるってことか？

「おじさん………食い逃げしちやっただの？ 見逃してくれそうだし、絡まない方がいいよ」

俺がこのハゲに見逃される理由を察したと同時に、ガキが服の裾を引いて言った言葉に、頭の奥で何かがぶちツツと切れた。

ふざけんな。

怪人協会どころか、雑魚ヒーローやクソガキにまで情けを掛けられたらいよいよ終わりだ。

鬼サイボーグやバングのジジイが生き延びたって話を聞いて、内心ホッとした自分に腹が立つぜ。怪人の定義はともかく、俺に決定的な覚悟が足りてねえのは確かなようだ。

雑魚には興味なかったが、こいつがひいちちゃんの兄貴なら話は別だ。

こいつなら、鬼サイボーグやジジイと同じかそれ以上に、あの人が悲しみ、傷つく。

俺があの人を好きじゃない証明になる。

俺は背中を振り払って、隙だらけの禿げに距離を詰める。

舐めんじゃねえ……。俺は怪人だ……！

「おい！ 今からテメエを……」

ハゲの肩を掴み、そのまま振りかぶった拳を振り下ろし……

「……すまん。俺も共犯だから、これ以上絡むのは勘弁して」

「おぐうおつはあああああーっ！！」

## 一応こちらが主人公 side

……正座して携帯ゲーム機でゲームしてるキングさんの横で、同じくジェノスさんが正座してそのプレイの様子をものすごく真剣に見てる。

何？ この状況は？

最初の方は何かボソボソと二人で話してた（多分昼間の童帝君からの電話のこと）けど、今はお互いに無言だからなんか妙に気まずい。特にすることがないってのもあるんだろうけど、何故か私だけじゃなくてバングさんとボンブさんまで無言で二人を見守ってしまったる。

キングさんも「この人何がしたいんだらう？」と言わんばかりに困惑してるのが、その横顔でよくわかる。

幸いながら、キングさんのしてるゲームはそう時間を取るものではなかったこととキングさんの腕もあって、この奇妙な沈黙はそんなに長く続かなかった。

「一応これで全クリだけど……。どう？ 満足した？」

キングさんがジェノスさんにクリア画面を見せて訊くと、ジェノスさんは真剣そのものな顔と声音で答える。

「……もう終わったのか？ 全く何も理解できなかった……」「すみません、ジェノスさん。私にはあなたが何をしたいのか理解できない」

口から出かかった「こつちのセリフだよ」を穏便に言い換えて私が突っ込むと、ジェノスさんはやっぱり真剣そのもので「サイタマ先生とキングやいつも行っている仮想バトルに俺も参戦を試みましたが、俺自身がまだ未熟であることを痛感しました」と答えられた。

うん、答えを聞いても理解できない。

ジェノスさん、お兄ちゃんとキングさんのゲーム対戦そんな風に思ってたの？

もうただ遊んでるだけのお兄ちゃんを恥ずかしく思えばいいのか、ここまで真面目なジェノスさんに引けばいいのかも私にはわからない

い。

っていうか、方向性が勘違いの大間違いとはいえどこまでも愚直に真面目に努力してる弟子を放って、お兄ちゃんはこんな時間まで何してるの？

「結構遅い時間になっちゃったな……」

キングさんも、8時を過ぎた時計を見て心配そうにつぶやく。

まったくだよ！ お兄ちゃんが今日は鍋食べたいって言うから、帰って来たらすぐに食べれるように用意して皆さんにも待つてもらってるのに、お兄ちゃん本人は何でまだ帰ってこないの？

……何かよくわからないけど、いきなりガロウ君を捜しに行くって言うって、お昼ご飯も食べずに出て行っちゃったのは何で？

お兄ちゃんも、ガロウ君を心配してくれてるの？ でも、バングさんやキングさんはお兄ちゃんがなんかちよつと怒ってるみたいな感じだったって言った。

……ねえ、お兄ちゃんは本当にどこで何してるの？

「……エヒメさん、大丈夫ですよ。先生がエヒメさんとの約束を破る訳がありません」

私がよほど思いつめた顔でもしていたのか、ジエノスさんが痛ましげな顔をしつつ私を励ましてくれた。

……うん。そうですね。

お兄ちゃんも、ガロウ君はいい子だって昨日のやり取りでわかってくれたもん。何で怒ったのかはよくわからないけど……、ガロウ君を捜してるのは心配してくれているからだ。

「そうそう。あの素晴らしいビンタを忘れてない限り、サイタマ君がエヒメ嬢との約束を破る訳がないわ」

「むしろバングさんがその件を忘れてください！」

同じようにバングさんが私の不安を紛らわせる為とはわかってるけど、私にとっては黒歴史なあのビンタを話に持ち出してくるから、私はちよつと本気で怒って頼み込む。

っていうかポンプさん、「何？ お前が素晴らしいと称賛するほどのビンタだと？」と言わんばかりの顔で私を見ないで。興味を持たな

いで。

「えーと、も、もう遅すぎますから、私、お兄ちゃんを迎えに行つてきますー!」

「ちよつ! ダメですエヒメさん! 危なすぎます!!」

なんかいたたまれなくなつたのと、本当にお兄ちゃんが遅すぎて皆さんお腹を空かせて待つてもらつてるのが申し訳なくなつたから、私はそう言つてレポートでお兄ちゃんを連れ戻そうとしたけど、跳ぶ前にジエノスさんに腕を掴まれて止められた。

「先生がガロウを捜しているということは、怪人協会のアジトを捜していると同義です。全く見つからず、怪人にも遭遇せずに当てもなく探し続けている所為で遅くなっているのならともかく、先生がアジトを見つけているのなら、いくら先生の側でも突然エヒメさんが現れたら、貴女はもちろん先生も危険です!」

私の腕を掴んで止めたジエノスさんが、どうして私に行かせてくれないのか、その理由を泣きそうな顔で、本当に私も私という足手まといが現れたことで不利になるであろうお兄ちゃんを案じているとわかる顔で説得して止めてくれた。

ここまで切羽詰まつた様子ではなかったけど、同じ理由で同じ説得はもう何度もされたのに、私はお兄ちゃんの側なら絶対に安全という甘えた期待と自分の不安、あとしようもない羞恥を理由に忘れたフリをして勝手な行動を取りうとした。

まったく反省しない自分が恥ずかしくて、私が俯いて「すみません、ジエノスさん。心配どころか迷惑ばかりかけて……」と謝る。

「いや、エヒメちゃんが危ないのはわかるけど、たしかにそろそろ迎えに行つた方が良くない?」

怪人協会のアジトなんて闇雲に捜しても見つからないだろうから、見つからないのならそれこそサイタマ氏は引き際を見失つていつ戻つて来るかわからないし。

あと……言っちゃなんだけどサイタマ氏はすごく強いけどあんな性格してるから少し心配だな。万が一……怪人の罠にでもかかったら……」

私が謝るとジェノスさんは優しいから私を責めるつもりはなかったらしく狼狽えたから、私とジェノスさんの両方をフォローするつもりでキングさんは口を挟む。

けど、キングさんにとってお兄ちゃんは（ある意味）対等な友達だし、歳の近い男同士だから私よりお兄ちゃんのことをわかつているのもあって、フォローのつもり発言でキングさん自身の不安も零してしまい、結果的に私の不安はぶり返されて煽られてしまう。

そのことに気付いたからか、ジェノスさんは怖い目でキングさんを睨み、キングさんはキングエンジンを鳴らして冷や汗を流しつつ私に「ご、ごめん！ エヒメちゃん！」と謝るけど、……ただ単にジェノスさんに怯えて動悸が激しくなっているキングエンジンをジェノスさんが激しく勘違いした。

「……確かに、先生は強いが素直すぎて搦め手には弱いだろう。だから、キング。悔しいがお前に任せる。」

エヒメさんと一緒に先生の元まで跳んでくれ」

「へ？」

思わず、私とキングさんが同時に声を上げる。

え？ 何でその結論になったの？

そんな私とキングさんの疑問を、バングさんとボンブさんは顎の髭を撫でながら納得したようにうなずいてその気はないんだろうけど説明してくれた。

「ああ、そうじゃな。それがいい。ジェノス君は今の状態だといっちゃ悪いが役に立たんし、第一重すぎるわな」

「わしらでもいいが、まだ全回復したとは言え切れん状態だしな。キングがお嬢ちゃんの護衛と、サイタマ君の援護に丁度いい」

……ああ。キングさんのキングエンジンをやる気Maxだと勘違いしていますわ、この人たち。

違うんです、ジェノスさん、バングさん達。キングさんのキングエンジンはそんなじゃないんです。

というか、ジェノスさんはともかくバングさんとボンブさんって実は本気でキングさんを世間の評判通りの実力者だと思ってます？

私はあなた達はわかってるけど優しいから、何か事情があるんだろう  
と思って黙ってるんだと思ってましたけど、そうじゃないの？

……多分、本気だろうなあ。

気付いているのなら、ここでキングさんを私の護衛とお兄ちゃんの  
援護に推すのは、まだよく知らないボンブさんとはかくバングさん  
にしてはおかしいもん。

バングさんなら、嘘ついてS級の地位にいるキングさんにお灸をす  
えるつもりでわざと強敵の前に放置することはあっても、それは自分  
たちがフォローできる状況かつキングさんがビビる以外の被害が出  
ないようにつて配慮はするはず。

自分が行く気もなければ、自分で言うのは何だけど可愛がってる私  
が巻き込まれそうな状況に反対しない訳がない。

……でも、気付いてないとしたらキングさんの勘違いさ<sup>オーラ</sup>れ能力すご  
すぎない？

私が遠い目でそんな風にキングさんの割と自業自得な自爆に同情  
していたら、ジエノスさんに「頼んだぞ、キング」とキングさんは肩  
ポンされて、行くことが決定されて更に大きくなったキングエンジン  
を鳴らしながら、継るような目で私を見る。

いや、そんな目で私を見られても……。

正直、私だつていざという時に私を頼りにしそうなキングさんは色  
んな意味で気まずいし邪魔だから連れて行きたくないから、どうやっ  
てこの勘違いを訂正しようか悩んだけど、幸いながらその悩みはあっ  
さり解決した。

「ただいま〜」

「！ お兄ちゃんー！」

元凶であるお兄ちゃんが、いつも通りのテンションで普通に帰って  
きてくれた。

なので私はパタパタと走ってリビングから玄関の廊下に繋がる扉  
を開くと、これまたいつも通り怪人の血やら体液やらに塗れたお兄  
ちゃんが普通に現れる。

どうやら、私やキングさんの不安は見事に杞憂だったみたい。



「ふう……。いやー、まいったまいった。大変な目に遭ったぜ」

「……………お兄ちゃん、どうしたの？」

けど、よく見るとお兄ちゃんの様子がいつもと少し違う。

お兄ちゃんはまだもう怪人と何連戦しても「疲れた」なんて言わないし思わないけど、今日はなんだか本気で疲労してみたい。

それに私がおかえりとお疲れ様と言えば、どんなに期待を裏切られて失望して落胆しても、お兄ちゃんは笑って「ただいま」って答えてくれたのに、今日は何故かお兄ちゃんは私から豪快に目を逸らす。

……お兄ちゃん、絶対に何かやらかしたでしょ？

お兄ちゃんの反応から、私に言いづらい何かをやらかしたから帰りたくなかった、子供みたいな理由で悪あがきをしてこんな時間まで帰ってこなかったことを察した私は、私から目を逸らしまくるお兄ちゃんにもう一度「お兄ちゃん？」と呼びかける。

それでも目どころか首を限界まで回して私から目を合わせようとしないお兄ちゃんに、ジエノスさんが困った様子で「先生？」と呼びかけてから、ジエノスさんは言った。

「先生、何があったのですか？ エヒメさんに心配をかけたくないお気持ちにはよくわかりますが、先生なら俺以上にわかっているはずでしょう？」

この人は何も教えない方が傷つき、不安になる人です。エヒメさんが先生を嫌う訳などないので、エヒメさんを思うのなら正直に話してください。俺達に聞いてほしくないのなら、今すぐに席を外しますから」

このジエノスさんの純粹すぎる説得と申し出に、流石の神経図太いんだか無神経なんだかなお兄ちゃんも良心にぶっ刺されて敵わなかった。

うん、ごめんジエノスさん。今のお兄ちゃんは私に気を遣ってるんじゃないくて、ただの保身だから。自分の事しか考えてないから。

そして私も、お兄ちゃんのことを嫌いになる訳はないけど軽蔑はする。

\* \* \*

「バカじゃないの！ バカじゃないの！ バツカじゃないの!!」

ジェノスさんの説得にいたたまれなさ過ぎて観念したお兄ちゃんが懺悔した、こんな時間まで帰ってこなかった理由を聞いて思わず私は、自分の前に正座したお兄ちゃんを見下ろして「バカじゃないの」を連呼する。

「え、エヒメさん……。先生も財布を無くしたのはわざとではなく、先生自身もショックを受けている事ですし……」

「それはわかってますしそこは責めませんから、ジェノスさんもすみませんが口を挟まないで！」

ジェノスさんがお兄ちゃんのフォローをするけど、私にとってそのフォローは見間違いだったから、本当にジェノスさんには悪いけど怒鳴って一蹴して黙らせた。

財布落として失くしたのはいいよ！

いや、6千円をなくしたのはうちの家計的に大打撃だけど、ジェノスさんの言う通りわざとじゃないんだから責めるとしても「しっかりしてよ！」程度で怒る気はないよ！ お兄ちゃんがB級上位になったおかげで、生活も前ほど切羽詰まってないし！

私が怒ってるのは、財布を失くしたと気付いた時にした行動だ！

この愚兄!!

「なんで失くしたと気付いた時にファミレスの電話を借りて、私を呼ばなかったの!!」

私ならすぐに跳んでいけるんだから、食い逃げの言い訳だと疑われて嫌な空気になるのだから長くても数分程度でしょ!! それくらいなら失くしたお兄ちゃんが悪いんだから我慢してよ！

なんでお兄ちゃんも、食い逃げしてんの!! 食い逃げ犯を言い訳にしてるだけで、お兄ちゃんもしてる事は同じじゃない!!」

食い逃げの冤罪をかけられて待つ時間の居心地の悪さも、妹である私にフォローされる恥ずかしさも想像できるけど、それらと天秤にかけて食い逃げを冤罪じゃなくて実行するってどうよ!?

しかも言い訳の為に追っかけた食い逃げ犯を結局捕まえずに見逃すって、もう本当にヒーロー以前に人としてどうよ、お兄ちゃん!!

正義感やヒーローとしての義務じゃなくて、お兄ちゃんの言い訳の為に追っかけたとはいえ、そして軽とはいえ犯罪者なんだからそこは見逃すな！ もはや共犯じゃねえか!!

私がマジギレしながら、何でお兄ちゃんが本当に電話で私を呼ばなかったのかを問い詰めると、お兄ちゃんはふてくされた調子でボソボソっとその訳を口にする。

「いや……だってお前とジエノスがめっちゃいい感じだったから……また邪魔するのも……しかもあんな理由で邪魔するのもマジでアレだったし……」

「そんな気遣いしなくていい!!」

私は余計なお世話すぎる気遣いにキレて、思わず鍋の用意で側にあったお玉でお兄ちゃんの頭をぶつ叩く。っていうか、もうあのノックなしサイレントおじやましますの時点で私とジエノスさんのいい雰囲気なんか霧消して戻ってこなかったから、気遣いならその時にしろ!

もちろん私が本気かつ凶器ありで殴ってもお兄ちゃんはノーダメージで、安物のお玉の柄が垂直に折れ曲がっただけだった。悔しい。

「わかったわかった！ 俺が悪かった！ 兄ちゃんが全部悪かった！ だからお説教はせめて明日にしてくれ！ 俺は財布を無くしただけじゃなくて別の事でもシヨックを受けてるんだ！」

「シヨック？ 何があったの？」

物理が無効なら口で攻撃するしかなかったから、お玉を投げ捨てて私がもう一度口を開く前に、お兄ちゃんがせめての譲歩を求めてきた。

腹が減ったから後にしろとかなら、「お兄ちゃんの所為でこっちも空腹だ!」と言ってもう部屋から閉め出して、先にご飯食べようかと思っただけ、そうではなかったから私の怒りはさすがにクールダウンして尋ねる。

けどお兄ちゃんは答えず、またしても私から目を逸らす。

……お兄ちゃん、ガロウ君の事か何かかと心配したけど、その反応

からしてまたろくでもねーことだろ、こら。

「先生、一体何があったんですか？」

心配そうにジェノスさんはお兄ちゃんにその「ショック」の理由を尋ね、バングさんやキングさんたちも心配そうにお兄ちゃんの様子を窺っている、ここ最近のお兄ちゃんじゃ珍しいレベルで落ち込みながら、お兄ちゃんは答えた。

「……せっかく買った白菜……あのファミレスに忘れてきた」

……………はあ？

「くっ……俺が回収してきます！」

「いかん、ジェノス君！ その身体では無理じゃ!!」

……なんかジェノスさんとバングさんが盛り上がりつつあるから私の反応がおかしいのかと思つて他二人を窺うと、ボンブさんとキングさんは「いやそんな白菜ぐらいで……」つて言わんばかりに明らか呆れてるから、たぶん私は正常だ。

っていうか、お兄ちゃん。ショックつてそこ？ 白菜忘れたことが、ヒーローとして人としてどうよな食い逃げをやらかした事よりショックなの？

へー、ほー、ふーん……………。

「お兄ちゃん」

私は白菜を回収しに行こうとするジェノスさんと止めるバングさんはひとまず放つておいて、正座したまま項垂れてるお兄ちゃんの肩を掴む。

私が肩を掴んだ瞬間びくつて跳ね上がったことは、私が怒ってるのはわかってるんだろう。でも、何に怒ってるのかはわかってないんだろ？ わかってたら、このタイミングであれば言う訳ないもんなあ。

まあわかってようがなからうが、もはやお兄ちゃんの本日の末路は決定済みだけど。

「ちよつと深海で頭冷やそうか？」

「エヒメさん!?!」

私の宣言で私がお兄ちゃんをどこに連れて行く気か察したジェノ

スさんが、バングさんとのやり取りをやめて私の腕を掴んで止める。  
ジェノスさんは巻き込めないから、安心してもらえるように私は振り返って答えた。

「大丈夫です、ジェノスさん。年に4回くらいはしてる事ですから」  
「季節ごとに先生を海に落としてるんですか!？」

あれ？ 安心どころかドン引かれた？

ああ、うん、よく考えなくて私の発言も行動もドン引き案件だわ。  
何やってんの私。そして反省しろ、お兄ちゃん。

いつもの私ならジェノスさんに引かれたことにショックを受けるんだけど、この時の私はお兄ちゃんのどこに出しても恥ずかしいやらかしと発言にマジギレしてて、そのショックさえも後回しにしてたのは幸か不幸かわからない。

っていうかジェノスさん、本当に止めないで欲しかった。もうこの時点でお兄ちゃんを海に落としてた方が、たぶんお兄ちゃんにとっても幸運な方だったと思う。

「ジェノス、止めてくれ！ こいつマジで俺を海のだ真ん中までレポートして落とす気だ!!」

「止めないでくださいジェノスさん！ 私としては火山口に落とさなだけで謝ってください!!」

「エヒメさん！ 落ち着いてください！ そして先生は今すぐ土下座で謝ってください!!」

私を後ろから羽交い絞めにしてレポートを阻止するジェノスさんにお兄ちゃんは継り付き、ジェノスさんは私を説得しつつお兄ちゃんに謝れと助言する。フォローがないってことは、ジェノスさんもお兄ちゃんのやらかしや発言自体はどうよ？ って思ってることにちよつと安心したら、唐突に声を掛けられた。

「楽しそうね」

キングさんやバングさん、ボンブさんでもない女性の声だったので一瞬本気で怖かったし驚いたけど、すぐにその声は凄く聞き覚えのある声だと気付いた。

「フブキさん！ どうしたんですか!？」

薄暗い廊下からこちらを睨み付けながらフブキさんが立っていたので、流石にお兄ちゃんへの怒りは忘れないけど横に置いて私はフブキさんに駆け寄って尋ねる。

ノックやインターホンを鳴らさずに入って来る人じゃないので、そんなことをする余裕もない程の非常事態か何かかと思ったけど、その割にはフブキさんのテンションは低かった。

「一体、貴方達は何を大騒ぎしてるのよ。インターホン、何度鳴らしたと思ってるの？」

けど私の疑問は、じろりと睨み付けられながら言われた嫌味で晴れた。あ、鳴らしたけど私たちが騒がしすぎて、気付かなかっただけか。

その事を申し訳なく思ってた私は頭を下げるのに……、お兄ちゃんは「ん？ どうしたフブキ。何か用か？」とまったく悪びれず、むしろ「こんな時間になんだよ、めんどくせーな」という本音が隠しきれないテンションで話しかける。

この愚兄、本当に何も反省もしてないな!!

私の怒りゲージをさらに上げるお兄ちゃんだけど、私だけじゃなくてフブキさんもお兄ちゃんの発言にキレてた。

「サイタマ、やってくれたわね」って、お兄ちゃん、フブキさんに何したの？

フブキさんに睨み付けられながらも言われても、お兄ちゃんには心当たりがないらしく首を傾げている。

そんなお兄ちゃんにフブキさんは明らかに怒りのボルテージを上げながら、手に持っていたフブキさんには似合わないスーパーのビニール袋を突き出した。

「これ。忘れものよ」

その突き出されたものが何であるかに気付いて、お兄ちゃんはさっきまでの面倒くささが一転して、珍しく嬉しそうに目を輝かせた。

「！ おー、助かった。」

今日はエヒメが鍋にするって言ったからさー。鍋に白菜は欠かせないからな」

……白菜？ さつきお兄ちゃんが言った、ファミレスに忘れてき

た奴？

なんでそこに忘れた白菜を、フブキさんが届けに来てくれたの？

「他に私に言うべき事があるんじゃないの？」

「え？ 白菜ありがとう」

「違うでしょ！ お店の会計を私に押し付けて逃げたことをちゃんと詫びなさいよ！」

私の疑問はまたしても、私が尋ねる前に二人のやり取りで氷解する。

……おい、お兄ちゃん。私は「ファミレスで財布を忘れて、エヒメわたしにもってきてもらうのが恥ずかしくてどうしようか悩んでたら食い逃げが現れたから、それを追って店から出た」としか聞いてないんだけど？

フブキさんという登場人物は今、初耳なんですけど？

「ああ……忘れてた……。ご……ごめん……」

「しかもまた話の途中で言っちゃうし!!」

「……ん？ 何か話してたっけ？」

「ほらやっぱり聞いてなかった！ とにかく今回の件は一つ貸しだから!! 覚えときなさいよ!!」

おい、ちよつと待てお兄ちゃん。

「……フブキさん、『また』って何ですか？」

「え？ ああ、そういうえばあなた達には昼間会ってなかったわね」

フブキさんの発言に聞き捨てならない所があったから私が尋ねると、フブキさんは戸惑ってるというかややキョドリながら答えてくれた。

ほうほう、昼間、私がジェノスさんの部屋にいた時にもフブキさんは来てくれていたのね。それなのに、もてなしどころか話も聞かずに勝手にガロウ君を捜しに行つて、財布を失くして、普通に訳を話して頼めばよかったのに食い逃げを言い訳に押し付けて、拳句の果てに今の今までそれを忘れていたと……。

「……フブキさん。この辺で一番活動が活発な火山ってどこかわかりますっ。」

「え？」

「海じゃなくて火山になった!？」

フブキさんにお兄ちゃんのお昼代を返しながら、私は真顔で尋ねる。

あまりに突拍子のないことを言い出した所為でフブキさんが戸惑い、お兄ちゃんは私の発言の意図を理解したからか、青い顔で私に「ごめん! 兄ちゃんが本当に悪かった!!」って謝るけど、謝る相手は私じゃねえだろ。

私、お兄ちゃんの事は本当に大好きでお兄ちゃんのマイペースさを見習いたいと思ってるけど、ここまで他人に迷惑かけておきながらその何が悪いかわかってないことに関しては本気で軽蔑したよ、お兄ちゃん!

何度海に落としてもこれなら、もう火山にでも落とさないと本気でダメだ。落とそう。それがお兄ちゃんの為にもなる。

私が本気でそう思っ、お兄ちゃんにつかみかかりに行くけどバングさんとボンブさん、そして何がなんやらわかってないけど不穏そうな事だけは感じ取ったのかフブキさんにディフェンスされて、お兄ちゃんを掴めない。

って、あれ?

こういう時に一番お兄ちゃんを庇いそうなジェノスさんがいない。その事に気付いたタイミングで、ジェノスさんが玄関に繋がる廊下の扉をバタンと閉めた。

ん? あれ? キングさんもいない。バカらしすぎて帰った?

「どうした、ジェノス」

お兄ちゃんもジェノスさんが庇ってくれないことに気付いたのか、ジェノスさんに尋ねてみたらジェノスさんはいつも通りの真顔で簡潔に答えてくれた。

「怪人が来たようなので、キングに任せました」

「うーわ」

思わず、わたしら兄妹から同じ声が出た。

ねえ、ジェノスさん。もしかしてあなたはキングさんの真相知って



てわざとやってない？

さすがに知り合いが家の前で怪人によってミンチはもちろん、助かっても昼間のようにその……急に新しいズボンが欲しくなる状況になられたら嫌なので、お兄ちゃんに目配せで「キングさんを助けに行つて」と伝える。

お兄ちゃんは少しでも私の怒りを治めたかったからか、真顔で頷いて脱いでいたグローブを嵌め直して玄関に向かうけど、その前にキングさんがキングエンジン鳴らしながら普通に帰ってきた。

「……げ………玄関の前にいた………お客さんです」

「なっ……キング!? 招き入れてどうする!？」

なんか宇宙飛行士のスーツみたいなのが搭載された、人間なのかロボットなのかも判別つかない人らしきものをキングさんは招き入れて、普通にジェノスさんに突っ込みを入れられた。

うん、あなたの本当の戦闘能力からして逆らえないのはわかるけど、流星に招き入れないで欲しいな!

「チツッ!」

ジェノスさんとお兄ちゃんが私を庇って前に出て、ジェノスさんは応急手当だけをした状態なのに、構えて迎え撃とうとしてくれた。

けどキングさんが招き入れた人は、警戒どころか驚いた様子もなく手を上げて、ジェノスさんの行動を制止ながら言った。

「あー待って待て。また酷く壊れたな。それ以上無理に動いてはいかん」

その声を聞いたのはたったの一度だけど、聞き覚えがあった。

「ワシじゃよ。ジェノス」

顔を隠すように覆っていたマスクから色が消えて透明になり、その素顔が露わになってジェノスさんは驚きつつその名前を呼ぶ。

「クセーノ博士!!!」

そう、キングさんが招き入れたのは怪人でも怪しいロボットやサイボーグでもなく、ジェノスさんの恩人である博士さんだった。

「え? あ、お、おひさしぶりです」

「おお！ エヒメさんか！ ジェノスからよく話は聞いておるよ。

一度会ったきりじゃのに、覚えてくれてありがたいのお」

私が頭を下げて挨拶すると博士さんも私のことを覚えてくれたように、嬉しげに笑って応じてくれた。

私も、ジェノスさんの命をいつも繋いでくれるこの人に会えたことは嬉しいけど、でも何でこんな時間にこんな格好で来たんだろう？

私と同じ疑問をジェノスさんも懐いたから問うと、流星に治した直後に大破は初めてだったから、直接現地まで出向いて正確な状況を把握したかったらしい。

ああ、この人は本当にジェノスさんを大切にしてくれているんだな。

「まあ気にせんでいい！ 大事なのは勝つことよりも生き残る事じゃ」

ジェノスさんが治してもらってすぐにまたこんなにも酷く壊れた事と、博士さんに心配をかけた事をものすごく申し訳なさそうに謝るけど、博士さんはカラツと笑ってフォローしてくれた。

ジェノスさんが生きている事を本心から安堵して喜んでくれる笑顔が嬉しくて、私も自然と笑顔になる。

「して……オヌシをそこまで破壊した敵は？」

「いつも通り、サイタマ先生が倒しました」

「そうか……。オヌシが……。ジェノスの師匠、サイタマ君か。一度会ってみたかつ「土足やめてくんない？」」

「ああ！ こりや失礼！」

けど私の笑顔はお兄ちゃんの相変わらずなマイペースさですぐに強張った。

お兄ちゃん……。確かに土足は困るけど、今このタイミングで言うことなかったでしょ!!

やっぱりお兄ちゃんは一度、マグマの中に突き落とした方が良いと思っただけで睨み付けるけど、流星に初対面同然の博士さんの前でそれをやったらドン引きどころじゃないので、後回しにする。

助かったと思うなよ、お兄ちゃん。あくまで後回しにしてるだけだ

からな。

\* \* \*

「ワシはクセーノ。元々はしがない機械工学者で、訳あって今はジェノスの正義活動をサポートしている者じゃ」

全身をガツチガチに固めた武装だったから、脱ぐのに時間がかかったけど博士さんは宇宙服みたいなものを脱いで、博士という肩書に相応しい白衣姿になって、まずは自己紹介。

お兄ちゃんも、「俺はサイタマ。よろしく」と流石にここは普通にあいさつで応じてくれた。いや、普通じゃないか。

お兄ちゃん、いきなり呼び捨てはやめて。せめて「博士」を付けて。そんなナチユラル失礼すぎるお兄ちゃんだというのに、博士さんはその無礼さを気にした様子もなくやや目を細めて感慨深そうに独り言じみた言葉を零す。

「そうか……ジェノスにこんな立派な師匠が出来たとは……感慨深い  
の……」

ワシとジェノスが出会った頃はワシらに味方は誰もおらんかった  
……。

たった二人で闇の中を彷徨うように……巨悪に対抗できる戦力を  
手に入れる為の研究を重ねるかうかずの苦難を乗り越えながら「迎えに  
来てもらえて良かったな、ジェノス。じゃあ部屋も狭いんでこちらへ  
んで解散ってことで。またなクセーノ」

……これは文句つけない。気持ちには分かった。

正直、私は博士さんに対して、かなり癖が強くてマイペースすぎる  
お兄ちゃんも時々ついてゆけずに引くジェノスさんと長年付き合っ  
てられるなあとは実は前から思ってたけど、その理由を今理解した。  
似た者同士か、この人ら。

長い話が全然聞けないお兄ちゃんも本当にどうかと思うけど、正  
直、ジェノスさんも博士さんも20文字とは言わないから話はもう少  
し簡潔にまとめて欲しい。

「博士……先生には要点を20文字以内でお願いできれば……」

「ジェノスさん、話は簡潔にして欲しいけど、そこまでお兄ちゃんを甘

やかさなくていいですよ」

博士さんにジェノスさんが送るアドバイスに、私は思わず突っ込む。

そして、突っ込んでから気付く。私、「あなた達、話が長すぎる」って本音を隠しきれてない。

「まあ、そう言わずに……。おそろくここが例のサイタマ君の家だと思っって手土産があるんじゃない。

気に入ってもらえると良いんじゃないが」

幸か不幸か私の失礼だけど結構切実な本音は気付かれずに流され、博士さんは脱いだスーツの中から何かを探って取り出す。

「っっていうかジェノスさん、「先生用の強化パーツですか？」って……。お兄ちゃん、あれでも一応生身です。

昨日もお兄ちゃんがカツラ被った時、勘違いでジェノスさんの髪である強化繊維をお兄ちゃんに植え付けようとしてましたよね？

ジェノスさんはお兄ちゃんをどうしたいんだろう？

そんな風に私が遠い目でお兄ちゃんの行く末をちよつと心配していたら、博士さんがお土産を見つけたして差し出す。

「なかなか手に入らん高級プレミアム牛肉の極上ギフトセット。最高級品じゃ」

……。それだけなら、ものすごく申し訳ないけど受け取れた。

ちようど晩御飯は鍋だし、博士さんも食べて行ってくれたら申し訳なさがないぶ軽減したし。

「サイタマ君はスーパーの安売り牛肉によく反応しているとジェノスから聞いたもんで、これは普段ジェノスが世話になってるお礼として受け取ってくれんか」

だけど、博士さんのこの発言で私はもう受け取れない。

博士さんの様子からして嫌味とかじゃない、善意100%なのはわかってる。

だからこそ余計に恥ずかしい!! っっていうかジェノスさん! あなたも善意しかないんでしようけど、何を博士さんに話してるの!?

うちの家計事情を赤裸々に暴露されたも同然で、私はもう穴が合っ

たらどころか自主的に穴を掘って埋まりたい気分なのに、思わず赤くなつた顔を隠して座る込むレベルだったのに……それなのに本つつつ当！ このバカお兄ちゃんは!!

「クセーノ……ゴホンツ、いや、クセーノ博士」

わざとらしく咳ばらいをして、つけなかつた敬称を今更になつてつけてお兄ちゃんは言う。

「どうやらジェノスを見守る者同士、語り合えることが多くありそう  
だ。」

また是非、うちに遊びに来てください」

すっかり、高級プレミアム牛肉の極上ギフトセットを受け取って、今すぐに追い出そうとした人に明らかまた同じようなお土産を期待して歓迎する。

……あのさあ、お兄ちゃん。

「……サイタマ君」

「……サイタマ氏」

「……サイタマ」

「……先生」

「え？ 何お前ら。何で全員、俺に向かって合掌してるの？」

博士さんとお兄ちゃんだけ何もわかつておらず、皆さんのお兄ちゃんに対する憐れみの目と合掌に戸惑っている。

ああ、皆さん。そういう反応ってことは、もう私を止める気はない  
んですね。ありがとうございます。

「……すみません、ジェノスさん。申し訳ありませんが、すぐに戻りま  
すけど先にお鍋の準備をしておいてもらえますか？」

私は戸惑って皆さんを見渡すお兄ちゃんから牛肉のギフトセット  
をスツと奪ってジェノスさんに渡し、そしてお肉に目がくらんでまだ  
現状を理解してないお兄ちゃんの手を掴む。

「……あ」

うん、ようやくわかったようだね、お兄ちゃん。

でも、おせえよ。

……私の怒りが普段の私の能力の限界を凌駕したのか、私一人でも

何度か繰り返さないと行けない距離である海、それも海岸近くじゃなくて何とか海溝とかがありそうな海の真上まで、一足飛びでやってこれた。

お兄ちゃんはもちろん、私だって超能力者だけどタツマキさんやフブキさんと違って自分を浮かせることは出来ないから、そのまま私たちは重力のままに海面まで墜落する。

そして私は手を離れたお兄ちゃんの背後に今度はテレポートで出現して、その背中を重力も味方につけて思いっきり踏みつけて海面に叩きつける。

「本つつつ当！ 少しは恥っていうものを知れ！ 深海で頭冷やして反省しろバカお兄ちゃん!!」

「ちよっ!? 肉と白菜は残しておけよ!!」

「反！ 省！ しろ!!」

……もはや季節ごとの風物詩になっている私のマジギレ海落としに、お兄ちゃんは相変わらず何が悪かったのか全くわかってないのをこつちが嫌になるほど理解出来る叫びを残して、海に落ちて行った。

その叫びに私は言っても無駄だとわかってることを叫んで、海に落ちる前にテレポートで戻る。

……反省しないのは、当たり前か。

ジェノスさんに「お兄ちゃんを甘やかさないで」と言う資格は私にはない。

だって、結局火山口になんか突き落せず、無事戻って来るとわかり切ってる海に落としたもん。

言われるまでもなく、お肉と白菜は絶対に残しておくつもりだった私が、一番お兄ちゃんを甘やかしてる。

……全く。

早く帰って来てよ、お兄ちゃん。

どんなに軽蔑したって、私はお兄ちゃんの事を嫌いになれる訳がないんだから。

## 怪人未満の逆鱗

唐突に意識が覚醒する。

起き上がるとブサイクなガキが横に座り込んで、困惑してる顔で俺に言う。

「おじさん、大丈夫？」

ヒーローのハゲてる人が『やつちまった』って言って逃げて行ったよ」

ガキの言葉に更に俺は訳が分からず混乱する。

自分がぶつとばされて気を失っていたことはわかっているが、それがどんな奴だったか、そもそもどうして俺はぶつ飛ばされたのかが思い出せん。

「俺が負け……!?! どっ……どんなヒーローだった!?!」

「覚えてないの? というか、知り合いじゃないの? ハゲたヒーローが『なんか見覚えがあるような……』とか言ってたよ」

俺がパニくつたままガキに訊くと、ガキはさらに困惑した様子でそのハゲたヒーローの発言を教える。

ハゲたヒーロー………なんか俺も見覚えがあるような気がするぞ、そいつ。

そう思ったが、俺がその見覚えの心当たりを思い出す前に声を掛けられた。

「ガロウ君く。キミ、何やってんの」

ねつとりとしたその声音には聞き覚えがあった。こつちはすぐに心当たりを思い出せた。

「ずつと見てたよ。」

ガロウ君って、私達とは違うね」

その心当たりの通りの奴が現れる。

ぼさぼさの長い髪に全身を包帯で包み、包帯で固定してあるのかそれとも両手がそうなのかわかんねえが、手を下ろせば地面に引きずるほどの長さの刃物を持つ、あの傭兵部隊を切り刻むために欲しがり、仲間である怪人を真っ二つにした、ぶつ飛んだ奴だ。





「もしかして、その子が『ひいちゃん』かな？」

「んな訳ねーだろ!! テメエ! 今すぐひいちゃんに土下座して切腹しろ!!」

思わず素でキレて言い返した。

何だその勘違い!? どんだけひいちゃんに失礼な勘違いしてんだ  
テメエ!!

このガキとひいちゃんじゃ、何もかもが正反対すぎるわ!!

そこまで勢いでキレてから、俺はそんなことでキレている場合じゃないことに気付く。

……………おい。……………何でこいつ、「ひいちゃん」の事を知ってるんだ?  
?

「あゝ、ごつめくん。ずいぶん可愛い呼び方してるから、子供であるその子かと思っちゃった」

軽々しく白々しくそいつは言うから、本気でこのガキを「ひいちゃん」だと思ったのか、それともわかった上での挑発か判別がつかねえ。どちらにせよ、これ以上「ひいちゃん」のことを口に出すな。こいつに「ひいちゃん」を知られたら、ヤバいのは間違いない。

こいつは……………怪人の中でも下種中の下種だ。

「おい、止まれ! 話はそこで聞く!!」

「あらら……………、ごめんね。まだ泣かせるつもりじゃなかったのに……………。悲鳴を上げさせるのは後でじっくり……………のつもりだったのに……………。ごめんね……………」

いきなり襲い掛かりはしねえ。けど、甚振るようにゆつくりとした足取りで近づきながら、興奮したように上ずる声で言い続ける発言がこいつのヤバさとその方向性が嫌になるほどわかりやすく理解する。

あの傭兵達も欲しがってたことからして、獲物は子供じゃねーと絶対にダメって拘りがある訳でもねえだろ。

「あゝ……………可哀相に……………。後でちゃんと全身ズタズタにしてあげるからね……………。ごめんね……………」

……………間違いない、「ひいちゃん」はこいつが見逃す例外にはならな

い。  
むしろこのガキに対してあの傭兵達の時よりキモく興奮してやがるこいつは、強い癖により弱い奴を甚振ることを明らかに好んでやる。

キリサキングとかいう怪人は、俺を素通りしてガキに気色悪い視線を向け続けながら言う。

ただ怯えさせて甚振る為だけの、心にもない謝罪を告げる。

「少年……もう助からないけど、ごめんね〜」

その白々しさが、ねつとりした声音で軽薄すぎる謝罪が無性に気に入らなかった。

「下がってろ」

だから後ろのガキに指示を出した。

邪魔だから。こいつが気に入らないから。こいつが喜ぶことなんか、何一つだつてさせてやりたくなかったから。

ただそれだけだ。

守ったわけじゃない。助けた訳じゃない。

……守る為でも誰かを傷つける手段を取るのは間違ってる。

だから、こいつをぶちのめすことしか考えていない俺は、ヒーローなんかじゃない。

俺は、怪人なんだ。

\* \* \*

ガキに指示を出すのが、腰が完全に抜けてるのかガキは全く動かねえ。つていうか、くせえ！ 漏らしてやがるな、クソガキ!!

ガキのビビりっぷりにイライラしながらも、俺は拳を何度か握って開いて体の調子確かめる。

本調子には程遠いが、鬼サイボーグやジジイと対峙した時よりはだいぶマシだな。

「ギョロギョロちゃんからガロウ君の動向監視を命令されてたんだよね。」

本当に私たちの仲間に対応しいかどうか見極めろつてね」

俺がガキの前に出て臨戦態勢を取ったことで、キリサキングの興味

がガキから俺に移って、ニヤニヤ嗤いながら勝手に語る。

思った通り、俺はあの目玉がアジトで語っていた言葉通りではなく、むしろ全然信頼されてなかったらしい。

相手にしてない奴等からの信頼なんかキモイだけだからそれはいいが、「僕は怪人だ！」って演技してエクスタシー感じてるただの変態な人間扱いは心外すぎる。

だから俺は拳にテーピングしてあった包帯を外して、皮肉気に笑って言い返す。

「ハッ……偉そうに何言ってるやがる。こっちはちようど、お前らのぬるさに落胆してたとこだ」

「じゃ、その子供を殺してみて」

俺の反論に、キリサキングは意味不明な即答をしてきやがった。

「あ？ そりや意味がわからねーな」

正直な俺の感想を口にしても、キリサキングは俺の疑問に答えず更に意味不明で……胸糞が悪いことを言い出しやがる。

「その子じゃなくて『ひいちゃん』でもいいよ。っていうか、『ひいちゃん』を私にくれるのなら、その子を助けた事や微妙なヒーローに負けたことをギョロギョロちゃんに黙ってあげてもいいかな」

「……なおさら意味が分かんねーよ。つーか、……なんででめーが『ひいちゃん』を知ってるやがる？」

ニヤニヤ嗤いながら、考える余地以前に俺にとってはメリットでも何でもない交換条件を出してきやがったキリサキングに、頭に昇った血で沸騰しかけた思考を何とか「冷静になれ」と言い聞かせて、訊き返す。

ひいちゃんのことを話題に上げたくなかったが、ここで恍けても意味はねえ。むしろ何で知ってるのか、知ってるんだとしたらこいつらだけなのか、あの目玉もなのか。そしてどこまで、あの人の本名や俺も知らないあの人の現住所まで知ってるのかを俺は把握しておきたかった。

「あれえ？ 気付いてないの？ 自覚してなかったんだ？」

ガロウ君、寝てる時ずっとずううくと、何度も何度も『ひいちゃ

ん』って子と呼んでたつてギョロギョロちゃんが言ったよ」

もったいぶりながらも今度は俺の疑問に答えるが、その答えに俺は余計に苛立った。

クソツッ！ 俺の自業自得か!! あの目玉に知られてるのが痛てえ!!

が、こいつの言ってることが事実ならまだあの目玉も、せいぜい「ひいちゃん」って名前だけで本名どころか性別さえわかってるかどうかは怪しい。少なくとも、情報源が俺の寝言なら俺が知らないことはあいつらも知らない。

ひいちゃんは今すぐ、こいつらみたいなの……あのストーカーみたいな怪人の中でも下種中の下種の脅威に晒されることはない。

确实ではなくとも、その可能性が高いのなら少しは安心できた。

「怪人とは、人間であることを捨てた者。人の世から切り離された存在」

俺の内心の安堵は見透かされていたのか、さつきから黙っていた虫の怪人が苛立ったように怪人の定義を語り、俺にダメ出しする。

このガキを他のガキのいじめから助けた所、そして俺が「ひいちゃん」を忘れることも捨てることも出来てないこと、……俺が人間であることを捨てきれない甘さを指摘する。

ああ、癪だがそこは認めてやる。

ひいちゃんの事を何度も何度も捨てようとして、けれど全然捨てきれない俺は確かに甘い。怪人だと言い切れる存在になっちゃいねえ。

俺が中途半端であることなんか、俺自身が一番わかっている。

だが、俺が認めてやるのは俺に対しての評価だけだ。

「人間社会をぶっ壊して、支配する組織になるの。ガキなんかバンバン殺す」

両手の刃物を交差させて構えてキリサキングは言う。また視線を、興味を俺からガキに移して。

俺が怪人未満なのは認めてやる。

だが、お前らが正しい「怪人」だとは認めえよ。あいつら……デス

ガトリング達を本物の「ヒーロー」と認めなかったようにな。

何が「人間であることを捨てた者」だ。何が「人の世から切り離された存在」だ。

ガキなんて怪人じゃなくても殺せる。ヒーロー名乗ってるあいつらだって、わざとじゃなくても殺しかけてたんだ。こいつを殺すことが、俺が怪人である証明になる訳がない。

お前らは、ただ単に人間なら罪になることも怪人なら関係ねえって勘違いしてるだけだろ。怪人どもが暴れてるからって自棄を起こしてた人間たちと根本は一緒だ。

お前らは、我慢なんかしたくなくて好き勝手やりただけのくせに、その好き勝手やったツケを自分で払う気がなく、誰かに責任転嫁したいだけのカスだ。

そんなの、怪人じゃねえ。

お前らこそ、どんなに姿が変わっても人間を捨てきれてねえし、人の世から切り離れてもねえんだよ。

俺がこいつらをぶちのめすに十分すぎる理由が出来た。

だからこそ、本格的に後ろのガキが邪魔だ。

「さっきも言っただろうが。ガキは早く帰れ」

もう一度、ガキにさっさと逃げろというのがガキはやっぱり漏らしたまま座り込んで、泣き言をほごく。

足が震えて動けない？

「バカヤロウ!!」

俺は我慢しきれなくなった苛立ちを爆発させて叫ぶ。キリサキン達を無視して振り返って、いつまでも情けなく泣いて他力本願なガキを怒鳴りつける。

「立てないからって誰かが手を伸ばしてくれると思うんじゃないやねえ!

誰も助けに来ねえ!!」

誰かが助けてくれるなんて思うな!!

この世にはたった一人しかいないとしても、それでも……それでも確かに「本物」は……ヒーローはいる。運が良けりゃ、助けてもらえるのは確かだよ!!

でも……助けてもらえても、……救われても、……自分が弱いままなら意味ねえんだよ!!

あの時、俺なんかに手を差し伸べてくれたから……

俺がああ小さな手に縋りついて、取ってしまったから……

俺なんかのヒーローにあの人は……ひいちゃんはなってしまったから、あんなことになった!

ひいちゃんは泣いて、けど俺の所為で泣いて悲しんで助けを求めることさえも出来なかった!

「こんなもん、捨てちまえ!!」

ガキが継るように持つている「ヒーロー名鑑」が癪に障る。

「助けに来てくれる誰か」という期待をヒーローという形で植え付ける物をブン投げて、俺は自分の犯した最大の失敗から学んだことをガキに伝えた。

「お前のことは、お前が守るんだよ!」

こういう時こそ、自分が強くなるしかねーんだ!!」

誰かに助けてもらったら、自分は救われても今度はその助けてくれた人が狙われる。

弱いままなら、助けてくれた人を助けられない。助けてくれた人に守られて、助けてもらえばなしで何も返せない。

自分が弱いツケを、その人に肩代わりさせっぱなしになるんだ。

だから、助けなんか求めるべきじゃない。

自分一人でなんとかできるように、自分のことは自分で守れるくらいに強くならなくちゃいけないんだよ。

「立て!!」

俺は中途半端なままで、あの人のようになれないから手を伸ばさずに突き放して、命令する。

ガキは、立ち上がった。

勢いよく、ガタガタ震え続けていた足どころか背筋も真っ直ぐに伸ばして、直陸不動の視線で俺と向き合った。

……なんだ。思ったより強いじゃねえか。

少なくとも、昔の俺よりはずっと。

その事に少しだけ、羨ましいような悔しいような二つの感情が入り混じって、混ざったそれらは……あの人に向けるものは全く違うはずなのに同じ名前に……憧憬になった。

昔の俺より強いと思ったから、認めたから、だからせめて最後に呼んでやるよ。

もうガキじゃないことを、認めてやる。

「タレオ!!!」

名前を呼ぶと同時に、キリサキングが背後から襲い掛かる。

俺に切りかかるのではなく、俺を無視してガキに向かって刃先を突き刺しに来た。

それを受け止め、そのままこの原理で奴を持つあげて浮かせ、無防備になった腹目がけて足を垂直に振り上げて蹴り上げた。

そのまま土手に向かって吹っ飛ばすが、キリサキングは土手の地面に腕の刃物を突き刺してそれ以上吹っ飛ばのを防ぐ。

見た目は腕の刃物以外は一応ほぼ人間のはずだが、地面に腕の刃物を指した反動で体がぐるぐる何度か回転して、腕は関節や骨を無視して雑巾絞ったみたいになじれたっていうのに、それを逆方向に回転させて元に戻すこいつは完全に人じゃねえな。

「走れ!!」

思った以上に吹っ飛ばせなかったが、タレオから距離を取らせることには成功した。

あいつも今度こそは俺の指示通り、走って逃げ出せた。

それを虫の怪人は初めから興味ないからか追いかけて、キリサキングも土手の上からちらりと視線をよこすだけでさすがにそのまま追いはしなかった。

タレオから血走った右目の視線を俺に戻して、奴はまた刃物を交差させて研ぐようなシヨリシヨリという音を立てて言う。

「もうダメだ。こっち側を敵に回したね」

「ヒーロー狩りと言いながら一人も殺していないという、思った通りの軟弱者だったな!!」

キリサキングは上辺だけ残念そうに、虫は俺に期待していた訳でも

ないくせに失望して勝手にキレて俺を嘲る。

敵に回すも何も、俺はお前らの仲間になる気はねえって初めから言っただろ。

俺は誰が何と言おうが怪人側、お前ら側だ。けどそれがお前らと仲間だって保証にはならねーよ。同じ側にいるだけで仲間だって言うんなら、人間同士で争いが起こる訳ねーだろ。

俺は確かにまだ人間を辞め切れていねえ半端者だ。

それでも、俺は怪人側にしがみつく。

人間側としてではなく、怪人側として俺はこいつらと対峙して敵対する。

「お前らの態度が気に入らねんだよ」

怪人未満の半端者だからこそ、妥協はしねえ。

お前らのように、自分のツケを他人に負わせるようなことだけはしてたまるか。

\* \* \*

あまりにうるさい音で目が覚めた。それが自分の心臓の音だとは気づかなかった。

そんな事に気付ける余裕もない激痛が全身を襲う。むしろなんでこんな激痛が走ってるっていうのに、俺は今まで寝ていたのかがわからない。

わからないから、考える。思い出す。

俺が寝ていた理由、この激痛の原因を無理やり体を起き上がらせながら記憶を掘り返す。

何とか立ち上がり、もう日が暮れ切った空を仰ぎ見てやっと思い出す。

ああ、そうだ。俺は怪人に負けたんだった。

間違いなく強かったが、ジジイに比べたら大したことがなかったから行けると思ったんだが……くそっ！

……にしても、何で俺は生きてるんだ？



キリサキングとかいう変態もあの虫の怪人も、息の根が完全に止まっているかどうかを確認する程慎重そうな奴は見えなかったが、虫はまだしもあの変態はもう死んでるとわかっててもミンチになるまで興奮しながら切り刻みかねない奴だったっていうのに。

そこを疑問に思ったことで、思い出す。

いけると思ったのに、俺が負けた訳。俺がキリサキングに、無防備に背中を向けてしまった理由を思い出した。

『おじさん……おじつ……きゃつ……ぐめつ……なさ……』

俺の一喝で泣き止んでたはずなのに、またぐちやぐちやにないてガキは……タレオは言った。

あの子のように、ひいちゃんのように謝っていた。

謝る必要なんかない。悪いのはあいつじゃない。あいつの足が遅かったとか、さつさと逃げなかったことを責めてはいけない。

タレオを責めて、タレオを人質にしたあのヘドロみてーなクラゲを正当化することなんか、俺にはできなかった。

『いや……そいつには個人的な恨みがあつてね……』

嫌がらせをするチャンスを探ってたんだ〜』

金属バットの時にいた怪人だった。

金属バットがぶつ倒れて、一般人の、10歳くらいの金属バットの妹だけが無防備にその場に残されていた時、あの妹を攫おうとしていた怪人が、その邪魔をしたことを根に持ってやらかした事だった。

……俺は本当に、何も変わってないことを思い知らされた。

悪くない。何も悪くない相手がいつも、俺の所為で傷つく。俺が中途半端で弱い所為で、いつだつて俺は――

「……はっー」

あまりに情けなさ過ぎて、逆に自分の事なのに笑えてきた。

そこでここまで情けないと、開き直る。

俺が負けたのは当たり前。俺はチョーシこいて自惚れていたけど、まだまだ弱い半端者だ。

その事がわかった上で生き残ただけでも儲けもの。そう思って、初心に帰ればいい。

そうだ。あいつらが俺のことを死んだと思ってるんなら、怪人協会からの監視も外れたってことだ。そんなもってヒーロー達は怪人協会の対処に忙しいってことは、俺はテキトーな場所に潜伏して、回復に専念できるってことだ。

そこまで考えて、ふと気づく。

……あの不細工なガキはどうなった？ 解放されたのか？

辺りを見渡してみても、ガキの死体はない。

だけど……あの変態っぷりからしてそれは別にいい情報じゃねえ。俺への嫌がらせ、俺をぶつ殺すチャンスを作る為の人質という役割を終えたからって、あいつを解放する奴らだとは思えねえ。

……そこまで考えて、「それがどうした」と自分で思う。

どうでもいいだろ。俺がこんな目に遭った元凶のガキなんて。

ガキやヒーローを殺すことが怪人の条件だとは思わねーけど、ガキの心配してやる理由こそ俺にはない。

そんな事より、とりあえず止血を……ってもう、止まってるか。

服がズタズタに傷口に張り付いて剥がれねえ。ガチガチに癒着してやがるな。

もうどうやって脱げばいいのかわかんねーことになってるが、まあ、今はこの方が好都合か。

「さあて……」

首を鳴らし、拳を固めて俺は向かう。

乙市へ、怪人協会のアジトに。

……「助けて」なんか言われてない。助けるつもりなんかない。

ただ、俺より弱かったくせに俺を殺したと勘違いしているあいつらが気に食わないだけだ。あいつらが喜ぶようなことは何一つしたくないだけだ。

怪人協会の邪魔をしたいだけだ。

それぐらい、俺は怒ってる。

## 今回はわりと真面目にS級会議

童帝が自作の人工衛星や探索機で見つけた怪人協会のアジトや、おおよその怪人の数を告げる。

確認できただけでも、怪人の数は500以上。うんざりする数だが、それでもこのメンバーにサポートも加えれば、まあ問題はないだろう。

童帝もそう言つて、数の話は終わらせて質の話に移る。

机上に先日出現したムカデ長老のグラフィックを投影させ、怪人協会にはこいつレベル……つまりはレベル竜がまだ何体かいることを想定して、俺達にその対策をするように忠告した。

しかし、想定や対策つて言つても、そのレベル竜がどういう怪人かわかつてねーとどうしようもねえな。

鬼レベルを単独で倒せるのがS級の条件だが、どんな鬼レベルでも倒せるとは限らねえ。

現に俺は、泥仕合で粘り勝ちするしか能がない。だから装甲が固すぎて手持ちの武器では火力が足りない相手なら、足止めの時間稼ぎぐらいしか出来ねえし、スピード特化ならそれこそ虎レベルでも下手すれば俺は永遠に甚振られるかどつと逃げられるという、無様な結果しか出せない可能性が高い。

だからこそ、慎重に事を進めるべきだ。相性次第で虎でもヤバいのなら、逆に言えば竜相手でも単独で倒せるかもしれないのだから。

……もう既に駆動騎士が犠牲となつている。奴はサイボーグだから、最悪の事態にはまだ陥つていない可能性が生身の奴よりあるとはいえ、その可能性に樂觀はもちろんできやしねえ。

これ以上犠牲を生まずに人質を救出して、そして確実に怪人協会という組織を壊滅しなくちゃいけないんだよ、俺達は。

だから、頼むからお前らマジで、少しは協調性を持ってくれ。

事前に敵戦力の情報が手に入らねえつてことは、潜入最中での情報交換がマジで命綱なんだよ。ちゃんと報連相をしつかりとつて、連携してくれ。

特に、タツマキ。

確かにお前がやられるとは誰も思ってたねえよ。

けどお前、報連相や連携どころか面倒になって怪人協会のアジトを地盤ごとひっくり返しそうで嫌なんだよ。

「奴らは出会い頭に容赦なく攻撃を仕掛けてくる。無論こちらも、例え怪人が対話を申し入れてこようが取り合う必要はない」

フラツシュが淡々と俺達全員に、「甘さを捨てる。油断するな」と告げて話をさっさと進める、もしくは切り上げようとしたが、その発言を童帝は飽を食べながら部分的に却下……いや、「例外」がいることを告げる。

「あ、待ってくださいフラツシュさん。」

それは当然の前提ですし、皆さんに強制する資格とか権利なんてないんですが、ひとまず全員この情報だけは頭に入れてください。

おそらく怪人協会アジトに、『人間怪人ガロウ』がいます。そして多分、満身創痍です。

けど、もしどつかで寝かされているのならそのまま。アジトで鉢合わせしたら襲い掛かってくるかもしれないませんが、戦う前にエヒメおねえさんの名前を出して協力を願い出してみてくださいませんか？ 口先では拒否するでしょうが、なんだかんだ理由付けて結果的に応じてくれる可能性が高いんですよ。

なんかガロウ、エヒメおねえさんのこと大好きっぽいので」

『……………はあ？』

童帝の発言に、協調性のない奴らが珍しくほぼ全員同じ反応をした。

だろうな。訳わかんねーよ。

おい、エヒメっていう嬢ちゃん。お前の人間関係、どうなってんだ？

\* \* \*

「……………は？ はあ!! ちょっと！ それどういうことよ!! またあの危機感のないバカは、ストーリーカーに付きまとわれてる訳!」

童帝の爆弾発言に真っ先に反応したのは、S級の中でも鬼サイボー

グと双璧をなす、あの嬢ちゃんにベタ惚れ筆頭過激派筆頭のタツマキだ。

いつものようにキャンキャン喚きながらも、嬢ちゃんは無事なのかどうかを童帝に尋ね、童帝はその甲高い声をうるさそうに片耳を押さえながら答えてやる。

「ストーリーじゃないですよ。小学生の頃に知り合った友達らしいです。っていうか、むしろ好きだからこそガロウはおねえさんを避けるって感じですね」

「……それがどうした？」

童帝の答えにフラツシユは苛立ったような声で、童帝の発言全てを切り捨てる。

「バカか、お前らは。こんな時にまで人質の子供より、自分が気に入っている相手に好かれることが重要なのか？」

そうなら勝手に好きにやればいいが、こちらの足を引っ張る真似をするようなら、今すぐに俺が始末してやる」

苛立ちを露わにして剣呑なことを言うが、まああの言い草じゃそう言われても当然だな。

タツマキはケンカ腰に「エヒメを優先してるんじゃないくて、あの危機感のなさを怒ってるのよ!!」と喚くが、童帝はそう言われることをわかっていたからか、タツマキよりはるかに落ち着いて大人な対応を取る。

「まさか。おねえさんの事は大好きですけど、好きだからこそおねえさんを悲しませる『悪』は絶対に許しませんし、甘い対応なんか取りませんよ」

その返答で少し氣勢がそがれてフラツシユは怪訝そうな顔をする。他の奴らもきよとんとした顔で続きを待っていたので、飴を齧っている童帝に代わって俺が引き継いであの発言の意図を説明した。

「別に童帝はエヒメっていう嬢ちゃんの友達だから、ガロウを庇ってる訳じゃねえよ。」

どうも、奴の自称怪人やヒーロー狩りって犯行には裏事情があるっぽい、上手く説得出来たらこっちの味方に付きそうだからこそ、問答

無用でぶっ飛ばそうとすんなって話だ」

「何だそりゃ？　つていうか、何でお前がんなこと知ってるんだゾンビマン」

俺が代わりに答えた事でその内容と二重に困惑してアトミック侍が尋ね、その答えは齧った飴を飲み込んだ童帝が答えた。

「ガロウの裏事情に関しての情報収集を、僕がゾンビマンさんに頼んだからですよ。」

僕がガロウとおねえさんの関係、おねえさん視点でのガロウの人物像を知った時、ゾンビマンさんは協会本部に向かっている最中だったので、その途中でヒーロー協会系列の病院に寄ってもらいました」

ガロウと嬢ちゃんの関連性に呆気を取られていたのはほぼ全員であって、例外はいる。

その例外は俺だ。俺は童帝の言う通り、事前に知らされてその情報収集をしていたから、呆気にとられるのも事前に済ませていた。

「童帝きゅん……。なんだか聞けば聞くほど訳が分からなくなってくるから、一から教えてくれないか？　とりあえず、何でそんな情報をどこで得たかから」

プリズナーがその事前に聞かされた俺のように、困惑しきった様子で事の経緯の説明を一から求めた。他の連中も頷き、タツマキが「ちよつと何で私じゃなくてそいつなのよ！　私が頼りにならないって言うの!？」と喚いて机をバンバン叩くのを見無視して、童帝は要望通り飴を舐めながら語り始める。

「事の起ころいは怪人協会のアジトがZ市と聞いて、そこにおねえさんと鬼サイボーグさんが住んでるって情報を思い出したから、昨日の昼間に連絡を取ったんです。で、残念ながらアジトの情報は手に入りませんでした。ガロウと交戦して、彼が怪人協会に攫われるのを目の当たりにした鬼サイボーグさんから向こう側の事情を教えてくださいました。」

……だからタツマキちゃん。アジトに突入しても、Z市の地盤ごとひっくり返してアジト壊滅させないでね。おねえさんに野宿なんてさせたくないでしょ?」

童帝の答えにまたしても俺が事前に済ませた感想、「あの嬢ちゃん  
はなんつー所に住んでんだよ!？」という驚愕やら呆れやらで反応に  
困ってる中、童帝はタツマキに釘をぶっ刺した。

タツマキは「す、するわけないでしょ!!」と言い張るが、目は思いつ  
きり泳いでる。やっぱりする気だったな。ありがとう嬢ちゃん。Z  
市に住んでて。でも、引越せ。

「で、どうもガロウは自称やヒーロー狩りという犯行には合わない、む  
しろお人好しと言っていい人格であることを教えてもらったんです。  
罪はあつても悪ではないというか……」

「……小学生の頃の知り合いの人物像など、信用できるものじゃない  
だろうが」

またしても童帝の答えにフラツシユは苛立ったような声、「くだら  
ない」という副音声をはつきり出して切り捨てる。

今度は少し癩に障ったのか、童帝も「話は最後まで聞け」という副  
音声を露わにむくれて反論。

「おねえさんは一昨日、ガロウ本人と再会してるんですよ。その上で  
の評価ですし、そもそも『罪はあつても悪ではない』って評価は、お  
ねえさんじゃなくて交戦した鬼サイボーグさんのものです。

あの鬼サイボーグさんが！ あの！ おねえさん好きすぎて、自分  
と実のお兄さん以外の人間を排除しかねない鬼サイボーグさんが！  
おねえさんに好意を寄せる男を庇うようなこと言っただけですよ!!  
説得力ありすぎでしょ!!」

『確かに』

童帝の熱弁に、フラツシユはやや圧倒されつつ素で返答。つていう  
かタツマキやアトミック侍、プリズナーは深々と頷き、俺と同じくあ  
の嬢ちゃんとはほぼ面識のないクロビカリも目を丸くして納得し、豚  
神は一瞬ピザを喰うのをやめて、全員と同じく同意の言葉を発してい  
た。

……ここまで自分の恋心やら嫉妬心やらが周知ってどうなんだ、鬼  
サイボーグ。俺も、ガロウが悪人じゃないかもしれないと思えた理由  
はそこだけどき。

「……で、その悪人ではない根拠を少しでもはつきりさせるために俺は病院に寄ったんだよ。そこに、鬼サイボーグの前に交戦してガロウにやられたヒーロー達が入院してたからな」

妙な説得力の材料になってしまった鬼サイボーグに呆れやら同情心やらを懐きつつ、またしても俺が説明を引き継ぐ。

「ガロウはどうも、そのヒーロー達と戦っている時、子供を庇っていたらしい。」

アジトにしていたプレハブ小屋に子供が入り込んで、それに気づいていないヒーロー達がプレハブ小屋ごと攻撃しようとしていたからこそ、奴は人数や自分の状態での不利さを理解していても、逃げずに応戦したと鬼サイボーグは言っていたらしいから、その真偽を確かめてきた。

……ガロウはデスガトリングに、『小屋に子供がいるから撃つな』と言ったらしい。が、そんなの嘘に決まってるってデスガトリングは譲らなかつたな。

だが、ステインガーとスマイルマン、そしてメガネっていうB級ヒーローは証言してくれたぜ。

……奴は最初から、『小屋を撃たないでくれ』と自分の身ではなく、小屋を庇っていたこと。包囲直前に小屋を見張っていた鎖ガマは、トイレを我慢できず15分ほど小屋から離れていたこと。

そして……ヒーロー達が小屋の前に集まってきた時、その小屋の様子を窺っていた子供が3人ほどいたことを話してくれた」

子供がいたこと、その子を庇っていたことについての確証は得られなかつた。

だが、奴の発言の信憑性は決して保身の為の虚言だと決めつけて、切り捨てていいものではないと思わせる程に高まった。

「ちよつと待て！ 小屋の外に子供がいたのなら、何でそいつらは何も言わなかつたんだ!？」

俺の答えに、アトミック侍は立ち上がって不可解な部分を追求する。

おそらく、本当にわかつてなかつた訳ではないだろう。ただこいつ



の性格上、自分なら絶対にしない行動であり、そしてそんなことをする人間、子供がいることを信じたくなかったんだろうな。

その性善説そのものな期待が気に入らなかつたのか、いつの間にか静かになっていたタツマキが盛大に舌を打ってから、吐き捨てるように言い放つ。

「……見捨てたんでしょ！ そのガキどもと小屋に残った子供は対等な友達なんかじゃなくて、いじめっ子といじめられっ子で、小屋にその子一人送り込むのもいじめの一環！ 自分たちのしたことがヒーローにばれるのが怖くて黙って逃げたってことよ!!」

……超能力、それも他に類を見ないほどに強力、まさに最強という言葉がふさわしい使い手だからこそ、他人に迫害はされずとも畏怖の目で見られ、疎外されてきたんだろう。

本人は絶対に認めないだろうが、明らかにガロウが庇ったであろう子供に感情移入してタツマキは、その子供を見捨てたガキどもと、最も助けなくてはいけない子供に気付けなかつたヒーロー達に憤慨していた。

弱者が弱者であることを責めない、力ある者の失態に義憤するところは、本当に立派なヒーローだよ。お前は。

「……そうでしょうね。おねえさん曰く、ガロウは小学生の頃はいじめられっ子で、おねえさん大好きなものいじめから助けてもらったからだそうですから、いじめられっ子を庇ったのは凄く自然です」

タツマキの言葉に、童帝も痛々しいものを見るような目で同意を示して、更にガロウが子供を庇ったという話に説得力を持つ情報を語る。

……しんみりしてる所悪いが、たぶんガロウにとって黒歴史ないじめられっ子という過去をあんまり晒してやるなよ。本人知ったら、ヒーロー狩りなんか関係なく俺らを殺しにかかるか、憤死するんじゃない？

いや、それはもう鬼サイボーグやタツマキレベルである嬢ちゃんが好きってことを暴露されてる時点で確定か。

すまん、ガロウ。耐えてくれ。

\*\*\*

「……しかし、ガロウが悪人ではないのなら奴は何で怪人だと自称して、ヒーロー狩りなんかしてるんだ？」

アトミック侍が子供の残酷さに打ちひしがれ、タツマキが酷く苛立っている空気に心地の悪さを感じたからか、クロビカリは話の方向を若干修正する。

「……その子を庇ったのは昔の自分を重ねただけで、後は全部言動通りの本心という可能性はありますが、僕は全てガロウの本心でも本意でもない、むしろガロウこそ怪人協会の被害者かもしれないと思つてます」

クロビカリの問いに答えながら、童帝が乱暴に飴を齧って砕く。

「……どういう意味よ？」とまだ苛立ったままのタツマキが、本気で苛立っているからこそいつもと違って静かに尋ねると、童帝も静かに、けれど灼熱の憤怒をその眼の奥に灯しながら自分が推測したガロウの裏事情を語った。

「怪人協会にエヒメおねえさんを人質に取られている。だからガロウは、おねえさんを守るために怪人協会の手足となって、協会の戦力を削ぐヒーロー狩りを行っている。」

……そう考えたら、彼の本質と実際に行っている犯行のギャップに説明がつくと思いませんか？」

その推測に、タツマキが目を剥いて椅子を倒して立ち上がり叫んだ。

「!? どういうことなの!? 童帝！ あんた、エヒメが攫われたつていうのに、まだ呑気に私たちに待機しろつて言う気!？」

「落ち着いて、タツマキちゃん。おねえさんは怪人協会に捕まってる訳じゃないことは確定してる。昨日の鬼サイボーグさんとの電話で、直接は話してないけど普通に声は聞いたから」

全身から緑の燐光を放って髪を逆立てたマジグレ寸前となって童帝を問い詰めるが、童帝はそんなタツマキの怒気に怖気づくどころかそれをうつつとうしいとしか思わない程、こいつもこいつで実は余裕がない。

だが、自分の推測が正しければ、頭に血が上って短絡的に動けば最悪の事態にしかならないことをよくわかつているからこそ、その怒りを食ってる飴にぶつけて、冷静に説明を続ける。

「? どういうことだ? 攫われたわけじゃねえ、鬼サイボーグと一緒にいてどうやって嬢ちゃんが人質になるんだよ? ガロウが怪人協会に騙されてるってことか?」

「……協会本部に侵入してきたのは、寄生虫タイプの怪人だったんだよね? ……それと同じようなのに寄生されてるかもしれないってことじゃない? Z市在住ならそれこそ、チャンスはいくらでもある」

けれどやっぱり冷静になり切れていない所為か、説明の順序がおかしくてアトミック侍が当然の疑問を抱く。

その疑問に答えたのは、悪いが意外なことに豚神だった。食ってばっかりだと思っていたが、意外と話はちゃんと聞いて考えてもいるのか。豚とか思ってた悪かった。

「なんてことだ……。エヒメちゃんも無自覚の間に、体内に爆弾が仕掛けられてるような状態だなんて……」

「……シルバーファングと鬼サイボーグを招集しなかったのか、奴らもガロウと同じ状況かもしれないということか?」

意外なことに嬢ちゃんと同じくらいらしいプリズナーが本気で嘆いている横で、フラッシュもやや顔を険しくして、ここにはないS級二人について尋ねる。

「ええ。ガロウと交戦して、怪人協会に彼が回収された際、同じように脅された可能性があります。そのような形で人質に取られたのなら、あのお二人は逆らえないでしょう。」

「……ですが、唯々諾々と従うお二人でもないことは皆さんもわかっているでしょう?」

フラッシュの問いに答え、口の中の飴を噛み砕きながら童帝は笑った。

とても10歳の子供には見えない、軽率に自分たちの逆鱗に触れた怪人協会共を嘲るように、肉食獣のような目で凄絶に笑って宣戦布告

するように、こいつは自分が立てた計画を語る。

「表向きは、怪人出現ホットスポットに住む新人の鬼サイボーグさんが信用ならない、シルバーフアングさんは一番弟子に情けを掛けるかもしれないからということ、今回の作戦から外してます。ですが、それはヒーロー協会に対しての建前。」

実際は僕等とは別に、怪人協会に潜入してもらいます。そしてその理由は、アマイマスクさんが絶対に反対するから。こう言っておけば、僕らと別行動でアジトに潜入しても、怪人協会に言い訳が立ちますし、彼らも不本意なスパイ行為などしなくて済みます」

「待て。何故、アマイマスクが反対するんだ？ 確かに表向きの理由で十分あいつは文句を付けそうだが……」

「！ 童帝！ あんたまさか、エヒメ本人も巻き込む気!!」

童帝の計画にフラッシュが怪訝そうに、サポートに甘んじないであろうアマイマスクを持ち出したことを疑問に思ったが、察したタツマキがまた立ち上がって叫ぶ。

「はい。というか、おねえさんの性格と能力上、大人しくしてろっていうのは無理ですよ。昨日のうちにテレポートで探し回って怪人協会のアジトにたどり着いてないのが幸運なくらい。」

それなら、初めから連れて行って側に置いておいた方が全員にとって、あらゆる意味で安心ですしメリットもあるでしょう?」

童帝は悪びれずしれっと答えて、質問で返しつつタツマキどころか他の連中の反対意見も封殺。

そうだよな。あの嬢ちゃん、制約は多いらしいがコントロールが完璧なテレポーターってだけでこの任務に限らず、サポート役にもってこいなんだよ。

しかもそれだけじゃなくて、あの嬢ちゃんがいたらタツマキのやりすぎとかそういう暴走の心配をしなくていい。たぶんこいつは俺らの意見や頼みは無視しても、嬢ちゃんの言葉なら素直じゃないだろうが聞くし、嬢ちゃんを巻き込むような無茶はしねえ。

……もうそのメリットだけで、戦力ない女の子を連れて行くデメリットを相殺してるってどうよ？ つーか下手したら、テレポートい

らねえぞ。タツマキの手綱握ってくれてるのなら、それで十分すぎる。

俺と同じことを思っているのか、他の連中も横目でタツマキを見ながら納得の苦笑いを浮かべていた。

タツマキ本人はブツブツと民間人に頼る事態に文句をつけていたが、俺達の視線に気付いていないわ、なんか鼻歌まじりに足を子供のようにぶらぶらさせているわと、明らかに機嫌が良くなっている。

たぶん嬢ちゃんを巻き込みたくないのは本音だが、それはそれで嬢ちゃんに自分の活躍を見てもらえるかもしれないのは嬉しいんだろう。

実の妹にはやたらと過保護なのに、嬢ちゃんに対しては扱いが雑……ってわけでもないよな。嬢ちゃんが人質って話でマジギレしてたし。

なんつーか、好意の示し方が真逆なのか。こいつ、愛情表現が違うだけで、実の妹と同じくらいに嬢ちゃんを溺愛してるよな。

っていうか、他の連中が嬢ちゃんを気に入ってる理由はなんとなくわかるが、タツマキだけは全然わからん。

いや、アマイマスクに切った啖呵は又聞きで聞いているから、気に入ること自体は疑問でも何でもない。だが、鬼サイボーグと双壁レベルで気に入るほどか？

「おねえさんの作戦参加に異議はないようなので、具体的に別行動組の作戦内容を説明させてもらいますよ」

俺はぼんやりとそんなことを考えていたら、童帝が話を進めだしたので、俺も思考をそちらに戻した。

「別行動組のメンバーは、おねえさんに鬼サイボーグさん、シルバーファンクさんにそのお兄さんのボンブさん、そしておねえさんの実のお兄さんであるハゲマントさんですが、先ほど話した協会への建前の為に、こちらから連絡はほとんど取れません。」

なので中継役をキングさんに担ってもらいます」

「キングさんに？」

「あいつがそんな役割やるか？ 現に今ここに来てねえじゃねえか」  
最初のメンバーは普通に妥当だが、中継役として拳がった名にクロビカリがオウム返しして、アトミック侍が少し苛立ったように訊き返す。

俺もキングの戦闘力に関しては何なら不安はないが、奴は怪人退治や民衆の保護よりも自分の強さの追及を優先している節があるから、こういう情が絡んだ事情に向いているとは思えなかった。

「遅刻理由はわかりませんが、連携は取れているはずです。

それにキングさんとハゲマントさん、かなり仲の良い友人関係らしいので問題ないでしょう。現に僕が鬼サイボーグさんに連絡した時、お隣のハゲマントさんの家に訪れていたそうですし。

むしろ、そういう関係だからキングさんですらおねえさんを人質に取られてどうしようもなくなくなる可能性があるのです、中継役ですが基本的にキングさんもおねえさん側で行動してもらいます」

だが俺達の不安は杞憂だった。つーか、キングと友人ってすげーなハゲマント。全然、顔覚えてないけど。

……ん？ ハゲマントってひでえヒーローネームだが、そんな名前を付けられるってことはハゲなんだよな？

……ジーナスの奴、進化の家を壊滅させた「リミッターが外れてた奴」はハゲてたとかほざいてたよな？

………キングの友人、家が怪人出現ホットスポット、そしてハゲ。  
いや……まさかな。

「不本意でスパイにならざるを得ない、その可能性が高い方は別行動班にして、アジトに僕らとは逆方面から侵入してもらいます。

キングさんは負担が大きいです、彼は鬼サイボーグさんたちとは違って初めから外す言い訳が用意できないので、僕たちと一緒にZ市に入ってから単独でおねえさんの家にまで行って、合流してもらう予定です。単独行動自体はいつもの事なので、Z市まで一緒なら協会も疑わないでしょう。

そしてキングさんの通信機は他の皆さんのとは違って、キングさんからの通信は全員に届きますが、キングさんに通信できるのは僕だけ

です。これは向こうも望んでいない情報漏洩を防ぐため。なので、危機的状況に陥っても、キングさんに助けを求めることは不可能だとご随意してください。

……本当はもう最初からキング流気功術、永世理力豪雪針えいせいりりよくごうせつしんでおねえさんに寄生しているであろう怪人を退治してしまつた方が話は早いでしょうが、向こうに危機感を与えて警戒されるより、むしろこの状況をこちらが利用し返して、スパイに使っていると思い込んでいる鬼サイボーグさんたちに接触して来た幹部たちを返り討ちという方針にしました」

ついまた俺個人のことに思考が持っていかれていた間に話が進んでいた。

なんか初耳なキングの技が聞こえて気になったが、まあ童帝が信頼しているくらいなのだから、寄生虫みたいな怪人に特攻な技なんだろう。

協会の最高戦力であるキングを嬢ちゃんのボディガードに使うような作戦にも聞こえるので、フラッシュがまた不服そうだったが、むしろ嬢ちゃんを囷にしてキングに厄介な幹部を当てるという方針には納得したのか、結局何も言わなかった。

逆にタツマキが嬢ちゃんを囷に使うことに文句を付けようとしたが、寄生虫を殺せるであろうキングの技が保険になつたのと、童帝の「こういう使い方をしないと、おねえさんはむしろ責任を感じすぎて自殺しかねないよ?」という言葉に、悔しげだが納得して口を噤む。

アマイマスクに切った啖呵の内容で知ってたが、繊細な小心者なのか覚悟が決まりすぎて度胸もありすぎるのかよくわかんねー嬢ちゃんだな。

……あの日、あのA市が壊滅した日、UFOが相手なら俺じゃ役に立たねえと思つて、がれき撤去と生存者捜索の為にさつさと協会本部から出たことを後悔する。

現にあの後すぐに宇宙人が降りてきて、シルバーファングたちと交戦したらしいのだから、俺も火力は乏しいがその分、盾として参加すべきだったんだ。

そうやって、あの嬢ちゃんと少しでも関わっておけば良かったと、少しだけ思う。

それくらいに今、嬢ちゃんの事がよくわからない、よく知らないという立場に疎外感を覚える。

あの協調性が皆無だった連中が、ここまで同じ「許せない」と「絶対に助ける」という思いで繋がらせたエヒメという嬢ちゃんに、今度こそちゃんと会って会話をしてみたかった。

……なら、全員生き残るべきだよな。

名前しか知らないと言つていい俺でも、きつとこの中の一人でも欠けたら泣く子だということくらいはわかる。そんな泣いている子に気の利いた言葉をかけられるほど俺は器用じゃねえし、何より俺にとつて最初の印象が誰かの死に悲しみ、泣いている子になるのはごめん

だから、気合いを入れねえとな。

ささやかな未来の目標を定めながら、俺は煙草の火を自分の手の甲に押し付けて消した。

\* \* \*

……だが俺が気合いを入れた端から、プリズナーの彼氏救済方法やら、タツマキが自分一人でラスボスを叩くといつも通りの唯我独尊な宣言やら、その発言にケンカを丁寧に売るフラッシュやら、拳句の果てに全員が危惧していた通り、俺達S級を丸ごと見下して童帝の指示に従う気皆無なアマイマスクが乱入するわけで、やっぱりこいつらに協調性はないと確信させられ、入れた気合いは頭痛となつて抜けていく。

あー、俺も糖分が欲しい。コーヒー……じゃなくてココア飲みたいくなってきた。

ココアパウダーをハチミツで練って作ったやつが飲みたい。もしくはミルクセーキ。